浄土教典籍目録

佛教大学総合研究所

凸版印刷株式会社 制作

表紙は、1991年発行の「BUDDAS※ 佛教学関係論文目録」CD-ROMの画面デザインを一部使用した。

※BUDDASはBuDdhism Database Systemの略である。

浄土教典籍目録

佛教大学総合研究所
凸版印刷株式会社 制作

目 次

緒言

凡例

インド(漢訳) …… 3

チベット …… 35
　チベット訳 …… 37
　チベット撰述 …… 51

中国・朝鮮 …… 173

日本 …… 245

書名索引 …… 445

著者名索引 …… 459

あとがき

緒　　言

ここに『浄土教典籍目録』をお届けいたします。

佛教大学総合研究所は発足以来、仏教学・浄土学の学術的課題に取り組んでまいりました。これまでに幾つかの研究成果を単行の書籍や本研究所紀要などのかたちで公刊してきております。ここに作成した『浄土教典籍目録』(以下、典籍目録とする)もこの学術研究の成果であります。

『典籍目録』作成の当初の目標は、若手研究者によるインド(漢訳)、チベット、中国、韓国、そして日本において著述あるいは書写された浄土教関連の典籍を網羅するという壮大なものでした。既存の幾種かの目録が部分的採録であって、網羅的目録が未だ存在していない現状では、浄土教の学術的研究の土台となるものとして大きな価値を有するものとなる、このような意義が込められていました。

しかし、実際に着手してみると、幾篇かの未研究典籍、既知の典籍であってもその通説的理解を超える新しい解釈の可能性などに逢着し、単なる目録ではなく学術的解題をつけた目録を目指すようになり、作業は膨大になりました。そして、最終の目標には猶も十年以上を要することが判明しました。よって、それまでの成果をパイロット版『典籍目録』(冊子及び電子書籍)で刊行し、点検・評価を受けて本版を編集刊行するという手法をとりました。パイロット版刊行の発想がなければ、この本版『典籍目録』刊行の決断はできなかったでしょう。本版では、重要な典籍データを含めて約200の典籍をパイロット版に追加しました。とはいえ、この『典籍目録』は、ほぼ現代まで手を伸ばしてはいるものの、日本の典籍については室町期までのものに留まっており、江戸時代以降の採録が期待されます。

本版刊行後は、採録済みの典籍データをも電子的に更新しながら最新の成果をネット環境で公表する方向で知恵を出し合っているところです。

この『典籍目録』作成には長い時間と甚大な労力が費やされました。若手研究者の原稿すべてに目を通していただいた監修者の先生方のご指導と温かい励ましにも感謝を申し上げるものです。

2011年２月24日

佛教大学総合研究所

所長　君塚　大学

凡　例

◇この目録は、インド・チベット・中国・韓国・日本の浄土教文献を集めたものである。ここでいう浄土教文献とは、原則として阿弥陀仏の極楽浄土への往生に論及している文献のことである。ただし、インド・チベットでは、阿弥陀仏信仰ないし極楽願文は密教的な儀礼と結びつくため、顕密の文献を採取の対象とした。また、インド起源の文献については、漢訳したもののみとし、サンスクリット語原典・チベット語訳は作業途上のため、今回は省いた。

◇文献の採録にあたり、日本・中国・韓国については、『長西録』『仏書解説大辞典』『国書総目録』などを主に用いた。

◇漢訳仏典については、『長西録』を主に用いた。異本（同本異訳含む）は特に重要なものを除いては別文献として扱わない。漢訳仏典の原典書名ついては、東北帝国大学法文学部『西蔵大蔵経総目録』があげるサンスクリット原典名を用いた。写本所在については、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本現存八種一切経対照目録』を利用し、現存するものをあげた。

◇配列は、チベットはチベット語の語順、中国・韓国・日本は五十音順にならべた。

◇字体は、旧字体・異体字を用いず新字体で統一した。例：佛教大学→仏教大学、龍谷大学→竜谷大学。

◇書名は、最も一般的な正式書名を用いる。ただし書名の内、正式名称とは別にその略称がよく知られている場合、例えば『教行信証』や『選択集』などは、正式名称を入力した後、丸括弧を付けてその中に略称も記載した。『選択本願念仏集（選択集）』というように。また二つの正式名称がある場合、例えば『御文』と『御文章』などは、その両方を全角スラッシュ（／）で区切って記載した。『御文』／『御文章』というように。

◇著者に真偽の上で疑問がある場合、著者名のあとに（？）を付す。

◇成立年がはっきりしない場合、世紀もしくは時代を示す。例：「６c-７c」、「平安中期」。

◇写本・刊本が膨大に現存する文献については、代表的なもののみを記すにとどめ、それらに関する一覧や研究を所載する書物があればそれを指示する。

◇奥書写本と刊本刊記については、内容的に別の奥書・刊記に移行すると考えられる箇所、例えば、第一転写から第二転写へ移る所などに（／）を入れる。文中の割注は〈　〉で括る。ただし、干支・年齢などごく短い割注は、括らずに本文に続けて記載する場合がある。判読不能文字は、字数がわかる場合は字数分の黒四角を入れる。例［■■■］、字数がわからない場合は［　　］で示す。

◇散佚文献については、他の文献から存在が知られる場合、その文献名をあげる。なお、その文献がどこに所収されるかを、丸括弧を付けて記す。例：『長西録』（『日仏全』１）。また散佚文献が、その存在を記した文献の文中に現れる場合、その文献の所載テキスト名と頁数を記す。例：『正源明義鈔』６（『法伝全』p.859）。

【チベット撰述浄土教文献について】

チベット撰述の文献は、東北大学所蔵の蔵外文献（チベット人によるチベット語の著作であり、三蔵を意味するテンギュール、カンギュールに所蔵されていないものを意味する）、東洋文庫所蔵の蔵外文献、天津古籍出版社による影印版 d Pyad gzhi' I yig cha phyogs sgrigs のシリーズ、d De smon phyogs bsgrigs（上下２巻、四川民族出版社、1994）、Bibliotheca Tibetica, The Complete Works of the Great Masters of the SaSkya Sect of the Tibethan Buddism （The Toyo Bunko, Tokyo, 1968）,そして各著者の全集を調査し、収集したものである。そのとき、目録として、A Catalogue of The Tohoku University Collection of Tibetan Works, on Buddhism （The Seminary of Indology Tohoku University, 1953）, Provisional itle-Indes to The Toyo Bunko Collection of Tibetan Works（The Toyo Bunko, 1978）, Bod kyi bsTan bcoskhag cig gi mtshan byang （Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang）bKa' gdams pa gsung'bum（Si khron mi rigs pe

skrun khang. 2006-2007）を活用した。

文献の収集範囲は、ゲルク派、初期のサキヤ派、幾つかのニンマ派の著書については、可能な限り網羅した。それ以外の著者、特にカギュ派、チョナン派、幾つかのニンマ派の著者については、その全集や目録がいまだに公開が不十分なので入手できていない。

◇現代語訳および参考文献は、原則として明治以後のものに限る。

◇略号表

・『大正新修大蔵経』	『大正蔵』
・『大日本校訂大蔵経』	『縮蔵』
・『日本校訂大蔵経』	『卍正蔵』（旧版による）
・『新纂大日本続蔵経』	『卍続蔵』（旧版による）
・『大日本仏教全書』	『日仏全』（旧版による）
・『昭和新修法然上人全集』	『昭法全』
・『法然上人伝全集』	『法伝全』
・『浄土宗全書』	『浄全』
・『続浄土宗全書』	『続浄』
・『恵心僧都全集』	『恵全』
・『真宗聖教全書』	『真聖全』
・『親鸞聖人真蹟集成』	『親鸞真蹟集成』
・『真宗大系』	そのまま
・『真宗全書』	そのまま
・『西山全書』	そのまま
・永超『東域伝統目録』	『永超録』
・長西『浄土依憑経論章疏目録』	『長西録』
・『印度学仏教学研究』	『印仏研』
・『日本仏教学会年報』	『日仏年報』
・Tibetan Buddhism Resource Center	TBRC

典籍目録

インド（漢訳）

阿弥陀経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：あみだきょう
書名別名：無量寿経、小経、小本、小無量寿経、四紙阿弥陀経、四紙経
異本書名：小無量寿経、称讃浄土仏摂受経
サンスクリット原典書名：Sukhāvatīvyūha
原典の存欠：現存
翻訳者名：鳩摩羅什
翻訳者名よみ：くまらじゅう
翻訳者生没年：350（永和6）-409（義熙5）
成立翻訳年：（成立）3c-4c（静谷説）（翻訳）402（弘始4）
成立地：インド
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
活字本所載書：『大正蔵』12（No.366）
現代語訳書：坪井俊映『浄土三部経概説』（隆文館、1956）、村瀬秀雄『和訳浄土三部経』（常念寺、1976）、
・Inagaki Hisao、*The Three Pure Land Sutras*、The International Institute for Buddhist Studies、1995
・Luis O Gómez、*The Land of Bliss*、University of Hawai'i Press、1996
浄土真宗聖典編纂委員会編纂『浄土三部経』（本願寺出版社、1996）
参考文献：藤田宏達・桜部建『無量寿経・阿弥陀経』（「浄土仏教の思想」2、講談社、1992）、藤田宏達『阿弥陀経講究』（東本願寺出版局、1997）、香川孝雄「『阿弥陀経』の成立問題」（石上善応『仏教文化の基調と展開』、山喜房仏書林、2001）
解説：本経は「浄土三部経」の一つで通称「阿弥陀経」と言われる。漢訳の「二存一欠」のうち現存する一本であり、中国及び日本の浄土教諸宗の正依の経典となっており、最も広く流布したものである。『出三蔵記集』（510-518年撰）では「無量寿経」が本名であり、「阿弥陀経」が別名であるが、『開元釈経録』（730年撰）となってはじめて「阿弥陀経」が本名になる。訳出状況の詳細については藤田宏達『阿弥陀経講究』pp.30-37 を参照。

本経は舎衛国祇樹給孤独園にて釈尊が対告衆である舎利弗に対して一方的に説法することから「無問自説経」とも言われている。本経は内容的に大きく三つの部分からなる。

前半は「依報段」と「正報段」に分けて解説されてきた。また後半には六方の諸仏がこの教説を信ぜよと勧める「六方段」と呼ばれる部分があり、その箇所は『仏名経』との関連が指摘されている。

求那跋陀羅訳『無量寿経』（454年訳出）は「二存一欠」のうちの唯一の欠本である。経録『仁寿録』（602年撰）には記載があり、善導も引用しているが現存しない。詳しくは、藤田宏達『阿弥陀経講究』pp.37-40を参照。

隋代の陳仁陵が書した経文を碑に刻んで湖北省襄陽の竜興寺に建てたといわれる「石刻阿弥陀経」には、経の半ばほどに他本に無い21字の増文があり、古来から問題とされている。

註釈書には智顗の『阿弥陀経義記』、元暁の『阿弥陀経疏』、源信の『阿弥陀経略記』などがある。

中国では『観経』を重視する傾向から、後代になって『阿弥陀経』を重視するという傾向に変化していく。

日本では『無量寿経』が浄土真宗で特に重視されるのに対し、『阿弥陀経』は時宗において最高の所依とされる。
作成者名：佐藤直実／佐々木大悟

阿弥陀鼓音声王陀羅尼経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：あみだくおんじょうおうだらにきょう
書名別名：阿弥陀鼓音声経、鼓音声王経、鼓音王経
サンスクリット原典書名：Ārya-Aparimitāyurjñānahṛdaya-nāma-dhāraṇī
原典の存欠：散逸
翻訳者名：失訳
翻訳者生没年：不明
成立翻訳年：6c.頃
成立地：インド
所収文献名：『陀羅尼雑集』（『大正蔵』21（No.1336））
巻数：1
写本所在：七寺、石山寺、興聖寺、松尾社
刊本所在：『大正蔵』12（No.370）
現代語訳書：中御門敬教「〈阿弥陀鼓音声陀羅尼経〉の研究　－阿弥陀仏信仰の密教への展開－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊　浄土教典籍の研究』、2006）
参考文献：小野田俊蔵「チベット所伝の浄土観想修法　－青木文教師将来資料Nos.103, 104, 107, 108, 109についての管見－」（『国立民族博物館研究報告』別冊1、1983）、小野田俊蔵「『阿弥陀鼓音声陀羅尼経』に基づく西蔵曼荼羅」（『日本仏教学会年報』52、1987）、柴田泰山「『選択集』第一段説示の「所依の経論」について」（『阿川文正教授古稀記念論集　法然浄土教の思想と伝歴』　山喜房仏書林、2001）、藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。浄土教が密教化した分岐点に位置する重要な経典。内容面では西方極楽浄土を明かし、阿弥陀仏を念じて往生することを勧める。〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉から多くの要素を継承しながら、阿弥陀仏の名号を受持し、随念すべきであり、十日間一心不乱に実践するなら見仏、往生できること、ここに説かれるダラニを受持、読誦することにより極楽往生できることを説く。また阿弥陀仏に父、母、子、声聞の弟子衆があることを、明かす(cf.蔵訳項目)。阿弥陀仏の両脇侍として観世音、大勢至の両菩薩の存在にも言及する。

この漢訳は、梁代に失訳の陀羅尼経類を集成したと思われる『陀羅尼雑集』巻四（『大正蔵』21（No.1336））にも収録されている。それに影響されたためか、従来この経には中国撰述説がある。しかしチベット訳の奥書き、固有名詞の違い、訳出の明瞭さからチベット訳は漢訳からの重訳の可能性はなくてインド撰述と思われる。

中国では極楽往生を説く点とともに、阿弥陀仏は婆羅門種であり、その国土には父母妻子、悪逆者がいるなどと穢土相を説く点が注目されている。たとえば宋の孤山智円（976-1022）の『仏説阿弥陀経疏』（『大正蔵』37（No.1760））には本経によって、阿弥陀は浄土相だけではなく穢土相を現し、釈迦も穢土相だけでなく浄土相を現していることから、仏の変化身には二重の側面が有る。そして、衆生の機が等しくないし、釈迦は折伏により、弥陀は摂受により、成熟させ、菩提に至らせるのは同じである、としている。これを承けて、南宋の宗曉（1151-1214）の『楽邦文類』（『大正蔵』47（No.1969））に、降誕する時には母など女人がいても、正覚した時には浄土になるとして、「女人根欠は生ぜず」とするインドの説を正しいとしている。

日本では、例えば『往生要集』では、本経は種々の特徴を捉えて言及しながら、往生の諸行を明かす諸経・呪の一つに挙げている。『選択本願念仏集』では、この経を念仏往生についての諸仏証誠の一例とする『浄土十疑論』の箇

所には引用するが、教判としては傍らに往生浄土を明かす教えの一つとし、持経と持呪の「読誦大乗の行」のうち持呪の箇所に言及するだけである。また台密事相を広く集大成した『阿娑縛抄』第五十三の阿弥陀の項目にも当経は挙げられる。注釈書には、江戸期の俊彦亮汰（1622-1680）による『阿弥陀鼓音声経鈔』が存在すると言われている。
作成者名：中御門敬教

阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経／大阿弥陀経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：あみださんやさんぶつさるぶつだんかどにんどうきょう／だいあみだきょう
書名別名：阿弥陀経
異本書名：仏説無量清浄平等覚経、仏説無量寿経、仏説大乗無量寿荘厳経、大宝積経無量寿如来会
サンスクリット原典書名：Sukhāvatīvyūha
翻訳者名：支婁迦讖／支謙
翻訳者名よみ：しるかせん／しけん
翻訳者生没年：後漢／呉
成立翻訳年：（成立）？（翻訳）2-3c
成立地：インド
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、七寺蔵本
2、興聖寺蔵本
3、顕智上人書写本
4、法通寺蔵本
5、教王護国寺蔵本
写本奥書：1、一校了　栄俊
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』12（No.362）
現代語訳書：辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注(1)-(7)」(『仏教大学総合研究所紀要』第6、7、8、10、11、12、13号、1999-2006)
参考文献：池本重臣『大無量寿経の教理史的研究』（永田文昌堂、1958）、藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970）、静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』（百華苑、1974）、色井秀譲『浄土念仏源流考』（百華苑、1976）、香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』（永田文昌堂、1984）、丘山新「大阿弥陀経の思想史的意義」(『東洋文化』70、1990)、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房仏書林、1993）、Paul Harrison、“Women in the Pure Land”（*Journal of Indian Philosophy*、Vol.26、1998）、真宗高田派教学院編『影印高田古典』第四巻（真宗高田派宗務院、2002）、大田利生『漢訳五本梵本蔵訳対照無量寿経』（永田文昌堂、2005）、藤田宏達『浄土三部経の研究』（岩波書店、2007）、辛嶋静志「阿弥陀浄土の原風景」(『仏教大学総合研究所紀要』17、2010)
解説：本経は＜無量寿経＞の最古の漢訳である。そもそもの＜無量寿経＞の成立は様々に想定されているが、紀元後1・2世紀と思われる。
　本経の内容は以下の通り。
　釈尊は王舎城の霊鷲山で、阿難に対して法を説く。昔、曇摩迦（法蔵）菩薩が仏国土の建設を望み、24願を起こしてその成就のために修行した。曇摩迦は仏となり阿弥陀と名づけられた。その阿弥陀仏の光明は第一であり、諸仏を凌駕しており、その光によって様々な衆生を救済している。その時、阿闍世王太子と五百人の長者の息子は釈尊から阿弥陀仏の24願を聞いて歓喜し、自分たちも阿弥陀仏と同じような仏になりたいと誓った。
　阿弥陀仏の浄土である須摩題（極楽）は西方にあり、大地は七宝でできており、三悪道がない。住人はすべて菩薩や阿羅漢（声聞）であり、それぞれが思うように修行できる。阿弥陀仏の寿命は極めて長い。その阿弥陀仏が般涅槃すると、次に観音・勢至がその法を継承する。
　経の後半では、三輩などの諸段階の人々がそれぞれに阿弥陀仏の国に往生する様子が述べられる。また、その阿弥陀仏世界と対照的な娑婆世界の五悪の様子が描かれる。そして、釈尊はこの五悪の娑婆世界において善を行うことの重要性を説く。釈尊は次に阿弥陀仏と須摩題を実際に阿難に見せて疑いを晴らし、阿弥陀仏への信を勧める。
　本経は『無量清浄平等覚経』と並び「初期無量寿経」に分類される。「初期無量寿経」の二本に共通する特徴として、（1）阿弥陀仏の光明の描写が多いこと、（2）阿闍世王太子授記の記述が存在すること、（3）阿弥陀仏の入滅と、観音菩薩・勢至菩薩への法の継承が説かれること、（4）中輩・下輩段において疑いをおこした衆生が二千由旬の城にとどまる記述が存在すること、（5）三輩の後に、さらに二種類の方法によって往生するという記述があること。（6）浄土において菩薩と同時に阿羅漢（声聞）の様子がしばしば描かれていること、（7）願文だけでなく、成就文においても女人往生について言及していること、などが挙げられる。
　本経は「初期無量寿経」の中でもより古いの形態と考えられており、（1）すべてが散文で記述され偈頌が存在しないこと、（2）音写語を多用すること、（3）願文の並びが他の訳に比べ素朴であることなど、本経のみに見られる特色を有する。
　本経及び『無量清浄平等覚経』・『無量寿経』の後半にある三毒五悪段は梵本には対応部分が見られず、その成立状況が古来から議論されている。
　なお、本経の訳者として主に支婁迦讖説と支謙説の二説があるが、現在では支婁迦讖説がやや優勢と見られる。（この問題に関しては香川孝雄『浄土教の成立史的研究』pp.17-29、Harrison（1998）参照。）
　また、法然は『選択集』第三章において、本経にある「選択」という言葉を引用し、重要な教義概念として使用した。
作成者名：佐藤直実／佐々木大悟

阿弥陀仏大思惟経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：あみだぶつだいしゆいきょう
原典の存欠：散逸
翻訳者名：阿地瞿多
翻訳者名よみ：あじくた
翻訳者生没年：7c.頃
成立翻訳年：653
成立地：インド（？）
所収文献名：阿地瞿多訳『陀羅尼集経』（十二巻中の第二巻相当）
巻数：1
写本所在：聖護蔵、興聖寺、西方寺
刊本所在：『大正蔵』18（No.901）
現代語訳書：なし
参考文献：頼富本宏『密教仏の研究』（法蔵館、1990）、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）＊p.267の苫米地誠一執筆項目、中御門敬教「『無量寿如来観行供養儀軌』

の研究　－中国における阿弥陀仏信仰の密教的展開－」（『印仏研』56-1、2007）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。所収先の『陀羅尼集経』には多くの密教儀軌書類が集成編集されている。成立は中国と思われ、〈大日経〉以前のいわゆる「雑密」に属する内容をもつ。7世紀の成立とされる点から、大乗典籍の密教化がほぼ完了し、そこに説かれた事相的要素を分類する役割を『陀羅尼集経』は期待されたと思われる。
　さて『阿弥陀仏大思惟経』は伝不空訳『無量寿如来観行供養儀軌』(『無量寿軌』)、『金剛頂経観自在如来修行法』(『観自在法』）と並んで、『阿娑縛抄』において天台阿弥陀法三部作の一つとされる。仏が補陀落迦山において観音菩薩を対告衆に極楽往生の方法を説く形式である。ここにも『無量寿軌』『観自在法』同様に、観自在菩薩と阿弥陀仏との繋がりが確認できる。
　経中では阿弥陀仏印、陀羅尼、作壇法（作像法・書仏像法)、供養礼拝の受持が極楽往生の具体的方法とされ、それが詳細に説かれる。経典形式を取るが、実体はいわゆる事相儀軌書である。記述の約半分を占める印相については以下のごとくである。すなわち阿弥陀仏心身印、阿弥陀仏大心印、阿弥陀護身結界印、阿弥陀坐禅印、阿弥陀仏滅罪印、阿弥陀仏仏心印、文殊師利印呪、場面観世音印呪、大勢至菩薩印呪、大勢至菩薩印、大勢至印、阿弥陀仏頂印、阿弥陀仏輪印、阿弥陀仏療病法印である。各印項目には印の結び方とその効能滅罪、極楽往生、病気平癒等が説かれている。記述の分量は効能よりも印相に重点がおかれている。
作成者名：中御門敬教

一向出生菩薩経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：いっこうしゅっせいぼさつきょう
翻訳者名：闍那崛多
翻訳者名よみ：じゃなくった
翻訳者別名：徳志、至徳、仏徳
翻訳者生没年：523（正光4）-600（隋開皇20）
成立翻訳年：585（隋開皇5）／595（隋開皇15）
巻数：1
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『大正蔵』19（No.1017）
解説：漢訳とチベット語訳が現存し、漢訳の異訳は7種ある（『大蔵経全解説事典』pp.296-297.参照)。
　本経は四種清浄法、四種心所楽作微妙法、四種陀羅尼、入無辺陀羅尼、四種修陀羅尼法を説き、さらによく菩薩行を具足するための四法と、菩薩が諸々の福徳を成ずるための四法と、そして阿弥陀仏の本生を説く。
　この阿弥陀仏本生は陀羅尼を説く点で、経の本体部分と関係を持つが、必ずしも密接な関係が見られる訳ではない。本生譚は以下の通りである。昔、宝功徳威宿劫王如来の治世に、仏が涅槃に入るためにこの陀羅尼を説いていた。その時、持火という転輪聖王がいて、その子に不可思議功徳という王子がいた。その王子は16歳でこの陀羅尼法本（法本陀羅尼）を聞き、修習し、全く睡眠を取らず、財宝や王位を貪らず、九十億百千那由他の諸仏に会うことができた。そして諸仏の説法をよく聞き修し、出家して沙門となり、衆生のためにこの陀羅尼を一生涯、説き続け、八十億百千那由他の衆生に菩提心を起こさせ、不退転地に住させた。この不可思議功徳比丘こそが阿弥陀仏であった。その時、月相という長者がいて、その子に無辺光という子がいて、かの不可思議功徳比丘からこの陀羅尼を聴くと、九十億の諸仏に会うことができた。その時の月相長者とは然灯仏であり、不可思議功徳比丘とは阿弥陀仏であった。そして、この陀羅尼を修する者は雪山にいる八夜叉と欲界にいる八菩薩が守護してくれると説く。
作成者名：北条竜士

一切如来烏瑟膩沙最勝総持経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：いっさいにょらいうしゅにしゃさいしょうそうじきょう
書名別名：烏瑟膩沙最勝総持経
サンスクリット原典書名：Sarvatathāgatoṣṇīṣavijaya-nāma-dhāraṇī-kalpa-sahita
原典の存欠：散逸
翻訳者名：法天
翻訳者名よみ：ほうてん
翻訳者生没年：？－1001
成立翻訳年：10c.頃
成立地：インド
巻数：1
刊本所在：『大正蔵』19（No.978）
現代語訳書：なし
参考文献：高田仁覚『インド・チベット真言密教の研究』（密教学術振興会、1978年)、頼富本宏『密教仏の研究』（法蔵館、1990)、頼富本宏『密教図像図典』（人文書院、1998)、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。極楽世界の大善法堂において、無量寿如来が観自在菩薩に一切衆生を利益する「一切如来烏瑟膩沙最勝総持」を説く。それを受持・読誦・書写することの利益、並びにそのダラニを用いた儀軌事相の説明が所説の中心である。「烏瑟膩沙」とはSkt. Uṣṇīṣaの音写。意味は三十二相の一つである肉髻。頭頂にあるので、「仏頂」と訳されることが多い。これが尊格化され三面八臂の「仏頂尊勝」（Skt. Uṣṇīṣa-vijayā）になる。この尊格は密教では如来部に属する。この如来部仏頂尊勝は所作タントラに分類される。ちなみにこのタントラは、説法の会座を極楽世界窟院、対告衆を観世音菩薩とする場合が多い。
　訳者法天は中インドの人。北宋時代に中国に入り、主として『毘倶胝菩薩一百八名経』や『仏説大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』という密浄融合思想経典を翻訳した。単なる翻訳者ではなく、密教儀軌に通じた点が特徴である。
　内容としては以下の通り。この一切如来烏瑟彼の膩沙最勝総持の法門を、受持・読誦すると、延命・消除罪業・快楽・長寿・無病が約束される。その具体例の一つとして、写経の塔中への納経功徳が説かれる。白樺皮にこの総持を書写し、納経を済ませ、その塔を右繞千匝すると、7日の寿命が7年に延び、7年の寿命が70年になり、長寿安楽無病が獲得できると説かれる。その次に儀式儀軌が詳細に説かれる。本経は雑密に属し、儀礼の準備・作法の詳細を説く点が特徴でる。儀軌においては、祈願者が総持と共に自身の姓名を写経皮に記入し供養することや、「無量寿総持法門」の読誦、阿弥陀三尊の安置（大勢至が金剛手に変更）に対する言及もある。この一切如来烏瑟膩沙最勝総持の果報として、智慧・宿命通の獲得、命終時には蛇が脱皮するごとく極楽世界に往生できることが、繰り返し説かれる。
作成者名：中御門敬教

月灯三昧経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：がっとうざんまいきょう

書名別名：入於大悲大方等大集説経、大方等大集月灯経
サンスクリット原典書名：Ārya-Sarvadharmasvabhāvasamtāvipañcitasamādhirāja-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：現存
翻訳者名：那連提耶舎
翻訳者名よみ：なれんだいやしゃ
翻訳者生没年：490-589
成立翻訳年：6c.
成立地：インド
巻数：10/11
写本所在：cf.『日本現存八種一切経対照目録』p.75
刊本所在：『大正蔵』15（No.639）
現代語訳書：なし
参考文献：田村智淳・一郷正道『三昧王経』（「大乗仏典」1・2、中央公論社、1991）、ツルティム・ケサン・藤仲孝司『解脱の宝飾』（UNIO、2007）、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。梵本原題の一つに「Samādhi-rāja」（三昧王）がある。ここの「王」は「一番、一等級」の意味。よってこの原題は「最高の三昧の経典」の意味。その他の原題「Candra-pradīpa」は主要登場人物である童子の名であり、当経漢訳の題名である。主題は覚り（空性）を得る手段としての実践（三昧）にある。それを様々な視点（過去世の出来事、特定の尊格、実践、三昧の利得等）から説く点が特徴である。大部の経典であるが、各章間に特に明確な繋がりはない。中観派の代表的論書月称著『中論釈』では、本経所説の空喩（一切法を幻・陽炎・夢・映像等に例える）がよく引用される。当経は〈般若経〉〈法華経〉〈華厳経〉などと共に、ネパールの「九法」の1つとして写経が続けられた著名かつ重要な大乗経典である。

浄土教との関係では、念仏（仏随念）について詳説する点、それを空の思想や実践と結びつけている点が特徴である。阿弥陀仏については、主題となる三昧の実践において副次的な事項として言及される程度である。念仏（仏随念）が説かれる場所は、梵本第4章に相当する（当経漢訳には章区分はない）。念仏関連の所説の代表的偈頌を挙げれば以下のとおり（巻1（p.553b））。

第9偈「念仏相好及徳行　能使諸根不乱動　心無迷惑与法合　得聞得智如大海」、第17偈「若有能生是心　念仏相好及智慧　彼人能修如念　一心趣向無退転」、第21偈「若遇垂死最重疾　痛悩逼迫極無卿　念仏三昧常不捨　不令苦切奪此心」

ここの第9偈「念仏相好及徳行」、第17偈「念仏相好及智慧」から理解できるごとく、単なる色身相好を随念するものではなく、法随念もあわせもった念仏（仏随念）である。この念仏は三昧中の心のあり方として議論される。

さらに浄土教との関係については三昧果報として、阿弥陀仏の見仏、極楽往生、往生後の利他行が説かれる点が特徴である。ここに臨終は説かれないが、往生後の利他行を強調する華厳系仏典の〈普賢行願讃〉と共通する記述が見られる。〈無量寿経〉より発展的な記述となっている、この世にいながら三昧を通して極楽に赴く点は、当経の往生思想の特徴といえよう（なお〈無量寿経〉では極楽世界の聖衆は神力によって往詣すると説かれる）。また臨終時に三昧による心の安定を得て、往生し、利他行を行うことも説く。浄土教に言及する具体的内容、箇所を整理すれば以下のとおりである。（1-1）三昧の果報としての阿弥陀仏と極楽世界を目にすること（巻1（p.551c）、巻3（p.563a））、（1-2）三昧の果報として臨終時に阿弥陀仏を目にし、極楽往生が確定する（巻6（p.589c））、（1-3）三昧の果報として現世にいながら極楽の阿弥陀仏を見仏し、利他行を行う（巻7（p.597b））、（1-4）宴座で三昧生活を送る者の果報として、死後の極楽往生（巻6（p.586b））、（2）阿弥陀仏への往詣（巻3（p.566c））、（3）阿弥陀仏の授記、三昧の委託（巻5（p.574a））である。
作成者名：中御門敬教

灌頂百結神王護身呪経（巻第四）

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：かんじょうひゃっけつじんのうごしんじゅきょう
書名別名：灌頂百結神主護身呪経第四巻、灌頂経第四巻
異本書名：達摩笈多訳『薬師如来本願経』(『大正蔵』14（No.449）)、玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功徳経』（『大正蔵』14（No.450））、義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功徳経』（『大正蔵』14（No.451））
原典の存欠：散逸
翻訳者名：失訳説（帛尸梨蜜多羅訳説）
翻訳者生没年：不明
成立翻訳年：不明（5c.頃？）
成立地：インド（？）
所収文献名：『仏説灌頂七万二千神王護比丘呪経』（『大正蔵』21（No.1331））
（書名別名　灌頂経、大灌頂神呪経）
巻数：12
写本所在：七寺、興聖寺、西方寺
刊本所在：『大正蔵』21（No.1331）
現代語訳書：なし
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。僧祐録では失訳経、帛尸梨蜜多羅訳説では東晋翻訳となる。『長西録』には「灌頂百結神主護身呪経第四巻　考灌頂経第四巻」と出る

仏が涅槃すると、その後に持戒者などがなくなり、末世においては仏法は滅し、鬼魔・毒龍が跋扈することが嘆かれる。彼らの乱行や、その他現世で経験する種々なる災難を除くために、灌頂章句百神王（神呪）が仏から帝釈天に説かれる。経典中には百神王一々の名が出され、その彼らの功徳も併記される。適切な前行の後に「呼其名」すれば、常に近くから守護するし、「書持名字」すれば、「諸神擁護」のもと「百怪消滅」するという。善男子・善女人がこの神呪を修行すれば、生前中は諸天等から守護・讃歎・護念を受け、臨終時には八大菩薩に迎えられ、その者の「精神」が西方に往生するという。「若命終時、是八大菩薩迎其精神、往生西方自在随意」とある。肉体が無くなるので、残った魂（精神）が往生すると考えられている。なお、臨終の時に八大菩薩の来迎があると説くが、これは〈薬師仏国経〉の影響と思われる。
作成者名：中御門敬教

観世音菩薩授記経

著作翻訳の有無：漢訳・蔵訳
書名よみ：かんぜおんぼさつじゅききょう
書名別名：観音授記経、観世音菩薩得大勢菩薩授記経、観世音授記経、観世音授決経
異本書名：如幻三摩地無量印法門経
翻訳者名：曇無竭
翻訳者名よみ：どんむかつ
成立翻訳年：453（興安2）
成立地：インド
巻数：1
写本等の存欠：刊本

活字本
活字本所載書：『大正蔵』12（No.371）
参考文献：斉藤舜建「『観世音菩薩授記経』所説の阿弥陀仏の入滅」（『印仏研』44-2、1996）、斉藤舜建「『観世音菩薩授記経』所説の如幻三昧をめぐって」（『印仏研』46-1、1997）
解説：本経は、主な対告者である華徳蔵菩薩の質問に応じる形で、釈迦が「如幻三昧」について説いた経典である。その如幻三昧を得た菩薩の一例として、西方安楽世界に往生した観音・勢至に言及し、彼らの本生や阿弥陀仏の般涅槃について説いている。異訳「仏説如幻三摩地無量印法門経」とチベット訳 “Phags pa rgyu ma ta bu'i ting nge 'dzin ces bya ba theg pa chen po'i mdo"が存在する。
　阿弥陀仏や安楽世界に関しては、7箇所言及が見られる。
　（1）本書の中心テーマは菩薩の如幻三昧についてであるが、華徳蔵菩薩が「この世界（娑婆）だけでなく、他方世界にも如幻三昧を得る菩薩はいますか？」と質問をする。それに対して釈迦は阿弥陀仏国にいる観音・勢至が如幻三昧を得ていると説く。そして「菩薩がもし如幻三昧を保ちたいなら、彼らのもとへ行って七日七夜この教えを聞きなさい。そうすればすぐに如幻三昧を得られる」と説く。(2) そして、その後に、「もし安楽世界の阿弥陀仏を見たいと願い、菩提心を発して、彼の国に生まれたいと願うなら、彼の国に生まれて無上正等覚から退転しない」ことを説く。（3）そして釈迦が光を放つと阿弥陀仏国土が現れる。聴衆はみな菩提心を起こし、彼の国に生まれたいと願う。(4) 安楽世界の菩薩・声聞が釈迦に説法を依頼する。すると、安楽世界が六種に震動する。(5) 阿弥陀仏が「釈迦仏はただこの土（安楽世界）だけにその名号を現したのではなく、無量の諸仏世界に名号を現した。その釈迦の名号を聞いた無量の諸仏世界の衆生は、善根を成就して、無上正等覚から退転しない」と説く。(6) 中盤には過去の世界である無量徳聚安楽示現国の説明があり、この国の荘厳は安楽世界を一滴の水とすれば大海に匹敵するくらいの美しさを持つと表現されている。(7) 経の後半に阿弥陀仏の般涅槃の様子が描かれる。そして阿弥陀仏の正法が滅した暁に観音菩薩が正覚を得て普光功徳山王如来となることが説かれる。
　このうち（3）（阿弥陀仏国の出現）については〈無量寿経〉・〈般舟三昧経〉と同様の内容をもち、(7)（阿弥陀仏の般涅槃）も「初期無量寿経」である『大阿弥陀経』・『無量清浄平等覚経』と同様の内容をもつ。また、(7) に関しては、「無量寿」であるはずの阿弥陀仏が般涅槃するという矛盾を抱えることになり、後世問題になった。浄影寺の慧遠を始め、道綽・善導・吉蔵・基などによって取りあげられ、特に仏身論の観点から議論された。般涅槃の記述は、『悲華経』等でも見られる。
作成者名：佐々木大悟

観世音菩薩如意摩尼陀羅尼経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：かんぜおんぼさつにょいまにだらにきょう
異本書名：菩提流志訳『如意輪陀羅尼経』（『大正蔵』20（No.1080））、義浄訳『観自在菩薩如意心陀羅尼経』（『大正蔵』20（No.1081））、実叉難陀訳　『観世音菩薩秘密如意摩尼陀羅尼神呪経』（『大正蔵』20（No.1082））
原典の存欠：散逸
翻訳者名：宝思惟
翻訳者名よみ：ほうしゆい
翻訳者別名：阿儞真那
翻訳者生没年：？－701
成立翻訳年：7c.頃
成立地：インド
巻数：1
写本所在：金剛寺、七寺、石山寺
刊本所在：『大正蔵』20（No.1083）
現代語訳書：なし
参考文献：『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。観世音菩薩を主尊とし、彼にちなんだ陀羅尼の読誦、衆生利益を目的とする薬の調合を説いた儀軌である。「雑密」に分類される。訳者はインド出身の訳経僧である。彼の訳には本経に依った儀軌として、『観世音菩薩如意摩尼輪陀羅尼念誦法』（『大正蔵』20、No.1084）がある。彼は同時に行者であったことも伺える。異訳には、菩提流志訳『如意輪陀羅尼経』（『大正蔵』20、No.1080）、義浄訳『仏説観自在菩薩如意心陀羅尼経』（『大正蔵』20、No.1081）、実叉難陀訳　『観世音菩薩秘密如意摩尼陀羅尼神呪経』（『大正蔵』20、No.1082）がある。
　観世音菩薩が、一切衆生の願いを叶えるために、「蓮華峯金剛加持秘密無礙観世音蓮華如意摩尼転輪心陀羅尼」を説こうとする。世尊が許可と加護を与えて、観自在菩薩は「根本呪」「心呪」「随心呪」を説くが、前述の陀羅尼とはこれを指すようである。この呪を適宜読誦し、儀軌を行うことにより、すべてが成就できるといい、特に衆生の現世利益、罪悪消滅が挙げられる。その功徳の一つとして、西方の無量寿仏・極楽世界・菩薩会を目にすることが一箇所説かれるが、浄土教に関してはそれ以上の言及はない。先に挙げた諸異訳でも同様の説かれ方である。本経後半では具体的な薬の調合、その使用法、及び効能が説かれる。薬により病の除去を願うだけでなく、衆生の願いすべてを叶えようとする点に特徴がある。
作成者名：中御門敬教

観無量寿経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：かんむりょうじゅきょう
書名別名：観無量寿仏経、無量寿観経、観経、十六観経
原典の存欠：散逸
翻訳者名：畺良耶舎
翻訳者名よみ：きょうりょうやしゃ
翻訳者生没年：5c
成立翻訳年：元嘉年中（424-453）
成立地：不明
巻数：1
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都妙蓮寺蔵本（永久4（1116）、僧珍秀）
2、大阪金剛寺蔵本（長寛3（1165）、忍禅）
3、東京五島美術館蔵本（建久3（1192）、明遍）
4、京都金戒光明寺蔵本（平安末期）
5、京都清浄華院蔵本（平安末期）
写本奥書：1、一校已畢、松尾一切経之内、永久四（1116）年九月廿九日書了執筆僧珍秀、願主神主秦宿禰親任
2、長寛三年（1165）三月十六日巳剋書写了、忍禅之
3、建久三年（1192）月廿二日為資先師菩提書之、明遍
4、（奥書なし）
5、（奥書なし）
刊本所在：1、明暦4（1658、仏教大）
2、元禄6（1693、仏教大）
3、享保18（1733、仏教大）
4、寛政11（1799、仏教大）
5、安政3（1856、仏教大）
6、同治10（1871、仏教大）

刊本の奥書刊記：1、明暦戊戌四年三月吉旦、中野小右衛門板行
2、元禄六癸酉年十二月八日、洛陽書林、秋田屋清兵衛寿梓（阿弥陀経の刊記より）
3、享保十八歳癸丑仲秋穀旦求之、洛下（阿弥陀経の刊記より）
4、浄土三部経科図四巻、同科註十巻、同合讃七巻、右三版隠士了阿捐許多金購得而為当山蔵本願為令法久住且以擬本師明誉忍達大和尚冥福也、于寛政十一己未、華頂幹事識
5、月輪殿下六百五十回諱辰御法会之次、施此経於有縁以表追遠之誠云
6、十二円敬刻此経連圏計八千七百零六個、同治十年夏六月、金陵刻経処識
活字本所載書：『大正蔵』12（No.365）、『浄全』1、『浄土宗聖典』1
現代語訳書：坪井俊映『浄土三部経概説』（隆文館、1956）、中村元・早島鏡正・紀野一義訳註『浄土三部経下』(岩波文庫、1964)、森三樹三郎『浄土三部経』（「大乗仏典」6、中央公論社、1976）、末木文美士・梶山雄一『観無量寿経・般舟三昧経』（「浄土仏教の思想」2、講談社、1992）、浄土真宗聖典編纂委員会『浄土三部経』（本願寺出版社、1996）
参考文献：坪井俊映『浄土三部経概説』（隆文館、1956）、藤田宏達『観無量寿経講究』（真宗大谷派宗務所出版部、1985）、梶山雄一・末木文美士『般舟三昧経・観無量寿経』（「浄土仏教の思想」2、講談社）、藤田宏達『浄土三部経の研究』（岩波書店、2007）、藤田宏達「『観無量寿経』の撰述問題再説」（『塚本啓祥教授還暦記念論文集・知の邂逅―仏教と科学』佼成出版社、1993）、Inagaki Hisao、*The Three Pure Land Sutras*（永田文昌堂、1995）
解説：本経の成立に関しては不明な点が多い。インドで成立した説、また中央アジア説、そして中国説や、中央アジア・中国成立折衷説までもがある。さらに本来別々に存在していた阿闍世王伝説、定善十三観、散善三観（九品段）が一つにまとめられ編纂されたという編集成立説も提示されている。近年は中央アジア成立説が有力となりつつある。こうした所説が想定されるのは、それはサンスクリット原典およびチベット語訳が存在しないことや、経中の用語がインド的ではないことに由来する。また漢訳者の畺良耶舎が西域出身であることから、中央アジアで成立した可能性も否定できない。本経と前後して漢訳され、経題に「観」がつくいわゆる「六観経」の成立と関連していると考えられるが、いまだその定説がないのが現状である。なお、漢訳からの重訳であるウイグル語訳の断片は現存する。

内容は、マガダ国でおきた王舎城の悲劇が発端となり、捕らわれの身となった王妃韋提希が釈迦に救いをもとめ、それに応じて浄土に往生する方法が説かれている。その往生方法とは、心をしずめて阿弥陀仏や観世音菩薩、大勢至菩薩、そして西方極楽浄土の荘厳を観想する定善の十三観（日想観・水想観・地想観・宝想観・宝池観・宝楼観・華座想観・像想観・真身観・観音観・勢至観・普観想観・雑想観）と、心が散り乱れたままで行う散善の三福（世福・戒福・行福）九品（上品上生から下品下生）である。前十三観の観想法は『般舟三昧経』の般舟三昧、後三観は『無量寿経』三輩段との関係が指摘され、また阿弥陀仏の名称について前十三観では無量寿仏とあるが、後三観では阿弥陀仏に変わることが指摘されている。

また、本経は漢訳された後、漢字文化圏における浄土教信仰ではとくに重要視され、浄影寺慧遠『観経義疏』や、善導『観経疏』など、数多くの解説書が著わされている。なお、経中に説かれている「令声不絶具足十念、称南無阿弥陀仏」は、『無量寿経』の「乃至十念」とともに、南無阿弥陀仏と十回唱えることによって極楽浄土に往生できる根拠となっている。なお、写本としては敦煌石室写本が少なからず遺されており（約60点）、また中国房山には唐代と遼代の石経が遺されている。
作成者名：斉藤隆信/北条竜士

九品往生阿弥陀三摩地集陀羅尼経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：くほんおうじょうあみださんまじしゅうだらにきょう
原典の存欠：散逸
翻訳者名：不空（？）
翻訳者名よみ：ふくう
翻訳者別名：不空金剛、大広智三蔵、阿目佉跋折羅
翻訳者生没年：705-774
成立翻訳年：8c.
成立地：インド（？）
巻数：1
刊本所在：『大正蔵』19（No.933）
現代語訳書：なし
参考文献：種智院大学密教学会編『梵字大観』（名著普及会、1983）
解説：本作は不空訳とされるが、彼の訳経を伝える円照集『表制集』、円照撰『貞元目録』、空海撰『御請来目録』の何れにも当経は見出せない。使用語句からも明らかに中国乃至日本撰述の密浄融合典籍と考えられる。

内容的には毘盧遮那如来が観音・勢至等の大衆に対し、無量寿国の上品上生乃至下品下生の境地（九品浄識真如境）への往生を説く点が注目される。その国土の十二大曼荼羅には『無量寿経』所説の十二光仏が座し、行者が彼らの特徴を観じ、九品浄土と十二光仏の名を称えれば、三界を離れ真如の世界に発趣できると説かれる。主要な浄土経典の内容をしっかりおさえている点が指摘できる。続けて阿弥陀如来小真言が説かれ、その読誦・受持・書写によって福慧増上・消除業障・消滅万病・長寿成就・往生極楽等が叶うとされる。
作成者名：中御門敬教

華手経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：けしゅきょう
書名別名：華首経、摂善根経、摂諸善根経、摂諸福徳経、摂福徳経
サンスクリット原典書名：Ārya-Kuśalamūlasaṃparigraha-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：散逸
翻訳者名：鳩摩羅什
翻訳者名よみ：くまらじゅう
翻訳者生没年：344－413
成立翻訳年：406
成立地：インド
巻数：10/11/13
写本所在：cf.『日本現存八種一切経対照目録』p.117
刊本所在：『大正蔵』16（No.657）
現代語訳書：なし
解説：10巻35品からなる大部の初期大乗経典である。多くの大乗教理を各章ごとに説くが、体系的ではない。大乗経典成立に影響を与えたと云われる。チベット訳も存在する（cf. 東北No.101）。

当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられるが、浄土教的な箇所については僅かである。第13「中説品」か

ら第18「諸法品」にかけて説かれる十方段中の、西方二十九仏の中に無量光仏が登場する。この西方を説く段には、無量光仏の他、無量光明仏、無辺光仏も登場する。彼らが同一の仏か否かについては不明。ちなみに無量光明仏は曇無讖訳『悲華経』「菩薩本授記品」に登場し、無辺光仏は『無量寿経』に阿弥陀仏の異名として登場する。この29仏の仏国土中の一生補処の菩薩が、西方から集まって、王舎城竹園を訪れ仏足を敬礼することが説かれる。『長西録』では、『称揚諸仏功徳経』と同様に、こうした仏国土に関する経典の特徴を承けて、列挙されたと思われる。
作成者名：中御門敬教

後出阿弥陀仏偈

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：ごしゅつあみだぶつげ
書名別名：後出阿弥陀偈、後出阿弥陀仏経、後出阿弥陀仏偈経、阿弥陀仏偈
原典の存欠：散逸
翻訳者名：後漢失訳
翻訳者名よみ：ごかんしつやく
翻訳者生没年：不明
成立翻訳年：後漢（25-220）
成立地：インド（中国？）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、所在不明（書写年不明、書写者不明、敦煌本（S.2116））
写本奥書：1、（奥書なし）
刊本所在：各大蔵経にすべて収められている。
活字本所載書：『大正蔵』12（No.373）、『真宗全書』6
参考文献：蓮沢成淳「後出阿弥陀仏偈解題」（『国訳』宝積部7、1932）、藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970）、椎尾弁匡『仏教経典概説』（三康文化研究所、1971）、斉藤隆信「後出阿弥陀仏偈とその用途」『浄土教典籍の研究』、2006）
解説：本書は「後出」とあるように第二訳である。諸経録によると第一訳には『阿弥陀仏偈』があったというが現存しない。隋の費長房『歴代三宝紀』4（『大正蔵』49、p.55）において後漢の訳経に入れられて以後、今日まで後漢訳として伝承されてきている（漢訳者は不明）。全編五言56句からなる偈で構成され、その内容は文中に「乃従世饒王」や「誓二十四章」とあることから、後漢支婁迦讖訳『無量清浄平等覚経』にもとづいており、仏や浄土の荘厳が簡潔に説かれている。偈の偶数句末に置かれた字は概ね[-n][-ng]で収束しており、しかも平声字で配置されていることから、不規則ながらも押韻させようとする訳者または撰者の意図が認められるのである。なお後に唐の迦才『浄土論』2に全文が、また宋の宗曉『楽邦文類』1にも部分的に引用されている。
おそらく本書にはもともと原典は存在せず、漢訳された経典に依りながら、中国で撰述されたのであろう。
作成者名：斉藤隆信

金剛恐怖集会方広軌儀観自在三世最勝心明王経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：こんごうくふしゅうえほうこうきぎかんじざいぼさつさんぜさいしょうしんみょうおうぎょう
書名別名：金剛恐怖集会方広儀軌観自在三世最勝心明王経、金剛恐怖集会方広儀軌観自在三世最勝王経、観自在菩薩最勝明王心経、観自在菩薩三世最勝心明王経
原典の存欠：散逸
翻訳者名：不空
翻訳者名よみ：ふくう
翻訳者別名：不空金剛、大広智三蔵、阿目佉跋折羅
翻訳者生没年：705－774
成立翻訳年：8c.頃
成立地：インド（？）
巻数：1
写本所在：金剛寺（破損）、七寺、興聖寺、新宮寺（破損）
刊本所在：『大正蔵』20（No.1033）
現代語訳書：なし
参考文献：『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。蓮華部の観世音菩薩を主尊とする儀規である。序品から成就心真言品までの全9章からなる。そこではあらゆる恐怖からの護衛が祈願される。特に、疾病の苦しみなく、人々から信頼敬愛され、悪鬼等から守護され、夭折なく、悪道に墜ちない等の功徳が強調される。種々の真言およびその読誦の効能、供養の品々の扱い、尊格の書写法等が詳説される点から、事相を扱う雑密に分類されるべきものである。蓮華部の正尊が阿弥陀仏であることから、その仏に関する言及もある。
訳者である不空は鳩摩羅什・真諦・玄奘と並ぶ四大訳経家の一人。真言宗の付法の第六祖。空海の師匠である恵果阿闍梨は不空の後継者である。
浄土教との関わりでいえば、「成就事品」第2が重要である。ここでは阿弥陀三尊（左脇士が大勢至ではなく金剛手）の書写法が詳説される。所説の儀規にのっとり、死後に極楽往生することが説かれる。最終章である「成就心真言品」第9の冒頭においても、阿弥陀三尊（ここでは左脇士が大勢至）の書写について言及がある。この章の末尾には、行者が所説の真言法に則れば、悉地を得て、一切の曼陀羅に成入し、一切衆生に敬念され、五無間罪が消滅し、臨終時には観自在菩薩が現れ説法し、命終の後に兜率天宮に往生し、その後、三悪道に堕ちない等の功徳が説かれる。このように極楽往生と並んで観自在菩薩を主尊とする往生観、兜率天往生を説く点も本経の特徴である。
作成者名：中御門敬教

金剛頂経観自在如来修行法

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：こんごうちょうきょうかんじざいにょらいしゅぎょうほう
書名別名：観自在如来修行法、観自在王修行法
原典の存欠：散逸
翻訳者名：不空（？）
翻訳者名よみ：ふくう
翻訳者別名：不空金剛、大広智三蔵、阿目佉跋折羅
翻訳者生没年：705-774
成立翻訳年：8c.
成立地：インド（？）
巻数：1
写本所在：七寺（破損）、興聖寺
・『大正蔵』校合資料
甲本：建長四年写東寺三密蔵本、、乙本：三十帖策子第十七帖、丙本：黄檗版浄厳等加筆本
刊本所在：『大正蔵』19（No.931）

現代語訳書：なし
参考文献：頼富本宏『密教仏の研究』（法蔵館、1990）、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）＊p.276の苫米地誠一執筆項目、苫米地誠一「紅頗梨色阿弥陀像をめぐって（2）　－次第と儀軌を中心に－」（『大正大学綜合仏教研究所年報』17、1995）、佐久間留理子「インド密教の観自在」（立川武蔵、頼富本宏編『インド密教』「シリーズ密教」1、春秋社、1999）、中御門敬教「『無量寿如来観行供養儀軌』の研究　－中国における阿弥陀仏信仰の密教的展開－」（『印仏研』56-1、2007）、中御門敬教「阿弥陀仏儀軌における往生観の受容と統合　－『無量寿如来観行供養儀軌』を事例として－」（『仏教文化研究』52、2008）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。伝不空訳『無量寿如来観行供養儀軌』（『無量寿軌』）と同じく、『阿娑縛抄』において天台阿弥陀法三部作の一つとされる。『無量寿軌』が〈大日経〉の影響下にあるのに対し、『観自在法』は題名や冒頭にもある如く〈金剛頂経〉の略法、「一印曼荼羅」を明かす儀軌事相書である。
　構成は『無量寿軌』同様に、前行、本行、結行の三段に分けられる。内容は本尊を観自在王仏（阿弥陀仏）とする成就法である。阿弥陀仏、世自在王仏、観自在王仏、観自在菩薩との密接不可分の関係については頼富本宏『密教仏の研究』（法蔵館、1990、pp.192-194）を参照のこと。ちなみに近年、辛嶋氏によって、現存最古の〈無量寿経〉である『阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』の経名の意味が「阿弥陀仏正覚仏と観音が人間を救済することを（説く）経」と理解できることが指摘された。
　本作は『表制集』には採録されていないが、『貞元目録』から現れ、空海によって招来された典籍である（cf.『御請来目録』）。本作は、不空の師である金剛智三蔵訳『金剛頂経瑜伽観自在王如来修行法』と極めて類似し、一見すると不空が師の典籍に倣ったものに見える。しかし、現在では、この伝金剛智訳経は唐末時代成立の偽経とされ、この相承は受け入れられない。目録には不空訳となっているものの、不空作の可能性が大いに考えられる典籍である。
作成者名：中御門敬教

思惟略要法

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：しゆいりゃくようぼう
書名別名：思惟略要経、思惟要経、思惟経、思経
翻訳者名：鳩摩羅什
翻訳者名よみ：くまらじゅう
翻訳者別名：羅什
翻訳者生没年：344（東晋建元2）-413（東晋義熙9）／350（東晋永和6）-409（東晋弘始11）
成立地：インド
巻数：1
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『大正蔵』15（No.617）
現代語訳書：なし
参考文献：「思惟略要法解題」（『国訳一切経』経集部4）、藤堂恭俊「『坐禅三昧経』に説示する念仏観の成立背景」（『印仏研』8-2、1960）、藤堂恭俊「鳩摩羅什訳出と言われる禅経典の説示する念仏観」（『福井博士頌寿記念　東洋思想論集』同刊行会、1960）、清水乞「観仏から造仏へ」（『日仏年報』63、1998）、山部能宜「『思惟略要法』と『五門禅経要用法』」（『印仏研』49-2、2001）
解説：本テキストの鳩摩羅什訳は現存するが、後漢の安世高訳『思惟要略経』1巻は経録に記されているものの現存しない。
　本テキストと『五門禅経』との間に多くの並行部分が認められていることから、本テキストは『五門禅経』から抄出されたものであると見なされる一方で（藤堂、月輪）、モンゴル禅経との類似性を指摘する説もある（山部）。
　本テキストは大乗の禅観法について詳説する。四無量観法、不浄観法、白骨観法、観仏三昧法、生身観法、法身観法、十方諸仏観法、観無量寿仏法、諸法実相観法、法華三昧観法の10種の観法を説く。特に観無量寿仏法では、無量寿仏の国に生まれるための観法として、鈍根の者は額の上一寸を観察し、皮肉を除去して赤骨を見、さらにその一寸を珂（白い瑪瑙）のごとくの白骨に変じて瑠璃光色にさせ、その光明を身中に入れ、再びその白光を放ち、その中に無量寿仏を観じるべきと説く。また次に、諸法実相観法を説く中で、諸法の畢竟空相を観じて、衆生に対して大悲を興し、あらゆる善本を回向すれば、無量寿仏の国に往生できると説く。
作成者名：北条竜士

十住毘婆沙論

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：じゅうじゅうびばしゃろん
著者名：竜樹
翻訳者名：鳩摩羅什
翻訳者名よみ：くまらじゅう
翻訳者別名：羅什
翻訳者生没年：344（東晋建元2）-413（東晋義熙9）／350（東晋永和6）-409（東晋弘始11）
成立翻訳年：後秦344-413頃
巻数：17
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『大正蔵』26（No.1521）
参考文献：平川彰「十住毘婆沙論の著者について」（『印仏研』5-2、1957）、平川彰「十住毘婆沙論における在家と出家」（壬生台舜編『龍樹教学の研究』大蔵出版、1983）、香川孝雄「竜樹の浄土思想」（「講座大乗仏教5・浄土思想」、春秋社、1985）、瓜生津隆真「十住毘婆沙論特解題」（『新国訳一切経』釈経論部12、大蔵出版、1994）
解説：著者は竜樹と伝えられており、その真選について様々な議論がなされているが、今だ決着はついていない。また、サンスクリット本、チベット語訳は伝わっていない。本書は、従来『華厳経』「十地品」に対する注釈であるとされるが、『十地経』以外の『般舟三昧経』、『宝月童子問法経』などの諸種の初期大乗経典も依用されていることから、広く大乗仏教の要点をまとめたものであると見られている。
　全体は35品からなり、序品が総説、第2章「入初地品」から第17章「入寺品」まで初地における在家菩薩の行法を説き、第18章「共行品」から第27品「略行品」まで初地における在家と出家の共行として行法を説き、第28章「分別二地業道品」から第35章「戒報品」まで第二地における出家菩薩の行報を説く。僅かに初地（歓喜地）と第二地（離垢地）の半ばでその注釈が終わっている。本書が説く十地思想よりも、浄土教思想が説かれる第9章「易行品」を中心に、古来から浄土教家によって重視されている。
　第5章「釈願品」では、初地の菩薩がおこす十大願の第7願は「浄仏土の願」と呼ばれ、浄土の十相を説き、その説相が『無量寿経』『小品般若経』『大品般若経』『阿閦仏国経』などの諸説と類似することが指摘されている。また、本章において聞名往生説を説く。また第9章「易行品」では、精進努力して暫々に阿惟越致に転進できない凡夫のために難行道を説いたあと、一心に諸仏・諸菩薩の名号を称えれば、不退転にいたるという易行道を説く。本章では阿弥陀仏や世自在王仏、阿弥陀仏の本願という語が出ること、さ

らに百七仏名は『無量寿経』に出る過去仏名と酷似していることから、本書の念仏思想は『無量寿経』の思想を受けていると考えられている。第20章「念仏品」では、善根功徳の力に基づき、般舟三昧によって諸仏を現前に見ることができると説き、第25章「助念仏三昧品」では、四十不共法によって仏の法身を観ずることを説く。

また、本書は後世に多大な影響を与えた。北魏の曇鸞は、易行品を取り上げ、難易二道を明らかにし、道綽は『安楽集』の中で聖道・浄土の二門を分けた。日本では法然が『選択集』の中で傍明浄土の論とし、正依の経論に挙げていないのに対し、親鸞は本書を多く取り上げ、重視している。

作成者名：北条竜士

請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：しょうかんぜおんぼさつしょうぶくどくがいだらにじゅきょう
原典の存欠：散逸
翻訳者名：難提
翻訳者名よみ：なんだい
翻訳者生没年：5c.頃
成立翻訳年：5c.頃
成立地：インド（？）
巻数：1
写本所在：金剛寺（破損）、七寺（破損）、石山寺、興聖寺、西方寺（破損）、新宮寺（破損）、松尾社
刊本所在：『大正蔵』20（No.1043）
現代語訳書：なし
参考文献：頼富本宏『密教仏の研究』（法蔵館､1990）、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）
解説：現世で遭遇する災難除去を目的とした密教経典である。浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。雑密に分類される。阿弥陀三尊が登場し、観世音菩薩による救済が説かれる。往生は重視されず、現世での救済が中心。ただし末尾に功徳として「浄仏国への生」が僅かに言及される。全体の内容は以下のとおり。

ヴァイシャーリ国の人民が、良医耆婆の手にも負えない大悪病に遭遇した。その惨状を目にして月蓋長者が仏に助けを請う。そして仏の指示に従って、彼は西方阿弥陀三尊を召喚する。その中の特に観世音菩薩に依って、現世苦から救済されることが説かれる。そのための行法として、三宝帰依（南無仏・南無法・南無僧）、観音菩薩の名号、大吉祥六字章句救苦神呪（oṃ ma ṇi pad me hūṃか）・各章句（消伏毒害無上章句、灌頂陀羅尼章句）等を称えることが勧められる。

このような名号・マントラ・陀羅尼の功徳のうち、観世音の名号による現世の様々な苦からの救済は、すでに鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』「観世音菩薩普門品」での七難（火難・水難・風難・刀杖難・悪鬼難・枷鎖難・怨賊難）や、「入法界品観音の章」などにも出ている。しかし本経典ではそれらがより組織的・体系的に述べられて、救済の具体的方法の提示に至っている。観音信仰が密教化していく過程の中、初期段階に属する経典（翻訳は5c.）の一つといえる。

作成者名：中御門敬教

称讃浄土仏摂受経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：しょうさんじょうどぶつしょうじゅきょう
書名別名：称讃浄土経、称讃浄土摂受経
異本書名：阿弥陀経、小無量寿経
原典の存欠：現存
翻訳者名：玄奘
翻訳者名よみ：げんじょう
翻訳者生没年：602（仁寿2）-664（永徽5）
成立翻訳年：（成立）？（翻訳）650（永徽1）
成立地：インド
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本所在：1、七寺蔵本
2、興聖寺蔵本
3、松尾社蔵本
4、大英博物館蔵本
写本奥書：1、一校了　慶光
2、（未調査）
3、以梵尺寺本交了
4、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』12（No.367）
現代語訳書：稲垣久雄「Hsuan-tsang's version of the Smaller Sukhāvatīvyūha Sūtra 玄奘訳『称讃浄土仏摂受経』」(『竜谷大学論集』442、1993)、西村実則「『称讃浄土仏摂受経』訳注」(『三康文化研究所年報』30、1999)
参考文献：藤田宏達『阿弥陀経講究』（東本願寺出版部、1997）、藤田宏達「玄奘訳『称讃浄土仏摂受経』考」（『印度哲学仏教学』13、1998）
解説：本経は＜阿弥陀経＞の漢訳のいわゆる「二存一欠」のうち現存する一本である。十方段の後にある「称讃不可思議仏土功徳、一切諸仏摂受法門」という本経の別名部分を「称讃浄土・仏摂受」と要約して経題にしたことが推定される。

藤田宏達は、訳出は玄奘の高弟である大乗光ではなく、無名の大乗詢であるとし、そのため本経には特異な訳や誤訳・文章の付加など、種々の疑点があると指摘している。

分量としては羅什訳『阿弥陀経』の二倍強である。『阿弥陀経』の六方段に相当する部分が十方段になっており、また八功徳水についての一々の説明があるなどの要因によって増広している。

日本では奈良時代に広く流布していた。

作成者名：佐藤直実／佐々木大悟

摂大乗論

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：しょうだいじょうろん
異本書名：摂大乗論
サンスクリット原典書名：Mahāyānasaṃgraha
原典の存欠：散逸
著者名：アサンガ、無著、無着
著者名よみ：むちゃく
著者生没年：395-470頃、または310-390頃
翻訳者名：玄奘
翻訳者名よみ：げんじょう
成立地：インド
活字本所載書：『大正蔵』31（No.1592-No.1598)、佐々木月樵『漢訳四本対照　摂大乗論　附西蔵訳摂大乗論』(国書刊行会1977)
現代語訳書：長尾雅人『摂大乗論　和訳と注解　上・下』（講談社、1982、1987）
参考文献：宇井伯寿『摂大乗論研究』（岩波書店、1935）、西尾京雄『仏地経論之研究』（国書刊行会1982）、工藤成性『世親教学の体系的研究』（永田文昌堂､1955）､山口益『世親の浄土論』（法蔵館、1963）

解説：漢訳によると「大乗阿毘達磨経」の「摂大乗品」の註釈として、大乗には10種類の勝れた特徴があることに関して、唯識瑜伽行派の立場から大乗仏教の教義をまとめた綱要書である。この無著の著作には、サンスクリット本は現存しないが、3つの漢訳があるほか、チベット訳（東北No.4048、大谷No.5549）も存在する。また、世親（アサンガの実弟）と、無性による註釈が、漢訳とチベット訳で伝えられているほか、チベット訳では著者不明の『秘密義弁別略疏』が伝えられている。

本著の構造は10章からなる。各章は、1）アーラヤ識の存在論証、2）三自性、3）三自性を通じた唯識への悟入、4）六波羅蜜多、5）菩薩の十地、6）7）8）菩薩の戒定慧の増上三学、9）無住処涅槃、10）仏の三身を内容とし、空を中心に説いた中観派とは異なったこの学派の理論と実践が示されている。

本著は、迦才の『浄土論』において、浄土とその往生を明らかにするために引用された12の経と7の論のうちの一つであり、東アジアの浄土教ではその説が取りあげられ、議論されてきた。特に重要なのは、別時意趣と仏国土荘厳の記述である。

別時意趣は、第2章に出る四種意趣（これらは弥勒の『大乗荘厳経論』第12章「説示（漢訳「弘法品第13」）vv.18-20とその『釈』(世親著とされる)に依る)、すなわち仏説の趣旨についての4つの解釈方法の第2であり、「他の時をお考えになったこと」という意味である。これは、世親釈をも含めて述べるなら、「多宝如来の名号を保つなら最上の正覚に決定する」とか「極楽世界に生まれたいと願うならそれだけでそこに生まれる」といった仏説は、文字通りに今直ちにそうなるという意味ではなく、貨幣の小さな単位が積もって大きくなるように、やがて別の時にそうなるという意味であり、怠惰な者を励ますための方便であるという。この立場からは極楽往生は容易ではないことになるが、これは見仏するには空性の証悟が必要であるという『般舟三昧経』、あるいは初地歓喜地が必要であるという唯識派の現実重視の実践論と繋がっている。それに対して、浄土教家たちは、普遍的な救済論の立場から、本願に乗ずることにより往生は可能であるということを経典に戻って再度確認し、主張している。なおチベットにおいても、チョナン派の教義大成者であるトルポパ・シェーラプ・ギェルツェン(1292-1361)、ニンマ派の人で無宗派運動で活躍したジュ・ミーパム・ギャムツォ(1846-1912)もまた、別時意趣の問題に対して、経典自体に聞名の功徳が述べられていることを重視して、回答としている。

また第10章には仏の様々な徳を説くなかで、諸仏の浄土には18の円満(真諦訳「円浄」)があるとされる。一方で無著の弟世親（天親）には、『浄土論』が漢訳で伝えられているが、そこには17種の荘厳が説かれている。その浄土の荘厳については、近現代の研究者たちにより世親の他の論書、唯識瑜伽行派の教義一般、功徳各々の原語とその意味といった観点から対比、研究されている。

作成者名：藤仲孝司

称揚諸仏功徳経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：しょうようしょぶつくどくきょう
書名別名：集華経、現在仏名、諸仏華、称揚諸仏経、集諸仏華経、称揚百七十仏名経、百七十仏名
サンスクリット原典書名：Ārya-Kusumasañcaya-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：散逸
翻訳者名：吉迦夜
翻訳者名よみ：きつかや
翻訳者生没年：5c.（？）
成立翻訳年：472
成立地：インド（？）
巻数：3/4
写本所在：上巻　聖護蔵、金剛寺（破損）、七寺、石山寺、興聖寺、西方寺、新宮寺、松尾社
中巻　聖護蔵、金剛寺（破損）、七寺、石山寺、興聖寺、西方寺、松尾社
下巻　聖護蔵、金剛寺（破損）、七寺、石山寺、興聖寺、松尾社
刊本所在：『大正蔵』14（No.434）
現代語訳書：なし
参考文献：田島徳音「仏説称揚諸仏功徳経解題」（『国訳一切経』「経集部」12、大東出版社、1973）、村上真完・及川真介『仏のことば註（三）　－パラマッタ・ジョーティカー』（春秋社、1988）、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）、安達俊英 'Hearing Amitābha's Name' in the Sukhāvatī-vyūha（『香川孝雄博士古稀記念論集　仏教学浄土学研究』、永田文昌堂、2001）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。霊鷲山において、仏が舎利弗・弥勒・迦葉を対告衆にして、特に仏名の功徳を強調する、3巻（上中下）から成る仏名経である。仏名経とは仏名読誦の功徳によって滅罪し、現世利益の願いを説く経典である。この経典にちなんで、三世諸仏の仏名を読誦する仏名会も良く知られている。成立的には中期以降の大乗経典に属する。経典末尾の奥書には、クチャ国における当経翻訳の経緯、その功徳が説かれている（cf. 『大正蔵』14、No.434, pp.105a15-105b4）。チベット訳も存在する（cf. 東北No.266）。

当経中には東西南北上の五方における、順に四十八仏、三十八仏、三仏、五仏、二十八仏が登場する。阿弥陀仏は巻下所説の西方の第一番目の仏として登場する。これらの仏名を挙げ、仏名を聞き、諷誦・歓喜・信楽することの功徳によって、生死の罪の滅、解脱、悪魔からの道心保護、住不退転などの利益が得られることを説く。本経は、浄土経疏目録である『長西録』に、仏国土に関する経典として所載されたと思われる。

仏名の挙げ方については、仏の固有名に仏十号を加えて出す点が特徴である。仏十号の功徳随念が下敷きになっていよう。ちなみに仏名を聞くことは、遭いがたい仏・仏教に出会えたことを象徴する讃歎の表現である。古くは〈スッタニパータ〉所説の「セーラ経」に出る（詳細は『パラマッタ・ジョーティカー』2 、pp.271-273）。それが浄土教に入ると往生行の一部を担う用例となる。浄土教、特に〈無量寿経〉における聞名の用例詳査については、安達［2001］を参考のこと。

当経所説の阿弥陀仏に関する所説を要約すれば以下の通りである。

（cf. p.99a-b）ここより西方十万億刹の彼方に安楽世界がある。そこに阿弥陀如来・至真・等正覚・明行成・為善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・衆祐が居る。この無量寿如来の名号を聞き、一心に信楽し、諷誦し、彼を念じ、歓喜し、心を定める。すると行者は無量の福徳を得て、三悪道の厄難を離れる。命終の後には往生できる。臨終時にしっかり念じれば阿弥陀仏は衆僧をひきいて、行者の前に現れる。悪魔から保護され、菩提心が折れることはない。なぜ無量寿仏がそうするかといえば、衆生救済、衆生守護の誓いを建てたからである。行者が往生した後には、如来の正覚慧を円満する。またその世界では大乗の者（第一乗）は正覚を満足し、小乗（声聞乗）の者は阿羅漢を満足するという。つまり願いに応じて生まれるのである。そこでは阿弥陀仏名を聞名して讃説すること、信じること、心を尽くし尊敬することが奨励される。

作成者名：中御門敬教

太子刷護経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：たいしせつごきょう
異本書名：失訳『太子和休経』(『大正蔵』12（No.344）)、菩提流志訳『大宝積経』「阿闍世王子会」(『大正蔵』11（No.310-37))
サンスクリット原典書名：Ārya-Siṃhaparipṛcchā-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：散逸
翻訳者名：竺法護
翻訳者名よみ：じくほうご
翻訳者生没年：3～4c.頃
成立翻訳年：3～4c.頃
成立地：インド
巻数：1
写本所在：七寺、石山寺、興聖寺、西方寺(破損)、松尾社
刊本所在：『大正蔵』12（No.343）
現代語訳書：なし
参考文献：静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』（百華苑、1974）、色井秀譲『浄土念仏源流考』（百華苑、1978）、Gregory Schopen、"Sukhāvatī as a Generalized Religious Goal in Sanskrit Mahāyāna Sūtra Literature"（*Indo-Iranian Journal*、Vol.19 Nos.3/4、1978）
解説：当経の全体的な解題については異訳『仏説太子和休経』の項を参照のこと。構成・表現・内容とも『仏説太子和休経』と極めて良く一致する。ただし、『仏説太子和休経』では、和休と彼の五百の従者による仏への質問が27であるのに対し、当経ではそれが38に増広されている。増広内容や異訳との対応については、静谷［1978］（pp.185-186）の「太子和休経、太子刷護経、阿闍世王子会の対照表」を参照のこと。
　なお浄土教思想については、異本である『仏説太子和休経』の項目を参照のこと。
作成者名：中御門敬教

大乗起信論

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいじょうきしんろん
書名別名：起信論
異本書名：大乗起信論
原典の存欠：散逸
翻訳者名：真諦
翻訳者名よみ：しんだい
翻訳者別名：拘那羅陀、派羅末陀
翻訳者生没年：499（永元1）-569（明帝天保8）
成立翻訳年：550（大宝1）
成立地：インド
巻数：1、2
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、東寺観智院蔵本（752（天平勝宝4）、書写者不明）
2、東寺観智院蔵本（754（天平勝宝6）、書写者不明）
3、七寺蔵本（平安後期、書写者不明）
4、俄蔵敦煌文献3（未調査）
5、快友寺蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
2、一校了栄俊
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』32（No.1666）
現代語訳書：平川彰『大乗起信論』（「仏典講座」22、大蔵出版、1973）、常盤大定『支那仏教の研究』（名著出版、1974）、竹村牧男『大乗起信論読釈』（山喜房仏書林、1985）、宇井伯寿・高崎直道訳注『大乗起信論』（岩波文庫、1994）、池田魯参『現代語訳大乗起信論』（大蔵出版、1998）
参考文献：村上専精『仏教唯心論』（創元社、1943）、望月信亨『仏教経典成立史論』（法蔵館、1946）、平川彰編『論集―大乗起信論と如来蔵』（春秋社、1990）、柏木弘雄『大乗起信論の研究』（春秋社、1998）、井上克人編『「大乗起信論」の研究』（関西大学出版部、2000）、『大乗起信論』（国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集、2007）
解説：本書は大乗に対して正しい信を起こさせるための論書である。5章からなり、大乗仏教の理論と実践が如来蔵思想に基づいて説かれている。中国・日本の各宗派に多大な影響を与えた。
　馬鳴菩薩造と言われるが、梵本やチベット訳が存在せず、5-6世紀の成立と考えられるため、『仏所行讃』作者の馬鳴と同一人物であるとは考えにくい。異訳に実叉難陀訳の2巻本『大乗起信論』が存在する。
　望月信亨・村上専精は本経の中国成立説を提唱しており、また、常盤大定、宇井伯寿・平川彰はインド成立説を提唱している。
　本経の巻末に、臆病な衆生のために如来が勝れた方便を示す場面がある。そこでは専ら仏を念じると、その願いに随って他方仏土に生まれ、常に仏をみて永遠に悪道を離れることが説かれる。その一例として「もし人が西方極楽世界の阿弥陀仏を専ら念じ、修習した善根を廻向してその世界に生まれることを願うなら、すなわち往生することができる」（『大正蔵』、p.583）と、阿弥陀仏の極楽世界を挙げている。
作成者名：佐々木大悟

大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいじょうしょうむりょうじゅけつじょうこうみょうおうにょらいだらにきょう
書名別名：宗要経
異本書名：失訳『大乗無量寿経』（『大正蔵』19（No.936））
サンスクリット原典書名：Ārya-Aparimitāyurjñāna-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：現存
翻訳者名：法天
翻訳者名よみ：ほうてん
翻訳者生没年：？－1001
成立翻訳年：10c.頃
成立地：インド
巻数：1
刊本所在：『大正蔵』19（No.937）
現代語訳書：なし
参考文献：池田澄達「梵本アパリミターユル陀羅尼経の校合」（『宗教研究』1-3、1916）、Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman, Mkhas grub rje's *Fundamentals of the Buddhist Tantras*, Hague, 1968、高田仁覚『インド・チベット　真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）、御牧克己「大乗無量寿宗要経」（牧田諦亮・福井文雅編『敦煌と中

国仏教』（「講座敦煌」7、大東出版社、1984））、塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文『密教経典篇』（「梵語仏典の研究」4、平楽寺書店、1989）、上山大峻『敦煌仏教の研究』（法蔵館、1990）pp.437-456、617-625、藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：漢訳異本『大乗無量寿経』（『大正蔵』19（No.936））の項目を参照のこと。
作成者名：中御門敬教

大乗無量寿経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいじょうむりょうじゅきょう
書名別名：宗要経
異本書名：法天訳『大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』（『大正蔵』19（No.937））
サンスクリット原典書名：Ārya-Aparimitāyurjñāna-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：現存
翻訳者名：失訳
翻訳者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：インド
巻数：1
刊本所在：『大正蔵』19（No.936）
現代語訳書：なし
参考文献：池田澄達「梵本アパリミターユル陀羅尼経の校合」（『宗教研究』1-3、1916）、Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman, *Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras*, Hague, 1968、高田仁覚『インド・チベット　真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）、御牧克己「大乗無量寿宗要経」（牧田諦亮・福井文雅編『敦煌と中国仏教』（「講座敦煌」7、大東出版社、1984））、塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文『密教経典篇』（「梵語仏典の研究」4、平楽寺書店、1989）、上山大峻『敦煌仏教の研究』（法蔵館、1990、pp.437-456、617-625）、藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：当経は名号に関して無量寿決定王如来の「百八の名号」を憶念・書写・読誦することなどの功徳を述べる。他方、異本『仏説大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』（『大正蔵』19（No.937））には、無量寿決定光明王如来の「名号を百八遍」称念して長寿を祈願するとしながら、「我今為説無量寿決定光明王如来一百八名陀羅尼曰～」などと一貫しない点が見られる。

また仏国土の方向と名称については冒頭に、当経は「上方有世界、名無量功徳聚」とするが、異本は「従是南閻浮提、西方過無量仏土、有世界名無量功徳蔵」とする。またダラニに関する修行の果報の一つとして往生が挙げられるが、当経は「西方極楽世界阿弥陀浄土」への往生とするが、異本では「無量寿決定光明王如来仏刹無量功徳蔵世界」への往生とする。

当経は経典書写の功徳を説く点から中央アジアで広く書写された。漢訳も敦煌において公的事業として書写されたものが大量に発見されている。しかし詳細な調査は行われておらず、諸本間の異同については今後の調査が俟たれる。

中国・日本の浄土教との関連では、本経と同じくダラニを説く『鼓音声陀羅尼経』は先行する〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉の影響が大きく、西方の極楽浄土への往生を説くため傍証の経とされる。それに対して本経は仏名が必ずしも一致せず、極楽国土も正面から言及されていないためか、取り上げられた事例はほとんど知られていない。

無量寿決定光明王如来の名前はインド・チベットにおいては阿弥陀仏の異名と理解された。しかし例えば日本の天台仏教（『大正蔵』（図像第8巻）『阿娑縛抄』pp.347c-349a）においては釈迦如来の異名と理解され、それをもとに儀礼が行われた。
作成者名：中御門敬教

大乗無量寿荘厳経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいじょうむりょうじゅしょうごんきょう
書名別名：無量寿荘厳経、荘厳経
異本書名：仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経、仏説無量清浄平等覚経、仏説無量寿経、大宝積経無量寿如来会
サンスクリット原典書名：Sukhāvatīvyūha
翻訳者名：法賢
翻訳者名よみ：ほっけん
翻訳者生没年：宋
成立翻訳年：（翻訳）991
成立地：インド
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
活字本所載書：『大正蔵』12（No.363）
参考文献：藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970）、香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』（永田文昌堂、1984）、林和彦「『大乗無量寿荘厳経』にみられる阿弥陀仏信仰の性格」（『仏教史学研究』33-2、1990）、大田利生『漢訳五本梵本蔵訳対照無量寿経』（永田文昌堂、2005）、大田利生『無量寿経論考』（永田文昌堂、2007）
解説：本経は「後期無量寿経」類の中でも独自の発展形態を示す。その特徴として、以下のことが挙げられる。(1) 上中下の三巻構成である。(2) 願文の数が三十六になっている。この点から、かつて四十八願経（『無量寿経』、『無量寿如来会』）との成立の前後が議論されたが、現在では、四十八願経よりも後の成立（宋代）であることが藤田宏達・香川孝雄などによって指摘されている。(3)『無量寿如来会』などと同様に五悪段が存在しない。(4) 極楽を「無名無号無相無形」と見るなど、空の思想を背景とした表現が多く見られる。(5) 極楽世界に胎生はなく、すべて化生であるとして、疑城胎宮の存在を否定している。(6) 様々な箇所を菩薩行として置き換えるという特徴が見られる。
作成者名：佐藤直実／佐々木大悟

太子和休経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：たいしわくきょう
異本書名：竺法護訳『太子刷護経』（『大正蔵』12（No.343））、菩提流志訳『大宝積経』「阿闍世王子会」（『大正蔵』11（No.310-37））
サンスクリット原典書名：Ārya-Siṃhaparipṛcchā-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：散逸
翻訳者名：失訳
翻訳者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：インド

巻数：1
写本所在：七寺、石山寺、興聖寺、西方寺、松尾社
刊本所在：『大正蔵』12（No.344）
現代語訳書：なし
参考文献：静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』（百華苑、1974）、色井秀譲『浄土念仏源流考』（百華苑、1978）、Gregory Schopen、“Sukhāvatī as a Generalized Religious Goal in Sanskrit Mahāyāna Sūtra Literature”（*Indo-Iranian Journal*、Vol.19 Nos.3/4、1978）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。僧祐『出三蔵記集』の段階で失訳扱いを受けている。『長西録』は異訳として西晋竺法護訳『仏説太子刷護経』（『大正蔵』No.343）を出す。『長西録』には出ないが、唐菩提流志訳『大宝積経』「阿闍世王子会」（『大正蔵』No.310-37）も異訳である。対応するチベット訳も存在する（D. 東北No.81、P. 大谷No.760-37）。西晋時代の竺法護訳が現存することから、古層に属する初期大乗経典である。ちなみに静谷正雄は、初期大乗に先行する原始大乗経典に分類するほどである。題名にある「和休」は、阿闍世王の皇太子の名前である。和休と彼の五百の従者が王舎城の仏を訪ね、二十七の質問を行い、それに対する仏の返答を構成とする小部の経典である。仏の返答を整理すると、所説内容は忍耐・不瞋・不邪淫・布施・経典書写・智慧・三昧・慈悲・和合・不殺生・神通力・誓願行・浄仏国土などにまとめられる。この所説を聞いた彼らは大いに喜び、直後に登場する弥勒菩薩と仏とのやりとりの中で浄土教的な要素が説かれる。該当部分を訳すと以下の通りである。
「仏は弥勒に告げました。私の次の話を聴きなさい。太子和休と五百人の長者の子息は、前世で百億の仏を供養し、誰もが菩薩道を行いました。また前世のディーパンカラ仏の時に、この五百人はすべて私の弟子であり、［私の］教化者でした。後世においては［彼らは］いつでも会座を等しくし、六億の仏を供養しました。この後、一劫がたちました。その劫は摩訶波羅蜜［劫］と名付けられました。［彼らは］一劫の間、会座を等しくし、五百人は前後して全て同一の名前となりました。名前は若那頸頭陀那仏です。［彼らが］仏となった時、その国土はまさに阿弥陀仏国土のようでした。［その］国土の菩薩で往来飛行する者、変化する者は、誰もが阿弥陀仏国の諸菩薩のようでした。人がこの教えを聞けば、誰もが阿弥陀仏国に生まれ、文殊師利菩薩・三摩訶提鉢菩薩のようになるでしょう。後に仏となれば、まさに阿弥陀仏のようになるでしょう」である。
　このように、行者が菩薩となる場合は文殊菩薩、仏となる場合は阿弥陀仏と述べる。限定的な阿弥陀仏信仰といえず、阿弥陀仏という存在を一般的な仏道上の到達点と捉えている点に特徴があり、阿弥陀仏信仰の広い流通の傍証ともなろう。
作成者名：中御門敬教

大智度論

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいちどろん
書名別名：大智度経論、摩訶般若釈論、大慧度経集論、大智度経論、大智釈論、大智論、智度論、大論、釈論
著者名：竜樹
著者名別名：羅什
翻訳者名：鳩摩羅什
翻訳者名よみ：くまらじゅう
翻訳者別名：羅什
翻訳者生没年：344（東晋建元2）-413（東晋義熙9）／350（東晋永和6）-409（東晋弘始11）
成立翻訳年：405（弘始7）
成立地：インド
巻数：100
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『大正蔵』25（No.1509）
現代語訳書：梶山雄一・赤松明彦『大智度論』（「大乗仏典」中国・日本篇1、中央公論社、1989）
参考文献：梶山雄一「大智度論における阿弥陀仏信仰」（『仏教大学仏教文化研究所年報』7、1990）
解説：竜樹が著したものを鳩摩羅什が弘始7年（405）に漢訳したと伝えられる。しかし本書は、内容において鳩摩羅什によって改変された部分が見られ、またサンスクリット本、チベット語訳が伝わっていないことから、そのすべてを龍樹の真作と見なすことは困難と考えられている。
　本書は『大品般若経』の注釈書であるが、もし原典を全訳すれば現存のものよりも約10倍になることから、最初の34巻（『大品般若経』初品に相当）のみを全訳し、以下は鳩摩羅什が適宜、抄訳したと言われている。
　本書は阿弥陀仏についても言及する。しかし、それはあくまで現在十方諸仏の1人としてであり、阿閦仏と並んで十方諸仏の代表としてのみ言及される。また、安楽世界については法積（法蔵）比丘の功徳力が薄いため、華積世界や普賢世界に劣るものとされ（初品、巻10）、無量寿世界は慈悲心の多い菩薩の行くべき世界ではなく、諸仏の功徳を集める菩薩、すなわち、諸仏にならって自利行に励もうとする菩薩の行くべきところであるとされる（往生品、巻38）。さらに、念仏についてもその大果を説くが、その念仏の対象は阿弥陀仏のみに限定されている訳ではない（初品、巻7）。しかしながら、念仏自体の価値は種々の煩悩や前世の罪を除くものとして高く評価されている（初品、巻7）。
　また、『般舟三昧経』について多く言及しており、その経に出る譬喩話を引用し、般舟三昧、すなわち、般若波羅密に裏付けられた念仏三昧を説く（初品、巻7）。
作成者名：北条竜士

大方広仏華厳経／普賢広大願王清浄偈

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいほうこうぶつけごんきょう／ふげんこうだいがんのうおうしょうじょうげ
書名別名：四十華厳、入不思議解脱境界普賢行願品
異本書名：東晋覚賢訳『文殊師利発願経』(『大正蔵』10（No.296))、唐不空訳『普賢菩薩行願讃』(『大正蔵』10（No.297))、失訳『普賢菩薩行願経』(『大正蔵』85（No.2907))、失訳『大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品』（『大正蔵』85（No.2908））
サンスクリット原典書名：Ārya-Bhadracaryāpraṇidhānarāja
原典の存欠：現存
翻訳者名：般若
翻訳者名よみ：はんにゃ
翻訳者生没年：8c.頃
成立翻訳年：8c.頃
成立地：インド
所収文献名：『大方広仏華厳経（四十華厳）』「普賢広大願王清浄偈」(『大正蔵』10（No.293 ））
巻数：40
写本所在：七寺、興聖寺、西方寺（破損）
刊本所在：『大正蔵』10（No.293 ）
現代語訳書：中御門敬教「「普賢十大願、浄土思想、科文を介した〈普賢行願讃〉理解　－『四十華厳』巻四十を参照して－」（『浄土宗学研究』30、2004）
参考文献：井ノ口泰淳「普賢行願讃考(1)」（『竜谷大学論集』

412、1978. 再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995）、井ノ口泰淳「普賢行願讃考(2)」（『竜谷大学論集』420、1982.再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995）、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房仏書林、1993）、武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）、Keikyo Nakamikado、Amitābha Cult in Bhadracarīpraṇidhānarāja（『印仏研』52-1、2003）、中御門敬教「往生後論攷」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』、山喜房仏書林、2004）

解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。叢書としての〈華厳経〉から「入法界品」のみを別出して翻訳したものであり、梵本『ガンダヴューハ』に対応する。漢訳では40巻からなるので『四十華厳』と通称される。

この最終巻（巻40）において、七支供養を含む「普賢十大願」が詳説され、その後でその果報（普賢行成就・悪業滅尽・極楽往生）が説かれ、終わりに〈普賢行願讃〉に相当する「普賢広大願王清浄偈」が挙げられる。この巻40の骨格は〈普賢行願讃〉を末尾におく点を除き、その他は梵本と一致していない。冒頭部分が、当経の構成をよく示している。紹介すれば以下の通りである。

「その時、普賢菩薩・摩訶薩は如来の勝れた功徳を称讃しおわり、諸菩薩や善財にこう語りました。

『良家の子息よ、如来の功徳は、たとえ十方のあらゆる諸仏の教えをもってもまったく説きあかせず、仏国土の極微の塵数もの劫にわたり、続けて説いてもきわめ尽くせません。この功徳の門を成就しようと望むなら、十種広大行願を実践すべきです。　－何を十とするのですか－　一つは礼敬諸仏、二つは称讃如来、三つは広修供養、四つは懺悔業障、五つは随喜功徳、六つは請転法輪、七つは請仏住世、八つは常随仏学、九つは恒順衆生、十は普皆廻向です』～」

この直後に個々の誓願が詳説され、その果報の一つに〈普賢行願讃〉62偈版の浄土思想（vs.57-60）を踏まえて、往生観が広説される。以下の通りである。

「一瞬にして極楽世界に往生します。到達してすぐさま阿弥陀仏、文殊菩薩、普賢菩薩、観音菩薩、弥勒菩薩等を目にします（v.57）。彼ら諸菩薩は姿形が麗しく、功徳を具え、［阿弥陀仏を］取り囲んでいます。その者は自ら［その様子を］目にし、［極楽世界の］蓮華の中に生まれ、［阿弥陀］仏から授記を授かり、授記を獲得しおわって（v.59）、無数の百千億ナユタ劫を経て、十方の説きあかせない［ほどの］世界に広くゆきわたり、智慧の力によって衆生の心に応じた利益をなします（v.60）。［その者は］久しからず菩提座に坐り、魔の軍勢を降伏し、正等覚を成就し、妙なる法輪を転じ、仏国土の極微の数ほどの世の衆生に菩提心を発すことができ、その［衆生］を機根に応じて教化し、成熟し、ないし海のような未来劫が尽きるまで、広く一切の衆生を利益できます（v.58）。良家の子息よ、かの衆生たちがこの大願王（普賢十大願）を耳にし、信仰し、大切に受け取り、読み誦え、広く人々に説いたとします。あらゆる功徳は、仏・世尊を除いて他に知る者はおりません。それゆえあなたたちは、この願王（普賢十大願）を耳にし、疑心を起こしてはいけません。つまびらかに受け取りなさい。受け取ってから読み、読んでから誦え、誦えてから保ち、ないし書写して、広く人々に説きます。これ［を実践した］人々は一瞬のうちに、あらゆる実践行と誓願全てが完成します（v.58）。獲得した福徳の集まりは無量であり無辺です。煩悩や大苦の海にいる衆生を救いとれます。その者を出離させ、阿弥陀仏の極楽世界に誰もが往生します。

その時、普賢菩薩摩訶薩は、再度この意味を述べようと思いたち、普く十方を見渡し、偈を説きました（以下「普賢広大願王清浄偈」）。」

漢訳仏教圏では、上述の長行と「普賢広大願王清浄偈」をもって華厳浄土義を代表させている。例えば、宋宗暁『楽邦文類』、明大佑『浄土指帰』、明袁宏道『西方合論』、長西『浄土依憑経論章疏目録』「羣経録第一」、文雄『蓮門経籍録』「傍依経本類」、継成『阿弥陀仏説林』、矢吹慶輝『傍説浄土教論集』などには、浄土教典籍として挙げられている。また中国華厳宗における『四十華厳』の注釈の中でも、以上の浄土思想に対する言及がされている。源信『往生要集』「大文第二欣求浄土」や法然『選択本願念仏集』・『逆修説法』においても当経への言及がある。中でも源信『普賢講作法』は、基本的に巻40に基づいており、日本天台仏教における華厳浄土義をよく伝えるものとなっている。

作成者名：中御門敬教

大方広仏華厳経修慈分

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいほうこうぶつけごんきょうしゅうじぶん
書名別名：華厳経修慈分、修慈分
原典の存欠：散逸
翻訳者名：提雲般若
翻訳者名よみ：だいうんはんにゃ
翻訳者生没年：7c.頃
成立翻訳年：692（嗣聖8）
成立地：インド（？）
巻数：1
写本所在：金剛寺(破損)、七寺(破損)、石山寺、興聖寺、新宮寺(破損)、松尾社
刊本所在：『大正蔵』10（No.306）
現代語訳書：なし
解説：『長西録』には、不空訳『普賢菩薩行願讃』、覚賢訳『文殊師利発願経』、般若訳『四十華厳』巻四十「普賢行願品」と、当経を合わせて「已上四経同本異訳」と記される。確かに本経は『四十華厳』巻40「普賢行願品」所説の浄土思想と基調が共通するが、厳密には当経を除く三訳と同本異訳といえない。正確に対応する梵語原典やチベット訳は未確認にである。

内容については以下の通りである。菩提を得るために、菩薩行を行い、常なる安楽を願うならば、慈心を修習すること、自ら調伏することが必要とされ、そのための修習が説かれる。特に慈心の修習を基調にして仏国土の諸々の特徴を修習することが説かれる。そして末尾において、その果報としての浄土教的側面が強調される。即ち往生するためには慈心の修習が必要であって、それができれば臨終時には生前中の障碍が滅することが説かれる。この点は華厳浄土義の通例である。

該当部分を訳すと以下の通りである。

「仏子（菩薩）よ、一切の菩薩がすべてこのように慈心を修習すべきです。あなたは慈を修することで、名前が「慈ある者」（慈者）となります。仏子（菩薩）よ、もしも善男子・善女人がこの『修慈経』を聞くことができれば、無始以来の諸悪業障を滅することができ、病疫を離れることができます。一切の人によって愛され敬われます。その間に、あるいは臨終の時に十方諸仏を奉見でき、［彼らから］無上正等覚の授記を授けられ、［無生］法忍を得て、あるいは陀羅尼門に入る［ことができる］。その［行者の］心は安穏で、死への畏れはなく、永く一切の諸悪道の苦を離れ、必ず清浄極楽仏国に生まれる。」

作成者名：中御門敬教

大宝積経阿闍世王子会

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいほうしゃくきょう　あじゃせおうじえ
異本書名：失訳『太子和休経』(『大正蔵』12（No.344）)、竺法護訳『太子刷護経』（『大正蔵』12（No.343））
サンスクリット原典書名：Ārya-Siṃhaparipṛcchā-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：散逸
翻訳者名：菩提流志
翻訳者名よみ：ぼだいるし
翻訳者生没年：？－727
成立翻訳年：7～8c.頃
成立地：インド
所収文献名：『大宝積経』（『大正蔵』11（No.310））
巻数：1
写本所在：金剛寺、七寺、石山寺、興聖寺、松尾社
刊本所在：『大正蔵』11（No.310-37）
現代語訳書：なし
参考文献：静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』（百華苑、1974）、色井秀譲『浄土念仏源流考』（百華苑、1978）、Gregory Schopen、“Sukhāvatī as a Generalized Religious Goal in Sanskrit Mahāyāna Sūtra Literature”（*Indo-Iranian Journal*, Vol.19 Nos.3/4、1978）
解説：当経の全体的な解題については異訳『仏説太子和休経』の項を参照のこと。構成、表現、内容とも『仏説太子和休経』と極めて良く一致する。『仏説太子和休経』では、和休と彼の五百の従者による仏への質問数が27であるのに対し、当経ではそれが偈頌形式の41に増広されている。増広内容、異訳との対応については、静谷［1978］（pp.185-186）の「太子和休経、太子刷護経、阿闍世王子会の対照表」を参照のこと。浄土教的な要素の部分（p.594,ab）を訳すと以下の通りである。
「その時、仏は弥勒菩薩摩訶薩に言いました。善男子よ、この王子と五百人の友人は、誰もが往昔に無上正等覚を求め、十ナユタ八十億の諸仏を供養してきました。私がディーパンカラ仏［の時代］に居た時、［彼らは］バラモンの子となり、かの［ディーパンカラ仏］を供養（成熟）しました。そうして彼らは未来世の弥勒仏をはじめとする、諸世尊の前にいつも生を受け（受化生）、［彼らに］親しく仕え、供養しました。このようにして［彼らは］三百劫を満たして十億の如来に奉事しました。その［奉事した］最後の仏は、無辺智［仏］善く諸法を学す者（無辺智善学諸法）と言います。ある時、無辺智仏は彼らの心の望むところを知り、各自に応じて無上正等覚の記を授けました。［彼らは］同じく安楽光厳劫において等正覚を成就しました。誰もが智慧憧相と名のりました。この諸仏が具えた荘厳は、西方無量寿国などと異なりはありません」である。
　他の異訳と比較して、極楽世界に往生する記述が省略されている。『長西録』に当経が載らないのは、こうした点が勘案された結果かもしれない。
作成者名：中御門敬教

大宝積経発勝志楽会

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいほうしゃくきょうほっしょうしぎょうえ
異本書名：闍那崛多訳『発覚浄心経』（『大正蔵』12（No.327））
サンスクリット原典書名：Ārya-Adhyāśayasañcodana-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：散逸
翻訳者名：菩提流志
翻訳者名よみ：ぼだいるし
翻訳者生没年：？－727
成立翻訳年：7～8c.頃
成立地：インド
所収文献名：『大宝積経』（『大正蔵』11（No.310））
巻数：2
写本所在：上巻　聖護蔵、金剛寺（破損）、石山寺、興聖寺、西方寺、新宮寺、松尾社
下巻　金剛寺、石山寺、興聖寺、西方寺、新宮寺、松尾社
刊本所在：『大正蔵』11（No.310-25）
現代語訳書：なし
参考文献：静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』（百華苑、1974）
解説：当経の全体的な解題については異訳『発覚浄心経』の項を参照のこと。ここでは当経の浄土教要素、すなわち極楽往生のための十種菩提心を挙げる。具体的には以下の十種である。
（1）衆生に大慈を起こさせ、損害心をなくさせる。（2）衆生に大悲を起こさせ、逼悩心をなくさせる。（3）仏の正法に対して身命を惜しまず、守護心をねがう。（4）一切法に対して勝忍を発し、執着心をなくす。（5）利養を貪らず、恭敬し、尊重し、意楽心を浄める。（6）仏種智を求め、どんな時にも忘失心をなくす。（7）衆生たちを尊重し、恭敬し、下劣心をなくす。（8）世論にとらわれず、菩提分に対して決定心を生じる。（9）雑染のない種々善根の清浄心を起こすこと。（10）如来たちに対して諸相を離れ、随念心を起こす。
　この直後に「弥勒よ、これを菩薩の発す十種心と名付ける。この心［を発す］ゆえに［行者は］阿弥陀仏の極楽世界にまさしく往生できる。弥勒よ、もしも人が十種の心の中の一［種］の心［でも］成就し、かの仏の世界への往生を願ったとして、もしも［極楽世界に］生まれれることができなければ、この理はありえない」と説かれる。静谷氏によると、これは〈無量寿経〉の誓願文形式を承けているとされる。
作成者名：中御門敬教

大宝積経無量寿如来会

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいほうしゃくきょうむりょうじゅにょらいえ
書名別名：如来会
異本書名：仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経、仏説無量清浄平等覚経、仏説無量寿経、仏説大乗無量寿荘厳経
翻訳者名：菩提流志
翻訳者名よみ：ぼだいるし
翻訳者生没年：？-727（開元15）
成立翻訳年：（翻訳）神竜2年（706）-先天2年（713）
成立地：インド
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、七寺蔵本
2、興聖寺蔵本
写本奥書：1、一校了
2、一校了
活字本所載書：『大正蔵』11（No.310-5）
現代語訳書：Garma C.C.Chang、*A Treasury of Mahāyāna Sūtras* (Motilal Banarsidass Pablishers、1991)
参考文献：藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970）、西田龍雄「西夏訳仏典目録」（京都大学文学部、

1977）香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』（永田文昌堂、1984）、大田利生『漢訳五本梵本蔵訳対照無量寿経』（永田文昌堂、2005）
解説：南インドの僧、菩提流志は勅命により、『大宝積経』49会120巻を翻訳した。本経はその第5会に配当されている。菩提流志は『大宝積経』を構成する際、もとあった訳をそのまま採用したり、改訳したりしたが、本会はそのうちの改訳したものに相当する。
　本経にはチベット語訳断片及び西夏語訳断片が存する。
　本経の特徴として、以下のことが挙げられる。(1)『無量寿経』と同じ「後期無量寿経」に相当し、願文の数も同じ48である。(2)『無量寿経』と同様に、経の序分に八相化儀が示される。(3) 五悪段が存在しない。(4) 五漢訳の中では現存の梵本に最も近い段階のものになっている。
　親鸞は＜無量寿経＞の中でも特に本経を重視し、その著作中37箇所において引用した。
作成者名：佐藤直実／佐々木大悟

大方等大集経賢護分

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：だいほうとうだいじっきょうけんごぶん／げんごぶん
書名別名：大方等大集賢護経
異本書名：支婁迦讖訳『般舟三昧経』（『大正蔵』13（No.417））、支婁迦讖訳『般舟三昧経』（一巻本）（『大正蔵』13（No.418））、失訳『拔陂菩薩経』（『大正蔵』13（No.419））
サンスクリット原典書名：Ārya-Pratyutpanne Buddhasaṃmukhāvasthitasamādhi-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：散逸
翻訳者名：闍那崛多
翻訳者名よみ：じゃなくつた
翻訳者生没年：523（正光4）-600（開皇20）
成立翻訳年：6c.
成立地：インド
巻数：5
写本所在：聖護蔵、七寺、興聖寺、新宮寺、松尾社（開巻不能）
刊本所在：『大正蔵』13（No.416）
現代語訳書：なし
参考文献：香川孝雄「般舟三昧経における浄土教思想」（『仏教大学紀要』35、1958）、桜部建『般舟三昧経記』（安居次講、1975）、末木文美士「『般舟三昧経』をめぐって」（『藤田宏達博士還暦記念論集　インド哲学と仏教』平楽寺書店、1989）、末木文美士・梶山雄一『観無量寿経・般舟三昧経』（「浄土仏教の思想」2、講談社、1992）
解説：『長西録』には「大集賢護経五巻　随闍那崛多訳」と出る。〈般舟三昧経〉の異訳である。浄土教に言及する箇所は「思惟品」第一（『大正蔵』13（No.416）、pp.875b22-876b24）である。阿弥陀仏登場箇所と全体との関係については、異本の支婁迦讖訳『般舟三昧経』（三巻本）を参照のこと。
作成者名：中御門敬教

抜一切業障根本得生浄土神呪　－附阿弥陀経不思議神力伝

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：ばついっさいごっしょうこんぽんとくしょうじょうどじんじゅ
書名別名：阿弥陀呪、得生浄土呪
異本書名：阿弥陀仏説呪
翻訳者名：求那跋陀羅
翻訳者名よみ：ぐなばだら
翻訳者生没年：394（太元19）-468（泰始4）
成立翻訳年：（成立）？（翻訳）450年頃（元嘉末年）
成立地：インド
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
活字本所載書：『大正蔵』12（No.368）、『国訳一切経』宝積部7
現代語訳書：教学研究委員会「神と浄土の接点『抜一切業障根本得生浄土神呪』訳注」（『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』第5号、2007）
参考文献：望月信亨『浄土教の起源及発達』（共立社、1930）
解説：本経は、阿弥陀の陀羅尼を持つ密教の呪である。
　冒頭に阿弥陀の15の陀羅尼（合計59字）が並べられる。そして「もし善男子・善女人でよくこの呪を唱えるものは、阿弥陀仏は常にその頭上にいて、夜昼擁護する。怨みをもつものにつけ入れられず、現世では常に安穏であり、臨終時には、そのまま往生する。」と説かれ、経の内容自体は終わる。
　本経には次に阿弥陀経不可思議神力伝が付しており、過去に僧叡・曇鸞・道綽・慧遠等が阿弥陀仏を信じ、浄土に往生したことを述べている。神力伝は、道綽についての言及があるなどのことから、本呪より時代が下ることが予想される。
　インド仏教が総じて密教化の道を辿ったように、浄土教も密教化していく。その過程で本経も成立してきたことが考えられる。阿弥陀関係の呪が多い中、この呪が最も多く伝えられた。望月信亨は「中国では早い時代から、羅什の『阿弥陀経』の後に、この呪を附すことが行われた」と予想している。
作成者名：佐々木大悟

拔陂菩薩経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：ばっひぼさつきょう
書名別名：跋陀菩薩経、拔陂菩薩経、颯陀菩薩経、拔陂安公古典経
異本書名：支婁迦讖訳『般舟三昧経』（『大正蔵』13（No.417））、支婁迦讖訳『般舟三昧経』（一巻本）（『大正蔵』13（No.418））、闍那崛多訳『大方等大集経賢護分』（『大正蔵』13（No.416））
サンスクリット原典書名：Ārya-Pratyutpanne Buddhasaṃmukhāvasthitasamādhi-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：散逸
翻訳者名：失訳
翻訳者生没年：不明
成立翻訳年：3c.頃
成立地：インド
巻数：1
写本所在：聖護蔵、金剛寺（破損）、七寺、石山寺、興聖寺、松尾社
刊本所在：『大正蔵』13（No.419）
現代語訳書：なし
参考文献：香川孝雄「般舟三昧経における浄土教思想」（『仏教大学紀要』35、1958）、桜部建『般舟三昧経記』（安居次講、1975）、末木文美士「『般舟三昧経』をめぐって」（『藤

田宏達博士還暦記念論集　インド哲学と仏教』平楽寺書店、1989)、末木文美士・梶山雄一『観無量寿経・般舟三昧経』（「浄土仏教の思想」2、講談社、1992）
解説：『長西録』には「跋陀菩薩経　僧祐録云漢代異訳」と出る。〈般舟三昧経〉の異訳である。浄土教に言及する言及する箇所は、『大正蔵』13、pp.922a2ff.ある。阿弥陀仏登場箇所と全体との関係については、異本の支婁迦讖訳『般舟三昧経』（三巻本）を参照のこと。
作成者名：中御門敬教

般舟三昧経

著作翻訳の有無：漢訳・蔵訳
書名よみ：はんじゅざんまいきょう
書名別名：十方現在仏悉在前立定経、大般舟三昧経、十方現在前立定経、般舟経
サンスクリット原典書名：Pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi-sūtra（蔵伝）
原典の存欠：現存
翻訳者名：支婁迦讖
翻訳者名よみ：しるかせん
翻訳者別名：支讖
翻訳者生没年：不明
成立翻訳年：179（光和2）
成立地：インド
巻数：3
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、所在不明（797（天平9）、書写者不明）
2、七寺蔵本（平安後期、栄俊書写）
3、妙蓮寺蔵本（平安後期、書写者不明）
4、快友寺蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
2、一校了栄俊
3、（未調査）
4、（未調査）
刊本所在：1、元禄7（1694、大正大・高野山大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』13（No.418）、『卍正蔵』6・10
現代語訳書：Paul Harrison、*The Pratyutpanna Samādhi Sutra*（Bukkyo Dendo Kyokai and Numata Center for Buddhist Translation and Research）、1998
参考文献：『国訳一切経』大集部4、Paul Harrison、*The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present*(The International Institute for Buddhist Studies)、Tokyo、1990、末木文美士・梶山雄一『観無量寿経・般舟三昧経』（「浄土仏教の思想」2、講談社、1992）、末木文美士「『般舟三昧経』をめぐって」(『仏教―言葉の思想史』、岩波書店、1996)
解説：『般舟三昧経』は『出三蔵記集』によれば光和2年（179年）に支婁迦讖が訳出したという。異訳は一巻本『般舟三昧経』の他に、3世紀の成立とされる『抜陂菩薩経』（チベット訳の第1章－第6章に相当）、闍那崛多訳の『大方等大集経賢護分』（チベット訳ほぼ全体に相当）が存在する。

高麗版大蔵経に収められた本経と、宋・元・明3版に収められたそれとは相違する部分がかなりあり、後者は前者を補修したものと考えられている。ハリソンは「現存の三巻本『般舟三昧経』のなかで、高麗本の問事品から譬喩品前半までの散文・偈頌と、高麗品および宋・元・明版の譬喩品後半以降の全章中の散文部分はおそらく支婁迦讖の原訳に属し、残りは後代の作である」と述べる。

『般舟三昧経』は全体が16品からなり、「般舟三昧（現在諸仏悉在前立三昧）」の行法と功徳が主題となっている。般舟三昧の行法を述べる行品では、「どういうやり方で現在諸仏悉在前立三昧を行うのか」という問いに対して「比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たちは戒を完全に持ち、独りで一処に住し、心に西方の阿弥陀仏が今現にましますことを念じなさい。聞いたとおりに念じなさい。この世界から千億万仏国を離れた須摩題という名前の国で、菩薩たちの中央におられ、教えを説いておられる。一切の者は、常に阿弥陀仏を念じるべきである」（『大正蔵』13、p.905）と釈尊は答える。このように般舟三昧の行法とは何かを述べる文脈で、阿弥陀仏を念じることが述べられる。本経は現存する阿弥陀仏文献の中で最古のものの一つである。

廬山の慧遠は『般舟三昧経』をもとに白蓮社をはじめ、般舟三昧を実習し、その境地を『念仏三昧詩集序』などに記している。また、天台智顗は『摩訶止観』の中に四種三昧の一つの常行三昧としてこの般舟三昧を用いている。

内容の詳細についてはチベット訳「'Phags pa da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa'i ting nge 'dzin ces bya ba theg pa chen po'i mdo」の解説を参照せよ。
作成者名：佐々木大悟

般舟三昧経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：はんじゅざんまいきょう
書名別名：般舟三昧経
翻訳者名：支婁迦讖
翻訳者名よみ：しるかせん
翻訳者別名：支讖
翻訳者生没年：不明
成立翻訳年：後漢、4-5c
成立地：インド
巻数：1
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都大蔵本
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、延宝7（1679、竜谷大・大正大・京都大）
刊本の奥書刊記：1、延宝七年龍集巳未孟夏穀旦、銅駝坊書肆村上平楽寺寿梓
活字本所載書：『大正蔵』13（No.417）、『卍正蔵』6・10
参考文献：桜部建『般舟三昧経記』（東本願寺出版部、1975）、Paul Harrison、*The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present*(The International Institute for Buddhist Studies、Tokyo、1990)、末木文美士・梶山雄一『観無量寿経・般舟三昧経』（「浄土仏教の思想」2、講談社、1992）
解説：本経は支婁迦讖訳三巻本『般舟三昧経』の同一訳者による異訳であるとされ、一巻本『般舟三昧経』と通称される。成立の順序として、まず三巻本『般舟三昧経』が訳出され、それに修正補訂が加えられ、そののち、それから抄出改定されて一巻本『般舟三昧経』の形が成立したとされる。ハリソンは「おそらく4世紀あるいは5世紀と思われるある段階で、宋・元・明版の三巻本『般舟三昧経』が要約され、支婁迦讖に帰せられた。このテキストは中国では失われてしまったが、なんらかの仕方で生き残り、高麗版に編入された」と推測している。

本経は八品からなる。行品の阿弥陀仏の箇所には、「念我名」という三巻本『般舟三昧経』にはない表現が見られるが（『大正蔵』13、p.899）、それは本経編集者の何らかの意図によるものと考えられる。

その部分は後に道綽の『安楽集』、善導の『観念法門』、

法然の『選択集』などに引用され、称名思想の根拠の一つとなった。
作成者名：佐々木大悟

毘倶胝菩薩一百八名経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：びくちぼさついっぴゃくはちみょうきょう
書名別名：毘倶胝一百八名経
原典の存欠：散逸
翻訳者名：法天
翻訳者名よみ：ほうてん
翻訳者生没年：？－1001
成立翻訳年：10c.頃
成立地：インド
巻数：1
刊本所在：『大正蔵』20（No.1114）
現代語訳書：なし
参考文献：頼富本宏『密教仏の研究』（法蔵館、1990）、頼富本宏・下泉全暁『密教図像図典』（人文書院、1998）、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。毘倶胝菩薩の「一百八名秘密真言」を称え、その功徳をもって現世での利益、死後の極楽往生を祈願する密教経典。毘倶胝菩薩は「一百八」（法数）の異名を持ち、それを音写して陀羅尼としたものが、上記「一百八名秘密真言」である。名号を陀羅尼化し、その読誦功徳によって極楽往生を目指す点は、密教化された浄土教の特色である。

訳者は中インドの人。北宋時代に中国に入り、〈無量寿宗要経〉の漢訳である、『大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』も訳した。

経名に出る「毘倶胝」（Skt. Bhṛkuṭī）は蓮華部の女尊の名前。一面三眼四臂の尊格。意味は眉をひそめること、転じて正法誹謗者への嫌悪を表す。その女尊は観音の額の皺から現れたという。つまり観音菩薩の化身である。菩提流志訳『不空羂索神変真言経』には不空羂索観音の右脇侍として出る。インドにおける成就法典籍『サーダナマーラー』ではカサルパナ観音の左脇侍として登場する。頭頂仏は、蓮華部の正尊阿弥陀仏である（cf. 頼富・下泉［1998］pp.198-199）。

この菩薩の「一百八名秘密真言」を受持・読誦・書写・解説すれば、寿命が延び、端正な容姿を獲得し、愛敬され、魔の境涯を離れ、輪廻を脱するという。さらに自然災害、猛獣からの保護、病魔からの回復も説かれる。そして毘倶胝菩薩の名前を念じれば、悪魔が危害を加えようとも、毘倶胝菩薩は身体から光を放ち、悪魔から保護される。ひいては天地すべてが清浄になり、念じた者の智慧を増長させる。彼（念じた者）は死後、長くとも七生するうちに宿命通を得て、バラモン・クシャトリヤに生まれる。その後、命終して西方極楽世界に往生する。
作成者名：中御門敬教

悲華経

著作翻訳の有無：漢訳・蔵訳
書名よみ：ひけきょう
書名の日本語訳：白蓮華のごとき憐れみ
チベット訳書名：'Phags pa snying rje pad ma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo
漢訳書名：悲華経／大乗悲分陀利経
サンスクリット原典書名：karuṇāpuṇḍarīkasūtra
原典の存欠：現存
翻訳者名：曇無讖
翻訳者名よみ：どんむしん
翻訳者別名：曇牟讖、曇摩讖、曇謨讖、曇無羅讖／訳者不明
成立翻訳年：419（玄始8）
成立地：インド
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『大正蔵』3（No.157）／『大正蔵』3（No.158）
現代語訳書：宇治谷祐顕「梵文悲華経大施品訳註」（『悲華経の研究』付録、文光堂、1969）、岩本裕「悲華経（抄）」（『仏教聖典選・第6巻・大乗経典（4）』読売新聞社、1974）
参考文献：宇治谷祐顕『悲華経の研究』（文光堂、1969）、成松芳子「悲華経における本願文の一考察」（『印仏研』23-2、1975）、成松芳子「悲華経所説の正因願について－無量寿経との対照を中心に－」（『橋本博士退官記念　仏教研究論集』、清文堂、1975）
その他の参考文献に関しては、石上和敬「＜悲華経＞の先行研究概観」（『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』26、2010）を見よ。
解説：本経には、サンスクリット本、チベット語訳および漢訳が現存する。その中、漢訳は経録の記載によると4訳あったと伝えられているが、後秦（A.D.384-417）の失訳と北涼の曇無讖訳（玄始8年、A.D.419）のみが現存する。また、トカラ語訳も現存する。関連文献としては、本経の内容をほぼ半分ほど伝えていると言われるMahajjātakamālāがある。さらに日本では、本経に出る釈尊の五百誓願をまとめた『釈迦如来五百大願経』が現存する。

本経の成立については、本経のもとになった20種ほどの諸経典があり、それらを素材として経典作者によって一つにまとめられたと考えられている（西尾京雄『国訳一切経』経集部5、解題）。しかし、それらの諸経典は一部を除き現存せず、この説の当否を確認することはできない。また、後期〈無量寿経〉に説かれる阿弥陀仏の誓願と近似するものが説かれることから、後期〈無量寿経〉の成立以後、本経は成立したと考えられている。

本経は6章から構成され、その主な内容は阿弥陀仏や観音菩薩、勢至菩薩、阿閦仏などを始めとする諸仏の誓願・授記と、釈迦牟尼仏の誓願・授記を説く一大本生譚である。その本生譚は第3章「布施品」から始まる。昔、この世界が刪提嵐という名で善持という劫の時代に、無諍念王という転輪聖王とその王子たちがいて、その王の大臣（宝海婆羅門）の子が悟って宝蔵如来となり、彼の勧めによって無諍念王とその王子たちは誓願を起こし、無諍念王は無量清浄（阿弥陀）、第1王子は観世音、第2王子は得大勢（勢至）、第3王子は文殊師利、（中略）第9王子は阿閦（以下省略）となり、浄土においてさとりに目覚めることを願い、宝蔵如来によって授記される。それに対して宝海婆羅門は浄土ではなく、衆生の煩悩の多い世界である穢土においてさとりに目覚めることを願い、五百の誓願を起こす。それを聞いた宝蔵如来は彼を讃え、将来、釈迦如来となるであろうと授記された。また、諸仏が他の華に喩えられるのに対して釈尊の慈悲は白蓮華に喩えられ、その慈悲は勝れたものであると説く。したがって、本経は穢土においてさとりに目覚めた釈尊を讃える経典であって、浄土を選んだ阿弥陀仏は諸仏中の一仏に過ぎず、穢土の衆生を見捨てた仏として低い立場に位置付けられている。

しかし、本経は〈無量寿経〉類中の阿弥陀仏の誓願と多くの部分で類似する誓願が説かれるため、早い時期から浄土教研究者によって注目されてきた。その内容は〈無量寿経〉類に説かれるものに比べ、その数や順番、内容において改編がみられる。特徴としては、『大阿弥陀経』のみに

ある4願（悉皆化生・無有女人・資具自然・菩薩光明）と、〈無量寿経〉類にはない6願（無石山海・無結難声・樹下成道・無有二乗・滅後得忍・滅後転女）が含まれることである。第42願は、〈無量寿経〉類では「声聞無数願」とするところを本経では「無有二乗願」として浄土における二乗（声聞・辟支仏）を否定する。このような改編は、阿弥陀仏が説く浄土をより純粋化し、本経の主眼である穢土成仏者に対する称賛の意図をより高めるためのものと考えられている。また、『無量寿経』の第18願に対応する第44願では、いわゆる「唯除誹謗正法」の文は認められるが、往生の条件として「聞名」と「善根回向」が説かれる点では異なる。なお、その誓願の数え方については49願説、50願説、51願説がある。
作成者名：北条竜士

普賢菩薩行願讃

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：ふげんぼさつぎょうがんさん
書名別名：行願讃、普賢行願讃
異本書名：東晋覚賢訳『文殊師利発願経』(『大正蔵』10（No.296))、唐般若訳『大方広仏華厳経（四十華厳）』「普賢広大願王清浄偈」(『大正蔵』10（No.293))、失訳『普賢菩薩行願経』(『大正蔵』85（No.2907))、失訳『大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品』(『大正蔵』85（No.2908))
サンスクリット原典書名：Ārya-Bhadracaryāpraṇidhānarāja
原典の存欠：現存
翻訳者名：不空
翻訳者名よみ：ふくう
翻訳者別名：不空金剛、大広智三蔵、阿目佉跋折羅
翻訳者生没年：705-774
成立翻訳年：8c.中頃
成立地：インド
巻数：1
写本所在：金剛寺、七寺、興聖寺（破損）
刊本所在：『大正蔵』10（No.297）
現代語訳書：なし
参考文献：井ノ口泰淳「普賢行願讃考(1)」(『竜谷大学論集』412、1978.
再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995)、井ノ口泰淳「普賢行願讃考(2)」(『竜谷大学論集』420、1982.再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995)、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』(山喜房仏書林、1993)、武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』(「浄土仏教の思想」3、講談社、1993)、Keikyo Nakamikado：“Amitābha cult in Bhadracarīpraṇidhānarāja”(『印仏研』52-1、2003)、中御門敬教「往生後論攷」(『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』、山喜房仏書林、2004)
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。正確な訳出年は不明であるが、不空の訳出活動時期すなわち746-771年にかけての訳出と思われる。当経はサンスクリット原典（慈雲本）とよく対応し62偈からなる。冒頭に「普賢菩薩行願讃　開府儀同三司特進試鴻臚卿粛国公食邑三千戸賜紫贈司空諡大鑑正号大広智大興善寺三蔵沙門不空奉詔訳」とある。訳者不空は日本真言宗では付法八祖の第六であり、現存する碑文・目録・僧伝資料によると、スリランカ・五天竺に渡って密教典籍を採集したとされる。その一つに『普賢菩薩行願讃』の対応梵本があったと考えられる。彼は単なる訳経に満足せず、当経を密教のユガ行によって無上正等覚を得るための前行に用い、門人にもそれを奨励したとされている。最終偈v.62の直後には、同訳者による『八大菩薩曼荼羅経』(『大正蔵』No.1167)末尾の讃が編入されている。この讃の直後には、尾題「普賢菩薩行願讃」が挙げられており、『八大菩薩曼荼羅経』までを含めて『普賢菩薩行願讃』とされる場合もある。刊本刊記には、毎日この『普賢菩薩行願讃』を読誦して「速疾満普賢行願陀羅尼」を唱えることにより、普賢行願が完成し、三昧の現前と智慧・福徳の二資糧が成就されるとされている。ゆえに、当訳経は『普賢菩薩行願讃』を中心とした儀規書の性格をもつことにもなる。また伝歴・書写の詳細は不明であるが、我が国の入唐僧たちによっても〈普賢行願讃〉の梵本・漢訳が将来され、真言密教において重用されてきた。

また本訳経は、同時に華厳思想、浄土教においても、それぞれに受容されてきた。浄土教では特に関連するvs.57-60をもって、例えば長西『浄土依憑経論章疏目録』「羣経録第一」や文雄『蓮門経籍録』「傍依経本類」などに浄土教典籍として挙げられている。

浄土思想に言及する箇所は以下の通りである。
「当於臨終捨寿時 一切業障皆得転　親覩得見無量光　速往彼利極楽界（v.57）。得到於彼此勝願　悉皆現前得具足　我当円満皆無餘　衆生利益於世間（v.58）。於彼仏会甚端厳　生於殊勝蓮花中　於彼獲得受記別　親対無量光如来（v.59）。於彼獲得受記已　変化俱胝無量種　広作有情諸利楽　十方世界以慧力（v.60）」
作成者名：中御門敬教

法華経

著作翻訳の有無：漢訳・蔵訳
書名よみ：ほけきょう
書名の日本語訳：白蓮華のごとき正しい法
サンスクリット原典書名：saddharmapuṇḍarīkasūtra
翻訳者名：竺法護／鳩摩羅什／闍那崛多・達摩笈多
翻訳者名よみ：じくほうご／くまらじゅう／じゃなくった・だるまぎゅうた
翻訳者別名：雲摩羅利、雲摩羅察／羅什、什、童受／徳志、志徳、仏徳・達摩崛多、笈多、法密、法蔵
成立翻訳年：286（太康7）／406（弘始8）／601（仁寿1）
成立地：インド
巻数：10／7／7
写本等の存欠：写本
活字本
活字本所載書：『大正蔵』9（No.263)／『大正蔵』9（No.262)／『大正蔵』9（No.264)
現代語訳書：坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』上・中・下（岩波文庫、1962-67)、松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義『法華経』1・2(「大乗仏典4・5」、中央公論社、1975-76、文庫版、中央公論新社、2001-02)
参考文献：藤田宏達「浄土信仰と法華経との交渉」(野村耀昌編『法華経信仰の諸形態』、「法華経研究」6、平楽寺書店、1976)、石上善應「浄土思想と法華経の交渉」(塚本啓祥編『法華経の文化と基盤』、「法華経研究」9、平楽寺書店、1982)、塚本啓祥『法華経の成立と背景－インド文化と大乗仏教－』(佼成出版社、1986)、勝呂信静『法華経の成立と思想』(大東出版社、1993)
解説：本経にはサンスクリット本、チベット語訳、漢訳が現存し、サンスクリット写本は19世紀以降に発見されたネパール本、ギルギット本、中央アジア本の3系統が伝わっている。漢訳は経録によれば、6本あると伝えられているが、現存するのは竺法護訳、鳩摩羅什訳、闍那崛多・達摩笈多訳の3訳と、部分訳として訳者未詳の『薩曇分陀利経』一巻がある。

本経は竜樹の『大智度論』に引用されていることから、

西暦紀元前後に成立し、その後、順次に増広されたと考えられている。これまでに多くの学者によって成立史的研究が行われ、現在のところ、段階的成立説と同時成立説が主張されている（詳細は伊藤端叡[1985-1990]、勝呂信静[1993]を参照）。

28品（梵本では27品）からなり、三乗方便、一乗真実の思想（方便品第2）、久遠実成の仏（如来寿量品第16）、二乗作仏（譬喩品第3）、提婆達多の成仏を予言し、8歳の竜女の成仏を説き（提婆達多第12）、全体にわたって特に『法華経』を受持し、読誦することを強調する。また、文学性豊かな多くの譬喩を用いていており、特に譬喩品の火宅喩、信解品の窮子喩え、薬草喩品の薬草喩、化城喩品の化城喩、五百弟子受記品の衣珠喩、安楽行品の髻珠喩、如来寿量品の医子喩は古来から法華七喩と言われている。

阿弥陀仏と極楽浄土については、化城喩品第7、薬王菩薩本事品第13、観世音菩薩普門品第25において言及されている。化城喩品では、大通智勝如来の16人の王子が仏となり、彼らは現在、他方世界に住し、それぞれの方角に2人ずつ住しており、そのうち西方には無量寿如来と度一切世間苦悩如来が住していると説かれる。薬王菩薩本事品では、仏が星宿王華神通菩薩に語る中で、もし女性でこの法門を聞いて摂受し、受持するならば、その人は最後の女性としての生存となるであろう。また、女性にして後の50年にこの薬王本事品を聞いて通達するであろう人は、死後に極楽世界に生まれ、三毒などもなく、五神通を得て、無生法忍を得ると説く。さらに観世音菩薩普門品では、法蔵菩薩が世自在王のもとで百劫の間修行して仏となり、西方極楽世界に無量光仏として住している。そこでは女性が生まれることなく淫欲もなく、無量光はシャーラ王のように輝いていると説く。化城喩品において説かれる阿弥陀仏は法蔵説話と結びつけて説かれておらず、『法華経』を説いて仏となることが説かれるから浄土経典との影響はないとされ、一方、観世音菩薩普門品では法蔵菩薩の名を挙げるから後代になって無量寿経の影響を受けて付加されたと考えられている(藤田[1976])。また、シャーラ王（＝ヴィシュヌ神）という表現から、ヒンドゥー教の影響が指摘されている（塚本[1986])。

また極楽の記述において浄土経典との共通性が指摘されている。例えば、嘱累品第22では女人往生・転女成男の思想や、極楽に往生した人は三毒などの煩悩から離れ五神通を備え、無生法忍を得るという記述は、〈後期無量寿経〉と共通性をもつ（藤田[1976])。

作成者名：北条竜士

菩薩従兜術天降神母胎説広普経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：ぼさつじゅうとじゅつてんごうじんもたいせつこうふきょう
書名別名：菩薩処胎経、処胎経、胎経
原典の存欠：散逸
翻訳者名：竺仏念
翻訳者名よみ：じくぶつねん
翻訳者生没年：374-417
成立翻訳年：364（建元1）-384（建元20）
成立地：インド
巻数：7
写本所在：1、知恩院蔵本（未調査）
2、七寺蔵本（未調査）
3、興聖寺蔵本（未調査）
4、俄蔵敦煌文献3、敦煌大蔵経59（pp.394-409）
5、快友寺蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
2、安元三年
3、（1、2、5巻）一校了
4、（未調査）
5、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』12（No.384）、『卍正蔵』12・1
参考文献：Eliza I. Legittimo、*Analysis of the Pu sa chu tai jing* 菩薩処胎経、Ph.D. dissertation presented at the International College for Postgraduate Buddhist Studies、2005
解説：本経は仏の入滅の場面を描く経典であり、7巻38品よりなる。

第8品に有名な懈慢界の話が出る。「前後に意を発せる衆生の、阿弥陀仏国に生れんと欲するもの、みな深く懈慢国土に着して、前進して阿弥陀国に生るることあたはず。億千万の衆、時に一人ありてよく阿弥陀仏国に生ず」（『大正蔵』、p.1028）とある。

この懈慢国土については懐感の『釈浄土群疑論』、源信の『往生要集』、宗暁の『楽邦文類』、親鸞の『教行信証』などで引用される。

作成者名：佐々木大悟

菩薩受斎経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：ぼさつじゅさいきょう
書名別名：受斎経、菩薩受斎法
原典の存欠：散逸
翻訳者名：聶道真
翻訳者名よみ：しょうどうしん
成立翻訳年：280（西晋太康1）-312（永喜6）
成立地：インド
巻数：1
写本等の存欠：刊本
活字本
活字本所載書：『大正蔵』24（No.1502）、『卍続蔵』17・2
参考文献：大野法道『大乗戒経の研究』（理想社、1954）
解説：本経は特定の斎日に斎をたもち、行道を行い、清浄な生活をして、人を済度する心を修練することを説く経典である。持斎について説く古い経典には『八関斎経』・『優陂夷堕舎経』・『斎経』および『中阿含経』第55の「持斎経」等がある。これらには八斎戒が説かれているが、本経はそれらに対して、特に菩薩道の行者の斎戒が説かれている。対告者も般若経典の主たる対告者である須菩提となっている。特に本経の十戒十念は『斎経』・『中阿含経』第55の八戒五念と同じ形式であり、それを基本に構成されていると考えられる。また、これらの経典では普通、その斎戒の功徳として天に生まれることが述べられるが、本経では阿弥陀仏の浄土に生まれることが説かれる。

本経は短経ながら、2カ所、阿弥陀仏についての言及がある。1つ目は経の前半で「波羅蜜行を行い、地獄・餓鬼・畜生の者を解脱させたいと願い、布施をすれば、須摩題（極楽）の阿弥陀仏の前に到達し、三昧を得る」と説く箇所である。2つ目は経の後半であり、「菩薩の斎戒」として、「斎日に西方の阿弥陀・観音・勢至に帰命すれば、三毒が消え、尊利（阿弥陀仏国）に往生する」と説かれる。その際、「阿弥陀・観音・勢至」に該当する翻訳語として『大阿弥陀経』と同じ訳語「阿弥陀三耶三仏檀・蓋楼亘・摩訶那鉢」が使用されていることは注目すべきことである。

本経は『浄土依憑経論章疏目録』などの浄土教の目録には収録されているが、中国や日本の注釈書ではあまり注目されていない。『大正蔵』では律部に収められている。

作成者名：佐々木大悟

発覚浄心経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：ほっかくじょうしんきょう
書名別名：菩提流志訳『大宝積経』「発勝志楽会」（『大正蔵』11（No.310-25））
サンスクリット原典書名：Ārya Adhyāśayasaṃcodana-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：散逸
翻訳者名：闍那崛多
翻訳者名よみ：じゃなくった
翻訳者生没年：523-600
成立翻訳年：7c.
成立地：インド
巻数：2
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：上巻 聖護蔵、七寺、石山寺、興聖寺、新宮寺、松尾社（開巻不能）
下巻 聖護蔵、七寺、石山寺、興聖寺、西方寺、松尾社
活字本所載書：『大正蔵』12（No. 327）
現代語訳書：なし
参考文献：岡亮二「十念の研究」(『顕真学苑論集』51、1959)、静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』（百華苑、1974）
解説：『長西録』には指摘されていないが、唐菩提流志訳『大宝積経』「発勝志楽会」と異訳の関係にある。対応するチベット訳も存在する（cf. D. 東北No.69、P. 大谷No.760-25）。サンスクリット原典は未発見であるが、寂天〈大乗集菩薩学論〉に多く引用されることから、原文が一部確認されている。訳者である闍那崛多（523-600）は北インドの人、西域からの将来梵本を長安大興善寺で翻訳した仏教家である。上下二巻からなり、対告衆は弥勒菩薩である。

舞台は波羅奈城の鹿野苑で、会衆中に業障が深重であり、諸根が未熟であり、談話・睡眠・戯論などを楽しんでいた菩薩たちが、そのことに悩んでいた彼らの求めに応じて、世尊が罪業についての説法する。以降、世尊と弥勒菩薩との問答によって展開する。汝たちは昔、拘留孫如来のもとで作った、法師を誹謗するなどの悪業により、いくつもの地獄を巡り、仏滅後五百年においては、それらの罪業を消滅すれば、阿弥陀仏の極楽世界に生まれ、仏から授記を得ると説く。すると菩薩たちはそれらの罪業を懺悔し、罪業を消滅するための13種の誓願を立てる。その後、世尊は仏滅後五百年に菩薩が解脱するための2種の四法、法施における20種の利、末世の悪、四弁才、慧行及び初業菩薩の不同を説く。後半は初業の菩薩が慧力を増長させるための利養・世話・睡眠・衆務・戯論を楽しむ過失についてそれぞれ20種を説き、最後に阿弥陀仏の極楽浄土に往生するための10種の心を説く。

浄土教的な面については以下のごとくである。罪業多く正しく仏道を行えない者に対して、極楽往生して、阿弥陀仏から授記を得ることが説かれる。ただ、浄土教的要素としてより注目されるのは、下巻末尾に仏が弥勒に説く、極楽往生のための十種類の発心である。内容は以下の通り。（1）一切衆生のために慈悲心を発し、怒りや恨みの心を起こさない。（2）一切衆生のために慈悲心を生む。（3）殺害を離れ、正法を受持する。（4）身命を捨て、一切諸法に執着しない。（5）甚深な忍行を行い、清浄な信を発す。（6）名聞利養に染まらず、一切智を宝とする。（7）一切衆生に対し尊敬を生じ、発心を忘失しない。（8）世間の事柄（凡言語）に驚かず、怖れず、愛着しない。（9）菩提分に入り、種々の善根を積む。（10）念仏を離れず、［仏の］諸相を遠離する。

この直後に「菩薩がいたとして、各々が［この心を］発し、念じ、一つでも具足すれば、まさにかの阿弥陀仏刹の中に生まれる。もしも生まれなければこの理はありえない。」と誓願文が説かれる。この十の発心は、冒頭（p.44a）に説かれる成仏から離れた者と対比関係にある。また元暁の『両巻無量寿経宗要』所引の『弥勒発問経』においても同種の十念説を説く（岡[1959]）。
作成者名：中御門敬教／北条竜士

無量寿経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：むりょうじゅきょう
書名別名：大無量寿経、大経、無量寿大経、大本、大本無量寿経、双巻経、双観経
異本書名：阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経、無量平等覚経、大乗無量寿荘厳経、大宝積経無量寿如来会
サンスクリット原典書名：Sukhāvatīvyūha
翻訳者名：康僧鎧（？）／竺法護／仏陀跋陀羅・宝雲
翻訳者名よみ：こうそうがい／じくほうご／ぶっだばだら・ほううん
翻訳者生没年：曹魏／西晋／東晋・劉宋
成立翻訳年：（翻訳）5c（？）
成立地：インド
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、七寺蔵本（平安期）
2、興聖寺蔵本
3、パリ国民図書館蔵本　ペリオ2671
写本奥書：1、一校了　栄俊
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』12（No.360）
現代語訳書：山口益・桜部建・森三樹三郎『浄土三部経』（『大乗仏典』6、中央公論社、1976）、Inagaki Hisao、*The Three Pure Land Sutras*、(The International Institute for Buddhist Studies、1995)、Luis O Gómez、*The Land of Bliss* (University of Hawai'i Press、1996)
参考文献：池本重臣『大無量寿経の教理史的研究』（永田文昌堂、1958）、藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970）、香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』（永田文昌堂、1984）、藤田宏達『大無量寿経講究』（安居事務所、1990）、百済康義「漢訳＜無量寿経＞の新異本断片」（『インド哲学と仏教　藤田宏達博士還暦記念論集』、平楽寺書店、1989）、藤田宏達・桜部建『無量寿経・阿弥陀経』（「浄土仏教の思想」2、講談社、1992）、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房仏書林、1993）、大田利生『漢訳五本梵本蔵訳対照無量寿経』（永田文昌堂、2005）、藤田宏達『浄土三部経の研究』（岩波書店、2007）
解説：「浄土三部経」のうち、本経は「無量寿経」と称される経典であり、漢訳は伝統的に五存七欠十二訳と言われている。なお、サンスクリット原典（Sukhāvatī-vyūha）が現存しており、また、チベット語訳（'Phags pa bde ba can gyi bkod pa shes bya ba thegs pa chen po'i mdo）も存在する（それぞれ、サンスクリット及びチベット語訳データを参照）。これら＜無量寿経＞諸本には、願文の数などの基準から概括的に初期と後期の二つの発達段階が認められる。本経はサンスクリット本、チベット語訳、『大宝積経無量寿如来会』、『大乗無量寿荘厳経』と並んで「後期無量寿経」に分類される。訳者は康僧鎧とされているが、

疑問視されており、仏陀跋陀羅・宝雲による共訳と考えられている。

百済康義によって、トルファン出土の5c中-6c末の漢訳断片（イスタンブール大学図書館所蔵）が発見された。七欠とされているもの関して、詳しくは藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp.24-29を見よ。

「初期無量寿経」からの展開した特徴としては、1、願文の数が「初期無量寿経」の24から48に増加したこと、2、菩薩の八相成道が説かれること、3、四誓偈（重誓偈、三誓偈）が設けられること、4、胎化段が三輩段から独立して経の後半に別に設けられること、5、繰り返し表現のいくつかを簡略化したこと、などが挙げられる。本経は他の後期無量寿経に比べると、三毒五悪段が残存しているなど、一部、初期無量寿経を引き継いでいる部分も見受けられる。

本経は五本ある漢訳のなか、中国・日本の浄土教諸宗において正依の経典として用いられているものである。その註釈書も多くあり、慧遠の『無量寿経義疏』、吉蔵の『無量寿経義疏』、元暁の『無量寿経宗要』、憬興の『無量寿経連義述文讃』などがある。

本経の主題は阿弥陀仏の前身、法蔵菩薩の本願及びその成就である。その内容の概略については「Sukhāvatī-vyūha」の項を見よ。

作成者名：佐藤直実／佐々木大悟

無量寿経優波提舎願生偈／無量寿経論／往生論／浄土論

書名よみ：むりょうじゅきょううばだいしゃがんしょうげ、むりょうじゅきょううぱだいしゃがんしょうげ／むりょうじゅきょうろん／おうじょうろん／じょうどろん

書名別名：無量寿経優波提舎、無量寿優波提舎経、優波提舎経願生偈、無量寿優波提舎経論、無量寿経優婆提舎願生偈

サンスクリット原典書名：Sukhāvatīvyūha-upadeśa（？）

原典の存欠：散逸

著者名：天親（Vasubandhu）（世親）

著者名よみ：てんじん（せしん）

著者名別名：婆藪槃豆、波藪槃豆、婆藪槃頭、伐蘇畔度

著者生没年：5c（？）

翻訳者名：菩提留支（菩提流支）

翻訳者名よみ：ぼだいるし

成立翻訳年：成立5c（？）、翻訳529（永安2・中大同1）／531（普泰1・中大同3）

成立地：インド

巻数：1

写本等の存欠：写本

刊本

活字本

写本所在：1、中国北響堂山刻経洞石経（北斉時代550-577、石刻者不明、願生偈のみ）

2、中国房山雷音洞石経（唐時代初620頃、石刻者不明、願生偈のみ）

〈影印版〉:塚本善隆「石刻山雲居寺と石刻大蔵経」（『東方学報』京都第5冊副刊、1935）

3、中国房山雲居寺南塔地下石経（遼時代10-12c、石刻者不明）

〈影印版〉:中国仏教教会編『房山石経（金遼刻）』11

4、正倉院聖語蔵蔵本（平安中期、書写者不明）

5、七寺一切経所収本（1175-1180、書写者不明）

6、金剛寺一切経所収本（11-13c、書写者不明）

7、石山寺一切経所収本（12c、書写者不明）

8、鎌倉光明寺蔵本（鎌倉末期、寂恵良暁書写）

9、京都常楽寺蔵本（14c、存覚書写、零本）

写本奥書：1、（奥書なし）

2、（奥書なし）

3、（奥書なし）

4、一校了

5、一校了、栄俊

6、一校了

7、（未調査）

8、寂恵之

9、（奥書不明）

刊本所在：1、宋版・東禅寺版（1093）

2、宋版・開元寺版（12c前半）

3、宋版・思渓版（12c前半）

4、宋版・蹟砂版（13c-14c初頭）

5、宋版・杭州版（13c後半）

6、高麗再雕版（13c中期）

7、永享9（1437、兵庫豪摂寺）

8、室町期（愛知上宮寺）

9、室町末期（滋賀円照寺）

10、室町末期（竜谷大）

刊本の奥書刊記：1-6、（テキスト末尾には刊記なし）

7、南無阿弥陀仏、願主比丘敬覚、筆者沙門泰兼、此浄土論之形木、為末代利益、安置知恩院、永享九丁巳年（1437）七月十八日

8、（未調査）

9、（未調査）

10、（未調査）

活字本所載書：『大正蔵』26、『卍正蔵』22、『浄全』1、『浄土宗聖典』1、『真宗聖教全書』1、『浄土真宗聖典-七祖篇（原典版）』

現代語訳書：『国訳大蔵経』論部5

Nishu Utsuki（宇津木二秀）“Amitāyus-sūtropadeśa with the Hymn of Devotion”（『竜谷大学論叢』248、1923）

Nishu Utsuki（宇津木二秀）“The Discourse on Buddhist Paradise” （『竜谷大学論叢』250、1923）

Minoru Kiyota, “Buddhist Devotional Meditation: A Study of the Sukhāvatīvyūhopadeśa” in: Minoru Kiyota (ed.), *Mahayana Buddhist Meditation:Theory and Practice*, Honolulu 1978

Jean Eracle, “Ganshoge de Vasubandhu” *The Pure Land: Journal of European Shin Buddhism*, 2-2,1980

Kenjo S. Urakami, *Amida Buddha and His Pure Land : Three Sutras and One Treatise*, Honolulu(?) 1997

参考文献：工藤成性『世親教学の体系的研究』（永田文昌堂、1955）、藤堂恭俊『無量寿経論註の研究』（仏教文化研究所、1958）、山口益『世親の浄土論』（法蔵館、1966）、稲城選恵『浄土論序説』（永田文昌堂、1976）、武内紹晃『昭和六十一年度安居本講師講本『無量寿経優婆提舎願生偈』』（東本願寺出版部、1986）、武内紹晃他『浄土仏教の思想三　竜樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』（講談社、1993）、仏教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編『無量寿経論校異』（仏教大学総合研究所、1999）、望月信亨「往生論と摂大乗論の十八円浄」（望月信亨『浄土教之研究』　仏書研究会、1914）、高瀬承厳「類本往生論に就きて」（『仏書研究』29、1917）、高瀬承厳「浄土宗三経一論五部九巻の日本伝来に就て」（『仏教学雑誌』3-8、1922）、加藤智学「婆藪槃豆大士の著作と浄土教」（『仏教研究』8-1、1927）、河野法雲「華厳経と浄土教との関係」（『大谷学報』10-1、1929）、大原性実「浄土論の観に就いて」（『顕真学報』2-2、1932）、西尾京雄「浄土論に於ける二乗種不生に就て」（『大谷学報』14-4、1933）、山口益「竜樹・世親における浄土思想」（宮本正尊編『仏教の根本真理―仏教における根本真理の歴史的諸形態―』　三省堂、1956）、

長谷岡一也「世親浄土論に於ける十地経的要素」（『印仏研』6-2、1958）、幡谷明「浄土論考」（『大谷学報』40-4、1961）、小妻道生「浄土論に於ける一心と唯識教学」（『真宗研究』7、1962）、神子上恵龍「浄土論と浄土経典との思想交渉」（『真宗学』33・34、1966）、桜部建「世親の釈経論と菩提流支の訳業とについての一考察」（横超慧日編『北魏仏教の研究』　平楽寺書店、1970）、桜部建「世親の『浄土論』に見える「如実修行」の句について」（桜部建『佛教語の研究』　文栄堂、1975）、向井亮「世親造『浄土論』の背景―別時意説との関連から―」『日仏年報』42、1976）、大友利行「世親の浄土思想の一側面」（『高井隆秀教授還暦記念論集　密教思想』、1977）、島津現淳「『釈浄土群疑論』所引の世親の『浄土論』について」（『同朋大学論叢』44・45、1981）、梶山雄一「浄土の所在」（『渡辺文麿博士追悼記念論集　原始仏教と大乗仏教　下』　永田文昌堂、1993）、柴田泰「中国仏教における『浄土論』『浄土論註』の流伝と題名（一）（二）」（『印度哲学仏教学』11-12、1996-1997）、安達俊英「『往生論』における訳語の問題、及び『大阿弥陀経』との関係」（『仏教大学総合研究所報』14、1998）、安達俊英「「浄土三部経」と『往生論』」（仏教大学総合研究所紀要別冊『浄土教の総合的研究』、1999）、松田和信「無量寿経論における「一法句」と「清浄句」」（仏教大学総合研究所紀要別冊『浄土教の総合的研究』、1999）、辻本俊郎「『無量寿経論』テキストの検討」（『仏教大学仏教学会紀要』8、2000）、大竹晋「『勝思惟梵天所問経論』『妙法蓮華経憂波提舎』『無量寿経優波提舎』について」（『仏教史学研究』46-2、2003）、斉藤隆信「中国浄土教礼讃偈における詩律―世親『往生論』から善導『般舟讃』まで―」（『仏教文化研究』50、2006）、辻本俊郎「『無量寿経論』の諸本について」（『アジア文化学科年報』9、2006）、辻本俊郎「『遊心安楽道』の著者について―『無量寿経論』を手掛かりとして―」（『アジア学科年報』1、2007）

解説：阿弥陀仏と極楽浄土を讃え、そこに往生する方法を体系的に説いた書物。インドでは唯一の浄土教論書といえる。よって、法然はその重要性ゆえに「浄土三部経」に本書を加えて浄土宗の正依の経論（「三経一論」）とした。ただし、日本の浄土教に及ぼした影響は、本書よりむしろ注釈書である曇鸞『無量寿経論註』（『往生論註』『浄土論註』）の方が大きい。

タイトルは様々な呼び名で知られるが、基本的には“無量寿経”の“upadeśa”、即ち“無量寿経”について“論”じた書物と見なすことができる。ただし、本書はいわゆる『無量寿経』およびその異本と非常に密接な関係があるというわけではなく、齟齬する箇所も少なくない。おそらくここでの“無量寿経”とは、〈無量寿経〉類を中心に、阿弥陀仏・浄土に言及する経論等の全般を指すものと考えられる〔安達俊英1999等〕。

本書にはサンスクリット原典やチベット語訳などは現存せず、漢訳が伝わるだけであるが、他の世親作と伝える経釈類と同様、世親の著作と見なしてよいのではないかと考えられている〔大竹晋2003等〕。

漢訳の写本・刊本は、本文の検討からして3系統に分類され、特にその一つである曇鸞『無量寿経論註』に引用の『無量寿経論』の本文は、他の『無量寿経論』単独写本の2系統との相違が少なくない〔『無量寿経論校異』、辻本俊郎2000、2006等〕。なお、最古のテキストである北響堂山の石経は、戦前に既に摩滅が激しく、解読できない状態であったという〔常磐大定『支那仏教史蹟踏査記』〕。

さて、内容であるが、本文は偈頌と長行とからなる。偈頌は最初に、阿弥陀仏に帰依して安楽国に往生しようという願い（＝願生）が述べられ、その後、安楽国と阿弥陀仏の特色を示しつつ、種々に讃嘆してゆく。そして最後に阿弥陀仏を見仏して、皆ともどもに往生することが誓われる。

一方、長行ではまず、この願偈の趣旨は安楽国と阿弥陀仏を観想して往生することにあるが、観想の方法、信心を発す方法（行法）は何かというならば、五念門（礼拝門・讃嘆門・観察門・作願門・回向門）であると述べる。特に作願門で奢摩他（＝止）、観察門で毘婆奢那（＝観）を成ずると説き、その観察門の対象として29項目を偈頌からピックアップし、それらを更に大きく仏国土（17種）・仏（8種）・諸菩薩（4種）の3者に分類する。これを「三厳二十九種功徳成就」と呼ぶ。「功徳成就」とは阿弥陀仏の功徳が成就した姿というような意味であろう。ただ、これらは29種に分けられるものの、結局は「一法句＝清浄句＝無為法身」という一つのものであるとも述べる。（なお、「句」とは「処」の意味と見なせる。）

さて、このような奢摩他・毘婆奢那を成就すれば、貪著を離れた無染清浄心、衆生の苦を抜こうとする安清浄心、衆生を悟りに導こうとする楽清浄心の3つの心が生ずると説く。更に加えて五念門に対応する形で、5つの功徳（五功徳門）も生じるとされる。即ち、往生して（近門）、極楽の聖衆の一人となり（大会衆門）、更に蓮華蔵世界に入り（宅門）、教えの甘味を味わい（屋門）、再び娑婆世界に還って人々を化導することができるようになる（園林遊戯地門）という5種である。前4門は自利、第5門は利他にあたる。

長行に説かれる五念門は、インド浄土教において初めて往生行を体系的に説き示したものとして注目されるが、偈頌には五念門は明確には現れない故に、また長行の教説に基づけば偈頌の大半が観察門となってしまってアンバランスであるが故に、偈頌と長行の関連は、必ずしも密接とはいえず、不自然さも免れない。

なお、偈頌・長行ともに「女人・根欠（障害者）・二乗種（声聞・縁覚といった小乗の者）は往生しない」と説くものの、これは『無量寿経』などの教説とも異なる故に、後世、これをどう解釈するかが大きな問題となった。

作成者名：安達俊英

無量寿如来観行供養儀軌

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：むりょうじゅにょらいかんぎょうくようぎき
書名別名：無量寿如来修観行供養儀軌、無量寿如来念誦儀軌、無量寿軌、無量軌、無軌、阿弥陀讃
原典の存欠：散逸
翻訳者名：不空（？）
翻訳者名よみ：ふくう
翻訳者別名：不空金剛、大広智三蔵、阿目佉跋折羅
翻訳者生没年：705-774
成立翻訳年：8c.
成立地：インド（？）
巻数：1
写本所在：七寺、西方寺、松尾社
・『大正蔵』校合資料
甲本：大治元年写仁和寺蔵本、乙本：仁和寺蔵古写本、丙本：黄檗版浄厳等加筆本
刊本所在：『大正蔵』19（No.930）
現代語訳書：中御門敬教「阿弥陀仏儀軌における往生観の受容と統合　－『無量寿如来観行供養儀軌』を事例として－」（『仏教文化研究』52、2008）
参考文献：赤塚祐道「『五輪九字明秘密釈』における阿弥陀曼荼羅について」（『密教図像』14、1995）、苫米地誠一「紅頗梨色阿弥陀像をめぐって（2）　－次第と儀軌を中心に－」（『大正大学綜合仏教研究所年報』17、1995）、武田和昭「香川・開法寺の板彫阿弥陀曼荼羅について」（『仏教芸術』237、1998）、中御門敬教「『無量寿如来観行供養儀軌』

の研究　－中国における阿弥陀仏信仰の密教的展開－」（『印仏研究』56-1、2007）
解説：当儀軌(以下『無量寿軌』)は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。密教的立場から極楽往生を目指す儀軌事相書である。我国へは最澄・空海・恵空・円珍によって請来された。伝空海『無量寿如来供養作法次第』や覚鑁『五輪九字明秘密釈』等においてその内容が継承されているほか、源信『往生要集』や永観『三時念仏観門式』にも引用される。このように天台阿弥陀法三部作の代表典籍として諸仏典に影響を与えた。
　密教と浄土教が結びつく事例はインド圏仏教において多々見られるが、東アジア仏教圏においても共通の傾向が知られ、本作はその代表的な事例でもある。この『無量寿軌』には「上品上生」が説かれているので、『観無量寿経』を承けたことは明白である。高麗版割注には「如観経所説」、宋元明本割注には「広如無量寿経所説」とさえ説かれている。彼の仕事には「訳」とされるも、実際は「著述」と考えられる場合も多く、本作はその一例のようである。
　この『無量寿軌』の構成は前行、本行、結行の三段に分けられる。本行以下においては阿弥陀仏の招来、接待、成就、本地へのお帰りという次第が続く。そこの次第は今日まで真言宗系統の修法の基本（六法／十八道）ともなっている。本文全体にわたり、「浄土三部経」、四十巻本『華厳経』、『般舟三昧経』、『往生論』、「発願文」、『阿弥陀如来根本陀羅尼』という有名な浄土教典籍が使用されており、密教方面からだけでなく浄土教方面からも注目される。また行者が無量寿如来との成就を果たした結果、彼は観自在菩薩と同体となることが明記される。その背景には、不空の訳経典籍には蓮華部関連仏典が多く、関心が観音菩薩に向かっていたと考えられる点や（『観音菩薩授記経』を翻訳）、密教では阿弥陀仏が観自在王如来と理解され、その因位が観自在菩薩とされる点や、また〈般若理趣経釈〉においては「無量寿仏は雑染五濁の世に住して観自在となる」と説かれる点、こうした諸点に根拠が求められそうである。
作成者名：中御門敬教

無量清浄平等覚経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：むりょうしょうじょうびょうどうかくきょう
書名別名：清浄平等覚経、平等覚経
異本書名：仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経、仏説無量寿経、仏説大乗無量寿荘厳経、大宝積経無量寿如来会
翻訳者名：支婁迦讖／支謙／白延／竺法護
翻訳者名よみ：しるかせん／しけん／はくえん／じくほうご
翻訳者生没年：後漢／後漢／魏／西晋
成立翻訳年：（翻訳）2c／3c／3c／3c後
成立地：インド
巻数：4
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、七寺蔵本（未調査）
2、興聖寺蔵本（未調査）
3、大英博物館蔵本（敦煌、上巻のみ）
4、正倉院本蔵本　景雲年間（未調査）
5、法通寺本（未調査）
6、教王護国寺蔵本（未調査）
写本奥書：1、一校了　永俊「只恐多有鳥焉之誤　重校正之　之祷」
2、一校了
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』12（No.361）
参考文献：藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970）、香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』（永田文昌堂、1984）、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房仏書林、1993）、Paul Harrison, “Women in the Pure Land”（*Journal of Indian Philosophy*, vol.26、1998）、大田利生『漢訳五本梵本蔵訳対照無量寿経』（永田文昌堂、2005）、藤田宏達『浄土三部経の研究』（岩波書店、2007）
解説：本経は『阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経』（『大阿弥陀経』）と並び「初期無量寿経」類に分類される。
　翻訳者に関しては支婁迦讖訳、支謙訳、白延訳、竺法護訳などの種々の説があり、未だにその決着がついていない（藤田宏達『浄土三部経の研究』p.46-53, 香川孝雄『浄土教の成立史的研究』p.30-51）。近年まで本経が＜無量寿経＞の最古の形態と考えられ重要視されたが、現在では『大阿弥陀経』のほうがより古い形態であると見做されている。
　本経は『大阿弥陀経』とほとんど同内容であるが、詳細に検討すれば、以下のような相違・展開が見られる。(1) 4巻構成になっていること。(2) 讃仏偈と東方偈の2偈が加えられていること。このうち東方偈は他の漢訳に比べ、現存の梵本に最も類似していた形を有している（香川孝雄）。(3) 願文（24願）の並びが大きく変化・整理されていること。(4) 音写語の多くを意訳語へ置き換えていること。特に後世流布する「阿弥陀仏」という語を使用せず、そのほとんどを「無量清浄仏」という訳語で表現している。
　経典の内容の概略については「阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経」の項を見よ。
作成者名：佐藤直実／佐々木大悟

文殊師利発願経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：もんじゅしりほつがんきょう
書名別名：行願讃、普賢行願讃
異本書名：唐不空訳『普賢菩薩行願讃』(『大正蔵』10（No.297))、唐般若訳『大方広仏華厳経（四十華厳）』「普賢広大願王清浄偈」(『大正蔵』10（No.293))、失訳『普賢菩薩行願経』（『大正蔵』85（No.2907）、失訳『大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品』（『大正蔵』85（No.2908））
サンスクリット原典書名：Ārya-Bhadracaryāpraṇidhānarāja
原典の存欠：現存
翻訳者名：覚賢
翻訳者名よみ：かっけん
翻訳者別名：仏陀跋陀羅
翻訳者生没年：359-429
成立翻訳年：420
成立地：インド
巻数：1
写本所在：金剛寺、七寺、石山寺、興聖寺、西方寺
刊本所在：『大正蔵』10（No.296）
現代語訳書：なし
参考文献：井ノ口泰淳「普賢行願讃考(1)」(『竜谷大学論集』412、1978.
再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995)、井ノ口泰淳「普賢行願讃考(2)」(『竜谷大学論集』420、1982.再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995)、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房仏書林、1993）、武内紹晃・

ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）、Keikyo Nakamikado：“Amitābha cult in Bhadracarīpraṇidhānarāja”（『印仏研』52-1、2003）、中御門敬教「往生後論攷」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』、山喜房仏書林、2004）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。現存する最古の〈普賢行願讃〉であり44偈からなる。経名（「文殊師利発願経」）や当経v.44（厳浄普賢行　満足文殊願　尽未来際劫　究竟菩薩行）からもわかる通り、本来は文殊菩薩の誓願に基づいて、菩薩の利他行を実践することを主題とする経典である。その実践が普賢行であり、その実践者として普賢菩薩が登場したと考えられる。このことは、異訳である不空訳の経名が「普賢菩薩行願讃」であることからも伺われる。〈普賢行願讃〉は、『出三蔵記集』（序巻第九）の「文殊師利発願経記第十九」に訳者覚賢（迦維羅衛国人）の言をして「外国四部衆礼仏時、多誦此経、以発願求仏道」とあることから、上記のように華厳思想を中心としつつも菩提行・誓願作法を目的とするものであり、おそらくは成立当時にインドで流行していた讃仏乗の系譜に連なるものと思われる。中国では華厳・浄土・密教の諸宗にまたがって取り扱われた。浄土思想に言及する箇所は以下の通りである。
「願我命終時　除滅諸障碍　面見阿弥陀　往生安楽国（v.42）。生彼仏国已 成満諸大願　阿弥陀如来 現前授我記（v.43）。」
　ここにはサンスクリット原典・チベット訳・不空訳の各v.60、般若訳のv.51に見られる往生後の救済活動が説かれていないことから、その実践行は5c.以降に現れたものと推測される。
　この叙述をもって、例えば長西『浄土依憑経論章疏目録』「羣経録第一」、文雄『蓮門経籍録』「傍依経本類」、継成『阿弥陀仏説林』、矢吹慶輝『傍説浄土教論集』などは本経を浄土教典籍として挙げる。
作成者名：中御門敬教

薬師如来本願経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：やくしにょらいほんがんきょう
異本書名：玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功徳経』（『大正蔵』14（No.450））、義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功徳経』（『大正蔵』14（No.451））、失訳説（帛尸梨蜜多羅訳説）『灌頂百結神王護身呪経（第四巻）』（『大正蔵』21（No.1331））
サンスクリット原典書名：Ārya-Bhagavato Bhaiṣajyaguru vaiḍūryaprabhasya pūrvapraṇidhānaviśeṣavistāra-nāma-mahāyānasūtra
翻訳者名：達摩笈多
翻訳者名よみ：だつまぎゆうた
翻訳者生没年：?－619（武徳2）
成立翻訳年：615（大業11）
成立地：インド
写本所在：聖護蔵、金剛寺、七寺、石山寺、興聖寺、西方寺、新宮寺、松尾社
刊本所在：『大正蔵』14（No.449）
現代語訳書：石田瑞麿『民衆経典』（「仏教経典選」12、筑摩書房、1986）、新井慧誉「梵文『薬師経』和訳」（「仏教タイムス」昭和49年6月15日～7月15日号）、岩本裕『大乗経典（四）』（「仏教聖典選」6、読売新聞社、1974）
参考文献：新井慧一「薬師経　－一仏経と七仏経－」（『印仏研』16-1、1967）、五来重編『薬師信仰』（「民衆宗教史叢書」12、雄山閣出版、1986）、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）、高橋尚夫「薬師如来の大願と真言について」（『大正大学研究論叢』12、2005）、Gregory Schopen、“Sukhāvatī as a Generalized Religious Goal in Sanskrit Mahāyāna Sūtra Literature”（*Indo-Iranian Journal*、Vol.19 Nos.3/4、1978）
解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。翻訳者の達摩笈多（?－619）は南インド出身で、西域を経て中国の京城大興善寺に住した。『摂大乗論』『菩提資糧論』など重要な大乗論書を翻訳したことで知られる。『薬師如来本願経』「序」には当経訳出の経緯が述べられている。その概要は以下の通り。当経訳出の以前に、鹿野寺沙門慧簡によって「薬師経」は翻訳され、世に流行していた。しかし誤りが多く、疑義の生じることを恐れ、慧矩が新たに三本の梵語原典を入手し、達摩笈多を含む計六名で、東都洛水南上林園において重訳し直したのが当経とされる。翻訳年次は隋大業年中（605-617）という。しかし、その訳出の経緯は玄奘（602-664）訳『薬師瑠璃光如来本願功徳経』（『大正蔵』No.450）とほとんど同じであり、疑義が存する。〈薬師経〉には当経を含めて四訳（四存一欠）存在するが、経録の記述を踏まえた、書誌的な説明については石田［1986］の薬師経解題を参照のこと。
　内容については玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功徳経』（『大正蔵』No.450）の項目を参照のこと。〈薬師経〉は玄奘訳が今日最も用いられるため、これを解説の代表とした。
　次に、玄奘訳の解題内容と重複するが、浄土教に関する部分の内容を述べれば以下の通り。すなわち八斉戒や戒を受けた出家者・在家者がその功徳をもって極楽往生を願うが適わなかった。しかしながらその彼らですら薬師如来の御名を聞くことによって、臨終時に八大菩薩が空にのぼって（乗空）来迎し、極楽世界への道筋を示したと説かれる。
　〈薬師経〉の日本への影響については、例えば『往生要集』「大文第六」の別時念仏（臨終行儀で薬師信仰に言及）などが知られる。
作成者名：中御門敬教

薬師瑠璃光七仏本願功徳経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：やくしるりこうしちぶつほんがんくどくきょう
異本書名：達摩笈多訳『薬師如来本願経』（『大正蔵』14（No.449））、玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功徳経』（『大正蔵』14（No.450））、失訳説（帛尸梨蜜多羅訳説）『灌頂百結神王護身呪経（第四巻）』（『大正蔵』21（No.1331））
サンスクリット原典書名：Ārya-Saptatathāgatapūrvapraṇidhānaviśeṣavistāra-nāma-mahāyānasūtra
翻訳者名：義浄
翻訳者名よみ：ぎじょう
翻訳者生没年：635（貞觀9）－713（先天2）
成立翻訳年：707（景龍1）
成立地：インド
巻数：2
写本所在：上巻　七寺、興聖寺、西方寺(破損)
下巻　七寺、興聖寺、西方寺、新宮寺(破損)
刊本所在：『大正蔵』14（No.451）
現代語訳書：石田瑞麿『民衆経典』（「仏教経典選」12、筑摩書房、1986）、新井慧誉「梵文『薬師経』和訳」（「仏教タイムス」昭和49年6月15日～7月15日号）、岩本裕『大乗経典（四）』（「仏教聖典選」6、読売新聞社、1974年）
参考文献：新井慧一「薬師経　－一仏経と七仏経－」（『印仏研』16-1、1967）、五来重編『薬師信仰』（「民衆宗教史叢書」12、雄山閣出版、1986）、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）、高橋尚夫「薬師如来の大願と真言について」（『大正大学研究論叢』12、2005）

解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。訳者は義浄（635－713）であり、本経は仏光内寺で707年に翻訳された。彼は『根本説一切有部律毘奈耶』をはじめとする戒律仏典の翻訳で知られ、渡印して現地で直接大小乗の仏典を研鑽した。翻訳だけでなく、『南海寄帰内法伝』の著作でも知られている。

本経は、明らかに一仏薬師経を承けたものであり、玄奘訳『仏説薬師瑠璃光如来本願功徳経』の文言を半分近く踏襲している。現存する〈薬師経〉漢訳の中でも一番新しい翻訳である。当経以外の〈薬師経〉は薬師仏一仏を扱うのに対し、当経は俗に「七仏薬師」といわれる七仏を扱うので、前者は一仏薬師経、後者は七仏薬師経ともいわれる。七仏各々が個々の誓願文を持つ点が大きな特徴であり、この七仏はチベットでは薬師七兄弟ともいわれる。厳密には薬師仏とその他の六仏を指す。七仏の名前は、善名称吉祥王如来、宝月智厳光音自在王如来、金色宝光妙行成就如来、無憂最勝吉祥如来、法海雷音如来、善住宝海如来、そして薬師瑠璃光如来である。この七仏にはそれぞれ東方に固有の浄土を有している。経典冒頭には、「どうか我ら及び未来世の像法の衆生のために、慈悲をもって諸仏の名号、本願の功徳である国土の荘厳、善巧方便の個々の特徴（差別之相）を説きたまえ」とあり、所説目的として「像法衆生のための教え」である点が理解できる。この七仏には合計44の誓願文があり、一仏薬師経が12の誓願を出すのとは大きく異なっている。個々の紹介翻訳・内容分類については高橋［2005］を参照のこと。ちなみに（1）病に関するもの、（2）災害に関するもの、（3）身体に関するもの、（4）迫害や刑罰に関するもの、（5）所求に関するもの、（6）人生苦に関するもの、（7）不徳に関するものに分類できるという（cf.高橋［2005］）。また明確に真言を出すなど一仏薬師経よりも密教化の進んだ点が特徴である。浄土教的な要素については、『仏説薬師如来本願経』、『仏説薬師瑠璃光如来本願功徳経』の項目を参照のこと。日本天台宗では四箇大法の一つ「薬師法」の所依典籍としても知られる。

作成者名：中御門敬教

薬師瑠璃光如来本願功徳経

著作翻訳の有無：漢訳
書名よみ：やくしるりこうにょらいほんがんくどくきょう
異本書名：達摩笈多訳『薬師如来本願経』(『大正蔵』14（No.449）)、義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功徳経』(『大正蔵』14（No.451））、失訳説（帛尸梨蜜多羅訳説）『灌頂百結神王護身呪経（第四巻）』(『大正蔵』21（No.1331）)
サンスクリット原典書名：Ārya-Bhagavato Bhaiṣajyaguru vaiḍūryaprabhasya pūrvapraṇidhānaviśeṣavistāra-nāma-mahāyānasūtra
翻訳者名：玄奘
翻訳者名よみ：げんじょう
翻訳者別名：玄奘三蔵、三蔵法師
翻訳者生没年：602（仁寿2）－664（鱗徳1）
成立翻訳年：650（永徽1）
成立地：インド
巻数：1
写本所在：金剛寺(破損)、石山寺、興聖寺、西方寺
刊本所在：『大正蔵』14（No.450）
現代語訳書：石田瑞麿『民衆経典』（「仏教経典選」12、筑摩書房、1986）、新井慧誉「梵文『薬師経』和訳」（「仏教タイムス」昭和49年6月15日～7月15日号）、岩本裕『大乗経典（四）』（「仏教聖典選」6、読売新聞社、1974）
参考文献：新井慧一「薬師経　－一仏経と七仏経－」（『印仏研』16-1、1967）、五来重編『薬師信仰』（「民衆宗教史叢書」12、雄山閣出版、1986）、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、1998）、高橋尚夫「薬師如来の大願と真言について」（『大正大学研究論叢』12、2005）、Gregory Schopen、“Sukhāvatī as a Generalized Religious Goal in Sanskrit Mahāyāna Sūtra Literature”（*Indo-Iranian Journal*、Vol.19 Nos.3/4、1978）

解説：当経は浄土経疏目録である『長西録』に挙げられる。当経翻訳者の玄奘（602－664）は中国河南省陳留（現在）の人。インドへの求法、法相宗の開祖、四大翻訳家の一人として知られた唐代の大仏教家。『瑜伽師地論』『大般若経』『倶舎論』『大毘婆沙論』など主要な経論75部1335巻を訳出した。

当経は『開元録』によると、650年に大慈恩寺翻経院における翻訳と伝えられる。異訳である闍那崛多（?－619）訳『薬師如来本願経』との類似からして、玄奘による重訳説もある。しかしこの点については、所依の梵語原典の問題も含めて確定的な結論には至っていない。詳細は石田［1986］の薬師経解題を参照のこと。

当経は密教の影響を承けた後期の浄土経典である。所説の東方浄瑠璃世界は「如西方極楽世界、功徳荘厳等無差別」とあるように明確に〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉を承けているが、その一方で陀羅尼が組み込まれた当経諸版も存在するごとくである。原典の成立は4～5世紀と、〈無量寿経〉と比べると数世紀遅れる。経典の対告衆は文殊菩薩である。薬師十二願といわれる薬師如来の誓願文では、相好具足、光明被照、所求満足、安立大乗、自戒清浄、諸根完具、除病安楽、転女成男、去邪趣正、息災離苦、飢渇飽満、荘具豊満が誓われている。阿弥陀仏の四十八願と共通する項目もあるが、傾向として現世的な願望が比較的目立つ。後の薬師信仰では、特に病魔からの回復を約束する仏典としても有名である。

浄土教的な要素を述べれば以下のとおり。すなわち八斉戒や戒を受けた出家者・在家者がその功徳をもって極楽往生を願うが適わなかった。しかしながら薬師如来の御名を聞くことによって、臨終時に八大菩薩が神力でもって来迎し、極楽世界への道筋を示したと説かれる。

なお敦煌写本は来迎八大菩薩の具体名を列挙する。すなわち文殊菩薩・観音菩薩・勢至菩薩・無尽意菩薩・宝檀華菩薩・薬王菩薩・薬上菩薩・弥勒菩薩である。

本来ならば浄瑠璃世界への往生を奨励するはずの当経が、阿弥陀仏の極楽世界への往生を手助けする点が大きな特徴である。グレゴリー・ショペンが極楽世界を「Sukhāvatī as a generalized religious goal」と評した、一根拠となる記述である。

作成者名：中御門敬教

Ārya-Bhadracaryāpraṇidhānarāja

著作翻訳の有無：梵語
書名の日本語訳：聖なる賢行願の王
チベット訳書名：'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po
漢訳書名：東晋覚賢訳『文殊師利発願経』(『大正蔵』No.296)、唐不空訳『普賢菩薩行願讃』(『大正蔵』No.297)、唐般若訳『大方広仏華厳経（四十華厳）』「普賢広大願王清浄偈」(『大正蔵』No.293)、失訳『普賢菩薩行願経』(『大正蔵』No.2907)、失訳『大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品』（『大正蔵』No.2908）
書名別名：Ārya-Bhadracarīpraṇidhānarāja、Bhadracaryapraṇidhānarāja、Bhadracarī、Samantabhadracaryāpraṇidhānarāja、Ārya-Bhadracaripraṇidhānarāja、Ārya-Bhadracarī［mahā］praṇidhānarāja、Bhadracarīnāmāryasamantabhadrapraṇidhānaṃ、Ārya-

Samantacaryāpraṇidhānarāja、Ārya-Bhadracarīmahāpraṇidhānaratnarāja
原典の存欠：現存
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：5-8c.ca.
成立地：インド
所収文献名：Gaṇḍavyūha
写本等の存欠：写本
活字本
刊本
刊本所在：写本については井ノ口〔1995〕、足利〔1956〕、Shiraishi〔1988〕、Hori〔2002〕を参照のこと。堀前掲論文によると、ネパール本として約30本の親本ガンダビューハ写本が存在する。中央アジアのトルファンからもガンダビューハ写本の存在が報告されている。
［写本］
・Ārya-Bhadracarīmahāpraṇidhānaratnarāja（AB）紙7葉（京都大学梵語学梵文学研究室所蔵）
・Gaṇḍavyūha（K1）紙521葉b5-525葉b1（京都大学梵語学梵文学研究室所蔵）
・Gaṇḍavyūha（K2）紙395葉a5-397葉b8（京都大学梵語学梵文学研究室所蔵）
・普賢行願讃異本之1「金剛三昧院本」（Lokesh Chandra "Sanskrit Manuscripts from Japan（Facsimile Ed.）2 Parts"（*Śata-piṭaka, Indo-Asian Literatures,* vol.93、1972、New Delhi）
・普賢行願讃異本之2「無量寿院本」（*ibid.,*）
・普賢行願讃異本之3「総持寺金剛台本」（現存せず）
・普賢行願讃異本之4「海輪本」（*ibid.,*）
＊上記4本は慈雲尊者が用いた伝承写本である。
（慈雲作『梵篋三本』行願讃跋中より「梵本四般其所承也。一則無量寿院所蔵。一即金剛三昧院所蔵。一即得之左海。後批云総持寺金剛台。三本並竪書。一即得之摂州小曽根。海輪者寄之於予。其文横書。今之所写。依準横書。而参伍余本云。天明三癸卯夏小北（比?）丘慈雲敬拝識」）

活字本所載書：Kaikioku Watanabe、*Die Bhadracarī eine Probe Buddhistisch - Religioser Lyrik*（Leipzig、1912）、泉芳璟「梵文普賢行願讃」（『大谷学報』10-2、1929）、Daisetz Teitaro Suzuki and Hokei Idzumi, *The Gandavyuha Sutra*（Kyoto、1949）、足利惇氏「普賢菩薩行願讃の梵本」（『京都大学五十周年記念論集』、1956）、Sushama Devi、*Samantabhadracarya-Praṇidhānarāja*（*Śata-piṭaka*、*Indo-Asian Literatures*、Vol.4、Delhi、1958）、P.L.Vaidya (ed.), *Gaṇḍavyūha* (*Buddhist Sanskrit Texts*、No.5、Darbhanga、1960）、Shindo Shiraishi, "BHADRACARĪ ein Sanskrittext des Heiligen Jiun. Abdruck im Jahre 1783"（『山梨大学学芸学部研究報告』13、1962. 再出『白石真道仏教学論文集』京美出版社、1988）
現代語訳書：泉芳璟「梵文邦訳普賢行願讃」（『MAYŪRA』2、1933）、長谷部隆諦「梵文聖普賢行願王和訳（1）」（『密教研究』89、1944）、Shindo Shiraishi、"Samantabhadra's Bhadracarī - praṇidhānam"（『山梨大学学芸学部研究報告』11、1960. 再出『白石真道仏教学論文集』京美出版社、1988）、岩本裕『華厳経』（「仏教経典選　大乗仏典」3、読売新聞社、1976）、中村元『発展期の大乗経典』（「大乗仏典」4、東京書籍、1988）、梶山雄一監修『華厳経入法界品　さとりへの遍歴』下（中央公論社、1994）、中村元『大乗仏教の思想』（「決定版中村元選集」21、春秋社、1995）
参考文献：渡辺海旭『壺月全集』上、大東出版社、1933）、足利惇氏「普賢菩薩行願讃の梵本」（『京都大学五十周年記念論集』、1956）、月輪賢隆「普賢行願讃の註疏（竜樹・世親・陳那・厳賢）に就て」（『小西・高畠・前田三教授頌寿記念　東洋学論叢』仏教大学編、1952.再出『仏典の批判的研究』百華苑、1971）、Shindo Shiraishi、"Ueber die Ueberlieferung und Komposition des Textes Samantabhadra's Bhadracarīpraṇidhāna"（『山梨大学学芸学部研究報告』12、1961. 再出『白石真道仏教学論文集』京美出版社、1988）、井ノ口泰淳「普賢行願讃考(1)」（『竜谷大学論集』412、1978.再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995）、同「普賢行願讃考(2)」（『竜谷大学論集』420、1982.再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995）、香川孝雄『浄土教の成立史的研究』（山喜房仏書林、1993）、武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）、Shin'ichirō Hori、"Gaṇḍavyūha-Fragmente der Turfan-Sammlung"（『国際仏教学大学院大学研究紀要』5、2002）、中御門敬教「〈無量寿経〉と普賢行　－〈普賢行願讃〉（伝）世親釈による解明－」（『仏教論叢』46、2002）、Keikyo Nakamikado、"Amitābha cult in Bhadracarīpraṇidhānarāja"（『印仏研』52-1、2003）、中御門敬教「「普賢十大願、浄土思想、科文を介した〈普賢行願讃〉理解　－『四十華厳』巻四十を参照して－」（『浄土宗学研究』30、2004）、同「往生後論攷」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』、山喜房仏書林、2004）
解説：内容ついては蔵訳、漢訳、蔵訳註釈、蔵外註釈の項目も参照のこと。〈華厳経〉「入法界品」末尾の〈普賢行願讃〉（以下〈行願讃〉）には、〈華厳経〉の立場（普賢行）に依った浄土教が説かれる。記述は僅かであるが、〈行願讃〉は〈無量寿経〉と〈華厳経〉との接点に位置する興味深い仏典である。

漢訳から眺めると〈行願讃〉には大きく2版が存在する。すなわち44偈頌版（『大正蔵』No.296）系統と62偈頌版(『大正蔵』No.297)系統である。現存する梵本〈普賢行願讃〉は何れも後者に属する。ただし末尾の2偈頌は衆生の誓願成就・往生極楽を祈願する書写者の廻向文である。後に〈行願讃〉は〈華厳経〉「入法界品」末尾に編入され、ここのそれは単行梵本写本と良く一致する。

さて〈行願讃〉の主題は普賢行にあるが、華厳部の先行する単行経典『文殊師利発願経』(『大正蔵』No.296)によれば、本来的にこれは文殊菩薩の行願の意味であった。つまりここの「普賢」は固有名詞「普賢菩薩」を指示せず、普通名詞「普く賢れたもの」を意味する。全体としては、この普賢行を全体の基調とし、七支供養、悪業滅尽、華厳思想、弥陀浄土思想を調和させた構造となっている。〈華厳経〉の一方の雄〈十地経〉が菩薩行の階梯を教理として示すのに対し、〈行願讃〉の編入先の「入法界品」はその具体的な実践を広説しており、〈行願讃〉はその掉尾を飾るものとなっている。菩薩道の実践を説いてインド大乗仏教に大きな影響を与えたシャーンティデーヴァ著『集学論』には、七支供養に関して〈行願讃〉が重要な典拠とされる。以後の中観派の大乗菩薩戒において必須の典籍となった。

次に〈行願讃〉所説の浄土思想について解説する。〈行願讃〉の浄土思想は初期の〈無量寿経〉を踏まえて、往生後の救済行に言及する点が特徴である。末尾の vs.57-60において集中的に説かれる。そこには、極楽世界に往生し、その後に智慧・慈悲に拠る普賢行でもって、永続的に衆生救済する往生観が説かれる。なお魏訳『無量寿経』以降の「一生補処の願」には、①成仏を待つ境地(一生補処の菩薩)、②救済を行う境地(普賢行の菩薩)として、自利利他相即の極楽世界が明確に説かれる。ここの②の根拠が、先の〈行願讃〉流の浄土教である。魏訳『無量寿経』以降にこの点が明見されるから、4～5世紀初頭にかけて、華厳思想と浄

土思想とが邂逅したことになろう。同経魏訳は序分においても、八相成道を示現する「菩薩」の理想像として普賢菩薩を出す。中国、日本の浄土教では主要な扱いを受けないが、チベットでは極楽往生を祈願する経典として有名である。以下に当該部分の梵本からの試訳を紹介する。
「そして私は臨終に際してあらゆる障礙を追い払いますように。かの無量光仏を面前に見ますように。またかの極楽国土に赴けますように（v.57）。そこに赴いた私の面前にこれら諸誓願（普賢行願讃）が全て完全に存在しますように。また私は余りなくそれら［諸誓願］を現実化しますように。世間に存在する限りの衆生の利益をなしますように（v.58）。かの美しく喜ばしい勝者の、マンダラ内の素晴らしく勝れた蓮華に生まれた私は、そこの無量光勝者の面前で授記を得ますように（v.59）。そしてそこで授記を得て、多く百コーティもの変化によって、智力によって、私は十方における多くの衆生の利益をなしますように（v.60）」
作成者名：中御門敬教

Sukhāvatīvyūha

著作翻訳の有無：梵語
書名の日本語訳：極楽の荘厳
チベット訳書名：'Phags pa bde ba can gyi bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo
漢訳書名：阿弥陀経
書名別名：Smaller Sukhāvatīvyūha
原典の存欠：現存
成立翻訳年：1c-2c／10c頃
成立地：インド
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
刊本所在：1、常明『梵漢阿弥陀経』（1773）
2、慈雲『梵漢阿弥陀経』（1783）
3、勝道『梵文阿弥陀経』（1792）
4、法護編纂・諦濡校訂『梵文阿弥陀経諸訳互証』（1795）
5、法護述・諦濡・典寿校訂『梵文阿弥陀経義釈』（1795）
活字本所載書：1、*Sukhāvatī-vyūha, Descreption of Sukhāvatī, the Land of Bliss*, ed. by F. Max Müller and B. Nanjo (Anecdota Oxonieniensia, Aryan Series, Vol.1, Pt.3), Oxford, 1883.
2、荻原雲来ほか『梵蔵和英合璧　浄土三部経』（大東出版社、1931）
3、*Sukhāvatīvyūha, Mahāyānasūtra-saṁgraha*, Part1, ed. by P.L.Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts, No.17, Darbhanga, 1961.
4、藤田宏達『阿弥陀経講究』（東本願寺出版部、2001）
明治期に日本で刊行された活字本を始め、その他の情報については藤田宏達『阿弥陀経講究』pp.17-20を参照せよ。
現代語訳書：中村元・早島鏡正・紀野一義『浄土三部経』下（岩波文庫、1963）、山口益・桜部建・森三樹三郎『浄土三部経』（「大乗仏典」6、中央公論社、1976）、Luis O Gomez “The Land of Bliss”、University of Hawai'i Press、1996、藤田宏達『阿弥陀経講究』（東本願寺出版部、2001）
参考文献：*A Tri-lingual Glossary of Sukhāvatīvyūha Sūtras*, by H. Inagaki, Kyoto, 1984.
解説：＜阿弥陀経＞の梵本。サンスクリット本としては日本に伝わった悉曇本のみが現存する。チベット訳のほかに、漢訳からの重訳としてウイグル語訳、西夏語訳、モンゴル語訳、満州語訳が存在する。
　現存する梵本は10世紀ごろである。＜阿弥陀経＞の成立は1・2世紀頃であろう。＜無量寿経＞との前後については、平川は＜阿弥陀経＞が先であるとし、藤田は＜無量寿経＞が先とする。
　内容は以下の通り。
コーサラ国舎衛城の郊外、給孤独の園を舞台として世尊が舎利弗に対して語る。ここから西へ十万億土のところに極楽世界があり、そこには阿弥陀仏が住し、法を説いている。その仏の寿命と光明は無量であり、そのため阿弥陀と名づけられている。その極楽世界は苦しみがなく、ただ安楽だけがある。そこには七宝樹や七宝の池・八功徳水があり、様々な色の蓮華があり、妙なる鳥がいる。その阿弥陀仏の名前を聞いて一日ないし七日、一心に念ずるならば、極楽世界に生まれることが説かれる。そして、東西南北上下の六方における諸仏が阿弥陀仏の極楽浄土をほめたたえ、「この経典を信じなさい」と示して信を勧め、経は終わる。
作成者名：佐藤直実／佐々木大悟

Sukhāvatīvyūha

著作翻訳の有無：梵語
書名の日本語訳：極楽の荘厳
チベット訳書名：'Phags pa 'od dpag med kyi bkod pa zhes bya ba theg po'i mdo
漢訳書名：無量寿経
書名別名：Larger Sukhāvatīvyūha
原典の存欠：現存
成立翻訳年：1c-2c／5c頃
成立地：インド
写本等の存欠：写本
活字本
活字本所載書：1、*Sukhāvatī-vyūha, Descreption of Sukhāvatī, the Land of Bliss*, ed. by F. Max Müller and B. Nanjo (Anecdota Oxonieniensia, Aryan Series, Vol.1, Pt.3), Oxford, 1883.
2、荻原雲来ほか『梵蔵和英合璧　浄土三部経』（大東出版社、1931）
3、足利惇氏『大無量寿経梵本』（法蔵館、1965）
4、藤田宏達『梵本無量寿経写本ローマ字集成』（1992、山喜房仏書林）
明治期に日本で刊行された活字本を始め、その他の情報については『原始浄土思想の研究』p.97-101を参照。
現代語訳書：中村元・早島鏡正・紀野一義『浄土三部経』上（岩波文庫、1963）、藤田宏達『梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』（法蔵館、1975）、山口益・桜部建・森三樹三郎『浄土三部経』（大乗仏典6、中央公論社、1976）、Luis O Gomez、The Land of Bliss、University of Hawai'i Press、1996
参考文献：*Buddhist Manuscripts*, general editor, Jens Brrarvig（Manuscripts in Schoyen Collection, Vol. 3）, Hermes Academic Pub., 2000、*A Tri-lingual Glossary of Sukhāvatīvyūha Sūtras*, by H. Inagaki, Kyoto, 1984.香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』（永田文昌堂、1984）、井ノ口泰淳編『梵本無量寿経写本集成』（「竜谷大学善本叢書」6、法蔵館、1986）、大田利生『漢訳五本梵本蔵訳対照無量寿経』（永田文昌堂、2005）
解説：＜無量寿経＞のサンスクリット原本。ただし、このサンスクリット本は後期＜無量寿経＞に属し、いわゆる『無量寿経』に近い内容である。おそらく5世紀前後の成立と考えられる。写本については完本では竜谷大学所蔵の榊本が最も古く、現在の時点で約38本存在する。詳しくは、『梵本無量寿経写本ローマ字集成』参照。近年、アフガニスタンから紀元6・７世紀とみられる本経の断片が発見された（*Buddhist Manuscripts*）。
　本経には、コータン語訳、モンゴル語訳、満州語訳があ

り、漢訳から重訳したウィグル語訳、西夏語訳が存在する。
　本経は、マガダ国の王舎城の郊外にある霊鷲山において阿難に対して説かれる。昔、法蔵菩薩が世自在王仏のもとで、すべての衆生を救うために覚りを求めることを決意する。そして、「自分が正覚を得て仏になった時、その自分の仏国土をどのようなものに作りあげれば、そこに住む人々は修行し覚りやすいであろうか」ということを五劫という長い年月を費やして考える。その結果「このような仏国土を私は作りたい」という48の誓願をたてる。
　法蔵菩薩は兆載永劫の間、六波羅蜜行を実践して覚り、ついに阿弥陀仏となる。そして、48項目の誓願が仏国土において実現されている様子が語られる。すなわち、阿弥陀仏は無量の光と寿命をもち、またその国土の衆生も数えられないほど多い。また、極楽国の樹や池は七宝の宝できらびやかに荘厳されている。そして、衆生が様々な方法で阿弥陀仏を念じることによって阿弥陀仏国に生まれるということが説かれる。そして、阿弥陀仏国に生じた菩薩が様々な徳を備えていることが述べられる。
　次に、釈尊が阿難と弥勒に実際に阿弥陀仏とその国土を見せる。そしてこの世界と他方世界の菩薩たちが多数その極楽世界に来生することを説く。
　梵本＜無量寿経＞の特徴として、以下のことが挙げられる。1. 帰敬偈・聞信偈が存在する、2. 阿難が釈尊の顔の輝きを讃える箇所で、棗の比喩・煉瓦の比喩という漢訳に現れない独自の比喩が存在する、3. 五悪段が存在しない。4. 現存する他の漢訳と対照させてみると、「無量寿如来会」と比較的よく対応している。
作成者名：佐藤直実／佐々木大悟

チベット

I　チベット訳

Kun tu bzang po'i spyod pa'i smon lam gyi don kun bsdus

書名の日本語訳：賢行願全義摂
サンスクリット原典書名：Samantabhadracaryāpraṇidhān-ārthasaṃgraha
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. Phyogs kyi glang po、Skt. Dignāga
著者名よみ：チョクキー ランポ、ディグナーガ
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.4012,mDo 'grel, Nyi.182a1-201a4
・北京版　大谷No.5513,mDo 'grel, Nyi.211a2-231a5
刊本の奥書刊記：（D.Nyi.201a3）（P.Nyi.231a5？）'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po'i bshad pa / slob dpon Phyogs kyi glang pos mdzad pa rdzogs so / /（『聖なる賢行の誓願』の釈、軌範師ディグナーガがお造りになったものが完了した。）
現代語訳書：中御門敬教「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究（1）～（4）」（『浄土宗学研究』32,34,35,36、2006－2010）
参考文献：月輪賢隆「普賢行願讃の註疏（竜樹・世親・陳那・厳賢）に就て」（『小西・高畠・前田三教授頌寿記念東洋学論叢』、再出『仏典の批判的研究』（百華苑、1971、pp.486-514）、竹村牧男『知の大系』（佼成出版社、1996）、中御門敬教 'Amitābha cult in Bhadracarīpraṇidhānarāja'（『印仏研』52-1、2003）、中御門敬教「往生後論攷」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』、山喜房仏書林、2004）、中御門敬教「普賢十大願、浄土思想、科文を介した＜普賢行願讃＞理解－『四十華厳』巻四十を参照して－」（『浄土宗学研究』30、2004）
解説：〈華厳経〉「入法界品」末尾の〈普賢行願讃〉（以下〈行願讃〉）には、〈華厳経〉の立場（普賢行）に依った浄土教が説かれる。記述は僅かであるが、〈行願讃〉は〈無量寿経〉と〈華厳経〉との接点に位置する興味深い仏典である。本作はこの〈行願讃〉のインド撰述註釈書である。

著者ディグナーガは5世紀から6世紀にかけて活躍した、仏教論理学の大成者。南インドのバラモンの家に生まれ、ヴァスバンドゥへの師事を経て、多くの著名な仏典を著作したとされる。彼の伝記は『プトン仏教史』『ターラナータ仏教史』に詳しい。義浄は「陳那の八論」として、『観三世論』『観総相論』『観所縁論』『因門論』『似因門論』『因明正理門論』『取因仮設論』『集量論』を挙げる。その他、『集量論自註』『倶舎論註精要灯』『般若波羅蜜多円集要義論』等が存在する。本作との関係では「讃」を多く著作した人物としても知られている（cf.東北Nos.1150, 1156, 1157, 2712, 4560, 4561）。

現存するインド起源の〈行願讃〉註釈には二系統がある。ナーガールジュナ、ヴァスバンドゥ、ディグナーガ、ゲンサンポの系統と、シャーキャミトラの系統である。前者は内容的にも分量的にも近似する。後者はより詳細に註釈されている。略釈（前者4作）と広釈（後者1作）とも言いえよう。かつて月輪賢隆は、略釈4作を「到底別人の作とは思われない」とまで述べた。この点について目録と諸釈記述とからは、ディグナーガとゲンサンポの二者は一貫して支持される。ゲンサンポは不明点が多いので、〈行願讃〉略釈系統はディグナーガ釈が基本となる。著述の傾向として、彼特有の認識論と論理学とは説かれないが、引用典籍の年代面からは彼の典籍と見なして矛盾はない。〈中論〉のナーガールジュナ、ヴァスバンドゥの著作とすると、原拠〈行願讃〉の年代、引用典籍の年代の両面から矛盾が生じる。講説された内容が、複数に伝承された結果、別作と捉えられたのか。あるいは1典籍が翻訳される折に、各段階の原稿が複数典籍として伝承された結果なのか。この点については今後の課題である。なおチベット撰述の〈行願讃〉釈の代表には、イェシェデとチャンキャ2世によるものが現存する。前者は諸釈を総合的に摂義する。後者は親本「入法界品」との関係、〈行願讃〉研究史、自註という構成である。

本作は十段からなる。すなわち、1.如来に敬礼すること、2.彼に供養すること、3.罪を告白すること、4.福徳に随喜すること、5.法輪を転じるよう勧請すること、6.如来が現世に留まって頂くよう懇願すること、7.善根を廻向すること、8.普賢行願の区分、9.普賢行願の究竟（目的）、10.普賢行願の功徳である。〈行願讃〉全体の60偈が上記の構成に分類されている。随所に科文相当の番号が付されており、註釈形式の面からも特徴的な本作である。

浄土教的な要素は、vs.57-60に説かれる。上記の構成では「10.普賢行願の功徳」に相当する。先ず、往生した者は往生以前に障礙を断じ、往生後に波羅蜜と相応する身体を獲得することが説かれる。続いて往生後に普賢行を行う点が説かれる。これは一生補処の境地とは対比的である。〈無量寿経〉では一生補処が理想とされるが、〈行願讃〉では普賢行の境地が理想とされる。そして、眷属を伴った無量光仏のマンダラに往生し、現前授記を得る点が説かれる。最後に往生後に変化雲（慈悲）と智力（智慧）とによる、穢土衆生の救済を行う点が註釈される。本註釈には漢訳が存在しないため、上記の浄土思想は漢訳仏教圏では大きく扱われることがなかった。しかし、インド仏教屈指の大思想家が往生以後の救済活動を註釈した点は、還相廻向との対比の上でも注目に値しよう。
作成者名：中御門敬教

bCom ldan 'das snang ba mtha' yas kyi gzungs sngags

書名の日本語訳：世尊無量光のダラニ呪
サンスクリット原典書名：Bhagavadamitābha-dhāraṇīmantra
原典の存欠：散逸
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：
・デルゲ版
　東北No.677, rGyud 'bum, Ba.222b1-6
　東北No.864, gZungs 'dus, E.87b4-88a2
・北京版
　大谷No.153, rGyud, Na.29a1-7
　大谷No.489, rGyud, 'A.85b1-6
刊本の奥書刊記：（D.Ba.222b5）bCom ldan 'das snang ba mtha' yas kyi gzungs rdzogs so / /
（『世尊無量光のダラニ［呪］』が終わりました。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、pp.131-132
解説：インド大乗仏教では中期以降、三宝ないし仏菩薩への礼拝と真言ないしダラニそのものと、その読誦の功徳を述べた短い典籍が幾つか成立し、中央アジアを通って広まったが、本著もその一つである。それらのダラニ自体も、アムリタとアミダを関連づけ、甘露の所有者と汚染の浄化

者としての阿弥陀へ呼びかけるといった内容のものであり、〈鼓音声ダラニ経〉のダラニを簡略化したような形態となっている。本著は、『無量光随念』（東北No.678,大谷No.154）のダラニとほぼ同じものを先ず示すが、その上でさらにもう一度仏菩薩に帰命し、もう一つのダラニを示し、その功徳を述べている。いずれも漢訳『阿弥陀如来根本陀羅尼』から取り出されたような内容となっている。
（全訳）
　インド語では、Bhagavān-amitābha-dhāraṇī-mantra で、チベット語では、Bcom ldan 'das snang ba mtha' yas kyi gzungs sngagsといいます。世尊・如来・応供・正等覚たる無量光仏に敬礼します。すなわち a mi te, a mi tod bha be, a mi ta sam bha be, a mi ta bi kran tam ga re, ga ga na kirti ka re, sarba kle sha ksha am ka ri svā hā. このダラニの功徳は、百千劫にわたって造った業障でも、これを3回念誦すれば、それらの汚れは尽きるでしょう。21回念じれば、4つの根本堕罪も罪悪を完全に浄めて、千人の仏に善根を積んだことになるでしょう。世尊無量光を随念すべきです。あらゆる仏や菩薩に敬礼します。na ma radna tra yā ya, ma hīdu hi ke svāhā. 身体に病気が生じても、渇病（nang khong skams）になったとしても、21回賛美して彼を扇子であおげば、病気がなくなるでしょう。このダラニ呪をお説きになって、すぐさまあらゆる眷属が喜悦し、〔その〕世尊がお説きになった事柄を大変賞賛しました。『世尊無量光のダラニ［呪］』が終わりました。
作成者名：中御門敬教

bDe ldan gyi snying po

書名の日本語訳：安楽を具えた心髄（極楽の心呪？）
原典の存欠：散逸
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：
・デルゲ版
　東北No.680, rGyud 'bum, Ba.223a5-7
　東北No.889, gZungs 'dus, E.165b1-4
・北京版
　大谷No.147, rGyud, Na.15a2-5
　大谷No.514, rGyud, 'A.165a2-4
刊本の奥書刊記：（D.Ba.223a7）bDe ldan gyi snying po rdzogs so / /
（『安楽を具えた心髄』が終わりました。）
活字本所載書：bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、p.133
解説：インド大乗仏教では中期以降、三宝ないし仏菩薩への礼拝と真言ないしダラニそのものと、その読誦の功徳を述べた短い典籍が幾つか成立し、中央アジアを通って広まったが、本著もその一つである。それらのダラニ自体も、アムリタとアミダを関連づけ、甘露の所有者と汚染の浄化者としての阿弥陀へ呼びかけるといった内容のものであり、漢訳『阿弥陀如来根本陀羅尼』を簡略化したような形である。〈鼓音声ダラニ経〉と〈阿弥陀如来根本陀羅尼〉は、アムリタと阿弥陀を関連づけたが、前者は、阿弥陀仏に関して三宝の不可思議を説き、また両脇侍としての観自在と大勢至を初めて明示した経典でもある。
　真言の前にまず三宝と観自在菩薩への信仰を述べ、後にそれを誦えたことの功徳として極楽往生することを述べている。観自在菩薩への信仰、密教が流行した時代にあって極楽往生への願いを結びつけた簡略な典籍である。
（全訳）
　仏に敬礼します。法に敬礼します。僧伽に敬礼します。聖者観自在菩薩大士に敬礼します。彼らに敬礼してから、この明呪を保ちなさい。この明呪が自分に成就しますように！すなわち、ha na ha na sā ni, na ba sā ni, dzva la dzva la ne, tsa la tsa la ne, purba yo ga ma nu sma ra phaṭ, ma hā ha ta svā hā, 彼のこの明呪を誦えたその者は、百千世にわたり生を念じます。今世から死んでからも、安楽を具えた世間（極楽世界）に生まれます。『安楽を具えた心髄』が終わりました。
作成者名：中御門敬教

sNang ba mtha' yas rjes su dran pa

書名の日本語訳：無量光随念
原典の存欠：散逸
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：
・デルゲ版
　東北No.678, rGyud 'bum, Ba.222b6-223a1
　東北No.867, gZungs 'dus, E.88b4-b6
・北京版
　大谷No.154, rGyud, Na.29a7-b2
　大谷No.492, rGyud, 'A.86a8-b2
刊本の奥書刊記：(D.Ba.223a1) sNang ba mtha' yas rjes su dran pa rdzogs so / /（『無量光随念』が終わりました。）
参考文献：赤松孝章「アミダ仏に言及する敦煌チベット文資料概観」（『印度哲学仏教学』5、1990）
解説：インド大乗仏教では中期以降、三宝ないし仏菩薩への礼拝と真言ないしダラニそのものと、その読誦の功徳を述べた短い典籍が幾つか成立し、中央アジアを通って広まったが、本著もその一つである。それらのダラニ自体も、アムリタとアミダを関連づけ、甘露の所有者と汚染の浄化者としての阿弥陀へ呼びかけるといった内容のものであり、漢訳『阿弥陀如来根本陀羅尼』を簡略化したような形である。本著は、『世尊無量光のダラニ呪』（東北No.677,大谷No.153）の二つの陀羅尼のうち第一のものとほぼ同じものを扱っており、より簡略な形となっている。
　内容は、まず無量光仏を礼拝し、陀羅尼を提示する。その内容は阿弥陀仏を讃えて汚染の浄化に言及したものである。最後にその念誦の功徳として、罪悪の浄化と福徳の蓄積を述べている。
（全訳）
世尊・無量光・如来・応供・正等覚者に敬礼します。すなわち、a mi te, a mi tod bha be, a mi ta sam bha be, a mi ta bi skrān ta gā mi ni, ga ga na kirti ka ri, sarba kle sha ksha yang ka ri svā hā. このダラニの功徳は、百千劫にわたって積んだ業障も、3回読誦すれば、それらが尽きると知るべきです。21回読誦すれば、4つの根本堕罪（殺、盗、淫、妄語）も、罪が浄化します。千仏に善根を作ることともなります。『無量光随念』が終わりました。
　なお敦煌文献の浄土教文献を研究した赤松［1990］p.197には、関連典籍として大谷No.153, 154, 286, 489, 492が指摘されている。
作成者名：中御門敬教

Padma dkar po'i le'u nyer bzhi pa las byung ba'i be smon

書名の日本語訳：『白蓮華（法華経）』24章に現れる極楽願文

漢訳書名：『妙法蓮華経』（『大正蔵』9（No.262））、『正法華経』（『大正蔵』9（No.263））
サンスクリット原典書名：Saddharmapuṇḍarīka
原典の存欠：現存
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：Dam pa'i chos pad ma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo（蔵訳〈法華経〉対応箇所）
・デルゲ版　東北No.113, mDo sde, Ja. 267a4-7
・北京版　大谷No.781, rDo sna tshogs, Chu. 192b2-4
刊本の奥書刊記：（p.135）'dren pa 'od dpag med pa'i sangs rgyas zhing // bde ba can du brdzus te skye bar shog // Padma dkar po'i le'u nyer bzhi par gsungs so //
（導師無量光仏の国土である極楽［世界］に化生しますように。『白蓮華（法華経）』24章にお説きになったものです。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、p.135
現代語訳書：坂本幸男・岩本裕『法華経（下）』岩波文庫、1967、松濤誠廉・丹治昭義・桂紹隆『法華経2』（「大乗仏典」5、中央公論社、1976）
参考文献：藤田宏達『原始浄土思想の研究』岩波書店、1969、p.312
解説：内容については漢訳項目も参照のこと。『法華経』「観世音菩薩普門品」において無尽意菩薩が観自在菩薩の功徳を説き、その名を念じ称えるよう勧めた32偈頌のうち、末尾の3偈頌であり、〈無量寿経〉の所説と一致した内容が見られる。この直前には「世自在王を導師とした法蔵（ダルマカーラ）比丘は、世間の供養を受けて、多くの幾百劫の間、修行して、無垢の無上正覚を得た。［観世音菩薩は扇をもち、］無量光導師の左右に立って煽いだ。如幻三昧により一切の国土に赴いて、勝者たちを供養した。」という2偈頌があり、〈普賢行願讃〉v.27とその註釈にもこのような内容が見られる。文中に出るシャーラ王はヴィシュヌ神の別名とされている。
（和訳）
「西方に、安楽の生じる場所であり、無垢なる世間である極楽［世界］があります。そこに衆生の調御者たる導師無量寿が現におられ、そこには女性としては生じず、あらゆる者達に性的な事柄はなく、彼ら仏弟子は変化して生まれ、汚れない蓮華の中央に坐っています。導師たる無量寿自身も［そこにおられます］。蓮華の中央は汚れなく、何と立派なことでしょうか。獅子座におられて、またシャーラ王のように光り輝いています。」
なお『法華経』「薬王菩薩本事品」（デルゲ版　東北No.113, mDo sde, Ja. 247b4-7、北京版　大谷No.781, rDo sna tshogs, Chu. 178b6-179a1）には、この章を聞いて修行に勤めるならば、極楽世界に往生し、眷属に囲繞された無量寿仏がおられる場所の獅子座に生まれると説かれており、『長西録』に浄土経典として挙げられるほか、源信著『往生要集』には極楽往生を勧める傍証の経典の一つとして挙げられている。
作成者名：中御門敬教

'Phags pa da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa'i ting nge 'dzin ces bya ba theg chen po'i mdo

書名の日本語訳：聖なる現在仏が面前に住しなさる三昧と名付けられた大乗経典
漢訳書名：『大方等大集経賢護分』（『大正蔵』16（No.416））、『仏説般舟三昧経』（『大正蔵』16（No.417））、『般舟三昧経』（『大正蔵』16（No.418））、『拔陂菩薩経』（『大正蔵』16（No.418））
書名別名：Da lta'i sangs rgyas bzhugs mdo
サンスクリット原典書名：Ārya-Pratyutpannabuddhasaṃmukhāvasthitasamādhi-nāma-mahāyānasūtra
原典の存欠：現存
翻訳者名：Śākyaprabha、Ratnarakṣita
成立翻訳年：8c.ca.
成立地：インド
写本等の存欠：活字本
刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.133, mDo sde, Na. 1b1-70b2
・北京版　大谷No.801, mDo sna tshogs, Du. 1-73a5
刊本の奥書刊記：（Harrison［1978］p.222, l.1）/ / rgya gar gyi mkhan po Śā kya pra bha dang / zhu chen gyi lo tsā ba ban de Ratna rakṣi tas zhus te / gtan la phab pa / skad gsar chad kyis kyang bcos lags / /
（インドの親教師であるシャーキャプラバと大校訂翻訳師である尊者ラトナラクシタが校訂して確定した［。これは］新語訳定によって、さらに翻訳されたものです。）
活字本所載書：・Paul M.Harrison, The Tibetan Text of the Pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi-sūtra、1978、Tokyo
現代語訳書：Paul M.Harrison, The samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present、1990、Tokyo、林純教『蔵文和訳　般舟三昧経』（大東出版社、1994）
参考文献：香川孝雄「般舟三昧経における浄土教思想」（『仏教大学紀要』35、1958）、桜部建『般舟三昧経記』（安居次講、1975）、末木文美士「『般舟三昧経』をめぐって」（『藤田宏達博士還暦記念論集　インド哲学と仏教』平楽寺書店、1989）、末木文美士・梶山雄一『観無量寿経・般舟三昧経』（「浄土仏教の思想」2、講談社、1992）
解説：内容については漢訳項目も参照のこと。蔵訳〈般舟三昧経〉は全26章であり、そのうちの21章・24章後半・25章は諸漢訳に対応箇所が存在しない。現存する〈般舟三昧経〉完本のうち蔵訳は最も増稿されたものである。題名の音写語「般舟三昧」の意味については、梵語表記（複合語）の解釈から現在2説ある。すなわち1.「現在諸仏が行者の面前に立つ三昧」、2.「行者が現在諸仏の面前に立つ三昧」である。この点について蔵訳は書名（cf. da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa～）からも前者を支持している。
当経の中心部分は三巻本『般舟三昧経』「行品第二」（蔵訳：2章後半から3章に相当）であり、そこに阿弥陀仏に対する見仏が集中的に説かれる。成立史から眺めるとこの箇所は〈般舟三昧経〉諸章のうち最古層に属し、現存する経典でいえば〈無量寿経〉最古の漢訳『大阿弥陀経』と、〈般若経〉最古の漢訳『道行般若経』を経由して成立したとされる。
蔵訳（2章後半から3章）では先ず般舟三昧によって達成される154の功徳が説かれる。次に般舟三昧の具体的内容が説明される。この箇所が浄土教典籍としての〈般舟三昧経〉中心場面である。行者は一人で閑静な場所に坐り、西方極楽世界に現在住している無量寿仏を憶念する。そしてその果報として見仏することを、経典は平易な7種類の比喩を用いて解説する。すなわち、第1の比喩では、1日ないし7日無量寿仏を憶念すれば、少なくとも夢中に見仏できること、第2の比喩では、夢中に視界に障礙が無いように、行者は無量寿仏を見仏できること、第3の比喩では、男が

娼婦を思い続けて夢中において交合するように、強く憶念することで無量寿仏を見て、無生法忍を得、成仏が確約されること、第4の比喩では、荒野で空腹の男が夢中に食物に満足するが、目覚めると空腹のままであり、「すべては夢のようだ」と考えるように、無生法忍を得ること、第5の比喩では、異郷にあって夢中に故郷を見るように、特定方向の仏を憶念すると夢中に見仏できること、第6の比喩では、死体の変容は心の所作であるように、見仏も心の所作であり、見仏は因縁積集の結果であること、第7の比喩では、影像に実体がないように、見られた仏はどこから来たのでもなく、どこに行くのでもない、影像のようなものであり、「三界は唯心」であること、を説いている。

このように〈般舟三昧経〉の課題は、現世での空三昧（空観・唯心観が平行して説かれる）による見仏であり、その点は死後の往生による見仏を説く〈無量寿経〉と対照的とも相補的とも言える。最初期の漢訳に両経典があることから、両経典の叙述に先行ないし同時に成立する形で、阿弥陀仏や極楽浄土の概念ができたものと考えられる。

初期大乗仏教における言及としては、『十住毘婆沙論』「入初地品第2」に「般舟三昧父、大悲無生母、一切諸如来、従是二法生」とされており、また「念仏品第20」に般舟三昧により見仏するのは初歓喜地の菩薩とされ、高い境地を求めており、その点も〈無量寿経〉と対照的かつ相補的である。前者の偈頌では智慧・慈悲の双修の一方に般舟三昧を挙げ、仏出現の1因（智慧資糧）とする。これは『菩提資糧論』にも対応偈頌があり、ナーガールジュナ（150-250. ca.）真作の可能性が高い。後にはカマラシーラ（8c.ca.）の〈修習次第後篇〉において、仏を作意することに関する教証とされており、その仏随念の方法は、チベットのツォンカパ（1357-1419）による〈菩提道次第大論〉（止の章）にも評価され引き継がれている。

作成者名：中御門敬教

'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo

書名の日本語訳：聖なる無量寿智と名づけられた大乗経典
漢訳書名：『大乗無量寿経』（『大正蔵』19（No.936））、『仏説大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』（『大正蔵』19（No.937））
サンスクリット原典書名：Aparimitāyurjñāna
原典の存欠：現存
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：
・デルゲ版
　東北No.674, rGyud 'bum, Ba.211b2-216a7
　東北No.675, rGyud 'bum, Ba.216a7-220b5
　東北No.849, gZungs 'dus, E.57b1-62a6
・北京版
　大谷No.361, rGyud, Ba.243b6-249a5
　大谷No.362, rGyud, Ba.249a5-254a2
　大谷No.474, rGyud, 'A.55b3-60b4
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.2538, Folios 1a1-7b7（1a-bが欠落）
刊本の奥書刊記：(D.Ba.216a7) 'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo rdzogs so / /
（『聖なる無量寿智と名付けられた大乗経典』が終わりました。）
(P.'A.60b3) oṃ gcig pa dang gnyis pa dang gsum pa dang gsum yod pa las / / oṃ gsum pa 'di dag pa yin te / 'di la tshe dpag med kyi mtshan brgya rtsa brgyad pa zhes zer ro / / 'di la yi ge brgya rtsa bcu yod pa ni klog pa'i ched du a gnyis dkyus su bcu pa bcug pa yin no / / 'di rgya dpe dngos la bris so / /
（oṃが1つ〔のダラニ〕と、2つ〔のダラニ〕と、3つ〔のダラニ〕と［合計］3つ〔のダラニが〕あるうち、「oṃ」が3つのもの　－これが正しいのである。これを、「無量寿の108の名号」という。この〔ダラニ〕に110の文字があるのは、読誦のために「a」を2つ本文に入れたのである。これはインドの典籍そのものに書かれている。）
参考文献：池田澄達「梵本アパリミターユル陀羅尼経の校合」（『宗教研究』1-3、1916）、Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman, Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras, Hague, 1968、高田仁覚『インド・チベット　真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）、御牧克己「大乗無量寿宗要経」（牧田諦亮・福井文雅編『敦煌と中国仏教』「講座敦煌」7、大東出版社、1984）、塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文『密教経典篇』（「梵語仏典の研究」4、平楽寺書店、1989）、上山大峻『敦煌仏教の研究』（法蔵館、1990、pp.437-456、617-625）、藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：内容については漢訳項目も参照のこと。密教化の進んだ代表的な浄土教経典である。上方の無量功徳蔵世界に無量寿如来が住し、説法していると説く。寿命は長くて100年で、横死もありえる閻浮提の人は、この如来の名号を聞き、この経典を書写し、書写させ、受持、読誦、供養すれば、長寿とこの仏国土への往生が得られると説く。さらに、特に経典書写の福徳は様々であり無量であると説く。その後にこの仏の108の名号（108回の読誦ととるか、108音節ととるかは不明）を繰り返し説く。その功徳の1つには、無量光如来の極楽世界への往生も挙げられている。なお経典末尾には仏を六波羅蜜の達成者とする偈頌がある。仏名に関して、無量寿如来と無量寿智決定光明王、仏国土についても上方の無量功徳蔵と極楽世界・無量光如来の仏国土等とあるように、不統一が見られ、その異同について、チベットではツォンカパの高弟ケードゥプなどが議論している。高田仁覚著『インド・チベット　真言密教の研究』を参照。

経そのものも経典自体に経典書写の功徳が強調されることから、中央アジアで広く流布し書写されたので、梵本をはじめ、燉煌本を含む漢訳・蔵訳、ウィグル語訳、満州語訳、西夏語訳等が存在する。詳しい関連情報、写本諸訳等の書誌情報については、御牧［1984］、塚本・松長・磯田［1989］pp.120-123を参照のこと。なお経の根本真言は、パンチェンラマ１世の『無量寿儀軌－無死如意牛自在王』（東北No. 5919 Ga）5b4-6にチベット語訳されている。

インドでは、経そのものとは別に、無量寿智という仏名が、名号を説くダラニとともに、密教の阿弥陀仏の成就法類に採用された。後期インド大乗仏教の高名な学者・行者であるジターリ（西暦960-1040年頃）著の成就法文献である〈無量寿智儀軌〉は、いわゆる四部タントラの分類では「所作タントラ」の蓮華部の正尊を明かす典籍とされるが、そこにおいて本経は『鼓音声陀羅尼経』とともに、修行の場に安置すべき「二つの無量寿経Tshe dpag med pa'i mdo gnyis」として言及されるし、また『本経』の六波羅蜜の偈頌が引用される。この安置、引用はジターリの成就法を詳細に説いたチベットのダツェパに継承されて明示されている。これらのことから、すでにインドで無量寿仏と無量寿智仏が同一視されていたことが分かる。同じくジターリの〈無量寿讃〉には、この仏はただ名号を保つことにより

寿命と智慧を広大にする仏とされている。女性成就者ダーキニー・シッディラージャ（マチク、10世紀後半から11世紀前半頃）は無量光仏から直接教えを受けたとされ、彼女の成就法文献は無上ヨーガ・タントラに分類されるが、それら成就法文献もまた本経の「無量寿智」という仏を後期密教の中で発展させたものである。

チベットでは、ジターリ流とダーキニー・シッディラージャ流の関連典籍と、さらに顕教の『無量寿経』に取材した成就法文献が幾つも成立することになるが、本経の、横死を除き寿命を与える無量寿仏という概念、仏の108の名号、六波羅蜜の偈頌はそれらの典籍に継承された。

作成者名：中御門敬教

'Phags pa tshe dang ye she dpag tu med pa'i sgrub thabs

書名の日本語訳：聖無量寿智成就法
サンスクリット原典書名：Ārya-Aparimitāyurjñānasādhana
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. dGra las rnam par rgyal ba、Skt. Jitāri
著者名よみ：ダレーナムパルギェルワ、ジターリ
翻訳者名：'Jam pa'i dbyangs、lCe dga' ba'i dpal
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.2699, rGyud, Nu. 67a3-67b4
・北京版　大谷No.3523, rGyud 'grel, Nyu. 81b6-82b2
刊本の奥書刊記：（D.Nu.67b3）slob dpon mkhas pa Dzai tā ri dgra las rnam par rgyal bas mdzad pa rdzogs so / / rgya gar gyi pa ṇḍi ta 'Jam pa'i dbyangs dang / lo tsā ba lCe dga' ba'i dpal gyis bsgyur ba'o / /
（軌範師であり学者であるジャイターリ（Dzai tā ri）－敵から打ち勝った者－がお作りになったものが完成した。インドのパンディタであるジャムペーヤン（'Jam pa'i dbyangs）と翻訳師チェガウェー・ペル（lCe dga' ba'i dpal）が翻訳した。）
現代語訳書：藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
参考文献：高田仁覚『インド・チベット　真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）、白崎顕成「Jitāriの『無量寿九尊法』について」（『仏教論叢』24、1980）、白崎顕成「Jitāri－人と思想－」（『木村武夫教授古稀記念　僧伝の研究』、永田文昌堂、1981）、中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
解説：著者は、西暦960-1040頃に活躍した後期大乗仏教の学者・行者であり、中観、論理学、菩薩戒、密教に関する著作を遺した。本著者は、無量寿仏に関する三部の著作（『無量寿讃』『無量寿智成就法』『無量寿智儀軌』）があり、この書はその一部をなす。本著は、儀軌としてその中心的な役割を果たす。『無量寿讃』はその中で使用される讃歌であり、『無量寿智儀軌』は成就法のなかで個別の事項についてより詳細な規定を示している。関連内容は『無量寿讃』『無量寿智儀軌』の項目を参照のこと。

この成就法の目的は、一切衆生を苦悩から護ることとされている。まず行の地を選定し、マンダラ供養・沐浴をし、仏尊などを招いて供養礼讃し、懺悔・四無量心などを空性として修習する。次に、無量寿智の真言を唱え、空から種字hrii.h、種字から光明が生じるのを観想することにより、赤い身体の禅定印を結んだ無量寿仏が灌頂を与える。真言または無死鼓音のダラニを唱えて、守護と延命を成就する。または自己を本尊と観想し、真言を唱えるか瓶の甘露により浄化される。再び讃歎・供養する。最後に有情が無量寿の身を得て臨終の苦などが終息し、安楽となるよう廻向する。

本著もサンスクリット原典は未報告であり、チベット訳のみが現存する。翻訳者はデルゲ版では「'Jam pa'i dbyangs、lCe dga' ba'i dpal」であり、北京版では「'Jam pa'i dbyangs、dGa' ba'i dpal」となっている。奥書の後に出る「名前の真言とは、「オーン、タッドヤター、アパリミターユル・ジュニャーナ、フリーヒ、フーン、ブルーン、スヴァーハ（Skt. Oṃ tadyathā aparimitāyturjñāna hrīḥ hūṃ bhrūṃ svāha）」である」とは、本文中に見られる「名前［の真言］によって転変したなら、ダラニも唱える（ming gis bsgyur na gzungs kyang bzlas）」（D. nu. 67b1）を承けた説明と思われる。この説明は後筆であろうが、『無量寿宗要経』の無量寿智仏を継承したものとなっている。

ターラナータ（1575-1634）の『寿命の儀軌　－甘露の海－』にも、伝承系譜の一部が掲載されている。（cf. Tshe cho ga bDud rtsi'i chu gter（20,a6-b1）、The Collected Works of Jo-Nang rJe btsun Tāranātha, Volume12、Reproduced from a set of prints from the Rtag brtan Phun tshogs gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak、1985）
作成者名：藤仲孝司

'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs

書名の日本語訳：聖なる無量寿智の心呪と名付けられたダラニ
漢訳書名：『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』（『大正蔵』12（No.370））
サンスクリット原典書名：Ārya-Aparimitāyurjñānahṛdaya-nāma-dhāraṇī
原典の存欠：散逸
翻訳者名：Puṇyasaṃbhava、Ba tshab nyi ma
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：
・デルゲ版
　東北No.676, rGyud 'bum, Ba.220b5-222b1
　東北No.850, gZungs 'dus, E.62a6-64a2
・北京版
　大谷No.363, rGyud, Ba.254a2-256a1
　大谷No.475, rGyud, 'A.60b4-62b2
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.2539, Folios 7b8-10a2
刊本の奥書刊記：(D.Ba.222a7) 'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs rdzogs so / /　/ / rgya gar gyi mkhan po pu ṇya saṃ bha wa dang / lo tstsha ba Pa tshab nyi ma grags kyis bsgyur ba'o / /
（『聖なる無量寿智の心呪と名付けれれたダラニ』が終わりました。インドの和尚であるプンニャ・サンバヴァと翻訳師パツァプ・ニマタクとが翻訳した。）
活字本所載書：bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、p.134に『不死なる鼓音』

に現れる極楽願文（'chi med rnga sgra las byung ba'i bde smon ）という題名で掲載されている。対応箇所は以下の通りである。
・デルゲ版
　東北No.676, rGyud 'bum, Ba.221a1-4
　東北No.850, gZungs 'dus, E.62b2-4
・北京版
　大谷No.363, rGyud, Ba.254a5-b1
　大谷No.475, rGyud, 'A.60b7-61a2
　「浄土に生まれますように。『不死なる鼓音』にお説きになった（rnam dag zhing du skye bar shog / 'chi med rnga sgra las
gsungs so //）」という奥書きがある。
現代語訳書：中御門敬教「〈阿弥陀鼓音声王陀羅尼経〉の研究－阿弥陀信仰の密教への展開－」（『仏教大学総合研究所紀要』12、2006年）
参考文献：小野田俊蔵「チベット所伝の浄土観想修法　－青木文教師将来資料Nos.103, 104, 107, 108, 109についての管見－」（『国立民族博物館研究報告』別冊1、1983）、小野田俊蔵「『阿弥陀鼓音声陀羅尼経』に基づく西蔵曼荼羅」（『日仏年報』52、1987）、柴田泰山「『選択集』第一段説示の「所依の経論」について」（『阿川文正教授古稀記念論集　法然浄土教の思想と伝歴』　山喜房仏書林、2001）、藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）、中御門敬教「〈無量寿経〉誓願文と釈迦の菩薩行－説一切有部説の痕跡－」（『印仏研』58-1、2009）
解説：内容については漢訳項目も参照のこと。本経は通常、阿弥陀仏と極楽浄土の思想を密教化した経典と捉えられているが、その成立に関しては後述のように説一切有部説の痕跡も認められるようだ。経自体は中国、日本の浄土教諸家にも良く知られた典籍である。チベットではいわゆる四部タントラの内、所作タントラに分類され、蓮華部の正尊を説くものとされるが、顕教でも無量寿仏に関する叙述において、同経の西方の極楽国土や無量寿仏の存在を証す部分、称名により往生できる部分が比較的よく知られている。
　なお三法を随念する文句（「仏は不可思議であり、仏法も不可思議であり、聖者のサンガは不可思議です。不可思議なものを信仰すれば、果報も不可思議です」）はチベット仏教においても常用されている。具体な内容は、西方安楽国に無量寿仏がおり、その仏の名号を正しく受持し、念ずるならば、臨終時にかの仏の来迎を受け、安楽国の蓮華に化生することが説かれる。すなわち鼓音声ダラニを唱えて、かの仏を供養し、作意すれば往生できると説く。当経は先行経典（『無量寿経』『阿弥陀経』）を受けながら、無死鼓音声王のダラニとそれの念誦による極楽往生を説いている。このダラニは涅槃の諸徳をまとめて、それを「無死の鼓音声」と関連づけたものであり、背景には、総持としてのダラニが念仏三昧や見仏と関連することが考えられるが、それが同時に密教的な要素ともなっている。また、無量寿仏が出家する以前の家族や、出家後の弟子たちが列挙されているが、これらは釈迦成道を踏まえたものと考えられる。成仏する際に、釈迦成道に倣った環境が整う点については、玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』（『大正蔵』27（No.1545）p.891bff.）に示されている。当経は『無量寿経』と同様に（cf.中御門〔2009〕）、説一切有部説の影響を受けたと考えられる。
　当経所説のダラニはインドでは経典から独立したものとして、密教の阿弥陀仏（無量寿智仏）の成就法類にも採用され、それはチベットに継承された。すでにジターリの〈無量寿智儀軌〉においては、修行の場に安置すべき「二つの無量寿経Tshe dpag med pa'i mdo gnyis」のうち一つとして言及されるが、後にダツェパの〈無量寿無死鼓音のマンダラ儀軌〉には、この経典自体をジターリ流の成就法類と密接に結び付ける解釈が見られる。
　塚本、松永、磯田［1989］p.123には、H. Takaoka, A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal, Vol.1, Nagoya, 1981, CH539に基づき、「Aparimitāhṛdaya」を挙げる。畝部俊也の調査によると、当経と題名が類似しているが、実際は「Amoghapasahṛdaya」であることが判明した。同氏によると、このテキストの最後にいくつかのhṛdaya文献（心真言）がまとめられた箇所があったようで、末尾に「Aparimitāhṛdaya」が収載されているため、題名が「Aparimitāhṛdaya」となった。内容は〈宗要経〉所説の「oṃ」が三つの真言である。
作成者名：中御門敬教

'Phags pa tshe dpag tu med pa'i snying po'i tshe dbang bskur ba zhes bya ba'i gzungs

書名の日本語訳：聖無量寿心呪の寿命潅頂というダラニ
サンスクリット原典書名：Ā rya A pa ra mi ta ā yur dznyā na a bhi ṣhi nytsa hri da yā na ma dhā ra ṇī（sic.）
原典の存欠：散逸
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.2540, Folios 10a2-12b4
刊本の奥書刊記：（12b3-4）
'Phags pa tshe dpag tu med pa'i snying po'i tshe dbang bskur ba zhes bya ba'i gzungs rdzogs so//
（『聖無量寿心呪の寿命潅頂というダラニ』というものが完了した。）
解説：後期密教のなかで成立した潅頂作法であるが、デルゲ版にも北京版にも収録されていないので、何らかの典籍から抄出されたものか、あるいは別に作成されたものかは不明である。五仏やその明妃は『秘密集会タントラ』のものである。寿命潅頂とそのダラニが説かれているが、生起・究竟の二次第の実践などへの言及もなく、寿命に関する祈願が中心となっている。何らかの儀軌において用いられる願文的な性格が見られるが、インド撰述あるいはチベットでの仮託の可能性についても未詳である。
　内容は、世尊金剛手が無量寿遍満生起という三昧に入って、寿命と福徳と智慧の資糧を無量に増大させる一切如来の心呪を説いたというものである。まず無量寿世尊の徳を讃えて、礼拝する。さらに大日無量寿、金剛サッタ無量寿、宝生無量寿、無辺光無量寿、不空無量寿に対して各々十方の魔を降伏し、寿命を授け、救護するよう祈願する。各々の明妃が寿命の保持者として瓶を寿命で満たして、頭頂から潅頂するよう祈願する。次に各々が寿命の招請者として奪われた寿命を召還し、寿命を授け、救護するよう祈願する。七印により捺印してから、世尊の五仏と曼荼羅の保持者の五明妃が、悲により加持し、寿命を堅固にするよう祈願する、というものである。
作成者名：藤仲孝司

'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po

書名の日本語訳：聖なる賢行願の王
漢訳書名：東晋覚賢訳『文殊師利発願経』（『大正蔵』

No.296)、唐不空訳『普賢菩薩行願讃』(『大正蔵』No.297)、唐般若訳『大方広仏華厳経(四十華厳)』「普賢広大願王清浄偈」(『大正蔵』大正No.293)、失訳『普賢菩薩行願経』(『大正蔵』No.2907)、失訳『大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品』(『大正蔵』No.2908)
書名別名: Kun tu(du)bzang po spyod pa'i smon lam、bZang po spyod pa'i smon lam、bZang po spyod pa、bZang spyod、etc
サンスクリット原典書名:Ārya-Bhadracaryāapraṇidhānarāja
原典の存欠:現存
翻訳者名: Jinamitra, Surendrabodhi, Ye shes sde(東北No.44,大谷No.761)、欠(その他)
成立翻訳年:9c.ca.(cf.『デンカルマ目録』(824)No.471)
成立地:インド
所収文献名:sDong pos brgyan pa(デルゲ版東北No.44、北京版大谷No.761)
写本等の存欠:写本
刊本
活字本
刊本所在:
・デルゲ版
東北No.44, Phal chen, A.358b7-362a4
東北No.1095-250, gZungs 'dus, Wam.262b5-266a3
東北No.4377, sNa tshogs, No.300b1-303b3
・北京版
大谷No.716, rGyud, 'Ha.266a3-268a2
大谷No.761, Phal chen, Hi.249b7-253a4
大谷No.5924, :Ngo mtshar bstan bcos, Mo.288b6-292a7
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.2449, Folios 1a1-12a1

刊本の奥書刊記:(D.Wam.266b3)'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po rdzogs sto / /
(『聖なる賢行願の王』が終わりました。)
＊代表として東北No.1095-250を出した。
活字本所載書:・SUSHAMA DEVI "SAMANTABHADRA-CARYA-PRAṆIDHĀNA-RĀJA"(Śata-piṭaka、Indo-Asian Literatures.vol.4、1958、Delhi)
現代語訳書:蔵訳からの翻訳はなし。ただし蔵訳は梵本と概ね一致するので、梵本のデータを参照のこと。
参考文献:井ノ口泰淳「普賢行願讃考(1)」(『竜谷大学論集』412、1978. 再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995)、同「普賢行願讃考(2)」(『竜谷大学論集』420、1982.再出『中央アジアの言語と仏教』法蔵館、1995)、中御門敬教「「普賢十大願、浄土思想、科文を介した〈普賢行願讃〉理解 −『四十華厳』巻四十を参照して−」(『浄土宗学研究』30、2004)、同「往生後論攷」(『高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学仏教学論叢』、山喜房仏書林、2004)
その他、梵本のデータを参照のこと。
解説:〈華厳経〉「入法界品」末尾の〈普賢行願讃〉(以下〈行願讃〉)には、〈華厳経〉の立場(普賢行)に依った浄土教が説かれる。記述は僅かであるが、〈行願讃〉は〈無量寿経〉と〈華厳経〉との接点に位置する興味深い仏典である。敦煌写本中に多数のチベット語写本の存在が報告されている。井ノ口〔1995〕p.204によると、カタログ上知り得るものとして、スタイン蒐集中に14点、ペリオ蒐集中に30余点が存在する。書誌と内容については梵本の項目も参照のこと。 七支供養を説く点から、大乗菩薩戒の基本的な典籍である。インドでのシャーンティデーヴァ以降の菩薩戒の実践を承けて、資糧の集積と罪悪の浄化のためにチベットでもアティシャ著『菩提道灯論』、ツォンカパ『菩提次第論』におけるように、〈行願讃〉は宗派を問わず、加行のとき、菩薩戒を受けるとき、また廻向するときに頻繁に読誦される。
チベット撰述の極楽願文にもしばしば本著は言及され、読誦される。それらのうち、最も流布した一つ、〈無量寿経〉に依るツォンカパ『最上国開門』とその影響下のパンチェン1世(1567-1662)などの極楽願文は、〈行願讃〉の7支供養や極楽往生に関する部分を引用し、それらを往生の因とし、読誦させている。もう一つの大流行した極楽願文、カルマ・チャクメー(1613-1678)『清浄大楽国土の誓願』は、〈行願讃〉所説の7支供養を骨格として、極楽浄土や阿弥陀仏に関する諸経典の内容を盛り込んでいる。
密教においても、本尊ヨーガを行う成就法文献には、インド以来 七支供養が広く採用されたが、阿弥陀仏成就法についても同様であり、〈行願讃〉中の極楽往生と利他行を願う vs.57-60 は、誓願と廻向の場面で重用される。また、カギュ派やニンマ派により発見された様々な「埋蔵経典」類は成就法文献との関係も強いので、そこにもまた七支供養は必ず用いられている。ちなみに、〈普賢行願讃〉所説の浄土思想を引用する浄土教文献としては、サキャパンディタ(1182-1251)『無量光の修習の義』、ダライラマ5世(1617-1682)『普賢行願に出ている睡眠修習の行持 −安楽国に渡る岸−』、パクパ(1235-1280)『無量光の門から罪を浄化する方便』、ダライラマ5世『無量光の成就法』、パンチェンラマ1世(1567-1662)『極楽国土に障害なく往く速疾道』、チャンキャ1世(1642-1715)『『最上国開門』の所縁次第要略』等々がある。
作成者名:中御門敬教

'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po'i rgya cher 'grel pa

書名の日本語訳:『聖行願讃の王』の広釈
サンスクリット原典書名:Ārya-Bhadracaryāpraṇidhānarājaṭīkā
原典の存欠:散逸
著者名: Tib. Shākya'i bshes gnyen、Skt. Śākyamitra
著者名よみ:シャキェー・シェーニェン、シャーキャミトラ
翻訳者名: Shā kya sing ha、dPal brtsegs
成立地:インド
写本等の存欠:刊本
刊本所在:・デルゲ版 東北No.4013, mDo 'grel, Nyi.201a4-234a4
・北京版 大谷No.5514, mDo 'grel, Nyi.231a6-267a7
刊本の奥書刊記:(D.Nyi.234a2)(P.Cho.267a5)kun du bzang po'i mtshan don mthun pa yi / / kun du bzang po'i spyod pa rnams phye ba'i / / dge ba kun du bzang po de yis ni / / 'jig rten kun du bzang po 'dra bar shog / / Shā kya'i bshes gnyen blo ldan gyis / / Shā kya'i gdung rgyud 'phel bya'i phyir / / Kun du bzang po'i spyod pa yi / / rgya cher 'grel pa rab bzang byas / / 'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po'i rgya cher 'grel pa / slob dpon Shā kya'i bshes gnyen gyis mdzad pa rdzogs so / / rGya gar gyi mkhan po Shā kya sing ha dang / zhu chen gyi lo tsā ba ban de dPal brtsegs kyis zhus te gtan la phab pa'o / /
(普賢〔菩薩〕の名義と等しい、諸々の普賢行を開示した、善なるかの普賢〔菩薩〕によって、世間の者が普賢〔菩薩〕と等しくなりますように。知性あるシャーキャミトラが、

釈迦族の流れ（仏法）を発展させるために、『行願讃』の広釈をよく造った。『聖行願王讃』の広釈という、軌範師シャーキャミトラによる御作が完成した。インドの親教師シャーキャシンハと主任翻訳師尊者ペルツェクとが請願して、確定した。）

現代語訳書：中御門敬教「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究（1）～（4）」（『浄土宗学研究』32,34,35,36、2006－2010）

参考文献：月輪賢隆「普賢行願讃の註疏（竜樹・世親・陳那・厳賢）に就て」（『小西・高畠・前田三教授頌寿記念東洋学論叢』、再出『仏典の批判的研究』（百華苑、1971、pp.486-514）、竹村牧男『知の大系』（佼成出版社、1996）、中御門敬教 'Amitābha cult in Bhadracarīpraṇidhānarāja'（『印仏研』52-1、2003）、中御門敬教「往生後論攷」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』、山喜房仏書林、2004）、中御門敬教「普賢十大願、浄土思想、科文を介した＜普賢行願讃＞理解－『四十華厳』巻四十を参照して－」（『浄土宗学研究』30、2004）

解説：〈華厳経〉「入法界品」末尾の〈普賢行願讃〉（以下〈行願讃〉）には、〈華厳経〉の立場（普賢行）に依った浄土教が説かれる。記述は僅かであるが、〈行願讃〉は〈無量寿経〉と〈華厳経〉との接点に位置する興味深い仏典である。本作はこの〈行願讃〉のインド撰述註釈書である。インド撰述の〈行願讃〉釈には二系統がある。一つがナーガールジュナ、ヴァスバンドゥ、ディグナーガ、ゲンサンポの各釈である。もう一方が、このシャーキャミトラ釈である。両系統を比較すると、明らかにシャーキャミトラ釈が内容豊富である。著述分量からは前系統が略釈、後者が広釈ともいえよう。

著者シャーキャミトラ（Skt.Śākyamitra, Tib.Śākya'i bshes gnyen）は8世紀ごろの人。ブッダグヒヤ、アーナンダガルバと共に「三大学匠」の一人とされる。また無上瑜伽タントラの聖者流においては、アールヤデーヴァ、ナーガボーディ、チャンドラキールティらと共に「四大弟子」の一人ともされる。密教家として著名な人物。本作〈行願讃〉釈の他に、〈初会金剛頂経（摂真実）〉に対するインド三大註釈の一つ『コーサラ荘厳』（東北No.2503,大谷No.3326）、本尊瑜伽を主題とする『聖忿怒大力成就法』（東北No.3636,大谷No.4458）、無上瑜伽タントラに分類される『大印入瑜伽ウパデーシャ釈』（東北No.3776,大谷No.4594）、アールヤデーヴァ〈行合集燈〉に対する『行集燈広釈』（東北No.1834,大谷No.2703）の合計5部の著作が現存する。

本作の構造については、冒頭の以下の文に集約される。「この〈聖なる普賢大菩薩の誓願（行願讃）〉は、菩薩の誓願について、信解行［地］と清浄増上意楽地という二つの境位による区分、方便を具えたもの、利徳を具えたもの、果報を具えた修習のやり方と、唱えるだけの利徳を示したものである」。この6項目に随って全体の60偈が区分される。この点は〈行願讃〉チャンキャ釈も同じである。

内容面については顕教一色である。ちなみに当作を除く4作はすべて密教典籍である。〈倶舎論〉を引用するなど、アビダルマ教学を背景にした論述が注意をひく。また先に挙げた分科の各項目が、六波羅蜜ないし十波羅蜜と対応して説かれる。全体を菩薩行の階位として捉える意図が十分に理解できる。親本である『ガンダビューハ』（『華厳経入法界品』）を意識して、偈頌の進行を菩薩行の深度に対応させたのであろう。全体を通して、特に強調される思想特徴はみられない。この点については他の〈行願讃〉諸釈と共通する。

浄土教の記述は、他の〈行願讃〉諸釈と比べて方向は類似しているが、さらに詳しい。vs.57-60を散文的に説明した形で説かれる。vs.57-58では、往生者が行う菩薩行（普賢行）が説かれ、世間が存在する限り衆生救済を行う決意が示されている。v.57では三障を説く〈倶舎論〉「業品」v.96が引用され、臨終時に業と煩悩と異熟の障を滅して極楽往生すると説く。よって往生者は所知障（法執に依る障礙）のみを具えたことになる。v.59では、眷属を伴った阿弥陀仏のマンダラに往生し、現前授記を得ることが説かれる。シャーキャミトラは、不現前授記ではないことを強調する。見仏（報身仏）の前提となる初地歓喜地（cf.〈摂大乗論〉世親釈）が、極楽の境地と重なる点を念頭にした記述かも知れない。v.60では、極楽往生した者は、変化雲（慈悲）と智力（智慧）とによって、穢土の衆生救済を行うことが説かれる。なお、ここでの「変化」とは、三昧と禅定とが作り出した仏菩薩をいう。一方、「智」とは、智慧波羅蜜であると釈す。こうした救済行は瑜伽行派の無住処涅槃を彷彿させる。すなわち慈悲に依って、衆生を救済するために涅槃に止住することはなく、智慧に依って、輪廻に止住し雑染することもないという立場である。本註釈には漢訳が存在しないため、上記の浄土思想が漢訳仏教圏では大きく扱われることがなかった。しかし、往生以後の救済活動が註釈された点は、還相廻向との対比の上でも注目に値しよう。

作成者名：中御門敬教

'Phags pa yon tan bsngags pa dpag tu med pa zhes bya ba

書名の日本語訳：聖なる無量功徳の讃嘆

漢訳書名：『仏説無量功徳陀隣尼経』（『大正蔵』19（No.934））

サンスクリット原典書名：Ārya-Aparimitaguṇānuśaṃsā-nāma-dhāraṇī

原典の存欠：散逸

成立地：インド

写本等の存欠：刊本

刊本所在：

・デルゲ版
　東北No.679, rGyud 'bum, Ba.223a1-5
　東北No.851, gZungs 'dus, E.64a3-7
・北京版
　大谷No.286, rGyud, Ba.2a8-b6
　大谷No.476, rGyud, 'A.62b2-8

刊本の奥書刊記：（D.Ba.223a5) 'Phags pa yon tan bsngags pa dpag tu med pa zhes bya ba'i gzungs rdzogs so / /（『聖なる無量功徳の讃嘆』というダラニが終わりました）

解説：インド大乗仏教では中期以降、三宝ないし仏菩薩への礼拝と、真言ないしダラニそのものと、その読誦の功徳を述べた短い典籍が幾つか成立し、中央アジアを通って広まったが、本著もその一つである。それらのダラニ自体も、アムリタとアミダを関連づけ、甘露の所有者と汚染の浄化者としての阿弥陀へ呼びかけるといった内容のものであり、漢訳『阿弥陀如来根本陀羅尼』を少し簡略化したような形である。また、『無量光随念（sNang ba mtha' yas rjes su dran pa)』を増補したような形にもなっている。漢訳では『阿弥陀仏説呪』（『大正蔵』12（No.369））と『甘露陀羅尼呪』（『大正蔵』21（No.1317））は本文献中のダラニと関係がある。塚本、松永、磯田［1989］p.123には、H. Takaoka, A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal, Vol.1, Nagoya, 1981, DH341に基づき、「Aparimitāstotra」を挙げる。畝部俊也の調査によると、当経と題名が類似しているが、実際は〈宗要経〉本文であることが判明した。

（全訳）

インド語で、Āryāparimitaguṇānuśānsa-nāma-dhāraṇī。チベット語で、'Phags pa yon tan bsngags pa dpag tu

med pa zhes bya ba'i gzungs。三宝に敬礼します。すなわち、na mo radna tra ya ya, na mo bha ga ba te, a mi ta bhu ya, ta thā ga ta ya, a ra hu te sam myak sam buddhā ya, ta dya thā, om a mri te, amri tod bha be, a mri ta bi kran te, a mri te ga mi ni, ga ga na ka ri ti ka re, sarba kle sha ksha am ka ri svā hā. このダラニの儀軌はこうである。1回誦えることで、十万劫にわたって積んだ業障が浄まります。日中ごとに三時に読誦すれば、あらゆる障碍が浄まります。千仏が生み出した善根を得るでしょう。21回読誦すれば、4つの堕罪が浄まります。10万回読誦すれば、聖者弥勒を目にします。20万回読誦すれば、聖者観自在を目にします。30万回読誦すれば、無量光如来を目にします。他の利得も無量のものがあるが、要約して示しました。『聖なる無量功徳の讃嘆』というダラニが終わりました。
作成者名：中御門敬教

Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba'i sgrub thabs

書名の日本語訳：無量寿智というものの成就法
サンスクリット原典書名：Aparimitāyurjñānasādhana
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. Ma gcig grub pa'i rgyal mo、Skt. Ḍākinī-Siddhi-Rāja
著者名よみ：マチク・ドゥペーギェルモ、ダーキニー・シッディ・ラージャ
翻訳者名：Zla ba bzang po、Glan dar ma tshul khrims
成立翻訳年：10c後半－11c前半
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No. 2143, rGyud, Tshi. 216a5-219a3
・北京版　大谷No. 2992, rGyud 'grel, Phi. 257b6-261a8
刊本の奥書刊記：（D.Tshi.219a2-3）Tshe dpag med pa'i sgrub pa'i thabs / / rTsa rgyud le'u 'bum pa dang / / bShad rgyud 'Od zer dra ba la / / brten nas Grub pa'i rgyal mos mdzad / / 'Chi med tshe sgrub 'di brtsams pas / / bdag dang rigs drug sems can rnams / / 'chi med dngos grub thob gyur nas / / tshe dpag med pa thob par shog / / / / rgya gar gyi pa ṇḍi ta Zla ba bzang po dang / bod kyi lo tsā ba Glan dar ma tshul khrims kyis（D. rtsis, P. gyis） bsgyur ba'o / /
（『無量寿の成就法』は、根本十万タントラと釈タントラ『光明網』
に依って、［女性成就者］シッディラージャーがお造りになった。この『無死寿命成就［法］』を著述したことによって、私と六道の衆生が、無死の悉地を獲得して、無量の寿命を獲得しますように。インドの パンディタであるラバ・サンボと、チベットの翻訳官ランダルマ・ツルティムが翻訳した。）
参考文献：小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教仏典」（『仏教大学大学院研究紀要』7、1979）、白崎顕成「Jitāriの『無量寿九尊法』について」（『仏教論叢』24、1980）、中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）、藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・プトンの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：女性成就者ダーキニー・シッディラージャは、本著のほかに、無量寿仏に関する成就法類として、『無量寿智のマンダラ儀軌』『無量寿の護摩の儀軌』『無量寿智の儀軌』を著しているが、いずれも本著と同様に、インド後期密教の無上瑜伽タントラの内容をもっている。詳細は、『無量寿智のマンダラ儀軌』の項目を参照のこと。いずれも『無量寿宗要経』の「無量寿智仏」を承けて、後期密教の内容に合わせ調えたものである。

冒頭には無量寿智仏に対する敬礼が説かれるが、その仏の姿は、一つの顔、二本の手、三つの眼等を具え、手には無死甘露が満ちた赤蓮華色の瓶を持ち、父母が合一した姿と描写されている。またマンダラの五族を記述しているが、これは『金剛頂経』系統の特徴である。しかし、無上瑜伽タントラ（父タントラ系）の『秘密集会タントラ』において、中央の大日如来と東の阿閦如来が交代し、後者がマンダラの主催者になるように、本作においても大日如来と無量寿仏が交代し、無量寿仏がマンダラの主催者として中央に位置し、大日如来が西に移動している。また、生起次第、五甘露、カパーラ（骸骨）などの用語、概念が見られ、病魔と罪障を浄めて、四灌頂を得ることを目的とする。後半部分には心呪の真言（『鼓音声ダラニ』所出）、「無量寿智決定王如来」の真言（『宗要経』所出）を唱えるが、『鼓音声ダラニ』『宗要経』との関係は表面には出てこなくて、後期密教の特徴が貫かれている。

なお、東北No.2143と大谷No.2992には翻訳者として、Zla ba bzang po、Dar ma tshul khrimsを挙げるが、後者はGlan dar ma 'tshul khrimsと奥書きに表記されている。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i dkyil 'khor gyi cho ga

書名の日本語訳：無量寿智のマンダラ儀軌
サンスクリット原典書名：Aparimitāyurjñānamaṇḍalavidhi
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. Ma gcig grub pa'i rgyal mo、Skt. Ḍākinī-Siddhi-Rāja
著者名よみ：マチク・ドゥペーギェルモ、ダーキニー・シッディ・ラージャ
翻訳者名：Zla ba bzang po、Glan dar ma 'tshul khrims
成立翻訳年：10c後半－11c前半
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.2141, rGyud, Tshi.210a3-215b4
・北京版　大谷No.2993, rGyud 'grel, Phi.261a8-269a1
・北京版　大谷No.4887, rGyud 'grel, Zu.204a5-211a5
刊本の奥書刊記：（D.Tshi.215b2-4）cho ga bzang po yongs bzung 'di / / rTsa rgyud le'u bum pa dang / / bShad rgyud 'Od zer dra ba la / / brten nas Grub pa'i rgyal mos mdzad / / de yis dge ba gang yod pas / / rigs drug smes can ma lus pa / / tshe dpag med pa'i lam zhugs nas / / de yis 'bras bu myur thob shog / / / / bCom ldan 'das mgon po tshe dpag tu med pa'i dkyil 'khor gyi cho ga bzang po yongs bzung zhes bya ba rdzogs so / / / rgya gar gyi paṇ ḍi ta Zla ba bzang po dang / bod kyi lo tsā ba Glan dar ma 'tshul khrims kyis bsgyur zhing zhus te dag par byas so / /
（優れた儀軌を包括したこれは、根本十万タントラと釈タントラ『光明網』に依って、［女性成就者］シッディラージャが造られた。これによって善が満ちるので、六道の衆生全てが、無量寿の道に入って、これによって果を速やかに得ますように。『世尊教主無量寿のマンダラの優れた儀軌を包括したもの』といわれるものが終わりました。イン

ドのパンディタであるラバ・サンボとチベットの翻訳官ランダルマ・ツルティムとが翻訳し、請願して、浄書した。）
参考文献：小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教仏典」（『仏教大学大学院研究紀要』7、1979）、白崎顕成「Jitaariの『無量寿九尊法』について」（『仏教論叢』24、1980）、中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）、藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・プトンの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：後期のインド大乗仏教に始まり、チベットでも流行した阿弥陀仏成就法は、ジターリ流と、女性成就者ダーキニー・シッディラージャ（マチク）流の２つである。チベットでの四部タントラの分類によれば、ジターリ流が所作タントラ（いわゆる「雑密」に分類される）に所属するのに対して、ダーキニー・シッディラージャ流の阿弥陀仏に関する関連典籍は「無上瑜伽タントラ」に分類される内容をもっている。他の同一著者による『無量寿智というもの成就法』、『無量寿の護摩の儀軌』、『無量寿智の成就法』も同様に分類される。いずれも題名から分かるように、『無量寿宗要経』の無量寿智仏を後期密教の枠組みにおいて発展させたものである。
　ダーキニー・シッディラージャ（マチク）は不明な点の多い女性成就者である。彼女の別の著作『馬頭成就法』（東北No.2142）には、無量光仏により彼女が授記を受けた様子が記述されている。年代としては、弟子のティプ・サンガクドンポ（年代不詳）、その弟子レーチュン・ドルジェタクパ（1083/84-1084）、ミラレパ（1040-1123）の生没年代からして、10世紀の後半から11世紀前半の人ということになろうか。
　これらの関連典籍は、ミラレパの弟子レーチュンパがインドに行って受法し、チベットに持ち帰り、密教重視のカギュ派に伝えられたが、その中でもジクテン・ゴンポのように、顕教による基礎付けを行う人も出た。その後、ゲルク派にも広まった（なおハルハ・タムチク・ドルジェ（1781-1855）『ダーキニー・シッディラージャ流の無量寿一尊、一瓶の門から寿命灌頂の作法を要略して提示したもの」には、レーチュンパ伝来の行法として無量寿仏と馬頭との双運が知られているという）。
　本著は偈頌形式になっている。五族に関する記述から『金剛頂経』の系統にある上に、生起・究竟の二次第、護摩、五甘露、滴、父母が合一した大楽など後期密教の特徴が顕著であり、実践のためには後期密教に関する熟達が要求される。とはいえ、通常の大乗仏教の教義やそれに関する祈願も見られる。上記のような性的要素を含んだヨーガは一般的に象徴として解釈して、世間一般や僧侶のあり方に反しないように行われたし、甘露が満ちた瓶の使用、長寿に関する祈願、光明による罪障の浄化などは、無量寿仏を観想する行法の特徴として、チベットで広く継承された。そこでは「ダーキニー・シッディラージャ流」といわれていても、顕教的な観想が全面的に押し出された著作も見られる。また、同著者の『無量寿智の成就法』（東北No.2145）も本著ときわめて類似した内容となっている。
　なお、東北No.2141と大谷No.2993, 4887には翻訳者として、Zla ba bzang po、Dar ma tshul khrimsを挙げるが、後者はGlan dar ma 'tshul khrimsと奥書きに表記されている。
作成者名：中御門敬教

Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs

書名の日本語訳：無量寿智の成就法
サンスクリット原典書名：Aparimitāyurjñānasādhana
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. Ma gcig grub pa'i rgyal mo、Skt. Ḍākinī-Siddhi-Rāja
著者名よみ：マチク・ドゥペーギェルモ、ダーキニー・シッディ・ラージャ
成立翻訳年：10c後半－11c前半
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.2145, rGyud, Tshi. 220a5-223a3
・北京版　大谷No.2990, rGyud 'grel, Phi. 241b8-243b7
・北京版　大谷No.4886, rGyud 'grel, Zu. 200b4-204a5
刊本の奥書刊記：（P.Tshi.223a2-3）bCom ldan 'das tshe dpag tu med pa zhes bya ba'i sgrub thabs / / Ye shes kyi mkha' 'gro ma Grub pa'i rgyal mo mdzad pa rdzogs so / /
（『世尊無量寿智という成就法』という、智空行母ドゥッペーギェルモの御作が終わりました。）
参考文献：小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教仏典」（『仏教大学大学院研究紀要』7、1979）、白崎顕成「Jitāriの『無量寿九尊法』について」（『仏教論叢』24、1980）、中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）、藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・プトンの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：女性成就者ダーキニー・シッディラージャは、本著のほかに、無量寿仏に関する成就法類として、『無量寿智のマンダラ儀軌』『無量寿智というものの成就法』『無量寿智の護摩の儀軌』を著しているが、いずれも本著と同様に、インド後期密教の無上瑜伽タントラの内容をもっており、いずれも『無量寿宗要経』の「無量寿智仏」を承けて、後期密教の内容として提示したものである。
　本著はなかでも、『無量寿智のマンダラ儀軌』（東北No.2141）という典籍と極めて内容が類似しているので、具体的解説はそちらを参照のこと。
　なお、東北No.2145と大谷No.2990, 4886では翻訳者名を挙げていない。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i cho ga

書名の日本語訳：無量寿智儀軌
サンスクリット原典書名：Aparimitāyurjñānavidhi
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. dGra las rnam par rgyal ba、Skt. Jitāri
著者名よみ：ダレーナムパルギェルワ、ジターリ
翻訳者名：Śrīmañju、lCe dga' ba'i dpal
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.2700, rGyud, Nu. 66b4-69a4
・北京版　大谷No.3524, rGyud 'grel, Nyu. 82b2-84a6
刊本の奥書刊記：（D.Nu.67b3）slob dpon Dzai tā ri dgra las rnam par rgyal bas / bram ze Nam mkha'i dbyings

kyi bu'i ched du mdzad pa rdzogs so / / rgya gar gyi mkhan po Shrī ma ñju dang / lo tsā ba lCe dga' ba'i dpal gyis bsgyur ba'o / /
（軌範師ジャイーターリ（Dzai tā ri）－敵から打ち勝った者－が、バラモンのアーカーシャ・ダートゥ（Skt. Ākāśadhātu）＊の息子のためにお造りなったものが完成した。インドの和上のシュリー・マンジュ（Śrīmañju）と翻訳師チェガウェー・ペル（lCe dga' ba'i dpal）が翻訳した。）
＊P. Nam mkha'i dbyang, D. Nam mkha'i dbyings
北京版ではSkt. Ākāśaghoṣa、デルゲ版ではSkt. Ākāṣadhātuとなる。
現代語訳書：藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
参考文献：高田仁覚『インド・チベット　真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）、白崎顕成「Jitāriの『無量寿九尊法』について」（『仏教論叢』24、1980）、白崎顕成「Jitāri－人と思想－」（『木村武夫教授古稀記念　僧伝の研究』、永田文昌堂、1981）、中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
解説：著者は、西暦960-1040頃に活躍した後期大乗仏教の学者・行者であり、中観、論理学、菩薩戒、密教に関する著作を遺した。本著者は、無量寿仏に関する三部の著作（『無量寿讃』『無量寿智成就法』『無量寿智儀軌』）があり、この書はその一部をなす。本著は、三部の著作のなかで最も大きく、『無量寿智成就法』に説かれる個別の内容や作法についてより詳細な規定を示している。関連内容は『無量寿讃』『無量寿智成就法』の項目を参照のこと。
　修行の場に二つの〈無量寿経〉を安置するように指示があり、それは後代のダツェパの儀軌によると『鼓音声ダラニ』や『宗要経』である。そして本著作は両経のダラニを用いて、無量寿智仏を金剛頂系のマンダラの中心に位置づけ、無量寿九仏の形に組織しており、同著者『無量寿讃』はこれら九仏を讃えるものである。作法の詳細については、『蘇悉地経』に説かれる忿怒明王真言や、密教の作壇法を通して死主を滅する延命祈願が説かれている。
　奥書には、あるバラモンの息子の延命という特定の目的のために著作されたことが記されており、一部のバラモンによる密教の受容等、当時の宗教事情の一端が垣間見られる。
　サンスクリット原典は未発見。チベット訳が現存する。翻訳者はデルゲ版では「Śrīmañju、lCe dga' ba'i dpal」であり、北京版では「Śrīmañju、dGa' ba'i dpal」となっている。「忿怒明王真言」（別名、忿怒甘露軍荼利真言）とは、蘇悉地羯囉経（『大正蔵』18（No.893） p. 616b）に見られる真言である。
　なお、プトン（Bu ston, 1290-1364）の高弟ダツェパ（sGra tshad pa, 1318-1388）の『無量寿無死鼓音のマンダラ儀軌－寿命の吉祥と智慧の如意成就－』（Tshe dpag med 'chi med rnga sgra'i dkyil cho ga Tshe dpal ye shes bsam 'grub）は、ジターリの三部の著作を総合したものとなっている。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag tu med pa'i sbyin sreg gi cho ga

書名の日本語訳：無量寿の護摩の儀軌
サンスクリット原典書名：Aparimitāyurhomavidhi
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. Ma gcig grub pa'i rgyal mo、Skt. Ḍākinī-Siddhi-Rāja
著者名よみ：マチク・ドゥペーギェルモ、ダーキニー・シッディ・ラージャ
翻訳者名：Wa la tsa ndra bla ma、Glan dar ma tshul khrims
成立翻訳年：10c後半－11c前半
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.2144, rGyud, Tshi. 219a4-220a5
・北京版　大谷No.2994, rGyud 'grel, Zu. 269a1-270a8
刊本の奥書刊記：（D.Tshi.220a4-5）sbyin sreg las kyi 'bras 'byin 'di / / mKha' 'gro Grub pa'i rgyal mo brtsams / / dge 'di yis 'gro ba kun / / tshe dpag med pa red 'gyur shog / / / / rgya gar gyi mKhan po wa la tsa ndra bla ma dang / / lo tsā ba Glan dar ma tshul khrims kyis bsgyur ba'o / /
（護摩事業の果を与えるこれは、ダーキニー・シッディラージャが著述した。この善によって、一切衆生が無量の寿命を完成しますように。インドの賢者バラチャンドラ・ラマと翻訳官ランダルマ・ツルティムとが翻訳した。）
参考文献：小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教仏典」（『仏教大学大学院研究紀要』7、1979）、白崎顕成「Jitāriの『無量寿九尊法』について」（『仏教論叢』24、1980）、中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）、藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・プトンの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：女性成就者ダーキニー・シッディラージャは、本著のほかに、無量寿仏に関する成就法類として、『無量寿智のマンダラ儀軌』『無量寿智というものの成就法』『無量寿智の儀軌』『無量寿智の成就法』を著しているが、いずれも本著と同様に、インド後期密教の無上瑜伽タントラの内容をもっている。詳細は、『無量寿智のマンダラ儀軌』の項目を参照のこと。いずれも『無量寿宗要経』の「無量寿智仏」を承けて、後期密教の内容として提示したものである。
　本著は偈頌形式で説かれており、儀軌書としては例外的な形態である。冒頭に、「護摩を行わないと果報は与えられない。護摩によって諸々の事業が成就する。事業の最勝なるものが護摩である。息災と増益と敬愛と降伏である」などと述べている。末尾には全体を総括して「第一、世間のアグニ神を供養する。第二、マンダラ［の諸尊］を喜ばせ満足させる。第三、アグニ神に［供物を］報酬し献上する。それから智慧薩埵がお来しになり、三昧耶薩埵をおさめとる。火が静まり、灰を川に捨てる。護摩事業の果報を与える」と結んでいる。内容として直接的には無量寿仏の記述が出てこないが、それは、本著が他の無量寿仏の儀軌や成就法に依存しており、特に現世での効験を追求するものだからではないかと思われる。
　なお、東北No.2144と大谷No.2994には翻訳者として、Dar ma tshul khrimsを挙げるが、後者の奥書ではGlan dar ma 'tshul khrimsと表記される。またもう一人の翻訳者として、東北No.2144ではBalacandraを挙げるが、大谷No.2994ではBalacaṇḍaを挙げている。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med la bstod pa

書名の日本語訳：無量寿讃
サンスクリット原典書名：Aparimitāyuḥstotra
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. dGra las rnam par rgyal ba、Skt. Jitāri
著者名よみ：ダレーナムパルギェルワ、ジターリ
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.2698, rGyud, Nu. 66b3-67a3
・北京版　大谷No.3522, rGyud 'grel, Nyu. 81a5-81b6
刊本の奥書刊記：（D.Nu.67a2）byang chub sems dpa' Dze tā ri dgra las rnam par rgyal bas mdzad pa'o / / 'di'i brgyud pa ni / Tshe dpag med / Grub pa brnyes pa'i sNying po zhabs / / Dze tā ri dgra las rnam par rgyal ba / / rDo rje gdan pa che chung gnyis / / Ba ri lo tsā ba / mChims brtson 'grus Seng ge / / rGya nag Phug pa / dBus pa Sangs rgyas 'bum / Bla ma dGe sdings pa / Bla ma bSam gtan bzang po'o / /
（菩薩ジェーターリ（Dze tā ri）－敵から打ち勝った者－がお作りになった。これの伝承は、アミターユス（Tshe dpag med）、成就を得たガルバパーダ（sNying po zhabs）、ジェーターリ（Dze tā ri）－敵から打ち勝った者－、大小二人のヴァジュラーサナ（rDo rje gdan pa）、バリ翻訳師（Ba ri lo tsā ba）、チィム・ツォンドゥー・センゲ（mChims Brtson 'gros Seng ge）、ギャナク・プクパ（rGya nag Phug pa）、ウパ・サンギェーブム（dBus pa Sangs rgyas 'bum）、ラマ・ゲディンパ（Bla ma dGe sdings pa）、ラマ・サムテンサンポ（Bla ma bSam gtan bzang po）である。）
現代語訳書：藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
参考文献：高田仁覚『インド・チベット　真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）、白崎顕成「Jitāriの『無量寿九尊法』について」（『仏教論叢』24、1980）、白崎顕成「Jitāri, －人と思想－」（『木村武夫教授古稀記念　僧伝の研究』、永田文昌堂、1981）、中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
解説：著者は、西暦960-1040年頃に活躍した後期大乗仏教の学者・行者であり、中観、論理学、菩薩戒、密教に関する著作を遺した。本著者は、無量寿仏に関する三部の著作（『無量寿讃』『無量寿智成就法』『無量寿智儀軌』）があり、この書はその一部をなす。『無量寿宗要経』の無量寿智仏を継承しており、『無量寿智儀軌』にはマンダラにおける無量寿九尊が配置されているが、その配置は『無量寿讃』のものと一致するし、後代のジターリ流を継承したチベットでの儀軌書にもこの『無量寿讃』が用いられている。関連内容については『無量寿智成就法』『無量寿智儀軌』の項目をも参照。特に大学者プトンの弟子ダツェパ（1318-1388）は、この法類を『鼓音声陀羅尼経』と密接に結び付けている。
　具体的な形式は、4句ごとに無量寿仏の功徳を讃えては礼拝を繰り返すことが10回なされる。内容は、仏部、金剛部、宝部、蓮華部といった基本的な五族と四維に合計九つの無量寿仏、すなわち中央の大日無量寿、東の金剛無量寿、南の宝生無量寿、西の蓮華無量寿、北の業無量寿、東北の普見無量寿、南東に功徳無量寿、南西に智慧無量寿、北西に不動無量寿が配置されて、それら九尊を順次讃えた後、最後を「輪廻の一切衆生が、あなたの名号のみを保ったのに対して、寿命と智慧を広大になさる無量寿に敬礼します」という偈で結んでおり、この性格付けは『無量寿宗要経』での無量寿智仏と一致する。五族の配置や、金剛薩埵や、五智などの特徴は、『金剛頂タントラ』の影響下にあるが、チベットでの四部タントラの分類では「所作タントラ」（東アジアでの分類では「雑密」に相当する）に所属し、蓮華部の正尊を明かすものとされる。サンスクリット原典の存在は知られていない。チベット訳のみ現存する。目録類では翻訳者の記述を欠いている。
　奥書には、この『無量寿讃』の伝承系譜が掲載されている。それに拠ると、当典籍は無量寿仏からガルバパーダ、ジターリへと伝承が継承され、著述された。ガルバパーダは、ターラナータの仏教史によると、ジターリの父である。また、バリ翻訳師以降、チベットの仏教者が出ている点から、この奥書の年代が推測できる。
　これらの儀軌は、バリ翻訳師を通じてチベットの当初サキャ派に伝承され、女性成就者ダーキニー・シッディラージャ（マチク）流から当初カギュ派に伝えられた「無上ヨーガ」所属の無量寿仏成就法とともに、無量寿仏の二大成就法の一つとなった。チベットではジターリ流の上に『無量寿経』の素材を取り入れて、幾つもの形の儀軌書が成立し、そこでは『本讃』も用いられ、文言が少し変わった事例も見られる。成就法文献として有名なものの一つに、ツォンカパが文殊菩薩から直接伝授された「文殊流の無量寿五尊」という法類があるが、そこでは中央に仏無量寿、東に金剛無量寿、南に宝生無量寿、西に蓮華無量寿、北に事業無量寿の五仏となり、その内容も「無上ヨーガ・タントラ」に分類されるものになる。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med la bstod pa

書名の日本語訳：無量寿讃
原典の存欠：散逸
成立地：不明
写本等の存欠：刊本
刊本所在：『蔵伝仏教礼賛祈願文 rGyun 'don bstod smon phyogs bsgrigs 』（中国蔵語系高級仏学院研究室／中国仏教文化研究所編、中国民族音像出版社、香港、1997）p.236
解説：無量寿仏に対する短い讃であり、常用経典として用いられたり、サキャ派・ゲルク派の異なった系統の無量寿仏成就法文献に題名なしで引用されるほど有名なものであるが、本来の出典や題名は未詳である。無量寿を時ならぬ横死を破る存在とする記述は、直接的には〈無量寿宗要経〉に見られる。
（全訳）
　「世間の導師無量寿は、時ならぬ［横］死を残らず破られる。寄る辺なき苦しんだ者たちの帰依処、仏無量寿に帰命する。」
作成者名：藤仲孝司

Sangs rgyas rjes su dran pa bla na med pa bsgom pa

書名の日本語訳：仏随念無上修習
サンスクリット原典書名：Buddhānusmṛtyanuttarabhāvanā
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. Blo 'gros chen po、Skt. Mahāmati
著者名よみ：ロドゥーチェンポ、マハーマティ
翻訳者名：Vi na ya ca ndra、Chos kyi shes rab

成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.3923, dBu ma, Ngi.77b3-79b7
・北京版　大谷No.5318, dBu ma, A.84a8-87a2
刊本の奥書刊記：(D.Ngi.79b6) Sang rgyas rjes su dran pa bla na med pa mdo'i rjes su 'gro ba zhes bya ba dkyil 'khor chen po'i slob dpon Ma hā ma ti'i zhal snga nas mdzad pa rdzogs so / / / Ā cā rya Vi na ya ca ndra dang / lo cā ba dge slong Chos kyi shes rab kyis bsgyur cing zhus te gdan la phab pa'o / /
（無上の仏随念・経に随順するものといわれるもの、大マンダラの軌範師マハーマティ御前の著作は完了した。軌範師ヴィナヤチャンドラと翻訳師比丘チューキ・シェーラプが翻訳し、校訂し、確定した。）
参考文献：吉崎一美「『聖仏随念』（P.3964）の諸問題　－Sādhanamālāに関連して－」（『印仏研』28-2、1980）、法尊「随念三宝経浅説」（『大蔵経補編』7、1985）
解説：中期大乗の教義を背景に仏随念（念仏）の実践方法を簡潔に説いた著作である。本著者 Mahāmatiないしそのチベット語訳 Blo 'gros chen po の著作には、ほかに密教の『大秘密歓喜滴』（D No.1345）と『荼毘の儀軌』（D No.1328）、『親友書簡の広釈』（D No.4190）がある。
　冒頭の著作目的として、「二の闇を摧破したいと欲し、正しい現れが生ずるのを欲する義利の成就するために、私は仏随念無上を説こう」という。まず行者は起床して清浄を念ずる真言を三唱し、自己の身体を分析し、究極的に成立していないことを修習する。同じく他の衆生と器世間の不成立をも修習する。同じく語の不成立、心の不成立を観察して、刹那の不成立から厭離、一切法空を修習する。空性を念ずる真言を適宜唱えて、真実に無知な凡夫を利益することを思念し、自己を本尊の身として立ち上げて、衆生利益を行い、朝昼晩に繰り返し仏を随念する。これには食物、時、威儀、星宿の決定は無い。友を欲しがらず、世間八法に捕らわれず、仏随念に努めるべきであるという。さらに仏を色身ではなく空、無生無滅なる法身として見るべきであるという趣旨の『入楞伽経』『金剛般若経』『智光明荘厳経』『八千頌般若経』を教証として引用する。その仏に対して帰依し、自己の身語意が無自性だと修習するなら、法身を随念する。さらに、本尊の慢をもつ者は色身を念ずべきだという。さらに自己の身語意の行動がよく調御されるべきであることを説いて、この随念と行に赴く者は間もなく最勝の具足を得ると述べ、終わりに「あらゆる者が無上仏随念をいつも離れないでそれに努めるように！」と祈念している。
作成者名：藤仲孝司

Sangs rgyas rjes su dran pa'i 'grel pa

書名の日本語訳：仏随念註
サンスクリット原典書名：Buddhānusmṛtivṛitti
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. Thogs med、Skt. Asaṅga
著者名よみ：トクメー、アサンガ
翻訳者名：A dzi ta shrī bha dra、Shā ka 'od
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.3982, mDo 'grel, Ngi. 11b5-15a6
・北京版　大谷No.5482, mDo tshogs 'grel pa, Ngi. 14a1-18b1
刊本の奥書刊記：（D.Ngi,15a6）slob dpon Thogs med kyis mdzad pa rdzogs so / / / / rGya gar gyi mkhan po A dzi ta shrī bha dra dang / Bod kyi lo tsā ba dge slong Shā ka 'od kyis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa / /
（軌範師無著がお造りになったものが終わった。インドの和上アジタシュリーバドラと、チベットの翻訳官、比丘であるシャーキャ・ウーが翻訳し、校訂し、確定した。）
現代語訳書：中御門敬教「無着作『仏随念註』と『法随念註』和訳研究」（『仏教大学総合研究所紀要』17、2010）
参考文献：藤田宏達「仏の称号　十号論」（『玉城康四郎博士還暦記念論集　仏の研究』所収、春秋社、1977）、吉崎一美「『聖仏随念』（P.3964）の諸問題　－Sādhanamālāに関連して－」（『印仏研』28-2、1980）、松田和信「Vasubandhuにおける三帰依の規定とその応用」（『仏教学セミナー』39、1984）、法尊「随念三宝経浅説」（『大蔵経補編』7、1985）、本庄良文『梵文和訳　決定義経・註』（1989）、合田秀行「無著におけるBuddhānusmṛtiについて」（『印仏研』44-1、1995）、合田秀行「無著におけるSaṅgānusmṛtiについて」（『精神科学』36、1997）、合田秀行「無著におけるDharmānusmṛtiについて」（『印仏研』46-2、1998）、中御門敬教「世親作『仏随念広註』和訳研究－前半部分・仏十号に基づく三乗共通の念仏観－」（『仏教大学総合研究所紀要』15、2008）、藤仲孝司「世親作『仏随念広註』和訳研究－後半部分・大乗特有の念仏観－」（『仏教大学総合研究所紀要』15、2008）
解説：仏法僧の三宝随念は数多くの仏典に説かれているが
　インドからチベットでは読誦経典として『三宝随念経』が用いられた。この三部の小さな経『聖仏随念経』『聖法随念経』『聖僧随念経』に対して、唯識瑜伽行派の祖師無著（アサンガ）は『仏随念註』、『法随念註』（東北No.3983、北京No.5483）、『僧随念註』（東北No.3984、北京No.5484）を著した。彼の弟、世親（ヴァスバンドゥ）は、『聖仏随念経』についてのみ『広註』を著している。天親（世親）著『浄土論』は阿弥陀仏に関する仏随念を説いて東アジアの浄土教に大きな影響を与えたが、インド撰述である本論と世親著『広註』は通仏教的な解説を行いながら、大乗の立場を少しずつ示している。両著作の内容の比較、研究は今後の課題である。
　『聖仏随念経』は、帰依と信仰の対象としての仏十号すなわち世尊・如来・阿羅漢・正等覚者・明行足・善逝・世間解・無上調御丈夫・天人師・仏世尊を列挙し、功徳を少し説明しているが、本論はその仏十号を解説している。ちなみに〈無量寿経〉の十念説も仏十号を念ずることである可能性がある。
　具体的には、十号は大功徳の観点から諸如来への浄信を生じさせるためのものとされ、第一の「世尊」により共通の仏随念を説き、第二の「如来」により最高の有情利益を行う方便を説くことから諸菩薩と共通しないものとされている。第一はさらに、世尊から天人師までの9句により順次、繋縛を断ったことによる教主の円満を説くという。最後の「仏世尊」は上記の9句すべてにより諸仏世尊の功徳の大性を説くためであるといい、梵語の文法解釈にも言及する。
　本論は『法随念註』『僧随念註』とともに、先行文献として、有部のアビダルマ文献である舎利子説『阿毘達磨集異門足論』や大目乾連造『阿毘達磨法蘊足論』の「四預流支に関する四証浄」の所説を承けており、『倶舎論』に断片的な説明しか見られない三宝について集中的に議論している。用語、概念についても「諸如来」「諸菩薩」に言及し、種姓については不定種姓、障の断については煩悩障と所知障の断など唯識瑜伽行派特有のものを用いている。これは唯識瑜伽行派の一般的な特徴でもあり、本著を無着の真作と見なすことに矛盾はない。
作成者名：中御門敬教

Sangs rgyas rjes su dran pa'i rgya cher 'grel pa

書名の日本語訳：仏随念広註
サンスクリット原典書名：Buddhānusmṛtiṭīkā
原典の存欠：散逸
著者名：Tib. dByig gnyen、Skt. Vasubandhu
著者名よみ：ディグニエン、ヴァスバンドゥ
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：
・デルゲ版
　東北No.3987, mDo 'grel, Ngi. 55b3-63b5
・北京版
　大谷No.5487, mDo tshogs 'grel pa, Ngi. 69a6-79a8
刊本の奥書刊記：（D.Ngi,63b4）slob dpon dByig gnyen gyis mdzad pa rdzogs so / /
（軌範師世親がお造りになったものが完了した。）
現代語訳書：中御門敬教「世親作『仏随念広註』和訳研究－前半部分・仏十号に基づく三乗共通の念仏観－」（『仏教大学総合研究所紀要』15、2008）、藤仲孝司「世親作『仏随念広註』和訳研究－後半部分・大乗特有の念仏観－」（『仏教大学総合研究所紀要』15、2008）
参考文献：藤田宏達「仏の称号　十号論」（『玉城康四郎博士還暦記念論集　仏の研究』所収、春秋社、1977）、吉崎一美「『聖仏随念』（P.3964）の諸問題　－Sādhanamālāに関連して－」（『印仏研』28-2、1980）、松田和信「Vasubandhuにおける三帰依の規定とその応用」（『仏教学セミナー』39、1984）、法尊「随念三宝経浅説」（『大蔵経補編』7、1985）、本庄良文『梵文和訳　決定義経・註』（1989）、合田秀行「無著におけるBuddhānusmṛtiについて」（『印仏研』44-1、1995）、合田秀行「無著におけるSaṅgānusmṛtiについて」（『精神科学』36、1997）、合田秀行「無著におけるDharmānusmṛtiについて」（『印仏研』46-2、1998）、中御門敬教「無着作『仏随念註』と『法随念註』和訳研究」（『仏教大学総合研究所紀要』17、2010）、藤仲孝司「無着作『僧随念註』和訳研究」（『仏教大学総合研究所紀要』17、2010）
解説：仏法僧の三宝随念は数多くの仏典に説かれているが　インド以来読誦経典として『三宝随念経』が用いられた。この三部の小さな経『聖仏随念経』『聖法随念経』『聖僧随念経』に対して、唯識瑜伽行派の祖師無著（アサンガ）は『仏随念註』『法随念註』『僧随念註』を著した。そのうち『仏随念』に関してのみに対して、その弟、世親（ヴァスバンドゥ）が解説し、仏随念（念仏）を論じたのが本著である。天親（世親）による『浄土論』での阿弥陀仏とその国土への随念はシナ、日本の浄土教に大きな影響を与えたが、本論では同著者が三宝や帰依に関して通仏教的な解説を行っていることが注目される。
　『聖仏随念経』は、帰依と信仰の対象としての仏十号すなわち世尊・如来・阿羅漢・正等覚者・明行足・善逝・世間解・無上調御丈夫・天人師・仏世尊を挙げ、その功徳を短く説明しているが、本著は冒頭に、１）如来の大功徳を通じて浄信を起こすための共通の仏随念、２）永久に有情を利益する方便を説くための諸菩薩特有の仏随念、と二項目を立てている。第一の項目は、上記の仏十号を九句により解説する（ちなみに〈無量寿経〉の十念説も仏十号を念ずることである可能性がある）。ここは説示性と実践性を定義とした教主の円満を解明するという形式であるが、内容そのものは無着の『仏随念註』と類似しており、世親著でも『倶舎論』になく『釈軌論』の論述と共通している。第二の項目は、『聖仏随念経』での功徳の叙述を説明しているが、ここには五姓各別説、三身説、無住涅槃など唯識瑜伽行派特有の大乗の教義が見られるし、大乗経典『無尽意所説経』も引用されている。教理からみて著者が世親であることに矛盾はないが、極楽浄土、阿弥陀仏、往生などへの言及はない。内容的には仏の特性、十号、随念に言及する『瑜伽師地論』「菩薩地」、『摂大乗論』「彼果智分」等と比較研究が必要であろう。
作成者名：中御門敬教

無題（No Title）

原典の存欠：散逸
成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：
・北京版
　大谷No.359, rGyud , Ba.243b1-5
　大谷No.490, rGyud , 'A.85b6-86a2
刊本の奥書刊記：なし
解説：『影印北京版西蔵大蔵経目録』（p.52）には「No.359［佚題（No　Title）］［'Chi med rnga sgra'i gzungs］［無滅鼓音陀羅尼］」とある。しかし、真言には大日如来が登場するように、「鼓音声ダラニ」と直接の関係はないようである。この紛らわしい表記の根拠は、『北京版大蔵経目録』（bKa' 'gyur dKar chag Tibetan）に「'Chi med sgra'i gzungs」（6b8）とあることに由来すると思われる。
（全訳）
　三宝に敬礼する。如来・応供・等正覚・大日如来王に敬礼する。大悲を具えた菩薩大士・虚空蔵に敬礼する。
　tadya thā / ba dzra ma bu / ba dzra ma bu bud dha dzre / ba dzra ma　bu bud dha dzre / shū ṇya ta pra bhe she / bai ro tsa na ga rbhe / ba nytse? de ya / a ba bo dha na svāhā / /
　儀軌は、常に念誦すれば、智慧波羅蜜への住を得るでしょう。一切の魔と、一切の敵と、一切のガネーシャは傷つけないでしょう。臨終時に、聖者無量光を見るでしょう。同様に一切の如来と、一切の菩薩を見るでしょう。誓願した通りに生まれるでしょう。［以上で］完了した。
作成者名：中御門敬教

無題（No Title）

成立地：インド
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・北京版　大谷No.360, rGyud , Ba.243b5-6
刊本の奥書刊記：なし
参考文献：池田澄達「梵本アパリミターユル陀羅尼経の校合」（『宗教研究』1-3、1916）
解説：『影印北京版西蔵大蔵経目録』（p.52）には「No.360［佚題（No Title）］［Tshe dpag med kyi yang snying］［無量寿近心呪］」とある。この表記の根拠は、『北京版大蔵経目録』（bKa' 'gyur dKar chag Tibetan）に「Tshe dpag med kyi yang snying」（6b8）とあることに辿れる。「yang snying」は「心呪の中の心呪」といった意味である。末尾の真言は〈宗要経〉（cf.池田［1916］p.552 etc.）の中で繰り返し用いられる真言の一部である。阿弥陀をアムリタ（甘露、無死）と関連づける傾向は、〈鼓音声ダラニ経〉、漢訳『阿弥陀如来根本陀羅尼』などに見られるが、〈宗要経〉には横死を滅するものとしての無量寿智仏が明確化される。これは後に、インド、チベットでの阿弥陀仏と同一視され、様々な儀軌書が成立したし、それらの中ではこの真言もたびたび用いられた。
（全訳）

「oṃ ba dzra a yu? she? hūṃ a 。
この聖なる無量寿の心呪を常に唱えたり、あるいは、秘密真言の実践者が灌頂した時、寿命を改めるでしょう。
oṃ pu ṇye pu ṇye ma hā pu ṇye / a pā ra mi ta yur pu ṇye dzñā na saṃ bha ro pa tsi te svāhā /」
作成者名：中御門敬教

II　チベット撰述

bKa' rdzogs pa chen po sangs rgyas dgongs 'dus 'Gro ba kun bsgrol las / bDe chen zhing gi smon lam Thar pa'i sgo 'byed

書名の日本語訳：『仏説である大究竟の仏の密意の集－一切衆生の済度－』より『極楽世界の誓願－解脱開門－』
著者名：不明
成立翻訳年：14c後半?
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本の奥書刊記：なし
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社、1994）pp.166-171
解説：『密意集』(dGongs 'dus)は、題名に「大究竟（ゾクチェン）」とあるように、ニンマ派の根本経典の一つであり、アヌ・ヨーガの部類に分類されるものであり、いくつかの注釈文献も造られている。サンギェーリンパ（Sangs rgyas gling pa. 1340- ？)の発見したパドマサムバヴァの埋蔵経であり、マハー・ヨーガ、アヌ・ヨーガ、アティ・ヨーガの構造を体系的に説いたものである。カルマ・カギュ派に継承されて、大きな影響を与えた。なお平松敏雄『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』3、1982、p.130）には、Peking No.452 と同じものではないかと推定されている。本書は、その『密意集dGongs 'dus』より、一節を抽出したものかと思われるが、出典は未確認である。
本作の前半では、〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉所説の極楽国土の荘厳・特徴や、無量光仏と眷属である観音・勢至を讃えて、極楽往生を祈願する願文が繰り返される。
次に一転して後期密教の要素が加味される。極楽国土が大楽国土と呼ばれ、その場所の特徴を讃えて往生を祈願する願文が繰り返される。
次に臨終から中有を経て往生する仕方、仏道の成就や自利利他の完成をかねた誓願文が繰り返されている。そして最後に、「昼夜六時に誓願をたてれば、大楽国土に生まれるであろう」と結び、真言を出している。
作成者名：藤仲孝司

bKra shis tshe ring mched lnga

書名の日本語訳：吉祥長寿五姉妹
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 1770, Folios 469a3-476a5
刊本の奥書刊記：（475b2）sgrub thabs Rin 'byung nas bshad ba'i lha tshogs rnams kyi rjes gnang bskur tshul gyi lhan thabs 'di lta bgu zhig dgos zhes lung rigs smra pa'i dge ba'i bshes gnyan dKa' chen Ye shes bsam gtan / dKa' chen Blo bzang skal bzang / dKa' chen Blo bzang don grub / dKa' chen Blo bzang yon tan / dKa' chen sKu skyo dge 'dun grags pa / dKa' chen chos mdzad? ye shes bstan 'dzin bcas mtshan zhabs pa rnams kyis bskul ba ltar / rtsa ba'i sgrub thabs kyi dgongs pa dang mthun zhing bklags lung gi dpe gzhan du 'tshol dgos rigs/ kha bskang / phyag len mthong ba brgyud pas kyang brgyan te blo dman bdag gis kyang rtogs sla ba'i ched dang / chos tshul bzhin du bsgrub par 'dod dag dag gis/ dngos grub stsol ba'i yi dam dang bar gcod bsrung ba'i chos skyong re nges par bsten dgos shing / de dag gi bsnyen bsgrub la brten nas 'dod don bsgrub pa la yang dbang dang lha'i thugs rgyud gyi ye shes rang rgyud la skye ba'i sna 'dren byed rig gtad dam rjes gnang/ sgrub thabs kyi lung bcas＋＋nges par dgos shing / de yang gdul bya mos pa sna tshogs kyi ngor rdo rje 'chang gi rgyud sde rnams su / yi dam lha'i sgrub thabs mtha' yas pa zhig / gsungs pa las rJe btsun Kun snying gis rjes gnang spyi zur gyi rgyun phal cher phyogs gcig tu bsdus pas na sgrub thabs 'di nyid lha grangs mang zhing sne 'dzom pa bcas ris su ma chad pa'i 'gro ba rnams la phan par mthong nas Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos sbyar ba'o / / 'dis kyang khams gsum chos kyi rgyal po Tsong khga pa chen po'i mdo sngags kyi bstan ba rin po che rgya mtsho'i gos can gyi bzhi thams cad du dar zhing rgyas la yun ring du gnas par byed nus par gyur cig / / manggalaṃ / /
sti phan bde'i 'byung gnas rgyal bstan yongs 'du'i ljon / / rab rgyas 'gro kun thar mchog 'bras bzang la / / spyod phyir bkra shis lhun grub chos grwa cher / / chos sbyin 'dzang med dal 'gro'i rgyun 'di spel / / sarba manga laṃ / /
（[この］成就法は、「ラトナーカラシャンティが説かれた天衆たちの許可灌頂作法に関して、この補遺のようなものが必要である」といって、教と正理の論者である善知識カチェン・イェシェーサムテン、カチェン・ロサンケルサン、カチェン・ロサンドンドゥプ、カチェン・クキョーゲドゥンダクパ、カチェン・チュ×イエシェーテンジンを含めた侍従学僧［たち］が勧めたとおり、根本の成就法の密意と一致し、読誦された他の経本に求めるのが正しい。補足、実践が見られる伝承によっても荘厳して、知恵の劣った者たちにも理解しやすいので、そして法を如実に成就したいと欲する者たちは、悉地を授ける本尊と障碍より守護する或る護法神に必ず親近することが必要であり、それらの修念に依って欲する目的を成就することにも灌頂と本尊の心相続の智慧を自相続に生じさせる先導の許可灌頂または明〔妃〕の授与、および成就法の伝授が××必ず必要である。それもまた、教化対象者の種々の信解の側において、持金剛のタントラ部類には本尊の成就法の無辺のものが説かれているうち、尊者クンニンが許可なさったもの一般と傍流のほとんどを一方に集めたものだから、この成就法こそが本尊が多数であり、全種類をともなって分け隔てをしない

衆生に益するものと見て、シャーキャの比丘ロサン・ペルデンテンペーニマ・チョクレーナムギェル・ペルサンポが著述した。

これによっても、三界の法王大ツォンカパの顕密の教えの宝が、海を衣とするもの［すなわち大地］すべてにおいて、広大で栴檀香の大地全てに栄え広がり、長期にわたり住させることができますようように。吉祥たれ。

吉慶　利益安楽の生じる源である仏教一切を集めた樹木［のようなものであり］、たいそう広大な衆生すべてが最高の解脱の賢れた果を享受するために吉祥（bkra shis）を自然成就（lhun po）する大寺院（chos grwa che）において、この無漏の説法の流水の流れが発展しますように。全て吉祥たれ。）

解説：著者(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。

本著は、インド最後期の学者で行者のラトナーカラシャンティによる諸尊への許可灌頂の補足として著作された。奥書の「カチェン（dka' chen）」はタシルンポの僧侶の学位であり、彼らを含めた僧衆の以来により、彼の住持する本山タシルンポ寺(「吉祥（bkra shis）を自然成就（lhun po）する大寺院（chos grwa che）」という個所に名が読み込まれている)において実践できるように、阿弥陀仏の化身パンチェンラマが諸伝統の融和を目指して、無量寿仏を本地としそこに統括される形で吉祥長寿五姉妹の供養法を著作したことになる。吉祥長寿五姉妹とは、阿弥陀仏信仰のもとに整理統合した成就法文献である。五姉妹とは（1）吉祥寿仙女、（2）翠顔仙女、（3）貞恵仙女、（4）冠咏仙女、（5）施仁仙女であり、各々、吉祥寿命、預知、大地、宝、牧畜を司る神とされる。またツェーリンマは、最も高名な行者ミラレパ（1040-1123）の伝記にも登場する。そこでは法を授けられた南チベットの山の女神として、カギュ派の護法神とも位置づけられている。これに関する行法は同派に伝承された。奥書に言及される尊者クンニン（サキャ派のクンガニンポ 1092-1158 か？）や、ゲルク派にこの教えが伝承された経緯などは未詳である。

本著は印刷状態が悪く、読解できない部分が幾つもあるが、おおよその内容は、阿弥陀仏を本地仏とした上でこれら五姉妹を生起させ、灌頂を受け、寿命の悉地を授かるよう祈願するものである。雪山やパドマサンバヴァが言及され、父母尊が登場し、ヨーガの観想が行われ、根本師シェーペードルジェ(bZhad pa'i rdo rje)、軌範師ヴァイジュラ・ヴァイラヴァ(rDo rje Phag mo lhan cig skyes mar gsal ba) といった名が出ており、民間信仰の要素も含めて様々な信仰を盛り込む形になっている。

作成者名：中御門敬教

sKal ba dang ldan pa'i gdul bya rnams kyis rtsa ba'i bla ma dang mgon po 'od dpag med dbyer med du byas nas gsol ba 'debs pa'i tshul

書名の日本語訳：有縁の教化対象者たちが根本師と無区別になって祈願する作法
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.1856-2, Folios45b4-46b4
刊本の奥書刊記：なし
参考文献：・ツルティム・ケサン・藤仲孝司訳『悟りへの階梯』（UNIO、2005）
解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。

本著は阿弥陀仏一尊一瓶の簡略な成就法の典籍であり、直後には東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.1856-3（本著の続編として「遷移」を説く）へ繋がっている。同文献目録で両者を別個の典籍としているので、それに従ったが、本作自体は末尾に奥書を持たないから、一つの典籍とすべきかもしれない。文字は唱える箇所は大きく、注意書きの箇所は小さく印刷されているが、テキストの状態が悪く読解困難な箇所が多い。

全体は大きく三部分に分かれる。

冒頭では、帰依・発心・四無量心の前行から始まり、生起次第を行う。すなわち、種字や真言より阿弥陀仏の特徴や持物の瓶を観想し、智慧薩埵を本地から招いて三昧耶と合体させ、七支供養を行う。

中間では、マンダラ供養を行い、阿弥陀仏に対して祈願し、世々に摂取されることと秘密蔵の受持者の子となることを祈る。具体的には、顕教に関しては、仏道の実践を祈願し、「菩提道次第」の内容に関連づける。すなわち、諸行無常を理解して、この世の現象に動揺せず、三士の道を修治すること、顕密共通の道により自相続を成熟させることが祈願される。密教に関しては、三昧耶戒の守護、あらゆる悉地の確立が祈願される。

末尾では、行者自身が衆生を導く有縁者となる祈願が説かれる。面前の根本師に無量光仏が融解し、続いて行者自身の心臓にその尊格が融解したと思念し、最後に行儀すべてにおいて師の現れを離れないように祈る。

作成者名：中御門敬教

sKyob pa rin po che'i bde smon

書名の日本語訳：キョプパ・リンポチェの極楽願文
著者名：sKyob pa 'Jig rten mgon po
著者名よみ：キョプパ・ジクテンゴンポ
著者名別名：Rin chen dpal、'Bri gung chos rje 'Jig rten mgon po、'Bri gung pa sKyob pa 'Jig rten mgon po
著者生没年：1143-1217
成立翻訳年：12-13c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（p.172）di sKyob pa rin po ches mdzad pa'o // sarba manga laṃ / / dge'o / /
（これはキョプパ・リンポチェがお作りになった。全て吉祥たれ。良かれ。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、pp.171-172
現代語訳書：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne

and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.24,27
参考文献：・立川武蔵『トゥカン『一切宗義』カギュ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』5、1987、pp.60-61, 80-81, 178-179）
・中御門敬教、藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態」
(『仏教大学総合研究所紀要』10, 2003)p.58
解説：著者はカム地方に生まれ、カギュ派のパクモトゥパに師事して、ディグン('Bri gung)寺を建立し、ディグン・カギュ派の開祖となった。彼の教えは「一意趣dgongs pa gcig」ともいわれ、弟子チェンガ・リンポチェなどの弟子がいる。彼自身は龍樹の生まれ変わりともされ、この師弟はダーキニー・シッディラージャ（マチク）流の阿弥陀仏成就法の伝統継承者に数えられているが、その成就法は無上ヨーガに分類されるのに対して、本著は、阿弥陀三尊の悲による自らの済度、極楽往生を祈願し、さらに有情の極楽往生を祈願する通大乗的な願文である。著者はその献身的信仰により有名であるが、ここにもその傾向が感じられる。また文中にロドゥーニンポ（Blo gros snying po）という名が出るが、これはカトクパ(Kah thog pa Dam pa bde gshegs.1122-1192)が極楽往生して第八地を獲得したときの名であり、「父子」というのは彼とその法嗣ツァントンパ(gTsang ston pa.1126-1216)のことであり、その法統にあることが推測される。
　以下に全文を訳しておく。
「祈願をたてます。勝者無量光よ、大悲により御覧になってください。観自在よ、加持してください。仏子勢至よ、かの智慧光明の国土に導いてください。悲によりかの光明の国土に導いてください。かの事業光明の国土に導いてください。かの誓願光明の国土に導いてください。
　大楽国土という誉れ有る勝者の国土に、世尊たる教主無量光と、ロドゥーニンポ父子の御足のもとに、我々が死んで［から］そこに生まれますように。そこにおいても三昧・密意を究竟して、［現れのない］法身が現成し、他の現れ［たる色身によって］は教化対象者の
知が如実に［仏の］密意を適え、無量の行いによりあらゆる衆生が済度されますように。
　ここから西方に無量光の国土がある。誰でも彼の名前を受持する者はその最高の国土に生まれますように。蓮華が泥で汚されないように三有の煩悩で汚されず、［輪廻の］有の蓮華から生じた極楽に生まれますように。」
　末尾の「有(srid pa)」は通常輪廻一般をいうが、ここでは特に生有、死有、中有を指すのかもしれない。また「有の蓮華から生じた極楽」というのは、法蔵菩薩が単なる小乗の涅槃に入らず、輪廻する衆生のために誓願を立て、輪廻において菩薩行を重ねたことから極楽浄土が成就したことを、述べた表現かと思われる。
作成者名：藤仲孝司

Khams gsum Chos kyi rgyal po Tsong kha pa chen po dang bCom ldan 'das mGon po Tshe dpag med dbyer med ma mchis pa la brten pa'i Tshe grub　－ 'Chi med bdud rtsis gang ba'i bum bzang －

書名の日本語訳：三界の法王大ツォンカパと世尊無量寿との差別無きものに依った寿命の成就　－無死の甘露が充ちた妙瓶－
著者名：rTa tshag pa Ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan
著者名よみ：タツァクパ・ガワンロサン・テンペーギェルツェン
著者名別名：rTa tshag pa sku phreng dgu pa
著者生没年：1811-1848
成立翻訳年：19c前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北 No.6723 ［Ga 1-11a2］
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 2182, Folios 1a1-11a1
刊本の奥書刊記：(Ga 10b2)Khams gsum chos kyi rgyal ba Tsong kha pa chen po dang bcom ldan 'das mgon po tshe dpag med dbyer ma mchis pa la brten pa'i tshe bsgrub －'Chi med bdud rtsi gang pa'i bum bzang－　zhes bya ba 'di ni / Jo bo rin po che mDo Khams mdzes rgyan gyi sku gnyer bslab gsum ldan pa dGe slong Blo bzang chos ldan nas bkra shis pa'i rab dkar tshe sku dang / rgya ting rnying ma bdun tshar 'bru dkar gyi khengs pa bcas te bskul ma byung ba / spyir btang 'di rigs gsar rtsom la rang bzo'i nyes pa 'byung nyen che yang rJe btsun Tsong kha pa chen po 'di nyid rGyal ba thams cad 'dus pa bdag nyid yin pa dang / khyad par du mGon po 'Od dpag med dang ngo bo gcig yin tshul rNam thar rnams las 'byung ba ltar na 'gal ba med nam snyam nas rigs mthun gyi gzhung lugs gzhan dag dang bstun te bskul ba bo'i ngo ma bcag tsam du Ba spa rje'i mtshan gyis byin gyi brlabs pa rTa tshag pa Ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan gyis (11a) rJe btsun 'Jam dpal dbyangs kyi ye shes rang snang las grub pa'i gzhal med khang Pho brang dGa' ldan rnam rgyal gyi gzims chung 'og min du hor zla gnyis pa'i cho 'phrul zla'i dga' ba dang po'i tshes la sug bris su bgyis pa dza yantu / /
（『三界の法王大ツォンカパと世尊無量寿との差別無きものに依った寿命の成就　－無死の甘露が充ちた妙瓶－』といわれるこれは、チョボ・リンポチェ［ツォンカパ］のアムド・カムの妙荘厳の像の管理者、三学を具えた比丘ロサンチョーデンから、慶賀の最上白、寿命の？身と七組？を白穀［・麦類］の充満したものを持って催促が来た。一般的に、これは新しい種類の著作において、自造の罪の生起の大きな害があっても、この尊者大ツォンカパこそは勝者すべてが集まった本性であるし、特に主無量光と一体であるさまは、 諸々の行状伝にある通りであれば矛盾は無いのかと思って、同種類の他の教義に随順して、勧めた人＋＋＋＋ババ尊者の名により加持されたタチョクパ・ガワンロサン・テンペーギャルツェンが、尊者マンジュゴーシャの智慧の自顕現より成った無量宮ガンデン・ナムギャルの小寝室「オーミン」において、モンゴル暦2月＋＋＋神変の ＋＋ 第一日に［自らの］手で書いた。勝利あれ。）
参考文献：・クンチョック・シタル、ソナム・ギャルツェン・ゴンタ、齋藤保高『実践チベット仏教入門』（春秋社、1995年、pp.182-184, 284）
解説：著者タツァクパ９世は、デプンで修学し、ダライラマ10世やパンチェン4世に師事し、ダライラマ11世の教師（yongs 'dzin）を務めた。
　本典籍は東北目録においてミクツェマ（dmigs brtse ma）に分類収録されている。これは通常、dmigs med brtse ba'i（無所縁の慈悲の）という言葉で始まる5句からなるゲルク派の常用経典であり、観自在・文殊師利・金剛手の三菩薩と祖師ツォンカパを一体だと観想して行う加行法である。もとはツォンカパがレンダワを称讃するものであったが、レンダワは名をツォンカパに入れかえた。この加行法は密教の本尊瑜伽の一部が独立して、上師瑜伽（グ

ル・ヨーガ）となり、準備的修行として行われた。上師瑜伽においてはまず、自己の根本師を釈尊から直接の師までの諸師の代表者にして本尊として生起させ、礼拝・帰依・供養などを行った後、ツォンカパの功徳を称讃するためにミクツェマが用いられる。次に真言念誦の三昧に入って、ツォンカパ師弟が行者の頭頂から心中に入って、浄化・加持すると観想する。ただし、本典籍は、無量寿［智］仏とツォンカパを一体だと観想するものであり、通常のものとは異なっている。その通常の経文も使用されていなくて、本文と割注から成っている。ツォンカパは「三界の法王」と称され、彼の僧名Blo bzang grags pa の還梵Sumatikīrti が、インド撰述の『無量寿宗要経』の真言に結びつけられている。観想の対象は、まずは僧侶としてのツォンカパの姿であり、三昧の修習による念誦の場合（6a2）に通常の阿弥陀仏成就法の姿となる。祈願の部分では、師の安泰を願うと同時に、自らが菩提道次第と真言道次第の道を円満に行うことへの誓願をたてさせている。

刊本は特に終わりにかけて判読が困難である。内容は前行と本行からなる。冒頭には著作目的として、四無畏（正等覚無畏、漏永尽無畏、説障法無畏、説出道無畏）が具わった最高の寿命の持明を得るために、四座瑜伽（四時の修観行）の次第を説くとある。本行は面前生起（2a6）、七支供養（3a1）、マンダラ供養（4a1）、我生起の修習（4b4）、讃（5b3）、等持の修習と念誦（6a1）、祝賀（9a4）となっている。

なお「東洋文庫蔵チベット蔵外文献」目録では本作の範囲が、Folios1a1-19a1となっているが、実際はFolios1a1-11a2が範囲である。ちなみに11a2.ff.は、『尊者ツェジンマの成就法　－不死の持明な速やかな成就－』（rJe tshe 'dzin ma'i sgrub thabs　－'Chi med rig 'dzin myur 'grub －）である。ちなみに、ゴロプポン・チジンキェンラプテンパチュペル（sGo slob dpon Khri 'dzin mkhyen rab bstan pa chos 'phel. 1840-1907/1908 ）による、『尊者大ツォンカパのツェジンマの成就法と寿命灌頂作法の補遺　－吉祥なる無死の授与－（rJe Tsong kha pa chen po tshe 'dzin ma'i sgrub thabs dang tshe dbang bya tshul gyi lhan thabs　－'Chi med dpal ster－）』（「東洋文庫蔵チベット蔵外文献」Call No.142, Ref. No. 2185, Folios 1a1-19a4）もツォンカパと無量寿仏を同一視して、ツェジンマの成就法に言及したものである。

作成者名：藤仲孝司

Grub rgyal ma lugs kyi tshe dbang bskur tshul gnyis

書名の日本語訳：ダーキニー・シッディラージャー流の寿命灌頂の二作法
著者名：mKhan chen Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan
著者名よみ：ケンチェン・ロサン・テンジンギェルツェン
著者名別名：mKhan chen Chos rgyal Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan
著者生没年：1639-1691
成立翻訳年：1680
刊本所在：mKhan chen Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan gyi bka' 'bum,　dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.26, Kha 1a-13a rjes-gnang, pp.1-7
刊本の奥書刊記：(7b5-6)
'di ni dbu mdzad Chos rje Blo bzang rnam rgyal gyis bskul ba'i ngor lHa'i btsun pa Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan gyis Rab byung bcu gcig pa'i lCags sbre'i Sa ga zla ba'i tshes bcu gcig gi nyin mgyogs par bris pa'o//
（これは、維那(領誦師)法主ロサン・ナムギャルが勧めたのにちなんで、尊者ロサン・テンジン・ギェルツェンが、第11ラプチュンの鉄の猿年(西暦1680年)の氏宿月(蔵暦4月)11日の昼に急いで記した。）
(13a1-2)
'di mdo sngags gzung lugs mtha' dag gi bang ndzod du gyur ba/ Chos ×× Blo bzang shes rab gyi gsung gyis bskul ba'i ngor sa mtha'i btsun pa Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan gyis bgyis pa'o// //
（これは経・真言のあらゆる教義の宝蔵となった、法××ロサン・シェーラプのお言葉により勧められたのにちなんで、辺地の僧侶ロサン・テンジン・ギェルツェンが造った。）
参考文献：・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
解説：著者はゲルク派の僧侶である。密教と医学に詳しかったという。本書は、無上ヨーガ・タントラに分類されるダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の、無量寿仏による寿命灌頂の儀軌を、二つ収録したものである。二つの作法は別々の機会に単独で著作されたものであり、対比などが行われているわけではない。第二の著作の末尾には、これは中のものであり、広と略を望むなら他を見るべきである、というように、中程度にまとめたものである。所々に「無上ヨーガのように行う」といった指示や、生起次第・究竟次第・五肉五甘露など後期密教の特徴が見られる。

第一の著作の構成は、1)共通の前行（1b1-2）、2)我生起の親近（1b2-3a3）、3)面前生起の成就（3a2ff.）となっている。面前生起では順次、寿命瓶（3a3-6）、寿命酒（3a6-b2）、寿命丸（3b2-5）の成就となる。次に弟子たちに伝授する次第（3b5ff.）となり、所縁として菩提道次第の内容が示されてから、観想に入る。

本行（4b5ff.）においては、散失した寿命の回復（4b5-5a6）、損なわれたもの（寿命、福徳、誓言）の回復（5a6-6a6）、寿命を溶け込ませること（6a6-7b3）、寿命を増長させること（7b3-5）という4つからなる。寿命を溶け込ませる段では、受法者が加持を祈願する個所では、無量寿仏、ダーキニー・シッディラージャーからカギュ派、サキャ派、ゲルク派のダライラマ5世までがこの法の祖師たちの名が列挙されている。

第二の著作は、第一の著作より少し簡略であり、構成や内容に大きな違いはない。科段は不明瞭な個所もあるが、おおよそ前行（8a2）、我生起（8a2-9a1）、面前生起（9a1-5）、弟子たちへの伝授（9a5-b5）、本行（9b5ff.）、散失した寿命の回復（9b6-10a1）、損なわれたものの回復（10a1-11a6, ただし「損なわれた寿命の回復」は、「損なわれた大種の回復」となる）、寿命を溶け込ませること（11b1-12b5）、寿命を増長させること（12b5-6）となっている。受法者が加持を祈願する個所では、さらにパンチェン1世までの系譜をも示している。

作成者名：藤仲孝司

Grub rgyal lugs kyi Tshe dpag med lha gcig bum gcig gi dbang bskur

書名の日本語訳：ダーキニー・シッディラージャ(マチク)流の無量寿一尊一瓶の灌頂
著者名：Dharmabhadra
著者名よみ：ダルマバドラ
著者名別名：dNgul chu Dharmabhadra, Bla ma chos bzang mchog

著者生没年：1772-1851
成立翻訳年：18c末-19c前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・1.Toh.6303. Kha.1a-15a3（＝天津古籍出版社, Vol.77, pp.103-110, Kha.1a-15a3）
刊本の奥書刊記：（15a1）Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs kyi tshe dpag med lha gcig bum gicg tu grags pa'i tshe dbang bskur tshul 'Chi med srog gi dpal ster zhes bya ba 'di ni / yul gTsang stod gyas ru'i char skyes pa'i Shā kya'i dge slong Dha rma bha dras rab byung bcu bzhi ba'i nad tshan rnam 'byung gi lo'i sgron zla ba'i gral tshe bzang por bris / / sa rba ma ngga laṃ / / sa rba dza ga taṃ / /
（ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の無量寿一尊一瓶として名高い寿命灌頂の作法である『無死なる命の吉祥の授与』というこれは、上ツァン地方のエール（右翼）の部分に生まれたシャーキャ［族］の比丘ダルマバドラが14ラプジュンの熱病の類が起こった？年の心宿月（蔵暦4/16-5/15）の期間の吉日に著作した。全て吉祥あれ。全て幸あれ）
解説：著者はゲルク派の学者であり、タシキル寺に学び、西チベットのヌルチュ寺(ギャルセートクメーサンポの寺)に住持した。その法嗣に弟子で甥のヤンチェン・ドッペードルジェ（dByangs can grub pa'i djo rje.1809-1887）がいる。顕密にわたって数多くの著作を遺したが、ニンマの法についても幾らか著作している。
　本著は、インドの後期密教における女性成就者ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の無量寿一尊一瓶の成就法であり、無上瑜伽タントラに分類される。無量光仏（2b5ff.）以下、ケルサンチュウーギェル（bsKal bzang chos rgyal）（3a6ff.）までの伝承祖師の名前が祈願文の中で説かれている。マチク流成就法としては比較的長部であり、後世のものであるためか、科文が良く整理され、全体像が分かりやすい。
作成者名：中御門敬教

Grub chen Mitradzoki'i lugs kyi sByong rgyud Tshe dpag med kyi dbang gi bla ma brgyud pa'i gsol 'debs smon lam shis brjod dang bcas pa

書名の日本語訳：大成就者ミトラゾーキ流の「悪趣清浄タントラ」の無量寿の灌頂の師伝承の祈願・誓願・祝詞をともなったもの
著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje
著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ
著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje
著者生没年：1781-1855
成立翻訳年：19c後半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）vol.?, Ca, bla 1a-4b brgyud, pp.205-206
刊本の奥書刊記：（4b2-3）
×××× dkyil 'khor×××rGyal dbang bsKal bzang rgya mtshos ndzad pa'i lugs 'di'i rDo sems lnga bcu bla ma'i brgyud pa'i gsol 'debs smon shis la skabs thob ×××××（××××マンダラ×××勝者〔ダライラマ７世〕ケルサン・ギャムツォ（1708-1757）が造られたこの流儀の金剛サッタ、15師の伝承の祈願 、願文について機会を得た×××××）
参考文献：・高田仁覚『インド・チベット真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）
・桜井宗信「『ドゥルガティパリショーダナ・タントラ』－死者の救済と後生安楽を目指して」（松長有慶編『インド後期密教　上－方便・父タントラ系の密教』春秋社、2005）pp.148-149
・Tedeusz Skorupski, The Sarvadurgatipariśodhana-tantra、New Deili、1983
・酒井真典「悪趣清浄軌」「悪趣清浄軌のマンダラ」（『酒井真典著作集 第三巻 金剛頂経研究』 法蔵館、1983？）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（二）－梵文テキストと和訳－」（『那須政隆博士米寿記念　仏教思想論集』大正大学真言学智山研究室編、1984）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（三）－校訂と和訳－」（『豊山学報』28・29合併号、1984）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（一）－梵文テキストと和訳－」（『壬生台舜博士頌寿記念　仏教の歴史と思想』大蔵出版、1985）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（四）－校訂と和訳－」（『豊山学報』30、1985）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（五）－校訂と和訳－」（『豊山学報』31、1986）
・塚本啓祥・松永有慶・磯田熙文編『梵語仏典の研究　・密教経典篇』（平楽寺書店、1989）
・中島小乃美「Buddhaguhyaの『一切悪趣清浄儀軌』観（1）」（『密教学』38、2002）
・中島小乃美「Ānandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』観」（『密教学』39、2003）
解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジョッツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。
　本著は比較的短い著作であり、〈悪趣清浄タントラ〉自体の所説に直接言及することもなく、行法を直接的に述べた箇所もない。この著者の同系統のもう一つの長い著作、ミトラゾーキ流「悪趣清浄タントラ」の無量寿の語マンダラの成就法に付随した著作であると思われる（ただしその著作では、「所作タントラの蓮華部の正尊無量寿主」とされている）。
　本著は、同タントラに関してインドの成就者ミトラヨーギンなど無量寿仏の灌頂の伝承者に対して摂取を祈願する部分（1b1-2b5）、修行の諸々の事柄に関して誓願を立てる部分（2b5-3b5）、善の集積により、無量寿などマンダラの諸尊に対して障碍の除去、安楽の増長といった吉祥を祈る祝詞（3b5-4b2）の部分から、構成されている。
　一部分印刷が不鮮明であるが、摂取を祈願する部分には、持金剛など、インドの成就者テーローパ、リーラヴァジュラ、マイトリーパなど、チベットではチャムパペル、ソナムセンゲ、リンチェンセンゲ、プトン・リンチェンドゥプ、ショーヌ・ソナム、続いてツォンカパからパンチェン１世ロサン・チョーギャンまでの菩提道次第の祖師、さらにゲンドゥンドッパ、テンジンティンレー、ロサンケーツン、ジャムヤンシェーパ、テンペーニマ、ロサンダルギェー、コンチョクジクメーワンポ、ジクメーリクペーセンゲといった祖師の名が挙げられている。
　誓願を立てる部分には、菩提道次第の箇所に対応する内容に続いて、障碍の除去、浄土の成就、三身の獲得、利他の成就、息災・増益など四事業の成就、特に苦や、死魔の

怖れからの済度、無死の金剛身の成就が祈願されている。
作成者名：中御門敬教

Grub chen Tshem bu ba'i lugs kyi thugs rje chen po'i sgrub thabs bDe ba can gyi myur lam

書名の日本語訳：成就者ツェムブバ流の大悲［・観自在］の成就法 － 極楽の近道
著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa(クンタン3世)、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c後半-19c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 39, New Delhi 1975 Vol.7, Cha. Tshem-bu-lugs 1a-5b, 162-171 （なお別の版では Ta巻）
刊本の奥書刊記：（5b4-5）
'di ni blo dang ldan pa ri khrod pa Blo bzang dkon mchog gis sngar nas bskul zhing/ nye char dad brtson dge ba dGe slong Chos bzang dar rgyas kyis nan cher bskul ba'i ngor/ bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes bla ma'i man ngag bzhin dBen gnas Yid dga' chos 'dzin du bris pa'o//
（これは、知恵をそなえた人であり、山［に隠棲する］僧ロサン・コンチョックが以前に勧め、最近［もまた］信・勤・善の人である比丘チョサンダーギャが慇懃に勧めたのにちなんで、尊者コンチョック・テンペードンメが師の口訣のとおり閑寂処ゴンサル・ガンデン・ラプギェーリンにおいて著わした。）
di ni dad brtson ldan pa ri khrod pa Don grub rgya mtsho dang dGe slong 'Jigs med blo gros gnyis kyis bskul ngor/ bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes dGon gsar dga' ldan rab rgyas gling du bris pa'o//
（これは、信と勤を具えた人であり、山［に隠棲する］僧ドンドゥプ・ギャムツォと比丘ジクメー・ロドーが勧めたのにちなんで、尊者コンチョック・テンペードンメが閑寂処イガー・チョジンにおいて著わした。）
参考文献：・Roerich, George N., THE BLUE ANNALS PART TWO （Asiatic Society, Calcutta, 1953） pp.1043-1044
・田中公明『超密教　時輪タントラ』（東方出版、1994）p.218
・田中公明『チベットの仏たち』（方文堂出版、2009） pp.43-45
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。
　本著は、大悲の主観自在菩薩を主尊とした、無上ヨーガと関係する成就法である。灌頂において無量光仏が招請され、かねて観自在菩薩の引導により極楽浄土へ往生することが祈願されている。全体的にマハームドラーや六支ヨーガも関係した、後期密教の概念や用語が頻出する（母タントラの代表的尊格ヘールカや、ゲルク派の密教の中心である「秘密集会、最勝楽、金剛怖畏」への言及もある）。諸処に割註がある。冒頭の割註には、観自在菩薩の成就法は無数にあり、観自在にすがって余命を有益にしたい場合、有名な成就法は5つほどである。それらの中で無上ヨーガと関係したツェムブバの赤導論（dmar khrid .医師が弟子に生の死体を解剖して五臓六腑を解説するように赤裸裸に指導するもの）を実践するにあたって、所縁の次第は尊者イェシェーギェルツェンとチャンキャ・ロルペードルジェなどの先師の教えに出ているから、ここには簡明な逐語釈として提示すると言う。この行法に関してゴ翻訳師('Gos lo tsa ba)著『青史 Deb ther sngon po』には、成就者ツェムブバ（gNyan Tshem bu pa）は名をダルマウセル(Dar ma 'od zer)といい、大悲［観自在菩薩］（Thugs rje chen）の法類の章に扱われている。この法類は 明妃 Nairātmā が彼に直接授けたものであり、チョナンパなどに広まった。その導き方の一部はマハームドラー（大印契）と一致し、六支ヨーガの第一支「抑制」とも一致するという。また赤導論（dmar khrid）は比丘尼ラクシュミー（dPal mo）から伝えられたものともいう。本著者には同系統の『断食作法の端の荘厳 ―極楽の通行証』という著作がある。
　具体的な内容としては、前行（1a3ff.）で金剛薩埵・持金剛を観想し、本行（3b1ff.）には一面四手の観自在を観想して行が行われる。本行の灌頂の場面において、受用身の無量光仏が根本師の本体として生起し、頭頂を飾り、その光により一切の仏祖を包摂した本体となる。次にこの無量光仏は、行者の頭頂に部族主の姿で現れる。最後に、観自在菩薩により導かれて極楽浄土に往生すること、無量の変化を現して穢土の衆生を導くことが祈願される。
作成者名：藤仲孝司

Grub dbang Thang stong snyan brgyud kyi tshe dbang gi cho ga bsgrigs 'chi med chab rgyun 'beb pa'i kai la sha ri （1）

書名の日本語訳：成就自在者タントンの聴伝の寿命灌頂儀軌の編纂 － 無死の水流を降らすカイラーサ山 －　（1）
著者名：Paṇ chen lnga pa bsTan pa'i dbang phyug
著者名よみ：パンチェン5世(8世)テンペーワンチュク
著者名別名：bsTan pa'i dbang phyug 、Blo bzang bstan pa'i dbang phyug、Paṇ chen sku phreng brgyad pa bsTan pa'i dbang phyug
著者生没年：1854/55 -1882
成立翻訳年：19c後半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No.1995 より, Folios 1a1-8a1
刊本の奥書刊記：（8a1）'di ni dge slong Ngag dbang rin chen blo bzang chos 'phel nas bskul ba'i ngor Lha babs rgyal rigs kyi bande Dharmakīrtir 'bod sbyar ba'o/ /
（これは比丘のガワン・リンチェン・ロサンチョーペルより勧められたのにちなんで、権現である王族の大徳ダルマキールティと呼ばれるものが著述した。）
解説：著者パンチェン5世（追贈を含めると8世）は、ダライラマ13世トゥプテン・ギャムツォの剃髪を行った。歴代のパンチェンラマの中では珍しくニンマの法を行ったが、それにより、住持する本山タシルンンポ寺内から反対も受けた。
　タントン・ギャルポ（1361/1421-1485?）は各地を巡って利他行として鉄の橋を架けたシャンパ・カギュ派の大行者であり、無量光仏の化身パドマサンヴァバから口訣を授かったとされる。本書は彼から伝えられた無量寿仏に関するニンマ派の延命儀軌の作法、特に軌範師が弟子に灌頂す

る次第を説いたものである。本著はさらに小品に分かれている。ダライラマ5世ガクワン・ロサンギャンツォ著『寿命の成就』もこの系統の儀軌を扱っている。冒頭では、法身無量光、受用身無量寿、持金剛、転輪王パドマサンヴァバ、大行者タントン・ギャルポ、持明者ワンポィデ(dBang po'i sde)、同パドマ・ティンレーの摂取を願い、ヘールカやダーカーなどの諸尊を礼拝する。後の持明者二人はニンマの mKha' 'gro 'od 'phro rim srung の系譜に出てくる人と思われる。ワンポィデすなわち Karma gu ru bkra shis stobs rgyal(1550?-1603)は、埋蔵経「北蔵Byang gter」の継承者であり、rGya zhang khromを発見したとされている。また彼は、パドマ・ティンレーの孫弟子にして18世紀生まれのティンレー・フンドゥプ('Phrin las lhun grub)、すなわちカギュ・テンジン・ペマロルパ(bKa' brgyud bsTan 'dzin padma rol pa.カギュ派の人)の儀軌を勘案し、ニンマの流儀に合うようにしているという。さらに伝統の諸師へ順次祈願する箇所（3b1ff.）では、持明者ドルジェ・ツァル(Rig 'dzin rDo rje rtsal)から遡り、タントン・ギャルポを通じて、世尊無量光、法身無辺光までのより詳しい系譜が示されている。

本書の構造も、前行(2a1-5a3)、本行（5a3-7a5）、後（7a5-b2）の三部分からなる。前行ではまず師が上記の礼拝、思念の後、真言の念誦を行いながら、親近修念、供物の献上の次第を行うが、日々行うべき行もこれであるという。次に本行として、弟子の摂取となる。弟子はまず身を整えてから祈願する。次に師は面前の諸尊に奉仕して救済を祈り、弟子に懺悔文を唱え帰依させてから、我生起を行わせる。無量寿仏からの諸師、特に極楽の尊格より寿命の持明者たちを観想し、加持の・寿命の精髄を招き、真言を唱えて弟子と寿命丸に溶け込ませる。さらに寿命を招いて寿命瓶に入れ、甘露が成就され、持明者たちからの甘露の流れが身を満たして寿命が成就されたと観想させ、真言を唱える。次に寿命の堅固を祈って、寿命酒を施し、同様に諸師からの甘露が自己の心臓に溶け込み、成就を得たと観想する。この行法を授かったことを告げ、誓言と律儀の遵守を教誡し、今後の利他を勧め、廻向する。最後には、我生起を収束させ、祝詞を唱えて終了する。

作成者名：藤仲孝司

Grub dbang thang stong snyan brgyud kyi tshe dbang gi cho ga bsgrigs 'chi med chab rgyun 'beb pa'i kai la sha ri（2）

書名の日本語訳：成就自在者タントンの聴伝の寿命灌頂儀軌の編纂 － 無死の水流を降らすカイラーサ山 －（2）

著者名：Paṇ chen lnga pa bsTan pa'i dbang phyug

著者名よみ：パンチェン5世(8世)テンペーワンチュク

著者名別名：bsTan pa'i dbang phyug 、Blo bzang bstan pa'i dbang phyug、Paṇ chen sku phreng brgyad pa bsTan pa'i dbang phyug

著者生没年：1854/55 -1882

成立翻訳年：19c後半

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No.1995 より, Folios 8a1-11a3

刊本の奥書刊記：（11a2-3）'chi med rdo rje'i srog shing gi rgyun 'khyer las byang(?) Tshe'i yid bzhin 'gugs pa'i lcags kyu zhes bya ba 'di ni rang gi sring mo mdo sngags kyi lam bzang gang dang gang nyams su len pa la dal ba med pa dPal ldan bsTan 'dzin chos 'dzom nas bskul ba'i ngor/ 'Od gsal lha rigs las Zhwa ser gyi ring lugs dri med 'dzin cing gsang sngags kyi rig pa 'dzin par khas 'che ba'i btsun pa Shrī man Dharmakīrtir 'bod pas sbyar ba'o/ /

（「無死金剛の芯柱の常行」の中から「寿命の如意の召還」というこれは、自らの姉妹すなわち経・真言のどの善い道をも実践するには暇が無いペルデン・テンジンチョゾムより勧められたのにちなんで、光浄天出身の黄帽派（ゲルク派）の流儀を持ち、秘密真言の持明者を自称する尊者、吉祥あるダルマキールティと呼ばれるものが著述した。）

付録の小品第一の奥書

（12b2）'di ni Har gdong sNgag ram pa bSod nams kyis bskul ba'i ngor rGyal rigs kyi bandes sbyar ba dza ga tam/ /

（これはハルドン（現在の青海省の一地名）の真言博士ソナムが勧めたのにちなんで、王族の大徳が著述した。）

付録の小品第二の奥書

（14a4）'di ni dge slong Ngag dbang rin chen blo bzang chos 'phel gyis bskul ba'i ngor rGyal rigs kyi bandes sbyar ba'o/ /

（これは比丘のガワン・リンチェン・ロサンチョーペルが勧めたのにちなんで、王族の大徳が著述した。）

解説：著者パンチェン5世（追贈を含めると8世）は、ダライラマ13世トゥプテン・ギャムツォの剃髪を行った。歴代のパンチェンラマの中では珍しくニンマの法を行ったが、それにより、住持する本山タシルンンポ寺内から反対も受けた。

前著と同じくニンマに伝えられた無量寿の成就法であり、本書もタントン・ギャルポの聴伝の題名のもとに収録されているが、必ずしも前著との関係は明かではない。本著はパドマサンバヴァ、トクメー、ドルジェ・ツアルなどの昔の持明者たちの修証の精髄である近出の「無死金剛の芯柱」を常行するための簡潔な著作とされている。新派・旧派の偏りを排除することを目指しており、その対象も「無宗派ris med」の人たちとされている。伝統の諸師への祈願文（8b2-9a1）の段に出る人名も、前者とは異なっている。

おおよその構成は、前行と障碍の追放、結界と懺悔、加持の祈願、供養・供物の加持の真言読誦、空・顕明の修習、所依の場所と能依の無量寿仏の観想と極楽からの招致、供物の奉献、収束、念誦と讃、寿命の召還と結縛と守護、誓願といった順序である。

なおこの著作の後（11a3-12a2）には、伝統の諸師への祈願文があり、それは「ユトク・ニンチィクの師の伝統と薬供養の補足部分」とされている。さらに 12a3-b2 には護摩、12b2-14a4 には寿命瓶と念誦に関する簡略な作法が収録されている。ユトクは、8, 9世紀のチベット伝統医学の始祖であり、後世の仮託を含めて幾つもの医療の伝統が伝えられている。チベットの伝統医学は仏教と密接な関係を持っているが、本著も医療との関連を持って著作されたのかと思われる。

作成者名：藤仲孝司

Grub pa'i dbang phyug chen po Mi tra dzo ki'i lugs kyi sByong rgyud Tshe dpag med gsung gi dkyil 'khor gyi sgrub thabs dkyil cho ga dbang bskur tshul dang bcas pa 'chi med grub pa'i zhal lung

書名の日本語訳：成就大自在者ミトラゾーキ流の「悪趣清浄タントラ」の無量寿の語マンダラの成就法、マンダラ儀軌、灌頂作法を合わせたもの － 無死の成就の口伝

著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje
著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ
著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje
著者生没年：1781-1855
成立翻訳年：19c前半
写本等の存欠：活字本
刊本所在：Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）vol.?, Ca, sByong rgyud 1a-42a, pp.80-100
刊本の奥書刊記：（41b5-42a2）
Grub pa'i dbang phyug chen po Mi tra dzi ki'i lugs kyi sByong rgyud Tshe dpag med gsung kyi dkyil 'khor gyi sgrub thabs dkyil cho ga dbang bskur tshul dang bcas pa 'Chi med grub pa'i zhal lung zhes bya ba 'di ni / rang dang skal mnyam mang po la phan pa'i bsams bas kun nas bslangs te / lHa sngags kyi kha bsgyur tsam ma gtogs rGyal dbang thams cad mkhyen pa Blo bzang bsKal bzang rgya mtshos ndzad pa'i lugs 'di'i rDo rje sems dpa' lHa bcu bdun gyi sgrub dkyil cho ga ji lta ba bzhin la / ras bris la brten pa'i khas len gyi rnam dbye gsal bar bgyis te/ rDo rje 'chang dngos dpal ldan bla ma dam pa rnams kyi bka' drin las / 'di nyid kyi smin byed kyi dbang bskur ba la sogs pa legs par thob / mKhan po chos rjer 'bod pa'i bTsun gzugs Dam tshig rdo rjes / dGa ldan bshad sgrub chos 'khor gling gi Chos grva chen por sbyar ba'i Yi ge pa ni / Tshe dang ldan pa dpyod ldan dge slong dGe 'dun dar rgyas so / / dge legs 'phel / / / /
（「大成就自在者ミトラゾーキ流の『悪趣清浄タントラ』無量寿語マンダラの成就法、およびマンダラ儀軌、灌頂の作法をあわせたものは、無死成就の口伝」というこれは、自己と等類の多くのものを益する思惟により動機づけられて、本尊の真言の改変を除き、勝者王〔ダライラマ７世〕一切智者ロサン・ケルサン・ギャムツォ（1708-1757）が造られたこの流儀の金剛サッタ17尊の成就マンダラ儀軌のとおりに、布画に依った実践の区別を明らかに［するために著述され］ました。持金剛そのもの〔である〕吉祥上師たちのご恩によって、まさにこれの成熟させる灌頂などをよく得ました。親教師法主と呼ばれる僧侶姿のタムチク・ドルジェが、ガンデン・シャッドップ・チョーコル・リンの大法堂において著作しました〔。〕筆受者は、具寿、伺察を具えた比丘ゲンドゥン・ダルギェーです。善が増長するように！）
参考文献：・高田仁覚『インド・チベット真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）
・桜井宗信「『ドゥルガティパリショーダナ・タントラ』－死者の救済と後生安楽を目指して」（松長有慶編『インド後期密教　上－方便・父タントラ系の密教』春秋社、2005）pp.148-149
・Tedeusz Skorupski, The Sarvadurgatipariśodhanatantra、New Deili、1983
・酒井真典「悪趣清浄軌」「悪趣清浄軌のマンダラ」（『酒井真典著作集 第三巻 金剛頂経研究』 法蔵館、1983？）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（二）－梵文テキストと和訳－」（『那須政隆博士米寿記念　仏教思想論集』大正大学真言学智山研究室編、1984）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（三）－校訂と和訳－」（『豊山学報』28・29合併号、1984）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（一）－梵文テキストと和訳－」（『壬生台舜博士頌寿記念　仏教の歴史と思想』大蔵出版、1985）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（四）－校訂と和訳－」（『豊山学報』30、1985）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（五）－校訂と和訳－」（『豊山学報』31、1986）
・塚本啓祥・松永有慶・磯田熙文編『梵語仏典の研究　・密教経典篇』（平楽寺書店、1989）
・中島小乃美「Buddhaguhyaの『一切悪趣清浄儀軌』観（1）」（『密教学』38、2002）
・中島小乃美「Ānandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』観」（『密教学』39、2003）
解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジャツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。

本著は、〈悪趣清浄タントラ〉の成就者ミトラヨーギン流の詳細な成就法とマンダラ儀軌であり、無量寿仏による摂取と、無死の金剛身の獲得を祈願するものである。ミトラゾーキ（ミトラヨーギン）に関しては『『ミトラの心髄』より「清浄極楽に生まれる誓願」』の項目を、〈悪趣清浄タントラ〉（東北No.483）に関してはパクパ著『無量寿成就法』の項目を参照。冒頭の割註によると、大成就者ミトラゾーキの修証、100マンダラの内の一部であり、ヨーガ・タントラ部に属する〈悪趣清浄タントラ〉の12マンダラの支分にして、非時の死を破壊するには最上だと讃えられる世尊主無量寿の語マンダラ13尊の成就法と絵図マンダラを成就して供養し、灌頂を受けて授ける儀軌の次第を実践しやすく提示したものである。最後の廻向文には、名号のみの受持によっても業障を浄め、死の怖れから済度する寿と智を授けるこの本尊に関する成就法とマンダラ儀軌は、蓮華手菩薩により摂取されて、最上成就の道筋をツォンカパの意趣どおり実践する仕方の明瞭な増広と学者・行者の善釈に拠っており、知恵の劣った者も行いやすく提示した、という。

奥書に言及されるダライラマ7世の著作は東北蔵外目録 Nos.5849-5851 Nga に該当すると思われる。さらに割註（12b6-13a2, 19b1,6, 22a4, 25a6, 26a4,）には、ジャムヤンシェーパ１世の口伝、ツォンカパの『大真言道次第』(sNgag rim chen mo)、ドゥルジン（'Dul 'dzin）著『普明のマンダラ儀軌』(Kun rig gi dkyil cho ga)、無記名の『成就法』、『勝楽』(sDom 'byung)などが指示されている。ドゥルジン（持律者）はツォンカパの同輩で弟子ともなった 'Dul 'dzin Grags pa rgyal mtshan（1374-1434/36）のことである。

尊格の配置としては、中央に、赤色で一面二手で菩薩形の世尊無量寿智、東に青の不動、南に黄の宝生、西に白の大日、北に緑の不空成就の五仏が各自の印相を結んで坐び、四維には四供養菩薩、四の門の門番という構成となっている。灌頂の五尊の場合には父母尊が登場し、そこでは蓮華族の主尊は無量寿智でなく無量光と呼ばれる。

構成は大きく分けて、1）親近の儀軌（2a3ff.）、2）マンダラの事業の次第（12b5ff.）からなる。部分的に印刷状態がよくなくて、読解不可能な部分が多いが、割注があるので、おおよその細分がわかる。
作成者名：藤仲孝司

mGon po Tshe dpag med kyi dkyil 'khor gyi mjug tu bya ba'i smon lam dang shis pa brjod pa ji ltar bya ba'i tshul

書名の日本語訳：主無量寿のマンダラの終わりに為すべき

誓願と祝福をいかにすべきかの方軌
著者名：Paṇ chen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan
著者名よみ：［パンチェン・］ロサン・チューキギェルツェン
著者名別名：Paṇ chen Lama I 、Paṇ chen Chos rgyan
著者生没年：1567-1662
成立翻訳年：16c-17c.
成立地：チベット
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5919［Ga.25a1-26b1］
刊本の奥書刊記：（26a4-b1）mGon po Tshe dpag med kyi dkyil 'khor gyi mjug tu bya ba'i smon lam dang shis pa brjod pa ji ltar bya ba'i tshul 'di yang Chos kyi rje bsTan 'dzin Blo bzang rgya mtsho'i sprul pa'i sku Ngag dbang bstan 'dzin 'phrin las phyogs glang grags pa'i sdes yang yang bskul ba la brten nas / dGe slong Blo bzang chos kyi rgyal mtshan gyis 'phral du bgyis pa'i yi ge pa ni dGe slong 'Tsho byed Blo bzang dbang rgyal lo / / mangalam / /
　oṃ svasti / phan bde'i 'byung gnas rgyal bstan yongs 'du'i?/ rab rgyas 'gro kun thar mchog gi 'bras bzang la / / spyod phyir bKra shis lhun grub chos grwa cher / chos sbyin 'dzad med dal 'gro'i rgyun 'di spel / /　/ / sarva jagatam ？ / /
（『主無量寿のマンダラの終わりに為すべき誓願と祝福をいかにすべきかというこの方法』もまた、法主持教者ロサン・ギャムツォの変化身たるガワン・テンジン・チィンレー・チョクラン・タクペーデがたびたび勧めたことに依って、比丘ロサン・チョーキギェルツェンが即座に造った［。その］筆受者は比丘ツォチェ・ロサン・ワンギャルです。吉祥たれ。）
（以下は著作全体に対する奥書の一種）
（オーム、スヴァスティ。益と楽の生ずるもとたる勝者の教え全体が集まる、きわめて広大な衆生すべてが最上の解脱の妙果を受用するために、タシルンポ大寺において、法施が尽きず、この河の流れを増長させますように！。サルヴァ・ジャガタム？）
参考文献：・嘉木揚凱朝「モンゴル仏教における無量寿仏灌頂の研究」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』23、2003）
解説：著者はタシルンポさらにセラ、デプンといったゲルク派の大寺に住持し、ダライラマ4世、5世が具足戒を受けるとき親教師をも務めた。ダライラマ5世によるチベット統一政権の時代に大きな影響を与えた。彼は没後、阿弥陀仏の活仏として認定されたが、これはゲルク派ではダライラマ2世以降二人目であり、彼から遡って、パンチェンラマの系譜が成立することになった。
　本著は、同著者の『無量寿儀軌　－無死如意牛自在王－』の最後に掲載された同著を補完する小著であり、二部分から成っている。同著の 18a5 に本書が「誓願(smon lam)」と称されるほか、同著を依用するロサン・イェシェー・ラプギャの著作（東北 No.6243 Na）にも引用されている。
　内容的には、阿弥陀仏を大乗の仏道を成就した者と捉えて、阿弥陀仏とツォンカパ、ジャムペル・ギャムツォなどゲルク派祖師たちに対して、極楽浄土の円浄に言及しながら、衰退すべてを滅し、楽・善すべてを増長させて仏道の成満を祈願する極楽願文となっている。ジターリの無量寿九尊、またはそこで用いられた『無量寿宗要経』の百八の名号と『無死鼓音声ダラニ』のダラニへの言及がある。名号の功徳に対する強調については、顕教の経典やそれらに基づく讃や願文などからの影響が見られる。
作成者名：中御門敬教

mGon po Tshe dpag med kyi sgrub thabs

書名の日本語訳：教主無量寿の成就法
著者名：Blo bzang bsKal bzang rgya mtsho
著者名よみ：ロサン・ケルサンギャンツォ
著者名別名：Blo bzang rgya mtsho、Dalai Lama 7
著者生没年：1708-1757
成立翻訳年：18c.
成立地：チベット
所収文献名：Gyud sde nas gsungs pa'i lha tshogs du ma'i sgrub thabs kyi rim pa phyogs gcig tu bkod pa　－Phan bde'i 'dod rgu ster ba yongs 'du'i 'khri shing－（ラサ版　東北No. 5853）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：The Collected Works (Gsung 'bum) of the Seventh Dalai Lama Blo-bzang-bskal-bzang-rgya-mtsho Reproduced from a set of prints from the 1945 'Bras-spungs blocks from the library of the Ven. Dhardo Rimpoche by Lama Dodrup Sangye　Gangtok
・ラサ版　東北No. 5853 (11)　Nga. 49b1-51a3
・The Collected Works (Gsung 'bum) of the Seventh Dalai Lama 103, 3［52a3］-107, 1［54a1］
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No. 1138, Folios 49b1-51a3（ラサ版と同内容の別版である。右端に漢数字も記入されている。）
刊本の奥書刊記：1.（未調査）
2.（106, 6［53b6］）mGon po Tshe dpag med kyi sgrub thabs nyung ngu 'di ni Khal kha nas / dad stobs dang ldan pa gyon ru'i cang rngun? dza sag gong tho ro'i dun wang degur ge chi tshe mgon skyabs kyis lhag lha 'brel che ba zhig gi nyams len rgyun khyer byas cho ga pa zhig dgos zhes 'phrin yig gi bskul ma byung ba ltar shā kya'i dge slong Blo bzang bKal bzang rgya mtshos sbyar ba'o / /
（この小部な『教主無量寿の成就法』は、Khal kha（現ウランバートル）から、信仰の力を具えたヨンルの～？の実践の伝承を引き継ぎ行う、何らかの適したものが必要である」と手紙の催促がなされた如く、シャカ族の比丘ロサン・ケルサン・ギャンツォ（Blo bzang bsKal bzang rgya mtsho）が著述しました。）
参考文献：・Life of the Seventh Dalai Lama, From the Lam-rim-bla-brgyud by Tse-chok-ling、Translated and prepared at the LTWA by Glenn H. Mullin with Losang Dawa and Losang N. Tsonawa、The Tibet Journal vol.8-1, Spring 1983
・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
・藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：著者は、モンゴル、清朝（康熙帝、雍正帝の時代）との度重なる紛争、介入の時代にあって、政治的に紛争の調停者として活躍しただけでなく、僧侶としても学問、著作、教育、大蔵経の改修、改版、寺院の興隆などに勝れた業績を残した。ジュンガル部と、ハルハ部と清の抗争、侵攻より、遊蕩に耽ったダライラマ6世が退位、連行される途中で死去した後、生まれ変わりに認定され、1720年即位したが、後に内紛が起こり、地方に謹慎させられた。しかし、清との争いを調停して、1751年にダライラマ政権を復活させた。パンチェンラマ3世ペルデン・イェシェーの師

匠ともなった。
本書もまた『タントラ部所説の諸天衆の成就法を一部に提示したもの － 益楽の願いすべてを与える集成の藤樹－』に収録された成就法の一つであるが、特に東北No. 5829（27）と類似点が見られる。
まず、空性よりパム字から蓮華、ア字から月輪上に赤いフルーヒ字が生じ、そこから光明が放射され、そしてその光明が転変し、その中央に無量寿仏が不死の甘露水の満ちた瓶を手にしておられるのを観想することが説かれる。そして甘露水が頭頂から灌頂され、行者の身体に満ち、あらゆる汚れが除去される。同様に空性の性質に基づき、ブルーム字から宝石の器が広大になり、そこに満ちた甘露を無量寿仏に献上する次第が説かれる。こうした諸功徳によって、行者は無量寿仏の保護を受け、一切衆生も保護を受けるとある。長寿への願いから、無量寿仏の保護が多くの有情に及ぶことを目的としているようである。
作成者名：中御門敬教

mGon po Tshe dpag med par brten pa'i tshe'i dngos grub bsgrub thabs －Mi 'gyur rdo rje'i srog rtsa－

書名の日本語訳：教主無量寿に依る寿命の悉地の成就法－不変金剛の命根－
著者名：Blo bzang bsKal bzang rgya mtsho
著者名よみ：ロサン・ケルサンギャンツォ
著者名別名：Blo bzang rgya mtsho、Dalai Lama 7
著者生没年：1708-1757
成立翻訳年：18c.
成立地：チベット
所収文献名：rGyud sde nas gsungs pa'i lha tshogs du ma'i sgrub thabs kyi rim pa phyogs gcig tu bkod pa －Phan bde'i 'dod rgu ster ba yongs 'du'i 'khri shing－（ラサ版　東北No. 5853）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：The Collected Works (Gsung 'bum) of the Seventh Dalai Lama Blo-bzang-bskal-bzang-rgya-mtsho, Reproduced from a set of prints from the 1945 'Bras-spungs blocks from the library of the Ven. Dhardo Rimpoche by Lama Dodrup Sangye　Gangtok
・ラサ版　東北No. 5853 (5)　Nga. 20a1-22a5
・ The Collected Works (Gsung 'bum) of the Seventh Dalai
Lama 42, 2［21b2］－46, 1［23b2］
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No. 1132, Folios 20a1-22a5（ラサ版と同内容の別版である。右端に漢数字も記入されている。）
刊本の奥書刊記：1.（未調査）
2.（45, 5［23a5］）de ltar mgon po Tshe dpag med la brten nas / tshe'i dngos grub sgrub pa'i thabs mdor bsdus pa 'di ni / gnam bskos 'jam dbyangs gong ma'i rigs las dad stobs kyis mngon par 'phags shing / bzang po'i bag chags yongs su sad pas rnam par dge'i mkhyen dpyod rmad du byung ba'i ngo mtshar can gyi dam pa Ho shos Kheng Ze chen wang gis Tshe dpag med kyi snying po kha 'don du byed pa'i skye bo du ma la phan pa'i thugs bskyed kyis nye bar bskul te 'di lta bu dgos zhes gsungs pa dang du blangs nas shā kya'i dge slong Blo bzang bsKal bzang rgya mtshos mGar thar Yongs la sbyin pa gtong ba'i gtsug lag khang du sbyar ba'i yi ge pa ni drung yig Tshangs skyes Blo ldan no / /
（このように教主無量寿に依って、寿命の悉地を成就する方法を要約したこ［の典籍］は、転輪王・文殊皇帝の種姓に属し、信仰の力によって明らかに優れており、善良さの習気が完全に覚醒したので善で素晴らしく稀有な御智慧の優れた人であるホーショ（西モンゴルの一民族）のケンセーチェンワン（Ho shos Kheng Ze chen wang）が、『無量寿の心呪』を常用経文とした多数の者たちを利益する心を起こし、間近にお願いして、「このようなものが必要です」とおっしゃたのを受けて、シャカ族の比丘ロサン・ケルサン・ギャムツォ（Blo bzang bskal bzang rgya mtsho）が、ガルタルのヨンラ・ジンパ・トンワという経堂（mGar thar Yongs la sbyin pa gtong ba'i gtsug lag khang）で著述した。それを、筆受した者は司書ツァンキェ・ロデン（Tshangs skyes Blo ldan）です。）
現代語訳書：・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
参考文献：・China and Tibet in the early XVIIIth century history of the establishment of Chinese protectorate in Tibet、L. Petech、T'OUNG PAO, Leiden, 1972
・Life of the Seventh Dalai Lama, From the　Lam-rim-bla-brgyud by Tse-chok-ling、Translated and prepared at the LTWA by Glenn H. Mullin with Losang Dawa and Losang N. Tsonawa、The Tibet Journal vol.8-1, Spring 1983
・藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：著者は、モンゴル、清朝（康熙帝、雍正帝の時代）との度重なる紛争、介入の時代にあって、政治的に紛争の調停者として活躍しただけでなく、僧侶としても学問、著作、教育、大蔵経の改修、改版、寺院の興隆などに勝れた業績を残した。ジュンガル部と、ハルハ部と清の抗争、侵攻より、遊蕩に耽ったダライラマ6世が退位、連行される途中で死去した後、生まれ変わりに認定され、1720年即位したが、後に内紛が起こり、地方に謹慎させられた。しかし、清との争いを調停して、1751年にダライラマ政権を復活させた。パンチェンラマ3世ペルデン・イェシェーの師匠ともなった。
本著は、教主無量寿智（Skt. Aparimitāyurjñāna）に依り、不死の悉地を成就する次第を説いたものである。ダライラマ7世には当典籍を含め、阿弥陀仏を主尊とし、寿命の延命を願う四つの典籍が存在する。それら典籍が著述された経緯は各典籍の奥書に詳しく出ているが、いずれも各依頼者の要請に応え執筆されたものである。本書は『タントラ部所説の諸天衆の成就法を一部に提示したもの － 益楽の願いすべてを与える集成の藤樹－ 』に収録された成就法の一つであるが、この集成には顕密の様々な尊格に関する儀軌が集成されている。そして、本書の著作はモンゴルのホショット部の一貴族の要請に依るものである。
敬礼・供養・懺悔・随喜・勧請・廻向の諸儀礼を偈文で詳細に説いているが、そのような点は極楽願文とも共通している。
奥書きに言及される『無量寿の心呪（Tshe dpag med kyi snying po)』は「鼓音声ダラニ」と考えられる。チベットで流行した所作タントラに属するジターリの三部作と「鼓音声ダラニ」は関係が深い。
作成者名：中御門敬教

mGon po Tshe dpag med lha dgu'i dkyil 'khor du slob ma gzhug cing dbang bskur ba'i rim pa －'Chi med dpal ster zhes bya ba dang sMan bla mched bdun gyi rjes gnang skabs kyi chos bshad bcas－

書名の日本語訳：主無量寿九尊のマンダラに弟子を入れて灌頂する次第　－無死吉祥授与といわれるものと、薬師七兄弟の認可の章の説明を具えたもの－
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 1789, Folios 1a1-15a2
刊本の奥書刊記：（14b5）Tshe dpag med lha dgu'i dkyil 'khor du slob ma gzhug cing dbang bskur ba'i rim pa dang / ＋＋＋＋……＋＋＋＋ di yang snyigs dus kyi skye bo 'ga' zhig la phan phyir du Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma Phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos gzim chung bka' gdams pho brang du sbyar ba'o / /
/ oṃ swa sti / phan bde'i 'byung gnas rgyal bstan yongs 'du'i ljon / / rab rgyal 'gro kun thar mchogs 'bras bzang la / / spyod phyir bKa shis lhun grub chos grwa cher / / chos sbyin 'dzad med dal 'gro'i rgyun 'di spel / / sa rba dza ga taṃ / /
（無量寿九尊のマンダラに弟子が入って灌頂する次第と、（以下テキストの状態悪く不明）これもまた、濁世の或る人に益するために、シャーキャの比丘ロサンペルデン・テンペーニマ・チョクレナンギェルペルサンポが、［タシルンポ寺の］寝室であるカダム御坊で著作した。
　オーン、スヴァスティ、利益・安楽の源である仏教全体が集まる広大な楽園であり、衆生すべてが最上の解脱の妙果を受用するためのタシルンポの大寺院において、法施の無尽のこの流水の相続を増長させよう！サルヴァジャガタム）
解説：著者(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。
　本著は、所作タントラに分類されるジターリ流の阿弥陀仏成就法を伝授するための典籍であるが、一部には煩悩の浄化などにさらに進んだ概念も見られる。テキストの状態が悪く部分的に読解困難であるが、密教全般の概説を述べてから、具体的な成就法に入る。薬師七仏の行法と併収されているのは、病気平癒や長寿への願いが共通するからであろう。
　まず吉凶の夢の観察を通して空の証悟を説明する。次に大乗を因の波羅蜜乗と果の金剛乗から説明し、後者の4タントラの分類と解釈を概説する。次に〈無死鼓音声ダラニ経〉を引用し、主無量寿九尊の灌頂、無死寿命の悉地の授与を説明する。八葉蓮華の八方位と中央に無量寿仏を配置したジターリ流の無量寿九尊マンダラを目の当たりに見て、それを信解する。(東南の「宝無量寿仏」は「功徳無量寿仏」の誤り、ないし変更であろう。)。
　本行の成就法はジターリ著『無量寿智儀軌』に基づいて詳説される。灌頂により身の罪障と煩悩が滅し、〈無量寿宗要経〉の六波羅蜜偈頌により寿命の成就を祈願する。次に特定の煩悩を九尊に対応させて加持し、瓶灌頂(九瓶形と二瓶形)により五煩悩を浄化し、五識が転依するが、道は無相瑜伽、果は仏の法身の成就とされる。作法により如来の宝冠が成就されて灌頂がなされる。有縁の凡夫たちも三業の功徳が完成し、五仏を速やかに得るよう祈願する。こうして垢の五煩悩を浄化し、五蘊を転依してから、道は有相瑜伽、果は仏の色身の成就とになる。広く導く場合には三真言を読誦し、瓶の浄化力を上げるにはあらゆる業障相を列挙し、その寂滅を祈願するなどの方法により、瓶を洗浄する。弟子たちに対しては、不浄な逆縁の消除、魔障を除くことを説明し、成就法を説いてから、ジターリ著『儀軌』の「金剛決定句」を唱える。以上が灌頂儀礼の要約とされ、次に幾分詳細な補足として、種々の尊格とそれにちなんだ祝詞が挙げられ、障碍や苦の消滅を繰り返し祈願する。
　最後に「薬師七兄弟重楼の認可」の冒頭の解説があり、濁世の教化対象者のためのこの法を行ずることの意義が説明される。薬師七兄弟は『薬師瑠璃光七仏本願経』(大正蔵No.451,デルゲ版No.503 Da)の薬師七仏のことであり、「重楼（mtho brtsegs）」は、敬礼、供養、祈願の基礎となる資糧田の修習の方法であり、本尊上の虚空に歴代諸師を上や重ねて観想するやり方である。
作成者名：中御門敬教

mGon po Tshe dpag med lha dgu'i cho ga'i yan lag －Bla brgyud gsol 'debs smon lam shis brjod dang bcas pa－

書名の日本語訳：主無量寿九尊の儀軌の支分　－師伝承の祈願、誓願、祝詞をともなったもの－
著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje
著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ
著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje
著者生没年：1781-1855
成立翻訳年：19c前半
写本等の存欠：活字本
刊本所在：Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）vol.?, Ca.1a-5a, pp.34-36
刊本の奥書刊記：＊印刷不鮮明である。
（5a5）ces mGon po Tshe dpag med lha dgu'i cho ga'i yan lag Bla brgyud gsol 'debs smon lam shis brjod dang bcas pa 'di ni rDo rje 'chang dngos Kun mkyen Kon mchog bstan pa'i sgron me dpal bzang po'i gsung la skabs thob kyi kha bsgyur dang kha skong ba cung zad byas te / rje 'di nyid kyi zhabs rdul spyi bos len ba'i btsun gzugs Dam tshig Do rjes bsgrigs pa dge legs 'phal / /
（といった、この『主無量寿九尊の儀軌の支分　－師伝承の祈願、誓願、祝詞をともなったもの－』は、持金剛そのものである一切智者コンチョク・テンペードンメー・ペルサンポのお言葉に機会を得た改変と補足を少し行った［ものである］。この尊者自身の御足の塵を頭上で受けとった僧装のタムチク・ドルジェが集成した。善が善く増長しますように。）
解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ

（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジゥツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。

本作はジターリ流成就法の支分となる祈願文・誓願文・祝詞文の三部を集成したものである。

初めの「祈願文」では、ジターリ流成就法の伝承者名を挙げつつ、祈願が繰り返される。

続く「誓願文」では、阿弥陀仏・極楽往生・仏道一般に関わる誓願が繰り返される。すなわち以下の内容であるが、そこには「菩提道次第」の捉え方が反映されている。無量光仏の位を速やかに得ること、勝者が称讃した道を学ぶこと、六道の衆生を父母として理解することにより起こる菩提心と生存の根本を断つ正見などの共通道（顕教の波羅蜜乗）によって心相続を治浄すること、全ての誓言を作法通りに護ること、順縁を完全に成就すること、凡人の執着と垢を洗い清めること、有相瑜伽と無相瑜伽（所作タントラの内容）を完成すること、勝者および仏子の事業を成就すること、恐怖と煩悩の闇を除くこと、極楽世界に往生して勝者を供養し歓喜させることである。この段の最後においては、善く説かれた教誡の精髄を味わい、菩提行を究竟して、一切智の最高の境位を得て、一切衆生を利益安楽に安住させるよう誓願がたてられる。

最後の「祝詞文」では、ゲルク派の「近伝」ないし「文殊流」の無量寿五尊の文献と同じく、無量寿仏、軌範師ジェーターリ、ティンジン・サンポ（ラマ・サムテンサンポ？）、ヴァジュラーサナ父子、持金剛・根本師などの直接的諸師や伝承的諸師といった、無量寿仏からツォンカパを経た菩提道次第の伝承者たちに対して、吉祥が祈願される。続いて無量寿智決定威光王如来（〈宗要経〉所説の阿弥陀仏）の眷属の諸尊に守護されるよう願い、無量寿主九尊に対して、吉祥が祈願される。その後で、所作タントラの〈宗要経〉〈鼓音声ダラニ〉に言及しつつ、種々の善の集まりを列挙して、安楽と善の相続が絶えない吉祥があるよう願い、完了している。

作成者名：中御門敬教

mGon po 'Od dpag med kyi bstod pa －Zhing mchog sgo 'byed－

書名の日本語訳：教主無量光の讃　－最上国開門－
著者名：Tsong kha pa
著者名よみ：ツォンカパ
著者名別名：Blo bzang grags pa, Blo bzang grags pa'i dpal
著者生没年：1357-1419
成立翻訳年：14-15c.
成立地：チベット
所収文献名：rJe thams cad mkhyen pa Tsong kha pa chen po'i bka' 'bum thor bu（ラサ版　東北No. 5275）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5275（17）, Kha. 16a-17a
・タシルンポ版, Kha. 19a2-20a2
・北京版　大谷No. 6018, rJe 3, Ga. 16a1-16b6
刊本の奥書刊記：（P.Ga.16b5）mGon po 'Od dpag med kyi bstod pa Zhing mchog sgo 'byed ces bya ba 'di ni Mang du thos pa'i rgyal khams pa Blo bzang Grags pa'i dpal gyis gangs can khrod kyi gangs ri'i dbang po 'O de gud rgyal gyi lHa zhol du sbyar ba'o//
（『教主無量光の讃　最上国開門』というこれは、多聞の遊行者ロサン・タクペーパルが雪国（チベット）の雪山の王オデグンギャルのハショルにおいて著作した。）
参考文献：・釈舎幸紀「無量光仏礼讃文をめぐって（序説）－その解説と和訳－」（『高田短期大学紀要』3、1985）
・石浜裕美子、福田洋一『聖ツォンカパ伝』（大東出版社、2008、p.140,187）
解説：ツォンカパ・ロサンタクパは、現在チベットの最大宗派ゲルク派の開祖である。本著は短い極楽願文であり、著作の場所オデグンギャルの聖地は、その麓でツォンカパは隠棲して文殊を成就し、弟子たちに教え、『真言道次第大論』などを現している。ツォンカパは晩年にガンデン寺において施主のために極楽願文を造ったとされているが、それはツォンカパの著作のなかでは著作場所が記されていない無題の小品集のどれか、またはその全体をいうように思われる。ツォンカパは阿弥陀仏の讃を顕密両方で著作したが、これは顕教の讃である。

内容は、有情の不死を乞い、極楽浄土の教主であり救済者である阿弥陀仏のすぐれた諸特性を大乗顕教一般に理解される面から叙述しては賞讃を繰り返すというものであり、その点では、同じ著者による同名のサブタイトルをもった誓願文と共通している。「一切の善逝に賞讃される極楽浄土」「諸々の苦の名も生じていないので極楽と呼ばれる有名なそこ」等と〈阿弥陀経〉〈無量寿経〉と一致した記述もあるが、極楽を「救護者のあなたの百コーティの誓願によりみごとに成就した最高の国土」と見なすようなより通大乗的な記述もある。終わりに、今生で亡くなるとき、蓮華に生まれて見仏・聞法すること、衆生済度のために観自在・勢至の行を行うことを誓願する。

作成者名：藤仲孝司

mGon po 'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba'i nyams len mdor bsdus

書名の日本語訳：主無量光に依った遷移の実践の要略
著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa（クンタン3世）、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c末-19c前半
所収文献名：mGon po 'Od med la brten pa'i 'pho khrid sogs kyi skor Dag zhing du mar bgrod pa'i myur lam（主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 38, New Delhi 1975　Vol.6 Ca , 'Pho-khrid 1a-5a2, 353-361　（なお別の版では Nya巻）
刊本の奥書刊記：（6b6-7a2）mGon po 'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba'i nyams len mdor bsdus 'di ni/ bsngags 'os yon tan du mas mngon par mtho ba rGa sho'u sprul sku Blo bzang dbang grags rgyal mtshan gyis bskul ngor/ bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron meds Ka ju'i mkhar du bris ba skye 'gro kun la phan thogs par gyur cig//
（この『主無量寿に依った遷移の実践の要略』は、賞賛されるべき多くの功徳により高き者とされる、ギャショウ活仏ロサン・ワンタク・ギェルツェンが勧めたのにちなんで、尊者コンチョック・テンペードンメが河州城（現在の甘粛省にある）において書いた。一切衆生に益しますように！）

参考文献：・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』　（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993、pp.226-232, 267-277）
・田中公明『性と死の密教』（春秋社、1997）pp.205ff.
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。
　『主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－』には8つの小品が含まれるが、そのうち第1から第6までは、無量光仏に関する実践しやすい方法をまとめたものであり、臨終時に悪趣の恐れから済度され、極楽往生することを祈願するものである。本著はそのうち第一で最長のものである（ちなみに、第7は〈宝積経、普見如来の国土の荘厳（＝文殊師利授記会）〉所説の文殊・普見如来に依って南方のその誓願如実成就清浄無塵積集という浄土へ遷移する方法、第8は大悲観自在に依ってその浄土ポタラへ遷移する方法である）。第1の著作に出る祈願文は一部省略して第２、第３、第４の小品にも用いられている。
　本著作には序論がある － 仏の教えすべては最終的に無住処涅槃に赴くが、実践上は最初、輪廻を厭うこと、特に悪趣の門を封ずることが必要である。そこで「強力な成仏方法、遷移（ポワ）の教誡」といった行いやすく利益が大きいものを中心に努力すべきである。「ポワの教誡」は本来〈秘密集会〉など無上ヨーガ・タントラにしか出ないが、先師たちは無量光仏と弥勒菩薩などに依る遷移を多く説かれた。中でも無量光仏に依るものは、仏の本願が成就したので聞名により往生し一生補処から退転しないと説かれたから、特別である。だから多くのダラニや経に極楽往生が説かれたが、往生するには〈無量寿経〉、ツォンカパ著『最上国開門』のように、無量光仏を信ずる、極楽往生を願う、善根すべてを往生の因として廻向するという三つが不可欠であり、大乗者はさらに発菩提心が不可欠である。だから、自心を観察して順縁の基礎を持ち、逆縁を離れて実践すべきだという。
　本行において、まず無量光仏と極楽の荘厳を明確に観想し、供養、帰依など共通の前行を行う。次に智慧サッタ、三昧耶サッタを招き、七支供養を行って、自身の脈管と滴を観想し、面前の師尊に祈願する。無量光仏が頭上から出現した、または自己が彼のようになったと観想し、滴と種字が頭上から自身に溶けるのを観想して、祈願する。仏の心臓の種字が光の鈎のように自心の滴に降りて、自己も風を上昇させて、ヒックにより仏の心と無差別にし、パットの種字により極楽に往かせ、蓮華の芯から意成身を受けて、仏より法の甘露を享受すると信解する。最後に仏が光に溶けて梵浄穴を制したと信解すると勝れた加持となり、甚深の寿命成就の教誡にもなるという。そして善行により無量光仏の御前が荘厳されるよう廻向する。
作成者名：藤仲孝司

mGon po 'Od dpag med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor　－bDe ba can gyi myur lam－

書名の日本語訳：主無量光に依るグル・ヨーガ － 極楽の速疾道 －
著者名：rNga rgod byams pa rab rgyas
著者名よみ：ガ・ゴ・チャムパ・ラブギェー
著者名別名：rNga rgod 03 blo bzang byams pa rab rgyas
著者生没年：1781-1849
成立翻訳年：19c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：rNga rgod byams pa rab rgyas kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.81, 1a-4a　pp.75-76
刊本の奥書刊記：（3a2-3）
'di yang rGya ma chen nas dad ldan A myes Tshe dbang rab brtan gyis nan tan chen pos bskul ngor/ /Shākya btsun Sudhi mitra'i ming gis khrums stod zla ba'i yar tshes dga' ba dang po'i nyin gNyan chen skong lha'i zhol du sbyar ba'i Yi ge pani dGe slong dKon mchog blo ldan no/ /
（これもまた、ギャマチェンから浄信あるアメェー・ツェワン・ラプテンが、きわめて慇懃に勧めたのにちなんで、釈迦の僧侶スディミトラの名［を持つ者］により、［28宿のうち、］室宿の月の上弦の祝日の一日の昼、ニョンチェン・ハィショルにおいて著作された［。その］筆受者は、比丘コンチョックロデンです。）
解説：著者はアムド出身で、ゲルク派の人である。ジャムヤンシェーパ2世コンチョック・ジクメーワンポによりガゴ・ナムケーセンゲの転生者に認定され、タシキルに学んだ。
　この著作には小さなグル・ヨーガ文献が含まれており、そのうちの第一作が無量光仏に依るものである。他には観自在菩薩・薬師仏・阿閦仏に関するグル・ヨーガも見られる。
　行者は自己の頭頂の宝座に無量光仏を観想する。三処の種字が光を放って、極楽から無量光仏と眷属を招き、彼らが溶けこんで無二になる。次に七支供養を行うが、それが本典籍の中心となっている。なかでも第6支の祈願が詳しい。主無量光仏に対して、死と中有の恐怖や悪趣への転落からの救済と、極楽への引導、そこでの化生・見仏・聞法、仏道の成就を祈願している。第7支の廻向では、無量光仏が光に融けて行者自身に溶け込み、仏の身語意の加持が自己に入ったと思念して、願文を唱えて誓願すべきであるという。そこに出てくる願文のうち、2か所はツォンカパの『最上国開門』の誓願文の一部（パンチェン1世の『極楽国土に障碍無く往く速疾道』東北.No.5958 Na 4b5,5b1 にも引用）に確認できる。
　末尾には、釈迦牟尼仏が極楽国土の浄土とそこに生まれる菩薩についてたびたび賞讃を述べたこと、安楽な国土において有情に癒しを与えるこの方法は勝れていることを述べ、有暇・具足の身を有意義にするためにそこに往生する誓願を立てて、その因として善を成就すべきだと勧めている。
作成者名：藤仲孝司

mGon po 'Od med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor　－Zhing mchog sgo 'byed－

書名の日本語訳：主無量光に依るグルヨーガ・最上国開門
著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa(クンタン3世)、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c後半-19c前半
所収文献名：mGon po 'Od med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor Zhing mchog sgo 'byed sogs Bla ma'i rnal 'byor gyi rim pa phyogs bsgrigs（主無量光に依るグルヨーガ・最上国開門など、グルヨーガの次第の編纂）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ

DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 35, New Delhi 1972 Vol.3, Ga, Bla-rnal 1a-7a1, 905-917（なお別の版では Nga巻）
刊本の奥書刊記：（6b6-7a1）
mGon po 'Od med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor Zhing mchog sgo 'byed ces bya ba 'di ni dad brtson blo dang ldan pa bSod nams rin chen gyis bskul ba'i ngor / bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes bris pa'o/ /
（主無量光に依るグルヨーガ・最上国開門というこれは、信・勤・知の人である、比丘ソナム・リンチェンが勧めたのにちなんで、尊者コンチョク・テンペードンメが著わした。）
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。

グル・ヨーガは、自己の根本師を一切諸仏菩薩の集まったものとして行う加行法であり、チベットではよく用いられる。本著は、宗祖のツォンカパの極楽願文〈最上国開門〉に関係して行うものである。この題名のもとに弥勒、文殊、著者の師などに関するグル・ヨーガも収録されているが、それらは極楽浄土、阿弥陀仏との関係はない。内容は、輪廻の苦、特に死や三悪趣の恐怖から自己や父母である六道の衆生が済度され、極楽浄土に往生し、正等覚者になるよう、遷移（ポワ）と同様の加行を通じて、祈願するものとなっている。

具体的には、まず面前に仏菩薩を招き、唯一の救済者たる三宝に帰依し、特に無量光仏とその眷属に帰命する。発心・祈願し、自己を無量光仏として生起させる。一切有情についても同様である。フリーヒ字の転変から根本師と無二となった無量寿仏を観想する。三処の三種字から光が放たれ、西方浄土から無量光仏と眷属を招き、彼らを証人として祈願を行う。招かれた智慧サッタが三昧耶サッタと同一になり、三宝に帰依し、無量光仏に帰命し、死の恐怖や三悪趣の苦からの済度を祈願する。ここで無量光仏、さらに普賢・文殊・観自在・虚空蔵・地蔵・金剛手など八大菩薩に恐怖からの済度を祈願する。それにより、彼らの身体から甘露が流れて、自己と有情の頭頂から入り、業障などを浄化し、加持を得たと思惟する。次に無量光仏に対して帰命し、供養する（割註には前述の一般的な目的の上に当面の目的を結び付けてもいいという）。祈願することにより、行者の中央脈管に無量光仏が溶けて、無量光仏の心臓のフリーヒ字と行者自身の心臓の方で輝く白い滴になったと観想して、先と同様に祈願する。次に無量光仏が甘露の相として光に溶けて行者の中央脈管に満ちると思惟する。

そして（割註には、詳細にはツォンカパの〈極楽願文〉全体を唱えるべきであるという）、臨終に行者は無量光仏と眷属を見て、中有の恐怖から解放され、極楽に蓮華から化生し、面前に授記を得て、穢土に教化し、菩提行を行うこと、臨終と世々に無量寿主を見て摂取され、不退転に利他を行ずることを祈願する。最後に釈迦牟尼・無量光・諸菩薩の諦力によりこれら誓願が成就することを祈願する。
作成者名：藤仲孝司

rGyal ba Tsong kha pa chen po'i bDe chen smon lam gyi sa bcad

書名の日本語訳：勝者である大ツォンカパの『大楽誓願』の科文
著者名：dPal sprul rin po che
著者名よみ：ペルトゥル・リンポチェ
著者名別名：dPal sprul rdo rje 'chang、［rDza dpal sprul］O rgyan 'Jigs med chos kyi dbang po、dPal sprul 'Jigs med chos kyi dbang po
著者生没年：1808-1887
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（p.454）Sel shul dgon lha ram(s?) par A bu bka' drin can gyis bskur ba lags so / / / /
（セルシュル寺院のハラムパ［博士］に対してアプ・カディンチェン（恩のあるアプ）が勧めたものでございます。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs smad（四川民族出版社、pp.452-454、1994）
参考文献：・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』永田文昌堂、pp.518-525, 691-701、2002
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.39, note82
解説：著者は sDe dge に生まれた。ジクメーリンパ（1729 / 1730－1798）の高弟ドゥドゥプチェン(rDo grub chen)1世ジクメー・ティンレー・ウセル('Jigs med 'phrin las 'od zer.1745 -1821）により dPal dGe bsam gtan gling の活仏に認定されて、同寺の座主を務め、カルマ・カギュ派やニンマ派の系統の無宗派運動(Ris med)の指導者となった。またチョクギュル・デーチェンリンパ（mChog gyur bde chen gling pa） より、彼のした埋蔵経『最勝楽仏平等ヨーガ』（bDe mchog sangs rgyas mnyam sbyor ）や、『三明の心髄の滴』（Rigs gsum snying thig ）の灌頂や伝授を受けた。弟子にドゥドゥプチェン・ジクメーテンペーニマ（ rDo grub chen 'Jigs med bstan pa'i nyi ma. 1865-1926) などがいる。またミーギュルドルジェとカルマチャクメーの「虚空法」(gNam chos)の無量光仏に関する遷移の法を、自著『普賢ラマの御教え』(Kun bzang bla ma'i zhal lung) に取り入れており、これはチベット全体のニンマ派に流行した。彼ら無宗派運動の人々は、極楽願文を幾つも著し、阿弥陀仏信仰を盛んにした。

本著は梶浜［2002］に和訳された同じ著者による作品 Tsong kha pa mdzad pa'i bDe smon zhing khams sgo 'byed 'don 'grigs と同一の典籍と思われる。

内容としては、題名には科文とあるが、本書は段落分けのみでなく、内容をも簡略にまとめている。ツォンカパの〈最上国開門〉では〈無量寿経〉を根拠として極楽往生の4条件を説いているが、それを本書は踏襲している。すなわち、1.極楽と無量光仏の特性を念ずること。2.善根を無量に集積すること。3.発菩提心。4.往生のために善根を廻向する、の4因である。さらに、〈無量寿経〉や〈入菩提行論〉や〈普賢行願讃〉からの引用を用いて、極楽往生の道を示す。
作成者名：藤仲孝司

rGyal ba Tshe dpag med sogs lhag pa'i lha rnams kyi bla ma'i rnal 'byor gyi skor

書名の日本語訳：勝者無量寿など諸勝尊のグル・ヨーガの法類
著者名：dByangs can dga' ba'i blo gros
著者名よみ：チャンチャン・ガーワェロドー

著者名別名：A kyā yongs 'dzin Blo bzang don grub, A kyā yongs 'dzin
著者生没年：1740-1827
刊本所在：・東北 No.6590 ［Ka 1-6］
刊本の奥書刊記：（Kha 2b4）'di ni yig rigs du ma sogs rig gnas la rnam dpyod yangs pa Thu med Rab 'byams pa dKon mchog chos 'dzin gyi 'dod mos bzhin/ dByangs can dga' ba'i blo gros gyis sbyar ba'o//
(これは、多くの文字類など明処の伺察が広大な、トメー・ラプジャムパ・コンチョック・チョジンの希望のとおりに、ヤンチャン・ガーワェロドーが著作した。)
（印刷状態が良くないので、本典籍所収の他の典籍の奥書をも参照、ほぼ解読することができた。）
参考文献：・クンチョック・シタル、ソナム・ギャルツェン・ゴンタ、齋藤保高『実践チベット仏教入門』（春秋社、1995年、p.169ff.）
解説：著者はゲルク派の学者であり、ラデン活仏 Rwa sgreng Blo bzang ye shes bstan pa rab rgyas の法嗣である。sKu 'bum bla ma A kyā ye shes skal bzang mkhas grub rgya mtsho の大師を務めたので、A kyā yongs 'dzin とも呼ばれる。

本著は無量寿仏によったグル・ヨーガの行法である。これは、自己の根本師を一切諸仏菩薩の集まったものとして生起させて行う加行法であり、チベットではよく用いられる。本典籍には、1.根本師を主無量寿と見て行うもの（1b-2b4）、2.「世尊普明大日の門から罪障を浄める方法」（2b4-4a2）、3.「聖白ターラーに依るグル・ヨーガの成就の宴」（4a2-5b2）、4.マンジュゴーシャへの願文（5b3-6a6）という四つの小さな著作が収められており、部分的に割注が入れているが、全体的に印刷状態が良くない。

内容は、自己の頭上に根本師たる主無量寿を観想し、三帰依処を招いてから、七支供養を行う。次に真言蔓・ダラニを観想し、光を観想する。次に行者は甘露により満たされ、成就を獲得したと観想し、ダラニを唱える。そのダラニは印刷状態が不良のため確定は困難であるが、クンガサンポ『無量光の寿命の成就』に引かれる「オーム、アマラニ、ジーヴァンティエー、スヴァーハー（Skt. oṃ amaraṇi jīvantiye svāhā）」と、「長ダラニ」すなわち「無量寿の心呪の真言」（cf. 東北No.5170（226））と思われる。

最後に自己が主無量寿となり、退転しないことを誓願し、廻向する。
作成者名：藤仲孝司

rGyu bzhi'i sgo nas bde chen zhing du skye ba'i smon lam －rNam mkhyen lam bzang－

書名の日本語訳：四因を通して大楽国土に生まれる誓願－一切相智の賢道－
著者名：Grwa lag Byang chub rdo rje
著者名よみ：タラク・チャンチュプドルジェ
著者生没年：？
成立翻訳年：？
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.291）de ltar rgyu bzhi tshang ba'i smon lam 'di / / dang po'i las can rlung gseb mar me'i gzugs / / bho dhis yid ngor bkra ba'i kun rtog 'ga' / bris 'dis bde gshegs chen po 'grub gyur cig / /
（このように四因円満なこの誓願は、初業者であり、風中の灯明の姿［の者であり］、菩提による心中の吉祥な分別なるものが、記した［。］これにより、偉大な善逝が成就しますように。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.280-291、1994）
解説：著者はTBRCでは Byang chub rdo rje の付いた人名は多く、どの人であるのは直接に確認できない。活字本にも書誌情報がないが、同書は著作を著者の年代順に並べているようであり、ジャムヤン・ケンツェー・チョーキロドー(シェチェン・ギャルツァプ(1871-1926)の弟子)、ジクレル・イェシェー・ドルジェ(1904-1988)、ダプクン・パドマリンチェン(年代不詳)、ツァプツァ・ドゥプゲンパ(年代不詳)、本著という順序になっているから、20世紀の人であろう。

本著は9音節4句の65偈で構成された極楽願文である。著者独自の視点から極楽往生の四つの因という主題を設定し、それらに関して多種多様な誓願がたてられている。

誓願の内容はおおまかに見て、自利利他に関して世間と出世間の円満や修証を願う様々な誓願、極楽国土の荘厳や無量光仏の功徳についての観想、無量光仏による引導、極楽への往生、さらなる菩提行の実践を願う種々の誓願である。そこには〈無量寿経〉の所説も断片的には見られるが、一般的には密教を含めたインド・チベットの大乗仏教の通念が反映されているようである。

本文には科文が挿入されており、それらによる本著作の構成は次の通りである。［帰敬偈］（vs.1-2）、１）第3の因として、善根を菩提に廻向すること（vs.3-7）、２）第1の因として、所依と能依の本体をあらゆる面よりたびたび思惟し、成就することを願うこと（vs.8-18）、３）第4の因として、かの世間に生まれるよう誓願をたてること（vs.19-43）、４）第2の因として、無量の善根を生じさせるために、輪廻の［衆生がいなくなる］までの間、教えと衆生への利益（すなわち仏法興隆と衆生利益）のために、甚深なる誓願をたてたこと（vs.44-64）、［結偈（奥書）］（v.65）である。

極楽往生の四因は一般的に〈無量寿経〉に基づいて、ツォンカパの『最上国開門』に説かれたものが有名であり、それは無宗派運動の人々を通してニンマの人たちにも広まった。すなわち、1. 繰り返し阿弥陀仏を随念すること、2. 善根を無限に積むこと、3. 菩提心を生ずること、4. 善を往生のために廻向することである（パンチェン1世のように第5に誓願を挙げる場合もある）。本論でも割注に、因に第1から第4まで番号を付けているのは、それに従ったのだと思われるが、なぜ本論では異例の順序で提示されているのか、なぜそれが割注では一般的な4つの因に配当しなおされているのかは、不明である。なお、「所依と能依」は「住持されるものと住持するもの」という意味であり、具体的には「所依」は国土とその荘厳、「能依」はその教主無量光仏をいう。
作成者名：藤仲孝司

bCom ldan 'das mGon po Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i bskyed rdzogs kyi khrid sgom tshul zin bris su btab pa

書名の日本語訳：世尊主無量寿智の生起［次第］・究竟［次第］の導き、修習方法を記録したもの
著者名：Paṇ chen gsum pa Blo bzang dpal ldan ye shes
著者名よみ：パンチェン3世ロサン・ペルデン・イェシェー
著者名別名：Blo bzang dpal ldan ye shes、Shākya'i dge slong Blo bzang dpal ldan ye shes、Blo bzang dpal ldan bstan pa'i ye shes dpal bzang po
著者生没年：1738 -1780

成立翻訳年：18c後半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No.1402, Folios Dza Tshe-bskyed-rdzogs 1b1-8b3
刊本の奥書刊記：8a3-b2
sbul lo sa zla'i yar ngor dben gnas dGa' ldan bDe chen rab rgyas kyi gzims chung du sKyabs mGon thams cad mkyen gzigs chen po rJe btsun Blo bzang dpal ldan bstan pa'i ye shes dpal bzang po'i zhal snga nas kyis brtse ba chen pos rjes su bzung ste thun mong ma yin pa'i Tshe dpag med kyi dbang dang bskyed rdzogs kyi bka' khrid zab mo don bsdur sgril ba bka' drin che dus ? ljags bshad kyi dmigs rkang rnams brjed tho zin bris su bkod pa'o//
（偈頌省略）
mjug gi tshigs su bcad pa 'di ni rDo rje 'chang chen po rJe btsun Blo bzang dpal ldan ye shes dpal bzang po'i zhal gyi bum bzang ? stsal ba yin cing jin bris kyi ngo bo 'debs pa po 'Jam dbyangs gong ma'i lung? gis tha sa lag chi gad? zhes bsngags shing/ gzung lugs kun la mkyen pa'i sPyan dkyus mchog tu ring pa'i dgung blon chen po ni yon paṇḍ.ida mGon po dngos grub rab bstan gyi kyi mkhyen rab kyi ?las byung ba' o//
（蛇年の氏宿月（3月、4月にまたがる）の上弦に、閑寂処ガンデン［寺］のデーチェン・ラプギェーの寝室において帰依主で大いなる一切知見者であるロサン・ペルデン・テンペー・イェシェー・ペルサンポ御前が大慈悲をもって摂取し、非共通の無量寿の灌頂と生起・究竟［の二次第］の深い導きの要義をまとめられた［その］ご恩の大きなとき？(祝日に?)、解説の所縁句義を、備忘の記録として提示した）
（終わりの偈、これは大持金剛尊者ロサン・ペルデン・イェシェー・ペルサンポのお口の妙瓶を授けられたし、〔それを〕記録物にする者は、文殊皇帝（清国皇帝）の命令？により、「　？」と賞賛されて、教義すべてを知る広目の大臣ノヨン・パンディタ・ゴンポ・ノードゥプ・ラプテンの智慧の？より生じた。）
解説：著者は、パンチェンラマ3世（追贈を含めた場合 6世）としてタシルンポ寺の座主を務めた。師にはガワン・チャムパ(Ngag dbang byams pa.1682-1762)やダライラマ７世ケルサン・ギャムツォ(sKal bzang rgya mtsho.1708-1757)などがある。
　本著は無上ヨーガにおける生起・究竟の二次第での無量寿仏成就法の難しい行法を、簡略にまとめた典籍である。ゲルク派での「近伝」の無量寿五尊の伝統に連なり、無量光仏の化身パンチェンが弟子に指導することを目的としている。
　具体的には、修行場所の準備と一般的前行の後、グル・ヨーガを行い、心を整えて自身を空だと修習し、呼吸を整え、面前に無量宮と甘露を観想し、生起次第を始める。唾液を飲み込み、臍に安住させ、上を向いて呼吸する。西を向いて坐り、空性から宝座の根本師の姿として無量寿仏を観想する。その頭頂にケルサン・ギャムツォまでの近伝の諸師と、ロサン・ペルデン・イェシェー、行者自身を観想する(割注に文殊師利からの伝承が示される)。これら諸師やツォンカパの心臓・頭上に無量寿仏を帰依処として明確化し、その身体の三処の三種字から放光・召還・灌頂・供養・賞讃を行う。寿命成就の甘露を観想して伝統の諸師に祈願し、甘露が身体に流れ込み、四灌頂を受け、障碍を浄化する。諸師は光に、光は無量寿に溶けこむ。今度は行者自身を無量寿として、または中央脈管に無量寿を修習する。次に延命の作法として、散失した寿命を甘露に満ちた瓶と髑髏杯の形で持物の瓶に招く。甘露が行者の梵穴から流入し、寿命を回復、増大させる。五大種の精髄と寿命、次に諸天と転輪王の寿命・福徳・威光の順序で同様に生じさせる。恩師と伝統の諸師の加持、仏菩薩の慈悲、護法神の威力に関して同様に行い、身語意の誓言、律儀を回復し、寿命を増長させる。寿命包摂の次第も同様に信解し、心呪・ダラニを唱えて行った最後に、頭上の無量寿が光に、光が自己に溶けて、自己は甚深・光明の双入した無量寿そのものだと慢ずる。行を離れたとき、睡眠のときも供養・廻向・観想を続ける。この方法は根本講釈の所縁類の憶え書だという。
　究竟次第では、まず身体の中央脈管を明確化し、風の活動を観想する。本行では8の所縁を順次、修習する摂寿儀礼を行うが、これらは後期密教の身体論に基づく生理的ヨーガの実践である。さらに頭頂の無量寿仏の心臓の光、持物の瓶の甘露、種字を観想して、病魔・罪障を除去し、加持を得て、失われた寿命を回復し、寿命の成就を得る。
　最後に祈願・廻向・誓願を行い、この作法はできるだけ日々実践すべきであるが、時折吉日に行ったとしても、長寿と無死金剛無量寿を成就することになるという。
作成者名：藤仲孝司

bCom ldan 'das mGon po 'Od dpag med la mchog cing gsol ba gdab pa'i cho ga －dGe legs dpal ster－

書名の日本語訳：世尊無量光主を供養し祈願する儀軌　－善吉祥を与えるもの－
著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje
著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ
著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje
著者生没年：1781-1855
成立翻訳年：19c.
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs sgrigs（天津古籍出版社）vol. ？, Ga, 1a-32a, pp.53-68
刊本の奥書刊記：（31b1-32a4）
bCom ldan 'das mgon po 'od dpag med la mchog cing gsol ba gdab pa'i cho ga dGe legs dpal ster zhes bya ba 'di ni / phyogs mthar bstan pa'i rgyal mtshan mi nub par 'dzin pa'i dge ba'i bshes gnyen bla ma Rab 'bams pa Grags pa rgyal mtshan gyis / phyogs 'di'i skyes dgu'i bsod nams gsog pa'i zhing mchog dam par rgyal ba 'Od dpag med kyi sku brnyan che ba gtsug lag khang dang bcas pa zhig bzhengs thog phya mchod smon lam sogs kyi cho ga'i rgyun 'dzugs rgyur / cho ga 'di lta bu zhig cis kyang gsar du bsgrigs dgos zhes 'phrin yig gi lam nas nan cher bskul ba don yod par bya ba'i phyir / dam pa gong ma rnams kyis mdzad pa'i sangs rgyas byang sems du ma'i mchod cho ga gi babs la gzhigs nas / 'gal med 'khyer bde'i tshul du/ bla ma dam pa du ma'i zhabs rdul spyi bos len pa'i rmongs rgan ba? ku pa?/ Dam tshig rdo rjes bsgrigs pa'i yi ge pa ni / rnam dpyod ldan pa'i rdo rje'i slob bu dge tshul bKra shis rdo rjes bgyis pa 'dis kyang bstan pa dang 'gro ba kun la phan bde rgya chen po 'byung ba'i rgyur gyur cig / / dge legs?
(『世尊無量光を供養し祈願する儀軌　－善吉祥を与えるもの－』というこれは、［諸々の］方向・辺境において教えの法幢が没しないよう受持する善知識、師ラプジャムパ・タクパ・ギェルツェンが、この地方の九生の福徳を積

む最上の田として、勝者無量光の大きな像を寺院と合わせて建立する初めに、礼拝・供養・誓願などの儀軌の相続を築く因として、このような儀軌をどうしても新たに編纂することが必要だと、書簡にて慇懃に勧めたのが空しくないように、勝れた先師たちの造られた多くの仏菩薩の供養儀軌のありさまを研究して、相違なく行いやすい仕方で、多くの勝れた師の御足の塵を頭で受けた愚かな老人、タムチク・ドルジェが編纂した［。その］筆受者［の役割］は、伺察を具えた金剛弟子、沙弥のタシ・ドルジェが行った。これによってもまた、教えと衆生すべてに広大な利益・安楽が生ずる因となりますように！善かれ！)

参考文献：・梶濱亮俊『チベットの浄土思想の研究』（永田文昌堂、2002年）pp.351ff.

解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジェツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。

本著は、無量光仏の仏像と寺院を建立するにあたって、供養や祈願の作法を平易にまとめて、知恵の劣った人たちも大きな利益が得られるようにした著作とされている。一部分は影印の状態が悪くて読みにくい。

帰敬偈と著作の目的、宣誓（1b1-4）の後、序論（2a1-4a4）では、〈無量寿経〉〈悲華経〉〈無死鼓音声ダラニ〉により、過去に法蔵比丘が誓願をたて授記されたこと、極楽浄土で成仏して今も住しておられること、その国土の荘厳と眷属の徳性が紹介される。次に、ツォンカパ著『最上国開門』より極楽往生の意義と〈無量寿経〉にその四因が説かれた個所を紹介し、国土の荘厳や、仏と眷属の徳性を念ずることが重要であるとしている。

本論（4a4ff.）はそれをいかに行うかを実践しやすくしたものであり、1）加行、2）正行、3）終わりの次第という三部からなっている。加行（4a4-7b2）では、行の場所の準備、三宝帰依、発心、四無量心、地神の加持などの後、無量宮と無量寿仏を観想し、供養し、加持する。

正行（7b2-27b4）では、まず無量光仏以下の資糧田を招いて明確化し、沐浴を差し上げる。次に資糧の集積・罪悪の浄化の七支供養（9a3-19b6）を行うが、礼拝の支分は徳性への讃、供養では供養されるマンダラの観想、懺悔は四力による浄化と仏道修行への祈願などの内容が加えられて詳細になっている。さらに、ツォンカパ著『最上国開門』とインドやチベットの著作と〈無死鼓音声ダラニ〉を用いるべき讃・願文とする。次に誓願を立てる次第でも極楽往生の四因を確認し、行と行の間の境目に四供物を捧げて廻向するが、23a1-26a2 にはクンタン・コンチョック・テンペードンメ（1762-1823）著『極楽国土の功徳を思惟することと合わせて誓願を立てる方法 － 加持速入』Ca 1a3-4a6 が用いられている。

終わりの次第（27b4-31b1）でも七支供養を行う。その後、祝詞を唱え、勝れた資糧田に対して礼拝・供養・祈願する利徳を説き、〈無量寿経〉や〈無死鼓音声ダラニ〉を引用し、無量光仏の名や極楽浄土の功徳を聞いたり念ずることの功徳を強調し、浄信により行に精進することを勧めている。

最後は廻向の偈で終わっている。

作成者名：藤仲孝司

bCom ldan 'das mGon po 'Od dpag med la brten pa'i Bla ma'i rnal 'byor －'Pho ba'i nyams len dang 'brel ba 'khyer bde －

書名の日本語訳：世尊無量光主に依るグル・ヨーガ －ポワ（遷移）の実践と関係した携えやすいもの－

著者名：dGe 'dun rgya mtsho

著者名よみ：ゲドゥン・ギャムツォ

著者名別名：Dalai Lama 2

著者生没年：1475 / 1476-1542

成立翻訳年：15c後半-16c前半

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：mKhan chen dGe 'dun rgya mstho'i gsung 'bum, dPyod gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs /（天津古籍出版社）vol.29　Ga 30a2-32a6

刊本の奥書刊記：（Ga 31b6-32a6）'di lta bu'i 'pho ba'i gdams pa la rgyud sde las bsngags pa shin tu che ste / Paṇ chen Chos kyi rgyal pos kyang / / tshul 'di sdug can btsan thabs 'chang rgya' thabs/ /ma bsgom 'tshan rgya 'pho ba'i man ngag ces / bla med rgyud sde'i snying po bsdus ba yin / zhes gsungs so / / zhes 'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba nyams len tshul 'di ni / 'gro ba dang lha bcas pa'i skyabs mgon dam pa Rong po'i mchog sprul rin po che dGe 'dun 'phrin las rab rgyas pas 'di lta bu zhig bris zhes bka' nan chen po yang yang phebs pa la brten nas / rang nyid 'pho ba'i nyams len gnad la khel ba dang / 'pho ba'i gdams ngag la 'phrigs tshud pa ci yang med kyang / 'od dpag med la brten ba'i bla ma'i rnal 'byor la nyams len byed rgyu byung na 'pho ba dang 'brel ma 'brel gang yin kyang bde ba can du skye ba la khyad par che snyam nas Shākya'i dge slong mKhan po'i ming can dGe 'dun rgya mtshos rang blor shar tshod tsam zhig Rong po'i chos sder 'phral du smras pa'i yi ge pa ni dPon chun rab 'byams pa dge 'dun nam mkhas grub po / 'di la brten nas rang bzhan 'gro ba thams cad bcom ldan 'das mgon po 'od dpag med dang 'Jam mgon chos kyi rgyal po bTsong kha pa chen po dbyer med pas dgyes bzhin rjes su 'dzin par gyur cig / / mangalaṃ / /

（このようなポワの教誡について、タントラ部に賞讃はきわめて大きい［ものがなされている］。パンチェン法王も「この方法は罪を持つ者が直ちに成仏する方法［であり］、修習しないで成仏するポワの口訣であるといい、無上タントラ部の心髄をまとめたものであると仰っている」といって、［そのような］無量光に依ったポワのこの実践方法［について］は、天を含めた衆生［にとって］の勝れた帰依主ロンポの最勝化身宝［すなわち活仏］であるゲドゥン・ティンレーラプギェーが、「このようなものを書きなさい」といって、［著者に対して勧められた。その］命令がたびたび来たの［であった。それ］に依って、［著者］自身はポワの実践の枢要についての決定と、ポワの教誡についての体得は何も無いが、「無量寿に依ったグル・ヨーガについて実践すべきこと［を述べた著作］ができたなら、［それが］ポワと関係［する実践］または無関係の［実践の］どれであっても、［無い場合に比べて］極楽に生まれるためには違いが大きい」と思って、釈迦［族］の比丘である親教師の名をもつゲドゥン・ギャムツォが、自己の知に浮かんだほどを、ロンポ寺において、直ちに語った［。その］筆受者は、ポンチュン・ラプジャムパ・ゲンドゥンナムケードゥッポ。これに依って自他の衆生すべてを、世尊無量光と文殊主法王大ツォンカパとの無差別［一体なもの］が、

喜んで摂取してくださるように！吉祥あれ！）
参考文献：・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）pp.226-232, 267-277
・田中公明『性と死の密教』（春秋社、1997）pp.205ff.
解説：著者はツァンに生まれたゲルク派の僧であり、カルマ派との政治的対立の時期にあってゲルク派の先頭に立って勝利し、デプン、タシルンポ、セラなど大寺の座主を歴任した。彼の逝去後、ソナム・ギャムツォが彼の転生者に認定されたことにより、ダライラマの系譜が成立し、ゲドゥン・ギャムツォはダライラマ2世とされた。
　無量光仏とツォンカパを無差別の存在と見て行うグル・ヨーガ（cf.クンチョック・シタル他『実践チベット仏教入門』1995, p.169ff.）であり、極楽国に生まれるために無量光仏に依ったグル・ヨーガをポワと関係させて、あるいは関係させないで実践するためのものとされている。宗祖ツォンカパに対する信仰や修行と、無量光仏に関する信仰と実践を結びつけ、さらにポワ（遷移）の行法をも兼ねるようにしたものである。奥書の記述は、パンチェン1世ロサン・チューキギェルツェン（1567-1662）著『世尊無量光に依る遷移の略法』の奥書に対応する箇所があるが、これは年代を考えるなら、不可解である。著作の勧請にも関連して記述されているようであり、開版のときの追加と見ることも難しい。
　行法としては、成就法共通の前行の後、三つの種字から光を放って、極楽から無量光仏を眷属とともに招き、自己と一体になったことを観想する。無量光仏に対して、自己の成仏・往生と利他行の一環として七支供養を行い、祈願・廻向・誓願する。以上がポワ（遷移）と無関係の実践方法である。ポワと関係した実践方法は、七支供養の後、後期密教の生理的なヨーガにより自己の身体の脈官・滴を修習し、今生の享受への執着を捨て、祈願し、帰依する。悪趣から有情を済度し、浄土へ引導する無量光に祈願し、仏からの光が自身に入って溶け、自己が極楽に化生し、見仏し、聞法するのを思惟する。最後は前述のように祈願・廻向・誓願する。
作成者名：藤仲孝司

bCom ldan 'das Tshe dpag med la brten nas tshe ril sgrub tshul gyi cho ga Tshe dang bsod nams 'phel bar byed pa'i bsam 'phel yid bzhin nor bu

書名の日本語訳：世尊無量寿に拠って寿命丸を成就する仕方の儀軌　－寿命と福徳を増長させる如意宝珠－
著者名：Blo bzang nor bu shes rab
著者名よみ：ロサン・ノルブ・シェーラプ
著者名別名：Chings su tsug thu No mon han Blo bzang nor bu shes rab、Su ma ti ma ṇi pradznyā
著者生没年：1677 / 1737－
成立翻訳年：17c　/ 18c.
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0293, Folios 1a1-15b2
刊本の奥書刊記：（15a6-bb2）bCom ldan 'das tshe dpag med la brten nas tshe ril sgrub tshul gyi cho ga Tshe dang bsod nams 'phel bar byed pa'i bsam 'phel yid bzhin nor bu zhe bya ba 'di ni / bla ma dang dkon mchog gsum la mi phyed pa'i dad pa dang ldan pa rang gi chos spun rDo rje rgyal mtshan gyis 'di lta bu zhig dgos zhes bskul ba'i ngor / lHa'i btsun pa Su ma ti ma ṇi pradznyās sbyar ba'i yi ge pa ni rnam dpyod dang ldan pa Gu shrī chos rje kun dga' rin chen no / / 'dis yang rGyal ba'i bstan pa dar zhing rgyas la yun ring du gnas pa dang sems can thams cad gnas skabs su bDe ba can du skye ba dang / mthar thug mGon po Tshe dpag med kyi go 'phang myur du 'thob par gyur cig / /　/ / dge legs 'prel bar gyur cig / /（『世尊無量寿に拠って寿命丸を成就する仕方の儀軌 －寿命と福徳を増長させる如意宝珠』というこれは、上師と三宝に分割されない信をもつ自らの兄弟弟子ドルジェ・ギェルツェンが「このようなものが必要です」と勧めたのにちなんで、尊師スマティ・マニ・プラジュニャー(ロサン・ノルブ・シェーラプ)が著作した［。その］筆受者は、伺察をそなえたグシュリー・チョジェ・クンガーリンチェンです。これによってまた、勝者の教えが栄えて広まり永らく住し、一切有情は当面に極楽に生まれ、究竟に無量寿主の位を速やかに得るように！善が増長するように！）
解説：著者はモンゴルで活躍したゲルク派の学僧である。シェーラプギェルツェン（Shes rab rgyal mtshan.年代不明） の弟子でもある。生没年については1677 / 1737－の二説があり、TBRCは前者を採用している。
　無量寿智仏によりにより寿命丸を成就する作法に、簡明な注釈を加えたものである。構造は１）前行、２）本行、３）後との三部からなっている。浄土教的要素は少ないが、無量寿仏を大悲の救済者とし、名号を念ずるだけで横死を滅して怖れから救う帰依処として讃えること、極楽浄土へ往生し、最終的に仏位を成就するよう祈願することなどが見られる。また「無量寿仏讃」や「心呪」が使用されている。
　具体的には、前行（1b4-2b5）では、長寿丸の素材を揃えて浄め、包んで封印する。場所を浄めて、無量寿仏など三宝の依処と瓶、供物を準備し、結界する。
　本行（2b5-14a4）では帰依、発心、供養、加持、七支供養、四無量心を行う。及び我生起を行い、寿命の甘露に満ちた瓶、次に行者自身と一体である無量寿仏を観想する。加持し、諸尊を招いて灌頂を受け、供養し、讃える。念誦の所縁を示し、寿命の成就を獲得する。堅固にして廻向する。次に、面前生起を成就し、祈願し、灌頂を受け、五妙欲・転輪王七宝・八吉祥物により供養する。仏徳を讃えてから、それが長寿丸に加持されるよう祈願し、念誦の所縁を示し、一切諸尊の加持を思念し、心呪やダラニにより堅固にする。行の中断する時には供物を加持し、供養し、讃え、廻向し、誓願により捺印する。誤りへの忍を請い、無量寿仏などに加持されるよう祈願する。諸尊を送り返し、祝詞を唱える。
　終わり（14a4-15a6）には、作法を示した後で、無量寿仏・文殊菩薩などの諸仏菩薩によって道全般に関し加持されるよう祈願する。面前生起の諸尊が光に融けて寿命丸の姿になったと思念する。
作成者名：藤仲孝司

bCom ldan 'das 'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba bsdus pa

書名の日本語訳：世尊無量光に依る遷移の略法
著者名：Paṇ chen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan
著者名よみ：［パンチェン・］ロサン・チューキギェルツェン
著者名別名：Paṇ chen Lama I 、Paṇ chen Chos rgyan
著者生没年：1567-1662
成立翻訳年：16c-17c.
成立地：チベット
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5896［Ka.17b2-18a4］
刊本の奥書刊記：（Ka.18a3）tshul 'di sdig can btsan thabs 'tshang rgya'i thabs / / ma sgoms 'tshang rgya 'pho ba'i man ngag ces / / bla med rgyud sde'i snying po bsdus pa

yin / ces pa 'di yang 'gro ba mang po la phan pa'i phyir / bTsun pa Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan gyis smras pa'o /
（この方法は、罪人の強引な手段、成仏する方便、修習していない者が成仏する遷移の秘訣」といって、無上［瑜伽］タントラ部の心髄を摂めたものである［。］これもまた、多くの衆生を益するために、尊者ロサン・チョーキギャルツァンが語った。）
参考文献：・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』（「浄土仏教の思想」3、講談社、pp.226-232, 267-277、1993）
・田中公明『性と死の密教』（春秋社、1997）pp.205ff.
解説：著者はタシルンポさらにセラ、デプンといったゲルク派の大寺に住持し、ダライラマ4世、5世が具足戒を受けるとき親教師をも務めた。ダライラマ5世によるチベット統一政権の時代に大きな影響を与えた。彼は没後、阿弥陀仏の活仏として認定されたが、これはゲルク派ではダライラマ2世以降二人目であり、彼から遡って、パンチェンラマの系譜が成立することになった。
　本著は、必ず訪れる死に備えて、勇者が戦争に入るときの鎧のように準備すべき実践方法であり、極楽に往生できるようにするもの
であるが、同時に無上瑜伽タントラ部の心髄を摂めたものであり、罪深い者、生前に修習していない者を強力に成仏させる秘訣であるとされている。
　具体的には、通常の前行のあと、極楽において根本師と無差別である無量光主を、ここに招いて観想し、行者と仏の身体において瑜伽を行う。帰依と祈願を繰り返した後で、断末摩の苦、中有や悪趣の怖れからの済度を願う祈願を行う。さらに身体における観想を行って、〈普賢行願讃〉の極楽往生に関する部分により、極楽への生に結び付けるのである。後期密教の生理的な瑜伽を用いる一方で、願文自体はより一般的なものであり、無量光仏の悲による済度、極楽往生を求めたものである。
　本書の奥書の言葉については、先行するダライラマ2世ゲドゥン・ギャムツォ（1475/76-1542）著『世尊無量光主に依るグル・ヨーガ　－ポワ（遷移）の実践と関係した携えやすいもの－』の奥書にも対応する言及がある。また本書自体が後世に影響を与えた。bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、1994、p.211）に掲載された同著者による〈極楽願文bDe smon 〉は、本著作のうち、前行・本行に続いて 17b5-18a1に説かれる祈願文を取り出したものである。ダルマバドラ『寿命の導き　－勇者が戦争に入ることの補遺備忘録－』（Pho khrid　－dPa' bo gyul 'jug gi lhan thabs zin bris－）も本作を承けたものである。また本書に関連する文献の一つが、「往生略軌釈」（『蔵密修法秘典』4、華夏出版社、2002、北京）として中国語訳されている。
作成者名：藤仲孝司

Chags med bDe smon gyi sa bcad

書名の日本語訳：チャクメーの『極楽願文』の科文
著者名：dPal sprul rin po che
著者名よみ：ペルトゥル・リンポチェ
著者名別名：dPal sprul rdo rje 'chang、［rDza dpal sprul］O rgyan 'Jigs med chos kyi dbang po、dPal sprul 'Jigs med chos kyi dbang po
著者生没年：1808-1887
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OP DPAL-SPRUL O-RGYAN-'JIGS-MED-CHOS-KYI-DBANG-PO(Reproduced from Dudjom Rimpoche's xylograph Collection. by SONAM T.KAZI Vol.2 GANGTOK 1970)pp.403-407
刊本の奥書刊記：（p.450）de ltar bDe ba can gyi smon lam sa bcad cung zad rgyas par byas pa 'di yang 'Jigs med 'od zer gyis bskul ba mi ldog par Shākya'i dge tshul dGe ba'i 'byung gnas kyis dKar chung rgod tshung gi ri khrod du sbyar ba'i Yi ge pa ni mkhyen dpyod rnam par yangs pa Thub bstan lung rtogs 'phel rgyas dpal bzang pos bgyis pa 'di kyang / / 'gro kun bDe ba can du skye ba'i rgyur gyur cig / mangalaṃ / /
(そのように『極楽願文』の科段 － 少し広汎にした本著もまた、ジクメー・オセルが勧めるのを断らずに、シャーキャの沙弥ゲーゥェー・ジュンネーがカルチュン・ゴッツァンの山にて著作した。筆受者は智慧広大なるトプテン・ルントクペルギャ・ペルサンポ［であり、その彼］が行った。これもまた、一切衆生が極楽に生まれる因となりますように！善かれ！)
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs smad cha（祝詞集下巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、pp.447-451
参考文献：・梶浜亮俊「ペェルトゥル・リンポチェの生涯と浄土思想」（『渡辺隆生教授還暦記念論集　仏教思想文化史論叢』、1997）
・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』（永田文昌堂、2002）
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.39 note82
・ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯』（平河出版社、1981）
解説：著者は sDe dge に生まれた。ジクメーリンパ（1729 / 1730－1798）の高弟ドゥドゥプチェン(rDo grub chen)1世ジクメー・ティンレー・ウセル('Jigs med 'phrin las 'od zer.1745 -1821）により dPal dGe bsam gtan gling の活仏に認定されて、同寺の座主を務め、カルマ・カギュ派やニンマ派の系統の無宗派運動(Ris med)の指導者となった。またチョクギュル・デーチェンリンパ（mChog gyur bde chen gling pa） より、彼のした埋蔵経『最勝楽仏平等ヨーガ』（bDe mchog sangs rgyas mnyam sbyor ）や、『三明の心髄の滴』（Rigs gsum snying thig ）の灌頂や伝授を受けた。弟子にドゥドゥプチェン・ジクメーテンペーニマ（ rDo grub chen 'Jigs med bstan pa'i nyi ma. 1865-1926) などがいる。またミーギュルドルジェとカルマチャクメーのgNam chos(虚空法、天空法)の無量光仏に関する遷移の法を、自著『普賢ラマの御教え』(Kun bzang bla ma'i zhal lung)に取り入れており、これはチベット全体のニンマ派に流行した。彼ら無宗派運動の人々は、極楽願文を幾つも著し、阿弥陀仏信仰を盛んにした。
　本著は、ツォンカパの『最上国開門』とともにチベットで流行したカルマ・チャクメーの『清浄大楽国土の誓願』に対する簡略な科文である。著者自身の文章は無いので、思想として著者独自の特徴を挙げることはむずかしい。チベットにおいては科文は、単に目次として用いられるだけでなく、すでに本文を学びおえた者が内容を思い浮かべて修習する場合にも用いられる。著者は『最上国開門』にも科文を作成している。チャクメーの願文にはジクメー・チョデンパ（'Jigs med chos ldan pa）による大きな註釈があるが、本著作との関係は未詳である。
　本著作はチャクメーの願文に三義があるとする。すなわ

ち、第一、極楽往生の因として『経』の説として四つの因、第二、名号を受持した加持が今生に生ずるよう祈願すること、第三、誓願が成就する因である諦語およびダラニ真言を唱えること、である。

そのうち、第一は、『無量寿経』の説としてツォンカパの『最上国開門』に挙げられたものであり、その四つは、本論では、１）国土の荘厳をたびたび作意すること、２）無量の善根を多くの門から集積すること、３）最上の正覚へ発心すること、４）それら善根を極楽に生まれる因として廻向し誓願を立てること、である。本論は以上のような項目をさらに細分して、該当する誓願文の箇所を指示するという形式になっている。

作成者名：中御門敬教

Chos rje dBo tshang ba la gnang ba'i bDe can gyi smon lam

書名の日本語訳：ボツァンパ法主にお与えなさった極楽誓願
著者名：dGe 'dun rgya mtsho
著者名よみ：ゲドゥン・ギャムツォ
著者名別名：Dalai Lama 2
著者生没年：1475 / 1476-1542
成立翻訳年：15c後半-16c前半
成立地：チベット
所収文献名：Chab shog snyan ngag skor（公文書並びに詩歌の類）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北 No.5580（168）Rī.88a6-89b1
刊本の奥書刊記：（Rī.89b1）Chos rje dBo tshang ba la gnang ba'i bDe can gyi smon lam / /
（ボツァンパ法主にお与えなさった極楽誓願）
解説：著者はツァンに生まれたゲルク派の僧であり、カルマ派との政治的対立の時期にあってゲルク派の先頭に立って勝利し、デプン、タシルンポ、セラなど大寺の座主を歴任した。彼の逝去後、ソナム・ギャムツォが彼の転生者に認定されたことにより、ダライラマの系譜が成立し、ゲドゥン・ギャムツォはダライラマ２世とされた。

本著は、ボツァンパ法主という人（未詳）が著者に対して極楽往生するための教えを請うたのに対して、この法主の徳を賞讃しつつ、さらに一切有情が往生できるよう誓願し、実践するよう勧めた願文である。ゲドゥン・ギャムツォによる数多くの書簡類の一つである（全集における「公文書並びに詩歌の類」は230の項目からなり、各項目には複数の書簡を収録したものも多く、著者の社会的活動の広さを反映している）。

具体的にはまず、法主は多聞であり、慈悲ある仏子として、善き縁の集積によりこの地方に生まれたから、釈迦如来が何度も称讃なさった極楽国土の功徳を見て、極楽往生を強く願求し、修行に委縮せずに資糧を積んだなら、法主自身の往生にとって著者の引導は必要ない。しかし、他の一切衆生もまたすぐに無量光仏のもとへ往生できるよう浄らかな誓願を日々立てるべきであるし、その場合、特別にたびたび念じて、修証を次第に増長させるべきである。すなわち、紅蓮華の須弥山のような輝く無量光仏が、観自在と大勢至など無数の菩薩衆に囲まれて虚空に現れて、「息子よ、極楽に急ぎなさい」と呼びかけ、安息させる。右手を行者の頭に置いて加持するし、中有の怖れから守護し、極楽浄土に引導してくださる。成就の蔵である根本と伝統の諸師、四部タントラの諸尊、ダーキニー、護法神たちも直接に現れて、障害を除去し、成就を助けてくれる、と思うべきである。行者自身も、死の苦しみと中有の怖れを越えて、瞬時に極楽浄土に行き、宝の蓮華の花弁に生まれて、無量光仏を拝顔し、甚深広大の妙法を聞き、難行に関わらず五道と十地を進み、仏身の位を現前にしよう、と思って何度も誓願すべきである、という。

作成者名：中御門敬教

'Chi kha ma'i gdams ngag ngo mtshar can

書名の日本語訳：臨終時の稀有なる教誡
著者名：Sa skya Paṇḍita
著者名よみ：サキャ・パンディタ
著者名別名：Sa paṇ, Kun dga' rGyal mtshan
著者生没年：1182-1251
成立翻訳年：12-13c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.5
（Bibliotheca Tibetica 5, The Complete Works of Paṇḍita Kun Dga' Rgyal Mtshan, Compiled by bSod Nams rGya mTsho, The Toyo Bunko, Tokyo, 1968）Na12,224b5-225a3
刊本の奥書刊記：（Na12,225a2）'Chi ka ma'i gdams ngag ngo mtshar can / / bla ma rje btsun Sa skya pa yab sras kyi gsung bzhin dpal ldan Sa skya panditas yi ge nyung ngur bkod pa'o
（『臨終時の教誡　－稀有なるもの－』は、ラマである尊者サキャ派父子のお言葉どおりに、吉祥なるサキャ・パンディタがわずかな文字に写した。）
解説：著者はサキャ派の五祖の第四であり、チベット仏教史上最大の学僧の一人である。文殊師利の化身として「ジャムゴン（文殊主）」とも称されている。同派のすぐれた学者たちやナーランダ寺最後の座主で亡命してきたシャーキャ・シュリーバドラ(1127-1225)に顕密にわたって広く学び、インドの外道とも論争して名声を博した。後にモンゴルのチベット侵攻が迫ったとき、モンゴルに赴いて、チベットの平和にも貢献した。サキャ派は初期からバリ翻訳師よりジターリ流の阿弥陀仏成就法を伝承し、五祖の中には極楽往生したと伝えられる人もいる。

本著は、臨終を想定して実践し、死去するときに無量光仏に済度されるようにする行法である。

まず前行として帰依・発心の後、面前に無量光仏を修習し、礼拝・供養する。加行として罪の浄化を確信し、思い込みすべてを捨て、死を恐れない心により無量光の三昧を成就する。本行として、外から自己へ収斂し、自己をその仏の存在として生起させる。善を有情に廻向し、後にも修習する。功徳として、病と魔が無く、臨終に苦がなく、中有に仏に摂取され、後に解脱を得ることを説いている。

作成者名：中御門敬教

'Chi med tshe yi sgrub pa

書名の日本語訳：無死なる寿命の成就
著者名：dGe 'dun rgya mtsho
著者名よみ：ゲドゥン・ギャンツォ
著者名別名：Dalai Lama 2
著者生没年：1475 / 1476-1542
成立翻訳年：15c-16c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5558(18)［Ma.47B1-53B2］

刊本の奥書刊記：（Ma.53a6） 'di ni bstan pa'i rtsa lag dam pa Chos kyi rje dGe legs rnam rgyal ba'i gsung gis bskul ba la brten nas / bla ma dam pa'i gsung las byung ba bzhin du dGe 'dun rgya mtsho dpal gyis dPal ldan 'Bras spungs kyi dGa' ldan pho brang du sbyar ba'i yi ge pa ni lung rigs smra ba Yon tan mchog gis bgyis pa 'dis kyang bstan pa dang sems can la phan pa rgya chen po 'byung bar gyur cig / /
（この［著作］は、教えの勝れた親族・法主［である］ゲレク・ナムギャルの御言葉による勧めによって、尊師の御言葉にあるとおりにゲドゥン・ギャムツォペル［追贈ダライラマ2世］が、吉祥あるデプン［寺］のガンデン宮において著述した［。その］筆受者［の役割］は、教と正理の論者ヨンテンチョクが行った。これによってまた、教えと有情に広大な利益が生じますように！）
解説：著者はツァンに生まれたゲルク派の僧であり、カルマ派との政治的対立の時期にあってゲルク派の先頭に立って勝利し、デプン、タシルンポ、セラなど大寺の座主を歴任した。彼の逝去後、ソナム・ギャムツォが彼の転生者に認定されたことにより、ダライラマの系譜が成立し、ゲドゥン・ギャムツォはダライラマ２世とされた。
　本著は、ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の無量寿成就法文献である。これは無上ヨーガに分類される行法であり、一尊一瓶の形になっている。この行法の発展過程は未詳であるが、ゲルク派の人の著作としては最も古いものの一つである。その作法の所々にジターリ流の儀軌（cf.ダツェパ（1318-1388）著『無量寿無死鼓声のマンダラ儀軌』）と共通した要素が見られるし、この伝統の系譜を挙げる箇所には、無量寿智やマチクからのカギュ派の祖師たちだけでなく、ジターリ流を伝えたサキャ派の諸師が列挙されている。よって、本典籍ではインドでの阿弥陀仏成就法の２つが合流しており、注目される。著者はゲルク派の教学だけでなく他宗派の教えをも聞いたといわれ、同派の教勢の伸長を反映したものかと思われる。
　具体的には、まず通常の成就法が示される。その後で、長寿のため灌頂をする作法が詳しく述べられる。寿命瓶による灌頂、寿命酒による灌頂、長寿丸による灌頂の順序であるが、瓶によるものが最も詳しくて、１）散失したものを招き寄せる、２）衰退したもの（寿命、力と福徳、三昧耶と律儀）を癒す、３）寿命を溶け込ませるという、３項目からなっている。
作成者名：藤仲孝司

Nye brgyud tshe khrid 'chi med rdo rje'i srog shing gi ngag 'don nag 'gros su bkod pa

書名の日本語訳：近伝寿命の導論　－無死金剛の芯柱－の発語を割註に提示したもの
著者名：Dharmabhadra
著者名よみ：ダルマバドラ
著者名別名：dNgul chu Dharmabhadra, Bla ma chos bzang mchog
著者生没年：1772-1851
成立翻訳年：18c末-19c前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.6304 Kha tshe-khrid 1a-6a1
・dNgul chu Dha rma bha dra'i gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.76 Kha tshe-khrid 1a-6a1
刊本の奥書刊記：（Kha.5b6-6a1）de ltar rGyal mchog lnga pas mdzad pa'i Nye brgyud tshe khrid 'chi med rdo rje'i srog shing gi rang nyid kyi tshe bsgrub tshul bla ma'i man ngag bzhin nag 'gros kyi tshul du dang brtson rnam dpyod yangs pa dGe sdings ne'u gsing pa'i Jo gsum thar? lags kyis 'phyin lam nas bskul ngor ban gzugs Dha rma bha dras sbyar ba'o / / bkra shis shog / / / /
（そのように最高の勝者〔ダライラマ〕5世が造られた『近伝寿命の導論　－無死金剛の主柱－』の自己の寿命の成就方法を割注の形で、浄信・精進・伺察の広大なゲディン・ネウシンパのジョスム・タル？・ラクが書簡により勧めたのにちなんで、ダルマバドラが著作した。吉祥であれ！）
解説：著者はゲルク派の学者であり、タシキル寺に学び、西チベットのヌルチュ寺(ギャルセートクメーサンポの寺)に住持した。その法嗣に弟子で甥のヤンチェン・ドッペードルジェ（dByangs can grub pa'i djo rje.1809-1887）がいる。顕密にわたって数多くの著作を遺したが、ニンマの法についても幾らか著作している。
　本著は、無量寿智仏を成就し、金剛の寿命を獲得する行法である。題名の「近伝」は長らく埋蔵されていたものが、近頃、発見されて伝承されたという意味であるが、この行法は、西方極楽浄土の無量寿智仏より空行母サンワ・イェシェー、パドマ・サンバヴァに伝えられたものが、後代のペルデン・ドルジェ(ダライラマ2世の同時代人)、ダライラマ3世ソナム・ギャムツォ(1543-1588)、ダライラマ５世ガワン・ロサンギャムツォなどへと伝承されたとされ、ゲルク派だけでなくニンマの法脈にもつながれている。奥書によると、本著はダライラマ5世著『近伝寿命の導論　－無死金剛の主柱－』への割註であるが、ダライラマ5世にその名の典籍は直接、見出せない。東北目録は、本著をダライラマ5世の著作東北No.5618 への註釈としている。東北No.5618 は四タントラの諸尊の成就法、事業、親近、許可などの数多くの実践方法を収録した大部の著作であり、それらのなかでは『寿命の成就』No.5618(28)が近いように思われるが、内容の一致も見出し難く、テキストの状態も良くないので、確定できない。他方、著者とほぼ同時代のハルハ・タムチク・ドルジェ(1781-1855)著『近伝寿命成就、無死金剛の芯柱の灌頂儀軌　－ 順次配列したもの、最上なる寿命の吉祥の施与－』は、まさしくその行法に関する大きな註釈である。
　本著は諸処で文字が不鮮明であり読解できないが、おおよその構成は以下の通り －
　空性、種字、真言により無量寿仏とその眷属を招いて、讃嘆し、七支供養を行って、資糧田に溶け込ませる。西方極楽浄土から無量寿智仏を招いて、サンワ・イェシェー、パドマ・サンバヴァ以下の祖師たちに寿命の持明を授かるよう祈願する。罪過を浄化し、無漏の甘露への作業と能力を得る。
さらに空性、種字、真言から無量寿仏を観想し、極楽浄土から智慧薩埵を招いて合一し、灌頂を授かる。そして、真言念誦と祈願を繰り返しながら、損なわれた寿命を召還し、結縛し、守護し、増長させるのである。
作成者名：中御門敬教

Nye brgyud tshe sgrub 'Chi med rdo rje'i srog shing gi dbang cho ga　－ Khrigs chags su bkod pa Tshe dpal mchog sbyin－

書名の日本語訳：近伝寿命成就、無死金剛の芯柱の灌頂儀軌　－ 順次配列したもの、最上なる寿命の吉祥の施与－

著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje
著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ
著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje
著者生没年：1781-1855
成立翻訳年：19c.前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Da, 'chi med 1a-19a srog shing, pp.172-181
刊本の奥書刊記：(19a2-5)
Phyag na pad dkar 'chang ba rGyal dbang thams cad mkhyen pa bSod nams rgya mtsho dpal bzang po la Nye brgyud du byon pa'i Tshe sgrub kyi gdams pa zab mo 'Chi med rdo rje'i srog shing du grags pa'i dbang cho ga khrigs chags su bkod pa Tshe dpal mchog sbyin zhes ba ba 'di ni / rang gzhan gyi lag len du nye bar mkho ba'i slad du / mang du thos pa'i btsun gzugs Dam tshig rdo rjes / rGyal dbang thams cad mkhyen pa lNga pa chen pos mdzad pa'i Cho ga sgrigs nyid gzhir gzung / gzhan du zhal 'phangs mdzad pa'i rigs rnams bla ma'i gsung rgyun ltar kha bskangs / skabs su babs pa'i mtshams sbyor ci rigs pas brgyan te dben gnas Byang chub gling du sug(sic.) bris pa 'dis kyang / bstan dang 'gro la nye bar phan pa'i rgyur gyur cig / dīrgha yuḥ sddhi mme pra ya tsatshantu(sic.) / /
「手に蓮華をもった〔観自在の化身である〕勝者王一切智者ソナム・ギャムツォ・ペルサンポ(ダライラマ3世)に近伝として出現した『寿命の成就の甚深な教誡・無死金剛の〔命の〕芯柱、として知られた灌頂儀軌を順次配列したもの － 最上の寿命の吉祥の施与－』というこれは、自他の実践に必要であるために、多聞の僧形をしたタムチク・ドルジェが、偉大なる勝者王一切智者〔ダライラマ〕5世が造られた『儀軌篇』こそを基本に置いて、別途造られた種類［のもの］を上師の口伝のとおりに補足しました。該当する適宜な結合により荘厳し、閑寂処チャンチュプ・リンにおいて文字にしました〔。〕これによってまた、教えと衆生に益する因となるように！　長寿が成就するように！」
参考文献：・Willis, Janice D., Enlighted Beings: Life Stories from the Ganden Oral Tradtion, Wisdom publications, Boston, 1995　pp.46-47,178
解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジゥツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。
　本著は、ゲルク派の「金剛」大成就者トッルンパ・ペルデン・ドルジェ(sTod lung pa dPal ldan rDo rje. 生没年不詳。ダライラマ２世ゲンドゥン・ギャンツォ(1476-1542)と同学でその師でもある。文殊主ツォンカパの聴伝の主パソ・チョーキギェルツェンの弟子「金剛の三兄弟」の一人とされている。)から近く伝承された無死寿命成就の灌頂の儀軌である。この教えは近伝の寿命の導き「無死金剛生命の芯柱」('Chi med rdo rje'i srog shing)としても知られている。本文中に開祖はダーキニー・サンワイェシェー(gSang ba ye shes)で、後にペルデン・ドルジェ、ダライラマ３世ソナム・ギャムツォ(1543-1588)、ダライラマ５世ガワン・ロサンギャムツォなどへと伝承されたとされ、奥書にはダライラマ３世に出現したという。すなわちペルデン・ドルジェが成就したものをダライラマ３世に伝えたのであり、ダライラマ５世により初めて儀軌篇にされた。同５世からは二通りの伝承があり、割註には５世からの引用もある。奥書には、同５世の儀軌篇を基本として、口伝から補足したという。ちなみにダライラマ３世はニンマの法をいくらか行ったが、５世は全チベットの統治者となったので、大規模に行った。
　おおよその構成は以下のとおり。
　前行では、まず寿命瓶・寿命酒・寿命丸などを準備し結界する。障碍を除去するよう自己が馬頭明王となって、供物を与え、守護輪を修習する。次に無量寿主となり、無量寿仏を眷属とともに招き、帰依・発心・四無量などを行い、祖師たちに祈願する。
　我生起の次第では、供養を行い、極楽から智サッタと灌頂の諸尊を招く。灌頂し、無量光仏が頭頂の化仏となる。損失した寿命を甘露の形で瓶や髑髏杯を満たし、真言鬘に溶け込ませ、甘露により罪障が浄められれ、寿命が回復され、寿命の成就を得る。所縁を明確にし、寿命を招来し、寿命の結縛、隠匿、守護を行う。面前生起では、軌範師の前行として、業瓶を成就し、中に無量宮を観想し、寿命酒と寿命丸を洗浄する。次に供物により加持し、捧げる。弟子たちに準備をさせる。
　弟子たちの行として、師を無量寿と観想し、供養させてから、まず顕教の経論により、得難い人身を得たこと、大切な命を久住させたなら、正法を行い、大利益を円満できること、そして、死ぬ者を救い、無畏を施すなら、長寿が実現されることを説く。次に金剛乗に様々な長寿法があるうち、この近伝の伝承を説明し、観想させる。弟子たちに仏位を得る発心をし、寿命の加持を受けるよう動機づけてから、祈願文を復唱させる。前行の上に発心、律儀の儀軌を受けさせ、障碍除去のための馬頭明王、次に無量寿仏を成就させる。一切諸仏と極楽の無量寿仏の加持を招き、障碍の除去と成就の獲得を祈願させる。寿命灌頂の本行では、寿命瓶、寿命酒、寿命丸に依った灌頂、寿命の繋縛、寿命の隠匿、寿命の守護、寿命の増長を行う。
　最後に、今から無量寿仏を本尊とし、誓言と律儀を守護するよう誓わせて、恩師に感謝の供養、善の廻向をさせる。智サッタは本処に去り、三味耶サッタは自身へ融けよう祈願させて、祝詞を述べる。
作成者名：藤仲孝司

Nye brgyud lugs Bla ma Tshe dpag med zhi khro la brten pa'i tshe dbang　－ 'Chi med dpal ster－

書名の日本語訳：近伝流、師無量寿の寂静・忿怒に依った寿命の灌頂　－無死の吉祥の施与－
著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje
著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ
著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje
著者生没年：1781-1855
成立翻訳年：19c.前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Da, 'chi med 1a-14a1 dpal-ster, pp.182-188
刊本の奥書刊記：（13a2）Nye brgyud lugs Bla ma Tshe dpag med zhi khro la brten pa'i tshe dbang 'Chi med dpal ster gyi cho ga zab mo Bar chad kun sel　byin rlabs chu rgyun zhes bya ba 'di ni / / rang gzhan gyi lag len du nye bar mkho ba'i slad du / rMor chen kun dga' lhun

grub kyi cho ga bsgrigs gzhir bzung / brgyud 'dzing gong ma 'ga'i yi ge gzhan dag las kyang legs cha cung zad blangs te 'jug pa shin tu bde bar / mkhas shing grub pa'i bla ma dam pa rnams kyi bka' drin gyi bdud rtsis legs par 'tshog / ban rgan Dam tshig rdo rjes sbyar ba'i Yi ge pa ni / dbyod ldan Slob dpon dge slong bsTan 'dzin bzang pos bgyis ba'o / / 'dis kyang dpal ldan bla ma dam pa rnams dang bstan 'dzin gyi skyes bu dam pa thams cad sku khams bzang zhing sku tshe ring ba dang / rnam dkar mdzad 'phrin mtha' dag gong nas gong du 'phrel zhing rgyas pa dang / thugs kyi bzhed don mtha' dag bgegs med lhun gyis grub pa'i rgyur gyur cig / / tshe dpal dge legs 'phel / /

（といった、この『近伝流、師無量寿の寂静・忿怒に依った寿命の灌頂 － 無死の吉祥の施たる甚深の儀軌、一切障碍を除去する加持の河』といわれるものは、自他の実践のために必要であるので、モルチェン・クンガ・フンドゥプの儀軌編纂を基礎にして、伝統の先の或る継承者の他の文書からも良い部分を少し承けて、［行う者が］入るのがきわめて易しいように、賢者で行者の勝れた師たちの御恩の甘露により満たされた、老僧タムチク・ドルジェが著作しました［。その］筆受者は伺察を具えた軌範師、比丘テンジンサンポが行いました。

これによってまた、吉祥ある勝れた師たちと勝れた持教者すべては御身体が健やかであり、御寿命が長く、白の御事業すべてがますます増長し広がり、御心の願望すべてが障碍なく自然成就しますように！寿命、吉祥、善が増長しますように！）

参考文献：・立川武蔵『西蔵仏教宗義研究　第五巻－トゥカン『一切宗義』カギュ派の章－』（1987、東洋文庫）p.50, p.94

・ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯』(平河出版社、1981)pp.252-253,290

解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジョッツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。

題名の「近伝流」というのは成就者タントン・ギャルポ（Thang stong rgyal po. 1361-1485）に始まる流儀をいい、ニンマの埋蔵経に関係する著作である。彼はシャンパ・カギュ派の人であり、鉄の鎖の橋を多く架けて利他を行った。ニンマ派の持明者ゴデム（Rig 'dzin rGod kyi ldem 'phru can. 1337-1408）が招来した「北蔵（Byang gter）」という埋蔵経の系列の人でもあり、ダライラマ5世もこの系統に関して著作を残している。

仏説の「寿命の成就」は多く、学者・行者の教誡も多いが、なかでもこれは深い。特にこれはパドマ・サムバヴァがタントン・ギャルポに直接授け、サムイェーのチムプから請来された「教蔵　－双運殊勝なる甚深な寿命の灌頂、無死の吉祥の施与－」というものである。これによりタントン・ギャルポは 125歳の長寿を得て有情を利益し、弟子たちも同様であったから、加持が大きいと知られている、という。

題名の「師無量寿の寂静・忿怒」は、平安な姿の無量寿仏と忿怒の姿の馬頭明王を意味する。前者は赤色で温和な菩薩形、後者は赤色で忿怒形で三面六手である。パドマ・サムバヴァは 16歳の少年の姿、タントン・ギャルポはヘールカの姿でいずれもタントラ行者の格好をしている。伝統の祖師たちを観想する個所、祖師たちに祈願する個所には、法身無量光、主無量寿、馬頭明王、パドマサムバヴァ、タントン・ギャルポから恩ある根本師までが列挙され、無量光には摂取、無量寿には寿命の施与、馬頭明王には障碍の除去、パドマ・サムバヴァには濁世の帰依処、タントン・ギャルポには欺きのない祈願を祈り、逆縁の除去、加持と無死の成就が祈願されている。構成はおおよそ準備（1b3ff.）、前行（2b1ff.）、本行（9b3ff.）、終わり（12b1ff.）からなり、寿命酒、寿命丸が用いられる。奥書の後（14a1-15a5）は、この行法の由来、タントンギャルポの話が lCags zam pa Ngag dbang bstan 'dzin phun tshogs の『寿命の灌頂儀軌の編纂』という典籍から示されている。

作成者名：中御門敬教

'Jam dbyangs nas rJe Rin po che sogs la brgyud pa'i 'jam lugs tshe dpag lha lnga'i rjes gnang

書名の日本語訳：文殊から尊者リンポチェなどに伝承された文殊流の無量寿五尊の認可

著者名：Co ne Grags pa bshad sgrub

著者名よみ：チョネ・タクパシェードゥプ

著者生没年：1675-1748

成立翻訳年：17c後半-18c後半

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.44, Kha（A-tshe-dbang）1a-8a,　pp.80-83

刊本の奥書刊記：第1

（6a2）'di yang shā ka btsun bShad grub ming can gyis dam pa snga ma 'i bshad srol ltar bgyis so / / mangga laṃ / /

（これもまた、シャーキャの僧侶シェードゥプの名を持つものが、先の上人の解説の仕方のとおりに造った。吉祥たれ！）

第2

（8a6）'di yang bla ma brgyud pa'i gsung gi man ngag la brten nas gzhan re gnyis la phan shas che snyam ste bShad sgrub ming can gyis bsgrigs pa'i yi ge pa'i Tā yi la lung Blo bzang don grub pa'o / /

（これも伝承の師のお言葉の口訣に依って、他の一人二人に対して益が大きいと思って、シェードゥプという名前を持つ者が編纂した［これの］筆受者はターイラルン・ロサンドンドゥプである。）

参考文献：・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）

・ツルティム・ケサン・藤仲孝司『悟りへの階梯』（UNIO、2005年）

解説：著者はゲルク派の学僧であり、セラ寺の教科書の著者としても有名であり、チョネ版大蔵経の開版にも関わった。チョネは、チョネゾン（Co ne rdzong. 現在の甘粛省甘南チベット自治区にある）にある古刹であるが、1459年にゲルク派の寺院となり、その管長や教学指導者として活躍した。

本作はガクワン・チャムパの『文殊流の［無量］寿灌頂五族の別載　－無死なる命の吉祥施－』、ならびに同著者（チョネ・タクパ・シェードゥプ）の『寿命丸の成就と寿命灌頂の作法　－無死吉祥の施与－』と同系統の著作である。タイトルにある「文殊流」は実質的にツォンカパ以降の「ゲルク派」を指すが、それについては前者の解題を参照のこと。具体的には本作では冒頭で「ジェリンポチェが伝承された無量寿五尊の現観、ツォンカパがされたやり方」と述べ、また中程の祈願の個所ではゲルク派の菩提道

次第の系譜に言及している。

全体構成は以下の通りである。すなわち、先ずは不死の悉地の獲得を目指す一般的な阿弥陀仏成就法（一尊一瓶）、次に寿命灌頂を行う際に面前に生起する瓶の成就が説かれる。ここでは秘密寿命瓶、寿酒加持、長寿丸、御食事加持が説かれる。この儀軌の前半部分は本人（軌範師）が成就する段であり、続いて軌範師が弟子に授ける部分が説かれる。先ず弟子たちに沐浴をさせ、面前に坐らせ、マンダラを奉献・祈願させる。そして瓶中に無量寿五尊、面前の虚空に仏子を伴う勝者がおられると信解させる。そして弟子たちが菩薩の律儀を保ちうるように許可を五尊から授けられように、各自に無量寿五族の認可を授けるよう祈願させる。

それから灌頂の本行が説かれる。これは『寿命丸の成就と寿命灌頂の作法　－無死吉祥の施与－』に説かれるものと同じである。すなわち、1）寿瓶に依って灌頂する、2）寿酒に依って灌頂する、3）長寿丸に依って灌頂する、4）寿命を増益する、である。ここで一旦本作は終わり第1の奥書きが説かれる。

本作の後でさらにダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の認可について増加部分が説かれるが、ここでも無量寿五尊が中心となっており、「文殊流」の特徴を示している。

作成者名：中御門敬教

'Jam lugs tshe dbang rigs lnga'i zur 'debs －'Chi med sgrog gi dpal sbyin－

書名の日本語訳：文殊流の［無量］寿灌頂五族の別載　－無死なる命の吉祥施－

著者名：Ngag dbang byams pa

著者名よみ：ガクワン・チャムパ

著者名別名：Phur bu lcog ［Ngag dbang］ byams pa、bDe mchog srung

著者生没年：1682-1762

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：・ラサ版　東北 No.6180 ［Ki 1-10］

刊本の奥書刊記：（Ki 9b6）gzhan las zab pa Tshe dbang 'Jam lugs kyi dbang bskur byed tshul mKhan chen bstan pa'i bdag / / Blo bzang mkhas btsun bzang po'i mdzad pa la / / zur rgyan cung zad gyis kha bkod ba / / Ngag dbang byams pas gzhan gyis bskul ngor bris / /nongs pa ci mchis dam pa rnams la bshags / / 'di yi dge bas bdag gzhan 'gro ba kun / / tshe dpag med kyi go 'phang myur thob shog / / ces pa 'di Cha dkar zhabs drung No mo［n］han gyis bskul ba'i ngor Phur bu lcog tu Byams pas bris pa dge legs 'phel.

（他より甚深なる寿命灌頂、文殊流の灌頂作法 － 大座主であり、教えの主であるロサン・ケーツンサンポの御作に対して、へりをわずかな荘厳で飾ったもの［すなわち・・・・］を、ガクワン・チャムパが他の者に勧められた折りに書いた。どんな誤りでもあるなら、勝れた方たちに懺悔します。この［著作の］善でもって、自他、衆生すべてが、無量寿の位を速やかに得ますように！

というこの［奥書］は、チャカル侍従活仏ノモハンにより勧められた折りに、［セラ寺の裏山の小寺］プルチョクにおいてチャムパが書いた。善が増長しますように）

参考文献：立川武蔵・石浜裕美子・福田洋一『西蔵仏教宗義研究』7（東洋文庫、1995）pp.27-31

解説：著者はゲルク派の学僧。ドカム(mDo mkhams)地方のチャムド(Chab mdo)に生まれ、セラ寺に学んだ。ダライラマ８世の教師を務め、道次第伝統の第53代とされている。

「文殊流の無量寿五尊」というのは、この行法がジターリ流の無量寿九尊九瓶の成就法に基づきながら、ツォンカパがマンジュゴーシャの成就法を行って、マンジュゴーシャに質問し、その教えを受けたことを指し、四維の四仏は省略されて、「中央に仏無量寿、東に金剛無量寿、南に宝生無量寿、西に蓮華無量寿、北に事業無量寿」（2b5-3a1）となっている。7b6以下 にそれら五仏に五智・五煩悩に基づく殺生とその浄化を配当して、通常の金剛界の五仏・五族により構成されている。東北目録の「文殊系統五分類・・・」という和訳は五種類の行法を連想させるが、そのような意味ではない。またツォンカパは示寂後、兜卒天に往生して「文殊心」として住しているとされ、彼自身も文殊の化身であったとされる。これは実質的にツォンカパに始まる「ゲルク派」の教えを意味しており、起源が遠くないので「近伝」と言われる。

本文では、まず一般的な前行（1b-7b3）が記述される。その中、5a3-b に『上師五十頌』『入行論』『弟子書簡』に依って師への祈願、「菩提道次第」による道全体の規定が示される。ジターリ流の阿弥陀仏成就法は本来、「四部タントラ」の中では所作タントラに分類されるが、6a1 以下にこの行法は無上瑜伽だとあり、内容を再構成している。それ以下に示された系譜も、通常の無量寿仏成就法のものではなくて、パンチェン・ロサンチョーキゲルツェンまでは「菩提道次第」の系譜と一致し、以下 Ngag dbang bstan 'dzin 'phrin las、Ngag dbang bstan 'dzin pa、bSod nams bzang po、著者自身とする。初めに師と寿瓶中の無量寿仏を無差別だと思う者が、住処を西方の極楽、瓶中の無量寿仏と観想する作法を示している。9a2-4 にも諸師の加持を願う個所で、「世尊無量寿智、尊者マンジュゴーシャ、法王大ツォンカパ」などと、同様な系譜が示される。

7b3 以下に本行が始まり、1）寿瓶に依って灌頂する、2）寿酒に依って灌頂する、3）長寿丸に依って灌頂する、4）寿命を増益する、という4項目が立てられる。その第1、寿瓶に依る灌頂は 7b3-9a6 に説かれて、8a6 までは広説、以下は略説である。後の三つはほぼ省略されている。

作成者名：中御門敬教

rJe bla ma Tsong kha pa chen po'i nye brgyud mGon po Tshe dpag med rigs lnga'i sgrub thab 'chi bslu ba'i man ngag dang bcas pa　－'Chi med bdub rts'i dga' ston－

書名の日本語訳：尊師大ツォンカパの近伝、主無量寿五族の成就法、および死を欺くことの口訣　－無死の甘露の宴－

著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje

著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ

著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje

著者生没年：1781-1855

成立翻訳年：19c前半

写本等の存欠：活字本

刊本所在：Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）vol.63, Tha.1a-5a, pp.71-73

刊本の奥書刊記：＊印刷不鮮明である。

（5a4）zhes 'Jam lugs Tshe dpag med rigs lnga'i sgrub thabs 'chi ba bslu pa'i man ngag dang bcas pa 'chi med

'dud rtsi'i dga' ston zhes bya ba 'di ni / rang gzhan gyi nyams len du・・pa'i phyir/ bTsun pa Dam tshig rdo rjes sbyar ba'o / 'dis kyang 'Jam mgon rgyal ba'i mdo sngags kyi bstan pa rin po che ・・・cing / phyogs dus kun tu・・・dar zhing rgyas la yun ring du gnas pa dang / dpal ldan bla ma dam pa rnams dang / bstan 'dzin gyis・・・・・・bzang(?) zhing zhabs pad ・・brgyar brtan pa dang / rnam par dkar pa'i mdzad pa ・・thams cad phyogs tham cad du dar zhing rgyas ・・gis rgyas par 'gyur cig / / ā yuḥ siddhi・・hoḥ

（といった、文殊流のこの『無量寿五族の成就法、および死を欺くことの口訣　－無死の甘露の宴－』は、自他の実践に・・ために、僧侶タムチク・ドルジェが著述した。これによっても、文殊主勝者（ツォンカパ）の顕密の教えの宝・・・、方向と時間のすべてにおいて栄えて広まり、長い間住することと、吉祥なる勝れた師たちと、持教者により・・・良くて、御足の蓮華が百・・・に安泰であり、白の行いが・・すべての・、すべての方向に栄えて広まりますように！寿命の成就・・・ホーホ。）

解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジゥツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。

本作は、ジターリ流の無量寿九尊の成就法を、ツォンカパが文殊から直接に授かった教えによって再構成し、無量寿五尊の行法としたものである。ジターリ流の特徴を受け継いでおり、〈宗要経〉所説のダラニも多用される。タイトル内に「尊師大ツォンカパの近伝」というように、長い伝統の師資相承によるのではなく、さほど遠くない昔に仏菩薩の加持を受けて、宗祖ツォンカパにより創始されて伝承されたものである。全体的に印刷が不鮮明であるが、タイトルにも出る「死を欺くことの口訣」が説かれた部分は、特に不鮮明である。

冒頭には名前を念じただけでも横死から護ってくださる師無量寿主の御足の蓮華に敬礼するという偈頌から始まる。母なる一切衆生のために速やかに宝のような等正覚の境位を獲得しようと説き、そのために世尊主無量寿の念誦に入るために、殊勝な発心を起こそうとある。

続いてバン字・ア字等の修習を通じて種字から光明が放射し、転変を経て現れる無量寿智仏がその身体の特徴と合わせて説かれる。次にその心臓の月輪座にある無量寿五族を観想して、その五族の頭頂・喉・心臓の種字から光明が放射されて、西方極楽世界から修習と等しい無量寿五族を召喚する。ジャッハ・フーム・バン・ホーホの種字により灌頂の五族を召喚する。次に行者は一切の如来が直接に加持して下さるよう祈願する。五族の智慧の甘露が行者の身体を満たし、頭頂にまで行きわたり、変化身無量寿仏の宝冠となる。これにより、無量寿智仏の成就が完成する。

終わりに、横死を滅して苦の衆生の依処となる無量寿仏に敬礼し、讃歎する。

作成者名：中御門敬教

bsTan bcos mNgon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rNam bshad rnam pa gnyis kyi dka' ba'i gnas gsal bar byed pa Legs bshad sKal bzang Klu dbang gi rol mtsho las rDzogs smin sbyangs gsum byas pa'i tshad bshad

書名の日本語訳：『現観荘厳論および釈論二つの難処を明らかにするもの － 善釈　幸いなるものの龍王の遊戯海』より「完成、成熟、浄化を行った度量」

著者名：Se ra rje btsun Chos kyi rgyal mtshan

著者名よみ：セラ・ジェツン・チョーキギェルツェン

著者名別名：Se ra rje btsun pa

著者生没年：1469-1544

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：Se ra rje btsun Chos kyi rgyal mtshan, rGyan 'grel sPyi don rol mtsho (中国蔵学出版社 1989, sTod cha)pp.96-99

参考文献：・兵藤一夫『般若経釈　現観荘厳論の研究』(2000)p.238

・立川武蔵、石浜裕美子、福田洋一『西蔵仏教宗義研究七』pp.68-69

・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.30 note58

解説：著者はゲルク派の大学者であり、ゲンドゥン・ドッパ（ダライラマ1世）などに師事し、学徳を円満にし、同派の大本山セラ寺の第12代座主となった。顕密の著作も多く、その中には現在まで教科書として重用されているものが幾つもある。

本著は『現観荘厳論』冒頭へのハリバドラ著『明義釈』の一文にちなみ、〈無量寿経〉より法蔵菩薩の誓願と修行、国土の建立、無量光仏としての成仏を具体例として論述し、大乗の特徴を明らかにした部分である。この種類の著作は著者独自のものではなく、般若学の伝統において他の学者も議論している（Kapstein は、チョナン派のトルポパの阿弥陀仏に関する著作を翻訳するなかで、典拠を示し、説明している）。直接的には、ツォンカパの法嗣でゲルク派を確立したギャルツァプ・タルマリンチェン（rGyal tshab Dar ma rin chen,1364-1431）の註釈『釈論・心髄荘厳rNam bshad snying po rgyan』とそこに引用された法蔵菩薩の誓願（〈無量寿経〉の第5願から第9願の取意）の記述に基づいている。

大中小の『般若波羅蜜経』（十万頌、二万五千頌、八千頌）の注釈として、直説義である甚深な空性を説いたものがナーガールジュナ著『般若中論本頌』（ただし中観学はチャンドラキールティ著『入中論』を根本典籍とする）であり、隠密義である広大な行を説いたものがマイトレーヤ著『現観荘厳論』である。『現観荘厳論』は大部の『般若波羅蜜経』に科文を与えるものであり、おもにハリバドラ著の註釈を通じて理解されるが、チベットでは般若学の根本典籍とされており、顕教哲学の主要五教科の第一である。アティシャが伝えた「菩提道次第」もその教誡であるとされている。『現観荘厳論』の冒頭に出る「誓願を完成しないで、有情たちを成熟しないで、仏国土を浄化しないでは、實際を現証しない」という大乗の仏道を概括した一文にちなみ、法蔵菩薩、無量光仏を具体例として、「完成、成熟、浄化を行った度量」が議論される。それは、かつての誓願を完成

したこと（rdzogs）、教化対象者の有情を成熟したこと（smin）、自らの仏国土を浄化したこと(byang)という三点より、實際（滅諦）を直に現証してしまう小乘の阿羅漢との違いを示し、大乘の発心から修行、成仏までの特徴を示すものである。論述形式としては、論理学の問答（僧院教育の必須項目）を用いて、涅槃、浄土、仏身、障の断除などが議論されている。一般的に大乘の経論において無量光仏や極楽往生への言及は、法の功徳の記述や廻向の段に出ることが多いが、本論は『現観荘厳論』全体の骨格を提示した第1章のしかも総論とも言える冒頭で、それらに言及していることが特徴である。
作成者名：藤仲孝司

Thugs rje chen po 'gro ba kun sgrol gyi bde smon

書名の日本語訳：「大悲が一切衆生を救済する」という願文
著者名：不明
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（p.136）Thugs rje chen po 'gro ba kun grol gyi / 'Od dpag med kyi smon lam rdzogs so //
（「大悲が一切衆生を救済する」という無量光の誓願が終わる。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社)、1994 、p.136
解説：上記の活字本に収録されたものであり、それなりに流布したものかと思われるが、そこには書誌情報が全く示されていない。「大悲」は固有名詞としては観自在菩薩を意味し、その菩薩が有情の自性清浄を見て済度を誓うという面も考えられなくはないが、直接的には、極楽浄土を建立した無量光仏(観自在はその脇侍)による済度の誓願である。誓願による救済、極楽往生ともにチベット人の信仰を端的に示したものである。
　以下に全文を訳しておく。
「泥中の蓮華の無染汚のように（蓮華は泥中でも染まらないように)、三界も汚れなく無染汚です。［三］界の蓮華から生じた極楽［世界］に生まれますように。」
作成者名：藤仲孝司

Theg pa chen po'i smon lam（尾題）

書名の日本語訳：大乘の誓願（尾題）
著者名：不明
著者名別名：不明
著者生没年：不明
成立地：敦煌
刊本所在：P.tib.153
刊本の奥書刊記：（なし）
活字本所載書：・赤松孝章「敦煌チベット文献の浄土教関係資料－P.tib.153について－」（『印度哲学仏教学』3、1988）
・Jonathan A.Silk “The Virtues of Amitābha, A Tibetan Poem from Dunhuang”（『仏教文化研究所紀要』32、1993）p.70ff
現代語訳書：・赤松孝章「敦煌チベット文献の浄土教関係資料－P.tib.153について－」（『印度哲学仏教学』3、1988）
・Jonathan A.Silk “The Virtues of Amitābha, A Tibetan Poem from Dunhuang”（『仏教文化研究所紀要』32、1993）p.70ff
参考文献：・赤松孝章「敦煌チベット文献の浄土教関係資料－P.tib.153について－」（『印度哲学仏教学』3、1988）
・Jonathan A.Silk “The Virtues of Amitābha, A Tibetan Poem from Dunhuang”（『仏教文化研究所紀要』32、1993）p.70ff
解説：敦煌出土のチベット語文献のなかから発見されたものであり、一応首尾完結した著作と見られる。題名は、写本の最後に「大乘の誓願（Theg pa chen po'i smon lam）を終わる」とあるが、この一文は横線で消されており、本文献の完全な末尾に出ているわけでもないので、本典籍の題名なのかどうか、確定できないとされている。ただし内容は確かに願文である。また同じ赤松氏が確認した敦煌出土の浄土関係典籍と共通した部分も見られる。Silk氏は、浄土三部経以外の大乘の教養も多く含んでいることを指摘している。
　内容の詳細は、赤松氏自身も提示しておらず、要約しがたいが、おおよそは次の通り。
　仏世尊こそが救済者であるから帰依の対象は三宝であり、求める対象は最上の正覚である。十方の虚空は一つであり、南北東西は無く、仏の功徳は平等であり差別はないが、有情の信の違いに応じて個別に表わされる。そして、阿弥陀仏の住する西の浄土においては喜びと安楽が無量であるとし、その国土のさまざな荘厳、そこにおける有情のありさま、観自在と大勢至の両菩薩の徳性などが示される。その記述の多くは〈無量寿経〉に拠っているようである。引き続いてまた阿弥陀仏の名を聞くなら、諸々の苦から解脱するとも説く。今生で人身を得た者は、三宝に帰依し、菩提心を起こし、極楽国を対象として、阿弥陀仏の名を称え、縁者とともに極楽に引導されるよう、阿弥陀に奉献し、観自在に廻向する。
　導くものは十波羅蜜（六波羅蜜と方便・力・願・智）であり、それにより、他の天・人の楽や他の輪廻の存在ではなく、極楽に引導される。阿弥陀仏は大慈悲の加持により来迎し、瞬時に往生する。
　生や輪廻は、生や輪廻そのものによってではなく、無生や無輪廻の証悟により、越えられる。生が無ければ、死も無い。大乘を行じて、六道を断ち、乘の階梯を昇り、阿弥陀仏の最高の処、かの浄土に生まれよう、と祈願している。
作成者名：藤仲孝司

Dag snang las sNang mthas mngon sum gsungs pa'i smon lam

書名の日本語訳：浄らかな顕現から無量光が直接お説きになった誓願
著者名：Khrag 'thung bDud 'joms rdo rje
著者名よみ：タクトゥク・ドゥジョンドルジェ
著者生没年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.274）'di yang Khrag 'thung bDud 'joms rdo rjes snyan grags kyi ngor phabs pa'o / mangga laṃ / dge'o /
（こ［の誓願文］も、タクトゥク・ドゥジョンドルジェが誉れある折に降りてきた。幸あれ。良かれ。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.273-274、1994）
現代語訳書：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious

Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.40
解説：著者は、ニンマ派の大究竟（rdzogs chen）の継承者であり、19世紀に活躍した（ちなみにこの名(飲血降魔金剛)からヘールカ（ヘーヴァジュラ・タントラなどの主尊）の信奉者であったと思われる）。「浄らかな顕現(dag snang)」は修行により、有情や器世間に関する行者の心の過失が除かれて、仏菩薩や浄土が現れている状態をいう。「直接（mngon sum）」というように、その見仏の三昧の体験のなかで無量光仏が現れて、直接に教えた誓願ということになる。
　内容は、臨終や中有（ないしそれを想定した観想）において、阿弥陀仏とその眷属を観想し、仏の身と浄土を成就するよう祈願する願文であり、ここでは浄土は有頂天(密厳国土とも同一視される。密厳国土は受用身が成仏し、住する場所とされる)と関連づけられている。
　本文は9音節からなる4句の2偈である。以下に全文を訳しておく。（）中は割注の部分である。
「（尊者に敬礼します。自証の八大菩薩は、）エマホ。自ずと顕現した清浄な本物の有頂天の領域、智慧の荘厳の変化の国土において、基盤の法身・勝者無量光は、自ら能力あり、菩薩衆の集まりを満足させる。智や智慧が現前になった能力によって、いつか顕現が転依するとき、本源の最上の確信が降りてきて、［自利・利他の］二利の究竟・［自性身・智法身・受用身・変化身という仏の］四身が現前になりますように。（自ずと顕現する極楽の所依（国土）と能依（仏）として、現前に作意し、この願いを唱えるべきです。サマヤ、ギャ、ギャ、ギャ、ダ、ティム。）」
作成者名：藤仲孝司

De bzhin gshegs pa sNang ba mtha' yas kyi mtshan brjod pa dang legs pa dang sangs rgyas kyi zhing gi yon tan thob pa mdor smros pa

書名の日本語訳：如来無量光の名号を称えること、善なることと仏陀の国土の功徳を得ることの略説
著者名：不明
著者生没年：9c（?）
成立翻訳年：9c初頭（820年頃）
成立地：敦煌
刊本所在：P.tib.6, P.tib.105, P.tib.112, P.tib.516, P.tib.760, P.tib.761
刊本の奥書刊記：なし
活字本所載書：・赤松孝章「敦煌チベット文献の浄土教関係テキスト」（『印度哲学仏教学』2、1987）
現代語訳書：・赤松孝章「敦煌チベット文献の浄土教関係テキスト」（『印度哲学仏教学』2、1987）
参考文献：・赤松孝章「敦煌チベット文献の浄土教関係テキスト」（『印度哲学仏教学』2、1987）
・Jonathan A.Silk “The Virtues of Amitābha, A Tibetan Poem from Dunhuang”（『仏教文化研究所紀要』32、1993）p.22ff
解説：敦煌から出土した文献類に含まれた断片類から赤松氏により復元された著作であり、7シラブル、59偈からなる。題名は一写本の首題と思われる個所による仮のものである。他の写本の末尾には「「無量光」は終了した」（sNang ba mtha' yas rzdogs so）ないし「「無量光の名号」は終了した」（sNang ba mtha' yas mtshan rzdogs so）等とあり、書写者の名を加えたものもある。
　構成は、1-11偈は帰敬偈、12-19偈は阿弥陀仏の国土の功徳の荘厳、20-25偈は六波羅蜜による仏の功徳と国土の完成、26-30偈はその仏国土の衆生の特性、31-59偈はその仏国土に生まれるための修道、となっており、著作の前半は阿弥陀仏とその国土の因果、後半はそこに生まれる因果を明らかにしている。
　1偈から30偈までは概ね〈無量寿経〉の所説に拠っているが、阿弥陀仏とその国土の成就は六波羅蜜の修行によったと説くのは特異であり、そこには〈無量寿宗要経〉末の「六波羅蜜の偈」の影響があるかもしれない。
　31偈には聞名による臨終来迎が説かれているほか、32偈以下には種々の善行、持戒、中道の修習による往生が説かれており、修善やヨーガ行を重視したチベットの仏教事情の反映とも思われる。
　挿入句として「ナモアミタプル」といった表現が見られ、これは漢訳の「南無阿弥陀仏」をチベット語に音写したようである。また本典籍の前後に密教経典が書写されていることから、それら挿入句は真言ダラニと同様の扱いを受けていた可能性や、あるいは中国の礼讃文と同じく阿弥陀仏への帰命を繰り返すのが見られることから、中国仏教の影響下に何らかの儀式の読誦用のテキストとして用いられた可能性も推定されているが、本来これが中国語で書かれたのか、チベット語で書かれたのかは不明である。
　なお赤松孝章「敦煌チベット文献の浄土教関係資料－P.tib.153について－」（『印度哲学仏教学』3、1988）には、同じ系統の著作のローマナイズ版、和訳が提示されている。
作成者名：藤仲孝司

rDo rje snang ba mtha' yas kyi sgrub thabs

書名の日本語訳：金剛無量光の成就法
書名別名：sNgags mdzod zab rgya las gsung rDo rje snang ba mtha' yas kyi sgrub thabs（甚深なる真言蔵に説かれた金剛無量光の成就法）
著者名：rDo rje bDe chen gling ba
著者名よみ：ドルジェ・デーチェンリンパ
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.304）dge rgan O rgyan ming gi ngor rDo rje bDe chen gling pas phab pa dge legs su gyur cig / sarba manga laṃ / /
（オギェンという名の老師にちなんで、ドルジェ・デチェンリンパが確定した。良からんことを！全て吉祥たれ！）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.302-304、1994）
解説：著者はテルトン・ドルジェ・デーチェンリンパ(gTer ston rDo rje bDe chen gling ba. 1833-?, 著作に mKha' 'gro dgongs pa kun 'dus kyi skor などがある)、またはドマン・テルトン・ドルジェ・デーチェンリンパ(mDo mang gter ston rDo rje bDe chen gling ba.?-1928, Brag 'go のドマン寺(mDo mang dgon)の建立者でヨンジン・ジンパギャムツォ(Yongs 'dzin sbyin pa rgya mtsho)とハツンパ・ナムケージクメ(lHa btsun rnam mkha' 'jigs med)の生まれ変わり)かと思われる。いずれにしてもニンマ派の埋蔵経発掘者である。活字本にも書誌情報がないが、同書は著作を著者の年代順に並べているようであり、その順序からしても20世紀の人と思われる。
　掲載書に「甚深広大な真言蔵(sNgags mdzod zab rgya）に説かれた」と記されているが、これが特定の典籍を示すのかどうかなどは未詳である。内容は密教における本尊ヨーガの成就法であり、無量光仏に「金剛」という名を加え、浄土を「大楽国土」と呼ぶなどその特徴が徹底しており、

その浄土の救済性を除外すれば〈無量寿経〉などの影響は見られない。空性の種子から無量光仏を招いて供養し讃えた後で、自他が大楽国土で安穏となり、自己がかの仏のような功徳を具えることを祈願している。

以下に全文を訳しておく。

「hrī 大楽国土におられる仏子を伴った勝者無量光に、慇懃に帰依いたします。母である衆生すべてが大楽国土に赴くために、増上意楽を完全に摂受すべきです。3回すべきです。

hrī の処、顕現が自性をもって不成立である空性から、不可思議なる円満な国土の荘厳が、幻術のように広がった［。その］中央にある千葉の蓮華、月輪［上］の、自心である（に住している）赤の hrī 字が転変したことから［無量光仏は現れた。その］語金剛の無量光［仏］は、赤く明るく、禅定し、結跏趺坐し、相好により荘厳されている。

仏は変化身の装束を円満に成就している。大楽国土から勝者をお招きして溶け込ませる。外、内、秘密の供養、八吉祥物、七宝などの供品の集まりによって供養し、［仏の］身語意の無量の功徳に対して、信心の讃をなすべきです。［勝者は］渡り難い輪廻の海から無数の弱き有情を導くために、発菩提心なさった。［その］行いは広大な波の［のようで］不可思議です。勝者よ、あなたのようなものは、まさに他にはありません。永久に依怙主たるあなたの心臓の輪に対して、思ったとおりに信により一心［不乱］に成就するとよい。私と私が関係する有情とともに、この衆生界に依る身体を具えたあらゆる者が、余りなく大楽国土で安息し、無辺の輪廻の海の深い坑をなくして後、善逝であるあなたの功徳がどれほどあろうと、まさにそのように私もまたなりますように。」

oṃ padma dhe wa hrīḥと唱えます。sa ma ya rgya rgya rgya。

作成者名：藤仲孝司

bDe chen zhing bkod zhes bya ba theg pa chen po'i mdo bsdus pa

書名の日本語訳：「大楽世界の荘厳」という大乗経典の要約

著者名：不明

成立地：チベット

写本等の存欠：活字本

刊本の奥書刊記：（p.139）chos sku 'Od dpag med kyis gsungs pa bDe chen zhing bkod mtshan rgyas pa theg pa chen po chos kyi rnam grangs kyi le'u stong phrag brgya pa las Chos sku 'od dpag med kyi le'u khol du byung ba ste lnga ba'o / / dge'o / /

（［こうした］法身たる無量光［仏］が説かれた極楽国土の荘厳の完全な特徴［についての説明］は、大乗法門の百千の章の中から、法身無量光の章を抜粋したものである。［すなわち〈宝積経〉］第5［会の要約］である。良かれ。）

活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社、1994）pp.138-139

解説：顕教での福徳の集積や罪悪の浄化、あるいは密教での前行や祈願においても、阿弥陀仏の特徴や極楽浄土の徳性をよく知って、それらを明瞭に観想することが、必要不可欠である。そのためチベットでは、「経典の要約」といった種類の文献が造られたが、本作はそのような文献の一つである。これは経（mdo）という言葉が要約といった意味をも含むことにも関係している。

題名には「「大楽世界の荘厳」という大乗経典」が、奥書には「大乗法門の百千の章」が言及されるが、これらはチベット訳『宝積経』が「聖なる大宝積の百千法門」といわれ、その第5会〈無量寿経〉の正式の名が「極楽の荘厳」（ただしチベット訳では「無量光の荘厳」）であることに関係しており、内容も〈無量寿経〉の所説を承けている。浄土の名は「極楽(bDe ba can)」でなく「大楽(bDe chen)」となっているが、それは、後期密教での重要な概念の一つ「大楽」に掛けているのと、チベット語で二つの単語が発音が似ていることからである。この用語は、顕教の修学を重視しないニンマ派、カギュ派の少し時代が下った人たちに多く用いられるようである。また奥書に「法身無量光が説かれた」というが、その原因としては、『現観荘厳論』第8章が自性身を無為とし、それと無差別である三身－智法身・受用身・変化身－を立て、法身に作用を認めており、それが密教にも継承されたこと、またニンマ派において法身を無量光、受用身を観自在、変化身をパドマサンバヴァとすることが、関連するであろう。また、阿弥陀仏成就法の文献では、法身は如来形の「無量光」、受用身（報身）は荘厳を纏った菩薩形の「無量寿」とされる事例が多い。

本作は具体的には、無量光仏の国土の特徴を説いた上で、そこへの往生を祈願する10の願文からなっている。v.1は、「無量光の国土には聖人以外はおられなくて、六道輪廻という名称さえもありません。その無量光の国土に生まれますように」といい、以下もこの形式にのっとっている。各偈頌に説かれる国土の特徴は、〈無量寿経〉の所説を承けており、以下の通り。v.2では智慧の光りはあるが、昼夜という名称もないこと、v.3では種々の宝が荘厳されているが、地面や石という名称もないこと、v.4では宝や芳香はあるが、世間の風という名称もないこと、v.5では菩提樹が茂っているが、植物や森林という名称もないこと、v.6では三昧という食はあるが、世間の食もないこと、v.7では全てが平坦で悪趣や危険な所という名称もないこと、v.8では法王（無量光仏）は存在するが、王や官吏という名称もないこと、v.9では八功徳水が降るが、世間の水という名称もないこと、v.10ではあらゆる者が化生するが、四生処という名称もないことである。

作成者名：藤仲孝司

bDe chen zhing gi bkod pa －lCags khams gser du 'gyur ba'i gdams pa－

書名の日本語訳：極楽国土の荘厳　－鉄が金となる教誡－

著者名：rKong gTer pa

著者名よみ：コン・テルパ

著者生没年：未詳

成立地：チベット

写本等の存欠：活字本

刊本の奥書刊記：（P.272）mar ngos nyer brgyad kyi dgung mor O rgyan bsTan 'dzin pa'i ngor rKong gTer pas gang dran du smras pa'o //

（下弦の月28日の夕方に、オギェンのテンジンパ(持教者)にちなんで、コン・テルパが念じたものとして語ったものである。）

活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.270-272、1994）

解説：著者はTBRCで確認できない。Shākya mchog ldan（サキャ派の人でチョナン派に転向した）の弟子にrKong ston Chos kyi rgyal mtshan(15c生まれ)という人はいるが、その人の思想も未詳であり、同一人物であるかどうかも不明である。また gTer kong に生まれてニンマ派の bDud 'joms の埋蔵経を継承したジクレル・イェシェー・ドルジェ(1904-1988)などは地名からしてこの法統に関連が

あるのかとも思われるが、それもまた不明である。活字本にも書誌情報がないが、同書は著作を著者の年代順に並べているようであり、シェーチェン・ギェルツァプ(1871-1926)、チェーヨル・リクジンチェン(年代不詳)、本著、クンサン・シェンペン(1745-1821)という順序になっているから、18世紀か19世紀生まれの人であろう。

1句9音節の11偈からなる。著者がテルパ（埋蔵経に関わる者）と称されるように、ニンマ派の独特な教義が濃厚な祈願文である(奥書の「オギェンのテンジンパ(持教者)」も、後期密教の祖インドラブーティの教えを保つ者すなわちパドマサンバヴァかと思われる)。ニンマ派の存在論・修道論のもと、死の体験を基盤たる界（真如、法界、仏性に相当するもの）の出現と捉えた上で、基盤の清浄智としての無量光仏を現前にし、浄土へ導かれて、速やかに成仏することを祈る願文である。思想的には、本来清浄なる基盤において客来の塵により覆われて流転しているのが凡夫であり、その覆障を浄めて基盤と無二なる智を成就したのが仏であるという如来蔵思想が顕著であり、その上で阿弥陀仏や極楽浄土、あるいは自利・利他の実践を捉えている。また方便としての寿命瓶に言及しており、本著作は寿命の灌頂儀式において用いられたようである。ニンマ派独特の用語法もあって、不明な箇所が残るが、概略は以下のとおりである。

vs.1-3 教主無量光仏と観自在・大勢至など眷属、極楽国土の徳性を叙述し、仏道の成就、済度を願う。vs.4-6ab 無差別なる勝義菩提心を起こして、臨終時に無量光仏と浄土が現前になることを願う。vs.6cd-8ab 所依清浄智の無量光と道智の勤勇顕現が、母に抱かれた子として、本来無差別なる界と智に（所知と能知として）解脱すること、所依の5光明が現前するとき、堅固な智、勤勇者性を得ることを願う。vs.8cd-9 ここでの問法の大因縁を説き、灌頂とタントラの伝授・口訣を得た瞬間、方便の浄瓶の甘露が師から溢れて弟子を隅々まで満たし、遠からず普賢の自覚があることを願う。v.10 この善により、あらゆる有情たちが今生を終えて本来の界に目覚めた時、浄土へ導かれることを願う。v.11 自己の三業を尽くして、聖衆の集会と有為とが一つであるとの確信を得て、始終一貫して平等な仏の位を、速やかに得ることを願う。

作成者名：藤仲孝司

bDe chen zhing gi ro sreg cho ga Ngan song gnas 'dren sdug bsngal mtsho skem gtan bde rab 'bar

書名の日本語訳：大楽国土の火葬儀軌 － 悪趣の処を導くもの、苦の海を乾かす永久の安楽の照耀

著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya

著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ

著者生没年：1612-1678

成立翻訳年：1671

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0698, Folios 1a1-16a5

・Rin chen gter mdzod, vol.32（Paro: Ngodrup and Sherap Drimay, 1976）

刊本の奥書刊記：（15b5-16a2）

Bla ma sMan bla khu dbon gyis/ /ring nas bskul ba don yod phyir/ /dGe slong Rā ga sya yis/ /lCags mo phag lo'i sBo zla yi/ /tshes pa bcu gnyis gsum gyi/ /thun skabs 'ga' la sgras pa ltar/ /Nam mkha' Kun dga' gnyis po yis/ /res mos byas shing bris pa la/ /nyes 'gal gang mchis lha la bshags/ /dge bas skye 'gro mang po zhig/ /rigs drug skye sgo chad nas kyang/ /bDe chen zhing du skye bar shog/ /(なお以下、16a2-4 まで真言が続く)

（マンラ師叔父・甥※が永らく勧めたのが空しくなることがないように、比丘ラーガースヤが鉄の雌猪の年（西暦1671年）の2月の12、13日の或る修行時間に語った通りに、ナムケーとクンガーの二人が相互に憶えて書いたもの［である。それ］におよそ誤り・矛盾があるものは、本尊に懺悔します。善により多くの衆生が、六道の生の門を断って、また大楽国土に生まれますように！）

（※マンラは文字どおりには「医師」「薬師」である）

参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.32ff., note64

・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）

・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択 －『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006年）

・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）

・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）

解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ （Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。

本著もその法類の一つとして編纂された儀軌であり、火葬の作法を詳しく示している。東洋文庫蔵チベット蔵外文献では著者を gNam chos Mi 'gyur rdo rje とする。唱える文言と割注の解説からなり、同法類の『大楽国土の成就』(Ref.Nos.695,709)から数カ所の引用や、「浄化儀軌Byang cho ga」（同著『大楽国土の成就法』の備忘録Ref. No. 0699, 2b5-3b4 に関係するか）への言及がある。Kapstein が言うように、樹木に乏しいチベットでは火葬は少数の高い地位の人しか行わないので、辺境地域で行われたのであろうが、「虚空法」伝播との関係は未詳である。

最初に、『秘密一般タントラ』(D No.806, 大正 No.897)の所説などにより土地を準備し、地神を供養する。次に死者を安置し火葬場を整えて、火神、護法神を供養する。次に馬頭の明呪を誦え、発火に必要な道具を揃える。『国土の成就』より浄化を行い、自己を無量光仏と修習し、真言により供物を洗浄する。吉祥草により守護の円満、障碍の息災、楽・善の作用を祈願し、炉を準備する。空性から種字により、炉の中央に火天を観想し、空性・種字から五色の火が燃えるが、それらは五仏の智慧の妃でもある。それにより死者は蘊ないし五毒を浄めて五智を得るよう祈願し、火を安住させる。火天の心臓から光を放って東南から火天と衆を招き、印を結ぶなどする。智慧サッタと三昧耶サッタを結合させて、灌頂する。礼拝、賞讃し、火供を受けることを請う。印を結び、真言を誦え、炎の吉凶に応じて行う。

次に死者を招き、来世の円満や往生を妨げる罪悪について、真言を誦えて供物を捧げ、息災を請う。火天に礼拝、

賞讃し、安住することと、火供を行う者が大楽国土の諸尊を見ることなどを祈願する。無量宮の中央に無量光仏を見るよう、『国土の浄化』より唱える。火供の品を無量光、観自在、勢至に捧げ、真言を唱えて死者の来世の息災、幸福などを祈願する。護法の父母尊を招いて供養し、死者を浄土に引導し、地道を成就させ、生者の障碍を除去するよう祈願し、護摩の本行は終了する。

後の行には念誦、賞讃し、百字真言を唱えて祈願する。智慧サッタは去り、三昧耶サッタは自己に溶ける。火天を賞賛、供養し、炭・灰を河に流し、遺骨を器に入れるなどする。勝れた人の遺骨などは作法に従って無量光仏を観想し、仏像、仏塔を造って摂寿以外の「浄化儀軌」を唱える。凡人の場合は洞窟に運んで置くなど、安置の方法を説く。『悪趣清浄タントラ』の無量寿仏の語マンダラや『秘密集会』を教証として利益が大きいとする。さらに、自己、施主の毛髪、古着に関して、摂寿儀礼と結び付けて行う方法を示している。

作成者名：藤仲孝司

bDe chen zhing sgrub kyi bka' bsrung gsol mchod bkrigs chags su bris pa

書名の日本語訳：大楽国土成就の護法神の祈願供養を決定として書いたもの
著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya
著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ
著者名別名：mKhas grub Karma chags med
著者生没年：1612-1678
成立翻訳年：17c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.705, Folios.1a1-4b2、No.719,1a1-4b2
・Rin chen gter mdzod, vol.32（Paro: Ngodrup and Sherap Drimay, 1976）
刊本の奥書刊記：（4a6-b2）
bDe chen zhing sgrub bka' bsrung 'di/ /sgrub pa'i cha lag tshangs(sic.) ba'i phyir/ /dge slong Rā ga a sya yis bya lo lo gsar tshes gcig gi/ /phyi dro'i cha la bsgrigs pa ste/ / yig mkhan dge slong sByin pas byas/ /nyes 'gal Chos skyong nyid la bshags/ /dge bas gnam chos bstan pa ni/ /Ganggā'i rgyun bzhin 'phel rgyal shog/ /sarba mangga laṃ/ /
（この『大楽国土成就の護法神』は、修行の支分が完備するように、比丘ラーガースヤが鳥年の新年の一日の午後に編纂しました。筆記者［の役割］は比丘ジンパが行いました。誤り・矛盾［があれば、それら］を護法神に懺悔します。善によって「虚空法」の教えが、ガンジスの流れのように増大し広まりますように。全て吉祥であれ！）
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.32ff., note64
・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006）
・中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ（Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。

本著もまた『大楽国土の成就』の法類に属するが、それに関して、修行に必要であるが欠けていた部分を補足する性格を持った著作である。護法神に祈願し、供養するものであり、今生での修行などに対する障碍、さらに遷移のときの極楽往生に対する障碍を除去するよう、願っている。一般的にチベットでは、また特に密教を実践する宗派では、閻魔法王やマハーカーラなど特定の護法神が信仰されている。

まず、獅子面で黒色一面二手である護法神－赤の獅子面の母尊－を伴い、カトヴァーンガ杖を持ち、赤馬の左右に男女の死者を連れているものを、その眷属とともに、有頂天の大屍林、さらに心臓の脈輪から招いて、座に着くと観想する。彼らに対して外・内・秘密の供養雲と各自の供物を捧げる。護法神がかつて仏の前で仏教守護の誓いを立てたことを賞賛し、父母尊と死者の各心臓を真言が回るのを観想し、真言を唱え、障碍の除去、意楽の成就、遷移のとき極楽への送迎に関する彼の誓いを念じさせる。

次に、三宝と三根本（上師・本尊・空行者）、大楽国土の諸尊に祈願し、彼らが供物を受け、父母尊がその身体の諸部分や持物によって、軌範師と弟子たちの寿命や福徳を侵害し大楽国土への往生を妨害する魔の衆たちを制圧するさまを、次々と具体的に観想する。

最後にもう一度、父母尊と眷属をが供物を承けて、修行の障碍を除去し、盗賊・怨鬼・呪詛・疫病を退け、事業を成就するよう祈願する。

作成者名：藤仲孝司

bDe chen zhing bsgrub smon lam

書名の日本語訳：大楽国土成就誓願
著者名：Tshab tsha sGrub rgan pa
著者名よみ：ツァプツァ・ドゥプゲンパ
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.280）Hor Bla ma dPal 'byor ngor Tshab tsha sgrub rgan pas 'gro phan smon lam bcas spel ba'o / / dge'o / / dge'o / / dge'o / /
（モンゴルのラマ・ペルジョルにちなんで、ツァプツァ・ドゥプゲンパが、『衆生利益の誓願』と合わせて合糅した。良かれ。良かれ。良かれ。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.279-280、1994）
解説：著者はTBRCで直接に確認できない。Tshar tshar sGrub rgan Grags pa rgyal mtshan という人名が掲載されているが、そこには何も情報はない。活字本にも書誌情報がないが、同書は著作を著者の年代順に並べているようであり、ジャムヤン･ケンツェー･チョーキロドー(Zhe chen rgyal tshab(1871-1926)の弟子)、ジクレル・イェシェー・

ドルジェ(1904-1988)、ダプクン・パドマリンチェン(年代不詳)、本著という順序になっているから、20世紀の人であろうか。

本著は 9音節10句からなる誓願文である。密教の影響を受けており、極楽浄土は空行者（ダーカー）の大楽国土とされている。往生と修行の円満から衆生利益までを、大楽国土の教主無量光に対して願う誓願である。奥書からすると、何らかの著作に対して増広をしたのかと思われるが、詳細は不明である。

以下に全文を訳しておく。

「na mo ā mi dhe wa hrīḥ

大楽国土で法輪を示す教主、広大無辺の勝者の御言葉の偉大な自在主、光相（'od mtshan. 無量光仏のこと）の極めて明らかな教主無量光、普賢・持金剛・金剛薩埵、二人の仏子［たる観音・勢至をはじめとする］菩薩、声聞・独覚の応供のサンガは十万［である］。化身は無数であり、［彼らはすべて］相を完成し、功徳を具えている。自他が今生から死去するとたちまちに、大楽［国土］、空行者のかの国土に生まれますように。生まれてから［十地五道など］地道の功徳をよく成就してから、変化により衆生を導く船主となりますように。」

作成者名：藤仲孝司

bDe chen zhing du skye bar smon pa'i gdung tshig －rNam mkhyen lam bzang－

書名の日本語訳：極楽に生まれることを願う呻きの言葉－一切相智の賢道－

著者名：Grwa lag Byang chub rdo rje

著者名よみ：タラク・チャンチュプドルジェ

成立地：チベット

写本等の存欠：活字本

刊本の奥書刊記：（P.301）de ltar bDe chen zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam 'di ka rang bzhan gyi dad pa spel phyir du lam mchog 'di la mos shing ring mo'i dus nas brtson pa lhur blang gis 'bad pa don yod kyi phyir du blun po dad pa'i rjes 'brang ku su li ba'i ban gzugs Byang chub rdo rje su 'bod pas / sNga 'gyur chos sde Grwa lag dgon gyi gral mthar sbyar bas sems ［can］ thams cad thar ba dang thams cad mkhyen pa'i go 'phang thob pa'i rgyur gyur cig / / mangga laṃ / /

（そのように大楽国土に生を受ける［ことを願う］この誓願は、自他の信仰が増長するよう、［そしてまた］この最高の道を信解し昔から精進に努める者の努力が空しくならないように、愚者である随信行［者］であり行乞者であり出家姿をしたチャンチュプ・ドルジェといわれる者が、旧訳寺院タラクゴンの末席において著作しました［。その］ことにより、一切［有］情が解脱と一切智の位を得る因となりますように。幸あれ。）

活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.291-301、1994）

解説：著者はTBRCでは Byang chub rdo rje の付いた人名は多く、どの人であるのは直接に確認できない。活字本にも書誌情報がないが、同書は著作を著者の年代順に並べているようであり、ジャムヤン･ケンツェー･チョーキロドー(Zhe chen rgyal tshab(1871-1926)の弟子)、ジクレル・イェシェー・ドルジェ(1904-1988)、ダプクン・パドマリンチェン(年代不詳)、ツァプツァ・ドゥプゲンパ(年代不詳)、本著という順序になっているから、20世紀の人であろうか。奥書の「旧訳（snga 'gyur）」は、新訳密教の始まりとなった大翻訳師リンチェン・サンポ（958-1055）以前に翻訳されたもの、特にその秘密真言ないしそれに拠る行法をいい、言い換えれば「ニンマ派」ということになる。

まず前行として、無数の衆生のための無量の誓願・誓言の成就者たる無量光仏に帰命し、救済者としてその慈悲と来臨を願う。次に礼拝・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向の七支供養を行う。

次に、4句からなる20偈でもって往生を祈願する。それらはほとんど〈無量寿経〉の所説に基づいており、法蔵菩薩の誓願と修行、それらが成就した国土の荘厳、そこへの往生とその後の修行を個々に述べては、そういう大楽ないし極楽国土へ生まれることを祈願している。

次に、偈の形が整っていない祈願が続く。それらは、救済者としての無量光仏に対して、臨終から来迎、中有、往生、その後の菩薩行の各場面に関して、それぞれ摂取不離や加護を祈願するものである。

終わりに、釈迦牟尼仏や無量光仏と、アジタ（弥勒）やマンジュゴーシャ（文殊師利）や秘密主（勢至）や観自在などの菩薩を証人として、欺くことのない縁起の理法によりこれら真実の誓願が速やかに成就することを祈っている。

誓願の中には、「五十の誓言」、「十七の稀有が成就した功徳国土」といった表現が見られる。前者は、法蔵菩薩の本願として挙げられており、49の誓願を挙げる蔵訳〈無量寿経〉からおおまかに数えたものと思われる。後者は、世親『無量寿経論』に説かれた「十七種荘厳功徳成就」など中国浄土教からの影響も想像されなくはないが、同論は蔵訳はないので、これも〈無量寿経〉の内容をまとめたものかと思われるが、詳細は不明である。

作成者名：藤仲孝司

bDe chen zhing du 'pho ba'i gdams pa rgyas par bsgrigs pa

書名の日本語訳：大楽国土への遷移の教誡を広く編纂したもの

書名別名：gNam chos thugs kyi gter kha las bDe chen zhing du 'pho ba'i gdams pa rgyas par bsgrigs pa(『虚空法、御心の埋蔵』より大楽国土への遷移の教誡を広く編纂したもの)

著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya

著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ

著者生没年：1612-1678

成立翻訳年：17c

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0700（＝No.0714）, Folios 1a1-17a4

刊本の奥書刊記：（17a1-4）

bDe chen zhing gi 'pho ba'i rgyas bshad 'di ni sPrul sku nyid kyi gsung gis bskul ba nas bdag Rāgasyas (sic.) sbyar ba la/ /'gal 'khrul nyes pa ci mchis bshags shing dge bas 'di nyid mthong thos kyi sems can thams cad bDe chen dag pa'i zhing khams su skye bar gyur cig/ / sarba mangga laṃ/ /e ma/ bstan dang 'gro ba sems can thams cad kyis/ don du chos sbyin rgya cher spel ba'i thab(sic.)/ rGyu sbyor dad ldan nam kha'(sic.) klong yang dang/ bstan 'dzin chos sgron gnyis nas gsar du krun/ spar 'di lha ldan zhi khro lha khang bzhugs/

（この『大楽国土の遷移の広釈』は、活仏［ミーギュル・ドルジェ］自身のお言葉により勧められて、私ラーガースヤが著作したもの［です。それ］に、およそ矛盾・錯誤・過失がある［ならば、それらの］ものを懺悔します。［こ

の著作の］善により、本書を見聞きする有情すべてが、大楽浄土に生まれますように！すべて吉祥であれ！ああ、教えと世の有情すべてが、本当に法施を広く増大させるため、ギュジョル・ダデン・ナムケーロンヤンと、テンジン・チョードンの二人から新たに生じたこの一握りのものは、仏殿シ・ト・ハカンでございます。）

参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.32ff., note64
・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）
・小野田俊蔵「チベットにおける葬送儀礼」（『仏教大学総合研究所紀要　東西の死生観』２別冊、1995）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006）
・中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）

解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ（Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。

本著は冒頭に「『虚空法、御心の埋蔵』より」と呼ばれる(本文中に『虚空の法、御心の埋蔵、甚深聴伝の類』より「大楽国土の成就法の部分」ともいう)ように、『虚空法』に所属し、死去のときどこに行くかと生前にそれを予行演習する行法である。題名のとおり理論的な説明も詳しい。冒頭の法の伝承によると、ミーギュル・ドルジェ（1645-1667）はパドマサンバヴァの五部埋蔵経（bKa' thang sde lnga. オギェン・パドマリンパが発見した）の一つ『王の遺教』（rGyal po bka' thang）などに予言されたとし、その過去世の修行、未来世の成仏を述べる。彼が13歳のとき（1657年）無量光三尊を直接に見て、『大楽国土の成就法』『夢に大楽国土に会う方法』『無量光の寿命の成就』『大楽国土の遷移』『大楽国土の祈願』『大楽国土の誓願』『大楽国土の灌頂』と『夢を捉えた祈願』『教誡』を授けられた。これは遷移の法のなかでも新鮮で加持が大きく、パドマサンバヴァによる怠惰な者のための教誡、臨終時に罪人も成仏できる強烈な法だとし、利徳が大きいという教証を示す。教証としては『金剛四座』（D Nos.428, 429, 430）やオギャン・リンポチェの言葉が重要な役割を果たしている。

遷移について法身、受用身、変化身の各々の遷移の行い方とそのときの外、内、秘密の徴候を示す。法身の遷移は勝義であり、虚空、光明、種字などである。受用身のはこの所説であり、生理的徴候と関係する。変化身のは横臥、呼吸、仏像の安置、発心、誓願などの行法である。死の兆しがない場合、身体にいる百の神々を殺すので、強制的遷移はすべきでない。凡夫はいつ死ぬか分からず怖れがあるとし、北枕で横臥し、頭頂に無量光仏やパドマサンバヴァなどを念じ、三宝の名やダラニ・真言を唱え、誓願するなら、悪趣に生まれないという。次に、識を身体のどこから遷移させるかとそれに応じた転生について諸説を紹介する。

遷移の教誡自体では、教証により種字など所縁類について、順次その方法を説く。それには遷移の修治と業の修治の二つがあるという。前者ではマンダラを供養し、弟子たちにも帰依・発心などを唱えさせ、彼らは白色一面四手の大悲者(観自在)だと観想する。頭頂に無量光仏、右左に世自在、金剛手、周囲に無数の仏菩薩を観想し、三尊の三処の三字から光を放ち、極楽から招いたものを溶け込ませる。遷移できるよう祈願する。自心の中央に紅蓮華、その上の月輪に風・心識の和合した白精滴、赤フリーヒ字を観想し、光が放たれて六趣の門が断たれる。ヒックの声により精滴が中央脈管より出て、無量光仏の拇指に触れて戻り、風を制御する。左右の脈管にも同様に行う。金剛拳を結んですべては空だと観想する。

次に、極楽に遷移して直ちに見仏できるよう誓願を唱えるが、これはミーギュルドルジェの略願文である。無量光仏の鉢から甘露が流れ、自身を満たす。次に寿命の成就を祈願し、諸尊は光に溶けて梵浄穴より自身に入る（割注は身体的徴候と注意点を記す）。自己が遷移する場合、死が避けられないなら、執着を捨て、教誡に集中して、心を虚空界に遷移させる。所縁、祈願、誓願もできるだけ行い、法友にも唱えさせて、極楽への遷移を確信する。他者に行う場合、帰依・発心・称名してから亡者に本尊、種字を観想させ、六趣を断ち、三尊などを念じ、眷属すべてと亡者の身が光に溶けて、無量光の心臓に溶けると観想し、極楽往生を祈願し（ミーギュルドルジェの略願文の一部を「私は」から「亡者は」に変えたもの）、極楽浄土へ送り出す。無量光仏も極楽に去ると観想し、悪趣の苦を経験しない、泥により染まらない蓮華のようになる、などと唱える。（割注には利徳や徴候や日数など注意点を記す。）

最後に遷移の次第では、自心の種字と六趣の門の断と頭頂の三尊を修習し、自らの識のフリーヒが無量光の心臓に移ると観想し、往生の誓願（ミーギュルドルジェの別の略願文に類するもの）を唱える。

作成者名：藤仲孝司

bDe ldan bkod pa'i mdo don ji bzhin pa'i smon lam　－Thar pa'i sgo 'byed－

書名の日本語訳：極楽荘厳の経の義のとおりの誓願　－解脱開門－
著者名：Rig 'dzin Tshe dbang nor bu
著者名よみ：リクジン・ツェーワンノルブ
著者生没年：1698-1755
成立翻訳年：1747
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（p.149）bDe ba can gyi bkod pa'i mdo don tshang ba'i smon lam tshigs su bcad pa Thar ba'i sgo 'byed ces ba 'di ni / rNam 'dren dpa' bo sprul pa'i sku rin po che gTsug lag dga' ba'i zhal snga nas kyi gsung gis bskul ba la brten / bod yul kha ba can gyi dbus gyur lha ldan rang byung sprul pa'i gtsug lag khang Jo bo 'od zer lha brgyad kyi spyan sngar snying nas gus pas / / phyogs med rgyal khams pa Rig 'dzin tshe dbang nor bus / me yos rab byung bcu gsum pa chu stod zla ba'i dkar phyogs gang pa la grub par bris pa'o / / dge'o / / dge'o / / dge'o / /

（『『仏国土極楽の荘厳の経典』の意味を完備した誓願の偈頌　－解説開門－ 』というこれ（本書）は、導師・勇者・

変化身宝であるツゥクラク・ガーワ御前のお言葉による勧請に従って、雪国チベット中央の［自然生変化の仏寺・ラデンランジュントゥルパ寺すなわち］大招寺の光明八尊※の眼前で、心から敬って、遍歴僧リクジン・ツェーワンノルブが、第13ラプジュン丙卯（1747年）の5月16日から6月15日の間の満月の日に完成し書写した。善きかな。善きかな。善きかな。）※「光明照射八尊（'Od zer phog pa'i lha brgyad）」cf. Dung dkar tshig mdzod chen mo, 北京、p.1839b「国王ソンツェン・ガンポが御遷化の折、ラサの経堂（大招寺）の八体の御本尊から光明が放たれて、寺院内全てが明るくなったことに起因する名高いものを「放光明八尊」と言う」と説明する。八体については、釈迦仏不動金剛・弥勒法輪・不去釈迦・燃灯仏・忿怒穢迹金剛・馬頭・ターラ・薬師を挙げる。

活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社、1994）pp.140-149

参考文献：・中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響　－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009年）

解説：著者はニンマ派の高名な学僧である。チョナン派の教義をも継承しており、カルマ派のスィトゥ・チョーキ・ジュンネーにも教えている。

本書は、文言・内容を〈阿弥陀経〉からほぼそのまま受け継ぎ、全体的に分量を〈阿弥陀経〉の約3分の2に要約したものである。チベットでは、仏や浄土の観想を行うために経典要約の文献が造られた事例があるが、本典籍も「極楽の荘厳」（『無量寿経』とともに〈阿弥陀経〉の正式題名）に関連したそのような文献類の一つである。

冒頭には、無量光仏に対する帰敬偈がおかれるが、これは〈阿弥陀経〉にない。以後は〈阿弥陀経〉に忠実に倣い、8度にわたって往生の祈願文を入れつつ、最後に意趣要約の文が繰り返される。

作成者名：中御門敬教

bDe ldan zhing gi dGon po 'Od dpag med rten dang brten par bcas pa las brtsams pa'i gtam yang dag par brjod pa mThong ba don ldan nor bu'i 'khri shing

書名の日本語訳：安楽国土の主無量光、所依能依を合わせたものに関した話の正説－見ると有益なものの宝玉の藤

著者名：rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan

著者名よみ：ギェルケンポ・タクパギェルツェン

著者名別名：Blo bzang don grub

著者生没年：1762-1837

成立翻訳年：18c後半-19c前半

写本等の存欠：刊本

刊本所在：rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyi bka' 'bum dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.73 Nga, dKar 1a-41a, pp.1-21

刊本の奥書刊記：（41a3-7）

bDe ldan zhing gi dGon po 'Od dpag med rten dang brten par bcas pa'i ×××mThong ba don ldan nor bu'i 'khri shing dDe ldan zhing du bgrod pa'i them skas zhes bya ba 'di ni/ snyigs dus kyi 'dren pa mtshungs med rGyal ba'i sku rin po che bsKal bzang dge legs rgya mtsho'i zhal snga nas ×/ dpon××nor bu/ ××××dkon mchog rgya mtsho dang/ 'Jam dbyangs brtson 'grus dang/ rigs pa'i gnas la blo gros kyi snang ba rgyas pa rab 'byams pa mthu stobs rnams kyis yang yang bskul ba la brten nas/ rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyis sTon pas mnyam med du ×××bden bzhi'i chos kyi 'khor lo thog mar bskor ba'i Chu stod zla ba'i yar ngo 'i rdzogs pa gsum pa'i nyin sbyar ba'i yi ge pa ni dGe tshul dKon mchog bstan 'dzin gyis bgyis pa 'di kyang 'gro ba mtha' dag bDe ldan zhing du 'jug pa'i rgyu gyur cig/ / mangalam/ /

安楽国土の主無量光、所依能依をあわせたものの×××見ると有益な宝玉の藤、安楽国土に往く階梯という本書は、濁世の無比の導師、勝者身の宝、ケルサン・ゲレク・ギャムツォ御前から×、××の宝、××××コンチョック・ギャムツォと、ジャムヤン・ツォンドゥーと、明処に知恵の光明が広大なラプジャムパ・トゥトプによりたびたび勧められたことに依って、教主［釈迦牟尼］が無比？に×××四諦の法輪を最初に転じた箕宿月［チベット暦６月］の上弦の三つの円満日［である5日、10日、15日に］ゲルケンポ・タクパギェルツェンが、著作した［。その］筆受者［の役］は、沙弥コンチョック・テンジンが行った。これもまた一切衆生が安楽国土に入る因となりますように！吉祥であれ！

参考文献：宇治谷祐顕「悲華経の浄土」（『仏教における浄土思想』1977）、中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響　－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009年）

解説：著者はドメー出身のゲルク派の学僧であり、タシキル寺やデプン寺のゴマン学堂で学んだ後、タシキルに戻り、ジャムヤンシェーパ2世の任命により、そこのラプラン（Bla brang）の親教師や貫主を務め、寺や塔の建立をも行った。デプンでは Chos 'khor rgyal の親教師（mkhan po. 僧院長）を務めたことから、rGyal mkhan po の名がある。

祝詞の後（2b6-3a1）に、本書が無量光仏の仏殿「トンワ・トンデン（見ると有益なもの）」の寺誌（dkar cha）として提示されることを述べて、科段を１）建立者の前後生の行状を少し述べる、２）勝者無量光が発心をなさったさまと国土の功徳の簡略を述べる、３）寺院およびその所依・能依がどのように建立されたかのありさま、との三つに分けている。

第一（3a2ff.）には、ゴマンの師ガワン・ゲレク（Ngag dbang dge legs）や、活仏ケルサン・ゲレク・ギャムツォの伝記が述べられているが、後半は印刷状態が悪くて読解が困難である。

第二（10a5ff.）には、無量光仏の前世における発心として、〈悲華経〉の記述を示している。すなわち、離諍王が宝蔵如来のもとで発心して、善き国土を摂取しようとし、宝蔵如来の教示により、西方の十万コーティ国土を過ぎた自在王如来（原典の仏名「dBang po'i dbyangs phyugs rgyal po(帝音自在王)」の転訛と思われる）の「帝王のように美しい」という仏国土において四仏が出た後、そこで無量光仏になること、無量劫に住するので「無量寿仏」、光明により無量の国土を満たすので「無量光仏」と号するという。さらに、〈無量寿経〉において燃灯仏以前の80の如来に先立つ世自在王仏のもとで法蔵比丘が発心し授記されたということ、さらに『賢劫経』『如幻三昧経』などにおける無量寿仏や極楽世界の授記を示している。また『無量寿経(Tshe mdo)』（『無量寿宗要経』）の無量寿仏と極楽の無量寿仏は同一か、別異かについて検討すべきであるとする。

極楽国土の諸々の功徳（12a3ff.）については、国土の個々の特性についてパンチェンラマ3世ペルデン・イェシェーの著作（未確認）とチャンキャ1世の『極楽国へ往く速疾道を明らかにする灯火』に沿って説明している。無量光仏の功徳（16a3ff.）についても同様であるが、法身は無辺

光（sNang ba mtha' yas）、受用身は無辺寿（Tshe mtha' yas）、変化身は無量寿（Tshe dpag med）と釈迦牟尼の経に説かれている、という記述がある。

第三（18a6ff.）は、1）所依（仏殿）と能依（本尊）を建立したことそのもの、2）完成してからダラニを入れて開眼したこと、3）建立と礼拝・供養・巡礼との利徳という、以上に分けられている。

その第一（18b1ff.）においては仏殿建立の経緯や安置された諸々の仏像類について言及する。

第二（22a5ff.）においては、内部に収められたインド・チベットの祖師、特にゲルク派の高僧の遺物類や、諸仏尊のダラニ類・経典類・法具類・聖物を述べている。

第三（27b1ff.）においては数多くのタントラ・経と、宗祖ツォンカパの行跡やカダム派・ゲルク派の祖師の言葉を引用して論述している。寺院の建立の功徳（27b1ff.）、仏像の建立の功徳（28b2ff.）、礼拝・供養・巡礼の功徳（32b4ff.）を述べているが、所々に無量光仏と関係して、極楽往生するための因となるべきことについても論及している。

結語（39b1ff.）は、顕密の修行や衆生済度に関する願文であるが、そこにも極楽往生と無量光仏による摂取への祈願が見られる。

作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi zhing gi mdo

書名の日本語訳：極楽国土経
著者名：rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan
著者名よみ：ギェルケンポ・タクパギェルツェン
著者名別名：Blo bzang don grub
著者生没年：1762-1837
成立翻訳年：18c後半-19c前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：rGyal gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）vol.73 Ca. bde-ba-can 1a-4b, pp.147-148
刊本の奥書刊記：（4b3-）
×××××gi dge ba'i bshes gnyen dKon mchog bzang po dang / bzo rigs smra ba dNgag dbang yang 'phel? gnyis kyis nan tan du bskul ba'i ngor / rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyis gZi mos chung bDe ldan chos kyi po brang du sbyar ba'i yi ge pa dGe tshul dKon mchog bstan 'dzin gyis bgyis pa 'dis kyang bstan 'gro la phan pa rgya chen po 'byung bar gyur cig / / dge'o/ /
××××の善知識コンチョック・サンポと、工巧明の論者ガクワン・ヤンペルの二人が慇懃に勧めたのにちなんで、ゲルケンポ・タクパギェルツェンが、シモ・チュン・チョキポタンにおいて著作した［。その］筆受者［の役は］は沙弥コンチョック・テンジンが行った。これ［の著作の善］によっても教えと衆生に広大な益が生じますように！善かれ！
現代語訳書：中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響　－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009年）
解説：著者はドメー出身のゲルク派の学僧であり、タシキル寺やデプン寺のゴマン学堂で学んだ後、タシキルに戻り、ジャムヤンシェーパ2世の任命により、そこのラプラン（Bla brang）の親教師や貫主を務め、寺や塔の建立をも行った。デプンでは Chos 'khor rgyal の親教師（mkhan po. 僧院長）を務めたことから、rGyal mkhan po の名がある。

本著は明言しないが、ラーガースヤの有名な極楽願文『清浄大楽国土の誓願』から取捨選択して3、4割程度の分量に編集したものであり、読誦しやすい形になっている。趣意を要約した部分、そのまま引用した部分、一部表現を変更した部分に分かれる。全体的には中間部分を除き、おおむね原著を受容しており、題名から伺われるように極楽国土に関する記述を中心にしている。原著のように極楽往生の四因は明示されていないが、七支供養の部分は原著と同じく重要である。

本著は「経」そのものでないが、「極楽国土の経bDe ba gyi zhing gi mdo」と呼ばれている。『蔵漢大辞典』（p.1381）に「経（Skt. sūtra, Tib. mdo）」の意味を「最重要部分」「顕教」「経」等というように、インド以来、要点をまとめた典籍はこの名で呼ばれた。チベットでは仏や浄土の観想のためにそれらの内容要約の文献が造られる事例がある。本著も、顕教の立場から極楽浄土に関する所説の最重要部分を取り出してまとめており、読誦文の体裁をとるので、「経」と呼ばれたと思われる。著者は、ミーギュル・ドルジェとチャクメーに始まり民間に広く普及した「虚空法 gNam chos」に属する極楽願文を評価しながらも、正統ゲルク派学僧の立場からそれを整理しなおしたのではないであろうか。あるいは、著者は阿弥陀仏の仏殿を建立し、それに関する著作をも著わしているので、何らかの関連があって、仏殿での儀式に用いたのかもしれない。

内容として、まず太陽の沈む方向（西方）に極楽国土があり、そこに無量光仏がいることと、その仏の特徴が説かれる。つまり三十二相八十随好相による荘厳、三種の法衣、結跏趺坐等といった外面上の特徴を先ず示し、観音勢至等の眷属について触れる。その後で七支供養の部分が詳説される。ラーガースヤの原著では懺悔部分に分量がかなり割かれるが、本作においては十悪懺悔等に限定されている。その後原著の中間部分が大きく省略され、後半の記述へと飛んでいる。そこでは極楽国土の特徴を挙げつつ、極楽への往生を願うことや現世的果報を得ること等が祈願される。その場合、原著にある〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈悲華経〉〈鼓音声王ダラニ経〉の内容が示されているが、ここでも典拠は言及されていない。

作成者名：中御門敬教

bDe ba can gyi 'pho ba'i gdams ngag

書名の日本語訳：極楽のポワの教誡
著者名：mKhan chen Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan
著者名よみ：ケンチェン・ロサン・テンジンギェルツェン
著者名別名：mKhan chen Chos rgyal Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan
著者生没年：1639-1691
成立翻訳年：1680
写本等の存欠：刊本
刊本所在：mKhan chen Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan gyi bka' 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.26, Ga 1a-4a, Pho ba pp.1-2
刊本の奥書刊記：（4a2） 'di yang Blo bzang ming 'chang bas bla ma'i man ngag bzhin du bkod pa'o / /
（これも、ロサンの名を持った者が師の口訣の通りに記述した。）
参考文献：・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）
・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
・ツルティム・ケサン・藤仲孝司訳『悟りへの階梯』（UNIO、2005）
解説：著者はゲルク派の僧侶である。密教と医学に詳しか

ったという。
本作は特に臨終時のポワ（遷移）の教誡実践を簡略に示したものであり、詳しくは他の教科書を見るように指示している。行法としては、阿弥陀仏の化身であるとされるパンチェン・ラマを通じてその仏を観想し、その上で行うものである。冒頭に科文が列挙されるが、それは以下の通りである。1.前行、2.本行の修治、3.業に結びつけること。
以下にその要約を行う。
1.前行－　福徳増長が主題とされる。得難い有暇・具足、死・無常、業の因果、輪廻と悪趣の過患を対象として思念し、ラマ・最高の三宝を信楽する信を浄化するなど、ツォンカパ『道次第』に説かれる実践と、三宝の拠所に敬礼することと、薬師仏（八薬師仏の名号を聞くこと）と『阿閦百字陀羅尼』等の陀羅尼読誦、〈三品経〉（三十五仏の名号）〈金剛般若経〉〈行願讃〉等の日常偈頌経文の読誦などに勤めるべきである。
2.本行の修治－　心に適った場所において、仏像の前に供物を供える。行者は安楽な場所で大日七法（禅定威儀）を具えて坐り、帰依と発心を堅固にする。次に、行者の頭頂にいる根本師と無区別の一切知者パンチェンに対して、そこに無量光仏が坐っておられると観想する。その上には師たち、正面には本尊マンダラの衆、周囲には勇者・空行者・護法神が囲繞していると観想する。仏の頭頂のオーン（oṃ）、喉のアーハ（āḥ）、心臓のフーン（hūṃ）から光明が放射し、自性住から一切の尊格を召喚して、頭頂の師に溶け込ませ一切の三帰依処を集めたものになったと思念する。次に眷属を連れた無量光仏に敬礼・供養・懺悔・随喜・懇願・勧請し、その功徳を極楽往生の因として廻向する（七支供養）。その後無量光仏に対して、死の怖れからの済度や極楽往生に関する祈願を繰り返す。
3.業に結びつけること－　行者に死の兆しが見えたなら、資財等を善処に施す。その時に執着等を毛ほども行わない。帰依と祈願を以前のように行う。特に祈願を強く行う。そして師（無量光仏）の心臓の光明が行者の識に触れるやいなや、識の本体である滴がヒックという。それからその滴が師（無量光仏）の心臓に溶け込んで、師と本尊と心が無区別になり、極楽世界に行くと思念する。
作成者名：中御門敬教

bDe ba can gyi smon lam

書名の日本語訳：極楽誓願
著者名：Padmasambhava（伝）
著者名よみ：パドマパドマ・サンバヴァ
著者生没年：8c.（？）
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本の奥書刊記：（p.158）pho ba'i cha rkyen du Padmas mdzad pa bzhin / bdag mKhar chen bZa' mTsho rgyal gyis bris nas sbas pa'o / sa ma ya rig 'dzin chen po sTag sham nus ldan rdo rjes gter nas gdan drangs pa'o / /（［極楽世界へ］転生する［ための］条件としてパドマ［サンヴァバ］がお作りになったものの通りに、私カルチェン・ザム・ツォギェルが書写して隠した。［それを］三味耶・大持明者たるタクシャン・ヌーデンドルジェ（1655-?. 一説によると1682-?)が埋蔵経から招来した。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、pp.155-158
参考文献：・平松敏雄『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』3、1982、p.109, 111, 127, 146）
・東智学「パドマサンバヴァとブータン」(『中川善教先生頌徳記念論集　仏教と文化』高野山大学仏教学研究室編同朋社出版 1983)p.315
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.24
解説：本書は、パドマサンバヴァのものをタクシャン・ヌーデンドルジェが発見したとされる埋蔵経典の一つであり、極楽往生を主題にしているが、菩薩の十地と往生する国土について特異な解釈をしている。上記の活字本では、著者はイェシェー・ツォギェル（Ye shes mtsho rgyal / mKhar chen bza' mtsho rgyal / mKhar chen mtsho rgyal. ティソン・デツェン王の妃であり、パドマサンバヴァのもとで出家し、成就を得たとされる）とするが、奥書にはパドマ・サンバヴァが説いたものを、イェシェー・ツォギェルが書写したとある。この埋蔵経の発見者タクシャン・ヌーデンドルジェ（bDud 'dul rdo rje.1615-1672の弟子であり、sTag sham の埋蔵経の発見に関わった）には、『清浄極楽誓願　－無量光の悲による種子の菩提心の芽の無尽なる増長－』という極楽願文もある。研究によると、パドマ・サンバヴァは伝承として、1）チベットに滞在してインドに帰った普通一般の姿、2）種々の国に種々の姿で化生し、チベットに埋蔵経を残した密教的な姿、3）ウッディヤーナの極楽浄土から自生し、本質的に無量寿仏と同一である秘密の姿、4）諸仏と同一である最秘密の姿を持つとされている。またニンマ派の Nyang ral Nyi ma 'od zer(1124-1192)などのように、法身は無量光仏、受用身は観自在、変化身はパドマサムバヴァと言う説も知られている。
内容は、〈十地経〉に説かれる菩薩の十地に極楽世界の特徴を当てはめるという特異な構成をとり、そのような十地へ順次生まれることを祈願し、最終的にその十地を完成し、行き着く普光地（Kun tu 'od）を極楽とし、そこへの往生を祈願する。歓喜国土には好ましい宝の大地、好ましい声を出す孔雀・鳥がいること、離垢国土には宝珠があふれ、供物が自然成就していること、発光国土には宝石の輝き・芳しい香り・蓮華が満ちていること、焔慧国土には垂幕・絹等と音楽があること、難勝国土には様々な妙欲・傘・幢・宮殿等があること、現前国土には神々の娘が美声で歌い、供養を行っていること、遠行国土には先の彼女たちが歌舞音曲をくり広げること、不動国土には一切の願望に対して無尽の享受があること、善慧国土には蓮華から化生し、あらゆる病気や病がないこと、法雲国土には苦悩がないことを説く。最後の普光地は極楽であり、そこが最終の目標とされる。
末尾は、無量光仏・観音・勢至・パドマサンバヴァに対して、発菩提心・誓願が成就するよう祈願しているので、この部分は弟子の記述である。
作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi smon lam

著作翻訳の有無：蔵外
書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Rin chen bzang po
著者名よみ：リンチェン・サンポ
著者名別名：Lo chen rin chen bzang po
著者生没年：958-1055
成立地：チベット
写本等の存欠：写本
刊本所在： b Ka' gdams gsung 'bum phyogs bsgrigs(『噶当文集　第一巻』Si khron mi rigs dpe skrun khang(四川

民族出版社) 2006)
刊本の奥書刊記：(3.8) lo tstsha ba/?/?/pos/?/mTho lding gtsug lag khang du sbyar ba dge'o oṃ tadyathā a pa ra mi ta a yur jnyā na hrī hūṃ bhruṃ swahā o.m? badzra a yu/?/swahā oṃ a ma ra ṇa ji ban ti ye swahā・・・・・・・
'di'i dge bas bdag gzhan sems can/?/?/mchog? bDe ba can du skye bar/?/
(翻訳師？ポが？トディン寺において著作した。良かれ。(陀羅尼省略)
この善により、自他、有情？が最上の（国土？）極楽に生まれる（ようにし！））
参考文献：・井内真帆「トゥケン『一切宗義』カダム派の章研究」(『大谷大学大学院研究紀要』21,2004)
・加納和雄「ゴク・ロデンシェーラブ著『書簡・甘露の滴』－校訂テクストと内容概観－」(『高野山大学密教文化研究所紀要』20,2007)
・川崎一洋「リンチェンサンポ撰述の『チャクラサンヴァラ・アビサマヤ註』について」(『印仏研』56-2,2008)
解説：この願文は、わずか1枚半と短いが、現在、チベットにおける浄土教の著作として知られる最古のものである。
　著者は、チベット後伝期初めに大きな功績を残した翻訳家である。3回インドに行き、カシミールで学んだ。西チベットに多くの寺院を建立し、ガリの王イェシェウが996年頃建立したトディン寺に住した。顕密にわたる彼の翻訳は、以前のもの(ニンマ派が依用する)と対比して「新訳」と呼ばれる。特にインド密教中期から後期の「ヨーガ・タントラ」「無上ヨーガ・タントラ」の類に詳しく、それらの翻訳は以降のチベット仏教に重大な影響を与えた。85歳のときにはインドから来たアティシャを迎えて、共同で翻訳も行った。師にはアティシャ、シュラーッダーカヴァルマン、ジュニャーニャ・シュリー、ダルマパーラ、弟子には、ニマ・シェーラブ、レクペーシェーラブ(大翻訳師ロデン・シェーラブの叔父)、ヨンテン・ツルティム、タクジョル・シェーラブなどがある。インドで阿弥陀仏の成就法文献を著したジターリ(960-1040、アティシャの師の一人)とは同時代である。初期カダム派の文献は長らく埋没し、その写本類はポタラ宮やゲルク派の大寺院に秘蔵されてきたが、近年それが調査公開された。このリンチェンサンポの全集は、デプン寺の十六羅漢堂に所蔵された4著作からなる。
　この願文はウメ体の写本に記されいる。内容は、極楽浄土とそこの無量光仏や眷属の徳性を説明しては、そこに自己と他の衆生が往生できるよう祈願を繰り返すというものである。おおよその記述としては、この釈迦牟尼仏の国土より西方に無数の仏国土を過ぎて極楽浄土があるが、その地は平坦であり、花々により荘厳されている。そこの天・人は寿命が無量である。そこは煩悩の異熟ではなく、悪趣、阿修羅、ヤマは無くて、化生する。無数の菩薩が菩提行を行い、一生補処であり、二資糧を円満にし、（誓願の）完成、（有情の）成熟、（国土の）浄化がされた場所である。左右に観自在、大勢至の菩薩がいる。この世で死亡するとただちにそこに生まれますように、といったものである。
　奥書にはトディン寺で著作されたことが記されている。最後に、幾つかの真言を唱えるが、そこには密教的な要素はない。「名の真言」として『無量寿宗要経』の「アパリミタ・アーユルジュニャーニャ」といったもの(ジターリの成就法にも出る)、または「アマラナ・ジーバンティ」といった後世の阿弥陀仏成就法に出てくるものが見られる（奥書の後の真言の置き方はジターリの成就法と類似点が見られる）。最後に、自他の極楽往生を願って廻向している。
作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi smon lam

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Zhwa dmar cod paṇ 'dzin pa
著者名よみ：シャマル・チューパンディンパ
著者名別名：Zhwa dmar ba Chos kyi dbang phyug
著者生没年：1453- ?
成立翻訳年：15-16c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：(P.214) bDe ba can gyi smon lam nyung bsdus tsam zhig rgyun khyer du dgos pas rtsol bar zhu zhes 'Brong pa bla ma dang sGis sna dgon gyi bla ma Ka rma Blo gros kyi dad 'dun bzang po'i bskul ngor / Karma pa Zhwa dmar cod paṇ 'dzin pas gsungs so //
（『極楽願文』という僅かの小集は、「常用［経典］として必要があるので、授けてください」と、ドンパのラマと、ギーナ・ゴンのラマ・カルマ派のロドゥーキ・デードゥンサンポが勧めた折りに、カルマ派のシャマル・チューパンディンパがお説きになったものである。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.213-214、1994）
参考文献：・立川武蔵『トゥカン『一切宗義』カギュ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』」5、p.55, 101、1987）
解説：著者はカルマ紅帽派の座主にはならなかったが、同派の第三代座主 チューペル・イェーシェー（Chos dpal ye shes、1406-1452)の化身である。第四代チューキダクパ・イェーシェーペルサンポ（Chos kyi grags pa ye shes dpal bzang po.1453-1525)の頃に活躍した人物とされている。TBRC によると、gTer ston Las 'phro gling pa(1585-1656)の高弟の一人であり、カギュの支派ディグン派('Bri gung)の法嗣rJe Chos kyi grags pa(1595-1659)の親教師であった。
　内容は、西方極楽浄土の教主阿弥陀仏を対象とし、〈普賢行願讃〉や『入菩薩行論』などに見られる七支供養に沿った、簡略な極楽願文であり、弟子ないし信者が日常的に行うために著された。以下に全文を訳しておく。
　「エマホ。ここから日が沈む［西の］方角［に］無数の世間を越えた所に、清浄な国土極楽があります。そこには最高の正覚者である（1)、寿命と光明が無量な方がいらっしゃる。その教主に敬礼します。意の化作である優れた（普賢）供養雲を献上し、宿世に積んだ悪を告白します（2)。一切衆生の善に随喜します。法輪を転じるよう勧請します。涅槃に入らず住されるよう祈願します。私の三世の善の集まりによって（3)、今世から寿命が尽きるやいなや、かの最高の国土に生まれ、かの教主のように、私も自他の利益を円満し、正定者として成就させて下さい（4)。」
作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi smon lam

書名の日本語訳：極楽誓願
著者名：'Brug pa Pad ma dkar po
著者名よみ：ブクパ・ペーマカルポ
著者名別名：rGyal dbang 'Brug pa Pad ma dkar po
著者生没年：1527-1592
成立翻訳年：16c.後半
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：(p.210) bDe ba can gyi smon lam dKon mchog brtsigs(sic. brtsegs) pa'i 'Od dpag med kyi zhing bkod las phyung ste Padma dkar pos Lo gror Rong ljon

nang zhes bya ba'i gtsug lag khang du bris pa Ban btsun rGyal ba bzang po la sogs pa'i don gnyer ba thams cad bde ba can du skye bar gyur cig //
（『極楽の誓願』は〈宝積経〉中の〈無量寿経〉から取り出して、ペーマカルポが、ロドにあるロンジョンナンという経堂で書いたものである。僧尼ギェルワ・サンポなどの希求者すべてが、極楽に生まれますように。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.207-211、1994）
参考文献：・斉藤昭俊・李載昌編『東洋仏教人名事典』（新人物往来社、p.272、1989）
・立川武蔵『トゥカン『一切宗義』カギュ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』5、pp.105-106、1987）
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.26
解説：著者はブクパ・カギュ派の第4代の活仏であり、学者として有名である。独自の思想はないものの、あらゆる分野に多くの著作を残しており、その明晰さのゆえゲルク派以外では各分野の総論として彼の典籍は利用されたが、中でも『仏教史』が有名である。Kapstein によると、本著はカルマ・カギュ派の常用経典とされている。この人には他にも関連著作があるようであるが、未調査である。
　本作は無量光仏への帰命の後、奥書の通り全般的に、〈無量寿経〉の所説に基づいた四句からなる21偈で構成されている。
　v.1では、無量光仏の語義説明を含めつつその仏への敬礼が説かれる。v.2では供養・懺悔・随喜・廻向が説かれ摂取を祈願する。v.3では法蔵菩薩が誓願を成就したように、自身も誓願が成就するよう祈願する。vs.1-3では前行としての七支供養（勧請は除く）が説かれる。v.4では聞名による往生を説く法蔵菩薩の第18願が引用され祈願される。v.5では無量光仏の憐れみの鈎（フック）による極楽への引導が祈願される。vs.6-21においては、極楽国土の特徴が様々な角度から述べられ、そこへ往生することが繰り返し祈願される。極楽国土の特徴として、宝でできた平坦な大地、悪趣が無いこと、香水の大河や変化鳥の存在、大きな菩提樹、華雨、思願の自然成就、見飽きない荘厳、二種類の往生の仕方（蓮華の胎にとどまる胎生と蓮華から直ちに生まれる化生）、眷属の数・寿命・誓願などの修行や功徳が無量であることが挙げられている。
　最後に、功徳を欲するものが皆、自己と同じく極楽往生することを祈願する一文で終わる。
作成者名：中御門敬教

bDe ba can gyi smon lam

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Tāranātha
著者名よみ：ターラナータ
著者生没年：1575-1634
成立翻訳年：16-17c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.213） bDe ba can gyi smon lam 'di yang / Ta sa'i don can sa skyong dbang mo Yid 'dzin dpal legs kyis bskul nas Tā ra nā thas gTings khobs gnyan yod du smras pa'o / / manga laṃ bkra shis / /
（この『極楽願文』も、タサの利益を有する土地の守り神イーディン・ペーレクがお願いし、ターラ・ナータがティンコプ・ニェンヨにおいて述べられた。喜ばしきかな。吉祥たれ。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、1994）pp.211-213
参考文献：・立川武蔵『トゥカン『一切宗義』チョナン派の章』（『西蔵仏教宗義研究』6、1993、p.15）
・藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・プトンの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：著者は、極端な如来蔵実在説である「他空説」を唱えたチョナン派の学者であり、『インド仏教史』の著作でも有名であるが、ジターリ流の阿弥陀仏成就法の系譜に名を連ねる人でもある。ジターリ流が『無量寿宗要経』に基づき無量寿9尊であるのに対して、それを伝承したサキャ派では1尊の行法が行われていた。本著も1尊の形を取り、典拠も『無量寿経』に依っている。
vs.1-2 には常住・堅固な実体を強調する学説の特徴が伺えなくもないが、基本的には仏の存在を讃えてから、現世のことから極楽往生とその後の利他行まで祈る願文である。4句からなる8偈よりなる。
　vs.1-2において、仏について、究極的な本性と世俗的な現れとが相即した双入、利他の活動を行う存在として、讃えている。
　次に祈願に入る。v.3 に、一切有情が善を為し、幸福をそなえ、目的すべてが成就すること、v.4 に、臨終時に無量光仏の誓願が成就した極楽国土に生まれること、v.5 に、一切諸仏が賞賛し、誓願が成就した無量の願いごと、荘厳により飾られた極楽国土に生まれること、v.6 に、一切に渡って誓願を成就し、衆生を成熟し、国土を浄化し、極楽浄土に生まれること、v.7 に、往生して直ちに諸々の功徳を成就し、供養雲を化作し、一切諸仏を歓喜させること、v.8 に様々な化作により、一切世間において有情を利益し、無数の衆生が浄土に導かれることを、それぞれ祈願する。
作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi smon lam mTha' yas sgo 'byed ma

書名の日本語訳：極楽願文 － 無辺の門を開く －
著者名：Ratna gling pa
著者名よみ：ラトナ・リンパ
著者名別名：1403-1478
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本の奥書刊記：（p.203）bDe ba chen po'i smon lam mtha' yas sgo 'byed ma zhes bya ba / sho lo ka sum bcu pa 'di / dad ldan slob ma 'ga' yis bskul ba'i ngor / O rgyan Padma'i gsung 'dzin gter ston Ratna gling pas lug lo 'bru bcud rgyas pa'i dus su / phag zla'i nyer gsum bkra shis skar ma rygal gyi nyin par lho phyogs gangs ri'i ngogs / dpal chos rdzong gi dben gnas su sbyar ba re zhig dge'o // dge'o //
（『大楽の究竟誓願の開門』といわれるこの三十頌は、信を具えたある弟子がお願いした折りに、オギェン（インドラブーディ）とパドマ［サンバヴァ］のお言葉を守る埋蔵経の発見者であるラトナ・リンパが、羊の年の穀物が実った時、猪月（十月）の二十三［日］、吉祥なる月の白昼（月が太陽の如く輝いている時）に、南方の雪山の山腹にある吉祥な法城の閑静な所で著述したものである。幸あれ。良かれ。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川

民族出版社、1994）pp.198-203
参考文献：・田中公明『チベット密教・成就の秘宝』（大法輪閣、pp.253-254、2001）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」（仏教大学総合研究所紀要別冊『浄土教典籍の研究』2006）p.74
解説：著者はニンマ派の人であり、パドマサンバヴァの弟子 Lang gro dKon mchog 'byung gnas(8c-9c) など多くの成就者や埋蔵経発見者の転生者とされる。多くの典籍を捜査、発見し、「古タントラ全集」(rNying ma 'i rgyud bum) を編集した。サンギェー・リンパ、ドルジェ・リンパ、ペマ・リンパ、カルマ・リンパとともに、パドマサンバヴァにより予言された五人の偉大な埋蔵経発見者の一人とされている。本書においても、多くはないが、ニンマの行法が見られる。ちなみに彼の「摂寿」は、後のカルマ・チャクメーの生誕時にもその父親により行われたと言われている。
本著は、帰敬偈の3偈と願文の33偈からなる。
冒頭の3偈は　無量光仏、弥勒と観世音、パドマ・サンバヴァ、諸仏菩薩や密教の諸尊に対して面前に出現し、誓願の証人となることを請うものである。
次に本偈のvs.1-26 において、有暇・具足の恵まれた境涯の獲得から、三律儀の護持、発心、菩薩行、善知識による摂取、新旧訳の仏説の密教経典や、埋蔵経の伝承・教誡と明処などへの精通、不住涅槃の行、光明・法性への解脱、中有における成仏と利他まで、ニンマの教義にも触れながら、顕密の大乗一般における祈願が立てられる。
vs.27-30 には浄土教的な特徴が多くて、臨終時に苦なく解脱できること、無量光仏、弥勒、観音、オギェンなどの来迎と空行母の引導により、大楽浄土である極楽浄土への往生、蓮華からの化生、無量の利他行を、祈願する。
vs.31-33 において、諸菩薩と等しくこの誓願を成就し、成仏すること、三世の仏、縁起の力、自己の清浄な意楽の力による誓願の成就を、祈願する。
作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi smon lam　－Zab lam dbang　gyi cha lag－

書名の日本語訳：極楽の誓願　－甚深道自在の支分－
著者名：Rig 'dzin rGod ldem can
著者名よみ：リクジン・グーデムチャン
著者名別名：sPrul sku Rig 'dzin rGod ldem can、Rig 'dzin rGod ldem、dNgos grub rgyal mtshan
著者生没年：1325／1337-1408
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（p.184）Nub zangs mdzod dmar po nas / sPrul sku Rig 'dzin rGod ldem can gyi gter ma'o / / sarba manga laṃ　/ /
（ヌプ・サンズーマルポ（西の赤銅鉱山）からの化身・持明者であるグーデム・チャンの埋蔵経である。すべて吉祥たれ。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社、1994)pp.181-184
参考文献：・ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯』（平河出版社、1981）pp.252-253,290
・平松敏雄『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』3、1982）pp.120-121, 176-177
・ダライラマ著、宮坂宥洪訳『ゾクチェン入門』（春秋社、2003）p.273
解説：著者グーデムチャンはツァンのガムリン（gTsang Ngam ring）生まれのニンマ派の人であり、「北蔵 Byang gter（チャンテル）」と呼ばれる四事業（息災・増益・敬愛・降伏）の法類を摂めた埋蔵経を、西チベットのツァン地方のラダックで発見した。その埋蔵経はテルダクリンパ・ギュルメードルジェ(1634/46-1714)の建立したオギェン・ミンドルリン寺の伝承する埋蔵経「南蔵」と対比させて、「北蔵」と呼ばれる。その中心地は第3代リクジン・チェンモ（大持明者）ガクギ・ワンポ(Ngag gi dbang po)が建立したウ地方のトゥプテン・ドルジェタク寺であり、その教えはリクジン・グーデムの歴代の化身により現在まで継承されている。また「北蔵」は、ダライラマ５世の『無量寿の精髄錬金による寝室－久住の儀軌および常行瑜伽に必要なる補遺－』にも言及されている。
本著は 4句からなる15の偈頌で構成されるが、時に偈頌形式から外れたものも見られる。
具体的内容は、極楽国土は様々な過失がなく様々な功徳があること、その国土の荘厳や菩薩たちの優れた特徴、その国土が清浄な誓願の成就した国土であることを述べて、自他がそこに往生することを祈願する。そして臨終時には来迎を受けて極楽国土へ化生し、正法を聴聞し、仏から授記を得て、神通力を得るように祈願する。末尾には「このようにこの私の良き誓願を、最高のラマや、救世者観自在など眷属を含んだ、仏と最高の仏子等が成就させてくださいますように」と結んでいる。個々の記述内容は〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉を承けたものであり、密教的な要素は見られない。
題名はあるいは、「極楽の誓願　－甚深道灌頂の支分－」と読むべきかもしれないが、その場合、もっと大きな儀軌書の一部分であるのかもしれない。奥書のヌプ・サンズーマルポ（西の赤銅鉱山）という地名は、ニンマ派の典籍にパドマサンバヴァを中心とした資糧田（または集会樹）が位置する処として観想の対象とされている。さらにシャンパ・カギュ派のタントン・ギャルポの成就法文献にも類似した名が見られる。いずれにしても、パドマサンバヴァを介した形で西方極楽国土、阿弥陀仏の赤色、本作の埋蔵経典を収めた宝蔵を連想させる名称である。
作成者名：中御門敬教

bDe ba can gyi zhing bkod brjod pa　－Zhing der bgrod pa'i them skas－

書名の日本語訳：極楽国土の荘厳の話　－ その国土に往く階梯－
著者名：Co ne Grags pa bshad sgrub
著者名よみ：チョネ・タクパ・シェードゥプ
著者生没年：1675-1748
成立翻訳年：17c後半-18c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum　, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.44　A Zhing-bkod 1a-10a, pp.112-116
刊本の奥書刊記：（10a5）
'di yang Shākya'i btsun pa Grags pa bshad sgrub kyis dad pas Co ne dgon nyid du bsgrigs pa'i yi ge pa ni Tā yi la lung Blo bzang grub pa'/ / //manggalam / /
（これもまた釈迦の比丘タクパ・シェードゥプが浄信をもってチョネ寺において編纂した［。その］筆受者は、ターイ・ラルン・ロサン・ドンドゥップです。）
解説：著者はゲルク派の学僧であり、セラ寺の教科書の著者としても有名であり、チョネ版大蔵経の開版にも関わった。チョネは、チョネゾン（Co ne rdzong. 現在の甘粛省甘南チベット自治区にある）にある古刹であるが、1459年

にゲルク派の寺院となり、その管長や教学指導者として活躍した。

本書は〈無量寿経〉の所説をツォンカパの『極楽願文－最上国開門－』に従って、極楽浄土の荘厳の要点をまとめて、提示するものである。著者は、西方の極楽浄土に関する著作とともにそれらと題名が類似した『勝者不動の国土の荘厳』『勝者不動の国土を見せるもの　－かの最上国に往く階梯－』といった、東方の阿閦の仏国土に関する著作も行ったが、本著でも「極楽と不動（阿閦）の国土に生まれる因は成就しやすいので、この国土の教化対象者が成就したならそこに生まれることを意趣なさって、教主［釈尊］はこの二つの国土の『国土荘厳経』を別に説明なさった」（1b6-2a1）などという。

極楽往生の因は、まず『最上国開門』と同じく〈無量寿経〉から極楽往生のための因を示し、１）無量光仏をたびたび念じて名を称えること、２）多くの善根を積むこと、３）菩提心を生ずること、４）善根を往生のためにすること、５）往生を願う信楽により誓願を立てること、６）極楽国土の功徳を経の説明の通り念ずることだとしているが、これは『最上国開門』の４因のうち、第三を二つに分けて第三、第四とし、第一を二つに分けて第一、第六としたものである。さらに、本文の論述では、題名『極楽国土の荘厳の話　－その国土に往く階梯－』に示された内容が集中的に取り扱われているだけであり、それ以上のことは言及さえされていない。チベットでは、仏や浄土の観想を目的にした経典要約の文献が造られた事例があるが、本典籍も「極楽の荘厳」を主題にしたそのような文献類の一つである。

次に往生を願うには国土の功徳を知ることが必要なので、国土に対する賞讃を述べる。まず（2b4-5a1）器世間に関して、往生の因を述べる段、大地を美しくする樹の功徳を述べる段、水の功徳を述べる段、蓮華の功徳を述べる段、荘厳の楼閣と受用の功徳を述べる段がある。次に（5a1-7a4）有情世間に関して、国土を美しくする共通の功徳を述べる段、眷属の声聞と菩薩の功徳の一分のみを述べる段、菩提樹の功徳を述べる段、国土の正尊無量光仏の功徳の一分のみを述べて願望を立てる段がある。これらの内容は明記はないが、実は『最上国開門』の文言を承けた「再録」といってもいいほどのものとなっている。

最後（9b1-10a5）に極楽往生に関する経証を〈無量寿経〉、〈薬師経〉、〈白傘蓋仏母ダラニ〉、〈普賢行願讃〉から示して、著作の善を極楽往生と成仏のために廻向している。なお、トゥクジェ・シャンパン・ペルサン著『清浄大楽国土の誓願の弁別釈』にも言及される。

作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi zhing bkod smon lam

書名の日本語訳：極楽国土の荘厳・誓願
著者名：'Jigs med gling pa
著者名よみ：ジクメーリンパ
著者名別名：mKhyen brtse 'od zer 'Jigs med gling pa、Rig 'dzin 'Jigs med gling pa
著者生没年：1729/1730-1798
成立翻訳年：18c.
成立地：チベット
所収文献名：Klong chen snying gi thig le(『大界の精髄の滴』)
写本等の存欠：活字本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 2935, bDe-can-zhing-bkod
Folios 14b5-17b4
刊本の奥書刊記：（刊本17b2-3、活字本p.252）
'Od mdo dang mthun pa'i smon lam 'di ni mDo khams nas slob bu dam pa 'Jigs med phrin las 'od zer gyis ring mo nas bskul zhing // nye char de'i gsal 'debs la brtson pa 'Jigs med Blo gsal can gnyis kyi ngor rGyal ba'i myu gu mKhyen brtse'i lhas so // bkra shis//
（〈無量寿経〉に合致したこの誓願は、［東チベットの］ド・カム出身の優れた弟子ジクメ・ティンレー・ウェセルが長らく勧めていて、最近、この明確化［のため］に精進したジクメーとロサルチェンの二人にちなんで、勝者の苗（菩薩）キェンツェ・ハによって［著述されたものである］。吉祥であれ！）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.248-252、1994）
解説：著者は、ニンマ派教義の大成者ロンチェンパ（1308-1363）を幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティクの体系を継承した。古刹ミンドゥルリン所蔵の『古派タントラ集』を整理し、ニンマの復興を目指した。1762年には Tshe ring ljongs paḍma 'od gsal theg mchog gling を建立した。弟子にジクメー・ティンレー・ウセル（'Jigs med 'phrin las 'od zer 1745-1821、rDo grub chen1世）やクンサン・シャンペン(Kun bzang gzhan phan)がいる。この系統では、ジュ・ミパム(1846-1912)、ジクメー・テンペーニマ(1865-1926、rDo grub chen3世)などリメー（無宗派運動）で活躍した人が多く、著者自身も含めて阿弥陀仏や極楽往生に関する著作を幾つも著わしている。

本著も『大界の精髄の滴』（Klong chen snying gi thig le）に所属する。活字本には、'Jigs med gling ba'i(sic.) bde smon ないし'Jigs gling bde smon とのみ表記されて、書誌は注記されていない。しかし、刊本には、『極楽に往く儀軌 －無量速疾道－ というものと、極楽国土の荘厳・誓願bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam zhes bya ba dang/ bDe ba can gyi zhing bkod smon lam』というように、前半の儀軌と密接に関連した願文として収録されている。さらにその後には、極楽国土を成就する行法である『Khong kyi khrus cho ga dang 'brel ba'i gshin po la lam bstan内部の洗浄儀軌と関係した亡者への道の説示』も併収されており、葬儀とも関連を持っている。

本著は、極楽国土の荘厳を述べて、そこへの往生を誓願するものであるが、その内容は奥書のとおり、すべて＜無量寿経＞に依っており、5句を一単位とした18の祈願文と末尾の要約から成っている。5句の一単位は、初めの４句で無量光仏と極楽浄土の特徴を述べて、最終の１句で極楽往生を願うという形式が反復されている。

末尾の要約は、釈迦牟尼仏の所説を受けてアーナンダが西方に散華・合掌・敬礼したこと、阿弥陀仏の無礙なる名は十方に遍く知られて、諸仏も賞讃なさっていると経典に説かれている。だから、我々が供養・散華・随喜・勧請・祈願・廻向するなら、願いがそのとおりに成就する、といってこの行の利徳を説いている。

作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi zhing gi bstod smon

書名の日本語訳：極楽国土の讃願
著者名：Dol po pa Shes rab rgyal mtshan dPal bzang po
著者名よみ：トルポパ・シェーラプ・ギェルツェン・ペルサンポ
著者名別名：Shes rab rgyal mtshan dPal bzang po
著者生没年：1292-1361
成立翻訳年：14c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本所在：・The 'Dzam-thang edition of the Collected

Works of Kun-mkhyen Dol-po-pa Shes-rab-rgyal-mtshan, Vol.7 TA.M（series vol.10）collected and presented by Matthew Kapstein（New Delhi: Shedrup Books and Konchhog Lhadrepa, 1992-1993）pp.891-896
刊本の奥書刊記：（p.181） 'di ni sa ga zla ba'i tshes bco lnga'i snga dro la zhing khams bDe ba can nye bar gzigs nas tshul ji lta ba bzhin bstod pa ni / chos rje kun mkhyen Jo nang ba chen po Shes rab rgyal mtshan dPal bzang po nas rNgog lo tsā ba'i gzim khang du mdzad pa'o / / 'di la brtson pas phyi ma la bDe ba can du skye bar the tshom med do / /
（この［著作］は、氏宿月の15日（4/15降誕会ヴァイシャーカ）の午前に、極楽世界を間近に見て、ありのままに称讃したものである。法主であり、一切智者たる偉大なるチョナン派のシェーラプ・ギェルチェン・ペルサンポが翻訳師の寝室でお作りになった。これに励むことによって後に極楽に生まゴクれることに疑いはない。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、pp.176-181
参考文献：・谷口富士夫『トゥカン『一切宗義』チョナン派の章』（『西蔵仏教宗義研究』6、1993）pp.22-23
解説：著者はチョナン派の他空説（gzhan stong. 円成実である如来蔵こそが基盤として常住堅固で不空であり、そこにおいて他である依他起や遍計所執である客塵の諸法は空であるという主張）の大成者であり、時輪タントラの実践者として有名である。その極端な如来蔵実在説は非仏教的なものとしてチベットの他宗派から激しく批判された。著者にはもう一つの極楽願文があるが、そこにも本著にもチョナン派特有の他空説や密教的な要素は見られない。書誌的な分析はそちらを参照されたい。
　本著は36偈頌の誓願文からなる。冒頭の v.1から v.25までは、極楽浄土の存在と全般的な特徴を讃えては、極楽世界に対して敬礼するものである。その後、vs.26-30は極楽世界の個々の功徳荘厳を讃え、vs.31-35は極楽世界の教主を讃え、それらに対して敬礼する。そのうち、vs.34-35には阿弥陀仏は誓願を成就した者であり、その名号を唱え受持するなら、臨終時に来迎があるとされる。それを受けて、v.36は極楽への化生、見仏、菩提授記を願う。vs.1-35の「讃」とv.36 の「願」を合わせて題名の「讃願」となっている。全体的に〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉の所説を忠実に承けた内容である。
作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi zhing gi yon tan sems pa dang sbrags te smon lam 'debs tshul byin rlabs myur 'jug dang Yid dga' chos 'dzin gyi zhing bsngags brjod bcas

書名の日本語訳：極楽国土の功徳を思惟することと合わせて誓願を立てる方法 － 加持速入、そして意喜ぶ法を受持する国土の賞讃
著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa(クンタン3世)、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c末-19c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 37, New Delhi 1975 Vol.5 Ca , Zhing-bkod 1a-7b3, 422-435
刊本の奥書刊記：（4a6-b2）zhes pa 'di ni dad brtson blo dang ldan pa Rab 'byams pa Dag dbang don grub dang dge slong dKon mchog grags gnyis kyis bskul ba'i ngor / byin rlabs kyi khyad kyis zhing gi yon tan phal cher rJe'i gsung gi tshigs bcad rang sor bzhag nas de dang mthun pa'i smon lam gyis zur brgyan / rJe'i gsung gi tshig lhug pa nas kyang 'ga' zhig kha bskang ste btsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes sbyar ba'i yi ge pa ni sNgags ram pa Ratna ā na nda'o / /
（これは、ダクワンドンドゥプと比丘コンチョクダクの二人が勧めた折りに、信・精進・知を具えたラプチャンパが、特別の加持による［極楽］国土の功徳の大部分［についての］尊者［ツォンカパ］のお言葉の偈頌をそのままにしておいて、それと等しい誓願によって周辺を飾った。尊者のお言葉の以外からも補足して尊者コンチョクテンペードンメーが著作した［。それの］筆受者はガクランパ（真言学博士）・ラトナアーナンタである。）
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。
　本著は、無量光仏を対象としたグル・ヨーガ（元来は真言密教の前行であったが、チベットでは罪障の浄化や福徳の集積のためにも広く行われるようになった）と文献であり、無量光仏を師とし、行者が自身と仏を無差別だと観じて行うものである。その上で、宗祖ツォンカパが〈無量寿経〉に基づいて著作した極楽願文『最上国開門』と結びつけて、題名が示すように極楽国土の功徳を思惟し、合わせて誓願をたてる方法を述べるものであり、刊本のうち Ca 1a-4b2 に相当する。後半の「意喜ぶ法を受持する国土の称讃」の部分（Ca 4b2-7b3）は、弥勒の兜率天（dGa' ldan）への往生を祈願する別の作品である。ツォンカパも両浄土への往生を祈願しているが、ここでも両浄土への往生に関する著作が並んで収録されているわけである。
　本著ではまず、『最上国開門』の前に、または遷移（ポワ）の所縁を中心とする場合、信ずる者は極楽往生すると〈無量寿経〉に説かれるから、無量光仏を頭頂に招き、自身の脈と滴を明瞭にし、心底からの願いをもって、称えるべきであるという。行者の識を無量光仏の心臓に溶け込ませるという遷移は、無上瑜伽タントラの行法であるが、本論にはそれ以上の言及はない。
　続く極楽願文は、まず〈無量寿経〉（『浄全』23. p.287, vs.3-5）の、微塵の数の世界を宝で満たして布施するより、無量光仏の名と極楽浄土の功徳を聞いて信心を起こすほうが、はるかに福徳が大きいという内容を示してから、『最上国開門』と同様に、しかし簡略な形で『同経』に説かれた仏や国土の荘厳の功徳を挙げては、仏による摂取や極楽往生を繰り返し祈る願文となる。
　なお、著者の直弟子でモンゴル仏教の指導者となったハルハ・タムチク・ドルジェ（Hal ha Dam tshig rdo rje, 1781-1855）著『世尊無量光を供養し祈願する儀軌 －善吉祥を与えるもの－』の祈願の個所（23a1-26a2）には、本論の Ca 1a3-4a6 が引用されている。
作成者名：中御門敬教

bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon tshig

書名の日本語訳：極楽国土に生を受けるための誓句

書名別名：bDe can smon lam
著者名：Dharmabhadra
著者名よみ：ダルマバドラ
著者名別名：dNgul chu Dharmabhadra, Bla ma chos bzang mchog
著者生没年：1772-1851
成立翻訳年：18c末-19c前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.6409［ Ca 1］
刊本の奥書刊記：（Na.1b6）ces bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon tshig 'di lta bu zhig dgos zhes mTshan ldan dam pa'i rang rtags 'chang Khra tshang sku skye rnam rgyal tshul khrims kyi gsung gis bskul ma mdzad ngor / ban gzugs Dha rma bha dras sbyar ba'o / / manga laṃ
（『極楽国土に生を受けるための誓句』は「こうしたものが必要です」という、定義を具え上人の本来の姿を持つ者であるタツァン・クキェー・ナンギェルツルティム［がそ］の御言葉によってお願いなさった折に、出家者の姿をしたダルマバドラが著述した。吉祥たれ。）
解説：著者はゲルク派の学者であり、タシキル寺に学び、西チベットのヌルチュ寺(ギャルセートクメーサンポの寺)に住持した。その法嗣に弟子で甥のヤンチェン・ドッペードルジェ（dByangs can grub pa'i djo rje.1809-1887）がいる。顕密にわたって数多くの著作を遺したが、ニンマの法についても幾らか著作している。

本著の題名は、冒頭には「極楽願文」（bDe can smon lam）、奥書には「極楽国土に生を受けるための誓句 」（bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon tshig）とある。後者が正式の題名であろう。七支供養・往生極楽・見仏・聞法・神力獲得・普賢行といったインド浄土教の教義をもとに、往生後の利他行として、大波濤行や、誓願の完成・衆生の成熟・国土の浄化といった般若学の理解を盛り込んでおり、浄土往生に基づく大乗の仏道を提示しているが、素材的には、宗祖ツォンカパの高名な『極楽願文』と共通したものがあり、その内容を簡略な願文にまとめたように思われる。

文殊師利に対する敬礼から始まり、宝の大地や意楽や資財を具えた極楽世界において、観自在・大勢至・菩薩・比丘衆に囲まれた根本師無量光仏に対する敬礼・帰依の願文を先ず説く。次に化作された海のような供養雲による供養、及び罪過の告白・随喜・勧請・祈願の願文により七支供養を行う。そして臨終時に断末魔の苦しみをなくす無量光仏に最上国土極楽世界へ引導されるよう祈願する。往生後には仏説を聞法し、教誡の内容を如実に理解し、獲得した神力により他国土へ赴いて大波濤行を完成し、穢土の衆生に説法し、勝者が賞賛した道に衆生を導くよう誓う。なお、このような往生後の救済行は〈普賢行願讃〉所説の普賢行と、文殊師利から寂天などへと伝承された菩提道次第のうちの一伝統（大波濤行）を踏まえたものである。

ひき続き阿閦・文殊師利・観自在・金剛手・釈迦仏・薬師仏・無量寿仏のように利他を成就して稀有なる力を得るよう祈願する。聞思修を成就した最高の帰依処において、大・明・速・深の知慧を獲得し、勝者の教えを保ち彼と等しくなるよう祈願し、その後で［誓願の］完成・［衆生の］成熟・［国土の］浄化を円満し仏位を得るよう祈願をくり返し、これら諸願の成就を祈って終了する。
作成者名：中御門敬教

bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam　－Zhing mchog sgo 'byed－

書名の日本語訳：極楽国への生を受けることの誓願　－最上国開門－
漢訳書名：極楽願文（『大正蔵』19（No.935））
著者名：Tsong kha pa
著者名よみ：ツォンカパ
著者名別名：Blo bzang grags pa, Blo bzang grags pa'i dpal
著者生没年：1357-1419
成立翻訳年：1399
成立地：チベット
所収文献名：rJe thams cad mkhyen pa Tsong kha pa chen po'i bka' 'bum thur bu（ラサ版　東北No. 5275）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5275（69）, Kha. 85a-100a
・ラサ版　東北No. 6944（6）［1-10］
・タシルンポ版, Kha. 100a3-117b1
・北京版　大谷No. 6071, rJe 3, Ga. 87b6-102a4
刊本の奥書刊記：（P.Ga.101b8）bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam Zhing mchog sgo 'byed ces bya ba 'di ni Blo bzang grags pa'i dpal gyis rDzing phyi'i gtsug lag khang du sbyar ba'i yi ge pa ni bZang skyong gis bgyis so / /
（『極楽国に生を受けることの誓願、最上国開門』というこれはロサン・タクペー・ペル（Blo bzang grags pa'i dpal）がジンチの学堂（rDzing phyi'i gtsug-lag-khang）において著作し［た。それの］筆受はサンキョン（bZang skyong）が行った。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs smad（四川民族出版社、pp.334-335、1994）
現代語訳書：・小野田俊蔵「ツォンカパ造『最上国開門』試訳－チベット　に於ける本願思想受容の一例として－」(『仏教文化研究』27 、1981)
・R. Thurman, Prayer for Rebirth in Sukhavati by Je Tsong Khapa written in 1395－Library of Tibetan Works and Archives, The Life and Teachings of Tsong Khapas, 1982
・釈舎幸紀「無量光仏礼讃文をめぐって（序説）　－その解説と和訳－」（『高田短期大学紀要』3、1985）
・梶浜亮俊「ツォンカパ著『極楽への誓願文』の研究」（『大阪工大摂南大学中研所報』23-3、1991 ）
・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』　（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）
参考文献：・小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教系仏典」（『仏教大学大学院研究紀要』7 、1979）
・小野田俊蔵「チベット所伝の浄土観想修法」（『国立民族学博物館研究報告別冊』1、1983）
・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』（永田文昌堂、2002）
・石浜裕美子、福田洋一『聖ツォンカパ伝』（大東出版社、2008、p.140,187）
解説：ツォンカパ・ロサンタクパは、現在チベットの最大宗派ゲルク派の開祖である。東北チベットのツォンカに生まれ、幼くして出家し修学し、中央チベットの諸学問寺で顕教密教全体に関して学んだ。別解脱戒、菩薩戒、三味耶戒の持戒と、中観帰謬論証派の哲学により、チベット仏教を刷新、包括する修道体系を確立した。各地で僧俗多くに説法を行い、ラサでモンラム大祭を創始し、ガンデン寺を建立した。顕密の代表作『菩提道次第大論』『真言道次第

大論』を初めとして多くの著作がある。阿弥陀仏をも見仏し、示寂の後、極楽往生とした。本著は弥勒に対する讃とともに文殊の指示により著わされたという。

内容は、〈無量寿経〉に基づいて、そこに説かれている最高の仏国土である極楽国土を観想し、そこに往生するための誓願を立てる。強い願いをもって資糧を積むなら極楽国土への往生は不可能ではないし、この世界の人たちは極楽への信仰が大きいので、往生にふさわしいという。往生の因としては、繰り返し阿弥陀仏を随念すること、善根を無限に積むこと、菩提心を生ずること、善を往生のために廻向することの四つが挙げられる。次に極楽国土の功徳を、器世間として宝樹・宝水・宝蓮華・楼閣と資財、次にそこに住む者の特徴、声聞・菩薩の眷族、阿弥陀仏という観点から述べる。次に強い欣求の必要性が述べられ、そして極楽への往生を主眼としながら大乗の仏道を行ずることへの願文が述べられる。この著作は密教の成就法などとは関係なく純粋に〈無量寿経〉の経文に依っていること、少善根による往生には言及せず、菩提行の実践を強調することが特徴である。奥書の後(P. Ga. 102a1-4)は、極楽往生と衆生利益を願う3偈で結ばれている。

この願文は、冒頭と中核部分を抜粋した日常読誦版もある。カルマ・チャクメーによる『清浄大楽国土の誓願』（rNam dag bde chen zhing gi smon lam,〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈悲華経〉〈鼓音声ダラニ〉等に基づき、密教にも言及する）とともに、チベットでの顕教の二大極楽願文として、ゲルク派外にも大きな影響を残した。

作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi zhing du bgrod pa'i myur lam gsal bar byed pa'i sgron me

書名の日本語訳：極楽国へ往く速疾道を明らかにする灯火
著者名：Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po
著者名よみ：ガクワンロサン・チュウデンペルサンポ
著者名別名：Blo bzang chos ldan、Cang skya hu thog thu、lCang skya1、灌頂普照広慈大国師章嘉呼図克図
著者生没年：1642-1715
成立翻訳年：17-18c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・北京版　大谷No.6226, lCang skya bKa' 'bum, Kha. 146a2-155b2
刊本の奥書刊記：（P.Ca.155a7）'di ni rgyal ba'i dgongs pa yab rje yis / / legs par bkral ba'i Zhing bkod smon lam la / / Myur lam nyal sgom sogs kyi man ngag gis / / brgyan te bshar sbyang 'khrer bder tshigs bcad du / / sa mtha'i sprang btsun Blo bzang ming can gyis / / zhing der skye ba'i bag chags 'jog pa dang / / skal mnyam bzhan la'ang phan 'dod lhag bsam gyis / / rgyal khab be'i cing zhes bya'i 'dabs su sbyar / / 'dir 'bad dge bas bde ba can nyid du / / skyes te theg chen chos la spyod pa dang / /ma dag zhing gi 'gro ba thams cad kyang / / zhing der drangs te gtan bder 'god par shog / /
（これは勝者の意趣を君主（ツォンカパ）が善く註釈なさった『国土荘厳誓願（最上国開門）』を、［パンチェン1世の］『速疾道』（東北No.5958）、「眠りの修習」などの口訣で飾ったものである憶念修を行いやすいように偈頌として、辺地の貧僧でロサンという名を持つ者が、「その国土に生まれる習気を［心相続に］置きたい、機縁の等しい他者にも益したい」と欲する増上意楽により、帝国の北京というところの近郊において著作した。ここに勤めた善により極楽へ生まれて、大乗の法を行じ、不浄国土の一切衆生もかの国に導き、永久の安楽に立たせよう！）
現代語訳書：・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』永田文昌堂、2002
参考文献：・梶浜亮俊「チャンキャ一世の浄土思想」（『大阪工大摂南大学中研所報』25-3、1993）
・梶浜亮俊「チャンキャ一世の一小論について」（『宗教研究』66-4、1993）
・梶浜亮俊「チャンキャ一世の往生思想」（『宗教研究』67-4、1994）
解説：著者はロンポ寺座主とパンチェンラマ1世によりタクパウセルの転生者に認定され、ダライラマ5世により受戒し、ウで修学した。清朝と交流し、モンゴル、満州の教化を行った。

本著は冒頭に、『無量寿経』に無量光仏の国土に往生する方便がに説かれたのを、第二の勝者ツォンカパが明らかにした極楽願文『最上国開門』の意趣を、簡略にまとめたものとされている。

具体的にはまず、ツォンカパの『最上国開門』と、それを承けたパンチェン・ラマ1世の『速疾道』に拠り、また〈無量寿経〉から極楽世界の諸功徳、仏の諸功徳、そこへの往生の仕方や往生した者の功徳の詳しい内容を偈頌によって記述し、導師無量光に帰命し、祈願し、招請して、誓願の証人であると思惟し、その眷属と合わせて観想する。〈普賢行願讃〉所説の七支供養を行い、無量光仏に帰命し、供養し帰依し、加持を願う。有情たちが速やかに正等覚者の位を得るために、極楽へ往生し無量光仏の教えを受けること、自己の善と三乗の一切聖者の善行、如来の諦言、法界の清浄、律儀の力により、自己がここで死去した直後に極楽に往生し、諸功徳を現成し、菩薩の広大行を完成し、穢土の有情たちをも仏道に導こうという誓願を唱える。唱えた善行を極楽往生の因として廻向する。

詳しくは〈普賢行願讃〉と『極楽誓願』の二つ、または余裕のないときは強い願楽により本論所出の誓願を唱える。ここで密教の成就法を行い、自己が受用身の無量光であるなどと観想する。さらに、廻向・誓願による結生を願い、眠るのは西に頭を向けて獅子のように眠り、無量光の身として起きて、行儀すべてにおいて極楽国土や、無量光仏などを思念する。さらに往生の因を積むだけでなく、疑いにより蓮華の蕊に五百年留まらないように〈無量寿経〉の所説に対して決定を得る。

本著は、同じゲルク派のギェルキェンポ・タクパギェルツェン(rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan)著『安楽国土の主無量光、所依能依を合わせたものに関した話の正説－見ると有益なものの宝玉の藤』において極楽浄土の諸功徳を述べる個所に多く引用されている。

作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi zhing du thogs pa med par bgrod pa'i myur lam

書名の日本語訳：極楽国土に障碍なく往く速疾道
著者名：Paṇ chen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan
著者名よみ：［パンチェン・］ロサン・チュ-キギェルツェン
著者名別名：Paṇchen Lama I 、Paṇ chen Chos rgyan
著者生没年：1567-1662
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北目録No.5958［Nga.1a1-7b4］
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 1245, Folios 1a1-7b4
刊本の奥書刊記：（Nga.7a6）bDe ba can du thogs pa med

par 'jug pa'i myur lam 'di yang / Slob dpon Jetāri dang / Bla ma rDo rje gdan pa'i man ngag dang / Ba ri lo tstsha ba nas brgyud ma Chos rje Sa Paṇ gyis Yi ger bkod pa dang / rJe thams cad mkyen pas bDe ba can gyi zhing bkod smon lam dang bcas pa mdzad pa'i man ngag dgongs pa gcig tu gnas pa ltar / deng sang gi gdul bya rnams la skal pa dang 'tshams pa'i sman yon du 'gyur ro snyam pa'i lhag bsam gyis kun nas bslangs / mdo rgyud dag 'dzin pa'i bTsun po Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan gyis sbyar ba 'dis kyang / 'gro kun bDe ba can du skye ba'i rgyur gyur cig / / Mangalaṃ / /

/ / Oṃ svasti / phan bde'i 'byung gnas rgyal bstan yongs 'du'i ljon / / rab rgyas 'gro ba kun thar mchog 'bras bzang la/ /spyod phyir bKra shis lhun grub chos grwa cher / / chos sbyin 'dzad med dal 'gro'i rgyun 'di spel / / sarva jagataṃ / / / /

この『極楽国土に障碍なく往く速疾道』［について］もまた、［内容としては］軌範師ジターリ（Jitāri）と師ドルジェデンパ（rDo rje gdan pa, Vajrāsana）の口訣と、バリ翻訳師（Ba ri lo tsa ba）からの伝承をサキャ・パンディタ（Sa-skya Paṇḍita. 1182-1251）が文字に記したものと、尊者一切智者［ツォンカパ］の御作『極楽国土の荘厳および誓願』の口訣は、お考えが同一に定まっている［。その］ように、今日の教化対象者たちにおける機縁と相応した薬効となるであろうという増上意楽により動機づけられて、諸々の経とタントラを受持する
僧侶ロサン・チューキギェルツェンが［本著を］著作した［。著作の善たる］これによってまた、一切衆生が極楽に生まれる因となりますように！吉祥たれ！

オーム・スヴァスティ！福利・安楽の起源たる勝者［世尊］の教えがすべて集まる最も広大な樹木［は最上の妙果を生む］、衆生すべてが［その樹木から］最上の解脱の妙果を受用するために、タシ・フンドゥプ大寺において、法施が尽きることなくこの河の流れを増長させますように！サルヴァ・ジャガタム！

現代語訳書：・梶浜亮俊「パンチェン・ラマ一世著『極楽世界に障害なく行くための迅速な道』の研究」（『摂大学術B：人文科学・社会科学編』10、1992）

解説：著者はタシルンポさらにセラ、デプンといったゲルク派の大寺に住持し、ダライラマ4世、5世が具足戒を受けるとき親教師をも務めた。ダライラマ5世によるチベット統一政権の時代に大きな影響を与えた。彼は没後、阿弥陀仏の活仏として認定されたが、これはゲルク派ではダライラマ2世以降二人目であり、彼から遡って、パンチェンラマの系譜が成立することになった。パンチェンラマの世代は、没後に追認されたケードゥプ・ゲレク・ペルサンポ mKhas grub dge legs dpal bzang po. 1385-1438)など3代を含めて数えた場合に、本著者は第4世となる。パンチェンラマは阿弥陀仏の化身とされたので、以降この活仏を通じた阿弥陀仏信仰という形も見られることになる。

奥書が示しているように、本書は、ジターリ流の阿弥陀仏成就法、サキャ派の無量寿に関する教え、〈無量寿経〉に基づくツォンカパの『最上国開門』を取り込んだ著作である。冒頭には本作を「今日、道を得ていない下・中の人のそれぞれにとって必要なもの」といって、機根の未熟な人の極楽往生を中心にしており、ツォンカパが小善根の人の往生に言及しなかったのとは対照的であり、補完的でもある。

具体的な実践としては、1）昼夜に念・知に依って最上国に往く道を修めること、2）最後に［日常生活の］作業（羯磨）に適用すること、という 2項目を立てている。

そのうち、第1（2a4以下）には、〈無量寿経〉や『最上国開門』の所説によって、1）無量光仏と極楽浄土を念ずること、2）資糧を積むこと、3）菩提へ発心すること、4）極楽往生への誓願を立てることを、順次説いているが、これは『最上国開門』に極楽往生の 4つの因としてまとめられたものである。特に行住坐臥すべてにおいて無量光仏のもとに居ること、もとへ往くことを思惟し、眠るときは西を向き、種字とその種字から光が来るのを観想すること、無量光仏が来て自己の心臓に溶け込むこと、起きる時はその光により起こされたことを観想するなど、いつも無量光仏と離れないことを説いている。これらはサキャ派の教えに見られた行法である。

項目の第2（6a4以下）には、死の徴候が現れた時の行法が簡潔に述べられている。特に心臓から識が引導されて無量光仏の心臓に溶け、蓮華に化生するという往生の作法は、この実践以外では遷移（'pho ba）の行法として詳しく扱われるものである。

さらに（6b3以下）、諸々の仏国土の中でも、阿弥陀仏の本願の成就によって極楽浄土は生まれやすく、悪趣に転落しがたいこと、釈迦牟尼もこの世界の者たちのために多く説かれたことを指摘して、この教えを実践すべきだと勧めている。

結びの偈（6b6以下）には、世間の苦と、無放逸であり、輪廻より出離すべきこと、極楽浄土の功徳、釈迦牟尼と無量光仏の導きによりそこへ往生すべきことが説かれている。

作成者名：中御門敬教

bDe ba can gyi zhing sbyong ba'i dad pa gsal bar byed pa －Drang srong lung gi nyi ma－

書名の日本語訳：極楽国土を浄める信を明かすもの －仙人の教えの太陽－

著者名：'Jam mgon 'Ju Mi pham rgya mtsho

著者名よみ：ジャムゴン・ジュ・ミーパム・ギャムツォ

著者名別名：Mi pham 'Jam dbyangs rnam rgyal

著者生没年：1846-1912

成立翻訳年：19-20c.

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：Collected Writing of 'Jam mgon 'Ju Mi pham rgya mtsho, by Sonam Topgay kazi, volume7, ［223（hūṃ.1）-251.6（hūṃ.15a6）］, Gangtok, 1976

刊本の奥書刊記：（251.5, hūṃ.15a5）'ang bdag cag gi thog ma'i dge ba'i bshes gnyen chen po bslab pa gsum gyi rnam thar phul du byung zhing / / bDe ba can du rgyal ba'i sras kyi spyod pa la slob pa'i rgyu tshogs la mnga' dbang yang dag par 'byor ba bka' drin mtshungs pa ma mchis pa'i dGe slong Grags pa rgyal mtshan dpal bzang po'i zhal snga nas 'di lta bu bris shig ces bkra shis pa'i lha reg dang bcas bri gzhi'i rkyen sbyar te yang yang bskul ba la brten nas gang gi slob bu Mi pham 'Jam dbyangs rnam rgyal zhes bya bas sTag tshang ri khrod du bka' drin gso ba'i mchod yon gyi tshul du bris te phul ba'i dge bas 'gro kun bDe ba can gyi zhing du skye bar gyur cig / / dge'o / / bkra shis so / /

bslab gsum dbang phyug mnga' ri chos rje yi / / thugs bskyed zla med mthu las legs 'ong mthus / / spar du bsgrubs dges 'brel thogs yid can kun / / bDe chen zhing skyes mngon sangs rgyas gyur cig / / sarva mangalaṃ / / dge'o / /

（［本作］もまた、私たちの最初の偉大な善知識であり、三学の行状が完成しており、極楽［国土］における仏子（菩薩）の行いを学ぶ因の資糧について自在を真に具えており、

御恩が無比である比丘タクパ・ギェルツェン・ペルサンポ御前が、「このようなものを書きなさい」といって、吉祥なるカタ［贈り物のスカーフ］とともに、著作のもとになる縁を揃えて、たびたび勧めた［、その］ことに拠って、彼の弟子であるミパァム・ジャムヤンナムギャルといわれる者が、タクツァンの山［の庵］において、御恩に報いる供物のありさまとして書いて捧げた［。その］善により、一切衆生が極楽国土に生まれますように。善かれ。吉祥たれ。

三学に自在なガリの法主の、無比なる発心から良く来った力によって、ひとまとめに成就した善によって、有情全てが大楽国土に生まれて現等覚しますように。全て吉祥たれ。善かれ。）

活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs smad（四川民族出版社、pp.366-391、1994）

現代語訳書：・梶浜亮俊「ミパァムの浄土思想の研究」（『摂大学術B：人文科学・社会科学編』11、1993）
・同『チベットの浄土思想の研究』（永田文昌堂、2002）

参考文献：・梶浜亮俊「Mi phamの浄土思想」（『印仏研』41-1、1992）

解説：著者は19世紀ニンマ派の人であり、無宗派運動（Ris med）の代表的学僧の一人である。多くの著作を著わし、「文殊主（ジャムゴン）」とも称された。ペルトゥル・リンポチェ(dPal sprul O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po. 1808-1887)やコントル・ヨンテンギャムツォ（Kong sprul yon tan rgya mtsho. 1813-1899）、ジャムヤン・ケンツェーワンポ('Jam dbyangs mkhyen brtse'i dbang po.1820-1892)に師事した。弟子にドォトプチェン3世ジクメー・テンペーニマがいる。彼らリメーの人々は他宗派の教えをも学んだし、各々阿弥陀仏信仰に関する著作を幾つか著したが、本著もツォンカパの極楽願文から影響を受けている。

本著の構造は、〈無量寿経〉より、極楽国土に生まれる因として、1）無量光仏を作意すること、2）無量の善根を積むこと、3）菩提へ発心すること、4）諸善根をその国土に生まれるために廻向し、誓願を立てることとの、合計四つを挙げたうえで、題名に「lung gi nyi ma」（教証の太陽）とあるように、〈無量寿経〉を中心に〈鼓音声ダラニ〉〈普賢行願讃〉などにより、極楽世界・阿弥陀仏の特性と、往生に関する疑問や修行法を明らかにしている。題名のうち、「極楽国土を浄める（修める）」という表現は理解し難い。題名を読み込んだ巻末の偈に「浄戒・聞思を最上に修めた（浄めた）強い信、精進により」とか「無比の大利益の国土を修めた（浄めた）実践を要として」などとあるが、構文的にも内容的にも無理がある。

内容のうち、冒頭に指摘される極楽往生のための四つの因は、ツォンカパの『最上国開門』と同じであるが、四つのうち、中心は仏を念ずることとその国土に生まれるのを欲することとの二つであり、善根を積むことと無上正覚への発心は補助であるとし、信と願楽（欲）を強調している。さらに、〈無量寿経〉より信による往生、〈鼓音声ダラニ〉より唱名による往生の経証を引用して、信を強調する。

信を起こすことに対する障碍は、了解しないこと、誤解すること、疑うことの三つとして、それらを除去するために順次経証を引用して詳説するが、この部分が最も強調されている。特に疑いに関して、極楽浄土には聖者のみが往生するという考えを批判し、信と願楽により凡夫も往生できること、聞名、称名によっても往生できること、有情の福分と仏の誓願と智慧の不可思議な力により困難な道も容易になることを論じている。「別時意趣」からの問いかえに対しては、「いつか往生することは決まっている」「信などが力になる場合、或る者は死去した直後に生まれることもありうる」などと述べて、聞名の功徳に関する経説を挙げるだけであり、有情の機根、無量寿仏の救済性などには立ち入っていない。また、聞名による往生などを疑う「悪しき論理学者」によっても、極楽往生といった深密の義について〈無量寿経〉などそれらの所説を、論理的に反駁することはできない、と述べている。これらは、ツォンカパが小善根による往生を強調せず、阿弥陀仏信仰を大乗の菩薩道として捉えたのとは対照的に、阿弥陀仏による救済を強調したものである。称名による往生の主張は、中国浄土教と一致して興味深いが、ここではむしろ『鼓音声ダラニ』の所説に基づくものかと思われる。

次に、修行の方法として、昼、夜の修行に分けて説明しているが、昼の修行は、上述の四つの因ないし七支供養を行うこと、夜の修行は願を持って眠ることである。そして、上中下の三種類の人が修行の結果として得ること、その徴候を挙げながら、さらに阿弥陀仏の誓願の勝れていることを説いて、信と願楽の重要性を強調している。

作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi zhing las brtsams pa'i gtam －dGe pa'i lo tog spel byed dbyar skyes sprin chen glal ba'i sgra dbyangs－

書名の日本語訳：極楽国土に関する話 －善の収穫物を増長させる大きな夏雲の［雷が］鳴り響く音声－

著者名：'Jigs med bstan pa'i nyi ma

著者名よみ：ジクメー・テンペー・ニマ

著者名別名：rDo grub gsum pa、dDo grub chen

著者生没年：1865-1926

成立翻訳年：19c-20c.

成立地：チベット

写本等の存欠：活字本

刊本の奥書刊記：（p.445）bDe ba can gyi zhing las brtsams pa'i gtam dGe pa'i lo thog spel byed dbyar skyes sprin chen glal ba'i sgra dbyangs zhes bya ba 'di ni / byang chub shing gi bshad pa yan chad gSer 'phyang gi lor bris kyang / 'phro rnams snyom las kyi ngang la yun ring por lus pa las / slar rang lo so bdun pa 'Phar ba'i lo'i ston ka bkra shis kyi dpal dang ldan pa'i tshes la yongs su rdzogs par byas te / theg pa mchog gi gsung rab la dad pa cung zad skyes pa'i sKal bzang 'Jigs med bstan pa'i nyi mas / bKra legs mdangs chen gyi ri bo'i ngos / nags tshal dga' ba can gyi mthongs / dGe 'phel gyi gtsug lag khang du sbyar ba 'dis kyang sems can rnams kyi rgyud la 'Od dpag med kyi smon lam ma lus pa bde blag tu smin par gyur cig / /

（『極楽国土に関する話 －善の収穫物を増長させる大きな夏雲の［雷が］鳴り響く音声－』というこれは、［「大地に生起する功徳」のうち］菩提樹の説明までは丁酉年（1897）に書いたが、付加は［著者自身の］懈怠の性質において長らく欠如していた［。そ］のうち、再び自身が37歳、鉄牛年（1903）の秋、吉祥ある日に完成させた。最上乗の聖教に対して信仰がいくばくか生じたケルサン・ジクメー・テンペーニマがタレクダンチェンの山腹、喜びある園林の場所、ゲペル寺院において著作した［。この］ことによってまた、有情たちの相続に無量光の誓願すべてが容易に成熟するように！）

活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs smad（四川民族出版社、pp.392-446、1994）

現代語訳書：・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』永田文昌堂、pp.581-668、2002

解説：著者はニンマ派の活仏であり、学僧・行者として活

躍した。本書の他に極楽願文も著作している。「無宗派運動」の指導者でもあったペルトゥル・リンポチェ（dPal sprul rin po che. 1808-1887）の弟子であり、兄弟子にはジュ・ミーパム（'Ju Mi pham. 1846-1912）がおり、この系統の人は阿弥陀仏や極楽往生に関する著作をいくつも残している。

本著は〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉『悲華経』を中心に多くの経論を引用しながら、極楽国土や無量光仏やその眷属とその徳性、その浄土へ往生する仕方について、細かく項目を分けて体系的かつ詳細に議論した論書である。

全体は大きく１.目的を示して極楽国土に生を受けることに悦びを生じさせる、２.その国土に生まれることへの委縮が生ずる門を遮止する、３.そこに生まれる因の資糧を成就する仕方を示す、という三つに分かれる。特にその第3の因に関しては、１.因を成就する仕方一般、２.根本たる信仰を修治する仕方、との二つからなる。その第2は、１.その国土が初めにどのように成就されたのか、２.成就した国土の円満、という二つからなる。その第1は、1.法蔵菩薩の思惟と誓願、２.行動と資糧、３.それらの成就という観点から説明する。第2は、国土の円満、１.器世間の功徳、2.有情世間の功徳という二つから説明する。そして前者の器世間に関しては、1.大地と虚空の場所、２.それらを美しくする荘厳、という二つにより説明する。後者の有情世間に関しては、概説した後で正尊と眷属の個々に分けて説明している。

作成者名：藤仲孝司

bDe ba can gyi gsol 'debs smon lam

書名の日本語訳：極楽の祈願という誓願
著者名：Che yol rig 'dzin chen po
著者名よみ：チェーヨル・リクジンチェン
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.269）Las rab rtsal gyi(sic.) so / / Che yol rig 'dzin chen po'i gsung red lags / /
（レーラプツェルによる［著作である］。チェーヨル・リクジンチェンポのお説きになったものである。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、p.269、1994）
解説：著者はTBRCで確認できない。無量光仏に次いでパドマサンバヴァが中心となっているので、ニンマないしカギュの系統の人が著作したものかと思われる。活字本には書誌情報が何もないが、同書は著作を著者の年代順に並べているようであり、シェーチェン・ギェルツァプ(1871-1926)、本著、コンテルワ(年代不詳)、クンサン・シェンペン(1745-1821)という順序になっているので、18世紀か19世紀生まれの人であろう。

本著は9音節からなる3偈で構成される。無量光仏とその変化、眷属に対して摂取と加持を祈る祈願文である。チベット人一般における無量光仏やその眷属、その救済に関する通念を、簡略にまとめた内容となっている。

以下に全文を訳しておく。

「無量光に敬礼します。オギェンのパドマサンバヴァに祈願します。聖なる優れた観自在は、道を引導してください。仏子大勢至は、障碍を除いてください。偉大な恩恵ある根本と継承の師は、憐れみでもって摂取して下さい。悪業や罪障が浄らかとなるよう加持してください。自他が今世から生まれ変わるやいなや、瞬時に手を取り励まし、一息で極楽に生まれるよう加持してください。最高の勝者の子（菩薩）となるよう加持してください。三界の衆生を私は導きますように。」

作成者名：中御門敬教

bDe ba can du skye ba 'dzin pa'i smon lam

書名の日本語訳：極楽に生まれるための誓願
著者名：Dol po pa Shes rab rgyal mtshan dPal bzang po
著者名よみ：トルポパ・シェーラプ・ギェルツェン・ペルサンポ
著者名別名：Shes rab rgyal mtshan dPal bzang po
著者生没年：1292-1361
成立翻訳年：13-14c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本所在：・The 'Dzam-thang edition of the Collected Works of Kun-mkhyen Dol-po-pa Shes-rab-rgyal-mtshan, Vol.7 TA.M（series vol.10）collected and presented by Matthew Kapstein（New Delhi: Shedrup Books and Konchhog Lhadrepa, 1992-1993）891-896
・The Collected Works(Gsung 'bum) of Kun-mkhyen Dol-po-pa Shes-rab-rgyal-mtshan(1292-1361): Reproduced from eye copies of prints from the rGyal-rtse Rdzong blocks preserved at the Kyi chu Monastery in the Paro Valley, Bhutan(Volume 1 Paro, Bhutan/Delhi: Lama Ngodrup and Sherab Drimay. 1984)
刊本の奥書刊記：（p.175）'di yang Tol po pa Shes rab rgyal mtshan dPal bzang pos bkod pa'o / /
（これも、トルポパの人、シェーラプ・ギェルツェン・ペルサンポ が著述した。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、pp.172-175
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）pp.29-31
・Kapstein, Matthew T., The 'Dzam-thang edition of the Collected Works of Kun-mkhyen Dol-po-pa Shes-rab-rgyal-mtshan: Introction and catalogue(New Delhi: Shedrup Books, Delhi 1992）
・谷口富士夫『トゥカン『一切宗義』チョナン派の章』（『西蔵仏教宗義研究』6、1993、pp.22-23）
・袴谷憲昭「チョナン派と如来蔵思想」（『チベット仏教』「岩波講座東洋思想」11、岩波書店、1989）
解説：著者はチョナン派の他空説（gzhan stong. 円成実である如来蔵こそが基盤として常住堅固で不空であり、そこにおいて他である依他起や遍計所執である客塵の諸法は空であるという主張）の大成者であり、時輪タントラの実践者として有名である。その極端な如来蔵実在説は非仏教的なものとしてチベットの他宗派から激しく批判されたが、本書にはそれら特徴的な主張は見られない。

本著は、rGyal-rtse Rdzong 版では No.13(Kapstein の目録による番号)「四種類の誓願」(sMon lam rnam bzhi)のなかに「極楽に生まれるための誓願」(bDe ba can du skye ba 'dzin pa'i smon lam)として、また'Dzam-thang 版では、No.70(Kapstein の目録による番号)「マンジュゴーシャの毛一つへの讃、了義の宝鬘」('Jam pa'i dbyangs kyi spu nyag gcig la bstod pa Nges don rin po che 'i 'phreng ba)のなかに18, 19 に同名の二本の「極楽の願文」(bDe ba can gyi smon lam)として、891-893 と 893-96 として収録されている。トルポパには二本の極楽願文があったようであり、長さからすると、891-893が本典籍に、893-96がもう一つの「極楽国土の讃願」(bDe ba can gyi zhing gi bstod

smon)に相当するように思われる。
本文は全21偈からなり、冒頭には、世自在に帰命し、無量寿智決定光明王の御足に敬礼するが、前者は〈無量寿経〉に出る過去仏であるが、密教では阿弥陀仏に関連づけられる場合もある。後者は〈宗要経〉に出る無量寿仏の名である。
次に〈無量寿経〉(bDe ldan zhing bkod mdo)より、法蔵菩薩の本願とその成仏後に聞名した衆生が往生し、一生補処もしくは不退転になると説かれた「東方偈」のvs.17-18 を出す。次に〈無量寿経〉所説の国土や眷属の諸々の特徴を具体的に讃えては、その極楽の国土に化生することを願う誓願を、15 偈にわたって述べる。次に臨終時に諸仏による現前授記と、仏・眷属の来迎と極楽に化生することを願う誓願を、3偈にわたって述べる。そして世自在王仏の加持と法蔵菩薩の本願力と無量光仏の大加持力と三宝の諦力とにより上記の諸誓願が成就することを願う願文を述べ、死後に極楽往生し、さらに我々が変化身をもって十方世界で利他を行うことを願う願文により締めくくる。
作成者名：中御門敬教

bDe ba can du skye ba'i rgyu bzhi 'i don

書名の日本語訳：極楽に生まれる四因の義
著者名：'Jam mgon 'Ju Mi pham rgya mtsho
著者名よみ：ジャムゴン・ジュ・ミーパム・ギャムツォ
著者名別名：Mi pham 'Jam dbyangs rnam rgyal
著者生没年：1846-1912
成立翻訳年：19c後半-20c初期
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Collected Writing of 'Jam mgon 'Ju Mi pham rgya mtsho, by Sonam Topgay kazi, volume6, [417(Dhīh. 1a1-5)], Gangtok, 1976
刊本の奥書刊記：(417.Dhī.5, a5) Dhī ming pas so // (ディーという名の者が［著作した］。)
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs smad（四川民族出版社、pp.366-391、1994）
現代語訳書：・梶浜亮俊「ミパァムの浄土思想の研究」(『摂大学術B：人文科学・社会科学編』11、1993)
参考文献：・梶浜亮俊「Mi phamの浄土思想」(『印仏研』41-1、1992)
解説：著者は19世紀ニンマ派の人であり、無宗派運動（Ris med）の代表的学僧の一人である。多くの著作を著わし、「文殊主（ジャムゴン）」とも称された。ペルトゥル・リンポチェ(dPal sprul O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po. 1808-1887)やコントル・ヨンテンギャムツォ（Kong sprul yon tan rgya mtsho. 1813-1899)、ジャムヤン・ケンツェーワンポ('Jam dbyangs mkhyen brtse'i dbang po.1820-1892)に師事した。弟子にドォトプチェン3世ジクメー・テンペーニマがいる。彼らリメーの人々は他宗派の教えをも学んだし、各々阿弥陀仏信仰に関する著作を幾つか著したが、本著もツォンカパの極楽願文から影響を受けている。
著者は『極楽を治浄する信を明かすもの －仙人の教えの太陽－』も著わしているが、本論も同じく極楽に往生するための4つの因を明らかにした簡略な著作である。4つの因は、〈無量寿経〉に基づいて、ツォンカパの願文『最上国開門』に示されたように、繰り返し阿弥陀仏を随念すること、善根を無限に積むこと、菩提心を生ずること、善を往生のために廻向することをいうのが通常である。
［全訳］
極楽に生まれたいと欲する者たちが、極楽に生まれる四因の義を実践することは、無量光仏の身を一点に［専注し、］所縁とする［ことにある］。毎日、名号を7回唱えてから、「導師無量光よ、お心にかけてください。勝者よ、あなたの発心のとおりに、無上の最勝の正覚に発心します。造ったかぎりの［すべての］善根と、西方の極楽国土に、最上の勝者あなたのもとに生まれてからも、大きな波の仏子の行すべてを、完成させるために廻向する［。その］とき、今生に死去した直後、極楽浄土に化生することと、導師無量光により授記されてから、［誓願の］完成・［有情の］成熟・［国土の］浄化を究竟させますように。無量光仏に祈願します。私が無上の正覚に発心してから、あらゆる善根を最上の大楽国土に生まれるために廻向するなら、［それが］成就するよう加持してください。
作成者名：藤仲孝司

bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam

書名の日本語訳：極楽に往く儀軌 －無量速疾道－
著者名：'Jigs med gling pa
著者名よみ：ジクメーリンパ
著者名別名：Kun mkhyen 'Jigs med gling pa、mKhyen brtse 'od zer、Rang byung rdo rje mKhyen brtse 'od zer、Paḍma dbang che
著者生没年：1729 / 1730－1798
成立翻訳年：18c後半
成立地：チベット
所収文献名：Klong chen snying gi thig le(『大界の精髄の滴』)
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献.Ref.No.2935 bDe-can-myur-lam Folios, 1a-14b4
刊本の奥書刊記：(14b3-4)
ces pa'ang mDo Khams pa 'Jigs med phyin las 'od zer gyis nan tan chen pos bskul ba'i ngor Rang byung rdo rjes dPal ldan Tshe ring ljongs su sbyar ba'o//
（というものもまた、ド・カム［地方］の人ジクメー・ティンレー・オセルが大いに鄭重に勧請したのにちなんで、ランジュン・ドルジェが吉祥ツェーリン地域において著作した。）
解説：著者は、ニンマ派教義の大成者ロンチェンパ（1308-1363）を幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティクの体系を継承した。古刹ミンドゥルリン所蔵の『古派タントラ集』を整理し、ニンマの復興を目指した。1762年には Tshe ring ljongs paḍma 'od gsal theg mchog gling を建立した。弟子にジクメー・ティンレー・ウセル（'Jigs med 'phrin las 'od zer 1745-1821、rDo grub chen1世）やクンサン・シャンペン(Kun bzang gzhan phan)がいる。この系統では、ジュ・ミパム(1846-1912)、ジクメー・テンペーニマ(1865-1926、rDo grub chen3世)などリメー（無宗派運動）で活躍した人が多く、著者自身も含めて阿弥陀仏や極楽往生に関する著作を幾つも著わしている。
本著はニンマの埋蔵経『大界の精髄の滴』(Klong chen snying gi thig le）所属の文献であり、その弟子ジクメー・ティンレー・ウセル（1745-1821）の勧請による著作である。刊本表題には『極楽に往く儀軌 －無量速疾道－ というものと、極楽国土の荘厳・誓願(bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam zhes bya ba dang/ bDe ba can gyi zhing bkod smon lam)』とあり、他の阿弥陀仏、極楽浄土に関する願文や成就法類を併収しているように、本著はそれらの中で中心的な儀軌書である。筆者は、〈無量寿経〉に儀軌自体は説かれていないが、実際にそこに存在しており、仏の事業のために律儀は等しく解釈したと述

べており、同経に真言と観想法を加えて組織したものである。関連文献にジクメー・ティンレー・ウセル著『極楽に往く儀軌－無量速疾道の灌頂儀軌－無明の闇を除く光明十万を具えたもの(bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam gyi dbang cho ga －Ma rig mun sel 'od zer 'bum ldan－)』がある。

構成は、加行、本行、後の三つからなる。

加行(1b2-2a1)は、1.場所の準備、2.供物の準備と土地神への供養と行の成満への祈願、3.帰依と発心、4.発趣のための四無量心、5.菩薩戒を受ける儀軌、6.土地の加持からなる。

本行(3b4-13a4)は、1.我生起、2.面前生起からなる。そのうち、我生起(3b5-5a3)では、『蓮華網タントラ』(cf.東北目録Nos.1750-1751)の意趣として浄土の無量宮の荘厳が説かれ、自己を観自在菩薩として明瞭に観想し、真言を唱える。面前生起(5a3-13a4)は、1.供養と加持、2.資糧田の成就、3.招請、4.安住への祈願、5.供養、6.念誦親近、7.事業への適用からなる。事業への適用は、生者のための寿命成就と共通のヨーガからなる。資糧田や共通のヨーガの部分には、極楽浄土の荘厳や無量光仏とその眷属とそれらを信ずることの功徳などが詳しい。法蔵比丘の誓願とその成就にちなんで来迎と往生が祈願されるが、それらすべては〈無量寿経〉に基づいている。

後(13a4-14b4)は廻向と祝詞と利徳からなる。廻向では『大日経』の廻向文を唱える。祝詞では「円満ある金の山」云々(出典未詳)を唱える。利徳では〈無量寿経〉より聞名・歓喜・合掌の功徳が無量である段（漢訳には欠如）とアーナンダに賞讃を勧める段が引用されて、精進を勧める。

最後に、経に儀軌は明示されないが、意味に依って律儀のとおりに註釈したので、一切有情の薬となるようにと祈る。

作成者名：藤仲孝司

bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam Kong gi khrus cho ga dang 'brel ba'i gshin po la lam bstan

書名の日本語訳：極楽に往く儀軌 －無量速疾道－　内部の洗浄儀軌と関係した、亡者に対する道の説示
著者名：'Jigs med gling pa
著者名よみ：ジクメーリンパ
著者名別名：Kun mkhyen 'Jigs med gling pa、mKhyen brtse 'od zer、Rang byung rdo rje mKhyen brtse 'od zer、Paḍma dbang che
著者生没年：1729 / 1730－1798
成立翻訳年：18c後半
成立地：チベット
所収文献名：Klong chen snying gi thig le(『大界の精髄の滴』)
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.2935 bDe-ba-can- zhing-sgrub, Folios 1a-8a2
刊本の奥書刊記：なし
解説：著者は、ニンマ派教義の大成者ロンチェンパ（1308-1363）を幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティクの体系を継承した。古刹ミンドゥルリン所蔵の『古派タントラ集』を整理し、ニンマの復興を目指した。1762年には Tshe ring ljongs paḍma 'od gsal theg mchog gling を建立した。弟子にジクメー・ティンレー・ウセル（'Jigs med 'phrin las 'od zer 1745-1821、rDo grub chen1世）やクンサン・シャンペン(Kun bzang gzhan phan)がいる。この系統では、ジュ・ミパム(1846-1912)、ジクメー・テンペーニマ(1865-1926、rDo grub chen3世)などリメー（無宗派運動）で活躍した人が多く、著者自身も含めて阿弥陀仏や極楽往生に関する著作を幾つも著わしている。

本書もニンマの埋蔵経『大界の精髄の滴』（Klong chen snying gi thig le）に所属し、『極楽に往く儀軌 －無量速疾道－ というものと、極楽国土の荘厳・誓願』という表題のもとで、幾つかの阿弥陀仏と極楽往生に関する儀軌書と関連した極楽願文の後に、収録されている。極楽浄土の成就を通して死者がそこへ往生することを目的とした葬儀に関する典籍である。

具体的な内容は以下のとおり。前行として、洗浄瓶に虚空蔵菩薩を観想し、真言を唱えると、智慧サッタは去り、三昧耶サッタは光に融ける。資糧を積み国土を浄化するために、百回の念誦と七支供養の反復を行う。

死者に道を説示する本行として、第一に所依となるべき場所に、空性から蓮華月輪座を生じさせ、そこに死者の生前の姿を観想し、上師たち、三宝、自性清浄、因果の各々の真実と特に無量光仏の真実により、そしてまた発心と誓願の加持により、中有から死者の識を招く。

第二に、死者の罪悪の浄化を妨げる魔を、供物によって去らせる。灯明皿を回して真言を唱え、食して去らせる。

第三の結界では、火の印を示し、真言を唱える。

第四の罪悪の浄化には、五つ、すなわち１）尊勝母の根本真言や百字真言などにより死者の業障と悪趣を除去する。２）瓶水により鏡の面や骨片を洗い、無量光仏と諸菩薩（八大菩薩のうち虚空蔵以外）の各徳性と虚空蔵の発心と法界の力とにより有情利益を目的として各々六波羅蜜の河がその所対治分である垢を浄化するよう祈願する。３）三毒を欠如した三宝の真実により死者の三毒を破る。４）四大種は毒の父母だとして、真実語を述べて、その三毒を大種に還元されるにすぎないものとして消去する。５）仏の成道と教化によって善と安楽がもたらされるよう祝詞を述べる。

次に食べ物を廻向し、中有の有情が悪趣の生への徴候を捨て、仏道を成じて無上の正覚を得るよう祈願し、「七仏通戒偈」を述べる。

後の次第では、仏菩薩の前で造った罪悪を懺悔し、彼らの悲により死や悪趣の苦から救済され、浄化されるようにという祈願を、自利の観点さらに利他の観点から唱える。次に修行と関連した道として、業果、三宝への帰依、信と、極楽浄土を念じ、無量光仏の名号を受持すべきことを説いて祈願する。

作成者名：藤仲孝司

bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam gyi dbang cho ga －Ma rig mun sel 'od zer 'bum ldan－

書名の日本語訳：極楽に往く儀軌 －無量速疾道の灌頂儀軌－　無明の闇を除く光明十万を具えたもの
著者名：'Jigs med 'phrin las 'od zer
著者名よみ：ジクメー・ティンレー・ウセル
著者名別名：rDo bla kun bzang gzhan phan、rDo grub chen 1、Kun bzang gzhan phan mtha' yas
著者生没年：1745-1821
成立翻訳年：18c.後半－19c.前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0126, Folios 1a1-7a6
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 3023, Folios 1a1-7a6
・'Jigs gling gsung 'bum. Vol.36. 1271ff.

刊本の奥書刊記：（7a4-6）rJe bla ma thams cad mkhyen pa'i bka' brtsams Dpag med myur lam la sbyar rgyu'i dbang chog ga 'od zer 'bum ldan zhes pa 'di ni snga 'gyur rdzogs pa chen po'i bstan pa 'dzin skyong spel gsum gyi mnga' bdag Rig 'dzin Nam mkha' 'jigs med rdo rje'i bka' stsal gser gyi cod pan spyi bor bcing nas spel ba po 'Jigs med 'phrin las 'od zer gyis bgyis shing yi ge pa ni mGon po bsam 'grub kyi (sic.) bgyis pa'i dge bas 'gro ba rnams bde chen zhing du skye ba'i rgyur gyur cig / / / / dge 'o / / dge 'o / / dge 'o / / / /
（尊師一切智者の御著作『無量速疾道に結び付けるべき灌頂儀軌　－光明十万を具えたもの－』というこれは、古訳［ニンマ派］の大究竟の教えを受持し、守護し、増長するという三つの自在主である持明者ナムケー・ジクメー・ドルジェの御教えの宝冠を頭頂に結んで増長させる人ジクメー・ティンレー・ウセルが造った。筆受者［の役割］はゴンポ・サムドゥップが行った［。その］善により、衆生たちが大楽国土に生まれる因となるように！善かれ！善かれ！善かれ！）
解説：本著者はニンマ派の活仏ジクメーリンパの弟子として、師の Klong chen snying thig の教えを確立した人であり、師に『極楽願文』の著作をも勧めている。1810年に rDo grub chen dgon寺を建立した。 この系統の人たちは阿弥陀仏や極楽浄土に関する典籍を幾つか著している。
　本書はジクメーリンパ（1729 / 1730－1798）の著作『無量速疾道』に関する大部の作『極楽の灌頂儀軌、無明の闇を除く光明十万を具えたもの』（おそらく神話上のものか）を文字化した著作とされ、本文と割注という形からなっている。無数の有情を無量光仏の位に就けるために成熟させる灌頂の儀軌である。ジクメーリンパは修行と証悟が完成した人であり、彼の『極楽の灌頂儀軌』は正統なものであり、その儀軌は〈無量寿経〉〈悲華経〉には直接出ないが、〈鼓音声ダラニ〉の儀軌や、多くのタントラ、口訣所説の五族の儀軌と合致している、とされる。
　構成は前行・本行・後との三つからなる。前行ではマンダラを準備し、業瓶二つと本尊の画像を具える。
　本行では、帰依・発心の次に無量光仏・観自在・勢至など仏菩薩に祈願してから、我生起と念誦を行う。次に、面前生起、瓶の生起を行う。世尊無量光を観想し、その三処の三種字と心臓上のフリーヒ字から光を放って広観し、諸仏国土の仏菩薩、特に極楽から賢劫千仏と諸菩薩に取り囲まれた無量光仏を招き、無二となり、そこに智慧薩埵を降ろして確立してから、瓶の灌頂により浄化し、本尊が頭の化仏になり、仏の眉間の光が弟子たちに溶け込む（瓶の生起には馬頭明王の真言、瓶の儀軌には無量寿のダラニ・真言が使用されている）。そして仏の身体・真言蔓・種字・寿命丸などが行者の頭頂・身体・喉・心臓・両手に確立されるよう観想し、成就への祈願を行い、散華する。
　最後に無量寿尊を促し、捺印し、廻向する。
作成者名：藤仲孝司

bDe ba can du bgrod pa'i rnal 'byor

書名の日本語訳：極楽に往く［ための］ヨーガ
著者名：Paṇ chen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan
著者名よみ：［パンチェン・］ロサン・チューキギェルツェン
著者名別名：Paṇ chen Lama I 、Paṇ chen Chos rgyan
著者生没年：1567-1662
成立翻訳年：16c-17c.
成立地：チベット
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5895［Ka 16b5-17b2］
刊本の奥書刊記：（Ka.17b1）tshul 'di yang dad pa dang ldan pa Gug rgyal mo nor bu'i thugs dam du dGe slong Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan gyis smras pa'o / /
（この方法もまた、信と施の功徳を具えた者であるググ・ギャルモ・ノルブの修証として、比丘ロサン・チョーキギャルツェンが述べた。）
参考文献：・「往生略軌釈」（『蔵密修法秘典』4、華夏出版社、2002、北京）
解説：著者はタシルンポさらにセラ、デプンといったゲルク派の大寺に住持し、ダライラマ4世、5世が具足戒を受けるとき親教師をも務めた。ダライラマ5世によるチベット統一政権の時代に大きな影響を与えた。彼は没後、阿弥陀仏の活仏として認定されたが、これはゲルク派ではダライラマ2世以降二人目であり、彼から遡って、パンチェンラマの系譜が成立することになった。
　極楽往生を目的として行を行うための簡潔な成就法あるいはグル・ヨーガの文献の一つであり、その内容を特に観想、祈願の面から補強したものとなっている。
　具体的な内容は、まず通常の前行と観想を行い、極楽から無量光仏をその眷属とともに招いて観想し、七支供養を行う。次に「世尊・如来・応供・正等覚者である無量光の御足に礼拝し、供養し、帰依します」と百回ないし適宜、述べてから、自己と衆生を断末摩と悪趣の怖れより済度し、大悲の力により最上国の極楽へ導くように祈願する。さらに〈普賢行願讃〉の極楽往生に関する部分（v.59）などを唱えて終了する。
　本書は、正尊に阿弥陀仏を立てているが、通常ゲルク派の文献ではそのような場合に祈願の部分には、しばしば大乗の仏道として利他の発心や行道などに関する内容が述べられることが多い。しかし、本書ではそのような内容は少なくて、むしろ無量光仏による済度への願いが前面に出ているところに特徴がある。
作成者名：藤仲孝司

bDe ba can du bgrod pa'i smon lam

書名の日本語訳：極楽に赴く誓願
著者名：Karma pa De bzhin gshegs pa
著者名よみ：カルマパ・テーシンシェクパ
著者名別名：Chos dpal bzang po
著者生没年：1384-1415
成立翻訳年：14-15c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（p.197）'Od dpag tu med pa la bstod pa Yan lag bdun pa smon lam dang bcas pa 'di // Karma pa De bzhin gshegs pas mDo smad kyi sa'i cha rma chu'i 'gram du sbyar ba'o //
（この無量光の讃　－七支の誓願－をともなったものは、カルマパ・テーシン・シェクパが、ドメのセチャ・マチューの近辺で著作した。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs , stod cha（四川民族出版社、pp.192-197、1994）
参考文献：・斉藤昭俊・李載昌編『東洋仏教人名事典』（新人物往来社、pp.260-261、1989）
・立川武蔵『トゥカン『一切宗義』カギュ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』5、p.54、1987）
・田中公明（春秋社、pp.82-86、2000）
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.26

解説：著者はカルパ・カギュ派黒帽ラマ第5代の活仏であり、明の永楽帝により南京に招待され、「大宝法王」の称号を授かった。その支持と後援を取り付けることにより、モンゴルを背景としたサキャ派のチベットの統治に取って代わった。

Kapstein によると、本著はカルマ・カギュ派の常用経典である。構成は 4句からなる32の偈頌で構成される。vs.1-10においては無量光仏に対して、その身語意の功徳と事業を讃えて敬礼が説かれる。v.11において供養、v.12において懺悔、v.13において随喜と勧請、v.14において懇願と廻向が説かれる。このvs.1-14に説かれる七支供養が、本作の副題「七支の誓願」に反映している。これら七支供養を前行として、続くvs.15-23において善知識による摂取、菩提心を保つこと、善き依処の獲得、善知識への親近、十波羅蜜の成就、止観による智慧と慈悲の功徳の獲得、菩薩行の完成による志願の成就などが祈願される。そしてvs.24-25において臨終時における来迎、極楽往生、そこでの大楽の獲得が祈願される。v.26においては無量光仏を見ること、v.27においては彼からの授記の獲得、v.28においては往生者が変化して世尊を讃嘆することが祈願される。v.29においては阿弥陀仏の眷属である弥勒・文殊・普賢・観自在・勢至などの菩薩から離れず解脱すること、vs.30-31においては往生後に誓願の成就と衆生救済を行うことが祈願される。最後のv.32においてはあらゆる衆生を仏地に導くことが祈願される。

本作を往生の階梯に分類すれば、vs.1-23（往生前）、vs.24-25（臨終時）、vs.26-29（往生後の自利の側面）、vs.30-32（往生後の利他の側面）となる。往生後の活動が明確にされているのは、〈無量寿経〉だけでなく〈普賢行願讃〉の影響もあろうかと思われる。

作成者名：中御門敬教

bDe ba chen po'i smon lam

書名の日本語訳：大楽誓願
著者名：Skt. Nāgārjuna, Tib. Klu sgrub, Chin. 龍猛、龍樹
著者生没年：ca. 7c. （？）
成立翻訳年：ca. 7c. （？）
成立地：インド（？）
写本等の存欠：刊本
刊本の奥書刊記：（P.155）smon lam 'di nyi klu sgrub kyis mdzad pa'o ／／
（この誓願を龍樹がお作りになりました。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社、1994）pp.151-155
解説：チベットでは龍樹はこの世界に三回出現したとされ、顕教の論書だけでなく密教の注釈書も仮託を含めて多く遺されており、古来から現代に至るまでその複数人説を含めて議論がある。本著作には変化身、ダーキニー、ダーカー、大楽等の言葉が用いられることから、著者は中観派の龍樹でなく、密教者の龍樹である。しかし、テンギュル雑部の誓願文集成のうちの龍樹作とされるもの（デルゲ版　東北No.4384、4385、4387、4388、北京版　大谷No.5930、5932、5928、密教に関連するものも含まれる）にも該当するものはない。一部の人には知られた願文であるが、著作の状況や流布の状況などの詳細は不明である。

内容は、無量光仏の国土の特徴を説いてからそこへの往生を中心に祈願する22の誓願文からなる。それらは〈無量寿経〉の所説を踏まえ、そこに密教的な記述を少し加えている。国土の特徴とそこへの往生の祈願（vs.1-11）、国土の荘厳並びに阿弥陀仏・その眷属にまみえる祈願（vs.12-13）、種々の祈願（vs.14-22）からなる。各誓願文の特徴を個別に示すと以下の通りである。

v.1では西方上部の極楽世界にいる無量光仏に対する敬礼、v.2では極楽世界は平坦であり光りに包まれ安楽であること、v.3では宝樹・香水・宝蓮華等で荘厳されていること、v.4では化作された鳥が法音を発し安楽の風が吹くこと等、v.5ではあらゆるものには妙欲の性質があり、一切の願望が成就すること、v.6では同処は法界であり、広大な説法がなされること、v.7では三悪趣・天・人・難処等の名称すらなく、胎生せず、あらゆる過患も存在しないこと、v.8ではすべての者が金の相好で荘厳されること等、v.9ではあらゆる執着が存在せず、望んだものが自然成就すること、v.10では同処が変化身の最高国土とされ、神通遊戯を行うこと等、v.11では同処における菩提樹・果実の荘厳・功徳、以上のことが各偈頌で言及され、その国土への往生が祈願される。v.12では同処の花や種々の荘厳を見ること、v.13では観音・勢至等の眷属に囲繞された無量光仏を見ること、v.14では無量の光明・寿命・僧伽を有する極楽の教主のもとへの往生、v.15では同処に蓮華から化生して神力を獲得すること、v.16では同処において十地を完成すること、v.17では同処の菩薩が神通遊戯して諸仏国土を訪問し、衆生利益を行うこと、v.18では同処の安楽が不可思議であること、v.19では行者が臨終時に無量光仏を眼にし、極楽に化生すること、v.20では空行者と空行母の供養雲による引導、v.22では三宝・法界における自性清浄なる加持・善等によってこれら誓願が成就することなど、これらが各偈頌で言及され、それらの成就が祈願される。

作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
漢訳書名：『極楽願文』（『大正蔵』19（No.935））
著者名：Tsong kha pa
著者名よみ：ツォンカパ
著者名別名：Blo bzang grags pa, Blo bzang grags pa'i dpal
著者生没年：1357-1419
成立翻訳年：1399?
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No. 6944（6）
刊本の奥書刊記：なし
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.184-192、1994）
現代語訳書：・小野田俊蔵「ツォンカパ造『最上国開門』試訳－チベットに於ける本願思想受容の一例として－」(『仏教文化研究』27 、1981)
・R. Thurman, Prayer for Rebirth in Sukhavati by Je Tsong Khapa written in 1395－Library of Tibetan Works and Archives, The Life and Teachings of Tsong Khapas, 1982
・釈舎幸紀「無量光仏礼讃文をめぐって（序説）　－その解説と和訳－」（『高田短期大学紀要』3、1985）
・梶浜亮俊「ツォンカパ著『極楽への誓願文』の研究」（『大阪工大摂南大学中研所報』23-3、1991 ）
・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』　（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）
参考文献：・小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教系仏典」（『仏教大学大学院研究紀要』7 、1979）
・小野田俊蔵「チベット所伝の浄土観想修法」（『国立民族学博物館研究報告別冊』1、1983）
・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』永田文昌堂、

2002
・石浜裕美子、福田洋一『聖ツォンカパ伝』（大東出版社、2008）p.140,187
解説：ツォンカパ・ロサン・タクパは、現在チベットの最大宗派ゲルク派の開祖である。東北チベットのツォンカに生まれ、幼くして出家し修学し、中央チベットの諸学問寺で顕教密教全体に関して学んだ。別解脱戒、菩薩戒、三味耶戒の持戒と、中観帰謬論証派の哲学により、チベット仏教を刷新、包括する修道体系を確立した。各地で僧俗多くに説法を行い、ラサでモンラム大祭を創始し、ガンデン寺を建立した。顕密の代表作『菩提道次第大論』『真言道次第大論』を初めとして多くの著作がある。
　『極楽国への生を受けることの誓願　－最上国開門－』（ラサ版　東北No. 5275（69）, Kha. 85a-100a）から抜粋された日常読誦版であり、『最上国開門』の冒頭・中核の誓願文である。『極楽願文』（『大正蔵』19, No.935 達喇嘛嘎卜楚薩木丹達爾吉訳）は、この日常読誦版の漢訳であることは、釈舎論文により解明された。『最上国開門』のうち、帰敬偈、宣誓偈 P. Ga 87b6-8 はこの『極楽願文』（『大正蔵』19, No.935）の p. 80b-c 3に相当する。誓願文の P. Ga 96b3-99b1 は『極楽願文』の pp.80c 4-81c 20 に、結偈の P. Ga 101b3-8 は『極楽願文』の p.81c 21-28 に対応する。ツォンカパは晩年にガンデン寺において施主のために極楽願文を造ったとされているが、ツォンカパの著作のなかでは著作場所が記されていない無題のものと本作のうち、どれなのかは不明である。
　帰敬偈、宣誓偈が各1偈である。誓願文は、まず冒頭の4偈で、輪廻の苦に呻く声により、唯一の善友、救い主無量光とその眷属に救済を祈願し、ここへの到来を求める。誓願文本体においては、まず自他の善根により臨終時に無量光仏の来迎を得て極楽に化生することを祈願する。次に無量の功徳を得て、大乗の聖教を完全に受持すること、それらを理解し、神通力により諸国土へ赴くこと、菩薩行を行うこと、利他のために正等覚することを祈願する。そしてそれらをまとめる2偈が説かれる。
　次に、正等覚するまでの期間に関する祈願として、善趣の良き依処を得ること、出家し浄戒をたもって阿闍のような比丘になること、完全な総持と弁才を得ること、禅定・五眼・神通を得ること、広大甚深な智慧を得て文殊のようになること、菩薩行を完成して観自在のようになること、魔・外道・対論者すべてを破る秘密主のようになること、発心・精進により大正覚した釈尊のようになること、病すべてを鎮める薬師のようになること、名号を唱えるのみで横死すべてを破る無量寿のようになること、無量寿の身を見て自己の障碍が止むこと、無量寿に対する堅い信を得て決して離れないこと、大乗の善知識にいつも摂取され正しく親近すること、教誡を受けて行ずること － 以上のことを祈願する。そしてそれらをまとめた祈願を行って終了する。
作成者名：藤仲孝司

bDe smon　－Phul byung ma－

書名の日本語訳：極楽願文　－卓越したるもの－
漢訳書名：極楽願文（『大正蔵』19（No.935））
著者名：Tsong kha pa
著者名よみ：ツォンカパ
著者名別名：Blo bzang grags pa, Blo bzang grags pa'i dpal
著者生没年：1357-1419
成立翻訳年：1399
成立地：チベット
所収文献名：Toh. 5275 [Kha. 1-273]
rje thams cad mkhyen pa Tsong kha pa chen po'i bka' 'bum thur bu
一切智者大ツォンカパの小作集
（この典籍の第69番目に当典籍は相当する）
写本等の存欠：刊本
刊本の奥書刊記：なし
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs smad（四川民族出版社、pp.184-192、1994）
現代語訳書：・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』永田文昌堂、pp.121-131、2002
参考文献：・小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教系仏典」（『仏教大学大学院研究紀要』7 、1979）
・小野田俊蔵「ツォンカパ造『最上国開門』試訳－チベット　に於ける本願思想受容の一例として－」(『仏教文化研究』27 、1981)
・R. Thurman, Prayer for Rebirth in Sukhavati by Je Tsong Khapa written in 1395－Library of Tibetan Works and Archives, The Life and Teachings of Tsong Khapas, 1982
・釈舎幸紀「無量光仏礼讃文をめぐって（序説）　－その解説と和訳－」（『高田短期大学紀要』3、1985）
・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』　（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）
解説：ツォンカパ・ロサン・タクパは、現在チベットの最大宗派ゲルク派の開祖である。東北チベットのツォンカに生まれ、幼くして出家し修学し、中央チベットの諸学問寺で顕教密教全体に関して学んだ。別解脱戒、菩薩戒、三味耶戒の持戒と、中観帰謬論証派の哲学により、チベット仏教を刷新、包括する修道体系を確立した。各地で僧俗多くに説法を行い、ラサでモンラム大祭を創始し、ガンデン寺を建立した。顕密の代表作『菩提道次第大論』『真言道次第大論』を初めとして多くの著作がある。
　本著はツォンカパによる極楽願文『最上国開門』の読誦版である。完本冒頭の1偈頌とその直後の1文（P. Ga.87b6-8）、そして末尾の極楽誓願（P.Ga.96b3-99a6）を抜粋したものであるから、『最上国開門』を参照のこと。
　題名のうち Phul byung ma（卓越したるもの）というのは、冒頭の「［無量寿仏の］卓越した行いにより」にちなんだ呼称である。ゲルグ派だけでなく、後の「無宗派運動」の人々にも受容された。
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Go rams bSod nams Seng ge
著者名よみ：コラム［パ］・ソナムセンゲ
著者名別名：Go rams pa
著者生没年：1429-1489
成立翻訳年：15c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（p.207） 'di ni 'dun cing smon pa'i gnas 'thob par bya ba'i ched du // Shāya'i dge slong bsod nams seng ges Thub bstan rnam par rgyal ba'i chos grwa chen por sbyar ba'o //
（これは、望み願う境地を得る原因として、シャーキャの比丘ソナム・センゲが、トプテン・ナムパルギェルワという大寺院において著述した。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（四川民族出版社、pp.204-207、1994）
参考文献：・立川武蔵『西蔵仏教宗義研究　第一巻－トゥ

カン『一切宗義』サキャ派の章－』（東洋文庫、1974年）p.66
解説：著者はサキャ派の学僧であり、ゲルク派の開祖ツォンカパの、特にその中観帰謬論証派の哲学に対して、中観自立論証派の立場から批判した人として知られている。彼の顕教の教学は後にサキャ派の正統として認められていった。
本作は四句からなる17の偈頌で構成される。vs.1-6 は帰命、礼拝である。礼拝の対象は順次、釈迦牟尼仏の賞賛した中で最高の極楽［国土］、そこの光明に荘厳された無量光仏、最上乗が説かれるとき菩提行を行う者たち、種々の変化身により種々の国土の衆生を利他する事業、観音・勢至を始めとする無数の眷属、その浄土に化生した伝統のサキャ派の人たちである（サキャ派はバリ翻訳師からジターリ流の阿弥陀仏成就法を継承し、サキャ五祖の時代から阿弥陀仏信仰を持ち、それに関する著作を幾つか遺している）
vs.7-17 は祈願であり、v.18 は廻向の句でもある。祈願の内容は順次、自他の善根・師の加持・無量光仏の発心の力によって、自己と有情が臨終時に極楽国土と無量光仏を見ること、直後に彼から最上乗（大乗）を聞いて、功徳の集まりによって行者自身の身心の相続が満たされること、自身を無数に変化して十方国土に行き仏菩薩を供養すること、そこで大乗の深い理法を聞いて菩提行が究竟すること、穢土の者たちを満足させて三乗により解脱させること、仏位を現成したとき彼らに最上乗を説き菩薩行を行わせて仏智に立たせること、法蔵比丘が国土荘厳を摂取したのと同じく勝れた浄土を獲得すること、最高の誓願である普賢行願のとおりに自他が成就すること、有情利益と普賢の荘厳によるこれら誓願の王［普賢行願］を成就し悪趣を空にすること、この無量の功徳により諸悪趣を捨てて無量光仏の許に生まれること、である。
祈願の内容は〈無量寿経〉の所説と〈普賢行願讃〉を承けている。終わりの３偈は〈普賢行願讃〉末尾の廻向文に基づいている。
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Paṇ chen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan
著者名よみ：［パンチェン・］ロサン・チューキギェルツェン
著者名別名：Paṇ chen Lama I 、Paṇ chen Chos rgyan
著者生没年：1567-1662
成立翻訳年：16c-17c.
成立地：チベット
所収文献名：bCom ldan 'das 'Od dpag med la brten pa'i pho ba bsdus pa（ラサ版　東北No. 5896）
写本等の存欠：活字本
刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5896［Ka.17b5-18a1］
刊本の奥書刊記：なし
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、p.211、1994）
解説：著者はタシルンポさらにセラ、デプンといったゲルク派の大寺に住持し、ダライラマ4世、5世が具足戒を受けるとき親教師をも務めた。ダライラマ5世によるチベット統一政権の時代に大きな影響を与えた。彼は没後、阿弥陀仏の活仏として認定されたが、これはゲルク派ではダライラマ2世以降二人目であり、彼から遡って、パンチェンラマの系譜が成立することになった。
本作は以下の2偈頌のみである。無量光仏への礼拝と、憐れみにようる救済の祈願を内容とする。
本著はわずかな語句の違いはあるものの、同じ著者の著作『世尊無量光に依る転生略法』(bCom ldan 'das 'Od dpag med la brten pa'i pho ba bsdus pa . 東北No.5896 Ka)より、前行・本行に続く祈願文を、『極楽願文』（bDe smon）として取り出したものである。詳しくは同書の項目を参照すること。同じゲルク派のクンタン・テーペートンメの無題の極楽願文や「無宗派運動」のトゥクジェ・シャンパン・ペルサン著『清浄大楽国土の誓願の弁別釈』にも言及されており、その普及が知られる。
以下に全文を訳しておく。
「欺くことなく、三宝の自性であり、悪趣の恐れから[有情を]済度する偉大な勇者、清浄な国土に導く最高の船長である、教主無量光に敬礼します（v.1）。断末摩〔の苦〕や閻魔の怖れから保護してください。恐怖すべき中有の狭路から済度してください。耐え難い悪趣の険地から導いて下さい。最高の極楽国土に導いてください（v.2）。他の希望の地はありません。［大］悲によって摂取してください。」
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：bDud 'dul rdo rje
著者名よみ：ドゥードゥル・ドルジェ
著者名別名：gTer ston bDud 'dul rdo rje
著者生没年：1615-1672
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.241） rig 'dzin Padma'i rnam sprul bla ma rTa mgrin mGon pos bka' gnang bzhin bDud 'dul rdo rjes bris pa'o //
（［これは］持明者パドマ［サンバヴァ］の化身、ラマ・タージン・ゴンポ（師馬頭主）が教えを授けられたとおりにドゥードゥル・ドルジェが書き写したものである。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、1994）pp.240-241
参考文献：・平松敏雄『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』3、1982）p.108, 142
解説：著者はカルマ・カギュ派、ニンマ派の人。埋蔵経典（gter ma）の発掘や教授に勤めた。カトクパ(Ka thog dam pa bDe bar gshegs pa. 1122-1192)が建立したカトク寺（東チベットのニンマの本拠地）が衰退していたのを、自らの弟子ロンサル･ニンポ(Klong gsal snying po) とともに再興した。埋蔵経「虚空法」の発見編纂に関わったカルマ・チャクメー(Karma Chags med.1613-1678)やミーギュル･ドルジェ(Mi 'gyur rdo rje.1628/29-1668)とも交流があり、弟子にはタクシャム･ヌーデン･ドルジェ(sTag sham nus ldan rdo rje.1655-?)がいる。本著作も奥書には、パドマサンバヴァの化身であるラマ・タージン・ゴンポ（師馬頭主）という人の教えを、著者が筆受したものとされており、埋蔵経の一つである。
内容は、無量寿仏を正尊として、極楽往生を含めた行の成満を祈願する簡略な願文であるが、用語法はかなり高度で複雑であり、大乗の空性、唯識、如来蔵などの教理の上に、密教の「入我我入」により俗を聖に転ずる行法をも要素としており、さらに後期密教の行法である生理的ヨーガなどを含んでいる。
具体的には、まず極楽国土の無量寿仏に礼拝し、祈願する。次にかの無量寿仏の加持によって一切衆生は二障（煩悩障・所知障）を断つとされる。その結果、世俗の錯誤の現れは、空性・大楽・智慧界において解脱へと導かれ、所取・能取の風は中央脈管に収まって溶ける。そして、祈願の内容として、一切の最上相をそなえた善逝界（如来蔵）、

自心清浄の仏身により利益がなされること、［本来の］基体の大光明に［行者の］道の光明が合体して、大楽の浄土が成就すること、蘊界処を諸尊の清浄な現れとして、彼らの来迎により大楽の浄土に往くこと、誓願の真実語により蓮華から化生するや否や如来から直接に受法し、無量の有情利益をなすよう加持されることを祈願する。
作成者名：藤仲孝司

bDe smon　－Nyung 'dus－

書名の日本語訳：極楽願文　－僅かにまとめたもの－
著者名：Karma pa bDud 'dul rdo rje
著者名よみ：カルマパ・ドゥードル・ドルジェ
著者名別名：bDud 'dul rdo rje、rJe bcu gsum pa
著者生没年：1733/-34-1797/98
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.247）de ltar bDe ba can gyi smon lam mdor bsdus 'di bzhin sDom brtson dam pa bDud 'dul rdo rjes / / Khams Karam dgon gyi dge slong rNam rgyal gyis bskul ba'i ngor bris pa dge'o / / mangalaṃ /（そのように極楽の誓願の要約はこのように、ドムツォン・ダンパ・ドゥードゥル・ドルジェが、カムのカラム寺院の比丘ナムギェルにより勧められた折に、書き記したものである。良かれ。幸あれ。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.246-248、1994）
解説：著者はカルマ黒帽ラマの活仏であり、カルマパ13世である。この系統にはカルマ・チャクメーやミギュル・ドルジェにより発見された「虚空の法Nam chos」が継承されている。弟子にパドマ・ニンチェ・ワンポ(Padma nyin byed dbang po. 1774-1853)がある。
　本著の内容は、七支供養により寿命や福徳が増大し、死んだとき極楽往生できるよう祈願するものである。
　具体的には、まず極楽浄土とその功徳を思念し、無量光仏と世自在・大勢至の両菩薩と無数の比丘の眷属に対して、あらゆる事物・観想による供養と賞讃を行い、罪を懺悔する。次に祈願に入り、加持により寿命、福徳、富が増長し、あらゆる願いが如法に成就し、慈悲を具足すること、死去したとき、極楽浄土の蓮華から化生すること、その後直ちに仏を供養し、授記され、相続を成熟し、神通などの功徳により現等覚し、無量の国土海に活動し、有情を導く大船主になることを祈願する。
作成者名：中御門敬教

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Kun bzang gzhan phan
著者名よみ：クンサン・シェンペン
著者生没年：1745-1821
成立地：チベット
所収文献名：［rDo bla］Kun bzang gzhan phan［mtha' yas］、rDo grub chen 1、'Jigs med 'phrin las 'od zer
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.273）smon lam 'di Kun bzang gZhan phan gyis so / /
（この誓願は、クンサン・シェンペンによるものである。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.272-273、1994）
参考文献：・梶濱亮俊『チベット浄土思想の研究』（永田文昌堂、2002）pp.231-234、p.683
解説：著者は mDo khams 生まれで、カギュ派、ニンマ派の人。ジクメーリンパ('Jigs med gling pa.1729/1730-1798. ニンマ派教義の大成者ロンチェンパを幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティクの体系を継承した)の二大弟子の一人である。この系統では、ジュ・ミパム(1846-1912)、ジクメー・テンペーニマ(1865-1926、rDo grub chen3世)などリメー（無宗派運動）で活躍した人が多く、著者自身も含めて阿弥陀仏や極楽往生に関する著作を幾つも著わしている。
　本著は、あらゆる帰依処が集約された無量光仏に対して、輪廻において帰依処の無い自己が慈悲を乞い、臨終時に恐れから救い、大楽国土(極楽浄土)へ引導するよう祈願する誓願文である。最後には、縁ある人が無量光仏と出会うよう廻向している。
　以下に全文を訳しておく。
「エマホ。あらゆる帰依処を集めた師無量光、取りまく仏・菩薩・声聞・独覚の集まりに、私は祈願します。加持してください。共・不共の二つの成就を授けてください。
　オーム、アー、グル、アミタ［ー］バ、サルバ、シッディ、パラ、フーム（Oṃ ā gu ru a mi ta bha sarba siddhi pha la hūṃ）
　ああ、私のような衆生は、多くの宿世により輪廻の里で、［かつて］悪趣の原因を成し、今なお成しつつある。この依処［の人身］を捨てると、たちまち六種の苦しみが私一人の上に降りかかる［。その
］とき、帰依処を希望する以外にないので、導師無量光、あなたは［私を見捨てず］知ってください。罪を具えた者は悪業・輪廻の投げた石［のようなもの］。今世の行為により現れに欺かれて、永久の仏法を行じることを知らず、ぼんやりして人［として］の寿命が尽きてから、死主閻魔の迎えの者が現れたなら、帰依処を希望する以外にない［。だ］から、憐れみによってご覧になってください。無量光主よ、現状の修習・体験は、怠惰の支配下となっていて堅固なることを得ず、中有の恐怖の幻影が生じたなら、あなた以外の帰依処はない［。だ］から、大楽の国土に導いてください。無量光主よ、不可思議な国土の荘厳と無量光主たる正尊と眷属の全く円満なるものに、私［自身］と私に良くも悪くも縁がある人、衆生すべてが、速やかに出会うという［ことを願う］優れた誓願が成就しますように。」
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Padma Nyin byed dBang po
著者名よみ：パドマ・ニンチェー・ワンポ
著者名別名：Si tu 9th、dPal ldan bstan 'dzin nyin byed 'phrin las rab rgyas phyogs las rnam rgyal
著者生没年：1774-1853
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.253）Si tu Padma nyin byed dBang pos / lHa mgar Karma bzang po'i ngor spel ba dge'o / /
（司徒パドマ・ニンチェー・ワンポが、ハカル（古代チベットの一氏族の名）のカルマ・サンボにちなんで、著述したものである。良かれ。)
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、1994）p.253
解説：著者はデルゲ（sDe dge）の生まれ、カルマ・カギュ派の人であるが、無宗派運動とも関連をもった。Karma Kam tshang の重要な継承者であり、この系統には「虚空法(天空法 Nam chos)」が伝えられている。彼自身はカルマパ13世（Karma pa bDud 'dul rdo rje.

1733/-34-1797/98）の弟子であり、カルマパ14世（Theg mchog rdo rje. 1799-1869）やコントゥル・ヨンテン・ギャムツォ（Kong sprul Yon tan rgya mtsho.1813-1899）の師となった。「虚空法」を広めることに功績があった。
　以下に全文を訳しておく。
「三世の勝者の総体である無量光よ、安楽を具えた［極楽の］蓮華の荘厳の最上国［に］、私たち有縁の者が他の生に妨げられずに化生し、教主のお顔を見て、授記を得て、菩提行が究竟し、衆生の利益が完成し、究極的に等正覚を得ますように。」
作成者名：中御門敬教

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：lCags kong rDo rje dgra 'dul
著者名よみ：チャクコン・ドルジェダドゥル
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.275）lCags kong rDo rje dgra 'dul gyis gsungs so / /
（チャクコン・ドルジェダドゥルがお説きになった。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、1994）pp.274-275
解説：著者はTBRCで確認できない。　活字本にも書誌情報がないが、同書は著作を著者の年代順に並べているようであり、クンサン・シェンペン(1745-1821)、タクトゥク・ドゥジョンドルジェ(19c)、本著、ジャムヤン・ケンツェー・チョーキロドー(シェチェン・ギャルツァプ(1871-1926)の弟子)という順序になっているから、18世紀後半から19世紀に生まれた人であろう。
　本著は、無量光仏を現前にした後で、七支供養を行い、さらに広く、恩ある衆生の済度と成仏のために、極楽往生と無量光仏の摂取を祈願する願文である。
　以下に全文を訳しておく。
「エマホ 。西方極楽国土にまします世尊［であり］、弟子の眷属を伴った主無量光を、一心［不乱］の憶念により現前にします。口先だけでない切望によって、心の底から祈願します。
　憐れみでもって思しめして加持してください。悪趣の恐怖から救護してください。普く衆生の船主であるあなた方に、私は敬って礼拝し、供物を献げます。罪業を懺悔し、功徳に随喜します。吉祥な法をお説きになり、涅槃に入らず住していてください。［造った］善を菩提の原因として廻向します。
　母なる六道［の衆生］を輪廻から済度して、無上の等正覚を得させるために、大海の［ような］国土において仏が浄治する解脱と誓願すべてが完成し、関係する衆生が残らず、稀有なる最高のかの極楽国土に生まれてから、無量光主により［身語意の］三密でもって摂取されますように。」
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：mChog gyur bDe chen gling pa
著者名よみ：チョクギュル・デーチェンリンパ
著者名別名：［O rgyan］mChog gyur bDe chen［zhig po］gling ba
著者生没年：1829-1870
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.261）mChog gyur bDe chen gling pas mDo khams rtsi ke nor bu spun gsum gyi brag nas spyan drangs pa 'di bDud rTsi lnga'i 'phrul shog las gtan la phab rim bzhin tu mTsho skyes bla ma dgyes pa'i 'bangs mKhyen brtse dBang pos bris pa dge'o //
（最上者たるデチェンリンパが、ド・カム［地方］のチィケ・ロルブ・プンスム・ギ・タクから招来したこの［教えを］、「五甘露の変化」によって決択した次第のとおりに、蓮華ラマ（パドマサンバヴァ）の喜ばれるしもべキェンツェー・ワンポが記しました。良かれ。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.258-261、1994）
参考文献：・ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯』(平河出版社、1981)p.280ff.
・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』　（「浄土仏教の思想」3、講談社、pp.226-232, 267-277、1993）
解説：著者はニンマ派の埋蔵経の継承者である。『最勝楽仏平等ユガ』（bDe mchog sangs rgyas mnyam sbyor ）や、『三明の心髄の滴』（Rigs gsum snying thig）といった埋蔵経を発見し、ペルトゥル・リンポチェ(rDza dPal sprul rin po che. 1808-1887)に付法した。弟子にケンツェー・ワンポ(mKhyen brtse'i dbang po)、コントゥル・ロドーターイェ('Jam mgon Kong sprul blo gros mtha' yas)などがある。
　本作は中心となる本文とそれについての割注から成り立っている。冒頭の注記には、上師の証悟の如意宝珠より十三の秘訣のうち、死ぬ時、大楽国土に往く教誡の略出とされる。現在と未来の弟子たちに対して、死を浄化し、極楽往生するよう教えたものである。
　まず一切の現れは空であり、空の性質から hrīḥ の種字が転変し、無量光仏と眷属の弥勒・文殊・観自在・金剛手の諸菩薩に転変したのを観想する。次に尊格すべての心臓の月輪上の hrīḥ の種字から光明が輝き、輪廻と涅槃に遍満し、それによりすべての者が大楽国土で安らいだことを観想する。次に十方三世の諸仏を眷属とともにここに招いて、礼拝・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向の七支供養を行う。
　次に誓願をたてる。すなわち、私と無数の衆生は死去して、西の極楽浄土の無量光仏のもとに化生し、尊顔を拝し、授記・教誡を得て十地五道を成就し、仏地を得ること、発菩提心の力により変化身による利他ができること、発心した無量光仏の名を聞き功徳を念じることにより自己の罪障と習気・雑染から仏の三業と解脱が成就すること、三世の仏の真実、文殊の智恵と慈悲、無量の神力により私のこれら誓願が成就すること、輪廻に彷徨う者が有暇・具足を得て善知識と出会い、聞法の力により今生で成仏するよう加持されることを誓願する。
　最後に注記には、無量光仏の名を称え、密呪を称え、自身を仏身として修習すると、死後に極楽に生まれると記している。特に、自己の頭頂に無量光仏と眷属を修習し、心臓の精滴に不生 a字を修習し、風と心を無二にして、正尊の心臓へ phaṭ の声により溶かす。すると諸尊は光に溶けて不可得の性に安住し、強力な遷移（ポワ）の行法となる、という。
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：'Jam mgon 'Ju Mi pham rgya mtsho
著者名よみ：ジャムゴン・ジュ・ミーパム・ギャムツォ
著者名別名：Mi pham 'Jam dbyangs rnam rgyal

著者生没年：1846-1912
成立翻訳年：19-20c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.263） 'Jam mgon Mi pham rin po che'i gsungs la / Bla ma 'Od gsal gyi thugs bzhed du bskyed chog(sic) sogs Padma bi dzas gsar bsnan dang snying po bzla ba tsam Rarma(sic) bsnan pa dge'o / /
（ジャムゴン・ミーパムリンポチェのお説きになったものに対して、ラマ・ウセル（阿弥陀仏？）の理想として生じさせるに十分なものなどを、パドマ・ビージャが新たに加えて、心呪を唱えることほどをラルマが加えた。良かれ。
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.261-263、1994）
参考文献：・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』（永田文昌堂、2002）pp.230-236
解説：著者は19世紀ニンマ派の人であり、無宗派運動（Ris med）の代表的学僧の一人である。多くの著作を著わし、「文殊主（ジャムゴン）」とも称された。ペルトゥル・リンポチェ(dPal sprul O rgyan 'jigs med chos kyi dbang po. 1808-1887)やコントル・ヨンテンギャムツォ（ Kong sprul yon tan rgya mtsho. 1813-1899）、ジャムヤン・ケンツェーワンポ('Jam dbyangs mkhyen brtse'i dbang po.1820-1892)に師事した。弟子にドォトプチェン3世ジクメー・テンペーニマがいる。彼らリメーの人々は他宗派の教えをも学んだし、各々阿弥陀仏信仰に関する著作を幾つか著したが、本著はツォンカパの極楽願文から影響を受けている。

極楽往生を願う者のために、その 4つの因の実践という形で説かれた極楽願文であり、冒頭と中段と末尾に割注が入れられている。

4因は、同じ著者による 『極楽国土を修治する信仰を明らかにするもの －[大]仙の教の太陽』にも出ている。すなわち、1.無量光仏を思念すること、2.善根を無量に集積すること、3.菩提へ発心すること、4.善根を浄土に生まれるために廻向し、誓願することである。これは〈無量寿経〉に基づいてツォンカパもその極楽願文『最上国開門』に示しているが、本著ではその4つがさほど明確に区別されて記述されているわけではない。

割注を含めて要約すると次の通りである。まず極楽浄土と無量光仏・観自在・大勢至・無数の仏・菩薩・阿羅漢が信心の虚空に明らかである［、と信解し、無量光仏を一心に縁じて、一切衆生の三業をまとめた祈願を立てると信解し、御名を七回など称えて、］無量光仏が心に掛けてくださるよう祈願する。無量光仏の発心と同じように発心し、あらゆる善根を造り、それを往生後に菩提行を成就するために廻向する。さらに、それで死去するや否や、極楽に化生し、授記を得て、〔誓願を〕完成し、〔有情を〕成熟し、〔国土を〕浄化して、究竟を得るように、そして私の発心以降の善根すべてを、大楽国土への往生のために廻向するとき、加持してくださるように、無量光仏に祈願する。［真言、種字を一心の信によりひたすら称えた後で、三輪無分別の三昧に入定し、この善を廻向し誓願する。］

奥書のパドマ・ビージャ(蓮華種子)という名は、シェーチェン・ギェルツァプ(Zhe chen rGyal tshab. 1871-1926)が自著の奥書に用いているが、両者の関係は未詳である。
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Glag bla bsod nams chos 'grub
著者名よみ：ラクラ・ソナム・チュードゥプ
著者名別名：Glag bla chos 'grub
著者生没年：1862-1944
成立翻訳年：19-20c
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本所在：The Collected writings of Glag-bla bsod-nams-chos-'grub: the 1991 Dkar-mdzes edition/ introduced by Matthew Kapstein. Delhi: Konchhog Lhadrepa, 1997. v.5, pp.25-562. Written at Rdzong-sar Bkra-shis-lha-rtse.(筆者未見)
刊本の奥書刊記：（P.267）bDe smon bsdus pa zhig dgos zhes dGe rgan Tshe dbang gis bskul ngor chos kyi ming can pas bris pa 'dis kyang 'brel tshad bde ba can du skye pa'i rgyur cig / / dge'o / / mangga laṃ /
（極楽願文の要略が必要であると、老師ツェワンにより勧められた折にチュー［chos. 法］の名を持つ者により書かれた［。］これによってまた関係する限りの者が、極楽に生まれる原因となりますように。良かれ。幸あれ。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.265-267、1994）
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.37ff.
解説：著者はカムで活躍したニンマ派の高名な僧侶であり、カルマ･チャクメー(Karma chags med.1613-1678）の高名な極楽願文『清浄大楽国土誓願』(rNam dag bde chen zhing gi smon lam)に対する大きな注釈『解脱道照明』('Grel bshad Thar lam snang byed)を著わしているが、七支供養など主要な要素はチャクメーの極楽願文ないしそれへの注釈書と共通している。

本著は1句 9音節の38句からなる願文である。〈無量寿経〉の法蔵説話に言及しつつ、無量寿仏を対象として七支供養を行い、さらに大乗の実践に関する祈願を行うものとなっている。

内容の概観は、西方の大楽国土は荘厳が不可思議であり、そこにおいて無量光仏は無数の眷属に囲繞されている。世自在王仏のもとで法蔵比丘が修証したものであり、彼が慧眼により照覧されるという。その上で、礼拝・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向の七支供養を行う。

次に実践に関する祈願としては、行道すべてにおいて、仏身を縁じた三昧に入り、語の障碍を浄めて、称名を繰り返し、信楽と浄信により現れた浄土を修習し、今生を捨てて大利が成就すること、突然に死が訪れた時には仏の心臓に識を託することにより、大悲の誓願により瞬時に引導されること、中有が現れはじめると、12の善逝と無量光仏と眷属が現れて、浄土に往き、そこで歓喜地を得ること、普賢行の誓願を成満し、衆生を導く船主となることを祈願する。

「12の善逝と無量光」という表現に関しては未詳である。〈無量寿経〉に無量光仏の12の別名を挙げているのは、魏訳のみであり、梵文、蔵訳には数が異なっている。
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：'Jigs med bstan pa'i nyi ma
著者名よみ：ジクメー・テンペーニマ
著者名別名：rDo grub gsum pa、dDo grub chen
著者生没年：1865-1926

成立翻訳年：19-20c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.264）bDe ba can du skye ba'i rgyu bzhi tshig nyung ngus bstan pa'i smon lam 'di 'ang bshes gnyen dam pa Oo ḍi ya na'i ngor 'Jigs med gling pas so / / dpe gcig tu 'jigs med bstan pa'i nyi mas mdzad ces gsungs / / rGyal ba 'Od dpag med mgon la / / gsol ba 'debs so byin gyis rlobs / / tshe 'di 'phos ma thag pa ru / / bDe ba can du drongs du gsol / / Bla bzang ngor 'Jigs med bsTan pa'i nyi mas so / /
（極楽に生まれる四因をわずかな句によって説いたこの誓願も、優れた善知識ウッディヤーナ（パドマ・サムバヴァ）にちなんで、ジクメー・リンパによって［作られたものである］。一写本には、ジクメー・テンペーニマ が作られたと説かれている。勝者無量光教主に祈願する。加持して下さい。この命が生まれ変わるやいなや、極楽に導いて下さい。善き師僧（ラ・サン）にちなんで、ジクメー・テンペーニマによって［作られたものである］。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.263-264、1994）
参考文献：・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』（永田文昌堂 2002）pp.228-241,277-333,693-701
解説：著者はニンマ派の活仏であり、学僧・行者として活躍した。「無宗派運動」の指導者でもあったペルトゥル・リンポチェ（dPal sprul rin po che.1808-1887）の弟子であり、兄弟子にはジュ・ミパム（'Ju Mi pham.1846-1912）がいる。彼らも極楽往生の 四因に関する著作を残している。伝記は梶浜(2002)pp.693-701 に和訳がある。

本著は、極楽往生のための 四因を七支供養によって説いた、阿弥陀仏に対する簡潔な願文である。極楽往生の四因は、1.無量光仏を思念すること、2.善根を無量に集積すること、3.菩提へ発心すること、4.善根を浄土に生まれるために廻向し、誓願することである。これは〈無量寿経〉に基づいてツォンカパが『最上国開門』において示したものであり、著者と同じ「無宗派運動」のジュ・ミーパムも採用している。

本論の内容は、まず無量光仏と極楽国土を一心に念じて、寄る辺なき者たちの保護者である無量光仏と菩薩に対して、礼拝・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向の七支供養を行う。

七支供養自体は通常、福徳増長のための儀礼とされるが、そのうち、本書では、祈願としては、自己が無数の有情の利益のために正等覚を成就するよう解脱と誓願を成就すること、これらの善により自他の一切有情が極楽浄土の荘厳の中に生まれて、大乗の饗宴を経験することを願う。廻向としては、自他が極楽往生し、大乗の法会を味わうために廻向するとされている。このようにして、極楽往生のための 四因が七支供養により包摂されている。
作成者名：中御門敬教

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Zhe chen rGyal tshab
著者名よみ：シェーチェン・ギェルツァプ
著者名別名：Padma bi dzas, 'Gyur med pad ma bstan 'dzin mkhas grub rgya mtsho'i sde
著者生没年：1871-1926
成立翻訳年：19-20c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.268）mGon po 'Od dpag med kyi gsol 'debs 'di yang Padma bi dzas sbyar ba'o / / bkra shis /
（教主無量光に関するこの祈願もパドマ・ビージャによる著述である。吉祥たれ。）
※「Zhe chen rgyal tshab 'gyur med Padma rnam rgyal」cf. Dung dkar tshig mdzod chen mo, 北京、pp.1776b-1777a
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.267-268、1994）
参考文献：・頼富本宏『密教仏の研究』（法蔵館、1990）pp.622-630,301-308
解説：著者はジャムヤン・ケンツェー・ワンポ('Jam dbyangs mkhyen brtse'i dbang po. 1820-1892)により、オギェン・ラプジュンドルジェ(O rgyan rab 'byung rdo rje)の転生者に認定されて、彼やコントゥル・ロドーターイェ(Kong sprul Blo gros mtha' yas. 1813-1899)に師事した。弟子にジャムヤン・ケンツェー・チューキロドー('Jam dbyans mkhyen brtse Chos kyi blo gros)がいる。奥書のパドマ・ビージャという名は、ジュ・ミーパム('Ju Mi pham. 1846-1912)の『極楽願文』の奥書に、ミーパムの教えにその名の人が新たに追加したと出ているが、詳しい関係は未詳である。

本著は、1句9 音節の23句からなる極楽願文である。密教の菩薩形での無量光仏に、〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉所説の国土の荘厳を加えて、それらの功徳を念じ、それにより現世での長寿や吉祥、死後の極楽往生を祈願する内容となっている。無量光仏を中心に周囲に八大菩薩を配置することは、チベットの仏画ではしばしば見られるが、「六牟尼」に関しては、『一切仏集合タントラ』に六仏の用例があるが、本著との関連は不明である。

以下に全文を訳しておく。

「賢劫勝者の主無量光は、紅蓮華の須弥山のように燃え上がるお体です。一面、二手［であり］、［その手は］禅定［印を結び］、鉢を携えています。相好が輝く方に祈願します。サフラン色の絹とオレンジ色の顔色を持ち、三種の法衣を巻いて着て、汚れない千の蓮華を具えた月輪の中央の、動かず結跏趺坐でいらっしゃる方に祈願します。八大菩薩と八女菩薩、四門番と梵行者、六牟尼 － いずれも柔和で繊細で嚼やかで寂静の法、荘厳と印を成就した方に対して、祈願します。様々な宝石の家屋の建築や、沐浴の池や、如意樹や、願ったものが生じる蔵と瓶や、化作された鳥の群は法音の歌声を持つ －不可思議な国土の荘厳に対して、祈願します。教主であるあなたの国土と御身の荘厳について［その］様子を心に描いて、それの功徳を念じることにより祈願するなら、横死等の悪縁がなくなり、長寿と富の円満さを具え、その後かのこの上ない最高の国土（極楽世界）における蓮華の口から［化生して］自利と利他を自ずと成就しますように。」
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：Ka thog Si tu Chos kyi rgya mtsho
著者名よみ：カトク・シトゥ・チューキギャムツォ
著者名別名：O rgyan chos kyi rgya mtsho
著者生没年：1880-1923/25
成立翻訳年：19-20c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.265）Ka thog Si tu Chos kyi rgya mtshos so / /
（カトク（四川省の地名）の司徒チューキギャムツォによ

るものである。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.264-265、1994）
解説：著者は、ニンマ派の学僧である。「無宗派運動」を指導したコントゥル･ロドーターイェ('Jam mgon Kong sprul blo 'gros mtha' yas. 1813-1899）やジュ・ミーパム('Ju Mi pham 'Jam dbyangs rnam rgyal rgya mtsho. 1846-1912）の弟子である。
本著は、1句9音節からなる4偈で書かれた簡略な極楽願文であり、その内容は、西方の大楽国土に無量光仏と眷属に対して、礼拝・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向の七支供養を行い、極楽往生とその後の菩薩行と正覚を願うものである。廻向において世々生々に大楽浄土に生まれることが祈願されているが、これは〈無量寿経〉の一生補処の願、あるいは〈普賢行願讃〉の所説を参考にしたためと思われる。
以下に全文を訳しておく。
「e ma ho　ここから西方の上部に、発菩提心と誓願により成就した大楽の国土があり、その中央の世尊・主・無量光は、大海の［ような］仏子の眷属らの中央に居られる。
身口意の慇懃さをもって敬礼し、実際の資産と想像した供物を献上し、過罪を懺悔します。善に随喜し、法輪を転じるよう勧請します。長い間［この世に］居られるよう祈願し、善根を菩提に廻向します。虚空が満たした［無辺の、輪廻における三世の］父母［である］あらゆる衆生たちは、一切相智・正等覚を得ますように！。そのために私はこの時から正覚に至るまで、仏子（菩薩）の行を学びます。
この著述により、三世に積んだあらゆる善の集まりを、衆生たちが正等覚を得るために廻向します。［私は］正等覚を得ていない［間、］あらゆる一々の世［の転生］において、大楽の国土に生まれ、勝者の御顔を見ますように。」
作成者名：藤仲孝司

bDe smon

書名の日本語訳：極楽願文
著者名：rDza phu khung Padma rin chen
著者名よみ：ダプクン・パドマリンチェン
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.279）'di yang Phu khang Padma rin chen gyis mdzad pa'o / /
（これはまたプカン・パドマリンチェンがお作りになったものである。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.278-279、1994）
解説：著者はTBRCでは明確に確認できないが、クンサン･ペマ･リンチェン･ナムギャルKun bzang padma rin chen rnam rgyal(1968-、別名 Pad gling sgung sprul11世. sPang stong dgon pa('Brug chu smad)の生まれで、ニンマ派の埋蔵経の継承者)は名前は似ているが、年代があまりに新しいので、確信がない。活字本にも書誌情報がないが、同書は著作を著者の年代順に並べているようであり、ジャムヤン･ケンツェー･チョーキロドー(Zhe chen rgyal tshab(1871-1926)の弟子)、ジクレル・イェシェー・ドルジェ(1904-1988)、本著という順序になっているから、20世紀の人であろう。
本著は9音節からなる5偈で構成される願文である。大楽国土の正尊である無量光仏／無量寿仏に祈願して、自らが大楽国土へ往生、摂取されること、さらに利他として衆生を引導し、成仏させることを願う誓願文である。
以下に全文を訳しておく。
「殊に勝れた国土である大楽国土において、あるがまま（如所有性）、あるかぎり（尽所有性）を知り、憐れみにより満たされた［すべての］空間を見て、禅定や三昧をなさる無量光仏に祈願します。
大楽［国土において］勝者の智慧と慈悲の虚空界を満たし、三種の法衣［をまとって］相好で飾りたて、［その］御名を聞くと三悪趣の苦しみが除かれる無量光仏に祈願します。
かの大楽の国土における無量寿仏 - 幸福が稀有であり、歓喜・安楽が無量である大楽国土の正尊に祈願します。大楽国土に生まれるよう加持してください。大楽国土の正尊に帰依します。
大楽国土の正尊に帰命します。大楽国土の正尊に供物を献げます。大楽国土の正尊よ、憐れみにより摂取してください。
かの大楽国土に我々が生まれてからも、大楽国土へ一切衆生を引導し、かの大楽国土で衆生たちが仏となって、大楽国土において空間を満たし完全に解脱しますように。」
作成者名：藤仲孝司

bDe smon bsdus pa

書名の日本語訳：極楽願文略本
著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya
著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ
著者生没年：1612-1678
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（p.234）rab gnas nub Bla ma Chos dbang Kun bzang gsol bcas dang zhwa gos gzab nas dga' ba'i rnam 'gyur byed pa gcig rmis pa de dngos yin bla ma de ga pa yin par ngos zin nas / de rgyab sa ga zla ba'i yar ngo zhig la / nub gcig bla ma Chos dbang kun bzang pheb byung / sku ni gsal por mi mthong du / khong bde ba can na skye tshar zer ba'i lung bstan byung dza / 'dir ni ci la byon pa yin bsam pas / bde ba can nas 'dir ltad mo lta ba la 'ong ba yin zer ba gcig la brten slar smon lam btab pa'o // Rā gas bsgrig /
（開眼供養の晩、ラマ・チョワン・クンサンがお召し物を召して衣冠をつけて喜びの表情をしたもの、夢に見た者は本物であり、まさしくそのラマであると確認してから、その後、氏宿月のある上弦（一から十五日）の日に、一晩ラマ・チョワン・クンサンがおこしになった。お身体ははっきりと見えずに、彼は極楽にすでに生まれたと言う記別があり、ここ［娑婆世界］になぜ出現されたのかと考えたので、極楽からここに眺めを見に来たのだと言った［。その］ことに基づいて、再び誓願をたてました。ラーガースヤが記す。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、1994）pp.232-235
参考文献：・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）
・Peter Schwieger, Ein tibetisches Wunschgebet um Wiedergeburt in der Sukhāvatī, St. Augustin, 1978
・Sangye Khandro, A Garland of Immortal Wish-fulfilling Trees：The Palyul Tradition of Ningmapa, Ithaca, 1988
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）

・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006）
・中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、ニンマの法統にも連なる。顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ （Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。
　本著は、同じ著者の『清浄大楽国土の誓願』を約5分の1の分量に要約したものであり、内容は無量光仏とその眷属、極楽浄土の徳性を讃えて、祈願を繰り返すものであるが、同願文が持っている極楽往生の四因や七支供養といった構成は除外されている。奥書からすると、著者がラマ・チョワン・クンサンの夢を見て、彼が極楽往生したことに確信を得たことにちなんだ著作である。
　西方の極楽世界に現在、無量光仏が住する。六道輪廻を離れて、そこに往生した者は、蓮華から化生するが、そこでは相好で荘厳されて神力は無碍であり、無辺の国土に赴くことができ、生老病死の苦がなく寿命が無量であり、願いは自然に成就し、常に無量光仏・観自在菩薩から聞法し、最後に死去する否や正等覚する－そういう浄土に生まれて授記を得ることを祈願する。さらに祈願の内容として、十地・五道の諸功徳が増長すること、金剛界五仏などの諸仏の受用身の浄土、大菩薩や成就者の諸々の変化身の国土に赴いて供養し受法できること、賢劫の諸仏が出現するときここ娑婆世界に来て供養し聞法して極楽に戻ること、行者自身の光明により一切衆生を極楽に導くこと、観自在・大勢至・文殊・オギャン（パドマサムバヴァ）の功徳が自己に具わること、それにより有縁者のすべてを加護し極楽に導くこと－それらのことを祈願する。終わりに、法性と縁起と慈悲の力により誓願が成就し、吉祥が生ずることを祈願する。
作成者名：中御門敬教

bDe smon bsdus pa

書名の日本語訳：極楽願文略本
著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya
著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ
著者生没年：1612-1678
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.238）cho ga phyir ldog skabs su smon lam btab bo //
（以上、儀軌のために戻った折に誓願をたてた。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、1994）pp.235-238
参考文献：・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）
・Peter Schwieger, Ein tibetisches Wunschgebet um Wiedergeburt in der Sukhāvatī, St. Augustin, 1978
・Sangye Khandro, A Garland of Immortal Wish-fulfilling Trees：The Palyul Tradition of Ningmapa, Ithaca, 1988
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006）
・中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、ニンマの法統にも属する。顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ （Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。
　本著は、同じ著者の『清浄大楽国土の誓願』を約5分の1の分量に要約したものであり、内容は無量光仏とその眷属、極楽浄土の徳性を讃えて、祈願を繰り返すものであるが、同願文が持っている極楽往生の四因や七支供養といった構成は除外されている。
　まず西方の極楽浄土に無量光仏がいて、無量の菩薩と声聞に囲繞されていること、その光明と寿命は無量不可説であることを説く。次にその功徳の叙述と祈願に入る。功徳の叙述などは＜無量寿経＞＜阿弥陀経＞に依るものが多く、『清浄大楽国土の誓願』のような密教的な概念も少ない。祈願の内容は、おおよそ次のとおりである－１）父母など縁者がみな臨終時にその無量光仏のもとに往生すること、２）悪趣・八難の名もない浄土は、さまざまな荘厳を具えて安楽であるが、私の縁者はみな臨終時にその浄土の蓮華に直ちに化生し、勝れた身体、諸々の資財を享受し、無量光仏に対面して供養すること、３）かの仏から授記を得て直ちに歓喜地を得ること、
４）神力により諸々の仏・菩薩・成就者の国土に行って供養し、教誡を受けること、５）菩薩行を行って無上の正覚を得ること、６）私もここでの横死を無くし、無量光仏の加持により、有縁の人々を大楽国土へ引導し、大悲の事業を成就すること、である。
作成者名：中御門敬教

bDe smon bsdus pa

書名の日本語訳：極楽願文略本
著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya
著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ
著者生没年：1612-1678
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット

写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.240）rgyal lo dmar po'i tshe'i bcu'i nyin 'grub sbyor dus bzang 'dzom pa'i nyin par Rā ga a syas smras so / / thams cad bkra shes bde legs kyi dpal la spyod par shog / /
（［これはチベット］暦の下弦月の時期の十日目の大安吉日にラーガースヤが語ったものである。衆生全てがめでた吉祥と幸福を享受しますように。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、1994）pp.238-240
参考文献：・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）
・Peter Schwieger, Ein tibetisches Wunschgebet um Wiedergeburt in der Sukhāvatī, St. Augustin, 1978
・Sangye Khandro, A Garland of Immortal Wish-fulfilling Trees：The Palyul Tradition of Ningmapa, Ithaca, 1988
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006）
・中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、ニンマ派の法統にも連なる。顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ（Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。
　本著は、同じ著者の極楽願文類のなかで最も短いものである。内容は、六道や現世の苦や困難を述べて、それらが克服されて善が成就されること、自他が極楽往生できて、往生後にも利他行を行うよう祈願するものである。同じ著者の極楽願文やその略本と比べて、無量光仏や極楽浄土の功徳の記述はきわめて少ない。これは異例のことであり、それらを詳しく述べた別の著作の存在を前提としているようである。この願文はそれらを用いる中で用いられるものであるのかもしれない。
　具体的には、まず根本三尊（上師、本尊、空行者）と三宝に対して、証人となり、以下の誓願の成就に関して加持されるよう祈願する。次に具体的な祈願に入る。すなわち、私がどこに居ても、諸々の息災・増益が成就されること、私と有縁の者全てが現世での繁栄を得て、臨終時には直ちに大楽国土（bDe chen zhing. 密教の影響下での極楽浄土 bDe ba can の別名）に往生できること、十悪を行った者も悪趣に往かず、利他の縁が無かった者をも臨終時に導いて仏地に立たせること、畜生たちも業障を浄めて大楽の国土に生まれること、そしてそこで十地を現証し、観自在菩薩のように変化により衆生を導くことであり、それらを祈願する。
作成者名：中御門敬教

bDe smon －bSlu med ma－

書名の日本語訳：極楽願文 －欺かないもの－
著者名：Grwa lag Byang chub rdo rje（？）
著者名よみ：タラク・チャンチュプドルジェ
著者生没年：？
成立翻訳年：？
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：なし
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、p.302、1994）
解説：著者名は記されていない。ただしこの著作はbDe smon phyogs bsgrigsにおいてその直前（pp.291-301）に掲載されたタラク・チャンチュプドルジェの極楽願文の末尾とほぼ一致することから、同じ著者か同じ系統に属する著者のものではないかと思われる。本著書は、9音節からなる3句で構成される。内容は父母の極楽往生や報恩に関して無量光仏に祈願し、仏・菩薩を証人としてその祈願の成就を祈るものである。
　以下に全文を訳しておく。
　「欺くことのない三宝の加持によって、私の父母が輪廻の悪趣の苦しみから済度されて、極楽に生まれ、［そして］主無量光［仏］を喜ばせますように！
　私の無始の時から今日まで、およそ造られた白の業の果、それらの力によって父母、有情たち［に対して］の恩を返し、すべての［者の］眷属となりますように。
　釈迦族の自在者、導師無量光、アジタ、マンジュゴーシャ、秘密主、観自在、眷属をともなった善逝よ、欺くことのない縁起の真理により、これらの誓願が速やかに成就しますように。」
作成者名：藤仲孝司

'Di nas nying mtshams sbyor zhes pa'i ［dbu can gyi］bDe smon

書名の日本語訳：「現世からの結生」という［ことばで始まる］極楽願文
著者名：不明
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社、1994）pp.149-150
解説：極楽世界への化生往生を願い、往生後の救済活動にも言及するきわめて短い願文である。上記の活字本に書誌情報は全く無くて、同書におけるこの極楽願文の収録場所は、〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉やタントラ部の極楽浄土と往生を中心に説く経典類より後、そしてチベットの祖師たちの願文類より前であり、極楽浄土と往生を部分的に説いた諸経論所出の願文に混ざって掲載されているから、この願文もまた何らかの経論の所説であろうと考えられるが、本著の出典や流布については不明である。
　内容に関して、「結生［相続］（Skt. pratisaṃdhāna etc.）」は、中有が滅して、識が母胎に入り、再び生有に結びつくことをいう。そのように煩悩と業により自由無く六道輪廻に結生するのではなく、信仰と誓願をもって極楽浄土に往生し、そこで活動できるよう祈願するものである。往生後の活動の内容は〈無量寿経〉と〈普賢行願讃〉に基づいているようである。チベットでは両典籍の所説から、

仏にまみえること、聞法すること、受記を獲得すること、諸世界に赴いて利他行を行うことなどに言及されることが多い。ただしこの願文では、直ちに十地を歩むとしている。

以下に全文を訳しておく。

「この世から［死んで遷移し、次の生へ］結生するやいなや、清らかな極楽世界の蓮華の中央の芯に変化して往生しますように。この不浄な身体を離れてすぐに、極楽世界に生まれますように。生まれるやいなや、十地をよく歩んで、変化［の身］により、十方において利他を行えますように。」

作成者名：中御門敬教

gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bDe chen zhing gi sgrub thabs 'don cha

書名の日本語訳：『虚空の法、御心の埋蔵、甚深聴伝の類』から「大楽国土の成就法の唱える部分」
著者名：Mi 'gyur rdo rje
著者名よみ：ミーギュル・ドルジェ
著者名別名：sPrul sku Mi 'gyur rdo rje、gNam chos Mi 'gyur rdo rje
著者生没年：1645-1667
成立翻訳年：17c後半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.695, Folios.1a1-10a3
・Rin chen gter mdzod, vol.32（Paro: Ngodrup and Sherap Drimay, 1976）
刊本の奥書刊記：（8b6）bDe chen zhing bsgrub 'don cha 'di / gTer blon Rā ga a sye yis / gTer ston dgongs pa rdzogs pa'i phyir / dam chos gzhung nas btus te bsgrigs / nye gnas kun dags yi ger bkod / nyes 'gal mchis na lha la bshags / dge bas 'brel thogs 'gro ba kun / bDe chen zhing du skye phyir bsngo /
（『大楽国土の成就』のこの唱える部分は、埋蔵経宰相ラーガアスヤが埋蔵経の発見者［ミギュル・ドルジェ］の密意を完成するために、妙法の典籍から集めて編纂した。一切の近住者（弟子）たちが文字にした。誤り・矛盾があるならば、本尊に懺悔する。［この］善により縁ある衆生すべてが大楽国土に生まれるために廻向する。）
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.32ff., note64
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はパドマサンバヴァの弟子の生まれ変わりとされ、カルマ・カギュー派のマハー・ムドラー（大印）の継承者の一人であり、ニンマ派の大究竟（ゾクチェン）の成就者でもある。カルマ・チャクメー（1613-1678）の指導を受け、無量光仏を見て「虚空法（ないし天空法 gNam chos）」と称される埋蔵経を幾つも授かった。

本著は、著者が啓示を受けた『虚空の法、御心の埋蔵、甚深聴伝の類』からチャクメーが編纂したものである。「虚空法－　大楽国土の成就法」は阿弥陀仏信仰や極楽往生を扱った重要な文献であるが、本願文はその中心となる。内容は、無量光三尊などに供養、讃嘆、懺悔、祈願し、摂寿による寿命成就を祈願するが、儀軌には諸方に彩箭を投ずる作法など独特のものが見られる。奥書の後に出る「虚空法、光明儀軌の廻向」「虚空法の誓願」は『極楽願文集成 bDe smon phyogs bsgrigs』上巻p.215ff.と同じものである。この儀軌はカルマ派の集会で特に月の10日、25日に行われ、最後はチャクメーの極楽願文で締めくくられる。また葬儀への導入に用いられる。

前行では、三宝と三尊（師・本尊・ダーキニー）へ帰依し、発心する。マンダラと食事の準備は不要とされ、行いやすくなっている。

次に無量光三尊の身体的特徴を観想する。各々の蓮華上の月輪座の上に無量光仏は赤色の身に一面二臂、禅定印、金剛結跏趺坐の姿、右の観自在は白色の身に一面四臂、蓮華の蔓を持つ姿、左の金剛手大勢至は青色の身に一面二臂、金剛杵・鈴を持つ姿で坐り、無数の仏・菩薩・声聞に囲繞されている。身の三処の三字の光により極楽世界から彼らを招いて、加持、灌頂の授与、寿命の障碍の除去、住世、転法輪などを祈願、敬礼する。真言を唱え、仏の心臓から光明が出て、五仏を招き、供養して、灌頂を受け、無量寿仏が頭頂の荘厳になる。

次に、仏身の清浄を述べつつ無量光仏と両菩薩へ供養を繰り返し、それが障碍の除去、苦の滅、光輝の増進、出家になる縁起となるよう祈願する（この歌は鈴や太鼓に合わせて唱えられるが、過去3世紀の間、チベットの貧しい僧侶や信者たちが最も多く唱えた歌であろう、といわれる）。次に無量光仏へ心による化作と事物との2種の供養をして福智の資糧を満足し、共・不共の悉地等を授かるよう祈願する。次に金剛の身語意を各々法身、受用身、変化身としその徳を述べて敬礼・賞讃する。自己の身語意の三昧耶の損失を懺悔し、無量光仏三尊など一切の仏菩薩を敬礼・賞讃し、最高の悉地を授かり、無辺光仏の成就の祈願し、真言を唱える。

次に摂寿と寿命の成就である。無量光仏を観想し、その手の瓶の甘露が行者に溶け込む。種字により東南西北上に彩箭を投じ、各方向から風火鉄水地の精髄が集まって緑赤白青黄の虹として輝き、その中央に風火鉄水地の明妃が一面二臂で彩箭・瓶を持ち、輝いて舞う。これら五明妃が、五大種の光輝を集めて自身の光輝を広大にし、五大種の寿命を集めて自身の寿命を堅固にし、五大の精髄を集めて寿命の精髄を広大にし、五大の光明を集めて自身の光明を広大になすよう祈る。無辺光仏三尊など一切の仏菩薩に敬礼、賞讃し、祈願し、寿命の悉地が授かるよう祈願する。

真言念誦により、仏は光となって自己に溶け込み、自身が仏世尊の身として現れる。無量光三尊など仏菩薩に対して、死後に直ちに極楽世界に往生し、見仏するよう祈願する。この誓願が成就するよう一切の仏菩薩に加持を祈願して終わる。

作成者名：中御門敬教

gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bDe chen zhing sgrub kyi byang chog Thar lam dkar po

書名の日本語訳：『虚空の法、御心の埋蔵、甚深な聴伝の類』から「大楽国土成就の浄化の儀軌・白の解脱道」
著者名：Mi 'gyur rdo rje
著者名よみ：ミーギュル・ドルジェ

著者名別名：gNam chos Mi 'gyur rdo rje
著者生没年：1645-1667
成立翻訳年：17c後半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：1.東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.702, Folios.1a1-10b3
2.Rin chen gter mdzod, vol.32（Paro: Ngodrup and Sherap Drimay, 1976）
刊本の奥書刊記：1.（10a3-b2）
'di nyid sPrul sku Mi 'gyur rdo rje dgung lo bcu gnyis pa me sbrul gyi lo khrum stod zla ba'i tshes dgu'i nyin/ dPal rno bkra'i gzhung nas gsungs pa dang mthun pa'i thugs rje chen po sngo skya zhal gsum phyag drug pa zhig gis dngos su bka' stsal to zhes gNam chos byang chog gzhung dang/ de yis bsngos bzhin thob par 'gyur/ samaya rgya rgya rgya/ sha ma tha ・・・・（読解不能）/ sPrul sku Mi 'gyur rdo rje dgung lo bcu gnyis pa/ me sbrul gyi lo khrum stod zla ba'i tshes brgyad nub/ rGyal ba rgya mtsho'i gzhun nas gsungs pa ltar zhal gzigs te/ Thugs rje chen po dang 'Od dpag med gnyis mgrin gcig tu 'di ltar bka' stsal to/ zhes pa gNam chos zas gtad dang/ ma yig bu yig gnyis ga bsprad/ gNam chos rang gzhung dang gzhan nas kha bskad 'os cung zad kyis kha bskangs te/ rTogs ldan Karma sogs gsar bu 'ga' la phan pa'i phyir/ bya lo 'brug zla'i nyer bzhi'i nyin dge slong brTson 'grus kyis yi ge pa byas te/ gTer blon Rā ga a syas bsgrigs pa la/ nyes 'gal mchis na Chos bdag srung ma'i tshogs la bshags shing/ dge bas 'di dang 'brel tshad nub phyogs bDe ba can gyi zhing du nges par skye par gyur cig/ mangga laṃ/ /
（これは活仏ミギュル・ドルジェが御年12歳、火の蛇の年（西暦1656年）、室宿（※1）9日の昼、ペル・ノタの典籍に説かれたものと一致する大悲［観自在菩薩］－青灰色で三面六臂－が直接に宣べられたといって、『虚空法の浄化の儀軌』本文と、それにより廻向されたとおり得ることになるであろう。サマヤ、ギャギャギャ、シャマタ・・・・。活仏ミギュル・ドルジェが御年12歳、火の蛇の年、室宿８日の晩、ギャルワ・ギャムツォの典籍に説かれた通りにお顔を拝見して、大悲［観自在］と無量光の2人が声を一つにこのように宣べられたといって『虚空法の施食』と、原本・写本の両者を一致させた。『虚空法』本文と他より言い伝えられたわずかなものにより補充した。トクデン・カルマなど新しい僧に益するために、鳥年（※2）の辰月（チベット暦3月）24日の昼、比丘ツォンドゥーが筆受者を行った。埋蔵経の宰相ラーガースヤが編纂したもの［である。これ］に誤り・矛盾があるなら、法の主、護法尊の衆に対して懺悔します。善によってこれと関係する者がすべて、西方の極楽国土に必ず生まれますように！吉祥たれ！）
※1）二十八宿の一つで、「khrums zla 室宿月」はチベット暦7月16日より8月15日にあたる。
※2）チェクメーの年代から、火の鳥の年（西暦1656年）または土の鳥の年（1669年）が考えられるが、単に「鳥の年」とあることから、直前の「火の蛇の年」を承けて前者が省略表記されたのかもしれない。
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.32ff., note64
・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はパドマサンバヴァの弟子の生まれ変わりとされ、カルマ・カギュー派のマハー・ムドラー（大印）の継承者の一人であり、ニンマ派の大究竟（ゾクチェン）の成就者でもある。カルマ・チャクメー（1613-1678）の指導を受け、無量光仏を見て「虚空法（ないし天空法 gNam chos）」と称される埋蔵経を幾つも授かった。

本著もまた、埋蔵経『虚空の法、御心の埋蔵、甚深な聴伝の類』の一部分であり、ミーギュル・ドルジェが観自在と無量光より授けられた『虚空法の施食』と若干の口訣の補足からなり、死者の極楽往生を目的とした葬儀の作法において唱える文言を示す。割註は作法を指示する。後期密教の用語も出るが、通念以上のものではない。

具体的内容は、遺体、遺髪または最低は種字などを前にして三宝、根本師・本尊などに帰依し、死者の識を招き、種字より供物を化作し、死魔や内外の邪魔に受けとらせるか、または自己は忿怒明王と観想して、彼らに死者の解脱を妨害させず、立ち去らせる。次に結界し、死者の罪障の浄化を観想し、火葬場を準備する。土砂に仏頂尊（cf.D No.599, 大正No.1025）の真言をかけて、罪障の浄化を観想する。

次に供養の本行として、瓶と鏡を準備して無量光仏に沐浴と衣を献上する。瓶を仏の無量宮だと観想し、六波羅蜜の水により障碍・煩悩の垢が浄化され、功徳を具えるよう祈願する。真言を唱え、鏡を示して、故人の三毒などの罪障が無量光仏たちにより浄化されるよう唱えて、土砂を掛ける。四大種を毒の父母とし、無量光仏に生類の安楽を祈願する。六部族の牟尼や無量光三尊に帰依し、死者が六道に迷わず、摂取、引導され、極楽に化生するよう祈願する。死者も帰依、発心し、随唱すると観想する。その身の三処の三字より光を放ち、極楽から無量光仏と真言蔓、法具が出現し、死者に溶け込む。極楽の諸尊に死者への加持・灌頂を祈願する。鈴と金剛杵を用いて真言を唱える。供物が無漏の智慧の甘露になり、廻向により吉祥が成就し、転輪王のようになること、四歓喜を知って持金剛となるよう祈願する。最後の食事を捧げ、無尽の虚空蔵を享受するよう願って、極楽に送り出す。七灯明を燃やし、金剛薩埵と五仏の五智の火を盛んにし、五蘊を焼いて五毒を尽きさせ、故人が無量光仏の相好を具えるよう観想する。「色声香味触法は無し」と唱え、ダラニ真言を唱えて、死者に道を示すが、南西のパドマサンバヴァの住処や四方の仏国土は益が少ないか、生まれ難いと述べて、彼の識が極楽浄土の無量光仏を選んで矢のように去り、その面前の月輪座に着くと観想する(チャクメーの国土選択の思想と一致する)。

生者に対して行う場合は、仏の三処の三種字の光により、一切の仏菩薩が招かれ、身体に溶け込み、金剛の鎧となったと観想し、福徳の大なることと百年の寿命を祈願する。さらに廻向を詳細に行う場合、自己の遷移に関する注意を記している。
作成者名：藤仲孝司

gNam chos thugs kyi gter kha las bDe chen zhing sgrub kyi zin bris

書名の日本語訳：『虚空の法、御心の埋蔵』から「大楽国土の成就の備忘録」
著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya
著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ
著者生没年：1612-1678
成立翻訳年：17c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.699, Folios.1a1-10a2
・Rin chen gter mdzod, vol.32（Paro: Ngodrup and Sherap Drimay, 1976）
刊本の奥書刊記：（9b5-10a2）
de ltar bDe chen zhing sgrub zin bris 'di / dge slong Padma sbyin pa zhes bya bas / / yun ring zhig nas nan du bskul ba'i ngor / mkha' lding rgyal po'i lo gsar tshes gcig nyin / / Rā ga a syas ji ltar smras pa ltar / / bskul ba po des yi ger bkod pa la / /nyes 'gal mchis na srung ma la bshags / / dge bas 'di nyid dang zhing cher 'phel nas / / 'gro kun bde chen zhing du rdzus skyes te / / rigs drug 'khor ba'i brtson ra stong par shog / / / sarba mangga laṃ / dge'o / /
（以上のように［説かれた］この『大楽国土の成就の備忘録』は、比丘パドマ・ジンパといった者が長い期間かけて鄭重に勧請したのにちなんで、ガルダ鳥王の新年（※）1日の日中、ラーガースヤが述べた通りに、かの勧請者が文字に配置した［。その］ものについて、誤り・矛盾が存在するなら、護法神に懺悔します。善によってこれ自体が浄められ、大いに増長してから、あらゆる衆生が大楽国土に化生し、六種類の輪廻の牢獄が空っぽになりますように。全て吉祥たれ！善かれ！）
※）鳥年として該当しそうなのは、1633年、1645年、1657年、1669年などである。
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.32ff., note64
・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『浄土教典籍の研究』「仏教大学総合研究所紀要別冊」、2006年）
・中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ（Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。
本著はミーギュル・ドルジェ著『大楽国土の成就』（東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.695）に対する著者による備忘録であり、理論的解説も見られる。親近し修習すべき所縁類を明確にした上で観想する次第を説く。この場所を大楽国土として成就することをも述べている。
内容は以下の通りである。まず儀礼の準備として広、中、略、簡便の4通りに、供物、持物、マンダラが説かれる。次に、親近し修習すべき所縁が順次説明される。すなわち、面前生起として阿弥陀仏と極楽を観想する国土浄化の所縁。観想により浄化する福徳資糧の積集の所縁、仏に一心に専注する顕教流の所縁。種字・真言により観想する所作タントラ流の所縁。さらに風の観想を加えた行タントラ流の所縁。真言鬘と念誦によるヨーガタントラ流の所縁。無量光仏と極楽を修習して面前生起させる無上瑜伽タントラのうち、仏の心から光を放って衆生の罪障を浄め、往生、成仏を可能にする父タントラ流の所縁と、真言鬘と種字の融解より成就を得る母タントラ流の所縁である。次に、彩箭を用いてまたは所縁のみにより無量光仏から五明妃（『秘密集会』流のもの）を出し、彼女らが器世間の五大種の精髄を入れた鉢を持つ。そこに有情世間の精髄、聖者たちの五智なども溶け、その甘露が行者の身に入り、病と障碍すべてが浄められ、寿命の持明を得るという寿命成就の所縁の次第である。
次に、諸尊が自己に溶け、自身は無量光仏だと観想する。外は虚空の虹、内は空の宮のようで、心臓の赤蓮華に極楽、無量光三尊を観想し、喉の赤蓮華の上と東西に種字を置いて、空性の実践を離れずその所縁を修習する、という究竟次第である。この次第でその所縁のまま眠り、夢の中で極楽などに行く実践、臨終時に行う実践も述べられ、合間に廻向・誓願すべきこと、昼夜何度行い、どれほど続けるべきかも言及される。
次に修行時に仏画・鉢・瓶と供物・器と無差別の大楽国土を観想し、寿命瓶の水・寿命丸・寿命麦と金剛の先端の中はすべて無量光と観想して、灌頂を受ける。広げるなら、自受灌頂し、略するなら、灌頂の供物が自己の頭に溶けると観想し、真言を唱える。瓶の水で洗浄し、供物と寿命丸などを舌におく。諸尊は自己に溶けるか、本処に戻る。自己も種字に、種字は空性に確立し、祝詞を述べて、終了する。
作成者名：中御門敬教

gNam chos bde chen zhing sgrub kyi dbang 'grig chags su bkod pa

書名の日本語訳：虚空の法、大楽国土を成就する灌頂を整然と配置したもの
著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya
著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ
著者名別名：mKhas grub Karma chags med
著者生没年：1612-1678
成立翻訳年：17c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.701, Folios.1a1-17a4（cf.Ref.No.715(45B-715), Folios.1a1-17a5）
・Rin chen gter mdzod, vol.32（Paro: Ngodrup and Sherap Drimay, 1976）
刊本の奥書刊記：（17a3）'grel tshad 'gro ba 'dren 'dod sems bskyed nas / bya lo 'bum 'gyur zla ba'i yar tshes la / gter blon Rā ga a syas bsgrigs pa yi / yi ge ri khrod

dge slong sByin pas bris / so skye'i dbang gis nyes 'gal mchis srid na / lha dang chos bdag srung ma'i drung du bshags / dge bas dbang 'di'i 'brel pa thogs tshad kun / skye gzhan gyis bar mtshams mi chod par / bDe ba can du nges par skye cig / manggalaṃ / /
（およそ注釈する限りは、衆生を導きたいという心を起こして、酉年、月の満ちゆく上弦日に、埋蔵経の大臣ラーガースヤが編纂したが、文字は山中の比丘ジンパが書いた。凡夫であるからおよそ誤りと矛盾がある限りは、本尊と護法女尊に懺悔する。善によってこの力の有縁の者全てが、他の生まれによって間が断絶しないよう、極楽に確実に生まれますようように。吉祥たれ。）
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.32ff., note64
・西岡祖秀『西蔵仏教宗義研究　第二巻－トゥカン『一切宗義』シチェ派の章－』（東洋文庫、1978年）
・田中公明『チベット密教』（春秋社、1996年）
・田中公明『性と死の密教』（春秋社、1997年）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『浄土教典籍の研究』「仏教大学総合研究所紀要別冊」、2006年）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ（Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。
本著の内容は同著者による「虚空法」文献とほぼ共通するが、多くの仏国土の中から阿弥陀仏の極楽世界を選択するのを特記した点は、同著者の『山法・独居修行の教誡』の「国土の選択」論に共通する。後半は成就法の一種の摂寿儀礼であり、臨終やそれに備えた行法である。割注には簡略に項目の整理がなされている。
およその内容は以下の通りである。大楽国土の灌頂の成就から始まり、マンダラの説明、三宝・根本三師・帰依処への帰命する。次に有情のために発心し、空性から化作した供物の無尽を願う。同じく蓮華とその上の阿弥陀三尊と、囲繞する仏・菩薩・声聞・独覚を観想し、根本三師を象徴する三字から光を放ち、極楽から無量光仏を招き、真言を唱える。大楽国土の無辺光仏に対して、敬礼・賞讃する。諸尊の身から光が西方に放たれ、無量光仏の身・真言蔓・持物が無量になり、雨のように行者自身と灌頂尊に溶け込み、瓶の甘露が満たされる。真言を唱え、弟子も供養・沐浴・マンダラ供養をし、彼らに極楽国土の灌頂を始める。オギェン・リンポチェ(パドマ・サンバヴァ)や『文殊根本タントラ』より、パドマ・サンバヴァの弟子の空行母イェシェー・ツォゲル(シチェ派の始祖たち、医学の四タントラの伝承者ダパ・ゴンシェーチャンなどインド・チベットの学者行者すべての大母だという)の教誡『誓言二十一』より、速く正覚したい者は無数の仏国土のうち一浄土へ誓願しなくてはならないと引用し、他の浄土への往生には二障を除き、第八地を得ること、最低でも無我・法性を見ることが必要であるが、極楽は他より勝れており、無量光仏の誓願力により誰でも往生できるし、そこでは全てが成就し、どんな過失や障害も無く、どこよりも速く成仏する、といって選択し、往生の誓願に勤めるべきだという。その点を〈無量寿経〉の誓願(念仏往生の願にも言及)や尊者コンチョックによる比丘チョーリンへの教誡により再説し、六道の衆生に教誡すべきだという。極楽の誓願と無量光仏の成就法は新旧多く盛んであるが、国土を完全に成就する灌頂と成就法は無かったのを、化身ミーギュルドルジェが無量光三尊から授かった経緯を、埋蔵経『パドマ・カタン』より説明する。この遷移の行法はどれよりも鋭利であるといい、無量光仏と極楽世界を明確にし、信ずる。レーチュンパの歌より親近修念により死の直後、鳥のように往生すること、仏説よりどんな大布施より阿弥陀仏と極楽への刹那の浄信が重要であることを説き、専注の浄心をもって阿弥陀三尊へ祈願、帰依、発心、懺悔、随喜、親近等を行わせる。次に阿弥陀三尊の身体的特徴を観想し、成就法（摂寿儀礼）を行うが、その作法は『大楽国土の成就法』（東洋文庫所蔵Ref.No.695）とほぼ共通する。ただし、この摂寿儀礼、八瑞相、寿命丸・寿命酒は、不治の者には邪見が生じるので不適切である、といい、健康な人には長寿の祝賀や祈願のため、死の近い人には安心のために与えるようである。最後に、釈迦牟尼の記説より、中有において無量光仏にまみえて極楽往生することは、法蔵菩薩の誓願に依るという。その後、補足説明がある。
作成者名：中御門敬教

gNam chos bDe smon

書名の日本語訳：虚空の法である極楽願文
書名別名：sMon lam bsdus pa（略誓願）
著者名：Mi 'gyur rdo rje
著者名よみ：ミーギュル・ドルジェ
著者名別名：sPrul sku mi 'gyur rdo rje、gNam chos mi 'gyur rdo rje
著者生没年：1645-1667
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.3125, bDe-smon. Folios
13a5-b6
刊本の奥書刊記：（P.216） 'di ni sPrul sku Mi 'gyur rdo rje dgung lo bcu gsum gser 'phyang gi lo sa ga zla ba'i tshes bdun la gtso 'khor rnams kyis（sic.） zhal gzigs pa'i tshe sangs rgyas sNang ba mtha' yas kyis dngos su gsungs ba'o //
（これは、活仏ミーギュルドルジェ御年13、丁酉の年の氏宿月の7日に、正尊と眷属たちのお顔を拝見した時、仏無量光が直接お説きになった。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.215-216、1994）
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と

極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」(『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定)
解説：著者はパドマサンバヴァの弟子の生まれ変わりとされ、カルマ・カギュー派のマハー・ムドラー（大印）の継承者の一人であり、ニンマ派の大究竟（ゾクチェン）の成就者でもある。カルマ・チャクメー（1613-1678）の指導を受け、無量光仏を見て「虚空法（ないし天空法 gNam chos)」と称される埋蔵経を幾つも授かった。なお東洋文庫蔵No.3125 には、チャクメーの『大楽誓願』の奥書の後に、本著が奥書とともに掲載されている。また、チャクメー著『大楽国土への遷移の教誡を広く編纂したもの』（東洋文庫蔵チベット蔵外文献No. 0700）には導師が唱えて弟子が唱和すべきものとして、極楽への遷移を祈願する個所(12a4-b3)と、亡者を送り出す個所(15a5-b3. ただし「私は」が「亡者は」となる)に、この全文が出ており、この願文の簡素さはそのような使用方法に対応しているようである。
　内容は、極楽世界の阿弥陀仏三尊に対して、臨終時の来迎と、極楽に往生すること、無量光仏を見ることを祈る4偈の願文である。以下に全文を訳しておく。
　「略誓願は、エーマーホ。稀有なる無量光仏と、右の大悲尊観世音や左の大勢至たちに、無数の仏や菩薩の眷属が囲繞し、無量の稀有なる幸福の、「極楽」というかの国土に、私は今世から死去するやいなや、他の生により遮られないで、そこに生まれて、無量光のお顔を見ますように。そのように私が誓願をたてたこれが、障碍なく成就するように、十方の一切の仏菩薩が、加持してください。すなわち、pnytsanidra ya a wa bo dha ni swā hā /」
作成者名：中御門敬教

gNam chos bDe smon

書名の日本語訳：虚空の法である極楽願文
著者名：Mi 'gyur rdo rje
著者名よみ：ミーギュル・ドルジェ
著者名別名：sPrul sku mi 'gyur rdo rje、gNam chos mi 'gyur rdo rje
著者生没年：1645-1667
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：(P.215) 'di ni sPrul sku Mi 'gyur rdo rje'i gter ma'o / /
（これは、活仏ミーギュルドルジェの埋蔵経である。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.214-215、1994）
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」(『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定)
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」(『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定)
解説：著者はパドマサンバヴァの弟子の生まれ変わりとされ、カルマ・カギュー派のマハー・ムドラー（大印）の継承者の一人であり、ニンマ派の大究竟（ゾクチェン）の成就者でもある。カルマ・チャクメー（1613-1678）の指導を受け、無量光仏を見て「虚空法（ないし天空法 gNam chos)」と称される埋蔵経を幾つも授かった（著者の『仏掌珍論』(Sangs rgyas lag 'chang）にはチャクメーの注釈がある)。弟子にはペンユル寺の初代座主持明者クンサン・シェーラプなどがある。「虚空法」は、虚空に秘められて空から降ってきた不可思議な法をいうが、これは「虚空法 － 大楽国土の成就」(gNam chos bDe chen zhing sgrub）の法類として編纂され、成就法、供養法、葬祭儀礼として広く流布した。著者は埋蔵経発見者ドードゥル・ドルジェ（gTer ston bDul 'dul rjo rje. 1615-1672）とも親交があった。この極楽願文は、同著者の『『虚空の法、御心の埋蔵、甚深耳伝の類』から『大楽国土の成就法』を取り出した部分』（東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.695, Folios.1a1-10a3）の奥書の直後にも「虚空法、光明儀軌の廻向」として掲載されている。なお「虚空法」は現在インド、カルナータカ州にあるニンマ派の本山 rNam grol gling 寺でも継承されている。
　本著は、大乗の仏道修行全般に関する4偈頌願文であるが、後半の第3、4偈において死後に極楽往生することと、往生後に正覚し、変化により利他を行うことを祈願している。以下に全文を訳しておく。
「[十] 方 [三] 世の弟子（菩薩）を伴った仏の密意、[すなわち福智の] 二資糧を完成した方に、随喜します（帰敬偈)。私は三世に善を積みました。三宝に供物を献げます。仏教が盛んになりますように。善を一切衆生に廻向します（1)。一切衆生が仏 [位] を得ますように。あらゆる善根を一つにまとめて、[その善根が今後の] 私の [心身の] 相続において成熟しますように。二障（煩悩障、所知障）を浄らかにして、資糧を完成し、長寿・無病・証悟を増長し（2)、今世で十地を征しますように。いつか [寿命が尽きて] 死去するやいなや、極楽に生まれますように (3)。[極楽に] 生まれて蓮華の花が開いて、その身体において正覚しますように。菩提を得てから、あらん限り化身によって衆生を導きますように（4)。サマヤ、ギャ、ギャ、ギャ。」
作成者名：中御門敬教

gNam chos bDe smon

書名の日本語訳：虚空の法である極楽願文
著者名：Mi 'gyur rdo rje
著者名よみ：ミーギュル・ドルジェ
著者名別名：sPrul sku mi 'gyur rdo rje、gNam chos mi 'gyur rdo rje
著者生没年：1645-1667
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：(p.216) 'di sPrul sku Mi 'gyur rdo rjes dgung lo bcu gsum gser 'phyang gi lo sa zla'i tshes bdun nyin 'od dpag med kyis dngos su zhal gzigs te gsungs pa'o /
（これは、活仏ミーギュルドルジェ御年13、丁酉の年（西暦1657年）の氏宿月の7日の昼間、無量光が直接お見えになって、お説きになったものである。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、p.216、1994）
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の

段 ―」(『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定)
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」(『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定)
解説:著者はパドマサンバヴァの弟子の生まれ変わりとされ、カルマ・カギュー派のマハー・ムドラー(大印)の継承者の一人であり、ニンマ派の大究竟(ゾクチェン)の成就者でもある。カルマ・チャクメー(1613-1678)の指導を受け、無量光仏を見て「虚空法(ないし天空法 gNam chos)」と称される埋蔵経を幾つも授かった。
内容は、阿弥陀仏三尊に対して、極楽に往き、阿弥陀仏に会うことを願う6句の簡単な願文である。「夢の対象」については、本著者の他の願文の奥書には夢における見仏のことが記されているから、夢中に阿弥陀仏を見ることを述べていると思われる。チャクメー著『大楽国土への遷移の教誡を広く編纂したもの』(東洋文庫蔵チベット蔵外文献No. 0700)には最後の遷移の次第の個所(16b6-17a1)に、導師に続いて弟子が唱和すべき願文はこれと似たものであり、「力により、夢の対境でもって極楽世界に赴いて、無量光にお会いできるよう」という文章は、「識が大楽[国土]に遷移するよう」となっている。
以下に全文を訳しておく。
「エーマーホ。大いに稀有なる法身無量光や、観自在や大勢至などに対して、我々は一心に心で祈願した力により、夢の対境でもって極楽世界に赴いて、無量光にお会いできるよう加持して下さい。」
作成者名:藤仲孝司

rNam dag bde chen zhing gi smon lam

書名の日本語訳:清浄大楽国土の誓願(大楽誓願)
書名別名:bDe chen smon lam
著者名:Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya
著者名よみ:Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ
著者生没年:1612-1678
成立翻訳年:17c.
成立地:チベット
写本等の存欠:活字本
刊本
刊本所在:・東北 No.7018 [1-17]
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.0723, Folios 1a1-17a6
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.3125, bDe-smon. Folios 1a1-12b4
刊本の奥書刊記:(東北No.7018 15a4、四川民族出版p.231、東洋文庫No.0723 15a4-17a6. No.3125 12a4-b4(※1-※2は欠如))
dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo / / na mo Manydzu shri ye / na moḥ su shri ye / na ma utta ma shri ye swā hā / / zhes brjod nas phyag gsum 'tshal na 'bum ther du 'gyur bar gsungs / / de nas rab brgya phrag / 'bring ci nus / tha na yang phyag bdun yan 'tshal / / rab 'di ma chag pa / 'bring lo zla tsam ma chag pa / tha ma nam skabs su kha nub tu gyu nas bDe ba can gyi zhing khams yid la dran cing 'Od dpag med la thal mo sbyar te dad pa rtse gcig gis bton na / tshe 'dir tshe'i bar chad sel / phyi ma bDe ba can du skye bar the tshom med de / 'Od mdo Zhing bkod mdo dang / Padma dkar po 'Chi med rnga sgra sogs kyi dgongs pa yin / zhes dge slong Rā ga a syas sbyar bas 'gro ba sems can mang po bDe ba can du skye ba'i rgyur gyur cig / /
(※1)om. ye dharmā he tu prabhavā he tu nte? shā? ntā ga to hya ba da ta/ he shā? nyca yo ni ro dha se vām pā dī mhā shra ma na. svā hā/ Karma chags med gyis mdzad pa'i bDe chen zhing gi smon lam bslu bden 'bras can 'di Karma Chos bzang kyis par du bzhengs skabs tshig sleb kyi cha shin tu dag par byed pa po ni Tshe dbang kun khyab po// B?ha wa ntu// //e ma ho. ÷ ngo mtshar Sangs rgyas sNang ba mtha' yas dang ÷ g-yas su Jo bo Thugs rje chen po dang ÷ g-yon su Sem dpa' mThu chen rnams la ÷ sangs rgyas byang sems dpag med 'khor gyis bskor ÷ bde skyid ngo mtshar dpag med pa yi ÷ bDe ba can zhes bya ba'i zhing khams der ÷ bdag ni 'di nas tshe 'phos gyur ma thag ÷ skye ba gzhan gyis bar ma chod pa ru ÷ de ru skyes nas sNang mtha' i zhal mthong shog ÷ de skad bdag gis smon lam btab pa 'di ÷ phyogs bcu'i sangs rgyas byang sems thams cad kyis ÷ gegs med 'grub par byin gyis brlab tu gsol ÷ tadya thā. panyatsa dri ya a va bo dha nā ya svāhā ÷ smon lam 'di gNam chos bDe chen zhing bsgrub nas khol du phyungs ba'o//
(※2)phyogs dus rGyal ba sras bcas dgongs ÷ tshogs gnyis rdzogs la rje yi rang ÷ bdag gis dus gsum dge bsags pa ÷ dkon mchog gsum la mchod pa 'bul ÷ rGyal ba'i bstan pa 'phel gyur cig ÷ dge ba sems can kun la bsngo ÷ 'gro kun sangs rgyas thob gyur cig ÷ dge rtsa thams cad gcig bsdus te ÷ bdag gi rgyud la smin gyur cig ÷ sgrib gnyis dag nas tshogs rdzogs te ÷ tshe ring nang med nyams rtogs 'phel ÷ tshe 'dir sa bcu non gyur cig ÷ nam zhig tshe 'phos gyur ma thag ÷ bDe ba can du skye gyur cig ÷ skyes nas padma'i kha phye ÷ lus rten de la sangs rgyas shog ÷ byang chub thob nas ji srid du ÷ sprul pas 'gro ba 'dren par shog ÷ sa ma ya rgya rgya rgya ÷ ÷ ÷
(以下、東北版)swasti / rigs drugs? sems can sangs rgyas sa 'god phyir / rNam dag bDe can zhing gis smon lam 'di/ 'du byed? mkhan po Zla ba nor bu yi zad med spar du bzhengs pa'i dge ba'i mthus / pha ma'i thog drang mkha' khyab sems can gyis / grangs med bsags pa'i sdig sgrib rab byang nas / myur du bDe can zhing der sgrod? nas ni/ mGon po? dang g-yer med shog / / mangalam ./ /
(以下、東洋文庫版)swasti/ rNam dag bDe can zhing gyis smon lam mdo/ /rnam dad lHa rgyal gza' 'tsho bu tsha nas/ /rnam kun mi 'zad par du bskrun pa'i dges/ / rnam grol sangs rgyas sa la 'god phyir bsngo/ /bdag sogs ma gyur drin can pha mas mtshon/ /bdag bstod mkha mnyam 'gro kun sems dang// bdag cag gnas skabs bgegs par rab zhi nas/ /bdag bzhan bDe can zhing du skye bar zhog/ /mangalaṃ//
(「三宝に敬礼します。文殊に帰依します。輝かしい方に敬礼します。最高の吉祥な方に敬礼します。幸あれ」と述べてから、3[回]敬礼すれば、10億[回の敬礼]となるであろうとお説きになった。それから優れた者は百回、中程の者はできるだけ、最低限の者も7回敬礼する。この優れた者は無貪となる。中程の者は[ある程度の]年月[の間]ほど、無貪である。最低の者はいつかその折に顔を西に向けて恭敬して、極楽世界を心に念じ、無量光に合掌して一心の信仰により唱えれば、今世で寿命の障碍が除かれ、後に極楽に生まれることは疑いない。〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉と、〈悲華経〉〈阿弥陀鼓音声王陀羅尼経〉等の意趣である、といって比丘ラーガースヤが著作した[。その]ことにより、多くの衆生たちが極楽に生まれる原因となりますように!

（※１.真言部分省略）カルマ・チャクメーが造られた『大楽国土の誓願』－欺きなく真実であり果をもったこれは、カルマ・チョサンが刊行なさった機会に言葉を混同した分をよく訂正した者は、ツェワン・クンキャプです。（真言部分省略）驚くべき無量光仏と、右に大悲尊と、左に薩た大勢至たちを、無量の仏菩薩が取りまいている。驚くべき無量の幸福の「極楽」といわれるかの国土に、私は死去した直後、他の生ににより間断されずに、そこに生まれてから、無量光のお顔を見ますように！そういって私が誓願を立てたこれは、十方の仏菩薩すべてにより、妨げなく成就するよう、加持してください。（真言部分省略）この誓願は、「ナムチュー（虚空の法）」・大楽国土を成就してから、抽出した。

(※２)方と時の仏および［その］仏子の意趣、二資糧の完成に随喜する。私は三世の積んだ善を、三宝に供養を捧げる。勝者の教えが増長しますように！善を有情すべてに廻向します。衆生すべてが仏［の位］を得ますように！善根すべてを一つにまとめて、私の［心］相続において成熟しますように！二障を浄め、資糧を完成して、長寿、無病、証悟が増長し、今生に十地を踏みますように！いつか死去した直後、極楽に生まれますように！生まれてから、蓮華が開花して、その身の依処において、仏になりますように！正覚を得てから、できるだけ［長く］変化により衆生を導きますように！（真言部分省略）

（以下、東北版）スヴァスティ、六種類の有情を仏地に立たせるために、清浄な極楽国土によるこの誓願は、ドゥチャンの親教師ダワノルブの無尽の刊行の善の威力でもって、父母を初めとして虚空を満たす［無量の］有情が、無数の積んだ罪障をよく浄めて、速やかにかの極楽国土に往ってから、主（・・・）怠りがないように！吉祥であれ！（以下、東洋文庫蔵）スヴァスティ、清浄大楽国土による誓願の経は、浄信のハギャル・ザーチョの子孫が、一切相無尽版として製作した［。その］善により、解脱・仏地に立たせるために廻向します。私などの母となった恩ある者 － 父母を初めとして、我を讃える虚空と等しい衆生すべてが心の悩みと私たちの当座の障害がよく鎮まって、自他が極楽国土に生まれますように！吉祥であれ！

活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.217-232、1994）

参考文献：・青木文教「ラーガアスヤ極楽願生偈」（『西蔵原本　大無量寿経国訳』光寿会、1928）pp.117-129

・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）

・Peter Schwieger, Ein tibetisches Wunschgebet um Wiedergeburt in der Sukhāvatī, St. Augustin, 1978

・Sangye Khandro, A Garland of Immortal Wish-fulfilling Trees：The Palyul Tradition of Ningmapa, Ithaca, 1988

・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.32ff.

・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006）

・中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」（『仏教大学総合研究所紀要』16、2009）

・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）

・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）

解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、ニンマの法統にも属している。顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ（Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導し、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を著した。この埋蔵経は gNam chos bDe chen zhing sgrub（虚空法 － 大楽国土の成就）の法類として編纂され、成就法、供養法、葬祭儀礼として広く流布した。チャクメーの極楽願文の中でも、本著は最も大きく重要であり、上記の法類による儀礼の最後を飾るものともされる。単独でも多く用いられ、ツォンカパ著『最上国開門』とともに、チベットで最も流布した二大極楽願文となった。冒頭にも、この教えは最高の教えであり、「経(mdo、顕教)の宗」だから灌頂などは必要ないと述べており、宗派、伝統を越えて広く流布されることを目指したようである。刊本は頁数などは一致するが、版木は別のものもあり、この願文の流布が推測できる。東洋文庫蔵No.3125 は、前に『法行要略(Chos spyod mdor bsdus)』(1a-10b6)、後に『帰依の経歴(sKyabs 'gro'i lo rgyus)』(1a1-8a4)を伴うほか、この願文の中にも『略誓願(sMon lam bsdus pa)』(13a5-b6)としてミギュル・ドルジェの願文とその奥書が収録されている。ジクメー・チョデンパ（'Jigs med chos ldan pa）ないしトゥクジェ・シャンペン・ペルサン（Thugs rje gzhan phan dpal bzang）による大きな註釈『清浄大楽国土の誓願の弁別釈・大楽国土へ往く善き階梯』（No.7019）、ラクラソナム・チュドゥプ（Glag bla bSod nams chos 'grub. 1862-1944)による大きな註釈『大楽国土誓願の復注　－解脱道を照らすもの（太陽）－』（bDe smon phyogs bsgrigs smad、四川民族出版社, 1994, pp.1-317）もある。

全体の構成は、願文自体からはさほど明瞭ではない。まず阿弥陀仏と極楽浄土の徳性と救済性を明かにして、礼拝・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向という七支供養を行う－特に懺悔の部分が詳細である。その後、幾つもの祈願が繰り返されるが、その内容は、横死をなくし、臨終時に来迎を受けることから、極楽往生して阿弥陀仏を拝顔し、授記を受け、利他を行うこと、阿弥陀仏の入滅時には観自在、大勢至に従うこと、成仏して無量寿仏のようになり、聞名の功徳により有情を利益することにまで渡る。それらの成就を三宝に祈願し、礼拝の功徳を説明し、最後にこの著作は＜無量寿経＞＜阿弥陀経＞＜悲華経＞＜鼓音声陀羅尼経＞などの意趣であると結んでいる。他方、註釈書によると、極楽往生の四つの因－すなわち１）形相をたびたび作意する、２）福徳の資糧を積む、３）正覚へ発心する、４）善根を自他が極楽往生する因として廻向する－から、なっていて、これはツォンカパの『最上国開門』と同じである。

そのうち、第一の因は極楽浄土と阿弥陀仏とその眷属を思念するのである。第二の因は、七支供養からなり、それらは各々慢・貪欲・瞋恚・嫉妬・愚痴・邪見・疑の対治とされるが、これは特異な説明である。礼拝の支分では、阿弥陀仏の名号を念じ、それを聞くことの利徳を通じて行われている。懺悔の支分は特に詳しくて、対治現行・能破・回復・依処の四力(シャーンティデーヴァ著『集学論』に引用された『説四法経』が原拠)を通じて行われる。対治現行の個所では十不善、別解脱・菩薩戒・三昧耶戒の違反が懺悔される。往生の第四の因としては順次、仏を拝顔すること、それを妨げる貪欲を断つこと、後生に願うこと、当面に願うことについて誓願する、ということになる。

作成者名：藤仲孝司

rNam dag bde chen zhing gi smon lam gyi 'byed 'grel bDe chen zhing du bgrod pa'i them skas bzang po

書名の日本語訳：清浄大楽国土の誓願の弁別釈 － 大楽国土へ往く善き階梯 －
著者名：Thugs rje gzhan phan dpal bzang
著者名よみ：トゥクジェ・シャンパン・ペルサン
著者生没年：19c
刊本所在：・東北 No.7019 ［1-82］
刊本の奥書刊記：(81b1)rab btags tsam du rNam dag bde chen zhing gi smon lam gyi 'byed 'grel bDe chen zhing du bgrod pa'i them skas zhes bya ba 'di ni/ lugs gnyis rnam dpyod kyis dbul zhing sos dal sgyid nyal la dga' ba/ chos med kyi btsun gzugs/ Thugs rje gzhan phan dpal bzang du 'bod pas Zla klung dal gyis 'bab pa'i y-gon 'gram/ Rab 'byams byams pa gling gi yang dben/ dBen ri Seng ge rdzong gi shar phyogs /grub brnyes rig 'dzin du mas zhabs kyis bcags shing byin gyis brlabs pa/ mda' g-yas g-yon na ma byon pa 'i Sangs rgyas Ma phan dang/ 'Phags pa Mig mi 'dzum pa'i sku brag la rang byon du dod pa dang/ khu byug dang 'jol mo sogs bya skad snyan ba du mas gang ba/ 'tshe ba'i dogs pa dang bral ba'i ri dwags gzhon nu dal bar rgyu ba sogs dben pa'i gnas kyi mtshan nyid ma tshang ba med pa'i sman ljongs nags tshal 'khrigs pa'i ra ba nas bris pa dge legs kyi snang ba dkar pos yongs su khyab bar gyur cig// //mkhas grub dbang po Karma Chags med kyi Zhal kyi dgongs bcud las byung bDe smon gyi/ /'byed 'gel bDe chen zhing du bgrod them skas par/ /Shar lho'i snying snying Padma g-yang skyid nas/ /yon sbyar bar bskrun bgyis pa'i dge ba'i 'bras/ /bstan 'dzin zhabs brtan bshad sgrub bstan dar dang/ /mkha' mnyam sems can 'brel thogs ma lus pa/ /thams cad bDe chen zhing du skye bar shog// // ces par byang nyung ngu 'di'am mTshams ming 'Jigs med chos ldan pas dge'o// Sarva manggalam?// //
〔奥書〕
［私的にあえて］ただ附会ほどのものとして、『清浄大楽国土の誓願の弁別釈・大楽国土に行く階梯』というこれは、［顕密］二つの宗の伺察に貧窮し、安閑・惰眠を喜ぶ、法無き僧侶姿の「トゥクジェ・シャンパン・ペルサン（悲利他賢）」と呼ばれる者が、Zla klung（Zla chuならＺＫ2476）が緩やかに流れる左岸（'gramと読んだ）、ラプジャム・チャムパ・リンの奥の院、閑寂山獅子城の東側、成就を得た多くの持明者が足で歩いて加持した、矢が左右に出てこない無能勝仏と聖者「不眴」の身体が、岩に自然に浮き出たのと、コーキラ鳥（カッコウ）(82a)とツグミなど多くの鳥の歌声が充ちていて、加害の恐れを離れた子鹿がのどかに活動するなど、閑寂の場所の相が欠けることのない薬樹の森が繁茂した園林で書いた［。その］ 善妙の白い現れが、すべてに遍満しますように！
　学者・行者の自在者カルマ・チャクメー御前の意趣の心髄から出た『極楽願文の弁別釈・大楽国土に行く階梯』として、東南のまさしく中心パドマ・ヤン・ティから、施物を合わせて造られた善の果、教えの受持、安泰、講説、修証、教えの隆盛［があり］、虚空と等しい有縁のあらゆる有情がすべて大楽国土に生まれますように！
　、という［ような］この小さな憶え書も、ツァムミン・ジクメ・チョデンパによる。善かれ！すべて吉祥であれ！
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.32ff.
・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択 －『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006年）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・田中公明『詳解　河口慧海コレクション　チベット・ネパール仏教美術』（佼成出版社 1990）pp.98-99
解説：著者はネード(gNas mdo) のカギュ派、ニンマ派の僧である。東北目録は著者を『清浄大楽国土の誓願』と同じく Rāgasya とするが、奥書からも、また著作の冒頭の「カルマ・チャクメーのお顔の妙瓶から来る極楽願文の弁別釈 － 自他への利益の願望をもって、無比の師の口伝をここに提示する」(1b4-2a2)、「カルマ・チャクメーは聖者観自在そのものですから」(45a2)、「かつてケードゥプ・カルマチャクメーが浄土から来られて、近住〔の弟子たち〕を導いた経緯のように」(66a5-6)、「チャクメーのこの『極楽願文』とパンチェン［１世］が造られた「欺き無き〔三〕宝」〔といって始まる願文〕」などといった文言からも、チャクメー自身の著作ではない。それらチャクメーへの尊崇や、彼の指導下のミギュル・ドルジェがもたらした埋蔵経『虚空の法』(gNam chos)を教証とし（9a2）、カルマ・チョサンによる刊行時の奥書には「この誓願は「虚空の法・大楽国土の成就」から抽出した。」といい、「大楽国土の成就」文献を原典としていることから、著者はチャクメーの弟子筋の人である。またニンマ派のカトクパ・ダムパ・デシェク(1122-1192)の本地である極楽浄土での菩薩名ロドー・ニンポの名や同派のジクメーリンパ(1729/1730-1798)の讃が言及されることから、その系統でもあるようである。さらに、ゲルク派のツォンカパやパンチェン1世の願文にも言及し「無宗派運動」の特徴を示している。
　註釈の仕方は、チャクメーの願文を引用しつつ、詳しい説明や関連事項を加えている。標準的でない表記や誤字も多く、読解困難な個所が少なくないが、チャクメーの高名な願文の構成が明らかになっている。それによると、この願文は、ツォンカパの『最上国開門』が〈無量寿経〉により示したのと同じく、極楽往生するための四因 － 1.形相をたびたび作意すること、2.福徳の資糧を積むこと、3.正覚へ発心すること、4.善根を自他が極楽に生まれる因として廻向すること － を骨格としている。
　四因の第1は、浄土と仏菩薩を思念することである。
　第2は、慢、貪欲、瞋恚、嫉妬、愚癡、邪見、疑の七つの対治として礼拝、供養、懺悔、随喜、勧請、祈願、廻向の七支供養を行うが、この極楽願文全体が七支供養を骨格とするものと取らえられている。また礼拝は、名号を念ずることから行うとされていることが注目される。懺悔は、罪悪の種々と、対治現行、能破、回復、依処という四つの力によりそれら罪悪を浄化する記述がたいへん詳しい。
　第3は、無上の正覚への発心である。
　第4は、見仏、その障碍の除去、後生に関する誓願、当面に関する誓願などを説いており、特に後生の極楽往生と

成仏に関する記述が詳しい。

全体的に仏や極楽浄土の記述に関しては〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉に多く依っている。因果を語るには、有部関係の文献や自派の祖師の事跡を示す。さらに実践的な教訓を処々に述べているが、それらには当時の人々の生活を反映したと思われるものもある。詳しい科文は藤仲［2006］を参照。チャクメーの願文に関しては、ペルトゥル・リンポチェによる科文もあるが、本典籍との関係については未詳である。

作成者名：藤仲孝司

rNam dag bde ba can gyi smon lam －'Od dpag med kyi thugs rjes sa bon byang chub sems kyi myu gu mi zad par rab tu 'phel ba－

書名の日本語訳：清浄極楽誓願　－無量光の悲による種子の菩提心の芽の無尽なる増長－

著者名：sTag sham Nus ldan rdo rje

著者名よみ：タクシャム・ヌーデンドルジェ

著者名別名：gTer chen sTag sham Nus ldan rdo rje、bSam gtan gling pa

著者生没年：1655-?(一説によると1682-?)

成立翻訳年：17c-18c

成立地：チベット

写本等の存欠：活字本

刊本の奥書刊記：（P.246）bDe ba can du skye ba smon lam rnam par dag pa 'di ni / bdag 'dra dpa' bo sTag sham rdo rje ngas / dPal rta mgrin gyi gTor sgrub bzhugs tshe bDe ba can du skye bar dbug dbyung zhing / zhing khams mthong snang rib tsam la brten nas rang gi ma rgan 'byung bzhi'i gyar po brjes nas / sems nyid ma la zhen(sic.) pa'i dge rtsa la dmigs te de ma thag tu bris pa'o // dge bas lus can thams cad bDe ba can du skye bar shog / / manga laṃ /

（この『清浄極楽誓願』は、主のような 勇者タクシャム・ドルジェ自身が、吉祥馬頭明王トルドゥプがいらっしゃる時、極楽に生まれるよう心を安息させ、［極楽］国土［について］の僅かな所見に依って、自身の老母という四大種の借物［である業と煩悩の身体］を取りかえて［生まれ変わり］、心性の母においてこだわる（zhan?弱い）［有所得の］善根を縁じて、それをすぐさま書き写した。［この］善により、身体を有する者［有情］全てが極楽に生まれますように。幸あれ。）

活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、1994）pp.242-246

解説：著者はニンマ派の人。ドゥードゥル・ドルジェ(bDud 'dul rdo rje. 1615-1672)の弟子であり、sTag sham の埋蔵経の発見に関わった。彼の発見したものにはパドマサンバヴァが説き、その弟子イェシェーツォゲルが書写したとされる極楽願文も含まれている。（cf.Master of the Nyingma Lineage(Dharma Press, Berkeley,1995,p.275）

本著は極楽往生と成仏を祈願する願文であり、4句からなる24偈頌から構成されている。密教の世界観や用語法も幾らか含まれているが、阿弥陀仏による摂取、極楽往生、大乗仏教の行道と成仏という骨格については全く顕教のものである。

具体的には、まず顕密の諸仏・諸尊に帰依し、証人となることを願う。次に祈願本体として、私とその関係者が臨終時に業や煩悩を浄めて、正尊や空行者を見て、西方極楽浄土の蓮華に化生すること、無量光仏を拝顔して法を受けること、自利と利他を円満にし、自らも無量光仏として成仏することに関して順次、項目を挙げて、その成就を祈っている。

作成者名：藤仲孝司

rNam dag bde ba chen zhing gi smon lam gyi 'grel bshad －Thar lam snang byed－

書名の日本語訳：大楽国土誓願の註疏　－解脱道を照らすもの（太陽）－

著者名：Glag bla bSod nams chos 'grub

著者名よみ：ラクラ・ソナムチュードゥプ

著者名別名：Blo bzang Chos kyi grags pa(?)、Glag bla chos 'grub

著者生没年：1862-1944

成立地：チベット

写本等の存欠：活字本

刊本所在：The Collected Writings of Glag-bla Bsod-nams-chos-'grub: The 1991 Dkar-mdzes Edition(Delhi: Konchhog Lhadrepa, 1996)vols.5-6

刊本の奥書刊記：（P.317）Chags med bDe smon gyi 'brel pa zhing sgrub dang sbyar te khrid kyi tshul du byas pa 'di nyid Drin chen bla ma'i zhal khrid ltar la lung gyis brgyan te sus kyang go sla bar byas te rDzong ［g］sar bkra shis lha rtse nas rMe ri（ru?） dge slong Blo bzang Chos kyi grags pa'am bSod nams chos 'grub kyis gang dran du bris pa 'dis kyang 'gro ba mang po bDe ba can du skye ba'i rgyur gyur cig / /

/ rdzogs sangs rgyal pa'i smon lam mthus grub pa /
/ rnam dag zhing dang ston pa'i ngo mtshar gtam /
/ rgyal gsungs mdo bzhin grub pas smon pa'i ngag /
/ bka' dang 'dra bar blo mchog rnams kyis 'dzin /（1）
/ don zab tshig gis ston tshul ma 'khrul bar /
/ rgya cher 'grel dang gdams ngag zung 'jug tu /
/ mkhas pa'i dbang pos bkral 'di'i spar gyi 'phrul /
/ lhag blos Kaḥ thog rdo rje gdan du bsgrubs /（2）
/ dge des ma rnams duḥ kha las grol nas /
/ nam zhig 'di snang nub tshe mngon sum du /
/ bde gshegs sras dang bcas pa'i zhal mthong ste /
/ skad cig nyid la bde ldan zhing bsgrod shog /（3）/

ces rnam dkar sgrub pa po 'Od dpag med mgon chos rje yab sras kyi rjes 'jug shākya'i dge slong dPal ldan ye shes kyis smon lam btab pa de de bzhin tu 'grub par gyur cig / / sarba manggo（a） laṃ / / dge'o / /

（チャクメーの『極楽願文』の関連('grel pa(註釈)の誤字か)を、「国土の成就」と結びつけて、導き方としたこれは、大恩師のお導きのとおりに、教証により荘厳して、誰もが分かりやすくした［ものである］。［カムのデルゲ東方の］ゾンサにおけるタシハツェ［寺］出身のメリの比丘ロサン・チューキタクパまたはソナム・チョードゥプが念じたところを記した［。］これによっても、多くの衆生が極楽に生まれる因となりますように！

正等覚者の誓願の力により成就した、浄土と教主の稀有なる話、勝者の説かれた経のとおりに成就したことによる誓願の言葉は、仏説と等しいものとして最上の知恵ある者たちは受持する（1）。甚深の義を言葉により説くさまを、錯乱せずに、広大な釈と教誡の双入として、学者の王が註釈したこ［の書］の印版は、ハクロがカトク［寺］の金剛座において完成した（2）。この善により母［なる有情］たちが苦から解脱し、いつかこの［世の］現れが没する時、現前に善逝および仏子のお顔を見て、刹那に極楽国土へ往きますように！（3）

というこれは、白の成就者無量光主の法主父子に従うシャーキャの比丘ペルデン・イェシェーが誓願した［。］それが、そのとおりに成就しますように！すべて吉祥であれ！善かれ！）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs smad（四川民族出版社、pp.1-317、1994）
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.37ff.
・宗川宗満「完全清浄極楽国土誓願」（『浄土学』5・6、1923）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択 －『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006年）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はカム(Khams)地方で活躍した高名なニンマ派の僧。
カルマ・チャクメー著『清浄大楽国土願文』（東北No.7018）に対する非常に詳しい註釈である。『清浄大楽国土願文』にはすでに『清浄大楽国土の誓願の弁別釈・大楽国土へ往く善き階梯』（東北No.7019. 奥書によると著者はThugs rje gzhan phan dpal bzang）という註釈がある。そして本書の題名に含まれる「註疏'grel bshad」は、何らかの典籍に対する注釈に対する詳しい復註を意味する場合がほとんどであり、その場合、本註釈は『清浄大楽国土の誓願の弁別釈・大楽国土へ往く善き階梯』に対する復註であるということになるが、本註釈を見る限り、同註釈の文言を直接引用して説明しているようには見えないので、本当に「復註」と言えるのかどうかは断定できない。ただし、『大楽国土へ往く善き階梯』と共通した記述も多いので、同釈を参照していることは確実であるが、同釈に見られる特異な表記や誤字もほとんど無くて、読みやすい。
著述の仕方としては、『清浄大楽国土願文』の本文に沿いながら、言葉を補って詳しく説明されており、教証としては〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉に限らず多くの経論が引用されている。Kapstein はチャクメーやラクラ・ソナムチュードゥプは、これらの典籍によりこの信仰を、より広く僧俗に普及させようとしたと評している。
往生の四因はツォンカパの『最上国開門』が挙げるものであり、〈無量寿経〉に基づく。さらに七支供養、四力による罪の浄化を骨格としているが、多くの教証に関しては、道次第の文献類などを参照したのではないかと思われる。チベットの諸宗派の祖師にも言及しており、宗派折衷運動の傾向を示している。さらに、著者による科段があり、構造が把握しやすくなっている。科段は藤仲論文を参照。
作成者名：藤仲孝司

rNam par rgyal ma la brten nas rang gzhan gyi tshe sgrub bya tshul dang rje btsun sGrol dkar gyi sgo nas tshe sgrub bya tshul 'chi med bdud rtsi'i dpal ster

書名の日本語訳：尊勝母に依って自他の寿命を成就する作法と、尊者白ターラーを通じて寿命を成就する作法 － 無死の甘露の祥を与えるもの －
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 1802, Folios 1a1-8a3
刊本の奥書刊記：（5a5-6）
Byang phyogs bstan pa'i gsal byed mKhan chen No min han Blo bzang tshe dbang skyabs mchog ser skya thun mon nas dgon dGa' ldan bDe ldan gling'i tshogs? 'don du chugs? chog la 'di lta bu zhig dgos zhes bskul ba'i ngor/ Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos sbyar ba'o/ /
（北方で教えを明らかにするもの、大親教師ノミンハン・ロンサンツェワン・キャプチョク・セルチャ・トゥンモン（※）からガンデン寺デーデン・リン（極楽院）の衆に唱えさせる儀軌においてこのようなものが必要ですと勧められたのにちなんで、シャーキャの比丘ロサンペルデン・テンペーニマ・チョクレナンギェルペルサンポが著作した。）
※1759-1846. モンゴルの Khal kha 出身のゲルク派の僧侶。
（7b6-8a3）
'Jam dbyangs chos skor nas bshad pa'i rJe btsun sGrol ma dkar ko'i sgo nas tshe sgrub bya tshul 'di lta bu zhig dgos zhes Zwa ser? bstan pa'i gsal byed mKhan chen No min han Blo bzang tshe dbang skyabs mchog gis bskul ba'i ngor/ Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos sbyar ba'o/ /
/ oṃ swa sti / phan bde'i 'byung gnas rgyal bstan yongs 'du'i ljon/ / rab rgyal 'gro kun thar mchogs 'bras bzang la/ /spyod phyir bKa shis lhun grub chos grwa cher / / chos sbyin 'dzad med dal 'gro'i rgyun 'di spel / / sa rba dza ga taṃ / /
（マンジュゴーシャの法類（ツォンカパの教え）に説明されている白ターラー母を通して寿命の成就をするこのような方法が必要ですと黄帽派(ゲルク派)の教えを明らかにする大親教師ノミンハン・ロサン・ツェワン・キャプチョクが勧めたのにちなんで、シャーキャの比丘ロサンペルデン・テンペーニマ・チョクレナンギェルペルサンポが著作した。
オーン、スヴァスティ、利益・安楽の生ずるもとである仏教全体が集まる広大な楽園 － 衆生すべてが最上の解脱の妙果を受用するためのタシルンポの大寺院－ において、法施の無尽のこの流水の相続を増長させよう！サルヴァジャガタム）
参考文献：・高田仁覚『インド・チベット 真言密教の研究』(密教学術振興会 1978)pp.202-203
・『仏書解説大辞典』1、pp.128-129
・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』（永田文昌堂、

2002）pp.306,602,641
・頼富本宏『密教仏の研究』(法蔵館、1990)pp.565-566,642ff.
解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。
本著は、無量光仏と関係しチベットでたいへん人気のある女性尊格を通じて寿命を成就する行法二つを併収したものである。ここで言及された内容は、チベットでタルチョ(真言や陀羅尼を書写した旗)を掲げる習慣とも重なるものであるが、印刷状態が悪くて読解不可能な部分がある。
前半の仏頂尊(Uṣṇīṣa)は、如来部に所属する明妃であり、そのタントラは四部の中では所作タントラに分類される。それに関するタントラは幾種類(東北Nos.594-599、大正Nos.967-979)もあるが、そのうち仏頂尊勝母(Uṣṇīṣa-vijaya)に関する典籍(東北Nos.594-595、大正Nos.978-979)は、極楽世界の集法堂において観自在菩薩に対して、仏頂に秘蔵されたダラニを説き、それを読誦・書写・供養すべきこと、そうするなら、長寿が得られ、極楽往生できることを説いたものである。このダラニ読誦の功徳による極楽往生も比較的よく知られている。本論そのものは仏頂尊の成就法を通じて、寿命を中心とした息災の事業を成就して長寿を得ること、死去した後で極楽往生することを願うものであるが、無量光仏への直接的な言及は少ない。
後半のターラー(救度母)は、金剛界系統のマンダラにおいて四隅のうち北東に置かれる明妃であったが、観自在菩薩の涙の池に咲いた蓮華の中から生まれたともされ、観自在菩薩の配偶者や眷属とされる場合もあり、八難からの救済者としてインド仏教後期以降、大流行した。きわめて簡潔な成就法であるが、無量寿仏は白ターラーの頭の化仏として言及される程度である。
作成者名：藤仲孝司

sNang ba mtha' yas kyi zhing gi yon tan la rnal 'byor pas bstod pa

書名の日本語訳：無量光の国土の功徳に対するヨーガ行者の讃
著者名：不明
成立地：敦煌
刊本所在：P.tib.67, P.tib.99, P.tib.158, P.tib.759, S.tib.452
刊本の奥書刊記：なし
参考文献：・赤松孝章「敦煌写本より見たるチベットの浄土思想受容」(『印仏研』35-1、1986)
・Jonathan A.Silk "The Virtues of Amitābha, A Tibetan Poem from Dunhuang"(『仏教文化研究所紀要』32、1993)
解説：敦煌から出土した文献類から確認された著作であり、7シラブル、206句からなっている。チベットでは、後代に仏や浄土の観想を目的にした経典要約の文献がいくつも造られるが、本典籍も阿弥陀仏や極楽の荘厳の観想を目的としたものとなっている。
構成は、1-16句は帰敬偈、17-29句は著作の動機、30-63句は阿弥陀仏の功徳、64-99句はその国土の功徳、100-199句はその国土に生まれるための修道、200-206句は廻向偈となっている。
著作の動機については、善逝の功徳は平等だから諸国土に差別は無いとしながら、衆生の習気の不同ゆえに国土の功徳の現れは種々あるとして、無量光仏の国土も言説を越えて功徳は不可思議であるものの、衆生を導くために本書ではその荘厳を説くのであるとする。
阿弥陀仏の功徳については、その寿命の無量なることに言及せず、その光明の無量なることが多く言及されている。特に、無数の化仏を現して衆生済度を行うという記述に関しては、〈観無量寿経〉との関係も指摘されている。
その国土の功徳については、〈無量寿経〉の国土荘厳についての記述に影響を受け、さらにその発展した形で描写されているが、内容的には特に後期〈無量寿経〉の系統の所説に親しいものがあると考えられている。
その国土に生まれるための修道として、五欲を捨てて善知識に親近することにはじまり、四諦、六波羅蜜、諸法の平等性の証悟など大乗一般の教養と考えられるものが挙げられており、中観・唯識の思想も展開されている。また178-179偈には称名による罪の浄化も挙げられている。
作成者名：藤仲孝司

sNang ba mtha' yas bsgom don

書名の日本語訳：無量光の修習の義
著者名：Sa skya Paṇḍita
著者名よみ：サキャ・パンディタ
著者名別名：Sa paṇ、Kun dga' rGyal mtshan
著者生没年：1182-1251
成立翻訳年：12-13c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.5（Bibliotheca Tibetica 5, The Complete Works of Paṇḍita Kun Dga' Rgyal Mtshan, Compiled by bSod Nams rGya mTsho, The Toyo Bunko, Tokyo, 1968）Na12,224a2-b5
刊本の奥書刊記：（Na12,224b5）sNang ba mtha' yas kyi bsgom don Chos rje Sa skya Panditas mdzad pa'o
（『無量光の修習の義』は、法主サキャ・パンディタがお造りになった。）
現代語訳書：・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』永田文昌堂、2002
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）pp.26-27
参考文献：・小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教仏典」(『仏教大学大学院研究紀要』7、1979)
・立川武蔵『西蔵仏教宗義研究　第一巻－トゥカン『一切宗義』サキャ派の章－』(東洋文庫、1974年）pp.59-60
解説：著者はサキャ派の五祖の第四であり、チベット仏教史上最大の学僧の一人である。文殊師利の化身として「ジャムゴン（文殊主）」とも称されている。同派のすぐれた学者たちやナーランダ寺最後の座主で亡命してきたシャーキャ・シュリーバドラ(1127-1225)に顕密にわたって広く学び、インドの外道とも論争して名声を博した。後にモンゴルのチベット侵攻が迫ったとき、モンゴルに赴いて、チベットの平和にも貢献した。サキャ派は初期からバリ翻訳師よりジターリ流の阿弥陀仏成就法を伝承し、五祖の中には極楽往生したと伝えられる人もいる。
本著は、サキャ派からゲルク派へも継承された「睡眠修習(nyal bsgom)」の古い文献である。「睡眠修習」は仏やその浄土や光明を観想し、その状態のまま眠りに入るものであり、最終的には浄土への往生を目的とした行法である。その作法の一部は、部派仏教の内容を継承した『声聞地』

に見られるヨーガ行者の眠り方すなわち北枕で右脇を下にし(顔は西向きになる)光明を念じて眠る作法とも類似し、後には註釈文献、願文も造られ、今日まで流行している。ジターリ流の『無量寿宗要経』ではなく『無量寿経』の所説が取り上げられている。本著自体では〈普賢行願讃〉中の、死時に無量光仏を見て、極楽国土に往生し、誓願すべてを叶えたいという趣旨（vs. 57-58）に依って造られたとされている。

具体的には、極楽世界の方向に主尊としての無量光仏（成就法の系統に示される姿のもの）が仏菩薩に囲まれているのを観想し、礼拝、供養ないし、この同著者の『十法行』の読誦の後、成就法に見られる光の放射・溶解を観想の次第を経て、仏陀・守護尊・自心が無差別になったのを思念する。極楽世界の蓮華から生まれて、無量光仏より授記を得たいという誓願（v. 59）を立てて、その状態のまま眠る。すると後に、蛇が脱皮するように（cf.『一切如来烏瑟膩沙最勝総持経』大正No.978,D No.596、『ウダーナヴァルガ』18-21）西方の極楽に化生し、聞法することが『宝積経』に説かれている、と結んでいる。ちなみにチベットでの宝積部は漢訳の『大宝積経』全49会に相当し、『阿弥陀経』は宝積部に含まれないので、ここでの『宝積経』は第5会の『無量寿経』を指す。

作成者名：中御門敬教

sNang ba mtha' yas la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor　－bDe chen lam bzang－

書名の日本語訳：無量光に依ったグル・ヨーガ　－善き大楽の道－
著者名：'Jam dbyang mkhyen brtse Chos kyi blo gros
著者名よみ：ジャムヤンケンツェー・チューキロドゥ
著者名別名：'Jam dbyang mKhyen brtse'i dbang po
著者生没年：1820-1892
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.258）Manydzu gho ṣhas so /（マンジュ・ゴーシャによるものである。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.253-258、1994）
解説：著者は無宗派運動(Ris med)の指導者の一人り、弟子にジュ・ミーパム('Ju Mi phan. 1846-1912)、ドドゥプチェン3世ジクメー・テンペーニマ(rDo grub gsum pa 'Jigs med bstan nyi. 1865-1926)、コントゥル・ヨンテンギャンツォ(Kong sprul yon tan rgya mtsho.1813-1899)がある。

本著は、無量光仏の金剛のヨーガに依って、共通と特別の二種類の悉地を成就するためのものであり、奥書からすると、著者自身が文殊菩薩を成就して授けられたもののようである。グルヨーガは元来、密教の本尊瑜伽の一部であるが、必ずしも灌頂を受ける必要がないので、チベットでは密教の準備的修行として流行した。これは、本尊から代々伝えられてきた法を根拠とし、直接の恩師を本尊して生起させて、礼讃・供養し、彼が自己の身心に入って一体となることを観想する。それにより、日常の行住坐臥すべてを清浄な現れとし、本尊との関わりと自覚をもって生きるという修行法であり、尊格の扱いなどにニンマ派的な特徴が見られる。

まず帰依・発菩提心という前行の後、光明・金剛界・双入である極楽国土が、種種に荘厳されているのを観想する。その中央に持明者パドマサンバヴァ、蓮華と月輪の上の無量光仏とその姿、観自在と大勢至などの眷属、十方世界の仏・菩薩・声聞・独覚を、空と現れの双入として観想する。三要処の種字からの光により、妙観察智を持つ無死の無辺光仏をここに招く。上師に対して、礼拝・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向の七支供養をする。

無量光仏と無差別であり帰依処すべてを集約した上師に対して、摂取・加持・自利利他の成就を祈る。特に一心の信仰による寿命の成就においては、親近・祈願により仏の心から光が放たれて、それにより輪廻・涅槃の精髄を甘露として招き、それが自己と行者の頭頂の穴から注がれて、金剛の寿命を成就したと観想し、念誦に努める。

一座の終わりに四灌頂を受ける。まず一心の祈願から、無量光仏の三密が自己に溶け込み、障碍を浄め、灌頂・加持・悉地を得たと観想する。そして上師の光明の変化が自己と無差別であるとし、「不可説、無為で勝義の妙観察の者［無量光仏］の尊顔を見よ」と述べる。

最後に、これを実践するなら、今生に［最勝成就と共通成就の］二種の成就を得て、後で極楽国土に化生し、仏を供養し、聞法し、授記されるであろうといって、実践を勧めている。

作成者名：藤仲孝司

dPal ldan nye rgyud lugs kyi Tshe khrid zab mo'i zin bris　－'Chi med bcud len－

書名の日本語訳：具吉祥近伝流の寿命の甚深な導論の憶え書　－無死の摂生－
著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje
著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ
著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje
著者生没年：1781-1855
成立翻訳年：19c後半
写本等の存欠：活字本
刊本所在：Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Tha, vol.63, Tshe.1a-5b, pp.74-76
刊本の奥書刊記：（5b3）'di yang rtsa ba'i bla ma'i gsung ji lta ba bzhin zin bris su btab pa'o / / Zangs ri rab 'byams pa Dam chos bzang po / rJe drung Blo bzang 'phin las / rJe gYung mgon rdo rje / rJe sNang mdzad rdo rje / des bdag Dam tshig rdo la'o / / dpe mi 'khyar ched dag rtsom gras su bzhugs su gsol ba yin(sic.)・・・・rgya mtsho / ? gsung / / tshe dpal 'phal / / / /
（これも根本師の御言葉通り、憶え書としたものである。サンリラプ・チャムパ・ダムチューサンポ、ジェドゥン・ロサンティンレー、ジェ・ユンゴンドルジェ、ジェ・ナンゼードルジェ［の順に伝承されて］、彼が私ダムチク・ドルジェに［伝授した］。・・・・・・・吉祥なる寿命が増長しますように。）
参考文献：・田中公明『性と死の密教』（春秋社、1997）pp.155ff.
・平岡宏一『ゲルク派版　チベットの死者の書』（学習研究社、1994）
・静春樹「仏教タントリストの飲食による成就」(『高野山大学密教文化研究所紀要』17、2004)p.63ff.
解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジョッツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、

数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。

無量光仏に関する寿命の成就法であるが、冒頭に記されているように、「無上ヨーガタントラ」に分類される〈秘密集会タントラ〉に基づく行法であり、文殊師利からツォンカパに伝えられた新しい伝承である。副題にある「摂生（rasāyana）」とは、インド伝来の仙術や仙薬のことである。〈秘密集会タントラ〉の注釈類には、死ないし死の観想を通じて凡夫の身を仏の身に変容させる行法が説かれている。

本作は前行、正行、後の次第という三つから構成されている。

第一、前行（1b4-3b3）では以下のことが説かれる。早朝に起床し、沐浴ないし清掃を行い、西向きに坐る。虚空に自己の根本師ないしツォンカパないし勝者無量光を中心とした資糧田を観想し、彼らから光明が放射されるのを観想する。自己と母なる衆生が輪廻に苦しむさまを思惟して強い厭離と恐怖を起こし、自他を救護するために、その能力をもった三宝の功徳を念じて帰依する。利他のために非共通（特別）の『寿命の甚深な導論』を実践しようといって発心し、さらに四無量心を心相続に和合させる。次に大日七法で坐り、呼吸の観想を行う。すなわち息を出す時はあらゆる病魔罪障が出ていったと考え、息を吸う時は諸仏菩薩の加持と、寿命の持明者たちの徳が光明と甘露の形で入ってきて、行者自身に溶け込むと考える。

第二、本行（3b3-5a5）は以下のとおり。極楽世界の功徳荘厳を思念し、中央の菩提樹・蓮華座の上の月輪座に変化身の無量光仏が、無量の仏菩薩も囲繞されて座しておられるのを思念し、阿弥陀仏の身体的特徴を観想する。無死の寿命の持明を獲得するよう思念して真言を唱える。最後に召喚した阿弥陀仏と眷属が極楽世界へ戻ると思念する。

第三、後の次第－臨終行儀－（5a5-b5）では次のように説かれる。横死の兆しが現れたなら、無量寿仏を明らかに見て、死魔を滅し、無死の持明をすぐに得るべく、廻向・誓願を行う。自分に死期が迫ると何週間か結界をはる。寿命成就の行に専念する場合には、無量光仏を招いてから念誦を行う。結界を解いた後、無量光の眷属の仏菩薩たちが光に溶解して、青蓮華の茎へ、次に宝座へ、次に蓮華座に溶け込み、無量光仏自身が光に溶けて、行者の梵浄穴から入って溶け込むことにより、自分自身が無量光になったと信解し、廻向・誓願を行う。

作成者名：中御門敬教

'Phags pa bZang po spyod pa'i smon lam gyi rnam par bshad pa Kun tu bzang po'i dgongs pa gsal bar byed pa'i rgyan

著作翻訳の有無：蔵外

書名の日本語訳：『聖普賢行願』の釈論　－普賢の意趣を明らかにする荘厳－

著者名：lCang skya Rol pa'i rdo rje

著者名よみ：チャンキャ・ロルペードルジェ

著者名別名：Janggyia qutugtu, Ye shes bstan pa'i sGron med, lCang skya khutukhtu, lCang skya 2, lCang skya 3, 章嘉呼図克図, blobsan danjin tümi, Lalitavajra

著者生没年：1717-1786

刊本所在：lCang-skya-Khutukhtu・Rol-pa'i-rdo-rje'i bKa'-'bum, Kha

刊本の奥書刊記：(Lokesh Chandra ed.p.61)

'Phags bZang po spyod pa'i smon lam gyi rnam par bshad pa Kun tu bzang po'i dgongs pa gsal bar byed pa'i rgyan zhes bya ba 'di ni/ dPal ldan sMad rgyud pa'i dGe bshes Bla ma Zhabs drung Shes rab bstan dar gyis yang dang yang du bskul ba dang/ chos 'di la mos pa'i mchog dman du ma la phan par 'dod pa'i bsam pas kun nas bslangs te theg pa mchog g gsung rab la sbyangs pa cung zad byas par rloms pa'i lCang skya rol pa'i rdo rje dGe slong Ye shes bstan pa'i sGron meds sbyar ba'i yi ge pa ni dPyod ldan dGe tshul dGe legs nam mkhas bgyis pa'o// 'dis kyang bstan pa dang sems can thams can la phan thogs par gyur cig//

（『聖普賢行願』の釈論－普賢の意趣を明らかにする荘厳－』というこれは、ペルデン・メギュ〔僧院〕の博士(善知識)・侍従シェーラブ・テンダルがたびたび勧めたのと、この法について信解する優劣の多くの者に益したいとの思いにより動機づけられて、最上乗の聖教への修学を少ししたと自負するチャンキャ・ロルペードルジェ・イェシェーテンペードンメが著作した〔。その〕筆記者は、伺察を具えた沙弥ゲレク・ナムケーが行った。これによってまた教えと有情すべてに益するように！）

活字本所載書：Lokesh Chandra.,Lcaṅ-skya Khutukhtu Lalitavajra's Commentary on the Samantabhadracryāpraṇidhānarāja(Namgyal Institute of Tibetolog, Gangtok, Sikkim, 1963)

参考文献：井ノ口泰淳『中央アジアの言語と仏教』（法蔵館、1995）、中御門敬教「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究（1）　－陳那、釈友、智軍の〈普賢行願讃〉理解　七支供養の章（1-7章）－」（『浄土宗学研究』32、2006年）、同「(2)」(同34, 2008)、同「(3)」(同35, 2009)、、同「(4)」(同36, 2010)、中御門敬教「往生後論攷」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』、山喜房仏書林、2004）、中御門敬教「普賢十大願、浄土思想、科文を介した＜普賢行願讃＞理解－『四十華厳』巻四十を参照して－」（『浄土宗学研究』30、2004）

解説：チャンキャは、ゲルク派に属し、内モンゴル最大の活仏であった。著者は青海に生まれ、コンチョック・テンペー・ドンメにより活仏に認定され、北京で育てられた。師にパンチェン・ロサンイェシェーやガワン・チャムパがいる。ゴンルン・チャムパリンに住持し、トゥカン・ラマの後、全モンゴルの教化を担う掌印大ラマに任命された。満・漢・蒙の三カ国語に通じて、乾隆帝の時代の清朝やダライラマ7世のチベットとの交流に活躍し、モンゴル語大蔵経カンギュルの翻訳と開版、満州語大蔵経カンギュルの翻訳を監督した。北京のチベット仏教諸寺院を建立した。教学の理解も深く7巻の著作を遺したが、特に『学説規定』は高く評価されている。弟子にコンチョック・ジクメー・ワンポ、ロサン・チューキニマ、ケルサン・トゥプテン・ジクメー・ギャムツォなどがいる。

『ガンダヴューハ』(『華厳経入法界品』)は菩提心と菩薩行を説くものとしてインド以来有名であるが、その末尾にあり、まとめにもなっている『普賢行願讃』は、不空訳『普賢菩薩行願讃』(大正蔵10,No.297)の奥書が伝え、アティシャ、ツォンカパなども教えているように、インドからチベットまで七支供養のためしばしば読誦された。そのvs.57-60には、極楽世界に往生し、智慧・慈悲に基づく普賢行により有情を済度することが説かれる。『同讃』にはインド撰述とされる註釈も4本がチベット訳に伝わり、チベットでも幾つか註釈書、関連儀軌書、語釈書が著されたが、中でも本著は、主流のゲルク派の有力な学者の著作ということもあって、有名である。

本著は、『経』(入法界品)の善財童子が文殊の指導から諸善知識を順次訪ねて弥勒に至り、普賢のマンダラを円満し、仏の境界を覚るという求法の旅の内容一つずつを因縁分(ニダーナ)として提示すること、次にインドの4註釈、チベットのイェシェデの註釈の傾向を紹介することが特徴である。

具体的には、冒頭に、『行願讃』は仏の契経とインド、チベットの学者、行者の論書においてあらゆる誓願のなかで所詮内容が甚深、広大で円満であるから「誓願王」とされることを述べる(末尾近くには仏説なので加持が大きく菩薩の誓願すべてがここに収まるので利益が大きいことにも言及する)。次にインド以来の通則として示すべき著作の目的(必要性)と関係について、諸菩薩の海のような功徳と行が所詮の内容、それらを意の対境とし誓願することによる大乗種姓の増長と、習気の確立、利徳の現証が目的(必要性)、究竟の利徳である大正覚の現証が、最終目的であり、最終目的は目的に、目的は所詮内容に掛かっているのが、本著の関係であるが、それらはインドの諸註釈に出ていないという。

本文の解説としては、まず因縁分としての善財童子の旅を述べ、先行註釈の説明の仕方については、ディグナーガ釈が七支供養に廻向の区別と廻向の辺際とその利徳という十義とその細分を立てたのに従い、『行願讃』本文を引いて概説し、これとナーガールジュナ釈とされるものは同様に見えるという。シャーキャミトラ釈は、誓願の方便、信解行地の誓願、増上意楽地の誓願、果、誓願の利徳、誓願本文を唱えるだけの利徳という六項目を立てるとし、『行願讃』本文により示してから、細分は上記二つとほぼ同じであり、ギェンサンポ釈も同様であるという。チベット撰述は或る註釈(おそらくイェシェデ釈)以外は逐語釈程度とし、ターラナータ(チョナン派)とトプバル・ウセルワ(未確認。14-15cのカギュ派か)の釈は少し大きいが、前者はほぼ高い地のみに適用して他の本文との不一致が多いし、後者はシャーキャミトラに従うが、十地と十波羅蜜への適用には大典籍との不一致が多いと論評する。

次に自らの解釈として、1）誓願が成就する因〔である〕集積・浄化すべき実践の次第、2）菩薩の誓願の次第を実践することそのもの、3）誓願を作意したことの利徳、4）本文を唱えたことなどの利徳、という四項目を立てて説明する。第一では七支供養を通じて、第二では、信解行地の実践、聖者菩薩地の実践、果が成就する基準という三項目を通じて説明し、全誓願のまとめとされる『十地経』の十大願にも結びつける。第三の誓願作意の利徳は、現法と後世の二項目で説明する。第四の本文唱誦などの利徳は五項目で説明するが、その第五の「授記の獲得と有情利益の成就」の個所に、無量光仏の悲と誓願より成就したマンダラである浄土に蓮華より化生し見仏し授記されること、刹那に無数の国土に自身を化作して利他することを述べている。

作成者名：藤仲孝司

'Pho khrid　－dPa' bo g-yul 'jug gi lhan thabs zin bris－

書名の日本語訳：寿命の導き　－［パンチェンラマ1世著］「勇者が戦争に入ること」への補遺備忘録－
著者名：Dharmabhadra
著者名よみ：ダルマバドラ
著者名別名：dNgul chu Dharmabhadra, Bla ma chos bzang mchog
著者生没年：1772-1851
成立翻訳年：18c末-19c前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.6306 Kha.1a-4a6
・dNgul chu Dha rma bha dra'i gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.76 Kha 'pho-khrid 1a-4a6
刊本の奥書刊記：（4a6）'di yang 'gro ba mang po la phan phyir/ bTsun pa Blo bzang chos kyi rgyal mtshan gyis smras pa'o/ /lhan thabs kyi zin bris 'di dge slong Dha rma bha dras bris / /
（これもまた多くの衆生を益するために、尊者ロサン・チューキギェルツェンが述べられた。この補遺備忘録は比丘ダルマバドラが記した。）
解説：著者はゲルク派の学者であり、タシキル寺に学び、西チベットのヌルチュ寺(ギャルセートクメーサンポの寺)に住持した。その法嗣に弟子で甥のヤンチェン・ドッペードルジェ（dByangs can grub pa'i djo rje.1809-1887）がいる。顕密にわたって数多くの著作を遺したが、ニンマの法についても幾らか著作している。

本著は、パンチェンラマ1世（ロサン・チューキギェルツェン. 1567-1662）著述の『世尊無量光に依る遷移（ポワ）の略法』（cf. 東北No.5896 bCom ldan 'das 'od dpag med la brten pa'i 'pho ba bsdus pa）に説かれる遷移（ポワ）の教説を簡略にまとめて、実践しやすくしたものであり、同著作より引用しながら補足した備忘録でもある。この行法は、罪人を強制的に成仏させ、修行しなかった者が成仏する方法であり、無上ヨーガの心髄をまとめたものとされている。東北大学蔵外目録によると、『一切智者プトンに依るラマ瑜伽と遷移（ポワ）の略法』（cf. 東北No.5898 Thams cad mkhyen pa bya ston chos rje la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor dang 'pho ba bsdus pa）、『勝者弥勒に依る遷移（ポワ）－ある善なるもの－』（cf. 東北No.5961 rGyal ba byams pa la brten pa'i 'pho ba　－legs pa cig－）の著作への補遺備忘録とともに収録されている。パンチェンの著作の後世への影響力が良く知られる著作の一つである。シャーンティデーヴァやカダム派の教えによると、真の勇者(英雄)は内の煩悩と戦って勝つものとされているが、本著は副題の「勇者が戦争に入ることの補遺備忘録」について解説がパンチェンラマの著作に倣っていたり、末尾にもこのマンダラはロサン・チューキゲルツェンが述べたと言うように、その著作を承けている。

具体的には、座を準備し、無量寿仏像を安置し、水など用具を具えて、西向きに座り、有情を済度するために成仏することを動機とし、面前に宝座と蓮華月輪上に無量光仏を観想し、三宝に帰依する。三宝から甘露が流れて、自他に溶け込み、罪障を浄め、寿命と福徳、法の功徳が増大する。発心し、帰依処が光に溶けて、自己が無量寿となったことを観想する。極楽から無量光仏を招き、それが自己の頭にとどまる。七支供養とマンダラ供養を行う。自身の中央脈管を観想し、自心の精滴が頭頂から出て仏の心臓に至り、戻って心臓に溶ける。現世の執着を断って真実の三宝に帰依し、死や悪趣の恐れから救済されて直ちに極楽に引導されるよう祈願し、仏の心から光の鈎が放たれて自己の心に溶けるのを観想する。最後に浄らかな誓願をもって結生するように説く。

作成者名：中御門敬教

'Pho ba

書名の日本語訳：遷移（ポワ）
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.1856-3,

Folios46b4-47b3
刊本の奥書刊記：（47b1）'di yang Khal kha＋ba thu＋＋gi shog dge slong E ma chi u la rtse＋blo bzang bsam btan dang ja sa ge rnam rgyal rdo rje'i shog slob ma dge slong e ma chi u ran＋li＋＋＋chos 'phel gnyis kyis bskul ngor Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyags las rnam rgyal dpal bzang pos sbyar ba'o / /
（これもまた、ハルハ＋＋＋部の比丘であるエマチウ＋＋＋ロサンサムテンと＋＋＋＋の弟子である＋＋比丘のエマチウ＋＋チョーペルの二人が勧請したのにちなんで、シャーキャの比丘であるロサンペルデンテンペーニマ・チョクレナンギェルペルサンポが著述した。）
解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。
　同著者の『有縁の教化対象者たちが根本師と無区別になって祈願する作法』(Ref.No.1856-2)の記述を承けた上でポワ（遷移）の行い方を簡略に述べた著作である。前著では阿弥陀仏一尊一瓶の成就法として阿弥陀仏の観想、祈願が簡単に説かれたが、この部分ではポワ（遷移）の儀礼が簡単に説かれる。本著も読誦の部分が大きく、注意書きの箇所は小さく記入されているが、全体的にテキストの状態が悪く、読解困難な箇所が多い。
　まず行者自身の身体の脈管、心臓などを観想する。次に、根本師と無差別な主である無量光仏を極楽浄土から召喚して、自己の頭頂に明確に観想する。その仏に対して敬礼・供養・帰依し、自己が今こそ極楽世界に導かれるよう祈願する。次に極楽往生への強い願望をもって、無量光仏の赤い光が鈎の形になったのを観想し、「ヒック」と唱えて行者の心臓の滴を喉、頭頂へ引き上げ、それが無量光仏の蓮華座に近づき、最終的にその仏の心臓に溶け込んだことを信解する。最後に、極楽往生するには師の口訣通りに実践すること、正しい善知識に対して思惟と行動の2つの点から正しく親近し、八難を離れた有暇の身において仏道の精髄を得ることが必要であると一般的な教訓が説かれている。
作成者名：中御門敬教

'Pho ba　－Ma bsgoms sangs rgyas－

書名の日本語訳：遷移－　修習していない者の成仏
著者名：'Jigs med gling pa
著者名よみ：ジクメーリンパ
著者名別名：Kun mkhyen 'Jigs med gling pa、mKhyen brtse 'od zer、Rang byung rdo rje mKhyen brtse 'od zer、Paḍma dbang che
著者生没年：1729 / 1730－1798
成立翻訳年：18c.
成立地：チベット
所収文献名：Klong chen snying gi thig le(『大界の精髄の滴』)
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0103, Folios 1a1-2b5
・'Jigs gling gsung 'bum Vol.36. 525-534
刊本の奥書刊記：（刊記なし）
参考文献：・田中公明『チベット密教・成就の秘法』（大法輪閣、2001）pp.141-144
・ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯　－チベット密教の瞑想修行－』、平河出版社、1986年、p.280ff.
解説：著者は、ニンマ派教義の大成者ロンチェンパ（1308-1363）を幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティクの体系を継承した。古刹ミンドゥルリン所蔵の『古派タントラ集』を整理し、ニンマの復興を目指した。1762年には Tshe ring ljongs paḍma 'od gsal theg mchog gling を建立した。弟子にジクメー・ティンレー・ウセル（'Jigs med 'phrin las 'od zer 1745-1821、rDo grub chen1世）やクンサン・シャンペン(Kun bzang gzhan phan)がいる。この系統では、ジュ・ミパム(1846-1912)、ジクメー・テンペーニマ(1865-1926、rDo grub chen3世)などリメー（無宗派運動）で活躍した人が多く、著者自身も含めて阿弥陀仏や極楽往生に関する著作を幾つも著わしている。
　本作も『大界の精髄の滴』（Klong chen snying gi thig le）に出ているニンマ派の大究竟（rdzogs chen）に所属する文献であり、生前に修行しなかった凡夫が死去の折に成仏する枢要の教えとされている。
　帰依・発心・四無量という共通の前行の後、本行として身体に中央脈管と精滴と種字を観想し、生理的なヨーガを実習する。そのなかで頭頂に無量光仏を明確に観想する。次に自身の識を引き出して、その仏の心臓に溶け込ませる。今度は無量光仏が光となって、行者自身に溶け込み、自己が無量寿になる。祈願においては、有頂天の虹の幕内に根本師が無量光仏として住すると観想し、信・敬・願楽をもって遷移の修習を行い、有頂天に往き、仏地を得るよう加持されることを祈願する。
作成者名：藤仲孝司

'Pho ba'i skor rnams

書名の日本語訳：遷移の法類
著者名：Paṇ chen gsum pa Blo bzang dpal ldan ye shes
著者名よみ：パンチェン3世ロサン・ペルデン・イェシェー
著者名別名：Blo bzang dpal ldan ye shes、Shākya'i dge slong Blo bzang dpal ldan ye shes、Blo bzang dpal ldan bstan pa'i ye shes dpal bzang po
著者生没年：1738 -1780
成立翻訳年：18c後半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No.1393, Folios Cha Pho-ba 1a1-3a3
刊本の奥書刊記：（3a2-3）'di ni so? nya? la? Grags pa bshad sgrub kyis 'di lta bu zhig dgos zhes bskul ngor Shākya'i dge slong Blo bzang dpal ldan ye shes kyis sbyar ba'o//
（こ［の本文］は？？？タクパシェードゥプが「このようなものが必要です」と勧めたのにちなんで、シャーキャの比丘ロサン・ペルデン・イェシェーが著作しました）
　なお冒頭直後割注（cf.1b2）には、次のような奥書に類する記述がある。
'di ni pha mtha' skye Blo bzang dpal ldan 'od gyis 'di lta bu zhig dgos zhes bskul ba ltar Shākya'i dge slong Blo bzang dpal ldan ye shes kyis sbyar ba'o / /
（この［割注］は辺境の人ロサンペルデンオが「このようなものが必要です」と勧めたように、シャーキャの比丘ロサン・ペルデン・イェシェーが著作しました）
解説：著者は、パンチェンラマ3世（追贈を含めた場合、6世）としてタシルンポの座主を務めた。師にはガワン・チャムパ(Ngag dbang byams pa.1682-1762)やダライラマ7世ケルサン・ギャムツォ(sKal bzang rgya mtsho. 1708-1757)などがある。本著は、死去を想定して準備し、死去したとき直後に極楽往生することを目的とする行法を、簡潔にまとめたものである。

帰依・発心・四無量といった前行の後で、自己の頭上に無量光仏を観想し、極楽浄土から智慧薩埵を招き、一体となる。次に七支供養、マンダラ供養を行って、極楽往生を祈願する。自己の身体の脈管、心臓中の識を観想し、それが出て、無量光仏の心臓に遷移することを信楽する。無量光仏に礼拝・帰依し、直ちに極楽往生を願う言葉を百・千・万・十万と唱えて、仏の心臓から光の鈎が出て自己の頭頂に入り、心臓に至ること、無量光仏の鉢の甘露が流れて身体を満たすことを観想し、長短のダラニを唱える。そして、大慈悲の蔵である無量光仏に加持・成就を祈願する。特に臨終に無量光仏が眷属とともに来迎され、極楽浄土に引導して頂き、蓮華から化生し、仏の長子となり、徳を証し、大乗の法を説き、衆生を済度し、成仏することを願う祈願文を唱える。そして、常に頭上の仏を観想し、臨終時に疑いなく遷移しよう、という。

作成者名：藤仲孝司

'Pho ba'i gdams pa

書名の日本語訳：遷移（ポワ）の教誡
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.1852-3, Folios36b2-37b3
刊本の奥書刊記：（37b1）'Chi bdag gshin rje'i 'jigs mun 'tshub na yang / / 'pho ba'i man ngag 'od zer 'bum phrag 'phro / / btsan thabs 'chang rgya'i man ngag zab mo 'di / / skal ldan bsod nams can gyi zab chos yin / /zhes rgyun khyer nyams len 'pho ba dang bcas pa 'di lta bu zhig dgos zhes / yog? rtsa? ri bla ma'i sprul sku Blo bzang bstan 'dzin rnam rgyal gyi＋＋＋bsam chen pos bskul ＋＋＋/ Shā kya'i dge slong blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos Nor gling skyed tshal du sbyar ba'o / /
（「死王［閻魔］の恐れ「である、不吉な」暗闇が募ったとしても、遷移（ポワ）の口訣は十万の光明を放つ。この強力な成仏の深い口訣は、縁を具えた福徳を具えた深い法である」といって、「こうした遷移（ポワ）を具えた伝承を携帯した実践？が必要である」と＋＋＋ラマの活化であるロサンテンジンナンギャル＋＋＋サムチェンポがお願い＋＋＋　、シャーキャの比丘であるロサンペルデンテンペーニマ・チョクレナンギェルペルサンポがノル寺の花園において著述した。）
参考文献：・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』　（「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）
解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。

「'pho ba」（ポワ）とは直接的には、死亡による転移、すなわち生存を移すこと、転生を意味する。本来は後期密教の主要な行法の一つであり、インドのヴィクラマシーラ寺のナーローパ（10c.ca.）が、密教行者のティローパから授けられた。死者の身体から識を抜き出し、浄土へ遷移させる一連の高度な行法である。生前中に死去に備えて実践し、臨終のときに実現できるようにする臨終行儀ともなる。チベットにおいては、通常の極楽往生とも関連づけて多くの著述が行われた。本著もこうした行法を簡潔に要約したものである。

先ず極楽世界から根本ラマと無区別の無量光仏を召喚し、行者自身の頭頂にある自身の極楽国土に導き、無量光仏は変化身として歓喜なさっているのを観想する。それ以降はテキストの状態が悪く読解困難であるが（cf. 37b3-7）、召喚をした無量光仏を主尊とする脈管修習に対する記述や、生理的瑜伽の実践、敬礼や供養や帰依といった諸要素が読みとれる。その後も読解困難であるが、生起次第の後には、無量光仏の光明を行者の身体に招き入れ、行者の身体各処における治浄が繰り返し説かれる。その結果として行者は成就を果たし、無量光仏の本地である極楽世界へ往生する、ということが説かれているようである。

作成者名：中御門敬教

Bya rgyud pad ma'i rigs kyi gtso bo mGon po Tshe dpag med kyi sgrub thabs smyung bar gnas pa'i cho ga dang bcas pa　－Rin po che'i phreng ba－

書名の日本語訳：所作タントラの蓮華族の正尊無量寿主の成就法および断食の作法 － 宝鬘
著者名：Ye shes rgyal mtshan
著者名よみ：イェシェー・ギェルツェン
著者名別名：Yongs 'dzin paṇḍita
著者生没年：1713-1793
成立翻訳年：18c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.6023［ Tha 1-23］
刊本の奥書刊記：（23a4）
'di ni skyes rabs du mar 'Jam mgon bla ma'i bstan pa la bya ba rgya chen po mdzad pa rTa chog Ba so rje drung Hu thog thu Blo bzang ye shes bstan pa'i mgon pas / mGon po Tshe dpag med kyi sgrub thabs smyung gnas kyi cho ga dang bcas pa'ang Ma mgon bstan pa'i srog shing rJe lCang skya rin po che'i zhabs brtan tu dmigs nas btsugs chog pa sbyor dngos rje gsum tshang ba lag tu blang bde pa zhig gsar bris dgos zhes bskul ba la brten / bla ma dam pa rnams kyi zhabs rdul spyi bo'i rgyan du 'dzin pa rGyal khams pa dGe slong ?Ye shes rgyal mtshan gyis Pho brang chen po Po ta la'i gzim chung bde ba can du sbyar ba'o//
（本書は、多くの宿世に文殊主（ツォンカパ）師の教えに対して広大な仕事をなさったタチョク・パソ御前［すなわち］フトクト・ロサン・イェシェー・テンパーゴンパが、主無量寿［仏］の成就法および断食の作法［の著作の経緯］も、閻魔母であり教えの主柱である尊者チャンキャ・リンポチェの慶賀安泰を目指して建立するに相応しいもの － 加行・本行・後［行］との三つが揃った実践しやすいもの － を新たに書くことが必要であると勧められたのに依って、勝れた諸師の御足の塵を頭頂の荘厳として受持する、遊行者、比丘イェシェー・ギェルツェンが、大宮殿ポタラの居室デワチャンにおいて著作した。）
解説：著者はツァン・トに生まれたゲルク派の学僧である。パンチェン2世ロサン・イェシェー（1663-1737）のもとで出家、受戒し、タシルンポ寺などに学び、学者・行者として大きな尊敬を受けた。ポタラ宮に招かれてダライラマ8

世ジャムペル・ギャムツォの師僧（Yongs 'dzin)となり、学識者(Paṇḍita）の称号を得た。顕密にわたって多くの著作を遺した。

ジターリの無量寿仏に関する3つの典籍を承けた無量寿九尊の儀軌である。題名は、真言の典拠『鼓音声ダラニ』『無量寿宗要経』が、いわゆる四部タントラのうちで所作タントラに分類され、無量寿仏が五部族の中で蓮華族の正尊に分類されることに、由来する。本文中の何か所かに修法の規定は「所作タントラの所説のとおりに為す」とあり、これらは所作タントラ一般の規定を指すと思われる。また本書には成就法文献としては整理された科文が与えられている。

本文中に、ツォンカパ著『無量寿讃』や『菩提道次第』や同論に引用される懺悔・供養・誓願に言及するなど、ゲルク派の特徴が明らかである。5b2 以下の供養には、無量寿仏、文殊、ツォンカパ以下、ゲルク派の人名が列挙されるが、ロサン・イェシェー（筆者の受戒の師）までは同派の「菩提道次第」の伝承の師である。また5b3-4 に無量寿仏を「善逝宝蔵のもとで発心し・・・極楽国土にて成仏した」というのは『悲華経』に依る。6a5-b2 に文殊、金剛手、観自在など通常の八大菩薩に帰命する。18a5-6 に四如来に帰命するのは、『救護餓鬼焔口ダラニ』（P No.356; 大正 21 No.1313）に依る（「甘露王如来」を加えた五如来は日本の施餓鬼に登場する）。奥書のチャンキャは、高名な学者であり、清朝との関係で活躍し、モンゴル大蔵経を改訂した 2世ロルペードルジェ（Rol pa'i rdo rje. 1717-1786）であろう。

作成者名：藤仲孝司

Bla ma dang mgon po tshe dpag med dbyer med du byas nas gsol ba 'debs pa'i tshul　－dGongs grub mchog sbyin－

書名の日本語訳：ラマと教主無量寿を無区別にして祈願する瑜伽行作法　－最高悉地の施与－

著者名：Blo bzang bsKal bzang rgya mtsho

著者名よみ：ロサン・ケルサンギャンツォ

著者名別名：Blo bzang rgya mtsho、Dalai Lama 7

著者生没年：1708-1757

成立翻訳年：18c.

成立地：チベット

所収文献名：Yon tan kun gyi gzhi rten bla ma'i rnal 'byor gyi rim pa phyogs gcig tu bkod pa　－dNgos grub bdud rtsi'i char 'phebs－（ラサ版　東北No. 5829）

写本等の存欠：刊本

刊本所在：The Collected Works (Gsung 'bum) of the Seventh Dalai Lama Blo-bzang-bskal-bzang-rgya-mtsho Reproduced from a set of prints from the 1945 'Bras-spungs blocks from the library of the Ven. Dhardo Rimpoche by Lama Dodrup Sangye　Gangtok

・ラサ版　東北No. 5829 (27)　Kha. 79a4-82b1

・The Collected Works (gSung 'bum) of the Seventh Dalai Lama 216, 3［81b3］-222, 1［84b1］

・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No. 1102, Folios 79a4-82a1（ラサ版と同内容の別版である。右端に漢数字も記入されている。）

刊本の奥書刊記：1.（未調査）

2. （221, 6［84a6］）da ltar tshig dang dmigs pa bstun nas bsgoms pa'i rjes su bsngo ba dang snon lam shis ba brjod pas legs par brgyan par bya'o / zhes bla ma dang mgon po tshe dpag med ngo bo dbyed med du byas nas gsol ba 'debs pa'i rnal 'byor bya tshul dNgos grub mchog sbyin zhes bya ba 'di ni / bKra shis lhun po nas phyag mdzod kyi gsol dpon rje drung Blo bzang Phun tshogs kyis dgos zhes bskul ngor Shā skya'i dge slong Blo bzang bsKal bzang rgya mtshos sbyar ba'o / /

（今、［この成就法の］言葉と［修習の内容である］対象を一致させてから、修習の後で［その功徳を］廻向して、吉祥な誓願を唱えることによって、良く荘厳すべきであるといって、ラマと教主無量寿の本質を無区別としてから祈願する瑜伽行のやり方である『最上利験施与』というこれは、タシ・ルンポ（bKra shis lhun po）の管理財産人の司膳である傑仲＊ローサン・プンツォク（Blo bzang Phun tshogs）が「必要です」とお願いした折、シャーキャ族の比丘ローサン・ケルサン・ギャンツォ（Blo bzang bskal bzang rgya mtsho）が著述した。）

【傑仲】大貴族の子弟が出家後に受ける尊称。cf. 『蔵漢大辞典』p.910a

参考文献：・Life of the Seventh Dalai Lama, From the Lam-rim-bla-brgyud byTse-chok-ling、Translated and prepared at the LTWA by Glenn H. Mullin with Losang Dawa and Losang N. Tsonawa、The Tibet Journal, 8-1, Spring1983.

・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）

・藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）

解説：著者は、モンゴル、清朝（康熙帝、雍正帝の時代）との度重なる紛争、介入の時代にあって、政治的に紛争の調停者として活躍しただけでなく、僧侶としても学問、著作、教育、大蔵経の改修、改版、寺院の興隆などに勝れた業績を残した。ジュンガル部と、ハルハ部と清の抗争、侵攻より、遊蕩に耽ったダライラマ6世が退位、連行される途中で死去した後、生まれ変わりに認定され、1720年即位したが、後に内紛が起こり、地方に謹慎させられた。しかし、清との争いを調停して、1751年にダライラマ政権を復活させた。パンチェンラマ3世ペルデン・イェシェーの師匠ともなった。

本著は、行者自身の師と無量寿仏を同一視して罪悪を浄め福徳を積み、祈願を行うグル・ヨーガの方法を、簡略に記したものである。密教的な儀軌（成就法）と大乗一般的な教理を併せ持っている。世間的な目的（寿命の長寿等）や出世間的な目的の達成も目指している。

具体的には、阿弥陀仏を観想し、真言や種字を瞑想することによって光明が生じ、頭頂からその光明が溶け込み、心臓に確立され、その働きによって自身が浄化され、灌頂や加持が獲得されるとある。また、臨終時に特に無量寿仏に見え、信仰を確立し、極楽往生することも祈願されている。

作成者名：中御門敬教

Ma gcig grub pa'i rgyal mo lugs kyi tshe dbang bka' bsgo bya tshul　－dNgos grub kun 'byung－

書名の日本語訳：ダーキニー・シッディラージャ(マチク)流の寿命灌頂と教令の作法　－悉地（成就）総生－

著者名：Ye shes rgyal mtshan

著者名よみ：イェシェーギェルツェン

著者生没年：1713-1793

成立翻訳年：18c.

成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.6028［ Tha 1-8a6］
刊本の奥書刊記：なし
解説：著者はツァン・トに生まれたゲルク派の学僧である。パンチェン2世ロサン・イェシェー（1663-1737）のもとで出家、受戒し、タシルンポ寺などに学び、学者・行者として大きな尊敬を受けた。ポタラ宮に招かれてダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォの師僧（Yongs 'dzin)となり、学識者(Paṇḍita）の称号を得た。顕密にわたって多くの著作を遺した。

本著は、ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の一尊一瓶の阿弥陀仏成就法に関する著作である。刊本の写りが悪く、読解不可能な個所がいくつもあるので不完全であるが（より正確な読解のためには先行する関連典籍、たとえばダライラマ２世の「不死なる寿命の成就」などが参照されるべきである）。また、多くの個所で師の後に随って唱える文句、信解すべきこと、散華することなどの指示が見られ、一定の弟子衆を率いて儀軌を進行させるための注意が払われている。

なお題名の訳し方は東北目録を参照したが、「教令」と訳した bka' bsgo（Skt. ājnyā）には多少問題がある。「教令」は、一般的にシナ・日本の密教において、仏の堅固な教勅により、度しがたい諸々の怨敵を打ち破ることをいい、忿怒相の明王の姿で現される。他方、チベット語の bka' bsgo は、障碍をなす魔鬼を退散させる命令をいう。本著作にもわずかに弟子の頭上に護法神を観想する事項は見られるが、それが「教令」と一致するのかどうかは、明確ではない。
作成者名：藤仲孝司

Ma gcig grub pa'i rgyal mo lugs kyi tshe dpag med la brten nas brtan bzhugs 'bul tshul gyi cho ga　－bsGrigs sra mkhregs rdo rje'i srog shing－

書名の日本語訳：ダーキニー・シッディラージャ（マチク）流の無量寿に依って久住を献上する手段の儀軌　－堅固な金剛の主軸－
書名別名：Tshe dpag med la brten nas brtan bzhugs 'bul tshul gyi cho ga
－bsGrigs sra mkhregs rdo rje'i srog shing－
（東北目録では「ma gcig grub pa'i rgyal mo lugs kyi 」を除いた形で書名が付けられている。しかしこれはあくまで、目録上の記載である）
著者名：Blo bzang bsKal bzang rgya mtsho
著者名よみ：ロサン・ケルサンギャンツォ
著者名別名：Blo bzang rgya mtsho、Dalai Lama 7
著者生没年：1708-1757
成立翻訳年：18c.
成立地：チベット
所収文献名：rGyud sde nas gsungs pa'i lha tshogs du ma'i sgrub thabs kyi rim pa phyogs gcig tu bkod pa　－Phan bde'i 'dod rgu ster ba yongs 'du'i 'khri shing－（ラサ版　東北No. 5853）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：The Collected Works (Gsung 'bum) of the Seventh Dalai Lama Blo-bzang-bskal-bzang-rgya-mtsho Reproduced from a set of prints from the 1945 'Bras-spungs blocks from the library of the Ven. Dhardo Rimpoche by Lama Dodrup Sangye　Gangtok
・ラサ版　東北No. 5853 (9) Nga. 35b1-41a5
2. The Collected Works (Gsung 'bum) of the Seventh Dalai Lama 72, 4［36b4］-85, 5［43a5］
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No. 1136, Folios 35b1-41a5（ラサ版と同内容の別版である。右端に漢数字も記入されている。）
刊本の奥書刊記：1.（未調査）
2. （85, 3［43a3]）'di ni drung yig Tshangs skyes Blo ldan dang / phu bo rTseg nyer Blo bzang dngos grub spun gyis mchod yon la ring 'tsho'i rten 'byung bsgrig 'dun skabs / Tshe dpag med kyi rigs shig la brten pa'i zhabs brtan 'bul chog gsar sgrigs shig byung na legs tshul srid skyong sde par zhus 'dug don ltar / grub rgyal lugs dang 'brel par / kun mkhyen lnga bas stsal ba'i sgrol dkar gyi brtan bzhugs chos bsgrigs dang / deng sang phyag len rgyun gyi yi ge sogs la gzhi byas te 'gal med khyer bde ba'i lugs su Shā kya'i dge slong sNyoms las mKhan blo bzang bskal bzang rgya mtshos Pho brang Ri bo gru 'dzin du sbyar ba'i yi ge pa ni Zhwa lu mKhan po Ngag dbang yon tan 'byung gnas so / /
（この［著作］は、司書のツァンキェ・ロデン（Tshangs skyes Blo ldan）と、兄であるツェクニェル・ロサングドゥプ（rTseg nyer Blo bzang dngos grub）の兄弟が、施主と福田に、長寿縁起の規定を希求した折、「無量寿一族を拠り所とした祈福禳災奉献儀軌を新たに規定して下さい」といって、良い方法を地方筆頭役人に尋ねると、［マチク・］ドゥプペー・ギェルモ流のやり方と関係するよう、五仏がお与えになった白度母（密教の長寿本尊の一つ）の久住法の規定と、今日とり行われ流布している［典籍の］文字等を基本として、［人々が］矛盾なく受け取り、簡単なやり方として、シャーキャ族の比丘ニョンレーケン・ロサン・ケルサン・ギャンツォ（Shāya'i dge slong sNyoms las mKhan blo bzang bskal bzang rgya mtsho）が、王宮の普陀山で著述［しました。その典籍を］筆受した者は、シャルゥの和尚ガクワン・ユンテン・ジュンネー（Zhwa lu mKhan po nGag dbang yon tan 'byung gnas）です）
参考文献：・小野田俊蔵「チベット撰述の浄土教仏典」（『仏教大学大学院研究紀要』7、1979）
・Life of the Seventh Dalai Lama, From the Lam-rim-bla-brgyud by Tse-chok-ling、Translated and prepared at the LTWA by Glenn H. Mullin with Losang Dawa and Losang N. Tsonawa、The Tibet Journal vol.8-1, Spring 1983
・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
・藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：著者は、モンゴル、清朝（康熙帝、雍正帝の時代）との度重なる紛争、介入の時代にあって、政治的に紛争の調停者として活躍しただけでなく、僧侶としても学問、著作、教育、大蔵経の改修、改版、寺院の興隆などに勝れた業績を残した。ジュンガル部と、ハルハ部と清の抗争、侵攻より、遊蕩に耽ったダライラマ6世が退位、連行される途中で死去した後、生まれ変わりに認定され、1720年即位したが、後に内紛が起こり、地方に謹慎させられた。しかし、清との争いを調停して、1751年にダライラマ政権を復活させた。パンチェンラマ3世ペルデン・イェシェーの師匠ともなった。

本書もまた『タントラ部所説の諸天衆の成就法を一部に提示したもの － 益楽の願いすべてを与える集成の藤樹－』に収録された成就法の一つである。

内容としては、阿弥陀仏に関するダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流成就法の過去の伝承者たちを面前に招いて、病魔罪障を浄化し、寿命福徳の増大を祈願する等の通仏教的な祈願を中心とする。マチクによる阿弥陀仏成就法は、無上ヨーガタントラに分類され、後期インド密教の特徴が目立つ。しかし、当典籍ではマチク流を標榜しつつも、それらの特徴には全く触れていなくて、より日常的な信仰や実践にふさわしいものとなっている。召喚された伝承者の系譜の中には、ミラレパ（1040-1123）、彼の弟子レチュン・ドルジェ・タクパ（1083-1161）等のカギュー派、サキャ・パンディタ（1182-1251）等のサキャ派、ダライラマ2世（1475/6-1542）、レプン寺管長／ガンデンティパを歴任したパンチェン・ソナム・タクパ（1478-1554）、ダライラマ5世（1617-1682）等のゲルク派と、各宗派の伝承が挙げられている。
作成者名：中御門敬教

Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs kyi tshe mtha' yas pa'i sgrub pa la brten rang gzhan gyi tshe spel ba dang / de'i slad du ril sgrub ji ltar bya ba

書名の日本語訳：ダーキニー・シッディラージーャ（マチク）流の、無量寿の成就による自他の寿命と、そのために寿命丸の成就をいかにすべきか
著者名：Paṇ chen gsum pa Blo bzang dpal ldan ye shes
著者名よみ：パンチェン3世ロサン・ペルデン・イェシェー
著者名別名：Blo bzang dpal ldan ye shes、Shākya'i dge slong Blo bzang dpal ldan ye shes、Blo bzang dpal ldan bstan pa'i ye shes dpal bzang po
著者生没年：1738 -1780
成立翻訳年：18c後半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No.1441, Nya Tshe sgrub, Folios 1b1-10b3
刊本の奥書刊記：（10a4-b3）'di ni Shākya'i dge slong Blo bzang dpal ldan ye shes kyis sbyhar ba'o / / sarba manga laṃ // //// Paṇ chen Er ti ni'i yi ge Zi ling a ma pan thā tā shin la phul ba ni / tho rangs spyi gtsug Tshe dpag med sku mdog dmar po zhal gcig phag gnyis mnyam gzhag gi steng na tshe bum bsnams pa skyil krung gis bzhugs par bsgoms nas / de'i thugs ka'i 'od zer gyis tshe bcud thams cad bsdus nas rang la sbyin par bsams la/ nam mkha' la mig bltas te dbugs pa rngub pas nam mkha' thams cad sngo?yur? gyis rang gi kha nas zhugs / / lus kyi nang thams cad gang par bsams la dbugs cung zad nang du 'dzin / des pho ba 'grang ba dang/ sgreg pa byung na tshe shin tu 'phrel / de'i mjug tu Tshe gzungs dang / Oṃ A ma ra n.i jī va nti ye svā hā zhes pa gang mang bzla / bu 'byung ba'i sngags ni / 'phags ma So sor 'brang ma la phag 'tshal lo / Oṃ ma n.i dha ra vajra ni ma hā pra ti sa re hūṃ phaṭ / ces gang mang bzla / 'di rnams nyams su len pa'i mi de la tshe brgya phrag la sogs pa dang/ ji ltar 'dod pa'i bu rnams 'byung bar sangs rgyas kyis gsungs so / / / / savasti / / phan bde'i 'byung gnas rgyal bstan yongs 'du'i ljon / / rab rgyas 'gro kun thar mchog 'bras bzang la / / spyod phyir bKra shis lhun grub chos grwa cher / / chos sbying 'dzad med dal 'gro'i rgyun 'di spel / / manga laṃ / /

（これはシャーキャの比丘ロサン・ペルデン・イェシェーが著作した。すべて吉祥であれ！パンチェン・エルティニ（モンゴルの官職名で清朝から与えられて歴代パンチェンの称号となった）の文書を、西寧の母親パーターシンに差し上げた［。そこには次のように書かれている］。明け方に頭頂に無量寿－　その身体は赤色で一面二手で禅定［印］の上に寿瓶を持たれ、結跏趺坐して坐っておられる－　を修習して、［その仏が］その御心の光明により寿の精髄すべてを摂取してから私に施すと思惟して、［私は］虚空を注視した。呼吸により虚空すべてが　？自己の口から入った。身中すべてが満たされたと思惟して、息を少し内に保つ。それにより胃を満たすと、ゲップが出るがそうしたなら、寿命がきわめて増長する。それの後に寿ダラニと「オーム・アマリニジーヴァニットイェ・スヴァーハー」というのを多く唱える。子どもができるダラニ［すなわち］「明妃大随求母に帰命する。オーム・アマニダーラーヴァジュラニ・マハーサレ・スヴァーハー」と多く唱える。これらを実践するその人には寿命が百歳になるとか、欲しい子どもができると仏は説かれている。利益が成就せよ！。吉祥あれ！益・楽の起源、勝者の教えがすべて集まる楽園［である］広大な衆生すべてが最高の解脱の妙果を行ずるためのタシフンドゥプ大寺において、法施が尽きずに栄えるこの流れを増大させよう。吉祥あれ！）
参考文献：・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
解説：著者(追贈を含めた場合7世)は、パンチェンラマ3世（追贈を含めた場合 6世）としてタシルンポ寺の座主を務めた。師にはガワン･チャムパ(Ngag dbang byams pa.1682-1762)やケルサン･ギャムツォ(sKal bzang rgya mtsho.ダライラマ７世 1708-1757)などがある。

本著は、インドの女成就者ダーキニー・シッディラージーャ（マチク）の無量寿仏成就法により自他の寿命を増長させ、そのため寿命丸を成就する行法を、無量寿仏の化身パンチェンが著わしたものである。この成就法は無上ヨーガに所属し、髑髏杯・五肉・五甘露・大楽など特有の概念が見られる。カギュ派からゲルク派へ伝承されたものである。ラプロンツェハセージェ(Rab 'brong rtse lha sras rje)の「寿命成就法」が典拠として言及されるが、それはツォンカパの高弟タクパ・ギェルツェン(1374-1434/36)の弟子ロンツェハセージエ('Brong rtse lha ras rje.14c-15c)のことかと思われる。

まず寿命丸を作るため、瓶の中にラプロンツェハセージェの「霊薬」や六種妙薬などを混ぜて準備する。次に無量寿仏の成就法を行う。面前生起において自身が無量寿仏となり、空性・種字から髑髏杯の五肉・五甘露を無漏智の海として観想し、極楽浄土の無量寿仏、諸仏菩薩を招き、『無量寿讃』を唱え、供養の明妃たちが供養し、自らも真言を唱えて供養する。三帰依・四無量心・発菩提心を行い、資糧田を自己に溶け込ませ、寿命の成就を得るよう唱えて行ずる。宝座に無量寿智仏とその身の五処の五種字を観想し、智慧薩埵と灌頂の諸尊を招き、甘露により灌頂を受け、全身が浄化され、大楽を経験する。

次に我生起を行う。真言を唱えて供養し、自心の種字を回る真言鬘から光を放って諸仏菩薩と特に無量寿智を招き、輪廻と涅槃の善すべてを無死の甘露として自己に溶け込ませ、加持を念じ、長短のダラニを唱える。無量寿智が供物の精髄を召し上がる。供養・讃嘆する。瓶を浄化して無量宮とし、中の宝座に寿命丸、無量寿智などを上のとおり観想し、極楽浄土から来て死王とその軍勢を破り、無死の甘露を成就するよう祈願する。灌頂の諸尊をも招き、種々の供物、五供養女、転輪王七宝により供養する。最後に宝瓶を捧げて加持を請い、無量寿仏の功徳と救済性を讃える。再びダラニを唱え、自心の真言鬘を観想し、瓶の本尊の心

臓の光から仏菩薩を勧請し、その加持・能力を甘露として招き、自心に溶け込ませる。人々にダラニを唱えさせ、供養、讃嘆し、歌を歌って無量寿仏の徳を讃え、インドからチベットでの伝統を列挙し、死王を破ること、息災の成就、全身への甘露の充満、金剛身の獲得を祈願する。

次に今後の行法を記し、無量寿智とその眷属に軌範師から施主までの息災、守護、特に無死の持明の成就を祈願し、それにより仏道の成満を祈願し、無量寿智が自己に溶けこみ、成就されたと観想する。寿命丸の効能を述べてから、無量寿仏の徳を歌い、祈願して終了する。

作成者名：藤仲孝司

Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs kyi tshe dbang bskur ba'i cho ga ji ltar bya tshul 'khyer bde bar bkod pa

書名の日本語訳：ダーキニー・シッディラージャ流の寿命灌頂の儀軌をいかにするかの作法 － 行いやすく提示したもの －

著者名：sTag phu yongs 'dzin ye shes rgya mtsho

著者名よみ：タプク・ヨンジン・イェシェーギャムツォ

著者名別名：Ye shes rgya mtsho、Chos bzang ye shes rgya mtsho

著者生没年：1789 -1856

成立翻訳年：19c

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No.2064, Folios 1a1-65a6 より、1a1-9b7

刊本の奥書刊記：（9b6-7）Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs kyi tshe dbang bskur ba'i cho ga ji ltar bya tshul 'khyer bde bar bkod pa 'di ni rTse mgron chen mo dkon mchog zla bas zher sun（？） sna tshog btang bas rkyen byas/ grong chg mkhan po gzhan la yang phan pa srid snyam nas bla ma'i phyag len bzhin Chu bzang ri khrod du bris pa'o/

（ダーキニー・シッディラージャ流の寿命灌頂の儀軌をいかにするかの作法 － 行いやすく提示したもの － これは、大増准（チベット政府の官職名。ダライラマの居室において宮廷の管理や、接客などを行った僧官）コンチョック・ダワが様々な厭悪（？）を発したのを縁として、他の誦経者（在家において仏事を行って生活する人）にも益がありうると思って、上師の実践のとおり、チュサン山中において書いた。）

解説：著者はゲルク派の学僧であり、デプン、セラ両寺で学んだ後、チュサン寺(Chu bzang dgon)の座主を務めた。

本著は、無上ヨーガ・タントラに分類されるダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の阿弥陀仏による寿命灌頂の作法を、割注を加えて実践しやすいように著わしたものである。この題名のもとに 1a-65a までの長大な文献となっているが、そこに収録された数多くの小さな典籍のほとんどは、一般的な行法や他の尊格に関するものがほとんどであり、阿弥陀仏や極楽浄土と関係するのは本著のみである。

具体的内容は次の通り。寿命瓶・寿命酒・寿命丸などの準備の後、我生起を行い、自己を無量寿智仏と観想する。極楽より招いた智慧薩埵が三昧耶薩埵と合一し、無量寿智仏から灌頂を受ける。供養、心呪とダラニの念誦、百字の諷誦、供養、賞讃などを行って、寿命瓶を成就する。次に面前生起を行い、同様にして寿命酒・寿命丸を成就する。

次に弟子たちの作法となり、まず道次第全般に関する教誡がなされ、利他のための成仏を目指してダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の寿命灌頂を受けるために発心する。次にこの法類の伝承に関して行者マルパやミラレパとその弟子たちの故事が説明される。輪廻の苦などを思って、帰依処である三宝や、恩師を、寿命瓶の中の無量宮と無量寿仏、伝統の祖師たちであると観想をしてから、灌頂の授与を請う。灌頂そのものには、寿命瓶に依るもの（6a3-8b6）、寿命酒に依るもの（8b6-9a4）、寿命丸に依るもの（9a4-7）、寿命の増長（9a7-b3）という4項目によって行う。8a6-b3 には無量寿仏からの祖師の系譜が見られる。

作成者名：藤仲孝司

Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs Tshe dpag med lha gcig bum gcig gi sgo nas tshe dbang bskur tshul bsdus su bkod pa －'Chi med dud rtsi'i bum bzang－

書名の日本語訳：ダーキニー・シッディラージャ(マチク)流の無量寿一尊、一瓶の門から寿命灌頂の作法を要略して提示したもの －無死甘露の妙瓶－

著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje

著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ

著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje

著者生没年：1781-1855

成立翻訳年：19c前半

写本等の存欠：刊本

刊本所在：Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs sgrigs（天津古籍出版社）vol.63, Da.1a-13b, pp.190-196

刊本の奥書刊記：（13b2）ces Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs tshe dpag med lha gcig bum gcig gi sgo nas tshe dbang bskur tshul mdor bsdus su bkod pa 'Chi med bdud rtsi'i bum bzang zhes bya ba 'di ni / / rang gzhan gyi lag len du nyer mkhor mthong nas / Paṇ chen thams cad mkhyen pa rje btsun Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan dpal bzang po'i gsung la gzhi byas te / gnad tshang don 'dus kyi tshul du / Bla ma Dam pa rnams kyi bka' drin kho nas nye bar 'tshe ba'i btsun gzugs / Dam tshig rdo rje 'am Dī ghā? yuḥ Ba dzra kī rtīs sbyar ba'i ye ge ba ni dbyod ldan Slob bu chos mdzad dge slong bsTan 'dzin bzang pos bgyis ba'o / /

（といったこの『ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の無量寿一尊、一瓶の門から寿命灌頂の作法を要略して提示したもの －無死甘露の妙瓶－』といわれるものは、自他の実践のために必要と見て、大学者で一切智者である尊者ロサン・チューキギェルツェンペルサンポのお言葉を基礎にして［骨格となる］要点が揃い［肉付けとなる］意味が集まった仕方で、師である正士たちの御恩だけにより生活する僧形のダムチク・ドルジェ、あるいはディーガーユフ・ヴァジュラキールティが著述しました［。その］筆受者は伺察を具えたロプチューゼェー・ゲロン・テンジンサンポが行いました。）

解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジョッツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。

ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・

ギェルモ)流の阿弥陀仏成就法文献であるが、無量寿九尊や〈宗要経〉所説の「六波羅蜜偈頌」を出すなどジターリ流の要素を取り入れて発展した段階の行法である。奥書にパンチェン1世の教えを基礎としたとあるが、彼には直接にダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流を称する典籍はないので、すでにその頃から両系統を総合した寿命灌頂が行われていたと思われる。割注はダライラマ7世やジクメーワンポの著作に言及するし、記述には先行する同種文献と重なる部分が多い。それらとの対応関係や継承の仕方は複雑すぎて検討しがたいが、本作独自の特徴は見られないようである。全体の構成は以下の通りである。

無量寿仏に対する敬礼偈、次に寿命瓶・寿命酒・寿命丸などの準備、帰依・発心などの前行を行う。無量寿智仏を招いて七支供養を行い、資糧田が行者に溶け込む。次に行者自身を本尊として生起させる「我生起」、無量寿仏を面前に生起させる「面前生起」を行う。後者は「浄水の成就」と「面前生起の供物の加持」からなる。

本行では、まずレーチュンパからの伝承が説明される。「菩提道次第」の発心の次第により目的たる衆生救済を明確にし、無量寿仏の智慧の現れとしての無量宮・寿命瓶等を観想し、法身無量光を初めとした諸尊の面前で帰依・七支供養等を行い、弟子にも行わせる。

中心となる無死寿命の獲得としては、「分散した寿命の招引」、「寿命の損減の回復」、「力と福徳の損減の回復」、「誓戒と律儀の損減の回復、身口意の認可を通しての延命」、「寿命の融合」を、行う。根本と伝承の師による加持を祈願し、法身無量光からの諸師に祈願するが、パンチェン1世以降の系譜は二通りである。次に、寿命酒、寿命丸を布施し、供物の効能を説き、諦句の吉祥を述べて、「六波羅蜜偈頌」を唱える。

「終わりの行」は諸尊を讃歎し、百字真言を読誦するなど通常の作法である。「百の寿命灌頂などのやり方」が補足される。割注では「寿命灌頂の詳細を望む場合」、「馬頭［観音］の認可と合わせて無量寿［仏］・馬頭［観音］の双運として灌頂したい場合」に言及するが、前者はダライラマ7世の典籍に基づき語句を配置したジクメーワンポの著作のとおりに行うこと、前行として四灌頂の作法は他を見ること、灌頂を得ていない部族の寿命灌頂の受け方は『軌範師学者の実践』のとおりに行うことを述べている。後者は「レーチュンパの具垂帷の十八法類中の一部、無量寿・馬頭の具垂帷」であるという。最後に、一切衆生が死魔に勝利し、無死の大楽を獲得することを祈願する。

作成者名：中御門敬教

Mi tra snying thig las / rNam dag bde ba can du skye pa'i smon lam

書名の日本語訳：『ミトラの心髄』より『清浄極楽に生まれる誓願』
著者名：Mitrajoki
著者名よみ：ミトラゾーキ
著者名別名：Mitrayogin
著者生没年：13c初(?)
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本の奥書刊記：（p.166）bDe chen zhing gi smon lam Gu ru Mi tra dza kis mdzad pa'o / sa ma ya / rgya rgya rgya /
（極楽世界の誓願をグルたるミトラゾキがお作りになった。ギャ（捺印）、ギャ（捺印）、ギャ（捺印）。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻）、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、pp.163-166
参考文献：・立川武蔵『トゥカン『一切宗義』カギュ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』5、1987）p.68, 108
・ツルティムケサン・藤仲孝司『ツォンカパ　菩提道次第大論の研究』（文栄堂、2005）p.312
・酒井真典「悪趣清浄軌」「悪趣清浄軌のマンダラ」（『酒井真典著作集 第三巻 金剛頂経研究』 法蔵館、1985）
解説：ミトラゾーキ（ミトラヨーギン）は、菩提道次第の甚深見の継承者 小クサーリ(Ku sa li chung ba, Rig pa'i khu byug chung ba）のことであり、リーラヴァジュラに師事し、観自在菩薩を成就した。さらに特にマイトレーヤを修習したので、その名がつけられた。大成就者アバドゥーティーパ(Abdhūtī pa)とも呼ばれ、アジタミトラ(Ajitamitra) とも同一視される。トプ翻訳師（1173-1225）に招かれて入蔵されたとされ、その教えはトプ・カギュ派に伝えられた。後にはインドの森林に現存しつづけている成就者ということで、信仰を集めた。ミトラ百（Mitra brgya rtsa）という灌頂の創始者としても知られている。

現行のテンギュル（ex. 北京版［大谷No.2981、3295、5021、5022］）に彼の著作は存在するが、それらは後期密教の内容のみを扱っていて、本作とは関係がない。本作の出典については不明な点が多く、口伝ないし仮託されたものとも考えられる。ただしチャンキャ１世ガクワンロサン・チュウデンペルサンポの著『白無量寿の成就法』の奥書きには、「大成就者ミトラゾキから伝えられた白無量寿の現観」などといった記述がある。ハルハ・タムチク・ドルジェ（1781-1855）の著作には、ミトラヨーギンから伝えられた〈悪趣清浄タントラ〉に関する無量寿仏の行法がある。

本作は基本的には四句の韻文形式であるが、時には破格も見られる。各偈頌では先ず極楽世界の優れた特徴を説き、現世の諸過失を挙げて極楽にはそれらの名称さえないと説く。そして結句で極楽への往生を祈願する。描かれている現世の過失や浄土の特徴は〈無量寿経〉や〈阿弥陀経〉に基づくと思われるが、極楽世界を大楽世界と称するなど、密教的な用語法や観念も少し見られる。弥勒を体現した名の行者による極楽願文であり、信仰の交雑を示している。

作成者名：中御門敬教

sMyung gnas kyi cho ga'i zur rgyan bDe ba can gyi lam yig

書名の日本語訳：断食作法の端の荘厳－極楽の通行証
著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa(クンタン3世)、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：1816
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 39, New Delhi 1975 Vol.7, Cha, sMyugs-cho-ga-zur-rgyan 1a-19b3, 289-326（なお別の版では Ta巻）
刊本の奥書刊記：（19a3-b1）sMyung gnas kyi cho ga'i zur rgyan bDe ba can gyi lam yig ces bya ba 'di ni chos tshul 'di la mchog tu mos pa Rab 'byams pa dKon mchog smon lam gyis 'di'i phan yon lo rgyus blang dor gyi lag len dang bcas gsal bar bstan pa zhig dgos zhes lan bcu gsum gyi

bar nan tan du bskul cing/ dad brtson blo dang ldan pa Rab 'byams pa dKon mchog ye shes kyis Thugs rje chen pos gtsos pa'i Bya rgyud kyi bsnyen yig cig dgos tshul sngar nas bskul ba dang/ yang dge sbyor la brtson pa'i ri khrod pa dKon mchog mchog ldan gyis po bstod la ṭik.k.a zhig dgos zhes yang yang bskul ba rnams don mthun par snang bas phyogs gcig tu bsdebs te/ bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes me byis'i dgun mtshams skabs nyin gung gi thun gseng la sug bris su bgyis pa las shog bur 'bebs pa po ni sNgag ram pa dKon mchogs kun dga'o/ /

（「断食作法の端の荘厳－極楽の通行証」というこれは、この法の方軌を最上に信解する人であるラプジャムパ（博士）・コンチョック・モンラムが、「この［修行法の］利徳と経緯と取捨の実践を明示することが必要です」といって13回までも慇懃に勧めたし、［さらに］信・勤・慧を具えたラプジャムパ・コンチョック・イェシェーが大悲［観自在菩薩］を主尊とした所作タントラの親近の文書が必要であることを前から勧めたことと、また善行に勤める山住者コンチョック・チョクデンが、「［比丘尼シュリーによる「何々の者」を表わす］ポ字［で終わる］讃に註釈が必要です」といってたびたび勧めたことが、一致した事柄として現れたので、一つにまとめて、尊者コンチョック・テンペードンメが火の鼠［の年、すなわち西暦1816年］の冬の結界のとき、正午の修行時間の合間に手書きした［。その］ものから紙に書き下ろした人は、ガクラムパ（真言博士）・コンチョック・クンガーです。）

（19b1-3）

dge 'dis phan bde'i 'byung gnas thub bstan pa dar/ /bstan 'dzin thugs mthun bshad sgrub bya ba 'phel/ /mi yi dbang phyug Vai li blon 'bangs sogs/ /bstan pa'i sbyin bdag mnga' thang dar bar shog/ khyad par 'brel thogs 'gro ba ma lus pa/ /phyag na padmas 'bal med rjes gzung ste/ /Zhing mchog bDe ba can dang Po ta lar/ /skyes nas sa lam bgrod pa mthar phyin shog/ /ces pa 'di ni Hal ha dar han Vai li? shog nas dad ldan sNgags ram pa dKon mchog bstan 'phel gyis par gsar bskun bgyis skabs bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes bris pa'o//

（この善により、益・楽の生処［である］牟尼の教えが栄えて、持教［者の］御心に適った講説・修行が増長し、人の王者ヴァイリ、臣下、領民など［といった］仏教の施主は、権勢が盛んになるように！特に縁ある衆生すべてを、金剛手が離れることなく摂取しますように！ 最上国の極楽とポタラに生まれてから地・道を往くことを完成しますように！という［ことを説いた。］これは、［モンゴルの］ハルハ大汗のヴァイリ？部から［出た］、信を具えたガクラムパ（真言学者）・コンチョック・テンペルが新版刊行をしたとき、尊者コンチョック・テンペードンメが書きました。）

参考文献：・田中公明『チベットの仏たち』（方文堂出版、2009）pp.43-45

解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。

仏の大悲を体とした観自在菩薩の成就法である。多くの観自在菩薩の行法の中で、大いに普及した口伝は比丘尼ラクシュミー（dPal mo）流のこの断食法であるとし、その加行の次第を付録として示している。本著の題名に「端の荘厳」というのは、それにちなんだものである。ただし阿弥陀仏や極楽への直接的言及は少ない。観自在の部族主無量光仏との関係、観自在の心呪の念誦によりどの国土にも往生できること、そして極楽往生を願う者はこの近道を行うべきであり、この行法はこの濁世において最も利が大きく行じやすいことが述べられている程度である。本著者には同系統の『成就者ツェムブバ流の大悲の成就法―極楽の近道』という著作もある。

全体は、１）悦びを生じさせるために経緯と利徳を説明する、２）要になるために取捨の実践を説明する、３）大悲［観自在］を勧請するために祈願する所縁を説明する、という3つの段に分かれている。

１）では、観自在菩薩が特にこの世間、中でもチベットに縁が深いこと、比丘尼ラクシュミーが宿業から癒されて成就を得たこと、後にネパールのパニャパやダワ・ゲルツェン、サキャ派のクンガ・ニンポ、カギュ派のパクモ・ドゥッパなどに伝えられて、衆生済度と寺院建立、僧侶育成が行われたことなど、この断食法の経緯が示される。そしてダラニ経典類や儀軌、ソナム・サンポの記事、『法華経』により、観自在の心呪を行じ、名号を聞いて受持し、唱えることの功徳を説き、この行法により大罪を浄め、大善根を生むべきであるという。特に臨終時に見仏して極楽浄土に引導される利徳を指摘している。

２）には、この修行における障碍とその除去方法、行うべき真言の念誦方法やその観想対象などについて、それぞれの規定が所作タントラ類や祖師たちの言葉に基づいて示されている。

３）には、観自在への祈願の意義が説明される。広釈の部分は、所依の身体の利徳と能依の自利利他円満の利徳に分け、教証を用いて示している。

最後に比丘尼ラクシュミーやその著であるポ字で終わる讃に言及して、その功徳の大きいことを述べている。

作成者名：藤仲孝司

rTsa ba'i bla ma dang mgon po 'od dpag med dbyer med kyi bla ma'i rnal 'byor

書名の日本語訳：根本ラマと教主無量光を無区別とするグル・ヨーガ

著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma

著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ

著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma

著者生没年：1782-1853

成立翻訳年：19c

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.1840, Folios12a3-13a4

刊本の奥書刊記：（13a3）

'di yang Li thang Byams pa gling gi mKhan po Rab 'byams pa tshangs dbyangs rgya mtshos bskul pa'i ngor / Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos sbyar ba'o / /

（こ［の典籍］もリタン（四川省内の地名）のチャムパ・リン（弥勒寺）の賢者であるラプチャンパ・ツァンジャンギャンツォがお願いした折に、シャーキャの比丘であるロサンペルデンテンペーニマ・チョクレナンギェルペルサンポが著述した。）

参考文献：・ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンダ『チベット密教の瞑想法』（金花舎、1996）所収の、ダライ・ラマ14世法王造『観音菩薩のグル・ヨーガ』（p.23, 44）

解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受け

た。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。

本尊無量光仏を供養して罪障を浄め福徳を積むグル・ヨーガの短い文献である。著者を無量光仏の活仏とする立場から、著者を信仰する弟子に対して許可したものであり、そのような師に対して敬礼・讃歎・祈願することが主要部分を構成した極楽願文となっており、密教的な要素は無い。テキストの状態が悪く、一部分は読解困難である。

まず、帰依・発心・四無量心の修習の前行を行い、後続する文句を読誦するよう促される。その冒頭には、大楽国土の世尊無量光仏である活仏チョクレー・ナムギェルに敬礼するとされ、著者自身への言及がある。さらに、吉祥無死寿命の悉地を賜る祈願、無量光仏である著者パンチェンに対する敬礼の文句、讃歎の文句などが続く。末尾には、極楽往生の祈願や、地道(大乗菩薩の十地と五道)の獲得の祈願、自身の行が無量光仏の眷属と等しくなる祈願が説かれて終了する。

作成者名：中御門敬教

Gtsug tor gdugs dkar mo'i bsgom bslas －bDe ba can gyi zhing du 'gro ba'i gdams pa Bya rgyal khyung gi rta pho －

書名の日本語訳：頂髻白傘蓋仏母の修誦　－極楽世界に行く教誡・鳥王である金翅鳥の牝鳥－

著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya

著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ

著者生没年：1612-1678

成立翻訳年：17c.

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No.2547,Folios19a5-23a3

刊本の奥書刊記：（22a5）'di 'dra rang dang gzhan la phan pa'i phyir / / Rā ga a syas gzhung dang man ngag bsdebs / / Padma mthar phyin zhes byas yi ger bris / / 'di la sngags sgra ma dag 'gal 'khrul sogs / / mchis na ye shes spyan ldan rnams la bshags / / dge bas 'gro kun bar chad rkyen zhi nas / / phyi ma bde chen zhing du skye bar shog / / skye nas gzhan don dpag med 'grub par shog / /

（このようなものは自他に対する利益のために、ラーガースヤが本文と口訣を結合させた。［それを筆受者の］パドマ・タルチンと呼ばれる者が文字に書いた。これに真言の音の不正確・相違・錯乱などが有るならば、慧眼を具えた者たちに懺悔します。善によって一切衆生が障碍の縁が息んで、後に大楽国土に生まれますように。生まれてから無量の利他が成就しますように。）

＊語句説明語の奥書

（23a2）lHa ldan rGyal rtse tshong khang gnyer Tshe dbang dpal 'byor dang / Nyi ma mchog pa bzung nas chos sbyin mi 'dzad pa'i par du bskrun skabs par byang smon chig tu Chos kyi seng ges so / / / / sarva manggalaṃ / /

（ハデン（ラサ）のギェルツェ商店の管理者であるツェーワン・ペルジョルとニマ・チョクパを初めとして法施が尽きない［ように］版木を製造した折に、ある菩提誓願文としてチュキセンゲにより［記されたもの］である。全てが吉祥たれ。）

参考文献：・頼富本宏・下泉全暁『密教仏像図典』（人文書院、1998）

・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006）

解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ（Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。

本著は阿弥陀仏に関連する尊格を扱って、「虚空法」の周辺部分を埋める典籍の一つと思われる。「白傘蓋仏母」（Skt. Sitātapatrāparājitā, Tib. gDugs dkar mo）は、あらゆる危害から保護を約束する白傘を手にした憤怒形の女尊である。インドにおいては白傘は王権を象徴するともいわれ、それが仏を象徴するものとして尊格化された（cf. 頼富、下泉［1998］pp.234-235）。この尊格を主題としたものに元真智等訳『大白傘蓋総持陀羅尼経』（『大正蔵』No.977）等がある。インド・チベットにおいてはいくつかの儀軌類が残されている。この白傘蓋は、仏頂尊勝や無垢尊勝と共に所作タントラ如来部の仏頂尊に分類される。仏頂尊勝に属するタントラには、極楽世界の石窟寺院で観自在菩薩が無量寿仏に質問する形式をとるものもあり、そのダラニによる極楽往生が説かれるなど、蓮華部と仏部という分類を越え関連づけられている。

本著ではまず、無量寿仏の妙妃としての白衣と同一であるとされ、極楽に往生するために、そして牟尼の頂髻からこの女尊（白傘蓋仏母）が変化した因縁、尊格の性格、無量寿仏との関連が示される。この行法は、本来は所作タントラであるが、実際には無上瑜伽タントラのように実践するよう注意される。そして、系統としてはジターリやドルジェデンパ等に連なるジターリ流成就法、ガーラプ・ドルジェ、ジャンペルシェーニェン、ヴィマミトラへ伝承されたインド伝来のニンマの作法、タクトゥンナンポの埋蔵経、インド典籍である『大海根本百成就法（Sgrub thabs brgya rtsa rgya mtsho）』と、カルマ黒帽ラマ6世トンワ・ドンデンの作法等のチベットの権威のある典籍の精髄を集めたものであり、実践しやすく大神力をもち、病魔を退ける金剛鉆と剣のようなものとされている。副題の意味として、これを実践すれば金翅鳥に乗っていくことと同じ程、たやすく素早く極楽へ赴くことができるとされている。文中では陀羅尼を織り交ぜた修誦（本文と口訣から成る。奥書を参照）がなされ、〈普賢行願讃〉を承けた極楽往生が祈願される他、往生後の利他行が言及される。奥書後の末尾には語句の補足説明が説かれ、さらにそれに付属した奥書も具えている。

作成者名：中御門敬教

Tshig bdun gsol 'debs / Byang zhus min na ltung bshags / bDe chen zhing sgrub kyis gsol 'debs

書名の日本語訳：七句の祈願 － 浄化をお願いしたのでないなら、堕罪を懺悔する、大楽国土の成就による祈願

著者名：Karma pa sku phreng bcu bzhi pa Theg mchog rdo rje

著者名よみ：カルマパ第14世テクチョク・ドルジェ

著者名別名：Karma pa bcu bzhi、Blo bsang grub mchog

著者生没年：1799 -1869

刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0707,

Folios 1a1-1b4(＝Ref.No.721)
刊本の奥書刊記：（1b3-4）
gNam chos 'Od chog gi brgyud pa'i gsol 'debs nyung bsdus 'di'ang/ dGe slong Karma chos ldan gyis bskul ngor/ Karma pa bcu bzhi pas gang shar 'phral du bris pa dge bar gyur cig// sarba mangga laṃ//
（虚空法［無量］光儀軌の伝統の祈願をわずかにまとめたこれもまた、比丘カルマ・チョデンが勧めたのにちなんで、カルマパ第14世が［心に］浮かんだものを即刻書きとどめた。善くなるように！すべて吉祥であれ！）
参考文献：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.342
解説：著者はカギュ派、ニンマ派の活仏であり、第8代ブクチェン・クンシク・チョーキナンワ（'Brug chen Kun gzigs chos kyi snang ba）により認定され、命名された。シツ（Si tu）9世（Padma nyin byed dBang po. 1774-1853）の弟子であり、ツルプ寺（mTshur phu dgon）の座主を務めた。関係する著作として『大楽国土成就の供養法会dDe chen zhing sgrub kyi tshogs mchog』）がある。これは、無量光仏からミーギュル・ドルジェに授けられ、カルマ・チャクメーがまとめた『虚空法Nam chos』での遷移の行法に、密教での法要会食の儀式を付け加えたものである。
　本著は、「虚空法」の伝統的な儀軌に関して簡略にまとめられた願文であり、悉地を授かり本初仏を成就できるよう加持されることを、繰り返し祈願する。4句からなる7の偈頌となっている。
　祈願の対象は順次、西方極楽浄土の主たる無量光仏、観自在・大勢至などの菩薩と声聞・独覚の阿羅漢の衆、第二の仏パドマサンバヴァと持明者・成就者の衆、ミーギュル・ドルジェ（虚空法の発見者）とドゥードル・ドルジェ（O rgyan bDud 'dul rol pa rtsal. 18世紀の埋蔵経発見者で『遷移の教誡』の著者）などの根本・伝統の諸師、寂静と忿怒の様々に変化した本尊の衆、獅子面のマハーカーラ兄妹などの護法神の衆である。最後に祈願の加持により息災、増益がなされ、無量光仏と差別なく成仏することを願っている。
作成者名：藤仲孝司

Tshe khrid 'chi med dga' ston

書名の日本語訳：寿命の導き・無死の宴
著者名：Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po
著者名よみ：ガクワンロサン・チュウデンペルサンポ
著者名別名：Blo bzang chos ldan、lCang skya hu thog thu、lCang skya1、灌頂普照広慈大国師章嘉呼図克図
著者生没年：1642-1715
成立翻訳年：17-18c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・北京版　大谷No.6283, lCang skya bKa' 'bum, Ca108a5-111a7
刊本の奥書刊記：（P.Ca.111a7）Bla ma Tshe dpag med dKon mchog yar 'phel gyi zhal las byung ba mdo tsam gyin ba Ngag dbang blo bzang chos ldan gyis brjed byang du bkod pa'o / /
（師である無量寿コンチョク・ヤルペルのお口から出たわずかなものを、愚僧ガクワンロサン・チュウデンが忘備録として著した。）
解説：著者はロンポ寺座主とパンチェンラマ1世によりタクパウセルの転生者に認定され、ダライラマ5世により受戒し、ウで修学した。清朝と交流し、モンゴル、満州の教化を行った。
　無上瑜伽タントラに分類されるダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の阿弥陀成就法のうち、寿命についての導きを示した典籍である。その内容は極楽から無量寿仏と諸尊を招いて、生起次第による延命と究竟次第による延命との二つを修法するものである。
　生起次第では、まず、前行として行者は、心臓の月輪上の赤いフリーヒ字から光を放ち、極楽から無量寿仏と菩薩を招き、マンダラの上に安住させてマンダラを捧げ、七支供養を行い、讃歎し祈願する。続いて、無量寿仏の加持により空性から種字、種子から斑杵・幕、守護輪から無量宮が順次生起すること、フリーヒから光が放たれて自利利他を為すこと、自己が無量寿仏であることを、観想する。頭頂と喉と心臓の種字からの光により、極楽から智慧サッタと灌頂の諸尊を招く。無量寿智仏を供養し、讃歎し、帰命する。心呪と長陀羅尼が取り巻いた心臓の月輪上の種字に心を保って、四十万回唱える。
　次に、寿命の損失を摂める、四大種の滋味を摂める、世間の寿命を摂める、出世間の寿命を摂める、という四項目を実践する。
　究竟次第では、風の鈎召、瓶の甘露の流出と真言の念誦、四歓喜、殊勝な四歓喜によった延命、心臓への寿命の杭の確立という五項目を実践する。
　奥書の記述は、師を無量寿仏と見立てた修法の後で記したことを示すものであり、根本師を仏と無差別だと見なすインド後期からチベットにおいてはふつうの考え方である。
作成者名：藤仲孝司

Tshe sgrub

書名の日本語訳：寿命の成就
著者名：Ngag dbang Blo bzang rgya mtsho
著者名よみ：ガクワン・ロサンギャンツォ
著者名別名：Dalai Lama 5、'Jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen
著者生没年：1617-1682
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
所収文献名：rGyud sde rnam bzhi'i lha tshogs rnams kyi sgrub 'phrin bsnyen pa rjes gnang sogs kyi nyams len －mChog thun dngos grub 'dod dgu'i nye ma gyung za－（ラサ版　東北No. 5618）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5618(28)［Tha.56b5-59a2］
刊本の奥書刊記：［奥書き］
（Tha.58b6）ces slob dpon chen po Padma 'byung gnas kyis Grub chen Than stong rgyal por dngos su gnang ba dang / bSam yas mChims phu'i gsang phug nas Zab gter du yang spyang drangs pa'i Tshe sgrub 'Chi med dpal ster gyi rgyun 'khyer di ni / 'od gsal lha yi rigs las Nor 'dzin skyong ba Mi'i dbang po Ngag dbang rab brtan gyi gsung gis bskul pa ltar / thugs dams spel ba'i ched du Za hor gyi Banda Gang shar rang grol gyis sbyar ba'i yi ge ba ni Chang khyim pa Ngag dbang mkhyen brtse'o / /
（偉大な軌範師であるパドマサンバヴァがドゥプチェン・タルトンギェルポに直接にお与えになり、サムイェー［地方にある］チムプ秘密洞窟から甚深なる宝蔵として再び請来なさったこの『寿命の成就　－無死の吉祥を与える常時携えるもの－』は、光明尊の族からノルジン・キョンワ・ミイワンポ・ガワンラプテンの御言葉により勧められたと

おりに、修証を増長させるためにサホルの尊者ガンシャル・ランドルが著述した［。これを］筆述した者は、チャンキムパ・ガクワン・ケンツェである。）
参考文献：・立川武蔵『西蔵仏教宗義研究　第五巻－トゥカン『一切宗義』カギュ派の章－』（東洋文庫、1987）p.50, p.94
解説：パンチェン1世ロサンチョーキギャルツェンに受戒した。モンゴル・オイラット部のグシ汗がドメ、ツァンを平定し、ダライラマ5世に献上したことからチベットに統一政権を確立した。ラサにポタラ宮を建立し、清の順治帝の招待で北京をも訪ねた。顕密、歴史と著作は多く、チベット全体の統治者ともなったことからニンマ派の著作も多い。

本著もそれらの一つであり、無量光仏に基づくニンマ派系統の成就法である。持明者トッペンツァル(Thod phreng rtsal. パドマサムバヴァの別名)と、彼により摂取された成就自在者タントンパの甚深蔵にして、浄らかな現れの二つの河が合流したものであり、前者の埋蔵経としてタントンパがもたらしたものである。後者タントン・ギャルポ(Thang stong rgyal po. 1361/1421-1485?）はシャンパ・カギュ派の行者であり、各地に鉄の鎖の橋を多く架けて利他を行った。東北目録は、ヌルチュ・ダルマバドラ著『近伝寿命の導論　－無死金剛の主柱－ の発語を割注に提示したもの』(東北No.6304)を、本論に関する註釈としているようであるが、その可否はまだ十分に確認できない。

まず前行として発心・資糧田［の観想］・祈願の後、浄化・入定・寿命成就の観想などを行う。次に、不時の横死を終わらせる寿命成就のこの行法が、空行母からの教誡であるとして、五趣の怖れと輪廻における妨げ・涅槃における妨げから解放されて、世尊無量寿を直証するように願って廻向する。

正行の段では、空から種字が生じ、種字から生じた無量寿智仏を自己だと観想する。次に頭頂に直接の根本師を観想し、さらに歴代の師を主無量寿・無量光仏に至るまで観想し、彼らが頭頂に溶け込んだと観想する。また祈願の段において、逆縁の除去と無死の成就の授与を祈願する時、無量光・無量寿・パドマサムバヴァから始まって、キャプダク・メンルンロチョクドルジェ（Khyab bdag sMan lung blo mchog rdo rje）に至るまでの歴代の祖師一人一人に祈願をする。祈願の段には受法の系譜も割注として入れられている。それら祖師には未詳の人が多い。資料として重要であるが、写本が所々不鮮明であり、特に割注は読解できない部分がある。

なおこの系統の著作としてハルハ・タムチクドルジェ『近伝流、師無量寿の寂静・忿怒に依った寿命の灌頂』があり、そこでも伝承の系譜が確認できる。
作成者名：藤仲孝司

Tshe sgrub 'khyer bde　－Kun phan－

書名の日本語訳：寿命成就の携帯しやすいもの　－一切の利益－
著者名：Dharmabhadra
著者名よみ：ダルマバドラ
著者名別名：dNgul chu Dharmabhadra, Bla ma chos bzang mchog, blo bzang tshe ring, chos kyi bzang po
著者生没年：1772-1851
成立翻訳年：18c末-19c前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.6301［ Na 1］
・dNgul chu Dha rma bha dra'i gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.76 ［Pa, Tshe-sgrub1a-b, p.100］（上記と同一影印版）
刊本の奥書刊記：（Na.1b5）di yang Dha rma bha dras rang gi nyams len du bris / / / /
（これもまた、ダルマバドラが自身の実践として書写した。）
解説：著者はゲルク派の学者であり、タシキル寺に学び、西チベットのヌルチュ寺(ギャルセートクメーサンポの寺)に住持した。その法嗣に弟子で甥のヤンチェン・ドッペードルジェ（dByangs can grub pa'i djo rje.1809-1887）がいる。顕密にわたって数多くの著作を遺したが、ニンマの法についても幾らか著作している。

基本的特徴としては、タイトルに「携帯しやすいもの（'khyer bde）」とあるごとく、特定の流派によらず、阿弥陀仏成就法を最も極めて簡潔にまとめたものである。

師に帰命することから始めて、一切衆生の利益を成就するために最高の菩提心に3度心を起こす。その後、根本師無量寿仏の身体の特徴を観想（ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の一尊一瓶の観想）して招く。ここで無量寿仏を横死を滅する者、三帰依処を集めた者と定義し直し、その彼に対して七支供養が行われる。そして衆生全てに無死の寿命の悉地を無量寿仏から賜るよう三度祈願する。次に無量寿仏の心臓にある月輪上のフリーヒ字の端にある真言蔓によって取り巻かれているダラニから五大種の精髄等を甘露として召引し、瓶に溶け込ませ、それから溢れ出して荘厳となり、病魔の障碍が洗浄され無死の寿命の悉地を獲得する。その後、「オーン、アマラニ、ジーヴァンティイェー、スヴァーハー」と唱える（出典未確認）。この善によって無病になり、富が広大になり、教と証の功徳が夏の湖のように増大して成仏するとある。しかし仏になったからといって、それで救済行が完結するのではなく、衆生の主、帰依処になるよう祈願して典籍は終わる。
作成者名：中御門敬教

Tshe sgrub　－'Chi med bdud rtsi'i chu rgyun－

書名の日本語訳：寿命成就　－無死甘露の河－
著者名：Paṇ chen gnyis pa Blo bzang ye shes
著者名よみ：パンチェン2世　ロサンイェシェー（追贈5世）
著者名別名：Shā kya'i btsun pa Blo bzang ye shes
著者生没年：1663-1737
成立翻訳年：17c末-18c前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.1290, Folios.1a1-4a2
刊本の奥書刊記：（4a1）'di ni dge skos chen mo Rab 'byams pa Blo bzang 'phrin las kyis 'di lta bu 'dus sde'i zhal 'don du btsugs chog pa zhig dgos zhes yang yang nan tan chen pos bskul bal brten nas Shā kya'i btsun pa Blo bzang ye shes kyis smras pa'o / /
（これは大掌堂師ラプチャンパ・ロサンティンレーがこのように「僧坊［の人々に］読誦させるによろしいものが必要である」と何度も大変な熱心さで勧請したことに依り、シャーキャの尊者ロサンイェシェーが述べた。）
参考文献：・ツルティム・ケサン・藤仲孝司『ツォンカパ　中観哲学の研究』3（文栄堂、2001）
解説：著者パンチェン2世はゲルク派の人物。ツァンに生まれ、タシルンポ寺に迎えられた。数え8歳の時にダライラマ5世ガクワン・ロサンギャムツォから沙弥戒を受け、授法した。ダライラマ6世や7世に沙弥戒を受け、法を授け

ている。ダライラマ政権の弱体化を図る清朝から、固辞にもかかわらずツァンの荘園を授与された。

本作はきわめて簡略な通常の阿弥陀仏成就法である。テキストの状態は悪いが、前行、阿弥陀仏の身体的特徴、阿弥陀仏・眷属の召喚並びに観想云々といった一般的な次第が伺える。奥書からすると、本作は僧坊僧衆の要望により読誦経典として作成された。

作成者名：中御門敬教

Tshe sgrub 'chi med 'bdud rtsi'i chu rgyun gyi sbyor dngos mjug gsum du ji ltar bya ba'i cho ga bsgrigs －Man ngag zhal shes dang bcas pa－

書名の日本語訳：寿命成就「無死甘露の河」の加行、本行、後［行］の三つにおいていかに為すべきかの儀軌集　－面授をともなったものを明示したもの、悉地（成就）の集起－

著者名：Ye shes rgyal mtshan
著者名よみ：イェシェーギェルツェン
著者名別名：Yongs 'dzin paṇḍita
著者生没年：1713-1793
成立翻訳年：18c.
成立地：チベット
所収文献名：Tshe sgrub 'chi med 'bdud rtsi'i chu rgyun gyi sbyor dngos mjug gsum du ji ltar bya ba'i cho ga bsgrigs man ngag zhal shes dang bcas pa sogs yi dam sgrub skor dngos grub kun 'byung /
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.6008［ Nya 1-10a5］
刊本の奥書刊記：（Yi-dam. Nya 10a2-5 sgrub-skor）Tshe sgrub 'chi med 'bdud rtsi'i chu rgyun gyi sbyor dngos mjug gsum du ji ltar bya ba'i cho ga bsgrigs man ngag zhal shes dang bcas pa gsal bar bkod pa dngos grub kun 'byung zhes bya ba 'di ni / ?gangs can 'gro ba'i mgon po thams cad mkhyen cing gzings pa rJe btsun Blo bzang bstan pa'i dbang 'phyug 'Jam dpal rgya mtsho dpal bzang po'i bkas bskul ba la brten nas sNang ba mtha' yas dur smrig gar gyim par rol pa （敬称記号）rJe btsun thams cad mkhyen pa Blo bzang ye shes dpal bzang po'i bka' drin las chos 'di'i dbang lung man ngag rnams legs par thob pa dGe slong Ye shes rgyal mtshan gyis Pho brang chen po Po ta la sbyar ba'o / / 'dis kyang rgyal ba'i bstan pa rin po che phyogs kun tu 'phel zhing rgyas par gyur cig / / mangalam
（『寿命成就「無死甘露の河」の加行、本行、後［行］の三つにおいていかに為すべきかの儀軌集　－面授をともなったものを明示したもの、利験の集起』というこれは、雪域の衆生の依怙主、一切を知見される［ダライ8世］尊者ロサン・テンペーワンチュク・ジャムペル・ギャムツォ・ペルサンポの勅に勧められて無量光の袈裟の歌舞に遊戯するもの、［パンチェン２世 ］尊者一切智者ロサン・イェシェー・ペルサンポの御恩よりこの法の灌頂・伝授・口訣を良く得た比丘イェシェー・ギャルツェンが、ポタラの大宮殿において著作した。これによってまた、勝者の教えの宝が全方向において盛んになり、広がりますように。吉祥あれ！）
解説：著者はツァン・トに生まれたゲルク派の学僧である。パンチェン2世ロサン・イェシェー（1663-1737）のもとで出家、受戒し、タシルンポ寺などに学び、学者・行者として大きな尊敬を受けた。ポタラ宮に招かれてダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォの師僧（Yongs 'dzin)となり、学識者(Paṇḍita）の称号を得た。顕密にわたって多くの著作を遺した。

本著はダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の阿弥陀仏成就法である。成就法自体の記述は比較的簡潔であるが、原則と除外の規定や修法の基本的考え方を所々で丁寧に示している。

5b3-6a1 には帰命し祈願する形で、無量寿仏からの伝承系譜が示されているが、それはダライラマ7世（1708-1757）の示したものより簡略であり、終わりには一切智者ケルサン・ギャムツォ（ダライラマ7世）と尊者ロサン・ペルデン・イェシェーの名を加えている。

著作の傾向として、『無量寿宗要経』の六波羅蜜の偈、ジターリの『無量寿仏讃』など本来ジターリ流のものを用いているが、これは両流儀がダツェパ著の儀軌において総合されたのと同様の傾向である。また、本文中に「～と説かれている」「ガンデン聴伝の口訣」「口訣に出ている」などといって、従来見られなかった内容が加えられていること、ツォンカパ著のグル・ヨーガの常用経典に言及していることなど、ゲルク派の特徴が明確明瞭である。

なお本書を当該所収する文献群（東北No.6008 Nya 1-54）のなかには、金剛怖畏・金剛手・弁才天・種々仏母・文殊師利・観自在・チャクラサムヴァラ・護法神・馬頭・ターラーに関する成就法や修法に関する著作が含まれているが、阿弥陀仏に関するものは本著のみである。

作成者名：藤仲孝司

Tshe sgrub －bDud rtsi bum bcud kyi dbang bshad－ lhan thabs su byas pa

書名の日本語訳：寿命の成就 － 甘露の灌頂の釈を補充したもの －
書名別名：Rig 'dzin tshe sgrub kyi dbang bshad nyer bsdus lhan thabs（持明［者］の寿命成就の灌頂の釈をまとめた補足）
著者名：'Jigs med gling pa
著者名よみ：ジクメーリンパ
著者名別名：Kun mkhyen 'Jigs med gling pa、mKhyen brtse 'od zer、Rang byung rdo rje mKhyen brtse 'od zer、Paḍma dbang che
著者生没年：1729 / 1730－1798
成立翻訳年：18c後半
成立地：チベット
所収文献名：Klong chen snying gi thig le(『大界の精髄の滴』)
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.0018, Folios 1a1-5b6
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.2918, Folios 1a1-4a3(本文),1a1-5b6(註釈)
刊本の奥書刊記：1.（刊記なし）
参考文献：・立川武蔵『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』3、1982）
・ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯　－チベット密教の瞑想修行－』（平河出版社、1986、p.29）
解説：著者は、ニンマ派教義の大成者ロンチェンパ（1308-1363）を幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティクの体系を継承した。古刹ミンドゥルリン所蔵の『古派タントラ集』を整理し、ニンマの復興を目指した。1762年には Tshe ring ljongs paḍma 'od gsal theg mchog gling を建立した。弟子にジクメー・ティンレー・ウセル（'Jigs med 'phrin las 'od zer 1745-1821、rDo grub chen1世）やクンサン・シャンペン(Kun bzang gzhan phan)がいる。こ

の系統では、ジュ・ミパム(1846-1912)、ジクメー・テンペーニマ(1865-1926、rDo grub chen3世)などリメー（無宗派運動）で活躍した人が多く、著者自身も含めて阿弥陀仏や極楽往生に関する著作を幾つも著わしている。

本書は、『大界の精髄の滴Klong chen snying gi thig le』所属の「持明の寿命の成就　－甘露瓶の精髄－ Rig 'dzin tshe bsgrub　－bDud rtsi'i bum bcud－」(東洋文庫蔵外文献Ref.No.0016. 1a1-4a3)への補足の註釈 1a1-5b6 である(同No.2918 は、同書とこの註釈を併収している)。著者について本文中（3a5-6）に「ジクメーリンパとして名で灌頂された人の後」に言及するから、弟子たちにより文書化された可能性もある。ニンマの祖パドマサンバヴァを阿弥陀仏の化身として捉える文献の一つである。

内容は、沐浴、施餓鬼、守護輪の修習といった前行の後、聞法の仕方と意義を説く。すなわち、一切有情の利益を思って聴聞することが大士の道の入り口だとし、慢など六の垢を離れて、仏を医師、法を薬などと想うこと、法を聞くなら悪趣の苦を離れられること、貴重な有暇・具足の人身を得た今こそ努力すべきだという。そして、究極の位を求めるために寿命や福徳など当面の幸福に拠ったのが秘密真言の特徴だという － これらは「菩提道次第」とも共通する規定である。 次にヴァーギーシュヴァラキールティ（ナーランダ寺六門の西門守護者。母タントラの熟達者）による「死を欺く（'chi ba bslu ba）」行法に言及する。そのような無死を成就する法のなかで、この教えは旧訳（snga 'gyur. すなわちニンマ）の金剛乗に属する直説である。それには一切経・埋蔵経・伝承教の区別があるが、この法の由来として、予言の埋蔵経 Lung bstan bka' rgya ma などより、ジクメーリンパの出現、パドマサンバヴァによる灌頂、この行法の広布などを述べる。

次に本行では、まず本頌より、智慧薩埵、ニンマの各祖師に依って勝者光明千相（rGyal ba 'Od mtshan stong. 無量光仏）を成就し、寿命の包摂、散失したものの召喚、滅尽したものの守護、奪われたものの摂取を行う。次に持明者と無二になった軌範師が、弟子に対して寿命灌頂する。死の近い人に対しても阿弥陀の慈悲は大きいと述べ、曼荼羅供養、三宝帰依、発心、資糧の集積を行う。次に七支供養を唱えて、弟子にも唱えさせる。寿命を召還し、パドマサンバヴァなどに加持され、甘露で洗浄される。金剛杵と寿命瓶をもち、無量寿父母尊を化仏としたパドマサンバヴァから大楽の甘露が流れて、心身を満たし、金剛の寿命を得たと観想する。最後に法身を種字により堅固にし、軌範師は無量寿として面前生起させ、色究竟天の浄土の受用身より世間、威光、地力、寿命、福徳のすべてが摂取されて、行者自身に溶け込むよう信解する。最後に報謝として、自顕現の吉祥銅色山（パドマサンバヴァの住処）などに廻向するよう説く。

作成者名：中御門敬教

Tshe bsgrub bDud rtsi'i zil mngar

書名の日本語訳：寿命成就の［無死］甘露の蜜
著者名：Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po
著者名よみ：ガクワンロサン・チュウデンペルサンポ
著者名別名：Blo bzang chos ldan、lCang skya hu thog thu、lCang skya1、灌頂普照広慈大国師章嘉呼図克図
著者生没年：1642-1715
成立翻訳年：17-18c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・北京版　大谷No.6284, lCang skya bKa' 'bum, Ca111a8-112b8
刊本の奥書刊記：（P.Ca112b7）'di ni 'Jam dbyangs gong ma chen po bBe skyid rgyal po'i sras mo dang pa rnam dpyod phul du phyin pa'i rgyan gyis mdzes pa'i kong jo gnyis pa'i thugs dam rgyun 'khyer du 'Jam dbyangs gong ma'i lung gis Kon ting phu'u shan bkvang tshi tā kan śrī ming bzhan lCang kya hu thog thur 'bod pa Ngag dbang Blo bzang chos ldan dpal bzang pos Bod chos lha khang du sbyar ba'i yi ge pa ni rnam dpyod dang ldan pa'i dGe tshul bsTan 'dzin chos dar ro / / Mangalaṃ / /
（これは文殊大皇帝である康熙帝の皇女　－殊勝なる浄信・智慧の飾りによって美しい第二公主－　の常行法として、文殊皇帝の御言葉によって、灌頂普照広慈大国師、別名が章嘉呼図克図と呼ばれるガクワンロサン・チュウデンペルサンポが、［おそらく北京の］チベット仏教寺院において著作した［。その］筆受者は、伺察をそなえた沙弥テンジン・チュウダルである。幸あれ！）
※音写語である下線部分は辞書や目録から訂正した。
解説：著者はロンポ寺座主とパンチェンラマ1世によりタクパウセルの転生者に認定され、ダライラマ5世により受戒し、ウで修学した。清朝と交流し、モンゴル、満州の教化を行った。

本著は冒頭に、ツォンカパから伝承された「深い寿命の導き」を実践しやすいようにまとめたものとされている。

具体的には、成就法共通の前行のあと、西方極楽の教主無量光の功徳を憶念して、帰依処として招き、その身語意の事業への讃を唱える。無量光仏が面前の虚空に住する姿やその持物を明確にする。帰命以下の七支供養を行う。畏怖からの救護、長寿を祈願する。無量光仏の身と鉢の種字から光が放たれ、一切有情の罪障を浄め、衆生を無量光仏の位に就ける。菩薩たちをも含めて供養し、加持を受けて、それが種字に溶け込み、甘露が増長したのを自己の鼻から摂取すると、それが身体中が満たされる。真言を唱えて、寿命の成就を得る。無量光仏が自己に溶け込むと思惟する。横死の相が見られると無量光仏が出現して死王を破る。無死の持明の獲得を祈願し、『宗要経』末尾の六波羅蜜の偈の要約による廻向・誓願・賞讃により、荘厳する。

作成者名：藤仲孝司

Tshe cho ga　－'Chi med dpal ster－

書名の日本語訳：［無量］寿の儀軌　－ 無死の吉祥を与えるもの －
著者名：Co ne Grags pa bshad sgrub
著者名よみ：チョネ・タクパ・シェードゥプ
著者生没年：1675-1748
成立翻訳年：17c後半-18c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.37, Kha, tshe 1a-24a, pp.25-36
刊本の奥書刊記：(23b3-24a2)Tshe dpag med kyi cho ga'i 'don cha nag 'gros su bkod pa ni / dad pa dang rnam dpyod zung du 'brel pa'i dka' bcu pa Blo bzang bsam 'grub dang/ dge slong Blo bzang dbang phyug gnyis kyis rang bzhan la phan 'dod kyi bdun pas bskul ba'i tshe / Shākya'i dge slong Grags pa bshad sgrub kyis / 'Dul 'dzin pas mdzad pa'i Tshe dpag med kyi dkyil 'khor gyi cho ga 'Chi bdag kun 'joms zhes grags pa la / × ma gnyis snang × / ×××× nyid kyis mdzad pa'i cho ga dngos dang/ gcig ni de la cung zad kha skong byas pa zhig tu snang bas / 'dir snga ma de gzhir byas pa yin na'ang/ de nyid nas 'byung ba'i 'chi blu'i skor dor/ Pan.chen gong mas mdzad pa'i Tshe dpag med kyi cho ga sogs nas legs(?) cha blangs te / sngar dgon 'dir mchis pa'i 'dod(?) cha dang

mthung par Co ne bshad sgrub gling du 'sgrigs pa ste cho ga 'di tshul bzhin du byas na/ gnas skabs tshe'i bar chad zhi zhing sdig sgrib 'dag pa dang / phyi mar bDe ba can du skyes nas sangs rgyas Tshe dpag med kyis rjes su 'dzin pa sogs phan yon shin tu che'o / smras ba / / snyigs ma'i 'gro ba kun gyi skyabs kyi phug / / bDe ldan zhing gi 'dren pa Tshe dpag med / / gang de'i dkyil 'khor cho ga 'od dkar can / / ×× 'gro 'di'i phan bde'i dpal du shar / / tshul 'dir sgo gsum 'bad las rnam dkar dge/ / Gangs ri'i tog 'dra'i × thob de yang / / gnas skabs tshe'i bar chad kun zhi zhing / /phyi mar bDe ba can du skyes phyir bsngo / / ces 'di yang gnas brtan Blo bzang dbang phyug gis 'di par du gno? par bzhed pa'i tshe bskul ba ltar bgyis shing / par ×× de nyid kyis × 'Jam dbyangs × khrims dang ×× gnyis so / / 'dis yang rgyal ba'i bstan pa la phan thogs par gyur cig / / sarvamangalaṃ /

（無量寿の儀軌［及び、その中］の唱える分を割註に提示したもの（本書）は、浄信と伺察が双運（総合）した十難学者ロサン・サムドゥプと比丘ロサン・ワンチュクの二人が、自他を益したいという楽欲により勧めたとき、シャーキャの比丘タクパ・シェードップが、ドゥルジンパが造られた『無量寿のマンダラ儀軌　－死王すべてを破るもの－』といって知られたものに、×二つ見られる×、×××自身が造られた儀軌そのものと、一つはそれに少し増補したものであると見えるので、ここには前者を基本としたが、同書に出ている「避死」の法類を捨てて、先のパンチェンが造られた『無量寿の儀軌』などから善い(?)分を承けて、前にこの寺院にあった考え方？と合わせて、チョネ・タクパ・シャッドップ・リンにおいて編纂した。この儀軌は如実に行ったなら、当座は寿命の障碍が鎮めて、罪障が浄められるのと、後には極楽に生まれてから無量寿仏により摂取されることなど利徳がきわめて大きい。

〔ここに〕語る － 濁世の衆生すべての最後の帰依処、極楽国土の導師無量寿、白い光を持ったそのマンダラ儀軌は、××この衆生の益・楽の吉祥として浮かんだ。この方軌に〔従って身語意の〕三門で勤めたことから白善、雪山の頂のような×を得た〔。〕それもまた、当座において寿命の障碍すべてが鎮まり、後には極楽国土に生まれるために廻向します。

というこれもまた、上座ロサン・ワンチュクがこれを版木にしたいと望んだとき、勧めたように造ったし、版木××そのものにより×ジャムヤン・ツルティムと、××二人です。これによってまた、勝者の教えを益しますように！

すべて吉祥であれ！）

解説：著者はゲルク派の学僧であり、セラ寺の教科書の著者としても有名であり、チョネ版大蔵経の開版にも関わった。チョネは、チョネゾン（Co ne rdzong. 現在の甘粛省甘南チベット自治区にある）にある古刹であるが、1459年にゲルク派の寺院となり、その管長や教学指導者として活躍した。

本著は、マンダラは無量寿九尊のものを用いており、ジターリの成就法に基づく詳細な無量寿仏のマンダラ儀軌である。そこに割注が加えられている。行者の身体における具体的観想の段階では、九尊ではなく金剛界五族の無量寿となっている。これはツォンカパ以降の「近伝」にも見られる。無量寿仏の成就法の通例として、無量寿仏とその眷属を極楽浄土から招くこと、さらにこの行法を行ったことの成果として死後の極楽往生が言及されるが、それ以上の論及はない。

所々で印刷が不鮮明であり、割注の小さな文字も読み取れない部分がある。また割注は、「避死」や「就寝法」や葬儀としての「南門」の行い方について論及する部分もある。割注にはドゥルジンパ（'Dul 'dzin pa）の儀軌と、パンチェン（Paṇ chen） の儀軌にたびたび言及して整理している。「或る人」として言及し、その作法を批判している箇所もある。「南門」に関しては、チャンキャ御前（Cang gyā（sic.） zhabs）の説にも言及する。奥書にも出るドゥルジンパ（持律者）はツォンカパの同輩で弟子ともなったタクパギェルツェン. 'Dul 'dzin Grags pa rgyal mtshan. 1374-1434/36）かと思われる。

構成は、１）親近の儀軌（1b2-7a3）、２）マンダラ儀軌への入り方（7a3ff.）からなる。

２）の部分はさらに、１）地の儀軌（7a3）、２）前行の儀軌（8a2）、３）本行の儀軌（11b4）の3つに分かれている。そのうち、前行の儀軌はさらに、１）明妃の儀軌（8a2）、２）仏尊の儀軌（8b3）、３）瓶の儀軌（10a4）、４）他者への灌頂するとき弟子の前行（11b3）という、4つに分かれている。また本行の儀軌はさらに、１）智線を引いて彩色する（11b5）、２）瓶を安置し荘厳を配置する（12b5）、３）成就し供養してから灌頂する(13a?)という、3つに分かれている。

作成者名：藤仲孝司

Tshe cho ga　－ 'Chi med 'dod 'jo dbang gi rgyal po－

書名の日本語訳：無量寿儀軌　－無死如意牛自在王－
著者名：Paṇ chen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan
著者名よみ：［パンチェン・］ロサン・チューキギェルツェン
著者名別名：Paṇ chen Lama Ⅰ（orⅣ）、Paṇ chen Chos rgyan
著者生没年：1567-1662
成立翻訳年：16c-17c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5919［Ga.1-26］
・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.1206, Folios.1a1-26b1
刊本の奥書刊記：(22a6-b1) 'di yang dge ba'i bshe sgnyen sde snod 'dzin pa mang pos yang yang nan gyis bskul ba la brten nas / mdo rgyud man ngag 'dzin pa'i spong ba pa Blo bzang chos kyi rgyal mtshan gyis Chos grwa chen po bKra shis lhun po'i gtsug lag khang du sSlob dpon Je tā ri'i gzhung Bya rgyud spyi'i lam dang mthun par sbyar ba'i Yi ge pa ni dGe tshul Blo bzang dar rgyas so / /

（これもまた、善知識であり［三］蔵の受持者の多くにより慇懃に勧められたことに依って、経・真言・口訣の受持者、世捨て人であるロサン・チョーキギェルツェンが大寺院タシルンポの経堂において、軌範師ジターリの典籍［に説かれた］所作タントラ一般の道に合わせて著作した［。その］筆受者は沙弥のロサン・ダーギェである。）

（24b6-25a1）yang dag lam la legs par 'khrid pa'i gnyen / / bstan pa'i pad tshal 'byed ba'i zhabs 'bring ba dGe slong bSod nams mtshan can gyis bskul nas / Shā kya'i dge slong Blo bzang chos kyi rgyal mtshan gyis lHa ldan du sbyar ba'o / /（正道に善く導く友であり、教えの蓮華の園を［花］開かせる従者であるソナムという名をもった比丘が勧めて、釈迦［族］の比丘ロサン・チョーキギェルツェンがハデン［すなわちラサ］において著作した。）

参考文献：・嘉木揚凱朝「モンゴル仏教における無量寿仏灌頂の研究」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』23、2003）
解説：著者はタシルンポさらにセラ、デプンといったゲル

ク派の大寺に住持し、ダライラマ4世、5世が具足戒を受けるとき親教師をも務めた。ダライラマ5世によるチベット統一政権の時代に大きな影響を与えた。彼は没後、阿弥陀仏の活仏として認定されたが、これはゲルク派ではダライラマ2世以降二人目であり、彼から遡って、パンチェンラマの系譜が成立することになった。

本著はジターリの著作『無量寿智儀軌』を承けた無量寿九尊のマンダラに基づく大きな儀軌である。ダツェパの『儀軌』と同じく、ジターリの三つの著作を総合し、その本文に言及し、引用なども明記している。「奥書」に言うように所作タントラ一般の作法と合わせて詳細に作法を示しているので、きわめて大部となっている。この行法は盛行し、関連する著作も著わされた。ラデン活仏ロサン・イェシェー・ラプギャの著作（東北 No.6243 Na）が依用するほか、ハルハ・タムチク・ドルジェ（1781-1855）も本著に基づく著作を著わした。現在のモンゴルでも高齢の在家信者に授けられており、その詳細が嘉木揚凱朝［2003］に報告されている。

冒頭には、この行法は死王から救済する稀有な方便であり、自他の利益のために行う儀軌であるとし、典籍と上人の教誡のとおりに述べる、という。全体の構造は、１）親近の儀軌（1a4-6b1）、２）マンダラの儀軌および避死（6a1ff.）となっている。6a6ff.には布画による場合、14b5ff. では灌頂、17a2ff. には甘露の瓶が９個の時、2個の時の作法、18b6ff. には避死の作法が示されている。『宗要経』の「無量寿智決定威光王」という仏名を用いること、灌頂の箇所に「世間の導師」云々の『無量寿讃』を用いること、『宗要経』の根本真言をチベット語訳していること、五供養女の観想と供養が見られることなどが注目される。

東北目録では Ga.1-26 を単一の典籍として記載しているが、奥書（22a6-b1）の後で一旦終わり、この行法を補完すると思われる小著作になる（23a1-24b6）。すなわち、持金剛・文殊師利・ツォンカパ以下のゲルク派の祖師へ修証一般を祈る願文である。直後の25a1ff. でも一旦終了し、廻向のための誓願文が置かれている。

作成者名：藤仲孝司

Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po'i sngags

書名の日本語訳：無量寿智の心呪の真言
著者名：Bu ston Rin chen grub pa
著者名よみ：プトン・リンチェンドゥプパ
著者名別名：Bu ston Rin po che
著者生没年：1290-1364
成立地：チベット
所収文献名：東北No.5170（gSang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gzungs 'bum chen mo「秘密真言四タントラ部の諸ダラニを一つにまとめた陀羅尼の大全集」）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5170(228)
The Collected Works of Bu-Ston, Part 16 (MA) edited by Prof. Dr. Lokesh Chandra from the Collection of Prof. Dr. Raghuvira International Academy of Indian Culture New Delhi、1969、Ma246a,491.4-492.1
刊本の奥書刊記：なし
解説：著者はチベット最大の学僧の一人であり、サキャ派のパクパがモンゴルの国師としてチベットを統治した時代の人である（多くの学僧からも学んだが、パクパからも学んでいる）。学僧としての名声を得て、シャルの領主から寄進を承けてシャル寺を大改修し、その住職となった。ナルタン寺所蔵のチベット語訳経論を整理して目録を作成し、後の大蔵経の基礎を造った。また顕密に多くの著作を残した。

本著もチベット訳経典より真言を集めたものの一つである。音写の状態は良くないが、「鼓音声ダラニ」所収の真言である。対応箇所は以下の通りである。

・デルゲ版　東北No.676, rGyud 'bum, Ba.221b5-222b7
　　東北No.850, gZungs 'dus, E.63a6-b2
・北京版　大谷No.361, rGyud, Ba.255a3-7

ただし末尾に「tadyathā / muni muni mahāmunaye svāhā /」の一文を付す。

作成者名：中御門敬教

Tshe 'das la 'pho ba bya tshul

書名の日本語訳：亡者における遷移の作法
著者名：sTag phu yongs 'dzin ye shes rgya mtsho
著者名よみ：タプク・ヨンジン・イェシェーギャムツォ
著者名別名：Ye shes rgya mtsho、Chos bzang ye shes rgya mtsho
著者生没年：1789 -1856
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No.2064, Folios 1a1-65a6 より、20a2-23b2
刊本の奥書刊記：（23b1-2）
'di yang rang nyid ro'i rtsar? mi 'dod bzhin du phan? kha yar 'gro? dgos byung skabs bya ba dang? bral pas bar do ngo sprod sogs gzhan na blang zhing de min dmigs rim go rim sogs 'di kha'i 'khrid zhu skabs bla ma'i man ngag sems la gang nges rnams brjed thor bris pa'o/
（これもまた、自己は死骸の脈管において？欲しないながら、？上に往く？必要性が生じた場合、［もはや］すべきことを離れた［死にゆく］者が、中有の解説などを他者から受けて、それ以外の［観想の］所縁の次第・順序など、この［死去する］ときの指導を請うた時、上師［から授けられたところの］口訣の［うちでで、自己の］心に決定したものを備忘録として書いた［ものである］。）
解説：著者はゲルク派の学僧であり、デプン、セラ両寺で学んだ後、チュサン寺(Chu bzang dgon)の座主を務めた。

本著は、無量光仏を招き、死者が迷わず極楽に往生するための作法・教誡を、簡略に説いた著作である。諸処に心構えや作法などが割注の形で注記されている。

まず世間八法の悪心を捨てて、死者へ大慈悲を生じ、『勝者無量光国土荘厳経』など三宝の依処を準備し供養してから、帰依・発心・四無量などの前行を行う。

次に真言とともに依処を空と観じ、死者の名と姿を観想する。三宝の真実（諦）や諸部の尊格、心呪、印、真言の真実、特に無量光仏の身語意の真実に依って、死者をこの葬儀の場所に招く。仏の心臓の光より、その識を呼び寄せ、頭頂を通って心臓に溶け込ませ、諸仏、特に文殊ヤマーリ(閻魔を降伏するもの)の真実により生前と没後の障碍を去らせる。

次に、死者に対して自らが中有にあることを知らせて、悪趣に生まれる相が現れたとしても、それらは幻のようなものであり、上師と三宝の慈悲と加持と力などにより恐れなくていいこと、死者の身体の脈管に識の滴が上下し、その滴は光明を本質とすると観想し、お迎えの言葉により、極楽から根本師と無差別なる無量光仏が眷属とともに来られたことを信解すべきことを説く。仏へ七支供養を行ってから、再び死者に教えさとす偈を説く。

死者を悪趣の怖れから解放し極楽浄土へ導くよう無量光仏に祈願する。ここで、仏の心臓の光により、死者の識がヒック、パットの種字とともに上に引き上げられ、頭頂の梵穴より抜けて無量光仏の心臓に溶けたこと、また極楽国土の仏の前に蓮華から生まれて、仏を見、法を聞き、成仏することを思い、真実の誓願をし、しばし三昧に入る。または〈普賢行願讃〉などの誓願を唱えるという。

なお、奥書の後にも小文字により教訓が記されている。すなわち、臨終時には信など善心を生じさせるべきこと、遺産を求める親族や愛憎の人を見させず、当人の死後の話やけんか・号泣などを聞かせず、僧俗みなが仏名やダラニ真言、最低でもマニを唱えること、仏名は畜生にも聞かせること、遺骨・遺髪や毛布を使用し、乳酪を飲食するときも、もとの有情を念ずると益が大きいと説かれた、という。

作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med kyi sgrub thabs

書名の日本語訳：無量寿の成就法
著者名：Ngag dbang Blo bzang rgya mtsho
著者名よみ：ガクワン・ロサンギャンツォ
著者名別名：Dalai Lama 5、'Jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen
著者生没年：1617-1682
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
所収文献名：rGyud sde rnam bzhi'i lha tshogs rnams kyi sgrub 'phrin bsnyen pa rjes gnang sogs kyi nyams len －mChog thun dngos grub 'dod dgu'i nye ma gyung za－（ラサ版　東北No. 5618）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5618(36)［Tha.75b3-76a5］
刊本の奥書刊記：（Tha. 76a4）Zur khang pa Phyo shug gnyis kyis nan gyis bskul ba la brten nas Za hol gyi bandes sbyar ba'i yi ge pa ni dpyod rgyas? bkras (bgras) ・・・du rda/rnga ・・・?
（スルカンパとチョシュクの二人により懇ろに勧められたのに拠って、ザホールの長老（Dalai Lama 5）が著作した［。その］筆受者は・・・（読解不能））
解説：パンチェン1世ロサンチョーキギャルツェンに受戒した。モンゴル・オイラット部のグシ汗がドメ、ツァンを平定し、ダライラマ5世に献上したことからチベットに統一政権を確立した。ラサにポタラ宮を建立し、清の順治帝の招待で北京をも訪ねた。顕密、歴史と著作は多く、チベット全体の統治者ともなったことからニンマ派の著作も多い。

本著は、無量寿智仏を成就し、灌頂を授かって自身の垢を浄化し、寿命を成就する行法である。明記はないが、文言や真言からすると、ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の無量寿仏成就法の系統に属する簡略な成就法のようである。内容の概略は以下の通りである。

帰依や発心の前行の後、まず我生起としては、法性・空性、それから蓮華、日月の座、さらにその上に自心のフーム字が転変した無量寿を観想する。傲慢を破る姿、右手は金剛杵を掲げ、左手は期克印を結び、尸林の装飾を完成し、右足は曲げ左足は伸ばして座った姿である。文殊・馬頭・金剛手・瑜伽女を四梵住の毛穴から放ち、諸尊が劫末時の火の中央に住する。額、喉、心臓の三処の三種字（オーム、アーハ、フーム）の表象より招いて、師と本尊と空行者に外・内・秘密の供養を捧げる。懺悔し、最上と共通との悉地を請う。金剛手の心臓のフーム字の端に真言蔓を観想して念誦し、廻向を誓願により捺印する。

面前生起としては、三宝帰依と発心を先行させ、自性清浄の真言により浄化し、前と同様に自心の赤フリー字が転変して、自身すなわち無量寿は赤色の受用身の姿で禅定印の上に寿命の瓶を持ち、金剛結跏趺坐により座っていると観想する。額、喉、心臓に三種字の三字より光が放たれて智慧サッタ、灌頂の本尊を招く。灌頂を授かるよう祈願し、真言を唱えて身体の垢が浄められる。残りの水が溢れる。それから、無量光仏が自らの頭の化仏になったと思惟する。無量寿智の真言を唱え、奏楽の間に供養する。三字を唱えて内の供養を捧げる。世間の導師により賞讃される。心臓のフリーヒ字のまわりの真言鬘から光が放たれる。寿命のもとを摂めたと思惟し、長短の陀羅尼をできるだけ唱える。終わりに善を回向し、誓願する。

作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med kyi sgrub thabs zab mo

書名の日本語訳：無量寿甚深成就法
著者名：'Phags pa
著者名よみ：パクパ
著者名別名：'Phags pa Blo gros rgyal mtshan
著者生没年：1235-1280
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.7（Bibliotheca Tibetica 7,The Complete Works of Chos Rgyal 'Phags Pa 2, Compiled by bSod Nams rGya mTsho, The Toyo Bunko, Tokyo, 1968)Pha3,35a5-Pha5,37a6
刊本の奥書刊記：1.（Pha5,37a5）bla ma'i zhal las legs par rtogs pa 'di / / Byang chub snyan par grags pas bskul gyur nas / / dPal ldan 'Phags pas gzhan gyi don du sbyar / / dge bas 'gro kun tshe dpag med gyur cig / / tshul 'di ni slob ma'i dam pa gcig gam gnyis la sbyin zhing mang du spel bar mi bya zhing 'byung kungs sba bar mi bya ste / / bla ma dang nye bar gdams pa la brnyas par 'gyur ro / / chu mo glang gi lo dgun zla ra ba'i yar gyi ngo la sMar khams Cam mdo'i gtsug lag khang du yi ger bkod pa'o /
（ラマのお口から良く証得されたこれは、チャンチュプ・ニェンパル・ダクパがお願いして、ペルデン・パクパが利他のために著述しました。［その］善根によって一切衆生が無量の寿命となりますように。このやり方は、弟子の中の優れた一人、あるいは二人に授けて、多くの者に広まらないようにし、出所を隠すべきではありません。［そうでないと］ラマと教えを軽視するようになるでしょう。

癸丑の年（A.D. 1253）の蔵暦十月の上弦に、マルカム（芒康）のチャムドにある経堂で文字に写しました。）
参考文献：・福田洋一・石浜裕美子『トゥカン『一切宗義』モンゴルの章』（『西蔵仏教宗義研究』4、1986）
解説：著者は、サキャ派の五祖の五番目であり、叔父サキャ・パンディタとともにモンゴルに出向き、モンゴルとの間に「施主・福田」の関係を築き、フビライの帝師ともなり、モンゴルの国威を背景にチベットにおけるサキャ派の統治をもたらした。サキャ派は初期からバリ翻訳師よりジターリ流の阿弥陀仏成就法を伝承し、五祖の中には極楽往生したと伝えられる人もいる。

この典籍はジターリ流の成就法と同じく『無量寿宗要経』に関連した成就法であり、そこに出る無量寿智決定威光王という仏の名と陀羅尼が用いられている。サキャ派の伝統を考えるなら、明記は無いが、ジターリ流の成就法が発見した形か、あるいはそれの影響を受けながら無量寿1尊の形となったものであると思われる。本著の冒頭には、

この行法の目的として、無量寿智のヨーガに依って、自他の寿命を延命するよう欲する者は、本尊ヨーガのみに依る方法と、瓶の儀軌に依る方法とがあるとされるが、本著は両方の作法を説明したものである。
作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med kyi sgrub pa'i thabs

書名の日本語訳：無量寿成就法
著者名：'Phags pa
著者名よみ：パクパ
著者名別名：'Phags pa Blo gros rgyal mtshan
著者生没年：1235-1280
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.7
（Bibliotheca Tibetica 7, The Complete Works of Chos Rgyal 'Phags Pa, 2, Compiled by bSod Nams rGya mTsho, The Toyo Bunko, Tokyo, 1968)Pha1,33a-Pha3,35a5）
刊本の奥書刊記：1.（Pha3, 35a3）dus min 'chi ba nges par 'joms byed pa'i / cho ga'i rim pa Ngan song sbyong rgyud las / / legs par gsungs pa bla ma'i man ngag gis / / gsal bar byas pa'i 'di ni 'Phags pas sbyar /
/de las dge ba rgya chen gang bskrun pa /
/ de yis 'gro ba ma lus 'chi bdag gi /
/ gyul las rnam par 'das nas tshe yi dpal /
/ bde dga' rgya mtshos brgyan pa thob par shog / /
sa mo lug gi lo dbyar zla 'bring po'i tshes nyi shu gsum la / rgyal bu byang chub sems dpa'i pho brang chen por sbyar ba'o / /
（横死を征服する儀軌の次第『悪趣清浄タントラ』に説かれたものを、ラマの口訣が明らかにしたこれは、パクパが著作した。
そのことから、生じたおよそ広大な善根、
それによって、衆生全てが死主の
軍隊から完全に解放されて、寿命の吉祥があり、
海のような安楽による荘厳を得ますように。
己羊年の夏月（蔵歴の四月から六月）、中［月］（五月）の二十三日に、王子である菩薩の大宮殿において著作した。）
参考文献：・高田仁覚『インド・チベット真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）
・桜井宗信「『ドゥルガティパリショーダナ・タントラ』－死者の救済と後生安楽を目指して」（松長有慶編『インド後期密教　上－方便・父タントラ系の密教』春秋社、2005）pp.148-149
・Tedeusz Skorupski, The Sarvadurgatipariśodhana-tantra、New Deili、1983
・酒井真典「悪趣清浄軌」「悪趣清浄軌のマンダラ」（『酒井真典著作集 第三巻 金剛頂経研究』 法蔵館、1983？）
・立川武蔵『西蔵仏教宗義研究　第一巻－トゥカン『一切宗義』サキャ派の章－』（東洋文庫、1974年）pp.60-63
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（二）－梵文テキストと和訳－」（『那須政隆博士米寿記念　仏教思想論集』大正大学真言学智山研究室編、1984）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（三）－校訂と和訳－」（『豊山学報』28・29合併号、1984）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（一）－梵文テキストと和訳－」（『壬生台舜博士頌寿記念　仏教の歴史と思想』大蔵出版、1985）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（四）－校訂と和訳－」（『豊山学報』30、1985）
・福田洋一・石浜裕美子『トゥカン『一切宗義』モンゴルの章』（『西蔵仏教宗義研究』4、1986）
・高橋尚夫「Sarvadurgatipariśodhanatantra（五）－校訂と和訳－」（『豊山学報』31、1986）
・塚本啓祥・松永有慶・磯田熙文編『梵語仏典の研究　・密教経典篇』（平楽寺書店、1989）
・中島小乃美「Buddhaguhyaの『一切悪趣清浄儀軌』観（1）」（『密教学』38、2002）
・中島小乃美「Ānandagarbhaの『一切悪趣清浄儀軌』観」（『密教学』39、2003）
解説：著者は、サキャ派の五祖の五番目であり、叔父サキャ・パンディタとともにモンゴルに出向き、モンゴルとの間に「施主・福田」の関係を築き、フビライの帝師ともなり、モンゴルの国威を背景にチベットにおけるサキャ派の統治をもたらした。サキャ派は初期からバリ翻訳師よりジターリ流の阿弥陀仏成就法を伝承し、五祖の中には極楽往生したと伝えられる人もいる。
『悪趣清浄タントラ』（東北No.483）は葬送儀礼に重視される密教経典であり、チベット仏教には最も初期から導入された。『摂真実』（『初会金剛頂経』）の釈タントラの一つであり、四部タントラのうちでは「ヨーガタントラ」に分類される。
本著は、同タントラの所説から、パクパの師の口訣に基づいて明らかにされた典籍である。内容は以下の四項目から構成されている。1.我生起・自性・真言・心呪・副心心呪について、2.現前生起のマンダラを完成し供養すること、3.瓶の儀軌、4.食事の加持である。ここで説かれたマンダラの様相は、無量宮の中心に無量寿仏がおり、四方に四菩薩（金剛手、虚空蔵、世自在、金剛羯磨）、四隅の内外に供養菩薩、四方の門に番人を配置している。こうした無量寿仏を含めた十七尊のマンダラに基づく、長寿の成就を目的とした成就法である。
作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med kyi brgyud pa

書名の日本語訳：無量寿の伝承
著者名：Bu ston Rin chen grub pa
著者名よみ：プトン・リンチェンドゥップパ
著者名別名：Bu ston Rin po che
著者生没年：1290-1364
成立地：チベット
所収文献名：東北No.5170（gSang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gzungs 'bum chen mo「秘密真言四タントラ部の諸ダラニを一つにまとめた陀羅尼の大全集」）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：The Collected Works of Bu-Ston, Part 16 (MA) edited by Prof. Dr. Lokesh Chandra from the Collection of Prof. Dr. Raghuvira
International Academy of Indian Culture New Delhi, 1969
1.The Collected Works of Bu-Ston, Part 16 (MA)
（14.4-14.6）
2.東北No.5170(24)
刊本の奥書刊記：なし
現代語訳書：・藤仲孝司、中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
参考文献：・田中公明『チベット密教』(春秋社、1993)pp.70-72
解説：著者はチベット最大の学僧の一人であり、サキャ派のパクパがモンゴルの国師としてチベットを統治した時代の人である（多くの学僧からも学んだが、パクパからも学

んでいる）。学僧としての名声を得て、シャルの領主から寄進を承けてシャル寺を大改修し、その住職となった。ナルタン寺所蔵のチベット語訳経論を整理して目録を作成し、後の大蔵経の基礎を造った。また顕密に多くの著作を残した。後継者はダツェパである。

本書は、無量寿智をはじめとする合計9名の伝承者（1.無量寿智、2.ダーキニー・シィディ・ラージャ、3.ヴァジュラ・キールティ、4.ボーディ・ラージャ、5.大王ラトナ・マハー、6.ラマ・サンユルバ、7.ヴィールヤ・シンハ、8.クマーラ・シィディ、9.ボーディ・プラジュニャー）に順次帰命することと、仏の立場から施主・サンガへの要請の文句が説かれる。マチク流の無量寿成就法の初期の相承系譜を伝えている。この典籍は東北No.5170（gSang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gzungs 'bum chen mo「秘密真言四タントラ部の諸ダラニを一つにまとめた陀羅尼の大全集」）の24番目に収録されている。これには、タントラ部に属するものに関して、出典・収録基準等の説明はないが、41作の相承系譜と349の真言を集成している。著者の大蔵経編纂事業の副産物の一つではないかと思われる。

作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med kyi mngon rtogs

書名の日本語訳：無量寿の現観
著者名：Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po
著者名よみ：ガクワンロサン・チュウデンペルサンポ
著者名別名：Blo bzang chos ldan、lCang skya hu thog thu、lCang skya1、灌頂普照広慈大国師章嘉呼図克図
著者生没年：1642-1715
成立翻訳年：17-18c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・北京版　大谷No.6332, lCang skya bKa' 'bum, Ja 21b2-22a8
刊本の奥書刊記：（P.Ja.22a6）'di ni rigs rus stobs 'byor phun sum tshogs pa Ha ra chin skal bzang e phu'i nyams len rgyun 'khyer du / phyogs mthar 'khyam pa'i sprang btsun gyin ba Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang pos / 'Jam dbyangs gong ma'i rgyal khab kyi Bod chos lha khang du grags par sbyar ba'i yi ge pa ni skad rigs dang yig rigs du ma la sbyangs shing rnam dpyod yangs pa'i dGe tshul bsTan 'dzin no / /
（これ（本書）は、種姓・力・富の円満なるハラチン・ケルサンエープーの実践を継承するために、あらゆる土地を遍歴する貧道愚僧ガクワンロサン・チュウデンペルサンポが、文殊皇帝（清朝皇帝）の宮殿のチベット仏教寺院と称されるところにおいて著作した［。］筆受者は、多種類の言語と文章について修学して伺察の広い沙弥テンジンである。）
解説：著者はロンポ寺座主とパンチェンラマ1世によりタクパウセルの転生者に認定され、ダライラマ5世により受戒し、ウで修学した。清朝と交流し、モンゴル、満州の教化を行った。

本著は、典型的な無量寿智仏の成就法であり、無量寿仏の修誦（本尊の修習と真言の念誦）すべき方法を簡略にまとめたものである。

具体的にはまず、共通の前行のあと、空性から種子、種子からに蓮華、月、その上に自心の赤のフリーヒ字が転変し、自己が無量寿智仏だと観想する。身体の色は赤、二手で禅定印を組み、無死の甘露に充ちた瓶をもち、荘厳に飾られた菩薩形をした、密教の阿弥陀仏の姿である。心臓のフーム字から光が放たれて、智慧薩埵と灌頂の諸尊を招く。智慧薩埵が自己に溶け、諸尊が灌頂し、無量光が頭頂の飾りとなっている。「無量寿智仏」の真言により供養する。「名号のみを聞いた者も、非時の死を残らず摧破し、寿命と福徳・智慧を授けてください。無量寿に帰命します」という『無量寿讃』と讃える。心臓の月輪の上のフリーヒ字を真言鬘が囲み、光が放たれる。五大の精髄、世間の功徳、仏菩薩の加持・威力が甘露の光として真言鬘に溶け、それから甘露が流れて、病・罪障を浄め、寿命・福徳が増益され、死のない寿命の持明者になったと思念する。心呪と長陀羅尼を唱える。百字真言により堅牢にして、自己が無量寿主となり、衆生すべてをそうするように善根を廻向し、三宝の吉祥により荘厳する。

作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med kyi snying po'i sngags

書名の日本語訳：無量寿の心呪の真言
著者名：Bu ston Rin chen grub pa
著者名よみ：プトン・リンチェンドゥプパ
著者名別名：Bu ston Rin po che
著者生没年：1290-1364
成立地：チベット
所収文献名：東北No.5170（gSang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gzungs 'bum chen mo「秘密真言四タントラ部の諸ダラニを一つにまとめた陀羅尼の大全集」）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：The Collected Works of Bu-Ston, Part 16 (MA) edited by Prof. Dr. Lokesh Chandra from the Collection of Prof. Dr. Raghuvira
International Academy of Indian Culture New Delhi, 1969
1.The Collected Works of Bu-Ston, Part 16 (MA)
（Ma246a,491.1-491.3）
2.東北No.5170(226)
刊本の奥書刊記：なし
参考文献：・池田澄達「梵本アパリミターユル陀羅尼経の校合」（『宗教研究』1-3、1916）
・Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman, Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras, Hague, 1968
・高田仁覚『インド・チベット　真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）
・藤仲孝司、中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：著者はチベット最大の学僧の一人であり、サキャ派のパクパがモンゴルの国師としてチベットを統治した時代の人である（多くの学僧からも学んだが、パクパからも学んでいる）。学僧としての名声を得て、シャルの領主から寄進を承けてシャル寺を大改修し、その住職となった。ナルタン寺所蔵のチベット語訳経論を整理して目録を作成し、後の大蔵経の基礎を造った。また顕密に多くの著作を残した。

本著もチベット訳経典より真言を集めたものの一つであり、『宗要経』所収のダラニ（cf.［1916］池田、p.552）である。内容は無量寿智仏の福徳への称賛である。ただし三回のoṃで始まるこのダラニの冒頭に「Oṃ vajrāyuḥ hūṃ ā / Oṃ puṇye puṇye mahāpuṇye / aparamitāyurpuṇye jñānasaṃbharopacite svāhā / 」が付け加わっている。

この典籍は東北No.5170（gSang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gzungs 'bum chen mo「秘密真言四タントラ部の諸ダラニを一つにまとめた陀羅尼の大全集」）の226番目に収録されたものである。著者の大蔵

経編纂事業の副産物の一つではないかと思われる。
　プトン『タントラ目録』の『宗要経』の箇所には、「oṃが三つあり、その間にpuṇyaが一つあるもの」と「oṃが二つあり、その間にpuṇyaがないもの」といった二経が挙げられている。oṃが二つのものと三つのものは、それぞれ'Og min gyi tshe dpag med（色究竟天の無量寿［経］[No. 1253]）、bDe ba can gyi tshe dpag med（極楽の無量寿［経］[No. 1254]）と呼ばれている。これは、仏のいる上方の世界を色究竟天と解釈した区別である。しかし、ケードゥプ・ジェは『タントラ概論』において、経典では両者とも上方の無量寿のダラニとして説かれたことを理由として、プトンの記述を批判している。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med kyi mdo sde'i sngags

書名の日本語訳：無量寿経の真言
著者名：Bu ston Rin chen grub pa
著者名よみ：プトン・リンチェンドゥプパ
著者名別名：Bu ston Rin po che
著者生没年：1290-1364
成立地：チベット
所収文献名：東北No.5170（gSang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gzungs 'bum chen mo「秘密真言四タントラ部の諸ダラニを一つにまとめた陀羅尼の大全集」）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：The Collected Works of Bu-Ston, Part 16 (MA) edited by Prof. Dr. Lokesh Chandra from the Collection of Prof. Dr. Raghuvira
International Academy of Indian Culture New Delhi, 1969
1.The Collected Works of Bu-Ston, Part 16 (MA)
（Ma246a,491.3-491.4）
2.東北No.5170(227)
刊本の奥書刊記：なし
参考文献：・池田澄達「梵本アパリミターユル陀羅尼経の校合」（『宗教研究』1-3、1916）
・Ferdinand D. Lessing and Alex Wayman, Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras, Hague, 1968
・高田仁覚『インド・チベット　真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）
・藤仲孝司、中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：著者はチベット最大の学僧の一人であり、サキャ派のパクパがモンゴルの国師としてチベットを統治した時代の人である（多くの学僧からも学んだが、パクパからも学んでいる）。学僧としての名声を得て、シャルの領主から寄進を承けてシャル寺を大改修し、その住職となった。ナルタン寺所蔵のチベット語訳経論を整理して目録を作成し、後の大蔵経の基礎を造った。また顕密に多くの著作を残した。
　本著もチベット訳経典よりダラニを集めたものの一つであり、『宗要経』所収のダラニ（cf.［1916］池田、p.552）である。その内容は無量寿智仏の福徳への称賛である。『宗要経』のダラニにはoṃが三つのものと、中間の段が抜けた二つのものがあり、これは後者である。
　この典籍は東北No.5170（gSang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gzungs 'bum chen mo「秘密真言四タントラ部の諸ダラニを一つにまとめた陀羅尼の大全集」）の227番目に収録されている。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med kyi bla brgyud －sMon shis sogs smon shis le tshan－

書名の日本語訳：無量寿の師の伝統　－誓願・祝詞など、誓願・祝詞の類－
著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa（クンタン3世）、
dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c末-19c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME　Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 39A, New Delhi 1975　Vol.8, Ja, sMon-shis 1a-9a6　465-481（なお別の版では Tha巻）
刊本の奥書刊記：3b4-6（第１の著作の奥書）
'di ni Khya dge legs bshad gling du sngar nas rJe bla ma'i dngos slob Lha gzigs grags pa rgya mtsho'i Tshe dpag［med］gi cho ga 'don rgyun bzhin/ de'i kha skong bla brgyud smon shis dang bcas pa zhig dgos tshul nang 'og ma'i Bla ma Rab 'byams pa 'jam dbyangs mkhas grub rgya mtsho dang/ dGe slong Blo bzang dar rgyas bcas kyis bskul ngor bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron meds bris ba'o/
（これは、キャ・ゲレクシャリンにおいて前から尊師の直弟子［であり、本尊を見たと称される］ハシク・タクパ・ギャツォ［著］の無量寿の儀軌を唱える伝統のとおりに、それの増補［として］『師の伝承　－誓願・祝詞をともなたもの－』が必要であることを、ナン・オクマ（内の下）の師ラプジャムパ・ジャムヤン・ケードゥプギャツォと、比丘ロサン・ダルギェーとが勧めた折りに、尊者コンチョク・テンペードンメが著した。）
4a6-b1（第２の著作の奥書）
'di'ang Khya dge dgon gyi nang 'og ma'i Bla ma 'Jam dbyangs mkhas grub dang/ dad ldan dGe slong Blo bzang dar rgyas gnyis kyis bskul ngor bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes bris ba'o/
（これもまた、キャ・ゲ・ゴン［寺内］のナン・オクマ（内の下）の師ジャムヤン・ケードゥプ［・ギャツオ］と、信をもった比丘ロサン・ダルギェーの二人が勧めた折りに、尊者コンチョク・テンペードンメが著した。）
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。
　本著作のうち、阿弥陀仏に関するものは最初の二つの小品であり、その願文からは、ゲルク派での阿弥陀仏信仰の伝承を概観できる。後には文殊師利智慧薩埵、ミトラヨーギン流の大悲［観自在］、白傘蓋仏母に関する小品である「師の伝承と祈願文」をも含んでいる。
　第一の著作は、1b1-2a6, 2a6-3b4 の2部構成になっている。前半は大乗の仏道として、共通の菩提道次第と、秘密真言－特に所作タントラの法類－に関して自らが祈願する文である。後半は、善を廻向し他者について祈願する文章を反復するが、その祈願の対象は、1)無量寿、ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)、ツォンカパとその弟子、無量光の化身としてのパンチェン３世ペルデン・イェシェー、ジャムヤンシェーパ2世、コンチョ

ク・ジクメーワンポという直接・間接の師の伝承、2)『無量寿宗要経』の教主無量寿智決定威光王のマンダラの諸尊、3)ジターリの儀軌類の教主無量寿九尊、4,5)無量寿の所作タントラの主尊である上方の無量寿の108の名、極楽の無量寿108の名のダラニ類、灌頂と誓言、身語意の金剛を成就させる静慮・瑜伽など、教と証得の諸々の正法、6,7)仏と法を信じて修道に勤め、教誡して教えを増長させる聖なる僧伽、8,9)無量寿仏の五智であり、完成された無量宮などとなっている。本作では、所作タントラ所属の〈無死鼓音声ダラニ〉〈無量寿宗要経〉、ジターリの成就法文献に説かれた阿弥陀仏にまつわる概念や用語（水と宝冠の灌頂、有相・無相ヨーガ、六尊）が多く用いられている。

第二の著作(3b6-4a6)は、インドからチベットにわたるジターリ流の無量寿仏の伝承の諸師の名を挙げては、「祈願します。最上と共通の悉地を授けてください」という祈願文が反復される。最後に、無量寿仏による摂取、地・道の速やかな証得、無量光の位の速やかな獲得を祈願する。

作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med dkar po phyag bzhi pa

書名の日本語訳：白無量寿四臂
著者名：Blo bzang nor bu shes rab
著者名よみ：ロサン・ノルブ・シェーラプ
著者名別名：Chings su tsug thu No mon han Blo bzang nor bu shes rab、Su ma ti ma ṇi pradznyā
著者生没年：1677 / 1737－?
成立翻訳年：17c / 18c
所収文献名：Yi dam rgya mtsho'i sgrub thabs Rin chen 'byung gnas kyi lhan thabs gsal ba'i me long（本尊海の成就法 － 宝生の補遺の明鏡）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・「東洋文庫蔵チベット蔵外文献」Ref. No. 0420, Folios200a6-204a6
刊本の奥書刊記：なし。
解説：著者はモンゴルで活躍したゲルク派の学僧である。シェーラプギェルツェン（Shes rab rgyal mtshan.年代不明） の弟子でもある。生没年については1677 / 1737－の二説あり、TBRCは前者を採用している。

本書も叢書『本尊海の成就法 － 宝生の補遺の明鏡』に収録された成就法の一つであり、後期の無上ヨーガを内容とする。類似の行法にガクワンロサン・チュウデンペルサンポ（チャンキャ1世 1642-1715）の『白無量寿の成就法』がある。

具体的内容は、一般の前行の後、バム字から蓮華、ア字から月輪［座］、その上のオーム字の放射・収斂から、無量寿仏を観想する。その身は白で1面4臂3眼である。第一の右手、左手は白金剛杵、水晶蔓を持ち、背後の二手は母を抱く禅定印であり、その上に白色甘露が満ちた水晶瓶を持ち、足は金剛結跏趺坐である。母尊の蓮華クンダリは赤色であり、第一の左右の手で珊瑚の数珠と鈴を持つ。背後の2本は父を抱き、赤色甘露が満ちた紅蓮華瓶を持ち、足は蓮華結跏趺坐である。両者とも自らの現れの父として、絹と宝で飾られた頭頂に大日、喉に無量光、心臓に不動、臍に宝生、秘密処に不空成就を伴っている。次に、心臓からの光の放射、智慧サッタと三味耶サッタとの無二、灌頂尊の招請、祈願、甘露の身体充満、〈宗要経〉のダラニ読誦、百字真言の読誦、善根の廻向、食事の洗浄、無量寿仏の面前生起、供養などを行い、生死を断つ無量寿仏を賞讃、祈願する。

次に、加持の儀軌である。まずマンダラを作成し、瓶・螺貝・ダラニ等を置き、供養の食事で取り囲み、我生起をして浄化し、空性から宝瓶を立ち上げ、瓶の水と本尊の水流を無二とし、そこのパン字から無量光仏を立ち上げ、オーム字の放射・収束と真言より我生起のように行って、供養、賞讃、陀羅尼と真言の念誦、瓶とその甘露の観想、供物の加持、祈願を同様に行い、瓶が本尊の甘露に溶解し、一味になる。

懺悔の七支を行い、祈願してから、本行として弟子に瓶儀軌を行う。世尊無量寿智仏となった瓶を弟子の頭頂に観想させて、瓶を弟子の頭頂に置く。父母尊が入定した菩提心が無死智慧甘露になり、それが頭頂の梵浄穴から入り、眉間以上を満たし瓶灌頂、喉以上を満たし秘密灌頂、心臓以上を満たし般若智灌頂、身体中を満たし第四灌頂を得る。これは後期密教のうち父タントラを代表する〈秘密集会タントラ〉の四種灌頂と一致する。ここで三業の習気を具えた垢が清浄になると信解させて、瓶水を与える。次に先述の無量寿仏を同様の次第で観想させ、成就させる。陀羅尼、真言を念誦させて、供養・賞讃などをし、種字を思念し、廻向、誓願して終結する。

作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med dkar po'i sgrub thabs

書名の日本語訳：白無量寿の成就法
著者名：Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po
著者名よみ：ガクワンロサン・チュウデンペルサンポ
著者名別名：Blo bzang chos ldan、lCang skya hu thog thu、lCang skya 1、灌頂普照広慈大国師章嘉呼図克図
著者生没年：1642-1715
成立翻訳年：17-18c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・北京版　大谷No.6347, lCang skya bKa' 'bum, Ja 58a1-b8
刊本の奥書刊記：（P.Ja.58b6）Grub chen Mi tra Dzo ki nas brgyud pa'i Tshe dpag med dkar po'i mngon rtogs shin tu bsdus pa 'di ni rig（rigs）rus phun sum tshogs pa'i dad ldan so nyid kyi tha'i ji Seng gdong mas rgyun 'khyer du 'di lta bu zhig dgos zhes ba skul ba'i ngor Ban rgyan sNyom las pa Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang pos mTsho bdun gyi lha khang chen mor sbyar ba'i yi ge pa ni sDom brtson dge slong bsTan 'dzin chos dar ro / / bkra shis / /
（大成就者ミトラゾーキから伝えられた白無量寿の現観を極略したもの－これは、種姓が円満であり信仰をもったソニの太子が、「センドンマが常用するものとして、このようなものが必要です」と勧めた折りに、老僧・貧道のガクワンロサン・チョデンペルサンポが七湖の大寺院において著作した［。その］筆受者は、出家者・比丘テンジン・チョダルである。吉祥あれ！）
解説：著者はロンポ寺座主とパンチェンラマ1世によりタクパウセルの転生者に認定され、ダライラマ5世により受戒し、ウで修学した。清朝と交流し、モンゴル、満州の教化を行った。チャンキャ活仏の系譜はタクパ・オセル（Grags pa 'od gsal）を1世とし、本論の著者ロサン・チュウデンを2世とする数え方もあるが、通常はロサン・チュウデンを1世、『学説規定』で有名なロルペードルジェを2世とする。

本著は、インドの成就者ミトラヨーギンから伝承された行法であり、白無量寿を本尊とし、真言念誦を行う方法を説いたものである。

まず成就法共通の前行のあと、空性から種子、種子からに蓮華・月、その上に自己の心にある白の阿字が転変し、自己が無量寿智決定威光仏として坐しているのを観想する。身体の色が白であるほかは、二手で禅定印を組み、無死の

甘露に充ちた瓶をもち、荘厳に飾られた菩薩形をした密教の阿弥陀仏の姿である。頭頂、喉、心臓の種子から無量の光が放たれて、上方の「功徳無量世界」から仏菩薩を招き、自己に溶けて無二になる。心臓の月輪の上の白の種字を長い陀羅尼が囲み、光が放たれ、有情の苦と罪を浄める。仏菩薩の慈悲・加持が自己に溶け込み、寿命・福徳・智恵の増益を思念する。『宗要経』の中心の心呪を唱えて、自己の前に智慧薩埵を観想し、念誦・供養し、無量寿智決定威光仏に帰命し、祈願する。智慧薩埵を迎えて自己は三昧耶サッタの慢により、自己が無量寿主となり、衆生すべてをそうならせるように善根を廻向する。

白無量寿仏の場合、無上ヨーガにおいて白衣明妃と関係する場合もあるが、この成就法は仏や国土や真言から見て、通常よりも、所作タントラの『無量寿宗要経』の影響が顕著である。

作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med gyi bstod pa －Padma'i phreng ba－

書名の日本語訳：無量寿讃　－蓮華蔓－
著者名：'Phags pa
著者名よみ：パクパ
著者名別名：'Phags pa Blo gros rgyal mtshan
著者生没年：1235-1280
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.7（Bibliotheca Tibetica 7, The Complete Works of Chos Rgyal 'Phags Pa 2, Compiled by bSod Nams rGya mTsho, The Toyo Bunko, Tokyo, 1968）Pha5,37a6-Pha6,38a5
刊本の奥書刊記：1.（Pha6,38a4）mngon par bstod cing rab tu gsol ba'i tshig / / Padma'i phreng ba ranm par spel ba 'dis / / Tshe dpag med mgon thob phyir Jim gyim gyis / / rab tu bskul nas 'Phags pas sbyar ba yin / / bcom ldan 'das Tshe dang ye shes dpag tu med pa la bstod pa'i tshig / / Padma'i phreng ba zhes bya ba 'di ni / / lung dang rigs pa'i de kho na nyid smra ba / 'Phags pa zhes bya bas sa pho stag gi dbyu gu'i zla ba'i tshes brgyad la sbyar ba'o / /
（現前に讃歎しつつ、お願いする句である『蓮華蔓』を発展させる、この［著作に］よって、無量寿教主［の位］を得るために、ジムギムが促して、パクパが著述しました。(v. 13)

世尊無量寿智を讃歎する句である『蓮華蔓』とは、教言と論理の真理を語る者であるパクパが、戊寅の年（A.D. 1278?）の婁宿月の18日に著述しました。）

参考文献：・福田洋一・石浜裕美子『トゥカン『一切宗義』モンゴルの章』（『西蔵仏教宗義研究』4、1986）
解説：著者は、サキャ派の五祖の五番目であり、叔父サキャ・パンディタとともにモンゴルに出向き、モンゴルとの間に「施主・福田」の関係を築き、フビライの帝師ともなり、モンゴルの国威を背景にチベットにおけるサキャ派の統治をもたらした。サキャ派は初期からバリ翻訳師よりジターリ流の阿弥陀仏成就法を伝承し、五祖の中には極楽往生したと伝えられる人もいる。

本著は、ジターリ流と同じく『無量寿宗要経』に基づいた簡単な讃であり、仏名も同経に説かれる「無量寿智決定威光王」が用いられている。著者は同様に『無量寿宗要経』に基づいて『無量寿讃』がもう一つ著しているが、それはきわめて短い。サキャ派の伝統、『無量寿宗要経』の影響ということから、ジターリ流の『無量寿讃』との関連が検討されるべきであろうが、前者が無量寿九尊に関するものであるのに対して、本著はそうではない。九尊とは別の形の行法が行われ、そこで用いるための讃であったと思われる。

13偈から構成されており、最後のものが奥書を兼ねている。1偈から4偈によって、無量寿智決定威光王の身口意の特徴を挙げてそれに帰命すること、9偈は息災、10偈と11偈によって世間と出世間の円満な成就に対する祈願、12偈によって願いの成就を蓮華の開花（通常、成仏の喩えとされる）に例えて説いている。

作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med grub rgyal lugs kyi zhi rgyas kyi sbyin sreg dngos grub kun 'byung

書名の日本語訳：無量寿［ダーキニー］シッディラージャ流の息災・増益の護摩 － 成就すべての出現 －
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 1816, Folios Ca Tshe-sreg 1a1-12a2
刊本の奥書刊記：（11b5-12a2）
lCang lung × sprul ba'i × nas Grub rgyal lugs kyi Tshe dpag med dang Tshe dpag med lha dgu'i zhi rgyas kyi sbyin sreg bya tshul gang rigs ? ×/ ××× 'di lta bu zhig dgos zhes bskul ba'i ngor/ Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos gzim chung bka' gdams po brang du sbyar ba'o / /

/ /oṃ sva sti / phan bde'i 'byung gnas rgyal bstan yongs 'du'i ljon/ /rab rgyas 'gro kun thar mchog 'bras bzang la/ /spyod phyir bKra shis lhun grub chos grwa cher/ /chos sbyin 'dzad med dal gro'i rgyun 'di spel/ /sa rba dza ga tiṃ/ /
（チャンルン［寺］×の活仏より、ダーキニー・シッディラージャ流の無量寿と、無量寿九尊の息災・増益の護摩の作法×××、×××このようなものが必要です、と勧められたのにちなんで、シャーキャの比丘ロサンペルデン・テンペーニマ・チョクレナンギェルペルサンポが、［タシルンポ寺の］寝室であるカダム御坊で著作した。

オーン、スヴァスティ、利益・安楽の源である仏教全体が集まる広大な楽園 － 衆生すべてが最上の解脱の妙果を受用するためのタシルンポの大寺院－において、法施の無尽のこの河の流れを増長させよう！サルヴァジャガタム）
（チャンルン寺は内モンゴルにあるゲルク派の大きな寺院である。ここにいう活仏は年代的に、清朝とも関係があった Ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan. 1770-1845のことかと思われる。）

参考文献：・田中公明『チベット密教』（春秋社、1996）pp.220-226
・北村太道「護摩儀礼」（立川武蔵・頼富本宏編『チベット密教』シリーズ密教２、 春秋社、1999）pp.221-236
解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、

ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。

ダーキニー・シッディラージャすなわちマチクには無上ヨーガタントラ部に分類される無量寿成就法と無量寿の護摩の儀軌があり、ジターリには所作タントラ部に分類される無量寿九尊の成就法がある。本著は題名が示すように前者を中心とした護摩儀軌であるが、ジターリ流の要素も取り込まれている。刊本には一部分印刷が不鮮明な個所がある。同様の傾向の先行著作には、ダライラマ２世ゲドゥン・ギャンツォ著『無死なる寿命の成就』や特にチョネ・ダクパシェードゥプ著『文殊から尊者リンポチェなどに伝承された文殊流の無量寿五尊の認可』がある。

まず加行の儀軌として、本尊ヨーガによる地の浄化、マンダラの作成、世間と出世間の火天の炉と供物の準備を行う。蓮華座に東を向いて坐り、洗浄水ないし内供養を成就し、加持して、金剛杵は方便、鈴は智恵であり、菩提心だと思い、真言を唱え、印を結んで、金剛薩埵などを喜ばせる。クシャ草により洒水する。内の供物を真言と印により加持して浄化して、外の五甘露になったと思惟し、息災と吉祥を祈願する。

根本儀軌としては、まず空性から世間の火天を観想し、三昧耶薩埵の種字の光から忿怒明王が智慧薩埵を招いて、炉に火天を安住させ、賞讃する。三昧耶と真言を唱えて、解脱と一切智者への障碍、三律儀に反する自性罪・遮罪、吉祥円満への障碍の消去を祈って供養する。出世間の火天については、火天の心の種字から無量寿智仏を観想し、極楽などから無量寿仏と眷属を招く。瓶の智慧の甘露が真言により頭頂から入る。真言を唱えながら供物を捧げて、罪障や病魔などが浄化されたと観想する。無量寿智の真言などを唱えて、讃嘆して供養する。

最後に過失への寛恕を請い、最上の成就を授かるよう祈願し、火天は本地に去り、三昧耶サッタは自己に溶け込む。火天を讃え、祈願して、終了する。さらに儀軌を広汎に行う場合に唱えるべき文句、行うべき儀軌の個々について規定が記されている。

作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med 'chi med rnga sgra'i dkyil chog　－Tshe dpal ye shes bsam 'grub－

書名の日本語訳：無量寿無死鼓音のマンダラ儀軌　－寿命の吉祥と智慧の如意成就－

著者名：sGra tshad pa Rin chen rnam rgyal

著者名よみ：ダツェパ・リンチェンナムギャル

著者生没年：1318-1388

成立翻訳年：1382

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：ラサ版　東北No.5233

同版の本典籍はThe Collected Works of Bu-Ston, Part 28 (SA) edited by Prof. Dr. Lokesh Chandra from the Collection of Prof. Dr. Raghuvira, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1969（Sa 1a-Sa 13a, 25.7）にも収録。

刊本の奥書刊記：（25,Sa13a5）'di ni rigs rus yon tan dpal gyis brjid / / tshe dang ye shes kun dga' ra pa'i dpal / / gang la 'byor ba rgyas pa'i bkas bskul nas / / dge slong sGra tshad pa yis sbyar ba yin / / de yi dge bas 'chi med rdo rje yis / / 'chi bdag lha min bdud kyi dbung bcom nas / / 'chi med bdud rtsi'i dpal la dbang 'byor ba'i / / kun mkhyen 'chi med dbang po 'grub gyur cig / / Tshe dpag med 'chi med rnga sgra'i dkyil cho ga Tshe dpal ye shes bsam 'grub ces bya pa 'di / sKu zhang Chen po Ta'i si tu'i bkas bskul ba'i ngor / chu pho khyi'i lo smin drug can gyi zla ba'i tshes brgyad kyi nyin / chos gnas chen po Ri phug tu sbyar ba'i yi ge pa ni / Rin chen dPal bzang ngo /

（本書は、「種族の功徳の吉祥さによって威光［であり］、寿命と智慧の園林の吉祥［である］、資財の広大な者［たる人］により勧められて、比丘ダツェパが著述したものです。その善により、無死の金剛をもって死主・阿修羅・魔の軍を滅してから、無死甘露の吉祥さについて自在を得た一切智の無死の力が成就しますように。「無量寿の無死の鼓音のマンダラ儀軌　－寿命の吉祥と智慧の如意成就－」という［名の］この［典籍］は、クシャンチェンポ・ターという司徒［が、そ］の御言葉により勧めた折に、壬戌の年（1382）の昴月（蔵暦9/16-10/15）の9日の日中、［シャル寺近郊の］法の栄んな土地であるリプ［寺］において［ダツェパが］著した［。それを］筆受した者は、リンチェン・ペルサンである。）

参考文献：・藤仲孝司、中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）

解説：著者ダツェパは大学者プトンの法嗣であり、師の仕事を受け継ぐ著作を多く残している。そのため、彼の著作は師の全集に併せて収録されている。「ダツェパ」という通称も、「ダ」すなわち声明(文法学)、「ツェ」因明(論理学)の人という人であり、顕教の学問を中心としていたようである。

本著は、ジターリの『無量寿智儀軌』を承けてまとめられた、無量寿九尊に基づく大きな儀軌書である。「軌範師の本文」としてジターリの本文を引用し、増補・広説している。同著者の『無量寿讃』も引用している。無量宮の観想、無量寿諸尊、四天王や天部衆の供養、真言の読誦などが詳細に記されて、ジターリが省略した六波羅蜜の偈なども『無量寿宗要経』から提示されている。『鼓音声ダラニ』（大正12 No.370; D No.676 Ba, No.850（５）E）自体は『阿弥陀経』の所説を承けながら、阿弥陀仏や極楽浄土を念ずるダラニを唱えることによって極楽往生をも説くが、本著作では同経の内容を直接扱うわけではない。むしろ、本典籍中に「「無死鼓音声」を儀軌どおりに描く」と言われているように、ジターリの儀軌が『鼓音声ダラニ』のダラニを中心に据えていることから、その系統の典籍が「無量寿無死鼓音のマンダラ儀軌」と呼ばれているのである。またジターリの典籍に見られた呪術的な要素についても、詳細に規定されたものが見られるが、それらが本来あったものなのか、増広されたものなのか、またどのように発展したのかなどは、不明である。

具体的に見ると、冒頭の帰敬偈では、無量寿仏は、帰依者を輪廻と涅槃におけるあらゆる衰退、退転から保護し、解脱・福利・安楽に結び付ける依怙主であると説く。また続く著作の目的として、「この著作は多くの学者・行者が明らかになさったが、他者により勧められたから、知恵の劣った私も［著作しようと］悦ぶ」とあり、この系統の儀軌が当時すでに幾つか存在していたようである。著作自体の冒頭には、「『無量寿無死鼓音』を通じて自他の死を欺くことと、寿命と智慧の悉地を成就するよう願う人が行う次第において前［行］に［師尊に］親近することの区分と、［本行として］マンダラ［に］より次第に行うべきこと」という二つの大きな項目が、立てられている。

作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med dwangs ma bcud 'dren gyi sgo nas gzims chung brtan bzhugs kyi cho ga sgrigs dang gang rgyun gyi rnal 'byor la dgos pa'i lhan thabs bcas pa

書名の日本語訳：無量寿の精髄錬金による寝室、久住の儀軌および常行瑜伽に必要なる補遺
著者名：Ngag dbang Blo bzang rgya mtsho
著者名よみ：ガクワン・ロサンギャンツォ
著者名別名：Dalai Lama 5、'Jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen
著者生没年：1617-1682
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5779［Nga.1a1-5a6］
刊本の奥書刊記：Bhrūm mtshan rdo rje'i rwa gdengs thog mda'i rgya can nang gi Tshe dpag med dwangs ma bcud 'dren gyi sgo nas gzims chung brtan bzhugs kyi cho ga sgrigs dang gang rgyun gyi rnal 'byor la dgos pa'i lhan thabs bcas pa chu babs su Za hor bandes bkod / /
（ブルームの相［である］金剛杵股を掲げた雷鳴の印をした『無量寿の精髄錬金による寝室、久住の儀規および常行瑜伽に必要なる補遺』の流伝として、サホールの長老［ガクワン・ロサンギャムツォ］が提示した。）
参考文献：・静春樹「仏教タントリストの飲食による成就」(『高野山大学密教文化研究所紀要』17,2004)p.63ff.
解説：パンチェン1世ロサンチョーキギャルツェンに受戒した。モンゴル・オイラット部のグシ汗がドメ、ツァンを平定し、ダライラマ5世に献上したことからチベットに統一政権を確立した。ラサにポタラ宮を建立し、清の順治帝の招待で北京をも訪ねた。顕密、歴史と著作は多く、チベット全体の統治者ともなったことからニンマ派の著作も多い。

本著は、パドマ・サムバヴァの教えである智慧の五光自在の錬金術による無死寿命の儀軌を実践するための備忘録である。この行法もニンマ派のものであり、後期密教特有の生理的ヨーガを行う。この実践は「護教の北蔵の大悲」（bsTan skyong Byang gter Thugs rje chen po）に基づいて行うとも言われるが、「北蔵」というのはツァンのガムリン（gTsang Ngam ring）生まれのニンマ派の持明者ゴーデム（Rig 'dzin dGod ldem. 1337-1408）が招来した四事業（息災・増益・敬愛・降伏）に関する法類であり、彼の項目を参照されたい。Thugs rje chen po（Mahākaruṇa, 大悲）は観自在菩薩かと思われる。たびたびパドマ・サムバヴァ（蓮華生）への言及がある。例えば、冒頭の馬頭明王は蓮華から生まれたものである。また法身無量光、受用身無量寿、最勝変化身パドマ・サムバヴァとも言う。題名「rgya can」はペチャの左見出しにも採用され、「封印された」と試訳したが、未詳である。「bcud 'dren（精髄を引き出すこと）」は、「bcud len（精髄錬金、精髄を受けとることSkt.rasāyana）」とも表記し、仙薬と真言に依り肉体を若くし長寿になること、鉄を金に変えること、寿命と身体と受用の悉地を目指すことであり、外道と共通した成就である。刊本の写りが悪く、読解が困難である。

まず修行の場を準備し、帰依、発心をする。種字より自己を馬頭明王と観想し、命を奪う魔物を駆逐し、守護輪を修し、祖師たちの加持を受け、清浄法界から無量寿主を諸尊とともに招く。供養し、加持と成就を願い、浄化をし、法界から蓮華無量寿の父母尊、次に空行母を観想し、三脉五輪に明妃を配置する。招来・供養・讃嘆し、悉地の授与を祈願する。念咒を行い、摂寿と所縁の明確化を行い、諸尊の到来と事業の成就を願う。五族の空行母に供物を献上し、金剛処に五族を入れた供物を結合させて、氷道を各々の時に断ち切る。久住そのものとして寿命の灌頂を行い、種々の息災、増益などを祈願する。誓願を立てる。諸尊の加持を祈願し、結行する。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med sprul sku

書名の日本語訳：無量寿変化身（仮題）
著者名：Blo bzang nor bu shes rab
著者名よみ：ロサン・ノルブ・シェーラブ
著者名別名：Chings su tsug thu No mon han Blo bzang nor bu shes rab、Su ma ti ma ṇi pradznyā
著者生没年：1677 / 1737－
成立翻訳年：17c / 18c.
所収文献名：Yi dam rgyam tsho'i sgrub thabs Rin chen 'byung gnas kyi lhan thabs gsal ba'i me long（本尊海の成就法 － 宝生の補遺の明鏡）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0419, Folios191a1-193a4
刊本の奥書刊記：1.（刊記なし）
解説：著者はモンゴルで活躍したゲルク派の学僧である。シェーラブギェルツェン（Shes rab rgyal mtshan.年代不明）の弟子でもある。生没年については1677 / 1737－の二説あり、TBRCは前者を採用している。

本著は、大部な叢書『本尊海の成就法 － 宝生の補遺の明鏡』に収録された数多くの成就法の一つである。直接の題名はないが、「無量寿変化身について」から始まっており、ここには〈宗要経〉〈鼓音声ダラニ経〉所説のダラニを用いた阿弥陀仏成就法と、後期密教の生理的ヨーガが組み込まれている。「無量寿変化身(活仏)」はパンチェンラマなど特定の師を指すかもしれない。

具体的内容は、まず帰依、発心、四無量心の修習を行う。続いて軌範師は顔を東に向け、面前の虚空に変化身無量寿仏を観想する。その無量寿仏は「一尊一瓶」の形である。三宝帰依・真言読誦の後で合掌し、加持において自身の寿命と智慧が無量となるよう祈願する。風を外に出し甘露が満ちた鉢を煮沸させる。内に吸いこんだ寿命甘露の溢れたものを、鼻門から入れて全身と心臓の中央脈管を満たすと思念する。続いて〈宗要経〉の「寿命ダラニ」を唱えて無量寿［仏］を光に溶解させ、その仏を自身の頭頂から入れて全身を満たす。次に善を廻向する。この作法により軌範師は無量寿仏となる。これにより師は弟子に儀軌を執行する資格を得る。この修念は、上弦月の日の賢の星宿の寅の刻に起床し、沐浴し、顔を東に向けて念誦する。通常の実践では寅の刻に〈心呪〉を百回、死の兆しが生じたなら千回を念誦することで、横死を退けるという。

次にこの行法の師資相承の修習や聖教の伝授には、一般と共通する点があるとし、それに関する瓶儀軌と、供物・安息香を用いた施餓鬼が説かれる。軌範師は無量寿仏等の我生起を念誦と共に行う。無量光仏の面前生起、瓶の洗浄を行い、〈宗要経〉のダラニと共に供物の加持を行い、無量寿仏により我々が無量寿智となるよう加持されるように祈願される（題名のように変化身の無量寿仏が強調される）。仏は光明に溶けて甘露となり、弟子は師に従ってマンダラを献上し、三宝帰依、懺悔・七支供養を行い、冒頭のような無量寿仏の成就法儀軌を行う。

最後に、供養、讃歎、〈百字真言〉読誦などを行う。
作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med Ba ri'i lugs

書名の日本語訳：無量寿バリ流（仮題）
著者名：Blo bzang nor bu shes rab
著者名よみ：ロサン・ノルブ・シェーラプ
著者名別名：Chings su tsug thu No mon han Blo bzang nor bu shes rab、Su ma ti ma ṇi pradznyā
著者生没年：1677 / 1737－?
成立翻訳年：17c / 18c
所収文献名：Yi dam rgya mtsho'i sgrub thabs Rin chen 'byung gnas kyi lhan thabs gsal ba'i me long（本尊海の成就法 － 宝生の補遺の明鏡）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0420, Folios193a5-200a6
刊本の奥書刊記：なし。
解説：著者はモンゴルで活躍したゲルク派の学僧である。シェーラプギェルツェン（Shes rab rgyal mtshan.年代不明） の弟子でもある。生没年については1677 / 1737－の二説あり、TBRCは前者を採用している。

本著は、大きな叢書『本尊海の成就法 － 宝生の補遺の明鏡』に収録された多くの成就法の一つである。冒頭に出る「無量寿バリ［翻訳師］流」のうち、「バリ［翻訳師］」（1040-1111頃）は、青年時にアティーシャの指示でインドに行き、アモーガヴァジュラに受法し、後にサキャ派の第2代座主となった。彼はインドで隆盛した2つの阿弥陀仏成就法（ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流・ジターリ流）のうち、後者の伝承者としても知られる。本著も随所に〈宗要経〉のダラニや六波羅蜜偈を用いており、ジターリ流成就法に依拠している。

具体的内容は、まず前行を行い、蓮華台上の月輪座上の種字「ブーム字」から無量寿仏をその特徴とともに観想する。次に三処三字から光明を放ち、無量寿仏をこの世に招く。彼の手に持つ甘露により灌頂され、障碍が浄化される。〈宗要経〉のダラニ、百字真言の読誦が奨励される。

次に本論の瓶儀軌に入る。まずその準備、供物の加持が説明され、〈入法界品〉第53章のように、供物は雲のように広大になる。次に無量寿仏・眷属・灌頂諸尊を招き、灌頂と無死寿命悉地の獲得などが祈願される。瓶の成就については、まず瓶の見立てが詳説される。そこに無死甘露が満ち溢れ、無死寿命が祈願される。さらに病人への加持も説かれる。次に瓶儀軌に関連して、瓶の水で洗浄し、孔雀の羽で摩拭し、ダラニを唱えて守護し、誰も害しないよう祈願する。次に吉祥として〈宗要経〉の六波羅蜜偈と〈鼓音声ダラニ〉を唱えて灌頂し、転輪王七宝（輪・馬・象・将軍・大臣・妃・宝）の吉祥偈を唱える。次に八吉祥仏の吉祥偈として仏道と宝物の吉祥による障碍・三毒の浄化、苦の寂静、寿命の増長を祈願する。特に軌範師は無量寿仏としての認可を祈願し、空性・種字・真言より自己を仏として観想する。その心臓から光が放たれ、軌範師・面前生起の諸尊・一切諸仏菩薩の心臓から大小の無量寿仏が出現し、弟子の身体に浸透すると信解する。真言によりそれと無二となる。

認可そのものは、三つの教に関係する。第一の教により念誦の教を受け、観想の後、三回唱えるが、一回目は加持、二回目は無二の混合、三回目は堅固にするためである。第二の教は加持そのものであり、散華の後、真言の悉地、無量寿の身語意の加持が起こることを祈願する。第三は、誓言(三昧耶)の教であり、正覚までの行を約束する。

最後に、加持として、面前生起の諸尊を信解し、自相続への加持を祈願し、心臓の種字と無二だと信解する。弟子も同様とし、諸尊の本処への帰還、我生起の収斂、廻向・誓願などにより終結する。

作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med Mi tra'i lugs

書名の日本語訳：無量寿ミトラ流（仮題）
著者名：Blo bzang nor bu shes rab
著者名よみ：ロサン・ノルブ・シェーラプ
著者名別名：Chings su tsug thu No mon han Blo bzang nor bu shes rab、Su ma ti ma ṇi pradznyā
著者生没年：1677 / 1737－?
成立翻訳年：17c / 18c
所収文献名：Yi dam rgya mtsho'i sgrub thabs Rin chen 'byung gnas kyi lhan thabs gsal ba'i me long（本尊海の成就法 － 宝生の補遺の明鏡）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・「東洋文庫蔵チベット蔵外文献 」Ref. No. 0422, Folios 204b1-208a5
刊本の奥書刊記：なし。
解説：著者はモンゴルで活躍したゲルク派の学僧である。シェーラプギェルツェン（Shes rab rgyal mtshan.年代不明） の弟子でもある。生没年については1677 / 1737－の二説あり、TBRCは前者を採用している。

本著も叢書『本尊海の成就法 － 宝生の補遺の明鏡』に収録された多くの成就法の一つである。題名は冒頭の記述による。類似の成就法文献に、ガクワンロサン・チュウデンペルサンポ（チャンキャ1世 1642-1715）の『白無量寿の成就法』や、著者ロサン・ノルブ・シェーラプの『白無量寿四臂』等がある。前者の奥書きにも大成就者ミトラゾーキ(ミトラヨーギン)による白無量寿の現観が言及され、本著との関係が考えられるが、身体的特徴には違いが見られ、今後検討が必要である。

内容は、まず成就法共通の前行を行う。次に空性により種字から蓮華台・月輪座を立ち上げ、そこにア字を観想する。その種字は無死の命を象徴する。その種字の放射・収斂から無量寿智仏を立ち上げる。身体色は月・水晶のような白色、一面二臂、禅定印を結び、無死智慧甘露が満ちた瓶を持ち、頭髪の髻を具え、金剛結跏趺坐し、宝の飾りを具えている。身体の白色以外は、ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流とほぼ同じである。次に心臓の月輪座上の白色ア字から光明が放射され、功徳を無量にし、眷属を具えた勝者無量寿仏を観想する。その仏の額・喉・心臓に各々種字を観想し、読誦の対象を明瞭にする。続いて〈宗要経〉のダラニを読誦し、供養を行い、所説の世尊如来応供等正覚仏無量寿決定威光王（無量寿仏）を敬礼し、軌範師が加持を祈願する。

続いて認可の儀規が説かれる。マンダラに配置する種々なる供物の奉献し（「入法界品」第53章所説の供養雲の例え）、そこで使用される真言（虚空蔵真言）・ダラニ（長ダラニ）を読誦し、仏に供養讃歎を行い、世尊無量寿仏の認可を賜るよう祈願が行われる。

続いて弟子に対して同様の成就法儀軌が説かれる。そこでは軌範師を無量寿仏と見立て、彼と面前生起の尊と十方の一切衆生の心臓から無量寿仏を降臨させ、弟子の頭頂から溶け込ませ、不二とさせ、弟子は認可を得たとする。

次に教えの伝授である。軌範師の心臓に種字を観想し、真言蔓とその光の放射と溶解を観想し、〈宗要経〉所説の長ダラニを3度唱え、順次、加持、無差別、堅固を信解する。続いて加持の伝授、三昧耶の伝授を行って、許可を受ける。弟子たちも同様に行う。最後に供養・賞讃・祈願・百字真言読誦など通常の行を行って、終了する。
作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor

書名の日本語訳：無量寿に依るグル・ヨーガ
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No.1836, Folios 4b5-6a3
刊本の奥書刊記：(6a2-3)
di yang ＋ston ＋ te ni sbu yan thu pa'i ＋＋la dpal 'byor gyis bskul ba'i ngor Shā kya'i dge slong blo bzang dpal ldan pa'i nyi ma Phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos sbyar ba'o / /
（この［典籍は］また＋＋＋＋＋＋にペルジョルがお願いした折に、シャーキャの比丘であるロサンペルデンペーニマ・チョクレーナンギェルペルサンポが著述した。）
参考文献：・ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンダ『チベット密教の瞑想法』（金花舎、1996）（cf. ダライ・ラマ14世法王造『観音菩薩のグル・ヨーガ』p.23, 44）
解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。

本著は、本尊無量寿仏を供養して罪障を浄め福徳を積むグル・ヨーガの簡略な文献であるが、阿弥陀仏の化身とされる著者パンチェンラマ自身を仏と見て行う観想法であり、彼を指導者として従う弟子や信者のために著された。このように或る活仏が、その本地の仏・菩薩の立場からその成就法を弟子や信者に授けるという著作は、活仏制度のもとでしばしば見られる。四灌頂など後期密教に由来する高度な内容も出てくるが、全体の論調は救済への祈願から始まっており、多くの人が実践できるより一般的なものである。全体的にテキストの状態が悪く、読みとれない部分がある。

冒頭の礼拝で無量寿仏は無量寿智仏ともされている。次に無量寿仏の特徴が要約され、著者と無差別であることが説かれる。次に無量寿仏は一切衆生の父母であり、悪趣の苦しみをなくす存在として讃えられる。次に前行として懺悔・随喜・勧請・廻向を行い、供養し祈願した力により、師無量寿仏の三処から三種字が次第に現れ、行者自身に溶け込んで四灌頂を得る。さらに、救済されること、それが世々になされない場合に阿弥陀の活仏である著者に導かれ、勝者が喜ぶ仏道に入ること、聞思修に入った時は障碍がなくなること、極楽浄土に往生することが、祈願される。最後に面前の無量寿仏を本尊とした成就法が簡潔に示されて終了する。
作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med la brten pa'i tshe sgrub

書名の日本語訳：無量寿に依る寿命成就
著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa(クンタン3世)、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c後半-19c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 39A, New Delhi 1975 Vol.8Ja , Tshe-sgrub 1a-3a4, 224-228 （なお別の版では Tha巻）
刊本の奥書刊記：(3a4)
'di ni dad brtson ldan pa ri khrod pa Don grub rgya mtsho dang dGe slong 'Jigs med blo gros gnyis kyis bskul ngor/ bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes dGon gsar dga' ldan rab rgyas gling du bris pa'o / /
（これは、信と勤を具えた山［に隠棲する］僧ドンドゥプ・ギャムツォと比丘ジクメー・ロドーが勧めたのにちなんで、尊者コンチョック・テンペードンメがゴンサル・ガンデン・ラプギェーリンにおいて著わした。）
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。

本著は、無量寿智仏により、自己と他者（師など）の利益のために寿命の成就を行いたい者に対して、簡略に説かれた基本的な行法である。行法の系統に関する記述はない。割注による説明がある。

共通の前行の後、真言を唱えて、空性からフリーヒ字、その字から光を順次観想し、諸仏の加持を得て、自己は無量寿智仏だと観想する。頭頂、喉、心臓の種字から光が放たれて智慧薩埵と諸尊を招き、三昧耶薩埵と無二に溶けて、灌頂を受ける。変化身の無量光仏が頭飾になる。真言により空性から供物が生じて、無量寿仏を供養し帰命する。自心の月輪の真言蔓から光が放たれて、輪廻における寿命と涅槃における寿命の精髄を集めたものが真言蔓に溶けて、そこから甘露が流出し、身体に満ちて、寿命を恢復し、寿命の成就を得たと観想する。そして長ダラニ・短ダラニや真言を唱える。

さらに瓶の水や長寿丸を成就する場合は、同様に我生起を行って、無量光仏を供養し、悉地の成就、無死の持明の獲得を祈願する。面前に生起させた仏の心臓の、種字と真言蔓から光が放たれて、仏菩薩の加持、世界の寿命の精髄、光輝すべてが真言蔓に溶ける。そこから甘露が流出して瓶が満たされる。真言により供物が浄められて、さらに空からのオーム字の光に溶けて、それが智慧の甘露になったと思惟し、供養・讃嘆を行う。瓶の智慧薩埵は本処に帰り、三昧耶薩埵は瓶の水や長寿丸に変わったと思念し、廻向と吉祥句により終了する。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dpag med la bstod pa

書名の日本語訳：無量寿に対する讃
著者名：'Phags pa
著者名よみ：パクパ
著者名別名：'Phags pa Blo gros rgyal mtshan
著者生没年：1235-1280
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.7 （Bibliotheca Tibetica 7, The Complete Works of Chos

Rgyal 'Phags Pa 2, Compiled by bSod Nams rGya mTsho, The Toyo Bunko, Tokyo, 1968）Ba22,273a5-b1
刊本の奥書刊記：なし
参考文献：・福田洋一・石浜裕美子『トゥカン『一切宗義』モンゴルの章』（『西蔵仏教宗義研究』」4、1986）
解説：著者は、サキャ派の五祖の五番目であり、叔父サキャ・パンディタとともにモンゴルに出向き、モンゴルとの間に「施主・福田」の関係を築き、フビライの帝師ともなり、モンゴルの国威を背景にチベットにおけるサキャ派の統治をもたらした。サキャ派は初期からバリ翻訳師よりジターリ流の阿弥陀仏成就法を伝承し、五祖の中には極楽往生したと伝えられる人もいる。
　この典籍はわずか3偈から構成された短いものであり、ごく簡略に随念し、讃歎、祈願するためのものであろう。ジターリ流の場合と同じく『無量寿宗要経』に説かれる仏（無量寿智教主）を、大乗仏教一般のブッダ観から簡略に讃えて祈願したものである。著者は『無量寿宗要経』に基づいてもう一つ『無量寿讃』を著しているが、本著はその簡略版であろうか。
作成者名：中御門敬教

Tshe dpag med lha dgu las bzhi'i sbyin sreg ji ltar bya ba'i tshul

書名の日本語訳：無量寿九尊の四羯磨の護摩を如実に行う作法
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No. 1817, Folios 1a1-4a4
刊本の奥書刊記：（4a2）Tshe dpag med lha dgu'i sbyin sreg gi cho ga 'di yang Kan thung khu ral ja sag? dPal ldan byams pa nas bskul pa'i ngor Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan 'bstan pa'i nyi ma phyog las rnam rgyal gyis sbrar ba'o / /
/ / oṃ sva sti / phan bde'i 'byung gnas rgyal bstan yongs 'du'i ljon / / rab rgyas 'gro kun thar mchog 'bras bzang la / / spyod phyir bKra shis lhun grub chos grwa cher / / chos sbyin 'dzad med dal gro'i rgyun 'di spel / / sa rba dza ga tiṃ / /
（この無量寿九尊の護摩の儀軌もまた、カントゥンクラジャサ？ペルデンチャムパ（モンゴル人か）により勧められた折に、シャーキャの比丘ロサンペルデン・テンペーニマ・チョクレーナムギェルが著述した。
　オーン、スヴァスティ、利益・安楽の源である仏教全体が集まる広大な楽園であり、衆生すべてが最上の解脱の妙果を受用するためのタシルンポの大寺院において、法施の無尽のこの流水の相続を増長させよう！サルヴァジャガタム）
参考文献：・田中公明『チベット密教』（春秋社、1996）pp.220-226
・北村太道「護摩儀礼」（立川武蔵・頼富本宏編『チベット密教』「シリーズ密教」２、 春秋社、1999）pp.221-236
解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。
　本著は、四羯磨の護摩の儀軌にジターリ流の無量寿九尊の成就法を組み合わせ、その説明を要約したものである。
　「四羯磨の護摩」とは、息災・増益・敬愛・降伏を祈願する護摩である。全体を通してテキストの状態が悪く、断片的な理解が得られるのみである。読解できた内容は、以下の通りである。
　まず始めに、偈頌により無量寿仏に敬礼してから、無量寿九尊の四羯磨の護摩を如実に行うやり方を説明する。そこでは護摩の儀軌において使用する炉と供物などの特徴が解説されるが、そこで使用されるものの大半は他の護摩儀軌と同じで良いとされ、さらに本儀軌特有の点についても若干説明される。その後で主題となるジターリ流の無量寿九尊の成就法、護摩の儀軌が説かれる。その後は末尾まで、読解困難な箇所が続く。
作成者名：中御門敬教

Tshe dpag lha dgu'i sgo nas zhi rgyas kyi sbyin sreg －Nag 'gros su bkod pa Zla ba gsar pa－

書名の日本語訳：無量寿九尊の門より「息災・増益の護摩」－逐語釈として提示したもの－　「新月」
著者名：Blo bzang ye shes bstan pa rab rgyas
著者名よみ：ロサン・イェシェー・テンパ・ラブギャ
著者名別名：Rwa sgreng Blo bzang ye shes bstan pa rab rgyas 、Rwa sgreng khri sprul bsTan pa rab rgyas
著者生没年：1759-1815
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・［ラサ版］東北 No.6243 ［Na 1-8］
刊本の奥書刊記：（8b5）Tshe dpag lha dgu'i sgo nas zhi rgyas kyi sbyin bsreg 'di lta bu zhig dgos zhes Se ra sNgags sde pa Zhal zur dGe slong Blo bzang 'jam dpal nas bskul ngor rGyud dang dam pa'i man ngag bzhin Rwa sgeng No mon han du 'bod bas Se ra Theg chen gling gi rang gnas su sbyar ba'o / / dge'o / /
（『無量寿九尊の門より「息災・増益の護摩」』のこのようなものが必要です、といってセラ［寺の］真言部の人である。シャルスルの比丘ロサン・ジャムペルから勧められた折に、タントラと勝れた人の口訣のとおりにラゲン・ノモンハンにおいて努力して、セラ［寺］のテクチョクリンの自坊において著作した。善かれ。）
参考文献：・藤仲孝司・中御門敬教「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践　－「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して－」（『仏教大学総合研究所紀要』11、2004）
解説：著者はラデン寺の活仏であり、ゲルク派の学僧。ラデン寺はカダム派のドムトンにより開基された名刹であり、ダライラマ7世が西暦1738年に恩師のガンデン座主に寄贈した。この座主の没後、生まれ変わりの活仏が認定された。弟子にヤンチャン・ガロ（dByangs can dga' ba'i blo gros）やイェシェー・ギェルツェン（Ye shes rgyal mtshan）やパンチェン3世ペルデン・イェシェー（dPal ldan ye shes）などがある。
　本著はジターリ流の無量寿九尊の成就法に基づく護摩（火供）の儀軌を本文として、その諸処に指示や解説を割注の形で入れたものである。
　題名については問題がある。東北目録が bkod pa でな

く「読んだ（bklod pa）」としている部分は、文字が不鮮明である。nag 'gros（逐語釈）の意味「語句を一列に読誦できるもの」との類推から、その直後にある動詞 bkod pa を bklod pa と判断したのかもしれない。しかし、本典籍はnag 'gos として本文と割注という形式になっており、本文は音読されるが、割注は指示や解説を与えていて音読されない。本文冒頭 1b2 にも「息災増益の護摩を少しの言葉で文字に提示するもの（zhi rgyas kyi sbyin sreg nyung nyu'i tshig gis yi ge 'god pa）」とあるし、一般的に他にもこの用例は見られるから、「提示する（'god pa）」の過去形 bkod pa とした。

また奥書にいう「勝れた人の口訣」について、5a1, b6, 7b4 の割注に, パンチェン・ロサン・チョーギェルツェン作『九尊のマンダラ儀軌』『誓願』に説かれたように為すべきだという。それらは『無量寿儀軌　－無死如意牛自在王－』（東北No.5919）と同書の付録と対応するので、同書に基づいているようである。

作成者名：藤仲孝司

Tshe phyag zung 'brel gyi tshe sgrub rgyun 'khyer　－rDo rje'i srog sgrub－

書名の日本語訳：無量寿と金剛手の双運の寿命成就の常行　－金剛の命の成就－

著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje

著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ

著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje

著者生没年：1781-1855

成立翻訳年：19c前半

写本等の存欠：刊本

刊本所在：Hal ha dam tsig rdo rje'i bka' 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Da, Tshe-phyag 1a-7a, pp.120-123

刊本の奥書刊記：（7a1-2）

Tshe Phyag zung 'brel gyi tshe sgrub rgyun 'khyer shin tu zab pa man ngag dang bcas pa rdo rje'i srog sgrub ces bya ba 'di ni/ rang bzhan gyi nyams len du/ gSang 'dzin bla ma yab sras kyi zhabs rdul spyi bos len pa'i Bhu su ku pa Dam tshig rdo rjes bris su bgyis pa'o// //dge legs 'phel//

（『無量寿と金剛手の双運した寿命成就、および常用のきわめて甚深なる口訣をともなったもの　－金剛寿命の成就－』というこれは、自他の実践において、持密者の上師父子の御足の塵を頭に受けるブスクパ・タムチク・ドルジェが［著作した。それを人をして文字に］書かせた。）

参考文献：・頼富本宏『密教仏の研究』（法蔵館、1990）pp.607-630

・高田仁覚『インド・チベット　真言密教の研究』（密教学術振興会、1978）pp.22-23

・杉木恒彦『八十四人の密教行者』（春秋社、2000）pp.172-176

解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジゥツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。

本著は、「秘密主聴伝　（gSang bdag snyan brgyud）」という根本典籍（この典籍は未詳だが、本偈と釈があるようであり、金剛手から授かったものか）の所説を常時実践しやすいように簡略にまとめたものであり、さらに詳しく修習したいなら、著者がまとめた灌頂儀軌のとおりに実践すべきであるという。奥書のブスク（Bhu su ku）という名は、密教行者の「食って寝て歩く（Bhu su ku）」という一見怠惰な行状からのあだ名であり、シャーンティデーヴァにも用いられた。

この灌頂・伝授・口訣を得た行者は、共通の前行を行ってから、居場所は楊柳宮（金剛手の住処）と極楽浄土、自己は忿怒の金剛手だと観想し、心臓のフーム字から光を放って、無量寿仏を頭飾とした金剛手などを招く。七支供養と四無量を行い、諸尊の資糧田が自己に溶け込む。空性から順次、種字・マンダラ・無量宮を観想し、フーム字の転変により自己を憤怒の秘密主金剛手とし、頭頂には師と無二であって、菩薩形の柔和な不動無量寿を観想する。智慧サッタなどを招き、三昧耶サッタに溶け込ませる。

自己の三処の種字と真言蔓から光を放って、自他の罪障・病・魔という障碍を浄めて、諸尊の力を溶け込ませ、加持と成就を得て、障碍に勝利する。頭頂の無量寿の心臓の種字からも光を放って、諸尊の加持、輪廻・涅槃の精髄すべて、寿命の損失などを包摂し、仏の手の瓶に満たし、障碍を浄めて、寿命の成就を得る。詳しく行う場合は、無量寿と金剛手を讃え、障碍の止息、成就の授与を祈願する。守護輪を観想し、自他を横死の怖れからの済度と、寿命の持明の獲得を願う。

さらに、功徳が大きいこととして、秘密主たる自身の五処の五種字を大日など五仏と信解し、五趣に導く五毒（嫉妬・慳貪・愚痴・貪欲・瞋恚）を燃やして五智の炎にし、それが寂滅した顕空から本尊として立ちあがって運ぶのが、秘密の護摩とされているという。さらに自己の身体の五処から、五族の無量寿を観想し、それらの種字から加持、甘露を招いて真言蔓に溶け込ませ、寿命を損なう縁を浄めて、死を退けるとされているとし、五大の不調和の徴候を知り、それらを対象とした瓶の執持と金剛念誦は最上の寿命成就だとして、経函と師の口伝により実践し、自他の利益を円満にするよう勧めている。

作成者名：藤仲孝司

Tshe dbang bskur tshul　－'Chi med tshe'i rig dzin gyi dngos grub ster ba'i gdams pa bzhugs so－

書名の日本語訳：寿命の灌頂作法　－不死寿命の持明の悉地を授ける教誡－

著者名：Paṇ chen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan

著者名よみ：［パンチェン・］ロサン・チューキギェルツェン

著者名別名：Paṇ chen Lama I 、Paṇ chen Chos rgyan

著者生没年：1567-1662

成立翻訳年：16c-17c.

成立地：チベット

写本等の存欠：刊本

刊本所在：・ラサ版　東北No.5920［ Ga 1-10］

・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.1207, Folios.1a1-10a3

刊本の奥書刊記：（9b6）'di yang bKa' rab 'byams smra ba Chos rje mTha' yas kyi mtshan can gang de'i gsung gis bskul ba la brten nas Blo bzang chos kyi rgyal mtshan gyis mDun sa Chos kyi pho brang gi gtsug lag khang du sbyar ba'o / / sarva manggalaṃ / /

Oṃ svasti / phan bde'i 'byung gnas rGyal bstan yongs 'du'i ljon / / rab rgyas 'gro kun thar mchog 'bras bzang la

/ / spyod phyir bKra shis lhung grub chos grva cher / / Chos sbying 'dzad med dal 'gro'i rgyun 'di spel / / sarba ja gaṃ taṃ / /
（これもまた、該博な聖教を語る法主「ターイェ（無辺）」の御名を持つ者－　彼のお言葉により勧められたことに依って、ロサン・チョーキギャルツェンが、集会の法の宮殿の寺院において著作した。すべて吉祥であれ。
　オーム・スヴァスティ。益と楽の生ずるもと、勝者の教えすべてが集まる［三十三天の善見城の北東の如意樹－］広大な大香樹（『倶舎論』AK.Ⅲ 66）の、最上の解脱の妙果を世の衆生すべてが享受するために、タシルンポ大寺における法施が尽きることなく、この河の流れを増長させますように。）
解説：著者はタシルンポさらにセラ、デプンといったゲルク派の大寺に住持し、ダライラマ4世、5世が具足戒を受けるとき親教師をも務めた。ダライラマ5世によるチベット統一政権の時代に大きな影響を与えた。彼は没後、阿弥陀仏の活仏として認定されたが、これはゲルク派ではダライラマ2世以降二人目であり、彼から遡って、パンチェンラマの系譜が成立することになった。
　本著はダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の無量寿仏成就法に関する寿命灌頂の典籍であり、弟子に灌頂を施す方法を説く。この行法は、ジターリ流の九尊九瓶と対比して「一尊一瓶」と呼ばれ、最も深いとされている。
　内容は、最初、弟子にマンダラを献上させてから、この法の経緯について、１）教誡をどこから求めたのか、２）信解させるための教誡の偉大さを示す。第一では、ティプ・サンガクドンポ、レーチュン・ドルジェタクパ、ミラレパに法が継承されたようすを説く。次に、共通の道により心相続を改める、として「菩提道次第」の内容が示される－すなわち、自他の輪廻、特に三悪趣における苦しみ、得難く利の大きい有暇・具足の人身を得たこと、苦を断った仏の位を切望すべきことである。次に、現前の住居や瓶を、無量寿智仏の顕現による無量宮や主無量寿仏だと観想し、その上に法身無量光、マチク以下の祖師、仏、菩薩、護法尊を観想する－そこにはカギュ派、ゲルク派の祖師も居並ぶ。そこで、三宝帰依、発菩提心、我生起を行った後、灌頂そのものに入るが、それは、１）寿命の散失を呼びもどす、２）損われたものを癒す、３）寿命を浸透させるという三項目からなり、その第二は広汎な行い方と簡略な行い方が並記されている。これら灌頂の各段には詳細な違いはあるが、基本的には、面前に住する無量寿仏の種子から光が十方に放たれて、世間の種々の事物、者たちとその精髄すべてが甘露または法具の形相で招き寄せられ、面前の無量寿仏と持物の瓶に溶ける。それから甘露が流出して弟子に入って全身を満たし、各々の作用を果たす。自己は無死の寿命の持明を得たことを信解し、甘露の真言を唱えて、寿命の成就に関する祈願をする。
作成者名：藤仲孝司

Tshe dbang bya tshul　－'Khyer bde－

書名の日本語訳：寿灌頂の作法　－携えやすいもの－
著者名：rNga rgod byams pa rab rgyas
著者名よみ：ガ・ゴ・チャムパ・ラプギェー
著者名別名：rNga rgod III blo bzang byams pa rab rgyas
著者生没年：1781-1849
成立翻訳年：19c前半
刊本所在：rNga rgod byams pa rab rgyas kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.81, Kha,　Tshe 1a-5a, dBang, pp.251-253
刊本の奥書刊記：（4a5-6）
brtse med Nyi bu'i mche can gyis/ btab pa'i lus can dbugs dbyung slad/ /tshig cung don tshang 'khyer bde ba/ /'phral du Byams pa'i ming can sbyar// //
（憐れみなき日子（閻魔）の鋭い牙により捕らえられた有身者（有情）を安息させるために、言葉が少なく意義の揃った携えやすいものを、チャムパの名をもつ者が速やかに著作しました。）
（4b5-5a2）
sgrub pa'i rgyal mtshan 'dzin pa'i kun spangs ×× mchog chos 'phel(?) gyi yang srid kyi zhabs brtan smon tshig 'di yang/ nyid kyi sku dpyod ldan dKon mchog bsam gtan gyis bskul ngor/ Shākya'i btsun gzugs Blo bzang byams pa rab rgyas kyi sngon? zla'i yar tshes bzhi × nyin sbyar ba yi ge ×× dpyod yangs pa Blo bzang rgyal mtshan bgyis pa dge legs su gyur cig//
（修行の幢を持つ遁世者 ××チョク・ チョーペル(?)の転生者の仏事〔のため〕のこの祝願句は、自身の甥であり伺察をそなえたコンチョック・サムテンが勧めたのにちなんで、シャーキャの僧姿のロサン・チャムパが前(?)月の上弦の四日 × 昼、著作した〔。〕筆記××伺察の広大なロサン・ギャルツェンが行った。良くあれ！）
解説：著者はアムド出身で、ゲルク派の人である。ジャムヤンシェーパ2世コンチョック・ジクメーワンポによりガゴ・ナムケーセンゲの転生者に認定され、タシキルに学んだ。
　本著は、ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の無量寿智仏による簡易な寿命灌頂である。諸処に簡潔な割註が入れられている。行者は前行を行い、前に寿命瓶、右に寿命酒、左に寿命丸を置いて、我生起、面前生起を行う。次に弟子たちに対する灌頂に入る。前行の後、無量寿仏・浄土・無量宮を観想するが、そこには無量寿仏や仏・菩薩・護教尊・智慧サッタを招いて、彼らの前で菩薩戒を授けることが簡潔に含めている。灌頂そのものは、1）損失を招きよせる、2）損なわれたものを癒す、3）寿命を溶け込ませるという通常の三つからなっている。
　4b1 以下には、Zhabs brtan smon tshig 'dod don mchog sbyin(祝願句 － 最上の願望を施与するもの)という小品が、置かれている。これは、無量寿智仏ないし無量光仏の徳を讃えて、その仏と諸尊、及び祖師たちにより寿命・福徳の増益を祈願するものである。
作成者名：藤仲孝司

Tshe ril sgrub pa dang tshe dbang bskur tshul　－'Chi med dpal ster－

書名の日本語訳：寿命丸の成就と寿命灌頂の作法　－無死吉祥の施与－
著者名：Co ne Grags pa bshad sgrub
著者名よみ：チョネ・タクパ・シェードゥプ
著者生没年：1675-1748
成立翻訳年：18c後半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum dPyad gzhi'i yig cha　phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.37, Kha　tshe sgrub 1a-6a, pp.37-39
刊本の奥書刊記：(6a6-b2)
Tshe dpag med kyi sgo nas tshe ril sgrub pa dang tshe dbang bskur × tshul 'chi bdag ×× chi med dpal ster zhes bya ba 'di ni / rang gi slob ma gnas brtan bya btang Shes rab kyis bzhan re gnyis la phan par bsams te bskul ba'i tshe / Shākya'i dge slong bShad sgrub ming can gyis

bla ma gong mas mdzad pa'i man ngag du ma la brten nas ji ltar 'tsham par Co ne dgon nyid du sbyar zhing / / dad pa dang rnam dpyod zung du 'brel pa'i gnas brtan bZod pa'i ming can gyis ×××××/ dge bas 'gro ba kun gnas skabs dus min 'chi ba las grol zhing / phyi mar bDe ba can du skyes nas rGyal ba Tshe dpag med yab sras kyis rjes su 'dzin pa'i rgyur gyur cig / / / /bkra shis / / dge'o / /

（『無量寿の門から寿命丸を成就し、寿命の灌頂をする作法 － 死王×××無死の吉祥を与えるもの － 』というこれは、［筆者］自身の弟子で上座なる世捨て人シェーラプが他の二者に益すると思って勧めたとき、シャーキャの比丘シェードップの名を持つ者が、先師が造られた多くの口訣に依って相応しいとおりにチョネ寺院において著作し、浄信と伺察が双運した上座であり、ゾパの名を持つ者が×××××。善により衆生すべてが当座、横死から解脱し、後に極楽に生まれて勝者無量寿父子により摂取されることの因になりますように！吉祥あれ！善かれ！）

解説：著者はゲルク派の学僧であり、セラ寺の教科書の著者としても有名であり、チョネ版大蔵経の開版にも関わった。チョネは、チョネゾン（Co ne rdzong. 現在の甘粛省甘南チベット自治区にある）にある古刹であるが、1459年にゲルク派の寺院となり、その管長や教学指導者として活躍した。

本著は、無量寿一尊一瓶の成就法としての伝統を踏襲したものである。ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)など「寿命の導き」の祖師たちへの祈願が見られるが、『無量寿宗要経』の六波羅蜜の偈も用いられることはジターリ流とも共通する。割注が付けられていて、そこに項目が整理され、個別の注意事項も記されているが、それらは字が小さく、印刷状態が悪い個所がある。

冒頭に「ここに無量寿［仏］の門から自他の利益を為したいと欲するならば」と述べており、1）寿命の成就と２）寿命の灌頂との２項目を立てている。１）寿命の成就（1b2ff.）は、我生起（1b2-2a4）、面前生起（2a4-3a3）の二つに別れている。

第二の面前生起では、他者に灌頂するために、我生起（3a4-5）と、面前生起との２項目を立てている。面前生起（3a5ff.）の個所では、寿命瓶の成就（3a6-b2）、寿命酒（3b2-4）、寿命丸の成就（3b4-6）、弟子にマンダラを献上させること（4a1-3、なおここでは道次第の所縁類とも関係づけている）、マンダラを示すこと（4a3-4）、弟子を浄めること（4a4-5）が説かれる。

次に2）灌頂（4a5ff.）においては、各々寿命瓶・寿命酒・寿命丸による灌頂と、寿命の増長との４項目がある。

第一の寿命瓶による灌頂（4a6ff.）には、［寿命の］召還（4a6-b3）、損なわれたものの養生（4b3-5b3）、寿命に溶け込むこと（5b4-6a1）との3つがある。第二の損なわれたものの養生は、寿命の損なわれたもの（4b4-5a4）、力と福徳が損なわれたもの（5a4-6）、誓言と律儀が損なわれたもの（5b1-3）の養生の３項目に分かれている。

第三の寿命に溶け込むこと（5b4-6a1）には、勝者無量寿やダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)など「寿命の導き」の伝統の諸師による加持を願う願文がある。

さらに、寿命酒による灌頂（6a1-3）、寿命丸による灌頂（6a3-6）となり、末尾には、この行法の利徳として、自己が当座に長寿となり、後に極楽往生する縁となり、対象とした他者が横死を脱することになるという。

作成者名：藤仲孝司

Tshe ril bsgrub tshul －'Chi med dpal sbyin－

書名の日本語訳：寿命丸を成就する作法 －無死の吉祥の施与

著者名：Co ne Grags pa bshad sgrub

著者名よみ：チョネ・タクパ・シェードゥプ

著者生没年：1675-1748

成立翻訳年：18c前半

写本等の存欠：刊本

刊本所在：Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.37, Kha (tshe sgrub)?1a-2b, p.40

刊本の奥書刊記：(2b5-6)

Tshe ril bsgrub tshul 'Chi med dpal sbyin 'di yang/ bstan pa'i mnga' bdag Ko'u shri nang so'i sku tshe spel pa'i thabs mkhas rten 'brel bsgrigs pa'i phyir du bskul ba'i ngor/ shākya'i dge slong bShad sgrub ming can gyis/ legs par sbyar ba'o/ bkra shis// //

（『寿命丸を成就する作法 － 無死の吉祥の施与 － 』これもまた、教えの主［である］コウシュリ［という名］の内管領の寿命が増長する巧みな方便を、縁起を調えるために［すなわち今後の好ましい果のために］勧められたおりに、シャーキャの比丘シェードップの名を持った者が、著作した。吉祥であれ！）

参考文献：・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）

解説：著者はゲルク派の学僧であり、セラ寺の教科書の著者としても有名であり、チョネ版大蔵経の開版にも関わった。チョネは、チョネゾン（Co ne rdzong. 現在の甘粛省甘南チベット自治区にある）にある古刹であるが、1459年にゲルク派の寺院となり、その管長や教学指導者として活躍した。

本著は、無量寿仏に依る成就法より、寿命丸の成就が特出されて記述されたものである。この著者は、副題を同じくする無量寿に関する成就法文献を複数著作しているので、広くはそれらと内容を共有しながら、そのなかで本作は「寿命丸」の成就という特定の主題に限定した短編とみなせる。用語法としては、やや後代のダライラマ7世（1708-1757）の『教主無量寿に依る寿命の悉地の成就法』と共通する要素も多く、ダーキニー・シッディラージャ(マチク・ドゥプペー・ギェルモ)流の無量寿一尊一瓶の成就法の流れにあるようである。祈願として「世尊よ、私と施主にあらゆる寿命と福徳を授けてください」と述べていることや、奥書からも分かるように、施主である一個人との縁から著作されたものだと思われる。供養や前行に続いて、我生起（1a2-b4）、面前生起（1b4-2b5）という構成になっている。

作成者名：中御門敬教

Tshe lha rnam gsum gyi mngon rtogs

書名の日本語訳：長寿三尊の現観

著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me

著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ

著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa(クンタン3世)、dKon mchog bstan ba'i sgron me

著者生没年：1762-1823

成立翻訳年：18c末-19c前半

写本等の存欠：刊本

刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ

DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 39A, New Delhi 1975 Vol.8 Ja , Tshe-lha-rnam-gsum 1a-2b5, 152-155 （なお別の版では Tha巻）
刊本の奥書刊記：2b4-5
'di ni Tshe lha gsum char sgrub par 'dod kyang so so ra mi lcogs pa rnams la 'jug pa bde ba'i phyir 'di dra zhig dgos zhes dad brtson ldan pa dGe slong dKon mchog zla bas bskul ngor/ bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes bris pa'o//
これは、「長寿三尊すべてを成就したくても、個々には暇のない者たちにとって行いやすいから、このようなものが必要です」といって、信と勤を具えた比丘コンチョック・ダワが勧めたのにちなんで、尊者コンチョック・テンペードンメが著わした。
参考文献：・田中公明『詳解 河口慧海コレクション チベット・ネパール仏教美術』（佼成出版社 1980）pp.104-105
・高田仁覚『インド・チベット 真言密教の研究』（密教学術振興会 1975）p.107, pp.202-203
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。
本著は、チベットで長寿三尊と称される無量寿仏、頂髻尊勝仏母、仏母如意輪に基づいて寿命成就を行うための典籍である。頂髻尊勝仏母（仏頂尊勝）は、極楽国土の正法結集窟において観自在菩薩の問いに対して無量寿仏がそのダラニと儀軌を説いた尊格である。また仏母如意輪（白ターラー）は観自在菩薩の配偶者として登場し、頭頂に無量光仏の化仏を付けた尊格である。よっていずれも阿弥陀仏に縁のある尊格であり、チベット仏教圏ではこの三尊形式の仏画も見られる。本論の割注に所作タントラのように行うという記述があるのも、「四部タントラ」のうち髻尊勝仏母（Uṣṇīṣa-vijaya）が、所作タントラの如来部に属するからである。
内容としては、前行を行った後、空性から蓮華月座が現れ、自心の赤フリーヒ字から光が放たれて主無量寿となったのを観想し、その心臓のブルーム字から右の座に三面八手の頂髻尊勝仏母、フーム字から左の座に白色二手の仏母如意輪（白ターラー）を観想する。自己の頭頂、喉、心臓のオーム、アーハ、フーム字から光を放ち、西の極楽浄土の無量寿仏の心臓から諸尊を招き、自己と諸尊が無二となる。灌頂を受け、部族主が頭頂の荘厳となり、真言により供養する。三尊に頂礼し、自心の真言鬘より光を放ち、持明者の諸尊仙の心臓から世界の精髄が真言鬘に溶けて、甘露の流れとなる。そして甘露に全身が満たされて、加持と寿命成就を得る。空性から生じた広大な宝瓶の中の蓮華月座に赤のフリーヒ字と光の放射があって、師や施主の障碍が浄められ、そして瓶の智慧薩埵は本処に戻り、三昧耶薩埵は瓶の水または丸薬になったとして、行を終える。
作成者名：藤仲孝司

Tshogs zhing dang 'brel ba'i snying po'i nyams len －bDe ba can du 'gro ba'i lam bzang－

書名の日本語訳：資糧田と関係する精髄の実践 －極楽に往く善き道－
著者名：Co ne Grags pa bshad sgrub
著者名よみ：チョネ・タクパ・シェードゥプ
著者生没年：1675-1748
成立翻訳年：17c後半-18c後半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.43, Kha 1a-5b, pp.99-101
刊本の奥書刊記：（5b2）
'di yang dad dang rnam dpyod ldan pa'i rgyan 'jed(?) sNgags ram pa Grags pa 'od zer sogs gur yags(?) ri khrod ba 'ga' res thugs dam du mdzad 'dod nas bskul ba'i ngor Shā kya 'di ge slong Grags pa bshad sgrub ces bya bas Co ne'i dGon nyid du lhag bsam dag pas sbyar ba ste / gzhan dag la yang phan thogs par gyur cig / / / / par du sgrub pa po yang bskul ba'o rnams so // / / manggalaṃ
（これも、信と伺察を具えた真言学博士タクパ・ウセルなどのいくらかの隠棲者が修行として行いたいと欲して勧請した折に、このシャーキャの比丘タクパ・シェードゥプといわれる者がチョネ寺院において、清浄な意楽をもって著作した。他者たちにも有益となりますように。印刷を行った者も勧請した者たちである。吉祥たれ。）
参考文献：・ツルティムケサン・藤仲孝司『悟りへの階梯』（UNIO、2005年）
解説：著者はゲルク派の学僧であり、セラ寺の教科書の著者としても有名であり、チョネ版大蔵経の開版にも関わった。チョネは、チョネゾン（Co ne rdzong. 現在の甘粛省甘南チベット自治区にある）にある古刹であるが、1459年にゲルク派の寺院となり、その管長や教学指導者として活躍した。
著作の目的は冒頭の「資糧を積み障碍を浄化する最高の方便を記す」や、末尾の「資糧を積み障碍を浄化する手段は多いが、極楽に生まれる方便を主とし［つつ］、あらゆる精髄の要をまとめて述べる」に表明されている。出典不明の多くの引用が行われ、それをもとに本作は進行する。題名にある「資糧田の実践」とは、ツォンカパ著『道次第小論』によれば加行六法の第4・5として述べられるものであり、面前に広大行・甚深見を伝えた諸師方、及び無量の眷属がおられると思惟して、資糧の集積と障碍の浄化を主題とした〈普賢行願讃〉所説の七支供養を彼らに奉じ、その功徳によって自己の相続を浄化することをいう。ちなみにこの六法はアティシャの恩師セルリンパの行状に由来する。通常は釈尊ないし開祖ツォンカパを資糧田の主尊とする。対して本作は主尊を無量光仏としている点に相違はあるが、その構成は先のそれに準じている。
先ず冒頭においては無量光仏の身体の観想が説かれ、その結果行者自身の心臓のフリーヒ字から光明が放射し、極楽世界等から無量光仏、宝髻仏、釈迦牟仏、不動仏、七兄弟の眷属を具えた薬師仏、普賢を初めとする八大菩薩などの菩薩衆、根本師などを召喚する。彼らは虚空に現れ、その配置としては中央に無量光仏、正面に宝髻仏、右に釈迦仏、左に不動仏、背後に薬師仏、上方に根本と伝承の師、周囲に八大菩薩と智慧の師等が囲繞しているとされる。この立体的な構図は本作の大きな特徴の1つである。次に彼らに対して七支供養を行い、その中で自分と自分に関係する者たちが悪趣から解放されることと、死去してすぐに極楽世界の無量光仏のもとに生まれ、見仏し、聞法し、すみやかに現等覚することを祈願する。
次に悪趣の恐怖から守護されるよう祈願し、断末摩の苦しみが生じないこと、無量光仏等が直接に御顔を示し、極楽世界への道程をお造り下さるよう祈願する。またさら8人の眷属を連れた無量光仏を直接に見仏し、強く信じ、尊

敬し、歓喜して、死んだのちに極楽世界で大乗種となり、衆生利益を行うことに障害がないよう祈願する。そして大悲により不浄の仏国土に神力の力で赴き、衆生たち各々の機根に応じた説法を行い、勝者が称讃した清浄な善き道に次第通りに導いてから、仏位に立たせるよう祈願する。このような祈願の繰り返しの後、最後にあらゆる帰依処が無量光仏に溶け込み、それらを集めた主である無量光仏に対して、大悲による摂取、加持を祈願し、無量光仏を本尊とするグル・ヨーガを行い、衆生利益を祈願して終わる。

付記として本論に関係した形での遷移（ポワ）が説かれ、その前行と本行について説明が行われている。

作成者名：中御門敬教

rDzogs pa'i sangs rgyas 'Od dpag tu med pas rgyal ba Ka thog pa dam pa bde gshegs la gnang ba'i sgrub thabs las khol du byung ba'i bde smon

書名の日本語訳：正覚者無量光が勝者カトクパ・ダンパ・デシェクに授けた成就法の中から略出した極楽願文
著者名：Ka thog pa dam pa bde gshegs
著者名よみ：カトクパ・ダムパ・デシェク
著者名別名：Ka dam pa bde gshegs、sPobs pa mtha' yas、Shes rab seng ge
著者生没年：1122-1192
成立翻訳年：12c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本の奥書刊記：（p.163）Dam pa rin po ches gsungs pa'i 'Od cho ga las mdor bsdus zhig tshur bshus pa lags / dge'o //
（ダムパ・リンポチェがお説きになった『光明儀軌』 から要約したものを書写しました。よかれ。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻） 、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、pp.159-163
参考文献：・平松敏雄『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』3、1982）p.108, 142
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.24
解説：著者のカトクパ・ダムパ・デシェクは、ニンマ派の祖師の一人である。パドマサンバヴァの弟子ヴィマラミトラからの伝統のうち「スル(Zur)系」のドプクパ(sGro phug pa. 1074-1134)の弟子の一人である。マハーヨーガの大成就者であり、東チベットのニンマの本拠地カトク寺の創設者である。阿弥陀や阿閦や薬師など諸仏の浄土を見ることができたとされる。またチベット流の阿弥陀仏成就法が登場しはじめたのも、彼の生きた西暦12世紀以降のこととされている。

本著は、彼が無量光仏からマハーヨーガのような成就法と極楽往生のための誓願文を授かってから、代々伝承されたものとされており、それに説明文を加えたものである。

具体的にはまず、この教えはパドマヴァジュラの教であるとされ、そこに西方を見つめる菩薩の化身、すなわちインド、チベットの成就者たちが言及される。そして、極楽には菩薩ロードゥ・ニンポ、雪域チベットには法主カトクパがいて、彼が未来に成仏したときに善逝無量寿となるが、それを根本と継承の師として、彼に摂取と極楽往生を祈願する。ロードゥ・ニンポはカトクパが極楽浄土で第八地を得たときの名ともされる。ちなみに、ロードゥ・ニンポという名はキョプパ・ジクテンゴンポ(sKyob pa 'Jig rten mgon po. 1143-1217)の極楽願文、トゥクジェ・シャンパン・ペルサン(Thugs rje gzhan phan dpal bzang. 19世紀)の『[カルマ・チャクメー著]清浄大楽国土の誓願の弁別釈 －大楽国土へ往く善き階梯 －』にも言及されているので、その法統にあるようである。

次に無量光仏に関する念仏三昧の功徳が無量であるとの教証を示して帰依する。次に往生が確実であるとの教証を示して、誰でも無量光仏の名を受持する者は極楽往生できるから、私はその名を受持し、死ぬやいなや、極楽往生するよう祈願する。続けて真言を唱え、〈行願讃〉で廻向する。

最後に、善男子善女人が精進して念誦を続け、密呪と持明を成就し、最高の仏果を得て、衆生を済度することを誓願して終わる。

奥書きにある『光明儀軌』については、その存在を含めて不明。「'Od mdo」(光明経)で〈無量寿経〉を指す事例があるので、『無量寿経』に関係した儀軌かと思われる。

作成者名：藤仲孝司

Zhing mchog sgo 'byed kyi dmigs rim mdor bsdus

書名の日本語訳：『最上国開門』の所縁次第要略
著者名：Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po
著者名よみ：ガクワン・ロサン・チュウデン・ペルサンポ
著者名別名：Lcang skya hu thog thu、lCang skya1、灌頂普照広慈大国師章嘉呼図克図
著者生没年：1642-1715
成立翻訳年：17-18c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・北京版　大谷No.6225, Ka.142a3-146a2
刊本の奥書刊記：（Ka.146a1） 'di ni yul byang phyogs kyi mthar skyes pa'i sprang btsun snyom las pa Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang pos Zhing mchog sgo 'byed dang Myur lam sogs las btus te bkod pa'o / / 'dis kyang mar gyur 'gro ba thams cad dag pa'i zhing du bgrod par gyur cig / /
（この［書］は、北方の果てに生まれた貧僧で懈怠人であるガクワン・ロサン・チュウデン・ペルサンポ（チャンキャ1世）が（ツォンカパ著）『最上国開門』や（パンチェン1世著）『速疾道』などから要略して提示した。この［功徳を］もって母なる衆生のすべてが浄土に往きますように。）
現代語訳書：・小野田俊蔵「チベット所伝の浄土観想修法 －青木文教師将来資料Nos.103, 104, 107, 108, 109についての管見－」（『国立民族博物館研究報告』別冊1、1983）
・梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』永田文昌堂、2002
参考文献：・小野田俊蔵「ツォンカパ造『最上国開門』試訳－チベットに於ける本願思想受容の一例として－」(『仏教文化研究』27 、1981)
・梶浜亮俊「パンチェン・ラマ一世著『極楽世界に障害なく行くための迅速な道』の研究」（『摂大学術B: 人文科学・社会科学編』10、1992）
・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』 （「浄土仏教の思想」3、講談社、1993）
・梶浜亮俊「チャンキャ一世の往生思想」（『宗教研究』67-4、1994）
解説：著者はロンポ寺座主とパンチェンラマ1世によりタ

クパウセルの転生者に認定され、ダライラマ5世により受戒し、ウで修学した。清朝と交流し、モンゴル、満州の教化を行った。

本著はツォンカパ著『最上国開門』に従って極楽浄土や阿弥陀仏を観想するとき、明瞭化すべき観想対照を順次明らかにした典籍であるが、それを前提としてから、（パンチェン1世著）『速疾道』と同じく密教的な成就法を付加している。

具体的にはまず、冒頭に『鼓音声ダラニ経』と〈無量寿経〉の記述によって極楽世界と無量寿仏・無量光仏の様相を示す。次に極楽世界に往生するためには『最上国開門』にならい、五項目（1.極楽と教主の功徳を思念する、2.善根を積む、3.発菩提心、4.廻向、5.誓願をたてる）に沿って、『最上国開門』の要所を提示する。その後、密教の行法に入る。最後に極楽往生に言及する〈普賢行願讃〉59偈と60偈を読誦する。

作成者名：藤仲孝司

Zab lam 'pho ba'i man ngag gi skor

書名の日本語訳：甚深道ポワの口訣類
著者名：Co ne Grags pa bshad sgrub
著者名よみ：チョネ・タクパ・シェードゥプ
著者生没年：1675-1748
成立翻訳年：17c後半-18c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.37, Kha 1a-6a, pp.57-59
刊本の奥書刊記：（4b5-5a1）'pho ba'i nyams len 'khyer bde bar bkod pa rnam pa gsum po 'di ni / dad stobs rnam dpyod dang ldan pa'i gnas brtan 'Jam dbyangs sbyin pas lhung bzed kyi ster sbying dang bcas te bskul bas rkyen byas shing mchog dman gang yang 'chi kha'i dus su nges par dgos pa'i gdams ngag gi rgyal po lta bur ma zad/ sdig can yin yang ngan 'gro'i skye sgo btsan thabs su gcod pa'i gdam par bshad par mthong nas gzhan la phan 'dod kyi bsams pas dam pa'i man ngag las 'byung ba'i don dang mthun par Shākya'i dge slong Grags pa bshad sgrub kyis sbyar ba'o / /
（遷移の実践を行いやすく提示したこの三種類［の著作］は、信力・伺察をそなえた上座ジャムヤンジンパが鉢の恵施とあわせて勧めたことが縁となって、上下の誰もが臨終時に必ず必要な教誡の王のようなもの［である］というだけでなく、罪人であっても、悪趣の門を強引な方便として断つ教誡として説明されることを見て、他者に益したいとの思いをもって、勝れた人の口訣に出ている義に合わせて、シャーキャの比丘タクパ・シェードゥプが著作した。）
（6a6）
'di yang gnas brtan 'Jam dbyangs sbyin pas bskul ba'i ngor Shākya'i dge slong bShad sgrub ming can gyis/ gzhan la'ang phan 'dod kyi bsam pas sbyar ba'o// manggalaṃ/
（これもまた上座ジャムヤンジンパが勧めた折に、シャーキャの比丘シャッドップの名を持つ者が、他者にも益したいとの思いをもって著作した。吉祥たれ！）
参考文献：・武内紹晃・ツルティム・ケサン・小谷信千代・桜部建『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』（「浄土仏教の思想」3、講談社、pp.226-232, 267-277、1993）
・田中公明『性と死の密教』（春秋社、1997）pp.205ff.
解説：著者はゲルク派の学僧であり、セラ寺の教科書の著者としても有名であり、チョネ版大蔵経の開版にも関わった。チョネはチョネゾン（Co ne rdzong. 現在の甘粛省甘南チベット自治区にある）にある古刹であるが、1459年にゲルク派の寺院となり、その管長や教学指導者として活躍した。

本著は、先師の教えた遷移（ポワ）の共通した口訣を実践しやすいように提示したものであり、三項目のうち、第1.グル・ヨーガに依った遷移（1b2ff. 自己の根本師を持金剛として観想して行うもの）、第2.無量光仏に依った遷移（2b4ff.）、第3.弥勒に依った遷移（3b4ff.）から成る。一度奥書が置かれて終了するが、再び阿弥陀仏への帰命の後（5a1ff.）に、極楽国土に往く実践を常行として行いたい場合に関する小論がある。

第2の「無量光の遷移」は更に、1）自己が行ずること（2b4ff.）、2）自己に対して行うこと（3a6ff.）、3）他者に対して行うこと（3b4ff.）の三つから成る。

1）では、前行の後、無量光仏を自己の頭頂に生起させ、極楽から諸仏菩薩を招いて一体となる。自身の中央脈管において心臓の辺りに識の白い滴を観想する。次に無量光仏を観想して七支供養を行う。次に無量光仏に対して、遷移の修習と極楽往生が叶うよう加持を祈願する。無量光仏の心臓から光の鈎が出て、自己の識を引き上げ、頭頂の梵浄穴から出て仏の心臓に溶けると観想する。

2）では、自己の臨終時には平生に行った1）のように観想して、遷移が修習できること、遷移により空行者になること、断末摩・閻魔の怖れからの救護、中有の怖れからの済度、死後にただちに極楽へ引導され摂取されることを祈願する。

3）では、葬儀において死者の頭頂に無量光仏を生起させることなどを知り、遷移の修習を祈願する代わりに、死者の到達を祈願してもよいという。

最後の小論では次のようなことが説かれる。無量光仏の像を祀り、〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉の所説に基づいて国土の功徳を念じ、往生への熱意をもって帰依し、ツォンカパの極楽願文を唱えて無量光仏などを招いて、七支供養を行う。無量光仏に帰依し、自己を思念されるよう祈願し、正覚へ発心する。その目的を達成するために極楽に往生し教えを受けること、及び自他の善根と聖者の諦語と法界清浄の力により、死去してすぐ極楽の蓮華に化生して無辺の功徳を証得し、諸仏の教えを受け、神力により諸国土に赴いて有情を利益することを祈願する。遷移を修習し、自己の識が鼻腔から出て、無量光の鼻腔から入って心臓に溶け、再び戻ってくるのを観想し、最後に無量光仏と眷属が自己に溶けて一体となると観想する。「オーム、アミータバヤ、フリーヒ」と唱えて、誓願する。睡眠の修習をする場合は、威儀を正して臥し、上述のように行った後、自己の三処に種字を置き、意欲をもって無量光仏のもとに往くと信解すべきこと、そうすると往生できて、そこからは退転しないこと、釈尊は我々の機根を考えて経やタントラにその国土が賞讃されていること、特に無量光仏自身が本願を立てたこと（「東方偈」蔵訳17,18偈）を述べている。

作成者名：藤仲孝司

bZang spyod kyi 'chi blu bya tshul

書名の日本語訳：〈普賢行願讃〉の死を欺く作法
著者名：Dharmabhadra
著者名よみ：ダルマバドラ
著者名別名：dNgul chu Dharmabhadra, Bla ma chos bzang mchog
著者生没年：1772-1851
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.6321［ Kha 1］
刊本の奥書刊記：（Na.1b6）bZang spyod kyi 'chi blu

mdor bsdus 'di yang mChims nam mkha' grags ××××
Paṇ chen dpal ldan ye shes / ××××
（普賢行の避死の要略これもまた、チム・ナムケータク・・・・パンチェン・ペルデン・イェシェー・・・）
解説：著者はゲルク派の学者であり、タシキル寺に学び、西チベットのヌルチュ寺(ギャルセートクメーサンポの寺)に住持した。その法嗣に弟子で甥のヤンチェン・ドッペードルジェ（dByangs can grub pa'i djo rje.1809-1887）がいる。顕密にわたって数多くの著作を遺したが、ニンマの法についても幾らか著作している。
　テキストの状態が非常に悪い。特に複写されたペチャ裏面は表面が裏写りしており、判読不可能な箇所が多い。
　本書は、〈普賢行願讃〉や〈集学論〉所説の『三誓言王タントラ』に関係する典籍である。本著は、サキャパンディタ『無量光主修習の義』やパクパ『無量光の門から罪を浄化する方便』、ダライラマ5世『普賢行願に出ている睡眠修習の行持　－安楽国に渡る岸－』などとも関係せず、阿弥陀仏についても言及は乏しい。末尾近くに、無量光の儀軌と関係させる場合において言及される程度である。無量光仏の儀軌と関係させたものとしては、例えばパンチェン4世テンペーニマに無量光仏の成就法と関連させた著作がある。奥書には、13世紀のナルタン寺の座主とパンチェンラマ3世の名が言及されているが、その関係は未詳である。
作成者名：中御門敬教

bZang po spyod pa'i smon lam kyi 'grel pa bZhi'i don bsdus nas brjed byang du byas pa

著作翻訳の有無：蔵外
書名の日本語訳：『行願讃』四釈の内容を要約して備忘録としたもの
著者名：Ye shes sde
著者名よみ：イェシェデ
著者名別名：智軍
著者生没年：9c.頃
成立翻訳年：9c.頃
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.4359, sNa tshogs, Ji.184a1-213b1
・北京版　大谷No.5846, mDo 'grel, Cho.217a2-252a5
刊本の奥書刊記：（D.Jo.213a7）（P.Cho.251a3）'Phags pa bzang po'i spyod pa'i smon lam slob dpon Phyogs kyi glang pos 'grel pa mdzad pa dang / slob dpon Shaa kya ba shes gnyen gyis 'grel pa mdzad pa dang / Sangs rgyas grags pas 'grel pa mdzad pa dang / rGyan bzang pos　tii ka mdzad pa dang rnam pa bzhi'i don dang 'phral du mkhan po dag las thos pa dang / mdo sde nas 'byung ba dang yang sbyar te bshad pa brda phrad sla bar brjed byang du byas pa rdzogs so / /
（『聖なる賢行願』の、軌範師ディグナーガがお造りになった釈と、軌範師シャーキャミトラがお造りになった釈と、ブッダキールティがお造りになった釈と、ゲンサンポがお造りになった註疏（ṭīkā）、〔これら〕四種の〔釈の〕内容と、折々に和尚たちから聞〔法〕したものと、経典にあるものも結合させて、説明が伝わりやすくなるよう備忘録とした）
現代語訳書：中御門敬教「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究（1）～（4）」（『浄土宗学研究』32,34,35,36、2006,2008,2009,2010）
参考文献：月輪賢隆「普賢行願讃の註疏（竜樹・世親・陳那・厳賢）に就て」（『小西・高畠・前田三教授頌寿記念東洋学論叢』（仏教大学編、1952、pp.265-294）、再出『仏典の批判的研究』（百華苑、1971、pp.486-514））、上山大峻「エセイデの仏教綱要書」（『仏教学研究』32・33、1977）、宮崎啓作「Ye Śes sde　－三部の著作－」（『印仏研』27-2、1979）、中御門敬教「往生後論攷」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』、山喜房仏書林、2004）、中御門敬教「普賢十大願、浄土思想、科文を介した＜普賢行願讃＞理解－『四十華厳』巻四十を参照して－」（『浄土宗学研究』30、2004）
解説：〈華厳経〉「入法界品」末尾の〈普賢行願讃〉には、〈華厳経〉の立場（普賢行）に依った浄土教が説かれる。記述は僅かであるが、〈行願讃〉は〈無量寿経〉と〈華厳経〉との接点に位置する興味深い仏典である。本作はそのチベット撰述註釈である。
　著者智軍（イェシェデ）は9世紀初頭の、チベットにおける梵語仏典の翻訳国家事業において、中心的な役割を果たした大翻訳師。本作〈行願讃〉釈の他に、学説綱要書である『見解の差別』、三宝を説明した『仏身広註』の合計3部の著作が現存する。彼に関する詳細な記録は現存しない。足跡については不明な点が多い。『仏身広註』奥書からは「シャン」の出身であることがわかる。彼の肩書き「Zhu chen gyi lo tsa ba（対応漢訳：大蕃国三蔵法師、意味：主任翻訳師）」は、9世紀前半に敦煌、甘洲で翻訳師として活躍した「法成（Chos 'grub）」にも見られるという。智軍の代表的著作『見解の差別』は後のチベットで1ジャンルとなった「学説綱要書（grub mtha'）」の渕源といわれる。
　さて本作は、冒頭と奥書とによると、数種類存在する〈行願讃〉を摂義し、理解の便を計るために著作された。ここに名前が上がる諸釈は、ディグナーガ、シャーキャミトラ、ゲンサンポ、ブッダキールティである。ゲンサンポ、ブッダキールティについて詳細は不明である。前者には、〈行願讃〉釈以外に著作は確認されていない。後者には、大蔵経の「秘密疏部」に著作2典籍が確認できる（例：北京版No.2092,2642）。
　中国・日本では『梵網経』所説の十重四十八軽戒が大乗菩薩戒の中心である。一方でインド・チベットではシャーンティデーヴァ流とアサンガ流との菩薩戒が中心である。前者では〈行願讃〉所説（七支供養）がきわめて重要である。しかし、インド伝来の〈行願讃〉（現存訳：ナーガールジュナ、ヴァスバンドゥ、ディグナーガ、ゲンサンポ各釈。シャーキャミトラ釈は現存するが別系統）は翻訳具合により晦渋の浅深があり、読解に耐え難いもの（ナーガールジュナ釈）さえ存在する。それゆえ、必要に迫られて智軍は「備忘録」を著作したと思われる。事実、チベット撰述典籍である点をさしひいても、経典翻訳の豊富な知識（経部：160部、論部：59部の翻訳）を背景として、先の諸訳よりはるかに内容が充実して読解しやすい。またより多くの経証が引かれている。他の諸釈で引用典籍名が出ないものにさえ、出典名を明記する事例もある。智軍釈を読解すれば、先の現存4釈の趣意がほぼ理解できる完成度である。チベット撰述〈行願讃〉諸釈の中では、チャンキャ2世（1717-1786）釈と並び、最も権威の高い位置にある。ツォンカパが『菩提道次第大論』の七支供養の箇所で引用する〈行願讃〉釈も智軍釈である。
　本作の構成はチベット訳〈行願讃〉釈、特に科文が整備された陳那釈とほぼ一致する。七支供養を骨格として、全体を十項目に分科する。浄土教的な要素は、〈行願讃〉vs.57-60を散文的に説明した形で説かれる。他の現存4釈と大きく変わらない。因となる往生前の普賢行、その果としての極楽往生について時間列で説かれる。中心となるのは因としての普賢行であるが、往生後の利他行を積極的に説

く点に、〈無量寿経〉とは異なる、新たな浄土思想の展開も見られる。

作成者名：中御門敬教

bZang spyod la brten pa'i 'chi blu'i cho ga bya tshul 'khyer bder bkod pa

書名の日本語訳：普賢行に依った死を欺く儀軌の作法を行じやすく提示したもの
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No.1980, Folios 1a1-6a6
刊本の奥書刊記：(6a2-6)
lCam sring gi nang rten gsang gsang ba bla tshe grub tshul gyi cho ga 'bri dgos tshul 'dug na'ang/ 'di rnams las zla rer chos skong sring la gser skyems tshogs 'khor re ma chag par bsgrubs na 'phrul yun kun tu bstan 'gro'i phan bder phan rabs che nges su 'dug pas tshul de lta bu ma chad par mdzad na de kha rang(?) gi thus(?) nges la gong gi rten rnams 'dri ba bstang snyoms su bzhag go/ / zhes bZang spyod la bsten pa'i 'chi blu 'di yang Er te ni Paṇḍita Kun dga' rdo rjes bskul ngor sNang ba mtha' yas rJe btsun Blo bzang dPal ldan Ye shes kyis mdzad pa'i cho ga la gzhi byas(?)　Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos sbyar ba'o / / manglam//
［馬頭明王の眷属であり護法女尊である］大紅司命主の内なる依処［としての］秘密師の寿命成就を行う儀軌を書くことが必要であるけれども、これら［の行法の中］から［特に］毎月、護法女尊に対して御酒の集会を途絶えずに修行したなら、当面と永遠すべてにおいて教えと衆生の益・楽に利益することが広大であると決まっているので、そのような作法を途絶えずになさるなら、［他ではなく］それこそに(?)決定し、上の依処の問いは捨ておくといって『普賢行に依った死の欺き』これもまた、エルテニ・パンディタ・クンガー・ドルジェが勧めたのにちなんで、無量光［の化身であり、先代のパンチェンラマ］尊者ロサン・ペルデン・イェシェーが造られた儀軌をもとにして(?)、シャーキャの比丘ロサン・ペルデン・テンペーニマ・チョクレナンギェルペルサンポが著作した。吉祥であれ！
解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。
　本著は、先代のパンチェンラマであるロサン・ペルデン・イェシェーの儀軌に基づいて著作した護法女神への供養儀軌である。〈普賢行願讃〉により死を避ける行法には、無量光仏と関係するものと関係しないものがあるが、本作は無量光仏を中心とした行法の要約版である。この種類の文献には、後期密教に由来する生理的ヨーガや死去のシミュレーションの実践が説かれることが多いが、本著作はそれよりむしろ〈普賢行願讃〉やそれに関連した祈願を中心とした儀軌であり、「所作タントラ」部類の行法として行われるもののようである。それは、本作が延命や長寿を願う在家の施主の依頼を受けて、出家僧侶が行う儀礼であることにもつながると思われる。
　内容は、持戒の僧侶数人を招き、その長老を金剛軌範師とし、場所を整え、無量光仏を中心とした三宝の依処（仏塔・仏像・経函）と供養を準備する。比丘たちは早朝に起きて律儀を正し、懺悔して、着席する。蓮華族の種字・印より帰依処を明確化し、帰依、発心、四無量の修習をする。次に一切法空を修習し、そこから宝座の上に無量光仏を観想し、自己はその仏だと観想する。三処の種字より光を放って、極楽浄土より無量光仏と眷属を招く。次に「甘露」の真言を唱えて供養し、讃を唱え、真言蔓に囲まれるのを観想してから、自己の心臓の無量光仏が供物を受けること、祈願、誓願し、仏が加持なさることを観想する。これは「所作タントラ」のとおりに行うという。次に世々に四天王を供養し、この甘露により魔物たちに廻向し、死と寿命の障碍を除去するよう祈願する。次に、広大な供物が光に溶けて、楽空無差別の三昧より無漏の楽が生じる。十方の諸仏とその眷属を縁じて面前の虚空に招き、彼らが死王や魔の軍勢を破ることを祈願し、行者自身と施主がそれを随喜すると申し上げる。加持された品物を普賢の供養雲と観想し、仏菩薩を供養し、死魔に勝ち、解脱を授かるよう祈願して、真言を唱えて沐浴し、マンダラ供養を行う。それを無量光仏とその眷属が受け取って、行者自身と一切有情、特に施主とその親族の横死を退け、寿命を増長させる成就を授かるよう、特に普賢行の威力により加持されるよう、祈願を繰り返す。比丘たちは〈普賢行願讃〉を唱え、長老はマンダラ供養を行う。
　行の後にも、供物を捧げて加持を得る。これも四天王と魔物たちに対してである。または、〈普賢行願讃〉読誦の果報として、死王を欺くよう諦語と祝詞を唱える。
作成者名：藤仲孝司

bZang spyod las byung ba'i nyal sgom gyi nyams len　－bDe ldan zhing gi 'jug ngogs－

書名の日本語訳：普賢行願に出ている睡眠修習の行持　－安楽国に渡る岸－
著者名：Ngag dbang Blo bzang rgya mtsho
著者名よみ：ガクワン・ロサンギャンツォ
著者名別名：Dalai Lama 5、'Jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen
著者生没年：1617-1682
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
所収文献名：rGyud sde rnam bzhi'i lha tshogs rnams kyi sgrub 'phrin bsnyen pa rjes gnang sogs kyi nyams len －mChog thun dngos grub 'dod dgu'i nye ma gyung za－（ラサ版　東北No. 5618）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5618(46)［Tha.96a1-98b1］
刊本の奥書刊記：（Tha.98a5）bZang spyod las byung ba'i nyal sgom gyi nyams len bDe ldan zhing gi 'jug ngogs zhes pa 'di ni lHas pa Blo bzang dpal 'byor gyis bskul bas rkyen byas tshul 'dir mos pa'i las dang po pa rnams la phan phyir Khyab bdag Zha lu pa Rin chen bsod nams mchog grub dang mKhas grub chen po Khra tshang pa Blo mchog rdo rje'i drung du nos shing khong du chud pa'i drin las rJe btsun Sa pa ṇ gyi rtsa tshig la gzhi byas

/ de'i Rang 'grel dang Chos kyi rgyal po 'phags pa'i gsung rab kyi don tshang bar bsdus teZa hor gyi Bande 'Jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen gyis lCags bya Hor zla lnga pa'i nyer drug la Pho brang Potalar sbyar ba'i Yi ge pa ni 'Chags dpon dGe slong Ngag dbang dkon mchog / /（『〈普賢行願讃〉に出ている睡眠修習の行持　－安楽国に渡る岸－』というこれは、ハーパ・ロサン・ペルジョルが勧めたことが縁となって、この方法を信解する初業者たちを益するために、遍満主ザルパ・リンチェンソナムチョクドゥプとケードゥプチェンポ・タツァンパ・ロチョクドルジェのもとに請願して了承されたご恩により尊者サパンの本文に基づいて、その自注釈と法王パクパの聖教の意味全部を摂めて、サホールの大徳ジャムヤンガーワェーシェーネンが、鉄の鳥［の年］、ホル暦五月二十六日にポタラ宮において著作した［。その］筆記者はツァンポン・の比丘ガワン・コンチョックである。）

解説：パンチェン1世ロサンチョーキギャルツェンに受戒した。モンゴル・オイラット部のグシ汗がドメ、ツァンを平定し、ダライラマ5世に献上したことからチベットに統一政権を確立した。ラサにポタラ宮を建立し、清の順治帝の招待で北京をも訪ねた。顕密、歴史と著作は多く、チベット全体の統治者ともなったことからニンマ派の著作も多い。

本著は、無量光仏を通じて滅罪と極楽往生を目的として就寝時に行う修行法であり、サキャ派からの継承である。冒頭に、本著は『華厳』に説かれた普賢行願の派生義としての極楽国土に遷移する方便を、睡眠修習の賢者の主張される流儀に合糅するといい、『普賢行願讃』の極楽往生に関する所説(v.57)などをマンジュゴーシャがジターリに授けたものがバリ翻訳師やサキャ五祖に伝えられた深い口訣であるという。具体的にはサキャパンディタの『無量光修習の義』やパクパの『無量光の門から罪を浄化する方便』の内容が説明されている。

構成は１）加行、２）本行、３）結び、４）利徳の四つからなる。

加行では、マンジュゴーシャ・サキャの師と三宝に帰依し、菩提心を修習し、面前に無量光を修習し、礼拝・供養する。具体的には、住居の西に極楽の荘厳や無量光仏の像を安置・供養し、西向きに眠る。無量光仏を正尊とする三宝と、根本・伝持の尊師たちを観想する。無量光仏に対して『行願讃』やサキャパンディタ著『十法行』やパクハの示す真言により七支供養を行い、無量光仏の位を得ることを願う。

本行では、四力（依処の力、能破現行の力、罪過止滅の力、対治現行の力）による罪悪の浄化を確信し、死を思い、別離すべき今生の身体や資財への執着を捨て、極楽往生を信じて、輪廻と悪趣を怖れず、無量光仏に罪障の浄化、極楽往生と正覚への授記を祈願する。次に呼吸法を実践する。すなわち、呼気に乗って自己の識が左鼻孔から出て無量光の右の鼻孔を通って心臓のフリーヒ字に溶け、仏の心臓の光明から左の鼻孔より出て、自己の右鼻孔を通じて心臓に溶ける。こうして勝者の心と自己の心が無差別だと思う無量光の等持を無数に行う。

結びにおいて、諸仏菩薩は尊師たちへ、尊師たちは無量光仏に、無量光は光に融けて吸気により自己に溶ける。自己も光に融けて仏・本尊・自心の三つが無差別の信仰の状態として生じさせ、無量光仏を対象として真言を唱える。『普賢行願讃』の全体または極楽往生と授記を願うv.59により誓願し、一切有情に廻向する。自己に溶けたものが極楽に往くと思惟し、自己の額・喉・心臓にオーム、アーハ、フームの三字を置いて護り、往生を願ったまま眠る。後の昼間の行儀でも、居場所は極楽国土だと思い、常に無量光仏と離れず、その方へ向かっていると修習する。

利徳としては、現世での病と魔がなく息災と長寿を得て、死の時、苦がなく、中有において無量光仏に摂取、済度され、身体は蛇が脱皮するように解脱して、極楽で蓮華から化生し、無量光から聞法できる。それは『宝積経』に説かれており、間違いないという。

最後に、インドの学者・行者、翻訳師、サキャパンディタの意趣を行いやすく提示したといい、善を一切有情の極楽往生に廻向する。

作成者名：藤仲孝司

'Od dpag tu med pa'i snying po 'dod chags gshin rje gshed sgrub pa'i thabs zhes bya ba

書名の日本語訳：無量光心貪閻魔敵成就法
サンスクリット原典書名：*Amitābhāhṛdayarāgayamārisādhana
著者名：Tib. Mar me mdzad ye shes、Skt. Dīpaṃkaraśrījñāna
著者名よみ：Tib. マルメージェー・イェシェー、Skt. ディーパンカラ・シュリージュニャーナ
著者名別名：Atiśa、dPal me dzad ye shes、Jo bo rje Atīśa、Atiśa
著者生没年：928-1054
成立翻訳年：10-11c.
成立地：チベット？
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・デルゲ版　東北No.1939, rGyud, Mi. 66b3-67a6
・北京版　大谷No.2804, rGyud 'grel, Ni. 30a8-47b2
刊本の奥書刊記：（D.Mi.67a6）slob dpon Mar me mdzad kyis mdzad pa rdzogs so / /
（軌範師マルメージェーがお造りになったものが終わりました。）
参考文献：・羽田野伯猷「密教者としてのアティーシャ」（『チベット・インド学集成』3、法蔵館、1987）
・羽田野伯猷「菩提心法者としてのアティーシャ」（『チベット・インド学集成』3、法蔵館、1987）

解説：著者はインド・ヴィクラマシーラからチベットに招請されて、「道次第」を伝え、仏教復興を行い、カダム派の祖となった。その教学は業果、菩提心を中心とし、無上ヨーガなど真言密教をも重視するものであった。

本典籍は、ヤマーリと関連づけた無量光仏の成就法である。衆生済度と無上瑜伽の強調という点に著者の教義的特徴が確認できる。ヤマーリは、無上瑜伽の父タントラに属する憤怒を司る金剛部の尊格であり、閻魔を制圧するものである。部分的に蓮華部の無量光仏とも関係付けられているが、閻魔が意味する死を退けて無量の寿命を得るといった側面は明確でなく、浄土教的要素は乏しい。

冒頭に、「吉祥なる金剛サッタに帰命する。身口意が無差別の大貪欲に敬礼する。およそ執着［する者］を畏怖させる、貪欲金剛の成就法を説こう」とある。

大乗の一般的教誡と密教の空性からの観想の後、「オーン、アミターバーフリダヤ、ラーガヤマーリ、アートマコー、ハン（oṃ Amitābhāhṛdayarāgayamāri ātmako haṃ）」と唱えることで、種子が転変し、金剛無量光が出現する。体の諸部分に諸尊を観想して、阿閦から灌頂を受ける。頭頂にヤマーリを観想して、礼拝、讃嘆する。念誦と拡大・縮小の観想を行う。全ての者たちの貪欲を大貪欲と認識し、文字を捨て、阿字の不可思議な義を修習する。貪欲の海に沈んだ者たちを安楽の船に載せる。一切衆生が蓮華のように無垢になれかし、と祈念して終わる。また「無量寿の心

呪」は「鼓音声ダラニ」を指すものと思われる。
作成者名：藤仲孝司

'Od dpag med

書名の日本語訳：無量光（仮題）
著者名：Blo bzang nor bu shes rab
著者名よみ：ロサン・ノルブ・シェーラプ
著者名別名：Chings su tsug thu No mon han Blo bzang nor bu shes rab、Su ma ti ma ṇi pradznyā
著者生没年：1677 / 1737－?
成立翻訳年：17c / 18c.
所収文献名：Yi dam rgya mtsho'i sgrub thabs Rin chen 'byung gnas kyi lhan thabs gsal ba'i me long（本尊海の成就法 － 宝生の補遺の明鏡）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0475, Folios 66a2-67a3
刊本の奥書刊記：（刊記なし　）
解説：著者はモンゴルで活躍したゲルク派の学僧である。シェーラプギェルツェン（Shes rab rgyal mtshan.年代不明） の弟子でもある。生年については1677年と1737年の二説があり、TBRCは前者を採用している。

大部の叢書『本尊海の成就法－宝生の補遺の明鏡－』に収録された数多くの成就法の一つである。供物を不要とするなど行いやすく簡略にまとめたものである。四部タントラのどれかの灌頂が必要とされるが、逆に言うと厳密な行法ではなく、広く実践者のために造られたものということになる。

内容は先ず行者自身が、成就法共通の準備と前行を行って、自己の心臓にある赤いフリーヒ字の転変より阿弥陀仏を観想し、智慧薩埵を招いて、身体の三処の種字の転変を観想し、「アパリミタ」云々の無量寿智の真言を唱え、廻向し、賞讃し、〈無量寿経〉や〈普賢行願讃〉を唱える。ここで「供物の儀軌」は不要とされる。次に弟子たちにも、帰依・発心を行わせてから観想させ、師を無量光としてから同様の実践をさせて、仏の心臓のフリーヒ字が真言蔓を伴ったものとして口から出て、自己の口から入り、心臓に来ると信解し、念誦するようにさせる。その場合、灌頂を得ていなくては無益なので、四部タントラのどれかを得た者に授けるべきだという。
作成者名：藤仲孝司

'Od dpag med kyi sgo nas sdig pa sbyong ba'i thabs

書名の日本語訳：無量光の門から罪を浄化する方便
著者名：'Phags pa
著者名よみ：パクパ
著者名別名：'Phags pa Blo gros rgyal mtshan
著者生没年：1235-1280
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.7（Bibliotheca Tibetica 7, The Complete Works of Chos Rgyal 'Phags Pa 2, Compiled by bSod Nams rGya mTsho, The Toyo Bunko, Tokyo, 1968）Pha6,38a5-Pha7,39b1
刊本の奥書刊記：（Pha7,39a6）rje Ｂa ri lo tsā ba las brgyud pa / chos rje Ｓa skya pa'i man ngag zab mo 'di ni rang gi slob ma Dod zhes bya ba'i don du / 'Phags pas shing pho khyi'i lo smin drug gi zla ba'i tshes nyi shug sum la sKu zhong bong lung bar sbyar ba'o / /（尊者バリ翻訳師から伝承された、法主サキャパのこの甚深なる口訣は、自身の弟子ドゥという者のために、パクパが甲戌の年（127S）、昴宿月の23日に、クション・ボンルンバにおいて著述しました。）
参考文献：・福田洋一・石浜裕美子『トゥカン『一切宗義』モンゴルの章』（『西蔵仏教宗義研究』4、1986）
・中御門敬教・藤仲孝司「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態－阿弥陀仏に関するダライラマ7世の信仰と実践－」（『仏教大学総合研究所紀要』10、2003）
解説：著者は、サキャ派の五祖の五番目であり、叔父サキャ・パンディタとともにモンゴルに出向き、モンゴルとの間に「施主・福田」の関係を築き、フビライの帝師ともなり、モンゴルの国威を背景にチベットにおけるサキャ派の統治をもたらした。サキャ派は初期からバリ翻訳師よりジターリ流の阿弥陀仏成就法を伝承し、五祖の中には極楽往生したと伝えられる人もいるが、ジターリ流の『無量寿宗要経』ではなく『無量寿経』の内容が目立っている。

本著は、無量光仏を通して罪を清め、極楽世界に往生し、授記を得るための方法を説くものである。そこには顕密の所説や行法が組み込まれており、きわめて典型的な行法である。彼以降もこのような方向の著作が多く見られることになる。

具体的には、七支供養を行い、密教の呼吸法をはじめとする観想を行う。極楽への往生と授記の獲得を願う『普賢行願讃』第59偈を読誦した功徳を廻向する。最後に、あらゆる状況において、自身の場所を極楽世間と考え、常に仏無量光と一緒であると修習すること、死ぬとき、面前に無量光仏がおられ、その方向に赴くと考えることを説き、このように常にヨーガを行えば、今世では長寿になり、事故がなくなり、来世では極楽往生できるという。

なお、奥書のバリ翻訳師とはジターリ流の阿弥陀仏成就法文献の継承者である。
作成者名：中御門敬教

'Od dpag med kyi sgom bzlas

書名の日本語訳：無量光の修誦
著者名：不明
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（p.137）oṃ ā mi dhe wa hrīḥ ces nyin re bzhin tshar re ma chag na shi 'phos ma thag tu bDe ba dan du skye bar 'gyur pa dKon mchog brtsegs pa'i mdo na gsungs so / / dge 'o / / sarbā manga laṃ / /（oṃ ā mi dhe wa hrīḥ と唱えて、日ごとにいつも中断しなければ 、死去してすぐさま極楽［世界］に生まれるでしょうと『宝積経』に説かれた。良かれ、あまねく吉祥たれ。）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs stod cha（祝詞集上巻） 、Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社、1994）p.137
解説：著者不明は不明であり、内容は密教の行法を取り込んだ観法である。題名の「修誦（sgom bzlas）」とは、本尊の修習（sgom）と、真言を誦えること（bzlas）を合わせた略称である。グル・ヨーガあるいは多忙なときの簡略な行において使用するために、簡潔にまとめられたものである。

収録本の目次は、本著の奥書を参照して「宝積経所出(dKon brtsegs las)」としているが、それはチベット語訳『宝積部』（漢訳の『大宝積経』『大正蔵』11 No.310）のことをいうので、ここでは、その第五会〈無量寿経〉のことに

なる。『宝積部』や〈無量寿経〉に真言の念誦は説かれていないが、チベット仏教での顕密一体の信仰という面からは矛盾とされない。顕教的な面から阿弥陀仏を随念し、七支供養により罪障を浄めて善根を積み、菩提心を起こし、極楽往生を誓願する。その上に密教的な観想法を行うのであり、このような形の著作は、サキャ派にもゲルク派にも見られるが、名号を何度も唱えることにより、自心の精滴が仏(師と同一とされる)の心臓に溶け込むことを説いている事例は、多くない。

以下に全文を訳しておく。

「帰依し菩提心を起こして［以下のように唱える］。自分の頭頂の蓮華月の上の、あらゆる帰依所の集まりである根本ラマと区別ない世尊・勝者無量光よ、私の保護者や帰依所としておられますようお願いします。敬礼し、供物を施し、罪過や誤りをすべて告白し、常住をお願いするといった善なる資糧を偉大な正等覚に廻向します。三密マンダラの荘厳を献上するので、受け取って下さい。最上の極楽国土に導いて下さいますように！。自他のために、すばやく正等覚を獲得できますように。［無量］光の名号を何度もお唱えし、自分の心の精滴が師の心臓ととけ込みました。心臓の月［輪］の上に赤いフリーヒと字［がある。その］のはしに、 真言鬘の光［がある。それ］によって衆生の罪や汚れを浄らかにしました。無量光の位（仏位）を得ますように。」

作成者名：藤仲孝司

'Od dpag med kyi sgrub thabs

書名の日本語訳：無量光の成就法
著者名：Ngag dbang Blo bzang rgya mtsho
著者名よみ：ガクワン・ロサンギャンツォ
著者名別名：Dalai Lama 5、'Jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen
著者生没年：1617-1682
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
所収文献名：rGyud sde rnam bzhi'i lha tshogs rnams kyi sgrub 'phrin bsnyen pa rjes gnang sogs kyi nyams len －mChog thun dngos grub 'dod dgu'i nye ma gyung za－（『四部タントラの諸尊の成就・事業・親近・許可などの修得法　－ 最勝と共通の利験一切の穂が豊かに実る樹－』ラサ版　東北No. 5618）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5618(29)［Tha.59a2-b1］
刊本の奥書刊記：［奥書き］
（Tha.59a6）zhes 'Od dpag med kyi sgrub thabs 'di lta bu zhig dgos zhes dKon mchog tshe ring gis bskul ba ltar Za hor gyi bandes sbyar ba'i ye ge pa ni / gNas brtan (?) 'Jam dbyangs so / /
（「こうした『無量光の成就法』が必要である」といって、コンチョク・ツェリンが勧請したとおりに、サホールの尊者が著作した［。その筆受者は］上座のジャムヤンである。）
解説：パンチェン1世ロサンチョーキギャルツェンに受戒した。モンゴル・オイラット部のグシ汗がドメ、ツァンを平定し、ダライラマ5世に献上したことからチベットに統一政権を確立した。ラサにポタラ宮を建立し、清の順治帝の招待で北京をも訪ねた。顕密、歴史と著作は多く、チベット全体の統治者ともなったことからニンマ派の著作も多い。

本著は阿弥陀仏一尊の成就法を日常的に実践するための簡略な典籍である。本文中には他の成就法文献からの真言などが省略された形で引用されるが、その原拠などは未詳である。

内容は三帰依文を唱え、真言より空性上のフリーヒ字が転変して、無量光仏を観想し、それを自己だと思念する。額、喉、心臓の三種字の光より智慧サッタを招き、真言により溶け込ませる。仏の心臓の真言鬘を観想して、ダラニを念誦する。再び智慧サッタを面前に観想して、最後には、〈普賢行願讃〉の七支供養を行い、それにより極楽往生することを最上の要としている。

作成者名：中御門敬教

'Od dpag med kyi nyal bsgom mdor bsdus

書名の日本語訳：無量光の睡眠修習の要約
著者名：'Jam dbyang mkhyen brtse Chos kyi blo gros
著者名よみ：ジャムヤンケンツェー・チューキロドゥ
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.276）nub bla ma Kun bzang chos 'phel nas gsung bskul ngor Chos kyi Blo gros pas bris pa'o / dge'o / bkra shis / mangga laṃ /
（西のラマであるクンサン・チューペルがお説きになるのを勧めたのにちなんで、チューキロドゥなる者が記した。良かれ。吉祥たれ。幸あれ。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.275-276、1994）
解説：著者は、ニンマの系統に連なり無宗派運動にも関わったシェ･チェン･ギャルツァプ(Zhe chen rgyal tshab.1871-1926)の弟子である。

本著は、通常の帰依・発心・七支供養などの前行に加えて、簡略なる阿弥陀仏による浄化の行法を説く。すなわち、種字や呼吸の観想を通じて睡眠時にも無量光仏を常に念ずるものである。このような観想や浄化を通じて平常にも罪障の浄化・福徳の集積を重ねて、臨終時には極楽往生ができるように、さらに自利利他が円満になるよう祈願するのである。この種類の行法としては、古くはサキャ・パンディタ（1182-1251）著『無量光の修習の義』があるが、その系統などは未詳である。

以下に全文を訳しておく。（）内は割注であり、［］は訳者が理解しやすいように補足したものである。

「仏・法・僧について帰依・発心を三回、［それに関する］「残らず衆生」などの一偈頌の終わりに、 Oṃ a mi ta bha hrīḥ sa pa ri wā ra e hye hi bdzra mā dza / padma ka ma lā ya staṃ /」（というものによって、座を差し上げたと信解します。［〈普賢行願讃〉より］「およそ誰であれ」などという七支［供養］を行うべきです。）世尊・如来・応供・正等覚者［である］無量光［仏］に帰命します。帰依します。（名号を三回唱え、信解・尊敬を強く起こすと、）面前の無量光［仏］の心臓のhrī ［の種字］から第二のものが生じました。［仏の］右の御鼻の穴から、［行者の］自己の左の鼻の穴へ入った。心蔵の中央［から］の光明の顕現が放たれることにより、罪障・習気を浄めた。風は戻って、同時に［行者の］右の鼻穴から、世尊の左の御鼻の穴へ入って、hrīḥ［の種字］に溶け込む。勝者の心と自身の心は、無差別であり知を越えた状態に安住している（と述べて信解して、息の去来と一致させた所縁をたびたび修習する［。その］終わりに、［仏の］御心と［自己の］心を混じりあわせて、眠るときにその状態において眠りにおちる、または更（thun. 一定の時間または修行時間）から目覚めるならば、無量光［仏］自身に溶け込ませる、または不可得として安住し、広略の誓願を適宜になすべきです。」

作成者名：中御門敬教

'Od dpag med kyi 'pho ba bKa' rgya ma sbyod tshul mdor bsdus

書名の日本語訳：無量光のポワ（転移）－秘密の教え－の行い方の要約
書名別名：'Pho ba bsdus pa
著者名：Dharmabhadra
著者名よみ：ダルマバドラ
著者名別名：dNgul chu Dharmabhadra, Bla ma chos bzang mchog
著者生没年：1772-1851
成立翻訳年：18c末-19c前半
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・dNgul chu Dha rma bha dra'i gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.77 Ga sgrub-thabs 10b1-11a1
・ラサ版　東北No.6363（Ga）
刊本の奥書刊記：（10b6-11a1）'di blo shin tu dman pa dag la phan phyir Dha rma bha dras sbyar ba'o/ /
（これは、きわめて知恵が劣った者たちを益するために、ダルマバドラが著作した。）
解説：著者はゲルク派の学者であり、タシキル寺に学び、西チベットのヌルチュ寺(ギャルセートクメーサンポの寺)に住持した。その法嗣に弟子で甥のヤンチェン・ドッペードルジェ（dByangs can grub pa'i djo rje.1809-1887）がいる。顕密にわたって数多くの著作を遺したが、ニンマの法についても幾らか著作している。
　本著は、無量光仏に帰依し、極楽往生を願うというきわめて簡略な行法であるが、他の成就法や遷移作法の小品とともに、平易な成就法文献の集成である『許可灌頂の類に含まれていない本尊成就法の次第を一部に収録したもの(rJes gnang khongs su ma song ba'i yi dam sgrub thabs kyi rim pa rnams phyogs gcig tu bsgrigs pa)』に収録されていることや、奥書の書き方からして、在俗の弟子が日常的に行うためのものかと思われる。
　具体的には、清浄な場所に依処を建立し、三宝帰依と発心をなし、極楽から根本師と無差別な無量光仏を招き、自己の頭頂に観想し、礼拝など七支供養を行う。無量光仏に帰命し、甘露の流出により浄化する。さらに仏を観想対象として明確化し、祈願しながら行う。最後にその仏を観想しなおして、寿命ダラニを唱え、この世が滅した直後に無量光仏の悲の鈎により極楽へ導かれて、蓮華から生まれ、授記されるよう祈願する。
　なお、ヤンチェン・ドッペードルジェの著作にはこの行法を承けたと思われるものがある。
作成者名：藤仲孝司

'Od dpag med kyi 'pho ba　－bKa' rgya ma'i bka' zin－

書名の日本語訳：無量光のポワ（転移）　－秘密の教えのお言葉を受けたもの－
著者名：dByangs can grub pa'i rdo rje
著者名よみ：ヤンチェン・ドッペードルジェ
著者名別名：dByang can grub pa'i rdo rje dpal bzang po、Blo bzang chos 'phel、'Jam dbyangs rdo rje
著者生没年：1809-1887
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東北 No.6497 ［ Ga 1-10］
・dNgul chu dByang can grub pa'i rdo rje'i gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.83 'Pho-zin 1a1-10a3
刊本の奥書刊記：（Ga.a2）'di ni thams cad mkhyen pa Dha rma bha dra dpal bzang po'i bka' khrid stsal bar rJe btsun dByang can grub pa'i rdo rje dpal bzang po'i zhal snga nas kyi bka' zin bris mdzad pa lags so / / shu bhaṃ /
（これは、一切智者ダルマバドラ・ペルサンポのご教導をいただいて、尊者ヤンチェン・ドッペードルジェ・ペルサンポ御前の御言葉を覚え書なさったものです。善かれ！）
参考文献：・田中公明『性と死の密教』（春秋社、1997）p.205ff.
解説：著者はゲルク派の学者であり、奥書に出るグルチュ・ダルマバドラ（dNgul chu Dharmabhadra.1772-1851）の甥であり、彼の法嗣となり、dNgul chu chos rdzong の座主となった。
　本作は冒頭に、ダルマバドラ著『無量光のポワ（転移）－秘密の教えの甚深な説明（'Od dpag med kyi 'pho ba －bKa' rgya ma'i bka' bshad zab pa）』に依るものとされるが、これは、無量光仏に帰依し極楽往生を願うダルマバドラ(著者の叔父)の簡略な著作『無量光のポワ（転移）－秘典の教言－ の行い方の要約』を受けたものと思われる。この行法はニンマ派から伝わった阿弥陀仏成就法であり、無量光仏がパドマサンヴァバに先ず成就法を与え、彼がそれを埋蔵経として隠したとある。以下（1b1）多くの伝承者の具体的な名前を出すが、本作の実践の依り処は、ヨンジン・パンディタによる無上ヨーガタントラの究竟次第の実践法にあるという。ニンマの法に対してできるだけ正統的解釈を与えるよう試みているようにも思われる。
　科文（3a3）は三段に分かれているようであるがはっきりしない。断片的な紹介になるが、おおよその内容は以下のとおりである。
　人が死んだ時に必要なことは悪趣を離れることであり、そのための降伏法（btsan thabs）として、パンチェン・リンポチェ・ロサンチューキギェルツェンペルサンポの言（cf. ダルマバドラvol.29,p.16世尊主無量光に依る師のグルヨーガ　－ポワを実践することと関係したもの、携帯しやすいもの－）を引用しポワが推奨される。さらにツォンカパの言を引用し、ポワにより求める場所を極楽と設定する。ポワについては、特に臨終時に識を身体から出す場所が重視される。梵浄孔以外から識が出たなら六道を再び輪廻することになるとし、大印の道として識を梵浄孔から出す実践を説く。そうして正行として無量光仏の本尊ヨーガが最後に説かれる。その次第の中での特徴を挙げるなら、行者は無量光仏に彼の哀れみの鈎で極楽に導かれること祈願することや、無量光仏の御心臓の短いア字に溶け込み、仏の御心と行者の心が無差別になると信解し、風を保ち、楽空無差別に入定することが説かれる。
作成者名：中御門敬教

'Od dpag med kyi tshe sgrub

書名の日本語訳：無量光の寿命の成就
著者名：Ngor chen Kun dga' bzang po
著者名よみ：ゴルチェン・クンガサンポ
著者生没年：1382-1456
成立翻訳年：14-15c.
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.10（Bibliotheca Tibetica 10, The Complete Works of Ngor

Chen Kun Dga' Bzang po 2, Compiled by bSod Nams rGya mTsho, The Toyo Bunko, Tokyo, 1969）A29,237a4-238a1
刊本の奥書刊記：なし
参考文献：・立川武蔵『西蔵仏教宗義研究　第一巻－トゥカン『一切宗義』サキャ派の章－』（東洋文庫、1974）p.67
解説：著者は、サキャ派の五祖の後、その継承者には顕教を中心とするもの、密教を中心とするもの出たが、後者のゴル派、ゾン派のうちゴル派の伝承者であり、サキャ派の親教師、ゴル寺の住持を務めた。
本著は無量寿仏を本尊とした長寿を祈念する成就法であり、一切有情のために仏位を得ようとして無量寿の念誦を行う方法を示している。サキャ派では、バリ翻訳師からジターリ流の阿弥陀仏成就法が伝えられ、サキャ・パンディタとパクパにおいて顕密の要素をまとめた行法が確立されたが、本著も、そのような延長線上にある。
具体的には、まず自性清浄の真言により空性から、西方極楽世界の無量寿仏（姿は密教の菩薩形）、伝承の諸師、仏菩薩を立ち上げる。本行として、十方の仏菩薩が無量寿仏の手のひらの鉢に溶け込み、自分の呼吸によって鉢の不死甘露が全身を満たすことを観想する。識を仏の体に移して「オーム。アマラニジーヴァンティエー、スヴァーハー（Skt. oṃ amaraṇijīvantiye svāhā）」を五百回唱える。最後に廻向し、誓願をたてるべきだと説く。
なお、この著者には他に『無死の寿命の悉地を成就する王』('Chi med tshe'i dngos grub sgrub pa'i rgyal po)という著作（東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No. 0629(7), Folios 53a5-59b3）があるが、それは『勝楽タントラ』とその『釈タントラ』にちなみ、不動如来などが登場するものである。
作成者名：中御門敬教

'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba

書名の日本語訳：無量光に依った遷移
著者名：Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
著者名よみ：パンチェン4世テンペーニマ
著者名別名：Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang po、Paṇ chen sku phreng bdun pa bsTan pa'i nyi ma
著者生没年：1782-1853
成立翻訳年：19c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No.1882, Folios Ja Thor 11a1-13a6
刊本の奥書刊記：（13a5-6）
'di'ang lhang cung ja sag tha? rgyal po'i yel mag ? / /mer gna kun dga'i shog dge slong Blo bzang byang chub nas 'di lta bu zhig dgos zhes bskul ba'i ngor/ Shā kya'i dge slong Blo bzang dpal ldan bstan pa'i nyi ma phyogs las rnam rgyal dpal bzang pos gzim chung bKa' gdams po brang du sbyar ba'o / /
（これもまた、×××××××××比丘ロサン・チャンチュプからこのようなものが必要ですと勧められたのにちなんで、シャーキャの比丘ロサンペルデン・テンペーニマ・チョクレナンギェルペルサンポが、［タシルンポ寺の］寝室であるカダム御坊で著作した。）
解説：著者パンチェンラマ4世(追贈を含めた場合7世)は、ダライラマ8世ジャムペル・ギャムツォから沙弥戒を受けた。いずれも早世したダライラマ9世ルントク・ギャムツォ、10世ツルティム・ギャムツォ、11世ケードゥプ・ギャムツォに対して、沙弥戒を授けている。1844-45年にはチベットの政治を担った。
本書は、これを実践することにより、死の苦や死後の悪趣への恐怖から安息を得て、臨終時に極楽浄土に往生するための「遷移」の実践を、簡略に記したものである。刊本は一部分印刷状態が悪くて読解し難い。「遷移」は後期密教の『秘密集会タントラ』などにおいて確立された行法であり、臨死体験のシミュレーションを通じて成仏することを目的とする。チベットではそれがより一般化されて、極楽往生などに関して臨終行儀やそれに備える行法として広まった。
西方に無量光仏の画像か塑像を安置し、行者はそれに向かって坐り、まず帰依対象を明確化し、帰依し、四無量を修習し、有情のために、そして特に甚深な遷移の教誡を実践するよう発心する。他の帰依処は無量光仏に溶け込み、その無量光仏が行者自身の頭頂から入って心臓に溶け込んで行者を加持する。さらに身体の脈管・心臓において滴を観想する。次に、師と無差別なる無量光に対して、極楽から神力により来られるよう祈願してから、帰依し、極楽世界への引導を祈願する。先と同様に観想するが、所縁の明確化はたびたび実践すべきであるという。修行の一座が終わるときには無量光仏が頭の梵穴に溶け込んだことを念じ、各座の合間にはどこにいても極楽だと信解することが重要であるという。
さらに死の予兆について精通し、退けられない予兆が見られたなら、資具を施し、執着を捨てて、律儀・三昧耶を保ち、閑寂処に座して無量光仏を観想し、上記と同様の行法を行い、自己の心識が無量光仏の心臓に溶けて、極楽の蓮華から化生し、大乗の菩薩行・神通を実践することを観想する。そしてこれを何度も繰り返す。他者の遷移に関しては「遷移の導き ('pho khrid)」から知るべきであるという。
作成者名：藤仲孝司

'Od dpag med la brten pa'i bzang spyod kyi sgo nas 'chi ba blu ba'i cho ga －'Chi med grub pa－

書名の日本語訳：無量光に依る普賢行の門から死を欺く儀軌　－無死の成就－
著者名：rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan
著者名よみ：ギェルケンポ・タクパギェルツェン
著者名別名：Blo bzang don grub
著者生没年：1762-1837
成立翻訳年：18c後半-19c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyi bka' 'bum dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Vol.74 Ca 'Chi-slu 1a-6a6, pp.47-49
刊本の奥書刊記：（6a4）
zhes 'Od dpag med la brten pa'i bzang spyod kyi 'chi blu 'Chi med grub pa zhes bya ba 'di ni lung rtogs yon tan kyis mngon par mdzes shing rab××××× can pa'i Hal ha g-yas ru'i Tho yon e ra(nga?) sto ni Paṇḍi ta Kun dga' rdo rjes lha dar ser po dang / gser gyi bgrang 'dzin sum cu dang ldan pa'i 'phreng bcas bskul ngor / rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyis Chos grwa chen po bKra shis 'khyil ×××××sbyar ba'i yi ge pa ni lung dang rigs pa smra ba Rab 'byams pa chos dar rgyas so / /
（『無量光に依る普賢行の死を欺く儀軌　－無死の成就－』といわれるこれは、教と証得の功徳によって麗しく、・・・・・をもった［モンゴルの］ハルハ右翼のトヨン・エラトニ、パンディット・クンガ・ドルジェが、仏像の黄の絹と30の金［の玉］をもった数珠をもって勧めた折に、ギェルケン

ポ・タグパギェルツェンが大寺タシキル・・・・・にて著作した[。]筆受者[の役]は教と正理の論者ラプジャムパ・チョダルギャである。)
参考文献：田中公明『性と死の密教』(春秋社、1997) pp.202-205、中御門敬教「カルマチャクメーの浄土思想とその影響　－ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版－」(『仏教大学総合研究所紀要』16、2009年)
解説：著者はドメー出身のゲルク派の学僧であり、タシキル寺やデプン寺のゴマン学堂で学んだ後、タシキルに戻り、ジャムヤンシェーパ2世の任命により、そこのラプラン(Bla brang)の親教師や貫主を務め、寺や塔の建立をも行った。デプンでは Chos 'khor rgyal の親教師(mkhan po. 僧院長)を務めたことから、rGyal mkhan po の名がある。

本著は、密教の阿弥陀仏成就法を骨格としながら、随所に無量光仏や極楽浄土、そこへの往生に関する記述(〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉の所説か)が組み込まれている。特に願文の部分では、無量光仏に対して、自己と一切有情、中でも施主が横死を回避し不死の悉地を賜ることが祈願される。割注が組み込まれているが、印刷不鮮明の箇所が多い。また「死を欺く」というのは、後期密教に説かれる生理的要素を含んだヨーガであり、死の前兆が現れたとき、それを滅して死を避ける行法、または死を受容して輪廻を仏道に転化する行法である。

概要は以下の通りである。前行として、三宝に帰依し、母である一切衆生を利益するために発心し、次に無量光仏を本尊としたグル・ヨーガを行う。蓮華と月輪座上の赤フリーヒ字から光が放たれて、その光により自利利他が行われ、転変した無量光仏に対する具体的な観想方法を説く。次に無量光仏への七支供養を行う。

願文では、無量光仏は見聞念により、横死と生死と小乗の涅槃を滅し、衆生を極楽世界へ引導するとして祈願する。不死の悉地により罪障と寿命の妨げを鎮め、不死の金剛身を獲得できるという。「オーン、アーミタバー、フリーヒ、スヴァーハー」、「オーン、バガヴァテー」等の寿命ダラニ(tshe gzung)を多く唱えて、仏がここに来られるよう祈願する。さらに「アムリタ」、「スヴァバーヴァ」等の真言により供物を作って虚空の如くにし、「オーン、アルガン、アーハ」等の真言により捧げて、悉地を賜るよう祈願する。さらに「オーン、サルヴァ、タターガタ、マンガラ、プージャ」等の真言を唱えて、無量光仏が不死を与えることを観想する。さらに、観自在や大勢至のように利他を行うことを祈願する。同様に広大な食事を生起させて、仏と眷属に捧げ、最高の悉地と共通の悉地 － 長寿となり、自利利他が成就することを、祈願する。普賢供養雲を捧げて、自己と一切有情、特に施主に長寿を賜ること、普賢誓願の力や諦の加持力が示されることを祈願する。最後に普賢行の誓願として、死を欺くことは疑いがないと誓う。

近い時代の著作として、同じゲルク派のダルマバドラによる『[普]賢行の死の欺き方』(東北No.6321)がある。印刷が不鮮明であるが、観自在菩薩に関する儀軌のようであり、〈普賢行願讃〉v.1 が引用されている。
作成者名：中御門敬教

Yon tan bsngags pa dpag tu med pa'i sngags

書名の日本語訳：無量の功徳を讃歎する真言
著者名：Bu ston Rin chen grub pa
著者名よみ：プトン・リンチェンドゥップパ
著者名別名：Bu ston Rin po che
著者生没年：1290-1364
成立地：チベット
所収文献名：東北No.5170(gSang sngags rgyud sde bzhi'i gzungs rnams gcig tu bsdus pa'i gzungs 'bum chen mo「秘密真言四タントラ部の諸ダラニを一つにまとめた陀羅尼の大全集」)
写本等の存欠：刊本
刊本所在：The Collected Works of Bu-Ston, Part 16 (MA)
edited by Prof. Dr. Lokesh Chandra
from the Collection of Prof. Dr. Raghuvira
International Academy of Indian Culture
New Delhi, 1969
1.The Collected Works of Bu-Ston, Part 16 (MA)
(Ma258a, 515.7-Ma258b,516.1)
2.Toh.5170(285)
刊本の奥書刊記：なし
解説：著者はチベット最大の学僧の一人であり、サキャ派のパクパがモンゴルの国師としてチベットを統治した時代の人である(多くの学僧からも学んだが、パクパからも学んでいる)。学僧としての名声を得て、シャルの領主から寄進を承けてシャル寺を大改修し、その住職となった。ナルタン寺所蔵のチベット語訳経論を整理して目録を作成し、後の大蔵経の基礎を造った。また顕密に多くの著作を残した。

本著もチベット訳経典より真言を集めたものの一つである。デルゲ版(東北No.679)、北京版(大谷No.286)に相当する経典から、ダラニを取り出している。
作成者名：中御門敬教

Rang gzhan bDe ba can du skye ba'i thabs mchog ces bya ba bDe ba can gyi mdo'i spyi don

書名の日本語訳：自他が極楽に生まれる最上の方便という極楽[荘厳]経の総義
著者名：Dol po pa Shes rab rgyal mtshan dPal bzang po
著者名よみ：トルポパ・シェーラプ・ギェルツェン
著者名別名：Shes rab rgyal mtshan dPal bzang po
著者生没年：1292-1361
成立翻訳年：13-14c.
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本所在：・The 'Dzam-thang edition of the Collected Works of Kun-mkhyen Dol-po-pa Shes-rab-rgyal-mtshan, Vol.7 TA.M (series vol.10) collected and presented by Matthew Kapstein (New Delhi: Shedrup Books and Konchhog Lhadrepa, 1992-1993) 883-886
活字本所載書：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss (Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004) pp.47-48, note59
現代語訳書：・Kapstein, Matthew T., (ibid. 2004) pp.29-30
参考文献：・Kapstein, Matthew T., The 'Dzam-thang edition of the Collected Works of Kun-mkhyen Dol-po-pa Shes-rab-rgyal-mtshan: Introction and catalogue(New Delhi: Shedrup Books, Delhi 1992)
・谷口富士夫『トゥカン『一切宗義』チョナン派の章』(『西蔵仏教宗義研究』6、1993) pp.22-23
・袴谷憲昭「チョナン派と如来蔵思想」(『チベット仏教

』「岩波講座東洋思想」11、岩波書店、1989）
解説：著者はチョナン派の他空説（gzhan stong. 円成実である如来蔵こそが基盤として常住堅固で不空であり、そこにおいて他である依他起や遍計所執である客塵の諸法は空であるという主張）の大成者であり、時輪タントラの実践者として有名である。その極端な如来蔵実在説は非仏教的なものとしてチベットの他宗派から激しく批判されたが、本書にはそれらの特徴的な主張は見られない。
本著は Kapstein の論文に〈無量寿経〉の注釈として紹介され、その一部がローマ字化され、英訳されている。全集を参照できていないので、全体像は未詳であるが、掲載された部分は、極楽往生に対する誤解や疑いに答えている。法蔵菩薩の特定の誓願に基づき、極楽往生に関する疑義に答えるという論述はチベットでは珍しい。
内容としてはまず、或る善知識たちは、極楽に凡夫はいないから、凡夫は努力しても往生できないという。それに答えて、それらは誤解や疑いの生ずる処ではないから、有情を害することになるという。根拠としては、法蔵比丘の立てた49誓願のうち第18願（梵本第19願「来迎引摂の願」）と、釈迦牟尼の証言により死去するときに聖者に変わるのだといい、それは『仏華厳経』（「普賢行願讃」）の来迎と往生の説とも一致するという。
また或る人たちは、『二頌註』(D No.4002 Ji 163b4-171a1)や『大乗荘厳経論釈』と同『復註』に、誓願により往生できるというのは別時を意趣したものという説より、すぐに往生はできないというが、それも法を捨てる罪や疑いの因になるので、有情を害する。それも第18願により除去される。すなわち、誓願を立てただけでなく無間業と法を捨てる罪をも遠く離れたし、別時の意趣はただ発心しただけの者に関して説かれたからである。
またそれら誓願が成就したなら、第18や第19も成就したから、誤解や疑いをすべきでない。成就していないなら、無量光仏が極楽で成仏して十劫過ぎたという教言、成就したとの表徴にも反する。一般的に菩薩は、誓願を完成し、有情を成熟し、国土を浄化しないかぎり、真実際を現証しないといわれることにも反する（Kapstein は『現観荘厳論』ハリバドラ釈の冒頭を指摘）。
だから、釈迦牟尼が弥勒に説かれ、十方諸仏も説かれたように、それら過失を捨てて、信じ、善根を無量に積み、たびたび誓願して、勤めるべきであるという。そうすれば、極楽の蓮華から化生し、49の誓願どおりの功徳を得るであろうという。
作成者名：藤仲孝司

Ri chos mtshams kyi zhal gdams las / Zhing khams gdams pa ded dpon nor len

書名の日本語訳：『山法・独居修行の教誡』より「国土選択の商主・財宝を受けとるもの」
著者名：Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya
著者名よみ：Tib. カルマ・チャクメー、Skt. ラーガースヤ
著者生没年：1612-1678
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
所収文献名：Ri chos mtshams kyi zhal gdams
写本等の存欠：活字本
刊本所在：Ri chos mtshams kyi zhal gdams には書誌データの記載のないペチャ版が出されている（大谷大学図書館所蔵）。
刊本の奥書刊記：（p.333,18-21）don de skad rta lo khrums gyi zla / / dus dmar po'i tshes brgyad tshes dgu yi / / dus dgongs（dgong?）thun snga dro'i thun skabs las / / bdag dge slong rā ga a syas smras / / de brTson 'grus rgya mtshos yi ger bkod / / le'u zhe gnyis pa'o mangga laṃ / /
（こういうことは午年・室宿月（蔵暦7月16日から8月15日）、赤時の八日、九日の、時間は夕方のトゥン（更）、午前のトゥンの折に、私、比丘ラーガースヤが語った。それをツォンドゥ・ギャンツォ（brTson 'grus rgya mtsho）が文字に著した。第四十二章である。吉祥たれ！）
活字本所載書：・bKra shis編、bDe smon phyogs bsgrigs smad cha（祝詞集下巻)、 Si khron mi rigs dpe skrun khang（四川民族出版社）、1994、pp.318-333
参考文献：・Sangye Khandro, A Garland of Immortal Wish-fulfilling Trees：The Palyul Tradition of Ningmapa, Ithaca, 1988
・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択 －『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『仏教大学総合研究所紀要別冊』、2006年）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 序分と礼拝対象の無量光仏の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
・中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究 ― 観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の荘厳と供養の段 ―」（『仏教大学総合研究所紀要』18、2011予定）
解説：著者はカルマ・カギュ派の学者・行者であり、顕密の著作を残したほか、同派のミギュル・ドルジェ（Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667）を指導して、阿弥陀仏や極楽浄土に関する埋蔵経「gNam chos（虚空法、天空法）」の発見に関わり、チベットで最も有名な極楽願文を遺している。
本著は、カギュ派、ニンマ派の様々な教えを集成した全53章からなる『山法・独居修行の教誡』の第42章である。「山法」はタクポ・カギュ派の修行法である。著作冒頭の科文にこの章の目的について、「[死後] どこに往くかの目的地があるために」といい、本章では弟子であるツォンドゥ・ギャンツォが往生すべき仏国土について質問したのに対し、答えたものとされ、偈頌で書かれている。シチェ派の開祖の女性成就者マチク・ラプキドンマ(1031-1129)の言葉が引用されるが、彼女の著『誓言（三昧耶）二十一』には、幾つか内容の一致が見られる。
具体的には、まず唯心的な視点から諸仏と六道の衆生にはそれぞれ涅槃の浄土と輪廻の穢土が現れることを指摘し、諸方の仏陀と成就者の国土と聖地、それらの特徴、往生の条件が示される。さらにそれらがチベットの信仰と実践に応じて議論される。弥勒の浄土に関しては往生を願う人が多いが、小さな変化身の国土であること、自らが有情を利益し、教法を護持するために『弥勒誓願』を修行すべきであるが、著者はこの輪廻の苦に戦く［弱い存在な］ので、『極楽誓願』（東北Nos.1096、6941）を唱えたといって選択の理由を示している。
次に主に〈無量寿経〉から西方の極楽国土と教主無量光とそこに往生する条件が紹介される。今境遇に恵まれて自由のあるうちに放逸に過ごさず、極楽国土と無量光仏を説く諸経を見て、国土を選択し、往生の準備をすべきであるという。
次に極楽国土の功徳が紹介されて、インド・チベットの

高名な仏教者の中でもチベットに縁の深い人たち-オギャン王などは無量光仏の変化身、ティソン・デツェン王などは観自在菩薩の変化身であり、龍樹、タクポハジェ、キュンポ・ネルジョルなどは極楽へ往生したという。『悲華経』より、無量光仏が示寂した後には観自在、勢至が継承して成仏することを、説く。

最後に無量光尊と観自在のみを志願すべきだと説いて、密教でのその成就法を行うことを勧めている。

作成者名：藤仲孝司

Rig 'dzin tshe bsgrub －bDud rtsi'i bum bcud－

書名の日本語訳：持明の寿命の成就 －甘露瓶の精髄－
著者名：'Jigs med gling pa
著者名よみ：ジクメーリンパ
著者名別名：Kun mkhyen 'Jigs med gling pa、mKhyen brtse 'od zer、Rang byung rdo rje mKhyen brtse 'od zer、Paḍma dbang che
著者生没年：1729 / 1730－1798
成立翻訳年：18c.
成立地：チベット
所収文献名：Klong chen snying gi thig le(『大界の精髄の滴』)
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献.Ref.No.0016, 1a1-4a3
刊本の奥書刊記：（4a1）gangs can gyi ？tik dpal chu bo ri'i lcags zam byad chu brgyun lam gyi gandholar/ rJe grub pa'i 'khor los bsgyur ba'i Thugs rje'i 'phrin las la rang gir mdzad pa'i mchog gi sprul pa'i sku sogs rtsa ba'i chos bdag gsum gyi sku tshe rten 'brel la dmigs nas rgya khrol ？/ / dge'o / /
（雪国［チベット］の？吉祥河山の 鉄橋、？河の流れる道のお堂にて、尊者ドゥッペーコルロ・ギュルワの『大悲事業』を自身のものとなさった最高の変化身（活仏）など根本の法主三者の寿命の縁起を縁じて広釈した。善かれ！）
参考文献：・平松敏雄『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』3、1982年）pp.109-111, p.182
・ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯 －チベット密教の瞑想修行－』（平河出版社、1986年）p.29
・田中公明『チベット密教・成就の秘法』（大法輪閣、2001）pp.141-144
解説：著者は、ニンマ派教義の大成者ロンチェンパ（1308-1363）を幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティクの体系を継承した。古刹ミンドゥルリン所蔵の『古派タントラ集』を整理し、ニンマの復興を目指した。1762年には Tshe ring ljongs paḍma 'od gsal theg mchog gling を建立した。弟子にジクメー・ティンレー・ウセル（'Jigs med 'phrin las 'od zer 1745-1821、rDo grub chen1世）やクンサン・シャンペン(Kun bzang gzhan phan)がいる。この系統では、ジュ・ミパム(1846-1912)、ジクメー・テンペーニマ(1865-1926、rDo grub chen3世)などリメー（無宗派運動）で活躍した人が多く、著者自身も含めて阿弥陀仏や極楽往生に関する著作を幾つも著わしている。

本著を収録した『大界の精髄の滴』（Klong chen snying gi thig le）のうち、「精髄の滴」（snying thig）は、教義の中心ゾクチェンを構成する心部・界部・教誡部のうち、教誡部を指すようである。本著は阿弥陀仏成就法であり、その中心は寿命瓶、寿命丸に拠った「摂寿（tshe 'gugs）」である。「摂寿」は、神・仙人・情器世間の寿命の精髄すべてを集めて、行者に融合させて寿命を守護する儀軌であり、他の系統の儀軌にも見られる。本著では、世尊無量寿仏を始めとした四方四維の尊格を対象にして、無死悉地を賜る祈願が、根本ダラニの読誦と共に繰り返される。その終わりには儀軌の骨格を要約した文句、すなわち「五大の界（dbyings）から［寿命の精髄が］彷徨した時、五母の界（klong）に一体になることで、五智において生死がなくなり、五身の界（dbyings）に寿命が隠されたので、五族の王も御覧にならない」ことが説かれる。

全体の構成は、題名（1a1ff.）、帰敬偈（1a1ff.）、儀礼の準備と前行（1a2ff.）、世尊無量寿仏の身体的特徴、及び無死の持明を成就する性格について（1a4ff.）、ダラニの読誦（1b1ff.）、阿弥陀仏と四方四維の尊格を対象にした摂寿儀礼（1b2ff.）、儀礼要約（3a1ff.）、衆生利益・寿命灌頂と悉地獲得・無死灌頂の獲得・無死金剛寿命の成就・金剛寿命の灌頂獲得を願う各種祈願文（3a2ff.）、奥書（4a2）、である。

なお東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref.No.2935は、本論に註釈『寿命の成就 － 甘露瓶の精髄の灌頂の釈の補充』(Tshe sgrub bDud rtsi bum bcud gyi dbang bshad lhan thabs su byas pa)を加えたものである。

作成者名：中御門敬教

Rig 'dzin tshe bsgrub dmigs gnad gal mdo

書名の日本語訳：持明の寿命の成就を縁じた枢要の経
著者名：'Jigs med gling pa
著者名よみ：ジクメーリンパ
著者名別名：Kun mkhyen 'Jigs med gling pa、mKhyen brtse 'od zer、Rang byung rdo rje mKhyen brtse 'od zer、Paḍma dbang che
著者生没年：1729 / 1730－1798
成立翻訳年：18c.
成立地：チベット
所収文献名：Klong chen snying gi thig le(『大界の精髄の滴』)
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref.No.0017, Folios 1a1-3a5
刊本の奥書刊記：（3a5）
rgyu? sbyo? ba zur? mdzod? tshe ring don 'grub nas par tu bskrun ba'i dge bas 'gro kun rdzogs pa'i sangs rgyas go 'phang thob pa'i rgyur gyur cig / /
（・・・が延命の利益を成就してから、版本を造った善により、衆生すべてが正等覚者の位を得る因になりますように！）
参考文献：・立川武蔵『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』3、1982年）
・ラマ・ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯 －チベット密教の瞑想修行－』（平河出版社、1986年）p.29
解説：著者は、ニンマ派教義の大成者ロンチェンパ（1308-1363）を幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティクの体系を継承した。古刹ミンドゥルリン所蔵の『古派タントラ集』を整理し、ニンマの復興を目指した。1762年には Tshe ring ljongs paḍma 'od gsal theg mchog gling を建立した。弟子にジクメー・ティンレー・ウセル（'Jigs med 'phrin las 'od zer. 1745-1821、rDo grub chen1世）やクンサン・シャンペン(Kun bzang gzhan phan)がいる。この系統では、ジュ・ミパム(1846-1912)、ジクメー・テンペーニマ(1865-1926、rDo grub chen3世)などリメー（無宗派運動）で活躍した人が多く、著者自身も含めて阿弥陀仏や極楽往生に関する著作を幾つも著わしている。

同著者による『持明の寿命の成就　－甘露瓶の精髄－』と同じく、『大界の精髄の滴』(Klong chen snying gi thig le) に所属し、甘露瓶を用いて摂寿作法を行う阿弥陀仏一尊一瓶の簡略な成就である。題名は奥書に明記がないので、冒頭の箇所をも参照した。

具体的な内容は次のとおり。

寿命尊に帰命し、準備を典籍のとおり成就した後、自分と成就の依処を無区別とする「アティヨーガ（ゾクチェン）」の確定によって、持明の行為と本文の守護者を賞讃する。フリーヒ字、「寿命自在の持明者パドマサンバヴァ（阿弥陀仏の変化身とされる）」などという文言などにより、智慧薩埵、受用身の無量寿の父母尊を観想し、その上に赤蓮華の瓶、その中に器・有情世間の精髄すべて、心臓のフリーヒ字、真言蔓とそれからの光の放射を観想する。次に、色究竟天清浄国土の五決定（受用身の五種の特法である処・身・眷属・法・時の決定）の中の眷属決定の功徳と、持明者と仙人たちの劫に住する寿命の精髄、器・有情世間と、光彩威光、事物の精髄、吉祥寿命、福徳すべてを、磁石が鉄粉をひきよせるように集め、行者自身に溶け込むと信解する。輪廻・涅槃の事物の精髄すべてを瞬間に精髄に溶け込ませて、極微細な塵のような無量寿仏の身により行者は金剛の寿命への灌頂を得て、自身は卍のような吉祥な身体になり、さらに精髄中の精髄である命の明知を刺激し、一種字が柔らかく響くのを思念する。穏やかな風および瓶をもって念誦に入ったのが、風と心が無差別な寿命成就であるという。

最後に一般的な議論がなされる。すなわち、他者のために成就する場合と、等持と風力の弱い浄業者は無量寿仏所説のフリーヒ字を思惟し、光の拡大・収束することが最も大切である。利他では対象の生命の種字を心臓中に思惟して摂寿し、修行時間の終わりに金剛念誦することで良くなる。休み時間に持命者各々に特定の悉地を促す寿命成就、枢要の見、生起次第を具えた後で、生死の無い自生の法界において一体になり、寿命を隠匿することが重要である、という。

作成者名：中御門敬教

Sangs rgyas sNang ba mtha' la bsten pa'i sku gsum bla ma'i rnal 'byor

書名の日本語訳：仏無量光に依る三身のグルヨーガ
著者名：'Jigs bral Ye she rDo rje
著者名よみ：ジクレル・イェシェー・ドルジェ
著者名別名：bDud 'joms 'Jigs bral Ye she rDo rje
著者生没年：1904-1988
成立地：チベット
写本等の存欠：活字本
刊本の奥書刊記：（P.278）oṃ a mā ra ni dzī wanti ye swā hā / zhes bzla bzhin du dbang bzhi blang bar bya'o / 'di ni byin rlabs shin tu myur zhing dGongs gter du babs nas ring zhig lon yang yi ger ma 'khod pas 'Jigs med shes rab kyi ngor 'Jigs bral ye shes rDo rjes bkod pa'o / / dge'o / /
（「オーム、アマーラ、ニジーヴァンティイェー、スヴァーハ」と唱えながら、四灌頂（宝瓶灌頂、秘密灌頂、智慧灌頂、句義灌頂）を受けるべきです。これ（行法）は加持が極めて速疾であり、『密意蔵』に納まってから長期間たっても文字に著さなかったので、ジクメー・シェーラプにちなんで、ジクレル・イェシェー・ドルジェが著わした。良かれ。）
活字本所載書：・bDe smon phyogs bsgrigs stod（四川民族出版社、pp.277-278、1994）
解説：著者はテルコン(gTer kong)の生まれであり、ニンマ派のドゥジョム(bDud 'joms)の埋蔵経の継承者の一人である。

本著は直接の師と本尊（ここでは無量光仏）を無差別だと修習するグルヨーガ文献である。この行法は本来密教の前行であったが、特にチベットでは罪障を浄め、福徳を積むための行法として盛んに行われた。本文中に三身の記述は明記されないが、師を三身を具えた無量光仏と一体とし、それを取りまく眷属や仏菩薩の集まりである資糧田を観想して行うようになっている。まずそれら聖師たちを対象として七支供養を行う。本著は、その七支供養の骨格に、無量光仏による摂取や極楽往生に関する祈願が盛り込まれている。奥書に四灌頂に言及するが、後期密教「無上ヨーガタントラ」特有のこの行法の内容に直接言及するわけではない。この願文は、パドマ・サンバヴァへの言及があるように『ゴンテル(密意蔵)』という埋蔵経の一部分であり、ニンマ派、カギュ派の行者の前行や信者の勤行として行われると思われるが、その典籍の全容やその中でこのグルヨーガがどのように役割を担っているのかということなどは、未詳である。

以下に全文を訳しておく。

「およそ見られる限りの極楽国土は、微細な塵ほどの金［からできた］大地に様々な宝石をあてがった鎧を被ったもの［です］。沐浴場の安楽な歌声や、鳥の歌声が聞こえ、すべてが聖諦だけを唱えます。苦諦を断じた国土において、広さが不明な［ほどの］無量宮の中央に、自身の頭頂に孔雀により支えられた座［があります］。蓮華・月の座に［坐られた］根本ラマは、無量光の［紅色の］珊瑚の須弥山［のような身体］に、三種の法衣の力を打ち纏った（chos gos gsum gyi dbang gzhus）姿［です］。相好を完全に円満にし、禅定［印を結び］、鉢を携え、右左の観自在と大勢至、前には吉祥なる仏パドマ・サンバヴァ、後ろには菩薩・阿羅漢の集まりにより囲繞されていて、一切勝者の集まりを本性としているもの［です。彼ら］に、心から帰依し、最高の菩提心を起こし、帰命し、身と資財をかえりみず献げます。遮罪と自性罪を破った罪・堕を懺悔します。善に随喜して、法輪を転じつつ、般涅槃せず堅固にいらっしゃって、私と［無限の生死流転において大恩ある］母なる一切衆生に対して、今［生］と後［生］と中有すべてにおいて憐れみでもってご覧ください［、と勧請します］。三世に積んだ善根を菩提に廻向します。今生の寿［を留める］諸行が空っぽになった途端、極楽国土に生まれますように。」

作成者名：藤仲孝司

Sras rgyal ba Don grub la mKha' 'gro'i gsang tshig tu gdams pa Dam tshig nyi shu rtsa gcig pa

書名の日本語訳：御子息、勝者ドンドゥプ（シッダールタ）に対して空行者の秘密語として教誡するもの、誓言（三昧耶）二十一
著者名：Ma gcig lab kyi sgron ma
著者名よみ：マチク・ラプキドンマ
著者名別名：Ma gcig lab sgron ma
著者生没年：1031-1129
成立翻訳年：11-12c
成立地：チベット
写本等の存欠：刊本
活字本所載書：・Kapstein, Matthew T., Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvatī to the Field of Great Bliss（Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed.by Richard K.Payne

and Kenneth K.Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004）p.45 note27
現代語訳書：・Kapstein, Matthew T., ibid. (2004）p.22
参考文献：・西岡祖秀『西蔵仏教宗義研究　第二巻－トゥカン『一切宗義』シチェ派の章－』（東洋文庫、1978年）
・藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択－『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳－」（『浄土教典籍の研究』「仏教大学総合研究所紀要別冊」、2006年）p.64
解説：著者はシチェ派の開祖となった女性成就者である。南インド出身でチベットに来たパダムパ・サンギェー（Pha Dam pa sangs rgyas. マイトリーパの弟子ともいう）、あるいはチベットの埋蔵経の発見者ダパ・ゴンシェチャン・シェーラプギャルワ（Grva pa mNgon shes can Shes rab rgyal ba. 1012-1050）に師事し、チョ(gCod. 断境)の法類を成就し、広めた。ヤルルンに住した。シチェ(Zhi byed)は、後期密教の影響をも含んだ般若波羅蜜の実践方法であり、輪廻と涅槃の苦などすべてを鎮める(zhi bar byed pa)ことからその名が付けられた。その伝承や教義には変遷や異説もあるし、独立した宗派を形成しているとも言い難いが、その教誡はゲルク派、カギュ派、ニンマ派など他宗派の行者にも継承されている。本著は、カルマ・チャクメー著『虚空の法、大楽国土を成就する灌頂を整然と配置したもの』(gNam chos bde chen zhing sgrub kyi dbang 'grig chags su bkod pa)東洋文庫蔵チベット蔵外文献Ref. No.701(Folios.1a1-17a4)のうち、3b5-5b4 に引用されているが、原本の所在や伝承などは不明である。
　内容は、速やかに成仏したい者は、一つの浄土への誓願を立てることが必要である。無数の国土が説かれたうち、極楽以外の最高の浄土に生まれるには、二障すべてを断って第八地以上を得ることが必要である。中程度の国土に生まれるにも、最も微細な煩悩障を断つこと、最低の国土に生まれるにも、我執を根絶することが必要である。見道未満では誓願しても成就できない。三昧耶戒に最小の過失もなく、悪を懺悔し、善を行い、誓願に勤めるなら、都卒天など小さな国土に生まれる。けれども、煩悩の領域に住む凡夫には難しく、仏国土への往生は不可能である。しかし、無量光仏はその誓願の力により、極楽に往生できると承認なさったから、極楽往生の願文に全面的に勤めることが必要である。それも、決定知と大精進を通じ、その荘厳と功徳を念じて誓願すべきである。極楽は凡夫も往生できるので、格別である。往生したなら、何でも思ったことが直ちに成就するし、微細な煩悩にも汚れなくて、行きたい仏国土にも行けるし、成仏も速やかであり、そのような不可思議な功徳を持った国土は他にないので、極楽往生の誓願に勤めることがきわめて重要である、と述べている。
　ただし本文に言及される極楽往生の誓願は、著作の願文として存在するのか、あるいは単に往生を願うことほどをいうのか不明である。本著の発想と記述は、カルマ・チャクメー著『山法・独居修行の教誡』の中の骨格と一致しており、「虚空法」に大きな影響を与えたことになる。
作成者名：藤仲孝司

Slob dpon chen po Jetāri'i lugs kyi bCom ldan 'das Tshe dpag med lha dgu'i sgrub dkyil gyi cho ga 'i ngag 'don khrigs chags su bsgrigs pa －'Chi med bdud rtsi'i mchog sbyin－

書名の日本語訳：大軌範師ジターリ流の世尊無量寿九尊の成就、マンダラの儀軌の発語を整然と編纂したもの　－最上の無死甘露の施与 －
著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje
著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ
著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje
著者生没年：1781-1855
成立翻訳年：19c前半
写本等の存欠：刊本
刊本所在：Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Ca, tshe-cho-ga 1a-24a , pp.22-33
刊本の奥書刊記：（23b2-24a3）
Slob dpon chen po Jetāri'i lugs kyi bCom ldan 'das mGon po Tshe dang ye shes dpag med pa lha dgu'i sgrub dkyil gyi cho ga 'i ngag 'don khrigs chags su bsgrigs pa 'Chi med bdud rtsi'i mchog sbyin zhes bya ba 'di ni / Chos grwa chen po dGa' ldan bkra shis tshe 'phel gling gi bsam gtan gyi dben gnas Yid dga' chos 'dzin gling du bstan 'gro spyi'i phan bde'i gsos su dmigs te 'di nyid kyi dkyil 'khor sgrub mchod kyi rgyun btsugs skabs / ris med dam pa so sos mdzad pa'i yig cha mang du mchis pa las / phyogs 'dir dar rgyas che zhing byin rlabs kyi khyad nas / rDo rje' 'chang Paṇ chen thams cad mkhyen pa rJe btsun Blo bzang chos kyi rgyal mtshan dpal bzang pos mdzad pa'i cho ga 'Chi med 'dod 'jo dbang gi rgyal po nyid gzhir bzung/ tshad ldan gyi phyag bzhes sogs dang bstun te ngag 'don gyi mtshams sbyor dang kha 'geng 'os kyis cung zad brgyan nas/ bla ma dam pa rnams kyi bka' drin las lugs 'di'i dbang dang gdams pa'i skor mang du thob pa'i rGyal khams pa Dam tshig rdo rjes bsgrigs pa'i Yi ge pa ni / dpyad ldan slob ma dge slong Blo bzang thar 'dod kyis bgyis pa'o / / 'dis yang rgyal ba'i bstan pa rin po che dar zhing rgyas pa dang / bstan 'dzin gyi skyes bu dam pa rnams zhabs pad brtan cing mdzad 'phrin bzang po rnams gong nas gong du 'phel zhing rgyas par gyur cig / / dge legs 'phrel / /
（『大軌範師ジターリ流の世尊主無量智寿九尊の成就、マンダラの儀軌の発語を整然と編纂したもの － 最上の無死甘露の施与－』というこれは、大寺院 ガンデン・タシキル・ツェペルリンの禅定の閑寂処イガーチョージンリンにおいて、教えと衆生一般の利益・安楽である癒すものとして縁じて［観想することによる］、これ（無量寿九尊）のマンダラを成就し、供養の流れを建立する機会に、無宗派の上人たち個々が造られた教科書は多くあるうち、 この地方で盛んであり加持の殊勝なることから、持金剛パンチェン一切智者ロサン・チョーキギェルツェン・ペルサンポが造られた『儀軌　－無死の如意牛王－』こそを基本に据えて、量を具えた（正規の）実践などと一致させて、発語の境い目と補充すべきことで少し荘厳してから、勝れた上人たちの御恩によって、この流儀の灌頂と教誡の類を多く得たギェルカムパ・タムチク・ドルジェが編纂しました［。その］筆受者は、伺察を具えた弟子比丘ロサン・タルドッが行いました。（以下廻向文）
　これによってまた、勝者の教えの宝が栄えて広まることと、持教の上人たちが安泰であり、［彼らの］善き事業がますます増益し、広まりますように！善が増益しますように！）
解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジョッツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作

している。

本著は、所作タントラの蓮華部の正尊に分類される無量寿九尊のジターリ流の無量寿仏成就法文献の行法について、その我・面前・瓶の三つの生起と、その灌頂儀軌で唱えるべき文言・真言の次第を含めて、詳細に示した典籍である。奥書には、本書がこの流儀の様々な教科書の中でもパンチェン1世ロサン・チョーキギェルツェンの著作『儀軌　－無死の如意牛王－』に基づくことが記されているように、本文でもジターリ流の無量寿九尊のマンダラ、同著『無量寿讃』の変形版が用いられており、さらにジターリ流が所作タントラに分類されるため、その特徴的な「有相」「無相」のヨーガに言及している。一部分、印刷ないし刊本の複写状態が良くない。

冒頭には伝承の師への祈願がなされるが、そこには根本師・持金剛・文殊師利・ツォンカパ以下の「菩提道次第」の祖師の名が出る。

構成は、我生起の次第（3b5-10b1）、瓶の生起（10b1-12a3）、面前生起を成就し供養する儀軌（12a3-13b1）、自己が入って灌頂を受ける儀軌（17b1ff.）、灌頂の本行（19a2ff.）、非共通の灌頂（20b3ff.）、祝詞（21a6-22a6）、祈願（22b5-23b5）などとなっている。ただし、22b2には「他者に灌頂する作法は他から知るべきである」と言い、パンチェン1世ないしそれに従う人の典籍が用いられたようである。

作成者名：藤仲孝司

gSang bdag snyan brgyud las gsungs pa'i Tshe dpag med dang Phyag na rdo rje zung 'brel gyi sgrub thabs tshe dbang dang bcas pa'i cho ga bsgrigs －'Chi bdag gyul las rnam par rgyal ba'i rgyal mtshan－

書名の日本語訳：秘密主聴伝に説かれた無量寿と金剛手の双運の成就法、および寿命灌頂の儀軌の編纂 － 死王に勝利せる幢 －

著者名：Hal ha Dam tshig rdo rje

著者名よみ：ハルハ・タムチク・ドルジェ

著者名別名：Dam tshig rdo rje Grags pa dpal、Brag ri Dam tshig rdo rje、Hal ha sBa'i Dam tshig rdo rje、sBa'i ri Dam tshig rdo rje

著者生没年：1781-1855

成立翻訳年：19c前半

写本等の存欠：刊本

刊本所在：Hal ha dam tsig rdo rje'i bka' 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs（天津古籍出版社）Tha, Tshe-phyag, 1a-29a, pp.105-119

刊本の奥書刊記：（29a2-b1）

gSang bdag snyan brgyud kyi chos skor phyi nang tshan mGon po Tshe dpag med gtso 'khor dang Phyag na rdo rje zung 'brel la brten pa'i tshe sgrub dang tshe dbang zab mo'i chog ga bsgrigs 'Chi bdag g-yul las rnam par rgyal ba'i rgyal mtshan zhes bya ba 'di ni / / rtsa ba'i gzung la kha 'gengs dang ngag 'don mtshan sbyor sogs zhib cha sbyor dgos pa mang bar snang bas / cho ga sgrigs bklag cho ga ma 'di lta bu zhig byung na rang bzhan gyi lag len dang chos rgyun la'ang phan pa'i bsam pas kun nas bslangs te / sNyan brgyud bka'i 'bum nang gi dBang cho ga don gsal sgron me dang / Tshe sgrub rdo rje'i tshig rkang / rNam 'dzoms tshe sgrub gsum khog gcig par 'dug pa rnams phan tshun gung bsgrigs / Grub chen rang nyid kyi dgongs pa bzhin tshe chang gyi zhal gdams sogs las kyang cung zad kha bskangs te / shin tu gsal zhing lag tu blang bde bar / rdo rje 'chang dngos bla ma dam pa rnams kyi bka' drin las lugs 'di'i dbang lung man ngag gi rim pa man du nod pa'i btsun gzugs / Dam tshig rdo rjes rang gi bsti gnas sgrub sde dGe ldan yid dga' chos 'dzin 'phel rgyas gling du rgya zla ba'i yar tshes bzang por legs par sbyar ba'i yi ge pa ni dpyod ldan gsol dpon dge slong bsTan 'dzin bzang pos bgyis pa'o / / 'dis yang bla ma dam pa rnams kyi zhabs pad brtan cin g/ snyan brgyud zab mo'i gdams pa dri ma med pa 'di dag phyogs dus kun tu dar zhing rgyas la yun ring du gnas par gyur cig / / tshe dpal dge legs 'phel / /

（『秘密主聴伝の法類、内部・外部の主無量寿正尊・眷属と金剛手との双運に依った甚深な寿命成就と寿命灌頂の儀軌の編纂　－死王の軍勢から勝利する幢－』　というこれは、根本典籍に対する補充と発声・境界など［に関する］細分を結合させる必要が多いと見えるので、このような儀軌の編纂・諷誦法ができたなら自他の実践と法の伝統にも益するという思いにより動かされて、聴伝全集中の「灌頂　－儀軌の明義灯－」と、「寿命成就　－金剛句－」、「［金剛］摧破の寿命成就」という一緒にある三つのものを相互に配置した。成就者自身のお考えのとおり、寿命酒の教誡などからも少し補足した。きわめて明瞭であり実践しやすくて、持金剛そのもの［である］勝れた師たちの御恩よりこの流儀の灌頂・伝授・口訣の次第を多く受けた僧姿のタムチク・ドルジェが、住居の修行処である、ゲデン・イガー・チョジンペルゲェー・リンにおいてチベット暦12月の上弦の吉日に著作した［。その］筆受者は、伺察を具えた司膳の比丘テンジンサンポが行った。これによりまた勝れた師たちが安泰であられて、これら甚深な聴伝の無垢の教誡が方向・時のすべてに栄えて広がり、永らく住しますように！寿命・吉祥・善が増長するように！）

解説：著者はモンゴル人のゲルク派の僧侶である。ハルハは外モンゴルをいう。クンタン・テンペードンメ（1762-1823）に師事し、モンゴル仏教の大指導者ジョッツンダンパ（rJe btsun dam pa）5世、6世の師となった。Chos 'khor gling を建立し、Urga の道次第学堂を再興し、数多くの著作を残した。ニンマの法についても幾らか著作している。

冒頭に「秘密主金剛手がホダクドゥッチェン・レーキドルジェ（lHo brag grub chen Las kyi rdo rje, 生没年不明）に直接に認可なさった無死寿命の成就の甚深な不共の教誡」と記されている。レーキドルジェはホダク・ドゥッチェン・ナムケーギェツェン（lHo brag grub chen Nam mkha' rgyal mtshan, 1326-1401）の弟子である。ナムケーギェツェンはニンマ派で、金剛手を成就した人であり、カダムの法と金剛手の法類を多く授けた。ツォンカパとも交流があった。本著は「自己が実践するのと他者に灌頂する作法の儀軌の実践の一部を明示」したものである。「秘密主聴伝　（gSang bdag snyan brgyud）の経函」と呼ばれる根本典籍（未詳。金剛手から授かったものか）が言及され、奥書に言われるもの以外では、「ドゥッチェン・リンポチェ（レーキドルジェ）の御言葉」「寿命灌頂の補完（lhan thabs）」「レーキドルジェの行状伝（rnam thar）」への言及がある。本著は後代のものであり、本来の姿と異なるかもしれないが、内容はジターリの無量寿仏成就法の影響を承けながら、諸処に相当な改変がなされている。本著者には、簡易で常行しやすくまとめた『無量寿と金剛手の双運の寿命成就の常行 － 金剛の命の成就 －』というものもある。

本論では弟子を摂取する次第として、1）加行（2a3-3b2）、2）本行（3b2-25b5）、3）後（25b5-26a6）とに分けられて

おり、その後に寿命酒だけを成就する場合の行法が記されている。本行の個所は、資糧田の供養（4b3ff.）、本尊の修習 － 我生起（6a4ff.）、面前生起（8a1ff.?）、弟子たちに対する灌頂 － 前行（19a5ff.）、灌頂そのもの（21b4ff.）、心臓形の食物の灌頂（22a4ff.）、尊勝の瓶の寿命酒の灌頂（23a4ff.）、支分としての八吉祥物・八物・転輪王七法の灌頂（24b4ff.）といった項目が立てられている。福徳と寿命の増長を祈願するとともに、悪業と煩悩、特に短命の原因となる殺生が戒められている。

灌頂のため招いて成就される尊格は、極楽浄土からの無量寿仏（無量寿智決定威光如来）、楊柳宮（金剛手の住処）からの世尊秘密主金剛手(チベットでは大勢至の忿怒形という)、八大寒林の護法尊たちであるが、無量寿仏は通常の一面二臂、金剛手は一面二臂で黒い藍色の忿怒形である。

本尊を修習する個所（9a4-b6）には、中央に大日無量寿、東に金剛サッタ無量寿、南に宝生無量寿、西に無量光無量寿、北に不空成就無量寿に加えて、四隅と上下に供養の明妃を置き、それらは〈秘密集会〉流の特徴を示しているが、直後（10b2-5）に四隅に配置される四仏は、北東の普見無量寿を初めとしてジターリの無量寿九尊の成就法のものを承けている。また無量寿九尊への祈願文（16a6-17a4）はジターリの〈無量寿讃〉の変形である。

作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa（クンタン3世）、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c末-19c前半
所収文献名：mGon po 'Od med la brten pa'i 'pho khrid sogs kyi skor Dag zhing du mar bgrod pa'i myur lam（主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 38, New Delhi 1975　Vol.6 Ca , 'Pho-khrid 5b2-6, 362 （なお別の版では Nya巻）
刊本の奥書刊記：（奥書なし）
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。

本著は『主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－』のなかの第3の小品であり、無量光仏に依って存命中の人がポワの修習を行う方法を説く。

七支供養から派生した部分として、身体の中に中央脈管、灯火の内に識の種字ないし滴を観想し、面前の師尊に対して心骨から祈願し、怖れからの済度を祈る。梵浄孔の上の部族主である無量光仏の心臓のほうの光明と、自身の脈管とが、無礙で区別できなくなったと思惟する。無量光仏の心臓のほうの脈管の輝く種字を修習し、祈願する。ヒック、パットの種字で結合し、廻向、誓願により結生する。

祈願の部分には、第1の小品の願文のうち、冒頭から「怖れから救護してください」までが用いられる。

作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

著者名：Tsong kha pa
著者名よみ：ツォンカパ
著者名別名：Blo bzang grags pa, Blo bzang grags pa'i dpal
著者生没年：1357-1419
成立翻訳年：14-15c.
成立地：チベット
所収文献名：rJe thams cad mkhyen pa Tsong kha pa chen po'i bka' 'bum thur bu（ラサ版　東北No. 5275）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5275, Kha 17a-19a
・タシルンポ版, Kha. 21a1-5
・北京版　大谷No. 6021, rJe 3, Ga. 17b1-5
刊本の奥書刊記：なし
参考文献：・釈舎幸紀「無量光仏礼讃文をめぐって（序説）－その解説と和訳－」（『高田短期大学紀要』3、1985）
解説：ツォンカパ・ロサンタクパは、現在チベットの最大宗派ゲルク派の開祖である。

本著はごく短い礼讃、願文である。ツォンカパは阿弥陀仏の讃を顕密両方で著作したが、これは顕密の要素を兼ね備えた讃である。チベットでは、密教の儀軌において祈願の部分で、純粋な極楽願文を唱えるといった形が見られ、このような顕密併存の形は珍しくない。

無量寿仏は紅蓮華の容色を有し、甘露の宝瓶を持ち、見・聞・念により救済し、名の受持で願いを満たし、不死という最高の位を与える仏であると説き、さらに無量寿仏の国土の荘厳が美しいことを説く。終わりに、施主たちが寿命を全うし、力と資財などの円満が増長し、極楽へ往生できるように廻向している。

作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

著者名：Tsong kha pa
著者名よみ：ツォンカパ
著者名別名：Blo bzang grags pa, Blo bzang grags pa'i dpal
著者生没年：1357-1419
成立翻訳年：14-15c.
成立地：チベット
所収文献名：rJe thams cad mkhyen pa Tsong kha pa chen po'i bka' 'bum thur bu（ラサ版　東北No. 5275）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5275, Kha 17a-19a
・タシルンポ版, Kha. 20b4-21a1
・北京版　大谷No. 6020, rJe 3, Ga. 17a6-17b1
刊本の奥書刊記：奥書なし
参考文献：・釈舎幸紀「無量光仏礼讃文をめぐって（序説）－その解説と和訳－」（『高田短期大学紀要』3、1985）
解説：ツォンカパ・ロサンタクパは、現在チベットの最大宗派ゲルク派の開祖である。

本著は、ごく短い礼讃文である。ツォンカパは阿弥陀仏の讃を顕密両方で著作したが、ここには密教の要素が中心となっている。

具体的には、無量光仏を、珊瑚色(紅)の容色をもち、蓮華と月輪の座に坐って、装飾具に荘厳された姿をしており、手に無死の甘露の宝瓶を持ったものとして観想し、死王を破り、十方諸仏に賞讃される最高の帰依処、願望すべてを叶える蔵として、礼拝するものである。

作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

著者名：Tsong kha pa
著者名よみ：ツォンカパ
著者名別名：Blo bzang grags pa, Blo bzang grags pa'i dpal
著者生没年：1357-1419
成立翻訳年：14-15c.
成立地：チベット
所収文献名：rJe thams cad mkhyen pa Tsong kha pa chen po'i bka' 'bum thur bu（ラサ版　東北No. 5275）
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5275, Kha 17a-19a
・cf.タシルンポ版, Kha. 21a5-22a2
・北京版　大谷No. 6022, rJe 3, Ga. 17b5-18a6
刊本の奥書刊記：奥書なし
参考文献：・釈舎幸紀「無量光仏礼讃文をめぐって（序説）－その解説と和訳－」（『高田短期大学紀要』3、1985）
解説：ツォンカパ・ロサンタクパは、現在チベットの最大宗派ゲルク派の開祖である。
　本著はごく短い礼讃文である。ツォンカパは阿弥陀仏の讃を顕密両方で著作したが、これは顕教、特に『無量寿経』の所説に基づく讃であり、その点では彼の有名な極楽願文『最上国開門』と共通している。
　具体的には、無量光仏は、無量不可思議劫の昔に世自在王の教えにおいて法蔵比丘となり、無数の仏国土の荘厳円満を一纏めにしたものを受持し、菩提行を学び、愚癡を破り、大誓願を立てたこと、及びその誓願のとおりに最高の浄土である極楽を成就したが、その極楽浄土の荘厳の特性や仏陀の特性に言及しつつ、無量光仏を礼拝するものとなっている。
　最後に、典拠は『宝積経』の集成の第五の経であり、仏の意趣のごとく示したことを述べる。そして、無辺の輪廻において苦しみ、安楽の無い一切有情が、死去した直後、大勢至など八大菩薩に引導されて、大乗の種姓に生まれるよう、廻向し祈願している。チベット訳での〈無量寿経〉は『宝積経』の第五のみである。
作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

著者名：Tsong kha pa
著者名よみ：ツォンカパ
著者名別名：Blo bzang grags pa, Blo bzang grags pa'i dpal
著者生没年：1357-1419
成立翻訳年：14-15c.
成立地：チベット
所収文献名：rJe thams cad mkhyen pa Tsong kha pa chen po'i bka' 'bum thur bu（ラサ版　東北No. 5275）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No. 5275, Kha 17a-19a
・タシルンポ版, Kha. 20a2-20b4
・北京版　大谷No. 6019, rJe 3, Ga. 16b6-17a6
刊本の奥書刊記：（P.Ga.17a5）'di yang rgyal mkhas (sic) pa Shar pa Tson kha pa Blo bzang grags pa'i dpal gyis sbyar ba'o //
（これも遊行者、東のツォンカ出身のロサンタクペーパルが著作した。）
参考文献：・釈舎幸紀「無量光仏礼讃文をめぐって（序説）－その解説と和訳－」（『高田短期大学紀要』3、1985）
解説：ツォンカパ・ロサンタクパは、現在チベットの最大宗派ゲルク派の開祖である。
　本著はごく短い礼讃、願文である。ツォンカパは阿弥陀仏の讃を顕密両方で著作したが、これは密教の要素を中心とした讃である。教主無量寿仏をフリーヒ字から生じ、無死の甘露に満たされた鉢を持つとするなど成就法系統での姿を持った者として観想する。そして彼を功徳を持った帰依処・救済者と位置づけて礼拝を繰り返す。最後二に当面に死を回避すること、究竟には極楽に化生し、教主を悦ばせるを祈願する。
作成者名：藤仲孝司

無題（No Title. 東北目録による仮題は「阿弥陀如来讃」）

著者名：dGe 'dun rgya mtsho
著者名よみ：ゲドゥン・ギャンツォ
著者名別名：Dalai lama 2
著者生没年：1475 / 1476-1542
成立翻訳年：15c後半-16c前半
成立地：チベット
所収文献名：『尊者一切智者の小部集』（rJe btsun thams cad mkhyen pa'i gsung 'bum thor bu）東北No.5546
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5546(4)［Nga.4a2-6］
刊本の奥書刊記：（Nga.4A）'di yang bTsun pa dGe dun rgya mthso dPal bzang pos sbyar ba'o / /
（これもまた、尊者ゲドゥン・ギャンツォ・ペルサンポが著作した。）
解説：著者はツァンに生まれたゲルク派の僧であり、カルマ派との政治的対立の時期にあってゲルク派の先頭に立って勝利し、デプン、タシルンポ、セラなど大寺の座主を歴任した。彼の逝去後、ソナム・ギャムツォが彼の転生者に認定されたことにより、ダライラマの系譜が成立し、ゲドゥン・ギャムツォはダライラマ２世とされた。
　東北目録は、本篇だけでなく本篇を含めて様々な仏菩薩への礼讃文や誓願文を収録したNo. 5546(Nga)に対しても、題名を与えていないが、前後のNos.5543(Ka)-5545(Ga), Nos.5547(Ca)-5548(Cha)には一貫して『尊者一切智者の小部集』（rJe btsun thams cad mkhyen pa'i gsung 'bum thor bu ）という典籍名が当てられているので、本篇を含めたNo. 5546(Nga)も、ここに所属すると思われる。内容は東北目録の添え書きにあるように、阿弥陀如来への礼讃文であり、無量寿仏を中心とし、さらに観自在、大勢至にも敬礼するものである。無量寿仏は密教系に見られるような赤色とされている。9音節4句の4偈からなる。
　以下に全文を訳しておく。
「主マンジュゴーシャに帰命します。
　意を奪う［赤い］珊瑚色の塵が積もったような［この］身が、相好の千の威光を放ち、眷属衆の海の中央に殊勝である。［その］天人師の無量寿［仏］に礼拝します。福徳・智慧の二資糧の財宝の受持よりみごとに生誕なさって、衆生の願望を満足させます。三身が自然成就し、あらゆる欲求の大いなる思量［をお持ちの］無量寿よ、あなたに帰命します。きわめて広大な智慧は虚空の広さに等しく、大悲によってすべてを常に御覧になり、能力によって魔軍全てを破り、事業が広大無比なるあなたに敬礼します。憐れみが自在であり、白蓮華を持つ仏子［観自在菩薩］や、力の自在なる仏子大勢至［菩薩］などの眷属が取り囲む無量光・無辺光たる彼に敬礼します。」
作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

書名の日本語訳：念誦法（東北目録記載名）
著者名：Ngag dbang Blo bzang rgya mtsho
著者名よみ：ガクワン・ロサンギャンツォ
著者名別名：Dalai Lama 5、'Jam dbyangs dga' ba'i bshes gnyen
著者生没年：1617-1682
成立翻訳年：17c.
成立地：チベット
所収文献名：rGyud sde rnam bzhi'i lha tshogs rnams kyi sgrub 'phrin bsnyen pa rjes gnang sogs kyi nyams len －mChog thun dngos grub 'dod dgu'i nye ma gyung za－（ラサ版　東北No. 5618）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：・ラサ版　東北No.5618(30)［Tha.59b1-5］
刊本の奥書刊記：（Tha.59b4）'di'ang Mang bkur rgyal khab kyi nye 'dabs su 'khor ba'i Ye shes rgya mtsho'i kha ton du Za hol gyi Bandes sbyar ba'i yi ge pa ni dGe slong 'Jam dbyangs grags pa'o//
（これもマンクル・ギャルキャプの近辺において、［自らの］眷属のイェシェー・ギャムツォの常用経文として、サホールの長老（Dalai Lama 5）が著作した［。その］筆受者は比丘のジャムヤンタクパである。）
解説：パンチェン1世ロサンチョーキギャルツェンに受戒した。モンゴル・オイラット部のグシ汗がドメ、ツァンを平定し、ダライラマ5世に献上したことからチベットに統一政権を確立した。ラサにポタラ宮を建立し、清の順治帝の招待で北京をも訪ねた。顕密、歴史と著作は多く、チベット全体の統治者ともなったことからニンマ派の著作も多い。
『東北大学所蔵蔵外目録』（p.228）に「A kind of Amitābha-sādhana」とあるが、本書は大聖観自在（'Phags mchog sPyan ras gzigs）を主尊としており、阿弥陀仏や極楽国土への言及はない。内容は、フーム字から生まれた一面二手の観自在菩薩を観想して、帰命・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向という通常の七支供養を行うものである。
作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa（クンタン3世）、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c末-19c前半
所収文献名：mGon po 'Od med la brten pa'i 'pho khrid sogs kyi skor Dag zhing du mar bgrod pa'i myur lam（主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME　Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 38, New Delhi 1975　Vol.6 Ca , 'Pho-khrid 7b4-9a3, 366-369　（なお別の版では Nya巻）
刊本の奥書刊記：9a2-3
'di ni Dad brtson blo dang ldan pa Rab 'byams pa Chos rgya mtshos bskul ngor/ bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes bris pa'o / /
（これは、信・勤・慧を具えたラブジュムパ・チョギャムツォが勧めたのにちなんで、尊者コンチョク・テンペードンメが著した。）
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。
本著は『主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－』のなかの第6の小品であり、死や悪趣への転落に関する恐怖にあたって無量光仏による救済と極楽往生を願う願文である。
冒頭の割注に、主無量光への信と極楽往生への願楽と、善根を往生のために廻向することとの3つを、継続的に作意し勤めることが、極楽往生の因の中心であるとする。具体的には先ず無量光仏の仏像や経典（Zhing bkod（国土荘厳経））などを準備し、西を向いて帰依することを表わす。次に本体の願文に入るが、内容は死や悪趣への転落に関して無量光仏による救済と極楽往生を願う願文である。要点をまとめた再説の部分のみ（8b5-9a2）を翻訳しておく。
「要するに衆生の主である無量光、あなた以外に願う他の帰依処が無い者が、その苦悶の叫びを高らかに叫ぶのならば、悲の御手により［その者たちを］摂取し導いてください。この［世における］現れ、こだわり［すなわち主客のとらわれ］を断つよう加持してください。断末摩の苦を鎮めてください。死の恐怖を除くよう加持してください。中有の迷乱の現れが消え去るよう加持してください。悪業・罪障を浄めるよう加持してください。浄土に生まれるよう加持してください。善き道の証得が生ずるよう加持してください。主あなたの御心と私の意が無差別であり、一つに和合するよう加持してください。」
終わりの割注には、強い信仰が重要であること、そして更に最後には廻向・誓願により結生すべきことを説いている。
作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa（クンタン3世）、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c末-19c前半
所収文献名：mGon po 'Od med la brten pa'i 'pho khrid sogs kyi skor Dag zhing du mar bgrod pa'i myur lam（主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME　Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 38, New Delhi 1975　Vol.6 Ca , 'Pho-khrid 5a2-b2, 361-362　（なお別の版では Nya巻）
刊本の奥書刊記：奥書なし
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。
本著は『主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－』のなかの第2の小品であり、無量光仏

によるポワ（遷移）の簡略な記述である。
　根本師と無差別である帰依処としての無量光仏を、眷属とともに極楽から面前の虚空に招く。三門（身口意）により帰命以下の七支供養を行い、帰命、供養、三帰依する。その後で済度を願って加持を祈願する。ヒック、パットの種字で終結させる。
　祈願文は第1の小品に出ていたもののうち一部が省略されたものであり、第3、第4の小品のなかでも用いられるので翻訳しておく。
「三世・十方の勝者すべての功徳を一つにまとめた上師と無差別である帰依の主、悲の蔵であるあなたに対して、祈願します。悪趣の怖れから救護してください。欺きなき三宝そのもの、悪趣の怖れから済度する勇者、浄土に引導する最上の船主である主無量光に祈願します。今後、中有の怖れより済度してください。耐え難き悪趣の淵から救護してください。今生をあきらめるよう加持してください。甚深なる道、ポワを修めるよう加持してください。浄土へ導くよう加持してください。願う処は他にありません。大悲をもってご覧になってください。」
作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa（クンタン3世）、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c末-19c前半
所収文献名：mGon po 'Od med la brten pa'i 'pho khrid sogs kyi skor Dag zhing du mar bgrod pa'i myur lam（主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME　Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 38, New Delhi 1975　Vol.6 Ca , 'Pho-khrid 5b6-7a2, 362-365　（なお別の版では Nya巻）
刊本の奥書刊記：（奥書なし）
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。
　本著は『主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－』のなかの第4の小品であり、無量光仏に依る、死者に対するポワの行い方を説く。
　根本師と無差別である帰依処としての無量光仏を、眷属とともに極楽から面前の虚空に招く（割註には、死者のためには「（マンダラの）南門」の儀礼などを関係させ、そうでない場合は遷移する前に死者の識を招くために、三宝の諦語などを述べる、または所縁として帰依処を信じて、死者への悲の所縁を先行させるという）。三門により帰命以下の七支供養を行い、帰命、供養、三帰依する。死者に対して、この世のすべての者に降りかかる死、あるいは無常があなたの上に降りかかったこと、そして今は中有の状態であることを告げる。現象に従うことなく、更に帰依主無量光をここに招いたので、私が唱えるとおりに専注しなさいといって、ポワを行うために、第２の小品に出る願文を唱える。ここで、第3の小品と同様に死者と無量光仏を観想し、再び願文の「欺きなき」（パンチェン1世の極楽願文）以下を唱えて祈願する。すると、仏の心臓から鈎のような光が降り、死者の識を中央脈管から引き上げ、フリーヒの種字に溶けると観想し、ヒックを唱える。パットを唱えると、極楽に戻った仏の心臓から識が出て、蓮華の芯において生を受け、無量光仏の高弟となると考える。「勝者の善き浄らかな彼のマンダラに」（〈普賢行願讃〉vs.59-60）などの誓願により、結生すべきである、という。
作成者名：藤仲孝司

無題（No Title）

著者名：Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者名よみ：クンタン・コンチョック・テンペードンメ
著者名別名：Gung thang sku phreng gsum pa（クンタン3世）、dKon mchog bstan ba'i sgron me
著者生没年：1762-1823
成立翻訳年：18c末-19c前半
所収文献名：mGon po 'Od med la brten pa'i 'pho khrid sogs kyi skor Dag zhing du mar bgrod pa'i myur lam（主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－）
写本等の存欠：刊本
刊本所在：THE COLLECTED WORKS OF GUṄ-THAṄ DKON-MCHOG BSTAN-PA'I SGRON-ME　Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; Gedan sungrab minyam gyunphel series 38, New Delhi 1975　Vol.6 Ca , 'Pho khrid 7a2-b4, 365-366　（なお別の版では Nya巻）
刊本の奥書刊記：7b3-4
gshin po la 'pho ba dang bsngo ba byed tshul dmigs kyis bkar ba zhig dgos zhes Hal ha Dza sag Thu hū na gyi shig nas Dang ldan dGe slong Blo bzang nyi mas bskul ngor/ bTsun pa dKon mchog bstan pa'i sgron mes sbyar ba'i Yi ge pa ni Bhikṣhu Ratnānanta'o//
（「死者に対してポワ(遷移)と廻向の作法の特別なものが必要です」とハルハの総督トハーン部から、浄信をもつ比丘ロサンニマが勧めたのにちなみ、尊者コンチョック・テンペードンメが著作した〔。その〕筆記者は比丘ラトナーナンダです。）
解説：著者は、ゲルク派の学僧であり、著作も多い。アムド（現在の四川省）に生まれて、ジャムヤンシェーパ2世からクンタン活仏と認定され、デプン寺に学び、ダライ8世のもとで具足戒を受けた。タシキル寺の第21代住持を務めて、アムド地方での指導者となった。
　本著は『主無量光に依るポワの引導などの類　－多くの浄土に往く早道－』のなかの第5の小品であり、死者のために無量光仏による遷移の儀式をより広汎に行う場合の祈願文である。その構成は、菩提道次第（Lam rim）、真言道次第（sNgags rim）などゲルク派の仏道体系に依っており、それらの内容を死者ないし遺された人たちのために順次教誡し、祈願するもの、あるいは祈願させるものとなっている。
　まず阿弥陀仏と極楽世界を死者のために明確化して祈願を始める。祈願の内容は次のとおり － 善知識が不在なら居る人たちが清浄な三業により三宝への供養、貧者への布施、真言の念誦、読経、曼陀羅に入っての灌頂などを為し、死者がどこに生まれても、それらあらゆる善行が彼に付き従うこと、その力により世々のすべてに悪趣、堕落の処に決して生まれず、有暇・具足（恵まれた境遇）を得て、良き所依の身を得ること、その身において若くして出家し、大乗の善知識に親近し、摂取されること、師の教誡どおりに聞思修をして、大乗仏道として共通の道である「道の三要（出離・発菩提心・正見）」と、「三士の道次第」により

修心すること、次に非共通の秘密真言の道に入る四灌頂を受けて、誓言と律儀を護り、生起・究竟の二次第に依って七支相合の双入たる大持金剛の身として正等覚することである。
作成者名：藤仲孝司

中国・朝鮮

阿弥陀経会本

書名よみ：あみだきょうえほん
著者名：夏蓮居
著者名よみ：かれんきょ
著者名別名：夏継泉、溥斎、渠園
著者生没年：1884（光緒10）-1965（中華人民共和国17）
成立翻訳年：20c
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『阿弥陀経三種』（北京居士林、2001）
参考文献：黄念祖『阿弥陀経三種合印序』（北京居士林、1980）
解説：夏蓮居は清朝雲南省の提督夏辛酉の長男として生まれ、山東省鄆城に住した。本名は夏継泉、字は溥斎で、渠園と号す。中年になってから仏道に入り、名前を夏蓮居と変えた。20世紀中国の著名な仏教学者で、中国現代浄土教の著名な居士として知られ、「南梅北夏」（南には梅光羲、北には夏蓮居）と尊称されている。民国1年（1912）、仏友梅光羲（当時山東省高等検察庁検察長）とともに当時の著名な浄土教の僧侶明慧のもとで仏教に帰依して受戒した。

夏蓮居は彼の『浄修捷要』の序文に、浄土門は易行であるが非常に信じがたいもので、もし浄土の「教海」を探らなければ、その真髄が分からないとしている。「教海」とは『無量寿経』を始めとする「浄土三部経」のことであるが、当時の中国の仏教界では、主に羅什訳の『阿弥陀経』のみが読まれており、それよりも詳細に翻訳された玄奘訳を読んでいる者はかなり少ないという現実があった。そこで『阿弥陀経』羅什訳、玄奘訳2本の合糅編集本を意図して作成されたのが本書である。本経は羅什訳の文学的な簡潔さに基づきつつ、玄奘訳の詳細さも受容している。主な特徴は次のような点である。

（1）羅什訳の六方段ではなく、玄奘訳の十方段を採っている。

（2）「一心不乱」のところで、襄陽石経の『阿弥陀経』に書かれた「専持名号、以称名故、諸罪消滅、即是多善根福徳因縁」の21文字を加えている。

（3）羅什訳の「其人臨命終時、阿弥陀仏与諸聖衆、現在其前、是人終時、心不転倒」の所を、玄奘訳の「臨命終時、無量寿仏与無量声聞弟子菩薩衆俱前後囲繞来往其前、慈悲加佑令心不乱」を参照して「其人臨命終時、阿弥陀仏与諸聖衆、現在其前、慈悲加佑、令心不乱」に変えている。

作成者名：肖越

阿弥陀経義疏

書名よみ：あみだきょうぎしょ
著者名：周演済
著者名よみ：しゅうえんさい
著者名別名：周叔迦
著者生没年：20c前半
成立翻訳年：20c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
刊本所在：1、刊年不明（仏教大、塚本善隆旧蔵書）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
参考文献：牧田諦亮『中国仏教史研究』（大東出版社、1989年）
解説：著者は周演済とあるが、仏教大学図書館所蔵本に「塚本善隆先生教正--周叔迦」との書き込みがあるので、周叔迦（1899-1970）という別名も有していたようである。周演済は中国華北地域の代表的な学者の一人である。元々工学を学んだが、一人の密教大徳との出会いをきっかけにして、仏教経典の研鑽をし始めた。その後、現代中国唯識学の代表的な学者である韓清浄（1884-1949）の下で唯識学を学び、民国の22年（1933年）から北京大学で唯識学を教えた。『唯識研究』は彼の代表的な著者書で、唯識学の入門書として人気があった。1953年中国仏教協会が北京に成立した後、中国仏学院の副院長兼教務長、そして中国仏教協会の副会長などを担ったのである。1970年北京で逝去。また印光のコメントがあることや先程の塚本善隆への献辞からして、印光（1861-1940）や塚本善隆（1898-1980）と親交を結んでいたことがわかる。なお、仏教大学図書館所蔵の刊本にある印光の手書きのコメントは以下の通り。「知閣下近来於教義大有所得、作此円満之疏、実為不可思議。闡揚、発揮不以己語駁古徳、則明教理者当可悦欣覧、初機之人及未研華厳相宗者不能深受其益也、印光謹復、七月二十三」

本書は『阿弥陀経』の注釈書。華厳思想と法相思想に基づいて『阿弥陀経』を解釈する。全体は2門に分かれ、第1門は「略釈名題」で、第2門は「広詮文句」である。まず「略釈名題」では顕・密両教の立場から経題が解釈される。即ち、顕としては西方阿弥陀如来の名（＝人名）をもって経名と立てるが、密としては経題に「仏」（人）と言う文字が現れないのは「法」をもって顕すためであるとする。またこの経の目的は浄土法門を説くことにあり、受持者は阿弥陀仏の願に従って浄土へ往生することを目指すべきであり、往生さえすれば「無量寿」を得ることになると説く。更に如来は唯一の大事因縁、即ち衆生をして如来の智見に開・示・悟・入させるために出世したとする。そしてその仏の智見が即ち「無量寿」の意味であるという。衆生の仏性は煩悩に沈んでいるので、無量の功徳を備えていると言ってもそれを顕すことはできない。しかしながら、本経に従って念仏すれば必ず極楽世界に往生し不退転となり、そして未来際を尽くして無量の有情を化楽することができるとし、それがまた「無量寿」の意味であるという。このため、『阿弥陀経』は実・円・頓の綱旨であり、教乗の肝随でもあると説かれている。「広詮文句」では序分・正宗分・流通分に分けて経の内容を説明している。

作成者名：肖越

阿弥陀経句解

書名よみ：あみだきょうくげ
著者名：性澄
著者名よみ：しょうちょう
著者生没年：1265（至元2）-1342（至正2）
成立翻訳年：1341（至正1）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続経』1-33-2
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）、『仏光大辞典』（仏光出版社、1988）、望月信亨『中国浄土教理史』法蔵館、1942）
解説：著者の性澄は、越州会稽（現在の浙江省会稽県）の人で、姓は孫氏。至元14年（1277）に仏果寺の石門殊律師の下で出家し、常に『法華経』を読誦する。至治1年（1321）招かれて燕京（現在の北京）に入り、清塔寺で三蔵を校正した。天台学だけではなく、密教にも通じ、晩年には浄土教に対する志を篤くしたという。

本書は、天台教学の五重玄義に基づき、『阿弥陀経』を注釈するもの。その主旨は、極楽往生のために念仏するこ

とを勧めるが、極楽浄土を自らの心に具わる世界と位置づけたり、『阿弥陀経』の「一心」については、理の一心と事の一心の二つの側面より解釈しつつ、理・事不二の境に遂げる念仏は、定善であると説示するなど天台教学の影響が随所にみられる。
作成者名：肖越

阿弥陀経讃

書名よみ：あみだきょうさん
著者名：浄遐
著者名よみ：じょうか
成立翻訳年：9c以前
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『浄土五会念仏誦経観行儀』巻中（『大正蔵』85（No.2827））、『慈覚大師在唐送進録』（『大正蔵』55（No.2166））、『諸阿闍梨真言密教部類総録』（『日仏全』2）
解説：著者の浄遐に関しては詳細不明であるが、『阿弥陀経讃』は、中唐の法照が選集した『浄土五会念仏誦経観行儀』巻中に見られる（『大正蔵』55巻1245頁中段）。そこには他に『観経十六観讃』も釈浄遐の作品として引用されている（『大正蔵』55巻1245頁上段）。『阿弥陀経讃』の内容は、七言一句の全八〇句からなる讃偈であり、すべて押韻する詩体である。讃題にあるとおり、鳩摩羅什訳の『阿弥陀経』を讃偈によって説いている。なお、『慈覚大師在唐送進録』に単行本として著録されている。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経事義

書名よみ：あみだきょうじぎ
書名別名：阿弥陀経疏鈔事義
著者名：袾宏
著者名よみ：しゅこう
著者名別名：雲栖、蓮池
著者生没年：1535（嘉靖14）-1615（万歴43）
成立翻訳年：16c後半-17c初頭
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』1-33-3
参考文献：『浄土宗大辞典』（浄土宗大辞典編纂委員会、1974）、Chung-fang Yu, *The Renewal of Buddhism in China: Chu-hung and the Late Ming Synthesis*, Columbia University, 1981、震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：著者の俗姓は沈氏、後に出家し明代四大高僧の一人となり、華厳浄土思想の代表者でもある。自ら蓮池と号し、晩年は雲栖寺に住したので、世に蓮池大師、或いは雲栖大師と呼ばれ、中国浄土教の第八祖として知られている。その著作は、弟子らに『雲栖法録』として収録されることになった。この『雲栖法録』中、浄土教に関するものは『阿弥陀経疏鈔』、『竹窓三筆』、『竹窓随筆』等をあげることができる。彼の伝記は『高僧摘要』(1)、『正源略集』(8)、『新続高僧伝』(43) 等にも収録されている。
　本書は、袾宏の著した『阿弥陀経疏鈔』のなかに引用された難解の語句を取り上げて、その出典と意味を簡略に解釈するものである。その中、『観経』『証道歌』『華厳玄談』『浄名経』『永嘉集』『文殊般若経』などの経論が見られる。一方、中国伝統文化の『論語』『孟子』『大学』『繫辞』『詩経』『管子』などの典籍も見られる。禅浄一体・儒学で仏教の理論を解釈する当時の学風を表している。
作成者名：肖越

阿弥陀経直解正行

書名よみ：あみだきょうじきげしょうぎょう
著者名：了根
著者名よみ：りょうこん
著者生没年：18c頃
成立翻訳年：1784（乾隆49）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、京都大（未調査、蔵-11ア-15）
2、大正大（未調査、1154-70）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『卍続蔵』1-33-4
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』（法蔵館、1942）、『浄土宗大辞典』、『仏書解説大辞典』
解説：袾宏の『阿弥陀経疏鈔』を主にして、傍ら宋王日休および竜舒の『竜舒浄土文』を参考して『阿弥陀経』を解釈したものである。末法には福徳の修得によって往生することは非常に難しいが、念仏は簡易・直捷であるので、それによる往生は得やすいことが説かれている。その念仏思想は袾宏の『阿弥陀経疏鈔』に説かれた信・願・行の称名念仏である。末尾に『抜一切業障根本得生浄土神呪』と抜文を記している。
　著者了根については不祥である。
作成者名：肖越

阿弥陀経疏

書名よみ：あみだきょうしょ
書名別名：仏説阿弥陀経疏、阿弥陀経義疏
著者名：元曉
著者名よみ：がんぎょう
著者生没年：617（真平王39）-686（神文王6）
成立翻訳年：7c
成立地：朝鮮半島（新羅）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、明暦4（1658、仏教大）
2、元禄10（1697、大谷大）
3、元禄12（1699、大正大）
刊本の奥書刊記：1、明暦四（1658）西村九郎右衛門刊
2、元禄十（1697）
3、元禄十二（1699）中井東右衛門刊
活字本所載書：『大正蔵』37（No. 1759）、『卍続蔵』1・34・10、『浄全』5、『韓国仏教全書』1、『元曉大師全集』2
現代語訳書：元曉全書国訳刊行会編『国訳元曉聖師全書』4（韓国語訳、大韓仏教元曉宗元曉全書国訳刊行会、ソウル、1988）
参考文献：恵谷隆戒『浄土教の新研究』（山喜房仏書林1976）、韓普光『新羅浄土教の思想』（東方出版、1991）、

韓普光「元暁の『阿弥陀経疏』における一心不乱の問題」（『印仏研』51-1、2002）
解説：『阿弥陀経疏』の著者である元暁は、『金剛三昧経論』『起信論疏』など計86部もの多数の著作が帰される、統一新羅最大の思想家である。
　本書は『阿弥陀経』の注釈書で、全体は大意・宗致・経文解釈の三門に分かれている。まず、大意では『阿弥陀経』が釈迦と阿弥陀の出世の本意を明かし、在家・出家の男女の仏道へ入る要門をしめすものと説く。『阿弥陀経』の名を聞くと一乗に入り、仏号を称えるとき三界の苦を超えるとも説かれる。
　宗致では、三界を超える器世間と衆生世間の二種の清浄をもって『阿弥陀経』の宗とし、衆生に無上道で不退転の位を得さしめることをその意致と説く。
　最後の経文解釈では、『阿弥陀経』の経文が、序分・正宗分・流通分の三段に分けて逐次注釈される。正宗分中の「多善根福徳因縁」を元暁は発菩提心と解し、往生の正因とする。また、一七日の「執持名号」を以て、往生の助行としている。発菩提心が往生の正因であることは、元暁自身の『両巻無量寿経宗要』でも主張されている。
　本書冒頭部で「穢土浄国本来一心」と述べることから、元暁は華厳唯心思想の立場から釈迦阿弥陀両尊の出世の本懐を明らかにし、願生浄土を意義を論じたものと考えられる。
作成者名：山中行雄

阿弥陀経疏

書名よみ：あみだきょうしょ
著者名：慈蔵
著者名よみ：じぞう
著者名別名：金（俗姓）
著者生没年：7c
成立翻訳年：7c
成立地：新羅
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『大小乗経論律章疏集並私記』（『中国・日本経典章疏目録』「七寺古逸経典研究叢書」6、大東出版社、1998）
解説：本書は現在では散佚しているものの書名から阿弥陀経の註釈書であったたと推定される。また『大小乗経論律章疏集並私記』などの記述から、39紙から成る1巻本であったことがわかる。
　著者の慈蔵は新羅国の人。仁平3年（636）勅を受けて入唐し長安を拠点として摂論・律などを学ぶとともに浄土教の素養も身につけ善徳女王12年（643）に帰国した。のち通度寺を創建。帰国の際に持ち帰った仏舎利と袈裟一着をこの通度寺の金剛戒壇に安置した。そして15日毎にここで説法をして戒律宗の根本道場としたという。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経疏

書名よみ：あみだきょうしょ
著者名：智円
著者名よみ：ちえん
著者名別名：法慧大師、無外、中庸子潜夫、徐氏（俗姓）
著者生没年：976（開宝4）-1022（乾興1）
成立翻訳年：10c-11c
成立地：中国
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『東南院御前聖教目録』（『真福寺古目録集』2「真福寺善本叢刊」2-1、臨川書店、2005）
参考文献：末広照純「孤山智円の儒仏道三教観」（『天台学報』24、1982）、金井崚純「孤山智円の三教観」（『天台学報』30、1988）
解説：本書は現在では散佚しているものの書名より阿弥陀経の註釈書であったと推定される。また『東南院御前聖教目録』の記述から1帖本であったことがわかる。
　著者の智円は杭州銭塘の人。北宋代の天台宗山外派の僧。山家派に属する知礼らと宗学や法系上の問題で対立し、盛んに宗学上の論争を繰り広げる一方、儒教や道教をも学び、儒・仏・道三教の融和統合を説いた。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経疏

書名よみ：あみだきょうしょ
著者名：円測
著者名よみ：えんじき
著者名別名：西明寺円測
著者生没年：613（新羅真平王35）-？
成立翻訳年：7c
成立地：中国
散逸文献の文献名出典：『東域伝灯目録』（『大正蔵経』55（No.2183）、『日仏全』1）、『三宝院経蔵目録』（一）-（二）（醍醐寺文化財研究所『研究紀要』20-21、2005-2006）
参考文献：妻木直良「新羅の高僧円測法師」（『大崎学報』31、1913）、羽渓了諦「唯識宗の異派」（『宗教研究』1、1916）、稲葉正就「朝鮮出身僧「円測法師」について」（『朝鮮学報』2、1951）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『東域伝灯目録』（『永超録』）や『三宝院経蔵目録』の記述から1巻本であったことがわかる。
　著者の円測は周代の新羅僧である。長安の西明寺に住したので、しばしば西明寺の円測と呼ばれる。3歳にして出家し15歳のとき長安に入り唯識学を学び、玄奘の帰朝の後はその教えを受けて唯識学を大いに宣揚した。また『成唯識論疏』を著して慈恩の『唯識述記』に反駁したが、これに関して『宋高僧伝』などは、玄奘より破門された円測が玄奘の『成唯識論』を講ずるのを盗み聞きし、慈恩に先んじて『成唯識論疏』を発表したのだと記し、円測の唯識説を排斥し慈恩の唯識説を正統なものと主張する。しかしながら今日ではこれは慈恩の学派の不当な中傷であり、円測の解釈のほうが妥当であったと考えられている（羽渓論文）。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経疏

書名よみ：あみだきょうしょ
著者名：懐成
著者名よみ：えじょう
成立地：中国
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『東域伝灯目録』（『大正蔵』55（No.2183）、『日仏全』1）
解説：本書は現在では散佚しているものの、書名から阿弥陀経の註釈書であったことが推測される。また『永超録』の記述から1巻本であったことがわかる。またここには「或人伝云此疏奉延暦寺前唐院文全与慈恩疏同」とあり、本書は文全なる人物に奉じられた『慈恩疏』と同一の物ではないかとの伝が付け加えられている。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経疏

書名よみ：あみだきょうしょ
著者名：懐感
著者名よみ：えかん
著者名別名：感禅師
著者生没年：7c
成立翻訳年：7c
成立地：中国
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『諸阿闍梨真言密教部類総録』(『大正蔵』55（No.2176)、『日仏全』2)
解説：本書は現在では散佚しているものの阿弥陀経の註釈書であることが推察される。また『諸阿闍梨真言密教部類総録』(『入唐八家録』）の記述から1巻本であったことがわかる。
　著者の懐感は唐中期の人。中国浄土五祖の第四に数えられる。長安千福寺に住し、初め法相・唯識を学んだが、後に善導に師事して浄土教の要義を受けて、口称念仏の行法実践によって念仏三昧を証得したという。著書に『釈浄土群疑論』7巻などがある。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経疏

書名よみ：あみだきょうしょ
著者名：恵静
著者名よみ：えじょう
成立地：不明
散逸文献の文献名出典：『東域伝灯目録』(『大正蔵経』55（No.2183)、『日仏全』1)
解説：本書は現在では散佚しているものの、『永超録』の記述から1巻本であったことがわかる。書名から阿弥陀経の註釈書であることが推測される。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経疏

書名よみ：あみだきょうしょ
著者名：澄興
著者名よみ：ちょうこう
成立地：不明
散逸文献の文献名出典：『東域伝灯目録』(『大正蔵経』55（No.2183)、『日仏全』1)
解説：本書は現在では散佚しているものの書名から阿弥陀経の註釈書であったことが推測される。また『永超録』の記述から1巻本であったことがわかる。書名から阿弥陀経の註釈書であることが推測される。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経疏鈔

書名よみ：あみだきょうしょうしょう
著者名：袾宏
著者名よみ：しゅこう
著者名別名：雲栖、蓮池
著者生没年：1535（嘉靖14）-1615（万暦43）
成立翻訳年：16世紀後半-17世紀初頭
成立地：中国
巻数：4
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本所載書：『卍続蔵』1-33-2・3、『雲栖法録』6-9
参考文献：Chung-fang Yu, *The Renewal of Buddhism in China:Chu-hung and the Late Ming Synthesis*, Columbia University, 1981、震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：著者の俗姓は沈氏、後に出家し明代四大高僧の一人となり、華厳浄土思想の代表者でもある。自ら蓮池と号し、晩年は雲栖寺に住したので、世に蓮池大師、或いは雲栖大師と呼ばれ、中国浄土教の第八祖として知られている。その著作は、弟子らに『雲栖法録』として収録されることになった。
　本書は、『阿弥陀経』の注釈書として自らが著した『阿弥陀経疏』をさらに詳しく解釈したもので、明代中国浄土教を代表する著作の一つ。通序大意・開章釈文・結釈呪意という三つの部分から成る。その中、通序大意では、明性・讃経・感時・述意・請加という項目を通して解説する。開章釈文では、華厳の10玄門思想に基づき、教起所因・蔵教等摂・義理深広・所被階品・能詮体性・宗趣旨帰・部類差別・訳釈誦持・総釈名題・別解文義という項目で詳細に注釈している。華厳思想をその基本理念とするが、称名念仏の優れていることも強調する。
作成者名：肖越

阿弥陀経疏鈔演義

書名よみ：あみだきょうしょしょうえんぎ
書名別名：阿弥陀経鈔演義定本
著者名：古徳
著者名よみ：ことく
著者名別名：文賢
著者生没年：？-1639（崇禎12）
成立翻訳年：17c
成立地：中国
巻数：4
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』1-33-3・4
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：著者の文賢は、明の僧侶、俗姓は陸氏、雲栖袾宏の弟子として知られ、古徳は彼の字である。本書は袾宏の『阿弥陀経疏鈔』を分かりやすく解釈したものである。袾宏の浄土教を理解する最も権威ある解説書であるといえる。
　『浄土諸経論』、また『華厳経』、『楞厳経』、『大智度論』、『大乗起信論』等の諸大乗経典を引用しつつ、唯心浄土の説を説きながら、それらの大乗経典を深く理解することによって浄土教を信じ、極楽往生の願いを持ちながら、弥陀の名号を称れば、極楽に往生できることを説くのが本経の主旨であることを示そうとしている。現存の続蔵経本の最後に乾隆17年（1752)、唯誠の重刻後序によって本書は清代浄土教にも影響を与えていたことがわかる。
作成者名：肖越

阿弥陀経疏鈔撷

書名よみ：あみだきょうしょしょうけつ
著者名：徐槐廷
著者名よみ：じょかいてい
著者生没年：1798（嘉慶3）-？
成立翻訳年：1867（同治6）
成立地：中国

巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』1-91-5
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：著者の徐槐廷は、清の在家居士として知られる。本書の他、著作の浄土教に関するものは『阿弥陀経応験』も知られている。
　本書は明の袾宏の『阿弥陀経疏鈔』に基づき、『阿弥陀経』を平易に注釈したものである。極楽の仏土をもって基準とし、信願をもって入門の礎とし、名号をもって実際の修行とし、往生をもってその果とし、経文をもって教えとするという。全体を、梁の昭明の『金剛経』の分類方法を参考にして、『阿弥陀経』を法会衆証分・仏土依正分・宝樹蓮池分・天人供養分・禽樹演法分・仏徳無量分・往生発願分・修持正行分・同讃勧信分・聞法信願分・互讃感発分・流通普度分という12分に分けて説明する。更にそれを総提依正二報（第1-6分）・就往生説（第7、8分）・就経文説（第9、10分）・仏仏互讃嘆難事（第11、12分）という4門に分類する。清代における在家居士の浄土教関連の著作として注目すべきである。
作成者名：肖越

阿弥陀経疏鈔問弁

書名よみ：あみだきょうしょしょうもんべん
書名別名：阿弥陀経問弁
著者名：袾宏
著者名よみ：しゅこう
著者名別名：雲栖、蓮池
著者生没年：1535（嘉靖14）-1615（万暦43）
成立翻訳年：不明
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続経』1・33・3、『雲栖法録』10
解説：著者の俗姓は沈氏、後に出家し明代四大高僧の一人となり、華厳浄土思想の代表者でもある。自ら蓮池と号し、晩年は雲栖寺に住したので、世に蓮池大師、或いは雲栖大師と呼ばれ、中国浄土教の第八祖として知られている。その著作は、弟子らに『雲栖法録』として収録されることになった。この『雲栖法録』中、浄土教に関するものは『阿弥陀経疏鈔』、『竹窓三筆』、『竹窓随筆』等をあげることができる。彼の伝記は『高僧摘要』(1)、『正源略集』(8)、『新続高僧伝』(43) 等にも収録されている。
　明の袾宏は、自身が著した『阿弥陀経疏鈔』の理解を助ける、大乗経典に説く教理と浄土教の教理との関わりを中心にして、自ら設けた質問に対して回答した書物である。全体は28の本問答と12の続問答からなる。本問答には、『華厳経』に説く8地菩薩になることと浄土教において往生して菩薩になることの難易及びその果位についての問答や、『大智度論』に説く「信」と『阿弥陀経』に説く「信」との関わり等の問題が取り上げられている。続問答では、なぜ『阿弥陀経』が『無量寿経』の小本と言えるかなどの問題が取りあげられている。
作成者名：肖越

阿弥陀経疏随縁義鈔

書名よみ：あみだきょうしょずいえんぎしょう
書名別名：阿弥陀経随縁抄
著者名：智首
著者名よみ：ちしゅ
著者名別名：皇甫氏（俗姓）
著者生没年：566（天和1）-635（貞観9）
成立翻訳年：6c-7c
成立地：中国
巻数：2
散逸文献の文献名出典：『智首法師集』（『日仏全』1)、『円行録』（『日仏全』1)、七寺蔵『古聖教目録』（『中国日本撰述経典（其之五）・撰述書』「七寺古逸経典研究叢書」5、大東出版社、2000）
解説：本書は現在では散佚している。『智首法師集』や『円行録』には「阿弥陀経疏随縁義鈔一部」と記述される。また七寺蔵『古聖教目録』には「阿弥陀経随縁抄上下」と記述されることから2巻本であったと推測される。
　著者の智首は北周の人であり、四分律宗第8祖。主な弟子に道宣がいる。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経摘要易解

書名よみ：あみだきょうちゃくよういげ
著者名：真嵩
著者名よみ：しんすう
著者生没年：1794（乾隆59）-1868（同治7）
成立翻訳年：不明
成立地：中国
巻数：1
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』1-91-5
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：著者の真嵩は、浙江省の人。俗姓は徐氏。字は普能。10歳で出家して、18歳で具足戒をうけ、咸豊2年（1852）天寧寺の住職となった。
　本書は羅什訳の『阿弥陀経』の注釈書である。全体を序分・正宗分・流通分に分け、『阿弥陀経』の経文を示して、玄奘訳本の『称讃浄土仏摂受経』をも参考にしながら天台教学に基づき簡易な注釈を付している。往生の条件としての「不可以少善根福徳因縁得生彼国」を解釈する中では、袾宏の教理を取りあげながら、一心に称名念仏することが最上の善根であると説く。更に「臨終来迎」については、仏を憶念すれば必ず成仏できるという『楞厳経』の所説に基づき、臨終の一心不乱の必要性を説く。
作成者名：肖越

阿弥陀経約論

書名よみ：あみだきょうやくろん
著者名：彭紹昇
著者名よみ：ほうしょうしょう
著者名別名：彭際清
著者生没年：1740（乾隆5）-1796（嘉慶1）
成立翻訳年：18c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』1-33-4
参考文献：『浄土宗大辞典』、震華『中国佛教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999)、『浄土聖賢録』（法舟文教基金会、

2001)、『仏光大辞典』(仏光出版社、1989再版)
解説：著者は、字は允初、尺木、知帰子と号した。彭際清とは菩薩戒を受けた時の法名である。江蘇省長州の士族家庭に生まれ、乾隆34(1769)進士となり、支県に選ばれたが、赴任しなかった。宋文森世隆、畢紫嵐奇、周安士夢顔と並び、清代の代表的な禅浄双修の居士とされる。最初は宋明の理学と道教の修練術を学んだが、仏法を聞いてから儒学と道学を捨てて仏法に専念した。浄土教に帰信した原因は、夫人の仏教信仰と、婦人の病身にあるという。彭の浄土思想は袾宏、真可、徳清、旭智らの思想を受けたほか、特に中国浄土教第九祖とされる実賢に私淑したという。「一日十時間の念仏・九時間の観仏・一時間の礼賛」という実修的な念仏修法を生涯に渡って修したという。彼の編集した『無量寿経』(諸漢訳の編集版)は当時の中国浄土教に大きな影響力を持ち、その浄土思想は後の楊文会などに強い影響を与えた。また、『華厳念仏三昧論』一巻は、華厳思想に基づいて浄土念仏法門を解釈する書物で、中国清朝浄土教の代表的な著作である。

多数の著作の中、浄土教系関係の書物として代表的な著作は『無量寿経起信論』3巻、『観無量寿仏経約論』1巻、『阿弥陀経約論』1巻、『一乗決疑論』1巻、『華厳念仏三昧論』1巻、『居士伝』56巻、『善女人伝』2巻などがある。また彼の監修によって『浄土三経』・『省庵法師語録』2巻・『念仏警策』・『西方公据』などが刊行された。更に『浄土聖賢録』9巻も彼の提案によって編纂が始まり、息子の彭希涑によって完成された。

本書は禅と浄土の行を合一する立場から『阿弥陀経』の要義を述べたもの。内容は(1)明経中要領、(2)明往生利益、(3)別申問答、(4)説偈回向の4つに分けられる。

最初の「明経中要領」にこの経は一心をもって宗とし、持名をもって行とし、信願をもって導とし、不退をもって程とし、阿耨多羅三藐三菩提をもって究竟とするといって要旨をあかす。即ち、まず経の「宗」であるところの一心を具して持名すれば、その心と仏とは不異となるので、その心浄きに随って仏土浄まり、娑婆を転じて極楽を成ずるということを説く。「信願をもって導となす」の一段では『阿弥陀経』に説かれた「汝等皆当信受我語及諸仏所説」を引いて3つの信が必要なことを説明する。西方浄土を信じること、一念を以って念仏すれば必ず見仏すると信ずること、そして見仏によって絶対に成仏すると信じることの三者である。ただし、これらは「依他起信」であって、これとは別に「正信」があるという。即ち、三世は自心を離れず、その自心に西方浄土が備わっており、一念に念仏すればこの念は即に仏となり、念念に念仏すれば、仏にあらざることなしと信じることである。「依他起信」は浅くて、「正信」は浄信であって、深いという。

次の「往生の利益を明かす」では『阿弥陀経』に基づき、極楽浄土には諸苦なし、ただ諸楽を受けること、また六根清浄となることなどを説かれている。

更に「別申問答」では、私達の心に清浄なる要素は全くないのに、どうしてその心に浄土の功徳や荘厳が現れるのか、また「苦も楽も妄想にすぎない」とか「浄穢不二」といったことが理解できれば真如にかなうことになるのに、どうして専らに浄土往生をめざすのかなどという4つの問答を通して、衆生の疑いを釈している。

清代浄土教における代表的な『阿弥陀経』の疏である。
作成者名：肖越

阿弥陀経略記

書名よみ：あみだきょうりゃくき
異本書名：小氏
著者名：憬興
著者名よみ：けいごう、きょうごう
著者名別名：璟興
著者生没年：7c後半
成立翻訳年：7c後半
成立地：新羅
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『大小乗経論律章疏集並私記』(『中国・日本経典章疏目録』「七寺古逸経典研究叢書」6、大東出版社、1998)、『寛印録』(『仏教文化研究』47・48、2003)、『東域伝灯目録』(『大正蔵経』55(No.2183)、『日仏全』1)
解説：本書は現在では散佚しているものの、『大小乗経論律章疏集並私記』の記述から38紙であったことがわかり、『寛印録』や『永超録』の記述から1巻本であったことがわかる。

著者の憬興は新羅国熊川郡の人。18歳にして出家し、新羅弁文王1年(691)文武王の遺命により国老となり、三郎寺に住する。法相を究め、専ら著述を事とし『最勝王経略讃』5巻、『無量寿経連義述文賛』3巻、『弥勒上生経疏』1巻、『弥勒下生経疏』1巻、『弥勒成仏経疏』1巻など多くの経論の註釈を著した。
作成者名：永田真隆

阿弥陀経略解

書名よみ：あみだきょうりゃくげ
著者名：大佑
著者名よみ：だいゆう
著者名別名：啓宗、蘧菴、法空
著者生没年：1333(至順4・元統1)(？)-1407(永楽5)
成立翻訳年：14c後半 - 15c前半
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、民国12-民国14(1923-1925、中国国家図書館)
2、民国16(1927、中国国家図書館)
刊本の奥書刊記：1、(未調査)
2、(未調査)
活字本所載書：『卍続蔵』1-33-2
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』(法蔵館、1942)、劉果宗『中国仏教各宗史略』(文津出版有限公司、2001)、『中国仏教人名大辞典』(上海辞書出版社、1998)
解説：大佑は明初期の僧侶で、啓宗と号し、また法空道人とも号する。蘇州の呉氏の家族に生まれ、12歳の時に出家したという。『華厳経』と『摩訶止観』などをよく研鑽したので、洪武4年(1371)京師に招かれて法要の担当をさせたこともある。永楽1年(1403)に浄土門を修し始め、後に西山に入り念仏三昧を専修した。『永楽大典・釈書』を編纂したほか、『浄土指帰』、『阿弥陀経略解』、『金剛経注』など書物を著したという。彼の履歴については『続仏祖統紀』、『続稽古略』2、『金陵梵刹志』2、『呉都法乗』6中に記されている。

本書は天台の釈経題・弁体・明宗・論用・判教という五重玄義に基づきつつ初機向けに著された『阿弥陀経』に対する簡易な注釈である。「釈題名」では経典名を一字ずつ解釈するが、「弁体」以後は非常に簡潔である。「弁体」では『大智度論』に基づき、本経は他の大乗経典と同じく「一実相印」を経の本体とすると説く。「明宗」では『阿弥陀経』中の「若有信者応当発願生彼国土」を本経の宗と為す。「論用」では往生さえすれば、みな無上菩提への道において不退転となり、生死の苦を離れ解脱の楽を得ることになるが、

それが本経の力用であると説く。「判教」では『阿弥陀経』が大乗方等教に属することを明かす。
作成者名：肖越、趙仲明

阿弥陀経略解円中鈔

書名よみ：あみだきょうりゃくげえんちゅうしょう
著者名：伝灯
著者名よみ：でんとう
著者名別名：幽渓伝灯、無尽、有門、幽渓大師
著者生没年：1554（嘉靖33）—1627（天啓7）
成立翻訳年：1621（天啓1）
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
活字本所載書：『卍続蔵』1-91-4、1、中華人民共和国54（2002、中国国家図書館）
参考文献：聖厳「明末中国的浄土人物及其思想」（『華岡仏学学報』1985）
解説：伝灯は天台の僧侶である。生まれは葉氏、字は無尽、自ら有門と号した。出家してから百松真覚のもとで『法華経』や『楞厳経』を学んだ。万暦15年（1587）に天台山に入り、幽渓の高明寺に住して、天台の祖庭を建立した。そのために、後に世人から幽渓大師と称された。伝灯はこのように天台を研鑽すると同時に、浄土教の発展にも貢献した。著作は『浄土生無生論』、『阿弥陀経略解釈円中鈔』、『浄土法語』、『観経図頌』、『楞厳経玄義』、『楞厳経円通疏』、『性善悪論』、『天台伝佛心印記注』、『天台山方外志』などがある。

作者の伝灯は天台学派の一代の宗師であり、明の天台宗に特徴的な性具善悪論の代表的人物とされる。また、浄土思想としては唯心浄土・本性弥陀を説く。この著作では明の初期の蘧菴大佑の著した『阿弥陀経略解』の内容に基づいて円満中道の円教浄土を唱導し、「一心不乱」の義を評価する。具体的にいうと西方極楽世界及び彼土の弥陀等の衆を妙有と解釈し、妙有であるからこそ、此土の衆生は仏の名号を持つことによって、仏の国土に往生することができる説く。絶えず念仏して、一心不乱に達し、万慮を離れると、初めて極楽が顕現する。それこそが本当の真空であるという。即ち娑婆世界は仮有であるのに対して、極楽世界は妙有であるが、その実は真空であり、それは「一心不乱」によって顕れるというわけである。

また、天台学の三諦三観からして、『阿弥陀経』の往生行は、即空即仮即中の「円満中道」であり、空仮中の中の「但中の道」ではないという。
作成者名：肖越

阿弥陀経略註

書名よみ：あみだきょうりゃくちゅう
書名別名：弥陀略註
著者名：続法
著者名よみ：ぞくほう
著者名別名：成法、伯亭、灌頂
著者生没年：1641（崇禎14）-1728（雍正6）
成立翻訳年：1700（康熙39）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』1-91-4
参考文献：『浄土宗大辞典』、震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）、望月信亨『中国浄土教理史』（法蔵館、1942）
解説：続法は華厳を宗とする学匠であるが、廬山の遺風を慕い、袾宏に私淑して浄業に励んだと伝えられる。自性弥陀、唯心の浄土を基盤としつつ、真如実相に入る簡易な方法として浄土教を説いた。

本書は華厳思想の10玄門に基づき、『阿弥陀経』を10門に分けて注釈している。10門とは以下の如し。(1)「教起所因」。如来は只一つの大事因縁のため、この世に来る。即ち、一切衆生に仏の知見を開・示・悟・入させるためであるが、本経では衆生に念仏の心を以て仏の知見に入らしめるためとする。この他にも10種の理由を示す。(2)「蔵乗分摂」。本経は三蔵でいえば経蔵にあたり、乗でいえば大乗の仏乗に配当されるとする。(3)「時会前後」。本経は転照時中の第2「中転時」にあたる。また『阿弥陀経』に説かれている念仏法門は釈迦仏の最初に説かれた『華厳経』普賢菩薩行願品の「極楽に帰する」から最後に説かれた『法華経』薬王品の「阿弥陀を見る」まで無間に説かれているとする。(4)「教義分斉」。化法と化儀がある中、『阿弥陀経』は化法の5種のうちでは円教であり、一仏乗に摂する。一仏を念じるとすべての仏を念じるので、本経は兼ねて頓教であるという。(5)「所被階品」。ただ阿弥陀仏の名字を聞けば、必ず往生し成仏できると説くので、本経は三輩九品に通じるとする。(6)「教体浅深」。1は随相門、2は唯識門、3は帰性門、4は無碍門である。本経は4番の無碍門であるという。(7)「宗趣通局」。通は六宗がある。1は阿含経、倶舎論に説いている随相法執宗で、小乗宗である。2は『解深密経』、『瑜伽論』に説いている唯識法相宗で、大乗相宗である。3は『大智度論』等に説いている真空無相宗で、大乗空宗である。4は『楞伽経』、『真如論』に説いている蔵心縁起宗で、大乗法性宗である。5は『楞伽経』、『真如論』に説いている真性寂滅宗で、大乗無性宗である。6は『華厳経』、『十地論』に説いている法界円融宗で、一乗法界宗である。念仏してすべての仏を見られることは華厳宗であり、また大勢至が念仏の心をもって無生忍の境地に入ることは無性宗でもあり、また『法華経』に薬王を聞いて安楽刹に往生するは法性宗である。(8)「部類差別」。中国では『無量寿経』は大本ともいい、『阿弥陀経』は大本に対する小本ともいわれる。本経は部の中、小本である。類には3種があり、1は『十六観経』で、2は『鼓王経』で、3は『後出阿弥陀偈』であり、そして『法華経』と『華厳経』のような経典は非部非類である。(9)「総釈名題」。経名についての解釈がなされるとする。(10)「別解文義」。道安の科判に基づき経文を序分・正宗分・流通分に分けて詳細に文句の注釈をほどこしている。

本書は清代浄土教を知る上においては重要な文献といえる。

なお末尾には『抜一切業障根本得生浄土神呪』（また「往生呪」ともいう）を字々句々に釈し、弟子厳光が敬虔な態度で一ヶ月半かかって校刻した縁起を記している。
作成者名：肖越

安養讃

書名よみ：あんようさん
著者名：涵虚得通
著者名よみ：かんきょえつう
著者名別名：己和
著者生没年：1376-1433
成立翻訳年：15c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）

巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正統5（1440、ソウル大・韓国釜山梵魚寺、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
2、刊年不明（韓国東国大、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、正統五年庚申（1440）七月、慶尚道聞慶鳳厳寺、門人文秀書刊
2、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『涵虚堂得通和尚語録』に収録）、『涵虚大師文集』（「韓国歴代文集叢書」202、景仁文化社、ソウル、1998）、『涵虚堂得通和尚語録』（韓国普済社、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「朝鮮・涵虚得通の念仏禅について」（『印仏研』55-1、2005）
解説：本書『安養讃』の著者は朝鮮時代の禅僧涵虚得通。涵虚得通には、他に『弥陀讃』・『弥陀経讃』が伝わっているので、おそらく本書を加えて三部から構成される阿弥陀仏・浄土への讃文であったと思われる。
　涵虚得通については、『弥陀讃』の項を参照されたい。
　本書は、浄土の荘厳を讃するもので、「彼此同化」・「依正俱勝」・「純楽無憂」・「備体荘厳」・「花池受生」・「十方遊行」・「聞音進修」・「長寿等仏」・「因友進道」・「念仏蒙化」という10の題目に分けられた10の讃文から構成されている。「安養国に往生した者の体は、金色に光り妙相を有している」や「七宝池には八徳水が充満し、水面には蓮華が咲き、そのなかで往生人は生を受ける」といった極楽浄土の荘厳を列挙しながら讃えている。本書中に讃えられる極楽浄土の荘厳は総じて、「浄土三部経」に共通なものである。強いて本書の典拠を述べるなら、浄土を「安養国」と言うので『無量寿経』に基づいていると言えなくもない。先に言及した3つの讃文のなかで、本書『安養讃』は最も素朴な浄土信仰を表していると言えよう。
　本書は、『涵虚堂得通和尚語録』（『韓国仏教全書』7）に収録されている。『涵虚堂得通和尚語録』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.152-153を参照のこと。
作成者名：山中行雄

安楽集

書名よみ：あんらくしゅう
著者名：道綽
著者名よみ：どうしゃく
著者名別名：道綽禅師、綽禅師、西河禅師
著者生没年：562（河清1）-645（貞観19）
成立翻訳年：609（大業5）-645（貞観19）
成立地：中国
巻数：2
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高野山宝寿院蔵本（1112（天永3）、書写者不明）
2、大谷大蔵本（1197（建久8）、書写者不明、巻上のみ）
3、北京図書館蔵本（書写年不明、書写者不明、敦煌本、衣28（北8432）背面、『敦煌宝蔵』110、第二大門第一のみ）
4、竜谷大蔵本（1347（正平2）、書写者不明、弘安3刊本の書写）
写本奥書：1、天永三年（1112）四月五日書写了同廿一日一校点了、是偏為往生極楽也
2、建久八年（1197）十一月八日辰時写之、留贈後見共成仏道、依五阿弥陀仏命右筆成阿弥陀仏
3、（奥書なし）
4、斯集一部就現行本開彫印唯為通浄教沽蒼生也、但庸唐之謬魚魯難詳正本流伝後昆刪定、庶使乃至一聞之類同結九品之縁而已、寛元三年乙巳仲秋日、願主比丘往成／彼往成所彫之板凉燠推移字点尽消爰悟阿数嘆摺写之云絶強抽弘通之懇志之間続前願主之蹤開斯印板、願酬上下一部勧進之功将成貴賤諸人引導之誠而已、弘安三年（1280）庚辰四月日、右一部印板三十二枚内奉加衆（以下略）／右以正平丁亥（1347（正平2年））仲呂之天如印奉書写之、執筆隠林正情、柳渓釈浄教
刊本所在：1、寛元3年（1245、高野山宝寿院（巻上のみ）・竜大（巻下のみ）
2、弘安3年（1280、所在不明、竜谷大蔵正平2写本奥書による）
3、至徳3年（1386、大英図書館）
4、慶長18年（1613、叡山文庫・法然院）
5、元禄11年（1698、大正大・仏教大）
刊本の奥書刊記：1、斯集一部就現行本開彫印唯為通浄教沽蒼生也、但庸唐之謬魚魯難詳正本流伝後昆刪定、庶使乃至一聞之類同結九品之縁而已、寛元三年乙巳仲秋日、願主比丘往成
2、斯集一部就現行本開彫印唯為通浄教沽蒼生也、但庸唐之謬魚魯難詳正本流伝後昆刪定、庶使乃至一聞之類同結九品之縁而已、寛元三年乙巳仲秋日、願主比丘往成／彼往成所彫之板凉燠推移字点尽消爰悟阿数嘆摺写之云絶強抽弘通之懇志之間続前願主之蹤開斯印板、願酬上下一部勧進之功将成貴賤諸人引導之誠而已、弘安三年庚辰（1280）四月日、右一部印板三十二枚内奉加衆（以下略）
3、至徳三年（1386）正月二十五日、印本願主法眼慈弁
4、斯集一部就現行本開彫印唯為通浄教沽蒼生也、但庸唐之謬魚魯難詳正本流伝後昆刪定、庶使乃至一聞之類同結九品之縁而已、下州竜沢山、大巌寺随流、鏤梓主雲竜、于時慶長十八年癸午（1613）四月　日
5、安楽集二巻寛元以降繡梓而行世者文字間有差誤、今会聚横川観中三井尊弘栂尾明慧根来深淵黒谷慧鎮等若干本而偶以校焉、其当不之弁而判然趨拾之彼此之間以為一本、至于其猶預而未可決則闕而一任於後学也、且句逗四声副之字傍以使読者易掛于牙歯耳、損貨助刻名件（中略）、回此功徳普施法界共生安楽速証菩提、元禄十一戊寅（1698）正月二十五日、禅蓮社釈義山募刻、借月楼岡元春謹書、采賢堂古藤春正寿梓
活字本所載書：『浄土古逸十書』、『浄全』1、『大正蔵』47（No.1958）、『卍続蔵』2-12-3、『真聖全』1
現代語訳書：『聖典意訳　七祖聖教』上（本願寺出版協会、1964）
参考文献：山本仏骨『道綽教学の研究』（永田文昌堂、1959）、藤堂恭俊・牧田諦亮『曇鸞・道綽』（講談社、浄土仏教の思想4、1995）、内藤知康『安楽集講読』（永田文昌堂、1999）、渡辺隆生『安楽集要述』（永田文昌堂、2002）
解説：浄土教を信じ、極楽に往生することを求めるように勧めた書。道綽の『観経』講義録、浄土三部経の要義釈など、成立には種々の説がある。十二大門からなるが、その内容はきちんと整理されてはいない。仏教に聖道門・浄土門の二門を建て、今の時代は末法、人はすべて凡夫であり、その時機に適った教えは浄土門の教えであるとした。また当時の諸師が阿弥陀仏と極楽は化身化土とするのに対し、報身報土であると規定するなど、後に道綽善導流といわれる浄土教の基礎を築いた。
　なお、道宣『続高僧伝』巻20、道綽伝には、道綽の著作として『浄土論』挙げるが、巻6、曇鸞伝には『安楽集』が挙げられており、道宣がそれぞれの著作を取り違えたものと考えられる。

作成者名：曽和義宏

為傑大霊駕撒骨下語

書名よみ：いけつだいれいがさんこつげご
著者名：涵虚得通
著者名よみ：かんきょえつう
著者名別名：己和
著者生没年：1376-1433
成立翻訳年：15c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正統5（1440、ソウル大・韓国釜山梵魚寺、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
2、刊年不明（韓国東国大、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、正統五年庚申（1440）七月、慶尚道聞慶鳳厳寺、門人文秀書刊
2、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『涵虚堂得通和尚語録』に収録）、『涵虚大師文集』（「韓国歴代文集叢書」202、景仁文化社、ソウル、1998）、『涵虚堂得通和尚語録』（韓国普済社、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「朝鮮・涵虚得通の念仏禅について」（『印仏研』55-1、2005）
解説：本書『為傑大霊駕撒骨下語』の著者である涵虚得通は朝鮮時代の禅僧。21歳までは儒学を学んでいたが、友人の死をきっかけに仏門に入る。その後『円覚経』・『金剛経』などの注釈書を著し、58歳で寂した。彼の行状は、韓普光論文から簡潔に知ることができる。
　本書『為傑大霊駕撒骨下語』は『涵虚堂得通和尚語録』に収録されている。本書は傑大霊駕の荼毘で語られたもののようである。傑大霊駕は持戒の功徳というものを持たないが、平生から念仏を行じた功徳によって、九品蓮台に遊ぶであろうと言い、阿弥陀仏の大悲による往生を説いている。
　本書は、『涵虚堂得通和尚語録』（『韓国仏教全書』7）に収録されている。『涵虚堂得通和尚語録』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.152-153を参照されたい。
作成者名：山中行雄

為尚愚上菴和尚下語

書名よみ：いしょうぐじょうあんおしょうげご
著者名：涵虚得通
著者名よみ：かんきょえつう
著者名別名：己和
著者生没年：1376-1433
成立翻訳年：15c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正統5（1440、ソウル大・韓国釜山梵魚寺、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
2、刊年不明（韓国東国大、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、正統五年庚申（1440）七月、慶尚道聞慶鳳厳寺、門人文秀書刊
2、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『涵虚堂得通和尚語録』に収録）、『涵虚大師文集』（「韓国歴代文集叢書」202、景仁文化社、ソウル、1998）、『涵虚堂得通和尚語録』（韓国普済社、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「朝鮮・涵虚得通の念仏禅について」（『印仏研』55-1、2005）
解説：本書『為尚愚上菴和尚下語』の著者は、涵虚得通は朝鮮時代の禅僧。21歳までは儒学を学んでいたが、友人の死をきっかけに、仏門に入る。その後『円覚経』・『金剛経』などの注釈書を著し、58歳で寂した。彼の行状は、韓普光論文から簡潔に知ることができる。
　本書は、尚愚上菴の荼毘式で、涵虚得通が行った法話である。前半部で、尚愚上菴の臨終で行った儀礼が述べられ、後半部に唯心浄土について語られている。臨終儀礼の内容を簡単にまとめると、臨終の尚愚上菴の面前に阿弥陀仏像を安置し、幡を手に持たせ、称名して自身の浄土往生の姿を想起させるというものである。このような、ある種の臨終儀礼を言及する文献は、朝鮮半島ではほとんど知られないので、非常に興味深い資料である。後半部を要約すると、尚愚上菴は参禅と観仏修行をよく行っていたから、自性弥陀を体得し、唯心浄土の境地に到達しているはずだと言い、もしそうでなかったとしても弥陀の本願力によって極楽往生しているとも言っている。ここで興味深いのは参禅による往生を認めている点と、唯心浄土と西方浄土の両方を認めている点になるだろう。
　本書は、『涵虚堂得通和尚語録』（『韓国仏教全書』7）に収録されている。『涵虚堂得通和尚語録』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.152-153を参照されたい。
作成者名：山中行雄

為誠寧大君仙駕下語

書名よみ：いせいねいたいくんせんがげご
著者名：涵虚得通
著者名よみ：かんきょえつう
著者名別名：己和
著者生没年：1376-1433
成立翻訳年：15c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正統5（1440、ソウル大・韓国釜山梵魚寺、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
2、刊年不明（韓国東国大、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、正統五年庚申（1440）七月、慶尚道聞慶鳳厳寺、門人文秀書刊
2、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『涵虚堂得通和尚語録』に収録）、『涵虚大師文集』（「韓国歴代文集叢書」202、景仁文化社、ソウル、1998）、『涵虚堂得通和尚語録』（韓国普済社、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「朝鮮・涵虚得通の念仏禅について」（『印仏研』55-1、2005）
解説：本書『為傑大霊駕撒骨下語』の著者である涵虚得通は朝鮮時代の禅僧。21歳までは儒学を学んでいたが、友人の死をきっかけに仏門に入る。その後『円覚経』・『金剛経』などの注釈書を著し、58歳で寂した。彼の行状は、韓普光論文から簡潔に知ることができる。

本書『為誠寧大君仙駕下語』は『涵虚堂得通和尚語録』に収録されている。本書は誠寧大君仙駕に対する法話。無明を破る正眼を得ることができなければ、阿弥陀の願力に頼って九品蓮台へ上ることを勧めている。

本書は、『涵虚堂得通和尚語録』（『韓国仏教全書』7）に収録されている。『涵虚堂得通和尚語録』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.152-153を参照されたい。

作成者名：山中行雄

印光法師文鈔

書名よみ：いんこうほっしもんしょう
著者名：印光
著者名よみ：いんこう
著者名別名：聖量、常慙
著者生没年：1861（咸豊11）-1940（民国29）
成立翻訳年：1925（民国14）
成立地：中国
巻数：4
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『印光法師文鈔』（1997）
参考文献：牧田諦亮『善導』（「浄土仏教の思想」5、講談社、2000）、張雪松『対印光法師及其近代中国浄土宗重構的批判性研究』（香港中文大学博士論文、2008）
解説：狭西省の趙氏の生まれ。名前は丹桂、字は昭伊、子任と号した。生後6ヶ月の頃、病気による失明の危機を契機として出家した。法名を聖量、常慙愧僧と号した。中国浄土教の第13祖。最初に儒学を学び、仏法を批判したが、その後、『龍舒浄土文』を読んで、念仏法門が生死輪廻を出離する最も重要な法門であると悟って、浄土教の専修を始めたという。光緒7年（1881）終南山南五台の蓮華洞寺で道純のもとで出家し、同8年、陝西興安の双渓寺で印海定公のもと具足戒を受けた。最近の研究によると、自分の寿命が38歳しかないと占われたこと、「丁丑奇荒」直後の社会がまさに人間地獄といえるような状況であったことなどが、出家と浄土に専念する動機であるとされる。印光の浄土思想は「儒教に説かれている人間の本分に尽くし、邪を修正し誠を目指すこと、仏教の諸悪莫作の理念を実修すること、更に生死輪廻を断じるため菩提心を持ちながら、深い信・願をもって、阿弥陀経の名号を称すこと」と纏めることができる。布教の面では、当時発達したばかりの交通と流通システムなどを利用して、善書を配布したことにより、中国全土はもとより、東南アジア華僑の地域にもネットワークを作り、因果思想と浄土信仰を普及せしめた。なお、彼の文書と遺文は弟子たちによって編纂された『印光法師文鈔』4巻(1925)、『印光法師文鈔続編』2巻(1939)、『印光法師文鈔三編』(1950)に収録されている。

本書は、民国6年（1917）、徐蔚如によって北京で刊行された「印光法師信稿」をもとに翌年さらに20篇あまりの遺稿を補って、北京で出版されたものである。民国12年（1923）商務印書館によって増広版が出版され、民国14年（1925）年中華中華書局が更に増補版を出版した。現在、『印光法師文鈔』として一般に用いられるのは増広されたものをさす。

本書は印光の文書を書・論・疏・序・跋・記・雑著などに分類して収録する。「書」に収められるのは当時の出家者・在家者らの浄土教信者の日々の修行や生活、まだは教義的なことに関する手紙である。「論」には「浄土決疑論」「浄土法門普被三根論」「宗教不宜混用論」「仏教以孝為本論」「如来随機利生浅近論」「持経利益随心論」「竭誠方獲実益論」「挽回劫運護国救民正本清源論」が、「序」には「印施極楽図序」「刻阿弥陀経序」「刻阿弥陀円中鈔序」「竜舒浄土文序」「安士全書序」「了凡四訓序」「四書蕅益解序」「浄業良導序」「初機浄業指南序」「弥陀経直解序」「浄土釈疑序」「観経善導疏序」「弥陀経白話解序」などが、更に「跋」には「往生論註跋」「往生浅説跋」などが収められている。「記」とは「記録」という意味と考えられ、寺院建立の経緯や碑文、および往生人の伝記や感応録などが収められている。「雑書」には「阿弥陀仏像讃」「浄土問答並序」などがある。

作成者名：肖越

印光法師文鈔三編

書名よみ：いんこうほっしもんしょうさんぺん
著者名：印光
著者名よみ：いんこう
著者名別名：聖量、常慙
著者生没年：1861（咸豊11）-1940（民国29）
成立翻訳年：1950（民国39）
成立地：中国
巻数：4
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『印光法師文鈔』（1997）
参考文献：牧田諦亮『善導』（「浄土仏教の思想」5、講談社、2000）、張雪松『対印光法師及其近代中国浄土宗重構的批判性研究』（香港中文大学博士論文、2008）
解説：狭西省の趙氏の生まれ。名前は丹桂、字は昭伊、子任と号した。生後6ヶ月の頃、病気による失明の危機を契機として出家した。法名を聖量、常慙愧僧と号した。中国浄土教の第13祖。最初に儒学を学び、仏法を批判したが、その後、『龍舒浄土文』を読んで、念仏法門が生死輪廻を出離する最も重要な法門であると悟って、浄土教の専修を始めたという。光緒7年（1881）終南山南五台の蓮華洞寺で道純のもとで出家し、同8年、陝西興安の双渓寺で印海定公のもと具足戒を受けた。最近の研究によると、自分の寿命が38歳しかないと占われたこと、「丁丑奇荒」直後の社会がまさに人間地獄といえるような状況であったことなどが、出家と浄土に専念する動機であるとされる。印光の浄土思想は「儒教に説かれている人間の本分に尽くし、邪を修正し誠を目指すこと、仏教の諸悪莫作の理念を実修すること、更に生死輪廻を断じるため菩提心を持ちながら、深い信・願をもって、阿弥陀経の名号を称すこと」と纏めることができる。布教の面では、当時発達したばかりの交通と流通システムなどを利用して、善書を配布したことにより、中国全土はもとより、東南アジア華僑の地域にもネットワークを作り、因果思想と浄土信仰を普及せしめた。なお、彼の文書と遺文は弟子たちによって編纂された『印光法師文鈔』4巻(1925)、『印光法師文鈔続編』2巻(1939)、『印光法師文鈔三編』(1950)に収録されている。

本書は印光が亡くなった10年後に弟子たちに編纂されたものである。第1巻と第2には印光の自ら述べた略歴のほか、すべて「書」即ち手紙を収録している。第3巻は書のほか、序文、縁起文、偈文などを収録する。第4巻は法語、論、書、および雑文などを収録する。

作成者名：肖越

印光法師文鈔続編

書名よみ：いんこうほっしもんしょうぞくへん
著者名：印光
著者名よみ：いんこう
著者名別名：聖量、常慙

著者生没年：1861（咸豊11）-1940（民国29）
成立翻訳年：1939（民国28）
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『印光法師文鈔』（1997）
参考文献：牧田諦亮『善導』（「浄土仏教の思想」5、講談社、2000）、張雪松『対印光法師及其近代中国浄土宗重構的批判性研究』（香港中文大学博士論文、2008）
解説：狭西省の趙氏の生まれ。名前は丹桂、字は昭伊、子任と号した。生後6ヶ月の頃、病気による失明の危機を契機として出家した。法名を聖量、常慙愧僧と号した。中国浄土教の第13祖。最初に儒学を学び、仏法を批判したが、その後、『龍舒浄土文』を読んで、念仏法門が生死輪廻を出離する最も重要な法門であると悟って、浄土教の専修を始めたという。光緒7年（1881）終南山南五台の蓮華洞寺で道純のもとで出家し、同8年、陝西興安の双渓寺で印海定公のもと具足戒を受けた。最近の研究によると、自分の寿命が38歳しかないと占われたこと、「丁丑奇荒」直後の社会がまさに人間地獄といえるような状況であったことなどが、出家と浄土に専念する動機であるとされる。印光の浄土思想は「儒教に説かれている人間の本分に尽くし、邪を修正し誠を目指すこと、仏教の諸悪莫作の理念を実修すること、更に生死輪廻を断じるため菩提心を持ちながら、深い信・願をもって、阿弥陀経の名号を称すこと」と纏めることができる。布教の面では、当時発達したばかりの交通と流通システムなどを利用して、善書を配布したことにより、中国全土はもとより、東南アジア華僑の地域にもネットワークを作り、因果思想と浄土信仰を普及せしめた。なお、彼の文書と遺文は弟子たちによって編纂された『印光法師文鈔』4巻(1925)、『印光法師文鈔続編』2巻(1939)、『印光法師文鈔三編』(1950)に収録されている。
　本書は著者が79歳の時に、弟子によって収集されたもので、タイトルにある通り『印光法師文鈔』の続編にあたる。上巻には「書」即ち手紙を収録する。下巻は序・記・頌讃・雑著などに分類される。本書では本編に見られなかった出産の現世利益などが説かれていて注目される。
「書」に収められるのは当時の出家者・在家者らの浄土教信者の日々の修行や生活、または教養的なことに関する手紙である。「書」には「一函遍復」などが、「序」には「浄土五経重刊序」「浄土十要序」「念仏宝王論疏序」「浄土輯要序」「飭終津梁序」「浄土聖賢録序」「浄土問辨序」「浄土三要述義序」「慧遠法師文鈔序」などが、更に「頌讃」には「浄土宗祖堂讃」「蓮宗十二祖頌讃」などを収められている。「雑書」には「臨終三大要」「浄土指要」「礼観音求子疏（附三要）」などがある。
作成者名：肖越

依観経等明般舟三昧行道往生讃／般舟讃

書名よみ：えかんぎょうとうみょうはんじゅざんまいぎょうどうおうじょうさん／はんじゅさん
書名別名：依観経等明般舟三昧行道往生讃経、依観経顕般舟三昧経、般舟三昧行道往生讃、観経等明般舟三昧行道往生讃、般舟行道讃、般舟生讃
著者名：善導
著者名よみ：ぜんどう
著者名別名：導禅師、光明大師
著者生没年：613（大業9）-681（永隆2）
成立翻訳年：7c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、金剛寺蔵本（鎌倉初期、書写者不明）
2、京都寺町誓願寺蔵本（1213（建暦3）、書写者不明）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（奥書なし）
刊本所在：1、鎌倉中期（京都大）
2、鎌倉中期（大東急記念文庫）
3、鎌倉中期（久原文庫）
4、鎌倉期（大谷大）
5、鎌倉期（高田専修寺）
6、貞永1（1232、富岡益太郎氏）
7、正安4（1302、東洋文庫）
8、明暦2（1656、仏教大）
9、万治2（1659、仏教大）
10、寛文7（1667、刈谷市中央図書館村上文庫）
11、元禄7（1694、仏教大）
12、享保20（1735、仏教大）
13、刊年不明（真福寺）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（刊記なし）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、寛喜二年庚寅（1230）三月二十七日午時為首相当大師遷化五百五十年忌奉刪一如経法般舟生讃流錯／今此部者請来〈承和六年己未（839）十二月十九日〉已後三百九十二箇年矣流伝〈建保五年丁丑（1217）玄冬〉已来一十四年東行之盛時衆応知／抑釈明信入宗之後多年之間於宗本典索其証本流布之本多錯故也同心至希愚功孤困謂於本朝在在処処毎有知聞往宿校合終従万里行果達大宋国謁諸州道俗問大師遺跡或樹簡街衢流志門邑也或盟約印匠闊？奥宦也遇拝八門玄〈是初請来〉僅雖休遠意不得一具典無由開宿望帰朝是後不隔幾年悲素執空開鏤版印〈開印細旨印奥記忽合八部十三巻中事讃上下今時初開雖有先印写今勘出於伝部者聊無先刊〉雖中自作経典擯出此本？満聚楽城邑於今可謂我願既満衆之結縁順逆亦足／開版印〈建暦三年太歳癸酉〉後当第五年生讃流伝〈円行将来御室歳本流伝次第具別録矣〉証宗深談後五百歳実乗興結証定真宗此部撰括一字加減胡越如何而流伝本多有不審因茲流行当第六年〈貞応壬午（1222）四月下旬〉直為書写奉請根本〈即是円行将来正本請出由縁記新写奥〉於根本本文不審由在復無証本不能校合空積歳月無勘定期所以明信発願致請機教相感当今正時披残部文擬校合本及類五会終準経旨遂勘定功列版印本於是同志両三三談一会加功成願証談所定記録歴然順理応文補？夷剰或来論章成其文義或引韻篇匡字音訓乃至字画倭点仮名次第読談楷定証印寛喜二年（1230）四月三日酉終惣結首尾五日〈三月二十七日故首而三月小四月二日不作此功故五日也〉／貞永之初壬辰之歳（1232）依彼遺約置此版刊／殊期一周擬終功績乃至平等施一切矣／二月三日立筆十月五日写竟釈子人真（藤堂論文による）
7、夫弘安年中行円上人承／勅願之旨被開一切経之印板而正安第二之暦林鐘下旬之天不終大功遂帰空寂今年依迎第三回之忌辰知真為謝彼恩徳三部之妙典五部之要義抽懇棘開印板是偏所備彼追賁也雖弘一部於穢界之雲期再会於浄刹之月而已／願以此功徳平等施一切同発菩提心往生安楽国／正安四年壬寅（1302）六月二十一日沙門知真（『浄土教判の研究』による）
8、（未調査）
9、（未調査）
10、（未調査）

11、覚寿捐銀十五銭薦、宗源、寿清冥福宗務、寿林共捐銀十五銭　貞俊、清寿素仙各捐銀十五銭、祐玄・貞寿共捐銀四十五銭薦、栄休・祐桂・妙応・利貞・宗貞冥福、徳甫・貞三共捐銀三銭、彦一捐銀一銭、玄爾・貞玉各捐銀十五銭、敬助刻斯、法事讃二巻、観念法門一巻、往生礼讃一巻、般舟讃一巻、伏願、回此功徳普施法界共生安養斉証無生／元禄甲戌（1694）臈月如来成道日、沙門義山募刻
12、（未調査）
13、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1981）、『卍続蔵』128、『浄全』4、『浄土真宗聖典』（七祖篇）
現代語訳書：大遠忌記念聖典意訳編纂委員会編『聖典意訳七祖聖教』中（浄土真宗本願寺派宗務所内出版部、1977）、斉藤舜健『浄土宗読誦聖典』6（四季社、2003）
参考文献：藤堂祐範『増訂新版浄土教版の研究』（山喜房、1976）、藤堂恭俊「わが国に遺存する唐・宋代浄土教典籍を中心とした日中交渉の資料八題」（『鷹陵史学』5、仏教大学歴史研究会、1979）、高橋正隆「善導大師遺文の書誌研究」（藤堂恭俊『善導大師研究』、山喜房、1980）、佐藤健「『般舟讃』の研究」（仏教大学善導教学研究会編『善導教学の研究』、東洋文化出版、1980）、斉藤隆信「中国浄土教礼讃偈における詩律-世親『往生論』から善導『般舟讃』まで」（『仏教文化研究』50、浄土宗教学院、2006）、南宏信・長谷川浩亨「金剛寺蔵『般舟讃』」（落合俊典編『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』、国際仏教学大学院大学、2007）
解説：本書は略して『般舟讃』、具名は『依観経等明般舟三昧行道往生讃』。善導著作5部9巻のうち行儀分と言われるものの1つ。前序と正讃と後序からなり、『観無量寿経』『阿弥陀経』『無量寿経』『般舟三昧経』を背景とつつ般舟三昧行道法とその讃偈を説く。その行法は7日、90日の間、身口意の三業を清浄無間にすることであり、これによって三昧に入り、それによって仏や浄土が現れ、心身ともに悦楽となるという。この7日、90日の間、身口意の三業を清浄無間にすることが「般舟」であり、身口意の三業を清浄無間にすることで精神集中が深まりきり仏の境地が現前し、心身ともに喜びの状態になることが「般舟三昧楽」であるという。

また正讃の讃偈は「般舟三昧楽」にはじまる7言から成り、上句に「願往生」、下句に「無量楽」の唱和を付して儀礼に供していたようである。

なお正倉院文書の「経律奉請集」によると天平20年（748）8月4日に書写されたことがわかる。また『古聖教目録』においてもその存在を確認できる。しかしながらその後、一般には流布されず法然もついに見られなかった。法然滅後5年の建保5年（1217）に発見されようやく流布した。

なお近年発見された金剛寺本は、断簡ではあるものの現存する諸本とは別系統であると指摘されており、今後の調査が期待される。
作成者名：永田真隆

往生西方浄土瑞応刪伝／浄土瑞応伝

書名よみ：おうじょうさいほうじょうどずいおうさんでん／じょうどずいおうでん
書名別名：往生西方浄土瑞応伝
著者名：文誅／少康
著者名よみ：もんしん／しょうこう
著者生没年：文誅（不詳）・少康（?-805）
成立翻訳年：8-9c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本
写本所在：1、和歌山高野山宝寿院蔵本（康治2（1143）、書写者不明）
2、彰考館蔵本（正治2（1199）、書写者不明）
3、京都国立博物館蔵本（正治1（1199）、書写者不）
写本奥書：1、天徳二年歳次戊午（958）四月二十九日、庚辰木曜觜宿、延暦寺度海沙門日延、大唐呉越州称日賜紫恵光大師勧導伝持写之伝焉、年来所伝之［■］保延元年（1135）火事焼失了、康治二年（1143）九月九日令改書之、移点并比校了、応安三年（1370）三月比参詣北野之処或人与之畢、求法比丘任秀之生年三六、勧修寺西林房
2、呉越国水心禅院住持主興福資利大師賜紫道銑敬造捨日本国大師初導伝持、天徳二年歳次戊午（958）四月二十九日、庚辰木曜紫宿、延暦寺度西海沙門日延、大唐呉越州称日賜紫慧光大師初導伝持写之得焉、略出往生伝感応要録之経云、南閻浮提衆生得生浄土者猶如駛雨云云、本云長承三年（1134）五月二十五日於大谷奉書求法沙門還縁、正治元年（1199）十二月七日書写了、同十三日移点了、一交了
3、呉越国水心禅院住持主興福資利大師賜紫［■］銑説敬造願日本国大師初導伝持、天徳二年歳次戊午（958）四月二十九日、庚辰木曜紫宿、延暦寺度西海沙門日延、大唐呉越州称日賜紫慧光大師初導伝持写之得焉、略出往生伝感応要録之経之南閻浮提衆生得生浄土者猶如駛雨云云、本云長承三年（1134）五月二十五日於大［■］奉書求法沙門［■］縁、正治元年（1199）十二月七日書写了、同十三日移点了、一交了
刊本所在：1、貞永2（1233、西本願寺）
2、慶安2（1649、竜谷大）
3、慶安3（1650、竜谷大・大谷大・大正大）
刊本の奥書刊記：1、呉越国水心禅院住持主興福資利大師賜紫道銑敬造捨、天徳二年歳次戊午（958）四月二十九日、庚辰木曜紫宿、延暦寺度海沙門日延、大唐呉越州称日賜紫慧光大師勧導伝持写之得焉、今此刪伝四十八結校合数本来勘韻篇為証宗立教初造施板印矣、願以此功徳平等施一切同発菩提心往生安楽国、貞永元年歳次壬辰（1232）三月二十七日立筆、四月二十一日畢功、釈子日真
2、今此刪伝四十八結、校合数本来勘韻篇、為証宗立教、初造施板印矣、願以此功徳平等施一切同発菩提心往生安楽国、貞永元年歳次壬辰（1232）三月二十七日立筆、四月二十一日畢功、釈子日真
3、天徳二年歳次戊午（958）四月二十九日、庚辰木曜觜宿、延暦寺度海沙門日延、大唐呉越州称日賜紫恵光大師勧導伝持写之得焉、今此刪伝四十八結、校合数本来勘韻篇、為証宗立教、初造施板印矣、願以此功徳平等施一切同発菩提心往生安楽国、貞永元年歳次壬辰（1232）三月二十七日立筆、四月二十一日畢功、釈子日真
活字本所載書：『大正蔵』51（No.2070）、『卍続蔵』135、『続浄』16
参考文献：小笠原宣秀「瑞応刪伝の諸問題」（『支那仏教史学』3、1939）、小笠原宣秀『中国浄土教家の研究』（平楽寺書店、1951）、野上俊静『中国浄土三祖伝』（文栄堂、1970）
解説：編者は文誅と少康とされているが、文誅については不詳であり、少康（?-805）は『宋高僧伝』にも立伝される8世紀の中国浄土教家であり、後善導とも称された。本書は「刪伝」とあるように、本来は刪除されていない往生伝が存在していた可能性もあるが、先行する往生伝や高僧伝における僧俗男女の伝の文言を刪除したという解釈も成り立つ。東晋の慧遠から唐の邵願保にいたる都合48人の伝を載せているが、各伝記載の分量は他の往生伝よりも短く、このため48人が1巻に収まるのである。成立は第34の元子

平の伝の中に大暦9年（774）と記載されているので、この年から少康の没年である永貞元年（805）の間であろう。なお高野山宝寿院写本の題号には「刪」がない。
作成者名：斉藤隆信

往生集

書名よみ：おうじょうしゅう
著者名：袾宏
著者名よみ：しゅこう
著者名別名：蓮池
著者生没年：1535（嘉靖14）-1615（万暦43）
成立翻訳年：1584（万暦12）
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『大正蔵』51（No.2072）、『卍続蔵』135、『続浄』16
参考文献：深貝慈孝「往生伝・高僧伝解説―特に浄全続十六巻所収本について―」（『続浄』16）
解説：編者の袾宏は杭州府仁の出身。晩年に雲棲山に居したことから雲棲袾宏とも敬称される。幼くして儒学や仏学に親しみ、両親の没後32歳で出家した。禅浄一致を唱え、後に蓮宗（中国浄土宗）の第9祖とされる。著作は『雲棲法彙』34巻など多数ある。
　本書は東晋から明にいたる僧俗・畜生などの往生人の伝を収録したもので、その内訳は巻上に沙門の往生伝を、巻中に王臣・処士・尼僧・婦女・悪人・畜生・続録（明代の往生人）の往生伝、そして巻下には諸聖同帰（経論に説かれる往生人）・生存感応（在世における感応）・附篇がそれぞれ収められている。各伝はそれまでに編集された往生伝類を用い、簡潔にまとめられており、処々に袾宏自身のコメントを賛や論の中で加えているのは、他の往生伝と相違するところである。また立伝された僧俗の中には必ずしも純粋な浄土願生者でない者も含まれていることも本書の特徴となっている。
作成者名：斉藤隆信

往生浄土決疑行願二門

書名よみ：おうじょうじょうどけつぎぎょうがんにもん
著者名：遵式
著者名よみ：じゅんしき
著者名別名：法宝大師、懺主禅慧法師
著者生没年：964-1032
成立翻訳年：11c
成立地：中国
巻数：1
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、天和3（1683、竜谷大・大正大・高野山大）
2、安永3（1774、竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1968）、『卍続蔵』108
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』pp.355-360（法蔵館、1942）
解説：作者の遵式は法宝大師・懺主禅慧法師ともいう。具足戒を受けた翌年に天台国清寺に入り修学をかさねる。後に四明に至り義通の膝下にはいり、知礼（960-1028）と同門となる。天台や浄土関連の著作が残されている。
　本書はその名の通り決疑門と行願門からなっている。序文の後に続く決疑門では疑師・疑法・疑自に分類し、疑師では邪外の師や因位にある凡師に従わず、得果の聖師である仏に従うべきことを説き、疑法では不了義の小乗や大乗に従わず、了義の大乗である浄土教に従うべきことを説き、疑自では自分のような薄地の凡夫は本来救われがたいが、阿弥陀仏の本願によって十念往生が可能であることを説く。次に行願門では礼懺門・十念門・繫縁門・衆福門に分類し、礼懺門では毎日早朝には道場の仏像の前で焼香合掌し、礼拝と懺悔を行なうべきことを説き、十念門では毎日早朝に西を向き起立合掌して一回の呼吸に一念を称え、心の散乱を抑制して十念することを説き、繫縁門では日常何を行うときでもいつも阿弥陀仏と極楽浄土に想いを寄せつづけることを説き、最後の衆福門では『観経』の三福に示されるような諸種の善行を実践するべきであると説く。このように天台浄土教の理論と実践が要領よくまとめられたのが本書である。
作成者名：斉藤隆信

往生浄土懺願儀

書名よみ：おうじょうじょうどさんがんぎ
書名別名：往生浄土懺儀
著者名：遵式
著者名よみ：じゅんしき
著者名別名：法宝大師、懺主禅慧法師
著者生没年：964-1032
成立翻訳年：1015（大中祥符8）
成立地：中国
巻数：1
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、康熙6（1667、増上寺）
2、光緒20（1894、大谷大・大正大）
3、天和3（1683、竜谷大）
4、安永3（1774、竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、此法自撰集、于今凡二改治、前本越僧契凝已刊刻広行、其後序首云、予自濫沾祖教等是也、聖位既広、比見行拝起易労、懺悔禅法皆事攻削、余悉存旧、今之広略既允似可伝行、後賢無惑其二三焉、刊詳刪補、何嫌精措、時大中祥符八年太歳乙卯（1015）二月日序
2、（未調査）
3、此法自撰集、于今凡二改治、前本越僧契凝已刊刻広行、其後序首云、予自濫沾祖教等是也、聖位既広、比見行拝起易労、懺悔禅法皆事攻削、余悉存旧、今之広略既允似可伝行、後賢無惑其二三焉、刊詳刪補、何嫌精措、時大中祥符八年太歳乙卯（1015）二月日序
4、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1984）、『卍続蔵』108
解説：作者の遵式は法宝大師・懺主禅慧法師ともいう。具足戒を受けた翌年に天台国清寺に入り修学をかさねる。後に四明に至り義通の膝下にはいり、知礼（960-1028）と同門となる。天台や浄土関連の著作が残されている。
　本書は遵式の属する天台の立場から浄土往生の法を説き示している。その内容は、無明を離れ十悪五逆を滅するためには、『無量寿経』や『称讃浄土仏摂受経』をはじめとする浄土教の諸経典に基づいて十種の法を行うべきであるとし、またこの法によって臨終に恐怖なく阿弥陀仏の来迎をうけ、さらに十方諸仏から授記をうけると説く。その十種の法とは（1）厳浄道場（儀礼を行なうために道場内を荘厳する）（2）明方便法（道場に入る前の七日間に別房で懺悔し清浄にすごす方法）（3）明正修意（五念門の功徳を回向して一切衆生を救済することを示す）（4）焼香散華（道

場に入る際に焼香・散華して三帰依文を唱える）（5）礼請法（釈迦・弥陀をはじめとする諸仏諸菩薩を道場に奉請する）（6）讃歎法（道場の阿弥陀仏像の前で讃歎する）（7）礼仏法（奉請した諸仏諸菩薩に敬礼する）（8）懺願法（懺悔・勧請・随喜・回向・発願の五悔を行なう）（9）旋遶誦経法（道場内を旋転しながら仏名を唱え、また『阿弥陀経』や『観経』を読誦する）（10）坐禅法（西方に向かって阿弥陀仏や極楽を観想する）である。
作成者名：斉藤隆信

往生浄土伝

書名よみ：おうじょうじょうどでん
著者名：戒珠（？）
著者名よみ：かいしゅ
著者生没年：985（雍熙2）-1077（熙寧10）
成立翻訳年：11c頃
成立地：中国または日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、真福寺蔵本（1254（建長6）、乗忍書写）
2、七寺蔵本（12c-13c、書写者不明）
写本奥書：1、（巻上）建長六年甲寅（1254）二月十六日、於法花山寺書写了、乗忍四十三、一交了（巻中）建長六年甲寅正月二十五日申尅、於法花山寺書写了、乗忍四十三（巻下）写本云、嘉禄三年（1226）十月十六日書写了、見賢思寺之志也、建長六年甲寅三月十日書写了、四十三乗忍
2、（奥書なし）
活字本所載書：塚本善隆「日本に遺存せる遼文学と其の影響」（『日支仏教交渉史研究』1944、pp.207-284、『塚本善隆著作集』6、1974）
参考文献：塚本善隆「日本に遺存せる遼文学と其の影響」（『日支仏教交渉史研究』1944、『塚本善隆著作集』6、1974）、塚本善隆「日本における宋戒珠『往生浄土伝』偽撰」（『日本思想大系月報』43、1974）、清水宥聖「安居院流の位置：言泉集と偽撰戒珠伝」（『古典の諸相』、1969）、清水宥聖「偽撰『戒珠集』とその影響」（大正大学国文学会編、『文学と仏教　第一集　迷いと悟り』、1980）、大谷旭雄「戒珠集『往生浄土伝』と法然」（『大正大学研究紀要』78、1993）、櫛田良洪「東寺宝菩提院蔵の浄土教の資料について」（『仏教史研究』4、1969）、櫛田良洪「漢家類聚往生伝巻中の翻刻書誌解説」（『金沢文庫資料全書　仏典第4巻　浄土篇（一）』、1980）、湯谷祐三「七寺本『往生浄土伝』とその周辺」（『七寺古逸経典研究叢書』5、2000）、国文学研究資料館編『伝記験記集』（真福寺善本叢刊、2004）
解説：本書は宋の戒珠に仮託された偽撰であり、遼の非濁によって作られた『随願往生集』から取材したものであろうと塚本善隆によって推断された。立伝されている浄土往生者は北魏や劉宋から北宋にいたる116人を数え、これを三巻にまとめている（上巻と中巻にそれぞれ40人、下巻に36人）。また最後に迦才『浄土論』及び、文詵・少康の『往生西方浄土瑞応删伝』に列せられている往生者の名前をあげている。戒珠真撰の『浄土往生伝』と違って在家者の伝をも載せており、このため民間での念仏信仰の様態を知ることができる。また戒珠真撰と同一人物は立伝されていない。なおこの真福寺本と同じく名古屋の七寺にも12世紀と思われる戒珠偽撰の写本が蔵されており、こちらは真福寺本を抄出させた可能性がある。その立伝の順序は同じであるが、約半数の61伝のみであり（上巻19人、中巻18人、下巻24人）、誤字がやや目だっている。何を基準に抄出させたのかは不明。また金沢文庫所蔵の『漢家類聚往生伝』は、この戒珠偽撰『往生浄土伝』（真福寺本系）に基づいて再編成された文献である。
作成者名：斉藤隆信

往生論註／浄土論註

書名よみ：おうじょうろんちゅう／じょうどろんちゅう
書名別名：無量寿経論註、論註、無量寿経優婆提舎願生偈註、無量寿経論偈注解
著者名：曇鸞
著者名よみ：どんらん
著者名別名：曇鸞大師、有魏玄簡大士、神鸞、曇巒
著者生没年：476（承明1）-542（興和4）
成立翻訳年：527-529（大通年間）以降
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高野山宝寿院蔵本（平安期、書写者不明）
2、河内長野金剛寺蔵本（巻下のみ、1138（保延4）、書写者不明）
3、大谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、永正第十天、伝与信順房
2、保延四歳［■］戌（1138）十二月
3、（奥書なし）
刊本所在：1、鎌倉初期刊（1256（建長8）以前、西本願寺、親鸞加点本、『観経／阿弥陀経集註、浄土論註』（『親鸞聖人真跡集成』7、法蔵館、1973）所収）
2、寛永6年（1629、仏教大・大谷大）
3、明暦4年（1658、大谷大）
4、貞享3年（1686、仏教大・大正大）
5、元禄10年（1697、仏教大・大正大）
刊本の奥書刊記：1、釈曇鸞法師者并洲汶水縣人也、魏末高斎之初猶在、神智高遠三国知聞、洞暁衆経独出人外、梁国天子蕭王恒向北礼、鸞菩薩註解往生論裁成両巻、事出迦才三巻浄土論也、建長八歳（1256）丙辰七月二十五日、愚禿親鸞加点了、八十四歳（親鸞真筆）
2、（未調査）
3、明暦戊戌（1658（明暦4年））初春吉旦、五条橋通扇屋町、丁子屋西村九郎右衛門新板
4、謹刻論註壱部両巻以流通矣、願共結縁者同入華蔵界、増進無上道、証悟法性楽、旹貞享三年（1686）歳次丙寅孟昏下浣、神楽銅駝坊、書肆村上勘兵衛尉（長尾平兵衛）梓行
5、無量寿経論一巻註解二巻旧所刊行頗有訛、今校讎古人所写十有余本黜訛従正、若其至於疑而無所検則闕焉、点示句逗四声以助庸学之手且異字体而分論之与解以免労従古用朱墨耳、損貨助刻名件（中略）共離苦域斉登楽邦速証無生普摂有情、元禄丁丑（元禄10、1697）正月二十五日、沙門義山募刻、岡元春謹書、古藤正寿梓
活字本所載書：『浄全』1、『大正蔵』40（No.1819）、『卍続蔵』1-71-2、『真聖全』1
現代語訳書：『聖典意訳　七祖聖教』上（本願寺出版協会、1964）、『蓑輪秀邦『解読浄土論註』（真宗大谷派宗務所出版部、1987）、早島鏡正・大谷光真『浄土論註』（仏典講座23、大蔵出版、1987）、神戸和磨炉・広瀬杲『大乗仏典　中国・日本篇5　浄土論註・観経疏』（中央公論社、1993）
参考文献：『蓑輪秀邦『解読浄土論註』（真宗大谷派宗務所出版部、1987）、藤堂恭俊『無量寿経論註の研究』（仏教文化研究所、1958）、福原亮厳『往生論註の研究』（永田文昌堂、1978）、幡谷明『曇鸞教学の研究』（同朋舎出版、

1989)、藤堂恭俊・牧田諦亮『曇鸞・道綽』(「浄土仏教の思想」4、講談社、1995)、論註研究会『曇鸞の世界』(永田文昌堂、1996)
解説：世親『往生論』を注釈したもの。冒頭に竜樹『十住毘婆沙論』の難易二道の説を引き、阿弥陀仏の本願他力によって極楽に往生することを易行道とする。十悪五逆の凡夫も、十念によって往生出来ると説く。
　道宣『続高僧伝』巻6、曇鸞伝には、曇鸞の著作として『安楽集』挙げるが、巻20、道綽伝には『浄土論』が挙げられており、道宣がそれぞれの著作を取り違えたものと考えられる。
作成者名：曽和義宏

角虎集

書名よみ：かっこしゅう
著者名：済能
著者名よみ：さいのう
著者生没年：18c後半頃
成立翻訳年：1770(乾隆35)
巻数：2
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2・14・3
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』(法蔵館、1942)、『仏光大辞典』(仏光出版社、1988)、震華『中国仏教人名大辞典』(上海辞書出版社、1999)
解説：著者の済能は、生滅不詳、臨済宗の僧侶で一壑子と号した。19歳にして顕聖寺で円澄のもとで出家したという。
　題名の「角虎」は、永明延寿の「有禅有浄土犹如戴角虎」から取ったもので、禅浄双修者は仏教者のなか、最も珍しい修行者であるという主旨を示している。本書は、「心清土浄」の立場に基づき、中国仏教における禅浄双修の有徳者たちの浄土極楽往生に関する語録である。上巻には死心新禅師をはじめとする臨済宗の法嗣16人、真歇了禅師をはじめとする曹洞宗の法嗣11人の語録を収録している。下巻には、まず引き続き曹洞宗の法嗣5人、また本覚真禅師以後の雲門宗の法嗣9人、また永明延寿をはじめ法眼宗潙仰宗の法嗣9人、最後にはそれ以外の廬山慧遠をはじめとする古今に優れる仏教者11人の禅浄双修に関する語録を収録する。その中、特に永明延寿の禅と浄土に関する論説が詳しく紹介されている。
作成者名：肖越

勧一切衆生願生西方極楽世界阿弥陀仏国六時礼讃偈／往生礼讃偈

書名よみ：かんいっさいしゅじょうがんしょうさいほうごくらくせかいあみだぶっこくろくじらいさんげ／おうじょうらいさんげ
書名別名：願往生六時礼讃偈、勧一切衆生願生西方極楽、世界阿弥陀仏国六時礼讃偈、往生礼讃、礼讃、六時礼讃偈、阿弥陀往生礼仏文、礼阿弥陀仏文、善導和尚礼懺之文
著者名：善導
著者名よみ：ぜんどう
著者名別名：善導大師、善導禅師、善導和尚、律師西京善道闍梨、善導闍梨、西京実際寺善道禅師、親証三昧大徳善導闍梨、大善導闍梨、慈恩寺善導禅師、慈恩寺善導和尚、導禅師、導師、高祖、光明大師、光明宗師光明一師、浄業和尚、宗家、善導和上、光明寺の和尚
著者生没年：613(大業9)-681(永隆2)
成立翻訳年：7c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、七寺蔵本(平安末期、書写者不明、異本か)
2、京都誓願寺蔵本(1213(建暦3)、書写者不明、明信開版本の書写本)
3、西本願寺蔵本(1401(応永8)、書写者不明)
4、正教蔵文庫蔵本(書写年代不明、書写者不明)
5、パリ国立図書館蔵本(P3841、書写年代不明、書写者不明)
6、ロンドン大英博物館蔵本(S2553、書写年代不明、書写者不明)
7、ロンドン大英博物館蔵本(S2579、書写年代不明、書写者不明)
写本奥書：1、奥書なし(尾題に阿弥陀往生礼仏文一巻の書名)
2、建暦三年(1213)太歳癸酉十月初三日畢
3、応永八年(1401)辛巳[■]秘本共三本、彼此校合シテ甲乙博士写畢、声ノ位難義不審之所ニハ、五音ノ符ヲ付畢甲乙共ニ、更無不審者也但黄[■]
4、(未調査)
5、奥書なし(「日没礼讃偈」後半、「初夜礼讃偈」、「中夜礼讃偈」)
6、奥書なし(「日中礼讃偈」)
7、奥書なし(「日中礼讃偈」断簡)
刊本所在：1、鎌倉期(大谷大)
2、鎌倉期(大谷大)
3、鎌倉期(専修寺)
4、建長3(1251、京都大学付属図書館・宝寿院)
5、室町期(竜谷大・大東急記念文庫)
6、室町期(大谷大・知恩院・専光寺)
7、室町期(祐誓寺・蓮泉寺・日本民芸館)
8、室町期(毫攝寺・慈敬寺)
9、室町末期(円照寺)
10、桃山末期(栗田元次旧蔵・鈴木霊真旧蔵)
11、寛永18(1641、竜谷大)
12、明暦2(1656、仏教大・東北大・新潟大・国文研・浄照坊)
13、万治2(1659、仏教大)
14、寛文7(1667、仏教大・竜谷大)
15、元禄6(1693、仏教大・東大総・千葉県立中央図書館・法然院)
16、元禄7(1694、仏教大・竜谷大・大谷大)
17、宝永6(1709、仏教大)
18、享保20(1735、仏教大)
19、明和6(1769、竜谷大)
20、寛政2(1790、法然院)
21、寛政7(1795、竜谷大)
22、寛政11(1799、竜谷大・大谷大)
23、嘉永2(1849、仏教大・大谷大)
24、明治9(1876、東大総・金沢大・竜谷大・東洋大)
25、明治12(1879、仏教大・金沢大・竜谷大)
刊本の奥書刊記：1、以西山上人御蔵移之畢
2、(刊記なし)
3、(刊記なし)
4、建長三年(1251)七月、日願主入阿弥陀仏
5、日中結讃初句依御室経蔵唐本加之而已、沙門知真
6、日中結讃初句依御室経蔵唐本加之而已、沙門知真
7、(未調査、知真版)
8、(刊記なし)

9、（刊記なし）
10、（刊記なし、古活字版）
11、（未調査）
12、明暦丙申（1656）初冬吉旦、五条橋通扇屋町、丁子屋九郎右兵衛門重刋
13、万治二己亥年（1659）正月吉旦、吉田庄左衛門板行
14、此書世流布印本文字往々有差誤故今考檢而避訛帰正重令開刋者也、岩寛文第七歳宿丁未（1667）弥生中澣、丁子屋三郎兵衛、堀川通仏光寺下ル町、帝都、書林、日野屋半兵衛寿梓（明暦二年版の翻刻本）
15、應剞劂氏之需刻、疏讃科本五部共九巻而弘通矣伏願、回此功徳普施法界共生安養斉悟法忍、元禄癸酉（1693）三月十有四日、沙門良仰謹識
16、華頂山蔵板、弘通所、知恩院古門前、沢田吉左衛門、京三条通寺町西入、山中善兵衛
17、（不明）
18、享保廿乙卯（1735）中春求版、今井七郎兵衛、井上忠兵衛、合刻、岡書林、元春棲敬書、采賢堂謹刊
19、（未調査）
20、（未調査）
21、西本願寺下老花長円寺蔵梓
22、寛政十一年己未（1799）五月、浪花長円寺蔵版、大阪彫刻師、松井忠蔵（無刊記本は竜谷山蔵版）
23、嘉永二年巳酉（1849）正月、京師書林、西六条花屋町油小路東入町、永田調兵衛、醒井通魚棚上ル町、丁子屋庄兵衛、東六条下珠数屋町、丁子屋九郎右衛門、東六条魚棚間之東入町、丁子屋平兵衛
24、（未調査、嘉永二年版の覆刻）
25、明治十年（1877）廿五日、御届、同十二年（1879）三月、出版、講師南条神興校正

活字本所載書：『大正蔵』47（No.1980）、『卍続蔵』128、『浄全』4、『浄土宗選書　行義分』、『真宗聖教大全』中、『真宗聖典全書』、『二楽叢書』1、『真宗聖教全書』1、『浄土真宗聖典』（七祖篇）、『善導大師全集』、『浄土宗大典』8

現代語訳書：大遠忌記念聖典意訳編纂委員会編『聖典意訳七祖聖教』中（浄土真宗本願寺派宗務所内出版部、1977）、村瀬秀雄『和訳善導大師六時礼讃 』（常念寺、1980）、林田康順『浄土宗読誦聖典』3（四季社、2001）

参考文献：藤原猶雪「善導大師本具両疏弘伝考（上　震旦編）」（『史学雑誌』34-10、史学会、1923）、藤原猶雪「善導大師本具両疏弘伝考（下　本朝編）」（『史学雑誌』34-11、史学会、1923）、上杉文秀『善導大師及往生礼讃の研究』（法蔵館、1931）、松陰了諦「敦煌出土善導礼讃偈に就いて」（『竜谷学報』297、竜谷学会、1931）、矢吹慶輝編『鳴沙余韻解説　敦煌出土未伝古逸仏典開宝』（岩波書店、1933）、望月信亨『仏教史の諸研究』（望月仏教研究所、1937）、大谷光照『唐代の仏教儀礼』（有光社、1937）、禿氏祐祥「善導撰述の典籍とその伝来」（『宗学院論集』32、本願寺派宗学院、1940）、藤堂祐範「浄土教と印刷文化」（『浄土学』16、17、浄土学研究会、1940）、藤原凌雪『往生礼讃概説』（永田文昌堂、1962）、小野勝年「円仁の見た唐の仏教儀礼」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、1964）、服部英淳「善導大師の行儀分とその註書」（『浄土宗全書』4、山喜房仏書林、1970）、藤堂祐範『増訂新版　浄土教版の研究』（山喜房仏書林、1976、初出は1930）、本願寺派宗学院編『古写古本　真宗聖教現存目録』（永田文昌堂、1976）、広川尭敏「敦煌出土善導『往生礼讃』古写本について」（大正大学浄土学研究会編『善導大師の思想とその影響』大東出版社、1977）、明山安雄「『往生礼讃』の研究」（仏教大学善導教学研究会編『善導教学の研究』東洋文化出版、1980）、高橋正隆「善導大師遺文の書誌研究」（藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、1980）、中井真孝「経疏目録類より見たる善導著述の流布状況」（藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、1980）、広川尭敏「礼讃」（牧田諦亮、福井文雅編『講座敦煌7　敦煌と中国仏教』大東出版社、1984）、提玄立、平松令三編『高田専修寺本　善導大師五部九巻』（法蔵館、1986）、広川尭敏「敦煌出土『沙門善導願往生礼讃偈』(S.2553)について」（浄土宗社会国際局編『日中浄土』10、日中友好浄土宗協会、1998）、斉藤隆信「善導の浄土教儀礼における通俗性」（『仏教論叢』49、浄土宗、2005）、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『集諸経礼懺儀　巻下』（「日本古写経善本叢刊」4、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、2010）

解説：善導の著作『五部九巻』の一つで、行儀分（儀礼書）に分類される。日常の儀礼書としての性格を持ち、前序・六時礼讃偈・懺悔発願・後序からなる。前序では浄土往生の実践体系である安心（三心）、起行（五念門）、作業（四修）を明らかにする。六時礼讃偈では一日を六時に分けて阿弥陀仏とその浄土に礼拝し、それぞれ『無量寿経』、竜樹『十二礼』、世親『往生論』、彦琮『願往生礼讃偈』、『観無量寿経』（「十六観偈」）などに基づいて讃偈を唱和する。そして罪障を懺悔し、浄土往生を願い、後序にいたって現在と未来の利益を説いている。

成立年代は明確ではないが、礼懺儀礼の発展過程から見ると、善導自作の「日中礼讃偈」に、『法事讃』と同じく押韻を備える讃偈が確認できるため、無韻を示す『般舟讃』成立以後の著作であることが推定される（斉藤隆信、2005）。

後世の浄土教儀礼に多大なる影響を与え、智昇（658-740）編纂『集諸経礼懺儀』の『開元録』入蔵、敦煌本の多数の存在、法照（生没年不詳）による『五会法事讃』への引用などの事跡が、唐代における『本書』の盛行を物語っている。

日本には、善導在世中に道昭（629-700）が『観経疏』、『般舟讃』と共に将来した（中井真孝、1980）。鎌倉時代以降、『五部九巻』の一部として刊行され（明信開版本、知真開版本など）広く流布していった。

なお多くの古写本の存在が確認されている『集諸経礼懺儀』所収本に関しては、『集諸経礼懺儀』の項目を参照せよ。

作成者名：加藤弘孝

観経疏

書名よみ：かんぎょうしょ
著者名：道闇
著者名よみ：どうぎん
著者生没年：7c
成立翻訳年：7c
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『安養集』（梯信暁『安養集　本文と研究』百華苑、逸文あり）、『安養抄』（『大正蔵』84、逸文あり）、『観経疏光明抄』（逸文あり）、『観経疏伝通記』（『浄全』2、逸文あり）、『観経疏略抄』（『浄全』2、逸文あり）、『観経疏楷定記』（『日仏全』58-59、逸文あり）

参考文献：恵谷隆戒「古佚書道闇の観経疏について」「唐道闇撰観無量寿経疏復元本」（『浄土教の新研究』、山喜房仏書林、1976）、梯信暁『安養集　本文と研究』（百華苑）

解説：道闇は、真福寺本戒珠往生伝によると、長安西明寺に住し、道綽に帰依していた浄土教家である。道闇の『観経疏』は、長西録では「2巻72丁」とされている。上述の恵谷隆戒「唐竜興撰観無量寿経記復元について」（『浄土教の新研究』、山喜房仏書林、1976）において、可能な限り逸文を集成して、復元がなされている。また上述の梯信暁

『安養集　本文と研究』（百華苑）には、『安養集』所引の逸文が頭註において指摘されている。
　復元本によると、十六観の呼称、仏身仏土論、九品の階位、別時意会通、逆謗除取等の問題が論じられている。十六観の呼称は浄影寺慧遠の呼称を踏襲している。仏身仏土論は法性土、行浄土、事浄土、化浄土の四種浄土を立てる。これは智儼や道世の説と一致する。またこれらの問題は敦煌本『無量寿観経纘述』と相似する点が多く、何らかの関連をもっていると考えられる。道綽や善導の思想とは相違する点が多い。
作成者名：曽和義宏

勧修定慧結社文

書名よみ：かんしゅうじょうえけっしゃもん
書名別名：定慧結社文
著者名：普照知訥
著者名よみ：ふしょうちとつ
著者名別名：牧牛子
著者生没年：1158-1210
成立翻訳年：1190
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、万暦36（1608、韓国国立図書館）
2、刊年不明（韓国東国大）
刊本の奥書刊記：1、大明万暦三十六（1608）年戊申六月日、順天府松広寺重刊
2、雲興寺刊
活字本所載書：『韓国仏教全書』4、『普照法語』（五台山上院寺、1937）
参考文献：韓京洙「普照知訥禅師の浄土観」（『印仏研』39-1、1990）、金敬熙「知訥の禅と浄土信仰」（『印仏研』46-1、1997）、韓普光「知訥の《定慧結社文》における浄土観」（『印仏研』47-2、1999）
解説：本書『勧修定慧結社文』の著者普照知訥は、高麗仏教中興の祖とされる高僧。臨済宗の看話禅を高麗仏教に導入し、禅教一致を説いた人物として知られている。知訥は1173年に16歳で出家し、宗暉禅師から具足戒を受けたと伝えられている。その後、1182年には 25歳で僧科に合格した。僧科とは、高麗における僧侶の科挙制度と言うべきもので、僧官、住持などの資格を規定する国家試験である。しかし知訥は官職には就かず、各地を転々とする。1200年以降松広山の吉祥寺（現在、曹渓山の松広寺）へ移り住み、1210年に53歳で亡くなるまで禅教一致の修行を広めた。知訥には『牧牛子修心訣』、『華厳論節要』、『看話決疑論』等の著作が帰される。ただし『念仏要門（あるいは念仏因由経）』に関しては、真偽作論争が未決着である。（本データベース『念仏要門』を参照されたい。）
　1188年、知訥は居祖寺に滞在しながら、「定慧結社」を組織する。その後、智異山の上無住庵へ移り、3年間「定慧結社」の活動を続けたとされる。本書『勧修定慧結社文』は、知訥が「定慧結社」として活動中であった1190年に出版された。本書の巻末部分に、本書が出版時には既に巷間に流布していたことを示唆する箇所があるから、執筆自体は1190年より以前に為されたと思われる。本書は、この「定慧結社」の理念である禅教双修を問答形式で論じたもの。高麗後期に流行した末法史観に基づく、安易な称名念仏を批判し、戒定慧の三学を以て修行することを勧める。知訥によれば、「念仏、転経、万行、施為は、これ沙門住持の常法」であって、排除すべきものでない。しかし、そういった行の「根本を極めることなく」行の形態にのみ固執して、往生を求めるものは批判されるべきものである。また本書では、浄土の指方立相（つまり浄土の実在化）が排除され、『維摩経』・『六祖壇経』・『万善同帰集』等を援用しつつ唯心浄土説が説かれる。知訥は、衆生の機根を、最上乗根機、上根機、悲願重者、浄穢苦楽欣厭心重者、最下根者の5つに分けるが、最下根者に関しては、観仏および梵字の観照といった観念仏を勧めている。本書の背景にあるのは、高麗後期に流行した末法思想とそれを発端とする称名念仏の流行である。本書からは、こういった時代の潮流に抗しようとする知訥の意思が読み取れる。
作成者名：山中行雄

勧念

書名よみ：かんねん
著者名：涵虚得通
著者名よみ：かんきょえつう
著者名別名：己和
著者生没年：1376-1433
成立翻訳年：15c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正統5（1440、ソウル大・韓国釜山梵魚寺、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
2、刊年不明（韓国東国大、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、正統五年庚申（1440）七月、慶尚道聞慶鳳厳寺、門人文秀書刊
2、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『涵虚堂得通和尚語録』に収録）、『涵虚大師文集』（「韓国歴代文集叢書」202、景仁文化社、ソウル、1998）、『涵虚堂得通和尚語録』（韓国普済社、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「朝鮮・涵虚得通の念仏禅について」（『印仏研』55-1、2005）
解説：本書『勧念』の著者である涵虚得通は朝鮮時代の禅僧。21歳までは儒学を学んでいたが、友人の死をきっかけに仏門に入る。その後『円覚経』・『金剛経』などの注釈書を著し、58歳で寂した。彼の行状は、韓普光論文から簡潔に知ることができる。
　本書『勧念』は『涵虚堂得通和尚語録』に収録されている。本書はタイトルが示すように、阿弥陀仏への念仏を勧める100字あまりの短い文章。人々が一緒に阿弥陀仏を念ずれば、極楽の岸へと登り、共に成仏道への善因の種を植えることになるという。もし万千という多くの人々の中から一人でも成道すれば、その一人のおかげで他の人々も証得し、さらに証得した人々が、それぞれ多くの人々を教化する。このようにして、一切衆生が菩提を成就できるので、多くの人々と念仏をすることが大事であると説いている。
　本書は、『涵虚堂得通和尚語録』（『韓国仏教全書』7）に収録されている。『涵虚堂得通和尚語録』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.152-153を参照されたい。
作成者名：山中行雄

観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門／観念法門

書名よみ：かんねんあみだぶつそうかいさんまいくどくほうもん／かんねんほうもん
書名別名：観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門経
著者名：善導
著者名よみ：ぜんどう
著者名別名：導禅師、光明大師
著者生没年：613（大業9）-681（永隆2）
成立翻訳年：7c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都寺町誓願寺蔵本（1213（建暦3）、書写者不明）
写本奥書：1、建暦三年（1213）太歳癸酉閏九月八日畢
刊本所在：1、鎌倉初期（竜谷大）
2、鎌倉期（高田派専修寺）
3、明暦2（1656、仏教大）
4、万治2（1659、仏教大）
5、元禄6（1693、仏教大）
6、元禄7（1694、仏教大）
7、刊年不明（真福寺）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
7、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1959）、『卍続蔵』107、『浄全』4、『浄土真宗聖典』（七祖篇）
現代語訳書：大遠忌記念聖典意訳編纂委員会編『聖典意訳七祖聖教』中（浄土真宗本願寺派宗務所内出版部、1977）、斉藤隆信『浄土宗読誦聖典』5（四季社、2002）
参考文献：望月信亨『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、服部英淳「善導大師の行儀分とその註書」（『浄土宗全書』4巻付録）、藤原幸章「『観念法門』について-その組織と性格-」（『大谷学報』37-3、1958）
解説：本書は略して『観念法門』、具名は『観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門経』である。
　内容としては前分と後分からなり、前分では『観無量寿経』や『観仏三昧海経』によって観仏三昧の法を、『般舟三昧経』によって念仏三昧の法を、さらには諸経によって入道場念仏三昧の法や道場内懺悔発願の法を明かし、後分では念仏往生を願う者には現世と来世に得られる五種の功徳利益、つまり五種増上縁があることを明かしている。そして最後に三種の問答をもうけて往生浄土に関わる疑点に答えている。このような構成に関して望月は『支那浄土教理史』において『観念法門』は2部立てとなっているため善導の著作は「5部9巻」ではなく「6部9巻」であるとの指摘をする。
　善導著作の5部9巻の中では初期の成立であると考えられる。また5部9巻の行儀分にあたるが、前述の「五種増上縁」の箇所は解義的である。
　なお、目録から敦煌本を1件確認することができる（『杏雨書屋蔵敦煌秘笈目録冊』p.112）。
作成者名：永田真隆

勧念要録

書名よみ：かんねんようろく
著者名：懶庵普雨
著者名よみ：らいあんふう
著者生没年：1515-1565
成立翻訳年：16c
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、崇徳2（1637、ソウル大）
刊本の奥書刊記：1、崇徳二（1637）年、秋七月、初吉日、求礼地、華厳寺開刊、自施刊、海淳比丘
活字本所載書：『韓国仏教全書』7
参考文献：『朝鮮人名辞書』（朝鮮総督府中枢院、1937）、東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）
解説：『勧念要録』は、『虚応堂集』などの著作で知られる禅僧普雨によって編纂された。普雨は、李氏朝鮮時代にもっとも影響力のあった僧の一人で、明宗の母、文定王后に重用された。普雨は、排仏崇儒の李朝下で禅教二宗の再興と、一度は禁止された度僧の復活に貢献した。しかし文定王后の死後、普雨は儒者勢力に弾劾され、1565年に済州島に流されてしまう。さらに同年済州島で虐殺された。
　本書は、往生伝や念仏に関する奇跡譚を集めたものである。例えば、吉州の王思机が、地獄の十王を往生させるために念仏をするという約束で、亡くなった妻を冥土から取り返す「王郎返魂伝」、慧遠が白蓮社を結成した因縁譚である「遠公結社伝」など合計11のエピソードが収められている。これに続く「観法」という章では「観無量寿経」の十六観法が簡単に説明される。ここでは観仏も称名もどちらも功徳のある行為として説かれている。あるいはむしろ、観仏修行・称名の両方が行われるべきと説かれているとも読み取れる。最終章「引証」で『薬師経』と『阿彌陀皷音聲王陀羅尼經』の引用によって称名の功徳が示される。
　唯一の刊本である崇徳2年本は、漢文の句の間にハングルの活用語尾や助詞にあたる要素（いわゆる「てにおは」）が挿入される「順読口訣」で表記されており、「懸吐諺解本」とよばれるものである。この刊本は損傷が激しく、所々に欠損箇所がある。したがって『韓国仏教全書』では、『念仏普勧文』などの他典籍中にあるパラレルを参照して復元している。復元の際に使われた典籍については『韓国仏教全書』7、p.609を参照。
作成者名：山中行雄

観無量寿経記

書名よみ：かんむりょうじゅきょうき
書名別名：観経記、観経疏記、竜興記
著者名：竜興
著者名よみ：りゅうこう
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『安養集』（梯信曉『安養集　本文と研究』百華苑、逸文あり）、『安養抄』（『大正蔵』84、逸文あり）、『観経疏伝通記』（『浄全』2、逸文あり）、『東宗要』（『浄全』11、逸文あり）、『往生論註拾遺鈔』（『浄全』1、逸文あり）、『観経疏楷定記』（『日仏全』58-59、逸文あり）

参考文献：恵谷隆戒「古佚書竜興の観無量寿経記の研究」「唐竜興撰観無量寿経記復元について」（『浄土教の新研究』、山喜房仏書林、1976）、梯信暁『安養集　本文と研究』（百華苑）
解説：竜興については不明。望月信亨は「大唐竜興大徳香積寺主浄業法師塔銘並序」に竜興大徳とあることから、竜興とは香積寺浄業法師ではないか、と推定している。
　成立年は引用文献に『称讃浄土仏摂受経』や『仏地経論』があり、また「基法師」という語が見られることから、善導、玄奘、基らよりも後代の成立と考えられる。
　内容については逸文から、浄土の名体、往生、仏身仏土、極楽と兜率の優劣、浄土三部経訳出などの問題が論述されていたものと推定される。修行階梯によって仏土の優劣が決定するということなどから、善導の説とは違い、浄影寺慧遠など唯識系、法相系の影響を受けた解釈をしていると考えられる。
　上述の恵谷隆戒「唐竜興撰観無量寿経記復元について」（『浄土教の新研究』、山喜房仏書林、1976）において、可能な限り逸文を集成して、復元がなされている。また上述の梯信暁『安養集　本文と研究』（百華苑）には、『安養集』所引の逸文が頭註において指摘されている。
作成者名：曽和義宏

観無量寿経義疏

書名よみ：かんむりょうじゅきょうぎしょ
書名別名：観経義疏、観経義記、無量寿観経義、無量寿観経義記、観無量寿経玄義
著者名：慧遠
著者名よみ：えおん
著者名別名：浄影寺慧遠、浄影、浄影大師
著者生没年：523（正光4）-592（開皇12）
成立翻訳年：隋代（6c）
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大英図書館蔵本（書写年不明、書写者不明、敦煌本、S524V、『敦煌宝蔵』4）
2、北京図書館蔵本（書写年不明、書写者不明、敦煌本、鳥94（北215）、『敦煌宝蔵』57）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（奥書なし）
刊本所在：1、寛文以降（大正大・竜谷大・大谷大・京都大・高野山大・東洋大・仏教大）
刊本の奥書刊記：1、河南四郎右衛門開版
1、醒井通松本屋大角清兵衛梓行
活字本所載書：『浄全』5、『大正蔵』37（No.1749）、『卍続蔵』1-32-4
参考文献：深貝慈孝「浄影寺慧遠の弥陀浄土観―大乗義章浄土教と観無量寿経義疏・無量寿経義疏との関連において―」（『仏教大学研究紀要』55、1971）
解説：中国における『観経』の最古の註釈書。『観経』は観仏三昧を説く経とする。その行法は応身観の始、すなわち凡夫のための、西方極楽の阿弥陀仏という有相の仏身を観察する行法であるとした。阿弥陀仏と極楽は低位の応身応土であるとしている。善導『観経疏』の楷定の対象とされるが、説人差別の解釈、定善・散善という用語など、善導を含めた後世の註釈書に与えた影響も大きい。
作成者名：曽和義宏

観無量寿経義疏

書名よみ：かんむりょうじゅきょうぎしょ
書名別名：観経義疏、観経吉蔵疏
著者名：吉蔵
著者名よみ：きちぞう
著者名別名：嘉祥大師
著者生没年：549（太清3）-623（武徳6）
成立翻訳年：隋代
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、名古屋真福寺蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、延宝4（？）（1676（？）、竜谷大・大谷大・大正大・京都大）
2、元禄8（？）（1695（？）、仏教大・竜谷大・大谷大・大正大・京都大）
刊本の奥書刊記：1、醒井通　松本屋　大角清兵衛梓行
2、河南四郎右衛門開版
活字本所載書：『浄全』5、『大正蔵』37（No.1752）、『卍続蔵』1-32-4
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』（法蔵館、1978）、藤井教公「慧遠と吉蔵　両者の『観無量寿経義疏』を中心として」（平井俊栄編『三論教学の研究』、春秋社、1990）、三桐慈海「仏道ということ―観無量寿経義疏について―」（『仏教学セミナー』60、1994）、袴谷 憲昭「吉蔵『観無量寿経疏』と浄土思想」（『平井俊栄博士古稀記念論集　三論教学と仏教諸思想』、春秋社、2000）
解説：三論教学の立場からの『観経』の注釈書。吉蔵は、浄土は長遠なる仏道に対する近果であり、衆生をして怠惰の心を生じさせないために説かれている、としている。浄土往生の因として、菩提心と三福十六観を挙げるが、菩提心は仏果に至る正因でもあり、近果である浄土に往生する因が三福十六観である。浄土観については、浄土はすべて酬因であるから報土と言うべきであるが、別して阿弥陀仏の浄土については、応身応土、分断生死、三界所摂であるとする。これは慧遠、智顗と同様の解釈と言えよう。『観経』の分科、九品の階位等も同様である。特異な解釈としては、韋提希のみならず、頻婆娑羅王、阿闍世もすべて聖人であるとする点である。これらの聖人が衆生を仏道に導く方便として、王舎所の悲劇を起こした、と解釈する。このうち最も功徳が大きいのは、仏に『涅槃経』を説く機縁を与えた阿闍世であるとする。このように『涅槃経』を基盤とした、独特の解釈をしている。また法蔵菩薩の誓願や、浄土三界摂不について、「北地」「南地」のそれぞれの師の解釈として、曇鸞、慧遠、智顗などの説を紹介している。
作成者名：曽和義宏

観無量寿経義疏正観記

書名よみ：かんむりょうじゅきょうぎしょしょうかんき
書名別名：霊芝観経義疏正観記
著者名：戒度
著者名よみ：かいど
著者名別名：四明竜山足菴沙門戒度、拙菴、拙菴律師戒度、足菴度公
著者生没年：12c
成立翻訳年：1181（淳熙8）
成立地：中国

巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、宝永6（1709、仏教大・大正大・竜谷大・大谷大・法然院）
刊本の奥書刊記：1、刻観経義疏正観記序、霊芝大智祖師当五百運興於趙宋博究諸家以律為宗体法華円意以弘揚四分令終南家法十倍明晶、厥功厥徳為天下学者之所仰止、所謂宋僧一狐之腋非苟讃矣、弘律之外以浄土業自行化他故十六観小阿弥陀並著義疏、較之諸師非無同異蓋各要逗機不得不然也、其継述者亦皆偉人而惟拙菴度律師称為特抜嘗翼正観記於観経疏聞持記於弥陀疏、聞持久伝此方而正観尚未流行、学者憾焉、天台山有徳王院主大雲潤法師亦其門秀者也、頃於濃之長滝寺経庫得此書本乃図剞劂広其流伝、於是徴序於余雖鄙拙無文、亦至喜此書久隠復顕豈得固辞哉、学者由記達疏因疏通経教以立行事能称理超聖凡於当念泯浄浄穢於一心則生前不漸為鷲峰支属、死後無謬於蓮国往生矣、是為序、旨、宝永己丑六年（1709）仲春既望、東湖安養精舎後学比丘慧淑薫盥和南題（序文）
宝永六己丑暦（1709）仲春穀旦、京兆、書肆山芸堂、中野五郎左衛門梓行（刊記）
宝永己丑（1709）蕤賓日寓雒下光隆寺知空書臥雲閣之南窗（跋文）
活字本所載書：『卍続蔵』33、『浄全』5、『浄土宗大典』5
参考文献：望月信亨『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、牧田諦亮「震旦諸師の浄土三部経釈　解題」（『浄土宗全書』5、山喜房仏書林、1970）
解説：元照（1048-1116）の『観無量寿仏経義疏』3巻に対して、さらに詳細に解釈したものであり、戒度は他にも『観経扶新論』1巻、『阿弥陀経義疏聞持記』3巻、『無量寿仏讃注』1巻などを著して、元照の浄土教思想を敷衍している。淳熙4年（1177）には『追和淵明帰去来辞』1篇を撰した（望月信亨、1942）。
　また本文中には善導（613-681）の『観無量寿経疏』4巻や飛錫（生没年不詳）の『念仏三昧宝王論』3巻などが引用されている。
　序が記された淳熙8年（1181）は、元照の没年より66年も隔たるが、その法系を継承していることは確実だと考えられる（牧田諦亮、1970）。
　晩年は余姚の極楽寺に住し、浄土教の宣布につとめ、臨終に際しては弟子達に『観無量寿経』を読誦せしめ、第九法身観に至ると跏趺して往生したという（『仏祖統紀』28、『浄土聖賢録』4）。
作成者名：加藤弘孝

観無量寿経義疏白蓮記

書名よみ：かんむりょうじゅきょうぎしょびゃくれんき
書名別名：白蓮記
著者名：用欽
著者名よみ：ようきん
著者名別名：七宝山用欽
著者生没年：11c後半
成立翻訳年：11c後半
成立地：中国
巻数：4
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『仏典疏鈔目録』（『興隆録』）下（『日仏全』1）、『長西録』（『日仏全』1）、『蓮門経籍録』上（『日仏全』1）、『浄土真宗教典志附録』3（『日仏全』1）、良忠『観無量寿経疏伝通記』（『浄全』2、p.78、184、245、295、302－303、409、430、逸文あり）、良忠『観無量寿経疏定善義略鈔』（『浄全』2、p.567、逸文あり）、聖冏『観無量寿経疏伝通記糅鈔』（『浄全』3、p.671、逸文あり）、戒度『観無量寿経義疏正観記』（『浄全』5、p.442、467、逸文あり）、良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』7、p.303、逸文あり）、良栄『浄土宗要集見聞』（『浄全』11、p.225、逸文あり）良弁『浄土十六箇条疑問答』（『浄全』11、p.675、逸文あり）、顕意『観無量寿経楷定記』（『日仏全』11、p.50、82、128－129、133、138、140、142、152、156－157、162 －164、169、171－172、174、178、181、195、202－203、逸文あり）
参考文献：阿川正貫「引用文から見た用欽の思想」（『印仏研』39-2、1991）、阿川正貫「諸師著作中に見る用欽の遺文」（『仏教文化研究』37、1992）、阿川正貫「用欽著作中の善導について」（『仏教論叢』36、1992）
解説：用欽は元照（1048－1116）の主要な門弟の一人である。
　本書は現存しないが、『仏典疏鈔目録』（『興隆録』）下に、師元照『観無量寿経義疏』の註釈書であると記されている。良忠（1199－1287）および顕意（1239－1304）の著作に逸文が多数見られるものの、その内容は元照『義疏』の語釈および補説が大半を占め、独創性や発展性に乏しい。
　ただ本書の大きな特徴として、用欽自身は天台浄土教であるにもかかわらず、善導に傾倒していたことを伺わせる記述が散見される点が挙げられる。良忠は『東宗要』などの著作で「択瑛、用欽等の師、みな善導をすなわち弥陀の化身と判ず」と述べているが、その典拠を明らかにはしていない。だが良栄は『東宗要見聞』において用欽の「善導弥陀化身説」の出典は本書であることを明記しており、さらに良忠『伝通記』には、本書が善導の捨身往生に言及していたことが述べられている。それゆえ本書は現存文献中、「善導弥陀化身説」および「善導捨身往生説」の両説を並記した最初の文献ということになる（阿川論文、1992）。
作成者名：伊藤瑛梨

観無量寿経義疏扶新論

書名よみ：かんむりょうじゅきょうぎしょふしんろん
書名別名：観経扶新論
著者名：戒度
著者名よみ：かいど
著者名別名：四明竜山足菴沙門戒度、拙菴、拙菴律師戒度、足菴度公
著者生没年：12c
成立翻訳年：1178（淳熙5）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、貞享1（1684、仏教大・大正大・竜谷大・東洋大）
刊本の奥書刊記：1、余頃年游学四明聞有輔正解者為破新疏而作也、宗中諸老嘗謂古人有言何以息諍無弁姑置之而不理也、雖然後学之曹不能無疑、今幸足菴度公評而論之、其理甚明使新疏重光後昆有託、豈曰小補遂十輟已長仍率同志命工鏤板以広其伝、淳熙己亥（1179）仲冬姚江帰、雲菴法義題（跋文）
貞享元甲子歳（1684）林鐘日（刊記）
活字本所載書：『卍続蔵』33、『浄全』5、『浄土宗大典』5
参考文献：望月信亨『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、牧田諦亮「震旦諸師の浄土三部経釈　解題」（『浄土宗全書』5、山喜房仏書林、1970）
解説：南山律宗の第15祖とされる元照（1048-1116）の『観無量寿仏経義疏』に対して、道因（1090-1167）は『輔正解』

を著してその解釈を批判した。これに対し元照の流れをくむ戒度が更に道因に反駁して成ったものが本書である。はじめに元照の『観経疏』を引き、これに対する道因の文をあげ、その後に自らの論評を加えている。なお道因の『輔正解』は現存しないことから、本書を通してその内容の一端をうかがうことができる。

戒度は他にも『観無量寿経義疏正観記』3巻、『阿弥陀経義疏聞持記』3巻、『無量寿仏讃注』1巻などを著して、元照の浄土教思想を敷衍している。淳熙4年（1177）には『追和淵明帰去来辞』1篇を撰した（望月信亨、1942）。

晩年は余姚の極楽寺に住し、浄土教の宣布につとめ、臨終に際しては弟子達に『観無量寿経』を読誦せしめ、第九法身観に至ると跏趺して往生したという（『仏祖統紀』28、『浄土聖賢録』4）。

作成者名：加藤弘孝

観無量寿経綱要

書名よみ：かんむりょうじゅきょうこうよう
書名別名：観無量寿経疏
著者名：義寂
著者名よみ：ぎじゃく
著者生没年：7c後半－8c前半
成立翻訳年：7c後半－8c前半
成立地：新羅
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『義天禄』）1（『日仏全』1）、『永超録』（『日仏全』1）、『仏典章疏目録』（『興隆録』）下（『日仏全』1）、『蓮門類聚経籍録』（『文雄録』）上（『日仏全』2）
参考文献：望月信亨「新羅義寂の著書並びに無量寿疏」（『浄土学』21、1946）、春日礼智「新羅義寂とその『無量寿経述義記』」（『新羅仏教研究』、山喜房仏書林、1973）
解説：本書は現存しない。

義寂『無量寿経疏』は、最古の「疏」を著した浄影寺慧遠の説に依っていることから、『観経』の「疏」である本書も慧遠の説に則って作成されたと推測される。

『新編諸宗教蔵総録』（『義天禄』）は、本書の書名を「綱要巻」と記述しているが、誤記と考えられる。おそらく伝わる際に、巻数だけが抜けてしまったのであろう。正式名および巻数は、『蓮門類聚経籍録』（『文雄録』）に記されている「綱要一巻」とみなせる。また『永超録』は、無量寿経釈類の項目において「疏三巻　大夫殿目録云、観無量寿経疏三巻、二部、寂法師可勘会之」（『日仏全』1、p.6）と、他の目録には義寂の著述として『観無量寿経疏』三巻があったことを示しているが、望月信亨は『無量寿経疏』の誤伝である可能性を示唆している（望月、1946）。しかし、『仏典章疏目録』（『興隆録』）には「疏一巻」とあり、書名は異なるものの『綱要』と巻数が一致している。この『疏』が『綱要』の異名か、あるいは義寂が『綱要』とは別に「観経疏」を著したのかは不明である。

作成者名：伊藤瑛梨

観無量寿経疏

書名よみ：かんむりょうじゅきょうしょ
書名別名：観無量寿仏経疏、天台観経疏、観経疏
著者名：智顗（？）
著者名よみ：ちぎ
著者名別名：天台大師、天台智者大師、智者大師
著者生没年：538（大同4）-597（開皇17）
成立翻訳年：7c-8c
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正保5（1648、仏教大）
2、元禄10（1697、大谷大・大正大・仏教大、1の後刷りか？）
3、天保5（1834、大正大・東洋大・立正大）
刊本の奥書刊記：1、正保五年（1648）初春日、野田弥兵衛開板
2、元禄十丁丑年（1697）霜月吉日、村上勘兵衛繍梓
3、（未調査）
活字本所載書：『浄全』5、『大正蔵』37（No.1750）、『卍正蔵』33-3
参考文献：佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、1951）
解説：智顗の撰述として伝えられているが、実際は智顗に仮託して天台六祖湛然（711-782）の頃までに作製されたと考えられている。

中国においては法聡、知礼などが智顗の真撰として註釈を施して、天台浄土教が確立された。最澄も『台州録』に智顗の真撰として将来している。

佐藤哲英『天台大師の研究』によると、偽撰とされる理由については、玄奘特有の新訳語が使われていることが挙げられる。随文解釈の部分は浄影寺慧遠の『観経義疏』の文章と50ヶ所の一致が確認され、科段などは慧遠のものとごく僅かの相違しかない。またいわゆる玄義の部分は智顗の『金光明経玄義』、『金光明経文句』、『法華玄義』、『法華文句』などの文章を依用し、それらを接合して作られている。

以上のことから、玄奘以後から湛然の頃までに、慧遠の『観経義疏』の解釈を基調とし、智顗の著作をも依用して、智顗の『観経疏』として天台学徒が作製したものであろう。これは天台教団が、次第に浄土教の影響を受けていく中で要請されて作製されたものと考えられる。

作成者名：曽和義宏

観無量寿経疏

書名よみ：かんむりょうじゅきょうしょ
書名別名：観経疏
著者名：法常
著者名よみ：ほうじょう
著者生没年：567（天和2）-645（貞観19）
成立翻訳年：6c末-7c前半
成立地：中国
巻数：1
刊本所在：なし
散逸文献の文献名出典：『東域伝灯目録』巻上、『長西録』
参考文献：恵谷隆戒『浄土教の新研究』（山喜房仏書林、1976）
解説：法常は、『続高僧伝』によると『摂大乗論』を学び、成実・毘曇・華厳・地論などをも研究していた学僧である。『続高僧伝』には『観経』の注釈書を製作したという記述はないが、『長西録』等には『観経疏』1巻があったことを記している。

凝然の『維摩経菴羅記』巻7によると、浄土を法性土・実報土・事浄土・化浄土に分ける、いわゆる四種浄土説は法常の提唱であり、法常から智顗へ、そして道世へと授けられたものであるという。

法常の『観経疏』はおそらくこの四種浄土説に基づいて、『観経』や阿弥陀仏、極楽浄土を解釈したものであり、阿弥陀仏は化身、極楽は化浄土であるという理解であったと

考えられる。
作成者名：曽和義宏

観無量寿経疏

書名よみ：かんむりょうじゅきょうしょ
著者名：霊裕
著者名よみ：れいゆう
著者名別名：宝山寺霊裕、趙氏
著者生没年：518（神亀1）－605（大業1）
成立翻訳年：6c後半
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『蓮門類聚経籍録』（『文雄録』）上（『日仏全』1）、『仏典章疏目録』（『興隆録』）下（『日仏全』1）、『浄土真宗教典志附録』3（『日仏全』1）
参考文献：牧田諦亮「宝山寺霊裕について」（『東方学報』36、1964）、三輪晴雄「浄影寺慧遠－その教学と義疏について－」（『仏教文化研究』29、1984）
解説：著者の霊裕は浄影寺慧遠（523－592）と同じく、当時の北斉仏教界で権勢を誇っていた合水寺法上（495－580）一門の出身であり、多くの註疏を著した。その著作数は慧遠を優に凌駕しており、慧遠が註した経典については、霊裕もすべて疏を著しているほどである。しかし、それらの著作は現在、散逸しているか断簡を残すのみであり、本書も現存しない。
　本書の内容を知る資料は残っていないが、当時の学僧はこぞって註疏を著しており、互いに弘法の教権を競っていたようなので（三輪論文、1984）、本書にも慧遠とは異なる霊裕独自の『観経』解釈が示されていたものと思われる。なお霊裕の弟子の海雲（？－646）撰『大法師行記』に記されている霊裕の著作活動から鑑みると、浄土教典籍は霊裕が43才から47才の間に著されているので、おそらく本書の成立もその頃でであろうと推測されている（牧田論文、1964）。
作成者名：伊藤瑛梨

観無量寿経疏

書名よみ：かんむりょうじゅきょうしょ
著者名：法位
著者名よみ：ほうい
著者生没年：7c
成立翻訳年：7c
成立地：新羅
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『仏典章疏目録』（『興隆録』）下（『日仏全』1）、『蓮門類聚経籍録』（『文雄録』）上（『日仏全』2）
参考文献：恵谷隆戒「新羅法位の無量寿経義疏の研究」（『日仏年報』25、1960）、深貝慈孝「新羅法位浄土教の研究」（『浄土教論集　戸松教授古稀記念』、大東出版、1987）
解説：本書は現存しない。
　『仏典章疏目録』（『興隆録』）・『蓮門類聚経籍録』（『文雄録』）といった江戸期の目録には本書の名が見られるものの、『新編諸宗教蔵総録』（『義天禄』）・『永超録』・『長西録』といった新羅や鎌倉期の古目録には本書の記載はなく、また本書を引用する典籍も見受けられないことから、法位の著作である『無量寿経義疏』の誤伝である可能性も考えられる。
　『無量寿経義疏』は浄影寺慧遠の思想を中心に、善導および懐感の思想も取り入れていることからして、もし本書が実際に存在していたならば、その内容もおそらく、それら諸師の影響を受けものであったと推測される。
作成者名：伊藤瑛梨

観無量寿仏経疏妙宗鈔

書名よみ：かんむりょうじゅきょうみょうしゅうしょう
書名別名：観経疏妙宗鈔、観経妙宗鈔、妙宗鈔
著者名：知礼
著者名よみ：ちれい
著者名別名：四明沙門、四明尊者
著者生没年：960（建隆1）-1028（天聖6）
成立翻訳年：1021（天禧5）
成立地：中国
巻数：6
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、承応3（1654、立正大）
2、明暦3（1657、立正大）
3、万治2（1659、仏教大・大谷大）
4、元禄3（1690、仏教大、会本）
5、大明成化21（1485、立正大（巻第2、3、5、6のみ現存））
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（巻第2）翁［■■］氏、商鸞母趙氏、段文、張寛、李安、王妙果、岳琮、盧妙通、路妙全、劉妙縁、尚清、劉妙原、牛悟山、孫妙栄、李成、唐妙清、邵敬、韓恵能
（巻第3）比丘悟聡、信官王善、信士汪義、信士汪善、信士騰俊、信女崔妙縁、梅洪、董善恵、信士崔福広、楊妙善、崔善浄、信女楊妙真、信士霍智、信女陳妙聚、信士張勝、信女孫女玉
（巻第5）京都順天府大興県思城坊居住奉仏信女卓氏妙慶応夫主卓福広上同居世、父卓覚海、母楊氏、王氏　発心捨財刊造妙観疏鈔経板第五巻報棲火宅心慕蓮邦以水泡之財祈金剛之体存亡普利恩有均沾賞花池似飢人得食遊宝地如遠客還家、大明成化乙巳（1485）七月吉日刊造
活字本所載書：『大正蔵』37（No.1750）、『卍続蔵』32、『浄全』5
参考文献：望月信亨『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、佐藤成順「元照の『観無量寿仏経義疏』について」（『大正大学大学院研究論集』18、1994）安藤俊雄『天台学論集　止観と浄土』（平楽寺書店、1975）
解説：天台大師の作とされる『観無量寿仏経疏』を注釈したもの。
知礼が活躍した北宋の天台は宗風が乱れ、大師の『観経疏』に対する解釈にも相違が見られるようになった。そこで著者は事相を重視するそれまでの解釈を批判し大師の本意に立ち返ろうと実相論に基づいて大師の『観経疏』を随文解釈した。
　なお慧澄痴空『妙宗鈔講義』などの記述から、この知礼の批判は智円の『観経疏刊正記』の所説に対して加えられたと考えられる。
作成者名：永田真隆

観無量寿仏経義疏

書名よみ：かんむりょうじゅぶつきょうぎしょ
書名別名：観経新書、観経元照疏

著者名：元照
著者名よみ：がんじょう
著者名別名：大智律師
著者生没年：1048（慶暦8）-1116（政和6）
成立翻訳年：11c末期-12c初頭
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、明暦4（1658、竜谷大）
2、寛文12（1672、大谷大・大正大）
3、天和4（1684、立正大）
4、刊年不明（仏教大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』37（No.1754）、『卍続蔵』32、『浄全』5
参考文献：望月信亨『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、佐藤成順「元照の『観無量寿仏経義疏』について」（『大正大学大学院研究論集』18、1994）、福島光哉『宋代天台浄土教の研究』（文栄堂、1995）、佐藤成順『宋代仏教の研究-元照の浄土教-』（山喜房仏書林、2001）
解説：南山律宗の第15祖とされる元照の、天台大師の作とされる『観無量寿仏経疏』に対する注釈書である。本書は浄影寺慧遠にはじまる『観無量寿経』の注釈書に対して、特定の人師に偏ることなく、それらの中の良い解釈だけを選択しつつ編集している。その上で天台宗の正流とされる知礼や山外派の智円の説とも異なる説を提示した。これには浄土教が事相に固執する邪説であるとの批判に対して弁明を試みようとの意図があったと見られる（佐藤1994）。
　また前述の通り、知礼『観無量寿仏経疏妙宗鈔』とは説を異にしたことから、知礼の門下からは非難されることとなり、道因によって本書を非難する『輔正解』が著されるなどした。その一方で戒度は『観経扶新論』を著して元照の『観経』解釈を擁護し、その高風を顕彰している。また戒度は本書を注釈した『霊芝観経義疏正観記』三巻を著して本書を流通させようとした。
　なお本書は法然門下において隆寛、証空、長西によって引用されている。
作成者名：永田真隆

観無量寿仏経疏／観経疏

書名よみ：かんむりょうじゅぶつきょうしょ／かんぎょうしょ
書名別名：観無量寿経疏、観経四帖疏、四帖疏、無量寿観経疏、楷定疏、証定疏、本疏
著者名：善導
著者名よみ：ぜんどう
著者名別名：善導大師、善導和尚、善導闍梨、善導禅師、導和尚、導禅師
著者生没年：613（大業9）-681（永隆2）
成立翻訳年：7c
成立地：中国
巻数：4
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、誓願寺蔵本（1213（建暦3）写、書写者不明）
写本奥書：1、建暦三年太歳癸酉五月七日立筆九月四日
刊本所在：1、鎌倉時代（専修寺蔵）
2、鎌倉期（大谷大）
3、室町期（竜谷大）
4、元禄3（1690、仏教大）
5、元禄7（1694、仏教大）
6、天保3（1832、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、刊記なし
2、刊記なし
3、刊記なし
4、観経散善義一巻、伏願、回此功徳普施法界共生安養済悟法忍、沙門忍澂募刻、元禄庚午冬十月十五日師子谷升蓮社識
5、観経証定疏四巻、伏願、回此功徳普施法界共生安養済悟法忍、元禄甲戌臘月如来成道日、沙門義山募刻
6、無量寿観経四帖疏者、光明大師古今楷定之蘊奥、而聖僧指授之秘賾也、染指浄家法鼎者流、所以不可学習書也。是以吾蓮社忍澂老漢欲資研究功夫之労、元禄年間割会本経、旦上梨棗而置版洛之書坊、以便于弘通、蓋是婆情之至也、然歳月代謝於今弗翅髣髴版之存亡哉、甚者至不知有此一本在焉。夫物之顕晦、雖必有時、而精業氓然可不傷耶。頃日風聞、他家密蔵焉、以故不行于世、因迺使書肆、求覓其所在於遐遥、漸而獲之、遂贖浄財若干、再蔵獅谷法庫、以聊報祖恩、所願回復印刷於当年、無窮弘伝於永世云爾／天保三年歳次壬辰孟夏仏誕日、獅谷白蓮社老隠聖阿謹識
活字本所載書：『浄全』2、『大正蔵』37（No.1753）、『卍続蔵』1-32-4、『真聖全』1
現代語訳書：『聖典意訳　七祖聖教』上（本願寺出版協会、1964）、村瀬秀雄『輪薬善導大師観経四帖書』（常念寺、1977）、広瀬杲『大乗仏典　中国・日本篇』5、『往生論註/曇鸞大師撰　安楽集/道綽禅師撰　観経疏/善導大師集記』（『七高僧傍訳全書』2、四季社、2001）
参考文献：香月乗光「善導大師の観経疏解説」（『浄土宗全書』2巻付録）、藤田宏達『善導』（人類の知的遺産18、講談社、1985）、牧田諦亮『善導』（「浄土仏教の思想」5、講談社、2000）、佐藤成順『善導の宗教－中国仏教の革新』（浄土宗、2006）、柴田泰山『善導教学の研究』（山喜房仏書林、2006）、結城令聞「観経疏に於ける善導釈義の思想史的意義」（『塚本博士頌寿記念　仏教史学論集』、1961）
解説：善導は初唐の長安で活動した浄土教の人師である。はじめ道綽に師事して浄土教を研鑽し、後に長安に出て実際寺や光明寺を拠点として、『阿弥陀経』の書写や浄土変相図の作成、そして龍門石窟の奉先寺龕窟の造営にも携わるなど、念仏の信仰と実践に尽力した僧である。
本疏は善導の著作五部九巻の一つで、『観無量寿経』の注釈書であるため、解義分（本疏）に分類される。内容は玄義分、序分義、定善義、散善義の4巻からなり、「古今楷定の疏」とも言われるように、浄影寺慧遠、吉蔵による『観経』理解を否定し、独自の浄土教理解を打ち出している。善導独自の釈疑としては以下のようなものが挙げられる。全体を五つに分ける五分科説をとること。観仏三昧、念仏三昧の一経両宗説。阿弥陀仏・極楽は報身報土であること。韋提希凡夫論。九品皆凡説。念仏による凡入報土を説くこと。また前十三観を定善、三福九品を散善として、前者を韋提希の要請による随他意、後者を釈尊の意志による随自意とすること。三心と五種正行、『観経』の本意は専ら阿弥陀仏の名号を称えさせること、付属の文によって釈尊の本意を口称念仏であるとみなしたことなどである。とくに浄影寺慧遠説をとりあげて厳しく反論しているが、用語法などで慧遠の影響を受けている面も見られる。
本書は中国浄土教において重視されることはなく、かえって日本の浄土教に大きな影響を与えた。特に法然と本書との出会いが、浄土宗を開宗する契機となったことはよく知

られている。
作成者名：曽和義宏

観無量寿仏経初心三昧門

書名よみ：かんむりょうじゅぶつきょうしょしんざんまいもん
著者名：成時
著者名よみ：じょうじ
著者生没年：？－1678（康熙17）
成立翻訳年：17世紀
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄土十要』3
参考文献：于海波『清代浄土宗著述研究』(巴蜀書社、2009)。
解説：本書は、成時が清の初め、1668年（康熙7）に録輯したもの。成時は呉氏、堅密と号し、智旭の直弟子で、篤く浄土教を修行し、『浄土十要』刊行した者として知られる。
　本書は、『観無量寿経』の13雑想観の「像想観」に基づき、書かれた儀式で、像想観さえ成就すれば阿弥陀仏の他の相が現われると思われるので、観仏入門の重要な方法であるという。
　具体的には、まず、『観無量寿経』を供養し、心を専ら阿弥陀仏に念ずる。また釈迦仏を帰依して極楽清浄世界に生まれることを願う。また釈迦仏が金台に坐る様子を観想することを通じて、極楽及び十方浄土の様子を観ずる。また阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩という西方三聖の相好を観ずることがでる。次には、極楽世界の阿弥陀仏をはじめ、観音菩薩・勢至菩薩らに礼拝して、過去に自分が作った罪を懺悔する。次には、『華厳経』浄行品第7にある「三帰礼拝文」を通して、無上の菩提心を発起する。最後には、阿弥陀仏の白豪を観ずることを説く。本書の最後にこの儀式に関する、簡易な問答がある。
作成者名：肖越

観無量寿仏経図頌

書名よみ：かんむりょうじゅぶっきょうずしょう
書名別名：観無量寿仏経図頌、観経図頌
著者名：伝灯
著者名よみ：でんとう
著者名別名：幽渓伝灯、無尽、有門
著者生没年：1554（嘉靖33）-1627（天啓7）
成立翻訳年：16c後半-17c前半
成立地：中国
巻数：1
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、清代（1616-1911、中国国家図書館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『卍続蔵』1-33-1
参考文献：聖厳「明末における中国の浄土人物及び思想」（『華岡仏学学報』1985）
解説：伝灯は天台の僧侶である。生まれは葉氏、字は無尽、自ら有門と号した。出家してから百松真覚のもとで『法華経』や『楞厳経』を学んだ。万暦15年（1587）に天台山に入り、幽渓の高明寺に住して、天台の祖庭を建立した。そのために、後に世人から幽渓大師と称された。伝灯はこのように天台を研鑽すると同時に、浄土教の発展にも貢献した。著作は『浄土生無生論』、『阿弥陀経略解釈円中鈔』、『浄土法語』、『観経図頌』、『楞厳経玄義』、『楞厳経円通疏』、『性善悪論』、『天台伝佛心印記注』、『天台山方外志』などがある。
　本書は『観経』の文のうち、重要な語句や難解なる語句に簡単な解説をつけ、その上で『観経』の全体像を偈の形で纏めたものである。
作成者名：肖越、趙仲明

帰元直指集

書名よみ：きげんじきししゅう
著者名：宗本
著者名よみ：そうほん
著者名別名：一元、一元宗本、天衣
著者生没年：16c頃
成立翻訳年：1570（隆慶4）
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、明代（1368-1644（？）、中国国家図書館）
2、明崇禎10（1637、中国国家図書館）
3、民国12-民国14（1923-1925、中国国家図書館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『卍続蔵』1-33-2、『帰元直指集』（「近世漢籍叢刊」、中文出版社、東京、1984）
参考文献：望月信亨 『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、劉果宗『中国仏教各宗史略』（文津出版有限公司、2001）
解説：著者の宗本は明の天台の僧侶であった。一元と号し、また天衣とも号する。浙江四明の陳氏の家の生まれ。
　本書は「念仏正信往生」から「行願流通」まで97編によって構成されている。智顗、永明延寿、竜舒、子元、普度などの説も引きながら、専ら浄土往生を求める事理を説く。具体的には不殺生戒、放生等の行を述べ、参禅と浄土の修行の難易を論じ、特に信・願・行を具足することを主張する。また儒教・仏教・道教三教の因果律も引いて、善因が往生往生の福を説いている。
作成者名：肖越、趙仲明

騎上牧童歌

書名よみ：きじょうぼくどうか
著者名：末継智訔
著者名よみ：まっけいちぎん
著者生没年：15c初頭-15c半ば
成立翻訳年：15c半ば
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、成化17（1481、韓国国立図書館、辛丑雉岳山上院庵刊、『寂滅示衆論』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、皇明成化（1481）歳在辛丑、暮春下澣、新刊於雉岳山上院庵、大施主司直劉万山、大施主李長守、護軍高仲賢、（中略、以下開板関係者名の列挙）咸莫同、春非
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『寂滅示衆論』に収録）

参考文献：韓普光「朝鮮・智訔禅師の念仏禅について」(『印仏研』56-1、2007)、金文基「騎上牧童歌研究」(『語文学』39、1980)
解説：本書『騎上牧童歌』の著者末継智訔は、朝鮮時代の禅僧。詳しい伝記が残っていないので、彼の生没年、人物については、わからないことが多い。ただ、朝鮮時代の高僧懶庵普雨、涵虚得通らの法系にある僧侶ということは知られている。
　本書『騎上牧童歌』は末継智訔の『寂滅示衆論』という著作の最後に付加されている詩編である。『寂滅示衆論』は、一切仏・菩薩・祖師は頓悟入門して寂滅の境界に至るが、衆生済度の願力によって此岸へ戻り、衆生と済度する、という趣旨を述べるもの。禅の立場から衆生救済を述べた論と言えよう。『寂滅示衆論』は、このように直接浄土信仰とは関連を持たないものである。一方、付篇である本書『騎上牧童歌』は、『寂滅示衆論』とは異なり、阿弥陀仏への憧憬を繰り返し吐露する文献である。本書は「景機体歌」と呼ばれる形式で綴られている。「景機体歌」とは、新羅・高麗時代の「郷歌」と同様、ハングルの詩を漢字で表記したもの。13から16世紀の朝鮮半島で流行した民謡形式である。本書『騎上牧童歌』は『寂滅示衆論』の思想を、この「景機体歌」という民謡形式で表現したものと考えられる。本書は12章から構成され、菩提心を登し、戒定慧の三学に精進して、寂滅を頓悟するという仏道修行の過程を、牛に乗って進む牧童に例えて歌い上げる。各々の詩章は、「阿弥陀仏、阿弥陀仏」とリフレインして終わる。
　内容的には、特に浄土往生を歌い上げるわけではないが、阿弥陀仏への憧憬のみが突出して表現される。韓普光によれば、指方立相的浄土（いわば浄土の実在化）ではなく、唯心浄土・自性弥陀に基づく念仏禅思想が反映されているようだ（韓普光論文、p.490）。
作成者名：山中行雄

行図

書名よみ：ぎょうず
著者名：道綽
著者名よみ：どうしゃく
著者名別名：道綽禅師、綽禅師、西河禅師
著者生没年：562（河清1）-645（貞観19）
成立翻訳年：575-645
成立地：中国
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『続高僧伝』、『新唐書』
参考文献：野上俊静『中国浄土三祖伝』（文栄堂、1970）、藤堂恭俊・牧田諦亮『曇鸞・道綽』（「浄土仏教の思想」4、講談社、1995）
解説：『続高僧伝』巻20、『新唐書』巻59芸文志による。如何なる内容の書物かは不明。現存しない。
作成者名：曽和義宏

求生行門要出

書名よみ：ぐしょうぎょうもんようしゅつ
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：12c末以降（？）
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、康熙28/乾隆14（1689/1749、韓国高麗大）
刊本の奥書刊記：1、己巳年（1689/1749）直指寺開刊
活字本所載書：『韓国仏教全書』11
参考文献：小野玄妙『仏教の美術と歴史』pp.1213-1214（大蔵出版、1937）
解説：『求生行門要出』という本書のタイトルは、浄土に往生することを求める者がおこなう行の要点というほどの意味であり、本書の意図と内容を言い表している。
　本書は『念仏要門』と『修三密証念仏三昧門』とともに『念仏因由経』の名のもとに編纂されたようである。しかし、『念仏要門』と『修三密証念仏三昧門』は、振虚捌関撰の『三門直指』に全文引用があるが、本書は『三門直指』に引用されておらず、原文が回収できなかった。このため『念仏要門』と『修三密証念仏三昧門』が収録されている『韓国仏教全書』第6巻に収録されなかった。
　しかし、後に高麗大で『念仏因由法門』というテキストが発見され、この中に本書が入っていたので、『韓国仏教全書』の補遺である第11巻に収録された。
　前述のように、本書は浄土往生のための行を説くものであるが、最初に天親の『無量寿経優波提舎願生偈』に依って、恭敬・専称仏名・礼拝・回向の四修法が説かれる。この4つを修すれば、自利・利他ともに具足するという。つづいて「一行三昧法門」という行が説かれる。ここでは『文殊師利所説摩訶般若経』に基づいた称名念仏が説かれる。特徴的なのは、「不観相貌」といって仏の相貌を観ずることなく、ただ称名に専念することを説く。これは、衆生が惑っているため、観行を成就しがたいから、ただ称名に専念するということである。
　3番目に「斎戒観想弥陀仏観音勢至二大士」として斎戒をして身を清め、阿弥陀仏および観音・勢至の二菩薩を観想することを説く。これは『観無量寿経』を典拠として説かれているのだが、先の「一行三昧法門」とは全く別の行であって、いささか奇異な印象を与える。ただし本書の立場としては、この3種の行に優劣をつけているのでなく、往生のための行が3種あるということを呈示しているにすぎないと思われる。
　最後に「念仏者は、身口意の三業を護って称名をするべき」と説き、持戒の重要性を強調する。
　本書の終わりに「牧牛子曰」と朝鮮仏教の再興者である普照知訥（1158-1210、牧牛子は普照知訥の別名）の言葉が引かれるので、本書は、おそらく彼の弟子もしくは彼に影響を受けた後代の人物の作であろうと推定されるが、著者・成立年代ともに不明である。
　その他の関連書誌情報については、『念仏要門』と『修三密証念仏三昧門』の項を参照されたい。
作成者名：山中行雄

現行西方経

書名よみ：げんこうさいほうきょう
著者名：元昱
著者名よみ：（不明）
著者生没年：13c-14c（？）
成立翻訳年：1298（？）
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、韓国国立図書館蔵本（光武4（1900）、書写者不明）
写本奥書：1、嘉靖三十五年丙辰七月日、黄海道海州山神

光寺開板、神光住持乙卯年大禅志淳書、大施主李世傑、法連、大施主比丘性訔、覚熙、書寫大和尚志淳、礼曹維那性衍、刊字一暹、供養主訔、勧化一雲
刊本所在：1、正統13（1448、韓国延世大・高麗大）
2、嘉靖35（1556、韓国嶺南大）
3、康熙49（1710、東国大・韓国国立図書館・高麗大）
4、刊年不明（韓国国立図書館）
刊本の奥書刊記：1、正統十三年戊辰（1448）正月日金山黄獄山直指寺
2、嘉靖三十五年丙辰（1556）七月日黄海道海州山神光寺開板
3、康熙四十九年庚寅（1710）河東双渓寺七仏庵開刊
4、（刊記なし）
活字本所載書：『韓国仏教全書』6
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1983）、韓泰植「韓半島で作られた疑偽経について」（『印仏研』45-1、1996）
解説：『現行西方経』は、海東永州公山の元昱が録したとされているが、『韓国仏書解題辞典』も『韓国仏教全書』も著者は疑わしいとしている。
　大徳2年（1298）正月初八日夜半に元昱が、法堂で『阿弥陀本心微妙真言』を一万遍唱えたところ、楽西という道人が現れる。楽西は、来世の受生処を占うことができると言い、その方法を伝授する。楽西は「南無阿弥陀仏本心微妙真言　才聞於耳　即往生　與諸聖衆　同遊戯如来大智福徳海　一時分付誦持者」という40文字からなる頌を授ける。この頌の文字を一つ一つ個別に木の札のようなもの（原文では柱と書かれているが、詳細は不明）に書き付ける。ただ「仏」という字のみ2個の木札に書かれるので合計41個の木札になる。これらを「浄器」に入れて、仏像の前で跪いて投げる。裏返って字の出なかった札を取り去り、字が出た札だけを集めて再び投げる。これを繰り返して、最後の一枚になった時に出た文字で、後生の受生処を占知する。例えば「仏」が出れば上品上生、「阿」は中品上生といった具合に上記の頌の一文字一文字が来世の行方を占うものとなっている。
　他にも「者」という字が出れば餓鬼界に生まれることになるが、懺悔をすれば下品下生を得る。このように占いで悪い結果が出ても、懺悔・慈心などに精進することによって浄土往生できる、または良い来世になるとする。
　韓泰植によると本書の背景には、新羅時代より始まる「占察法会」がある。このような占を中心にする法会は、地蔵信仰・弥勒信仰を背景にしていることが多いが、本書では阿弥陀信仰を背景とし、その点が珍しい。また1709年には明眼という僧によって、本書を拠り所とした「現行西方道場」が開かれ、70余人が結社した。明眼はまた『現行法会礼懺儀式』という本書に基づいた儀礼書を編纂している。本書については『現行法会礼懺儀式』の項目を参照せよ。
作成者名：山中行雄

現行法会礼懺儀式

書名よみ：げんこうほうえらいせんぎしき
著者名：明眼
著者名よみ：みょうげん
著者名別名：百愚、石室、雪（「品」のしたに「山」）
著者生没年：1646-1710
成立翻訳年：1709頃
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、康熙49（1710、東国大、韓国国立図書館、高麗大）
刊本の奥書刊記：1、康熙四十九年庚寅（1710）河東双渓寺七仏庵開刊（『現行西方経』と合綴本）
活字本所載書：『韓国仏教全書』9
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1983）、韓泰植「韓半島で作られた疑偽経について」（『印仏研』45-1、1996）
解説：本書『現行法会礼懺儀式』は朝鮮時代の禅僧明眼によって著された。明眼は無影の弟子であり、性聡の下でも学んだと伝えられている。明眼は仁祖24年丙戌（1646）七月生まれで65歳で入滅と伝えられており、本書以外にも『百愚随筆』（『韓国仏教全書』9収録）、『般若波羅蜜多心経略疏連珠記会編』（『韓国仏教全書』9収録）などを著作したとされる。
　本書『現行法会礼懺儀式』は『現行西方経』を所依とする儀礼書。明眼は1709年に『現行西方経』を所依経典として、智異山の七仏庵で「現行西方道場」を開き、その時に本書を編纂した（韓泰植論文、pp.206-207）。本書は、「啓請西方三宝」・「受八関斎戒」・「次礼仏懺悔」・「懺悔偈」・「燃臂」・「持念有四種方便」・「四番精進」・「祝願」・「後施食着語」という諸章から構成される。冒頭の「啓請西方三宝」で、「海東朝鮮国某処の沙門某と沙彌某が発誓願し、「現行法会」を開き「秘密之伽陀」を誦し、懺悔し業縁を離れ、念誦によって「楽国」に生まれることを期す」と述べられる。ところが「秘密之伽陀」が一体何を指しているのかは本書には明示されていない。懺悔とは「懺悔偈」という章で説かれる「我昔所造諸悪業、皆由無始貪恚癡、従身語意之所生、一切我皆懺悔」であろう。また「念誦によって「楽国」に生まれることを期す」というが、何を念誦するのかも明示されていない。ところで「四番精進」という章で、「我は今、未だに浄土に登っていない者を、神呪を誦することによって、阿弥陀仏神呪の妙力を承り、浄土に同生させる」と説く。このように本書では、「阿弥陀仏神呪」、「秘密呪」という語が頻出する。先ほどの「秘密之伽陀」とともに、何を具体的に指しているのかが明示されていない。おそらく本書の依拠文献である『現行西方経』中で重要視される『阿弥陀本心微妙真言』を指すのか、もしくは『現行西方経』が教示する占いで使用される「南無阿弥陀仏本心微妙真言　才聞於耳　即往生　與諸聖衆　同遊戯如来大智福徳海　一時分付誦持者」という文句を指しているかもしれない。
　本書の依拠文献である『現行西方経』については本データベースの『現行西方経』を参照されたい。
作成者名：山中行雄

華厳念仏三昧論

書名よみ：けんごんねんぶつざんまいろん
著者名：彭際清
著者名よみ：ほうさいせい
著者名別名：彭二林、彭紹昇、允初、尺木
著者生没年：1740（乾隆5）-1796（嘉慶1）
成立翻訳年：1783（乾隆48）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-9-1
参考文献：中村薫『中国華厳浄土思想の研究』（法蔵館、2001）、黄念祖『華厳念仏三昧論』（北京居士林、2002）
解説：著者は、字は允初、尺木、知帰子と号した。彭際清

とは菩薩戒を受けた時の法名である。江蘇省長州の士族家庭に生まれ、乾隆34（1769）進士となり、支県に選ばれたが、赴任しなかった。宋文森世隆、畢紫嵐奇、周安士夢顔と並び、清代の代表的な禅浄双修の居士とされる。最初は宋明の理学と道教の修練術を学んだが、仏法を聞いてから儒学と道学を捨てて仏法に専念した。浄土教に帰信した原因は、夫人の仏教信仰と、婦人の病身にあるという。彭の浄土思想は袾宏、真可、徳清、旭智らの思想を受けたほか、特に中国浄土教第9祖とされる実賢に私淑したという。「一日十時間の念仏・九時間の観仏・一時間の礼賛」という実修的な念仏修法を生涯に渡って修したという。彼の編集した『無量寿経』（諸漢訳の編集版）は当時の中国浄土教に大きな影響力を持ち、その浄土思想は後の楊文会などに強い影響を与えた。また、『華厳念仏三昧論』1巻は、華厳思想に基づいて浄土念仏法門を解釈する書物で、中国清朝浄土教の代表的な著作である。

多数の著作の中、浄土教系関係の書物として代表的な著作は『無量寿経起信論』3巻、『観無量寿仏経約論』1巻、『阿弥陀経約論』1巻、『一乗決疑論』1巻、『華厳念仏三昧論』1巻、『居士伝』56巻、『善女人伝』2巻などがある。また彼の監修によって『浄土三経』・『省庵法師語録』2巻・『念仏警策』・『西方公据』などが刊行された。更に『浄土聖賢録』9巻も彼の提案によって編纂が始まり、息子の彭希涑によって完成された。

本書は乾隆48年（1783）、彭際清43歳の年に書かれた書物である。『華厳経』の思想に基づいて浄土教の念仏門を解釈するものである。まず念仏には二種あって、一つに普念、二つに専念であるという。普念は『観仏相海経』、『仏不思議境界経』などに説かれているのようにすべての仏を念じることで、専念は『薬師瑠璃光如来経』、『阿閦仏経』、『無量寿経』のように一つの仏のみを念ずることである。これに対し著者は『華厳経』に基づき、一仏を専念することと多仏を念じることは無碍であると説く。即ち華厳思想に基づき、阿弥陀仏を念じることと一仏を念じることは「即自即他、亦専亦普」であるとする。

そして次に5義を示して全経を貫く。まず5義の第1は「念仏法身直指衆生自性門」。如来は一つの大事な因縁を以て、この世の中に来られた。その大事な因縁とは衆生に仏の知見を開・示・悟・入させることである。仏の法身は、衆生の自性と全く同じであり、諸仏の法身を念ずることが自分の本性、即ち仏性を念ずることと同じという。そして第2は「念仏功徳出生諸仏報化門」。仏の功徳は無量であり、法界を尽くして諸々の身を現して、無尽の荘厳を示し、無辺の仏事を作る。そのため、一仏の功徳を念じると、諸仏の報化を生ずるという。第3は「念仏名字成就最勝方便門」。一仏の名号を念じることはもっとも勝れたことで、往生の正因でもある。その理由は一つの如来の名号が法界虚空界と等しいからである。第4は「念毘盧舎那仏頓入華厳法界門」。『華厳経』に説かれている華蔵世界は毘盧舎那仏の世界で、仏教の最高の境界である。すべての衆生は成仏するために、必ず華厳法界に入らなければいけないが、毘盧舎那仏を念じれば、直ちに華厳の法界に入れる。所謂、如来の果地をもって人を導き信解をさせ、念仏三昧に入らせることができるという。第5は「念極楽世界阿弥陀仏円満普賢大願門」。如来の功徳門を成就したければ、必ず普賢菩薩の十種の広大な行願を修すべきである。極楽の阿弥陀仏を念じれば、普賢菩薩の大願を円満できる。これこそが阿弥陀仏を念ずる意味である。結局、5義の全体として、阿弥陀仏一仏を念じることは、諸仏を念じることになり、最高の行となるということを華厳思想と関連させて述べようとしているとみなせよう。

5義を述べた後、問答を設けて自問自答を行う。

作成者名：肖越

西帰直指

書名よみ：さいきじきし
著者名：周夢顔
著者名よみ：しゅうむがん
著者名別名：周安士、思仁、懐西
著者生没年：1656（順治13）-1739（乾隆4）
成立翻訳年：17c後半-18c前半
成立地：中国
巻数：4
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-14-2
参考文献：『仏光大辞典』（仏光出版社、1988）、蔣維喬『中国仏教史』4（上海書店、1989）
解説：著者は中国清代昆山の著名な居士で、自ら懐西を号し、字は安士で、また周安士ともよばれている。大乗経蔵に通達し、浄土教を深く信じた。

本書は中国近世浄土教の代表的な著作『安士全書』の第6である。周安士は衆生の悪行の内、殺業と淫業とがもっとも避けられるべきことであるとして、まず『万善先資集』4巻を著して殺業の戒めを説き、そして『欲海回狂』3巻を書いて淫欲の戒めを示し、また『陰騭文広義』3巻を著して、儒教と仏教の心性をめぐって論を展開し、そして『西帰直指』を著作して、念仏によって西方極楽浄土の往生を求めることを薦めた。その4つの著作は後人によって『安士全書』として一つにまとめられた。彼の浄土思想は、主に浄土経典によりつつ、諸大乗経典にも基づいているようである。また、『西帰直指』の最初に雲栖袾宏の「普勧念仏」を取り上げており、雲栖の思想をうけていることをも明らかである。

本書は4巻に分かれる。第1巻は「浄土綱要」で、浄土経典に説かれる阿弥陀仏の四十八願とその浄土の荘厳、及び念仏によって西方極楽浄土へ往生できることが説かれている。第2巻は「疑問指南」で、主になぜ極楽浄土への往生が必要かということや世間の人々がどうすれば往生できるかなどの十疑を設けて、それに回答する。第3巻は「啓信雑説」で、様々な事例をあげて浄土門を信ずべきと論じる。第4巻は「往生事略」で、主に極楽浄土へ往生した菩薩・高僧・尼僧・王臣・居士・童子・女人・悪趣等の往生伝である。

作成者名：肖越

西斎浄土詩

書名よみ：さいさいじょうどし
著者名：梵琦
著者名よみ：ぼんき
著者名別名：楚石、曇曜
著者生没年：1296（元貞2）- 1370（洪武3）
成立翻訳年：14世紀
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄土十要』8
参考文献：震華『中国佛教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）、『仏光大辞典』（仏光出版社、1988）、望月信亨『中国浄土教理史』法蔵館、1942）、聖厳「明末中国的浄土人物及其思想」（『華岡仏学学報』、1985）。
解説：著者の梵琦は、中国明代の禅僧、また浄土教者で、字は楚石、幼児の字は曇曜。浙江省象山に生まれ。9歳で天寧永祚禅寺で出家、16歳で杭州昭慶寺で具足戒を授けさ

れた。至正17（1357）8月報恩光孝寺の住職を担い、19年（1339）天寧永祚禅寺に隠居し、寺の西側に居を建てて、そこで浄土念仏を専修し、自ら「西斎老人」と号した。同23年に再び永祚禅寺の住職を招請され、後に住職を他人に譲り西斎にて専ら浄土を専修した。洪武3（1370）75歳の時、臨終が近づいていることを予知し、一偈を書して、命終したという。他の著作に『楚石梵琦語録』20巻、『上生偈』、『北遊鳳山西斎』3集、『和天台三聖詩』などがある。

本書は、詩の形を通して、極楽浄土往生の浄土法門を勧める書物である。上巻に懐浄土詩77首、中巻に列名浄土詩108首、下巻に『観無量寿経』に説く16観法に関する22首、化生讃8首、析善導和尚念仏偈8首、懐浄土百韻詩、娑婆苦漁家傲16首、西方楽漁家傲16首を収録する。

懐浄土詩には、阿弥陀仏の32相と80種好、神通力、光明智慧等がすべて我々の心から発生したもので、唯心浄土の立場で、阿弥陀仏、極楽浄土を讃嘆する。

列名浄土詩には、108項目を分けて僧侶から、一般の凡人及び悪人まですべての人々に極楽往生の念仏法門を勧める。

本書は、著者の浄土教の代表的な著作として、智旭（1599 - 1655）の『浄土十要』第8巻に収録されて、後世の中国浄土教にも影響を与えた。

作成者名：肖越

西方確指

書名よみ：さいほうかくし
著者名：常摂
著者名よみ：じょうしょう
著者生没年：不明
成立翻訳年：1643（崇禎16）-1647（順治4）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-15-1
解説：本書は清の常摂が、西方極楽世界の中の覚明妙行菩薩の浄土教に関する所説の法を纏めたものである。疑経に類したものである。清代の有名な居士彭紹升が乾隆38年（1773）に書いた序を付す。この序分には、本書が明末の崇禎16年（1643）の5月28日から清初めの順治4年（1647）の10月2日までの5年間に行われた24回の法会の記録であるという。

内容は、西方極楽浄土は確実に存在することを説き示し、極楽浄土へ往生するために念仏すべきであると説く。覚明妙行菩薩が人々の質問に対して、まず偈で仏教教理や、浄土教の要義等を中心にして説き、その後それらの質問に対して具体的に回答する。極楽浄土へ往生するために、一心に念仏すべきであると説く。体系的な教理はないが、当時の禅浄・儒仏混同一体の仏教の実態を伝えていて興味深い。

作成者名：肖越

西方合論

書名よみ：さいほうごうろん
著者名：袁宏道
著者名よみ：えんこうどう
著者生没年：1568（隆慶2）-1610（万暦38）
成立翻訳年：1599（万暦27）
成立地：中国
巻数：10
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『大正蔵』47
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）、于海波『清代浄土宗著述研究』（巴蜀書社、2009）、周群『袁宏道評伝』（南京大学出版社、1999）
解説：著者の袁宏道は明末の居士、湖広（現湖北）の出身である。字は中朗で、石頭居士と号す。はじめ李卓吾の下で禅を学んだが、晩年に病気をきっかけにして浄土門に帰入する。

本書は、刹土門・縁起門・部類門・教相門・理諦門・称性門・往生門・見網門・修持門・釈異門という10門を建て、各門も10項目を設けて浄土教に関する諸問題を説明するものである。性相円融の思想に基づき浄土教こそが釈迦の教えの中、最も優れた教えであると主張する。そして『華厳経』に基づきつつ、禅の人たちに浄土教を勧めようとしている。本書は『浄土十要』の第10要として収録され、後に張明教が『西方合論標注』という注釈書を著し、広く流布することとなった。

作成者名：肖越

西方直指

書名よみ：さいほうじきし
著者名：一念
著者名よみ：いちねん
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-13-4
参考文献：浄土宗大辞典刊行会『浄土宗大辞典」1974
解説：本書は一念居士が浄土教の初心者のために著した書物である。

上巻では浄土の因地・功果・儀式・願文・弁疑という5つの側面から論述される。「浄土因地」では、『無量寿経』に説く西方極楽浄土の成立について説明する。「浄土功果」では『観経』に説く極楽浄土往生の正因と『無量寿経』に説く往生の功果を論じる。「浄土儀式」では往生するための念仏の修行方法について説く。「浄土願文」では雲栖袾宏の発願文を通して極楽往生の発願を示す。「浄土弁疑」では、『帰元直指』・『浄土十疑論』・『無我論』等の大乗経論を取り上げながら極楽浄土の実在性を論じる。中巻では諸大乗経論を取り上げながら、浄土教の優れる点を説き示す。下巻では、諸大乗経論に説かれる読誦・称名念仏・持戒（口戒・淫戒・殺戒）等、様々な往生方法を紹介している。

作成者名：肖越

西方要決釈疑通規

書名よみ：さいほうようけつしゃくぎつうき
書名別名：西方要決
著者名：基（？）
著者名よみ：き
著者名別名：窺基、慈恩大師
著者生没年：632（貞観6）-682（永淳1）
成立翻訳年：7c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文

写本等の存欠：刊本
活字本
写本
写本所在：1、大阪本泉寺蔵本（室町末期、実悟書写）
写本奥書：1、（奥書なし）
刊本所在：1、浄土教版？（天理図書館蔵）
2、寛永5（1628、大正大・竜谷大）
3、寛永11（1634、群馬県鈴木霊真氏蔵）
4、正保2（1645、竜谷大）
5、延宝9（1681、大正大）
6、元禄7（1694、京都大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、調査中(3、群馬県鈴木霊真氏蔵本と同本か？）
3、寛永拾一年林鐘十六日雖為老眼依為懇望点畢　［■］露形見花押
4、正保二乙酉年（1645）林鐘　大和田九左衛門開板
4、五条橋通扇屋町　丁子屋　西村九郎右衛門板（大和田板の模刻、寛文頃か）
5、于時延宝九歳（1681）辛酉三月春上浣　戸嶌惣兵衛尉彫刻焉（『科西方要決略註』に含まれる本文）
6、（未調査）
活字本所載書：『浄全』5、『大正蔵』47（No.1964）、『卍続蔵』2-12-4、『浄土古秩十書』9
参考文献：浅野教信『講本 西方要決』（永田文昌堂、1993）
解説：本書は、諸経論の説を基に、浄土教義に対する十四種の疑難を挙げ、それに対して通釈し極楽往生を勧める。二乗種不生、念仏別時意説、極楽と兜率の優劣等の疑難と並んで、三階教に対する釈難もある。
　本書を基の撰述とするか否かについては古来から議論が分かれている。偽撰とするのは仁和寺済暹、望月信亨、真撰であるとするのは良忠、基弁らである。
　偽撰の理由としては、中国・朝鮮半島で引用されていないこと、『義天録』に収録されていないこと、基は兜率願生者で浄土教信仰があったとは考えられないこと、新訳経論を引用していないこと、以上の理由が挙げられている。
作成者名：曽和義宏

西方略伝

書名よみ：さいほうりゃくでん
書名別名：往生西方略伝
著者名：遵式
著者名よみ：じゅんしき
著者名別名：懺主、慈雲懺主
著者生没年：964（乾徳1）-1032（明道1）
成立翻訳年：10c末-11c初頭（？）
成立地：中国
散逸文献の文献名出典：『龍舒浄土文』（浄全6、逸文あり）、『楽邦文類』（浄全6、逸文あり）、『唐朝京師善導和尚類聚伝』（『金沢文庫資料全書4、逸文あり）
解説：本書は現存していないが、『楽邦文類』2にその序が載せられている。それによると、33人の往生人についての事跡を顕らかにして、後の諸賢のために示し、みな共に往生することを願う、としている。序には、道安、浄影寺慧遠、智顗、道綽、善導、懐感、慧日、基、澄観の名前が挙げられており、これらの諸師の伝記が収められていたと推測される。
　また『竜舒浄土文』、『唐朝京師善導和尚類聚伝』には、本書の善導伝を引用している。本書の善導伝には、善導が阿弥陀仏の化身であること、五会念仏の創始者であること、善導が念仏すれば仏が口中から出ること、法照が善導後身であることを述べている。善導阿弥陀仏化身説は本書がその典拠であろう。
作成者名：曽和義宏

讃阿弥陀仏偈

書名よみ：さんあみだぶつげ
書名別名：無量寿経奉讃七言偈百九十五行、大経奉讃、奉讃
著者名：曇鸞
著者名よみ：どんらん
著者名別名：曇鸞大師、有魏玄簡大士、神鸞、曇巒
著者生没年：476（承明1）-542（興和4）
成立翻訳年：527-529（大通年間）以降
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大英図書館蔵本（711（景雲2）、書写者不明、敦煌本、S.2723、『敦煌宝蔵』22、『略論安楽浄土義』と合冊、巻首欠）
2、竜谷大蔵本（唐初期、書写者不明、敦煌本、『略論安楽浄土義』と合冊、首尾欠）
3、大原来迎院如来蔵蔵本（1099（康和1）、良忍書写）
4、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、景雲二年（711）三月十九日、弟子張萬及写
2、（奥書なし、巻尾欠のため）
3、康和元年（1099）十二月一日申時於大原報身房書写功畢、同二日移点了、報筆僧薬源、願依此書写功自他求生極楽国矣
4、（奥書なし）
刊本所在：1、正保2年（1645、大正大）
2、延宝5年（1677、仏教大・竜谷大・大谷大・大正大）
3、元禄7年（1694、未調査）
4、明和6年（1769、竜谷大・大谷大・京都大）
刊本の奥書刊記：1、正保二乙酉暦、三条通菱屋町、婦屋林甚右衛門
2、延宝五丁巳九月吉日（『略論安楽浄土義』と合冊。『讃阿弥陀仏偈は延宝5年以前の開版か）
3、元禄七甲戌暦七月吉旦、渡辺十郎兵衛（恵空『讃阿弥陀仏偈文林』に含まれる本文）
4、明和六己酉歳春二月、京醒井通、瑞書堂梓行
活字本所載書：『浄全』1、『大正蔵』47（No.1978）、『卍続蔵』2-乙-1-1
現代語訳書：『聖典意訳　七祖聖教』上（本願寺出版協会、1964）
解説：曇鸞自身の信仰から出された浄土教讃歎の書。その内容は浄土三部経すべてにわたって作られるが、特に十二光仏の讃歎など、『無量寿経』所説の内容を中心としている。
　『略論安楽浄土義』と一連のものとして流通していたようである。『略論安楽浄土義』が鳩摩羅什の著作であるという伝承の影響からか、本書をも鳩摩羅什の著作とする伝承がある。写本3の大原来迎院如来蔵の良忍手択本などが「羅什法師作」としている。
作成者名：曽和義宏

参禅念仏文

書名よみ：さんぜんねんぶつもん
著者名：不明
著者生没年：不明

成立翻訳年：14c以降
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
刊本
刊本所在：1、刊年不明（韓国嶺南大）
刊本の奥書刊記：1、崇禎紀元後戊子年全羅道順天松広寺開板
活字本所載書：『韓国仏教全書』12
参考文献：韓普光「高麗太古普愚禅師の念仏禅について」（『印仏研』53-1、2004）
解説：本書『参禅念仏文』の著者は不明で、成立年代も正確には分からない。

なおかつ、本書の古刊本である韓国嶺南大蔵本にはタイトルもない。実は、この『参禅念仏文』というタイトルは、韓国仏教全書の編者によって付けられたものであって、実際のタイトルが、どのようなものであったかは不明である。

本書は、参究活句・念仏兼誦経往生・念仏要略の三部よりなる典籍である。最初の参究活句では、有名な無門関の第一趙州狗子すなわち趙州が「狗に仏性があるか無いか」と聞かれて「無い」と答えた公案が考察される。この考察自体、無門関を逸脱するものでなく、むしろ禅宗に典型的なものであるといえる。この参究活句は、最後に「仏説決定往生真言」が唐突に引用されて終わる。この参究活句については、後述する。

次の念仏兼誦経往生は、『拔一切業障根本得生浄土神呪』中の一エピソードを改変したもので、『阿弥陀経』の読誦を勧めるもの。

最後の念仏要略では、唯心浄土ならびに自性弥陀仏が説かれる。つまり仏の浄妙法身は一切衆生の心地に偏在しているから、心とはすなわち仏であると云われ、真実念仏をする人は、自性たる阿弥陀を念ずる者であると説かれる。また実際の念仏の方法については、間断なく「阿弥陀仏」の名号を心で見、念仏するのは誰であるのか観察すべきであると云う。すると自性弥陀仏が現前すると説く。このように称名、観仏、観想などと異なる念仏法を説く。

さて、この念仏要略の最後に割注があり「右念仏要略下二文一頌　古太和尚示参禅念仏規式也」と念仏要略の典拠が記されている。古太和尚というのは誤りで、高麗の僧太古普愚（1301-1382）のことである。一方、『示参禅念仏規式』という書は知られていない。ところが念仏要略の前半部は、太古普愚の『示楽庵居士念仏要略』（「太古和尚語録」上巻、『韓国仏教全書』6、p679）というテキストと一致し、後半部は、同じく太古普愚の『示白忠居士』（「太古和尚語録」上巻、『韓国仏教全書』6、p680）というテキストと一致する。

さらに、前述の参究活句の文章は、太古普愚の『答方山居士呉提学況』（「太古和尚語録」上巻、『韓国仏教全書』6、p678）というテキストの文章と非常によく似ている。

以上の二点から、本書『参禅念仏文』は、太古普愚の著したテキストでほとんど占められていると云い得る。

さて、本書中の参究活句・念仏兼誦経往生・念仏要略といった三つのテキストは、相互に関連性をほとんど持たない。とりわけ参究活句には、浄土教と関連するのは、最後に唐突にあらわれる決定往生真言だけであって、公案を考察する箇所は、浄土教と一切関係がない。こういった一貫性のなさの故に太古普愚自身の著作とは、いささか考え難い。したがって彼の影響を受けた後代の人物による編集で、本書が成立したと思われる。

現存刊本に「崇禎紀元後戊子年」という刊行年の記述があるが、崇禎は17年までしかなく、戊子の年は無かった。ともかく刊本は17世紀中期に刊行されたと思われる。

作成者名：山中行雄

三門直指

書名よみ：さんもんじきし
著者名：振虚捌関
著者名よみ：しんきょはつかん
著者生没年：？-1770（？）
成立翻訳年：1769
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、乾隆34（1769、韓国東国大）
刊本の奥書刊記：1、乾隆三十四年己丑（1769）四月日、金麗玉書（中略、以下、施者名列挙）安州隠寂寺開板、移鎮香山普賢寺
活字本所載書：『韓国仏教全書』10
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）
解説：本書『三門直指』の編者、振虚捌関には伝記などが残っておらず、人物の詳細は分からない。本書を始めとする彼の著作から、おそらく禅宗の普照知訥（1158 -1210）の影響を受けた僧で、禅教双修の立場に立つと考えられる。彼の生没年もはっきりしないが、1780年頃には存命とする説がある（『韓国仏書解題辞典』p.193）。しかし、彼の弟子によって編纂された『振虚堂文集』（『韓国仏教全書』10収録）の序文には、彼の死後16年経った乾隆51（1786）に出版されたという記述があり、これに従えば振虚捌関の没年は1770年ということになる。ここでは、後者に従っているが、今後検討の余地はある。

本書は、タイトルが示すように「念仏門」、「円頓門」、「径截門」の3門に分かれる。本データベースに関するのは第1門の「念仏門」だけなので、第2の「円頓門」と第3の「径截門」は簡潔に説明するにとどめる。「円頓門」は、「牧牛子（=普照知訥）成仏論問答」と「義湘師四法界円頌」を引用しつつ、禅宗の立場から華厳思想を解説するものである。「径截門」は、「牧牛子看話決疑問答」と「休休菴坐禅門並精進図説看堂規」等、禅家の修行要諦や儀規に関する文献を収録したもの。

さて本書第1門である「念仏門」は、更に「十種念仏」、「二種念仏」、「四種念仏」、「五種念仏」、「勝行念仏」、「臨終念仏」、「称名礼念先後節次」の7章に分かれる。第1章から第6章まで、諸経典中の各種念仏法が紹介される。すなわち『文殊師利所説般若波羅蜜経』・『無量寿経』・『観無量寿経』・『天親論』・『華厳経賢首品』・『西域祇園寺図』などの諸経典中の念仏法を抄録し、時折、簡素な解説がくわえられている。ちなみに「十種念仏」では『念仏因由経』（この文献については『念仏要門』の項を参照せよ）が全文引用され、「二種念仏」では『修三密証念仏三昧門』（この文献については『修三密証念仏三昧門』の項を参照せよ）が全文引用されている。

第七章「称名礼念先後節次」では、それまでの念仏法の紹介とは大きく異なり、念仏儀礼の順序次第が教示される。すなわち『浄三業真言』・『阿弥陀仏本心微妙真言』・『決定往生浄土真言』など真言・陀羅尼類と『阿弥陀仏讃』・『弥陀因中四十八願』・『懺悔十二仏』などの讃文・願文・懺悔文が、儀礼で読誦されるべき順序で収められている。18世紀の朝鮮浄土教儀礼の一端を伺わせる資料といえよう。この第7章中に収録されている真言や願文の一つ一つに、ハングルによる音写が並記されている。
作成者名：山中行雄

示永昌大君

書名よみ：じえいしょうだいくん
著者名：懶翁恵勤
著者名よみ：らいおうえごん
著者名別名：江月軒
著者生没年：1320-1376
成立翻訳年：14c
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『韓国仏教全書』6 （「懶翁和尚歌頌」に収録）、韓訳大蔵経154、李鍾郁編『懶翁集』（韓国月精寺、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「高麗・懶翁恵勤禅師の念仏禅」（『印仏研』54-1、2005）
解説：本書『示李尚書』の著者懶翁恵勤は、高麗末期に活躍した禅僧。20歳のときに了然禅師のもとで得度し、27歳で元に渡り38歳まで元に滞在した。その後、高麗に戻り、52歳のときには恭愍王に王師に任命されるなど、高麗仏教の指導者的な役割を果たし、57歳で入滅した。懶翁恵勤の生涯については『懶翁和尚行状』（韓国仏教全書6、pp.703-709）に詳しい。
　本書は、永昌大君に授けた偈頌である。短いので全文を以下に引用する。「一念忘時明了了　弥陀不在別家郷　通身坐臥蓮華国　処処無非極楽堂」この偈頌は、一心不乱に念仏すれば、自分が極楽にいること、さらに自分の居る所々が、極楽に他ならないことを覚ると解釈できよう。つまり懶翁の『示諸念仏人』などに見られるような唯心浄土説を本書でも開陳している。懶翁の唯心浄土説については、『示諸念仏人』と韓普光前掲論文を参照されたい。
作成者名：山中行雄

示諸念仏人

書名よみ：じしょねんぶつにん
著者名：懶翁恵勤
著者名よみ：らいおうえごん
著者名別名：江月軒
著者生没年：1320-1376
成立翻訳年：14c
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『韓国仏教全書』6 （「懶翁和尚歌頌」に収録）、韓訳大蔵経154、李鍾郁編『懶翁集』（韓国月精寺、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「高麗・懶翁恵勤禅師の念仏禅」（『印仏研』54-1、2005）
解説：本書『示諸念仏人』の著者懶翁恵勤は、高麗末期に活躍した禅僧。20歳のときに了然禅師のもとで得度し、27歳で元に渡り38歳まで元に滞在した。その後、高麗に戻り、52歳のときには恭愍王に王師に任命されるなど、高麗仏教の指導者的な役割を果たし、57歳で入滅した。懶翁恵勤の生涯については『懶翁和尚行状』（韓国仏教全書6、pp.703-709）に詳しい。
　本書は、念仏者に対して自性弥陀唯心浄土を説く偈頌。本書は念仏を勧請する短い文献であるが、いささか難解な言い回しが多い。本書は、二六時中、自性弥陀が何処にいるのかを思念し続けると、念じていることすら忘れる時が来て、その時に弥陀が顕現すると言い、また弥陀を念じ続けると、ある時、東と西が一毛も離れていないことに気づく、とも言う。つまり自分の内にこそ弥陀が存することを念じ体得すれば、西方浄土は東から離れていない、つまり、どこか遠いところにあるのではないと悟ると解釈できよう。さらに阿弥陀仏が何処にいるのかを思念し続けると、身体から常に紫金光を発するようになる、とも言う。これもまた弥陀は自らの内に存するということを体得し、自性阿弥陀をこの世で顕現せよと言っていると解釈できよう。ちなみに、この「阿弥陀仏が何処にいるのかを思念し続けると、身体から常に紫金光を発するようになる」という偈頌は、懶翁恵勤が妹に宛てた『答妹氏書』にもほぼ同形で登場する。韓普光は『答妹氏書』からこの偈頌が引用されたとする（韓普光、前掲論文、p.518）が、両文献の成立年代はわかっていないので、韓普光の根拠は不明。
　本書は、『懶翁和尚語録』（『韓国仏教全書』6 ）に収録されている。『懶翁和尚語録』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.130-141並びに『韓国古書総合目録』p.116を参照されたい。
作成者名：山中行雄

釈観無量寿仏経記

書名よみ：しゃくかんむりょうじゅぶつきょうき
書名別名：観無量寿経記
著者名：法聡
著者名よみ：ほうそう
著者生没年：9c
成立翻訳年：8c-9c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、法明院蔵本（1077（承保4）、昌暹書写）
2、延暦寺天海蔵蔵本（1179（治承3）、書写者不明）
写本奥書：1、承保四年（1077）三月十七日午時以大厳房／本書之了僧昌暹／同十八日夜点了同廿二日交了（藤堂論文に基づく）
2、治承三年己亥（1179）正月廿日黙了／元和十三年歳（818）次丁酉六月己未朔十八日景子天台老僧行満於禅林寺偶見此本親自手札敬法重人古之常道聡公久於毘壇同聴一宗相承覩物思人悲喜交至満黍承末学覩茲記文天台妙観冷然可識古人有言智人知智蛇自識蛇上品真乗一念即足依正因果誰知一如三千空仮出自一家後学覩之可為乗種信謗之人亦如不軽終不唐捐願聞妙観耳老僧満記百年之後並疏及記入仏隴蔵留伝也／唐大中十二年（858）三月二十三日於台州開元寺揚老宿院抄過経生僧周静／二十五日勘過日本比丘珍記／比丘円珍敬同先輩高願永永興持大師妙教二十八日点過記之四月一日已前更看過珍記／本記云本云以御蔵本書了云云康平六年（1063）四月十七日午尅写了（藤堂1979による）
刊本所在：1、享保12（1727、大正大・竜谷大・大谷大）
2、享保20（1735、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、元和十三年歳（818）次丁酉六月己未朔十八日景子天台老僧行満於禅林寺偶見此本親自手札敬法重人古之常道、聡公久於毘壇同聴一宗相承覩物思人悲喜交至、満季承末学覩此記文、天台妙観冷然可識、古人有言智人知智蛇自知蛇、上品真乗一念即足依正因果誰知一如三千空仮出自一家後学覩之可為乗種、信謗之人亦如不軽終不唐捐願聞妙観耳、老僧満期百年之後並疏及記入仏隴蔵留伝也／唐大中十二年（858）三月二十三日於台州開元寺楊老宿

院抄過経生僧周静、二十五日勘過日本比丘珍記、比丘円珍敬同先輩高願永永興持大師妙教二十八日点過記之、四月一日已前更看過珍記
2、（未調査）
活字本所載書：『卍続蔵』32、『浄全』5
参考文献：藤堂恭俊「わが国に遺存する唐・宋代浄土教典籍を中心とした日中交渉の資料八題」（『鷹陵史学』5、仏教大学歴史研究会、1979）
解説：天台大師の作とされる『観無量寿経疏』を注釈したものであり、奥書によると行満が元和13年（818）に禅林寺で本書を見ているので、これ以前の成立ということがわかる。内容は天台『疏』の全文を注釈したものではなく、必要に応じて浄影寺慧遠や善導の釈を紹介しながら解説を加えている。
　著者の法聡は妙楽の弟子として知られるが詳細は不明。なお本書は中国においては早くに散逸しており、義通や知礼も本書を知らないが、日本へは円珍によって天安2年（858）12月に将来され、浄土宗では良忠が『決疑鈔』や『伝通記』などに本書を引いている。
作成者名：永田真隆

釈浄土群疑論

書名よみ：しゃくじょうどぐんぎろん
書名別名：群疑論、決疑論、浄土群疑論
著者名：懐感
著者名よみ：えかん
著者生没年：640（貞観14）-701（大足1）
成立翻訳年：681（永隆2）-701（大足1）
成立地：中国
巻数：7
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大英図書館蔵本（書写年不明、書写者不明、敦煌本、S2663、『敦煌宝蔵』22）
2、七寺蔵本（1175（承安5）-1180（治承4）、書写者不明、巻第二のみ）
3、大正大蔵本（1608（慶長13）-1616（元和2）、桑誉了的書写）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
3、増上寺中興伝灯仏子源誉 花押
刊本所在：1、建長2（1250、大東急文庫、第4巻および第3、第5、第6、第7巻の一部を欠く）
2、元徳2（1330、禅林寺）
3、寛永3（1626、未調査）
4、宝永2（1705、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、建長二年庚戌（1250）季夏日、願主比丘往成
2、元徳二年（1330）四月 日摺写校点畢、為興隆仏法贈末代学徒専後見行者必憫志趣矣、黒谷末流沙門真恵
3、（未調査）
4、今依延応寛元建長印本及古徳書写数本以為校讐黜訛従正新成一本、若其有疑則闕焉而俟後賢之是正耳、宝永二歳次乙酉（1705）十二月八日、洛東華頂釈義山書
活字本所載書：『浄土古逸十書』、『浄全』6、『卍続蔵』2-12-3、『大正蔵』47（No.1960）
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』（法蔵館、1978）、金子寛哉『『釈浄土群疑論』の研究』（大正大学出版会、2006）、村上真瑞『『釈浄土群疑論』の研究』（建中寺、2008）
解説：善導の弟子である懐感が、浄土教の諸問題について、121の問答を設けてそれらの問題に答えている。各々の問答において、諸師の解釈を多数紹介しており、中には現存しない注釈書に説かれたとみられる解釈も存在し、隋唐代の浄土教理解を知る上でも重要な書である。懐感はこの書を完成せずに没したため同門の懐惲が完成させたとされる。
　懐感の思想については、もと法相宗の学僧でのち善導から浄土教を習学したという懐感の経歴から、本書を唯識思想の観点から浄土教を理解しているとする説と、玄奘、基らの法相教学の影響を受けつつも、それらに対して善導教学の立場に立った浄土教理解をしているという説がある。
作成者名：曽和義宏

修三密証念仏三昧

書名よみ：しゅうさんみつしょうねんぶつざんまいしゅうさんみつしょうねんぶつざんまい
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：12c-13c（？）
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、康熙28/乾隆14（1689/1749、韓国高麗大）
2、乾隆34（1769、韓国東国大）
刊本の奥書刊記：1、己巳年 （1689/1749）直指寺開刊
2、乾隆三十四年己丑（1769）四月日、金麗玉書（中略、以下、施者名列挙）安州隠寂寺開板、移鎮香山普賢寺
活字本所載書：『韓国仏教全書』6
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、小野玄妙『仏教の美術と歴史』pp.1213-1214（大蔵出版、1937）
解説：『修三密証念仏三昧』の著者は不明である。本書は、『念仏要門』と『求生行門要出』とともに『念仏因由経』の名のもとに編纂されたようである。ところで『念仏要門』には「普照禅師述」という記述があり、これが正しければ、『念仏要門』は12世紀中期から13世紀初期の間に書かれたことになる。したがって『修三密証念仏三昧』の成立も、この年代から大きくずれることはないはずだが、『念仏要門』の著者には疑いがあり、結局成立年代を決定することはできない。
　本書は、念仏の二種相を説く、260余字程度の非常に短い教典である。二種の念仏の一つは有相念仏、もう一つは無相念仏である。有相念仏から説明すると、数珠を持ちながら念仏一回ごとに数珠を繰っていく念仏である。この念仏を間断なく一日一夜あるいは七日七夜続ければ、阿弥陀仏に見えることができ、往生することができるというものである。一方、無相念仏とは、出入息観を行いながら、阿弥陀仏に精神を集中するものである。無相念仏により、煩悩を鎮め、信心を増し、不退転の位を速やかに得ることができるとする。注記すべきは、無相念仏によって往生ができるかどうかは書いていない点であろうか。無相念仏による往生について本書は全く触れていない。
　このような有相・無相念仏の特徴から分かるように、無相・有相という語が使われているにも関わらず、唯識とは全く関係がない。本書中にも有相・無相の定義のようなものは記されていない。ただし、本書を全文引用している振虚捌関の『三門直指』には「心は念仏の体を為し、口は念仏の相を為す。」というような文章があるので、おそらく本書中の有相・無相の区別は、この『三門直指』の文章と共通するものと思われる。つまり称名念仏は口で仏名を唱

えるから、念仏の相を有する「有相念仏」であり、一方称名の伴わない念仏は、念仏の相を有しないから「無相念仏」ということになろう。
　本書は、後に『念仏要門』とともに振虚捌関の『三門直指』に入れられた。その他の関連書誌情報については、『念仏要門』の項を参照されたい。
作成者名：山中行雄

集諸経礼懺儀

書名よみ：しゅうしょきょうらいさんぎ
書名別名：集諸経礼懺偈文
著者名：智昇
著者名よみ：ちしょう
著者生没年：7c-8c
成立翻訳年：7c-8c
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、河内長野金剛寺蔵本（12c、書写者不明）
2、檀王法林寺蔵本（12c、美福門院得子書写）
3、名古屋市七寺蔵本（1177（安元3）持門房）
写本奥書：1、一交了
2、奥書なし
3、安元三（1177）四月一日午時許書写畢筆師持門房、一交了、栄芸
刊本所在：1、各種刊本大蔵経
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1982）
参考文献：羽塚堅子「集諸経礼懺儀之研究」（『真宗研究』28、1943）、上杉智英「七寺蔵『集諸経礼懺儀』巻下の系譜」（『浄土学』44、2007）、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『集諸経礼懺儀』巻下（2010）
解説：撰者の智昇（生没年は不明）は律に明るく、また『開元釈教録』と『続集古今仏道論衡』などを撰したことからも、道宣（596-667）の学問を継いでいることがわかる。本書の成立年代はも不明であるが、智昇は開元18年（730）に『開元釈教録』20巻を編集し、その中に本書が著録されているので、それ以前に撰述されたようである。
　巻上は題名にあるとおり、大蔵経中の諸経典から集めた偈文や、それ以前の儀礼文献（特に三階教の『七階仏名経』）からも多く取り入れ、さらに道教の影響が強い『三厨経』をも交えて、自ら作った礼讃文も加えて新たに浄土教の儀礼に用いるべく、整理配列したものである。巻下は善導（613-681）の『往生礼讃偈』の全文をそのまま載録しているが、流布本の『往生礼讃偈』よりは古形をとどめていると思われる。
作成者名：斉藤隆信

受持阿弥陀仏経行願儀

書名よみ：じゅじあみだぶつきょうぎょうがんぎ
著者名：成時
著者名よみ：じょうじ
著者生没年：？-1768（乾龍33）
成立翻訳年：18c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄土十要』3
参考文献：于海波『清代浄土宗著述研究』（巴蜀書社、2009）
解説：本書は、成時が清朝の初め、康熙7年（1668）に録輯したものである。成時は俗姓呉氏、堅密と号し、智旭の直弟子で、『浄土十要』刊行した者として知られる。
　本書は、智旭の『阿弥陀経要解』に基づき、西方極楽往生のため、礼拝・懺悔・発願し称名念仏するための行儀を記した書物である。その中、『阿弥陀経要解』に阿弥陀の名号は万徳を備えるので、称名念仏以外は必要ないという教説に基づき、一日乃至七日一心不乱することを勧める。同じく成時の録集した『観無量寿仏経初心三昧門』とともに『浄土十要』の第三として収録されている。
作成者名：肖越

浄土旨訣

書名よみ：じゅどしけつ
著者名：為霖
著者名よみ：いりん
著者名別名：道霈
著者生没年：1615（万暦43）- 1702（康熙41）
成立翻訳年：1681（康熙20）
成立地：中国
巻数：1
漢和：和文
漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-14-1
参考文献：荒木見悟『中国心学の鼓動と仏教』（中国書店、1995）。震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）、『仏光大辞典』（仏光出版社、1988）、望月信亨『中国浄土教理史』法蔵館、1942）。
解説：著者は明末清初の曹洞僧。福建建安の人。俗姓は丁。字は為霖、旅泊・非家叟と号した。法名は道霈という。14歳で白雲寺に出家し、永覚元賢に参じた。順治7年(1605)、鼓山の元賢のもとではじめて印可される。同14年鼓山の首座として乗払し、翌年元賢のあとを継いで開堂した。康熙41年(1702)寂、88才。
為霖には本書の他にも『続浄土生無生論』1巻、『仁王般若経合疏』3巻 など、著書は30種以上に達している。
　本書は、問答の形で、禅浄双修の立場で浄土往生の事を勧める書物である。温陵龔岸斎居士請示修浄業法語（8則）、答岸斎居士浄土八問、浄土普説、示徳彰禅人、普勧念仏文、普勧念仏放生文、重刻王龍舒居士浄土文序、善導和尚念仏偈八句句各一首、示念仏偈など16項目から構成されている。その中、唐の善導のことをのべたものは、中国近代においては非常に独特なものである。
作成者名：肖越

小阿弥陀経科

書名よみ：しょうあみだきょうか
著者名：智昭
著者名よみ：ちしょう
成立地：不明
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『大正蔵』55（No.2183）、『日仏全』1）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『新編諸宗教蔵総録』（『義天録』）の記述から1巻本であったことがわか

る。
作成者名：永田真隆

小阿弥陀経義記

書名よみ：しょうあみだきょうぎき
著者名：義想
著者名よみ：ぎそう
著者名別名：義相、義湘、浮石尊者、義持、海東華厳初祖、円教国師
著者生没年：625（武徳8）-702（嗣聖19）
成立翻訳年：7c
成立地：新羅
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『大正蔵』55（No.2183）、『日仏全』1）
参考文献：八百谷孝保「新羅僧義湘伝考」（『支那仏教史学』3-1、1939）、金知見「義相の法諱孝-海東華厳の歴運をめぐって-」（『韓国仏教学SEMINAR』4、1990）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『新編諸宗教蔵総録』（『義天録』）の記述から1巻本であったことがわかる。
　著者の義想は7世紀の新羅僧。『宋高僧伝』や『三国遺事』などに伝記が残っているが、それらは出自や入唐における経緯などで伝歴が異なるためとくに注意が必要である。
作成者名：永田真隆

小阿弥陀経疏古迹記

書名よみ：しょうあみだきょうこせきき
著者名：太賢
著者名よみ：たいげん
著者生没年：8c
成立翻訳年：8c
成立地：新羅
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『大正蔵』55（No.2183）、『日仏全』1）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『新編諸宗教蔵総録』（『義天録』）の記述から1巻本であったことがわかる。
　著者の太賢は新羅の人。唯識を究め、常に著述を事とした。主な著作に『菩薩戒本宗要』1巻、『梵網古迹折衷』5巻などがある。
作成者名：永田真隆

小阿弥陀経疏

書名よみ：しょうあみだきょうしょ
著者名：遁倫
著者名よみ：とんりん
著者名別名：道倫
著者生没年：7c-8c
成立翻訳年：7c-8c
成立地：新羅
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『大正蔵』55（No.2183）、『日仏全』1）
参考文献：揚白衣「新羅の学僧道（遁）倫の『瑜伽師地論記』の研究」（『東洋学研究』106、1984）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『新編諸宗教蔵総録』（『義天録』）の記述から1巻本であったことがわかる。
　著者の遁倫は唐代の新羅僧。海東興輪寺に住し『瑜伽師地論記』20巻を著すなど唯識に優れていた。
作成者名：永田真隆

小阿弥陀経疏

書名よみ：しょうあみだきょうしょ
著者名：元舎
著者名よみ：がんしゃ
成立地：不明
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『大正蔵』55（No.2183）、『日仏全』1）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『新編諸宗教蔵総録』（『義天録』）の記述から1巻本であったことがわかる。
　著者の元舎に関しては詳細不明。
作成者名：永田真隆

小阿弥陀経鈔

書名よみ：しょうあみだきょうしょう
著者名：智首
著者名よみ：ちしゅ
著者名別名：皇甫氏（俗姓）
著者生没年：566（天和1）-635（貞観9）
成立翻訳年：6c後半-7c前半
成立地：中国
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『大正蔵』55（No.2183）、『日仏全』1）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『新編諸宗教蔵総録』（『義天録』）の記述から1巻本であったことがわかる。
　著者の智首は北周の人。弘福寺に住し四分律宗第8祖とされた。主な弟子に道宣がいる。
作成者名：永田真隆

小阿弥陀経新疏指帰

書名よみ：しょうあみだきょうしんしょしいき
著者名：仁岳
著者名よみ：じんがく
著者名別名：浄覚
著者生没年：992（淳化3）-1064（治平1）
成立翻訳年：11c
成立地：中国
巻数：2
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『大正蔵』55（No.2183）、『日仏全』1）
参考文献：大松博典「宋代天台学と浄覚仁岳」（『印仏研』35-2、1987）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『新編諸宗教蔵総録』（『義天録』）の記述から2巻本であったことがわかる。さらに目録の記述からすると、巻末には『小阿弥陀経新疏指帰科』が付加されていたようである。
　著者の仁岳は宋代の僧。四明知礼の門下にありながら師の説に反駁したことで知られ『仏祖統紀』には「諸師雑伝」

に加えられている。
作成者名：永田真隆

小阿弥陀経西資鈔

書名よみ：しょうあみだきょうせいししょう、しょうあみだきょうさいししょう
著者名：智円
著者名よみ：ちえん
著者名別名：法慧大師、無外、孤山智円、中庸子潜夫、徐氏（俗姓）
著者生没年：976（開宝4）-1022（乾興1）
成立翻訳年：10c-11c
成立地：中国
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『大正蔵』55（No.2183）、『日仏全』1）
参考文献：末広照純「孤山智円の儒仏道三教観」（『天台学報』24、1982）、金井峻純「孤山智円の三教観」（『天台学報』30、1988）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『新編諸宗教蔵総録』（『義天録』）の記述から1巻本であったことがわかる。さらに目録の記述からすると、巻末には『小阿弥陀経西資科』が付加されていたようである。
　著者の智円は杭州銭塘の人。北宋代の天台宗山外派の僧。山家派に属する知礼らと宗学や法系上の問題で対立し、盛んに宗学上の論争を繰り広げる一方、儒教や道教をも学び、儒・仏・道三教の融和統合を説いた。
作成者名：永田真隆

浄業初学須知

書名よみ：じょうごうしょがくしゅち
著者名：悟開
著者名よみ：ごかい
著者生没年：？-1830（道光10）
成立翻訳年：1825（道光5）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：（欠?）
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：著者の悟開は蘇州の人。俗姓は張氏で、字は豁然。雲水道人と号して、清末の浄土教者として知られる。悟開には、本書の他に『念仏百問』、『浄業知津』等の浄土教関係の著作がある。
　本書は、過光5年（1825）春、蘇州霊巌山のふもとの宝蔵庵で在家信者のために述べた浄土教の入門書である。光緒8年（1882）に刊行された。その主旨は、当時の禅浄双修の観点と違い、いわゆる純粋無雑の念仏を勧める。『阿弥陀経』を中心して読誦すべきこと、専念に阿弥陀仏の名号を称えるべきことが勧められている。それと同時に戒律を守るべきことも説かれる。最後の付録としては『古崑摘録』と題して、「徹悟禅師念仏用語」等のそれ以前の浄土教諸師の重要な論説を紹介している。
作成者名：肖越

浄業知津

書名よみ：じょうごうちしん
著者名：悟開
著者名よみ：ごかい
著者生没年：？-1830（道光10）
成立翻訳年：19c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-14-4
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：悟開は蘇州の人。俗姓は張氏で、字は豁然。雲水道人と号して、晩年に霊巌のふもとにある宝蔵庵に住したという。清末の浄土教者として知られる。
　本書は、悟開が道光9年（1829）に在家女性唐貞のために持戒称名念仏の要義を解明したものである。世間の苦と極楽の楽を比較しながら、念仏による極楽往生を勧める。念仏の実践方法として眼を閉じて念仏すれば心が散乱しにくいこと、また「即念即聴・即聴即念」と述べ、自らの称名の声を耳に聞くこと、また、「南無阿弥陀経」という六字名号と「阿弥陀仏」という四字名号のいずれも効果は一緒であることが説かれる。更に、40巻『華厳経』の最後にある「普賢菩薩行願品」に説かれている礼拝・懺悔等の儀式も勧める。巻末には、「念仏往生浅近」・「念仏進一解」・「念仏須戒殺」を付す。本書には、当時儒教・仏教混同の特性も見られる。悟開には、本書の他にも『念仏百問』等の浄土教関係の著作がある。
作成者名：肖越

称讃浄土経疏

書名よみ：しょうさんじょうどきょうしょ
著者名：靖邁
著者名よみ：せいまい
著者生没年：不明
成立翻訳年：650（永徽1）以降
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『東域伝灯目録』、『安養集』
参考文献：柴田泰山「靖邁『称讃浄土経疏』について」（『印度哲学仏教学』19）
解説：靖邁は、『宋高僧伝』のよると、玄奘の翻訳活動に参加し、『古今訳経図紀』を著した僧である。『称讃浄土仏摂受経』は玄奘によって永徽1年（650）に翻訳されたと伝えられているので、本書はそれ以降の成立と考えられる。
　本書は現存しないが、『安養集』に引用されている。その内容は浄土の荘厳に関するものである。逸文内では『無量寿経』、『仏地経論』、『無量寿経論』、『維摩経』が引用されている。とくに靖邁の浄土理解において『仏地経論』が大きな影響を与えているものと考えられる。
作成者名：曽和義宏

浄修捷要

書名よみ：じょうしゅうしょうよう
書名別名：五念簡課
著者名：夏蓮居
著者名よみ：かれんきょ

著者名別名：夏継泉、溥斎、渠園
著者生没年：1884（光緒10）-1965（中華人民共和国17）
成立翻訳年：20c
成立地：中国
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄修捷要』（北京居士林、2000）
解説：夏蓮居は中国現代浄土教の著名な居士として知られている。清朝雲南省の提督夏辛酉の長男として生まれ、山東省鄆城に住した。本名は夏継泉、字は溥斎で、渠園と号す。中年から仏道に入り、名前を夏蓮居と変えた。20世紀中国の著名な仏教学者で、「南梅北夏」（南には梅光羲、北には夏蓮居）と尊称されている。民国1年（1912）、仏友梅光羲（当時山東省高等検察庁検察長）とともに当時の著名な浄土教の僧侶明慧のもとで仏教に帰依して受戒した。

本書は天親の五念門と夏蓮居自身が合糅編集した『仏説大乗無量寿荘厳平等覚経』に基づく礼拝文である。香賛・32礼拝文・無量寿仏賛・発願文という4つの部分に分けられている。

まず序文において本書執筆の主旨を述べ、浄土門は易行であるが非常に信じがたいもので、もし浄土の「教海」を探らなければ、その真髄が分からないとしている。「教海」とは『無量寿経』を始めとする「浄土三部経」のことであるが、当時の中国の仏教界では、主に羅什訳の『阿弥陀経』のみが読まれており、それよりも詳細に翻訳された玄奘訳を読んでいる者はかなり少ないという現実があった。また『無量寿経』にも5訳があるが、内容的に相違も大きく、理解が大変であることから、それらを読むことさえ殆どなされていない状況であった。そのために夏蓮居は5訳に基づき『仏説大乗無量寿荘厳平等覚経』を編集した。そしてそれをもとにして、初機の者のために簡単な修行のテキストとして作成したのが本書である。

本文は主に32礼賛文の部分を中心とする。夏蓮居は各礼拝文に基づいて礼拝する間に、天親の讃嘆・観察・発願・回向という五念門の他の4つと四修を修すことになるという。

礼拝文は浄土経典に基づき理と事の二つの方面から阿弥陀仏とその浄土を讃嘆している。事としては阿弥陀仏の前身としての法蔵菩薩の菩薩行、及び阿弥陀仏の功徳、その浄土、名号とその名号を称えることの功徳などを讃嘆する。理としては「仏は心により生ず。心は仏により現ず。全ての仏は心であり、境の他には心無し。他のものすべてが即ち自性である。名号はまさにその自性を顕す。そして六字名号は万法をすべて統括し、一門が普門であり、全ての事は即ち理であり、全ての妄想は真に帰す。声声が自己を醒めさせ、念念は本尊を離れず」などといったことを讃嘆する。

このように本書は華厳思想に基づいて浄土教を理解するのであるが、その一方、密教の影響もみられる。例えば第12礼賛文では「顕密は一体なり、身と土は二にあらず。称名と持咒とは異なることなし。教主は即ち本尊であり、大日と遮那とは同じく光・寿に帰す。華蔵・密厳は極楽に離れず。竪にして三際に窮し、横にして十虚を遍す」を説く。ここに密教と顕教の融合がみられるが、これは現代中国浄土教の一つの特徴と言える。即ち、顕教の礼拝・称名と密教の身・口・意という三密を統合することによって、顕と密とは一体となると説くのである。
作成者名：肖越

清珠集

書名よみ：しょうじゅしゅう
著者名：幻空治兆
著者名よみ：げんくうじちょう
著者生没年：19c
成立翻訳年：1870
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、同治9（1870、韓国国立図書館）
刊本の奥書刊記：1、歳庚午仲（1870）秋浄願社活印
活字本所載書：『卍続蔵』2・15・1、『韓国仏教全書』11
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）
解説：本書『清珠集』の編者幻空治兆の伝記は残っておらず、彼の生没年などは不明である。しかし本書の序文から、幻空治兆は阿弥陀信仰を行ずる「浄願社」を信徒数十人とともに結社したことが知られる。同治9年版もこの浄願社によって刊行された。

本書『清珠集』に付されている幻空治兆の「自序」によると、本書は、この浄願社が依って立つべき規則あるいは基本原則を示すために編纂されたようである。本書では「自己仏」・「秘密法門」・「当念往生」・「往生十易」・「浄土十勝」といった浄土教および仏教全般にわたる項目が大凡200ほど列挙され、それら項目には簡素な解説が付されるという構成が採用されている。すなわち、これらの項目と解説が、浄願社が依るべき基本原則として本書中に呈示されているといえよう。諸項目とその解説は、すべて浄土教典籍から収集されたものである。引用される典籍は、『浄土十疑論』・『念仏三昧宝王論』・『往生論』・『安楽集』・『浄土或問』・『楽邦文類』・『礼念弥陀道場懺法』など多岐に渉る。

本書の跋文に「幻空老人、抄録浄土要語一百二十則」と書かれており、これを受けて『韓国仏書解題辞典』（p.216）は、本書『清珠集』は浄土要訣120則を叙述しているとする。ところが本書に収められている項目の数は、明らかに200に及んでいる。項目が後で付加された可能性もあるが、現存する資料からは判断を下し難い。
作成者名：山中行雄

浄土往生伝

書名よみ：じょうどおうじょうでん
著者名：戒珠
著者名よみ：かいしゅ
著者生没年：985（雍熙2）-1077（熙寧10）
成立翻訳年：1064（治平1）
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、慶安4（1651、竜谷大・大谷大・大正大・京都大）
刊本の奥書刊記：1、此伝也渡此土久焉、未見板行肆行世希有焉、適於南京唐本一部与頑魯、請城南僧羊如上人、俾加和点所開板也、時慶安四年仲春吉辰
活字本所載書：『大正蔵』51（No.2071）、『卍続蔵』135、『続浄』16
参考文献：飛鳥井義天「浄土往生伝（戒珠）の一考察」（『真宗学報』20、1937）、塚本善隆「日本に遺存せる遼文学と其の影響」（『日支仏教交渉史研究』1944、『塚本善隆著作集』6、1974）
解説：戒珠は北宋長楽の出身で、子光の弟子となって天台

や禅を修め、93歳の高齢で没した。本書はその序文にあるように、梁の『高僧伝』以降に編纂された12種の僧伝から、計75人の浄土往生者（正伝はすべて出家僧）を選び三巻にまとめた往生伝である。上巻は西晋から北周までで正伝19人附伝12人を、中巻は陳から唐までで正伝20人附伝4人を、下巻は唐から北宋まで正伝17人附伝3人をそれぞれ収めている。各伝に記載事項の相違や加減はあるが、概ね出自・出家以前・出家・平生の修行・念仏への回心・往生行・臨終の奇瑞・没後についての概略がまとめられている。なお戒珠の『浄土往生伝』には真撰と戒珠に仮託された偽撰があり、偽撰については参考文献の塚本善隆の論文を参照。『浄全』には『円光大師行状絵図翼讃』から釈法敬と釈善豊と太原沙弥の三人の伝を「戒珠伝佚文」としてあげているが、これらは戒珠偽撰『往生浄土伝』の佚文であって、戒珠真撰の『浄土往生伝』に立伝される僧ではない。
作成者名：斉藤隆信

浄土紺珠

書名よみ：じょうどかんじゅ
著者名：虚舟徳真
著者名よみ：きょしゅうとくしん
著者生没年：？-1888
成立翻訳年：1880
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、光緒8（1882、韓国国立図書館）
刊本の奥書刊記：1、光緒八年壬午（1882）孟秋浄願社開刊留鎮于奉恩寺
活字本所載書：『卍続蔵』2・15・2、『韓国仏教全書』11
参考文献：李能和『朝鮮仏教通史』（国書刊行会、1974）
解説：本書『浄土紺珠』は、虚舟徳真によって編まれた。『朝鮮仏教通史』によれば、虚舟徳真の生年は不明であるが、没年は光緒14年（1888）10月13日である。彼は幼少にして出家を願い、朝鮮禅宗の一派である曹渓宗に入門したと伝えられている。しかし後には松広寺や仙厳寺など各地を転々としたようである。虚舟徳真には、現在、本書以外の著作は知られていないので、著者の思想についても、ほとんどわからない。とはいえ本書巻頭の自叙で、禅と浄土教の二つは、究極的に一つに帰すると云われるので、禅教一致を支持する僧侶であったことが知られる。

本書は、主として浄土教関連の多様な経・論から心・念・信心・功徳・願など60余の項目について記述を集めた、いわばアンソロジーである。本書に特徴的なのは、数にしたがって項目が立てられていることであろう。たとえば、一なら「一心」で、一心に関する『阿弥陀経』の文章が引かれる。同様にして、三なら「三輩」で『無量寿経』が、四なら「四修」で『無量寿経優波提舎願生偈』が、また四十八なら「四十八願」で『大阿弥陀経』が引用される。上記以外の項目をさらに列挙すると「一乗」「二力」「三不信心」「四種念仏」「五敬」「六度」「七正念」「八易生」「九品」「十無礙」「十二願」「十六観」「二十八真念」などである。引用典籍は上記の他に、『大宝積経』『観無量寿経』『金剛頂瑜伽念珠経』『普賢行願記』『宝王三昧念仏直指』『蓮宗宝鑑』『万善同帰集』など多岐にわたる。
作成者名：山中行雄

浄土決

書名よみ：じょうどけつ
著者名：李贄
著者名よみ：りし
著者名別名：李載贄、李卓吾、篤吾、宏甫、温陵居士
著者生没年：1527（嘉靖6）-1602（万暦30）
成立翻訳年：1597（万暦25）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、明代（？）（1368-1644、中国国家図書館）
2、民国12-民国14（1923-1925、中国国家図書館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『卍続蔵』2-13-2
参考文献：望月信亨『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、張聖厳「明末における中国の浄土人物及び思想」上・下（『明海大学教養論文集』1991、1993）、『居士伝』（『卍続』88冊）
解説：本書の編集者李贄は明末の居士で、字は卓吾という。また温陵禅師とも号した。普江の人で、陽明学者でもある。『蔵書』『般若心経提綱』などの著書がある。彼は禅の法門の高揚に努め、同時に弥陀浄土を唱導した。袾宏の『竹窓三筆』、彭際清の『居士伝』（第43巻）の中に彼を評価する記事が見られる。

本書は李贄が諸師の説く天台唯心浄土の諸典籍の大意を纏めた書物である。自叙の他、天台智顗の『浄土十疑論』・宋無為居士楊傑浄土十疑論序・一心三観・寿禅師勧修浄業・行脚求師・宗本答問・三大聖人現身勧修浄土・経論指帰浄土・祖師指帰西方・西方偈賛・西方五請・念仏八偈が所収されている。

その中、「一心三観」では温陵禅師の天台の一心三観説に基づき、念仏を通して三惑を破ることを述べている。「寿禅師勧修浄業」では永明禅師が『万善同帰集』において浄土往生を勧めていると述べる。「行脚求師」では『帰元直指』に説いている宗本禅師の浄土往生の利益に関する問答について纏める。「宗本答問」は宗本禅師が浄土往生の立場から禅と浄土の関係について述べた問答のまとめである。「三大聖人現身勧修浄土」では『宋高僧伝』に記している慈愍三蔵や法照などが仏や三聖をみた事跡を収録する。「経論指帰浄土」では経論に説かれているように阿弥陀仏を念じることによって極楽に往生することを勧める。「祖師指帰西方」では、六祖慧能・李卓吾・霊芝禅師・永明延寿・龍舒居士などの諸師が西方極楽往生を勧めていることが述べられる。「西方偈賛」とは西方極楽の殊勝と浄土往生を勧める宗本禅師の偈賛である。「念仏八偈」では南無阿弥陀仏の名号を賛嘆する八偈が収録されている。
作成者名：肖越

浄土五会念仏誦経観行儀

書名よみ：じょうどごえねんぶつじゅきょうかんぎょうぎ
書名別名：五会念仏法事讃、五会法事讃、広本法事讃
著者名：法照
著者名よみ：ほっしょう
著者名別名：大悟和尚、梁漢沙門、南岳沙門法照、法照禅師、法照大師、善導後身
著者生没年：746（天宝5）-838（開成3）
成立翻訳年：774（大暦9）

成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、フランス国立図書館蔵本（書写年代不明、書写者不明、P2066）
2、フランス国立図書館蔵本（書写年代不明、書写者不明、P2250）
3、フランス国立図書館蔵本（951（乾祐四年）、書写者不明、P2963）
4、京都国立博物館蔵本（書写年代不明、書写者不明、守屋本）
写本奥書：1、奥書なし
2、奥書なし
3、時乾祐四年（951）歳次辛亥蕤賓之月蓂明十三葉、於宕泉大聖先巌寺講堂後弥勒院写、故記
4、奥書なし
活字本所載書：『大正蔵』85（No.2827）、『浄土宗大典』8
参考文献：塚本善隆『唐中期の浄土教―法照の研究―』（「東方文化学院京都研究所研究報告」4、東方文化学院京都研究所、1933）、佐藤哲英『竜大図書館山内文庫蔵　法照和尚念仏讃（本文並解説）』（『慶華叢書』1、慶華文化研究会、1951）、小野勝年「円仁の見た唐の仏教儀礼」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、1964）、藤堂恭俊「震旦諸師の浄土教に関する著作　解題」（『浄土宗全書』6、山喜房仏書林、1973）、広川尭敏「敦煌出土法照関係資料について」（石田充之博士古稀記念論文集刊行会編『浄土教の研究』永田文昌堂、1982）、三枝樹隆善「浄土五会念仏略法事儀讃　解題」（塚本善隆編『仏教教育宝典6　中国仏教集』玉川大学出版部、1983）、張先堂「晩唐至宋初浄土五会念仏法門　在敦煌的流伝」（『敦煌研究』55、敦煌研究編集部、1998）、五十嵐明宝『浄土五会念仏略法事儀讃』（永田文昌堂、2001）、斉藤隆信「法照の礼讃偈における通俗性―その詩律を中心として―」（『浄土宗学研究』30、知恩院浄土宗学研究所、2004）、斉藤隆信「法照崇拝とその凋落」（『浄土宗学研究』35、知恩院浄土宗学研究所、2009）
解説：隋から中唐までに作られた礼讃偈と、自らが詠んだ礼讃偈を載録し、これに念仏誦経などを加えて実際の儀礼に応ずべく組織させた一大儀礼書である。もと上中下の三巻よりなるが、上巻は散逸している。なお『五会法事讃』には本項目である『広本』と『略本』の二種類が存在し、『略本』は『浄土五会念仏略法事儀讃』1巻（または2巻、『大正蔵』47）である。本書（『広本』）は大暦9年（774）、太原の竜興寺において編纂された。本文中に、「再述浄土念誦観門」とあり、これ以前、既に儀礼書を撰述していたことが窺える（張先堂、1998）。

『略本』本文中に、「広作法事」の際には三巻本の『広本』を用い、「略作法事」の際には一巻本の『略本』を用いよとの指示が記されており、法事の規模に応じて広略が使い分けられていたことがわかる。また法照自作の礼讃偈には、近体詩の影響を受けながらも、『切韻』に縛られない、純文学性と俗文学性を両立させる特質が備わっており、大衆動員型の音楽法会の中核として、大いにその役割を果たしていたと考えられる（斉藤隆信、2004）。

なお本書に述べられる五会念仏とは、速度の緩急が異なる五種の念仏によって形成される行儀であり、『略本』の記述によると大暦元年（766）の創始という。日本には五台山に滞在していた円仁（794-864）によってもたらされ、引声念仏として行じられるようになった。
作成者名：加藤弘孝

浄土五会念仏略法事儀讃

書名よみ：じょうどごえねんぶつりゃくほうじぎさん
書名別名：五会念仏法事讃、五会法事讃、略法事讃
著者名：法照
著者名よみ：ほっしょう
著者名別名：大悟和尚、梁漢沙門、南岳沙門法照、法照禅師、法照大師、善導後身
著者生没年：746（天宝5）-838（開成3）
成立翻訳年：788（貞元4）-838（開成3）
成立地：中国
巻数：1/2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正保5（1649、仏教大・金沢大・竜谷大・大正大）
2、江戸期（仏教大・竜谷大・東洋大・法然院）
刊本の奥書刊記：1、正保五戊子暦（1648）上春三条通菱屋町、林甚右衛門尉
2、村上勘兵衛雕刻
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1983）、『卍続蔵』128、『浄全』6、『浄土宗大典』8
参考文献：塚本善隆『唐中期の浄土教―法照の研究―』（「東方文化学院京都研究所研究報告」4、東方文化学院京都研究所、1933）、佐藤哲英『竜大図書館山内文庫蔵　法照和尚念仏讃（本文並解説）』（『慶華叢書』1、慶華文化研究会、1951）、小野勝年「円仁の見た唐の仏教儀礼」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、1964）、藤堂恭俊「震旦諸師の浄土教に関する著作　解題」（『浄土宗全書』6、山喜房仏書林、1973）、広川尭敏「敦煌出土法照関係資料について」（石田充之博士古稀記念論文集刊行会編『浄土教の研究』永田文昌堂、1982）、三枝樹隆善「浄土五会念仏略法事儀讃　解題」（塚本善隆編『仏教教育宝典6　中国仏教集』玉川大学出版部、1983）、張先堂「晩唐至宋初浄土五会念仏法門　在敦煌的流伝」（『敦煌研究』55、敦煌研究編集部、1998）、五十嵐明宝『浄土五会念仏略法事儀讃』（永田文昌堂、2001）、斉藤隆信「法照の礼讃偈における通俗性―その詩律を中心として―」（『浄土宗学研究』30、知恩院浄土宗学研究所、2004）、斉藤隆信「法照崇拝とその凋落」（『浄土宗学研究』35、知恩院浄土宗学研究所、2009）
解説：隋から中唐までに作られた礼讃偈と、自らが詠んだ礼讃偈を載録し、これに念仏誦経などを加えて実際の儀礼に応ずべく組織させた一大儀礼書である。分巻の相違で1巻本と2巻本があるが、内容は同じである。なお法照の『五会法事讃』には二種の系統が存在し、本項目は『略本』であり、『広本』は敦煌石室から発見された『浄土五会念仏誦経観行儀』3巻である。

本書（『略本』）は法照が入京した貞元4年（788）以降、章敬寺の浄土院において、『浄土五会念仏誦経観行儀』3巻を節略して編纂されたと考えられる（張先堂、1998）。

本文中に、「広作法事」の際には三巻本の『広本』を用い、「略作法事」の際には一巻本の『略本』を用いよとの指示が記されており、法事の規模に応じて広略が使い分けられていたことがわかる。また法照自作の礼讃偈には、近体詩の影響を受けながらも、『切韻』に縛られない純文学性と俗文学性を両立させる特質が備わっており、大衆動員型の音楽法会の中核として、大いにその役割を果たしていたと考えられる（斉藤隆信、2004）。

なお本書に述べられる五会念仏とは、速度の緩急が異なる五種の念仏によって形成される行儀であり、大暦元年（766）の創始という。日本には五台山に滞在していた円仁（794-864）によってもたらされ、引声念仏として行じ

られるようになった。
作成者名：加藤弘孝

浄土極信録

書名よみ：じょうどごくしんろく
著者名：戒香
著者名よみ：かいこう
著者名別名：智善、願西
著者生没年：19c後半頃
成立翻訳年：1871（同治10）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続経』2-15-1
解説：著者戒香の生没年は不詳であるが、清末における極楽往生を求める念仏者として知られる。
本書は、『阿弥陀経』『無量寿経』『楞厳経』の「大勢至菩薩念仏円通章」などの浄土経典、及び祖師たちに説かれた念仏往生に関する語録に基づき、一向に念仏往生を勧める願生文である。内容は、「念仏読経終身受持儀序」・「讃仏取浄」・「焼指発願志求西方文」・「阿弥陀経礼想儀」などの三二偈文と「信極普勧四十八詠」からなる。速やかに苦に満ちている娑婆世間を離れ、極楽浄土に往生を願うことが、本書の主旨である。
作成者名：肖越

浄土指帰集

書名よみ：じょうどしいきしゅう
著者名：大佑
著者名よみ：だいゆう
著者名別名：啓宗、蘧菴、法空道人
著者生没年：1333（至順4）-1407（永楽5）
成立翻訳年：半-15c前半
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、乾隆49-乾隆50（1784-1785、中国国家図書館）
2、民国12-民国14（1923-1925、中国国家図書館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『卍続蔵』2-13-1、『浄土指帰集』（上海仏学書局、1935）
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』（正聞出版社、1991）、劉果宗『中国仏教各宗史略』（文津出版有限公司、2001）、『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1998）。
解説：大佑は明初期の僧侶で、啓宗と号し、また法空道人とも号する。蘇州の呉氏の家族に生まれ、12歳の時に出家したという。『華厳経』と『摩訶止観』などをよく研鑽したので、洪武4年（1371）京師に招かれて法要の担当をさせたこともある。永楽1年（1403）に浄土門を修し始め、後に西山に入り念仏三昧を専修した。『永楽大典・釈書』を編纂したほか、『浄土指帰』、『阿弥陀経略解』、『金剛経注』など書物を著したという。彼の履歴については『続仏祖統紀』、『続稽古略』2、『金陵梵刹志』2、『呉都法乗』6中に記されている。
本書は洪武28年（1395）に四明翠岩無象によって刊行されて以降、現代に至っても広く流布している。
本書は四明知礼の天台思想に基づき、礼仏・懺悔・発願・回向・三福などの事の念仏を行うと同時に、理の唯心浄土を唱導する書物である。原教・宗旨・法相・観慧・行法・証験・決疑・斥謬・指広・勧修という十門からなる。「原教」では浄土経典に説かれている阿弥陀仏の発願と極楽浄土の殊勝なること、及び中国の慧遠をはじめ歴代の諸師の浄土教を紹介する。「宗旨」では知礼の『妙宗鈔』に基づき、心観を本経の宗となすと指摘する。「法相」では「一切聖賢皆以無為法而有差別」に基づき、諸仏の教えは唯一つの理であると説くと同時に、天台大師・永明・永嘉などの著作を取り入れながら西方極楽に往生の必要性を説く。「観慧」では天台の一心三観に基づき、観仏三昧と般舟三昧を説く。「行法」では『阿弥陀経』に説かれている「一心不乱」を遂げるために、持戒・懺悔・浄業三福・往生咒（ダラニ）・発菩提心などが必要であると述べる。「証験」では経典や往生伝などに説かれている菩薩や中国の諸師の往生の実例を初めとして、悪人・女人及び畜生までの往生を説いている。「決疑」では往生するのに疑を断じることが重要であると説く。「斥謬」では仏教の執空や道教などの外道の教えを批判する。「指広」では般若・法華・華厳などの諸経及び諸師の論に説かれている種々の浄土義を説いている。「勧修」では慈雲・龍舒などの教えを紹介しながら、念仏を勧める。
作成者名：肖越、趙仲明

浄土自警録

書名よみ：じょうどじきょうろく
著者名：古崑
著者名よみ：ここん
著者名別名：玉峯、恋西
著者生没年：？—1892（光緒18）
成立翻訳年：19世紀
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
刊本所在：1870年（同治10）竜谷大学所蔵
参考文献：『仏光大辞典』（仏光出版社、1988）、望月信亨『中国浄土教理史』法蔵館、1942）、震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）。
解説：著者は、清末の僧侶で、江西上饒出身である。字は玉峯、恋西と号した。少なくして普寧寺で出家し、大乗経典を学んだ。『浄土十要』『阿弥陀経円中鈔』など浄土教の書物の影響をうけて、一日六万遍阿弥陀仏の名号を称え、専心に念仏往生を求めたという。古崑には本書の他にも『浄土随学』2巻、『浄土必求』1巻、『蓮宗必読』1巻、『念仏要語』1巻、『念仏4大要訣』1巻、『浄土神珠』1巻、『西帰行儀』1巻、『念仏開心頌』1巻、『上品資糧』1巻などの浄土教に関する著書は多い。
本書は、この娑婆世界から解脱するため、念仏往生の浄土教を以て、自らを警め、人を警める書物である。浄土教は上・中・下根すべての群機を摂する解脱法で、下根にしても、阿弥陀仏の本願を信じれば、往生ができるという旨を説く。そして、娑婆世界の苦しみを説きつつ、極楽の清浄快楽を讃嘆する。
作成者名：肖越

浄土十疑論

書名よみ：じょうどじゅうぎろん
書名別名：阿弥陀仏十疑論、阿弥陀決十疑、釈往生浄土十

疑、観無量寿経十疑論、阿弥陀十疑論
著者名：智顗（？）
著者名よみ：ちぎ
著者名別名：天台大師、天台智者大師、智者大師
著者生没年：538（大同4）-597（開皇17）
成立翻訳年：7c-8c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、東寺観智院金剛蔵（1151（久安7）、書写者不明）
写本奥書：1、久安七年（1151）三月三日書了、一交一点了、願以書写力、往生安養刹、即見弥陀仏、証得大菩提、久安七年（1151）三月三日天台門資
刊本所在：1、万暦年間（1573 - 1620、増上寺・大谷大、明万暦版）
2、正保2（1645、大谷大・竜谷大・仏教大・叡山文庫）
3、延宝9（1681、大谷大・大正大・竜谷大・仏教大・高野山大・東洋大・叡山文庫・京都大）
4、光緒8（1882、大谷大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査、康熙三年（1664）（？））
2、正保二年（1645）三月吉旦、二条通松屋町、武村市兵衛刊行
3、延宝九辛酉（1681）初春吉日、東洞院六角下ル町、山口忠右衛門
4、（未調査）
活字本所載書：『浄全』6、『大正蔵』47（No.1961）、『卍正蔵』33-6、『中華大蔵経』2-7
参考文献：佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、1951）
解説：浄土教に関する十の疑問を挙げ、それに答えている。十の疑問とは以下の如くである。第1、第2は浄土往生に関する問題。第3、第4は十方浄土・諸仏の中で、なぜ西方浄土・阿弥陀仏の一仏一土のみを求めるのかという問題。第5、第6は凡夫往生の問題。第7は兜率と西方の優劣。第8は別時意説。第9は二乗種不生。第10は往生の行業について。

本書は智顗の著作であるとされてきたが、佐藤哲英『天台大師の研究』等では偽撰とされている。その理由として、玄奘の訳語等が使用されているので、玄奘以後の成立である。十疑のうち七疑に『安楽集』の影響が確認され、また曇鸞『往生論註』、迦才『浄土論』、懐感『釈浄土群疑論』等からの影響も認められることから、『群疑論』以降の成立であると考えられる。智顗に仮託されてはいるが、天台よりもむしろ浄土教の諸問題について答えている書であるといえる。
作成者名：曽和義宏

浄土修証儀

書名よみ：じょうどしゅうしょうぎ
書名別名：修証儀、観無量寿経修証儀
著者名：択瑛
著者名よみ：たくえい
著者生没年：1045(慶暦5)-1099（元符2）
成立翻訳年：11c後半
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『仏典疏鈔目録』（『興隆録』）下（『日仏全』1）、『長西録』（『日仏全』1）、『蓮門経籍録』上（『日仏全』1）、『浄土真宗教典志附録』3（『日仏全』1）、『仏祖統記』14（『大正蔵』49、p.221）、『観無量寿経義疏正観記』上（『卍続蔵』22、p.384、逸文あり）、『観無量寿経義疏正観記』中（『卍続蔵』22、p.393、逸文あり）、『復宗集』（『卍続蔵』57、p.67-68、逸文あり）、『観経疏略鈔』（『浄全』2、p.536）、『観経疏伝通記糅鈔』（『浄全』3、p.87）、『選択本願念仏集名体決』（『浄全』8、p.446）、『浄土宗要集見聞』（『浄全』11、p.225）
参考文献：西郊良光「択瑛の浄土教」（『天台学報』28、1986）、阿川正貫「桐江択瑛の浄土教－良忠等の引用文を参考として－」（『大正大学大学院研究論集』14、1990）
解説：本書は現存しない。

『仏典疏鈔目録』（『興隆録』）下、『蓮門経籍録』上、『浄土真宗教典志附録』3には、「観経疏釈類」の書物として名が挙げられていることから、本書は『観経』の末註であることが分かる。よって『長西録』に記述されている「観無量寿経修証儀」は、本書の異名であると思われる。また本書の書名は、良忠・良栄・聖冏の著述に散見できることから、日本に伝来していたものと考えられる。

本書は、戒度『観無量寿経義疏正観記』、大佑『浄土指帰集』、興咸『復宗集』に一部が引用されているので、その内容の一端を伺い知ることができる。それらによると択瑛は『観経』に説示される観門に、此土において道に入り破惑証理する無生観（自力理観）と、浄土に生ずることを求め、この世での身を捨てて浄土の身と為す有生観（他力事観）の2種を設ける。その上で択瑛は、知礼・智円などの天台一家の自力理観とは全く異なる他力事観、すなわち厭離穢土・欣求浄土の立場の方を自身の立場としてとるのである。このような態度は、知礼教学を継承する大佑などといった正統派天台浄土教家からの痛烈な批判を受けることとなった。（西郊良光、1986）

また良忠は『東宗要』において「択瑛、用欽等の師、みな善導をすなわち弥陀の化身と判ず」（『浄全』11、p.3）と記述していることから、択瑛は天台浄土教に身を置きながらも善導の影響を受けていたと推測される。
作成者名：伊藤瑛梨

浄土承恩集

書名よみ：じょうどしょうおんしゅう
著者名：芳慧
著者名よみ：ほうえ
著者名別名：妙能
著者生没年：19c後半頃
成立翻訳年：1875（光緒1）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-14-5
参考文献：『浄土宗大辞典』（浄土宗大辞典編纂委員会、1974）
解説：著者の芳慧は、古崑に師事した清末の浄土教者として知られる。

本書は、浄土教を教示された先師の恩に報いるために、浄土典籍の序分・跋、及び著者自ら念仏の感想などを纏めた書物である。先師たちの功徳を讃嘆しながら、後進を警策とすることが本書の主旨であり、45項目からなる。

先ず、「蓮宗必読新刻縁起」「西方径路序」「浄土自警録序」「浄土神珠序」などの浄土教書物の序分が示され、次には、自らの念仏体験に基づき書かれた文がつづき、そして、先師の書物を読んだ感想文である。更に西方極楽往生の発願文と、偈で念仏に関する自ら作った偈文なども収録されている。

作成者名：肖越

浄土証心集

書名よみ：じょうどしょうしんしゅう
著者名：卍蓮
著者名よみ：まんじれん
著者生没年：不詳
成立翻訳年：1975（光緒1）
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-15-1
解説：作者の卍蓮は、天台宗の僧侶であるが、晩年にもっぱら念仏したという。生没年不詳。
本書は、心のほかには浄土はなく、浄土のほかに心もなしという唯心浄土の観点から、心・仏・衆生が差別なしを中心にして末法時代には最も優れる修行法が浄土教であると説く。
上巻には、(1) 浄土縁起 (2) 一心両土地応宜取捨 (3) 簡易不可思議 (4) 心土不二智者同往 (5) 惟心同異 (6) 心仏一致諦観無外 (7) 念仏名無上深妙禅 (8) 仏祖語異理同 (9) 約教釈疑 (10) 願門普摂無有棄化 (11) 求生抜欲根本 (12) 持名功不虚棄 (13) 求生要学信実 (14) 尼真超請示 (15) 七期念仏普説 (16) 女衆錯会経旨 (17) 求生不可勝数 (18) 往生公私両利 (19) 称名復本 (20) 一信永信 (21) 誓願決定 (22) 立行堅猛 (23) 願此法門相度脱 (24) 附刻真妄心境図 (25) 金装仏 (26) 花献仏 (28) 灯供仏 (29) 正助総申回向仏果という29項目から色々な側面で極楽往生の念仏法門の要点を説く。
中巻には、詩、対聯の形で娑婆世界の苦しみ、極楽世界の楽、浄土教の修行は無上深妙禅等を讃嘆する。
下巻は、主に浄土教の修行・往生・教理・極楽の荘厳を讃嘆する偈頌からなる。「唯心念仏頌」などの偈頌を収録されている。
作成者名：肖越

浄土生無生論

書名よみ：じょうどしょうむしょうろん
著者名：伝灯
著者名よみ：でんとう
著者名別名：幽渓伝灯、無尽、有門、幽渓大師
著者生没年：1554（嘉靖33）-1627（天啓7）
成立翻訳年：1603（万暦31）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、清乾隆49-50（1784-1785、中国国家図書館）
2、民国12-14（1923-1925、中国国家図書館）
3、民国15（1926、中国国家図書館）
4、民国年間（中国国家図書館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』47
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』（法蔵館、1991）、『仏経解説辞典』（河南大学出版社、1997）、劉果宗『中国仏教各宗史略』（文津出版有限公司、2001）
解説：伝灯は天台宗の僧侶である。俗姓は葉氏、字は無尽、自ら有門と号した。出家してから百松真覚のもとで『法華経』や『楞厳経』を学んだ。万暦15年（1587）に天台山に入り、幽渓の高明寺に住して、天台の祖庭を建立した。そのため、後に世人から幽渓大師と称された。伝灯はこのように天台を研鑽すると同時に、浄土教の発展にも貢献した。著作は他に『阿弥陀経略解釈円中鈔』、『浄土法語』、『観経図頌』、『楞厳経玄義』、『楞厳経円通疏』、『性善悪論』、『天台伝仏心印記注』、『天台山方外志』などがある。
本書は天台の三観と性具善悪思想に基づき、浄土教義を述べるものである。本文は10門に分かれる。即ち、(1) 一真法界門、(2) 身土縁起門、(3) 心土相即門、(4) 生仏不二門、(5) 法界為念門、(6) 境観相呑門、(7) 三観法而門、(8) 感応任運門、(9) 彼此恒一門、(10) 現未互在門である。巻末にある跋文には、「幽渓大師、以性具円理、闡浄土法、著為生無生論」とある。
まず、「一真法界門」では、一真法界とは衆生の本来的な心性で、その心性は無量の徳を備え、無量の名を受けるという。「身土縁起門」では、その一真法界性は不変であるけれど、縁に従って変化するという。三身および四土も悉く心より変造されたものであるという。「心土相即門」では、安楽浄土はここから十万億の国土を離れるが、われの心にも存在するという。「生仏不二」では、阿弥陀と凡夫とは覚りの違いがあるけれど、その心は全く同じであるという。「法界為念門」では、法界の円融体が私心であるので、私が念仏する心の法界であると説く。「境観相呑門」では、『観経』では理と事の二種観があり、お互いに補い合っていると述べる。「三観法爾門」では能観を三観となし、所観を三諦となすと説く。「感応任運門」では、心は諸仏を感ずれば、弥陀は応じる。ちょうど磁石のようであるという。「彼此恒一門」では、臨終の時にもし正念を失わなければ、もしくは光や華を見ることができたなら、往生して宝池に生まれる。「現未互在門」では、行者は今念仏すれば、因の中にすでに果があって、花を開くことになると結ぶ。
本書は智旭編の『浄土十要』の第9巻に収録される。注釈書として正寂『浄土生無生論注』1巻（1612）、受教『浄土生無生論親聞記』2巻（1626）、達黙『浄土生無生論会集』1巻（1849）などが存する。
作成者名：肖越

浄土資糧全集

書名よみ：じょうどしりょうぜんしゅう
著者名：荘広還
著者名よみ：そうこうかん
著者名別名：復真
著者生没年：1520（正徳1）-？
成立翻訳年：1600（万暦28）
成立地：中国
巻数：6
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-13-3
解説：著者の荘広還は、浙江省桐郷の人で、字は復真、明の在家居士として知られる。若くして儒学を学び、後に漢方医学を学んだ。40歳の時、世間を厭い養生術に従事したが、病にかかったことを契機として仏教を学び始めた。袾宏に師事して念仏を修め、日に5万遍の名号を称えという。
本書は、袾宏の信願行の念仏思想を参考して浄土往生の行法を述べるものである。信は、「浄土往生章」「浄土起信章」の2章に、願は、「浄土誓願章」に、行は、「浄土斎戒章」

「浄土日課章」「浄土兼禅章」の3章においてそれぞれ纏められている。

「浄土往生章」では、『悲華経』『鼓音王経』『無量寿経』などに説かれている阿弥陀仏の起源に関する語句を引用して、浄土が実際に存在することを説く。「浄土起信章」では、『大阿弥陀経』『竜舒浄土文』、また大佑の『浄土指帰』、袾宏の『浄土疑弁』などの文を引用しながら、疑を去って正信を起すべきことを説く。「浄土誓願章」では、念仏を修める人は必ず往生の願をも発さなければならないと説く。「浄土斎戒章」では、五戒十善を持つべきことを説く。「浄土日課章」では、『阿弥陀経』や『観経』などの浄土経典に基づき修行すべきことを説く。「浄土兼禅章」では、永明・袾宏・石機諸禅師の説を引用して、禅浄一致の立場を中心にして摂心念仏・数息念仏・参究念仏・実行念仏などの禅浄一致の法を示す。

作成者名：肖越

浄土神珠

書名よみ：じょうどじんじゅ
著者名：古崑
著者名よみ：ここん
著者名別名：玉峯
著者生没年：？—1892
成立翻訳年：20世紀
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-15-2
参考文献：『仏光大辞典』（仏光出版社、1988）、望月信亨『中国浄土教理史』法蔵館、1942）、震華『中国佛教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）。
解説：著者は、清末の僧侶で、江西上繞出身である。字は玉峯、恋西と号した。若くして普寧寺で出家し、大乗経典を学んだ。『浄土十要』『阿弥陀経円中鈔』など浄土教の典籍の影響をうけて、一日六万遍阿弥陀仏の名号を称え、専心に念仏往生を求めたという。古崑には本書の他にも『浄土随学』2巻、『浄土必求』1巻、『蓮宗必読』1巻、『念仏要語』1巻、『念仏4大要訣』1巻、『浄土神珠』1巻、『西帰行儀』1巻、『念仏開心頌』1巻、『上品資糧』1巻などの浄土教に関する著書は多い。

本書は、慈雲の「往生浄土決疑文」、「弥陀経正信発願偈」など36項目からなる。その中「往生浄土繋縁門」では、『楞厳経』の「大勢至菩薩円通章」に母親と息子の憶念の譬えによって阿弥陀仏と衆生との関係を説明する。称名念仏方法にいて、天台の三諦円融の立場で、理の一心と事の一心を両側面から説明する。『観無量寿経』に関しては、智顗、慈覚、四明の天台観仏の観点に基づき説明する。大乗経典における浄土教の位置は、智旭の『阿弥陀経要解』の解釈を取り上げて、浄土教は最も方便で、円頓、了義の教義である。　浄土教と禅との関係には、念仏するのは無上の深妙禅であるとの示す。

作成者名：肖越

浄土晨鐘

書名よみ：じょうどしんしょう
著者名：周克復
著者名よみ：しゅうこくふく
著者生没年：不詳
成立翻訳年：1659（順治16）
成立地：中国
巻数：10
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-14-2
参考文献：『仏光大辞典』（仏光出版社、1988）、震華『中国佛教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）。
解説：著者は清朝初期の居士仏教の第一人者として知られる。本書の他にも『法華経持験記』2巻、『華厳経持験記』1巻、『観音経持験経』1巻、『金剛経持験記』1巻など著書は多い。

本書は『龍舒浄土文』『蓮宗宝鑑』などから収録して一書としたものである。原始・啟信・勧修・念仏法門・功行法門・策進・飭終・正弁・了俗・持験という10巻からなる。

第1巻の最初には、朝晩の行に使う経論を示す。その中には、唐の善導の「臨睡入観文」の見られる。後の原始では、『悲華経』や、浄土経典などに説く阿弥陀経とその極楽浄土の起源に関する記述を示す。啓信では、浄土教に関する信ずるべきものを16項目から論説。勧修では、人々にとっては念仏往生の行を行いべき理由について説く。最後の持験では、廬山の慧遠をはじめとする往生者の実例を示し極楽往生するのが実際存在であると説く。

作成者名：肖越

浄土随学

書名よみ：じょうどずいがく
著者名：古崑
著者名よみ：ここん
著者名別名：玉峯・恋西
著者生没年：？-1892（光緒17）
成立翻訳年：1875（光緒1）
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-14-5
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』（法蔵館、1942）、『仏光大辞典』（仏光出版社、1988）、震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：著者の古崑は、清末の僧侶で、江西上繞出身である。字は玉峯、恋西と号した。古崑は幼くして普寧寺で出家し、大乗経典を学んだ。『浄土十要』『阿弥陀経円中鈔』などの浄土教の書物の影響をうけて、一日六万遍の名号を称え、一向に極楽往生を求めたという。古崑には本書の他にも『浄土随学』2巻、『浄土必求』1巻、『蓮宗必読』1巻、『念仏要語』1巻、『念仏四大要訣』1巻、『浄土神珠』1巻、『西帰行儀』1巻、『念仏開心頌』1巻、『上品資糧』1巻などの浄土教関連の著書がある。

本書は、重要な浄土経典と祖師の著作における要文を選び纏めたものである。上巻は、「阿弥陀経頌」「九品観章頌」「即心念仏頌」「念仏述懐」「無上深妙禅」など31項目からなる。主に偈の形で、信・願・称名念仏の浄土法門を讃嘆す。下巻は、52項目かるなる。そのうち、「蓮宗必読序」「西方径路序」「浄土十要序」などの12種の重要な浄土教典籍の序分および経典に対する頌である。また「血写阿弥陀経発願」「病久発願」などの11は発願文である。その他は、浄土の信・願・称名念仏・往生に関する要文から成る。

作成者名：肖越

浄土法語

書名よみ：じょうどほうご
著者名：伝灯
著者名よみ：でんとう
著者名別名：幽渓、無尽、有門
著者生没年：不明
成立翻訳年：明代
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄土十要』9、『浄土津梁』7
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）、于海波『清代浄土宗著述研究』（巴蜀書社、2009）
解説：伝灯は俗姓を葉氏、字は無尽、有門と号した。天台山の幽渓の高明寺で天台を復興したので、世人に幽渓大師と称される。

本書は天台の唯心浄土・本性弥陀の旨に基づき、極楽への往生を勧めるものである。生死輪廻の超える法門として自力・他力・本有功徳力によるものがある中、最も速く、かつ簡易な法門は、自力兼他力の念仏によって極楽往生を願う浄土法門であり、往生のためには、娑婆の恩愛を捨てて、極楽を一心に念ずるべきであると説き示している。その際、具体的には信・行・願が必要となることも述べる。信を具足するにはすべて大乗経論と浄土門の典籍を研鑽すべきであり、行には正・助の二行があり、正行は『阿弥陀経』の称名と『観無量寿経』の観想念仏であるとする。助行は世間の善行と不殺生などの律儀をもって西方に回向するという世間の行、及び六度万行等を西方に回向するという出世間の行とである。最後に、通別・広狭・偏局の面から願を説いた。なお、本書は『浄土十要』の第9、また『浄土津梁』第7として収録されている。
作成者名：肖越

浄土宝書

書名よみ：じょうどほうしょ
著者名：栢庵性聡
著者名よみ：はくあんせいそう
著者生没年：1631-1700
成立翻訳年：1686頃
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、康熙25（1686、東国大・韓国国立図書館）
刊本の奥書刊記：1、康熙二十五年丙寅（1686）初夏、全羅道楽安、金華山澄光寺開刊
活字本所載書：『韓国仏教全書』8
参考文献：『朝鮮人名辞書』（朝鮮総督府中枢院、1937）、東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）
解説：『浄土宝書』は、阿弥陀信仰に関する典籍と往生伝などの伝記を禅宗の僧栢庵性聡が集成したものである。栢庵性聡は13歳で出家し、その後30歳ころから各地を転々とし詩家と交遊した。韓国では禅僧としてのみならず詩家としても有名である。性聡が、ある時浜辺に来泊した大船から190巻の典籍を発見し、その190巻中の一つが『浄土宝書』であるとされてきたが、本書の序文を読む限り、どうやら性聡本人が編纂したと考えられる。

本書の章分けにしたがって、内容を順に紹介していく。冒頭の「因地」では阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩の由来が経典からの引用によって説明される。次いで「浄土起信文」、更に衆生本有仏性力・弥陀慈光摂取力・信願念仏功勲力の三力によって往生すると説く「勧脩浄土之業」が続く。「念仏法門」で数息念仏法など様々な念仏法、およびその心構えが詳しく教示される。この章における念仏は、観仏だけのものと称名と観仏の混淆形の両者が説かれている。次に「仏示念仏十種功徳」と、『阿弥陀経』の読誦を勧める「念仏兼誦経往生」（これは『抜一切業障根本得生浄土神呪』中の一エピソードを改変したもの）、さらに『阿弥陀経』の全文引用が続く。「念仏現応」では、念仏で鬼を退けた、念仏で病が治ったなどの念仏による奇跡譚が紹介される。また「日課念仏」で古の高僧たちが一日に何遍念仏を唱えたかが紹介され、続く「歴代尊宿」で名僧たちの浄土教への貢献が紹介される。「浄土果験」には多数の往生伝が収録されており、往生伝の数のみならず往生人も非常に多彩である。本章には沙門・王臣・士民・尼衆・婦女・悪人、さらに畜生の往生までもが収められている。これら衆生の往生因は、称名念仏だけに留まらない。ちなみに犬の往生伝では、飼い主の念仏を聞いていたことが往生因である。最後に、20万遍となえると菩提心が生じ、30万遍となえると阿弥陀に会うこと久しからずと言われる「往生浄土多羅尼」という陀羅尼が引用される。

本書中では、念仏を軽視し心を集中することなく仏の名を唱えるだけの人々を愚夫・愚婦と非難して「念」を重視することを強調するが、一方で「称名」の功徳も説かれている。前述の「念仏法門」の章で、往生の因はあくまで「一念」であるが、阿弥陀を称名するのは、「一念」を生じさせる助因となると述べられているので、「称名」は助因として勧められていたと理解されよう。
作成者名：山中行雄

浄土立教志

書名よみ：じょうどりっきょうし
著者名：志磐
著者名よみ：しばん
著者生没年：12c-13c
成立翻訳年：咸淳5（1269）
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：明版大蔵経
活字本所載書：『大正蔵』49（No.2035）、『卍続蔵』131、『続浄』16
参考文献：深貝慈孝「往生伝・高僧伝解説―特に浄全続十六巻所収本について―」（『続浄』16）
解説：南宋の志磐は天台僧であり、四明の福泉寺の住僧である。彼は宝祐6年（1258）から咸淳5年（1269）までの12年を費やして、自らが所属する天台宗山家派の立場から、仏伝・歴代祖師・天台列祖・浄土祖師などを紀伝体によって編集した『仏祖統紀』54巻を著した。『浄土立教志』はこのうち巻26,27,28に相当する。蓮社七祖（慧遠・善導・承遠・法照・少康・延寿・省常）の伝記にはじまり、比丘・比丘尼や善男善女、そして禽魚の往生までも載せている。それらの伝記の多くは既知の資料にもとづいて編纂されていることから、資料としての価値は高いとはいえない。
作成者名：斉藤隆信

浄土論

書名よみ：じょうどろん
書名別名：迦才浄土論
著者名：迦才
著者名よみ：かざい
著者生没年：7c頃
成立翻訳年：648（貞観22）以降
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、竜谷大蔵本（天平年間、書写者不明、断簡、巻中第五章のみ）
2、大阪大念仏寺蔵本（書写者不明、書写年不明、巻中のみ、良忍手沢本）
3、京都常楽台蔵本（1119（元永2）、書写者不明、存覚手沢本）
4、七寺蔵本（1175（承安5）-1180（治承4）、書写者不明）
5、七寺蔵本（1175（承安5）-1180（治承4）、書写者不明、巻中のみ、4とは別筆）
6、叡山文庫天海蔵本（室町期、書写者不明、上巻のみ）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（奥書なし）
3、貞治五年丙午（1366）九月廿六日伝領訖、見右奥書勘書写之年紀経皇代二十五代、送年暦二百四十八歳、今不慮感得之、可訪宿縁而已（存覚花押）／元永二年（1119）九月日書写畢、以書本一交了／此書ハ文字極悪不可為写本
4、一校了栄俊
5、（奥書なし）
6、（奥書なし）
刊本所在：1、慶安2（1649、仏教大）
2、慶安4（1651、京都大・大正大・仏教大）
3、刊年不明（元禄以降（？）、大正大・大谷大・竜谷大・仏教大・法然院、いずれも慶安4年版の後刷り）
刊本の奥書刊記：1、慶安二（1649）仲春吉旦、井上治右衛門板
2、慶安四（1651）辛卯仲秋吉辰、井上治右衛門刊行
3、柳田六左衛門、梅村弥右衛門（その他数種類あり）
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1963）、『浄全』6、『浄土論』（金陵刻経処刊）、『卍続蔵』2-12-3、名畑応順『迦才浄土論の研究』本文篇（法蔵館、1955）
参考文献：名畑応順『迦才浄土論の研究』（法蔵館、1955）、坂上雅翁ほか「迦才『浄土論』の書誌学的研究」（『仏教文化研究』50、2006）
解説：著者迦才の事跡は不明。道綽の往生や、貞観22年（648）に往生した人についての記述があることから、道綽の後輩、善導とほぼ同じ頃の人物と推定される。
　本書は、道綽『安楽集』の内容や構成が乱雑で理解し難いとして、9章に整理して浄土教の要義を理解させることを目的に撰述される。第1章は仏身仏土論、第2章は往生人について、『観経』の九品は菩薩の階位でいずれに相当するかを説き、浄影寺慧遠の説は階位が高すぎると批判している。そして「浄土教は本は凡夫のため、兼ねて聖人のために説かれる」とする。第3章は往生の因となる行法について説いている（以上巻上）。第4章は往生の道理、別時意会通を説き、第5章は往生の経証として経論の要文を引用する（以上巻中）。第6章は往生人の相貌、第7章は西方と兜率の優劣を比較し、西方往生が勝れているとする。第8章は浄土教が時機相応の教えであることを説く。第9章はその他の疑難について答えている（以上巻下）。
　『安楽集』よりも多くの経論を引用し、項目を整理して解説するが、『摂大乗論』などの影響を受け、西方極楽の阿弥陀仏は化身であるとするなど、かえって道綽の教義から乖離している。また巻下第6章往生人相貌は、多くの往生者の行業を載せ、後の往生伝類の先駆とされる。
作成者名：曽和義宏

浄土論

書名よみ：じょうどろん
書名別名：浄土論抄、同略本
著者名：迦才
著者名よみ：かざい
著者生没年：7c頃
成立翻訳年：648（貞観22）以降
成立地：不明
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『山王院蔵』（『昭宝録』3、774a）、『永超録』（『高山寺本東域伝灯目録』241）、『長西録』（『日仏全』1、344c）
参考文献：名畑応順『迦才浄土論の研究』（法蔵館、1955）、森川昭賢「我が国に於ける迦才『浄土論』の流伝」（『仏教史学』3-3、1953）、曽和義宏「常楽寺所蔵迦才『浄土論』について―上巻の翻刻と解説」（『浄土宗学研究』28、2001）
解説：比叡山東塔西谷の山王院の蔵書目録である『山王院蔵』、『永超録』、『長西録』の各目録に、迦才『浄土論』に3巻本とは別に1巻本が存在したことを記す。内容不明。現存せず。
作成者名：曽和義宏

浄土或問

書名よみ：じょうどわくもん
著者名：天如
著者名よみ：てんにょ
著者名別名：惟則
著者生没年：不詳
成立翻訳年：元代
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『大正蔵』47
参考文献：望月信亨『中国浄土教理史』（法蔵館、1942）。震華『中国佛教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）。
解説：著者は元代の僧侶、字は惟則、天如と号した。出身は永安（江西省）。中峯明本の弟子として知られている。天如には本書の他にも『楞厳会解』10巻、『楞厳円通』10巻、『禅宗語録』、『十法界図説』など著書は多い。
　本書は台浄一致・禅浄一致、永明延寿の理事双修の観点に基づきつつ、問答の形で浄土教義に対する26の疑問に対して回答した書物である。最初、すでに覚った者が極楽浄土往生する理由に関する問題である。仏身仏土に関しては、天台の立場に基づき回答する。次には、念仏、及び往生の問題である。最後の問題は、なかなか成就できない仏教者に、報恩、決志、求験の三策を勧める。
　本書は後の智旭によって『浄土十要』の第6として収録されている。
作成者名：肖越

諸上善人詠

書名よみ：しょじょうぜんにんえい
著者名：道衍
著者名よみ：どうえん
著者名別名：姚広孝、独庵
著者生没年：1335（至元1）-1418（永楽16）
成立翻訳年：1381（洪武14）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』135、『続浄』16
参考文献：深貝慈孝「往生伝・高僧伝解説―特に浄全続十六巻所収本について―」（『続浄』16）、牧田諦亮「中国における往生伝の系譜―『諸上善人詠』について―」（『善導教学の成立とその展開』、1981）
解説：撰者の道衍は明朝臨済宗楊岐派に所属する僧であり、天台や禅を学び詩文もよくした。1404年（洪武15）には北京の慶寿寺に住持するが、後に永楽帝の命によって還俗し資善大夫太子少師を拝命する。
　本書の題号は、『阿弥陀経』の「諸上善人、俱会一処」に基づき、更に各伝のはじめに七字四句の讃詩が添えられており、すべて韻を踏んでいるので「詠」というのである。その内容は総計122人の往生者に対する讃詩と簡単な略伝である。
作成者名：斉藤隆信

示楽庵居士念仏要略

書名よみ：しらくあんこじねんぶつようりゃく
著者名：太古普愚
著者名よみ：たいこふぐ
著者名別名：円証
著者生没年：1301-1382
成立翻訳年：14c
成立地：朝鮮半島（高麗）
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『韓国仏教全書』6、李鍾郁編『太古集』（韓国月精寺普済社、1940）、『韓訳大蔵経』153
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「高麗太古普愚の念仏禅について」（『印仏研』53-1、2004）
解説：本書『示楽庵居士念仏要略』の著者太古普愚は、臨済宗を朝鮮半島へ正伝し、看話禅を広めた人物としてよく知られている。太古普愚は、断片的ではあるが、念仏禅に関する記述も残しており、本書もその一つである。
　本書では、唯心浄土ならびに自性弥陀仏が説かれる。すなわち方便によって様々な経が説かれるが、究極的には、心は浄土であり、自性は阿弥陀仏であると説かれ、真実念仏をする人は、自性たる阿弥陀を念ずる者であると説かれる。また実際の念仏の方法については、間断なく「阿弥陀仏」の名号を心で見、念仏するのは誰であるのか観察すべきであると云う。すると自性弥陀仏が現前すると説く。このように称名、観仏、観想などと異なる念仏法を説く。
　本書は『太古和尚語録』（『韓国仏教全書』6）に収録されている。
　『大古和尚語録』の写本および古刊本の所在は現在不明（その他の『太古和尚語録』の書誌情報は、『韓国仏教全書』p.137を参照）。
　ちなみに本書は、『参禅念仏文』（『韓国仏教全書』12）というテキストにほぼ全文引用されている。これについては、『参禅念仏文』の項を参照されたい。
作成者名：山中行雄

示李尚書

書名よみ：じりしょうしょ
著者名：懶翁恵勤
著者名よみ：らいおうえごん
著者名別名：江月軒
著者生没年：1320-1376
成立翻訳年：14c
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『韓国仏教全書』6 （「懶翁和尚歌頌」に収録）、韓訳大蔵経154、李鍾郁編『懶翁集』（韓国月精寺、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「高麗・懶翁恵勤禅師の念仏禅」（『印仏研』54-1、2005）
解説：本書『示李尚書』の著者懶翁恵勤は、高麗末期に活躍した禅僧。20歳のときに了然禅師のもとで得度し、27歳で元に渡り38歳まで元に滞在した。その後、高麗に戻り、52歳のときには恭愍王に王師に任命されるなど、高麗仏教の指導者的な役割を果たし、57歳で入滅した。懶翁恵勤の生涯については『懶翁和尚行状』（韓国仏教全書6、pp.703-709）に詳しい。
　懶翁恵勤は、元滞在時に師事した指空の禅と、同様に元で修めた臨済禅の両者を行じる禅僧であるが、いくつか浄土信仰に関する文献も残している。本書もまた、そのような浄土信仰に関する文献の一つである。本書は李尚という人物に教えを与えるもの韻文文献。李尚という人物については、何も伝えられていない。本書は西方に向かって念仏に勤めれば、上品という蓮花は自ずから開く、と言って非常に素朴な浄土往生信仰を開陳している。
　本書は、『懶翁和尚歌頌』（『韓国仏教全書』6 ）に収録されている。『懶翁和尚歌頌』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.130-141並びに『韓国古書総合目録』p.116を参照されたい。
作成者名：山中行雄

新修浄土往生伝

書名よみ：しんじゅじょうどおうじょうでん
書名別名：新修往生伝
著者名：王古
著者名よみ：おうこ
著者生没年：11c
成立翻訳年：1084（元豊7）
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、所在不明（1130（大治5）、書写者不明、入信院旧蔵か、田中塊堂『日本古写経現存目録』思文閣、1973、p.135）
2、所在不明（1158（保元3）、弁昭書写）
写本奥書：1、（巻上）大治五年（1130）八月十八日書之
2、（巻下）杭州仁和県候潮門外界奉三宝弟子、守越州助教凌大中、弟大正大順、与家眷等意者、為先考九詳事、生平

帰依繋念、西方阿弥陀仏、属纊之際、如所期七日覩毫光、微笑正念而逝、華蔵義公和尚目撃証明、又当開浄土伝板、謹捨浄財、成此縁、用仲追薦荘厳、仍願見聞読誦者、及一切衆生、咸帰極楽之邦、速証菩提之道、時崇寧元年（1101）六月望日謹題、保元三年（1158）六月十七日已刻、於東大寺北院出、同月十九日一交点弁昭自手出、願共諸衆生往生安楽国乃至臨終時奉見弥陀仏
活字本所載書：『卍続蔵』135、『続浄』16
散逸文献の文献名出典：法然『類聚浄土五祖伝』（『昭法全』p.843）
参考文献：深貝慈孝「往生伝・高僧伝解説—特に浄全続十六巻所収本について—」（『続浄』16）
解説：撰者の王古は官僚（礼部侍郎）にして、『直浄土決疑集』を撰述し、また戒珠の『浄土往生伝』を増補して『新修往生伝』を編纂した在俗の西方願生者であった。本書の序文によると、戒珠の『浄土往生伝』に漏れた伝やその後の往生人の伝を収載して、総計115人の伝記になったという。本書はもと三巻あったが、巻中は散逸し現存しておらず、部分的な伝（曇鸞・道綽・善導）だけが法然の『類聚浄土五祖伝』に残されているにすぎない。現存する巻上には40人（正伝25人、附伝15人）、巻下には39人（正伝31人、附伝8人）の伝が収められていることから、散逸した巻中には36人の伝があったのであろう。
作成者名：斉藤隆信

新編普勧文

書名よみ：しんぺんふかんもん
著者名：好隠有璣
著者名よみ：こういんゆうき（こういんうき）
著者名別名：雲客
著者生没年：1708-1790頃
成立翻訳年：18c
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、刊年不明（韓国東国大）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
活字本所載書：『韓国仏教全書』9
参考文献：『朝鮮人名辞書』（朝鮮総督府中枢院　ソウル 1937）
解説：『新編普勧文』の撰者好隠有璣は、『朝鮮人名事典』によると粛宗丁亥（1708年）に生まれ、80余歳で寂したという。ところが、乾隆50（1785）年に『好隠集』という好隠有璣の著作を収録した典籍が編纂されるが、その序文において編者である蔡伯規は、好隠有璣は79歳で海印寺で寂したと記している。

本書は、普度の『蓮宗宝鑑』をはじめとして『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』『龍舒増広浄土文』『宝王三昧念佛直指』などのテキストから文章を抄録したもの。本書はタイトルからすると、念仏および浄土信仰を勧めるためのものであるが、本書の序文では撰者自身の親孝行のために編纂されたと記されている。本書は内容上、前半部と後半部に分けることができる。前半部は浄土教および信仰に関する項目に従って諸典籍からの抄文が配置される。主な項目として、阿弥陀仏の由来を述べる「阿弥陀仏因行」、臨終の際に起こる疑いと動揺を戒める「臨終三疑」「臨終四関」が挙げられる。

後半部は「一元法師観苦早修説」「中峰祖師歌」といった、個々の僧たちの詩や論説が、宗派に拘ることなく引用される。また慧遠の伝記も記されている。ここでは仏教典籍のみならず『蘇雪堂飲食説』という儒家的なテキストも引用されている。

附録として「江月尊者西往歌」と「清虚尊者回心歌」という海東の僧による二つの歌が収録されている。この2編のみ漢字とハングルが混淆した表記法で記されている。
作成者名：山中行雄

随願往生集

書名よみ：ずいがんおうじょうしゅう
著者名：非濁
著者名よみ：ひじょく
著者名別名：純慧大師
著者生没年：？-1063（嘉祐8）
成立翻訳年：11c
成立地：中国
巻数：20
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『新編諸宗教蔵総録』（『日仏全』1）、『往生浄土伝集』（真福寺善本叢刊第2期第6巻『伝記験記集』、臨川書店、2004）
参考文献：塚本善隆「日本に遺存せる遼文学とその影響」（『東方学報』7、1936）、塚本善隆「日本に遺存せる遼文学とその影響補遺」（『東方学報』8、1937）、塚本善隆「続三階教資料雑記」（『支那仏教史学』1-2、1937）、古典遺産の会『往生伝の研究』（新読書社、1968）
解説：本書は現在では散佚しているものの、『新編諸宗教蔵総録』の記述から20巻本であったことがわかる。また本書より抄出されたであろうと推測される真福寺蔵の戒珠集『往生浄土伝』が存在するため、幸いにしてごく断片的ではあるが、その内容もうかがい知ることができる。即ち戒珠集『往生浄土伝』は非濁『三宝感応要略録』などを材料にしたことがわかっているが、戒珠集『往生浄土伝』において、『三宝感応要略録』に存在しないにもかかわらず、これと類似する文体の伝があるので、これらはもともと『三宝感応要略録』と同じ著者の『隨願往生集』に存したと推測できるためである。ちなみにその類似する文体の伝とは「道昂伝」と「尼浄真伝」の2伝である（塚本論文 1936）。

ちなみにこの戒珠集『往生浄土伝』は3巻から成り、116名の往生人が収められる。内訳としては僧60人、尼20人、優婆塞15人、優婆夷6人、沙弥3人、沙弥尼2人、童子2人、童女2人、外国事例6人であり、それらはおおよそ年代順に記されている。詳しくは『往生浄土伝』の項目を参照のこと。

撰者の非濁は燕京（今の北京）に住した遼朝の僧であり、菩薩戒師として孝文皇帝（在位1055-1101）から農民に至るまで多くの人々に戒を授けたことで知られる。
作成者名：永田真隆

送魂下語

書名よみ：そうこんげご
著者名：涵虚得通
著者名よみ：かんきょえつう
著者名別名：己和
著者生没年：1376-1433
成立翻訳年：15c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本

活字本
刊本所在：1、正統5（1440、ソウル大・韓国釜山梵魚寺、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
2、刊年不明（韓国東国大、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、正統五年庚申（1440）七月、慶尚道聞慶鳳厳寺、門人文秀書刊
2、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『涵虚堂得通和尚語録』に収録）、『涵虚大師文集』（「韓国歴代文集叢書」202、景仁文化社、ソウル、1998）、『涵虚堂得通和尚語録』（韓国普済社、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「朝鮮・涵虚得通の念仏禅について」（『印仏研』55-1、2005）
解説：本書『送魂下語』の著者である涵虚得通は朝鮮時代の禅僧。21歳までは儒学を学んでいたが、友人の死をきっかけに仏門に入る。その後『円覚経』・『金剛経』などの注釈書を著し、58歳で寂した。彼の行状は、韓普光論文から簡潔に知ることができる。
　本書『送魂下語』は『涵虚堂得通和尚語録』に収録されている。本書は恵峰禅師の遷化の際に語られたもの。恵峰禅師は、戒律を厳格に守ることはなかったが、「念仏香社」という結社を創立し、朝夕に大乗経典を念じ、阿弥陀仏の称名念仏に専念していたので、中品か下品に往生することは決定していると述べる。なお、恵峰禅師が結成した「念仏香社」と涵虚得通の関係は不明な点が多い。韓普光は涵虚得通が「念仏香社」に積極的に関与したとするが、『涵虚堂行状』（『韓国仏教全書』7収録）などの資料には、「念仏香社」についての記述はない。
　本書は、『涵虚堂得通和尚語録』（『韓国仏教全書』7）に収録されている。『涵虚堂得通和尚語録』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.152-153を参照されたい。
作成者名：山中行雄

大聖竹林寺記

書名よみ：だいしょうちくりんじき
書名別名：聖寺記（？）
著者名：法照（？）
著者名よみ：ほっしょう
著者名別名：大悟和尚、梁漢沙門
著者生没年：746（天宝5）-838（開成3）
成立翻訳年：8c-9c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：道光『然阿上人伝』（『浄全』17、p.407）、聖冏『観経疏伝通記糅鈔』（『浄全』3、p.147）
解説：逸文からの断片的な内容は、法照が五台山登嶺前に夢の中で五台山に上り荘厳された仏閣を拝し、さらに文殊普賢に末法の凡夫に応じた法門を尋ねる。両菩薩はこれに答えて念仏をすすめる。この内容は『宋高僧伝』における法照伝と近似する。
　覚明房長西（1184-1266）の『浄土依憑経論章疏目録』雑述録第9に、「大聖竹林寺記一巻　法照」とあるので、本朝では法照の作と伝えられている。しかし賛寧の『宋高僧伝』21の法照伝の末尾には（『大正蔵』50,p.845）には「絳州の兵掾王士詹、聖寺記を述べて云う」とある。この「聖寺記」が「大聖竹林寺記」の略称であれば、本書は法照の作ではなくなる。
作成者名：斉藤隆信

大弥陀懺略抄要覧普勧念仏文

書名よみ：だいみだせんりゃくしょうようらんふかんねんぶつもん
書名別名：弥陀懺節要、念仏普勧文、普勧文
著者名：明衍
著者名よみ：みょうえん
著者生没年：17c後半-18c前半
成立翻訳年：1704
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、康熙43（1704、韓国奎章閣・韓国蔵書閣・東国大）
2、乾隆30（1765、韓国国立図書館）
3、乾隆41（1776、ソウル大・韓国国立図書館・韓国延世大・韓国慶北大・韓国真珠荘・韓国精神文化研究院・金一根氏）
4、乾隆42（1777、未調査）
5、乾隆52（1787、ソウル大）
6、刊年不明（韓国延世大・韓国中央大・韓国東亜大・韓国嶺南大・韓国成均館大・釜山大（複写）・金一根氏・李崇寧氏）
刊本の奥書刊記：1、康熙四十三年甲申（1704）慶尚道呂泉郡竜門寺開板
2、乾隆三十年（1765）九月山興律寺開刊
3、乾隆四十一年丙申（1776）三月日慶尚道陜川海印寺開刊
4、乾隆四十二年丁酉（1777）全羅道万淵寺刊
5、乾隆五十二年丁未（1787）七月日戊辰禅零寺刊
6、（刊記なし、巻末落丁）
活字本所載書：『韓国仏教全書』9
参考文献：朝鮮総督府編『朝鮮図書解題』（名著刊行会、1969）、小倉進平『増補補注　朝鮮語学史』（刀江書院、1964）、東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）
解説：大弥陀懺略抄要覧普勧念仏文』は、明衍が諸経論から念仏や浄土往生に関する文章を抄して、それを諺文（朝鮮語）で解釈した、いわばアンソロジー的な作品である。例外的にハングルのみの抄文があるが、全般的に諸経から引用される漢文、続いてそれを注解するハングル文から構成されている。明衍は、人々にひろく念仏を勧めるために本書を著したとする。
　本書の冒頭で、阿弥陀仏が他の諸仏より優れていること、西方極楽世界の様子、他人に念仏を勧めることの福徳、仏を誹謗すれば地獄に落ちることなどが、簡潔に論じられる。その後、烏長国王などの十人の往生伝が続く。
　次に「念仏作法次序」と題された章では、浄口業真言から始まり、讃仏偈、往生偈などを経て、大仏頂首楞厳神呪に至る真言・偈が、おそらく当時の念仏作法で読誦されていたであろう順番で紹介される。最後に再び文学作品、経典などからの抄文が載せられている。
　諸刊本は、構成にかなり異同がある。表題にも異同があり、乾隆30年（1765）版は、「普勧文」、乾隆41年（1776）版は、「蓮宗宝鑑」となっている。「蓮宗宝鑑」は元代に普度によって著された別の文献があるので、この乾隆41年（1776）版がなぜこの表題を掲げるのかは不明。
作成者名：山中行雄

澄性歌

書名よみ：ちょうしょうか、ちょうせいか

著者名：元暁
著者名よみ：がんぎょう
著者生没年：617（真平王39）-686（神文王6）
成立翻訳年：7c
成立地：朝鮮半島（新羅）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：朝鮮古書刊行会編『東文選 』（「朝鮮群書大系」 續々8-14、 朝鮮古書刊行会、1914）
参考文献：韓普光『新羅浄土教の思想』（東方出版、1991）、韓泰植（普光）「新羅・元暁の弥陀證性偈について」（『印仏研』43-1、1994）
解説：本偈『澄性歌』の著者は、統一新羅のもっとも独創的な思想家であった元暁である。彼の著作のほとんどが失われたとはいえ、86部に及ぶ多数の論書を著したと伝えられている。一方で元暁は、新羅仏教の大衆化を推し進める役割も果たした。『三国遺事』4によれば、彼は『華厳経』の「無礙」という語を使って「無礙歌」を作って世間に広めたといわれる。「無礙歌」以外にも、元暁は多くの偈や歌を著したと考えられているが、それらの多くは失われてしまい、現存していない。つまり『澄性歌』は、現存する数少ない元暁の詩歌の一つである。また、本歌は浄土往生のためには阿弥陀仏への全幅の帰依が必要であることを訴えており、大衆教化を目的として書かれたと考えられている（韓泰植（普光）論文、p.272）。
　本歌に写本等は現存しないが、高麗の崔滋が撰した『万徳山白蓮社妙国師碑銘』（『東文選』巻117）に収められている。『万徳山白蓮社妙国師碑銘』は、円妙了世（1163-1245）の行跡を伝える碑銘である。了世は臨終の直前に、元暁の『澄性歌』を唱え浄土往生を願ったと伝えられる（韓泰植（普光）論文、pp.270-271）。
　本歌は、非常に短いものなので、以下に全文引用する。
　「法界身相難思議、寂然無為無不為、至以順彼仏身心、故必不獲已生彼国」
作成者名：山中行雄

徹悟禅師語録

書名よみ：てつごぜんじごろく
書名別名：徹悟禅師文集
著者名：徹悟（述）／了亮（編）／了梅（編）／了如等（編）
著者名よみ：てつごぜんじ／りょうりょう／りょうばい／りょうにょ
著者名別名：際醒、訥堂、夢東／
著者生没年：1741（乾隆6）-1810（嘉慶15）／18c-19c／18c-19c／18c-19c
成立翻訳年：19c
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-14-4
参考文献：『仏書解説大辞典』、震華『中国仏教人名辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：徹悟禅師（1741-1810）は、万寿寺粹如禅師の法嗣で南岳禅師から数えて39代目にあたる。また中国浄土宗13祖の内の第12祖とされる。清の僧侶で、諱は際醒、字は徹悟、一字訥堂、夢東とも号する。32歳の時、大病を患い、無常を観じて出家した。性・相二宗及び天台の三観十乗の旨に通達する。晩年になって浄土門に専念するようになり、臨終の際には「少説一句話、多念一声仏、打得念頭死、饒汝法身活」と示し、念仏しながら往生したと伝えられている。代表的な著作は『念仏伽陀』、『夢東遺集』等がある。生涯については『浄土堅聖録続編』1、『新続高僧伝』4-47、『蓮宗諸祖伝略』4等に記されている。
　本書は嗣法門人了亮・了梅・了如等によって編集されもので、上下2巻がある。上巻には徹悟自らの序文の他に、誠安の序文と心雨の「念仏伽陀」の序文の後、「示衆普説」一篇を収め、下巻には般若・華厳・楞伽・金剛などの諸経の要義・跋・書簡等を収めている。
　そのうち、彼の浄土思想がよく表れているものは上巻の「示衆普説」と下巻の「念仏伽陀教義百偈」で、後世にも影響を与えた。後の印光（中国浄土教第13祖）の『印光法師文鈔』にも「示衆普説」の要旨と「念仏伽陀教義百偈」の全文が収録されている。
　本書の主旨は大乗仏教の教理をおさえながら、阿弥陀仏を信じ、称名念仏の行による極楽浄土への往生を勧めることにある。上巻の「示衆普説」の最初に「一切法門、以明心為要、一切行門、以浄心為要、然則明心之要、無如念仏、憶仏念仏、現前当来必定見仏、不仮方便、自得心開」と説き、中でも「憶仏念仏」は最も重要な行門とする。そして「真為生死、発菩提心、以深信願、持仏名号」の16字を念仏法門の一大宗綱とする。このように徹悟は念仏門を大乗仏教によく一致しているのみならず、すぐれた修行門だと考えていた。なぜなら、称名によって衆生の妄念を押さえ、真実の仏性をあらわせるからである。なお本文ではまた『観無量寿経』・『無量寿経』・『阿弥陀経』等の経典のみならず、永明延寿の四料簡なども引用しつつ、浄土門がすぐれていることを説く。
作成者名：肖越

転経行道願往生浄土法事讃（法事讃）

書名よみ：てんぎょうぎょうどうがんおうじょうじょうどほうじさん（ほうじさん）
書名別名：西方浄土法事讃（巻上尾題）、安楽行道転経願生浄土法事讃（巻下首題）、浄土法事讃（敦煌本巻上尾題）
著者名：善導
著者名よみ：ぜんどう
著者名別名：善導大師、善導禅師、善導和尚、律師西京善道闍梨、善導闍梨、西京実際寺善道禅師、親証三昧大徳善導闍梨、大善導闍梨、慈恩寺善導禅師、慈恩寺善導和尚、導禅師、導師、高祖、光明大師、光明宗師光明一師、浄業和尚、宗家、善導和上、光明寺の和尚
著者生没年：613（大業9）-681（永隆2）
成立翻訳年：7c
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都誓願寺蔵本（1213（建暦3）、書写者不明）
2、大阪真宗寺蔵本（鎌倉末期、万里小路大納言宣房卿）
3、金沢文庫蔵本（鎌倉末期、書写者不明）
4、西本願寺蔵本（1401（応永8）、書写者不明）
5、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
6、和歌山宝寿院蔵本（書写年不明、書写者不明）
7、大阪覚応寺蔵本（書写年不明、書写者不明）
8、中国国家図書館蔵本（書写年不明、書写者不明、北新0355、大谷家旧蔵）
写本奥書：1、奥書なし
2、奥書なし
3、（未調査、抄出本）
4、応永八年辛巳（1401）六月日書写畢

5、奥書なし
6、（未調査、巻下のみの零本）
7、（未調査、巻上のみの零本）
8、願往生僧善導集記（巻上（首欠）のみの零本）
刊本所在：1、鎌倉期（専修寺）
2、鎌倉期（金沢文庫）
3、南北朝期（光徳寺）
4、室町期（竜谷大・大東急記念文庫）
5、室町期（大谷大・知恩院・専光寺）
6、室町期（祐誓寺・日本民芸館）
7、室町期（亳摂寺）
8、室町期（慈敬寺）
9、室町末期（円照寺）
10、桃山末期（栗田元次旧蔵・鈴木霊真旧蔵）
11、寛永18（1641、竜谷大）
12、明暦2（1656、仏教大・東北大・新潟大・国文研・浄照坊）
13、万治2（1659、仏教大）
14、寛文7（1667、仏教大・竜谷大）
15、元禄6（1693、仏教大・東大総・千葉県立中央図書館・法然院）
16、元録7（1694、仏教大・竜谷大・大谷大）
17、宝永6（1709、仏教大）
18、享保20（1735、仏教大）
19、明和6（1769、竜谷大）
20、寛政2（1790、法然院）
21、寛政7（1795、竜谷大）
22、寛政11（1799、竜谷大・大谷大）
23、嘉永2（1849、仏教大・大谷大）
24、明治9（1876、東大総・金沢大・竜谷大・東洋大）
25、明治12（1879、仏教大・金沢大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、刊記なし
2、（未調査、巻下のみの零本、良聖手沢本）
3、刊記なし（巻上のみの零本）
4、刊記なし
5、刊記なし
6、（未調査、知真版）
7、刊記なし
8、刊記なし
9、刊記なし
10、刊記なし、古活字版
11、（未調査）
12、明暦丙申（1656）初冬吉旦、五条橋通扇屋町、丁子屋九郎右兵衛門重刋
13、万治二己亥年（1659）正月吉旦、吉田庄左衛門板行
14、此書世流布印本文字往々有差誤故今考検而避訛帰正重令開刋者也、旹寛文第七歳宿丁未（1667）弥生中澣、丁子屋三郎兵衛。堀川通仏光寺下ル町、帝都、書林、日野屋半兵衛寿梓（明暦二年版の翻刻本）
15、應剞劂氏之需刻、疏讃科本五部共九巻而弘通矣伏願、回此功徳普施法界共生安養斉悟法忍、元禄癸酉（1693）三月十有四日、沙門良仰謹識
16、華頂山蔵板、弘通所、知恩院古門前、沢田吉左衛門、京三条通寺町西入、山中善兵衛
17、（不明）
18、享保廿乙卯（1735）中春求版、今井七郎兵衛、井上忠兵衛、合刻、岡書林、元春棲敬書、采賢堂謹刊
19、（未調査）
20、（未調査）
21、西本願寺下老花長円寺蔵梓
22、寛政十一年己未（1799）五月、浪花長円寺蔵版、大阪彫刻師、松井忠蔵（無刊記本は竜谷山蔵版）
23、嘉永二年巳酉正月、京師書林、西六条花屋町油小路東入町、永田調兵衛、醒井通魚棚上ル町、丁子屋庄兵衛、東六条下珠数屋町、丁子屋九郎右衛門、東六条魚棚間之東入町、丁子屋平兵衛
24、（未調査、嘉永二年版の覆刻）
25、明治十年廿五日、御届、同十二年三月、出版、講師南条神興校正
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1979）、『卍続蔵』128、『浄全』4、『浄土宗選書　行義分』、『真宗聖教大全』中、『真宗聖典全書』、『二楽叢書』1、『真宗聖教全書』1、『浄土真宗聖典』（七祖篇）、『善導大師全集』、『浄土宗大典』8
現代語訳書：大遠忌記念聖典意訳編纂委員会編『聖典意訳七祖聖教』中（浄土真宗本願寺派宗務所内出版部、1977）、柴田泰山『浄土宗読誦聖典』4（四季社、2001）
参考文献：藤原猶雪「善導大師本具両疏弘伝考（上　震旦編）」（『史学雑誌』34-10、史学会、1923）、藤原猶雪「善導大師本具両疏弘伝考（下　本朝編）」（『史学雑誌』34-11、史学会、1923）、望月信亨『仏教史の諸研究』（望月仏教研究所、1937）、大谷光照『唐代の仏教儀礼』（有光社、1937）、禿氏祐祥「善導撰述の典籍とその伝来」（『宗学院論集』32、本願寺派宗学院、1940）、岸田覚心編「善導撰述研究文献目録」（『宗学院論叢』32、本願寺派宗学院、1940）、藤堂祐範「浄土教と印刷文化」（『浄土学』16、17、浄土学研究会、1940）、小野勝年「円仁の見た唐の仏教儀礼」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、1964）、服部英淳「善導大師の行儀分とその註書」（『浄土宗全書』4、山喜房仏書林、1970）、佐々木求巳『真宗典籍刊行史稿』（伝久寺、1973）、藤堂祐範『増訂新版　浄土教版の研究』（山喜房仏書林、1976、初出は1930）、本願寺派宗学院編『古写古本　真宗聖教現存目録』（永田文昌堂、1976）、佐藤心岳「『法事讃』の研究」（仏教大学善導教学研究会編『善導教学の研究』東洋文化出版、1980）、高橋正隆「善導大師遺文の書誌研究」（藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、1980）、中井真孝「経疏目録類より見たる善導著述の流布状況」（藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、1980）、斉藤隆信「善導の浄土教儀礼における通俗性」（『仏教論叢』49、浄土宗、2005）
解説：善導の著作五部九巻の一つで、行儀分（儀礼書）に分類される。巻上は下巻の転経行道の前方便で、召請、請三宝、懺悔からなり、高座と下座が互いに唱和する。巻下は『阿弥陀経』の全文を17段に分けて讃文をはさみ、行道しつつ高座が経文を、下座の大衆が讃文を読み、浄土教の儀礼が行われる。

本書は施主の依頼によって挙行され、施主の功徳を積累するために行われる当日限りの別時儀礼の書である。成立年代は明確ではないが、礼讃儀礼の発展過程から見ると、同じく行義分の『往生礼讃』と共に押韻を備える讃偈が確認できるので、無韻を示す『般舟讃』成立以後の著作であることが推察できる（斉藤隆信、2005）。

西域より唐代の写本（大谷家旧蔵）が出土していることから、『往生礼讃』ほどではないにしろ、唐代に流通していたと考えられる。またセルゲイ・フェドロヴィッチ・オルデンブルグらが西夏の古都黒水城から『法事讃』2巻を発掘したともいうが、詳細は不明である（岸田覚心、1940）。

日本においては、円行（799-852）による将来をもって初伝とする（中井真孝、1980）。鎌倉時代以降、『五部九巻』の一部として刊行され（明信開版本、知真開版本など）広く流布していった。
作成者名：加藤弘孝

天竺往生験記

書名よみ：てんじくおうじょうけんき

書名別名：天竺往生本記、天竺往生伝、天竺往生記抄
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：日本（？）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、寛永6（1629、竜谷大・大谷大・大正大・高野山大）
2、正保2（1645、京都大）
3、元禄7（1694、大正大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『続浄』16
参考文献：深貝慈孝「往生伝・高僧伝解説―特に浄全続十六巻所収本について―」（『続浄』16）
解説：本書はインドの世親によって撰述され、鳩摩羅什によって漢訳されたと伝えられるが、とても信頼することはできない。また奥書きに「延暦二十四年己酉（805）入唐帰朝沙門最澄」とあり、あたかも最澄によってわが国にもたらされたかのように記しているが、最澄の将来目録に本書の名は見られないことから、これらの情報はすべて本書を権威付ける意図のもとに編集されたと考えられる。成立年代は不明であるが、成立地については、その語彙（入二十五三昧帳）や語法（向西飛行者見）などから日本であろうと考えられる。
　内容は五天竺からそれぞれ数人の浄土往生者を選び計9人の僧俗の伝記を編集したものである。往生行としては口称念仏や造像・布施がある。最後に中天竺と西天竺における阿弥陀仏信仰の盛況ぶりを伝えて本書はおわる。なお本書には浄土宗袋中良定（1552-1639）の『天竺往生験記並端書』が添付され、解説が詳細にされている。
作成者名：斉藤隆信

答浄土四十八問

書名よみ：とうじょうどしじゅうはちもん
著者名：袾宏
著者名よみ：しゅこう
著者名別名：雲栖、蓮池
著者生没年：1535（嘉靖14）-1615（万暦43）
成立翻訳年：1584（万暦12）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-13-3、『雲栖法録』10
参考文献：Chung-fang Yu, *The Renewal of Buddhism in China:Chu-hung and the Late Ming Synthesis*, Columbia University, 1981、荒木見悟『雲棲袾宏の研究』（大蔵出版株式会社、1985）
解説：著者の俗姓は沈氏、後に出家し明代4大高僧の1人となり、華厳浄土思想の代表者でもある。自ら蓮池と号し、晩年は雲栖寺に住したので、世に蓮池大師、或いは雲栖大師と呼ばれ、中国浄土教の第8祖として知られている。著作は弟子によって編集された『雲棲法彙』に収録されている。その中で浄土教に関するものは『阿弥陀経疏鈔』、『竹窓三筆』、『竹窓随筆』、『浄土疑辯』等が取り上げることができる。彼の伝記は『高僧摘要』1、『正源略集』8、『新続高僧伝』48、『補続高僧伝』に見られる。
　本書は、徳園居士が袾宏に対し浄土教について質問する形で展開する。全体は浄土教に関する48問答より成る。そこでは、例えば、十善戒の修行によって天に生まれるには発願は必要ないが、極楽に生まれるには発願が必要であること、また理の一心と事の一心の難易の違い、『十疑論』に基づいて不浄観の修行をしても観仏をしなければ浄土往生ができないと、『般舟三昧経』の観仏による見仏の難しさと『無量寿経』に説く念仏によって往生する易しさなど、難易の相違などがテーマとして論じられている。また本書からは三教合一、華厳浄土思想といった著者の思想を読み解くことができる。
作成者名：肖越

答妹氏書

書名よみ：とうまいししょ、とうめししょ
著者名：懶翁恵勤
著者名よみ：らいおうえごん
著者名別名：江月軒
著者生没年：1320-1376
成立翻訳年：14c
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『韓国仏教全書』6 （「懶翁和尚歌頌」に収録）、韓訳大蔵経154、李鍾郁編『懶翁集』（韓国月精寺、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「高麗・懶翁恵勤禅師の念仏禅」（『印仏研』54-1、2005）
解説：本書『答妹氏書』の著者懶翁恵勤は、高麗末期に活躍した禅僧。20歳のときに了然禅師のもとで得度し、27歳で元に渡り38歳まで元に滞在した。その後、高麗に戻り、52歳のときには恭愍王に王師に任命されるなど、高麗仏教の指導者的な役割を果たし、57歳で入滅した。懶翁恵勤の生涯については『懶翁和尚行状』（韓国仏教全書6、pp.703-709）に詳しい。
　本書は、懶翁恵勤が、妹からの手紙に対する返事として記したものである（韓普光、前掲論文、p.519）。兄を慕う妹に、親兄弟への情を断ち切って、念仏修行に専念することを勧めている。すなわち、本書は親族に会いたいという気持ちを断絶し、二六時中、着衣や食事のときであっても、阿弥陀仏を念じよと説く。そうすれば無念・無我の境地に至り、六道輪廻の苦痛からも逃れることができるとも説いている。また偈頌で「阿弥陀仏が何処にいるのかを思念し続けると、無念の境地に至り、身体から常に紫金光を発するようになる」とも言う。この頌は、懶翁恵勤が念仏者にあてた『示諸念仏人』という文献にも見られる。この『示諸念仏人』を参考にすれば、この偈頌は、「弥陀は自らの内に存するということを体得し、自性阿弥陀をこの世で顕現せよ」という意味に解釈できよう。本書と『示諸念仏人』の関係については、『示諸念仏人』の項を参照されたい。本書は、『懶翁和尚歌頌』（『韓国仏教全書』6 ）に収録されている。『懶翁和尚歌頌』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.130-141並びに『韓国古書総合目録』p.116を参照。
作成者名：山中行雄

東林十八高賢伝

書名よみ：とうりんじゅうはちこうけんでん
書名別名：蓮社十八賢、十八賢伝

著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都大蔵本（書写年不明、書写者不明、蔵経書院本、『卍続蔵』の底本）
写本奥書：1、十八賢伝、始不著作者名、疑自昔出於廬山耳、熙寧間嘉禾賢良陳令挙舜兪粗加刊正、大観初沙門懐悟以事迹疎略復為詳補、今歴考廬山集高僧伝及晋宋史、依悟本再為補治、一事不遺、自茲可為定本矣
刊本所在：1、万暦42（1614、増上寺）
刊本の奥書刊記：1、十八賢伝、始不著作者名、疑自昔出於廬山耳、熙寧間嘉禾賢良陳令挙（舜兪）粗加刊正、大観初沙門懐悟以事跡疎略復為詳補、今歴考廬山集高僧伝及晋宋史、依悟本再為補治、一事不遺、自茲可為定本矣
活字本所載書：『大正蔵』49（No.2035）、『卍続』135、『続浄』16
参考文献：松本文三郎「東林十八高賢伝の研究」（『大谷学報』86、1942）、深貝慈孝「往生伝・高僧伝解説―特に浄全続十六巻所収本について―」（『続浄』16）
解説：志磐の『仏祖統紀』26浄土立教志（『大正蔵』49、p.265）に『蓮社十八賢』、『蓮社百二十三人伝』、『不入社諸賢伝』が別個に収録され、『続浄』16所収の本書は武林寓生の黄汝亨の序文が付され、上記の三伝と竜眼李伯時の連社十八賢図の解説をまとめて『東林十八高賢伝』として所収している。本書の撰者は不明であり、よって撰述年代も未詳である。内容は廬山を中心に活動した僧侶や名士の伝記であり、慧遠、慧永、慧持、道生、曇順、僧叡、曇恒、道昞、曇詵、道敬、仏馱耶舎、仏馱跋陀羅、劉程之、張野、周続之、張詮、宗炳、雷次宗の18人が立伝されている。また『蓮社百二十三人伝』は曇翼以下代表的な7人の伝を載せ、『不入社諸賢伝』では陶淵明以下3人の伝を載せている。
作成者名：斉藤隆信

念仏歌

書名よみ：ねんぶつか
著者名：明眼
著者名よみ：みょうげん
著者名別名：百愚、雪厳石室、雪嵒
著者生没年：1646-1710
成立翻訳年：17c後半-18c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、景宗1（1721、東国大、『百愚随筆』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、上之元年辛丑（1721）秋、社日、方丈寓人申命耇題、助刻、水月大禅師定慧、（中略、開板の関係者名が列挙される）練板、修鏡
活字本所載書：『韓国仏教全書』9（『百愚随筆』に収録）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）
解説：本書『念仏歌』は朝鮮時代の禅僧明眼によって著された。明眼は無影の弟子であり、性聡の下でも学んだと伝えられている。明眼は仁祖24年丙戌（1646）7月生まれで65歳で入滅と伝えられており、本書以外にも、『般若波羅蜜多心経略疏連珠記会編』（『韓国仏教全書』9）、『現行法会礼懺儀式』（『韓国仏教全書』9）を著作したとされる。
　本書は、念仏を勧める詩で、明眼の文章を集めた随筆集『百愚随筆』に収録されている。七言からなる句は「南無仏」や「念仏」など、すべて「仏」で終わり末韻を踏んでいる。阿弥陀仏が一切衆生を成仏させるなど讃阿弥陀仏、我は信解心を持って人々に念仏を勧めるという勧念仏、国王や父母の恩に報いるための念仏など、多種多様な浄土教の関連事項が凝縮されて詩歌に詠われる。「始知衆生本成仏」という句もあるので、明眼は華厳思想の「性起説」で浄土教を理解していたのではないだろうか。
作成者名：山中行雄

念仏伽陀

書名よみ：ねんぶつかだ
著者名：徹悟（述）／了亮（編）／了梅（編）／了如（編）
著者名よみ：てつごぜんじ／りょうりょう／りょうばい／りょうにょ
著者名別名：際醒、訥堂、夢東／　／　／
著者生没年：1741（乾隆6）-1810（嘉慶15）／18c-19c／18c-19c／18c-19c
成立翻訳年：19c
成立地：中国
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-14-4
解説：徹悟禅師は、万寿寺粹如禅師の法嗣で南岳禅師から数えて39代目にあたる。また中国浄土宗13祖の内の第12祖とされる。清の僧侶で、諱は際醒、字は徹悟、一字訥堂、夢東とも号する。32歳の時、大病を患い、無常を観じて出家した。性・相二宗及び天台の三観十乗の旨に通達する。晩年になって浄土門に専念するようになり、臨終の際には「少説一句話、多念一声仏、打得念頭死、饒汝法身活」と示し、念仏しながら往生したと伝えられている。代表的な著作は『念仏伽陀』、『夢東遺集』等がある。生涯については『浄土堅聖録続編』1、『新続高僧伝』4-47、『蓮宗諸祖伝略』4等に記されている。
　本書は嗣法門人了亮・了梅・了如等によって編集されもので、『徹悟禅師語録』の巻下に収録されている。全体は阿弥陀仏の名号を讃嘆する偈頌から成り、「教義百偈」と「宗乗百偈」との2部があって、それぞれ100偈で構成されている。
　「教義百偈」は全体4字4句で、各句の最初は必ず「一句弥陀」から始まる。まず浄土経論に基づき、阿弥陀仏の名号を称えることによって浄土に往生することが、大乗仏教の法華・涅槃・般若・如来蔵の教義などと一致していると讃嘆し、馬鳴・龍樹を始め、印度と中国の浄土門を広めた祖師たちを讃嘆する。
　「宗乗百偈」も4字4句で、やはり各句は全て「一句弥陀」ではじまる。ただし、それに続く各偈の内容は禅宗の公案と玄機である。おそらくそれらの全てが阿弥陀仏の名号に収まることを述べようとしているのであろう。
作成者名：肖越

念仏感応伝

書名よみ：ねんぶつかんのうでん
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：14c-15c（？）
成立地：中国

巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
刊本所在：1、刊年不明（京都禅林寺）
刊本の奥書刊記：1、原本唐刻已壊破惜哉、故命工合紙改折本為冊子、期不朽、文政八年歳舎乙酉（1825）夏六月日、前衆頭、恬澄
活字本所載書：小笠原宣秀『中国浄土教家の研究』（平楽寺書店、1950）
参考文献：小笠原宣秀「禅林寺蔵『念仏感応伝』に就いて」（『竜谷学報』322、1938年、『中国浄土教家の研究』（平楽寺書店、1950）に採録）
解説：本書は現在のところ京都禅林寺に所蔵される刊本のみが確認されるだけで（巻尾欠）、中国浄土教の感応伝では現存する唯一の資料である。作者は不詳。編纂時期も不明ながら元の至正15年（1355）の伝が記録されてることなどから、小笠原によって明代初期の成立であろうと推定されている。題号にあるように念仏による感応のありさまを描写している。往生伝と類似しつつも性格を異にし、必ずしも臨終や往生を描いているわけではない。
　内容は、はじめに唐宋代に撰述された浄土教関係書籍の序文などを17種を採録し、ついで総計199の感応伝が示されている（巻尾を欠いているので実際には更に加増される可能性がある）。各伝はそれ以前の高僧伝や往生伝によりつつ、感応を受けた場面を中心に再構築されているようである。そのうちわけは、インドが10人、中国が189人であり、出家の僧・尼、在家の男・女の順に配列されている。もっとも古い伝は三国呉の康僧会であり、もっとも新しいものは元の文宗周の伝である。
作成者名：斉藤隆信

念仏鏡

書名よみ：ねんぶつきょう
書名別名：共生西方浄土念仏鏡
著者名：道鏡／善道
著者名よみ：どうきょう／ぜんどう
著者生没年：8-9c
成立翻訳年：9c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1,延宝2（1674、大谷大、大正大）
2,寛永19（1642、京大、高野山大）
3,万治3（1660、竜谷大）
4,延宝1（1673、立正大）
刊本の奥書刊記：1,原板在杭州雲棲蓮池大師処今重刻于莆田国歓寺蔵経堂、出蔵経管字函第三巻據重鍥念仏鏡敘、象緯麗天、晃曜莫踰於桂魄、波瀾疏河、源流悉匯於滄溟、是以万法唯心功実存于一念、千車合轍道不出乎総持、具最勝之妙門、脱輪迴之捷徑、其唯念仏乎、蓋自弥陀?現慈航超積劫之淪浄土門開法界結無遮之会、勢至念之而証円通、能仁称之而悲堪忍、大海会同帰、宝樹林中搖衆楽、十八賢共社、白蓮香裡顕真宗、悲智双行聖凡倶摂、蓋医王護世、仙方道訣皆靡、慧日当空、黒室昏衢頓破、変世界為黄金、位登不退、坐蓮華而見仏、果証無生、譬夫九曲明珠雖寸糸而可貫、百川衆味嘗一滴以皆通、欲枯業海、須念弥陀、彼教綱森羅、博之頗難契理、禅那寂照、修之恐渉岐途、豈若繫念彼仏不労弾指到西方（如賢）欲弘法施、用広是書、迺募貲於檀那、以重輝於剖剛、極知固陋、濫贅其文云、萬暦癸丑春衆華現瑞日、蓮山国歓崇福禅院釈子如賢和南謹識、惟心浄土宜承当自性弥陀触処彰、無苦無憂真極楽　　勿憎勿愛即西方、恒沙功徳本来具妙宝荘厳不可量、好個主人無量寿見聞声色露堂堂
2,清寧九稔歳次已亥孟秋月、冥生一葉記、奉聖州彰義寺前東五台臨壇大徳弘律沙門法広詳勘崇摂大夫検大保円教大師賜紫沙門知昭詳勘、開書鋪高家新彫印
3,（未調査）
4,（未調査）
参考文献：望月信亨「唐大行和尚と道鏡等の念仏鏡」（『浄土学』10,1936）、小笠原宣秀「求生西方浄土念仏鏡考」（『竜谷大学論集』353,1956）、三宅徹誠「念仏鏡について著者及び成立年代」（『印仏研』47-1,1998）、木村清孝「念仏鏡の一考察」（石上善応古稀記念論集『佛教文化の基調と展開』、2001）
解説：撰者道鏡の伝記は真福寺蔵の戒珠集『往生浄土伝』巻中に見えている。それによると相州日光寺の僧で、印仏の功徳によって往生したことを伝えている。またもう一人の撰者善道は不明（初唐の善導の往生伝が編入されていることから両者は時代的にみても別人であることは明白である）。本文中に大行の説を引用し、またその往生伝を記しているので、この撰述者は大行の影響を受け、大行が逝去した後に成立したことになるであろう。内容は11章（勧進念仏門、自力他力門、念仏得益門、已得往生門、校量功徳門、校量斎福門、疑謗得罪門、誓願証教門、広摂諸教門、釈衆疑惑門、念仏出三界門）からなる問答形式の構成である。中国浄土教概論のような書物であって、独自性に欠け、面白味が無い。経典では阿弥陀経を多く引く。釈衆疑惑門において当時精力的に活動していた三階教との優劣が述べられていることは特に注目されてよいだろう。
なお、本文中に大行の説を引用し、またその往生伝を記しているので、本書の撰述者は大行の影響を受け、大行が逝去した後に成立したことになるであろう。
作成者名：斉藤隆信

念仏警策

書名よみ：ねんぶつけいさく
著者名：彭際清
著者名よみ：ほうさいしょう
著者名別名：彭二林、彭紹昇、允初、尺木
著者生没年：1740（乾隆5）-1796（嘉慶1）
成立翻訳年：18世紀後半
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』21-14-4
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）、牧田諦亮『中国仏教史研究』（大東出版社、1984）。
解説：著者は、字は允初、尺木、知帰子と号した。彭際清とは菩薩戒を受けた時の法名である。江蘇省長州の士族家庭に生まれ、乾隆34（1769）進士となり、支県に選ばれたが、赴任しなかった。宋文森世隆、畢紫嵐奇、周安士夢顔と並び、清代の代表的な禅浄双修の居士とされる。最初は宋明の理学と道教の修練術を学んだが、仏法を聞いてから儒学と道学を捨てて仏法に専念した。浄土教に帰信した原因は、夫人の仏教信仰と、婦人の病身にあるという。彭の浄土思想は袾宏、真可、徳清、旭智らの思想を受けたほか、特に中国浄土教第9祖とされる実賢に私淑したという。「一日十時間の念仏・9時間の観仏・一時間の礼賛」という実修的な念仏修法を生涯に渡って修したという。彼の編集した『無量寿経』（諸漢訳の編集版）は当時の中国浄土教に大きな影響力を持ち、その浄土思想は後の楊文会などに強

い影響を与えた。また、『華厳念仏三昧論』1巻は、華厳思想に基づいて浄土念仏法門を解釈する書物で、中国清朝浄土教の代表的な著作である。多数の著作の中、浄土教系関係の書物として代表的な著作は『華厳念仏三昧論』、『無量寿経起信論』3巻、『観無量寿仏経約論』1巻、『阿弥陀経約論』1巻、『一乗決疑論』1巻、『華厳念仏三昧論』1巻、『居士伝』56巻、『善女人伝』2巻などがある。また彼の監修によって『浄土三経』・『省庵法師語録』2巻・『念仏警策』・『西方公据』などが刊行された。更に『浄土聖賢録』9巻も彼の提案によって編纂が始まり、息子の彭希涑によって完成された。

本書は、諸大乗経論のなか、念仏往生に関する重要な金言聖句を収録して、念仏往生の浄土教を説明するものである。上下2巻58項目からなる。

上巻では、まず、大乗経典より『無量寿経』の上輩往生段、『阿弥陀経』の一心不乱、『観無量寿経』の観仏法、『首楞厳経』の勢至菩薩念仏、及び『華厳経』の「賢首品」などの念仏に関する経文、更に龍樹菩薩の『大智度論』、馬鳴菩薩の『大乗起信論』、智顗の『浄土十疑論』、善導の『浄業専雑二修説』、飛錫の『念仏三昧宝王論』、永明の『万善同帰集』などの以前諸師の論書・手紙などから、念仏往生に関する重要な論説から33項目を収録する。

下巻では、達観、憨山、幽溪、袁宏道、袁中道、無異、三峯、智旭、截流、覚明妙行、張光緯、翁叔元、思齊らの著作の中から、念仏往生に関する重要な記述を選んで収録する。

作成者名：肖越

念仏作法

書名よみ：ねんぶつさほう
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：14c
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、嘉靖8（1529、閔泳珪氏蔵）
刊本の奥書刊記：1、西餘斎蔵嘉靖八年（1529）全羅道光陽地万寿菴補刻合綴
活字本所載書：『高麗仏籍集佚』（東国大出版部、1985）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、鎌田茂雄『朝鮮仏教史』（東京大学出版会、1987）
解説：本書『念仏作法』の成立年、編者等は不明。しかし高麗後期の天台僧、無寄雲黙の著作『釈迦如来行述頌』（『韓国仏教全書』6収録）と『天台末学雲黙和尚警策』（『韓国仏教全書』6収録）を含むことから、少なくとも高麗後期以降を成立年代の上限に設定できる。さらに本書は、『仏説八関斎戒秘密求生浄土心要』という典籍を含んでいる。「八関斎」は在家の八戒を与える斎会であり、高麗時代によく行われたが、李朝ではまったく行われていない。したがって李朝期に本書が編纂される可能性は、かなり低いと見ていい。以上から高麗末期に本書が成立したと推測できる。また上記の無寄雲黙自身、阿弥陀信仰の行じていたという伝承もある（『朝鮮仏教史』p.178）が、現存資料のみからは、彼が『念仏作法』の著者であるとは断定できない。

本書は、34種にも渉る多種多様なテキストを含むアンソロジー的な典籍である。タイトルが示すように、念仏儀礼で読み上げるべき阿弥陀仏への讃文などが収められているが、それ以上に忠節・孝行・報恩・戒殺生といった徳目や地獄に関する典籍が集められている。したがって、本書は在俗・出家者に向けた道徳書としての側面も併せ持つと言えよう。

本書冒頭の「孝順文」という章では、『法苑珠林』第49忠孝篇や『一験冥報記』などの典籍から忠義・孝行・報恩に関する文章を抄録したもの。次章「誡殺放生文」では、『布袋和尚誡殺頌』など殺生を戒める典籍などが列挙される。

次に本書のタイトルでもある「念仏作法」が続く。この章では、一切仏への帰命を述べる「啓請」、続いて「大慈菩薩讃仏懺悔回向発願全句」を始めとする諸々の懺悔・回向・発願文が挙げられ、さらに「弥陀十相讃」・「諸仏讃」といった讃文が続く。讃文類の後、「義湘和尚投師礼」・「竜舒福恵説」といった古の高僧たちの典籍が引用される。

「念仏作法」の章の後で、上記の無寄雲黙の『釈迦如来行述頌』が続く。この典籍は仏伝文学であるが、釈迦の伝道過程を天台の五時教判を用いて説明するところが、特徴的である。

続いて、『仏説八関斎戒秘密求生浄土心要』と『十王経』の二つの偽経が引かれる。前者は、往生のための「八関斎」の方法を述べ、後者は地獄の記述、ならびに地獄に堕ちるのを避けるために仏の帰命することを述べる偽経である。次いで無寄雲黙の『天台末学雲黙和尚警策』が続くが、この典籍は、僧に対して、施主大衆の恩を忘れずに出家僧の本分を守って修行に励むことを求めるものである。この典籍のあとも『明教嵩禅師尊僧篇』など6種の典籍がつづくが、これら7つは全て出家僧としてのあるべき姿を説くものである。

本書『念仏作法』は、『韓国仏教全書』に収録されておらず、唯一『高麗仏籍集佚』にのみ収められている。『高麗仏籍集佚』は、個人蔵の古刊本を謄写したものなので、校訂作業はなされていない。無寄雲黙と彼の著作については『韓国仏書解題辞典』pp.131-132および『朝鮮仏教史』p.178を参照。

作成者名：山中行雄

念仏三昧宝王論

書名よみ：ねんぶつざんまいほうおうろん
書名別名：三昧宝王論、宝王論
著者名：飛錫
著者名よみ：ひしゃく／ひせき
著者生没年：不詳
成立翻訳年：774（大暦9）以降
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
刊本
刊本所在：1、紹武1（1646、大谷大、駒沢大、長谷寺、清涼寺）
2、慶安1（1648、仏教大、東北大、大正大、大谷大、法然院）
3、元禄13（1700、仏教大、大正大、竜大、大谷大）
4、享保6（1721、仏教大、東大東文研、大正大、東洋大、駒沢大）
5、乾隆49（1784、中国国家図書館、湖南図書館、竜谷大）
6、中華民国19（1930、駒沢大）
刊本の奥書刊記：1、丙戌（1646）冬日古吳 比丘正知識於祖堂（『浄土三論』合刻版）
2、慶安元歳（1648）八月吉祥日、長谷川市郎兵衛開板（無刊記の再刷本あり）
3、元禄十三庚辰（1700）下旬、増上寺門前、美濃屋又右衛門、板行（無刊記の再刷本あり）

4、享保六刄歳（1721）仲秋（無刊記の再刷本あり）
5、乾隆四十九年歳次甲辰（1784）秋日京都阜成門外衍法寺、比丘了慰敬募、重刊板存本寺
6、中華民國十九年歳 在庚午（1930）爲、張母周太夫人七十生日敬刊此卷 、孫鴻猷二十元鄧啟 曾維藩馬彙彝德 蔣秉熺羅素誠曾紀雲各兩元王傳鈞王傳鎏徐文霨各拾元清河堂二十八元、以上共九十元、計刻此編共付刻資八十元餘資撥充印費記、北平刻經處附識
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1983）、『浄土宗全書』6
現代語訳書：唐中期仏教思想研究会編『念仏三昧宝王論の研究』（「大正大学総合仏教研究所研究叢書」22、ノンブル社、2009）
参考文献：曽根宣雄「『念仏三昧宝王論』における仏身論について」（『仏教論叢』48、浄土宗、2004）、石川琢道「飛錫の実践論―称名念仏と般舟三昧―」（『仏教論叢』48、浄土宗、2004）、伊吹敦「念仏三昧宝王論に見る禅の動向」（『東洋学研究』41、東洋大学東洋学研究所、2004）、吉水岳彦「飛錫の「是心作仏是心是仏」釈」（『仏教論叢』50、浄土宗、2006）、小林順彦「唐中期における天台の動静―楚金・飛錫を手掛かりとして―」（多田孝正博士古稀記念論集刊行会編『多田孝正博士古稀記念論集　仏教と文化』山喜房仏書林、2008）、郡嶋昭示「飛錫の衆生論」（『大正大学総合仏教研究所年報』31、大正大学総合仏教研究所、2009）、唐中期仏教思想研究会編『念仏三昧宝王論の研究』（「大正大学総合仏教研究所研究叢書」22、ノンブル社、2009）、于海波『清代浄土宗著述研究』（巴蜀書社、2009）、加藤弘孝「『念仏三昧宝王論』の撰述年代―飛錫の事跡に関連して―」（『仏教大学大学院紀要―文学研究科篇―』39、仏教大学大学院、2011）
解説：著者の飛錫は唐中期の僧であり、初め律を学び、後に楚金(689－758)と共に天台を学び、止観に精通したという。終南山紫閣峯草堂寺に住することが多く、天宝3年（744）以後は千福寺法華道場において法華三昧を行じた。広徳2年（764）、不空（705－774）の奏上で大興善寺に大徳49人が置かれた際には、この中に選ばれている。以降、不空の訳経場において『仁王護国般若波羅蜜多経』2巻、『大乗密厳経』3巻、『大集大虚空蔵菩薩所問経』8巻などの翻訳に従事した。伝記資料としては、『宋高僧伝』、『釈門正統』、『仏祖統紀』、『浄土聖賢録』などがある。

また飛錫の著作には、本書の他、『誓往生浄土文』1巻、『無上深妙禅門伝集法宝』1巻、『念仏五更讃』1巻、『西方讃文』1巻、『往生浄土伝』5巻、『紫閣山莫碑』1巻などが知られるが全て散逸している。

本書の成立年代は、大暦9年（774）以降であり、それには不空の入寂が契機になっている可能性がある。

本書の主旨は、諸禅三昧中の宝王である念仏三昧の修行を3巻に分けて勧めるところにある。上巻では、未来仏を念ずることを7門に分類して標榜する。すなわち（1）念未来仏速成三昧門、（2）嬖女群盗皆不可軽門、（3）持戒破戒但生念仏想門、（4）現処湯獄不妨受記門、（5）観空無我択善而従門、（6）無善可択無悪可棄門、（7）一切衆生肉不可食門である。『妙法蓮華経』の「常不軽菩薩品」に基づき、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を尊重すべきことを強調している。

中巻では、現在仏を念ずることを6門に分けて説いている。6門とは、（8）念現在仏専注一境門、（9）此生他生一念十念門、（10）是心是仏是心作仏門、（11）高声念仏面向西方門、（12）夢覚一心以明三昧門、（13）念三身仏破三種障門である。これらにおいては、『十住毘婆沙論』、『釈華厳経論』の「易行品」などの経論に基づき、難行道、易行道の差異を分類する。現在仏を念ずるのは、阿弥陀仏の本願力による成就しやすい法門だからである。

下巻では、過去仏を念ずることを標榜して7門とする。（14）念過去仏因果相同門、（15）無心念仏理事双修門、（16）了心境妄想不生門（17）諸仏解脱心行中求門、（18）三業供養真実表敬門、（19）無相献華信毀交報門、（20）万善同帰皆成三昧門である。ここでは、『観仏三昧海経』本文中に「念ずるところの仏は胎内を出でた獅子王のようであり、仏果と譬える。仏を念ずる人は胎内にいる獅子王のようであり、仏子だと譬える。二つは因果においては差異があるが、仏としては異なりがないと論ずる」とあるのを引用し、過去仏と衆生の因果が同じである道理を述べている。

なお智旭（1599-1655）編の『浄土十要』第5巻に収録されている節略本に関しては、『浄土十要』項目を参照せよ。
作成者名：肖越/加藤弘孝

念仏百問

書名よみ：ねんぶつひゃくもん
著者名：悟開
著者名よみ：ごかい
著者生没年：？－1830（道光10）
成立翻訳年：1825（道光5）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
刊本
活字本所載書：『卍続蔵』2-14-4
参考文献：『浄土宗大辞典刊行会』(浄土宗大辞典編纂委員会、1980)。
解説：悟開は蘇州の人。俗姓は張氏、字は豁然、雲水道人と号して、晩年に霊巌の宝蔵庵に住し、1830年9月20日に念仏しながら、往生したという。清末の浄土教者として知られる。浄土教に関する著作としては、本書の他に『浄業初学須知』、『浄業初学須知』が知られる。日本には、1866年の（同治5）刊本がある。

本書は、悟開が、在家の浄土教信者の浄土教理の理解を助けるため、大乗経典に説く教理と浄土教の経典に説く浄土教理との関わりを中心に、自ら設けた100の質疑に対して平易な回答した書物である。その中、『観無量寿経』に説く「下品往生」は事の一心の境なので、事の一心の境に遂げなければ往生できないという。また、是心是仏・一心不乱・浄業三福・念仏三昧・禅浄関係・四種念仏、および念仏と往生の関わり・念仏と諸功徳との関わり、念仏と読誦大乗経典との関わり、『阿弥陀経』と『金剛般若経』との優劣、更に、『無量寿経』に関しては、三輩往生段に説かれている菩提心と往生の関わり、また、五悪段と大乗経典の関わりなどの問題を取り上げて回答する。
作成者名：肖越

念仏要門

書名よみ：ねんぶつようもん
書名別名：念仏因由経
著者名：普照知訥（？）
著者名よみ：ふしょうちとつ
著者生没年：1158-1210
成立翻訳年：12c-13c（？）
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、康熙28/乾隆14（1689/1749、韓国高麗大）

2、乾隆34（1769、韓国東国大）
刊本の奥書刊記：1、己巳年 （1689/1749）直指寺開刊
2、乾隆三十四年己丑（1769）四月日、金麗玉書（中略、以下、施者名列挙）安州隠寂寺開板、移鎮香山普賢寺
活字本所載書：小野玄妙『仏教の美術と歴史』pp.1214-1216（大蔵出版、1937）、『韓国仏教全書』6、『韓訳大蔵経』153（「韓国高僧」3）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、小野玄妙『仏教の美術と歴史』（大蔵出版、1937）、高翊晋『韓国撰述仏書の研究』（韓国民族社、1987）韓京洙「普照知訥禅師の浄土観」（『印仏研』39-1、1990）、韓泰植「韓半島で作られた疑偽経について」（『印仏研』45-1、1996）
解説：『念仏要門』の著者は、小野玄妙編本は普照禅師（知訥の諱号）としている。しかし『韓国仏教全書』は、これは仮託されたものであるとして、著者不明としている。『韓国仏書解題辞典』も著者に関しては疑問があるとする。また、小野玄妙が見た原本が散逸し、現在のところ見つかっておらず、このことも知訥真作説に不利に働いているようである。『韓国仏書解題辞典』の後でも、偽作説（高翊晋書pp.249-254と韓泰植論文）と知訥真作説（韓京洙論文）の両者が出されている。韓国国内では、偽作説のほうが有力のようであるが、真作説・偽作説の両者とも決定的な根拠を呈示できていないので、今後のさらなる研究が望まれる。

本書は、十悪八邪を断ずることなく、五戒十善等を修めずに西方浄土に往生を望む人々の誤りを批判し、十種念仏を修めることを勧めている。

十種念仏とは、（1）戒身・（2）戒口・（3）戒意・（4）動憶・（5）静憶・（6）語持・（7）黙持・（8）観想・（9）無心・（10）真如からなる。また、「醍醐味を得ても、宝器でないなら貯蔵は難しい」といい、戒を遵守して、身口意を清浄に保つことを説く。さらに、「無念の一念が円明（完全な明智）を覚る。円明は思慮を超絶しており、これこそが真の念仏である」ともいい、禅の影響を伺わせる念仏論が説かれている。

本書は、『修三密証念仏三昧門』と『求生行門要出』とともに『念仏因由経』の名のもとに編纂されたようである。のちに振虚捌関の『三門直指』に全文引用される。ちなみに、やや煩瑣ではあるが、本書自体が『念仏因由経』、本書とその他2編とともに編纂されたものを『念仏法門』と称されることもあるが、ここでは『韓国仏教全書』に従い、本書を『念仏要門』、本書とその他2編とともに編纂されたものを『念仏因由経』として扱った。
作成者名：山中行雄

念仏要門科解

書名よみ：ねんぶつようもんかげ
著者名：宝鼎
著者名よみ：ほうてい
著者生没年：20c前半
成立翻訳年：1922
成立地：朝鮮半島（日本統治下）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、韓国松広寺所蔵本（1922、書写者不明）
写本奥書：1、釈元二千九百四十八大正十一年壬戌（1922）春仏涅槃日曹渓山宝鼎茶松室中謹書
活字本所載書：『韓国仏教全書』12
解説：本書『念仏要門科解』の著者宝鼎は、日本植民地時代の曹渓宗の僧。伝記などが残っておらず、生涯については不明な点が多い。しかし『韓国仏教全書』に11もの著作や編著が収録されており、碩学の人物であったことが伺われる。

本書は、『念仏要門』（『韓国仏教全書』6に収録）の注釈書。『念仏要門』の著者は、普照知訥と伝えられており、本書『念仏要門科解』もまた『念仏要門』を普照智訥に帰している。しかし現在韓国では『念仏要門』の著者は普照知訥ではないとする偽作説のほうが有力である。この点については『念仏要門』の項を参照されたい。ともかく本書の著者宝鼎は、『念仏要門』は普照知訥によって著されたという立場で注釈している。

本書の冒頭部で、普照知訥の伝記が簡単に紹介された後、『念仏要門』中の一語一句が丹念に語義注釈される。『念仏要門』の大胆な解釈は見られないが、幾つか注目すべき解釈もある。例えば『念仏要門』で説かれる十種念仏中に、貪嗔痴慢を断じて無思になって修する念仏法「戒意念仏」があるが、この戒意の「意」を八識説の第六と七識、すなわち意識と末那識で説明しようとする。本書には、このような独自性が散見される。
作成者名：山中行雄

栢庵浄土讃

書名よみ：はくあんじょうどさん
書名別名：浄土讃百詠
著者名：栢庵性聡
著者名よみ：はくあんせいそう
著者生没年：1631-1700
成立翻訳年：1694頃
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、韓国松広寺蔵本（大正15（1926）、綺山子書写）
写本奥書：1、大正十五年丙寅（1926）夏、使本寺康性天上人、據泰安寺梁映月和尚蔵板而謄写也、綺山子識
活字本所載書：『韓国仏教全書』8
参考文献：李能和『朝鮮仏教通史』（国書刊行会、1974、初版：新文館（京城）、1918）、『朝鮮人名辞書』（朝鮮総督府中枢院、1937）、東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）
解説：『栢庵浄土讃』は、禅僧栢庵性聡の晩年期の作品である。本文中に「吾生六十又三年」と言われるので、性聡が63歳の頃に著したと考えられる。栢庵性聡は13歳で出家し、その後30歳ころから各地を転々とし詩家と交遊した。韓国では禅僧としてのみならず詩家としても有名である。また『現行法会礼懺儀式』などを著した明眼も性聡の下で学んだ。

四韻による百余の詩は、極楽浄土の絢爛な風景、老いと病苦に苛まれながらも静謐に隠棲する性聡自身、そして彼の往生への憧憬を詠い上げている。絢爛な浄土の風景描写とは対照的に、自らの病身を「病骨誰憐鶴痩形」と、やや自嘲気味に表現しつつ「傍人莫笑吾疎散　神往西方形暫留」といい、自分の精神はもう浄土にあるが、体は暫くこの世に留まっていると、西方往生への憧憬を味わい深く表現している。なお、本書中の極楽の記述は「浄土三部経」全般に基づくものであるが、強いて言えば「阿弥陀経」の極楽描写から多く受けているように思われる。
作成者名：山中行雄

白衣解

書名よみ：びゃくえげ
著者名：恵永
著者名よみ：ええい
著者名別名：普慈国尊、弘真
著者生没年：1228-1294
成立翻訳年：1267頃
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、韓国東国大蔵本（書写年不明、書写者不明）
写本奥書：1、（奥書なし）
活字本所載書：『韓国仏教全書』6
参考文献：東国大学校仏教文化研究所『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1983）、李能和『朝鮮仏教通史』（国書刊行会、1974、初版：京城、1918）
解説：恵永は、13世紀中期から後期にかけて活躍した瑜伽宗の高僧。恵永というのは諱で、法号は普慈国尊、諡号は弘真と伝えられている。

本書『白衣解』の現存写本は、巻頭と巻末が欠落しており、著者名・成立年・奥書等は不明である。『韓国仏教全書』もこの写本を底本としているので、『韓国仏教全書』収録本も巻頭と巻末は欠如している。しかし普慈国尊贈諡弘真碑銘（『朝鮮仏教通史』下、p.176）によれば、本書は、恵永が柳公璥という人物の要請を受け、『白衣礼懺』という書物の注釈として著したものであると伝えられている。

『白衣礼懺』という典籍は現存しておらず、本書『白衣解』によってのみ、ある程度本文が回収できるが、前述のように本書自体に欠落があるので、その全容は不明である。とはいえ回収される文章から、『白衣礼懺』は、補陀洛迦山に住む白衣観音菩薩に対する帰命文と讃頌、真言、そして殺害・偸盗などの業障の滅と無量寿国往生を願う後懺悔発願文で構成されていたと分かる。『白衣礼懺』は、阿弥陀仏でなく観音菩薩に無量寿国往生を願うという珍しい典籍であるが、願往生という点ではやはり浄土文献のカテゴリーに入るべきものである。

本書『白衣解』はこの『礼懺』の簡潔な注釈書である。本書は、基本的に経典を引用しつつ語句を解説するというスタイルを取る。例えば補陀洛迦山の説明には『華厳経』、観音菩薩の三十二相は『大薩遮尼乾子所説経』、「一生補処」は『阿弥陀経』といった具合に様々な経典が引用される。上記以外に引用される経典は、『観無量寿経』・『金剛頂経』・『涅槃経』・『維摩経』・『灌頂経』などである。また三千大世界の説明には『倶舎論』が言及される。

本書の記述は、概ね簡潔であるが、非常に高度な解説を展開することもある。例えば「三空定観」という観音菩薩の観想を三性説をもって説明し、「八諦門」という語句を「真俗二諦にそれぞれ四種がある」と二諦説で解釈するなど、仏教哲学の理論が用いられることもある。
作成者名：山中行雄

白衣礼懺

書名よみ：びゃくえらいさん
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：朝鮮半島
漢和：漢文
解説：『白衣礼懺』という典籍は現存しておらず、『白衣解』（『韓国仏教全書』6収録）という本書に対する注釈書によってのみ、ある程度本文が回収できる。回収される文章から、『白衣礼懺』は、補陀洛迦山に住む白衣観音菩薩に対する帰命文と讃頌、真言、そして殺害・偸盗などの業障の滅と無量寿国往生を願う後懺悔発願文で構成されていたと分かる。『白衣礼懺』は、阿弥陀仏でなく観音菩薩に無量寿国往生を願うという珍しい典籍であるが、願往生という点ではやはり浄土文献のカテゴリーに入るべきものである。

本書に関する、その他の書誌情報は、『白衣解』の項目を参照されたい。
作成者名：山中行雄

仏説阿弥陀経要解

書名よみ：ぶっせつあみだきょうようげ
書名別名：阿弥陀経要解、弥陀要解
著者名：智旭
著者名よみ：ちぎょく
著者名別名：素華、八不道人、蕅益、西有沙門
著者生没年：1599（万歴29）-1655（順治12）
成立翻訳年：1653（順治12）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
刊本
刊本所在：1、清光緒11（1885、中国国家図書館）
2、清光緒20（1894、中国国家図書館）
3、清光緒23（1897、中国国家図書館）
4、民国14（1925、中国国家図書館）
5、民国22（1933、中国国家図書館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』37（No.1762）
参考文献：郭朋『中国仏教思想史』（福建人民出版社、1995）、劉保金『仏経解説辞典』（河南大学出版社1997）、震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：智旭は明の四大高僧の一人として知られている。字は蕅益、または朴華で、自ら八不道人、また西有沙門と号した。智旭は最初儒学を学び、『闢仏論』など十数篇の仏教批判の書物を書いたが、17歳の時、袾宏の『自知録』と『竹窓随筆』などを読み、以前書いた書物を焼いて、仏法を学び始めた。天台の禅観と唯識を学んだが、晩年には専ら浄土の教えを修めたと言われている。『梵網合註』・『大仏頂首楞厳経文句』・『法華会義』・『楞伽義疏』・『阿弥陀経要釈』・『閲蔵知津』・『霊峰宗論』などの著作が知られている。

さて、智旭は重要な浄土系書物の中、10人の書物13冊を指定し、『浄土十要』として編集した。本書はその『浄土十要』の第一要にあたる。

本書は天台の五重玄義（釈名・弁体・明宗・力用・教相）に基づき『阿弥陀経』の語句を注釈するものである。その中、「弁体」では、本経は天台の実相を体とすると説く。また第三の「明宗」では、袾宏の『阿弥陀経疏鈔』に説いている信・願・行の教理を宗となすと述べる。その中、「信」では信自・信他・信因・信果・信事・信理という六信をあげる。「信自」とは自分の自性は仏の自性と同じと信じること、「信他」とは他方仏としての阿弥陀仏の真実の願と『阿弥陀経』に説いている六方諸仏の誠実言を信じることであり、釈迦仏の教えを信じることである。「信因」とは

散乱の心で称名念仏しても成仏の種となるので、まして一心に念仏すれば必ず浄土に往生できると信じることである。「信果」とは浄土の諸上善人は皆念仏三昧によって往生したと信じること。「信事」とは極楽浄土は確かに過十万億土に存在するということを信じること。それに対して「信理」とは十万億国土の荘厳は実際には我の心が現すものであると信じることであると述べる。すなわち「全事即理・全妄即真・全修即性・全他即自」となる。

次に「願」とは「厭離娑婆欣求極楽」であるという。「行」ではすべての行の中で最も簡易かつ効果的なのは称名念仏と説く。そして「信」と「願」の有無によって往生が決まり、「行」である称名の工夫の深さ次第で品位の高低が決まるとも述べる。また信・願を持ちながらの称名念仏は了義教であると示し、念仏は一乗の真因とするが、この考え方はそれ以降の中国浄土教に多きな影響を与えた。

次の「力用」では、本経の力用は往生して不退位になることと説く。称名念仏して事一心不乱の位になれば方便有余土に往生し、理一心不乱の位になれば実報荘厳土（また分証常寂光ともいう）に往生し、無明を断じ尽くせば究竟常寂光土に往生できるとする。

更に本経の「経相」は、釈迦仏が無問自説ですべての衆生を往生させることであるとのべ、最後に経文を一句ずつ解釈して終わる。

作成者名：肖越

仏説観無量寿仏経略論

書名よみ：ぶっせつかんむりょうじゅぶつきょうりゃくろん
著者名：楊仁山
著者名よみ：ようにんざん
著者名別名：楊文会
著者生没年：1837（道光17）-1911（宣統3）
成立翻訳年：20c
成立地：中国
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『楊仁山全集』（黄山書社、2000）
参考文献：『楊仁山全集』（黄山書社、2000）、震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）、陳継東『清末仏教の研究―楊文会を中心として―』（山喜房仏書林、2003）
解説：楊仁山は中国近代仏教復興の祖といわれる清の代表的な居士である。27歳の時に『大乗起信論』を授けられたことによって、仏門にはいた。彼は日本の仏教学者南条文雄との親交によって、中国ではすでに失われたが、日本には残っている典籍を中国で刊行し、また日本の『卍続蔵』に序文を書いた。同治4年（1865）、金陵に「金陵刻経処」を創立し、50年近くにわたって金陵刻経処の刻経事業を主宰し、中外の仏教典籍を刊行する事業を行った。宣統2年（1910）、彼は「報告同人書」に大蔵経編纂に関する意見を述べ、清朝に編纂された『四庫全書提要』に倣って、まず大蔵経の「提要」を編集し、次に全大蔵経の完成の橋掛かりとして、『大蔵輯要』の編纂を呼びかけた。そして日本の『卍続経』から重要な典籍を選び、それらを編纂して『大蔵輯要』とした。門下には太虚・諦閑などの有名な僧侶もいるし、欧陽漸・梅光羲など当時の有名な在家仏教学者もいる。代表的な著作は『大乗起信論英訳』（合訳）、『観無量寿経略論』などがあり、その遺作は『楊仁山全集』、『楊仁山遺作』に収録されている。

本書は『楊仁山全集』4に収録され、大乗仏教の教理をおさえながら、善導の『観経疏』も参考にしつつ『観無量寿経』全体の文句の単純な解釈を行っている。

作成者名：肖越

仏説大阿弥陀経

書名よみ：ぶつせつだいあみだきょう
書名別名：無量寿経王日休会集本
著者名：王日休
著者名よみ：おうにっきゅう
著者名別名：王龍舒、龍舒居士、虚中
著者生没年：？-1173（乾道9）
成立翻訳年：1160（昭興30）
成立地：中国
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『大正蔵』12
解説：王日休は南宋龍舒（現在安徽省舒城）の人で、字は虚中である。日休とも、龍舒居士とも号す。高宗の時（1127-1162）に、国学の進士に任じ、『六経訓』という数十万言の著作を著わしたが、ある日、自分の著作は全部過去の業習であるとして、それらをすべて捨てて仏法に帰依し、素食して念仏門を専修する。彼の『龍舒浄土文』はそれ以降の中国浄土教に大きな影響をもつこととなった。後の中国浄土教第13祖印光もその『龍舒浄土文』を読んで後に浄土門に帰したという。

本書は既に存在していた〈無量寿経〉漢訳5訳の内、唐訳を除いた他の4訳を一つに合糅したものである。ただし、主としては康僧鎧訳『無量寿経』を底本としている。願文は康僧鎧訳と同じく48願である。編集の仕方はなるべく難解な文言を避けて、分かりやすい言葉を用いる。また康僧鎧訳を底本としつつも、他の訳に存在して康僧鎧訳に見られない箇書はこれを取り入れ、康僧鎧訳と他の3訳の両者に見られるが、互いに異なっている場合は現代の言葉に近い方を採るという編集方針を示している。全体は56品からなる。即ち（1）法会大衆、（2）阿難問発、（3）五十三仏、（4）法蔵本因、（5）大願問仏、（6）四十八願、（7）願後説偈、（8）初修善行、（9）親近諸仏、（10）願成作仏、（11）蜎蠕亦度、（12）光明独勝、（13）十三仏号、（14）阿闍世王、（15）地平気和、（16）講堂宅宇、（17）宝池大小、（18）蓮華化生、（19）丐者比類、（20）澡雪形体、（21）澡畢進業、（22）池流法音、（23）池岸華樹、（24）樹音妙楽、（25）自然飲食、（26）景象殊勝、（27）道場宝樹、（28）宝網音香、（29）蓮華現仏、（30）大会説法、（31）十方聴法、（32）観音発問、（33）菩薩出供、（34）菩薩功徳、（35）泥？去者、（36）光明大小、（37）恩徳無窮、（38）仏寿人数、（39）遞次作仏、（40）仏智無極、（41）独無須弥、（42）十方称讃、（43）三輩往生、（44）必修十善、（45）復有三等、（46）一生補仏、（47）大会宝池、（48）世人極苦、（49）五道昭明、（50）寿数随意、（51）八端検束、（52）衆見仏相、（53）疑城胎生、（54）菩薩往生、（55）聞法因縁、（56）正法難聞である。

本書は〈無量寿経〉の普及という面からすると大いに評価されるが、恣意的に編集した箇所も見られ、批判されることもある。三輩段の中・下輩には菩提心が説かれるにもかかわらず、本書ではそれを省く。明代の雲棲袾宏が指摘するようにこの他にも経文の順序の入れ替えや内容の削除が多く問題が生じているのは否定できない。よって雲棲袾宏はこれを採用せず、『無量寿経』を刊行して流通することにした。ただし、彼の『阿弥陀経疏鈔』に〈無量寿経〉を引く際には本書を用いる。

作成者名：肖越

仏説大乗無量寿荘厳清浄平等覚経

書名よみ：ぶっせつだいじょうむりょうじゅしょうごんびょうどうかっきょう
著者名：夏蓮居
著者名よみ：かれんきょ
著者名別名：夏継泉、溥斎、渠園
著者生没年：1884（光緒10）-1965（中華人民共和国17）
成立翻訳年：20c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄土五経読本』（三重浄宗学会、2001）
解説：夏蓮居は中国現代浄土教の著名な居士として知られている。清朝雲南省の提督夏辛酉の長男として生まれ、山東省鄆城に住した。本名は夏継泉、字は溥斎で、渠園と号す。中年から仏道に入り、名前を夏蓮居と変えた。20世紀中国の著名な仏教学者で、「南梅北夏」（南には梅光羲、北には夏蓮居）と尊称されている。民国1年（1912）、仏友梅光羲（当時山東省高等検察庁検察長）とともに当時の著名な浄土教の僧侶明慧のもとで仏教に帰依して受戒した。

夏蓮居は彼の『浄修捷要』の序文に、浄土門は易行であるが非常に信じがたいもので、もし浄土の「教海」を探らなければ、その真髄が分からないとしている。「教海」とは『無量寿経』を始めとする「浄土三部経」のことであるが、当時の中国の仏教界では、主に羅什訳の『阿弥陀経』のみが読まれており、それよりも詳細に翻訳された玄奘訳を読んでいる者はかなり少ないという現実があった。また〈無量寿経〉にも5訳があるが、内容的に相違も大きく、理解が大変であることから、それらを読むことさえ殆どなされていない状況であった。そのような中にあって、〈無量寿経〉漢訳5本の合糅編集本を意図して作成されたのが本書である。確かにそれまでにも宋代の王日休の再編集本を始め、すでに3種の編集本があったが、いずれにしても原訳と合致しない箇所があるか、5種すべての漢文訳を参照していないという理由で、夏蓮居は5訳に基づき新たに『仏説大乗無量寿荘厳平等覚経』を編集したのである。

全体は48章から成る、即ち（1）法会聖衆、（2）徳遵普賢、（3）大教縁起、（4）法蔵因地、（5）至心精進、（6）発大誓願、（7）必成正覚、（8）積功累徳、（9）円満成就、（10）皆願作仏、（11）国界厳浄、（12）光明徧照、（13）寿衆無量、（14）宝樹徧国、（15）菩提道場、（16）堂舎楼観、（17）泉池功徳、（18）超世希有、（19）受用具足、（20）徳風華雨、（21）宝池仏光、（22）決証極果、（23）十方仏讃、（24）三輩往生、（25）往生正因、（26）礼供聞法、（27）歌嘆仏徳、（28）大士神光、（29）願力宏深、（30）菩薩修持、（31）真実功徳、（32）寿楽無極、（33）勧諭策進、（34）心得開明、（35）濁世悪苦、（36）重重誨勉、（37）如貧得宝、（38）礼仏現光、（39）慈氏述見、（40）辺地疑城、（41）惑尽見仏、（42）菩薩往生、（43）非是小乗、（44）受菩提記、（45）独留此経、（46）勤修堅持、（47）福慧始聞、（48）聞経獲益である。

本経は「後期無量寿経」の康僧鎧訳を主とし、後の唐訳と宋訳の本願思想と大乗菩薩思想を受けながら、その一方で「初期無量寿経」と後期の『大乗無量寿荘厳経』の両者に往生の必要条件として説かれる十善戒も取り込むということを行っている。また、願文の分け方については四十八願を基本としつつ、「初期無量寿経」の二十四願経に対応するため24段に分ける。文辞の方も漢文原訳よりかなり読みやすくなっている。

そのため、仏教界の中では批判的な意見があったものの、1980年代以降、台湾を始め中国大陸でも非常広く受け入れられるようになってきた。元々注目されていなかった〈無量寿経〉が一般庶民の間に誰でも読誦されるに至ったという点で、本書編纂の意義は少なくないといえる。今日では1日に本経を数回読む人も珍しくなくなっている。
作成者名：肖越

仏説無量寿経

書名よみ：ぶつせつむりょうじゅきょう
書名別名：無量寿経彭紹昇会集本
著者名：彭紹昇
著者名よみ：ほうしょうしょう
著者名別名：彭際清、彭二林、允初、尺木
著者生没年：1740（乾隆5）-1796（嘉慶1）
成立翻訳年：18c
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄土五経読本』
参考文献：陳継東『清末仏教の研究－楊文会を中心として－』（山喜房仏書林、2003）
解説：著者は、字は允初、尺木、知帰子と号した。彭際清とは菩薩戒を受けた時の法名である。江蘇省長州の士族家庭に生まれ、乾隆34（1769）進士となり、支県に選ばれたが、赴任しなかった。宋文森世隆、畢紫嵐奇、周安士夢顔と並び、清代の代表的な禅浄双修の居士とされる。最初は宋明の理学と道教の修練術を学んだが、仏法を聞いてから儒学と道学を捨てて仏法に専念した。浄土教に帰信した原因は、夫人の仏教信仰と、婦人の病身にあるという。彭の浄土思想は袾宏、真可、徳清、旭智らの思想を受けたほか、特に中国浄土教第九祖とされる実賢に私淑したという。「一日十時間の念仏・九時間の観仏・一時間の礼賛」という実修的な念仏修法を生涯に渡って修したという。彼の編集した『無量寿経』（諸漢訳の編集版）は当時の中国浄土教に大きな影響力を持ち、その浄土思想は後の楊文会などに強い影響を与えた。また、『華厳念仏三昧論』1巻は、華厳思想に基づいて浄土念仏法門を解釈する書物で、中国清朝浄土教の代表的な著作である。

多数の著作の中、浄土教系関係の書物として代表的な著作は『無量寿経起信論』3巻、『観無量寿仏経約論』1巻、『阿弥陀経約論』1巻、『一乗決疑論』1巻、『華厳念仏三昧論』1巻、『居士伝』56巻、『善女人伝』2巻などがある。また彼の監修によって『浄土三経』・『省庵法師語録』2巻・『念仏警策』・『西方公据』などが刊行された。更に『浄土聖賢録』9巻も彼の提案によって編纂が始まり、息子の彭希涑によって完成された。

本書はいわゆる〈無量寿経〉の会本（編集本）である。最初の〈無量寿経〉の会本である王日休編の『大阿弥陀経』に対しては雲棲袾宏が勝手的に書き換えと批判したが、彭際清はその批判を参考としながら、魏訳の『無量寿経』を底本にして経文を簡潔に纏めた。それが本書である。本書は後の楊仁山に強い影響を与え、楊仁山によって「浄土四経」に収録され中国全土に広まった。ただ日本の学者南条文雄は彭際清の方法論に対して、彭際清は王日休の方法を否定しながら、結局、王日休の誤りを繰り返ていると批判している。全体は35品から成る。即ち（1）聞経時処、（2）声聞衆等、（3）菩薩衆等、（4）大教縁起、（5）古仏出興、（6）法蔵因地、（7）仏前発願（48願）、（8）積植徳行、（9）法蔵成仏、（10）国土宝厳、（11）光明無量、（12）寿命無量、（13）聖衆無量、（14）七宝諸樹、（15）道場宝樹、（16）堂舎楼観、（17）七宝浴池、（18）衣食自然、（19）顔貌端正、（20）総賛荘厳、（21）花光出仏、（22）三輩往生、（23）十方称嘆、（24）補処菩薩、（25）菩薩出供、（26）無量説法、（27）菩薩功徳、

（28）勧進往生、（29）五悪五善、（30）重重誨勉、（31）禮仏現光、（32）疑惑胎生、（33）菩薩往生、（34）独留此経、（35）聞経獲益。
作成者名：肖越

佛説無量寿経箋註

書名よみ：ぶっせつむりょうじゅきょうせんちゅう
著者名：丁福保
著者名よみ：ていふくほ
著者生没年：1874（光緒2）-1952（中華人民共和国4）
成立翻訳年：19c末-20c前半
成立地：中国
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：（未調査）
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999）
解説：中国現代仏教の有名な居士で、字は仲祜、疇隠居士と号す。無錫に生まれ、蘇州の東呉大学堂と上海の東文学堂に学び、日本語にも通達する。1905年に楊仁山と出会い、それを機縁として仏教研究を始める。代表的著書としては『一切経音義』、『翻訳名義集新編』、『仏学大辞典』等がある。

本書は所謂彭紹昇によって編集された『無量寿経会本』の注釈書である。随の浄影寺慧遠と唐の嘉祥寺吉蔵らの注釈書も参考としているが、それよりも彭紹昇によって重校された『無量寿経会本』（諸漢訳の纏め）に基づき注釈したもので、彭紹昇の言葉が頻繁に引かれ、〈無量寿経〉諸訳の特徴をできるだけ取り上げるようとしている点が本書の一つの特徴である。文句の解釈には一つの文句に対して諸本の異同を取り上げて対照しながら説明している。思想の面では、「後期無量寿経」を基準としつつ諸大乗経典（特に法華・華厳）などを引きながら、一乗了義の思想に基づき経文を解釈した。
作成者名：肖越

宝王三昧懺

書名よみ：ほうおうざんまいさん
書名別名：長寿懺
著者名：夏蓮居
著者名よみ：かれんきょ
著者名別名：夏継泉、溥斎、渠園
著者生没年：1884（光緒10）-1965（中華人民共和国17）
成立翻訳年：20c
成立地：中国
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
刊本所在：1、刊年不明（仏教大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
解説：夏蓮居は中国現代浄土教の著名な居士として知られている。清朝雲南省の提督夏辛酉の長男として生まれ、山東省鄆城に住した。本名は夏継泉、字は溥斎で、渠園を号す。中年から仏道に入り、名前を夏蓮居と変えた。20世紀中国の著名な仏教学者で、当時「南梅北夏」（南には梅光羲、北には夏蓮居）と尊称されている。民国1年（1912）仏友梅光羲（当時山東省高等検察庁検察長）とともに当時の著名な浄土教の僧侶明慧のもとで仏教に帰依して受戒した。

本書は〈無量寿経〉を中心としての懺悔文で、夏蓮居の最後の著作である。主に『仏説大乗無量寿荘厳清浄平等覚経』や『華厳経』の菩薩思想等に基づき纂されている。最初の釈迦大讃は〈無量寿経〉の「讃仏偈」の内容に基づいて釈迦の菩薩行を讃嘆した文である。従来の大乗仏教の華厳懺法を受け入れて、「仏説大乗無量寿荘厳清浄平等覚経」に説かれている「讃仏偈」・「八相成道」・「法蔵菩薩の菩薩行」などにも参考して作られたものである。このように『無量寿経』に参考して作られた浄土教の懺悔文は以前には見られなかったという。
作成者名：肖越

宝王三昧念仏直指

書名よみ：ほうおうざんまいねんぶつじきし
著者名：妙叶
著者名よみ：みょうよう
著者生没年：13c-14c（？）
成立翻訳年：1395（洪武28）
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、清代（1616-1911、中国国家図書館）
2、清光緒20（1894、中国国家図書館）
3、民国11（1922、中国国家図書館）
4、民国12-民国14（1923-1925、中国国家図書館）
5、民国15-民国20（1926-1931、中国国家図書館）
6、刊年不明（中国国家図書館、仏経流通処発行）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』47
参考文献：望月信亨『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、劉果宗『中国佛教各宗史略』（文津出版有限公司、2001）、『仏書解説大辞典』
解説：作者の妙叶は念仏三昧を専修した天台宗の僧侶である。

本書は明末の智旭が編纂した『浄土十要』の中の第7要として収録されている。その再刻の序に「元末明初、鄞江有大善知識、名妙叶、深憫邪見、述為念仏直指二十二編」などの文字が見える。また本文中の「洪武乙亥九月」の語によって、洪武28年（1395）ごろ成立したものと判断できる。

本書の旨は念仏三昧はすべての三昧の中、最も勝れる三昧で、また「至円至頓」の法門で、すべの衆生を救済ができるので、道を得る最も便利は法門だと指摘する。

本文は、極楽依正・斥妄顕真・呵謬解・正明心仏観仏慧・道場尊像念仏正観・闢断空邪説・開示禅仏不二法門・示諸仏二土折攝法門・勧修・勧戒殺・勧持衆戒・勉起精進力・正行・別明客途所修三昧・三昧儀式・揚仏下化之力・十大礙行・羅顕衆義・独示一願四義之門・示念仏滅罪義門・略示列祖行門・正示回向普勸往生という22編からなり、その後に真妄心境図説・破妄念仏（妄念を破るための念仏）を付録として収録している。その要旨は唯心浄土・自性弥陀を説く。往生を欲する者は、戒・解・行・向の四法を具足することである。所謂「一願四義門」を主張する。略説すれば念仏の意義は一つの願でまとめることができる。その願は戒・解・行・向四つの意味からなる。「戒」では念仏三昧を修める際、戒律を守らなければ信念があっても念仏三昧を取得できない。一日夜でも沙弥戒・具足戒を持てば、往生できるという。「解」では、念仏三昧を修める人は大

乗の第一義を読誦すべきで、それによって浄土と穢土のすべては自分の心に備わり、我心に離れないという正解を持つに至るという。「行」では浄土を求める行人は正解に基づいて修行すべきである、即ち、六時に身・口・意の三業を損わなく念仏すべきという。「向」は大小善根のすべてを浄土に回向しなければいけないということ。
作成者名：肖越、趙仲明

摩訶阿弥陀経

書名よみ：まかあみだきょう
書名別名：無量寿経
著者名：魏源
著者名よみ：ぎげん
著者名別名：魏遠達、号良、黙深、墨生、魏承貫
著者生没年：1794（乾隆59）-1857（咸豊7）
成立翻訳年：19c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』73、『魏源全集』20（岳麓出版社、2004）
参考文献：『魏源全集』（岳麓出版社、2004）
解説：魏氏は乾隆59年（1794）4月23日湖南邵陽県に生まれ、原名は魏遠達、字は黙深であり、承貫は仏教に帰依した後の菩薩名ということである。魏源は中国晩清時代の傑出な思想家といわれ、当時学術運動の啓蒙大師ともいわれる。道光25年（1845）に進士に合格し、あい付いて江蘇の東台と興化の知県を任させた。業績が勝れたが、大平軍を同情したので、清の政府に免職された。晩年に仏教に帰依し、本書を修訂して「浄土四経」と指定した。

歴史学者として最も代表的な貢献は『海国図志』で、林則徐を中心して編集された『四洲志』に基づき、歴代の史誌を参考しながら編集されたものである。最初には50巻になったが、後に100巻に至った。それは以前「中華至上」の伝統的な概念を突破し、当時中国で初めて科学的に地球、各州、また中国を紹介する諸物である。そのほかの著作は『古微堂内外集』、『古微堂詩集』、『詩古微』、『書古微』、『元史新編』、『聖武記』、『海国図志』などがある。晩年に仏教に帰依し、専ら念仏して西方阿弥陀仏の極楽を求めることにした。中国浄土教に貢献したことは、彼によって初めて「浄土四経」（『阿弥陀経』、『観無量寿経』、彼に修訂された本経、また般若訳の『大方広仏華厳経』の第40巻「普賢菩薩行願品」）を指摘されたことで、後の印光は彼の「浄土四経」に基づき、「大勢至菩薩念仏円通章」を加え「浄土五経」（『無量寿経』は康僧かい訳を採用した）と指摘した。現代中国浄土教にもこの「浄土五経」に基準している。また後の金陵刻経処の楊仁山によって、再刊された。また日本の明治38年（1905）-大正1年（1912）楊仁山によって他の中国典籍とともに、日本の前田慧雲、中野達慧等に送って、『卍続蔵』に収録されることになった。

本経は魏源は咸豊6年（1856）に現存の漢訳〈無量寿経〉の五訳に基づき、修訂したものである。本経は経題は最初に『無量寿経』としたが、後に王蔭福居士によって現在の『摩訶阿弥陀経』となった。修訂の旨は、当時すでに、中国仏教界は『阿弥陀経』のみ読み王日休と彭紹昇の修訂本があったものの、袾宏が王日休の修訂本に勝手に自分の意見を撰述したことを批判したので、それを避けるように五種漢訳を参考して（王本は唐訳に参考しなかった）、字字は原訳に出処があるように本経を修訂した。文脈は以前よりかなり読みやすくとなった。例えば、願文の数は四十八願経の重複したところをカットし、世親の『浄土論』の24章数にあわせながら、「初期無量寿経」の24願数に基準した。また諸訳に梵文の音写語を殆ど採用せず、翻訳語を選んだ。

だが本経には依然に勝手に書きかえったところがあると指摘された。まず、願文の第2願に「無有胎生」という文は出処がない。また五悪段には、「生時痛、老時痛、病時痛、死時痛--」というように完全に訳した。よく言われるところは、本経に「過是以後、無量寿経亦滅、唯余阿弥陀仏四字、広度群生」と言うようになったことが諸訳に見られなかった文書に書き換えした。
作成者名：肖越

摩訶阿弥陀経衷論

書名よみ：まかあみだきょうちゅうろん
著者名：王耕心
著者名よみ：おうこうしん
著者生没年：不詳
成立翻訳年：1904（光緒30年）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』
解説：著者王耕心の生没年は不詳である。

本書は、光緒30年に王耕心によって、魏源は咸豊6年（1856）に現存の漢訳＜無量寿経＞の五訳に基づき、修訂した『摩訶無量寿経』に基づき、往生浄土の念仏に関する問題について解釈するものである。（魏源と『摩訶阿弥陀経』については、本目録の『摩訶阿弥陀経』項目に参照）。

まず、魏源が修訂した『摩訶阿弥陀経』の原文を24章に分け、魏源が『摩訶阿弥陀経』を編集した経緯と主旨について説明する。その中に、〈無量寿経〉の唐訳の願文数は46で、宋訳の願文数が34願である記す。本分の「衷論」部は、次の6項目からなる。

「衷論1」には、〈無量寿経〉諸本と『阿弥陀経』の諸訳などの浄土経典、生死輪廻の原因などの浄土教の根本的な問題として説明する。

「衷論2」には、釈迦仏に説かれた解脱法を中心に説く。

「衷論3」には、中国浄土教において、称名念仏・観想念仏・また大乗ダラニ呪を称える密教の浄土経・大経経典の読誦によって往生する顕教の浄土教等を説明する。

「衷論4」には、阿弥陀仏・南無阿弥陀仏の二つの称名念仏、念仏・持戒・修福という浄土教の三事等の修行方法を説く。

「衷論5」には、『般舟三昧経』に説く「一心」と浄土経典に説く「一心」、衆生の三念、2種の念仏三昧などの問題を取り上げて説明する。

「衷論6」には、『般舟三昧経』『大集経』に説く現世見仏と『阿弥陀経』に説く現世見仏の違い、一心念仏の三つの解釈、念仏入門の鍵等の浄土教に関する問答である。
作成者名：肖越

弥陀経義

書名よみ：みだきょうぎ
書名別名：弥陀義、弥陀経義集
著者名：善導（？）
著者名よみ：ぜんどう
著者名別名：導禅師、光明大師
著者生没年：613（大業9）-681（永隆2）
成立翻訳年：7c
成立地：中国

巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本
写本所在：1、竜谷大蔵本（1352（正平7）、書写者不明）
写本奥書：1、本云　寛元二年（1244）四月日、書写訖功者也、執筆老昧尊阿、六十三歳／私云　正平七年壬辰（1352）初弐月七日奉書写安置之訖、右筆覚忍、歳十八戒三、願主釈学念、生歳四十六。
刊本所在：1、元禄8（1695、未調査）
2、刊年不明（未調査）
3、刊年不明（未調査、福井毫摂寺・大谷大に複写あり）
4、刊年不明（未調査、大正大）
刊本の奥書刊記：1、善導大師述弥陀経義者、定善義雖挙其名、未来至本朝。千有余年于茲。依之先賢深病之。如今介袾宏書典之中新渡。仍而寿梓行于世者也。元禄八年歳次乙亥二月吉旦、松本屋大角清兵衛寿梓。
2、京東六条下珠数屋町、丁字屋九郎右衛門。
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『真宗全書』続4
参考文献：了祥「評弥陀経義」（『真宗全書』続4）、上杉文秀『善導大師及往生礼讃の研究』（法蔵館、1931）p.38
解説：善導『観経疏』定善義宝樹観釈に「此義弥陀経義中已広説竟」（『浄全』4、p.41）、宝池観釈にも「此八徳之義已在弥陀義中広説竟」（『浄全』4、p.42）とあることにより、浄土宗二祖聖光が弟子の宗円を宋に遣わして捜索させたが、請来することができなかった。現存するテキストは、『観経疏』の抜書きをもとにして、これに撰述者のコメントを挿入しつつ浄土教の要義について解説している。全体的に雑然としており、体系的に整理されているわけではない。また書名は『弥陀経義』であるが、『阿弥陀経』の注釈書というわけではない。文中に「穴賢（あなかしこ）」等の和語が混在していることから、日本において偽作されたと考えられている。
作成者名：斉藤隆信

弥陀経讃

書名よみ：みださきょうさん
著者名：涵虚得通
著者名よみ：かんきょえつう
著者名別名：己和
著者生没年：1376-1433
成立翻訳年：15c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正統5（1440、ソウル大・韓国釜山梵魚寺、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
2、刊年不明（韓国東国大、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、正統五年庚申（1440）七月、慶尚道聞慶鳳厳寺、門人文秀書刊
2、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『涵虚堂得通和尚語録』に収録）、『涵虚大師文集』（「韓国歴代文集叢書」202、景仁文化社、ソウル、1998）、『涵虚堂得通和尚語録』（韓国普済社、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「朝鮮・涵虚得通の念仏禅について」（『印仏研』55-1、2005）
解説：本書『弥陀経讃』の著者は朝鮮時代の禅僧涵虚得通。涵虚得通には、他に『弥陀讃』・『安養讃』が伝わっているので、おそらく本書を加えて三部から構成される阿弥陀仏・浄土への讃文であったと思われる。
　涵虚得通については、『弥陀讃』の項を参照されたい。
　本書は、『阿弥陀経』の偉大さを讃するもので、「開示捷経」・「指途迷倫」・「讃土令忻」・「讃仏勧念」・「六方同讃」・「彼此相接」・「人天共遵」・「現未倶益」・「易発機感」・「善念回向」といった10の題目に分けられた10の讃文から構成されている。まず「開示捷経」と「指途迷倫」で、釈迦仏が『阿弥陀経』を衆生に教え授けたのは、衆生が暗闇に灯火を得るが如くであり、釈迦の衆生への大悲は、赤子を抱くかの如くである、といったような釈迦仏礼讃が述べられる。続いて、極楽浄土・阿弥陀仏を釈迦仏が説き示して、衆生に往生および念仏を勧めたことが讃えられる。また、十方の諸仏が浄土、阿弥陀仏ならびに『阿弥陀経』の受持を讃えたことが述べられる。最後に、この経を聞き受持して、往生した衆生は無数であるといった、『阿弥陀経』の功徳が讃えられる。
　本書には浄土の荘厳について記述がある一方で、法蔵菩薩に関する記述がない。このことから、本書で讃えられている「弥陀経」とは、『阿弥陀経』であると推測できる。ただ韓普光が、本書を含む涵虚得通の三讃文は、浄土三部経のそれぞれを讃えるものと説明しているが、この点は検討を要するように思える（韓普光前掲論文、p.510）。というのも、例えば『観無量寿経』の十六観についての記述が、三讃文のどれにも見当たらない等、「浄土三部経」中の主要な概念の幾つかが、涵虚得通の三讃文に全く出てこないからである。
　本書は、『涵虚堂得通和尚語録』（『韓国仏教全書』7）に収録されている。『涵虚堂得通和尚語録』の書誌情報は、『韓国仏書解題辞典』pp.152-153を参照されたい。
作成者名：山中行雄

弥陀讃

書名よみ：みださん
著者名：涵虚得通
著者名よみ：かんきょえつう
著者名別名：己和
著者生没年：1376-1433
成立翻訳年：15c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正統5（1440、ソウル大・韓国釜山梵魚寺、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
2、刊年不明（韓国東国大、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、正統五年庚申（1440）七月、慶尚道聞慶鳳厳寺、門人文秀書刊
2、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『涵虚堂得通和尚語録』に収録）、『涵虚大師文集』（「韓国歴代文集叢書」202、景仁文化社、ソウル、1998）、『涵虚堂得通和尚語録』（韓国普済社、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「朝鮮・涵虚得通の念仏禅について」（『印仏研』55-1、2005）
解説：本書『弥陀讃』の著者である涵虚得通は朝鮮時代の禅僧。21歳までは儒学を学んでいたが、友人の死をきっか

けに、仏門に入る。その後『円覚経』・『金剛経』などの注釈書を著し、58歳で寂した。彼の行状は、韓普光論文によって簡潔に知ることができる。

本書は阿弥陀仏を讃するもの。涵虚得通には、他に『安養讃』・『弥陀経讃』が伝わっているので、おそらく本書を加えて三部から構成される阿弥陀仏・浄土への讃文であったと思われる。また、この三讃文の本文には頻繁に「再唱」という割注が付される。「再唱」が「もう一度唱える」を意味しているなら、本書は儀礼で読誦されていたことになる。このことから韓普光は、本書は念仏儀礼に使われたテキストであるとする。

作成者名：山中行雄

弥陀証性偈

書名よみ：みだしょうしょうげ
著者名：元暁
著者名よみ：がんぎょう
著者生没年：617（真平王39）-686（神文王6）
成立翻訳年：7c
成立地：朝鮮半島（新羅）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『韓国仏教全書』1
参考文献：韓普光『新羅浄土教の思想』（東方出版、1991）、韓泰植（普光）「新羅・元暁の弥陀證性偈について」（『印仏研』43-1、1994）
解説：本偈『弥陀証性偈』の著者は、統一新羅のもっとも独創的な思想家であった元暁である。彼の著作のほとんどが失われたとはいえ、86部に及ぶ多数の論書を著したと伝えられている。一方で元暁は、新羅仏教の大衆化を推し進める役割も果たした。『三国遺事』4によれば、彼は『華厳経』の「無礙」という語を使って「無礙歌」を作って世間に広めたといわれる。「無礙歌」以外にも、元暁は多くの偈や歌を著したと考えられているが、それらの多くは失われてしまい、現存していない。本偈『弥陀証性偈』は現存する数少ない偈の一つである。

本偈に写本等は現存しないが、高麗の禅僧知訥（1158-1210）によって撰ばれた『法集別行録節要並入私記』（『韓国仏教全書』4）に収められている。『韓国仏教全書』1収録の『弥陀証性偈』も『法集別行録節要並入私記』中の『弥陀証性偈』を基にしている。

本偈は、法蔵菩薩の発菩提心と弘誓願を讃えるものである。非常に短い偈なので以下に全文引用する。

「乃往過去久遠世　有一高士号法蔵　初発無上菩提心　出俗入道破諸相　雖知一心無二相　而愍群生没苦海　起六八大超誓願　具修浄業離諸穢是也」

作成者名：山中行雄

無量寿経優婆提舎願生偈略釈

書名よみ：むりょうじゅきょううぱだいしゃがんしょうげりゃくしゃく
書名別名：浄土論略釈
著者名：楊文会
著者名よみ：ようぶんかい
著者名別名：楊仁山
著者生没年：1837（道光17）-1911（宣統3）
成立翻訳年：19c後半-20c初頭
成立地：中国
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『楊仁山全集』（黄山書社、2000）
参考文献：震華『中国仏教人名大辞典』（上海辞書出版社、1999年）、陳継東『清末仏教の研究－楊文会を中心として－』（山喜房仏書林、2003）
解説：楊文会は中国近代仏教復興の祖といわれる清の代表的な居士である。27歳の時に『大乗起信論』を授けられたことによって、仏門に入った。彼は日本の仏教学者南条文雄との親交によって、中国ではすでに失われたが、日本には残っている典籍を中国で刊行し、また日本の『卍続蔵』に序文を書いた。同治4年（1865）、金陵に「金陵刻経処」を創立し、50年近くにわたって金陵刻経処の刻経事業を主宰し、中外の仏教典籍を刊行する事業を行った。宣統2年（1910）、彼は「報告同人書」に大蔵経編纂に関する意見を述べ、清朝に編纂された『四庫全書提要』に倣って、まず大蔵経の「提要」を編集し、次に全大蔵経の完成の橋掛かりとして、『大蔵輯要』の編纂を呼びかけた。そして日本の『卍続蔵』から重要な典籍を選び、それらを編纂して『大蔵輯要』とした。門下には太虚・諦閑などの有名な僧侶や、欧陽漸・梅光羲など当時の有名な在家仏教学者がいる。代表的な著作は『大乗起信論英訳』（合訳）、『観無量寿経略論』などがあり、その遺作は『楊仁山全集』、『楊仁山遺作』に収録されている。

本書は『楊仁山全集』4に収録され、『浄土論』冒頭の偈頌が非常に難解になので、曇鸞の『浄土論註』を参考にして簡潔に解説を行った書物である。

作成者名：肖越

無量寿経記

書名よみ：むりょうじゅきょうき
書名別名：両巻無量寿経疏、両巻無量寿経記
著者名：玄一
著者名よみ：げんいつ
著者生没年：7c-8c前半
成立翻訳年：7c-8c前半
成立地：朝鮮半島（新羅）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、宮内庁書陵部蔵本（奈良期、書写者不明）
2、大谷大蔵本（1854（嘉永7）、書写者不明）
3、京都大蔵本（1854（嘉永7）、書写者不明、2の大谷大蔵本の青写真による複写）
4、大谷大蔵本（江戸後期、順芸書写）
写本奥書：1、釈玄一集
2、嘉永七（1854）年甲寅首夏中旬第一日謄写竟、右原本在濃州興雲寺
3、嘉永七（1854）年甲寅首夏中旬第一日謄写竟、右原本在濃州興雲寺
4、（奥書なし）
活字本所載書：『卍続蔵』1・32・2、『韓国仏教全書』2
参考文献：韓普光『新羅浄土教の思想』（東方出版、1991）、東国大学校仏教文化研究所『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1983）、南宏信「書陵部に残る新羅浄土宗の遺文」（『いとくら』4、2008）
解説：『無量寿経記』の著者である玄一の伝記などは一切伝わらず、正確な生没年は知られない。しかし、玄一は、憬興の『無量寿経連義述文賛』に言及されており、また、後で再度取上げるが、本書『無量寿経記』は法位の『無量寿経義疏』に依拠して書かれているので、7世紀から8世紀初めの人物であろうとされる。

本書は『無量寿経』を注釈したもので、上巻のみが現存している。さらに現存する写本は、明らかに途中から始まっており、前半部が欠落していることがわかる。また現存写本中にも蠹食による欠字がある。したがって本書全体の内容および玄一の浄土思想も知りがたいが、以下に本書の特徴的な点を述べていく。

例えば、玄一は、「乃至十念」を『弥勒発問経』の十法、つまり慈心・悲心・護法心などの十法をそれぞれ念ずることという法位の十法十念説を踏襲しているし、四十八願の分類法も、法位と同じく13分類で、分類名もほぼ同一である。したがって本書は、法位の『無量寿経義疏』に大きく依拠しているといえる。実際法位は慧遠と並び、本書中で最も多く（10回）名を挙げて言及されている。一方で、『無量寿経』中の文章を区切る際、どの文がどの段に属しているかといったような細かい点では法位に従わないこともある。

本書中、法位・慧遠の他にも『大智度論』と『瑜伽論』がよく引用されるが、これは新羅浄土教の教義書に共通の傾向である。しかし本書には『往生論』『成実論』『仏性論』『法華論』などの仏教典籍のみならず、桓寛の『塩鉄論』のような政治経済文献までも言及され、玄一が広範な知識を有する学僧であったことを伺わせる。

1の宮内庁書陵部蔵本は、唯一冒頭部の6行を残しているが、破損が激しくその読解は非常に困難である。しかし、この冒頭部で『無量寿経』と『観無量寿経』の説時順序に関する重要な議論がなされていると考えられる（南宏信論文、p.12）。その他諸写本に関する書誌情報は、南宏信論文を参照にされたい。

作成者名：山中行雄

無量寿経起信論

書名よみ：むりょうじゅきょうきしんろん
著者名：彭際清
著者名よみ：ほうさいせい
著者名別名：彭二林、彭紹昇、允初、尺木
著者生没年：1740（乾隆5）-1796（嘉慶1）
成立翻訳年：1775（乾隆40）
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』1-32-3
参考文献：『仏書解説大辞典』、『中国仏教百科全書』（中国仏教協会）、牧田諦亮『中国仏教史研究』（大東出版社、1981）、『仏光大辞典』（仏光出版社、1988）
解説：著者は、字は允初、尺木、知帰子と号した。彭際清とは菩薩戒を受けた時の法名である。江蘇省長州の士族家庭に生まれ、乾隆34年（1769）進士となり、支県に選ばれたが、赴任しなかった。宋文森世隆、畢紫嵐奇、周安士夢顔と並び、清代の代表的な禅浄双修の居士とされる。最初は宋明の理学と道教の修練術を学んだが、仏法を聞いてから儒学と道学を捨てて仏法に専念した。浄土教に帰信した原因は、夫人の仏教信仰と、婦人の病身にあるという。彭の浄土思想は袾宏、真可、徳清、智旭らの思想を受けたほか、特に中国浄土教第9祖とされる実賢に私淑したという。「一日十時間の念仏・九時間の観仏・一時間の礼賛」という実修的な念仏修法を生涯に渡って修したという。彼の編集した『無量寿経』（諸漢訳の編集版）は当時の中国浄土教に大きな影響力を持ち、その浄土思想は後の楊文会などに強い影響を与えた。また、『華厳念仏三昧論』1巻は、華厳思想に基づいて浄土念仏法門を解釈する書物で、中国清朝浄土教の代表的な著作である。

多数の著作の中、浄土教系関係の書物として代表的な著作は『無量寿経起信論』3巻、『観無量寿仏経約論』1巻、『阿弥陀経約論』1巻、『一乗決疑論』1巻、『華厳念仏三昧論』1巻、『居士伝』56巻、『善女人伝』2巻などがある。また彼の監修によって『浄土三経』・『省庵法師語録』2巻・『念仏警策』・『西方公据』などが刊行された。更に『浄土聖賢録』9巻も彼の提案によって編纂が始まり、息子の彭希涑によって完成された。

本書は『華厳経』の心仏衆生三無差別の思想に基づいて康僧鎧訳『無量寿経』の解釈を行った書物である。教体・教相・帰趣・別釈・回向の5門に分かれる。最初の3門は『無量寿経』の大綱を論じ、第4門は全経の要処を解釈し、最後の1門は回向文である。第一教体においては自他不二義・法相不二義・因果不二義・生仏不二義を通して仏身仏土と自己心性との不二なることを述べ、第二教相においては信・願・念・行によって往生すべきことを論じ、第三帰趣においては菩提心の要義について論じる。その中において、一切諸仏・一切仏土が自心を離れざることなどを了知して、無信の信・無願の願・無念の念・無行の行をすべきことを説く。第4別釈では35項目に分けて経文を解釈している。

作成者名：肖越

無量寿経述記

書名よみ：むりょうじゅきょうじゅっき
著者名：竜興
著者名よみ：りゅうこう
著者名別名：竜興大徳、浄業、香積寺浄業、浄業法師
著者生没年：655（永徽6）-712（延和1）
成立翻訳年：7c後半-8c前半
成立地：中国
巻数：2
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：七寺蔵『古聖教目録』（『中国・日本経典章疏目録』「七寺古逸経典研究叢書」6、大東出版社、1998）
参考文献：松本文三郎「善導大師の伝記と其時代」（浄宗会編『善導大師の研究』浄宗会、1927）、塚本善隆『唐中期の浄土教－特に法照禅師の研究－』（「東方文化学院京都研究所研究報告」4、東方文化学院京都研究所、1933）、常盤大定、関野貞『支那文化史蹟　解説』9（法蔵館、1940）、望月信亨『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、岩井大慧『日支仏教史論攷』（東洋文庫、1957）、恵谷隆戒「古佚書竜興の観無量寿経記の研究」（『印仏研』8-1、1960）、恵谷隆戒「唐竜興撰観無量寿経記の復元について」（『仏教大学研究紀要』37、1960）、岸覚勇『続善導教学の研究』（記主禅師鑽仰会、1966）、金子寛哉「浄業法師碑について」（『仏教論叢』31、1987）、金子寛哉「浄業法師碑をめぐって」（戸松啓真教授古稀記念論集刊行会編『戸松教授古稀記念　浄土教論集』大東出版社、1987）、牧田諦亮『善導』（「浄土仏教の思想」5、講談社、2000）、柴田泰山「竜興『観経記』の概要」（『浄土学』44、2007）
解説：唐代の竜興によって著された『無量寿経』の註釈書。

本書は現存しないが、平安後期に書写された七寺蔵『古聖教目録』に、「無量寿経述記　上下七十一枚竜興」と記載されているので、平安後期までに将来され、その後、散逸したと考えられる。

また『東域伝灯目録』上には「同（無量寿）経記二巻竜興寺名　同（無量寿）経疏」とあり、竜興に『無量寿経記』という名の註釈書があったことを窺わしむるが、誤記等の可能性もあり（望月信亨、1942）、はっきりしたことはわからない。

内容に関しては、同じく竜興による『観経』の註釈書、『観

無量寿経記』の復元テキストに、瑜伽唯識系の思想的特徴が顕著に見出せるため(恵谷隆戒、1960)、本書も浄影寺慧遠や慈恩寺窺基の影響を色濃く受けて撰述された註釈書であった可能性が高い。

なお著者の竜興については、『金石萃編』75に「大唐竜興大徳香積寺主浄業法師」とあるので、一般的に浄業法師と同一人物と見なされている（望月信亨、1942）。浄業を同一人物と仮定するならば、出生年代は655年（永徽6）となる。諱は象といい、俗姓は趙氏。高宗皇帝の忌日に際して、『観経』及び『釈浄土群疑論』の講説をおこなった。712年（延和1）6月15日、世寿58歳にして寂したという。

神禾原の善導墓塔の側に埋葬されたことから、かれが善導に私淑していたとする説もある（塚本善隆、1933）。

作成者名：加藤弘孝

無量寿経述義記

書名よみ：むりょうじゅきょうじゅつぎき
著者名：義寂
著者名よみ：ぎじゃく
著者生没年：7c半ば-8c初頭
成立翻訳年：7c後期－8c初期（？）
成立地：朝鮮半島（新羅）
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：恵谷隆戒「新羅義寂撰無量寿経述義記復元本」（『浄土教の新研究』山喜房仏書林、1976、pp.409-453）
散逸文献の文献名出典：『扶桑蔵外現存目録』（『昭和法宝総目録』2、p.566c）、『高山寺聖教目録上』（『昭和法宝総目録』3、p.915c）、その他の逸文を含む出典については以下の恵谷論文を参照のこと。
参考文献：春日礼智「新羅義寂とその『無量寿経述義記』」（『新羅仏教研究 』山喜房仏書林、1973、pp.31-46）、恵谷隆戒「義寂の無量寿経述義記について」（『仏教大学紀要』35）、恵谷隆戒『浄土教の新研究』山喜房仏書林、1976、pp.93-107）、梯信暁「新羅義寂『無量寿経述義記』の一考察　世親『浄土論』の位置付けについて」（『印仏研』75、1989）梯信暁「新羅浄土教の特徴に関する一考察」（竜谷大学仏教学会『仏教学研究 』49、1993）、李種林「新羅義寂の三定聚について」『印仏研』10
2、2003）
解説：『無量寿経述義記』の撰者である義寂の伝記は未詳であるが、『三国遺事』第4によると海東華厳の祖である義湘（620-702）の十大弟子であったことが知られる。また「無量寿経連義述文賛」を著した憬興は、681年に新羅文武王の命により国師となるが、憬興は著書で義寂の説を批判している。さらに善珠（723-797）の「唯識義灯増明記」巻一によると、義寂は、著書「唯識未証決」をもって、窺基・円測らとともに唯識宗六家の一人として数えられていた。以上から義寂は、7世紀の中葉から8世紀の初頭に在世したと推測される。

『無量寿経述義記』3巻は現存していない。しかし『正倉院文書』によると、本書は748年に筆写されており、また『長西録』には130丁あるとされる。従って少なくとも鎌倉時代までは本書が流布していたことが明らかである。本書は、源隆国の『安養集』、了慧の『無量寿経鈔』など多数の著作に引用されており、それらの著作を用いて恵谷隆戒が復元本を出版した。（『浄土教の新研究』山喜房仏書林、1976）恵谷隆戒自身は全体の3分の2を復元したと算定している。この恵谷復元本と了慧の『無量寿経鈔』から、大凡の内容を知ることができる。

本書は康僧鎧訳『無量寿経』を注釈したものである。義寂は、序正流通の3分科法を用いて『無量寿経』を分ける。

即ち我聞如是から願楽欲聞までが序分、仏告阿難乃往過去から略説説耳までが正宗分、そして仏告弥勒其有得聞から不歓喜までを流通分とする。これは、浄影・嘉祥の説に依っており、法位・玄一・憬興の新羅僧たちとは区切り方が異なっている。

義寂の48願解釈は、浄影の説をほぼ踏襲しており、48願を摂浄土願・摂法身願・摂衆生願の3種に分け、第31・32願を摂浄土、第12・13・17願を摂法身、残りの43願を摂衆生願とする。しかし、義寂は一つ一つの願は摂浄土・摂法身・摂衆生の三願を具足する、と浄影にはなかった見解を述べる。更に義寂は、四十八願と『往生論』の29種荘厳を対比させる。例えば、摂浄土願によって国土荘厳の17功徳がある、というように願とその功徳である荘厳を対応させ、48願の関係を極めて複合的に捉える。こういった願と功徳の複合的な関係から華厳の一即一切の思想を読み取ることも可能であろう。ともかく、48願と29荘厳との対比は、義寂以前には見られず、彼の独創的見解である。

義寂は、第18願の十念を、臨終の口称念仏として理解するので、善導の『往生礼讃』の影響が見られると言えよう。また、逆謗除取の問題については、念仏によって五逆罪を犯した者であっても往生が可能であるとし、法位などと異なる。このように、義寂は、元暁・法位など同時代の新羅僧とは違い、本願の念仏、口称の念仏を強調して、善導の『往生礼讃』や懐感の『釈浄土群疑論』に立脚している。日本では、平安中期以降、道綽・善導の浄土教が流行するにつれ、義寂の本書も高い評価を得るようになった。

作成者名：山中行雄

無量寿経連義述文賛

書名よみ：むりょうじゅきょうれんぎじゅつもんさん
書名別名：無量寿経述賛、無量寿述賛、連義述文賛
著者名：憬興
著者名よみ：ぎょうごう、きょうこう、けいこう
著者生没年：620（？）-700（？）
成立翻訳年：7c末
成立地：朝鮮半島（新羅）
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、元禄12（1699、大正大・京都大・竜谷大・大谷大・立正大）
2、寛政3（1791、早稲田大）
刊本の奥書刊記：1、元禄十二年巳卯（1699）十二月日、帝畿書肆、山本四郎兵衛蔵、井上氏忠兵衛版
2、京都、銭屋利兵衛
活字本所載書：『大正蔵』37（No. 1748）、『卍続蔵』1・32・3、『浄全』5、『韓国仏教全書』2、『韓国歴代文集叢書』5
参考文献：松林弘之「朝鮮浄土教に於ける憬興・義寂の一考察」（『仏教学研究』22 、竜谷大学仏教学会、1966）、恵谷隆戒『浄土教の新研究』（山喜房仏書林、1976）、渡辺顕正『新羅・憬興師述文賛の研究』（永田文昌堂、1978）、韓普光『新羅浄土教の思想』（東方出版、1991）、梯信暁「新羅浄土教の特徴に関する一考察」（『仏教学研究 』49、竜谷大学仏教学会、1993）
解説：『無量寿経連義述文賛』の著者である憬興の生没年などの詳細は分かっていない。『三国遺事』巻5は、憬興が熊川州の人であったと伝えているが、この地は、もともと百済の一州であり、670年に新羅に統合される。したがっ

て憬興は本来、百済の出身であったことになる。また『三国遺事』は、憬興が神文王1年（681）に国老に任命されたことも伝えているので、すくなくともこの年には存命であった。

さて、『無量寿経連義述文賛』には＜無量寿経＞の異訳がほとんど全て挙げられているのだが、菩提流支訳『無量寿如来会』（714年訳出）が言及されていない。一方で義浄の『南海寄帰内法伝』（691年に中国に伝わる）は引用されているから、憬興は700年ころまで生存していたとする説もある。（韓普光『新羅浄土思想の研究』pp.136-139）

『無量寿経連義述文賛』は『無量寿経』の注釈である。憬興は『無量寿経』の諸異訳を詳細に比べ、それらの願数に24願と四十八願の違いがあるのは、梵文に備欠ある故とするが、彼自身は西晋法護の訳の『無量寿経』を底本とすると述べる。しかし引用文から判断すると『無量寿経連義述文賛』の底本は、康僧鎧訳とされる『無量寿経』（大正No. 360）である。もちろん、この『無量寿経』が、実は法護訳であるという説も『出三蔵記集』に出ているほど古くからあるのだが、『無量寿経』の訳者までも検討する点は、元暁、義寂、法位などに見られず、憬興の独自性といえる。

『無量寿経連義述文賛』は、来意・釈名・解本文の三門に分けられている。来意では『無量寿経』の意図するところが簡潔に述べられるが、憬興は、本経は『観無量寿経』の後に説かれたと独創的な見解を述べる。釈名では経の題名について論じているが、その詳細は、憬興自身の著である『観無量寿経疏』に譲っている。しかしこの『観無量寿経疏』が散逸したため、釈名の詳細は不明である。

解本文では、極めて詳細な科文を設けて、『無量寿経』の本文を厳密に注釈している。ちなみに書名の『連義述文賛』は慧遠や元暁などの諸師の釈義を連ね、経の文意を述べて賛ずることに由来すると考えられている。したがって本書には経・論書のみならず『論語』にまで至る大量の引用がある。とはいえ単なる引用集ではなく、慧遠・法位・元暁らの説が、いちいち厳しく批判されている。例えば、阿弥陀仏の智は、曇鸞・慧遠・元暁は四智とするが、憬興は、吉蔵と同じく五智とする。また十念を『弥勒所問経』の十念とする説（法位・元暁）は排されるが、一方で「十声を具する者のみが往生する」といった説も否定される。

『無量寿経連義述文賛』は、慧遠・吉蔵・元暁の注釈とならんで『無量寿経』の四大注釈の一つであり、日本浄土宗の良忠、道光などに影響を与えている。本書には法位や義寂らのように散逸して伝わらない諸家の説も多く引用されており、この点でも貴重な資料である。

作成者名：馬場久幸・山中行雄

遊心安楽道

書名よみ：ゆうしんあんらくどう
著者名：元暁（？）
著者名よみ：がんぎょう
著者生没年：617（真平王39）-686（神文王6）
成立翻訳年：7c/8c/10c
成立地：朝鮮半島（新羅）/中国/日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都来迎院如来蔵蔵本（平安後期（？）、書写者不明、良忍手沢本）
写本奥書：1、一校了
刊本所在：1、明暦4（1658、仏教大・大谷大・大正大・竜谷大・高野山大・立正大・韓国東国大・韓国円光大・落合俊典・韓普光）
2、刊年不明（京都大）
3、刊年不明（大谷大、金陵刻本）
刊本の奥書刊記：1、明暦四戊戌（1658）孟春吉旦、五条橋通書林、西村九郎右衛門刊
2、（刊記なし、最終丁は手書）
3、（刊記なし）
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1965）、『卍続蔵』2・12・4、『浄全』6、『元暁大師全集』10、『韓国仏教全書』1、諸本対照校訂『遊心安楽道』（韓普光『新羅浄土思想の研究』東方出版、1991、pp.588-747）
現代語訳書：元暁全書国訳刊行会編『国訳元暁聖師全書』6（韓国語訳、大韓仏教元暁宗元暁全書国訳刊行会、ソウル、1988）、Lee Leo、*Le Maître Wön-hyo de Silla du VIIe Siècle: sa vie, écrits, son apostolat*（カトリック出版社（韓国）、1986）（第二章に『遊心安楽道』のフランス語訳を含む）
参考文献：村上哲明「『遊心安楽道』元暁作説への疑問」（『大谷学報』39-4、1959）、章輝玉「遊心安楽道考」（『南都仏教』54、1985）、落合俊典「遊心安楽道の著者」（『華頂短期大学研究紀要』25、1980）、落合俊典「遊心安楽道諸本攷」（『華頂短期大学研究紀要』33、1988）、韓普光『新羅浄土思想の研究』（東方出版、1991）、愛宕邦康『遊心安楽道』の撰述者に関する一考察（『南都仏教』70、1994）、中央僧伽大学校仏教史学研究所編『元暁研究論著目録』（「元暁研究叢書」2、1996）、李暁箕「『遊心安楽道』の浄土思想―真偽問題について―」（『印仏研』51-1、2002）、福士慈稔『新羅元暁研究』（大東出版社、2004）
解説：本書は元暁によって撰述されたと伝えられるが、元暁の真作ではなく後人の作とされる。その理由として、元暁滅後、菩提流支によって訳された『不空羂索神変真言経』と『大宝積経発勝志楽会』が引かれる等が挙げられる（本書の真偽論争については韓普光著書を参考にされたい）。しかし韓国では『遊心安楽道』の元暁撰述説を根強く支持する学者もいる（李暁箕論文）。

また、本書は高麗の『義天録』などの古い目録に記載されず、鎌倉時代の『長西録』で初めてその名が記され、成立年代および成立地についても学説の一致をみない。

本書は、浄土教の要義を概説したもので、浄土教のいわれと宗の本質、浄土の所在、浄土についての疑惑、往生の因、往生人の種類、往生の難易、浄土教に関する疑難の解明の七門に分けて説く。本書の大部分は浄土関係の経・論からの引用であり、特に元暁の『無量寿経宗要』からの引用が全体の三分の一、迦才の『浄土論』からの引用が五分の一を占めている。また、例えば『無量寿経宗要』では決定種姓の往生を認めないのに対し、本書は、決定種姓の往生について、無余涅槃後、菩提心を生ずれば、という条件つきで認める。このように『無量寿経宗要』の説を改めている点が散見される。さらに注目される点は、密教儀礼による往生を認めることである。本書第七門において、善行を修めることがなかったものも、『不空真言経』に説かれる光明真言を土沙加持して亡骸または墓上に散ずれば、苦身を捨てて極楽に生まれると説かれている。なお、本書は法然の『撰択本願念仏集』に浄土宗の名の例として引用される。

本書の写本は、京都大原来迎院如来蔵書庫において昭和47年（1972）に発見された。『遊心安楽道私記』を著した義海もこの写本を見ること叶わず、明暦4年（1658）刊本のみを用いた。また『大正蔵』と『浄全』は明暦4年（1658）刊本を、『卍続蔵』は京大蔵の無刊記本を底本としている。本書の書誌的情報は、落合俊典「遊心安楽道諸本攷」（『華頂短期大学研究紀要』33、1988）と韓普光『新羅浄土思想の研究』（東方出版、1991）に詳しい。

作成者名：馬場久幸・山中行雄

懶翁和尚僧元歌

書名よみ：らいおうおしょうそうげんか
著者名：懶翁恵勤
著者名よみ：らいおうえごん
著者名別名：江月軒
著者生没年：1320-1376
成立翻訳年：14c
成立地：朝鮮半島（高麗）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、趙赫済氏蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』6 （「懶翁和尚語録」に収録）、『韓訳大蔵経』154、李鍾郁編『懶翁集』（韓国月精寺、1940）、李相宝編『韓国仏教家事全集』（韓国チプムンダン社、1980）、金鍾雨『郷歌文学研究』（韓国研学社、1971）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「高麗・懶翁恵勤禅師の念仏禅」（『印仏研』54-1、2005）
解説：本書『懶翁和尚僧元歌』の著者懶翁恵勤は、高麗末期に活躍した禅僧。20歳のときに了然禅師のもとで得度し、27歳で元に渡り38歳まで元に滞在した。その後、高麗に戻り、52歳のときには恭愍王に王師に任命されるなど、高麗仏教の指導者的な役割を果たし、57歳で入滅した。懶翁恵勤の生涯については『懶翁和尚行状』（韓国仏教全書6、pp.703-709）に詳しい。

本書は、405の歌からなる韻文で、新羅時代からの伝統を持つ「吏読文」というスタイルで書かれている。このことから、韓普光は大衆に念仏を勧めるために本書は著されたとする。（韓普光前掲論文、p.520）とはいえ「吏読文」というスタイルのために、朝鮮語学史に見識がないと本書の読解は困難。懶翁は本書で人生の儚さ、家・財産などへの執着の虚しさなどを歌いつつ、念仏による極楽往生を勧めている。本書での念仏とは称名念仏を意味していると思われる。例えば、行往坐臥のいかなる状態であれ、あるいは黙っている時であれ、高声であれ、隠念であれ、常に「南無阿弥陀仏」または「阿弥陀仏」と一生唱えつづければ、極楽往生は難しくないと説いている。また、本書で「観無量寿経」の十六観の一つである日没観が言及されるが、その修習法は、西に落ちてく太陽を、開目でも閉目でもよいので、眼前にして「阿弥陀仏」の大聖号を昼夜を問わず誦すると言われる。

ちなみに韓普光はこの箇所を「阿弥陀仏」の大聖号を「覚える」と解説し、本書中に称名念仏以外の念仏法が説かれているかのように述べているが、根拠は不明。というのは、テキストの当該箇所には明らかに「誦」と書いてあり、異読もない。したがってこの箇所をわざわざ「覚える」と解する必要があるのか疑問である。
作成者名：山中行雄

礼浄土十二偈

書名よみ：らいじょうどじゅうにげ
著者名：曇鸞
著者名よみ：どんらん
著者名別名：曇鸞大師、有魏玄簡大士、神鸞、曇巒
著者生没年：476（承明1）-542（興和4）
成立翻訳年：527-529（大通年間）以降
成立地：中国
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『続高僧伝』6
参考文献：野上俊静『中国浄土三祖伝』（文栄堂、1970）、藤堂恭俊・牧田諦亮『曇鸞・道綽』（「浄土仏教の思想」4、講談社、1995）
解説：『続高僧伝』巻6曇鸞伝に、曇鸞の著作として出る。

おそらく、迦才『浄土論』巻中に「禅那崛多三蔵、別訳龍樹讃礼阿弥陀仏文、有十二礼」、善導『往生礼讃』に「竜樹菩薩願往生礼讃偈十六拝」（中夜礼讃）として出される偈頌を指すと推測される。

『讃阿弥陀仏偈』のことである、とする説もある。
作成者名：曽和義宏

礼念往生文

書名よみ：らいねんおうじょうもん
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：16c末-17c（？）
成立地：朝鮮半島（李朝（？））
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
刊本所在：1、刊年不明（韓国国立中央図書館・ソウル大・韓国奎章閣・ハーバード大）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、朴世敏『韓国仏教儀礼資料叢書解題集』（仏教大学総合研究所、1998）
解説：『礼念往生文』の著者および成立は不明である。本書は、阿弥陀仏への礼文および讃偈、極楽往生のための念仏の法門や真言などを収録したものである。本書には「示楽庵居士念仏法門」「勒那三蔵礼仏観門」などの念仏の意義・方法を教示する法門類、「阿弥陀仏讃」「三種浄観讃」などの讃偈類、「神妙章句陀羅尼」「阿弥陀仏本心微妙真言」などの陀羅尼・真言類、また「天台智円法師発願文」などの発願文の類いが多数収録され、また「為臨終人念仏式」という儀礼文なども収められている。従って本書は、真言・陀羅尼および讃仏偈の読誦を包含する祈往生儀礼の文献と言えよう。

本書の導入部分では、「正月の一日と十五日に一斎食するものは、一万五千年持戒し、米七万斗に値する功徳を積み、八万の神々に護られる」というような斎日に関する記述が多くみられる。さらに、本書中に引かれる礼文・讃偈・真言の多くは、ハングルによる音写が割注のように付されている。以上の点から、本書は在家を視野に入れていることが伺える。また、一切諸仏に往生を祈願する「啓請」では「跪半拝」や「立半拝」などの注記がある。加えて、念仏の際の献供と勧供で唱えられる讃偈・真言も詳細に規定されている。このことから、本書は念仏儀礼を執り行う際の規範書としても使われたようである。

1の刊本は、巻末の損傷が著しく刊記の判読は不可能。このため著者、刊行年および刊行処などについて知ることができない。『韓国仏書解題辞典』では、壬辰の倭乱（1592）以降の刊行であろう、と推定されているが、その根拠は述べられていない。
作成者名：山中行雄

略諸経論念仏法門往生浄土集

書名よみ：りゃくしょきょうろんねんぶつほうもんおうじょうじょうどしゅう
書名別名：慈悲集、往生浄土集、浄土慈悲集

著者名：慧日
著者名よみ：えにち
著者名別名：慈愍三蔵
著者生没年：680（永隆1）-748（天宝7）
成立翻訳年：8c
成立地：中国
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、刊年不明（韓国桐華寺所蔵高麗本（上巻のみの巻尾残欠本））
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
活字本所載書：『大正蔵』85（No.2826）
参考文献：大屋徳城『鮮支那巡礼行』（東方文献刊行会、1930）、小野玄妙「慈愍三蔵の浄土教」（『現代仏教』2-17、3-23、1925-1926）
解説：著者の慧日は『宋高僧伝』巻29によると、出家受具の後、南海をまわってインドに赴き、18年間のインドおよび西域の遊学を経て719年（開元7）に帰国する。帰国後は玄宗皇帝より慈愍三蔵の号を賜り、長安や洛陽を中心に浄土教の宣揚につとめたため、「善導・少康とは異時なるも同化なり」と評された。
　本書はもと3巻からなるが、上巻のみが現存している。その上巻は巻尾が欠け、また途中にも落丁が数紙あるため全体像をつかむことは困難であるが、題号にあるとおり、浄土教典やその他大乗経論をもって念仏往生の真実を論証している。また当時隆盛していた慧能を開祖とする南宗禅における浄土教への理解に対して一々に反駁を加えていることにもこの時代の特徴が現れているだろう。
　なお法照の『浄土五会念仏誦経観行儀』には慧日作の「西方讃」や「般舟三昧讃」「厭此娑婆願生浄土讃」が収められている。こちらは儀礼にかかわる資料である。
作成者名：斉藤隆信

略論安楽浄土義

書名よみ：りゃくろんあんらくじょうどぎ
書名別名：問答一巻、略論、浄土略論、安楽土義、略論安楽土義
著者名：曇鸞
著者名よみ：どんらん
著者名別名：曇鸞大師、有魏玄簡大士、神鸞、曇巒
著者生没年：476（承明1）-542（興和4）
成立翻訳年：527-529（大通年間）以降
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大英図書館蔵本（711（景雲2）、書写者不明、敦煌本、S.2723、『敦煌宝蔵』22、『讃阿弥陀仏偈』と合冊、巻首欠）
2、竜谷大蔵本（唐初期、書写者不明、敦煌本、『讃阿弥陀仏偈』と合冊、首尾欠）
3、大原来迎院如来蔵蔵本（1100（康和2）、書写者不明、所在不明）
4、大阪本泉寺蔵本（室町末期、書写者不明）
5、京都常楽台蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、景雲二年（711）三月十九日、弟子張万及写
2、（奥書なし、巻尾欠のため）
3、康和二年二月四日未時許書写了、同月六日巳時許、於大原草菴移点了、桑門薬源、自他法界同利益、求生極楽成仏道
4、（未調査）
5、右此一巻者六道衆生之骨目出能三界麟麒教也、亦聖人之財白毫也
刊本所在：1、承応2年（1653、大正大・京都大）
2、延宝5年（1677、仏教大・竜谷大・大谷大・大正大）
3、天和2年（1682、未調査）
4、元禄6年（1693、大谷大、松誉厳的『略論安楽浄土義詳解』に含まれる）
5、天保9年（1838、未調査）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、延宝五丁巳九月吉日
3、天和二壬戌晩秋日、洛下書肆堂
3、京六条、丁子屋九郎右衛門後摺本（天和2年刊本の後摺本）
4、元禄六癸酉歳履端上旬、浪華北御堂前書肆、毛利田正太郎繍梓
5、天保九年五月再雕、六条珠数屋町、丁子屋九郎右衛門
活字本所載書：『浄全』1、『大正蔵』47（No.1957）、『卍続蔵』2-12-3
参考文献：名畑応順『略論安楽浄土義講義』（東本願寺出版部、1966）
解説：『讃阿弥陀仏偈』と一連のものとして流通していたようである。『讃阿弥陀仏偈』が実践の書であるのに対し、本書は浄土教義を示すために問答を設けて解説した書である。すなわち、（1）三界摂不、（2）浄土荘厳、（3）三輩品因縁、（4）胎生辺地、（5）仏智疑惑、（6）世間尽無尽、（7）仏度不度、（8）世間即出世間、（9）十念相続の九問答からなる。
　元暁『無量寿経宗要』に「什公言」とあることから、本書を鳩摩羅什の著作とする伝承があった。写本3の大原来迎院如来蔵の良忍手択本などが「羅什法師作」としていたようである。また内容から曇鸞の著作ではないとする説もある。
作成者名：曽和義宏

竜舒浄土文

書名よみ：りゅうじょじょうどもん
書名別名：浄土文、竜舒増広浄土文
著者名：王日休
著者名よみ：おうにっきゅう
著者名別名：竜舒居士
著者生没年：12c頃
成立翻訳年：1160（紹興30）
成立地：中国
巻数：12
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、明暦3（1657、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、明暦三丁酉（1657）三月吉辰、寺町通円福寺門前町、秋田屋平左衛門板行
活字本所載書：金陵刻経処本、『浄全』6、『大正蔵』47（No.1970）
参考文献：林田康順「王日休『龍舒浄土文』の研究（一）～王日休の生涯考～」（『印仏研』41-1、1992）、同「王日休『龍舒浄土文』の研究（二）～その撰述年次と増広考～」（『宗教研究』295、1993）
解説：南宋の居士王日休が、諸経論および諸人の伝記から浄土教に関連する内容を抜粋した書。王日休の撰述は10巻までで、11巻からの残り2巻の撰者は不明。

本書には、善導弥陀化身説を伝える遵式『西方略伝』や、念仏多善根説を伝える襄陽の石刻『阿弥陀経』が載せられており、法然『選択集』の内容に大きな影響を与えた重要な書である。
作成者名：曽和義宏

両巻無量寿経宗要／無量寿経宗要

書名よみ：りょうかんむりょうじゅきょうしゅうよう／むりょうじゅきょうしゅうよう
著者名：元暁
著者名よみ：がんぎょう
著者生没年：617（真平王39）-686（神文王6）
成立翻訳年：7c
成立地：朝鮮半島（新羅）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都永観堂禅林寺蔵本（平安後期-鎌倉期、証空筆写（？））
〈影印版〉『禅林寺蔵新羅元暁撰両巻無量寿経宗要（影印）』（民族社、1988）
写本奥書：1、（奥書なし、箱上蓋貼紙「大経宗要　山師御自筆」、箱上蓋墨書「両巻無量寿経宗要」）
刊本所在：1、宝永8（1711、大谷大・竜谷大）
2、宝永8（1711、竜谷大）
3、明暦4（1658、大正大）
4、刊年不明（竜谷大、金陵刻本）
5、刊年不明（京都大）
6、刊年不明（京都大）
7、刊年不明（京都法然院光明蔵）
刊本の奥書刊記：1、宝永八（1711）京都、河南四郎右衛門刊
2、宝永八（1711）松本屋清兵衛刊
3、明暦四（1658）
4、（刊記なし）
5、（刊記なし）
6、（刊記なし）
7、（刊記なし）
活字本所載書：『大正蔵』37 （No. 1747）、『卍続蔵』1・32・
3、『浄全』5、『韓国仏教全書』1、『元暁大師全集』2
現代語訳書：元暁全書国訳刊行会編『国訳元暁聖師全書』1（韓国語訳、大韓仏教元暁宗元暁全書国訳刊行会、ソウル、1988）
参考文献：山田行雄「曇鸞教学と元暁の浄土教思想—特に行論を中心として」（『仏教文化研究所紀要』4、1965）、康東均「元暁の浄土思想に於ける生因説」（『印仏研』58、1981）、渡辺顕正「新羅浄土教家の大経「胎化段」観」（『印仏研』75、1989）、李正模「禅林寺古鈔本『無量寿経宗要』と諸本との対照研究」（『仏教大学大学院研究紀要』18、1990）、梯信暁「元暁の浄土教思想について—『両巻無量寿経宗要』を中心として」『日本・中国仏教思想とその展開 』山喜房仏書林、1992）、藤能成「元暁『両巻無量寿経宗要』における誓願と菩提心について」（『日仏年報』60、1995）、韓普光（泰植）「元暁の念仏助因説について」（『印仏研』103、2003）、田中ケネス「元暁の『無量寿経宗要』における信—如来蔵思想と日本浄土教との関係を中心にして」（『日本浄土教の形成と展開 』 法蔵館、2004）
解説：本書の著者である元暁は、『宋高僧伝』巻4や『三国遺事』巻4によると、入唐を志したが、途中で断念し新羅に戻った。また還俗して小姓居士と名乗り、村々を歌い踊りながら歩き回って村民を教化した、と伝承されている。つまり元暁には、新羅仏教の大衆化を進めた人物としての一面がある。その一方で彼には、『金剛三昧経論』『起信論疏』など計86部もの多数の著作—その多くが散逸したとはいえ—があり、当時、類を見ない碩学でもあった。元暁の仏教思想は「和諍」という言葉に表されているが、それは対立する思想や仏教のあらゆる教説を融和し総合しようとするものである。

元暁の弟子の審祥が日本に華厳宗を伝えたという関係から、 元暁は東大寺を始めとする南都の諸寺院で高い評価を受けた。 高山寺にある『華厳縁起』には、元暁にまつわる様々な伝説が語られている。『無量寿経宗要／両巻無量寿経宗要』は、『無量寿経』の注釈書である。本書では、大意門（教之大意）・宗致門（簡経之宗致）・分別門（学人分別）・解釈門（就文解釈）の4科門を立てて『無量寿経』を釈するが、第4門の解釈門つまり経文の解釈は、全く脱落していて伝わっていない。落合俊典は、日本に伝来した時にすでに解釈門は含まれていなかったとする（落合俊典「解題」『禅林寺蔵新羅元暁撰両巻無量寿経宗要（影印）』）。

本書で元暁は、浄土往生の因を正因と助因の二つに分け、発菩提心を浄土往生の正因とする。助因は念仏修行と功徳行などである。助因である念仏について、元暁は、独自の見解を呈示する。彼は『無量寿経』中の下輩の十念を特に論じるが、この十念を隠密十念と顕了十念の二種に分ける。彼は『無量寿経』の「乃至十念」は隠密十念であるとし、それは『弥勒発問経』で説かれる十念、すなわち常生慈心、深起悲心から正念観仏までの一念一念に別の意味が込められる十念とする。さらに、この十念の実践は初地以上の菩薩のみが可能と言う。他方、顕了十念は『観無量寿経』の「具足十念」つまり称名念仏、観像念仏および観相念仏などであり、凡夫の十念といえよう。また『観無量寿経』の十念者は、五逆罪を犯した後で懺悔をしたから下品往生が可能であるとし、懺悔の有無が五逆罪人の往生を決定するとされる。

審祥によって日本にもたらされた新羅華厳が、東大寺など南都の寺院で盛んに研究されるにつれ、『無量寿経宗要／両巻無量寿経宗要』もよく研究された。しかし11世紀以降、元暁の浄土思想は、本書に代わって『遊心安楽道』に代表されるようになる。ただし、現在『遊心安楽道』は元暁の真作でないという意見が有力である。

京都永観堂禅林寺本は、寺伝などで浄土宗西山派の祖証空の自筆であるとされているが、証空の書状などと筆跡が一致しないことや、写本は33紙よりなるが、24紙から明らかに別人の筆となっている、といった2点から寺伝の信頼性は高くない。
作成者名：馬場久幸・山中行雄

臨終偈（仮名）

書名よみ：りんじゅうげ
著者名：涵虚得通
著者名よみ：かんきょえつう
著者名別名：己和
著者生没年：1376-1433
成立翻訳年：15c前半
成立地：朝鮮半島（李朝）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正統5（1440、ソウル大・韓国釜山梵魚寺、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）

2、刊年不明（韓国東国大、『涵虚堂得通和尚語録』の刊本）
刊本の奥書刊記：1、正統五年庚申（1440）七月、慶尚道聞慶鳳厳寺、門人文秀書刊
2、（未調査）
活字本所載書：『韓国仏教全書』7（『涵虚堂得通和尚語録』中「涵虚堂得通和尚行状」に収録）、『涵虚大師文集』（「韓国歴代文集叢書」202、景仁文化社、ソウル、1998）、『涵虚堂得通和尚語録』（韓国普済社、1940）
参考文献：東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、1982）、韓普光「朝鮮・涵虚得通の念仏禅について」（『印仏研』55-1、2005）
解説：本書『臨終偈』の著者は、涵虚得通は朝鮮時代の禅僧。21歳までは儒学を学んでいたが、友人の死をきっかけに、仏門に入る。その後『円覚経』・『金剛経』などの注釈書を著し、58歳で寂した。彼の行状は、韓普光論文から簡潔に知ることができる。
　本書は、涵虚得通が臨終の際に残したとされる偈頌。
　短いので以下に全文引用する。
　「湛然空寂　本無一物　霊光赫赫　洞徹十方　更無身心　受彼生死　去来往復　也無罣礙　少選又曰　臨行挙目　十方碧落　無中有路　西方極楽」
　すなわち臨終の際に目をあげる（臨行挙目）と、極楽への道が開けていると歌っており、涵虚得通の極楽往生に対する切なる憧憬を伺わせる偈頌と言えよう。
作成者名：山中行雄

臨終正念訣

書名よみ：りんじゅうしょうねんけつ
書名別名：臨終正念往生文、臨終正念記、臨終正念要訣、臨終正念要決、臨終要決
著者名：善導（？）
著者名よみ：ぜんどう
著者名別名：導禅師、光明大師
著者生没年：613（大業9）-681（永隆2）
成立翻訳年：7c
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、紹熙1年（1190、大津市新知恩院）
刊本の奥書刊記：1、四明東呉存思蘭若比丘宗本重雕即施、紹熙改元臘月八日
活字本所載書：『大正蔵』47（No.1966,1969A,1970）、『浄全』4
参考文献：藤堂祐範「宋板臨終正念要決について」（『浄土学』14）、玉山成元「善導著『臨終正念要訣』について」（『善導大師の思想とその影響』、大東出版社、1977）、藤堂恭俊「『臨終要決』の異本とわが国における流伝」（『善堂教学の成立とその展開』、山喜房仏書林、1981）
解説：本書は道鏡・善道の『念仏鏡』（『大正蔵』47,p.133）に収録されている文献であり、これが後世に善導の作として誤って伝承されてきたのである。内容は知帰子と浄業和尚（『念仏鏡』では善道和尚）の臨終正念をめぐっての問答、臨終に医薬品を用いること、神に禍福を祈ること、臨終念仏について、それぞれ問答をもって構成されている。また『竜舒浄土文』（『大正蔵』47,p.287）や、『楽邦文類』（『大正蔵』47,p.213）にも引かれている。
作成者名：斉藤隆信

霊峰蕅益大師撰定浄土十要

書名よみ：れいほうぐうえきだいしせんていじょうどじゅうよう
書名別名：浄土十要
著者名：智旭
著者名よみ：ちぎょく
著者名別名：素華、八不道人、蕅益大師、蕅益老人
著者生没年：1599（万歴29）－1655（順治12）
成立翻訳年：1655（順治12）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
刊本
刊本所在：1、清光緒20（1894、中国国家図書館）
2、民国12-民国14（1923-1925、中国国家図書館）
3、民国19（1930、中国国家図書館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『卍続蔵』2-13-4・5、『原本浄土十要』（霊岩山、（未調査））、『浄土十要』（仏光出版社、1990）
参考文献：郭朋『中国仏教思想史』（福建人民出版社、1995）、望月信亨『支那浄土教理史』（法蔵館、1942）、張力等『中国歴代高僧』（吉林教育出版社、1997）、張聖厳「明末における中国の浄土人物及び思想」上・下（『明海大学教養論文集』1991、1993）、丁海波『清代浄土宗著述研究』（四川出版集団巴蜀書社、2009）
解説：智旭は明の四大高僧の一人として知られている。字は蕅益、また朴華で、自ら八不道人、また西有沙門を号した。智旭は最初儒学を学び、『闢仏論』など十数篇の仏教批判するの書物を書いたが、17歳の時、袾宏の『自知録』と『竹窓随筆』などを読んだ後、以前書いた書物を焼いて、仏法を学び始めた。天台の禅観と唯識を学んだが、晩年には専ら浄土の教えを修めたと言われている。『梵網合註』・『大仏頂首楞厳経文句』・『法華会義』・『楞伽義疏』・『阿弥陀経要釈』・『閲蔵知津』・『霊峰宗論』などの著作が知られている。
　智旭はこれらの書物のほかに、自分の著作を含む重要な浄土系諸師8人の代表的著作を指定し、『浄土九要』として編集した。その後弟子成時が自らの著作も入って『浄土十要』を出版した。
　第一要として智旭『阿弥陀経要解』、第二要として遵式『往生浄土懺願儀』『往生浄土決疑行願二門』、第三要として成時『観無量寿仏経初心三昧門』『受持阿弥陀経行願儀』、第四要として智顗『浄土十疑論』、第五要として飛錫『念仏三昧宝王論』、第六要として天如『浄土或問』、第七要として妙葉『宝王三昧念仏直指』、第八要として梵『西斎浄土詩』、第九要として伝灯『浄土生無生論』『浄土法語』、第十要として袁宏道『西方合論』が挙げられている。一々の著作の内容等はそれぞれの項目を見よ。
　本書は智旭以後の中国近現代浄土思想に大きな影響を与えた。特に清・民国時代の印光はこの『浄土十要』を刊行し普及に努めた。そのことによって浄土教の最重要な書物として取り扱われるようになったが、その際、印光は各要にまた別の重要な書物を付録として加えた。印光がかつて住した蘇州霊岩山寺によって1990年代に刊行された『原本浄土十要』の中では、第一要に『無量寿経四十八願』、第三要に『法照伝』『慧日伝』『蓮華勝会文』『礼懺儀序』、第八要に『蓮池答曹魯川書』『蕅益開示』、第九要に『続生無生論』『省庵菩提心文』『圓観等伝』等、第十要に『徹悟語録』が附録として加えられ、そして最後の附本には、『往

生論註』『蓮華世界詩』『省庵勧修浄土詩』が加えられている。その中、『往生論註』は智旭の時には散逸して伝わっていなかったのであるが、楊仁山居士によって日本から伝えられ、印光がそれを付本としてこの『浄土重要』に加え、刊行したものである。
作成者名：肖越、趙仲明

蓮邦詩選

書名よみ：れんぽうしせん
著者名：広貴
著者名よみ：こうき
著者生没年：16c-17c
成立翻訳年：16c末-17c初頭（万歴年中）
成立地：中国
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『卍続蔵』2-15-4
解説：著者広貴の伝歴は明らかではないが、書名から著者は妙意菴に住した一向に念仏する雲棲に私淑した人物であると思われる。
　本書は、周代から清朝までの年代に従って著した中国仏教者のみならず、インド仏教者たちの阿弥陀仏、極楽浄土、及び浄土教往生を讃嘆した詩文を取り上げて、編集したものである。周代に当たる人物は、インドの阿氏多・跋陀羅・迦哩迦・半託迦を取り上げている。
　更に内容を「如来弘願望」（4人の16首）、「苦勧廻轡」（23人の81首）、「翻然向往」（19人の30首）、「一意西馳」（18人の67首）、「執持名号」（18人の54首）、「聖境現前」（17人の61首）、「発明心地」（22人の159首）、「華開見仏」（12人の25首）、「広度衆生」（8人の21首）という9項分類し、歴代の人物が極楽浄土を讃嘆する詩文を収録する。謝霊運・善導・永明・智旭などの仏教代表者はもとより、仏馱跋陀羅などのインド僧侶の訳文も収録されている。
作成者名：肖越

目　　本

阿弥陀観私記

書名よみ：あみだかんしき
著者名：慶祚
著者名よみ：けいそ
著者名別名：龍雲房、三井大阿闍梨
著者生没年：955（天歴9）-1019（寛仁3）
成立翻訳年：10c末-11c初頭
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1／「小山本」）
参考文献：築島裕「古訓点資料に現れた十一、十二世紀の仏教諸宗教学の交流」（古代学協会編『後期摂関時代史の研究』吉川弘文館、1990）、松本光隆「天台宗寺門派における金剛界儀軌の訓読について」（井上親雄・ 山内洋一郎編『古代語の構造と展開 』 （「研究叢書 」116 、和泉書院、1992）、築島裕『平安時代訓点本論考；研究篇』（汲古書院、1996）、八木昊恵『恵心教学史の総合的研究』（永田文昌堂、1996）
解説：著者の慶祚は三井の大阿闍梨ともいわれ、摂関期の天台宗寺門派を代表する学僧である。寺門僧による古点本の中で慶祚の訓説が最も重用されていることは築島裕らによって実証されている。この慶祚は慈覚・智証両門徒の対立が激化するなかで、大衆を引き連れて山を下り、岩倉大雲寺に移り、寺門の学問の隆盛に大きく寄与した。長徳3年（997）、宋国から新書5部が送られてきた際、源清の『竜女成仏義』を批判した。この『竜女成仏権実疑難』は現存する。また『続本朝往生伝』の一条天皇の伝において「学徳には源信・覚運・実因・慶祚・安海・清仲（中略）皆これ天下の一物なり」と当時から高くその学解を評価されている。『三井往生伝』にもその浄土往生が立伝されている。
　なお、中世の伝承では慶祚は地蔵菩薩を阿弥陀仏の因位とする弥陀地蔵一体説の創案者としても知られる（『薄草紙口決』・『沙石集』）。
　なお、本書は散逸して伝わらないものの、阿弥陀仏を観想する為の私記であったことが推察される。
　『日仏全』1所収の『長西録』（寛文2年（1662）刊『長西録』も同様）と小山本『長西録』（小山正文「寛永21年本『浄土依憑経論目録』」『同朋大学論叢』62、1990）では記述が異なる。『日仏全』1の方は「西方要観一巻　慶祚園城寺、阿弥陀観私記一巻　〈著者無記名〉」と「西方要観」の著者として「慶祚」を挙げ、「阿弥陀観私記」については不明とする。そして、これらの記述を採用する『仏書解説大辞典』4には同様の記載がある。更にこの『仏書解説大辞典』4の内容を継承する『国書総目録』3にも同じ記載があり、また『国書人名辞典』2、『日本仏教人名辞典』も「慶祚」を「西方要観」の著者とする。しかしながら、ここで小山本の記述を尊重するならば、「西方要観一巻　慶祚園城寺、阿弥陀観私記一巻　〈著者無記名〉」と「西方要観」の著者は「実範」であり、「阿弥陀観私記」の著者を「慶祚」と訂正する必要がある。
作成者名：能島覚

阿弥陀経綱要記

書名よみ：あみだきょうこうようき
著者名：永範
著者名よみ：えいはん
著者生没年：12c頃
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：2
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：著者の永範については未詳である。
　本書は散逸して伝わらない。『長西録』には法量が2巻47丁であったと伝えられている。
作成者名：能島覚

阿弥陀経私抄

書名よみ：あみだきょうししょう
書名別名：阿弥陀経私集鈔
著者名：尭恵
著者名よみ：ぎょうえ
著者名別名：善偉房尭恵、善偉
著者生没年：1328（嘉暦3）-1395（応永2）
成立翻訳年：14c
巻数：3
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：写本
刊本
写本所在：1、竜谷大（1727（享保12）（？）、書写者不明）
写本奥書：1、（袖書）智円書ス、此書刊行尭恵抄ト全同也、然下巻初［■］入往生記投機抄、十四五紙之間刊本無之（「舎利弗若有等事」の段落途中で分巻され、下巻巻頭に『往生記投機抄』・『授手印伝心鈔巻第二』・『領解授手印徹心鈔巻第三』と要文2ヶ条、同巻末に『天満宮略縁起』を挿入）（奥書）享保十二年歳次丁未（1727、『天満宮略縁起』のみの書写年次か？）
刊本所在：1、享保2（1717、西山短大・竜谷大・大正大）
刊本の奥書刊記：1、（巻頭序）阿弥陀経私集抄序、釈堯慧諱善偉住洛之圓福寺、立信上人五世苗裔而頓乗上人之門人也、師著於編也数軸頗以通経、是居其一矣、予嘗遊学時偶於田舎獲斯旧本、巻盈三巻証包於蔵、矧乎数歳塵封秘笈底尚矣、一日有容（「客」か）謂予曰、方考此抄之引文与事実魚魯而錣之梓以行云于世焉、余謂不克也、而容之責不得遁焉、披大蔵之巻和会経論異文加旁訓従剞劂氏之需後学伝誦、応永二年（1395）染微疾七月二十日安祥而寂、奇雲垂寺内云、春秋六十八歳、享保二酉丁暦（1717）仲夏佛日雒北十念寺隠士老梅軒（方形陽刻「識」）
（刊記）享保二酉丁年（1717）仲夏上旬／京五条通東洞院東入福森兵左衛門板行、同儀兵衛、成出權兵衛、熊木茂兵衛板行
活字本所載書：（なし）
参考文献：稲田広演「《研究資料》円福寺所蔵享保二年板『阿弥陀経私集鈔』影印」（『深草教学』22、2002）
解説：西山派深草義の円福寺第3世尭恵善偉の著作で、『阿弥陀経』の注釈書。初期深草義の教義を伝えているだけでなく、散佚した『阿弥陀経』古注を豊富に引用している点でも貴重な文献である。
　まず始めに、法然『阿弥陀経釈』と善導『法事讃』を解釈の基準とすることを述べ、大意・釈名・入門解釈の三科を立てている。本文解釈に入る前には、和漢両朝の『阿弥陀経』註釈書を列挙している。『長西録』所載のものと比較すると、部数は約三分の二ではあるが、『長西録』未採録の3部（智央『円修記』一巻・法久法師『西記』一巻・伝懐感禅師『疏』二巻）も含まれている。
　次の『阿弥陀経』の異訳本を挙げる段では、師の暢空よりの伝聞として、秦羅什訳・宗元嘉中求那跋陀羅訳・唐玄奘訳・後秦失訳の四訳の他に、不空三蔵の訳本が青蓮院経蔵にあることを述べており、暢空が青蓮院との関わりを持っていたことを窺わせる。
　以下ほぼ全篇、逐語的に『阿弥陀経』を解釈している。逐語注釈以外には、通序別序有無事・六師身子六種闘勝事・精舎焼失壇像不焼事・成道六年須達造精舎事・実畜生有無

事・聖迎時命終事・終焉見佛心眼事・往生浄土有中有哉事の8項目が別出されている。いずれも尭恵の関心のありかを示すものであろう。

写本は竜谷大所蔵の一本しか確認されていない。木板本は享保2年（1717）に出版され、さらに本文に埋め木による修正が加えられた版元・出版時期とも不明の後刷本が出ている。しかしこの両板本には、文章が前後する錯簡誤刻があり、通読する際には、龍大写本に拠る必要がある。

作成者名：稲田廣演

阿弥陀経釈

書名よみ：あみだきょうしゃく
書名別名：小経釈
異本書名：阿弥陀経私記、小経私記
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本
写本所在：1、『漢語灯録』所収（『漢語灯録』の項を参照）
写本奥書：1、『漢語灯録』の項を参照
刊本所在：1、『浄土三部経釈』所収（『浄土三部経釈』の項を参照）
2、『漢語灯録』所収（『漢語灯録』の項を参照
刊本の奥書刊記：1、『浄土三部経釈』の項を参照
2、『漢語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『法然上人集』（「大日本文庫」仏教篇）、『漢語灯録』の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』1（春秋社、1989）、袖山栄輝『傍訳　阿弥陀経釈』（四季社、2005）
参考文献：住田智見「真本漢語灯録と三部経私記（一）」（『無尽灯』23-6、1918）、住田智見「真本漢語灯録と三部経私記（二）」（『無尽灯』23-10、1918）、今岡達音「三経釈と選択集との著作前後」（『仏教学』2-3、1925）、今岡達音「三経釈と選択集との著作前後」（『仏教学』2-6、1925）、岸一英「『逆修説法』と『三部経釈』」（『藤堂恭俊博士古稀記念　浄土宗典籍研究』研究篇、同朋舎出版、1988）、岸一英「『阿弥陀経釈』古層の復元―『三部経釈』の研究（五）―」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』1、山喜房仏書林、2004）、岸一英「『阿弥陀経釈』古層復元本」（『仏教文化研究』54、2010）
解説：法然の『阿弥陀経』を解釈したもの。『浄土三部経釈』のうちの1つ。

石井教道は、思想的に『逆修説法』・『選択集』より、以前に成立したと推測する。古本『漢語灯録』第2、3巻末の識語によると、文治6年（1190）に、東大寺で講説したものとあるが、一方、岸一英によれば、その説に反対し、普段の講説の積み重ねたものと推論する。

本書は大きく分けて2系統のテキストがあり、1つは寛永版・承応版で、科段は、来意、専雑、釈名、入文解釈の4つに分ける。もう1つは『漢語灯録』所収本で、弁所依経、重釈二行、経来意、釈名、入文解釈の5つに分ける。岸一英は、前者の系統のテキストのほうが、比較的原意に近いとする。

法然の一向念仏の教えの立場から、『阿弥陀経』を解釈する。「入文解釈」の中では、正宗分を大きく「極楽依正」と「念仏往生」に2分して解説する。特に少善根の文や、六方諸仏証誠の文などの、念仏の要文に力点を置いているようである。また、本書は所々に源信の『阿弥陀経略記』の影響が見られる。

本書は文献的に他の『無量寿経釈』・『観無量寿経釈』とともに問題がある。すなわち、これら3書は、『選択集』の文が、後世になって流入したと今岡達音は主張する。更に岸一英は、『広本選択集』以外の文であっても、付加された新層の部分があることを示唆する。したがって、それら3書の原意を知るには、新層を除き、古層に注視する必要がある。

作成者名：角野玄樹

阿弥陀経集註

書名よみ：あみだきょうしゅっちゅう
書名別名：弥陀経註、弥陀経集註、阿弥陀経註、阿弥陀経集註、観経阿弥陀経註、観経阿弥陀経集註、観阿弥陀経集註、観経弥陀経集註、観経弥陀経註
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、京都西本願寺蔵本（書写年不明、親鸞真筆本）
〈影印版〉:『観無量寿経集註　附阿弥陀経集註』（全人社、1944）
〈影印版〉:『観無量寿経註』（同朋舎出版、1980）
〈影印版〉:『増補親鸞聖人真蹟集成』7（法蔵館、2006）
2、高田専修寺蔵本（1318（文保2）、存覚書写）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、此本者、以上人御真筆慥所奉写也、自去年丁巳（1317）季春之候至今茲戊牛（1318）暮秋之天、渉両載数月之居諸終一巻二経之書写訖、経文釈文之交行也、愚蒙易迷、大字小字之連点也、不審難明之間、為顧知慮、難致固辞、依願主慇懃之懇望、励小量随分之微功者也、努力努力可被止外見而己、右筆釈存覚二十九歳
活字本所載書：『定本親鸞聖人全集』註疏篇
参考文献：小川貫弌「観阿弥陀仏経集註について」（『印仏研』9-1、1961）、平野顕照　「親鸞聖人撰述観阿弥陀経集註について」（『親鸞聖人』、1961）、石田充之「「観経弥陀経集註」に示される親鸞聖人の思想について」（石田充之『親鸞教学の基礎的研究』、永田文昌堂、1970）、小川貫弌「観阿弥陀経集註について」（『定本親鸞聖人全集』別冊、法蔵館、1970）、川瀬和敬「高田山所蔵存覚手写本「観阿弥陀経集註」について」（『定本親鸞聖人全集』、法蔵館、1970）、宗兼利「親鸞教学の総合的研究　『観経弥陀経集註』における親鸞聖人の加点について」（『仏教文化研究所紀要』10、1971）、北山覚「＜観無量寿経・阿弥陀経集註＞について　その一」（『真宗研究会紀要』4、1973）、黒田覚忍「『集註』の思想傾向について」（『宗学院論集』48、1978）、門川徹真「『阿弥陀経集註』における『称讃浄土経』文所引の意味」（『真宗研究』25、1981）、森田真円「「観経弥陀経集註」の研究」（『印仏研』35-1、1986）、中村元「『観経阿弥陀経集註』声点索引」（『教学研究所紀要』6、1998）

解説：親鸞による『阿弥陀経』の註記。
本書は、元は別項『観無量寿経集註』と一具であり、そこに善導『般舟讃』からの引用がない事などから、親鸞の若年期、特に法然膝下時代の註記とされている。
本書は、巻子本に『阿弥陀経』本文を大書し、その行間、上下段、紙背に善導『法事讃』『観念法門』、『称讃浄土経』、元照『阿弥陀経義疏』を註記している。
註記の特色として、経文の記入されている表側にはそれぞれ直接的な経文解釈文が記され、紙背には偈文や独特な解釈、主張等を記している事が挙げられるが、本書では、善導『法事讃』下巻は表側に記され、上巻が紙背に記入されるという点が注目されるところである。
本書の特色として、『観無量寿経集註』引用文には一部訓読点が記されているのに対し、本書には一カ所もそれがないという事があげられる。この点については、当時『観無量寿経』中心の浄土教観を持っており、『阿弥陀経』についてはその地位が定まっていなかったからではないかとする見解がある。この点については黒田覚忍・宗兼利・石田充之論文を参照。
本書は昭和18年（1943）に西本願寺寺宝調査の際、禿氏祐祥によって発見され紹介された。当時本書は特に題名はなく、単に『観無量寿経』とされており、別項『観無量寿経集註』とは一具であったが、修理の際2冊に分離し『阿弥陀経集註』とされた。
作成者名：藤田真隆

阿弥陀経要記

書名よみ：あみだきょうようき
著者名：永観
著者名よみ：ようかん
著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：1103（康和5）以前
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『往生拾因』（『浄全』15）、『拾遺往生伝』（『日本思想大系』7）、『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）、末木文美士「永観『阿弥陀経要記』逸文について」（『印仏研』25-1、1976）、新井俊夫「『阿弥陀経要記』について」（『仏教論叢』21、1977）
解説：著者の永観については『往生拾因』の項を参照。
本書は散逸して伝わらない。しかし、『往生拾因』等には永観自身が本書に言及していること、良忠・了慧ら初期浄土宗の学僧の著述に本書が引用されていることから本書の存在と逸文は知られていた。近年、末木・新井両氏によってその逸文の全体が報告されている。
それによると、本書の内容は以下のものであったと推察される。まず、引用典籍としては吉蔵『法華経義疏』・善導『観経疏』・懐感『釈浄土群疑論』・智光『往生論疏』・恵心『阿弥陀経略記』等が挙げられている。次に『阿弥陀経』の分科は元暁・円測・慈恩・僧肇・元照・恵心と同様に伝智顗『阿弥陀経義記』の理解を踏襲する。また一七日の行については尋常・臨終に通じるとしながらも、尋常の行は造罪等によってその功徳が滅することのない決定業であり、懺悔滅罪して必ず往生を得るものだと説く。更に『無量寿経』の第18願の「唯除五逆誹謗正法」の釈に関しては懐感『釈浄土群疑論』に紹介する十五家にふれ、経文のとおりに理解しつつも、往生は願行具足こそが肝要であることなどを明かしているが、いづれも逸文で知られるのみであって、その全体は不明である。
本書の成立は『往生拾因』に言及があることから康和5年（1103）以前であろう。
作成者名：能島覚

阿弥陀経略記

書名よみ：あみだきょうりゃっき
書名別名：阿弥陀経疏、小阿弥陀経疏、小経略記、弥陀経略記、阿弥陀経の略記
異本書名：阿弥陀経大意、会本阿弥陀経略記、阿弥陀経略記会本
著者名：源信
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：1014（長和3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1279（弘安2）、書写者不明、下巻のみ）
2、東京大蔵本（書写年不明、定智書写）
写本奥書：1、弘案二年巳卯（1279）四月二十日、点之畢
2、（奥書なし、「播州明石太山寺住定智求得薬師院」の識語あり）
刊本所在：1、寛永7（1630、坂本実蔵坊内真如蔵・大正大）
2、承応3（1654、大倉精神文化研究所・金沢大暁烏文庫・京都大・高野山真別処・西教寺方丈文庫・大正大・東北大狩野文庫）
3、元禄3（1690、叡山文庫天海蔵・大谷大・大正大・竜谷大）
4、元禄6（1693、竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、于時寛永七庚午年（1630）初秋、開之
2、承応三甲午暦（1654）孟春吉祥、京極通円福寺町、秋田屋平左衛門板行
3、秋田屋平左衛門刻梓
4、元禄六癸酉歳（1690）四月八日／江戸書林須原茂兵衛、皇都書林勝村治右衛門
活字本所載書：『恵全』1、『大正蔵』57（No.2210）、『日仏全』31
参考文献：小山昌純「源信撰『阿弥陀経略記』に関する考察―東京大学総合図書館蔵写本を基に―」（『西山学会年報』14、2004）
解説：著者に関しては、長久4年（1043）頃成立と考えられる鎮源『法華験記』源信伝に「経論の章疏を造り、顕密の教文を抄づ＜小阿弥陀経疏・対倶舎抄・因明四相違疏注釈・同断纂なり＞（日本思想大系『往生伝・法華験記』、p.160）とその名が見られ、『永超録』にも「同経（阿弥陀経）略記一巻　日本源信僧都」（『高山寺本東域伝灯目録』p.189）とあることから、源信の真撰と考えられる。
成立年代は、序に記される「長和三年甲寅（1014）暮春三月九日」と考えられる。内容は序と本文からなり、序には、本書が親衛藤将軍（藤原成房か）の依頼により、智顗『阿弥陀経義記』の要旨を詳述し、『阿弥陀経』を解説したものである旨が述べられる。本文は大意・経題解釈・本文解釈で構成されるが、その中「大意」は後に『阿弥陀経大意』として別行、流布している。経題解釈では別号であ

る「仏・説・阿弥陀」をそれぞれ「娑婆の化主・娑婆の化儀・極楽の化主」と釈し、通号である「経」を三世諸仏の諸経であるが、その義理は一つであると釈す。本文解釈では智顗『阿弥陀経義記』の文科により序文・正宗分・流通分に分かち、随時『称讃浄土経』を対照しつつ略釈される。「無量寿仏」を釈して、「無」を空、「量」を仮、「寿」を中、「仏」を三智一心具とする無量寿三諦説は本書の特質として注目される。

なお写本の所在として、『国書総目録』1（p.93）では「国会・東大・金沢文庫」を挙げるが、現在、国立国会図書館蔵本の所在は不明。

作成者名：上杉智英

阿弥陀悔過

書名よみ：あみだけか
著者名：昌海
著者名よみ：しょうかい
著者生没年：8c-9c
成立翻訳年：平安初期
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、高野山金剛三昧院蔵本（1192（建久3）、書写者不明／1223（貞応2）、宗快書写／1248（宝治2）、書写者不明、中間欠）
2、金沢文庫蔵本（鎌倉末期書写、書写者不明）
3、京都来迎院如来蔵蔵本（1525（大永5）、詒雲書写）
4、多紀道忍蔵本（1843（天保14）、良海書写）
5、大津明徳院無動寺蔵本（1826（文政9）、豪実書写）
6、勝林院蔵魚山叢書3所収本（書写年不明、声淵書写）
写本奥書：1、本云、建久三年（1192）十一月十二日書了云々／本云、貞応二年（1223）廿二日蓮入房御本書写了、宗快／宝治二年（1248）歳次戊申八月十日書写了（大蔵会編『大蔵会展観目録』文華堂書店、1981、p.588、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』山川出版社、1975、p.36、図版4、『国書総目録』1、p.93b）
2、奥書なし（『国書総目録』1、p.93b）
3、時大永五(1525)乙酉二月一日、於魚山勝林院宝泉房悪筆ニテ写書、右本者向之房詒運自筆博士共於末代重宝写之置訖、大僧都幸淵（花押）（『国書総目録』1、p.93b、『昭和現存天台書籍総合目録』下、p.929、『来迎院如来蔵聖教文書類目録』）
4、康永二年（1343）癸未於大原来迎院…卒爾染筆畢…声淵（『昭和現存天台書籍総合目録』下、p.929）
5、（奥書なし、『国書総目録』1、p.93b、『昭和現存天台書籍総合目録』下、p.929）
6、（奥書なし、『昭和現存天台書籍総合目録』下、p.929）
参考文献：井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、pp.35-79）、津村諦堂『日本浄土教の研究』（山喜房仏書林、1980、p.75）
解説：昌海は大和秋篠寺の善珠（723-797）の弟子で、法相・唯識を学び興福寺に住した。のちに大和広岡に移り、法相宗を広めたが、師の善珠と同じく浄土願生者でもあった。『仏書解説大辞典』では桓武帝代（781-806）の人物とし、一方『長西録』では「依寛平法皇」とあり、昌海が寛平法皇（もと宇多天皇、即位887-897）と関係していたことが知られる。また『浄土法門源流章』では日本浄土六祖の一人とする。

本書は『長西録』に出て、『浄土法門源流章』に「法相昌海欣求安養、撰西方念仏集一巻並阿弥陀悔過」（『浄全』15、p.590）、『本朝高僧伝』にも「撰西方念仏集・阿弥陀悔過各一巻」とあり、『西方念仏集』と並び昌海の著作であることが知られる。その内容は題名に依れば、阿弥陀仏を本尊する悔過会の一種で、罪過を懺悔する儀式である「阿弥陀悔過」の文を書いたものであると思われる。また来迎院如来蔵蔵本奥書の「博士共」という記述からすると、「博士」も記載されている可能性がある。なお、『国書総目録』、『昭和現存天台書籍総合目録』に依ると、『阿弥陀悔過』と題する多数の写本が伝わっているが、写本未調査のため、それらの内容が昌海の著作であるかは不明である。

作成者名：北条竜士

阿弥陀抄

書名よみ：あみだしょう
書名別名：阿弥陀中川、観自在王三摩地、阿弥陀私記
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、坂本西教寺方丈文庫蔵本（1192（建久3）、蓮寂書写（？））
2、曼殊院蔵本（1220（承久2）、契昭書写）
3、曼殊院蔵本（鎌倉期、契昭書写）
4、東寺観智院金剛蔵蔵本（江戸期、書写者不明）
写本奥書：1、承安五年（1175）五月十一日於天王寺念仏三昧院宿所、以東寺本書之、政春／建久三年（1192）三月二十一日書之、比校了、沙門蓮寂
2、承安五年（1175）五月十一日於天王寺念仏三昧院宿所、以東寺本書之、政春／建久五年（1194）九月二十九日賜弁阿闍梨御本書写了、金剛仏子聖一／承久二年（1220）十一月七日書写之、契昭、交了
3、読合了、契昭
4、文永四年（1267）六月七日於遍智院書写畢、良斉／写本之記云、正嘉二年（1258）八月二日以報恩院本書写畢、定一
活字本所載書：苫米地誠一「実範の阿弥陀観－付、東寺観智院所蔵『観自在王三摩地』翻刻－」（『智山学報』50、2001）
参考文献：佐藤哲英『念仏式の研究』（百華苑、1972）、櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、『京都府古文書等緊急調査報告書曼殊院古文書・聖教目録』（京都府教育委員会、1976）、苫米地誠一「実範の阿弥陀観－付、東寺観智院所蔵『観自在王三摩地』翻刻－」（『智山学報』50、2001）
解説：本書は真言密教の別尊法の一つである阿弥陀仏供養に関する実範の私記である。その分量はわずか五丁程度の小冊子であるが、特に阿弥陀仏の供養法に関して、教相面での注釈を施している点に特色がある。その構成は三段である。そのうちの主要な点を述べれば、以下の5点となる。（1）観自在菩薩は娑婆世界に現れる姿であり、また阿弥陀仏の因位であって、大日如来の別徳でもあるということ。（2）その異名として得自性清浄法性・観自在王・仁勝・無量寿という尊号を持つこと。（3）観自在菩薩の三摩地に入る過程として、五つの段階をふまえること（観自在三摩地・根本印明・正念誦・観菩提心・根本印明の五つを具する）。（4）『無量寿観修行儀軌』の観音成身観という箇所に対して三つの観想（自らを観ず・他を観ず・自他を観ず）を明らかにし、その中でも最初の自観に対する注釈は『理

趣釈』を用いて詳細に行っていること。(5) 観自在菩薩は諸仏の大悲そのものであること。

本書は守覚『秘抄』・頼瑜『秘抄問答』『薄草紙口決』・亮尊『白宝口抄』にその引用がみえる。しかも、それぞれの引用から阿弥陀仏法に関する議論の中で実範説と尊重されていた点が確認できる。また、本書とは別に実範の阿弥陀仏供養法に関する次第として『中川実範次第』・『中川実範弥陀次第』と称する典籍も存したようであるが、現在は逸文しか伝わらない。

ところで、本書の書名に関し、『阿弥陀抄』の名を挙げるのは小山本『長西録』所載のみである。西教寺本・曼殊院本の外題は『阿弥陀中川』であり、東寺本のそれは『観自在王三摩地』とまちまちである。

なお、西教寺本・曼殊院本の識語に共通して名が記されている政春とは台密十三流の法曼流の祖で相実の弟子に当たる台密僧である。そして、本書の撰者の実範と相実は『尊卑分脈』(実頼公流) によれば兄弟である。従って、これらを考え合わせると本書は実範に近接する俗縁・法縁に属する者によって書写が行われていることから、本書が実範撰述の私記である点は確かといえよう。

作成者名：能島覚

阿弥陀新十疑

書名よみ：あみだしんじゅうぎ
書名別名：新十疑、新十疑論
著者名：禅瑜
著者名よみ：ぜんゆ
著者名別名：禅愉、禅輸
著者生没年：913?（延喜13）-990（正暦元）
成立翻訳年：10c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、名古屋真福寺蔵本、(1156（保元1)、弁憲写)
2、滋賀西教寺正教蔵本（1657（明暦3)、舜興写)
3、叡山文庫無動寺蔵本（1810（文化7)、真超写)
4、京都大学図書館蔵本（明治時代、書写者不明)
写本奥書：1、保元元年十月十日校点畢。為往生極楽証大菩提也。弁憲之本也。
2、保延四年戊午正月八日為当年竪義書了。同二月三日校勘了。観仏宗沙門行全記之。自実教郷房賜之。寿永三歳三月十日。欣求安養念仏者重円記也。右者以宝園院本令書写之者也。明暦参丁酉歳八月吉日。江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵。
3、文化七年庚午七月上旬以黒谷青龍寺蔵本令書写之者也。台岳法曼院真超記。
4、保延四年戊午正月八日為当年竪義書了。同二月三日校勘了。観仏宗沙門行全記之。
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』(百華苑、1979)、梯信暁『奈良・平安期浄土教展開論』(法藏館、2008)
解説：禅瑜の著。伝天台『十疑論』の形式に倣い、10項目を立てて浄土教の諸問題を論じている。第1疑から第3疑までは、九品往生人の行業があまりに易行に過ぎるという疑問を呈し、宿善が深厚である等の理由を挙げて経説を信受せよと説く。第4疑では女人・根欠・二乗の往生、第5疑では未断惑人の往生、第6疑では五逆謗法人の往生に関する疑問を掲げ、いずれも天台教学に照らして経説の真実を主張している。第7疑では「不退転」という往生の利益に関する問題を論じ、第8疑では弥陀身土論を取り上げて、「同居浄土・劣応身」とする天台宗の基本的立場を提示している。第9疑では阿弥陀仏が諸仏に比べてことに勝れているという教説に対する疑問を取り上げ、第10疑では末法濁世における浄土教の意義を論じている。全般的に天台宗の立場に則した見解が示されていて、天台教学に基づく浄土教教理の構築を目指した書であると言える。禅瑜は良源の弟子で、論義の名手として良源の活動を支えた人物の一人である。『阿弥陀新十疑』は、天台浄土教教理の整備に努めた良源の意向を受けて著されたものと考えられる。後世への影響も大きく、ことに院政期、天台宗において浄土教義科が整備される際に参考書として用いられたことがわかっている。
作成者名：梯信暁

阿弥陀懺補助儀

書名よみ：あみだせんふじょぎ
著者名：円西
著者名よみ：えんさい
著者生没年：平安期
成立翻訳年：平安期
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1、p.348)、『蓮門録』(『日仏全』1、p.390)
解説：本書は現存が確認されておらず、内容は不明。書名より類推すれば、円仁『阿弥陀懺法』もしくは遵式『小阿弥陀懺儀』に関する内容か。『長西録』(「小山論文」p.226) では「一巻　十五丁」とあるが、『長西録』(『日仏全』1、p.348) では「一巻　五丁」とする。円西に関しては『長西録』(『日仏全』1、p.348)、『蓮門録』(『日仏全』1、p.390) 共に「入宋比丘」と記す。
作成者名：上杉智英

阿弥陀懺法

書名よみ：あみだせんぽう
著者名：円仁（？）
著者名よみ：えんにん
著者名別名：慈覚大師
著者生没年：794（延暦13）-864（貞観6）
成立翻訳年：平安期
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1)
参考文献：田島徳音「例時作法」(『仏書解説大辞典』11)、田島徳音「例時作法と三階教との関係」(『大正大学学報』30・31、1940)、佐藤哲英「西方懺悔法に関する研究」(『竜谷大学論集』338、1950)、西村冏紹「例時作法成立考」(『天台学報』20、1978)、佐藤哲英『西方懺悔法－本文並に解説－』(竜谷大学一乗文化研究会編、1949)、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』(百華苑、1979)、奈良弘元『初期叡山浄土教の研究』(春秋社、2002)
解説：『長西録』に「阿弥陀懺法　一巻慈覚」とあることによってのみ、本書がかつて存在したことが知られるが、今は散逸して伝わらない。

本書の撰者に比せられる円仁が五台山竹林寺より法照流の弥陀行法・懺法を将来したことは夙に有名である。その円仁が遺した念仏三昧法を説く文献として『例時作法』(『正蔵』77) が挙げられる。『例時作法』とは天台宗の弥陀信仰を代表する作法であり、『阿弥陀経』を読誦し、行道をしながら甲念仏・合殺・九声念仏などの引声念仏を行う作法である。ただし、現況の研究では『例時作法』に後世の付加があり、必ずしも円仁当世のものでない点が明ら

かにされ、その原形と想定されるものの存在が指摘されているが、本書もその『例時作法』の原形の場合と同様に、円仁在世に行われていたと考えられる数ある弥陀行法・懺法の内に存在したのではないかという推測がある。
作成者名：能島覚

阿弥陀大呪秘要決

書名よみ：あみだだいじゅひようけつ
著者名：済暹
著者名よみ：さいせん
著者名別名：仁和寺済暹僧都、仁和寺済暹律師、南岳房僧都、暹僧都
著者生没年：1025（万寿2）-1115（永久3）
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『諸宗章疏録』（『日仏全』1）
参考文献：櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の済暹については『観無量寿経中略要問答抄』の項を参照。
作成者名：能島覚

阿弥陀秘讃

書名よみ：あみだひさん
著者名：覚超
著者名よみ：かくちょう
著者名別名：都率僧都、兜率僧都、都率先徳、兜率先徳、楞厳院先徳
著者生没年：960（天徳4）-1034（長元7）
成立翻訳年：10c末-11c初頭
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：花野充道「都率僧都覚超の著作解題」（『和党』36、1976）、小山昌純「覚超浄土教の再検討－青蓮院所蔵『私念仏作法』を中心として－」（『仏教学研究』57、2002）
解説：現在のところ、本書と同一の題号をもつ典籍は伝わらない。しかしながら、類似する題号をもつ典籍となると『弥陀名義讃』と『阿弥陀名義秘密讃』がある。まず『弥陀名義讃』は『台祖密目』・『竜堂録』に覚超の著述として記載されているが現存していない。次に『阿弥陀名義秘密讃』（竜谷大蔵本、正応2年（1289）、観円書写、活字本所載『続日本歌謡集成』1（東京堂出版、1964））は現存し、原本の法隆寺蔵本を影写したものであるという。そして覚超の著述として伝えられてきた『弥陀名義讃』とは『阿弥陀名義秘密讃』のことであるという理解（花野）があるが、『阿弥陀名義秘密讃』には撰号がなく、覚超の著述としての伝承も見当たらない為、両者を同一のものとして扱うにはより詳細な検討が必要とする見解もある（小山）。また、本書の『阿弥陀秘讃』がこれらの典籍と同一であるのか、そうならば本書の題号は別名なのかという点にも注意が必要であり、今後の検討が望まれる。
作成者名：能島覚

阿弥陀秘釈

書名よみ：あみだひしゃく
著者名：定尊
著者名よみ：じょうそん
著者名別名：禅定院、禅定院阿闍梨、朝日阿闍梨
著者生没年：11c後半-12c前半
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：中野達慧『興教大師正伝』（世相軒、1934）、櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、苫米地誠一「定尊作『阿弥陀略道場観私釈』について－石山寺所蔵写本をめぐって－」（『高木訥元博士古希記念論集　仏教文化の諸相』、山喜房仏書林、2001）、武内孝善「定尊阿闍梨攷」（『頼瑜僧正七百年御遠忌記念論集　新義真言教学の研究』、大蔵出版、2003）
解説：著者の定尊は仁和寺禅定院を師の寛意から相承していることから禅定院定尊ともいう。源信の弟子であり、現存最古の浄土教目録である『阿弥陀仏経論並章疏目録』（真福寺蔵）の撰者と目される寛印供奉の孫でもある。同門の弟子に仁和寺3世の覚行法親王がいる。新義真言宗の宗祖、覚鑁の師としても知られる。また、院政期の真言教学を代表する学者である仁和寺済暹とも関わりのあることが史料（『血脈類聚記』）から伺える。現存する著書として石山寺蔵『阿弥陀略道場観　一巻』（院政期書写）がある。同時期に同名の僧侶で妙法房定尊がいるが、こちらは小野流に属する真言僧であり、両者の混同には注意が必要である。
　著書の『阿弥陀秘釈』は散逸して伝わらない。弟子の覚鑁には同名の著書がある。
　なお、仁和寺に『阿弥陀大呪秘密釈　一帖』（仁平2年（1152）書写、中田祝夫『古点本の国語学的研究　総論篇』（勉誠社、1954）p.418）があり、本書に該当するか検討が必要であろう。
作成者名：能島覚

阿弥陀秘釈

書名よみ：あみだひしゃく
書名別名：三品阿弥陀秘釈
著者名：覚鑁
著者名よみ：かくばん
著者名別名：興教大師、自性大師、密厳尊者
著者生没年：1095（嘉保2）-1143（康治2）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都仁和寺蔵本（鎌倉期、書写者不明）
2、京都勧修寺蔵本（天正12（1584）、祐守書写）
詳しくは『興教大師覚鑁写本集成』（法蔵館、1997）p.457ff.を参照。
写本奥書：1、（奥書なし）
2、天正十二年九月　書写之　祐守　行蔵六十五歳
刊本所在：1、刊年不明（大谷大・京都大・東洋大・高野山大・大正大・種智院大・立正大、『密厳諸秘釈』1）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』79（No.2522）、『興教大師全集』（中野達慧編輯、世相軒、1935）
現代語訳書：宮坂宥勝『興教大師撰述集』上（山喜房仏書林、1977、増補訂正版1990）pp.149-152
参考文献：『永観・珍海・覚鑁』（『浄土仏教の思想』7、講談社、1993）、櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、『興教大師八百五十年御遠忌記念論集　興教大師覚

鑁研究』（興教大師研究論集編集委員会、春秋社、1992）、苫米地誠一「興教大師覚鑁の教主観について（2）―密教の教主―」（『大正大学日本仏教文化学会紀要』1、1992）、佐藤隆賢「覚鑁上人と浄土思想」（『日仏年報』42、1977）
　詳しくは『密教関係文献目録』（増補改訂版、2007、種智院大学密教学会編）を参照。
解説：筆者は仁和寺、南都に学び、当時、東寺に対して従属的であった高野山を復興・自立させて、そこに大伝法院を建立し、広く諸法流を統合して事相を振興させた。しかし後に法統・寺領をめぐる対立から退去し、根来に移住した。本地身説法説を採る古義真言宗に対して加持身説法説とされる新義真言宗の祖となり、浄土教の隆盛のなかで密教に浄土教を取り入れた真言念仏ないし秘密念仏の基礎を確立した。
　本書の密教的な阿弥陀観や浄土観は同著者の『五輪九字明秘密釈』や『一期大要秘密集』第7とも一致する。
　構成は阿弥陀如来の大意、名号の解釈、字相字義の解釈の3段からなっている。
　「大意」においては、阿弥陀如来を自性法身観察智体とし、真と迷を不二とする三密の立場から説明している。
　「名号」においては、『無量寿経』所説の「無量寿仏」「無量光仏」「無辺光仏」「無礙光仏」「無対光」「炎王光仏」「歓喜光仏」「智慧光仏」「不断光仏」「難思光仏」「無称光仏」「清浄光仏」「超日月光仏」という13の翻訳名は顕教における意味を表わすものであり、密教ではすべての名や言語は如来の密号であるとする。そして、13の名号を順次挙げて各々の徳性を説明し、それらはすべて法身たる大日如来の異名であること、また諸仏菩薩は大日如来の差別智印であり、衆生の言語にも密号がありうることを説く。ゆえに、阿弥陀の三字を唱えることは重罪を滅するし、その一仏を念ずることは福智を成就させるから、阿弥陀一仏の無辺の徳性が速やかに成満されるとしている。
　「字相字義」においては、「阿弥陀」の梵語のうちア・ミ・タの各文字について、真言密教の立場から各々、一心平等本初不生義などの理論に始まり、仏部・蓮華部・金剛部に分け、仏果に至るまでの実践に当てはめる。そして、字相と字義は分離しえないという。
　最後に、取捨選択は妄心分別であるとし、娑婆世界や穢身を厭い、極楽世界や仏身を欣ぶことは無明、妄想である。濁世末代においても常に平等法界を観じ、仏道に入るべきである、といって、一般の浄土教思想に批判的な密教の立場を示している。
作成者名：藤仲孝司

阿弥陀仏白毫観

書名よみ：あみだぶつびゃくごうかん
書名別名：白毫観、白毫相観、白毫観法
著者名：源信
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：981（天元4）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、坂本実蔵坊内真如蔵蔵本（1116（永久4）以前（？）、書写者不明、『十六想観画讃』『三十二相業因観』『十輪経抜書』と合冊本）
2、醍醐寺三宝院蔵本（平安末期-鎌倉初期（？）、書写者不明）
3、坂本大林院蔵本（1916（大正5）、書写者不明）
写本奥書：1、（奥書なし、合綴で同一人物の書写である『十六想観画讃』には「永久四年（1116）四月二十二日、以横川谷闍梨自筆本移声訓了」の移点奥書がみられる）
2、白毫観法一巻、天元四年（981）六月二十九日、楞厳沙門源［■］、縦不得暗観常読文可期明了之
3、大正五丙辰年（1916）三月二十五日、依実蔵坊蔵本於大林院書写之
活字本所載書：『恵全』3、『日仏全』31
現代語訳書：末木文美士『安然・源信』（『大乗仏典＜中国・日本＞』19、中央公論社、1991）
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、佐藤哲英「金沢文庫に見存する恵心僧都撰述に就て」（『竜谷学報』309、1934）、末木文美士『安然・源信』（『大乗仏典＜中国・日本＞』19、中央公論社、1991）、西村冏紹「『阿弥陀仏白毫観』の研究」（『叡山学院研究紀要』21、1999）、西村冏紹「醍醐三宝院蔵源信撰『白毫観法』について―源抄『阿弥陀仏白毫観』の再治本―」（『叡山学院研究紀要』25、2003）
解説：著者は源信。
　『観無量寿経』十六観中の第九仏身観に説かれる白毫観について解釈したもの。白毫を観ずるにあたり、（1）観業因（2）観相貌（3）観作用（4）観体性（5）観利益の5種の観法が説かれる。
　『三宝院旧記』所収「白毫観法奥書」によれば、成立は天元4年（981）6月29日となる。また、寛和1年（985）-正暦1年（990）の間の成立と考えられる静照『極楽遊意』に「世に往生要集および白毫観の文あり。行者は須らく彼の文によるべし」（佐藤哲英『叡山浄土教の研究』資料編、p.96）とあることから源信在世時に流布していたことが知られる。また『往生要集』では白毫相を観ずることを述べた後「已上、観経・華厳経等の意に依る。具には別巻に在り」（日本思想大系6『源信』、p.134）と細註されており、良忠『往生要集義記』はこれを「別巻とは白毫観を指す」（『浄全』15、p.118）と解釈する。なお金沢文庫蔵『往生十念』（寛和1年（985）-長治2年（1105）の間に成立か）の「白毫の光明を観じて引摂せらるべき事」「白毫の体性を観ずべき事」（佐藤哲英『叡山浄土教の研究』資料編、p.304-306）は、本書の「白毫の作用を観ず」「白毫の体性を観ず」「白毫観の利益を明す」の末文（『恵全』3、p.580-583）とほぼ一致し、何らかの関連が推測される。
作成者名：上杉智英

阿弥陀略道場観私釈

書名よみ：あみだりゃくどうじょうかんししゃく
著者名：定尊
著者名よみ：じょうそん
著者名別名：禅定院、禅定院阿闍梨、朝日阿闍梨
著者生没年：11c後半-12c前半
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：写本
写本所在：1、石山寺蔵本（院政期書写、書写者不明、校倉聖教）
写本奥書：1、禅定院定尊闍梨記云云、（梵字）之本
参考文献：中野達慧『興教大師正伝』（世相軒、1934）、櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、苫米地誠一「定尊作『阿弥陀略道場観私釈』について－石山寺所蔵写本をめぐって－」（『高木訥元博士古希記念論集　仏教文化の諸

相』、山喜房仏書林、2001)、武内孝善「定尊阿闍梨攷」(『頼瑜僧正七百年御遠忌記念論集　新義真言教学の研究』、大蔵出版、2003)
解説：著者の定尊については『阿弥陀秘釈』の項、参照。
本書は『金剛頂瑜伽中略出念誦経』のうち、孔雀座を観想する中で本尊である阿弥陀如来を観想する過程を説く経文に注釈を加えたものである。それは阿弥陀仏の座す孔雀・蓮花台・月輪・種子・三昧耶形としての独古杵・阿弥陀如来の名号の字義・阿弥陀仏の身色などについてそれぞれ解釈を行っている。ここで説く阿弥陀仏は金剛界曼荼羅に拠り、法身大日如来の別徳であり、妙観察智をつかさどる仏とされる。
それらの中でも注目すべきは、経文の語義への注釈もさることながら、阿弥陀の名号について無量光・無量寿の2つの見方を示し、竪・横（時間・空間）の隔たりを超越した利益を表していると見ること、阿弥陀仏は心の外に観想する仏ではなく、自心の中に観ずべき仏であると理解していることなどを挙げることができるだろう。
作成者名：能島覚

示或人詞

書名よみ：あるひとにしめすことば
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
写本奥書：1、『和語灯録』の項を参照
刊本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『高僧名著全集』4、『和語灯録』の項を参照
現代語訳書：『和語灯録』の項を参照
参考文献：『和語灯録』の項を参照
解説：法然の言説とされるものを収録した文献。
比較的短い文献で3箇条よりなる。
第1箇条。西向きに用を足したり背を向けたりしてはならないとする。逆にちょっと座ったり寝たりする際は、必ず西向きになれと述べる。もし事情があって西を背にする場合は、心だけでも西方に向けよと説く。
第2箇条。この法語は法然文献中珍しく追善回向に言及するので注目される。孝養の心で父母を大事に思う人は、父母を阿弥陀仏におまかせするのがよいと説く。自分が念仏できるのは、父母が養ってくれたからこそである。自分の念仏の功徳により、父母を極楽へ往生させ、罪をも滅して下さいと思うならば、必ず阿弥陀仏は父母を迎えて下さると指摘する。その例として、幼くして父母を亡くし、30年間念仏して祈ったことにより、父母が共に極楽へ往生したという中国の尼の妙雲の話しをあげる。
第3箇条。まず善導の『往生礼讃』の第18願釈の文を引き、この文を口にし心にもうかべ眼にする者を、阿弥陀仏は御目を見回し御耳を傾け自分の名を称える者がいるかご覧になり聞こうとしていると説く。だから一称・一念も阿弥陀仏に知られないことはないと指摘する。いずれにせよ第18願釈文は四十八願の眼・肝・魂である。だからこそ、その念仏を称える際は十分に身を清め数珠・袈裟をかけるのがよく、不浄の身で持仏堂へ入るのはよくないと説く。
また罪を畏れることや身を慎むことは、自力を励むことであるという見解に対し、とんでもない間違いであると主張する。このような見解を持つ者は、必ず三悪道に堕ちると指摘する。
作成者名：角野玄樹

ある人のもとへつかはす御消息

書名よみ：あるひとのもとへつかわすごしょうそく
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
写本奥書：1、『和語灯録』の項を参照
刊本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『定本法然上人全集』7（山喜房仏書林、1982）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『高僧名著全集』4、『国文東方仏教叢書』2-4、『和語灯録』の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』3（春秋社、1989）、石丸晶子『法然の手紙』（人文書院、1991）、『和語灯録』の項を参照
参考文献：『和語灯録』の項を参照
解説：法然のものと伝えられる短文の手紙。誰に宛てたかは不明。成立年次も不明。
内容は大きく2つに分かれる。まず念仏往生について、4つの疑問とその応答がなされる。念仏は善根が少ないのではという疑問に対し、一念十念でも往生から漏れることはないと答える。次に罪障が重いので念仏では往生できないのではという疑問に対しては、十悪五逆の者でも往生ができると応答する。更に念仏の教えは、下根の人を嫌っている教えではないかという疑問に対し、常没流転の凡夫が正機であると述べる。時代が末法なので救われないのではという疑問に対しては、末法万年より後の法滅以降でも念仏の教えは盛んであると答える。そして更に仏の大願業力をもってしても凡夫は往生できないと思いこんでいることが、往生の大きな障害となると説く。
次に念仏は今生の祈りにもなり、後生の往生にも、念仏以上のものはないと説く。
作成者名：角野玄樹

安心鈔

書名よみ：あんじんしょう
書名別名：安心抄
著者名：証空
著者名よみ：しょうくう
著者名別名：善恵房、善恵房証空、西山上人、当山上人、小坂、弥天善恵鑑智国師

著者生没年：1177（治承1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：13c頃
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大塚霊雲氏蔵本（江戸中期、書写者不明、尾道持光寺旧蔵『西山秘鈔』所収）
2、岐阜清閑寺蔵本（1808（文化5）、義道書写、『曼荼羅供養式』『観経惣釈』と合冊）
3、大谷大蔵本A（未調査、『浄土宗西山流秘要蔵』巻3所収）
4、愛知三河一色満国寺蔵本（未調査、『浄土宗西山流秘要蔵』巻3所収）
5、大谷大蔵本B（未調査、『四代奏上』所収）
6、竜谷大蔵本（未調査、『四代奏上』所収）
7、大谷大林山文庫蔵本（1777（安永6）、未調査）
写本奥書：1、御本云、永徳三年（1383）十一月日於洛陽竹中書写、本ハ無銘、今度西山上衍院長老西山御詞ト染自筆被遊外題、末代之券契後筆之指南不可過之者歟
2、明応五年丙辰（1496）仲冬念九日於堺之北之庄常行寺傍而西月軒之以全本写之、宗純公所望之也、以此条目臨終正念于宝樹瑞華芬馥覃一切者也〈是亮範能化御所持本奥書〉／文化三年丙寅（1806）春三月二十日拝写之、弁才／同五年戊辰（1808）冬臘月十二日拝写、義道（花押）／此抄御選号西山上人御作ト者惣ジテ観門義鈔之外門人筆記する処歟、何レモ古本皆西山上人御選或ハ御釈ト有也、又西山善峯寺沙門証空記ト所置者恐ハ後人ノ所為也、往借（昔？）ノ本ニハ沙門証空記ト有リ、是全祖師ノ自置玉フト見ヘタリ、前ノ五段鈔モ西山五段鈔ト題ハ祖説テ門人著筆スル故也、此安心抄者広略二本有ト見ヘタリ、祖説同聴筆記歟、其略ナルモノハ次ニ出西山善慧上人曰ト云一紙ノ御法語是也、此ト彼トヨク対映シテ可見、サテ西山上人法語ト題シテ三紙バカリノ語有リ、是ハ西山円慈上人ノ語也、然後人西山上人ト云名ニ付テ奥ニ西山善恵国師法語ト書記タルハ甚謬ナリ、慈上人モ一時法将ニテ世人西山上人ト云ハヤシタル也、其訳モ不知流祖ト勿混、例セバ戒珠抄流祖ノ著ト取謬ル也、西山国師ノ著述ト標スルハ円慈師ノ事也、故ニ東山学頭恬澄上人［■］付序無別［■］ヲ以可知、謹言有誌諸徳能検別真偽流祖之抄流布於世矣、沙門龍空義道、予所持新二本亮範能化本都合三本校了（以下付箋、冒頭数字虫損）四辛巳（文政4、1821）六月異本対映シテ寿梓ス、為宝楼院妙祐恵照大姉菩提
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
7、（未調査）
刊本所在：1、貞享5（1688、大谷大・竜谷大、『浄土安心詮要鈔』所収）
2、安永4（1775、名古屋蓮華寺、『浄土安心詮要鈔』所収）
3、文政5（1822、大谷大・竜谷大・西山短大、『五段鈔』と合冊）
4、明治21（1888、名古屋蓮華寺、折本）
刊本の奥書刊記：1、宝徳三辛未年（1451）五月二十八日沙門某甲集之／写本曰、寛正四癸未年（1463）七月日惟宗量綱（中略、付録法語集・跋文あり）元祖上人ノ曰ク、源空ガ目ニハ三心五念四修皆見南無阿弥陀仏也、抑三心トハ者安心也、四修トハ者作業也、南無弥陀仏トハ者起行也、然ルニ起行作業ハ者末ヱ也用也、夫レ本末ハ者同体ナリ也、体用ハ一致ナリ也、所謂ル皆見ルトハ者決定ナリ也、決定安心之実ハ者称名念佛ナリ也、若シ不信不行而諍安心異義者ノハ譬ヘバ如聾人之論音声高下盲之評丹青可否、寔ニ耐大笑又可深悲者ノナリ也、今ノ世一宗諸流ノ之輩ラ斯ノ党類不少矣、仰ギ願ハ速カニ改我執愚見唯帰于念仏往生正義、斯詮要鈔及付録ハ者照暗夜之灯炬度苦海之船筏也、若シ謬ツテ違之者元祖不孝ノ之法孫厥ノ罪ミ尤モ不足誅者ノ歟、幸ニ今拝跪シテ而読焉之次デ切リニ跋於斯、時貞享戊辰ノ之歳（1688、元禄1）秋ノ之仲月ノ之下日ノ之第八也、埜山子釈明春（花押「明春」「埜山」）／洛陽五条高辻通雁金町中村孫兵衛刊行
2、（未調査）
3、（奥書）亮範上人本抜云、明応五年丙辰（1496）仲冬念九日於堺之北之庄常行寺傍而西山西月軒之以全本写之、宗純公所望之也、以此条目臨終正念于宝樹瑞華馥郁覃一切者也／仰願為宝楼院妙祐慧照大姉謝恩、此鈔寿于梓貽諸後代且助幼学写労転筆止魯魚之誤歟、流祖軍持滴水漫漫溢流四海補母君霊位究竟解脱妙道及与法界含霊願共往生安楽国、流祖二十世資裔龍空義道敬白／文政五載壬午（1822）春涅槃会、帝西奥海宝林山蔵、弘通書林伊豫屋佐右衛門
4、明治二十一年（1888）十月十六日出版御届、仝年仝月三十日出版、著述者故人善恵国師、出版人和歌山県平民若宮秀諦、和歌山県下紀伊国有田郡長田村八番地、右此安心鈔ハ派祖西山国師ノ御説ニシテ門人之ヲ記シテ流伝スルノ慈訓ナリ、然ハ則チ其ノ流ヲ汲ム者ハ篤ク信仰セザルベカラズ、蓋シ紙数僅カナルヲ以テカ古来諸鈔ト合冊シテ伝ル故ニ世ニ知ル人少シ、是ヲ以テ今別版ニ鏤刻シテ我門ノ檀徒ニ施与シテ恒ニ訓読セシメテ苟シクモ安心ノ謬解ナカラ令ンコトヲ冀フノミ、時明治十八年（1885）三月受陽山総持寺輪空円瑞
活字本所載書：森英純編『西山上人短篇鈔物集』（1980、西山短期大学）
解説：証空の作とされるが、成立年代は不詳。大塚蔵本によると、南北朝時代、西山三鈷寺上衍院に住した仁空実導が本書に「西山御詞」という外題を記したという。これによって窺うに、当時から証空の真撰とみなされていたようだが、現存の諸本は江戸時代を遡ることができない。
　本書は、西山派で強調される「機法一体」や「真仮一体」の思想を、和語で記した短篇法語。衆生が憑む心と仏の摂取とが一体であることを「火のついた木」に喩えつつ、その道理の領解と称名念仏の実践を勧めている。
　本書には、同趣旨ながら文章量の違う広略二本がある。大塚氏蔵写本や、同じく証空作『五段鈔』と合冊出版された文政5年（1822）板には、広略二本とも収録されている。粟生光明寺56世闡空亮範編『浄土宗西山流秘要蔵』巻3所収本と、『四代奏上』およびそれを版行した『浄土安心詮要鈔』所収本は略本のみである。両本の成立事情は、現在のところ不明というしかないが、いずれも短編であるため、すべて他書との合冊という形で伝存している。
　清閑寺蔵写本は、文政5年板を出版した龍空義道自身が書写した本で、板本の底本と見られる。また清閑寺には、義道によって訂正等の書き入れを加えられた文政板も現存している。
作成者名：稲田廣演

安身養神集

書名よみ：あんしんようしんしゅう
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文

散逸文献の文献名出典：『長西録』（「小山本」）、良忠『観経玄義分伝通記』（『浄全』2、p.194、逸文あり）、良忠『往生要集義記』（『浄全』15、p.344、逸文あり）、道忠『釈浄土群疑論探要記』（『浄全』6、pp.155-156、逸文あり）、良忠『浄土宗要集見聞』（『浄全』11、p.320、逸文あり）、『大須真福寺宝生院経蔵聖教目録』（『真福寺古目録集』、影印17ウ、阿部泰郎・山崎誠編集責任、臨川書店、1999）
参考文献：佐藤哲英『念仏式の研究』（百華苑、1972）、大谷旭雄「実範「病中修行記」について　その構成と念仏思想」（『仏教文化研究』13、1966）、苫米地誠一「実範の阿弥陀観－付、東寺観智院所蔵『観自在王三摩地』翻刻－」（『智山学報』50、2001）
解説：本書は散逸して伝わらない。日仏全本『長西録』においても記載がないが、従来より良忠等の初期浄土宗の学僧の著述の中に引用のあることが指摘されていた。そこへ新たに小山本『長西録』の紹介によって本書の存在と上下2巻であることが明らかとなった。『大須真福寺宝生院経蔵聖教目録』（『真福寺古目録集』所収）にも2巻本であることが明示されている。
　良忠の『観経玄義分伝通記』などには「安身養神集ノ上に云」とごく数ヶ所ながら本書の引用がある。その引用はごく断片的なものであり、それらから本書の内容を知ることは困難であるが、（1）瑜伽の論（『摂大乗論』など）に説く浄土は別時意趣である、（2）禅瑜の『阿弥陀新十疑』の第8疑の文を引用し問答をおこして、阿弥陀仏の身量に限りがないことを明らかにする、という2点の教説が認められる。更には良忠の弟子道忠が13c後半に著した『釈浄土群疑論探要記』の割注に「養神集証報身土、前四教証後二理証也」とあり、一々の具体的な文証は挙げられていないが、阿弥陀仏の身土について報身土の説が提示されていたことが推察される。
作成者名：能島覚

安養集

書名よみ：あんにょうしゅう
著者名：源隆国
著者名よみ：みなもとのたかくに
著者生没年：1004（寛弘元）-1077（承保4）
成立翻訳年：1071（延久3）
成立地：日本
巻数：10
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、滋賀西教寺正教蔵本（1656（明暦2）、舜興写）
写本奥書：1、右者以宝園院本令書写之者也。明暦二丙申歳八月吉日。江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵。
参考文献：戸松憲千代「宇治大納言源隆国の『安養集』に就いて」（『大谷学報』19-3、1938）、恵谷隆戒『浄土教の新研究』（山喜房仏書林、1976）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、西村冏紹監修・梯信暁『宇治大納言源隆国編　安養集　本文と研究』（百華苑、1993）、梯信暁『奈良・平安期浄土教展開論』（法藏館、2008）
解説：藤原頼通の側近として活躍した大納言源隆国が、天台宗の学僧とともに平等院南泉房において編纂した書。1071年（延久3）成立。「厭穢・欣浄・修因・感果・依報・正報・料簡」という7門の組織のもとに、天台浄土教に関する95の論題を立て、各論題下に、それぞれの問題に触れた経論章疏の要文、のべ775文を列挙するという形をとる、浄土教に関する論義のための参考資料集、いわゆる義科要文集である。95論題は、「（1）厭離穢土、（2）欣求浄土、（3）十方仏証明、（4）極楽兜率優劣難易、（5）兜率極楽相対、（6）極楽十方相対……」と次第し、『往生要集』の影響下にあることが明白である。ただし、『往生要集』に引用されなった要文を重点的に集めようとしていることから、『往生要集』の不足を補った文献であり、『往生要集』とともに手元に置いて論義の参考書として用いられたものと考えられる。天台浄土教の論義は、11～12世紀に整備されるが、『安養集』はその先駆的役割を果たした文献であり、これに続いて『安養抄』『浄土厳飾抄』等の義科要文集が出現する。
作成者名：梯信暁

安養抄

書名よみ：あんにょうしょう
著者名：良慶
著者名よみ：りょうけい
著者名別名：教月房良慶、教月房
著者生没年：1118（元永1）-1202（建仁2）
成立翻訳年：12c後半
成立地：日本
巻数：6
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：本書は散逸して伝わらない。
　著者の良慶とは寺門僧であり、教月房ともいう。文治2年（1186）、園城寺における尊星王法の法会に伴僧として出仕し、文治6年（1190）には探題を勤め、正治2年（1200）に園城寺長吏拝堂に呪頭として出仕し、同年に同寺の大学頭となっていることなどにみえる。その時には法眼に叙されていた。著述に『法華経』に関する論義を綴めた『一品抄』があったという。寂年として建久2年（1191）との見方もあるがこの記事（『三井続灯記』）は誤りであろう。なお、『長西録』の本書の細注には「教月房　依白川院仰造文」とあり房名も一致するものの、この良慶の活躍時期は後白河院の時代であるので細注の示す年代との間に不一致がみられる。そのために寺門僧の良慶と本書の撰者である良慶の比定に疑問が存することも確かであるが、この細注自体が「後白河院」の誤りである可能性も考えられる。
　また、佐藤哲英は本書を東大寺本『安養抄』7巻に比定するむきもあるが『長西録』のものとは巻数も異なるなど、慎重に検討すべき課題は多いため、本書とは別書と考えるほうが妥当だと思われる。
作成者名：能島覚

安養知足相対鈔

書名よみ：あんにょうちそくそうたいしょう
著者名：珍海
著者名よみ：ちんかい
著者名別名：禅那院珍海、珍海已講、越前已講、越洲
著者生没年：1092（寛治5）-1152（仁平2）
成立翻訳年：1146（久安2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、東大寺図書館蔵本（久安2（1146）、宗性書写、宗性筆『弥勒如来感応抄草』巻2所収）
2、東大寺図書館蔵本（元禄3（1690）、書写者不明）
写本奥書：1、久安二年（1146）三月九日抄畢、末学珍海、天福元年（1233）九月下旬之候於東大寺中院誂経性大進公

書写之畢、此之書端破損之間不書写之尋得証本可書添之也、同十月二十八日酉時於同所一交了、羊僧宗性
2、（未調査）
活字本所載書：大正84（No.2685）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）、橋本凝胤「安養知足相対抄」（『仏書解説大辞典』1、1933）、恵谷隆戒「珍海已講著鎌倉古写本　安養知足相對抄に就いて」（『専修学報』2、1935）、明山安雄「珍海撰「安養知足相対抄」について」（『藤原弘道先生古希記念　史学仏教学論集』藤原弘道先生古希記念会、1973）、大谷旭雄「南都における『往生要集』の受容と展開―珍海『安養知足相対抄』を中心に―」（『往生要集研究』永田文昌堂、1987）
解説：本書は宗性筆『弥勒如来感応抄草』巻2から恵谷隆戒によって古写本が検出されたことを契機に珍海の浄土教典籍として注目を集めることとなった。
　その内容は唐代浄土教以来の争論である安養浄土・兜率浄土の優劣に関する見解を示したものである。本朝の平安浄土教においても『往生要集』『安養集』にそれらの議論が継承されており、本書の前半も『往生要集』大門第3の「極楽証拠」に引用される懐感撰『釈浄土群疑論』・迦才撰『浄土論』の説をそのまま引き継ぎ、続いて源信の見解を引用してなおかつ自説を展開している。その自説とは安養世界が優位なことに『釈浄土群疑論』の述べるような8つの優位性（本願の有無など）を指摘できるが、要を取れば安養世界には諸々の退縁が無い、そこに到ることに他力往生の強い願力・光明力があるという2点において優れていることを述べ、併せて七義の相対として、境・心・魔・事縁・無濫・疑心・経教の7種にわたってもその難易の価値判断を下すことができるというのである。更に『釈浄土群疑論』や『往生拾因』を引用して極楽往生を妨げる懈慢国についても言及し、それは安養世界の化土であり、辺地での胎生を述べていることに過ぎないとも説いている。その中で『釈浄土群疑論』の孫引きでありながらも、善導『往生礼讃』の「千中無一」の教説に注目することは興味深い。このように珍海は本書において安養世界の優位性を論じているものの、結論としては兜率天・兜率上生信仰を否定しているわけでなく、両信仰の並存を認めつつ、相互に誹謗することを誡め、その選択にはあくまで自らの所縁に従うべき旨を明かしている。その点に南都三論宗の学匠としての珍海の立場が表れているとの評価が多い。
作成者名：能島覚

安養賦

書名よみ：あんようふ
著者名：智光
著者名よみ：ちこう
著者生没年：709（和銅2）-780（宝亀11）頃
成立翻訳年：8c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』2、p.149）
解説：著者の略歴については『無量寿経論釈』の項を参照。
　本書はすでに散逸しており、内容は不明であるが、書名中の「賦」は詩を誦するの意があるから、安養（極楽）への往生を願った詩集の類であると思われる。
作成者名：北条竜士

安楽集私記

書名よみ：あんらくしゅうしき
書名別名：安楽集記
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1282（弘安5）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、鎌倉光明寺蔵本（1282（弘安5）、良忠真筆（？）、巻子本）
2、千葉大巌寺蔵本（鎌倉末期、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
刊本所在：1、寛永5（1628、鈴木霊真氏）
2、寛永18（1641、大谷大・竜谷大・大倉山精神文化研究所）
3、慶安2（1649、京都大・大正大・仏教大・竜谷大）
4、明暦2（1656、早大・大正大・仏教大・竜谷大・県立秋田図書館・無窮会平沼文庫）
5、安政2（1855、大谷大・大正大）
6、刊年不明（京都大・京都獅谷法然院）
刊本の奥書刊記：1、于時寛永五戊辰暦（1628）卯（ママ）月吉日刊摺之終、五條因幡堂大堀付抜町清吉／（藤堂祐範『浄土教古活字版図録』より）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
活字本所載書：『浄全』1
参考文献：今岡達雄「三祖記主然阿良忠上人年譜考」（『浄土学』4、1932）、恵谷隆戒『浄土宗三祖然阿良忠上人伝の新研究』（金尾文淵堂、1934）、藤堂祐範『浄土教古活字版図録』（便利堂内貴重図書影本刊行会、1934）、今岡達音「安楽集私記　二巻、解題」（『浄全』21、1972）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214（建保2）比叡山で受戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。
　本書は、道綽の『安楽集』2巻の注釈書であり、上下2巻よりなる。撰述年について、今岡達音は慶順（室町期の鎌倉光明寺の住僧）撰『諸記類集』（『諸記類聚』）の記事等から「1277年（建治3）起草、1282年（弘安5）再治調巻された」（「解題」）とし、恵谷隆戒は『諸記類集』の記事を誤りであるとした上で、1282年（弘安5）こそが成立の年時である」（『浄土宗三祖然阿良忠上人伝の新研究』）としている。
　『安楽集』は12大門からなっているが、本書上巻では、始めに道綽の略伝を述べ、次いで第1大門を9門に分かつ中、その第8門までを解釈し、下巻において第9門と第2大門以下第12大門までを解釈する。
　第1大門では、仏滅後、時代が下り、衆生の能力も劣るに随い、行者にとって慧学は「正」より「兼」へ、称名は

「兼」から「正」となり、よって「今時」の衆生には念仏往生が仏法通入の道であることを述べるとする。第2大門では、法報化の仏の三身について、法身は理であり、報身は修因感果であり、化身は報身より起きて万機に赴くとし、また三身の体は菩提であり実として一如であるとする。第3大門では、三車火宅の喩えは、羊鹿牛の車に興じることを小乗に蘇息（安息）することであるとし、後に大白車を求めることは回心向大であるが、これは迂迴の菩薩であり輪廻長遠の難行道であるとする。反対に直ちに大乗を学ぶ菩薩を直往の菩薩とし、この菩薩のために、『易行品』は易行不退について説くものであるとする。第5大門では、此界での修観は、定は自力と同じであるが、他力（仏力）が加われば浄土に往生し、自力のものは色天に生じるという解釈を示す。第6大門では、聖人は心に一如を証することができるので、特に方を指すことはないが、凡夫は身に随って心を転じるので、専ら西方を欣心するのであるとし、また浄土の体は上下に通じるが、若し相即無相と知れば上位（上品三生）に生じ、一向に相のみと理解するのであれば下位（中下六生）に生じるとするものであると述べる。『安楽集』について、良忠は道綽の説示に沿った形で、凡夫は西方極楽浄土を旨とすべき理由を述べる。

なお、『安楽集』において『大智度論』が多く引用されているのと同様に、本書でも『大智度論』を多用しており、また良忠の師の1人である良遍（1196-1251）の説を援用する箇所も見られる（『安楽集私記見聞』によれば、「有人云」とは「勝願院（興福寺勝願院良遍）也」とある。）。また解釈を述べるにあたって「『決疑抄』の如し」「疏の記（『伝通記』）の如し」等として他の自著に譲る点が少なからずある。

作成者名：米沢実江子

安楽集私記見聞

書名よみ：あんらくしゅうしきけんもん
著者名：良栄（？）
著者名よみ：りょうえい
著者名別名：理本、高蓮社
著者生没年：1342（康永1）-1428（応永30）（？）
成立翻訳年：14c-15c
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、慶安2（1649、大谷大・大正大・竜谷大）
2、寛文2（1662、大谷大・早大・大正大・仏教大・竜谷大・大倉山精神文化研究所・西尾市立図書館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『浄全』1
参考文献：今岡達音「安楽集私記　二巻、解題」（『浄全』21、1972）
解説：著者とされる良栄は、良忠・尊観（名越派の祖）・明心・妙観・聖観・良栄と続く名越派の人で聖観に師事した。また名越派中興の祖でもある。良栄の著書は「大沢見聞」と呼ばれ、名越派の重要な書として用いられた。

本書は、良忠の『安楽集私記』の注釈書であり、上下2巻よりなる。

本書は、巻首ならびに奥書に著者の名が記されていないが、著者を「良栄」とするのは、「第十一門事」において「私良栄（割り注）」（寛文2年版）とあることに由る。しかし著者を良栄とすることについて今岡達音は、「本書の中に『伝通記』・『決疑抄直牒』等の文等を挙げることから、良栄以後の作ではないか」としており、著者の特定には再考の余地を残す。

本書は、良忠の『安楽集私記』において示された「行」や「菩薩」の名称を菩薩（行者）の位毎に示し説明する箇所が多くみられ、また解釈例として『安楽集私記』に比べ元暁・法位・憬興・玄一等の朝鮮半島の人師を、多く挙げる点が注目される。

作成者名：米沢実江子

安楽集論義

書名よみ：あんらくしゅうろんぎ
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖聖人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（良聖書写（？））
写本奥書：1、（未調査）
参考文献：恵谷隆戒『浄土宗三祖然阿良忠上人伝の新研究』（金尾文淵堂、1934）、藤堂恭俊「『安楽集論義』一巻　然阿良忠」（『続浄』6）、藤堂恭俊「総州在住時代における良忠の著作と金沢文庫蔵古写本『安楽集論義』」（『仏教文化研究』32、1987）、日置孝彦「東国浄土教における良忠上人―付　称名寺蔵金沢文庫保管鎮西義典籍解題―」（『仏教文化研究』32、1987）、藤堂恭俊「金沢文庫蔵『安楽集論義』の撰者に関する一管見」（『戸松教授古稀記念　浄土教論集』、1987）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214（建保2）比叡山で受戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。

本書は、道綽の『安楽集』の注釈書であるが、『安楽集』12大門の内、上巻の第1大門から下巻の第4大門までに38の論題目を設定し、自問自答の形式を以て展開されており、第5大門以下の論義はなされていない（藤堂恭俊「金沢文庫蔵『安楽集論義』の撰者に関する一管見」）。

本書の撰者について、恵谷隆戒は「安楽集論義一帖　良聖書写本」として、良忠の著作とし（『浄土宗三祖然阿良忠上人伝の新研究』）、日置孝彦も「良忠の講説したものを、恐らく門弟が書写したもので、『安楽集私記』の底本であろう」（「東国浄土教における良忠上人―付　称名寺蔵金沢文庫保管鎮西義典籍解題―」）として、良忠の著作としている。また藤堂恭俊も、本書の筆録時期を良忠が鎌倉入りする以前と推定した上で、『往生論註記』（1263起稿）、『安楽集私記』（1282）の中に、本書で論議した内容を継承している点、弁長からの伝承をふまえている点等が認められるとして「良忠の講述と云う事ができると思う」（「金沢文庫蔵『安楽集論義』の撰者に関する一管見」）としている。

本書の内容は、藤堂恭俊の研究に依て、以下の論題目であることがわかる。1五説中無鬼説事、2韋提大士事、3観仏三昧為宗、4熙連半恒乃至三種等事、5報仏報土事、6清秦国事、7体非成壊事、8従真垂報事、9極楽三界摂不摂事、10不具菩提心事、11一総生起事、12応上輩生事、13欲令衆生専志有在事、14浄土初門事、15兜率退不退事、16別時意

事、17在縁事、18在心在縁在決定三義事、19十念事、20棄生求生事、21不知如来実相身為物身事、22復有三種不相応事、23在此起信立行願生浄土此是自力事、24大聖三車招慰事、25盤石劫事、26胎生既爾余三生亦如是事、27法華十六王子事、28何因至今不出火宅事、29当今末法事、30縦有人天果報事、31縦使一形造悪事、32此彼諸経多明念仏三昧為宗事、33念仏始終両益事、34常念我名事、35雲比丘念仏三昧事、36海竜王経八法往生事、37惟無三昧経兄弟二人事、38次有大徳曇鸞法師事。
作成者名：米沢実江子

意楽用心記

書名よみ：いぎょうようじんき
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：13c後半-14c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）、『蓮門類聚経籍録』下（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。書名のみ『長西録』『蓮門類聚経籍録』にみえる。
作成者名：伊藤茂樹

一期大要秘密集

書名よみ：いちごだいようひみつしゅう
異本書名：一期大要、一期大要集
著者名：覚鑁
著者名よみ：かくばん
著者名別名：興教大師、自性大師、密厳尊者
著者生没年：1095（嘉保2）-1143（康治2）
成立翻訳年：1134（長承3）（？）-1143（康治2）（？）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都東寺観智院蔵本（建仁3（1203）、良盛書写）
2、京都東寺観智院蔵本（鎌倉期、書写者不明）
3、和歌山高野山三宝院蔵本（文保1（1317）、真海書写、最終転写は天正20（1593）、良琢書写）
4、和歌山高野山光台院蔵本（天文3（1534）、賢隆書写、最終書写は天和2（1682））
5、和歌山高野山宝亀院蔵本（文禄3（1594）、快算書写）
6、京都醍醐寺三宝院蔵本（正保2（1645）、定願書写）
7、和歌山高野山金剛三昧院蔵本（書写年不明、空算書写）
詳しくは『興教大師覚鑁写本集成』（法蔵館、1997）p.458ff.を参照。
写本奥書：1、十念極楽易往集巻六奥書　建仁三年（1203）中春五日（彼岸初日之）書之　若被見此又　必生密厳国　文永七年（1270）六月十六日書了　右筆　沙門　良盛
2、（奥書なし）
3、文保元年（1317）七月七日於高塚僧/坊書写了求道弟子真海/正中二年（1325）八月二十日書写了/順聖/興国元年（1340）六月八日於八幡誉田/寺西福院（石切）師主順上人御本書写了/求法末資快弁/于時天正二十年壬辰（1592）九月二十四日根来寺/智積院玄宥法印以御本写之畢/天正二十暦（1592）十月二十一日本主良琢/紀州日高郡青蓮寺仙光院/三十四歳而求之
4、御本ニ云/年来所持ノ本紛失之故馳老筆了老期ノ之要書不可如之也/于時天文参季申午（1534）閏正月二十九日書写之了/於武（刀刀刀）小机保内鳥山三会寺奥疏伝受之時分早々馳短筆者也/是仏道修行通達菩提指南也/于時天和二季壬戌（1682）九月二十六日書之/大山大坊内　十六ノ歳/隆寅賢了房（花押）/右之一書維為疎筆一期ノ要書ト為賢隆法印以御自筆/令書写畢云々
5、無量光院清胤法印蒙勧誡此疏写畢誠拭老眼染筆此併菩提心決定成就臨終正念往生極楽上品上生直到弥陀成等正覚乃至普利平等抜苦令法久住利益人天之発願而　文禄三年（1594）十月二十八日　東南院快算（押紙云）　帰命慈父弥陀尊頂礼悲母観自在　維子今渇哭飮乳　早開胸懐先授手
6、于時正保貳年（1645）季霜月下旬書写早/法師定願
7、（奥書なし）
刊本所在：1、刊年不明（大谷大・京都大・東洋大・高野山大・大正大・種智院大・立正大、『密厳諸秘釈』3）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『興教大師全集』（中野達慧編輯、世相軒、1935）
現代語訳書：『興教大師撰述集』（上、宮坂宥勝編注　山喜房仏書林、1977、増補訂正版1990）pp.157-176
参考文献：『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1993）、櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、『興教大師八百五十年御遠忌記念論集　興教大師覚鑁研究』（興教大師研究論集編集委員会、春秋社、1992）、苫米地誠一「興教大師覚鑁の教主観について（2）-密教の教主」（『大正大学日本仏教文化学会紀要』1、1992）、佐藤隆賢「覚鑁上人と浄土思想」（『日仏年報』42、1977）
　特に本文献に関するものとして、佐藤隆賢「覚鑁上人と浄土思想」（『日仏年報』42、1977）、『興教大師八百五十年御遠忌記念論集　興教大師覚鑁研究』春秋社、1992）、橘信雄「〈一期大要秘密集〉における〈臨終行儀〉について」（『印仏研』36-2、1988）
　詳しくは『密教関係文献目録』（増補改訂版、2007、種智院大学密教学会編）を参照。
解説：筆者は仁和寺、南都に学び、当時、東寺に対して従属的であった高野山を復興・自立させて、そこに大伝法院を建立し、広く諸法流を統合して事相を振興させた。しかし後に法統・寺領をめぐる対立から退去し、根来に移住した。本地身説法説を採る古義真言宗に対して加持身説法説とされる新義真言宗の祖となり、浄土教の隆盛のなかで密教に浄土教を取り入れた真言念仏ないし秘密念仏の基礎を確立した。
　本著は、人の一期の大要は末期の用心にあり、九品の往生は臨終時の正念にかかっているとして、密教関係の典籍から要文を集めて、その一期の大要を説いたものであり、九門より構成されている。全体的に内容は顕教のものとさほど異ならなくて、特に唱名念仏により臨終の正念をたもって極楽往生することが説かれていること、それが現身往生や即身成仏ではなく来世での往生となっていることなど、浄土教と一致している。しかし、第七門には、特に真言密教の観点から、阿弥陀仏は理体としての大日如来の智徳の現れであって本質的には同体であること、極楽浄土は密厳浄土の別徳であることが強調されており、著者の密教家としての特徴が現れている。また本書の阿弥陀仏は九品の阿弥陀仏ではなく、不空の『無量寿如来観行供養儀軌』や空海の『無量寿如来供養作法次第』にでる紅頗梨色の阿弥陀である。なお一部の論者は真撰であるのかどうかに疑問を呈している。中ノ川実範の『病中修行記』（即身成仏を中心としている）からの引用があるほか、構成において同書や永観の『往生講式』とも似たものがあり、そこからの影

響も指摘されている。他方、本格的に往生と即身成仏の融合をはたしたのは本書であるが、晩年の『五輪九字明秘密釈』ほどには徹底されていないともされている。
(1)「身命を惜しむべき用心の門」では、病気になっても命を軽んじないで、医療により安穏となって、往生のための福業を積むべきであるという。
(2)「身命を惜しまざる用心の門」では、老いや病が進んで命終が迫ったなら、もはや延命に労しないで、身命を投げうって菩提の道に勤めるべきであるとする。
(3)「本住処を移る用心の門」死期を悟ったなら、遺言し身辺を整理して、住み慣れた住居を離れるべきであり、死と極楽往生に備えて無常房に移り、出家すべきであるとする。
(4)「本尊を奉請する用心の門」無常房において本尊を祀る作法を説く。本尊は立像で東向きにし、手に五色の糸をかけ、病人は西を向いて臥せ、五色の糸の端を掴ませる。ただし仏像を西向きにする場合もある。各々「来迎」と「引接」の場合である。本尊は病人が常に信仰している仏菩薩でよいとされる。
(5)「業障を懺悔する用心の門」菩提を妨げる業障を浄めるために懺悔する。実範のの懺悔文を引用した後、密教における懺悔を説明している。
(6)「菩提心を発する用心の門」『菩提心論』所説の行願、勝義、三摩地の三種菩提心を起こすように勤めることを説き、三摩地菩提心に関しては本覚心を照見するために十種類の月輪観と十種類の阿字観を説明している。
(7)「極楽を観念する用心の門」二仏のうち弥陀は大日の智用であり、二浄土のうち極楽は密厳の別徳とされること、大日如来を中心に据えて、極楽や阿弥陀を観念すべきことをいう。
(8)「決定往生の用心の門」臨終時の作法を説き、九門のうちで最も重要視されている。知識の人たちが病人の念仏に唱和し援助して、彼の願いのとおりに正念にて極楽往生ができるよう、病人の息に合わせて人々は「南無阿弥陀仏」の念仏を唱える。それができるなら、極悪の罪も消去して往生できるという。
(9)「没後追修の用心の門」命終の時に死者に悪相が見られた場合、それらは死者が地獄・餓鬼・畜生という悪趣に生まれたしるしであるとして、各々の場合に応じて追修の供養を行って悪趣から救済すべきであるという。最後には覚鑁自身が自らの臨終において弟子達に追修を遺言する記述も見られる。
関連典籍として曇寂(1674-1742)の享保19(1734)の著作『一期大要略出私記』が(宝暦7年書写　竜谷大蔵)がある。なお東寺観智院から発見された『十念極楽易往集』は、『玉葉』によると後白河法皇の命により仏厳房聖心により編纂され、藤原兼実はそれを受けとったとされるが、これは第六巻しか現存せず、しかもその全文は『一期大要秘密集』と同一であることから、本書は仏厳の著とする説があり、近年も著者問題が提起されている。
作成者名：藤仲孝司

一実菩提偈

書名よみ：いちじつぼだいげ
書名別名：一実菩提心頌、法華菩提心略頌、発菩提略頌、一実菩提心論
著者名：覚運(？)
著者名よみ：かくうん
著者名別名：檀那僧正、檀那院僧正
著者生没年：953(天暦7)-1007(寛弘4)
成立翻訳年：10c末-11c初頭
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本(1175(安元1)、書写者不明、題号『法華菩提心略頌』、『懈怠者行記』と合本)
2、坂本西教寺蔵本(1648(慶安1)、舜興書写、題号『法華菩提心略頌』)
3、坂本西教寺蔵本(1657(明暦3)、舜興書写、題号『法華菩提心略頌』、八合本)
4、坂本明徳院蔵本(1810(文化7)、真超書写、題号『発菩提略頌』、八合本)
5、坂本実蔵坊真如蔵蔵本(未調査、題号『法華菩提心略頌』、『法華安楽行鈔』等と合本)
写本奥書：1、安元元年(1175)二月十四日書…了(奥書の一部分を紹介する『渋谷録』より転載)
2、(未調査)
3、(未調査)都率御作又云檀那御作(奥書の一部分を紹介する『渋谷録』より転載)
4、(未調査)
5、或此略頌於一実菩提偈名檀那先徳御釈ト云々作者不定也(『渋谷録』より転載)
刊本所在：1、寛文3(1663、大正大)
刊本の奥書刊記：1、(未調査)
活字本所載書：『日仏全』24
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』(百華苑、1979)、八木昊恵『恵心教学史の総合的研究』(永田文昌堂、1996)
解説：本書の構成は七言一句の偈、206偈と6篇の宝号から成る。
内容は法華経の教説、乃ち法華一乗と本迹二門の教えにより、一実の菩提心を発し、すみやかに無上の大菩提に至ることを述べている。そして最後に円融無作の四弘誓願と久遠実成の釈迦如来や西方極楽の阿弥陀如来等への帰依を明かしている。
著書について覚運のものとする『天台小部集釈』所収本、作者不明とする『長西録』、そして都率僧都覚超の撰とする坂本西教寺蔵本や坂本実蔵坊真如蔵蔵本があり、撰述者に関する伝承に錯綜がみられる。したがって、本書が覚運の撰とはにわかに決し難い。
なお佐藤哲英『叡山浄土教の研究』では、『天台小部集釈』所収本にみられない「南無久遠実成仏、常在霊山釈迦尊、四十八願度衆生、極楽化主弥陀尊」という偈文が金沢文庫蔵本や坂本西教寺蔵本には存在することが指摘され、『念仏宝号』における阿弥陀仏の久遠実成思想につながる可能性が論じられている。
作成者名：能島覚

一念多念分別事

書名よみ：いちねんたねんふんべつじ、いちねんたねんふんべつのこと
書名別名：一念多念分別
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148(久安4)-1227(嘉禄3)
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文

写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（室町後期、書写者不明、端坊旧蔵本）
2、滋賀円照寺蔵本（室町後期、書写者不明）
3、大阪光徳寺蔵本（室町後期、書写者不明）
4、大谷大蔵本（貞享4年、恵空書写）
5、竜谷大蔵本（未調査）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（奥書なし）
3、本云建長七歳（1255）乙卯四月廿三日、愚禿釈善信八十三歳書写之
4、南無阿弥陀仏、建長七歳（1255）乙卯四月廿三日、愚禿釈善信八十三歳書写之
5、（未調査）
刊本所在：1、寛文4（1664、国立公文書館内閣文庫、後世物語聞書と合冊）
2、明和2（1765、竜谷大、『真宗法要』31巻所収）
3、文化8（1811、大谷大・竜谷大・京都大、『真宗仮名聖教』13巻所収）、
4、明治36（1903、大谷大、『真宗聖教大全』上）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『続浄』9、『真聖全』2、『真宗全書』46、『大正蔵』83（No.2677）、『定本親鸞聖人全集』6、『国文東方仏教叢書』1-3、『真宗史料集成』1
参考文献：爪生津隆雄「隆寛律師の著作に就て」（『真宗研究』18、1928）、安井廣度『法然門下の教学』（法蔵館、1938）、平井正戒『隆寛律師の浄土教』（国書刊行会、1941）、戸松啓真「先徳要義集解説」（『続浄』9、1974）
解説：専修念仏教団内で一念多念についての論争が問題化したとき、一念多念のどちらの立場にもかたよることなく念仏するように隆寛がいましめた書である。なお親鸞はこの書の引用経典を調べて『一念多念証文』を記しており隆寛は一念多念どちらも行として解釈しているが、親鸞は一念を信、多念を行とする両者の見解の違いがある。現在真宗で相伝されている本には、「建長七歳乙卯（1255）四月二十三日愚禿釈善信八三歳書写之」とした親鸞相伝本の奥書が記されている。
作成者名：伊藤茂樹

一念多念文意

書名よみ：いちねんたねんもんい
書名別名：一念多念証文、一多文意、一多証文
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：1258（建長8）以前
成立地：日本
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都東本願寺蔵本（1257 （康元2）、親鸞真筆本）
〈影印版〉:『親鸞聖人真蹟集成』4（法蔵館、1974）
2、高田専修寺蔵本（1307（徳治2）、顕智書写）
〈影印版〉:『影印高田古典』4（真宗高田派宗務院、2002）
3、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
4、大阪願得寺蔵本（室町末期、書写者不明）
5、山南光照寺蔵本（室町末期、書写者不明）
6、大谷大蔵本（未調査、慧空）
写本奥書：1、康元二歳丁巳（1257）二月十七日、愚禿親鸞八十五歳書之
2、愚禿八十五歳書之／徳治二年丁未（1307）十二月下旬第六書写之
3、正嘉元年丁巳（1257）八月六日書写之、愚禿八十五歳
4、正嘉元年丁巳（1257）八月六日書写之、愚禿八十五歳
5、（奥書部破損）
6、（未調査）
刊本所在：1、寛文4（1664、大谷大・竜谷大）
2、明和2（1765、大谷大・竜谷大、『和語真宗法要』所収）
3、文化8（1811、大谷大・竜谷大、『真宗仮名聖教』所収）
4、万延1（1860、未調査）
刊本の奥書刊記：1、寛文第四甲辰（1664）暦如月中澣、於洛東七条寺内
2、夫決難聖道ノ万行ハヤウヤク正像ノムカシニカキリ、唯有浄土ノ一門ハトヲク澆季ノ今ニ通ズ、上古ノ聖人ハ自力ヲハケムテ開悟シ、末世ノ凡愚ハ他力ヲ信シテ往生ス、ココニ吾大法主高祖古徳ノ慈訓ヲ纂輯シ若干巻トナシ、カツ校正ヲクハヘコレニ題シテ真宗法要トイフ、コレカミ仏祖先徳ノ広恩ヲ謝シシモ、生死ノ群生海ヲ度センカタメナリ、コレスナハチ念仏往生ノ真法証大涅槃ノ至要ナリ、マコトニコノ文ノ名ソレユヘアルカ、ソモソモコノ書ノ中或一部或二部国字ヲ安スルニ尋常ニ違スルモノアリ、コレモマタ先哲ノ筆蹟ニシタカフ、後ノ学侶疑端ヲナスコトナカレ、ココニ其書ノ成ヲヨロコヒテ毫ヲソメテ巻尾ニシルスト云爾、明和二年乙酉（1765）七月二十五日、釈文如（朱印）
3、文化八年辛未歳（1811）、本願寺蔵（朱印）
4、夫斯三種聖教者大祖聖人真翰而所秘在于宗利宝庫、為厥慈訓乎、大悲摂化善巧万機普益要法包、豈可不珍敬奉持焉、今茲十一月有志謀上木寿梓流通于遐代、乃請大法主輪下蒙其許可在欲以報仏祖洪恩之一端、然及刻成使家伝戸読其勝縁利益不亦甚大矣哉、万延庚申（1860）冬十一月、権大僧都円崇謹撰、藤原信愿拝書、大祖和語之聖典（朱印）／先師遊泉院疾革謂弟子曰、死後莫煩樹碑唯望大祖之聖典公行於世、弟子敬承命、没後未幾而刻成、因縁師之、微意於斯云
活字本所載書：『真聖全』2、『浄土真宗聖典－原典版－』『真宗聖典』、『定本親鸞聖人全集』和文篇、『真宗史料集成』1、『大正蔵』83（No.2657）、『諸本校異一念多念文意』
現代語訳書：三角寛「一念多念文意」（『現代語訳親鸞全種』3、講談社、1974）、真継伸彦「一念多念文意」（『現代語訳親鸞全集』3、法蔵館、1982）、石田瑞麿「一念多念文意」（『親鸞全集』3、春秋社、1985）、梶山雄一「一念多念文意」（『大乗仏典』22、中央公論社、1987）、『浄土真宗聖典一念多念証文（現代語版）』（本願寺出版社、2001）、櫟重誓「一念多念文意」（『傍訳親鸞聖人著作全集』4、四季社、2001）
参考文献：瓜生津隆雄『一念多念文意』（『聖典講讃全集』8-4、小山書店、1935）、可西大秀「一念多念文意諸本の解説」（『宗史編修所報』3、）、藤枝昌道『一念多念文意講義』（顕真学会、1948）、山上正尊『一念多念文意講讃』（為法館、1956）、梯実円『一念多念文意講讃』（永田文昌堂、1998）、安藤章仁「解説　一念多念文意」（『影印高田古典』4、2002）、本多弘之『『一念多念文意』考究』（真宗大谷派宗務所出版部、2005）
解説：浄土真宗の宗祖親鸞の著作。法然在世時から続く一

念多念の論争に対し、「一念往生、多念往生ともうすことなし」と示し、「浄土真宗のならいには念仏往生と申す」ことを述べている。また本書は、隆寛の『一念多念分別事』に引用される漢文を注釈するという形をとっているが、『一念多念分別事』には引用されていない文言にも言及しており、親鸞の一念多念に対する立場を知ることができる。

本書の成立年時については断定することができない。現存する真筆本には康元2年（1257）2月の奥書があるが、その前年、建長8年（1258）のものと推測される5月29日付性信宛の親鸞の消息には「一念多念の文意」と記されており、この建長8年（1258）には成立していたと推測される。また建長7年（1257）4月に親鸞が『一念多念分別事』を書写していることが奥書などからわかっており、建長7年（1257）4月から建長8年（1258）5月の間に本書が成立したものかとも推測される。

作成者名：藤田真隆

一枚起請文

書名よみ：いちまいきしょうもん
書名別名：一枚起請（外題）
異本書名：御誓言の書、善導寺御消息、一枚御消息、一枚消息、円光大師一枚起請、黒谷上人起請文、吉水一枚御消息、法然一枚起請
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、徳富蘇峰氏蔵本（鎌倉期（？）、書写者不明）
〈影印版〉:『浄土宗大辞典』2（口絵）
2、清浄華院蔵本（書写年不明、書写者不明）
〈影印版〉:中野正明『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、1994）
3、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
4、安土浄厳院蔵本（1425（応永32）、隆暁書写）
〈影印版〉:小川隆彦『一枚起請文原本の研究』（無量光寺、1970）
5、『法然上人伝記』（『九巻伝』）所収（『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照）
6、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
7、金戒光明寺蔵本（書写年不明、書写者不明）
〈影印版〉:小川隆彦『一枚起請文原本の研究』（無量光寺、1970）
写本奥書：1、安貞二年（1228）十一月十日
2、安貞二年（1228）十一月十日、然阿ミタ仏（花押）
3、『和語灯録』の項を参照
4、于時応永三十二乙巳年（1425）後六月三日、沙門隆暁書之
5、『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照
6、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
7、建暦二年（1212）正月二十九日、源智（花押）
刊本所在：1、『和語灯録』所収「御誓言の書」（『和語灯録』の項を参照）
2、『和語灯録』所収「諸人伝説の詞」（『和語灯録』の項を参照）
3、貞治4（1365、京都知恩院）
〈影印版〉:小川隆彦『一枚起請文原本の研究』（無量光寺、1970）
4、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
2、『和語灯録』の項を参照
3、貞治四年乙巳（1365）十一月二十五日開板安置知恩院以伝遐　代云
4、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、日本思想大系10『法然・一遍』、日本古典文学大系83『仮名法語集』、中野正明『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、1994）、望月信道『浄土宗聖典』（平楽寺書店、1911）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『法然上人集』（「大日本文庫」仏教篇）、『法然上人集』（「日本古典全集」1、日本古典全集刊行会、1926）、『高僧名著全集』4、『国文東方仏教叢書』1、『真聖全』4、浩々堂『真宗聖典』（平楽寺書店、1910）、『日本精神文献叢書』12（大東出版社、1940）、真宗聖典編纂委員会『真宗聖典』（東本願寺出版部、1978）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
現代語訳書：意訳真宗聖典刊行会『意訳七祖聖教』3（法蔵館、1956）、勝又俊教他『仏教文学集』（「古典日本文学全集」15、筑摩書房、1961）、藤吉慈海『法然上人御法語講話』上（山喜房仏書林、1977）、伊藤唯真・藤堂恭俊『黒谷と一枚起請文』（金戒光明寺、1978）、橋本峰雄『法然』（思想読本、法蔵館、1983）、藤井実応『法然上人と一枚起請文―法然上人のご遺訓―』（大東名著選13、大東出版社、1986）、村瀬秀雄『法然上人等法語で綴る　念仏の法門』（常念寺、1986）、藤堂恭俊『一枚起請文のこころ』（東方出版、1987）、大橋俊雄『法然全集』3（春秋社、1989）、伊藤正順・加藤義諦『法然上人『一枚起請文』のみ教え』（善導寺、1990）、浄土宗総合研究所『法然上人のご法語』2（浄土宗、1999）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
参考文献：望月信亨『浄土教之研究』（仏書研究会、1914）、玉山成元「一枚起請文の考察」（『浄土学』26、1958）、小川隆彦『一枚起請文原本の研究』（無量光寺、1970）、中野正明『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、1994）
解説：法然の短文の法語。浄土宗の基本的教えが簡潔にまとめられているとされる。浄土宗においては、非常に重要視される文献で、日常勤行集や御法語集に所収される。写本・刊本・活字本なども数多い。

本書の諸本を大きく2分すると、弁長伝承のものと、源智伝承のものがある。前者のほうが、後者よりも素朴な内容となっているため、成立時期は前者のほうが先であるとされる。法然の伝記などによると、法然臨終のさい、法然が記したとされるが、おそらく、それ以前から既に成立していたものと推測される。

内容は、往生極楽のためには、決定往生心で念仏する以外にないと説く。念仏を信じる人は、たとえ釈迦1代の教えを学んでいたとしても、無智の人と同じように念仏するべきことを勧める。そして、これ以外に教えを隠していることはないと2尊に誓っている。法然の教えの根幹ともいえる内容である。

ここで紹介した本書の写本・刊本・活字本については一部にすぎない。詳しくは、『仏書解説大辞典』1、小川隆彦『一枚起請文原本の研究』（無量光寺、1970）、『古写古本真宗聖教現存目録』（永田文昌堂、1976）、藤堂祐範『浄土教文化史論』（山喜房仏書林、1979）、『国書総目録』1、『古典籍総合目録』1などを参照。

作成者名：角野玄樹

一紙小消息

書名よみ：いっしこしょうそく
書名別名：小消息
異本書名：黒田の聖人へつかはす御文、黒田の聖へつかはす御返事
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
写本奥書：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『和語灯録』の項を参照
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
刊本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『和語灯録』の項を参照
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、望月信道『浄土宗聖典』（平楽寺書店、1911）、『国文東方仏教叢書』2-4、『日本精神文献叢書』12（大東出版社、1940）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
現代語訳書：意訳真宗聖典刊行会『意訳七祖聖教』3（法蔵館、1956）、藤吉慈海『法然上人御法語講話』上（山喜房仏書林、1977）、村瀬秀雄『法然上人等法語で綴る　念仏の法門』（常念寺、1986）、藤堂恭俊『一紙小消息のこころ』（知恩院浄土宗学研究所シリーズ5、東方出版、1996）、浄土宗総合研究所『法然上人のご法語』1（浄土宗、1997）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
参考文献：伊藤祐晃『浄土宗史の研究』（1956）、三田全信「黒田聖人の研究」（『仏教文化研究』17、1971）、藤堂恭俊『一紙小消息のこころ』（東方出版、1996）
解説：法然のものとされる短文の法語。『一枚起請文』とともに、浄土宗では重要視される法語。日常勤行集や御法語集などにも収録される。

『和語灯録』では、黒田の聖人へ宛てた手紙とするが、その黒田の聖人とは誰であるのかは定かではなく、諸説ある。

成立年次の詳細は不明。『西方指南抄』が初出なので、それまでには成立していたであろう。

内容は、行の少なさ、罪の深さ、末世の時代、煩悩具足の身などを過度に気にして疑心をもってはならないと説く。それよりも、信心を深くして阿弥陀仏の本願に乗じることを勧める。そして、阿弥陀仏の本願に出会ったことを喜び、阿弥陀仏の恩徳に報いるべきことを主張する。
作成者名：角野玄樹

一遍上人絵詞伝

書名よみ：いっぺんしょうにんえことばでん
書名別名：遊行上人縁起絵、一遍上人縁起絵、遊行縁起、遊行上人縁起、一遍上人縁起、一遍上人絵詞伝縁起、一遍上人絵伝、一遍上人絵縁起
著者名：宗俊
著者名よみ：そうしゅん
著者名別名：平宗俊
著者生没年：不明
成立翻訳年：1307（徳治2）（？）
成立地：日本
巻数：10
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：・A系統
1、藤沢清浄光寺蔵本（鎌倉期、東山天皇寄進、1911（明治44）焼失、「古縁起」）
2、山形光明寺蔵本（1594（文禄3）、満悟書写、狩野元秀画、満悟は遊行33代）
3、東京国立博物館蔵本（江戸中期、書写者不明、藤沢清浄光寺蔵古縁起模本）
4、逸翁美術館蔵本（江戸中期、正通・栄勢書写、5軸、絵のみ）
5、辻兵吉氏蔵本（1816（文化13）、谷文晁書写、藤沢清浄光寺蔵古縁起模本、巻2・5・6・9・10）
・B系統
6、神戸真光寺蔵本（1323（元亨3）、行顕書写）
7、京都金光寺蔵本（鎌倉末期、書写者不明、巻3・5・6・9の一部）
8、東京国立博物館蔵本（鎌倉期、隆光書写、土佐尊朝画、巻3・7の一部）
9、長野金台寺蔵本（鎌倉期、書写者不明、巻2）
10、京都金蓮寺蔵本（室町期、書写者不明、20巻）
・C系統
11、京都金蓮寺蔵本（南北朝期、伝後二条天皇宸翰、巻8）
12、尾道常称寺蔵本（南北朝期、書写者不明、巻2・5・6・8、巻3の詞書（江戸期後補））
13、遠山記念館蔵本（1381（永徳1）、書写者不明、巻1・6・7・8の一部を合巻）
・系統未確認
14、別府永福寺蔵本（南北朝期、未調査、巻7の大部分）
15、新潟専称寺蔵本（室町期、未調査）
16、東京大蔵本（1672（寛文12）、未調査、1冊）
17、藤沢清浄光寺蔵本（江戸初期、書写者不明）
18、逸翁美術館蔵本（江戸中期、未調査、折本1帖）
19、逸翁美術館蔵本（江戸中期、未調査、折本1帖）
20、藤沢清浄光寺蔵本（1858（安政5）、未調査、焼失、「新縁起」）
21、新潟来迎寺蔵本（江戸期、未調査、巻3欠、巻9・10合冊）
22、大和文華館ほか諸家分蔵残欠本（未調査）
写本奥書：・A系統
1、（焼失のため不明）
2、（巻10巻末）本奥云、弟子宗俊宿因多幸而奉逢上人之済度、得聞出離之要法、思其恩徳、検其報謝、高於天厚於地、仍自建長文永之往事、至永仁正安之行儀、図師資之利益、備弟子之報恩、類聚而為十巻、殆揚十之一二、此中或有四

句偈、或有七言頌、或人之返報、或有自之詠謌、皆惟出離生死之肝心、往生浄土之要路也、至段々詞者、僅記録頑魯之領拝、更不話賢哲之後難、苟思其事実不好其事花、唯欲見者之易諭、聞者之深誡者也、将又遠伝於遐代、近為及未来、終一部之書写、安十巻於道場、若依此絵図有発心之人者、互去娑婆苦域、同到安養楽邦而已
（各巻奥書）文禄三年（1594）七月七日、最上出羽守義光寄進之、右十巻之縁起有様子手前在之已上（印）、寛永八年（1631）七月十五日、最上源五郎義俊新寄進之（印）、出羽国山形光明寺筆者狩野法眼（「元秀」印）
（外箱蓋裏）絵詞伝筆者顕考、詞書者遊行三十三代他阿上人、絵者狩野宗秀法眼、古法眼元信之孫也、縁起拾巻共ニ御寄附之末書者、文禄三年七月七日、最上出羽守義光寄附之、右拾巻之縁起者有由致而手前在之、寛永八年七月十五日、最上源五郎義俊新寄之、出羽国山形光明寺縁起外題者佐々木萬治郎筆也、是者従来之外題損候ニ付松平大和守様当所御領地之節、佐々木氏エ被仰付候而御寄附也、右拾巻之表補者三十二代如海改之、箱各巾等者三十三代文英改之、渡リ段子之巾古来ヨリ相添幅一尺七寸七分長三尺六寸色黄唐茶也、是者縁起拝見之節敷物也
3、（巻末）（宗俊奥書、2山形光明寺蔵本参照）／古縁起各巻の題簽の模写／【女房奉書・未調査】／一遍上人縁起備、叡覧候之処、御文如此候、従私金光寺能々可申遣之由被仰下候、為後代可被副置此絵之條、可然候哉、永正十三年（1516）十二月二十二日、隆永、宝泉寺
（外箱蓋）藤沢道場什物、称古縁起、一遍上人絵詞伝、什巻
（各巻初に原本の総長が記される。また各画面余白には、狩野晴川一門の画人の款記が小さく入る。）
4、（第一軸巻末）寛政元年己酉（1789）閏六月、正通写
（第二軸巻末）寛政二庚戌（1790）八月、住吉内記弟子写
（第三軸巻末）寛政元年己酉閏六月、正通写
（第四軸巻末）寛政元年己酉十二月、正通、栄勢写
（第五軸巻末）寛政二庚戌八月、住吉内記弟子写
（箱書）古土佐写、正通、栄勢、住吉内記弟子
5、（巻2巻末）文化十三季丙子（1816）七月六日摹畢、文晁
・B系統
6、（宗俊奥書、2山形光明寺蔵本参照）／元亨三年（1323）七月五日謹蒙遊行上人之禅命、馳禿筆畢、雖恥隔芝池之往跡、唯喜結華台之来縁耳、執筆三井八律仏母金剛行顕
7、（奥書なし）
8、（外箱）遊行軸者、二巻、土佐絵尊朝筆
（箱貼紙）一遍上人絵伝、隆光筆
9、右此壹巻之縁起悉損壊故修覆之者也、元禄十二己卯年（1699）九月日、遊行四十五世記之、此一巻者二祖上人之真跡而最初之一段者十九代上人之補写也、右為本山代々之交割、然信州金台寺者依有由緒今以之令寄附彼寺者也、維時宝暦丁丑（1757）冬、遊行五十二世他阿一海
（添状）一遍上人御伝第二巻者二代上人之御真筆也、初之一段者十九代上人書補ニ而、右絵詞伝十巻之内唯有此一巻、年来為本山宝物事実難有事也、然処信濃国野沢金台寺者依有伴野姓之由緒、当尊師彼寺エ寄附之、誠宗門秘蔵之一巻永代隠没無之様、其寺之可為什宝者也、遊行五十二代上人役者、修領軒（執事印）、宝暦七丁丑年（1757）十二月、桂光院（遊洞印）、信州佐久郡野沢、金台寺、惣檀那中
（東山天皇下賜の添状、未調査）
10、徳治第二之天（1307）初夏上旬之候、馳筆終功畢／（宗俊奥書、2.山形光明寺蔵本参照）
・C系統
11、（未調査）
12、（奥書なし）
13、（巻7巻末）白山豊原寺、于時永徳元年（1381）八月日
・系統未確認
14、（未調査）
15、（未調査）
16、（未調査）
17、（未調査）
18、（未調査）
19、（未調査）
20、（未調査）
21、（未調査）
22、（未調査）

刊本所在：1、万治2（1659、関西学院大・東北大狩野文庫・日本大・竜谷大・仏教大・花園大・国会図書館・大須市立図書館・今治市河野美術館・尊経閣文庫・高野山真別処）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『定本時宗宗典』下、『国文東方仏教叢書』1、『遊行上人縁起絵』（「日本絵巻物全集」23、角川書店、1968）
参考文献：宮次男編『一遍上人絵伝』（「日本の美術」56、至文堂、1971）、宮次男「解説」『遊行上人縁起絵』（「新修日本絵巻物全集」23、角川書店、1979）、一遍研究会編『一遍聖絵と中世の光景』（ありな書房、1993）、砂川博編『一遍聖絵の総合的研究』（岩田書院、2002）
解説：本書は時宗開祖一遍智真と二祖他阿真教の伝記絵巻。全10巻で、前半の4巻17段が一遍の行状、後半の6巻26段が真教の行状である。編者の宗俊は、真光寺蔵本や金蓮寺蔵本の奥書から、「池刑部大輔」と呼ばれた「平宗俊」という人で、真教の在俗の弟子とみられる。

聖戒編『一遍聖絵』や真教編『一遍上人縁起絵』（現存せず）が一遍の行状だけを述べ、その師恩に報じ遺徳を讃仰する目的で制作されたのに対し、本書は真教の行状が半分以上を占めており、真教が一遍の正統な後継者であることを示すとともに、教団としてのあり方を説く目的で制作されたと考えられる。一遍の行状を述べる巻については、建長年間（1249-56）に出家した後、親族に襲撃されるところから始まり、熊野本宮での神勅受託、信州佐久郡の躍り念仏開始等が述べられ、正応2年（1289）の臨終で終わる。収録された教説は、「六十万人頌」「十一不二頌」「六字無生頌」「誓願偈文」「別願和讃」などで、主要なものを選別したらしい。真教については、一遍没後、真教が請われて後継者となり念仏賦算を始めるところから始まり、北陸・関東・甲信地方を回国、嘉元1年（1303）相模国当麻で歳末別時念仏を修して、遊行を終えるところまでを描く。真教は時衆の統制を図って教団の確立に努めており、本書には教義だけでなく、「他阿弥陀仏同行用心大綱」が収録されるなど随所に教戒が示されている。教団統制の影響は絵にも表われ、『一遍聖絵』が僧尼を混在させるのに対し、本書は分けて描くのである。本書の原本は失われているが、摸本が幾つも制作されて、今日に多数が伝存する。以上の事実からして本書は単なる絵伝にとどまることなく時宗の聖典として重視されてきたことが窺える。

諸本については、宮次男が画面構成により次の3系統に分類している。（A）人物を比較的大きく描き、精巧で写実的な描写をする系統で、清浄光寺蔵本（「藤沢道場古縁起」、1911年焼失）・光明寺蔵本などがある。（B）尼の顔を白く塗るなど僧尼の区別が明瞭であり、人物を小さめに描く鎌倉絵巻風の系統で、金蓮寺蔵本・真光寺蔵本・清浄光寺蔵本などがある。この系統の伝本が最も多い。（C）は前の2系統に分類できないもので、金台寺蔵本・常称寺蔵本などがある。
作成者名：坪井直子

一遍上人語録

書名よみ：いっぺんしょうにんごろく
著者名：一遍
著者名よみ：いっぺん
著者名別名：智真、一遍上人、遊行上人、捨聖、円照大師、証誠大師、河野時氏（通秀、通尚とも）
著者生没年：1239（延応1）-1289（正応2）
成立翻訳年：1763（宝暦13）
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、竜谷大蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、宝暦13（1763）
2、明和7（1770、神奈川藤沢清浄光寺）
3、文化8（1811、国会図書館・静嘉堂文庫・大正大・京都大・高野山大・日本大・東洋大・駒沢大・金沢大・仏教大・東北大狩野文庫・旧彰考館・神奈川県立図書館）
4、刊年不明（大谷大・京都大・竜谷大・新潟大・刈谷市立刈谷図書館・東京都立日比谷図書館・高野山真別処・薬師寺）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、宗祖上人語録写本二巻、秘于藤山蔵中尚矣、而宝暦季年東都居士円意篤信此書、而請上之梓、既而摹印装輯稍功成矣、明和初年羅祝融氏之災、印版書冊悉劫灰、嗟乎可惜哉、于時孝子小林勘平憾傷其至顕遺功之湮滅、明和庚寅秋再刻復成矣、惟嗣先考円意居士之志也、然去文化丙寅春三月堂宇印版共燼矣、繇之亦欲冀円意居士、及妙有円了妙讃受光円諦等、菩提無窮之廻向、而茲歳勘平更命剞劂氏、不吝雕費而復旧矣、請披覧此書者、莫闕十唱一唱永仏号焉／于時文化八年辛未冬十月、江戸浅草日輪寺境内、藤沢山学寮蔵版
4、（未調査）
活字本所載書：『時宗全書』1、『定本時宗宗典』上、『日仏全』66、日本思想大系10『法然・一遍』、『高僧名著全集』18、『国文東方仏教叢書』1輯宗義、『世界大思想全集』52、『日本精神文化大系』4、武田賢善編『一遍上人語録付播州法語集』（永田文昌堂、1961）、『仮名法語集』（「日本古典文学大系」83、1964）、『一遍上人語録付播州法語集』（岩波文庫、1985）
現代語訳書：高野修編『一遍上人語録原文対照現代語訳』（岩田書院、2009）
参考文献：宮崎円遵「金沢文庫所蔵播州法語集に就て「一遍上人語録」「播州問答集」の成立に関する一考察」（『中世仏教と庶民生活』、平楽寺書店、1951、「宮崎円遵著作集3」（思文閣出版、永田文昌堂、1987））、石田文昭『意訳一遍上人語録法語』（山喜房仏書林、1964）、古川雅山『一遍上人語録新講』（雅山洞、1977）、梅谷繁樹「一遍上人の念仏思想―法語の成立をめぐる試論―」（『印仏研』26-1、1977）、長島尚道「聖教解説『一遍上人語録』」（『日本仏教史学』18、1983）、秦恒平「一遍上人の詩と捨身―「一遍上人語録」―」（『国文学解釈と教材の研究』、1983）、金井清光・梅谷繁樹『一遍語録を読む』（法蔵館、1984）、金井清光「一遍・他阿の法語」（『法語・詩偈』、「仏教文学講座」3、勉誠社、1994）
解説：一遍の法語として伝承されていたものを、遊行第52代一海が広く集成したもので、それを一海の委嘱を受けた浄土宗西山派の俊凰が校訂した。上巻には別願和讃（阿弥陀仏の念仏往生願についての和讃）・百利口語（阿弥陀仏に帰命し、称名念仏を勧める和讃）・誓願偈文（阿弥陀仏の誓願により称名することを、弟子に希望する偈）・時衆制誡（修行の戒め）・時衆道具秘釈（時衆が用いる十二の道具についての解釈）・消息法語・偈頌和歌を、主に『一遍聖絵』・『遊行上人縁起絵（一遍上人絵詞伝）』から集録し、下巻には「門人伝説」とする法語を、主に『播州法語集』から集録したらしい。江戸時代の編纂ではあるが、一遍の思想を伝えるものとして重要である。
　本書は、文化8年（1811）版の跋文によれば、宝暦13年（1763）に上梓されたが、翌明和1年（1764）頃に火災にあって版木を焼失し、明和7年（1770）に再び上梓された。この明和7年版は、宝暦13年版を改訂したもので、宝暦版が『遊行上人縁起絵』を基準とするのに対し、明和版は『一遍聖絵』を重視する。また集録される法語等の数も異なり、例えば宝暦13年版が法語113条、和歌69首とするのに対し、明和7年版は法語111条、和歌66首とする。明和7年版の版木もまた火災に遭い、文化8年（1811）に三度目の上梓がされるが、文化8年（1811）版は明和7年版と同一である。これら三度の上梓は小林宗兵衛（円意）、勘平父子の功績によるところが大きい。
作成者名：坪井直子

一遍上人法門抜書

書名よみ：いっぺんしょうにんほうもんぬきがき
著者名：一遍
著者名よみ：いっぺん
著者名別名：智真、一遍上人、遊行上人、捨聖、円照大師、証誠大師、河野時氏（通秀、通尚）
著者生没年：1239（延応1）-1289（正応2）
成立翻訳年：14c-15c
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、滋賀木ノ本浄心寺蔵本（1727（享保12）、但阿弥陀仏書写）
2、滋賀木ノ本春渓寺蔵本（1743（寛保3）、善瑞書写）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『定本時宗宗典』下
参考文献：大橋俊雄「解説」（日本思想大系10『法然・一遍』）、橋俊道・梅谷繁樹「解説」（『一遍上人全集』春秋社、1989）、今井雅晴編『一遍辞典』（東京堂出版、1989）
解説：漢文体で書かれた一遍の法語を中心とする遺文集。一遍の門弟順阿の聞書によるという一遍の法語67条を収録しており、『播州法語集』にほぼ相当する。また本書と同じく漢文体で書かれた法語集『一遍念仏法語』とは内容を同じくするが、別系統と見られる。法語の他に、一遍の消息・法語・偈頌・和歌、二祖他阿や法然の法語、七祖託何自筆を写したとする「踊念仏記」などを収録し、巻末に19世尊皓までの遊行上人系譜を掲載する。本書は、遊行上人系譜の最後、19世尊皓について「文明二庚寅（1470）自出世以来二十九年、明応五丙辰（1496）自入滅以来四年、自初祖一遍代々出世入滅以来至明応八年己未（1499）」と記すことから、明応8年（1499）までに成立していたらしい。伝本については、浄信寺蔵本は増上寺貞誉僧正の書写本からの転写であり、春渓寺蔵本は浄信寺蔵本から転写する。
作成者名：坪井直子

一遍念仏法語

書名よみ：いっぺんねんぶつほうご
著者名：一遍
著者名よみ：いっぺん
著者名別名：智真、一遍上人、遊行上人、捨聖、円照大師、証誠大師、河野時氏（通秀、通尚とも）
著者生没年：1239（延応1）-1289（正応2）
成立翻訳年：14c-15c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、高野山金剛三昧院蔵本（1465（寛正6）、書写者不明）
写本奥書：1、寛正六年（1465）六月日（未調査）
活字本所載書：宮坂宥勝「金剛三昧院蔵『一遍念仏法語』について」（『仏教文学研究』4、法蔵館、1966）
参考文献：宮坂宥勝「解説」（『仮名法語集』、「日本古典文学大系」83）、大橋俊雄「解説」（日本思想大系10『法然・一遍』）、橘俊道・梅谷繁樹『一遍上人全集』（春秋社、1989）、梅谷繁樹「高野山・金剛三昧院蔵『一遍念仏法語』の本文価値について」（『時宗文化』18、2008）
解説：書写年が確認できる最古の一遍の法語集で、寛正6年（1465）の奥書がある。漢文体ではあるものの、中世に流布した和文体の法語集『播州法語集』の原初形態を窺うことが出来る。外題「一遍念仏法語全」、内題「一遍上人法語」、表紙に「校合済」とあることから、別の伝本があったらしい。102条の法語を収録する。本書と同じく漢文体の法語集『一遍上人法門抜書』とは、本書が独自に付加したとみられる巻末の7条を除けば、1、2条が異なるのみである。また『播州法語集』安永5年（1776）版と比較すれば、安永版にはない14条があるが、その中の10条は『一遍上人語録』所収の法語等である。
作成者名：坪井直子

一遍聖絵

書名よみ：いっぺんひじりえ
書名別名：一遍上人絵伝、一遍上人六条縁起、六条縁起、六条道場絵伝、一遍上人一期修行画図
著者名：聖戒
著者名よみ：しょうかい
著者名別名：河野通定、弥阿上人、弥阿、弥阿弥陀仏
著者生没年：1263（弘長3）-1323（元亨3）
成立翻訳年：1299（正安1）
成立地：日本
巻数：12
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、清浄光寺・歓喜光寺蔵本（1299（正安1）、世尊寺経尹等（？）筆、円伊画、巻7は後補）
＜影印版＞:『一遍聖絵』（「新修日本絵巻物全集」11、角川書店、1975）
2、東京国立博物館蔵本（1299（正安1）、世尊寺経尹等（？）筆、円伊画、巻7のみ）
3、奈良北村家蔵本（室町期、書写者不明、巻3・6-8、旧京都新善光寺御影堂蔵本）
4、尊経閣文庫蔵本（室町期、書写者不明、巻1・2・4・9-12、旧京都新善光寺御影堂蔵本）
5、尊経閣文庫蔵本（未調査、巻3・7・8）
6、佐渡大願寺蔵本（未調査）
7、藤田美術館蔵本（未調査）
8、国会図書館蔵本（未調査、巻5-8、4軸）
9、国会図書館蔵本（1913（大正2）、未調査、12軸、1840（天保11）年狩野養長摸写本の模写）
10、国立公文書館蔵本（未調査、3冊）
11、旧彰考館蔵本（未調査）
写本奥書：1、正安元年己亥（1299）八月二十三日西方行人聖戒記之畢、書画法眼円伊、外題三品経尹卿筆／応安二季己酉（1369）卯月三日破損之間修補之畢、于時僧阿／延徳四季壬子（1492）六月二十三日及大破間修理之＜于時満願寺住阿＞覚阿
2、（奥書なし）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
7、（未調査）
8、（未調査）
9、（未調査）
10、（未調査）
11、（未調査）
刊本所在：1、安永5（1776、大谷大・名古屋大・竜谷大・国会図書館）
刊本の奥書刊記：1、皇都紫苔山河原院歓喜光寺蔵板、安永五丙申歳（1776）秋天、書肆、寺町通四條上ル処蓍屋宗八、寺町通六角下ル蓍屋儀兵衛
活字本所載書：『時宗聖典』下2、『時宗宗典』2、『時宗全書』2、『定本時宗宗典』下、『続群書類従』9上、『日仏全』69、『一遍上人絵伝』（大和絵同行会、1922）、『一遍上人絵伝』（「日本絵巻物集成」22、雄山閣、1932）、『日本精神文化大系』4（金星堂、1939）、『一遍聖絵』（博雅会、1941-1942）、浅山円祥『一遍聖絵六條縁起』（山喜房仏書林、1940）、『一遍聖絵』（「日本絵巻物全集」10、角川書店、1960）、『一遍聖絵：巻四：国宝：歓喜光寺・清浄光寺蔵』（貴重本刊行会、1993）、大橋俊雄校注『一遍聖絵』（岩波文庫、2000）
現代語訳書：橘俊道・梅谷繁樹『一遍上人全集』（春秋社、2001）
参考文献：宮次男編『一遍上人絵伝』（「日本の美術」56、至文堂、1971）、一遍研究会編『一遍聖絵と中世の光景』（ありな書房、1993）、高野修『一遍聖人と聖絵』（岩田書院、2001）、砂川博編『一遍聖絵の総合的研究』（岩田書院、2002）、砂川博『一遍聖絵研究』（岩田書院、2004）、金井清光『一遍聖絵新考』（岩田書院、2005）、砂川博『一遍聖絵と時衆』（岩田書院、2009）
解説：時宗開祖一遍智真の伝記絵巻。一遍の伝記絵巻の中では、聖戒が編纂した本書が最も古く、他に嘉元4年（1306）に真教が熊野本宮に奉納した『一遍上人縁起絵』（現存せず）、真教の伝記を付した宗俊編纂の『一遍上人絵詞伝（遊行上人縁起絵）』（嘉元1年（1303）-徳治2年（1307）成立）がある。現存する絵巻諸本は、この聖戒編纂本と宗俊編纂本の二系統に大別されるが、聖戒の流派が発展しなかったためか、聖戒編纂の伝本は少ない。

本書の原本は国宝に指定されており、その奥書から一遍没後十年目の祥月命日である正安1年（1299）8月23日に成立、聖戒が詞書を起草し、絵は法眼円伊、外題は世尊寺経尹によったことがわかる。絹本に極彩色で描かれ、詞書部分も色紙のように彩色するなど優美な絵巻で、工房で制作されたのか複数の画家による合作であり、詞書も公卿数人による寄合書とみられる。聖戒開山の京都歓喜光寺（六条道場）には、元弘1年（1331）に3世瑞光が編纂したという江戸期写『開山弥阿上人行状』が伝わるが、それには関白九条忠教の協力が記されている。豪華な絵巻の制作には公

家社会の関与があり、聖戒は公卿等と親交があったのであろう。
　編纂者の聖戒は、一遍の弟子で弟でもある。本書によれば文永8年（1271）頃、一遍が再出家して聖達に入門した時、聖戒も出家して従い、その後3年間は共に修行したらしい。一遍と別れた後も交流はあり、正応2年（1289）、死の床にあった一遍の傍らにいて遺誡を書き取り最期を看取っている。
　内容については、阿弥陀仏の四十八願・十二光仏にちなんで48段・12巻から成る。一遍の生涯の行状を描いており、建長3年（1251）に13歳で太宰府の聖達の下へと出立するところから始まり、天王寺で「南無阿弥陀仏」と記した念仏の札を配る賦算を始めたこと、熊野本宮証誡殿で熊野権現より「一遍の勧めによるのではなく阿弥陀仏の悟りによって一切の衆生が往生出来ると定まっているので、信不信・浄不浄に限らず札を配るように」という神託を受けたこと、諸国を遊行して念仏を勧める賦算をしたことなどを記し、正応2年（1289）兵庫で入滅するところで終わる。絵巻中には主な頌・法語・和讃・和歌が取り上げられるが、他の祖師伝とは異なり、殊更に一遍を讃仰したり神秘化することがなく、忠実に一遍の教義を伝えていると考えられる。
作成者名：坪井直子

隠遁国ノ記

書名よみ：いんとんこくのき
著者名：覚瑜
著者名よみ：かくゆ
著者名別名：覚愉、住心房、出阿、出雲路上人
著者生没年：1158（保元3）-1233（天福1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『明義進行集』（大谷大学文学史研究会編『明義進行集　影印・翻刻』p.155）
解説：本書は現存しない。
　ただし『明義進行集』3「第六出雲路上人覚愉」によると、覚瑜はあるとき門弟に「四王天に生まれて毘沙門天の眷属となり、弥勒の出世を待つという願を持っていたが、今はその旨を改め念仏をとなえて極楽往生を願っている。」と語ったとあり、そのような発心の由来や意趣が本書に記されていたという。
作成者名：伊藤瑛梨

恵信尼消息

書名よみ：えしんにしょうそく
書名別名：恵信尼御消息、恵信尼文書、恵信尼書状、恵信尼書簡、恵信尼公之御文、恵信尼公御書、恵信尼公自筆文書、尼公自筆文書
著者名：恵信尼
著者名よみ：えしんに
著者名別名：恵信、ちくぜん（筑前？）
著者生没年：1182（寿永1）-？
成立翻訳年：13c
成立地：日本
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、西本願寺蔵本（13c、恵信尼真筆本）
〈影印版〉:『重要文化財　恵信尼文書　西本願寺蔵』（1977、法蔵館）
写本奥書：1、（奥書なし）
活字本所載書：『真聖全』5、『真宗史料集成』1、『定本親鸞聖人全集』書簡篇、『浄土真宗聖典－原典版－』、『真宗聖典』、日本古典文学大系82『親鸞集　日蓮集』、新潮日本古典集成『歎異抄　三帖和讃』、山本摂「恵信尼文書の本文（2）」（『行信学報』15、2001）
現代語訳書：石田瑞麿「恵信尼消息」（『親鸞とその妻の手紙』、春秋社、1968）、円地文子・町田トシコ「恵信尼文書（恵信尼書簡）」（『現代語訳親鸞全集』2、講談社、1974）、真継伸彦「恵信尼消息」（『現代語訳親鸞全集』4、法蔵館、1983）、石田瑞麿「恵信尼消息」（『親鸞全集』別巻、春秋社、1987）、佐賀江弘子「恵信尼消息」（『傍訳親鸞聖人著作全集』6、四季社、2001）
参考文献：鷲尾教導『恵信尼文書の研究』（中外出版、1923）、梅原真隆『恵信尼文書の考究』（顕真学苑、1958）、宮崎円遵「恵信尼文書」「恵信尼と自筆文書」（『親鸞の研究』上、「宮崎円遵著作集」1、思文閣出版、1986）、山本摂「恵信尼文書再読」（『行信学報』10、1996）、山本摂「再論「恵信尼文書」」（『行信学報』12、1998）、山本摂「恵信尼文書の構成」（『行信学報』13、1999）、山本摂「恵信尼文書の本文（1）-（2）」（『行信学報』14-15、2000-2001）、James C.Dobbins「女性のまま浄土に生まれた女性達－恵信尼文書研究から－」（『山田明爾教授還暦記念論集　世界文化と佛教』永田文昌堂、2000）、今井雅晴「恵信尼の出自と京都での結婚」「恵信尼の下妻での夢の意味」「恵信尼晩年の越後での生活と信仰」（『親鸞と浄土真宗』吉川弘文館、2003）、中前正志「浄土教思想と女性　恵信尼の極楽往生」（『国文学解釈と鑑賞』、2004）、西口順子「「恵信尼文書」について」（『中世の女性と仏教』法蔵館、2006）
解説：本書は建長8年（1256）から文永5年（1268）の間に、越後にいた親鸞の妻恵信尼から、京都にいた娘覚信尼へ送られた消息等全10通の集成である。
　本書は、ながくその存在が知られなかったが、大正12年（1923）に鷲尾教導『恵信尼文書の研究』によって世に紹介され、当時学会にあった親鸞非実在説を一蹴することにもなった。
　一巻の書物として整理されたのは鷲尾による紹介以後で、元々どういった形態であったかは不明である。
　本書所収の消息は、その内容によって3つに分類する事ができる。まず最初は、建長8年（1256）7月9日付と同年9月15日付の2通で、これは消息ではなく、恵信尼のもとにいた下人を覚信尼に譲る証文になっている。2つ目は、全て弘長3年（1263）に書かれたと推測される4通で、親鸞の往生に疑問をもった覚信尼に対し、その往生の間違いのない事をいくつかのエピソードを交えながら示している。その中には、親鸞が比叡山で堂僧であったことや、六角堂に参籠し夢告をえた事、吉水の法然の下に通った事などが記されており、親鸞の事跡を知る上からも注目される。3つ目は、文永元年（1264）から文永5（1268）の間の4通で、恵信尼自身の晩年の様子がしるされており、子供を多く抱え苦労する様子や、自らの卒塔婆についても触れており、中世期の女性の信仰を知る上から興味深い。
作成者名：藤田真隆

円戒秘決己証

書名よみ：えんかいひけつこしょう
著者名：聖光（？）
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立翻訳年：12-13c（？）

成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
写本
写本所在：1、三井寺法明院蔵本
写本奥書：1、嘉禎三年（1237）八月一日／右一巻実宗門珍蔵復古之秘抄也、天明六丙午辰（1786）以転輪真冏和尚所持之本於洛東岡厭求遺庵代筆于正因拝写此収蔵、法雨苑慈雲／（朱筆）右一巻者無論中古贋作、有一二之可観者故附管城子備異日考證耳、看者察知之（石井教道氏「弁長聖光作「円戒秘訣己証」に就て」（『浄土学』5・6、1933）より）
活字本所載書：石井教道「弁長聖光作「円戒秘訣己証」に就て」（『浄土学』5・6、1933）
参考文献：石井教道「弁長聖光作「円戒秘訣己証」に就て」（『浄土学』5・6、1933）
解説：浄土宗第二祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。

本書は「口伝法門」について述べる書である。先ず「一心三観与円戒同異事」「鏡像円融法門」等について、『梵網経』『止観』『顕戒論』『顕揚論』「道邃付法文」等を引用して解説し、次に7箇条の口伝（「天台大師御入定」、「智者記御自筆」、「天台御釈円戒瀉瓶口決」、「星図」（3箇）、「止観心要」）を挙げる。これらの7箇条はその一々に「弁阿聖光」の署名と「嘉禎三年（1237）八月一日」の奥書が付されている。

初めの「一心三観与円戒同異事」では、円戒には円頓菩薩戒と円頓仏戒とがあり、円頓菩薩戒は位に浅深があるため戒を伝授すべきであり、成仏の因であるので因分であるとする。一方、円頓仏戒は万法悉く本覚一位であるので位に浅深はなく、この円頓仏戒において一心三観の相承（即ち円頓仏戒の相伝）をするという。（この後に『記主良禅師乞戒疏』第二（『浄全』17,p.400下-401上）を載せる）。次の「鏡像円融法門」では、『摩訶止観』の「根塵相対の一念の心起こるに即空即仮即中なり。譬えば明鏡の如し」の文を引用して、明像鏡を即空即仮即中に喩えるとし、「鏡像一体三名万法一如の意也」と述べる。

石井教道は翻刻対照表から「一心三観与円戒同異事」と「鏡像円融法門」の文は、『記主良禅師乞戒疏』第二の文を除くと、その大部分が『等海口伝抄』（1349）と同文であり、7箇条の口伝は『天台玄旨灌頂』『玄旨壇秘鈔』『玄旨帰命印信』によっていることを指摘した上で「本書は聖光の著でない」とし、天台血脈の中、檀那流の中興に「弁長」の名があることを指摘して、「浄土の弁長をそれに仮託して、浄土宗の二祖聖光も口伝法門の伝統者であるとなし、以て浄土教荘厳の為の材料とした点があったのではなかろうか」としている。よって「良忠が聖光から所謂璽書を受けたという嘉禎三年八月一日に仮託し、鎮西聖光こそ恵檀両派の伝統者であり、浄土宗にもその相伝があることを高調せんとして作られたものであろう」とする。そして製作年代については、『等海口伝抄』を材料としていることから南北朝以前に遡ることができないことを指摘する。
作成者名：米沢実江子

円福寺縁起

書名よみ：えんぷくじえんぎ
著者名：尭恵
著者名よみ：ぎょうえ
著者名別名：善偉房尭恵、善偉
著者生没年：1328（嘉暦3）-1395（応永2）
成立翻訳年：1366（貞治5）
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、愛知岡崎円福寺蔵本（江戸期（？）、書写者不明）
2、愛知岡崎円福寺蔵本（1708（宝永5）、円智書写、『円福寺基誌』所収本）
写本奥書：1、尭恵／右、代々文書并三尊縁起・善導影像之伝記等、能登権守殿〈五条坊門油小路前〉文庫ニ奉預置也
2、惟時貞治五年丙午（1366）三月祖忌日釈尭恵欽記之
活字本所載書：宗学研究室「《研究資料》『円福寺基誌』」（『深草教学』20、2000）
解説：西山深草義を大成した顕意の門弟尭空道意（実子説もあり）によって猪熊綾小路に開かれた円福寺の創立の由来を記した縁起。同寺3世尭恵によって著された。

顕意の嵯峨への隠遁から書き起こし、師の命をうけた道意が、善導真筆の『観経疏』を求める旅を描く。道意は渡宋を目指し、商船に同乗して肥前国松浦まで辿り着いた。しかし悪天候により出港できず、思いわずらっていたある日、顕意と善導の夢を見て、さらに善導大師坐像を感得した。これが顕意の主著『観経疏楷定記』の完成と証誠を告げることを悟った道意は、渡宋をあきらめ帰京する。しかし顕意はすでに5月19日に没しており、その中陰法要に立ち会うことになる。その後、道意は持ち帰った善導大師像を本尊として寺院を建立。これが勅願寺となって花園天皇より円福寺の号を下賜された。

本書の伝本は、円福寺所蔵のカナ書きの巻子本と、それを漢訳した『円福寺基誌』所収の略本のみである。しかしこの巻子本も比較的新しく、おそらく原初の形そのままの写本ではないと思われる。巻子本には日付がないが、略本により貞治5年（1366）3月14日（善導大師忌日）の成立を知ることができる。
作成者名：稲田廣演

於一向専修宗選択集中摧邪輪（摧邪輪）

書名よみ：おいっこうせんじゅしゅうせんちゃくしゅうちゅうざいじゃりん（おいっこうせんじゅしゅうせんぢゃくしゅうちゅうざいじゃりん）（ざいじゃりん）
書名別名：破選択摧邪輪、摧邪論、選択集中摧邪輪
異本書名：はせんちゃくざいじゃりん（はせんぢゃくざいじゃりん）、ざいじゃろん、せんちゃくしゅうちゅうざいじゃりん（せんぢゃくしゅうちゅうざいじゃりん）
著者名：明恵
著者名よみ：みょうえ
著者名別名：明恵房高弁、高弁、成弁
著者生没年：1173（承安3）-1232（寛喜4）
成立翻訳年：1212（建暦2）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都仁和寺蔵本（1530（嘉禄3）、[■] 怡書写）
2、京都六波羅蜜寺蔵本（書写年不明、書写者不明）
3、高野山大蔵本（1610（慶長15）、盛春房書写）
4、京都醍醐寺蔵本（未調査）

写本奥書：1、巻上：三十三、正和五年（1316）十二月書写之同六年二月一日点畢／浄心誡観法終南山沙門／右一帖自善財院御房給之、権小僧都［■］怡（花押）、右以寺家御本重予校点了、嘉禄三年（1530）十一月二十七日求法非人［■］怡
巻中：本云建暦三年八月二十日於神護寺南房未時書写交点了、〈求菩提持者覚玄賢弁本也〉元応元年（1319）六月十五日於信乃小路房終写功了同交点了寂雅／享禄三年（1530）十二月三日集両本寺家本善財院本重令校点了此中巻閼伽井坊之本也、予一期之間為披見借請之遺跡必可返献彼坊者也、権小僧都著［■］怡（花押）
巻下：本云寛喜三年（1231）五月一日辰時許書写之了、右下巻以田中坊之本書之又以寺家之本見合入落字等号校本也、上巻者先度田中坊所給也、中巻又従閼伽井御坊予一期之間借預之間後世留守之族彼中巻可令返納者也、又右奥書文寺家交本無之田中坊本写之当時此本稀也秘蔵之、享禄三年（1530）十一月二十二日、権小僧都［■］怡、同二十四日以寺家御本交点了（日本思想大系15『鎌倉旧仏教』より）
2、（参考文献参照）
3、（参考文献参照）
4、（未調査）
刊本所在：1、刊年不明（宮内庁書陵部・お茶の水図書館成簀堂文庫）
2、刊年不明（叡山文庫）
3、寛永年間（大谷大・京都大・大正大・名古屋大・仏教大・竜谷大・智積院運敞蔵・高野山金剛三昧院）
4、刊年不明(京都大・大正大・名古屋大・立正大・竜谷大・高野山真別所・高野山宝城院・成田山・薬師寺）
刊本の奥書刊記：1、（参考文献参照）
2、（参考文献参照）
3、建暦二年（1212）十一月二十三日、華厳宗沙門高弁率爾草之了／右二箇條疑難去冬専修人可有来問之由風聞之間為彼決答雖草之不然之故深納懐中畢、然而連連伝聞偏負破念仏行之過云云、仍近日為諸人証判雖有流布之志尚以思惟之間也、然重又聞専修人云作書破念仏行云云、若有遐方歴代流此悪名者為耻為疵可不爾謝乎、仍先以此書奉進十方一切諸仏善薩賢聖衆会并仏法護持神祇冥衆御宝前副威光増法楽扇正智之風摧邪見之幢次依蒙高命謹以進上之此即抽乎懐中之始也、建暦三年（1213）三月一日、非人高弁上進上（日本思想大系15『鎌倉旧仏教』による）
4、（未調査）
活字本所載書：『浄全』8、『日本大蔵経』74、日本思想大系15『鎌倉旧仏教』（1971）
現代語訳書：塚本善隆編『法然』（「中公バックス」5、中央公論社、1983）
参考文献：梶原隆徳「鎌倉時代の摧邪輪写本並びに袋中上人真筆評摧邪輪について」(『専修学報』3、1936)、藤堂祐範編『浄土教古活字版図録』（貴重図書影本刊行会、1934）、川瀬一馬『古活字版之研究』（日本古書籍商協会、1967）、島地大等『日本仏教教学史』（中山書店、1976）、大屋徳城『日本仏教史の研究』3（国書刊行会、1988）、前川健一「摧邪輪」（日本仏教研究会編『日本仏教の文献ガイド』「日本の仏教」3、法蔵館、2001）、米沢実江子「六波羅蜜寺蔵『摧邪輪』について」（高橋弘次先生古稀記念論文集第1巻『浄土学仏教学論叢』山喜房仏書林、2004）
解説：明恵は、1173（承安3）紀州（和歌山県）有田郡石垣庄に生まれる。幼少期に両親を亡くし、1181（養和1）高雄の上覚房行慈（明恵の叔父・文覚の高弟）に師事し、1188（文治4）東大寺にて受戒。1206（建永1）後鳥羽院より栂尾（神護寺別所）に高山寺を賜り、1212（建暦2）11月に『摧邪輪』、翌1213（建保1）6月に『摧邪輪荘厳記』を著して、『選択集』の内容を批判した。
　本書の内容は『選択集』に対し、大門として2つの批判を挙げる。まず、大門第1では「菩提心を撥去する過」を挙げて批判する。この批判は更に5種に分類される。(1) 菩提心を以て往生極楽の行とせざる過、(2) 弥陀の本願の中に菩提心無しという過、(3) 菩提心を以て有上小利とする過、(4)『双巻経』に菩提心を説かずといい並びに弥陀一経止住の時菩提心無しという過、(5) 菩提心は念仏を抑うという過（5の余として「念仏衆生摂取不捨」に言及）であり、以上の批判は、それぞれ主に『選択集』の次の章段に対応している。1は第3章、2は第4章、3は第5章、4は第6章、5は第12章、5の余は第7章。大門第2の批判は「聖道門を以て群賊に譬える過」であり、これは『選択集』第8章に対している。
　明恵は『選択集』を批判するに当たって、自らは善導の解釈を評価するものであり、また諸行の一つとしては称名念仏をも重視するものであるという立場を示した上で、「菩提心為本」「諸行往生」の立場から中国華厳宗の諸師をはじめ、道綽・善導等の文献をも文証にしつつ、法然の解釈を批判する。そしてこの批判によって『選択集』に述べられる「念仏観」・「末法観」・「往生・成仏観」等の解釈は、仏教はもとより善導浄土教にも違背しているとし、『選択集』の教えを仏教衰退の原因であると糾弾する。
　書名に関しては『長西録』（『日仏全』1）では「破選択邪論　三巻」とあり、智積院『運敞蔵目録』では「選択集中摧邪輪」とある。
作成者名：米沢実江子

往生講式

書名よみ：おうじょうこうしき
書名別名：往生講私記、阿弥陀講式、弥陀講式
著者名：永観
著者名よみ：ようかん
著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：1079（承暦3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、醍醐寺蔵本（1112（天永3）、書写者不明）
2、高野山宝城院蔵本（1148（久安4）、源覚書写）
3、醍醐寺蔵本（平安後期、書写者不明）
4、醍醐寺蔵本（1279（弘安2）、書写者不明）
5、高野山三宝院蔵本（鎌倉期、書写者不明）
6、彰考館蔵本（1306（嘉元4）、書写者不明）
7、三千院蔵本（1306（嘉元4）、書写者不明、断巻）
8、お茶の水大蔵本（南北朝期、書写者不明）
9、東寺宝菩提院蔵本（1438（永享10）、書写者不明）
10、高野山金剛三昧院蔵本（室町期、書写者不明）
11、禅林寺蔵本（室町期-江戸初期、書写者不明）
12、大正大蔵本（1686-1687（貞享3-4）、合本、書写者不明、大谷論文参照）
13、随心院蔵本（1269（文永6）、仮名書き、書写者不明）
以下、多数あり。
写本奥書：1、南都東大寺沙門永観尊、願共結縁者往生安楽国、於弥陀御前講讃私記文、及十方国中同以成仏道、天永三年（1112）書写畢、抑此式彼律師存生之間筆削不絶、雖然最後臨終之時以此本被修、此講有其霊瑞、来迎讃異香満堂〈云々〉、仍以此可為正本耳、此歌本二来迎讃次ニ有之〈世乎須天々阿弥陀保等介乎多之牟美ハ乎波利乎毛不曽宇礼之加利毛留〉、此歌第七段奥二有之〈美奈此等乎和多

佐牟登於毛不許々呂故曽極楽爾遊久士留信奈里毛礼〉
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、東山禅林寺永観之作也
6、（未調査）
7、嘉元四年（1306）暦芳辰初月候染愚筆致書写了、願以染紫毫之功必欲拝白毫之光而已、ひさしくも身はあらし世ふみ［■］くきのあとてふと万れかこみうてらも南無阿弥陀仏
8、南都東大寺沙門永観尊、願共結縁者往生安楽国、於弥陀御前講演私記文、及十方国中同以為仏道
9、（未調査）
10、為賢識、照快菩提而已、授与宥勢／於高野山南谷房照尊院以御本書之、求法澄祐之／［■■］勢秀
11、南都東大寺沙門永観尊、願共結縁者往生安楽国、於弥陀仏前講説私記文、及十方国中同以成弘通
12、承暦三年（1079）六月五日往生講中書畢、今夜一僧来加直字、忽然去－亦跡異香芬馥是則如来化現歟、余抑筆拭涙、同云六月一五日後夜念仏之後発大願曰、所作式交若不冥仏意者忽預煙灰無有遺余、比丘永－敬白、誓約投護摩火、明日見之一字不消［■］／門下行人等可秘本也
13、文永六年（1269）五月二十二日とりのおはりにこのしきかきをはりぬ、かならすかならす一仏浄土の縁をむすはんとなり／しつかにこの式を拝覧申候にほんふのつたなき事をのへ給へる時はいよいよしやはをいとひ仏の難有体［　］時は猶々浄土をねかひ候也、ねかわくは此式拝見之力をもつてすみやかに九品のはちすの上に生させ給へ、南無阿みた仏南無阿みた仏南無阿みた仏、仏子尊然（花押）／南都興福寺東院之内、藤菊丸
刊本所在：1、寛永21（1644、寛永寺）
2、寛文4（1664、大正大・竜谷大）
3、寛文9（1669、大正大）
4、元禄11（1698、大谷大・大正大・日本大・竜谷大・早稲田大・寛永寺・積翠文庫、首書、伝阿注）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、此書律師永観御所造也、先雖有板行誤謬多之、所以今亦禅林之正本改板之者也、寛文四年〈甲辰〉（1664）閏五月吉日、二条通二王門町村上勘兵衛
3、（未調査）
4、元禄十一季（1698）春上院、書肆村上勘兵衛寿梓
活字本所載書：『大正蔵』84（No.2725）、『浄全』15
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）、乾克己『中世歌謡の世界』（近代文芸社、1992）、随心院聖教類総合調査団代表沼本克明『仁海僧正950年御遠忌記念　随心院聖教類の研究』（汲古書院、1995）、高野山大学附属高野山図書館『高野山講式集　高野山大学附属高野山図書館所蔵』（小林写真工業、2001）、ニールスグュルベルク『講式データベース』（http://www.f.waseda.jp/guelberg/koshiki/datenb-j.htm、2004）、乾克己「『往生講式』と仏教歌謡」（『金沢文庫研究』274、1985）、大谷旭雄「永観『往生講式』の撰時と往生思想」（『戸松教授古希記念　浄土教論集』大東出版社、1987）、笹田教影「禅林寺蔵『往生講私記』」（『仏教大学仏教文化研究所年報』5、1988）、乾克己「往生講式研究序説」（『和洋女子大学紀要（文系編）』28、1988）、花野憲道「随心院蔵『仮名書き往生講式』解説並びに影印、翻刻」（『鎌倉時代語研究』13、1990）、ニールスグュルベルク「永観と宝物集」（『季刊文学』5-4、岩波書店、1994）
解説：著者の永観については『往生拾因』の項を参照。
　本書は毎月15日を斉日とし、西壁に阿弥陀仏の迎接像を奉安して行う阿弥陀講の式文である。
　その内容は表白と7門の講説、そして各門に終わりに付された伽陀によって構成される。それらを細説すると、(1)発菩提心（2）懺悔業障（3）随喜善根（4）念仏往生（5）讃嘆極楽（6）因円果満（7）回向功徳の7門であり、中心は第4の念仏往生門とみられ、前3門は発心・懺悔・随喜を行う準備段階を表し、第5・第6門は極楽往生への志願を強固にするための補助的な役割を果たして、第7門に至って全ての善根を回向し、現当二世の大願成就を果たさんとするものである。
　本書の撰述年次は古来より永観の壮年期にあたる承暦3年（1079）説と老年期の永長1年（1096）説があったが、大正大蔵本に伝えられる承暦3年の永観の識語を考証した研究（大谷論文）により、前者の説が主流となっている。更に本書の「一心称念」説の理解が『往生拾因』の叙述ほど具体化されていないことも承暦3年撰述説を裏付ける一因ともなるだろう。
　また現存写本より本書は室町期に至ると宗派に関わらず広範に受容されたことが確認できる。特に13c後半から仮名書き仏典としては最古の事例である仮名書き本もみられ（花野論文）、大原勝林院所蔵の「魚山叢書」には節博士の加えられた写本が複数あり、実際の法会で多用されたことがが知られる。同時に人生の無常を説き、技巧を凝らした対句表現による式文が後代の阿弥陀仏和讃や伽陀、釈教歌の典拠となるだけにとどまらず、『撰集抄』『宝物抄』『方丈記』『平家物語』『愚迷発心集』などの説話・物語・法語に及ぼした影響も少なくない（乾論文）。そして、これらの相関関係を考証すると本書が後代の諸書の典拠であったその一方で、式文を七五調の形式に和讃化した作品が介在しているとの可能性も指摘されている。『長西録』には永観の著書として「往生極楽讃」「念仏讃」も挙げており、それとこれら両書が比定されるか今後の綿密な検討が必要であろう。
作成者名：能島覚

往生極楽讃

書名よみ：おうじょうごくらくさん
著者名：永観
著者名よみ：ようかん
著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：11c後半-12c初頭
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）
解説：著者の永観については『往生拾因』の項を参照。
　本書は散逸して伝わらない。内容については『往生講式』『念仏讃』の項を参照。
作成者名：能島覚

往生極楽問答

書名よみ：おうじょうごくらくもんどう
著者名：覚超
著者名よみ：かくちょう
著者名別名：都率僧都、兜率僧都、都率先徳、兜率先徳、楞厳院先徳
著者生没年：960（天徳4）-1034（長元7）
成立翻訳年：10c末-11c初頭
成立地：日本
巻数：1

漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、坂本西教寺蔵本（1657（明暦3）、舜興書写、八合本）
2、坂本西教寺蔵本（1659（万治2）、舜興書写、六合本）
3、坂本実蔵坊内真如蔵蔵本（未調査）
4、身延山久遠寺蔵本（未調査、『法華観法』・『阿弥陀観心』と合本）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
刊本所在：1、万治3-寛文8（1660-1668、東京大、『天台小部集釈』の内）
2、寛文5（1665、叡山文庫・勧学院・四天王寺・大正大・立正大・竜谷大、『天台小部集釈』6）
3、安永7（1778、大谷大・お茶の水大図書館成簣堂文庫・京都大・国会図書館・滋賀十妙院・大正大・東京谷中天王寺福田蔵、『天台小部集釈』の内）
4、安永7（1778、竜谷大、『山家雑詮』9）
5、文政11（1828、大谷大、『天台小部集釈』の内）
6、刊年不明（上野寛永寺）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、延宝五丁巳（1677）十一月吉祥日（巻6末）
3、（未調査）
4、寛文五歳乙巳（1655）初冬吉祥日、安永七（1778）戊戌初夏吉祥日（巻11末）
5、（未調査）
6、（未調査）
活字本所載書：『日仏全』24
参考文献：田島徳音「往生極楽問答」（『仏書解説大辞典』1）、花野充道「都率僧都覚超の著作解題」（『和党』36、1976）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、小山昌純「覚超浄土教の再検討－青蓮院所蔵『私念仏作法』を中心として－」（『仏教学研究』57、2002）
解説：本書の内容はわずかに四つの問答から構成される。まず、近来の諸行の人は皆、往生極楽を願うが、往生の定不定は何によって知ることができるのかと問いを出す。それに対して、三種の心が現前すれば往生は決定だとする。その三種の心とは、一に極楽世界のみを観ずることに明了な心、二つにいつ何時も往生のみを希望する心、三つに常に夢中において仏・菩薩が来迎し、自身が往生することを見る心である。ただ、毒発の人と称される五逆の罪人は、当然ながらこの三種心を具せないとする。しかしながら同時に、『往生要集』の臨終行儀の指示に従い、臨終十念に依ることで往生することができることも説き、その際に自己の想いを西方に向け、此の界への執着を断ち、弥陀の大悲に順じるように勧めている。また覚超自身もこれらの三種の心を具する能力がないことを披瀝しており、自身は五逆ほどの罪人ではないと示しながらも、毒発の人に勧めた往生の方法によって、自身の臨終十念に対する述懐を記することで本書を締め括っている。
作成者名：能島覚

往生集

書名よみ：おうじょうしゅう
著者名：昌海
著者名よみ：しょうかい
著者生没年：8c-9c
成立翻訳年：平安初期
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『永超録』（『日仏全』1、p.79）
参考文献：住田智見『浄土源流章解説』（法蔵館、1925・1982、p.177）、富貴原章信『日本唯識思想史』（大雅堂、1944、p.268）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、pp.35-79）
解説：著者については『阿弥陀悔過』の項を参照。
　本書は現在のところ伝わっていない。『永超録』に「往生集一巻、興福寺聖海撰」とあるが、この「聖海」は「昌海」と同一人物であると思われる（富貴原[1944]）。また、本書を同著者の『西方念仏集』と同じ著作であるとみる説もある（住田[1925]）。これらの説に依るならば、昌海の著作は『阿弥陀悔過』と『西方念仏集（往生集）』の2種と考えられる。
作成者名：北条竜士

往生拾因

書名よみ：おうじょうじゅういん
書名別名：往生十因
異本書名：往生極楽拾因
著者名：永観
著者名よみ：えいかん（ようかん）
著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：1103（康和5）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、叡山文庫真如蔵本（1120（元永3）、書写者不明）
2、高野山宝寿院蔵本（1216（建保4）、隆宴写）
3、栃木輪王寺慈眼堂蔵本（1558（弘治4）、書写者不明）
4、叡山文庫天海蔵本（1567（永禄10）、祐覚写）
写本奥書：1、先年以彼律師御本写校了。又元永三年四月上旬如彼律師自点本校点了。
2、建保四年八月比勧他書写之偏是為無上菩提也。釈隆宴。
3、弘治四年六月廿五日成福寺書之了。
4、往生十因彫印板先使二親入安楽回向迷境其功徳自他法界皆蒙益。嘉元三年乙巳蕤賓下旬。願主沙門如円。祖師通範法師三十三年忌為証大菩提馳禿筆而已。永禄十年丁卯八月時正求法沙門祐覚之。
刊本所在：1、宝治2（1248、仁和寺・竜谷大・京都大）
2、寛文9（1669、駒沢大・九州大）
3、延宝6（1678、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、此十因者為刻彫印字写作者草本一点一画敢莫取捨。唯仰先師之筆跡擬備結縁之指南矣。宝治二年戊申仲春日。願主比丘往成。
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』84（No.2683）、『浄全』15
参考文献：大谷旭雄「永観―念仏宗の人―」（『浄土仏教の思想』7、講談社、1993）、梯信暁『奈良・平安期浄土教展開論』（法藏館、2008）
解説：永観の著。永観は京都禅林寺の僧で、東大寺三論宗の碩学。康和2年（1100）から4年まで東大寺別当を務めたのち、禅林寺に帰って念仏の実践と衆生教化に当たった。『往生十因』は、康和5年の成立とされている。自身の念仏実践の体系を確立し、あわせて講社の仲間たちを極楽へ

と導く目的で著されたものである。一心に阿弥陀仏を称念する一行が、往生極楽の因となる理由を、「(1) 広大善根の故 (2) 衆罪消滅の故 (3) 宿縁深厚の故 (4) 光明摂取の故 (5) 聖衆護持の故 (6) 極楽化主の故 (7) 三業相応の故 (8) 三昧発得の故 (9) 法身同体の故 (10) 随順本願の故」という10項目にわたって論じている。永観が目指したのは「一心」の成就であり、称名念仏の一行によって「一心」すなわち三昧を発得できるという主張をもって『往生拾因』の特徴と見ることができる。永観が一心を重視するのは、往生のためには臨終正念の現前が不可欠だと考えたからである。また、自らを罪悪生死の凡夫と自覚する者を受法の機と見ていることも特徴の一つである。そのような者に対して、一心称名の一行によって往生が可能であることの根拠を示し、その実践の方法を示しているのである。凡夫初心の者を育てて、やがて迎えるべき臨終に正念を現前させるための念仏実践の理論を組織した書であると言える。

作成者名：梯信暁

往生仏土経

書名よみ：おうじょうぶつどきょう
著者名：不明
著者生没年：12c以前
成立翻訳年：12c以前
成立地：日本
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『往生要集裏書』、『佚名孝養説話集抄』
参考文献：斉藤隆信「『大乗毘沙門功徳経』解題」(『七寺古逸経典研究叢書』4、大東出版社、1999)、牧野和夫「七寺蔵『大乗毘沙門功徳経』と「因縁・説話」」(『七寺古逸経典研究叢書』4、大東出版社、1999)、恋田知子「偽経・説話・物語草紙　―岩瀬文庫蔵『釈迦并観音縁起』絵巻をめぐって―」(『国語国文』74-5、2005)、箕浦尚美「金剛寺蔵〈佚名孝養説話集抄」について」(科学研究費　基盤研究 (A) (1) 報告書「金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究」、落合俊典、2007)
解説：本書は散逸して伝わらない。『往生要集裏書』、『佚名孝養説話集抄』にある逸文によってその存在が知られる。『往生要集裏書』所引の注記によると本書には和歌が収められていたようで、そのような点から日本撰述経典と考えられる。

本書の内容はその逸文に限れば「早離・速離の父を恋ふる縁」と「金珠孝子の父を尋ぬる縁」があったと考えられ、更にいくつかの本生譚を収めた経典であったと推測される。日本撰述経典という点で本書に親近性がある経典として七寺蔵『大乗毘沙門功徳経』全11巻が挙げられるが、本書はそのような大部な経典といかないまでも、複数巻に亘る経典であったと考えられる。

なお、本書の「早離・速離の父を恋う縁」と『観世音菩薩往生浄土本縁経』の早離・速離本生譚は非常に近似しており、両者は混同されることもある。しかし、それらの本生譚の構成・物語の展開には類似点が多いものの、登場人物・地名には多くの相違が認められるため、現在の研究においては別の経典として認識されている。

また、本書は『宝物集』独自の早離・速離物語と関連するものと注目されている資料でもある。『観世音菩薩往生浄土本縁経』の項を参照。

作成者名：能島覚

往生要集

書名よみ：おうじょうようしゅう
書名別名：往生集
著者名：源信
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：988（永延2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、小松聖徳寺上宮文庫蔵本（996（長徳2）、長胤書写、巻中のみ、原表紙に「顕實之」、「傳顕眞之」(別筆)とあり)
2、神奈川最明寺蔵本（11C後半（？）、書写者・加点者不明、浄蓮房源延所持本)
3、伊勢神宮徴古館蔵本（1152（仁平2）以前、書写者不明、快圓加点（？）、巻上末一帖のみ)
4、京都青蓮院蔵本（1171（承安1)、弘恵書写、三巻三帖)
5、高野山西南院蔵本（1181（治承5）以前、書写者不明、断簡11紙、漢字平仮名交じり文、『往生要集』冊子本を解き、継ぎ合わせた紙背に『三十帖策子目録』を書写している)
6、お茶の水図書館成簀堂文庫蔵本（平安末期（？）、書写者不明、巻下本一帖のみ（巻末数葉欠))
7、大東急記念文庫蔵本（1204（元久1)、榮真書写、巻上末一帖のみ)
8、武生引接寺蔵本（鎌倉初期（1216（建保4）以降？)、書写者不明、三巻九帖、建保4年刊本を書写したものか)
9、小松聖徳寺上宮文庫蔵本（鎌倉期、書写者不明、巻上本一帖のみ、巻末に「長林寺」とあり)
10、高野山正智院蔵本（鎌倉期（1210（承元4）以降？)、書写者不明、三巻六帖、書写奥書はないが仁安3年（1168）版刊記、承元4年（1210）版刊記を書写する)
11、大東急記念文庫蔵本（鎌倉期（1255（建長7年）以前？)、書写者不明、長禅加点本、應蓮社顕誉所持本、三巻六帖、巻上一は、建保4年版本・建長5年版本・承元4年覆刻版本と異なる版式の古版本の零本、欠損部は補寫される、巻上二から巻下一まで建長5年（1253）版本、巻下二前半三十二葉は鎌倉期写、後半二十六葉は補写)
12、京都浄福寺蔵本（鎌倉期（？)、伝後京極良経（1169-1206）写、巻上本一帖、巻中本一帖のみ、漢字平仮名交じり文)
13、奈良興福寺蔵本（鎌倉期（？)、書写者不明、巻下末一帖のみ、漢字片仮名交じり文)
写本奥書：1、長徳二年（996）七月廿六日寫了　長胤
2、永観二年甲申冬十一月於天台山延暦寺首楞厳院撰集斯文、明年夏四月畢于其功矣、有一僧夢毘沙門天将両丱童来告云、源信所撰往生集皆是経論文也、一見一聞之倫可（ミセケチあり）可證无上菩提、須加一偈廣令流布、他日語夢、故作偈云／已依聖教及正理　勧進衆生丶極楽　乃至展轉一聞者　願共速證無上覚（跋文)
3、快圓／仁平貳年（1152）四月十丶日酉時許槙點了
4、(巻上）傳領十達之／慶安三季（1650）霜月中旬令感得之畢／傳領英弘（傳領奥書、いずれも本文と別筆)
（巻中）一校并點了（校了、加点奥書）／傳領十達之／傳領英弘／慶安三年（1650）霜月中旬覧之畢（傳領奥書、い

ずれも本文と別筆）
（巻下）永観二年甲申冬十一月於天台山延暦寺首楞厳院撰集斯文、明年夏四月畢于其功矣、有一僧夢毘沙門天将両卯童来告云、源信所撰往生集皆是経論文也、一見一聞之倫可證无上菩提、須加一偈廣令流布、他日語夢、故作偈曰／已依聖教及正理　勧進衆生生極楽　乃至展轉一聞者　願共速證無上覚（跋文）
延久二年（1070）四月十日、平等院南泉房多本取集讀相給、其中以善本日野點畢、其衆皇后宮大夫殿其為張發、樺尾阿闍梨以為講師＜云々＞（加点奥書）／承安元年（1171）十二月十一日書寫畢／沙門弘恵本也（書写奥書）／傳領十達／傳領英弘（傳領奥書）
5、（紙背『三十帖策子目録』奥書）治承五年（1181）丑二月廿二日、於嵯峨水本僧房書寫了／金剛佛子静幸
6、（奥書なし）
7、元久元年（1204）＜甲子＞五月四日未時計書寫了、榮真
8、（跋文、青蓮院蔵本に同じ。奥書なし）
9、（奥書なし）
10、（跋文、青蓮院蔵本に同じ。源信書状、周文徳返報あり）。（仁安3年（1168）版刊記）往生要集者一代聖教之肝心九品往生之目足也、流布之雖多摺寫之本惟尠、仍彫文字於形木整句偈於貫花、其志相企其力不叶、祈請三寶勧進諸人、以其助成熟此功徳、縦秘之［■］内将弘之世間、若有借請之輩可勿悋惜之心而已／于時仁安三年（1168）六月十九日彫刻畢
（承元4年（1210）版刊記）承元四年（1210）四月八日刻彫畢、願主大法師實眼、励微力於自心、抛財寶於佛界、迄功于一百枚、但此模者、先年之比有聖人、勧進十方刻彫之、於此所不慮之外、逢失火焼失畢、仍以自力刻之、偏是為四恩七世、無縁法界、成佛得道也
11、（巻上一）（刊記なし）、（奥書）應蓮社顕誉
（巻中二、加点奥書）建長七年（1255）＜乙卯＞五月七日、於北京近衛西洞院交點畢、為悲母尊霊往生極楽＜云々＞／長禅
（巻下二、跋文・源信書状・周文徳返報・承元四年版刊記あり）
12、（奥書なし）
13、（跋文）去年中冬ヨリハシメテ、コノナツノ［■■］ニイタルマテ、天［■］首楞厳院ニシテ抄集ノ功オハヌ、多少コレニ［■］モナフ遠近ニソノカスアリ、ステニチ［■■■■］クシテ弥陀［■］ニムマレム、コノナカニヒケルトコロノ経論［■■］偈、アルイハ便ナルアリ、シカルヲ發心ヲ讃詠セムカタメ、結縁［■］憶持［■■］メニノセテ、［■］カラスシモ文章起盡ノタヨリヲ［■■■］ス、永［■■］年乙酉四月八日記オハヌ、聖教オヨヒ正理ニヨテ、衆生[■]勧進シテ、佛事［■■■■］至展轉シテヒトタヒモキカムモ［■■■■］ヒニ生スルヲ［■■■］エム、寛和二年ノナツ、ヒトノ夢相ア［■■■］オアテコノ文ヲイハク、毘沙門天王、両卯童子ヲモテキ［■■］ス
刊本所在：1、佚書（1168（仁安3）、高野山正智院蔵古写本に「異本奥書曰」としてその刊記が知られる）
2、佚書（1210（承元4）、實眼発願、高野山正智院蔵古写本に「異本奥書曰」としてその刊記が知られる）
3、出口常順所蔵本（1216（建保4）、蓮契発願、最寂開版、三巻六帖）
4、刈谷専光寺蔵本（1216（建保4）版、1217（建保5）印西摺写、祖山所持本、三巻六帖（取合本）、巻上本は祖山による補写、巻上末は青阿彌陀仏勧進版（開版年次不明）、巻中本末・巻下本末は建保4年版を建保5年に印西が摺写したもの）
5、竜谷大学蔵本（1253（建長5）、道妙発願、法恵、良信所持本、三巻六帖、建長5年版本、叡山文庫、高野山寶寿院、龍門文庫、伊勢西来寺、大東急記念文庫にもあり）
6、大東急記念文庫蔵本（鎌倉期（1255（建長7年）以前？）、應蓮社顕誉所持本、巻上一、建保4年版本・建長5年版本・承元4年覆刻版本と異なる版式の古版本の零本、欠損部は補寫される）
刊本の奥書刊記：1、（高野山正智院蔵古写本に記される「異本奥書曰」による）往生要集者一代聖教之肝心九品往生之目足也、流布之雖多摺寫之本惟尠、仍彫文字於形木整句偈於貫花、其志相企其力不叶、祈請三寶勧進諸人、以其助成熟此功徳、縦秘之［■］内将弘之世間、若有借請之輩可勿悋惜之心而已／于時仁安三年（1168）六月十九日彫刻畢
2、（高野山正智院蔵古写本に記される「異本奥書曰」による）承元四年（1210）四月八日刻彫畢、願主大法師實眼、励微力於自心、抛財寶於佛界、迄功于一百枚、但此模者、先年之比有聖人、勧進十方刻彫之、於此所不慮之外、逢失火焼失畢、仍以自力刻之、偏是為四恩七世、無縁法界、成佛得道也
3、建保四年歳次丙子初冬十月下旬八日、以諸人助成致三卷彫刻、是則先師蓮契上人、發起［■］願雖企経始、不遂素懐早帰黄壌、仍任遺旨今終微功矣／遺弟最寂記之／（別筆）三井寺日光院蔵本＜以上六冊也＞／亮憲僧正 寄進／月山寺舜宥
4、（巻上本）持主祖山
（巻上末刊記）勧進青阿彌陀仏
（巻中本末・巻下本刊記）建保5年（1217）三月廿三日摺写之了／願以此功徳盡廻向佛道＜云々＞　求法僧印西之
（巻下末、跋文・刊記あり（建保4年版本に同じ）、源信書状、周文徳返報の補写あり（建長5年版本に同じ））建保5年（1217）三月廿三日摺写之了／願以此功徳盡廻向佛道＜云々＞　求法僧印西之
（源信書状、周文徳返報の補写と同筆）主祖山
5、（巻下末、跋文あり（青蓮院本に同じ）、源信書状、周文徳返報あり）今此要集者、源出横川、流傳四海、但文字加減、何是何非、文義倶妙、取捨無據、廣考諸文、或古本云、自本此文有両本、遣唐本留和本、今本是遣唐本也、祇園精舎无常院文有二行餘、是留和本也＜已上＞、故知、遣唐本再治本明矣、今以送唐本開板鏤印、以此功徳自利々它、我與衆生同會樂邦／建長5年（1253）在歳癸丑四月肇彫、九月畢功／願主道妙
6、（巻上一）（刊記なし）、（奥書）應蓮社顕誉
活字本所載書：『恵全』5、『日仏全』31、『浄全』15、『真聖全』1、『原本校註漢和対照 往生要集』（小山書店、1937／山喜房仏書林、1976復刻）、花山勝友『往生要集』（岩波書店、1942）、石田瑞麿『日本思想大系6 源信』（岩波書店、1970）、『浄土真宗聖典 七祖篇 原典版』（浄土真宗本願寺派、1985）、石田瑞麿『往生要集』上下（岩波書店、1992）、築島裕・坂詰力治・後藤剛編『最明寺本 往生要集 譯文篇』（汲古書院、1992）、『浄土真宗聖典 七祖篇 註釈版』（浄土真宗教学研究所、1996）
現代語訳書：『国訳一切経 和漢撰述部』諸宗部24（大東出版社、1941）、石田瑞麿『往生要集－日本浄土教の夜明け－』東洋文庫8・21（平凡社、1963・1964）、川崎庸之他『日本の名著 源信』（中央公論社、1972）、花山勝友『往生要集』（徳間書店、1982）、花山勝友『傍訳浄土思想系譜全書6－10 往生要集』（四季社、2003）、
参考文献：八木昊恵『恵心教学の基礎的研究』（永田文昌堂、1962）、石田瑞麿『日本思想大系6 源信』（岩波書店、1970）、藤井智海『往生要集の文化史的研究』（平楽時書店、1978）、鈴木一男『初期点本論攷』（桜風社、1979）、中村元『古典を読む 往生要集』（岩波書店、1983）、大隅和雄・速水侑編『日本名僧論集4 源信』（吉川弘文館、1983）、福原蓮月『往生要集の研究』（永田文昌堂、1985）、東京大学史料編纂所編『大日本史料』第1編之23（東京大学、1985）、

西崎亨編『和泉書院影印叢書8 高野山西南院蔵『往生要集』断簡』（和泉書院、1986）、往生要集研究会編『往生要集研究』（永田文昌堂、1987）、速水侑『人物叢書 源信』（吉川弘文館、1988）、築島裕・坂詰力治・後藤剛編『最明寺本往生要集 影印篇』（汲古書院、1988）、末木文美士『大乗仏典 中国・日本篇19 源信』（中央公論社、1991）、章輝玉・石田瑞麿『浄土仏教の思想6 新羅の浄土教 空也 良源 源信 良忍』（講談社、1992）、西田直樹・西田直敏『浄福寺本仮名書き「往生要集」影印・翻刻・解説』（おうふう、1994）、西田直樹『「往生要集絵巻」詞章と絵の研究』（和泉書院、2000）、西田直樹編『「仮名書き絵入り往生要集」の成立と展開 研究篇・資料篇』（和泉書院、2001）、小原仁『ミネルヴァ日本評伝選 源信－往生極楽の教行は濁世末代の目足－』（ミネルヴァ書房、2006）

解説：著者は源信。

奥書により、延暦寺首楞厳院において984年（永観2）11月に起筆、翌985年（寛和1）4月に擱筆したことが知られる。

内容は、往生極楽に関する経論の要文を抄出し、全3巻（本末6帖）に編集したもので、序文、本文、跋文で構成される。

序文では、往生極楽の教行が濁世末代の目足であること、頑魯の者の為に、覚り易く行じ易い念仏の一門によって経論の要文を集めること、本文が（1）厭離穢土、（2）欣求浄土、（3）極楽証拠、（4）正修念仏、（5）助念方法、（6）別時念仏、（7）念仏利益、（8）念仏証拠、（9）往生諸行、（10）問答料簡の十門によって構成されることが述べられる。

本文、（1）厭離穢土では、三界六道の厭離すべきことが説かれる。（2）欣求浄土では、仏菩薩の来迎により極楽に往生する楽しみと、極楽における楽しみが十楽として説かれる。（3）極楽証拠では、極楽を十方の浄土、兜率と対比し優れていることが説かれる。（4）正修念仏では、五念門（礼拝・讃歎・作願・観察・廻向）に基づき観相念仏が説かれる。（5）助念方法では、観相念仏の補助として七事（方処供具、修行相貌、対治懈怠、止悪修善、懺悔衆罪、対治魔事、総結要行）が説かれる。（6）別時念仏では、日時を限定して念仏する尋常の別行と、臨終の行儀が説かれる。（7）念仏利益では、滅罪生善、冥得護持、現身見仏、当来勝利、弥陀別益、引例勧信、悪趣利益の七つの念仏の利益が説かれる。（8）念仏証拠では、念仏の一門を勧める理由として、その易行なることが説かれ、念仏を往生の業とする十の経論の文が揚げられる。（9）往生諸行では、受持・読誦等、念仏以外の往生極楽の行が説かれる。（10）問答料簡では、極楽依正、往生階位、往生多少、尋常念相、臨終念相、粗心妙果、諸行勝劣、信毀因縁、助道資縁、助道人法の十項目について問答が設けられる。

跋文では、本書執筆の経緯、毘沙門天の夢告による証誠が述べられ、偈文が付される。（引き続き、源信の手紙とその返報を付すものもある）。なお現行の跋文は本書擱筆時のものでなく、後に改訂されたものである（上杉智英「『往生要集』跋文の変遷」（『印仏研』58-2、2010））。

本書は極楽往生の指南書として広く流布し、念仏結社の発足、地獄・極楽・六道といった他界観、臨終来迎思想等、以降の日本浄土教、並びに物語、説話、和歌、謡曲、浄瑠璃、造形美術等にも多大な影響を与えるものである。

作成者名：上杉智英

往生要集勘文

書名よみ：おうじょうようしゅうかんもん
書名別名：勘文
著者名：平基親
著者名よみ：たいらのもとちか
著者生没年：1151（仁平1）-？
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：6
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、名古屋真福寺蔵本（1235（文暦2）、書写者不明、他の2文献と共に『天台往生要集』に所収）
写本奥書：1、文暦二年大才己未（1235）七月十六日書了（佐藤哲叡『叡山浄土教の研究』資料編に基づく）
散逸文献の文献名出典：良忠『往生要集抄』（『往生要集義記』）（逸文あり、佐藤・大谷・福原論文を見よ）
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、大谷旭雄「『往生要集義記』について」（『浄土学』36、1985）、福原隆善「叡山における『往生要集』の展開」（『往生要集研究』、永田文昌堂、1987）、上杉智英「真源撰『往生要集裏書』について」（『仏教大学総合研究所紀要別冊浄土教典籍の研究』、2006）

解説：著者は平基親（1151-？）。兵部卿三位基親という。民部卿平親範の息であり、建永1年（1206）に出家する。法然と交流があり、法然の『選択集』の序文は基親作と記述される。他に『往生要集外典抄』『善導大師画讃』を述す。

成立年次に関しては不明であるが、著者の生存年代からして鎌倉前期頃の成立と思われる。本書の完本は現存しない。ただし『往生要集外典抄』『往生要集遣宋消息』と共に真福寺蔵『天台往生要集』（仮題、前部欠）に収録され、本書はその中で第1番目に所収されているが第6巻の後半部分が現存する。

内容は『往生要集』大文第九、第十に相当する箇所を8文あげている。一方、良忠『往生要集抄』（『往生要集義記』）には13箇の引用が確認されている。『往生要集裏書』の内容両断簡には殆ど重複する箇所はない（前掲佐藤、p.236）。本書は内容に言及するものではなく、難語説明を中心としていることが特色といえる。平基親は他にも引用経典や地の文の用語に対応する外典を選出する『往生要集外典抄』を著している。

両書に共通していえることは『往生要集』の語句に対して経典に基づき註釈・解釈を施していることである。また本書には真源（1064-1136）の『往生要集裏書』を引用して註釈するということがなされているが、真福寺蔵本の『往生要集勘文』は全てこの『往生要集裏書』からの引用であるので（前掲上杉から確認）、真源独自のものはみられない。この註釈形式は『往生要集抄』（『往生要集義記』）にもみられるところである。

作成者名：南宏信

往生要集外典抄

書名よみ：おうじょうようしゅうげてんしょう
書名別名：外典抄
著者名：平基親
著者名よみ：たいらのもとちか
著者生没年：1151（仁平1）-？
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、名古屋真福寺蔵本（1235（文暦2）、書写者不明、他の2文献と共に『天台往生要集』に所収）
写本奥書：1、文暦二年大才己未（1235）七月十六日書了（佐藤哲叡『叡山浄土教の研究』資料編に基づく）
活字本所載書：佐藤哲叡『叡山浄土教の研究』資料編（百

華苑、1979)、福原隆善「叡山における『往生要集』の展開」(『往生要集研究』、永田文昌堂、1987)
参考文献：西村冏紹「『往生要集外典抄』解題」(佐藤哲叡『叡山浄土教の研究』資料編、百華苑、1979、p.260)、佐藤哲叡『叡山浄土教の研究』研究編、百華苑、1979、p.229、大谷旭雄「『往生要集義記』について」(『浄土学』36、1985)、福原隆善「叡山における『往生要集』の展開」(『往生要集研究』、永田文昌堂、1987)
解説：著者は平基親。兵部卿三位基親という。民部卿平親範の息であり、建永1年(1206)に出家する。法然と交流があり、法然の『選択集』の序文は基親作とされる。他に『往生要集勘文』『善導大師画讃』を述す。
成立年次に関しては不明であるが、著者の生存年代からして鎌倉前期頃の成立と思われる。
『往生要集』所載の用語を29箇選出し、それと関連する外典(『文選』『史記』等20数部)の当該箇所を集録している。『往生要集』に引用された外典の典拠を示すのではなく、引用経典や地の文の用語に対応する外典を選出しているのが特色といえる。よって『往生要集』の内容自体に言及するものではないが、基親の関心や、学識の深さ、手にしていた漢籍など当時の学問状況の一面を窺うことが出来きる貴重な資料である。
本書は『往生要集勘文』断簡・『往生要集遺宋消息文』2通と共に真福寺蔵『天台往生要集』(仮題、前部欠)に所収される。その中で本書は第2番目に所収されており、かつては良忠『往生要集義記』に引用される逸文から内容が推測される程度であったが、この写本の発見により完本で確認できるようになった。なお『往生要集義記』における本書の引用は『浄全』15、p.289b、p.341aの2箇所に確認できる。
作成者名：南宏信

往生要集釈

書名よみ：おうじょうようしゅうしゃく
異本書名：往生要集鈔
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133(長承2)-1212(建暦2)
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本(1220(承久2)、書写者不明)
2、金沢文庫蔵本(13c半ば、良聖書写)
3、千葉善照寺蔵本(江戸後期、書写者不明、『漢語灯録』)
4、大谷大蔵本(江戸後期、書写者不明、『漢語灯録』)
写本奥書：1、(奥書なし)
2、承久二年(1220)六月十二日於越後国府為往生極楽拭汗書了
3、応永八年<辛巳>(1401)卯月二十八日根本書写人専覧御房至十二丁目書写其奥残已遂往生畢故依相伝人誂令続筆畢、右筆賢照、右此録者古本従来迎寺令恩借奉書写之矣願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界必披見之貴奉仰十念回向者也、于時明応元年(1492)十二月一日、南無阿弥陀仏、円定和尚、此一巻紙三十九張、此巻書写元禄七年戊(1694)極月九日之夜功畢、根本和州三輪之、本書写之後以二尊院之蔵本校合之、今写本良照和尚本也、墨付三十九丁、主恵空得岸、凡漢語前集十巻拾遺一巻也得前集十巻闕拾遺一巻尤所哀也後学願尋求而補書令全矣
4、応永八年<辛巳>(1401)卯月二十八日根本書写人専覧御房至十二丁目書写其奥残已遂往生畢故依相伝人誂令続筆畢、右筆賢照、右此録者古本従来迎寺令恩借奉書写之矣願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界必披見之貴奉仰十念回向者也、于時明応元年(1492)十二月一日、南無阿弥陀仏、円定和尚、此巻書写元禄七年戊(1694)極月九日之夜功畢、根本ハ和州三輪之、本書写之後以二尊院之蔵本校合之、今写本ハ良照和尚ノ本也、墨付三十九丁、主恵空得岸、凡漢語前集十巻拾遺一巻也、今得前集十巻闕拾遺一巻尤所哀也後学願尋求而補書令全矣
刊本所在：1、天明1(1781、仏教大、書名は『往生要集釈並同詮要』)
刊本の奥書刊記：安永九年庚子(1780)五月十三日於京都小川西福寺借恵空所写本校　天明元年辛丑(1781)五月梓行
活字本所載書：上杉文秀『往生要集釈・往生要集詮要』(法蔵館、1916)、江藤澂英『古本漢語灯録』(中外出版、1924)、石井教道『昭法全』(平楽寺書店、1955)、『金沢文庫資料全書』4(金沢県立金沢文庫、1974)、大橋俊雄『法然全集』1(春秋社、1989)
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』1(春秋社、1989)、本庄良文「古本漢語灯録所収『往生要集釈』訳注」(『浄土学仏教学論叢』所収、山喜房、2004)。曽根宣雄訳注『往生要集詮要　往生要集釈　傍訳』(四季社、2004)
参考文献：前期説
石井教道『昭法全』序文(平楽寺書店、1955)、同「元祖教学の思想史的研究―特に念仏思想と門下の動向について―」(『浄土学』25、1957)、藤堂恭俊「浄土開宗への一歴程―源信より善導へ―」(香月乗光編『浄土宗開創期の研究　思想と歴史』1970)、同「浄土宗開創期前後における法然の課題」(同著『法然上人研究一』山喜房、1983)、大橋俊雄「法然における専修念仏の形成」(『法然・一遍　日本思想大系』岩波書店、1971)、同「法然上人の叡山修学に就いて」(『浄土学』26、1958)、梶村昇「『私聚百因縁集』研究―浄土宗立教開宗問題をめぐって―」(『法然仏教の研究』1975)、同「法然上人の『往生要集』観と偏依善導―醍醐本法然上人伝記研究一―」(『浄土宗学研究』12、1980)、福原隆善「法然の『往生要集』諸釈書について」(『仏教論叢』23、1979)、伊藤唯真「法然の回心と「浄土宗」の開立」(同著『浄土宗の成立と展開』吉川弘文館、1981)
後期説
阿川貫達「元祖の著及法語に現れたる恵心先徳」(『浄土学』13、1938)、赤松俊秀「源空について」(同著『続・鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、1966)、石田充之「法然上人の著作法語」(『選択集研究序説』百華苑、1976)、八木昊恵『恵心教学の基礎的研究』(永田文昌堂、1977)、坪井俊映「法然の往生要集に関する四釈書の考察―一向専修批判の弁述書として―」(『仏教大学人文学論集』11、1977)、同「法然の『往生要集』観」(同著『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』隆文館、1982)
諸釈書順次成立説
末木文美士「源空の『往生要集』釈書―その撰述前後をめぐって―」(『印度学仏教学研究』24-1、1975)、同「初期源空の文献と思想―『往生要集』釈書を中心に―」(『南都仏教』37、1976)、服部正隠「法然上人の『往生要集』観」(『東海学園女子短期大学紀要』17、1982)、同「法然の『要集』末疏成立に関して」(『東海学園女子短期大学紀要』18、1983)、同「法然上人の『往生要集』観(2)―『要集』の正意に関して」(『宗教文化の諸相』山喜房仏書林、1984)、同「法然上人の『往生要集』観(3)―詮要、料簡、略料

簡―」(『東海仏教』29、1984)、同「法然の『往生要集』末疏成立年次について」(『浄土教論集』、1987)、嶋田法宣「往生要集四釈書の研究」(『宗学院論集』58、1986)、林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究」(『印度学仏教学研究』44-1、1995)、同「法然上人『往生要集詮要』の研究―特に往生階位釈について―」(『仏教論叢』40、1996、同「法然上人『往生要集』四釈書の研究―助念方法門、惣結要行をめぐって―」(『法然上人研究』5、1996)、同「法然上人『往生要集』釈書撰述についての一考察」(『仏教文化学会紀要』4・5合併号、1996)、南宏信「法然『往生要集釈』諸釈書の六義について」(『仏教大学大学院紀要』34、2006)、同「『往生要集釈』の構成について」(『仏教大学大学院紀要』35、2007)

解説：著者は法然房源空。

成立年代に関しては、著者の生存年代から12cなか頃から13cはじめ頃の成立である。本書は古本『黒谷上人語灯録(漢語)』(以下『漢語灯録』)に『往生要集料簡』『往生要集略料簡』『往生要集詮要』と共に収録される。これら諸釈書は法然の他の著作、つまり『選択集』『逆修説法』「東大寺講説」のどこに位置付けるかが問題とされてきた。「東大寺講説」前後に位置付ける立場(前期説)、『選択集』成立前後に位置付ける立場(後期説)がある。更には諸釈書中の成立順序を論じるようになる。諸説あるが、一概に前期説・後期説といっても、近年の文献学的研究の成果以前の研究も混在しているので注意が必要である。例えば『漢語灯録』の古本・新本の区別、また「東大寺講説」の古層・新層の区別が認識されているかどうかで、それぞれの説の中でも結論を導出する過程が違う。また諸釈書中の成立順序を論じても、それぞれの釈書が他の法然文献のどこに位置付けられるかは殆んど論じられていないし、論じていたとしても決定的な見解にまでは至っていない。

本書は源信『往生要集』の注釈書である。『往生要集』は大文第一厭離穢土門、大文第二欣求浄土門、大文第三極楽証拠門、大文第四正修念仏門、大文第五助念方法門、大文第六別時念仏門、大文第七念仏利益門、大文第八念仏証拠門、大文第九往生諸行門、大文第十問答料簡から構成されている。本書は前半を「大意」「釈名」「入文解釈」で説明する。後半を「広」「略」「要」で説明する。構成は以下の通り。(1)大意。(2)釈名。「往生」「要」「集」に分けて解説する。(3)入文解釈。「三段分別」で序文、正宗分、流通分に分ける。「章門開合」で十門(開)を五門(合)にまとめ、その中でも正修念仏門を選ぶ。(4)広釈。十門の科段を説明する。(5)略釈。大文第五助念方法門の末文である惣結要行を説明し、称念を取る。(6)略釈再説。同様の説明を詳述した後、助念を『往生要集』の正意とする。(7)要釈。大文第四正修念仏門、大文第八念仏証拠門を説明し、十経六義を讃じる。(8)往生階位。大文第十問答料簡門の『安楽集』『往生礼讃』を説明する。

(5)は『往生要集略料簡』に収録され、(6)は『往生要集料簡』と『往生要集詮要』末尾に見られる。(6)は後人の加筆であると指摘されている。本書は『往生要集料簡』と『往生要集略料簡』とのほぼ全文を包含する。他の諸釈書と違い、古本『漢語灯録』以外に唯一単独で写本が現存し、金沢文庫に二種の写本が確認できる。本書は新本『漢語灯録』において二分され、前半を『往生要集大綱』、後半を『往生要集略料簡』と題して収録する。

作成者名：南宏信

往生要集鈔

書名よみ：おうじょうようしゅうしょう
書名別名：往生要集抄
異本書名：往生要集義記、往生要集記
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
巻数：8
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、尊経閣文庫蔵本(1363(貞治2)、行阿他書写)
2、仏教大蔵本(書写年不明、書写者不明巻4零本)
3、叡山文庫蔵本(1635(寛永12)、良雄書写、寛永3年版の写し)
4、竜谷大蔵本(1924(大正13)書写者不明、寛永3年版の写し)
5、竜谷大蔵本(未調査、所蔵目録所載、所在不明)
写本奥書：1、(各巻端書)恵教／八帖之内／相傳隆益(以下、見せ消ち)、仙通、西尊院
(巻8奥書)本云、此集奥書事、依憑誌記上中下〈真源法橋付所引註論一々検其文各々注其巻〉行年三十七、裏書上下少々本説等検之未知誰人作、疑問澄憲法印作、付此疑問有明禅法印答并住心房答、惣結要行料簡并要集釈各一帖祖師上人作、石見覚什僧都抄、勘文六帖平基親卿、同人往生要集外典抄一帖、妙香院抄三帖／此抄引載上具書等約束様、依云依憑記、裏云裏書、料簡云祖師、疑問云前安居院作、毘云明禅答、泉云覚什僧都抄、勘云勘文、外云外典抄、妙云妙香院抄、已上数帖之披閲依有煩此等之抄物抽要類聚于此私抄〈云々〉／奉　施入不断念佛所江州奥野保内西尊院也、若有借用之事者二ヶ月之中可被返本所之旨就借人之状可出之而為末代伝、恐紛失所記也、為明証四天護法敢勿忽緒矣、貞治二年(1363)三月二日書写之畢、願主行阿(「奉施入」以下、ほぼ同文で各巻にあり)
2、(奥書なし)
3、寛永十二年(1635)
4、原本坂本文庫所蔵、大正十三年五月
5、(未調査)
刊本所在：1、寛永3(1626、西教寺正教蔵・成簀堂文庫・竜谷大・大谷大・仏教大(巻下第1・巻中第2のみ合1冊)、古活字版、内題「往生要集抄」)
2、寛永5(1628、京都大・岡崎市浄珠院、古活字版、内題「往生要集抄」)
3、刊年不明(成簀堂文庫・竜谷大・仏教大、古活字版、内題「往生要集義記」)
4、寛永18(1641、仏教大(所在不明)・西尾養寿寺、内題「往生要集義記」、書肆「理兵衛」)
5、寛永18(1641、竜谷大(3部)・仏教大・大谷大・大正大・早稲田大・種智院大、内題「往生要集義記」、書肆「吉田四郎右衛門」)
6、元治1(1864、大正大・仏教大・大谷大、内題「往生要集義記」)
刊本の奥書刊記：1、于時寛永三年〈丙寅〉暦(1626)閏四月吉日刊摺之畢
2、于時寛永五年〈戊辰〉暦(1628)二月吉日刊摺之畢、五条因幡堂大堀侍抜町清吉
3、(刊記なし)
4、寛永辛巳(1641)仲冬日、書舎理兵衛
5、寛永辛巳(1641)仲冬日、書舎　椹木町吉田四郎右衛門
6、元治元年(1864)
活字本所載書：『浄全』15(底本は元治版)
現代語訳書：本庄良文「『往生要集義記』―読み下しと現代語訳―」(『浄土宗学研究』21-31、『仏教文化研究』)

参考文献：大谷旭雄「『往生要集義記』について」(『浄土学』36)、福原隆善「叡山における『往生要集』の受容と展開」(『印仏研』52、1978)、藤堂祐範『浄土教古活字版図録』(貴重図書影本刊行会、1934)
解説：源信『往生要集』の注釈書。中世成立の『往生要集』注釈書は散佚したものが多いが、それらを豊富に引用して訓詁解釈を施す本書は、『往生要集』注釈の集大成的な著作といえる。成立年代は不明だが、本書の中に多くの自著を挙げて参照を促しているため、良忠の最晩年の著作であると考えられる。
本書の伝本は、書名の「鈔」と「義記」という二種の表記で大きく二系統に区別される。現存するすべての写本や成立の早い版本は「鈔」であり、一方、寛永年間に出版されたと推測される無刊記古活字版以降はすべて「義記」と名付けられている。内容的にも「義記」は比較的素朴な「鈔」の本文を加筆修正したものと見られ、良忠の著作としては「鈔」に拠るべきである。しかし「義記」の加筆は教学的に非常に高度なもので、科段や注釈・問答の追加など、倶舎学を背景とした高い学問水準が垣間見られる。
伝本の中では、良忠没後100年を待たず成立している尊経閣文庫蔵写本と、それに前後する成立と見られる仏教大蔵の巻4零写本は特に注目される。また寛永3年(1626)版および同5年(1628)版は、古活字による訓点が付されている点で、浄土教古活字版の中でも稀有な存在である。「義記」系統の中では、異本注記や詳細な出典考証などを頭注に付した元治版は、幕末の増上寺学寮の総力を挙げた研究成果として特筆される。
作成者名：稲田廣演

往生要集詮要

書名よみ：おうじょうようしゅうせんよう
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133(長承2)-1212(建暦2)
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、千葉善照寺蔵本(江戸後期、書写者不明、『漢語灯録』)
2、大谷大蔵本(江戸後期、書写者不明、『漢語灯録』)
写本奥書：1、応永八年＜辛巳＞(1401)卯月ニ十八日根本書写人専覧御房至十ニ丁目書写其奥残已遂往生畢故依相伝人誂令続筆畢、右筆賢照、右此録者古本従来迎寺令恩借奉書写之矣願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界必披見之貴奉仰十念回向者也、于時明応元年(1492)十二月一日、南無阿弥陀仏、円定和尚、此一巻紙三十九張、此巻書写元禄七年戊(1694)極月九日之夜功畢、根本和州三輪之、本書写之後以二尊院之蔵本校合之、今写本良照和尚本也、墨付三十九丁、主恵空得岸、凡漢語前集十巻拾遺一巻也得前集十巻闕拾遺一巻尤所哀也後学願尋求而補書令全矣
2、応永八年＜辛巳＞(1401)卯月ニ十八日根本書写人専覧御房至十ニ丁目書写其奥残已遂往生畢故依相伝人誂令続筆畢、右筆賢照、右此録者古本従来迎寺令恩借奉書写之矣願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界必披見之貴奉仰十念回向者也、于時明応元年(1492)十二月一日、南無阿弥陀仏、円定和尚、此巻書写元禄七年戊(1694)極月九日之夜功畢、根本ハ和州三輪之、本書写之後以二尊院之蔵本校合之、今写本ハ良照和尚ノ本也、墨付三十九丁、主恵空得岸、凡漢語前集十巻拾遺一巻也、今得前集十巻闕拾遺一巻尤所哀也後学願尋求而補書令全矣
刊本所在：1、天明1(1781、仏教大、書名は『往生要集釈並同詮要』)
刊本の奥書刊記：1、安永九年庚子(1780)五月十三日於京都小川西福寺借恵空所写本校　天明元年辛丑(1781)五月梓行
活字本所載書：上杉文秀『往生要集釈・往生要集詮要』(法蔵館、1916)、江藤澂英『古本漢語灯録』(中外出版、1924)、石井教道『昭法全』(平楽寺書店、1955)
現代語訳書：『往生要集詮要　往生要集釈　傍訳』(四季社、2004)
参考文献：前期説
石井教道『昭法全』序文(平楽寺書店、1955)、同「元祖教学の思想史的研究―特に念仏思想と門下の動向について―」(『浄土学』25、1957)、藤堂恭俊「浄土開宗への一歴程―源信より善導へ―」(香月乗光編『浄土宗開創期の研究　思想と歴史』1970)、同「浄土宗開創期前後における法然の課題」(同著『法然上人研究一』山喜房、1983)、大橋俊雄「法然における専修念仏の形成」(『法然・一遍　日本思想大系』岩波書店、1971)、同「法然上人の叡山修学に就いて」(『浄土学』26、1958)、梶村昇「『私聚百因縁集』研究―浄土宗立教開宗問題をめぐって―」(『法然仏教の研究』1975)、同「法然上人の『往生要集』観と偏依善導―醍醐本法然上人伝記研究一―」(『浄土宗学研究』12、1980)、福原隆善「法然の『往生要集』諸釈書について」(『仏教論叢』23、1979)、伊藤唯真「法然の回心と「浄土宗」の開立」(同著『浄土宗の成立と展開』吉川弘文館、1981)
後期説
阿川貫達「元祖の著及法語に現れたる恵心先徳」(『浄土学』13、1938)、赤松俊秀「源空について」(同著『続・鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、1966)、石田充之「法然上人の著作法語」(『選択集研究序説』百華苑、1976)、八木昊恵『恵心教学の基礎的研究』(永田文昌堂、1977)、坪井俊映「法然の往生要集に関する四釈書の考察―一向専修批判の弁述書として―」(『仏教大学人文学論集』11、1977)、同「法然の『往生要集』観」(同著『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』隆文館、1982)
諸釈書順次成立説
末木文美士「源空の『往生要集』釈書―その撰述前後をめぐって―」(『印度学仏教学研究』24-1、1975)、同「初期源空の文献と思想―『往生要集』釈書を中心に―」(『南都仏教』37、1976)、服部正隠「法然上人の『往生要集』観」(『東海学園女子短期大学紀要』17、1982)、同「法然の『要集』末疏成立に関して」(『東海学園女子短期大学紀要』18、1983)、同「法然上人の『往生要集』観(2)―『要集』の正意に関して」(『宗教文化の諸相』山喜房仏書林、1984)、同「法然上人の『往生要集』観(3)―詮要、料簡、略料簡―」(『東海仏教』29、1984)、同「法然の『往生要集』末疏成立年次について」(『浄土教論集』、1987)、嶋田法宣「往生要集四釈書の研究」(『宗学院論集』58、1986)、林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究」(『印度学仏教学研究』44-1、1995)、同「法然上人『往生要集詮要』の研究―特に往生階位釈について―」(『仏教論叢』40、1996、同「法然上人『往生要集』四釈書の研究―助念方法門、惣結要行をめぐって―」(『法然上人研究』5、1996)、同「法然上人『往生要集』釈書撰述についての一考察」(『仏教文化学会紀要』4・5合併号、1996)、南宏信「法然『往生要集釈』諸釈書の六義について」(『仏教大学大学院紀要』34、2006)、同「『往生要集釈』の構成について」(『仏教大

学大学院紀要』35、2007）
解説：著者は法然房源空。
　成立年代に関しては、著者の生存年代から12cなか頃から13cはじめ頃の成立である。本書は古本『黒谷上人語灯録（漢語）』（以下『漢語灯録』）に『往生要集釈』『往生要集料簡』『往生要集略料簡』と共に収録される。これら諸釈書は法然の他の著作、つまり『選択集』『逆修説法』「東大寺講説」のどこに位置付けるかが問題とされてきた。「東大寺講説」前後に位置付ける立場（前期説）、『選択集』成立前後に位置付ける立場（後期説）がある。更には諸釈書中の成立順序を論じるようになる。諸説あるが、一概に前期説・後期説といっても、近年の文献学的研究の成果以前の研究も混在しているので注意が必要である。例えば『漢語灯録』の古本・新本の区別、また「東大寺講説」の古層・新層の区別が認識されているかどうかで、それぞれの説の中でも結論を導出する過程が違う。また諸釈書中の成立順序を論じても、それぞれの釈書が他の法然文献のどこに位置付けられるかは殆んど論じられていないし、論じていたとしても決定的な見解にまでは至っていない。
　源信『往生要集』の注釈書である。『往生要集』は大文第一厭離穢土門、大文第二欣求浄土門、大文第三極楽証拠門、大文第四正修念仏門、大文第五助念方法門、大文第六別時念仏門、大文第七念仏利益門、大文第八念仏証拠門、大文第九往生諸行門、大文第十問答料簡から構成されている。
本書の構成は以下の通り。
　(1)『往生要集』の十門の名称を明かす。(2)「章門開合」で十門（開）を五門（合）にする。(3) 五門の組織とその要不要を分別し、念仏往生門（第四門から八門）を要とする。(4) 念仏往生門の中、大文第四正修念仏門を要とする。(5) 正修念仏門の中に説く五念門の中、観察門を要とし、更にその中でも称念を要とする。(6) 大文第八念仏証拠門において、十経六義（相対）を説明し、念仏を讃じる。(7)『往生礼讃』の往生階位（大文第十問答料簡門）を説明し、専修を勧める。(8) 惣結要行釈（大文第五助念方法門の末尾の文）を説明し、助念仏を決定往生業として結ぶ。
　本書は、称念を勧めながらも、最後の（8）では助念仏を勧めているなど内容的に矛盾している。他の諸釈書とも比較し、その形式的な面からも（8）は、後人の加筆であると指摘されている。内容が類似していながらも、『往生要集』に対する念仏理解が錯綜している箇所もあり、注意が必要である。
作成者名：南宏信

往生要集略料簡

書名よみ：おうじょうようしゅうりゃくりょうけん
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、千葉善照寺蔵本（江戸後期、書写者不明、『漢語灯録』）
2、大谷大蔵本（江戸後期、書写者不明、『漢語灯録』）
写本奥書：1、応永八年＜辛巳＞（1401）卯月ニ十八日根本書写人専覧御房至十ニ丁目書写其奥残已遂往生畢故依相伝人誂令続筆畢、右筆賢照、右此録者古本従来迎寺令恩借奉書写之矣願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界必披見之貴奉仰十念回向者也、于時明応元年（1492）十二月一日、南無阿弥陀仏、円定和尚、此一巻紙三十九張、此巻書写元禄七年戌（1694）極月九日之夜功畢、根本和州三輪之、本書写之後以二尊院之蔵本校合之、今写本良照和尚本也、墨付三十九丁、主恵空得岸、凡漢語前集十巻拾遺一巻也得前集十巻闕拾遺一巻尤所哀也後学願尋求而補書令全矣
2、応永八年＜辛巳＞（1401）卯月ニ十八日根本書写人専覧御房至十ニ丁目書写其奥残已遂往生畢故依相伝人誂令続筆畢、右筆賢照、右此録者古本従来迎寺令恩借奉書写之矣願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界必披見之貴奉仰十念回向者也、于時明応元年（1492）十二月一日、南無阿弥陀仏、円定和尚、此巻書写元禄七年戌（1694）極月九日之夜功畢、根本ハ和州三輪之、本書写之後以二尊院之蔵本校合之、今写本ハ良照和尚ノ本也、墨付三十九丁、主恵空得岸、凡漢語前集十巻拾遺一巻也、今得前集十巻闕拾遺一巻尤所哀也後学願尋求而補書令全矣
活字本所載書：江藤澂英『古本漢語灯録』（中外出版、1924）、石井教道『昭法全』（平楽寺書店、1955）
参考文献：前期説
石井教道『昭法全』序文（平楽寺書店、1955）、同「元祖教学の思想史的研究―特に念仏思想と門下の動向について―」（『浄土学』25、1957）、藤堂恭俊「浄土開宗への一歴程―源信より善導へ―」（香月乗光編『浄土宗開創期の研究　思想と歴史』1970）、同「浄土宗開創期前後における法然の課題」（同著『法然上人研究一』山喜房、1983）、大橋俊雄「法然における専修念仏の形成」（『法然・一遍　日本思想大系』岩波書店、1971）、同「法然上人の叡山修学に就いて」（『浄土学』26、1958）、梶村昇「『私聚百因縁集』研究―浄土宗立教開宗問題をめぐって―」（『法然仏教の研究』1975）、同「法然上人の『往生要集』観と偏依善導―醍醐本法然上人伝記研究一―」（『浄土宗学研究』12、1980）、福原隆善「法然の『往生要集』諸釈書について」（『仏教論叢』23、1979）、伊藤唯真「法然の回心と「浄土宗」の開立」（同著『浄土宗の成立と展開』吉川弘文館、1981）
後期説
阿川貫達「元祖の著及法語に現れたる恵心先徳」（『浄土学』13、1938）、赤松俊秀「源空について」（同著『続・鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、1966）、石田充之「法然上人の著作法語」（『選択集研究序説』百華苑、1976）、八木昊恵『恵心教学の基礎的研究』（永田文昌堂、1977）、坪井俊映「法然の往生要集に関する四釈書の考察―一向専修批判の弁述書として―」（『仏教大学人文学論集』11、1977）、同「法然の『往生要集』観」（同著『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』隆文館、1982）
諸釈書順次成立説
末木文美士「源空の『往生要集』釈書―その撰述前後をめぐって―」（『印度学仏教学研究』24-1、1975）、同「初期源空の文献と思想―『往生要集』釈書を中心に―」（『南都仏教』37、1976）、服部正隠「法然上人の『往生要集』観」（『東海学園女子短期大学紀要』17、1982）、同「法然の『要集』末疏成立に関して」（『東海学園女子短期大学紀要』18、1983）、同「法然上人の『往生要集』観（2）―『要集』の正意に関して」（『宗教文化の諸相』山喜房仏書林、1984）、同「法然上人の『往生要集』観（3）―詮要、料簡、略料簡―」（『東海仏教』29、1984）、同「法然の『往生要集』末疏成立年次について」（『浄土教論集』、1987）、嶋田法宣「往生要集四釈書の研究」（『宗学院論集』58、1986）、林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究」（『印度学仏教学研究』44-1、1995）、同「法然上人『往生要集詮要』の研究―特に往生階位釈について―」（『仏教論叢』40、

1996、同「法然上人『往生要集』四釈書の研究―助念方法門、惣結要行をめぐって―」(『法然上人研究』5、1996)、同「法然上人『往生要集』釈書撰述についての一考察」(『仏教文化学会紀要』4・5合併号、1996)、南宏信「法然『往生要集釈』諸釈書の六義について」(『仏教大学大学院紀要』34、2006)、同「『往生要集釈』の構成について」(『仏教大学大学院紀要』35、2007)

解説：著者は法然房源空。

成立年代に関しては、著者の生存年代から12cなか頃から13cはじめ頃の成立である。本書は古本『黒谷上人語灯録(漢語)』(以下『漢語灯録』)に『往生要集釈』『往生要集料簡』『往生要集詮要』と共に収録される。これら諸釈書は法然の他の著作、つまり『選択集』『逆修説法』「東大寺講説」のどこに位置付けるかが問題とされてきた。「東大寺講説」前後に位置付ける立場(前期説)、『選択集』成立前後に位置付ける立場(後期説)がある。更には諸釈書中の成立順序を論じるようになる。諸説あるが、一概に前期説・後期説といっても、近年の文献学的研究の成果以前の研究も混在しているので注意が必要である。例えば『漢語灯録』の古本・新本の区別、また「東大寺講説」の古層・新層の区別が認識されているかどうかで、それぞれの説の中でも結論を導出する過程が違う。また諸釈書中の成立順序を論じても、それぞれの釈書が他の法然文献のどこに位置付けられるかは殆んど論じられていないし、論じていたとしても決定的な見解にまでは至っていない。

源信『往生要集』の注釈書である。『往生要集』は大文第一厭離穢土門、大文第二欣求浄土門、大文第三極楽証拠門、大文第四正修念仏門、大文第五助念方法門、大文第六別時念仏門、大文第七念仏利益門、大文第八念仏証拠門、大文第九往生諸行門、大文第十問答料簡から構成されている。

本書の構成は以下の通り。(1) 念仏の一門を勧める。(2) 念仏を往生の要とする。(3) 大文第五助念方法門の惣結要行を説明する。(4) 六義(大文第八念仏証拠門を説明する)。(5) 往生階位の文を説明する。

本書は『往生要集料簡』とほぼ同一であるが、(3) の惣結要行の要・不要についての意見に矛盾がみられる。また『往生要集釈』とほぼ内容が重複する。そのためか、新本『漢語灯録』では収録されない。他の諸釈書と内容が類似していながらも、『往生要集』に対する念仏理解が錯綜している箇所もあり、他の諸釈諸と合わせて注意が必要である。

作成者名：南宏信

往生要集料簡

書名よみ：おうじょうようしゅうりょうけん
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133(長承2)-1212(建暦2)
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、千葉善照寺蔵本(江戸後期、書写者不明、『漢語灯録』)
2、大谷大蔵本(江戸後期、書写者不明、『漢語灯録』)
写本奥書：1、応永八年＜辛巳＞(1401)卯月ニ十八日根本書写人専覧御房至十ニ丁目書写其奥残已遂往生畢故依相伝人誂令続筆畢、右筆賢照、右此録者古本従来迎寺令恩借奉書写之矣願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界必披見之貴奉仰十念回向者也、于時明応元年(1492)十二月一日、南無阿弥陀仏、円定和尚、此一巻紙三十九張、此巻書写元禄七年戌(1694)極月九日之夜功畢、根本和州三輪之、本書写之後以二尊院之蔵本校合之、今写本良照和尚本也、墨付三十九丁、主恵空得岸、凡漢語前集十巻拾遺一巻也得前集十巻闕拾遺一巻尤所哀也後学願尋求而補書令全矣
2、応永八年＜辛巳＞(1401)卯月ニ十八日根本書写人専覧御房至十ニ丁目書写其奥残已遂往生畢故依相伝人誂令続筆畢、右筆賢照、右此録者古本従来迎寺令恩借奉書写之矣願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界必披見之貴奉仰十念回向者也、于時明応元年(1492)十二月一日、南無阿弥陀仏、円定和尚、此巻書写元禄七年戌(1694)極月九日之夜功畢、根本ハ和州三輪之、本書写之後以二尊院之蔵本校合之、今写本ハ良照和尚ノ本也、墨付三十九丁、主恵空得岸、凡漢語前集十巻拾遺一巻也、今得前集十巻闕拾遺一巻尤所哀也後学願尋求而補書令全矣
活字本所載書：江藤澂英『古本漢語灯録』(中外出版、1924)、石井教道『昭法全』(平楽寺書店、1955)
参考文献：前期説
石井教道『昭法全』序文(平楽寺書店、1955)、同「元祖教学の思想史的研究―特に念仏思想と門下の動向について―」(『浄土学』25、1957)、藤堂恭俊「浄土開宗への一歴程―源信より善導へ―」(香月乗光編『浄土宗開創期の研究　思想と歴史』1970)、同「浄土宗開創期前後における法然の課題」(同著『法然上人研究一』山喜房、1983)、大橋俊雄「法然における専修念仏の形成」(『法然・一遍　日本思想大系』岩波書店、1971)、同「法然上人の叡山修学に就いて」(『浄土学』26、1958)、梶村昇「『私聚百因縁集』研究―浄土宗立教開宗問題をめぐって―」(『法然仏教の研究』1975)、同「法然上人の『往生要集』観と偏依善導―醍醐本法然上人伝記研究一―」(『浄土宗学研究』12、1980)、福原隆善「法然の『往生要集』諸釈書について」(『仏教論叢』23、1979)、伊藤唯真「法然の回心と「浄土宗」の開立」(同著『浄土宗の成立と展開』吉川弘文館、1981)
後期説
阿川貫達「元祖の著及法語に現れたる恵心先徳」(『浄土学』13、1938)、赤松俊秀「源空について」(同著『続・鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、1966)、石田充之「法然上人の著作法語」(『選択集研究序説』百華苑、1976)、八木昊恵『恵心教学の基礎的研究』(永田文昌堂、1977)、坪井俊映「法然の往生要集に関する四釈書の考察―一向専修批判の弁述書として―」(『仏教大学人文学論集』11、1977)、同「法然の『往生要集』観」(同著『法然浄土教の研究―伝統と自証について―』隆文館、1982)
諸釈書順次成立説
末木文美士「源空の『往生要集』釈書―その撰述前後をめぐって―」(『印度学仏教学研究』24-1、1975)、同「初期源空の文献と思想―『往生要集』釈書を中心に―」(『南都仏教』37、1976)、服部正隠「法然上人の『往生要集』観」(『東海学園女子短期大学紀要』17、1982)、同「法然の『要集』末疏成立に関して」(『東海学園女子短期大学紀要』18、1983)、同「法然上人の『往生要集』観(2)―『要集』の正意に関して」(『宗教文化の諸相』山喜房仏書林、1984)、同「法然上人の『往生要集』観(3)―詮要、料簡、略料簡―」(『東海仏教』29、1984)、同「法然の『往生要集』末疏成立年次について」(『浄土教論集』、1987)、嶋田法宣「往生要集四釈書の研究」(『宗学院論集』58、1986)、林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究」(『印度学仏教学研究』44-1、1995)、同「法然上人『往生要集詮要』の研究―特に往生階位釈について―」(『仏教論叢』40、1996、同「法然上人『往生要集』四釈書の研究―助念方法

門、惣結要行をめぐって―」(『法然上人研究』5、1996)、同「法然上人『往生要集』釈書撰述についての一考察」(『仏教文化学会紀要』4・5合併号、1996)、南宏信「法然『往生要集釈』諸釈書の六義について」(『仏教大学大学院紀要』34、2006)、同「『往生要集釈』の構成について」(『仏教大学大学院紀要』35、2007)
解説：著者は法然房源空。
　成立年代に関しては、著者の生存年代から12cなか頃から13cはじめ頃の成立である。本書は古本『黒谷上人語灯録（漢語)』(以下『漢語灯録』）に『往生要集釈』『往生要集略料簡』『往生要集詮要』と共に収録される。これら諸釈書は法然の他の著作、つまり『選択集』『逆修説法』「東大寺講説」のどこに位置付けるかが問題とされてきた。「東大寺講説」前後に位置付ける立場（前期説)、『選択集』成立前後に位置付ける立場（後期説）がある。更には諸釈書中の成立順序を論じるようになる。諸説あるが、一概に前期説・後期説といっても、近年の文献学的研究の成果以前の研究も混在しているので注意が必要である。例えば『漢語灯録』の古本・新本の区別、また「東大寺講説」の古層・新層の区別が認識されているかどうかで、それぞれの説の中でも結論を導出する過程が違う。また諸釈書中の成立順序を論じても、それぞれの釈書が他の法然文献のどこに位置付けられるかは殆んど論じられていないし、論じていたとしても決定的な見解にまでは至っていない。
源信『往生要集』の注釈書である。『往生要集』は大文第一厭離穢土門、大文第二欣求浄土門、大文第三極楽証拠門、大文第四正修念仏門、大文第五助念方法門、大文第六別時念仏門、大文第七念仏利益門、大文第八念仏証拠門、大文第九往生諸行門、大文第十問答料簡から構成されている。
　本書の構成は以下の通り。(1) 念仏の一門を勧める。(2) 念仏を往生の要とする。(3) 大文第五助念方法門の惣結要行を説明する。(4) 六義（大文第八念仏証拠門を説明する)。(5) 往生階位の文を説明する。(6) 末尾の文。
　本書は『往生要集略料簡』とほぼ同一であるが、(3) の惣結要行の要・不要についての意見に矛盾がみられる。また『往生要集釈』とほぼ内容が重複する。そのためか、新本『漢語灯録』では収録されない。他の諸釈書と内容が類似していながらも、『往生要集』に対する念仏理解が錯綜している箇所もあり、他の諸釈諸と合わせて注意が必要である。
作成者名：南宏信

往生礼讃見聞

書名よみ：おうじょうらいさんけんもん
書名別名：往生礼讃偈見聞、礼讃見聞
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：13c後半-14c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1)、『浄土真宗教典志』(『日仏全』1)、『蓮門類聚経籍録』上（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。『長西録』『浄土真宗教典志』『蓮門類聚経籍録』などに書籍名がみられる。
作成者名：伊藤茂樹

往生礼讃私記

書名よみ：おうじょうらいさんしき
書名別名：往生礼讃偈私記、往生礼讃記、礼讃私記、礼讃記
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿弥陀仏、然阿、記主禅師
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1276（建治2）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、宝永6（1709、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、(未調査）
活字本所載書：『浄全』4
参考文献：服部英淳「善導大師の行儀分とその註書」(『浄土宗全書』4巻付録）
解説：著者の良忠は浄土宗の第三祖であり、関東を中心として浄土宗教団の発展に尽力した。著作活動も精力的であり後に記主禅師とも称された。
　本書は善導の『往生礼讃』の注書である。全体を顕瑞・釈名・分文の3段に分類した上でそれぞれ注釈を加えている。顕瑞では、中国浄土五祖の少康が洛陽の白馬寺において光を放つ善導の「西方化導文」を見出し、これを智昇が一切経中に加えたこと、そしてそれが『往生礼讃偈』であると想定し、釈名では「往生礼讃偈一巻」の題号を解説し、分文では『往生礼讃』を4段に分けて随文解釈する。良忠の著作中に教証として引かれる典籍は、浄土教典にとどまらず、広く内典と外典が散見される。これはその博識を示すものではあるが、浄土宗学を仏教思想の中にいかに位置づけられるかという試みであり、良忠教学の大きな特色となっている。本書にも『華厳経』『大般若経』『遺教経』や『倶舎論』『大智度論』『大乗起信論』などが教証に供されており、広範な視点から中国浄土教礼讃儀礼を明かそうとしている。
　なお現行本は良仰によって宝永年間（1704-1711）ごろに校訂が加えられている。
作成者名：斉藤隆信

往生礼讃前料簡

書名よみ：おうじょうらいさんぜんりょうけん
書名別名：礼讃前料簡
著者名：長西
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：聖冏『心具決定往生義』(『浄全』12、pp.798-799、逸文あり）
参考文献：石橋誠道『九品寺流長西教義の研究』(国書刊行会、再刊1984)、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』下（大東出版社、1977）
解説：聖冏『心具決定往生義』(正確には「心具決定往生義追加」の部分、応永7年（1400）成立）に、「九品寺の長西聖人、良遍御筆と号する抄これ有り、名けて礼讃前料簡と曰う」として引かれる典籍。聖冏所引の逸文は、正雑二行と専雑二修、それに三心の具・不具をめぐる議論である

が、その形式や論法が『観経疏光明抄』などによく似ており、またその所説も『専雑二修義』巻第四での所論と軌を一にしている。

なお、『心具決定往生義』では『往生礼讃前料簡』として引かれているが、あるいは『往生礼讃光明抄』の一部である可能性もある。しかし金沢文庫に現存する『往生礼讃光明抄』は、巻一すなわち前序の釈を欠いているため確認できない。

作成者名：吉田淳雄

往生礼讃問答

書名よみ：おうじょうらいさんもんどう
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：10
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、満性寺蔵本（書写年不明、書写者不明、零本）
写本奥書：1、（未調査）
活字本所載書：稲田廣演「満性寺蔵『往生礼讃問答』ー新出の隆寛遺文ー」（『深草教学』19、1999）
参考文献：稲田廣演「満性寺蔵『往生礼讃問答』解題ー新出の隆寛遺文ー」（『深草教学』19、1999）
解説：『弥陀本願義』の奥書に『観経疏問答』と『礼讃問答』の存在があったことから従来から知られていたが散逸していた。平成9年湯谷祐三の真宗高田派満性寺の典籍調査により発見された。第8巻のみの零本である。『極楽浄土宗義』や『滅罪劫数義』『散善義問答』における華座観を重視する隆寛の解釈が当書にみえ、また『弥陀本願義』の奥書に『礼讃問答』十帖とみえる点から考慮しても隆寛の著述としてよい。現存するのは八巻のみ。

作成者名：伊藤茂樹

往生論五念門行式

書名よみ：おうじょうろんごねんもんぎょうしき
書名別名：念仏式
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：12c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、竜谷大蔵本（1135（長承4）、覚聖書写、書名『念仏式』、重要文化財）
写本奥書：1、長承乙卯歳（1135）暮春丁酉日写也、釈種ビッシュ（署名梵字4字）
活字本所載書：佐藤哲英『念仏式の研究』（百華苑、1972）
参考文献：佐藤哲英「念仏式の作者について」（『竜谷大学論集』353、1956）、佐藤哲英「中ノ川実範の生涯とその浄土教」（『密教文化』71・72、1965）、佐藤哲英『念仏式の研究』（百華苑、1972）、苫米地誠一「実範の阿弥陀観－付、東寺観智院所蔵『観自在王三摩地』翻刻－」（『智山学報』50、2001）
解説：本書は『長西録』にその存在を指摘する記述があるのみで、従来は散逸した文献であるとされてきた。ところが、昭和31年（1956）、佐藤哲英が竜谷大学所蔵の『念仏式』を精査・検討した結果、『往生論五念門行式』に該当すると比定し、その後、昭和42年（1967）に重要文化財の指定も加わり、本書の地位が確定したのである。

竜谷大学蔵『念仏式』は巻子本であるものの、その巻首が欠けている。そのため、首題・撰号及び礼拝門に関する記述が失われていることとなる。しかしながら、その尾題に準じて『念仏式』という書名が付けられるに至っている。

本書の内容は書名に「往生論五念門行式」とあるように、世親『往生論』に説く五念門（礼拝門・讃嘆門・作願門・観察門・回向門）の行式を述べたものである。ちなみに、実範の叡山修学の師とされる明賢には「往生論五念門私行儀」があると『長西録』に紹介がある。その構成は五念門を順に列挙し、各々に関する典拠・解釈を諸経論疏から要文を抜き出し、書き列ねている。引用の数量は39部144にも及ぶ。それらの中でも第4門・観察門に関する叙述は全体の6割を越えるほどの分量を占め、本書の中心でもある。まず『論』の阿弥陀仏・国土・菩薩の3種を観察することを勧める大身観を明かし、続いて不堪の者に対しては、仏の32相を観ずる小身観、更には白毫観を述べている。これらのうち、小身観・白毫観の叙述には『往生要集』第4観察門に説く別相観・雑略観の強い影響が認められ、『要集』が依用した要文を再構成して解釈していることを佐藤は明らかにした。他にも『阿弥陀経』・『往生礼讃』前序などを根拠として、阿弥陀仏の名号を称えることを勧めることや『往生論註』の往還二種回向門への注目などがみられる。

また本書に引用する諸経論疏のうち、『論註』・『往生礼讃』・『観念法門』・『観経疏定善義』の存在、並びに道綽・善導の著述の引用に際して、禅師・和尚という敬称が用いられている点は注意すべきである。特に本書の『論註』の引用は、現存する平安浄土教典籍の中では『安養集』に次ぎ、珍海『決定往生集』に先行するものであり、その点から平安浄土教展開史における本書の位置は貴重だといえる。

なお本書を『念仏式』に比定する見解には、今なお疑義が根強い（末木文美士『日本仏教思想史論考』（大蔵出版、1993）、苫米地誠一「実範の阿弥陀観－付、東寺観智院所蔵『観自在王三摩地』翻刻－」（『智山学報』50、2001））。従って、今後の更なる研究の深化が望まれる。

作成者名：能島覚

往生論註記見聞

書名よみ：おうじょうろんちゅうきけんもん
書名別名：浄土往生論註記見聞、浄土論註記見聞、無量寿経論註記見聞、論註記見聞、註記見聞、酉見
著者名：聖聡
著者名よみ：しょうそう
著者名別名：大蓮社酉誉聖聡、酉師、酉公、聡師
著者生没年：1366（良治5）-1440（永享12）
成立翻訳年：室町期
成立地：日本
巻数：10
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、寛永12（1635、大正大）
2、慶安4（1651、大谷大・京都大・大正大）
刊本の奥書刊記：1、寛永乙亥（1635）孟穐吉日　杉田勘兵衛尉刊行

2、慶安四（1651）辛卯稔十一月吉日　二条通玉屋町村上平楽寺
活字本所載書：『浄全』1
参考文献：今岡達音「解題」（『浄全』21）、森本真順『仏書解説大辞典』、丸山博正「往生論註記見聞」（『聖聰上人典籍研究』、山喜房仏書林、1989）
解説：良忠著『往生論註記』（以下『論註記』）の注釈書であり、その内容から筆者は聖聰とされる。成立年次は未詳であるが、聖冏の『伝通記糅鈔』（1393-1395に成立）が引用されていることから、それ以降の成立であると思われる。
　その構成内容は、第1巻（『論註記』1における『十住毘婆沙論』の教相難行道まで）、第2巻（易行道の途中まで）、第3巻（「婆藪般豆」以下）、第4巻（「性相両宗三性門」以下）、第5巻（『論註記』2の「観察門」以下）、第6巻（「形相功徳」以下）、第7巻（「三種功徳」以下）、第8巻（「衆生世間」以下）、第9巻（『論註記』4の全体）、第10巻（『論註記』5の全体）となる。
　この構成を見ても分かるように、本書では『往生論註』の上巻である偈文解釈に重点が置かれている。
　その解釈において引用されるのは、良忠の書物や、現在は散逸した『鎌倉御抄』（著者は不詳であるが、鎌倉光明寺第3世定恵や同第4世良順作とも擬される）や、「先聞」などと登場する師聖冏の説であり、白旗義の系譜を強く感じさせる。
　特に聖冏からの相伝を重視する姿勢は、他書とも共通する。
作成者名：東海林良昌

往生論註記鈔

書名よみ：おうじょうろんちゅうきしょう
書名別名：論註記鈔
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：13c後半-14c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『浄土鎮流祖伝』2（『浄全』17、p.431）、『新撰往生伝』1（『浄全』17、p.506）
解説：本書は散逸して伝わらない。『新撰往生伝』巻1、『鎮流祖伝』巻2の寂恵良暁伝の中にみえる。『鎮流祖伝』に「為後学筆決疑鈔見聞、論註記鈔等」とあり、『往生論註』関係の註釈書があったようである。但しはやくに散逸したようで、『長西録』や後の目録にはみられない。
作成者名：伊藤茂樹

大胡の太郎実秀か妻室のもとへつかはす御返事

書名よみ：おおごのたろうさねひでがさいしつのもとへつかわすごへんじ
書名別名：大胡太郎の妻室へつかはす御返事
異本書名：法然聖人御消息（外題、内題）、上野大子女房御返事（外題）、上野ノオホコノ女房ノ御返事（内題）、大子女房御返事（尾題）
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：1199（建久10）（？）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（1255（建長7）、真仏書写）〈影印版〉:『影印高田古典』1（真宗高田派宗務院、1996）
2、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
3、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
4、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
写本奥書：1、（第1の旧表紙の袖書）上野大子女房御返事、法然聖人御消息、釈慶信
（第2の旧表紙の袖書）上野大子女房御返事、法然聖人御消息、釈願行
（奥書）建長乙卯（1255）五月二十三日書之
2、『西方指南抄』の項を参照
3、『和語灯録』の項を参照
4、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
刊本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『和語灯録』の項を参照
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『定本法然上人全集』7（山喜房仏書林、1982）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『国文東方仏教叢書』2-4、『西方指南抄』の項を参照、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』3（春秋社、1989）、石丸晶子『法然の手紙』（人文書院、1991）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
参考文献：平松令三「オウゴの女房あて法然上人御消息について」（『高田学報』67、1978）、小山正文「高田専修寺の『法然聖人御消息』をめぐって」（『高田学報』72、1983）、『影印高田古典』1（真宗高田派宗務院、1996）、『西方指南抄』の項を参照、『和語灯録』の項を参照
解説：法然が記したとされる手紙。送り先の相手については、伝承によるに、主に2説ある。大胡太郎実秀の妻宛説と大胡太郎実秀宛説である。また、手紙を届けた遣いの者の名も2説存在し、伝承に問題のある消息といえる。
　本消息は、実秀の妻のものとも伝えられているが、彼女の生没年などの詳しい事跡については不明。ただ、実秀とともに法然に帰依していたという伝承が、『西方指南抄』下本や『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）第25巻に残っている。
　成立年次については、『和語灯録』所収本の註記に「正治元年（1199）」の記述がある。また、『和語灯録』所収本の末尾には、「正月二十八日」とある。しかし、正治1年の記述は『和語灯録』所収本のみで、他本には見られない。また、この月日の時点では、まだ元号は変わっておらず、実際は建久10年である。
　内容について。まず本願について説かれる。第十八願文が引用され、心を尽くして称名するのが念仏であるとし、余行は本願ではないので、念仏には及ばないとする。そして、本願は既に成就されており、称名すれば必ず往生でき

ると説く。
　次に光明摂取。『観経』、善導『往生礼讃』の文を引用しつつ、なぜ念仏行者のみに光明を照らすのかという問いに対して、念仏は本願であるからとする。
　次に念仏付属。『観経』、善導『観経疏』の文を引用しつつ、念仏は阿弥陀仏の本願なので付属されたのであると述べる。往生を求める人は、釈尊が付属した念仏を修し、釈尊の御心に従うべきと説く。
　次に六方諸仏証誠。阿弥陀仏の名号を称えて往生することを、六方の諸仏が真実であると証誠していると説く。そしてそれは念仏は本願だからとする。
　次に三仏同心が説かれている。阿弥陀仏の本願、釈迦の付属、諸仏の護念は虚しくなく、念仏は余行より勝れていると述べる。そして、善導は阿弥陀仏の化身であると指摘している。
　次に専修・雑修の二修である。専修は念仏、雑修は余行であると定義し、そして『往生礼讃』四得十三失の文の一部を引用しつつ、念仏は阿弥陀仏・釈迦の二仏の御心に叶っているが、雑修は二仏の御心に背いていると説いている。
　諸本の中、特に注目されるのは高田専修寺蔵の写本である。この写本は真仏の書写本であるが、願行なる人物の手に渡り、更に後に慶信の手に渡ったものという。なお、本写本の一部には親鸞の筆もあるという。すなわち、平松令三は慶信の名が記されている第1の旧表紙の袖書の筆跡について、親鸞筆と推測している。
　また、諸本の文字の異同から見て、この専修寺蔵本は、少し他本とは系統を異にするようである。この諸本の文字の異同の考察も平松令三が行っている。
作成者名：角野玄樹

大原座主消息

書名よみ：おおはらざすしょうそく
著者名：顕真
著者名よみ：けんしん
著者生没年：1131（天承1）-1192（建久3）
成立翻訳年：12c後半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸している為、内容については未確認であるが、『長西録』に著者名として顕真を挙げていることから、本書の著者は第61代天台座主顕真であることが推定される。『法然上人行状画図』（四十八巻伝）には、「姨禅尼をすすめんために、念仏勧進の消息をつかはさる。世間に流布して、顕真の消息と号するこれなり。」（第14巻）と文治2年（1186）12月29日に護摩堂尼御前へ出したという消息が収められているが、この消息が本書と同一のものとするには今後の検討が必要であろう。
　なお『国書総目録』には、別に「大原消息」という典籍が紹介されている。これは弘化4年（1847）、愚蔵という者が収録し、刊行した『華園文庫』という典籍に収められ、親鸞に関係する28篇の諸文書を集めたものの一つである。その内容は先に挙げた『法然上人行状画図』（第14巻）所収のものと同一である（佐々木求己『真宗典籍刊行史稿』（伝久寺、1973））。
作成者名：能島覚

御文／御文章

書名よみ：おふみ／ごぶんしょう
書名別名：蓮如上人御文、消息、勧章、勧文、宝章、文、御書
著者名：蓮如
著者名よみ：れんにょ
著者名別名：恵灯大師、本願寺蓮如、信証院、兼寿
著者生没年：1415（応永22）-1499（明応8）
成立翻訳年：1461（寛正2）-1499（明応8）
成立地：日本
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、石川珠洲西光寺蔵本（1473（文明5）、蓮如真筆本（2通）、下間蓮崇書写（16通））
2、富山赤尾行徳寺蔵本（室町期、蓮如真筆本（8通）、赤尾道宗書写（21通））
3、大阪門真願徳寺蔵本（1519（永正16）、蓮能尼書写（10通））
4、兵庫名塩教行寺蔵本（室町中期、書写者不明（246通））
蓮如真筆本については『蓮如上人御文』、『大系真宗史料』を見よ
写本奥書：1、（端書）于時文明第五（1473）九月二十三日ニ、藤島郷ノ内林之郷超勝寺ニオイテ、同二十七日申ノ剋ニイタリテ筆ヲソメオハリヌ、釈蓮如（花押）
2、（第一帖奥書）此一帖十一通ノ御文ハ、九通ハ御筆ヲモテ直ニウツシ申候也、一通ハ上様ノ御筆直ニウツシ申、一通ハ御筆ヲモテスキウツシノ御本ヲモテ直ニウツシ申候也、何モ一字モ加減ナク候、クタリモカナツカヒモ御本ノコトク也
3、永正十六年（1519）九月三日願得寺実如
4、（未調査）
活字本所載書：禿氏祐祥『校註蓮如上人御文全集』（文献書院、1922）、『大正蔵』83（No.2670）、『真聖全』3、堅田修『真宗史料集成』2（同朋社、1983）、『浄土真宗聖典（原典版）』（本願寺出版部、1985）、稲葉昌丸『蓮如上人遺文』（法蔵館、1997）、大谷暢順『蓮如上人全集』3（中央公論社、1998）
参考文献：堅田修・千葉乗隆『蓮如上人御文』（同朋社、1982）、福間光超『「御文章」書写本の調査・研究』（『竜谷大学仏教文化研究所紀要』31、1992）、林智康「蓮如上人と『御文鈔』」（『真宗学』86、1992）、源了円『蓮如』（「浄土仏教の思想」12、講談社、1993）、千葉乗隆『図録蓮如上人余芳』（本願寺出版社、1998）、岡村嘉史『大系真宗史料』6（法蔵館、2008）
解説：蓮如は本願寺8代門主である。衰微していた本願寺において、本願寺7世存如の長男として、苦難の中で成長する。比叡山衆徒の襲撃に遭い、京都東山大谷を出て文明3年（1471）越前吉崎に赴き、北陸地方を教化し、さらに摂津・河内・和泉で布教に専念する。のちに山科・石山に本願寺を建立する。本願寺を強大な宗門に成長させた浄土真宗中興の祖である。また、「南無阿弥陀仏」の六字名号を数多く書いて弟子や門弟に与え、「正信念仏偈」と「三帖和讃」を刊行した。著作には本書のほか『改悔文』など布教のためのものが多い。蓮如の行実を示した言行録に『蓮如上人御一代記聞書』等がある。
　『御文』（真宗大谷派の呼称、本願寺派では『御文章』という）は蓮如が真宗教義を信徒に平易に説示しようとして、仮名混じりの消息形式で出した一紙法語の集成である。
　全体で300通程であり、そのうち年紀の明かなものは約160通、真蹟が残っているのは約60通である。その中で、特に肝要なものを第9代実如（1458-1525）が抽出・編集したものを『帖内御文』（5帖80通）、それら以外のものを『帖外御文』と言う。また『帖外御文』とは別に、『夏の御文』4通（明応7年）・『御俗姓御文』1通がある。詳しくは、それぞれの項目を見よ。
　当時はすべての人が一度に蓮如上人の教化を聞くことが

困難であった。そのため読誦される「御文」を拝聴することによって、各人の胸に届けられた。『御文』には個人宛よりも、道場・講中に送られたものが多い。聴聞を原則とするため、これら回覧することは許されなかった。

内容としては善知識だのみ（善知識を絶対化する説）・十劫秘事（阿弥陀仏が十劫に正覚成就した時、我々は既に救われているとする説）・口称正因（口称念仏こそが往生の正因とする説）などを異義として批判しつつ、「信心正因・称名報恩（信心が往生の正因であり、称名念仏は阿弥陀仏への報恩行であるとする説）」こそが真宗の正義であると述べる。また、「六字釈」（南無阿弥陀仏の六字の解釈）・「機法一体」（たのむ機と阿弥陀仏のたすくる法が本来一体であるとする説）・「女人往生」などの教義を繰り返し説いている。また、他力回向の信心を「たすけたまへと弥陀をたのむ」と表現しているのも蓮如の特徴的表現である。

作成者名：佐々木大悟

改悔文／領解文

書名よみ：がいけもん／りょうげもん
書名別名：改悔、真宗領解文
著者名：蓮如（？）
著者名よみ：れんにょ
著者名別名：恵灯大師、本願寺蓮如、信証院、兼寿
著者生没年：1415（応永22）-1499（明応8）
成立翻訳年：15c（？）
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、河内光善寺蔵本（室町期、蓮如真筆本）
2、京都慶証寺蔵本（1764（明和1）、玄智書写）
写本奥書：1、（刊記なし）
2、（未調査）
刊本所在：1、万治2（1659、竜谷大、『改悔私記』巻上所収）
2、天明7（1787、竜谷大、法如証判本、文如跋文）
3、寛政1（1789、大谷大・大正大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『真聖全』3、『浄土真宗聖典（原典版）』（本願寺出版部、1985）、『浄土真宗聖典』（本願寺出版社、1988）、『真宗聖典』（東本願寺出版部、1978）
参考文献：禿氏祐祥「領解文成立考」（『蓮如上人研究』、中京大師四百五十回遠忌法要事務所、1948）、池田勇諦『改解文考察』（大谷派宗教所刊、1986）、桑原浄昭『領解文の味わい』（永田文昌堂、2004）
解説：蓮如は本願寺8代門主である。衰微していた本願寺において、本願寺7世存如の長男として、苦難の中で成長する。比叡山衆徒の襲撃に遭い、京都東山大谷を出て文明3年（1471）越前吉崎に赴き、北陸地方を教化し、さらに摂津・河内・和泉で布教に専念する。のちに山科・石山に本願寺を建立する。本願寺を強大な宗門に成長させた浄土真宗中興の祖である。また、「南無阿弥陀仏」の六字名号を数多く書いて弟子や門弟に与え、「正信念仏偈」と「三帖和讃」を刊行した。著作には本書のほか『御文』など布教のためのものが多い。蓮如の行実を示した言行録に『蓮如上人御一代記聞書』等がある。

この『改悔文』（本願寺派では『領解文』）とは、「信心が起こる一念で往生が定まり、その後の念仏は報恩感謝の念仏である」という真宗の正義にもとづいた領解を説く法語である。

全文は以下のとおりである。「もろもろの雑行雑修自力のこころをふりすてて、一心に阿弥陀如来、われらか今度の一大事の後生、御たすけ候へとたのみまうして候ふ。たのむ一念のとき、往生一定御たすけ治定と存し、このうへの称名は御恩報謝と存しよろこひまうし候ふ。この御ことわり聴聞申しわけ候ふこと、御開山聖人御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからさる御勧化の御恩と、ありかたく存し候ふ。このうへは定めおかせらるる御掟、一期をかきりまもりまうすへく候ふ。」

このうち「御恩報謝」の後ろに「存し」という語があるものが『領解文』で、ないものが『改解文』であると区別されている。内容は安心・報謝・師徳・法度の4段に分かれると言われている。万治2年（1659）に刊行された丈愚の『改解私記』がそのような科段分けを行っており、その後、この説が一般化したようである。

蓮如在世時代、御正忌報恩講において蓮如が法談した後、参詣した篤信の僧侶が親鸞の真影の前で「改悔」の告白をし、それに蓮如が評価・指導（安心）保証を施した。それが文章化されて『改悔文』が成立していく。『改悔文』の成立・発展に関して詳しくは桑原浄昭『領解文の味わい』を見よ。

天明7年（1787）に第17代法如がこれまで出言していた『改悔文』を『領解出言之文』と改名し、開版・頒布をしたことにより、『領解文』は浄土真宗における安心領解の亀鑑と位置づけられ、全国に普及していった。実際、現代においても、一斉に出言するという形式が踏襲されている。

本書は蓮如作と断定してよいかどうかは難しい問題といえるが、この『改悔文』と同様の内容をもつ文章が『御文』に見られるため、泰厳（1711-1763）の『改解文略解』をはじめとして、蓮如との関連を認める見解は多い。

作成者名：佐々木大悟

華山院家四十八問答

書名よみ：かざんいんけしじゅうはちもんどう
書名別名：華山家六八問答、華山院四十八御問、浄教六八賢問記
著者名：顕意
著者名よみ：けんに
著者名別名：道教房、公空、記主、聖恵
著者生没年：1238（暦仁1）-1304（嘉元2）
成立翻訳年：1192（正応5）
巻数：1
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（1779（安永8）、随海写、『深草之鈔物雑書』の内）
写本奥書：1、（袖書）私云、華山院者華山右大将〈或時華山院右大将有三重六義御問、顕意上人答之〉、今案此華山院従一位大政大臣（太政大臣）通雅公〈建治二年（1276）薨〉之息正二位権大納言兼右大将家教公歟。通雅〈従一位大政大臣（太政大臣）〉家教〈正二位権大納言兼右大将〉家定〈従一位左大臣〉長定〈正二位内大臣〉、已上寂翁書之
（奥書）正応五年壬辰（1192）八月十五日沙門顕意謹記、浄土宗源者佛智願海也、深広無涯底二乗非所測、見聞有歓喜一念致不退、是以味道君子不恥下問賜六八之算、西山愚孫雖非上智献一両之義、唯順厳命不顧後難而已
（巻末）深草之鈔物雑書一冊書写畢、寛文庚戌（1670）三陽法性山会裏ー／享保十八癸丑（1733）九月於如意山書写畢、節翁上人／寛延二己巳（1749）五月於吉田宝珠院拝写畢、貞智順／安永八己亥（1779）十月於味浜満国寺拝書写

畢、随海専求
刊本所在：1、寛政9（1797、大谷大、内題「浄教六八賢問記」）
2、文政2（1819、大谷大・京都大・西山短大・西尾市岩瀬文庫、『観経四品知識義』と合冊）
3、明治31（1898、仏教大・竜谷大、文政板の後刷、『仙洞三心義問答記』・『浄土宗建立私記』・『菩薩蔵頓教一乗海義要決』・『難易二道血脈図論』・『観経四品知識義』と合冊）
刊本の奥書刊記：1、（巻頭）竹林両記序、古曰徳不孤必有隣、誠哉此言、昔吾門有法灯之主而時百寮有豪傑之賓、緇素雖異互為隣也亦如吉水与月輪、正問浄利之津直答弘願之道、録之曰浄教六八賢問記、実是浄業者之指南也、惜哉其門人深秘于書笈而未伝于世者已五百有余歳也、展転差脱或蠹蝕致失其真者箇々不可勝言、慕其芳躅者誰不嘆之耶、今茲丙辰念仏之暇大概校正了、四品知識義亦爾是彼之別記而小冊故録此巻末合為一巻、爰得居士之信施而鏤梓以付桃源之什宝焉、又託書林而流布遠近、冀令見聞者斉結九章之良縁云爾、寛政八丙辰歳（1796）十月十五日、桃源山人妙瑞謹誌
（巻末）明誉法山禅定門、恩誉知営禅定尼、清誉真凉禅定門、香発恵薫信女、先祖代代諸精霊乃至沙界平等普潤、檀越京北中村伊右衛門、助刻居士信此篇天下伝見聞歓喜客回共座金蓮、寛政九丁巳歳（1797）五月、洛北小野郷杉坂村桃源山蔵版、皇都書林堀川通仏光寺下河南四郎兵衛
2、時文政二竜舎己卯（1819）五月十九日、深艸一派大衆謹開版之
3、記主大和尚遺稿校版発起崇福寺励空大和尚、時文政二己卯年（1819）五月十九日刻成／明治三十一年（1898）三月五日再版、六巻合本正価金五拾銭、三陽崇福寺蔵、発行所愛知県額田郡岡崎町環翠堂伊藤小文司、東京麻布飯蔵森江佐七、仝浅草吉野町経世書院、京都知恩院古門前沢田吉左衛門、仝五条通高倉東沢田友五郎、京都花屋町永田長兵衛、名古屋市下江川町皓月堂与助、仝門前町其中堂兼助、仝本町五丁目大成堂文二郎
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2633）
解説：西山深草派の顕意が、「華山院家」より送られた浄土教義に関する問いに対して返答した書。
顕意の跋文によれば、「味道の君子」が下賜された「六八の算（異本では筆・箋とも）」すなわち48ヶ条の問いに対し、正応5年（1192）8月15日「西山の愚孫」の立場で答えて「厳命に順」じたという。大谷大蔵写本に見られる深草派寂翁（1646-1711）の考証では、「華山院」を華山院家教（1261-1297）に比定している。
興味深いことに、鎮西義の了恵道光が、本書とほとんど同じ問いに対して答えを付けた『尊問愚答記』1巻（『浄全』続9）が伝存している。了恵は「驪竜の尊問」に答えたと言い、檀王法林寺蔵写本によれば、建治1年（1275）3月15日に華山院通雅（1233-1276）に届けられたものである。「君子」「驪竜」とは皇帝を示唆する語であるから、あくまで華山院家は取次ぎ役であり、顕意の『仙洞三心義問答記』と同様、実際は両書とも亀山上皇の意思が働いて成立したものと推測される。
本書の問いは、第1釈尊出世の本懐が念仏往生であるというべきか、第3浄土宗は聖道門の修行を否定するか等、聖道門と対比して浄土宗の意義を質す設問や、第8『大経』の第19・20願は諸行本願か来迎果遂の願か、第31諸行往生に摂取の光益があるか等、浄土諸流で意見が相違する問題などが挙げられ、法然以降、常に取り沙汰されている課題が多く見られる。
これらについて、了恵の『尊問愚答記』が文義（出典根拠の原文）を重視して答えるのに対し、本書は「要門・弘願」「自力・仏力・願力」「正因・正行」など、西山特有の名目を駆使して、法然―証空―立信―顕意と受け継いだ西山深草義を主張する。両書の対比は、鎮西義と西山深草義の考え方の相違を知るのに有用である。
本書の写本は稀で、谷大蔵写本は、比較的新しいものながら現存最古本である。書写に関わった寂翁や随海（？-1794）は著名な学僧で、深草派の本山円福寺や檀林妙心寺に住持している。やや遅れて寛政9年（1797）洛北桃源山地蔵院の妙瑞が監修したものが初めての開板で、文政2年（1819）深草派檀林崇福寺励空の開板がこれに次ぐ。
作成者名：稲田廣演

観経四品知識義

書名よみ：かんぎょうしほんちしきぎ
書名別名：四品知識義
著者名：顕意
著者名よみ：けんに
著者名別名：道教房、公空、記主、聖恵
著者生没年：1238（暦仁1）-1304（嘉元2）
成立翻訳年：13c半ば-14c初頭
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（1700（元禄13）恵空書写、『難易二道血脈図論』と合冊）
2、愛知岡崎浄珠院蔵本（1726（享保11）、是空書写）
3、愛知西尾養寿寺蔵本（1734（享保10）、書写者不明）
4、大谷大蔵B本（1779（安永10）、随海書写、『深草之鈔物雑書』の内）
5、愛知吉良称名院蔵本（江戸中期、書写者不明、麟空所持、巻頭に『知識義見聞』を付す）
写本奥書：1、元禄十三辰年（1700）六月日以十念寺本写之、恵空
2、（未調査）
3、享保十九寅天（1734）十月十四日
4、深草之鈔物雑書一冊書写畢、寛文庚戌（1670）三陽法性山会裏一／享保十八癸丑（1733）九月於如意山書写畢、節翁上人／寛延二己巳（1749）五月於吉田宝珠院拝写畢、貞智順／安永八己亥（1779）十月於味浜満国寺拝書写畢、随海専求
5、（未調査）
刊本所在：1、寛政9（1797、大谷大、『浄教六八賢問記（華山院家四十八問答）』と合冊）
2、文政2（1819、大谷大・京都大・西山短大・岩瀬文庫、『華山院家四十八問答』と合冊）
3、明治31（1898、仏教大・竜谷大、文政板の後刷、『仙洞三心義問答記』・『浄土宗建立私記』・『菩薩蔵頓教一乗海義要決』・『難易二道血脈図論』・『華山院家四十八問答』と合冊）
刊本の奥書刊記：1、（巻頭）竹林両記序、古曰徳不孤必有隣、誠哉此言、昔吾門有法灯之主而時百寮有豪傑之賓、緇素雖異互為隣也亦如吉水与月輪、正問浄利之津直答弘願之道、録之曰浄教六八賢問記、実是浄業者之指南也、惜哉其門人深秘于書笈而未伝于世者已五百有余歳也、展転差脱或蠹蝕致失其真者箇々不可勝言、慕其芳躅者誰不嘆之耶、今茲丙辰念仏之暇大概校正了、四品知識義亦爾是彼之別記而小冊故録此巻末合為一巻、爰得居士之信施而鏤梓以付桃源之什宝焉、又託書林而流布遠近、冀令見聞者斉結九章之良縁云爾、寛政八丙辰歳（1796）十月十五日、桃源山人妙瑞謹誌
（巻末）明誉法山禅定門、恩誉知営禅定尼、清誉真凉禅定門、香発恵薫信女、先祖代代諸精霊乃至沙界平等普潤、檀

越京北中村伊右衛門、助刻居士信此篇天下伝見聞歓喜客回共座金蓮、寛政九丁巳歳（1797）五月、洛北小野郷杉坂村桃源山蔵版、皇都書林堀川通仏光寺下河南四郎兵衛
2、時文政二竜舎己卯（1819）五月十九日、深艸一派大衆謹開版之
3、記主大和尚遺稿校版発起崇福寺励空大和尚、時文政二己卯年（1819）五月十九日刻成／明治三十一年（1898）三月五日再版、六巻合本正価金五拾銭、三陽崇福寺蔵、発行所愛知県額田郡岡崎町環翠堂伊藤小文司、東京麻布飯蔵森江佐七、仝浅草吉野町経世書院、京都知恩院古門前沢田吉左衛門、仝五条通高倉東沢田友五郎、京都花屋町永田長兵衛、名古屋市下江川町皓月堂与助、仝門前町其中堂兼助、仝本町五丁目大成堂文二郎
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2634）
解説：西山深草派の顕意が、『観無量寿経』散善義の九品往生のうち、中品下生から下品下生にいたる四品の往生に説かれる「善知識」について9つの問答で論じた書。
　初めに、九品のうち上五品に善知識が説かれない理由を質し、上五品が仏法に縁のある人々であるのに対し、下四品は仏法に縁がなく浄土を求めなかった人であるから、善知識の導きが必要であるとする。その導きとは念仏一行であるが、相手に合わせて様々に説かれており、安心・起行・聞名・作業の4つの往生があると分析する。すなわち、中品下生は安心往生、下品上生は起行往生、下品中生は聞名往生、下品下生は作業往生である。以下、その理由を経文や『観経疏』・『往生論註』・『五会法事讃』等によって説明している。
　顕意は、これら4つの往生は、ある1人の往生の道程と見ることも、あるいは往生の4つの姿と見ることも容認している。また特に「聞名」に注目し、『往生礼讃』の前序に「一声」とあるのは「一念一聞」であると見る。これは易行性を強調し、経釈の意図はより多くの衆生を救うことにあると解釈するもので、顕意の他の著述にも一貫している往生観である。
　本書の成立年代、および江戸時代以前の流伝状況は不明。全編わずか八紙であるが、西福寺恵空が十念寺沢了から借り受けて書写した本が現存し、版本も3種を数える。
作成者名：稲田廣演

観経疏光明抄

書名よみ：かんぎょうしょこうみょうしょう
書名別名：浄土疑芥別申観経部善導疏（巻八・巻十五内題）、序分義疑芥（巻十尾題）、観経散善義疑芥（巻十八尾題）
著者名：長西
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c半ば
成立地：日本
巻数：18
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1268（文永5）-1269（文永6）、永源書写、巻三・巻五の一部・巻八・十・十五-十八が現存）
写本奥書：1、（巻3）文永六年（1269）九月十日巳時書了、於一條万里小路アミタ寺写之
（巻8）文永六年（1269）九月二十一日戌時書了、於一條万里小路阿弥陀院写之、執筆永源春亀二十九
（巻10）文永五年戊辰（1268）六月二十四日、於洛陽武者小路万利小路観音堂書之畢、執筆永源
（巻18）文永六年（1269）九月二十四日丑時書了、於［■■■］一條万利小路アミタ院写之、執筆永源
活字本所載書：『宗学研究』（大谷派）9、11、13、14、15、16（1934-1939）
参考文献：西島泰英「金沢文庫所蔵の『観経疏光明抄』解説」（『宗学研究』9、1934）、岸章二「金沢文庫所蔵観経疏光明抄玄七第五（？）と同序三第一の本文及びその解説と光明抄研究の一問題」（『宗学研究』11、1935）、広川尭敏「金沢文庫本『観経疏聞書』と『光明抄』」（『浄土宗学研究』18、1992）
解説：善導『観経疏』に対する註釈書。玄義分七巻・序分義三巻・定善義四巻・散善義四巻の全18巻で、このうち巻三および巻五の一部（玄義分）、巻八・十（序分義）、巻十五-十八（散善義）が現存する。
　本書は、「惣じて定散諸善を以て弥陀の本願となし、別して念仏一行を以て本願の正意となす。念仏の中に於ては観念等を以て傍となし、称名等を以て正となす」（巻三）という、諸行本願義の立場より善導『観経疏』を註釈したもので、長西の教学・思想を考察する上で重要な資料である。
　本書の成立に関しては、従来、長西が78歳で善導『観経疏』の講義を行ったと伝える凝然『維摩経疏菴羅記』巻九の記載から、弘長1年（1261）頃と考えられてきた。しかし最近では、建長年間（1249-1256）の良忠の講録である『観経疏聞書』に『光明抄』の影響を見ることができるとし、成立年次を早める説も提唱されている（広川尭敏「金沢文庫本『観経疏聞書』と『光明抄』」）。
作成者名：吉田淳雄

観経疏大意

書名よみ：かんぎょうしょたいい
書名別名：観経疏大意抄、観経大意
著者名：証空
著者名よみ：しょうくう
著者名別名：善恵房、善恵房証空、西山上人、当山上人、小坂、弥天善恵鑑智国師
著者生没年：1177（治承1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：13c
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、石黒観道氏旧蔵本（1808（文化5）、舜礼書写）
2、関本諦承氏旧蔵本（1810（文化7）、瑞恩書写、『西山教義研究』及び『法然聖人門下の教学』所収本の底本）
3、竜野如来寺蔵本（1814（文化11）、観道書写）
4、京都長仙院蔵本（未調査）
写本奥書：1、文化五戊辰（1808）夏始閲此書、盲亀浮木為懐雖拝写恨原本魯魚多、希後覧英士訂正之、洛西光明輪下南紀負笈杜門大空舜礼謹写
2、維時文化七庚午（1810）七月十九日於金林蘭若瑞恩拝写之
3、観道拝写、私考云、元本洛西唐橋西方寺玄粲上人、背皆コト乎、断間或簡料簡コト乎、当當コト乎、其外処々可付意後人乞訂、跋、此書也西山宗一流密秘中秘也、眼者如金篦刮膜、愚者少差則破晴、不可不誡不可慎、邪悪夏虫不足語氷曲士不足語道、已矣已矣、文化十一戌（1814）秋七月既望住観音寺沙門照空観道識
4、（未調査）
活字本所載書：「西山疏抄尋覧」（『西山教義研究』1-1、1922）、安井広度『法然聖人門下の教学』（1938、法蔵館）、森英純編『西山上人短篇鈔物集』（1980、西山短期大学）
参考文献：上杉慧岳「近く発見されたる西山証空上人の観

経疏大意の研究」(『仏教研究』3-2、1922)、藤原幸章『観経疏大意講説』(1963、大谷大学内安居事務所)、佐伯良雄「『観経疏大意』の成立時期について」(『深草教学』13、1993)
解説：西山派祖証空の著。「大意」の名の通り、証空の基本的な考え方が窺える概説書である。
　最初に「先づ念仏宗とは、諸経を会して観経に入るるなり。諸善を会して念仏に摂す」と、念仏を中心とする教相判釈を定義し、これが五部九巻の主旨であるとして、以下、23の問答を立てて善導の真意を探っている。
　各問答の概要は、以下の通り。(1) 善導の所属宗派、(2) 善導が『観経』によって一宗を立てた理由、(3) 聖道と浄土の区別、(4) 四十八願中の生因の願、(5) 本願を称名と解釈する意図、(6) 念仏の解釈、(7) 憶念は観法か、(8) 相好光明を憶念することの理解、(9) 念仏宗から見る聖道の観法、(10) 憶念の内容、(11) 称名を本願とする理由、(12) 名即体の理解、(13) 造悪の人は防げるか、(14) 七仏通誡との会通、(15) 阿弥陀仏の十劫成仏、(16) 三身を立て四土を立てないこと、(17) 往生後の修行、(18) 正行と雑行、(19) 弘願念仏に帰した後の余行の扱い、(20) 一念と多念、(21) 華座観の三尊は再現か、(22) 韋提希の聞法と見仏が同時であること、(23) 韋提の見仏は十六観の最後にあるか。
　本書には、証空の初期の著作『自筆鈔』に頻出する特殊名目「観門・弘願」、中期の『他筆鈔』に見られる「正因・正行」が混在することなどから、成立時期は両書の中間ではないかと推測されるが(佐伯論文参照)、年次を特定できる確実な証拠はない。
　伝写本は、文化・文政の頃を遡ることができず、伝承についても明らかではないが、証空の他の著述との整合性から、真作であることは確実と見られる。
作成者名：稲田廣演

観経疏伝通記

書名よみ：かんぎょうしょでんづうき
書名別名：伝通記、観経四帖疏伝通記、観経伝通記
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人、然阿弥陀仏
著者生没年：1199(正治1)-1287(弘安10)
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：15
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、鎌倉光明寺蔵本(1322(元亨2)、良暁書写)
2、群馬太田大光院蔵本(鎌倉中期、書写者不明、零本、良暁手沢、光明寺四世良順聖満伝領本、藤堂祐範『浄土教稀覯書目第四』参照)
写本奥書：1、元亨二年壬戌(1322)三月四日、書写畢／本云弘安八年(1285)秋誂于宋人書之令校之沙門良空、同年十二月廿二日重校了、良空／自弘安九年丙戌(1286)四月五日至五月廿一日決疑鈔并伝通記、於大覚寺上人御前再治之畢、然阿(在御判)／元亨二年壬戌(1322)六月二日點校了、所授寂真加之已、良暁(花押)
2、良暁(花押)／伝領聖満
刊本所在：1、慶長13(1608、竜谷大)
2、慶長17(1612、叡山文庫)
3、寛永初期(仏教大)
4、慶安4(1651、大谷大・大正大・仏教大・竜谷大)
5、文政5(1822、大谷大・京都大・高野山大・大正大・仏教大・高野山大)
刊本の奥書刊記：1、(巻尾墨書)于時慶長十三暦(1608)霜月念日、下総国大巌寺堪忍相応
2、此伝通記十五巻令校合畢尚又攸鏤梓也、下州竜澤山大巌寺随流　鏤梓主雲竜、于時慶長十七壬子(1612)霜月十五日
3、(巻末墨書)右伝通記十五冊雖為清沢本泉寺所持之本所望之間依難辞授与教行寺已
4、(未調査)
5、(未調査)
活字本所載書：『浄全』2、『大正蔵』57(No.2209)
参考文献：恵谷隆戒『浄土宗第三祖然阿良忠上人伝の新研究：特に金沢文庫資料を中心として』(国書刊行会、1984)、良忠上人研究会『良忠上人研究』(大本山光明寺、1986)、三上人御遠忌記念出版会『源智・弁長・良忠　三上人研究』(三上人御遠忌記念出版会、1987)、斉藤隆信「『観経疏伝通記』見出し」(『浄土宗学研究』21、1994)
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘(島根県)に生まれる。建暦1年(1211)、同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、建保2年(1214)、比叡山で受戒した。その後1236(嘉禎2)年、九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』の相伝を受ける。建長1年(1249)、関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、正元1年(1259)、鎌倉に入り、悟真寺を開創して念仏を広めた。
　本書は、善導『観経疏』を法然・弁長の義にしたがって注釈したもの。康元2年(1287)3月21日から下総国光明寺で書き始め、正嘉2年(1258)3月29日、同国西福寺において書き終わる。その後文永11年(1274)正月16日より建治1年(1275)11月16日まで校訂をした。さらに弘安10年(1287)、良忠入寂の2ヶ月前にも部分的な校訂がされた。
　内容は『玄義分伝通記』6巻、『序分義伝通記』3巻、『定善義伝通記』3巻、『散善義伝通記』3巻から成る。『観経疏』の全文について、逐文解釈している。解釈に際して、仏典のみならず外典も広く引用し、善導が参考にしたと思われる解釈を可能な限り推定し、また法然・弁長以外の解釈についても広く紹介している。
　『観経疏』を題号の釈と本文の釈に2分して解釈している。題号の釈をさらに題号釈と撰号釈に分けて解釈し、撰号釈においては、『新修往生伝』に「善導」と「善道」の2種の伝記が出る、所謂る「善導二人説」について考察し、両者は同一であると結論付けている。　また本文の釈においては、十四行偈を序分、その後「此観経一部」から散善義の王宮分解釈末尾の「解観経一部文義竟」までを正宗分、「竊以真宗難遇」より後を流通分としている。
作成者名：曽和義宏

観経疏伝通記見聞

書名よみ：かんぎょうしょでんつうきけんもん
書名別名：遅沢鈔、良暁見聞、見聞論記、観経伝通記見聞
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251(建長3)-1328(嘉暦3)
成立翻訳年：1310(応長4)-1311(正和1)
成立地：日本
巻数：15
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、(未調査)

写本奥書：1、本云、初自延慶三年庚戌（1310）十二月終至応長二年（1312）二月二十八日、首尾三カ年間伝通記一部始終十五巻、任相伝之旨、加私勘文、料簡委細抄之畢、後見更有憚、無左右不可及他見、背此制法者、可有冥罰之状如件、良暁在御判／先師制法如件、穴賢、不可有他見者也、延文二年（1357）五月十三日終功畢、良誉在御判／写本云、先師制法条条如上、今亦以如此、不可有他見者也、嘉元三年（1305）十月十日一校了、沙門常誉在判
活字本所載書：『日仏全』61
解説：寂恵良暁の『観経疏伝通記』の注釈書。本書は良暁が甲州の遅沢の草庵において著したことから『遅沢鈔』ともいう。『蓮門経籍録』には聖冏の『観経疏伝通記糅鈔』に見られる「師仰」という記述が本書を指すとしている。内容的に師良忠の説を逸脱することなく忠実であり、本文の字句について細かく注釈したものである。
作成者名：伊藤茂樹

観経疏問答

書名よみ：かんぎょうしょもんどう
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『弥陀本願義』（平井正戒『隆寛律師の浄土教　附遺文篇』、p.127）
解説：『弥陀本願義』奥書に、『観経疏問答』の書名がみえる。その直前には『玄義分問答』十帖があったことが記されており、『玄義分問答』は現存しないものの、金沢文庫には『散善義問答』十帖と『定善義問答私見』が残されていることからして、これらの書はおそらく『観経疏問答』の一部をなしていたものと考えられる。(『定善義問答私見』を一部とみてよいか)
作成者名：伊藤茂樹

観経疏略鈔

書名よみ：かんぎょうしょりゃくしょう
書名別名：伝通記略鈔、御自筆鈔、敬忍房鈔、足立鈔（散善義略鈔のみを称す）
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人、然阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1261（文応2）・1264（文永1）
成立地：日本
巻数：8
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、明暦2（1656、仏教大）
2、（未調査、大正大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『浄全』2
参考文献：恵谷隆戒『浄土宗第三祖然阿良忠上人伝の新研究：特に金沢文庫資料を中心として』（国書刊行会、1984）、良忠上人研究会『良忠上人研究』（大本山光明寺、1986）、三上人御遠忌記念出版会『源智・弁長・良忠　三上人研究』（三上人御遠忌記念出版会、1987）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。建暦1年（1211）、同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、建保2年（1214）、比叡山で受戒した。その後1236（嘉禎2）年、九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』の相伝を受ける。建長1年（1249）、関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、正元1年（1259）、鎌倉に入り、悟真寺を開創して念仏を広めた。

本書は、善導『観経疏』を法然・弁長の義にしたがって簡略に注釈したもの。弘長2年（1262）に、高野の敬忍房の依頼によって、玄義分・序分義・定善義の各略鈔全6巻を撰述した。のち文永1年（1264）に、武蔵国足立において散善義を講述して、それを『散善義略鈔』2巻としてまとめた。これによって『散善義略鈔』を「足立鈔」とも称する。

本書は善導『観経疏』における重要な項目を、『玄義分略鈔』3巻で168、『序分義略鈔』1巻で101、『定善義略鈔』2巻で148、『散善義略鈔』3巻で142の、合計559項目選び出して、問答体をもって解説している。『伝通記』よりは説明が簡略で、引用が少ない。引用についても大半が仏典であり、『伝通記』のように外典を引用することは殆ど無い。ただし、一部『伝通記』には言及されていないことも説いている。例えば、『伝通記』との関係については、本書の引用の仕方などから推測するに、『伝通記』が善導の思想背景の解明を志したのに対し、浄土宗義・鎮西義に基づいたな解釈を提示するという意図があったものと思われる。
作成者名：曽和義宏

観経疏他筆鈔

書名よみ：かんぎょうのしょたひつしょう
書名別名：十巻鈔、観経疏之抄、教相他筆御鈔、他筆の私記、嘉禎抄
著者名：証空
著者名よみ：しょうくう
著者名別名：善恵房、善恵房証空、西山上人、当山上人、小坂、弥天善恵鑑智国師
著者生没年：1177（治承1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：嘉禎年間（1235-1238）（？）
巻数：10
漢和：和文
漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、藤沢歓喜光寺（遊行寺）蔵本（書写年不明、伝安国書写（遊行5代））
2、大谷大蔵本A（1535（天文4）-1536（天文5）、恵敬書写）
3、大谷大蔵本B（1673-1681（延宝年間）、書写者不明、恵空手沢本）
4、兵庫生瀬浄橋寺（書写年不明、顕義書写）
5、愛知吉良西福寺（未調査）
6、一色満国寺（書写年不明、音空写）
写本奥書：1、（未調査）
2、（第5巻）時天文四稔（1535）十二月十八日写之畢
（第6巻）於紀州名草郷楫取総持寺以賢恵寄進之証本不辞悪筆慮後見偏是辱笑基也、雖然一覧僧侶者一返之蒙御助成者証九品倶回得不退阿鞞跋致即無生者哉、庶幾法界平均普利而已、天文五稔（1536）潤拾月上旬、拾巻鈔書写畢、右筆恵敬
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）

6、（未調査）
刊本所在：1、文政9（1826、西山短大・大谷大・大正大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、（巻頭序）刻観経疏他筆鈔序、盧山道公（仁空実導）曰吉水大師雖有衆多門葉無有与余人通講導公疏、而徳為善慧上人数講授之、且非唯授自宗旨而諸宗大綱亦悉伝焉、故上人所述自筆鈔者、直記大師口決之義、他筆鈔者於先伝口決更切磋琢磨細成其義尽宗之淵源矣、二鈔之所談但是自麁至細爾、豈有浅深乎、由是観之凡浴于吉水之流者於斯師所述不可不学也、其自筆鈔者寛文之末洛北有空覚師者校刻而流于世、独他筆鈔者世希得写本而珍蔵焉、然展転之差脱不為不多、読者憾焉、茲有寛量公者寓学于西山広谷已有年、深憂斯鈔之散逸将損貨寿梓以聊報祖恩且省謄写之労焉、義道顕義両学生承其芳志周索遠捜得衆本校讐功畢、命諸剞劂剞劂業成寄予請序、予也深懼以鄙言冠祖典不遜之罪莫大焉固辞不可、於是乎遂自忘蕪陋叨贅以塞其責云、時文政八竜輯乙酉（1825）仲冬既望、尾陽玉窓阜沙門亮範謹誌／対校諸本目録、一本奥書云、観経疏教相他筆鈔一部十巻、貞和三年乙亥載（1347）十一月二十五日濃州立政寺知通謄写〈生年三十四歳〉、今文化三年丙寅（1806）中秋望日依彼親跡不差一字一点謹謄写焉、広谷黌下義道〈生年十九歳〉、一本云、文禄四年乙未（1595）六月五日於禅林文宗写焉、今在広谷蔵、一本云、天文五稔（1536）二月十七日写之畢、厭欣沙門廓善、広谷真空慧玉大和尚所伝持而前学頭桂巖老和尚護持焉、一本云、天文七年戊（1538）三月三日於尾州曼陀羅寺書写之畢、一本云、天文九子歳（1540）弥生二十六日於勢州桑名浄土寺書写畢、已上二本今在東山宝蔵焉、一本云、天文八年（1539）二月吉日尾州祐福講寺第十一世守向上人所書写本、濃州立政講寺義空玄憐大和尚伝持焉、広谷輪下顕義粛模写焉、一本云、寛永二乙丑天（1625）二月十五日礼道粛謄之本、今在播州神吉常楽寺蔵、一本云、本山光明講寺三十九世竜空臥雲大和尚本、跋云西山祖師他筆御書十一巻、宝暦四戊歳（1754）冬十一月内為往生極楽兼為使末代初学者知今家教相書写者也、西山前学頭泰賢老和尚伝焉、其奥云、蓋此鈔者善慧上人己証之法門而一家深奥也、嗚呼惜哉没而広不行于世、予也嘗於秘匣中求索之向雪窓而書写、然原本魯魚之舛脱不尠俟後昆之校耳、散善義鈔二冊在洛東浄土寺村浄土寺蔵、奥云、天和二年竜集壬戌（1682）暮冬下旬於洛東禅林之北軒而沙門利空謹書写畢、玄義分鈔中巻一冊在濃州山縣清閑寺蔵、奥云、慶長十九年（1614）霜月二十六日於立政講寺立讃書写、一本東山前学頭恬澄老和尚謄写本、一本紀州梶取総持講寺妙空弁才大和尚所持本、一本尾州祐福寺第四十七世亮範大和尚所持本、一本三州遊心寺俊克和尚所持本（跋）〈尾陽〉正住院蔵版／有書不弘通則与無書等、校刻之元意亦無他、只在其弘通耳、仍寄之本山光明講寺之書蔵也、文政丙戌（1826）仲冬、正住教院寛量
活字本所載書：1、『日仏全』57・58、『西山全書』4・5、『西山叢書』5・6（西山短期大学、1996・2002）
解説：善導『観経疏』の注釈書。証空の講義および論義の内容を門弟が書きとめたもの。筆受者は観鏡証入（西山派東山義祖）あるいはその弟子観日証源といわれている（空覚恵仁『西山年譜要記』）。浄珠院所蔵『揩定記』版本に手書きされた袖書（古写本からの写しと推測される）によると、古くは「他筆の私記」あるいは「嘉禎抄」とも呼ばれたらしい。『西山上人縁起』には九条道家に献上された「観経疏私記十巻」の存在が伝えられており、本書との関連が窺われる。また「嘉禎」とは、その成立年代を示すものと見られるが、詳細は不明である。

『観経疏』の「正因・正行」「顕行・示観」などの語に特殊な意味を持たせ、証空独自の用語として用いながら『観経疏』本文を解説し、さらに問答を重ねて注釈している。証空の初期の著作『自筆鈔』の逐語解釈とは趣を異にし、おそらく複数の門弟が論義に加わって成立したものであろう。証空が「不断念仏」・「六時礼讃」と並べて西山往生院に始めた三箇の行事（慈円『不断念仏始行縁起』、『西山上人縁起』所引）の一つ、「問答論義」を記録したものと想像される。

本書は、西山教学の基礎文献として広く流布したようで、円空立信（西山派深草義祖）の『観経疏深草鈔』には、本書を引き写したような記述が見られる。証空の孫弟子に当る一遍知真の門流（時宗）に古写本（歓喜光寺蔵本）が伝わっているのも、その名残りであろう。

永らく写本でのみ伝播していたが、文政9年（1826）板本が正住院（現、愛知県常滑市）から出版された。祐福寺47世闡空亮範（後に粟生光明寺56世）の序によると、『他筆鈔』が希少本であることを嘆いた正住院寛量が、龍空義道・照空顕義の両名に命じて諸本を捜索・校合させたものである。本文に後世の補筆が混入して14巻10冊と増補されており、書誌学的に問題のある板本ではあるが、主に『観門義』（漢文体に改変して出版された『自筆鈔』）に依るしかなかった証空の思想について、その展開を世に知らしめた点で画期的な業績である。
作成者名：稲田廣演

観経要義集

書名よみ：かんぎょうようぎしゅう
著者名：行観（述）／唯信房（筆録）
著者名よみ：ぎょうかん／ゆいしんぼう
著者名別名：覚融、鵜木の行観
著者生没年：1241（仁治2）-1325（正中2）／不明
成立翻訳年：不明
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、大谷大蔵本（未調査）
2、岐阜清閑寺蔵本（未調査）
3、西山短大蔵本（未調査）
4、吉良称名院蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
2、本云、思此抄者行観上人之弟子衆向師決疑之抄歟、寛正五甲申年（1464）正月三十日、永弘生［■］三十三（傍注「大血脈妙諫上人之下ニ出」）／至宝永六己丑年（1709）二百四十有六年也、至文化七庚午年（1810）三百四十有七年也／右要義一冊者依洛常楽寺求空師為祖恩報謝再写訖／提婆五法一塩不食二薪依不着三路地坐禅四火煮物不食五不眠文／融栄聖教録云、要義集一巻或二巻、但是再治未再治之異也、其二巻者再治本也、此鈔者行観上人之御義ヲ観導記之也云云、或案云其一巻者芸州慈仙寺住空寿静雲公永禄十一戊辰年（1568）十月八日書写之本、東山会中幡陽明石長寿院探元公上足通忍公之所持也／宝永六己丑年（1709）四月中旬書写考合訖、台空／時文化四丁卯年（1807）十月中旬書写畢、恵泰／時文化七庚午年（1810）五月上旬洛西於広見寺書写畢、西山流末学顕義／時文化八年未星（1811）夏六月十二日西山下海印里阿弥陀教寺書写之了、西山沙門義道
3、（未調査）
4、（未調査）
解説：行観とその門弟達による講義や問答の記録で、全部で84項からなる。撰号は無いが、第48項に「行観上人、唯信房ニ対シテ無余人八月二十七日御義云」とあり、他項にもその名が散見される唯信房が記録したものと考えられる。その他、観導房、覚真、長福寺等の行観門下が問答に参加している。

成立年代を示す記述としては、第1項に正応5年（1291）

9月15日夜、第17項に正応4年（1290）6月2日、第64項に永仁1年（1293）7月3日等の日付があり、数年間に渡る記録であることが窺える。

西山派西谷義の立場で、東山・西山（深草義を指すか）の教義と対比しながら五祖一徹を主張しており、廃立・傍正・助正や機法一体という特殊名目も見られる。

清閑寺本の奥書に引用された融栄の『聖教録』によれば、一巻仕立ての初稿本と、二巻の再治本が存在するといい、大谷大蔵本が初稿一巻本、清閑寺本が再治二巻本に相当するかと思われる。

作成者名：稲田廣演

漢家類聚往生伝

書名よみ：かんけるいじゅおうじょうでん
著者名：不明
著者生没年：13c頃
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉中期、書写者不明、中巻のみ、大心手沢本）
写本奥書：1、（奥書なし）
活字本所載書：金沢文庫『金沢文庫資料全書』浄土篇1（「金沢文庫資料全書」4、県立金沢文庫、1980）
参考文献：金沢文庫『金沢文庫資料全書』浄土篇1（「金沢文庫資料全書」4、県立金沢文庫、1980）、高雄義堅「金沢文庫新出 漢家類聚往生伝に就て」（『竜谷学報』310 、1934）塚本善隆「日本に遺存せる遼文学とその影響―真福寺の『戒珠集往生浄土伝』と金沢文庫の『漢家類聚往生伝』について―」（『塚本善隆著作集』6、1974、初出：1936）
解説：本書は中巻のみ現存する。中国における僧・沙弥・尼・優婆塞・俗人、合計38人の往生伝を収録したもの。個々の往生伝に示される行業は印仏・観想・図像・読書経典など多岐にわたる。

本書の成立には遼代の非濁（？-1063）による『随願往生集』（散逸）・『三宝感応要略録』が背景に存在すると考えられる。非濁『随願往生集』は『義天録』に採録され、高麗において存在したことは確実なものの、本邦への渡来は未詳である。しかし、遼人の他の著述は平安末期には日本へ伝わっていることから、『随願往生集』が伝来した可能性を十分考えられる。また、非濁『三宝感応要略録』も『今昔物語集』の典拠として注目され、その研究の進展により1100年頃には日本に伝わっていたことが明らかであるので、日本に流伝した非濁による伝記を抄出・編纂したものが本書であり、その際に文体も和様化されたと推測される。

また、本書に収められている往生人の個々の標題・内容は真福寺本の戒珠「往生伝」のものとほとんど同一であり、38人分のうち34人もの分量が該当する。したがって、本書と真福寺本の戒珠「往生伝」はその成立において、密接な関係があると考えられる。

作成者名：能島覚

観極楽遊心鈔

書名よみ：かんごくらくゆうしんしょう
著者名：済暹
著者名よみ：さいせん
著者名別名：仁和寺済暹僧都、仁和寺済暹律師、南岳房僧都、暹僧都
著者生没年：1025（万寿2）-1115（永久3）
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『諸宗章疏録』（『日仏全』1）
参考文献：櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の済暹については『観無量寿経中略要問答抄』の項を参照。
作成者名：能島覚

観心極楽讃

書名よみ：かんじんごくらくさん
著者名：小聖
著者名よみ：こひじり
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の小聖とは、あまり高位でない僧という謙称（『日国』5）であろう。謡曲の「葵の上」に「横川の小聖を請じて来たり候へ」という小聖の呼称がみえる。
作成者名：能島覚

観心念仏

書名よみ：かんじんねんぶつ
書名別名：天台大師新修西方業儀式
著者名：覚運（？）
著者名よみ：かくうん
著者名別名：檀那僧正、檀那院僧正
著者生没年：953（天暦7）-1007（寛弘4）
成立翻訳年：10c-12c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高山寺蔵本（院政期、書写者不明）
2、大正大蔵本（未調査、『三輩往生弁』と合本）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（未調査）
刊本所在：1、万治3（1660、高野山真別処）
2、安永7（1778、国会図書館・竜谷大、『山家雑詮』9）
3、刊年不明（大谷大、『天台小部集釈』の内）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（巻11末）寛文五歳乙巳（1655）初冬吉祥日、安永七（1778）戊戌初夏吉祥日
3、（未調査）
活字本所載書：『日仏全』24、末木文美士「高山寺所蔵天台関係典籍について」（『平成5年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』1994）
参考文献：田村芳朗『鎌倉新仏教の研究』（平楽寺書店、1965）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、八木昊恵『恵心教学史の総合的研究』（永田文昌堂、1996）、末木文美士「高山寺所蔵天台関係典籍について」（『平成5年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』1994）、落

合俊典「真福寺蔵承暦元年写『阿弥陀仏経論並章疏目録』について」(『仏教文化研究』47・48)
解説：本書は阿弥陀三諦説に基づいた観心念仏によって浄土往生を勧めたものである。
内容は三段で構成される。まず、念仏をする時は一心三観を修し、次に阿弥陀仏の四字を観じる。そして最後にその名号を唱えることを勧めている。このうち、一心三観を勧める中では、この一心三観の念仏を円念仏・不可思議念仏と称している。また空仮中の三観を修することはあらゆる惑を滅し、法報応の三身が顕れる功徳があると説く。それは阿弥陀仏の四字を観ずることは、その名号に一切の諸仏の功徳が内在するからであって、念仏の一念の心性より出るものだという。そうして諸々の法界中の功徳が満ちる念仏をすれば極楽世界に上品上生の往生をすることができると説いている。その後、『日仏全』本では「南無阿弥陀仏遍像曼陀羅文」が付加されているが、最古の写本である高山寺本（末木論文）ではこの部分がなく、「阿弥陀仏発願文」・「小豆念仏勧進帳事」が付加されている。
さて本書には『日仏全』本の題号の副注に「天台大師新修西方業儀式」と別名がある。これは平安後期の目録（『寛印録』（落合俊典「真福寺蔵承暦元年写『阿弥陀仏経論並章疏目録』について」(『仏教文化研究』47・48)）・『東域伝灯目録』(『日仏全』1)）に記載される「天台大師西方浄業儀一巻」に相当するものと思われる。加えて院政期までに成立した『妙行心要集』(『日仏全』33）には天台大師作「新修西方行業義式」との書名で本書の第二段が引用されていることからも本書の別名としてそれが知られる。その一方で高山寺本には題号が「観心念仏西方行業式」と、また『渓嵐拾葉集』(『大正蔵』76）には「観心念仏事」として主に本書の第一段を引用していることより、両方の書名が院政期ごろより併存していたとみられる。
なお本書の成立は先行研究によれば平安末期と推定されるが、著者に関して『長西録』(『日仏全』1）は無記名であり、他の諸目録でも作者が確認できない。よって覚運による撰述という点は疑わしく、覚運撰と明記される文献は近世の編纂である『天台小部集釈』まで下る可能性があるだろう。
作成者名：能島覚

観世音菩薩往生浄土本縁経

書名よみ：かんぜおんぼさつおうじょうじょうどほんえんきょう
書名別名：往生浄土本経、浄土本縁経、観音本縁経、本縁経
著者名：不明
著者生没年：12c以前
成立翻訳年：12c以前
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、竜谷大蔵本（元禄2年（1689)、恵空書写、『仏説阿弥陀三昧海経』と合冊）
2、京都大蔵本（江戸期、書写者不明、蔵経書院旧蔵、貞享元年（1684）版の転写本、『仏説十王阿弥陀仏国経』他、7巻と合本）
写本奥書：1、元禄二己巳（1689）二月日、恵空主之
2、貞享元甲子（1684）天五月吉辰、東叡山池之端大和屋源兵衛刊行
活字本所載書：『続蔵経』1（No.12）
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』(百華苑、1979)、川勝政太朗「武蔵須賀広の嘉禄・寛喜板石塔婆について」(『史迹と美術』278、1931)、斉藤隆信「『大乗毘沙門功徳経』解題」(『七寺古逸経典研究叢書』4、大東出版社、1999)、牧野和夫「七寺蔵『大乗毘沙門功徳経』と「因縁・説話」」(『七寺古逸経典研究叢書』4、大東出版社、1999)、平松令三「新知見の親鸞聖人筆本縁経要文」(『高田学報』92、2004)、恋田知子「偽経・説話・物語草紙　―岩瀬文庫蔵『釈迦并観音縁起』絵巻をめぐって―」(『国語国文』74-5、2005)、箕浦尚美「金剛寺蔵〈佚名孝養説話集抄」について」(科学研究費　基盤研究（A）(1）報告書「金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究」、落合俊典、2007)、能島覚「理明房興然撰『五十巻鈔』「阿弥陀」所引の経論章疏について」『宗学院論輯』81、2009)
解説：本書は日本撰述経典で、偽経といえる。
その内容は観音菩薩の本生譚であり、阿弥陀仏国への往生の因縁を明かし、早離・速離の因縁譚としても後世、喧伝される。南天竺の摩涅婆亜咤という国に生を受けた早離・速離という二人の男児がいた。彼等には聡明な両親がいたが、幼くして母を失った。その後、飢餓が訪れ、父が食料を求め旅に出、男児は継母に養育されることとなった。その後、還ってこない夫に異念を生じた妻は継子に害意を企て、二人の男児を南海の孤島に置き去りにした。そうして早離・速離は不幸にも餓死に至ることとなるが、継母の行いを恨むことなく、生前の実母の教えに従い、菩提心を起こし、衆生の済度を誓いながら命を落とすこととなった。そして、この早離が観世音菩薩の前世の姿であると明かされる。
本書の成立に関しては不明な点が多く、いつ、どのような人物によって撰述されたのか未詳である。類似する経文・成立背景をもつと考えられる経典として『往生仏土経』がある。そのようななか、従来、本書は『長西録』に経名が見られることから成立の下限は13c頃と見られていたが、12cの資料である青蓮院蔵『浄土厳飾抄』、興然撰『五十巻抄』、金剛寺蔵『佚名孝養説話集抄』に引用があるところからその成立年が引き上げられることとなった。また親鸞筆とされる聖教断簡や弟子の真仏の『経釈文聞書』にも引用が見られ、埼玉県江南町の寛喜2年（1230）の紀年名をもつ板石塔婆にも本書の一部が刻まれている。また早離・速離の因縁譚はその後の唱導・説話・直談の世界にも影響がみられるとの指摘があり、それらの展開を追跡する研究も蓄積されている。他方、本書は奈良絵本・絵巻の素材としても注目され、その広範な流布を垣間見ることもできよう。『往生仏土経』の項も参照のこと。
作成者名：能島覚

閑亭後世物語

書名よみ：かんていごせものがたり
書名別名：後世物語
著者名：隆寛（？）
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、元禄5（1692、大谷大・大正大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、元禄五壬申（1692）夏板行
活字本所載書：『続浄』9
参考文献：爪生津隆雄「隆寛律師の著作に就て」(『真宗研究』18、1928)、平井正誠『隆寛律師の浄土教』(国書刊行

会、1941)、戸松啓真「先徳要義集解説」(『続浄』9)、松本史朗『法然親鸞思想論』(大蔵出版、2001)
解説：隆寛撰述とされる平仮名で書かれた書。現在は元禄5年(1692)の刊記が記される版本しか残らない。隆寛撰述とされているが、本文中には「隆寛律師曰く」として隆寛の詞が紹介されているので、おそらく隆寛門弟の作であろう。冒頭に末代の規範となる碩学名匠として、空也・永観・珍海・法然・隆寛・聖覚・浄遍・明遍・明禅・乗願・敬日の名をあげている。本文中には上記の人師の法語をあげている。上下巻とも臨終平生・三心・一念多念等についての問答を数多く収録する。行を重視し、諸行往生を容認するとともに、融通念仏をすすめて数量念仏を重視するなど隆寛の他力思想を強調する解釈はみられない。また生身仏や神祇信仰、験者との関係など専修念仏教団において興味深い内容が見られる。成立年については、文永12年(1275)作の『和語灯録』には本書の書名があげられており、更に本文中に乗願上人を浄土の先達として載せているが、乗願が建長3年(1251)の滅であるので、成立の上限は建長3年、下限は文永12年に設定することが出来る。本書は鎌倉時代中頃の浄土教系の聖の撰述と見るべきであろう。なお、隆寛の「四句之抄」など散逸文献や信瑞の『明義進行集』にみえる隆寛の『答但馬宮問三箇条』『得生西方義』等の引用がみられる。
作成者名：伊藤茂樹

勧女往生義

書名よみ：かんにょおうじょうぎ
書名別名：勧安往生義
著者名：源信(？)
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942(天慶5)-1017(長和6)
成立翻訳年：10c後半(？)-11c初頭(？)
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1、p.352)、『玄智録』1(『日仏全』1、p.465)、『竜堂録』下(『日仏全』2、p.274)『顕注密勘抄』(『日本歌学大系』別巻5、p.277、『河海抄』にも同内容がみられる)
解説：佐藤哲英・八木昊恵・合阪逸朗「源信和尚撰述著作解題」(『竜谷学報』317、1936、p.320)では『勧女往生義』を『往生極楽偈』『勧進往生極楽偈』の別名として三者を同一視する。しかし『顕注密勘抄』(『日本歌学大系』別巻5、p.277)に引用される『勧女往生義』の内容(「恵心僧都の勧女往生義と申造紙に、いまめきの中将、長井の侍従、伏見の翁など云古物語あり」)が、『往生極楽偈』(『恵全』1、p.521)には見られないことから、ひとまず両書は別個のものとして取り扱うべきであろう。
作成者名：上杉智英

観念法門見聞

書名よみ：かんねんほうもんけんもん
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251(建長3)-1328(嘉暦3)
成立翻訳年：13c後半-14c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1)、『浄土真宗教典志3』(『日仏全』1)、『蓮門類聚経籍録』上(『日仏全』1)
解説：本書は散逸して伝わらない。『長西録』や『浄土真宗教典志』『蓮門類聚経籍録』に書籍名がみられる。
作成者名：伊藤茂樹

観念法門私記

書名よみ：かんねんほうもんしき
書名別名：訂正微考観念法門私記、観念法門記、観念法門私記見聞、観念門記、行儀分記(善導著作の五部九巻の内、行儀分の注釈書を総称して)
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199(正治1)-1287(弘安10)
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、慶長16(1611、名古屋市蓬左文庫・叡山文庫)
2、宝永6(1709、大谷大・早稲田大・大正大・東京大・立正大・竜谷大・高野山真別所)
3、刊年不明(大谷大・東京大・東洋大・松ヶ丘文庫)
刊本の奥書刊記：1、(未調査)
2、(未調査)
3、(未調査)
活字本所載書：『浄全』4
参考文献：『観念法門私記冠註』(『浄全』4所収)
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘(島根県)に生まれる。1211(建暦1)同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214(建保2)比叡山で受戒、その後1236(嘉禎2)九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249(建長1)関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259(正元1)鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。
　本書は、善導の『観念法門』の注釈書であり、上下2巻よりなる。
　はじめに『観念法門』解釈するのに「大意」と「解題」と「解文」の3つに分けるとし、次にこれらについて順に述べる。先ず「大意」とは、善導の『観経疏』「玄義分」に述べる「観仏三昧」「念仏三昧」の行相について述べるものであるとし、「解題」は『観念法門』の具名「観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門」の内、観・念・相海・功徳・法門等を釈すことによって、題号全体を説明し、「解文」として『観念法門』に対して逐語的解釈を行うが、そこでは「大意」にそって、観仏・口称・心念等の相違、念仏または口称の遍数等の問題に言及する。まず観仏と心念については「観仏とは観仏三昧なり。謂く色相を観ず。心念とは念仏三昧なり。謂く名号を念ずるなり。口称と心念と倶に念仏なりと雖も口と意と異なるとす」とし、また「定心三昧とは即ち是れ観仏なり。口称三昧とは即ち是れ念仏なり。倶に行成に至れば即ち浄土を見る」というように口称と心念との異なりを示しながら、倶に三昧の状態において浄土を見るとする。また遍数については聖光の伝える法然のことばとして「善導の意は機に随て一万以上十万以下を勧めしむ」ことを示す。これは良忠自身が「念仏を挙ぐることは助正の義を知らしめて、正定の義を顕す。ただ行に助正有るには非ず」『浄全』4、p.246)とし、また「衆生の起

行既に千殊有り。経には一往を説く。堅く執すること莫れ」（『浄全』4、p.246）というように、多様な行者の機根に対応するように諸行が存在することを認める立場で解釈するものである。
　本書の成立は、良忠晩年、洛中において『往生礼讃私記』『法事讃私記』を撰した頃とされている。
作成者名：米沢実江子

観念法門私記見聞

書名よみ：かんねんほうもんしきけんもん
書名別名：大沢見聞、良栄見聞
著者名：良栄
著者名よみ：りょうえい
著者名別名：理本、高蓮社
著者生没年：1342（康永1）-1428（応永30）（？）
成立翻訳年：14c-15c
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
刊本
刊本所在：1、享保17（1732）
2、刊年不明（大正大・お茶の水図書館）
刊本の奥書刊記：1、（所在不明）
2、（未調査）
活字本所載書：『浄全』4
解説：良栄は、良忠・尊観（名越派の祖）・明心・妙観・聖観・良栄と続く名越派の人で聖観に師事した。また名越派中興の祖でもある。良栄の著書は「大沢見聞」と呼ばれ、名越派の重要な書として用いられた。
　本書は良忠（1199-1287）述『観念法門私記』の注釈書であり、上下2巻よりなる。
　良栄は、自らの解釈を述べる他に、「藤田（藤田派）」、「水沼（藤田派の祖性心）相伝」、「坂下（白旗派の祖良暁）」等の人師の解釈を挙げる。藤田派・白旗派の引用は、一つの語句の解釈例として藤田派を挙げる場合は白旗派については触れず、またその反対においても同様である。しかしこのような注記方法は同じ良栄の『法事讃私記見聞』では見られない。
作成者名：米沢実江子

観念法門私記見聞

書名よみ：かんねんほうもんしきけんもん
著者名：聖聡
著者名よみ：しょうそう
著者名別名：大蓮社酉誉聖聡、大蓮社、酉誉、酉師、酉公、聡師
著者生没年：1366（貞治5）-1440（永享12）
成立翻訳年：14c-15c
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、刊年不明（大谷大・竜谷大（1冊））
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
解説：聖聡は良忠・良暁（白旗派の祖）・定恵・了実・聖冏・聖聡と続く白旗派の人。幼年に明見寺（千葉県）において真言密教を学んだが、後1385（至徳2）に聖冏（浄土宗第7祖）の教義を聞き浄土教に帰依し、浄土宗第8祖となった。
　本書は良忠（1199-1287）述『観念法門私記』の注釈書であり、上下2巻よりなる。
　聖聡の『法事讃私記見聞』では「謙倉見聞」・「鎌倉御抄」・「記見聞」・「白旗直見聞」等、諸師の解釈をしばしば援用したが、本書においてはこの様な例はなく、「記云」、「水沼（藤田派の祖性心」・「水沼口筆」等という表現がよく用いられている。また良栄が挙げる『法事讃私記』の引文と聖聡の挙げる引文とが重なる場合、聖聡の解釈は良栄の解釈内容とほぼ同意であることが多く、また良栄の解釈に沿った形で増幅させている場合もあり、特に良栄の説を批判することはなく、このようなことから、聖聡は良栄の解釈をふまえて注釈していると考えられる。
　解釈は、基本的に衆生の行相の浅深、品位の異なりを前提とするものである。
作成者名：米沢実江子

観無量寿経科文

書名よみ：かんむりょうじゅきょうかもん
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
活字本所載書：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：佐藤哲英『念仏式の研究』（百華苑、1972）
解説：本書は散逸して伝わらない。佐藤哲英は本書を伝智顗の『観無量寿経疏』か善導の疏にちなんだ科文であると推測する。
作成者名：能島覚

観無量寿経記

書名よみ：かんむりょうじゅきょうき
著者名：員性禅師／真性禅師
著者名よみ：いんしょう／しんしょう
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：不明
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1、p.342）、『玄智録』3（『日仏全』1、p.515）、『蓮門録』（『日仏全』1、p.371）
解説：本書は現存が確認されておらず、内容は不明。書名より『観無量寿経』の注釈書と考えられる。『長西録』（『日仏全』1、p.342）では「員性」の「員」に対し、「員一作真」と細註を付す。なお『長西録』（「小山論文」p.215）では「員性禅師」とする。
作成者名：上杉智英

観無量寿経釈

書名よみ：かんむりょうじゅきょうしゃく
書名別名：観経釈
異本書名：観無量寿経私記、観経私記
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）

成立翻訳年：12c後半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、『浄土三部経釈』所収（『浄土三部経釈』の項を参照）
2、『漢語灯録』所収（『漢語灯録』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『浄土三部経釈』の項を参照
2、『漢語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『法然上人集』（「大日本文庫」仏教篇）、『漢語灯録』の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』1（春秋社、1989）、柴田泰山『傍訳　観無量寿経釈』上・下（四季社、2006-2007）
参考文献：住田智見「真本漢語灯録と三部経私記（一）」（『無尽灯』23-6、1918）、住田智見「真本漢語灯録と三部経私記（二）」（『無尽灯』23-10、1918）、今岡達音「三経釈と選択集との著作前後」（『仏教学』2-3、1925）、今岡達音「三経釈と選択集との著作前後」（『仏教学』2-6、1925）、岸一英「『逆修説法』と『三部経釈』」（『藤堂恭俊博士古稀記念　浄土宗典籍研究』研究篇、同朋舎出版、1988）
解説：法然の『観無量寿経』を解釈したもの。『浄土三部経釈』のうちの1つ。
　石井教道は、思想的に『逆修説法』・『選択集』より以前に成立したと推測する。古本『漢語灯録』第2、3巻末の識語によると、文治6年（1190）に、東大寺で講説したものとあるが、一方、岸一英によれば、その説に反対し、普段の講説の積み重ねたものと推論する。
　科段は、定前後、来意、釈名、釈二善義、入文解釈の大きく5つに分ける。
　内容は、「定前後」では、『無量寿経』と『観無量寿経』の成立順について検討する。「入文解釈」では、法然の一向念仏の教えの立場から、『観無量寿経』の文を解釈する。定散二善について解説し、付属の文といわれる念仏の要文を中心に論を展開しているようである。
　本書は文献的に他の『無量寿経釈』・『阿弥陀経釈』とともに問題がある。すなわち、これら3書は、『選択集』の文が、後世になって流入したと今岡達音は主張する。更に岸一英は、『広本選択集』以外の文であっても、付加された新層の部分があることを示唆する。したがって、それら3書の原意を知るには、新層を除き、古層に注視する必要がある。
作成者名：角野玄樹

観無量寿経十六想観画讃釈文

書名よみ：かんむりょうじゅきょうじゅうろくそうかんがさんしゃくもん
著者名：安国
著者名よみ：あんこく
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：中国または日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1、p.343）、『玄智録』3（『日仏全』2、p.516）、『蓮門録』（『日仏全』1、p.371）
参考文献：櫛田良洪「東寺宝菩提院蔵の浄土教の資料について」（『仏教史研究』4、1969）
解説：本書は現存が確認されておらず、内容は不明。櫛田良洪「東寺宝菩提院蔵の浄土教の資料について」（『仏教史研究』4、1969）によれば、三密蔵に鎌倉期古写本の残欠（三葉）があり、その丁数付けによって11葉から成っていたのではと推測されている。また最後の1葉の「為先師十三廻　遣迎院書写畢」の記述から西山派白河遣迎院と関係あることに注意を促されている。
作成者名：上杉智英

観無量寿経集註

書名よみ：かんむりょうじゅきょうしゅっちゅう
書名別名：観経註、観無量寿経註、観経集註、観無量寿経集註、観経阿弥陀経註、観経阿弥陀経集註、観阿弥陀経集註、観経弥陀経集註、観経弥陀経註
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、京都西本願寺蔵本（書写年不明、親鸞真筆本）
〈影印版〉：『観無量寿経集註　附阿弥陀経集註』（全人社、1944）
〈影印版〉：『観無量寿経註』（同朋舎出版、1980）
〈影印版〉：『増補親鸞聖人真蹟集成』7（法蔵館、2006）
2、高田専修寺蔵本（1318（文保2）、存覚書写）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（『阿弥陀経集註』巻末）此本者、以上人御真筆慥所奉写也、自去年丁巳（1317）季春之候至今茲戊牛（1318）暮秋之天、渉両載数月之居諸終一巻二経之書写訖、経文釈文之交行也、愚蒙易迷、大字小字之連点也、不審難明之間、為顧知慮、難致固辞、依願主慇懃之懇望、励小量随分之微功者也、努力努力可被止外見而已、右筆釈存覚二十九歳
活字本所載書：『定本親鸞聖人全集』註疏篇
参考文献：小川貫弌「観阿弥陀仏経集註について」（『印仏研』9-1、1961）、平野顕照　「親鸞聖人撰述観阿弥陀経集註について」（『親鸞聖人』、1961）、石田充之「「観経弥陀経集註」に示される親鸞聖人の思想について」（石田充之『親鸞教学の基礎的研究』、永田文昌堂、1970）、小川貫弌「観阿弥陀経集註について」（『定本親鸞聖人全集』別冊、法蔵館、1970）、川瀬和敬「高田山所蔵存覚手写本「観阿弥陀経集註」について」（『定本親鸞聖人全集』、法蔵館、1970）、宗兼利「親鸞教学の総合的研究　『観経弥陀経集註』における親鸞聖人の加点について」（『仏教文化研究所紀要』10、1971）、北山覚「＜観無量寿経・阿弥陀経集註＞について　その一」（『真宗研究会紀要』4、1973）、黒田覚忍「『集註』の思想傾向について」（『宗学院論集』48、1978）、門川徹真「『阿弥陀経集註』における『称讃浄土経』文所引の意味」（『真宗研究』25、1981）、森田真円「「観経弥陀経集註」の研究」（『印仏研』35-1、1986）、中村元「『観経阿弥陀経集註』声点索引」（『教学研究所紀要』6、1998）
解説：親鸞による『観無量寿経』の註記。
　註記文には、建保5年（1217）に発見されたとされる善導『般舟讃』からの引用がない事や、建暦1年（1211）頃に将来された『楽邦文類』を朱書している事などから、親鸞の若年期、特に法然膝下時代の註記であろうとされている。
　本書は、巻子本に『観無量寿経』本文を大書し、その行間、上下段、紙背に善導『観経疏』『観念法門』『往生礼讃』

や曇鸞『浄土論註』、『楽邦文類』などを註記している。
　註記の特色として、経文の記入されている表側にはそれぞれ直接的な経文解釈文が記され、紙背には偈文や独特な解釈、主張等を記している事が挙げられる。
　本書は基本的に註記のみで、親鸞の主張は見られないが、引用される典籍やその訓読方法、あるいは引用されなかった解釈文などを通して、当時の親鸞の思想を推測する事ができる。黒田覚忍はそれらの特色として、観察行の否定、信心の強調、機の反省などを挙げている。これらの点に関しては、黒田覚忍・宗兼利・石田充之論文を参照。
　本書は昭和18年（1943）に西本願寺寺宝調査の際、禿氏祐祥によって発見され紹介された。当時本書は特に題名はなく、単に『観無量寿経』とされており、別項『阿弥陀経集註』とは一具であったが、修理の際2冊に分離し『観無量寿経集註』とされた。
作成者名：藤田真隆

観無量寿経疏

書名よみ：かんむりょうじゅきょうしょ
著者名：智光
著者名よみ：ちこう
著者生没年：709（和銅2）-780（宝亀11）頃
成立翻訳年：8c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『仏典疏鈔目録』（『日仏全』1、p.214）、『浄土真宗教典志』3（『日仏全』1、p.515）
参考文献：井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、p.50）、章輝玉・石田瑞麿『新羅の浄土教・空也・良源・源信・良忍－叡山の浄土教－』（「浄土仏教の思想」6、講談社、1992、p.49）
解説：著者の略歴については『無量寿経論釈』の項を参照。
　本書はすでに散逸して伝わらないから内容は不明であるが、題名からすると『観無量寿経』の註釈であるとみなしうる。
作成者名：北条竜士

観無量寿経疏顕要記破文

書名よみ：かんむりょうじゅきょうしょけんようきはもん
書名別名：顕要記破文、顕要記破、破顕要記
著者名：源信（上巻）／覚運（下巻）
著者名よみ：げんしん／かくうん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公／檀那僧正
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）／953（天暦7）-1007（寛弘4）
成立翻訳年：997（長徳3）以降（？）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、叡山文庫真如蔵蔵本
2、西教寺正教蔵蔵本（1657（明暦3）、舜興書写）
3、叡山文庫無動寺蔵本（1817（文化14）、真超書写）
写本奥書：1、（未調査）
2、右者以宝園院本令書写之者也、明暦参＜丁酉＞歳（1657）八月吉日、江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵
3、（未調査）
刊本所在：1、天和2（1682、未調査）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『恵全』1、『日仏全』31、『大日本史料』2編2
参考文献：戸松憲千代「源清の観経疏顕要記について」（『宗学研究』17、1939）、安藤俊雄「恵心僧都と四明知礼―趙宋期における日中天台の交流―」（『仏教学セミナー』8・9、1969・1970、日本名僧論集『源信』、1983）
解説：長徳1年（995）、宋源清から送られてきた5書に対し、長徳3年（997）朝廷の命により撰述された日本天台からの公式な書評の内の1つで、源清撰『十六観経記』（観無量寿経疏顕要記）2巻に対する書評。
　著者は源信（上巻）、覚運（下巻）。
　成立年代は『元亨釈書』の「長徳三年四月。宋国送新書五部。彼土台徒之述也。所謂法華示珠指二巻。龍女成仏義一巻。十六観経記二巻。仏国荘厳論一巻。心印銘一巻。附而乞台教遺失書六部。此方学者有議新書者。因茲朝廷詔慈覚。智證両徒加毀破」の記述より長徳3年（997）以降と考えられる。
　内容は源清の解釈に対する讃辞が2点程みられるが、その他は引用の誤脱・解釈の誤り等の指摘である。
　なお批判の対象である源清撰『十六観経記』は現存していないが、その逸文は戸松憲千代により集成されている（「源清の観経疏顕要記について」（『宗学研究』17、1939））。
作成者名：上杉智英

観無量寿経疏末抄（仮題）

書名よみ：かんむりょうじゅきょうしょまっしょう
著者名：覚瑜
著者名よみ：かくゆ
著者名別名：覚愉、住心房、出阿、出雲路上人
著者生没年：1158（保元3）-1233（天福1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『浄土宗要集』5（『浄全』11、p.99）、『浄土宗要集見聞』5（『浄全』11、p.299）
参考文献：住田智見『浄土源流章解説』（法蔵館、1925）
解説：本書は現存せず、書名も不明である。
　良忠は『浄土宗要集』5において専雑二修と正雑二行の同異を論じる中で、「覚瑜上人また二行即二修の義を存す〈親しくその鈔を見よ〉」『浄全』11、p.99）と述べているが、「其鈔」について良栄は『浄土宗要集見聞』5において「親しくはその鈔を見よとは、四帖の疏に付して抄を造るなり」（『浄全』11、p.299）と註記していることからして、覚瑜が善導『観経疏』の末抄を著していたことが知られるのである。おそらく本書は、善導の「疏」に依拠して、覚瑜の立場である諸行本願義的側面から独自の教義を展開したものと思われる。
作成者名：伊藤瑛梨

観無量寿経中略要問答抄

書名よみ：かんむりょうじゅきょうちゅうりゃくようもんどうしょう
著者名：済暹
著者名よみ：さいせん
著者名別名：仁和寺済暹僧都、仁和寺済暹律師、南岳房僧都、暹僧都

著者生没年：1025（万寿2）-1115（永久3）
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『諸宗章疏録』（『日仏全』1）
参考文献：櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：本書は散逸して伝わらない。
　済暹は空海以来の東密を代表する学僧である。白河法皇の弟に当たる性信法親王に師事した。また、済暹の弟子には新義真言宗の覚鑁の師として知られる仁和寺の定尊がいる。その学系は東密のなかでも広沢流に属す。済暹の著述に関しては、その大半は散逸し、『大正蔵』に収められるものは12部である。しかし、智積院第28世謙順の編による『諸宗章疏録』によれば68部に及び、その浩瀚な著述によって空海以後の真言教学の大成に寄与した。そのなかで済暹の浄土教典籍は『諸宗章疏録』によると6部を伝えているが、全て散逸し、その内容を知ることはできない。しかし、良忠の『往生要集義記』に「仁和寺済暹律師勘文」（『浄全』15、p.242）として、基撰とされる『西方要決』に対する偽撰説を唱えていることが紹介されており、注目される。また、本書や済暹の著述と伝えられる『十六相観私記』の書名より、『観経』に注目した浄土教思想ではなかったかとの佐藤哲英による指摘もある。
作成者名：能島覚

羈中吟

書名よみ：きちゅうぎん
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1227（嘉禄3）
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『法然上人行状絵図』44（『法伝全』p.280、逸文あり）
解説：隆寛が、臨終時に唱えたとされる。「我きく、達磨和尚は配所のくさむらに跡をのこし慈恩大師は穢土のいほりに名をととむ。ひとりは、仏心宗の根源、ひとりは法相宗の高祖なり、大国なをしかり、いはんや辺州をや。上古又かくのごとし、いはむや末代をや。苦界やすからす、浮生ゆめのごとし、たゝ聖衆の来迎をのぞむ、更に有為の遷変をいたまず」
作成者名：伊藤茂樹

器朴論

書名よみ：きぼくろん
著者名：託何
著者名よみ：たくか、たくが
著者名別名：託阿、詫阿、他阿弥陀仏、七祖他阿、遊行七代、七祖上人、遊行七祖
著者生没年：1285（弘安8）-1354（文和3）
成立翻訳年：1342（康永1）-1354（文和3）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、竜谷大蔵本（1634（寛永11）、但阿弥陀仏書写）
写本奥書：1、此器朴論三巻吾宗七代祖佗何上人落陽七条金光寺特住之節御作也、則為御自筆被遊境葛籠有之、遊行三五代上人常州佐竹御在留之時申請書写之畢、校合畢、寛永十一年（1634）極月日、武州瀧山住南空十六歳軸屋但阿弥陀仏
刊本所在：1、宝永3（1706、未調査）
2、安永5（1776、国会図書館、未調査）
3、天明3（1783、未調査）
4、刊年不明（京都大・大正大・東京大・日比谷図書館・蓬左文庫）
刊本の奥書刊記：1、（跋）此書者宗門之鍵鑰也、久雖欲鏤梓短綆難汲、而既将止矣、或謂予曰若有未考文者何不出、凡例乎遵依斯言而採、託何上人之真翰任、本校対而属剞劂氏者也、藤沢山隠叟尊遵誌之、于時宝永三丙戌（1706）祀二月穀日、施主奥州南部光林寺存冏（未調査）
2、（奥書）此器朴論三巻者我宗玄樞也、宝永中有存冏師捨資鏤梓流伝于世、然罹回録変印板烏有可惜矣、我爰吾門宗将尊如上人慨歎此書苑湮没微、予興復之志予夙披方袍、浴法海一滴雖無力擲衣資幸得遇此勝縁、豈敢堪黙止耶、遂募有縁檀信再刻斯文永為仏光山蔵秘、伏翼広布于法界普垂不朽蕩九有、而再現仏国翻迷情而大成赫智、安永五年丙申（1776）三月既望平安城第五橋南荘厳教寺沙門覚阿旭堂謹識／（跋）此書者宗門之鍵鑰也、久雖欲鏤梓短綆難汲、而既将止矣、或謂予曰若有未考文者何不出、凡例乎遵依斯言而採、託何上人之真翰任、本校対而属剞劂氏者也、藤沢山隠叟尊遵誌之、于時宝永三丙戌（1706）祀二月穀日、施主奥州南部光林寺存冏（未調査）
3、（奥書）此器朴論三巻者我宗玄樞也、宝永中有存冏師捨資鏤梓流伝于世、然罹回録変印板烏有可惜矣、我爰吾門宗将尊如上人慨歎此書苑湮没微、予興復之志予夙披方袍、浴法海一滴雖無力擲衣資幸得遇此勝縁、豈敢堪黙止耶、遂募有縁檀信再刻斯文永為仏光山蔵秘、伏翼広布于法界普垂不朽蕩九有、而再現仏国翻迷情而大成赫智、安永五年丙申（1776）三月既望平安城第五橋南荘厳教寺沙門覚阿旭堂謹識／（跋）此書者宗門之鍵鑰也、久雖欲鏤梓短綆難汲、而既将止矣、或謂予曰若有未考文者何不出、凡例乎遵依斯言而採、託何上人之真翰任、本校対而属剞劂氏者也、藤沢山隠叟尊遵誌之、于時宝永三丙戌（1706）祀二月穀日、施主奥州南部光林寺存冏／（刊記）帝城書肆村上平楽寺寿梓（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『時宗全書』1、『定本時宗宗典』上、『大正蔵』84、『日仏全』67、『大日本校訂大蔵経』日本撰述部時宗、『国訳一切経』諸宗部22
現代語訳書：梅谷繁樹「七祖託何上人作『器朴論』私訳注」（『時宗教学研究』27-30、1999-2002）
参考文献：橘俊道『時宗史論考』（法蔵館、1975）、平田諦善『改版増補時宗教学の研究』（山喜房仏書林、1977）、河野憲善『一遍教学と時衆史の研究』（東洋文化出版、1981）、石田善人『一遍と時衆』（法蔵館、1996）、長沢昌幸「『器朴論』における一考察」『時宗教学年報』28、2000）、長沢昌幸「『器朴論』書誌考」（『時宗教学年報』29、2001）、長沢昌幸「他阿託何『器朴論』撰述とその時代背景」（『西山学苑研究紀要』5、2010）
解説：本書は時宗教学を体系化した時宗七祖託何の主著で、教団史上最も優れた教学概説書として評価されている。「器朴論」の書名は、本書末に「此法界に於て器有り朴有り、九界を朴と為し、十界を器と為す……其教門に八万四千の機法有り、故に釈に器朴万差と曰う」「茲に聖道に諸教宗族或ると雖も、苟に妙なること未だ兪とせず故に朴と言う、

浄土一宗は更に倫伍を詎、其の華爽曙なり、肆へに器と為す」とあって、聖浄二門などの器朴について論じることに拠るらしい。十五門から成り、前十四門が問答体形式、最後の一門が叙述形式、各門の標題は、第一聖浄難易門、第二本懐非懐本、第三二尊二教門、第四諸仏正覚門、第五諸教出離門、第六大小権実門、第七二種三昧門、第八成仏往生門、第九発菩提心門、第十有相無相門、第十一諸経通讃門、第十二念仏多福門、第十三末法弘通門、第十四臨終要心門、第十五祖々念仏門である。

内容は難解で、和漢の顕密禅律の経論疏等さらには外典にまで及ぶ幅広い典籍が引用されるが、宗祖一遍の法語は僅か数カ所に止まる。このことについて、石田善人は宗祖の論著に拠って立論できなかったところに当時の時衆教団の逢着していた問題の深刻さがうかがえるとするが、平田諦善は当時の教学界において各自それぞれ自宗の独尊を主張した時代に対応するものであって、述作が対他説得のためのものであり、宗門の祖師に関してむしろ口を閉じて語らず当然のこととしている様であるとする。

本書では第十四「即便当得は一機の始終なり」「弘願領解を信の因となし、念々称名を信の果となす。因果具足の信心はただ称名にあり、臨終と平生、即便と当得、不一不二のして余人の測らざるところなり」というように、西山義に由来する「即便往生」が随所で説かれいて、河野憲善はそこに宗祖一遍の「一遍の念仏」「当体の念仏」の真義が表明されているのであり、その顕彰のために七祖託何がいかに奮迅したかをうかがわせるものがあるという見解を述べている。他に『観経疏』を多く引用することから、託何が善導研究を通じ時宗教学の教義体系を善導に溯って構築する意図があったとする長沢昌幸の推察がある。本書は浄土教学の中で自宗の教学を体系的に位置付ようとしたものであったと考えられる。

作成者名：坪井直子

逆修説法

書名よみ：ぎゃくしゅせっぽう
異本書名：法然聖人御説法事、無縁集、師秀説草
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本
写本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、安土浄厳院蔵本（室町中期頃、書写者不明）
〈影印版〉:宇高良哲『『逆修説法』諸本の研究』（文化書院、1988）
3、『漢語灯録』所収（『漢語灯録』の項を参照）
4、京都法然院蔵本（1687（貞享4）、雲臥書写）
〈影印版〉:『藤堂恭俊博士古稀記念　浄土宗典籍研究』資料篇（同朋舎出版、1988）
5、東京通元院蔵本（書写年不明、書写者不明）
写本奥書：1、『西方指南抄』の項を参照
2、（奥書なし）
3、『漢語灯録』の項を参照
4、右於下総州豊田庄水飼戸郷関元之村客食祐福寺日為超蓮社月公和尚書写之偏想旧識不顧人嘲染禿毫而已乞願称名十念文明十七乙巳（1485）霜月四日、沙門恵月筆、法然上人御談師秀ハ安楽房ノ父逆修七々説相也此草述聞鈔ニモ引之、白旗沙門　叡誉門悦、心誉祐察、貞享四丁卯（1687）正月二十五日為報恩書写竟、証誉雲臥書、読要集記六云祖師説章者是也、決疑沢見聞二末五十五紙引之直牒六十一丁同、口決抄下三十一丁云師秀草、決疑抄四二十二丁外記大夫入道五十日逆修説法詞
5、（未調査）
刊本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『漢語灯録』所収（『漢語灯録』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『漢語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『藤堂恭俊博士古稀記念　浄土宗典籍研究』資料篇（同朋舎出版、1988）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『法然上人集』（「大日本文庫」仏教篇）、伊藤祐晃『浄土宗史の研究』（1956）、『西方指南抄』の項を参照、『漢語灯録』の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』2（春秋社、1989）、村瀬秀雄『浄土宗要義』（常念寺、1991）、真柄和人『傍訳逆修説法』上・下（四季社、2006-2007）
参考文献：宇高良哲「『逆修説法』諸本比較」（『藤堂恭俊博士古稀記念　浄土宗典籍研究』研究篇、同朋舎出版、1988）、大谷旭雄「逆修法会の成立史的研究―成立年次と成立時の形態考―」（『藤堂恭俊博士古稀記念　浄土宗典籍研究』研究篇、同朋舎出版、1988）、林田康順「法然上人『逆修説法』諸本の比較研究」（『印仏研』45-2、1997）、林田康順「恵空書写本漢語灯録所収『逆修説法』について」（『仏教論叢』41、1997）
解説：法然が、中原師秀（法然門下の安楽房遵西の父）の逆修法要のさい、講説したものとされる。『漢語灯録』所収本の奥書などによると、初七日から六七日まで、法然が説法したとされ、残りの七七日の説法は、弟子の感西がしたとされる。

石井教道は、『浄土三部経釈』と『選択集』との間に成立したと推測する。大谷旭雄は、建久5年（1194）頃の成立と推測する。

内容は、主に浄土三部経の解釈と、阿弥陀仏の功徳について解説する。前者では、本願の文や付属の文などの念仏の要文をとりあげ、解釈を加える。選択思想も説く。後者では、阿弥陀仏の仏身や、名号の功徳などについて論じる。

作成者名：角野玄樹

憬興師云

書名よみ：きょうごうしいわく
著者名：親鸞（編）／真仏（編）／不明（編）
著者名よみ：しんらん／しんぶつ
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師//
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長3）/1209（承元3）-1258（正嘉2）/不明
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（鎌倉期、親鸞・真仏など書写）

写本奥書：1、（奥書なし）
活字本所載書：生桑完明「資料複刻　憬興師云」（『高田学報』53、1964）
参考文献：生桑完明「資料複刻　憬興師云」（『高田学報』53、1964）、平松令三『親鸞真蹟の研究』（法蔵館、1988）
解説：様々な文を抜き書きしたノートのようなもの。筆記者も複数おり、親鸞や真仏やその他の人による。冒頭が「憬興師云」から始まるので、外題にこの名が名づけられたようである。
　内容は、憬興『無量寿経連義述文賛』の引用文、『大般涅槃経』の取意文、法然消息「九条殿北政所御返事」の文、字訓を記したもの、親鸞『教行信証』の引用文、道綽『安楽集』の引用文（2文）、宗暁『楽邦文類』の引用文である。
作成者名：角野玄樹

経釈文聞書

書名よみ：きょうしゃくもんききがき
著者名：真仏
著者名よみ：しんぶつ
著者生没年：1209（承元3）-1258（正嘉2）
成立翻訳年：1255（建長7）-1258（正嘉2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（鎌倉初期、真仏真筆本）〈影印版〉:『真仏上人集』（『高田古典』1、真宗高田派宗務所、1996）
写本奥書：1、（奥書なし）
活字本所載書：『真宗史料集成』1、『高田学報』9（1934）
参考文献：竹内宜啓「経釈文聞書解説」（『高田学報』9、1934）、生桑完明「経釈文聞書」（『高田学報』41、43、44、1957-1958）、赤松俊秀「『師子身中の虫』と『諸仏等同』について」（赤松俊秀『鎌倉仏教の研究』、平楽寺書店、1957）、佐々木覚爾「『経釈文聞書』の成立について」（『印仏研』50-1、2001）、永村真「中世高田門徒の「聖教」－真仏撰述の抄物を通して－」（速水侑編『日本社会の仏と神』、吉川弘文館、2006）
解説：真仏によって集められた諸経論計25文の抜き書き。
　著者真仏は承元3年（1209）誕生。常陸国真壁の武士、椎尾氏の出身であるとされる。親鸞の教えをうけ、専修寺を主な活動拠点とし、関東を中心として専修念仏を弘めた。初期真宗教界において真仏の影響の大きい事は、現在本願寺教団以外の真宗教団において、真仏を親鸞につぐ祖として仰いでいることからも知ることが出来る。正嘉2年（1258）、師親鸞に先だって往生したとされる。真仏の事跡については不明な点が多く、没年を弘長1年（1261）とする説もある。真仏については常磐井慈裕「史上の真仏」（『武蔵野女子大学仏教文化研究所紀要』15、1997）を参照。
　本書には奥書がなく、成立年代を特定することは出来ないが、生桑完明は、建長8年（1256）に真仏が親鸞のもとに上京したことが『三河念仏相承日記』にみえるので、その時に親鸞の手許にあった経典等を書写したのであろうと推測している。
　一方、本書に引用される『蓮華面経』『法事讃』などの文が、建長7年（1255）と推測される9月2日付慈信房宛消息の中に見えているので、それを見た真仏が、後にそれらを調べたのであろうと推測したのが赤松俊秀であり、本書の成立と善鸞事件との関係に注目している。これを受けて佐々木覚爾は、引用される『大品経』『華厳経』『無量寿経』などの文に注目し、正嘉1年（1257）末頃から同2年（1258）の間に、関東において書写されたと指摘する。
　本書には、「親鸞聖人曰、教行証言」として『教行信証』「行文類」自釈部分が引用されている他、『親鸞夢記』も引用されている。
　引用される経論には次のようなものがある。
　『蓮華面経』1文、善導『法事讃』1文、親鸞『教行信証』1文、憬興『無量寿経連義述文賛』1文、『大般涅槃経』4文、『華厳経』2文、『妙法蓮華経』5文、『無量寿経』1文、『般若経』1文、『業報差別経』1文、『法句譬喩経』1文、『焼法門誦文』1文、『親鸞夢記』1文、『観世音菩薩往生浄土本縁経』2文、『観仏三昧経』1文、『平等覚経』1文。
　ただし経典名が同じであっても、現存経典には本文が見られない場合もあり、出典未詳の場合もある。この点については生桑完明論文を参照。
作成者名：藤田真隆

経釈要文／二尊大悲本懐

書名よみ：きょうしゃくようもん／にそんだいひほんがい
書名別名：二尊大悲、大悲本懐
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：12c末-13c半ば
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、京都東本願寺蔵本（鎌倉初期、親鸞真筆本）〈影印版〉:『親鸞聖人真蹟集成』9（法蔵館、1974）
2、高田専修寺蔵本（延慶2（1309）以前、顕智書写）〈影印版〉:雲村賢淳『真蹟本　二尊大悲本懐の研究』（法蔵館、1986）
3、京都西本願寺蔵本（鎌倉後期、覚如書写、裏書蓮如）〈影印版〉:雲村賢淳『真蹟本　二尊大悲本懐の研究』（法蔵館、1986）
4、小松本覚寺蔵本（室町期、蓮如書写）〈影印版〉:福原亮厳『親鸞聖人遺文　二尊大悲本懐の研究』（永田文昌堂、1968）
写本奥書：1、二尊大悲本懐、開山聖人真蹟也、釈従如（花押）
2、以親鸞聖人真筆御本書写之
3、文明捨七年乙巳（1475）七月二十八日、蓮如（花押）、右此本尊者、覚如上人之手跡也、而間令破損間、奉修覆也
4、延享四丁卯歳（1747）十月十五日書之、二尊大悲蓮如大和尚真跡也、可為一家所立竪相承一巻者也、為後証今末弟従如加筆［■］、和州箸尾冨田教行寺常住物也
活字本所載書：『真聖全』5、『親鸞聖人全集』写伝篇2
参考文献：福原亮厳『親鸞聖人遺文　二尊大悲本懐の研究』（永田文昌堂、1968）、雲村賢淳『真蹟本　二尊大悲本懐の研究』（法蔵館、1986）
解説：本書は昭和23年（1948）に日下無倫によって東本願寺宝庫から発見されたもので、その裏書にあるように「二尊大悲本懐」の名で伝えられており、一方、西本願寺蔵本は「経釈要文」の名のもとに伝えられている。
　本書は、釈迦、弥陀二尊の大悲によって信心を得、無上覚を証することを軸仕立で示したもの。全体は六段で構成されており、1段目には源信の『往生要集』、覚運の『念仏宝号』を、第2、3段目には「一大教主 釈迦如来 出世素懐 唯説弥陀 大悲誓願」など、釈迦の大悲について、第4、5段目には、その弥陀の大悲は「一切を引摂」するとし、「仏

智を信受する」者は「無上覚を証す」としている。第6段目には『無量寿経』の五徳瑞現を引用している。1段目に引用される『念仏宝号』については、『浄土和讃』「諸経讃」の「久遠実成阿弥陀仏　五濁の凡夫をあはれみて　釈迦牟尼仏としめしてぞ　迦耶城には応現する」の典拠となったと思われ、法然にはみられない久遠実成説を説く親鸞の仏身観を知る上で注目されている。また西本願寺蔵本の裏書きに「此本尊者」と記されており、本書が名号本尊成立以前の可能性もある事から、親鸞の本尊観を知る上で注目される。

なお本書の成立については、60歳代とする説、80歳代とする説があり、断定できない。

作成者名：藤田真隆

具三心義

書名よみ：ぐさんじんぎ
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1216（建保4）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉後期、湛睿書写）
写本奥書：1、（上巻）具三心義上巻権律師隆寛記之
（下巻）建保四年（1216）二月十三日手自一校訖、権律師隆寛記之、山城宇治群是野郷如形點了
活字本所載書：平井正戒『隆寛律師の浄土教　附遺文篇』、『日大蔵』90、安井広度『隆寛律師全集』、安井広度『法然門下の教学』付録、『金沢文庫資料全書』4、石田充之「金沢文庫蔵隆寛律師遺著『具三心義』本文と解説」（『宗学院論輯』25、1976）、石田充之「金沢文庫蔵隆寛律師遺著『具三心義』本文と解説（続キ）」（『宗学院論輯』27、1976）
参考文献：塚本善隆「金沢文庫の鎌倉古鈔浄土宗典―特に長楽寺隆寛派の資料に就いて―」（『顕真学報』3-3、1934）、安井広度『法然門下の教学』（法蔵館、1938）p.276、平井正戒「隆寛律師の浄土教」（国書刊行会、1941）p.30、石田充之「金沢文庫蔵隆寛律師遺著『具三心義』本文と解説」（『宗学院論輯』25、1976）
解説：隆寛の三心の解釈について説かれた書。上下二巻の書物で、三章に分かれている。下巻の奥書きからみえるように建保4年（1214）、隆寛69歳の時の著作である。法然門流の重要な課題である安心の解釈について、『観経疏』上品上生段の三心釈の文に細釈をほどこしている。内容は第1章は「総明三心義」、第2章「別明三心義」、第3章に「総結三心義」となっており、上巻は第1、2章の至誠心釈まで、下巻は2章の深心釈から第3章までとなっている。隆寛は、凡夫には三毒があるため自らで真実心を起こすことが出来ない。そのため、阿弥陀仏の本願に帰す心を真実心と捉え、自力での真実心を捨て、他力の真実心を主張するところに特色があり、当時の仏教界での真実心の概念とは大きく異なっている。念仏・諸行ともに三心を具足することが往生行としての基準であり、三心を具足しない行は廻心して他力念仏に帰す。本書にはこのような信を重視する隆寛の三心釈が明瞭に説かれている。『極楽浄土宗義』『散善義問答』等とともに隆寛教学の研究をするには重要な書物である。

現存する写本は金沢文庫にある。上下巻の表紙には共に湛睿と署名があり湛睿の所持本である。本書は発見当初、下巻の奥書に「手自一校訖」とあるので隆寛の自筆として考えられたが、すぐに否定された。理由は隆寛真筆の東寺三密蔵の『天台学生式問答』の奥書の筆跡と本書の筆跡は異なり、同文庫に所蔵される他の湛睿書写本と同筆であるからである。同文庫には隆寛の著作が多数残るが、その内でも唯一、上下巻がすべて揃って残っている書物として貴重である。

作成者名：伊藤茂樹

九条殿下の北政所へ進する御返事

書名よみ：くじょうでんかのきたのまんどころへしんずるごへんじ
異本書名：九条殿北政所御返事
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
4、大阪柏原光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』（室町末期から江戸初期、釈乗敬書写（？））所収（大阪柏原光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』の項を参照）
〈影印版〉：伊藤真宏「光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』について」（『仏教大学仏教学会紀要』6、1998）
写本奥書：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『和語灯録』の項を参照
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
4、大阪柏原光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』の項を参照
刊本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『和語灯録』の項を参照
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『定本法然上人全集』7（山喜房仏書林、1982）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『高僧名著全集』4、『国文東方仏教叢書』2-4、『西方指南抄』の項を参照、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照、大阪柏原光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』3（春秋社、1989）、石丸晶子『法然の手紙』（人文書院、1991）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
参考文献：『西方指南抄』の項を参照、『和語灯録』の項を参照、大阪柏原光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』の項を参照
解説：法然が九条兼実の正室へ宛てたとされる手紙。

多賀宗隼の『玉葉索引』（吉川弘文館、1974）によるとこの兼実の正室は、長男良通や良尋の母で、藤原季行の娘

であると指摘され、生没年は1152年（仁平2）から1201年（建仁1）とされる。仮に本消息が法然真撰でかつ兼実の正室に宛てたことが歴史的事実とするならば、『玉葉』の記事から法然と兼実の関係がはじまると推測される1189年（文治5）以前から正室の没年である1201年までの成立となる。

内容について。余行は貴い行であるけれども、念仏のほうがすばらしい行だとする。その理由として、念仏は阿弥陀仏の本願の行、釈迦の付属の行で、六方諸仏の証誠の行だからと説く。それなのに往生の道に疎い人は、余行に堪えられないので容易な念仏をするのだというが、それはとんでもない間違いだと誡める。というのも余行を勧めないのは、余行が根本的に三仏の本願・付属・証誠の行ではないからである。そして恵心の『往生要集』の「往生之業念仏為本」という文を示し、それを念仏を勧める根拠とする。また、善導『観経疏』では一向専修の念仏がよいと説かれていることや、『無量寿経』の「一向専念無量寿仏」の文を取りあげ、一向専修の念仏をすべきと主張する。そして「一向」とは二向・三向に対立するもので、余行を選び捨てて嫌い除くことであると説く。

また念仏がすばらしい行であることの証拠として、『往生要集』には行の中でも念仏が勝れていると説かれていること、および最澄の「七難消滅の法」なるものに「念仏をつとむべし」という趣旨があることなどを指摘する。

このように現世後生の行の中でも、念仏以上のものはないと述べ、一向専修の但念仏をすべきことを説く。

作成者名：角野玄樹

愚禿鈔

書名よみ：ぐとくしょう／ぐどくしょう
書名別名：愚禿抄、二巻鈔
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：1255（建長7）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（1293（永仁1）、顕智書写）〈影印版〉:『顕智上人集』上（「高田古典」2、真宗高田派宗務院、1999）
2、京都常楽寺蔵本（1340（暦応3）、存覚書写、下巻のみ）
3、京都常楽寺蔵本（1342（康永元）、存覚・他不明書写、上巻のみ）
4、高田専修寺蔵本（1414（寛正5）、真慧書写）
5、越後浄興寺蔵本（1434（永享6）、周観書写）
6、京都西本願寺蔵本（1446（文安3）、蓮如書写）
7、京都西本願寺蔵本（1469（応仁3）、書写者不明）
8、和歌山真光寺蔵本（室町末期、書写者不明）
9、大阪願得寺蔵本（室町末期、実悟（？））
10、大阪光得寺蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、（上巻末）建長七歳乙卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八十三歳／永仁元年癸巳（1293）十月六日書写之
（上巻裏書）永正十一甲戌（1514）林鐘中澣応真上人御下着、厚木信濃前司藤原定広預申候処也
（下本巻裏書）永正十一天（1514）六月中旬応真上人御下着、厚木信濃前司藤原定広預申候処也
（下末巻裏書）自応真上人アツカリ申ス、厚木信濃前司藤原定広（花押）、永正十一天（1514）林鏡
2、本云／建長七歳乙卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八十三歳／暦応三歳庚辰（1340）十二月二十五日書写之、件写本者以右御真筆所書写之本也、註麁以下坐筆不思様之間回愚案任自由書之点文同前不及写之者也、展転書写之間非無其誤歟、但本失錯歟、自僻案歟、只就愚推之所覃令自専許也、不須及他見而已、存覚五十一歳
3、本云／建長七歳乙卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八十三歳／先年随得本且書下帖今日為満部追写当巻只為備自見、乍振折臂初三丁余雖励之猶不堪之間仮両筆終一帖畢坐筆麁註等任自由之愚案之子細如載下帖之奥而已、于時康永元年壬午（1342）九月十一日記之、存覚五十三歳
4、（上巻末）建長七歳乙卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八十三歳／永仁元年癸巳（1293）十月六日書写之
（上巻裏書）于時寛正五歳／永正十一甲戌林鐘中厚木信濃守預申処也、愚禿鈔上
（下巻裏書）永正十一甲戌九月中旬従応真上人厚木信濃守預り申、愚禿鈔下
5、（巻末）本云／暦応四歳辛巳（1341）閏四月六日奉書写、釈宗昭七十二歳
（上下巻末）愚禿鈔大谷本願寺開山御作也、永享六年（1434）二月十三日令周観上洛之時蒙存如上人御免奉書写者也、後第一如経法可奉信仰也、濁世末代之罪忽生死之凡夫非彼上人勧化者誰出離生死遂往生極楽不退之土哉
6、（上巻）本云／建長七歳乙卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八十三歳／本奥云／先年随得本且書下帖今日為満部追写当巻只為備自見、乍振折臂初三丁余雖励之猶不堪之間仮両筆終一帖畢坐筆麁註等任自由之愚案之子細如載下帖之奥而已、于時康永元年壬午（1342）九月十一日記之、存覚五十三歳
（下巻）本云／建長七［■■］卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八十三歳／暦応三歳庚辰（1340）十二月二十五日書写之、件写本者以右御真筆所書写之本也、註麁以下坐筆不思様之間回愚案任自由書之点文同前不及写之者也、展転書写之間非無其誤歟、但本失錯歟、自僻案歟、只就愚推之所覃令自専許也、不須及他見而已、存覚七十一歳／時也文安第参（1446）初春中旬之比奉漸筆訖於写本者本遇寺［■■］借秘本令書写処也、右筆蓮三十二歳
7、（未調査）
8、建長七歳乙卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八十三歳／本云／正応弐歳己巳（1289）十一月六日令書写之訖、写本者以親鸞聖人御自筆令書被催汲流而不忌源之志不顧筆点謬悪筆之至者也而已、覚如、建武二年乙亥（1335）十一月三日
（最後の一紙）今度宗旨為帰依而深懇望故自筆之写本其外二冊又仮名書相添以授与源秀也、康永元年（1342）三月下旬
9、（上下巻共）本云／建長七歳乙卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八十三歳
（表紙上下巻共）釈実悟
10、（上巻）本云／建長七歳乙卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八十三歳
（下巻）本云／建長七歳乙卯（1255）八月二十七日書之、愚禿親鸞八三十歳
刊本所在：1、寛永13（1636、大谷大・竜谷大）
2、明和2（1765、大谷大・竜谷大、『真宗法要』所収）
3、文化8（1811、大谷大・竜谷大、『真宗仮名聖教』所収）
4、天保14（1843、大谷大・竜谷大）
5、天保15（1844、竜谷大）
6、嘉永7（1854、大谷大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、寛永丙子（1636）仲冬吉旦、西村又左衛門新刊

2、（未調査）
3、（未調査）
4、天保十四稔癸卯（1843）八月御開版、調進所、有慶堂、室町通高辻北、中嶋利左衛門
5、天保十五申辰（1844）四月、東六条下珠数屋町、丁字屋九郎右衛門梓行
6、寛永丙子（1636）仲冬新刊、嘉永七申寅年（1854）再刊、皇都書肆、東六条下珠数屋町丁子屋、西村九郎右衛門
活字本所載書：『真聖全』2、『浄土真宗聖典－原典版－』、『真宗聖典』、『定本親鸞聖人全集』漢文編、『新編真宗聖教全書』5　親鸞聖人集1、『真宗史料集成』1、『大正蔵』83（No.2648）、伊藤義賢『真蹟古写本　祖典三書合本』（竹下学寮出版部、1933）
現代語訳書：真継伸彦「愚禿鈔」（『現代語訳親鸞全集』3、法蔵館、1982）、石田瑞麿「愚禿鈔」（『親鸞全集』3、春秋社、1985）、福永昊淳・竹井徹「愚禿鈔」（『傍訳親鸞聖人著作全集』5、四季社、2001）
参考文献：村上専精『改訂　愚禿鈔講義』（法蔵館、1928）、生桑完明「愚禿鈔顕智上人書写本解説」（『高田学報』22、1938）、武生譲「造意の縁由を課題とする「愚禿鈔」の研究」（『大谷大学研究年報』7、1954）、武生譲「愚禿鈔の問題と摧邪輪の所論」（『真宗研究』4、1959）、灘本愛慈『愚禿鈔要義』（永田文昌堂、1972）、藤原幸章『愚禿鈔講叢』（東本願寺出版部、1978）、安藤章仁・佐波真「愚禿鈔」、佐波真「寛正五年本」（『顕智上人集』上、「高田古典」2、真宗高田派宗務院、1999）
解説：親鸞の著作。上下2巻（高田専修寺蔵、顕智書写本は3巻）からなり、上巻では大乗仏教、小乗仏教の二者択一にはじまって、阿弥陀如来の選択本願念仏の教えがもっとも勝れているとするいわゆる二双四重の教相判釈について論を展開している。下巻では、善導『観経疏』「散善義」の三心釈を引用し、善導の三心釈には自力の三心と他力の三心が説かれている事をあきらかにして、他力信心に帰する事を勧めている。上巻が教相をあきらかにしているのに対して、下巻は安心をあきらかにしているとみる事が出来る。

本書は真筆本が現存せず、最古の写本である正応2年（1289）覚如書写本も現存していない。現存する最古の書写本は、永仁1年（1293）顕智書写本で、それから約50年後の存覚書写本も現存する。

顕智書写本と存覚書写本との間には、文字の異なりや本文位置の違いがある事から、『定本親鸞聖人全集』ではそれぞれ別本として取り上げている。

本書の成立年時は、存覚書写本の奥書から建長7年（1255）とされてきたが、上下巻ともに同じ奥書となっており、一日で上下2巻を著したとは考えがたい事から、建長7年（1255）の奥書は清書時の奥書と推測されている。村上専精は、本書に往還二回向や三経の隠顕を説かない事などから、本書成立を『教行信証』成立以前とし、法然座下にあった時代のメモを整理したものがその原型ではないかとする説を示している。しかし、本書には『般舟讃』が引用されており、『般舟讃』の発見年代を考慮すると、現在では賛同し難い説となっている。一方、顕智書写本には上巻のみに奥書があり、下巻にはないので、本書は未完のままなのではないかとする見解もある。また本書成立事情を、明恵の『摧邪輪』への反論とする見解もあるが、親鸞は『摧邪輪』を見ていないのではないかとする者もある。
作成者名：藤田真隆

九品寺見聞集

書名よみ：くほんじけんもんしゅう
書名別名：選択見聞集
著者名：長西（？）
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c（？）
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『選択集私聚鈔』5（13丁右、30丁右、ともに逸文あり）
参考文献：石橋誠道『九品寺流長西教義の研究』（国書刊行会、再刊1984）、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』下（大東出版社、1977）
解説：智円（？-1372）の『選択集私聚鈔』（暦応3年（1340）頃成立）中に引かれる典籍。智円は西山流六角派の祖である了音の孫弟子にあたり、『選択集』のほか五部九巻のそれぞれにつき「私聚鈔」を著して諸派の説を対比し、派義の顕彰に努めた。『選択集私聚鈔』においても、『選択集』解釈をめぐる諸派の異説が随所に紹介されており、『九品寺見聞集』もその一つとして引用されている。

『選択集私聚鈔』に引かれる『九品寺見聞集』を長西の著作と認定し、『選択見聞集』として紹介したのは石橋誠道である（『九品寺流長西教義の研究』、p.43）。しかし『九品寺見聞集』（『選択見聞集』）を長西の著と判定できる根拠は存在せず、今後慎重な検討を要すると思われる。なお金沢文庫には、『観経疏』『法事讃』の「見聞集」が現存している（著者未詳）。これらの典籍と『選択見聞集』との関係は不明であるが、あるいは同一著者による一連の著作の可能性もある。
作成者名：吉田淳雄

熊谷の入道へつかはす御返事（九月十六日付）

書名よみ：くまがやのにゅうどうへつかわすごへんじ（くがつじゅうろくにちづけ）
書名別名：熊谷入道へつかはす御返事
異本書名：九条殿北政所御返事、津戸三郎へつかはす御返事
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初頭
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『憬興師云』所収（『憬興師云』の項を参照）
3、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
4、『法然上人伝記』（『九巻伝』）所収（『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照）
5、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
写本奥書：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『憬興師云』の項を参照
3、『和語灯録』の項を参照
4、『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照
5、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照

刊本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『和語灯録』の項を参照
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『定本法然上人全集』7（山喜房仏書林、1982）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『国文東方仏教叢書』2-4、『西方指南抄』の項を参照、『憬興師云』の項を参照、『和語灯録』の項を参照、『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』3（春秋社、1989）、石丸晶子『法然の手紙』（人文書院、1991）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
参考文献：平松令三「新発見の親鸞聖人真蹟　法然上人御消息」（平松令三『親鸞真蹟の研究』法蔵館、1988）、『西方指南抄』の項を参照、『和語灯録』の項を参照
解説：法然が記したとされる短文の手紙。送り先の相手については、伝承によると、熊谷直実宛説、九条殿北政所宛説、津戸三郎宛説の3説がある。この送り先の相手についての議論は、平松令三によってなされている。ただし、平松令三の議論の中には、津戸三郎宛説は入っていない。
　熊谷直実宛説は『和語灯録』所収本の題名が根拠である。九条殿北政所宛説は『憬興師云』所収本の末尾の「九条殿北政所御返事」の記述が根拠となっている。また、『西方指南抄』も本消息の前に「九条殿北政所御返事」と題する消息があり、その消息と連続して本消息が収録されているので、九条殿北政所宛説を支持していると平松令三は考えている。津戸三郎宛説は『法然上人伝記』（『九巻伝』）『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の記載が根拠となっている。3説いずれとも決し難いようである。平松は、断定は避けているようだが、内容上の印象から、どちらかというと熊谷直実宛説に傾いているように見受けられる。
　熊谷直実は、武蔵国の武士。『吾妻鑑』によれば、久下氏との領地騒動で裁判となる。その際、採決に不服で、将軍頼朝の前で髻を切り、そのまま逐電する（建久3年（1192））。そののち出家したと予想され、法然の伝記などでは法然門下に入門したとされる。関東下向の際の逆馬や、上品上生の願、予告往生などの話しは、直実の気性をよくあらわしているということで有名である。
　九条殿北政所、津戸三郎についての解説は、別項目の『九条殿下の北政所へ進する御返事』・『津戸の三郎入道へつかはす御返事（九月十八日付）』などの解説を参照。
　本消息は短いもので、今回の生で往生するのだと思いきりなさい、念仏を怠らず、決定往生の道理を知ってくださいと勧めている。
作成者名：角野玄樹

黒谷聖人御消息

書名よみ：くろだにしょうにんごしょうそく
著者名：法然（著）／不明（編）
著者名よみ：ほうねん／
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師/
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）/
成立翻訳年：室町期（？）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、大阪柏原光徳寺蔵（室町末期から江戸初期、釈乗敬書写（？））
〈影印版〉:伊藤真宏「光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』について」（『仏教大学仏教学会紀要』6、1998）
写本奥書：1、（奥書なし）
活字本所載書：伊藤真宏「光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』について」（『仏教大学仏教学会紀要』6、1998）
参考文献：伊藤真宏「光徳寺蔵『黒谷聖人御消息』について」（『仏教大学仏教学会紀要』6、1998）
解説：法然の手紙を編集した文献。編者は不明。釈乗敬（1563-1643）が書写したものと予想される。
　奥書がないため、成立年次は不明だが、伊藤真宏は、釈乗敬が筆した光徳寺蔵『法然聖人御詞』と同筆と推測し、本書も釈乗敬のものとする。室町末期から江戸初期の書写と考えられる。
　内容は、法然のものとされる手紙で、九条北政所へ宛てたものと、鎌倉2位の禅尼に宛てたものの2通である。
作成者名：角野玄樹

黒谷上人語灯録（漢語）

書名よみ：くろだにしょうにんごとうろく
書名別名：円光大師語灯録（漢語）、黒谷語灯録（漢語）、漢語灯録
著者名：法然（著）／道光（編）
著者名よみ：ほうねん／どうこう
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師／了恵、望西楼、蓮華堂、広済和尚
著者生没年：1133（長承2）- 1212（建暦2）／1243（寛元1）- 1330（元徳2）
成立翻訳年：1274（文永11）
成立地：日本
巻数：10
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、安土浄厳院蔵本（1430（永享2）、隆堯書写、巻7）
〈影印版〉:宇高良哲編著『『逆修説法』諸本の研究』（文化書院、1988）
2、千葉川善照寺蔵本（江戸後期、書写者不明、10巻3冊）
3、大谷大蔵本（江戸後期、書写者不明、10巻6冊）
4、名古屋祐誓寺蔵本（江戸後期、書写者不明、10巻6冊）
5、金沢大蔵本（1826（文政9）、恵温書写、『漢語灯録抜文』1冊）
6、竜谷大蔵本（1909（明治42）、書写者不明、10巻3冊）
7、大谷大蔵本（1909（明治42）、書写者不明、10巻6冊）
写本奥書：1、永享二庚戌年（1430）四月二十五日於金勝寺谷草庵書写之畢、南無阿弥陀仏、後見一反、右筆法印隆堯、六十二／隆堯法印真筆黒谷漢語灯録第七巻一冊寄付江州浄厳院常住畢、元禄十年丁丑（1697）孟夏二十七日、洛東獅谷忍澂（花押）／此真筆一巻令感得之者也、月日、当院十四世興誉（花押）
2、（巻第3）今云、明応六丁以巳年（1497）二月十一日、一校畢、徳誉／私云、此一巻与現行印本号三経釈別本也、初二経釈者同板本故不写、此巻者不同故写之畢、元禄十一年寅（1698）冬臘月中旬写此巻畢、所持恵空、此巻二十六紙（巻第7）写本者義山公自三輪借出一本再以二尊院之蔵本校之、今以彼校本写之畢、元禄十一年（1698）八月写此

巻校、恵空（巻第8）本云、嘉元四年（1306）八月五日以蓮花堂正本書写了、覚唱／写本云、永徳三癸亥（1563）五九日於三光院北坊令書写畢、吉水末流導見／時也嘉慶戊辰（1808）八月二十一日於忌尸道場観音寺書写畢、快尊／右此録者古本従来迎寺令息借奉写書之矣、願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界必彼見之貴賤奉仰十念之廻向者也、于時明応元年（1492）十二月一日、南無阿弥陀仏、円空和尚／于時明応五年（1496）卯月二十六日書写畢、筆者云々／第八巻紙数三十二張／元禄十一年（1698）寅九月五日校合此巻竟、所持恵空（巻第10）応永八年辛巳（1401）卯月二十八日根本書写人専覧御房、至十二丁目書写其奥残已遂往生畢、故依相伝人誂令続筆畢、右筆賢照／右此録者古本従来迎寺令恩借奉書写之矣、願遠伝末代広及諸人自他同生極楽世界、必披見之貴賤奉仰十念回向者也、于時明応元年（1492）十二月一日、南無阿弥陀仏、円定和尚、此一巻紙三十九張／此巻書写元禄七年戊（1694）極月九日之夜功畢、根本和州三輪之本書写之後以二尊院之蔵本校合之、今写本良照和尚本也、墨付三十九丁、主恵空得岸

3、（2に同じ。ただし巻10の「円空和尚」が「円定和尚」となっている）

4、（未調査）

5、（未調査）

6、（未調査）

7、（未調査）

刊本所在：1、正徳1（1711、佐々木求巳氏、11巻9冊）

2、正徳5以降（1715以降、大阪府立大（1、4欠）・立正佼成会附属佼成図書館（9冊）・佐々木求巳氏・大正大・ハーバード燕京図書館・仏教大・麗沢大、11巻9冊）

3、正徳5以降（1715以降、東洋大・竜谷大、10巻8冊）

4、正徳5以降（1715以降、大谷大・新城ふるさと情報館牧野文庫、11巻7冊）

5、文化4以降（1807以降、佐々木求巳氏・金沢文庫、11巻7冊）

6、文化4以降（1807以降、以降（大谷大・佐々木求巳氏・仏教大、11巻7冊）

7、文化4以降（1807以降、以降（大谷大・千葉県立中央図書館・竜谷大）

8、刊年不明（豊田市図書館（5冊、10巻欠））

刊本の奥書刊記：1、洛東知恩院御門前、沢田吉左衛門

2、宝永二乙酉年（1705）三月吉日、柳馬場通二条下町、芳野屋作十郎

3、洛東知恩院御門前、沢田吉左衛門

4、正徳五乙未稔（1715）正月吉日、華頂山蔵版、弘通所、京知恩院古門前、沢田吉左衛門、京寺町通仏光寺上ル、赤井長兵衛

5、正徳五乙未稔（1715）正月吉日、華頂山蔵版、調進所、京寺町通松原下ル、文涌堂三郎平衛、弘通所、同知恩院古門前、沢田吉左衛門、同寺町通仏光寺上ル、赤井長兵衛

6、華頂山蔵版、弘通所、京知恩院古門前、沢田吉左衛門、京三条通寺西へ入、山中善平衛

7、法蔵館、西村七兵衛、京都市下京区東六条中珠数屋町、烏丸東入二十人誦町二十二番戸

8、（未調査）

活字本所載書：『浄全』9、『真聖全』4、『大正蔵』83（No.2611）、『縮蔵』霜7、江藤澂英編『古本漢語灯録』（「浄土仏教古典叢書」、国書刊行会、1984）、『昭和新纂国訳大蔵経』宗典部3

参考文献：今岡松庵「恵空師の漢語灯録」（『宗教界』13-12・14-3・14-8・14-11、1917-1918）、藤原猶雪「徳川時代における法然上人漢語灯録の改竄刊流」（藤原猶雪『日本仏教史研究』大東出版社、1938）、河住玄『黒谷上人語灯録概説』（欣求庵、1981）、坪井俊映「法然の語録述作年次に関する研究収録」（坪井俊映『法然浄土教の研究—伝統と自証について—』隆文館、1982）、今岡達音「古本漢語灯録解説」（江藤澂英編『古本漢語灯録』、「浄土仏教古典叢書」、国書刊行会、1984）、戸松啓真「黒谷上人語灯録について」（『戸松教授古稀記念　浄土教論集』大東出版社、1987）、中野正明「『黒谷上人語灯録』について」（『法然遺文の基礎的研究』法蔵館、1996）、桃井信之・杉岡孝紀・渡辺了生・河智義邦・大洲誠史「黒谷上人語灯録　古写本刊本・研究文献目録」（浅井成海編『黒谷上人語灯録（和語）』、「竜谷大学善本叢書」15、同朋舎、1996）

解説：道光が編纂した『黒谷上人語灯録』の中で、巻第1-10までの漢文体の遺文を集録した10巻分を指す。普通「漢語灯録」と呼称される。「和語灯録」は道光在世中の元亨1年（1321）に開版されたが、「漢語灯録」はその時には開版されず、その後書写によって伝えられ、正徳5年（1715）になってようやく開版された。知恩院42世白誉至心の跋文によると、従来写伝の「漢語灯録」2・3本を見るに魚魯倒置遺字闌脱が多いのみならず、法然の尋常の法語に背馳し、宗義に矛盾しているものが間々あったので、これを正さんと欲し、豆州薬王山寺に伝持されていた武州金沢称名寺文庫の蔵本をとりよせて、義山に命じて校訂し、その瑕疵を去って、原型に復元せしめ、開版したということである。ところが、大正6年（1917）、今岡達音によって、元禄7（1694）-元禄11年（1698）に真宗大谷派初代講師恵空が書写した「漢語灯録」の転写本が古書店から発見された。これを「古本漢語灯録」という。この「古本漢語灯録」と「正徳版」とその他の伝本の三者の比較検討が行われた結果、「正徳版」が原文に夥しい改変を加えているテキストであることが明らかになると同時に、「古本漢語灯録」の信憑性がある程度確立されることとなった。「古本漢語灯録」はその書写奥書によると、義山が「和州三輪之本」と「二尊院之蔵本」と校合した本を恵空が書写したものということであるが、この奥書の内容は、恵暁撰『恵空老師行状記』の、恵空が「二尊院之蔵本」を発見し、義山に世に流布させることを勧めたところ、義山がこれに応じて「二尊院之蔵本」を後に自らが得た一本と参看校訂したという記述と符合する。したがって、「漢語灯録」開版の経緯は、この『恵空老師行状記』の記事の通りであったと推測される。

なお、『漢語灯録』そのものの編纂年時は、「正徳版」に付された道光の序文（「古本漢語灯録」には見られない）によると、文永11年（1274）12月8日頃となるが、「正徳版」の信憑性からして再考の余地があるかもしれない。なお最古の写本として、永享2年（1430）に隆堯が書写した安土浄厳院蔵本（巻第7のみ）がある。

所収遺文は、第1巻『無量寿経釈』、第2巻『観無量寿経釈』、第3巻『阿弥陀経釈』『浄土三部経如法経次第』『如法念仏法則』、第4・5巻『選択本願念仏集』、第6巻『往生要集釈』『往生要集略料簡』『往生要集料簡』『往生要集詮要』、第7・8巻『逆修説法』、第9巻『類聚浄土五祖伝』『善導十徳』、第10巻『浄土宗略要文』『浄土初学抄』『没後起請文』『七箇条起請文』『送山門起請文』『遺北陸道書状』『諸方返報』。

作成者名：曽田俊弘

黒谷上人語灯録（和語）

書名よみ：くろだにしょうにんごとうろく（わご）

書名別名：円光大師語灯録（和語）、黒谷語灯録（和語）、和語灯録

著者名：法然（著）／道光（編）

著者名よみ：ほうねん／どうこう

著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師／了恵、望西楼、蓮華堂、広済和尚

著者生没年：1133（長承2）- 1212（建暦2）／1243（寛元1）

-1330（元徳2）
成立翻訳年：1275（文永12）
成立地：日本
巻数：7
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都安居院西法寺蔵本（鎌倉後期、書写者不明、零本（巻13））
2、大阪河内長野金剛寺蔵本（南北朝期、書写者不明、1巻1冊（巻13））
〈影印版〉:落合俊典研究代表『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究 : 研究成果報告書 』1（2007）
3、仏教大蔵本（江戸期、書写者不明、7巻7冊、大津市善通寺旧蔵）
4、宮城塩釜神社蔵本（江戸期、書写者不明、1巻1冊（巻15））
5、お茶の水図書館成簣堂文庫蔵本（江戸期、書写者不明、7巻7冊）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、于時正平六年辛卯（1351）五月二十三日、高野山清浄台院添削書写畢、円賢
3、（奥書なし）
4、（奥書なし）
5、（奥書なし）
刊本所在：1、元亨1（1321、竜谷大、7巻7冊）
〈影印版〉:浅井成海編『黒谷上人語灯録（和語）』（「竜谷大学善本叢書」15、同朋舎、1996）
2、寛永20（1643、大阪府立大（1巻欠）・大阪府立中之島図書館・大谷大（7巻3冊）・金沢大・カリフォルニア大バークレー校東アジア図書館・九州大（巻1･4-7存）・京都大・国文学研究資料館・国立国会図書館・佐々木求巳氏（序なし）・定専坊・大正大・知恩院浄土宗学研究所・津市図書館橋本文庫・東洋大（7巻5冊）・日本総合学術情報センター・弘前市立図書館（巻7存）・広島大・仏教大・竜谷大（7巻5冊、5冊目欠）・麗沢大、7巻7冊）
3、文化4以前（1807以前、浅野長量氏、7巻7冊）
4、文化4以前（1807以前、佐々木求巳氏、7巻7冊、刊者なし）
5、文化4以降（1807以降、名古屋大、鈴木書店旧蔵、7巻7冊）
6、文化4以降（1807以降、佐々木求巳氏・東洋大・ハーバード燕京図書館竜谷大、7巻5冊）
7、文化4以降（1807以降、秋田県立図書館・佐々木求巳氏、7巻5冊）
8、文化4以降（1807以降、大谷大・東洋大、7巻7冊）
9、正徳5（1715、大阪府立大・京都大・国文学研究資料館・佐々木求巳氏・筑波大・津市図書館橋本文庫・東北大・豊橋市図書館（巻6-7存）・奈良女子大・仏教大・竜谷大・麗沢大、7巻7冊）
10、正徳5以降（1715以降、佐々木求巳氏・麗沢大）
11、文化4以前（1807以前、佐々木求巳氏）
12、文化4（1807、佐々木求巳氏・金沢文庫・千葉県立中央図書館・仏教大）
13、刊年不明（国文学研究資料館・新城ふるさと情報館牧野文庫（7巻7冊）・滝学園図書館（15冊））
刊本の奥書刊記：1、元亨元年辛酉（1321）のとし、ひとへに上人の恩徳を報したてまつらんかため、又もろもろの衆生を往生の正路におもむかしめんかために、この和語の印板をひらく、一向専修沙門、南無阿弥陀仏、円智、謹疏／沙門了恵感歎にたへす、随喜のあまり七十九歳の老眼をのこひて、和語七巻の印本を書く／元亨元年辛酉（1321）七月八日終謹疏、法橋幸厳巻頭
2、寛永癸未（1643）孟春吉日、柳馬場二条下町、吉野屋権兵衛
3、寛永癸未（1643）孟春吉日、京都書林、寺町四条下ル二丁目、赤井長兵衛
4、寛永癸未（1643）孟春吉日
5、寛永癸未（1643）孟春吉日、華頂山蔵版、（朱印）「華頂山印房」、京都知恩院古門前、沢田吉兵衛、弘通所、京都三条寺町西入、山中善兵衛
6、寛永癸未（1643）孟春吉日、華頂山蔵版、（朱印）「華頂山印房」、京都知恩院古門前、沢田吉兵衛、弘通所、京都三条寺町西入、山中善兵衛
7、寛永癸未（1643）孟春吉日、華頂山蔵版、（朱印）「華頂山印房」、弘通所、京都知恩院古門前、沢田吉兵衛、洛東下河原、山岡四郎兵衛
8、寛永癸未（1643）孟春吉日、華頂山蔵版、京都知恩院古門前、沢田吉兵衛、京都知恩院南門前、豊田熊太郎
9、正徳五乙未（1715）稔、正月吉日、書林、芳野屋権兵衛、沢田吉左衛門
10、正徳五乙未（1715）稔、正月吉日、書林、柳馬場通二条下町、芳野屋作十郎
11、正徳五乙未（1715）稔、正月吉日、書林、華洛、湖照庵、京都書肆、寺町四条下二丁目、赤井長兵衛
12、正徳五乙未（1715）稔、正月吉日、書林、華洛、湖照庵、京都書肆、寺町四条下二丁目、赤井長兵衛
13、（未調査）
活字本所載書：『浄全』9、『国訳大蔵経』宗典部3、『真聖全』4、『大正蔵』83（No.2611・2612）、『縮蔵』霜7、『了恵輯録　法然上人和語灯録』（檀王法林寺、1930）、浅井成海編『黒谷上人語灯録（和語）』（「竜谷大学善本叢書」15、同朋舎、1996）、中野正明『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、1996、安居院西法寺蔵本翻刻）、『浄土宗聖典』4（浄土宗、1999）、落合俊典研究代表『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究 : 研究成果報告書 』1（2007、金剛寺蔵本翻刻）
現代語訳書：塚本善隆編『法然』（「日本の名著」5、中央公論社、1971）、永忠順『和語灯録　極楽往生への灯』（大蔵出版、1982）
参考文献：藤堂祐範「和語灯録開題」（『了恵輯録　法然上人和語灯録』檀王法林寺、1930）、藤堂祐範『浄土教版の研究』（「藤堂祐範著作集」中、山喜房仏書林、1976）、河住玄『黒谷上人和語灯録　再訂版』1-4（欣求庵、1980）、河住玄『和訳黒谷上人語灯録』1-12（欣求庵、1978-1981）、河住玄『黒谷上人語灯録概説』（欣求庵、1981）、坪井俊映「法然の語録述作年次に関する研究収録」（坪井俊映『法然浄土教の研究—伝統と自証について—』隆文館、1982）、戸松啓真「黒谷上人語灯録について」（『戸松教授古稀記念　浄土教論集』大東出版社、1987）、西村冏紹「『語灯録』（和字）の一考察—新出浄写本を中心として—」（『仏教大学仏教学会紀要』2、1994）、中野正明「『黒谷上人語灯録』について」（『法然遺文の基礎的研究』法蔵館、1996）、浅井成海・矢田了章・川添泰信「『黒谷上人語灯録』について」（浅井成海編『黒谷上人語灯録（和語）』、「竜谷大学善本叢書」15、同朋舎、1996）、白川晴顕・三栗章夫・岡村喜史「『黒谷上人語灯録』の書誌について」（浅井成海編『黒谷上人語灯録（和語）』、「竜谷大学善本叢書」15、同朋舎、1996）、桃井信之・杉岡孝紀・渡辺了生・河智義邦・大洲誠史「黒谷上人語灯録　古写本刊本・研究文献目録」（浅井成海編『黒谷上人語灯録（和語）』、「竜谷大学善本叢書」15、同朋舎、1996）、岸一英「西村冏紹師寄贈『黒谷上人語灯録（和語灯録）』について」（『常照』41、仏教大学図書館、1996）、善裕昭「金剛寺蔵『黒谷上人語灯録』—解題と翻刻—」（落合俊典研究代表『金剛寺一切経の総合的研

究と金剛寺聖教の基礎的研究 : 研究成果報告書 』1、2007）
解説：道光が編纂した法然の遺文集『黒谷上人語灯録』の中で和文体で書かれた巻第11-15までの5巻と、『拾遺黒谷上人語灯録』の中で和文体で書かれた巻上・中の2巻を合わせた計7巻をいい、「和語灯録」と通称される。道光は文永12年（1275）1月25日付の序で、法然門流で異義が多出し、それを聞く者の多くが源を忘れその流れに従って、新しきを貴て旧きを知らずであることを嘆き、「いささか上人のふるきあとをたずねて、やや近代のあたらしきみちをすてん」と思い、法然の遺文を集めたと編纂の意図を明かし、やまとことばは読みやすく意味が解り易いので、往生を求める人はこの遺文集を灯火として浄土の道を照らせと勧めている。そして後跋では、20数年を費やして、都から地方まで遺文を求めて探訪し、真偽を明らかにし、取捨したことを述べている。

所収遺文は、第1巻『三部経釈』『御誓言の書』『往生大要抄』、第2巻『念仏往生要義抄』『三心義』『七箇条の起請文』『念仏大意』『浄土宗略抄』、第3巻『九条殿下の北政所へ進する御返事』『鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事』『要義問答』『大胡の太郎実秀へつかはす御返事』、第4巻『大胡の太郎が妻室のもとへつかはす御返事』『熊谷入道へつかはす御返事』『津戸の三郎へつかはす御返事』『黒田の聖人へつかはす御文』『越中国光明房へつかはす御返事』『正如房へつかはす御返事』『禅勝房にしめす御詞』『十二の問答』『十二箇条の問答』、第5巻『一百四十五箇条問答』『上人と明遍との問答』『諸人伝説の詞』、拾遺巻中『登山状』『示或人詞』『津戸三郎へつかはす御返事』『示或女房法語』、拾遺下『念仏往生義』『東大寺十問答』『御消息』『往生浄土用心』。

元亨元年（1321）に知恩院11世円智によって開版され、その刊記には、当時79才の道光が、随喜の涙を拭いながら自ら印本を書したことを記している。この「元亨版」は、日本で最初に版行された日本人の著述であり、また日本で最初に版行された平仮名交り文の版本であり、日本の出版史上高い価値を持つものであり、現存が確認されているのが竜谷大学図書館所蔵の一本のみという稀覯本である。

近年、「元亨版」版行以前の『和語灯録』を書写したと推定される西法寺蔵本（第13巻の残欠）、金剛寺蔵本（第13巻）が発見・紹介されている。
作成者名：曽田俊弘

黒谷上人御法語

書名よみ：くろだにしょうにんごほうご
著者名：隆堯
著者名よみ：りゅうぎょう
著者名別名：浄厳坊、隆堯法印、金勝山浄厳房隆堯法印
著者生没年：1369（応安1）-1449（宝徳1）
成立翻訳年：13c-14c
成立地：日本
漢和：和文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、刊年不明（京都大）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
活字本所載書：恵谷隆戒「隆堯法印編の黒谷上人御法語について」（『仏教大学研究紀要』32、1970）
参考文献：恵谷隆戒「隆堯法印編の黒谷上人御法語について」（『仏教大学研究紀要』32、1970）
解説：本書は隆堯が主として法然法語集である道光編『和語灯録』の中から念仏安心の大要に関する法語を中心に23編を抄出し、それに礼阿や向阿などの法語を4編挿入して編輯したもの。版本には表題・刊記はないものの、巻初に「黒谷上人御法語云　沙門隆堯記」とある。構成としては比較的「諸人伝説の詞」が多い。次いで消息（大胡太郎・津戸・九条殿下の北政所あてなど）が多く、その他には「禅勝房にしめす御詞」などが所収される。また前半には罪に関する法語が多いといった傾向も見受けられる。前述の礼阿や向阿などの法語はその直前の法然法語を受けたものであり、当時の礼阿らの影響力を垣間見ることができよう。

本書は第1語から第23語までが隆堯『念仏安心大要抜書』と同文であること、そしてこの『念仏安心大要抜書』という書名から推測するに、『念仏安心大要抜書』は本書を抜抄したものに、向阿『帰命本願抄』を付加して開版したものであると考えられる（恵谷論文）。したがって本書の成立は『念仏安心大要抜書』の成立の下限である応永30年（1423）以前であると推測される。

恵谷は全27語の各法語は元亨版『和語灯録』中の法語とほぼ同文であるが、全文を載せているわけではなく、抄出であるというが、必ずしもそうとは言い切れない部分がある。また元亨版にないものとしては第7・8・9語が兵庫県川辺郡毫摂寺所蔵『法然上人御法語』と同文、第16語が出典不明などと指摘される（恵谷論文）。
作成者名：永田真隆

黒谷上人伝

書名よみ：くろだにしょうにんでん
著者名：信瑞
著者名よみ：しんずい
著者名別名：敬西房
著者生没年：？-1279（弘安2）
成立翻訳年：1262（弘長2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『法然上人行状画図』26（『法伝全』、p.165）、『選択決疑鈔見聞』（『浄全』7、p.923、逸文あり）、『決疑鈔直牒』（『浄全』7、p.498、逸文あり）『選択口伝口筆』（『浄全』7、p.634、逸文あり）、『獅子伏像論』（『続浄』9、p.396、逸文あり）、『法伝全』p.986
参考文献：望月信亨『浄土教の研究』（金尾文淵堂、1916）、井川定慶「信瑞の法然上人伝と明義進行集巻第一に就いて」（『仏教学雑誌』3-7、1922）、三田全信『成立史的法然上人諸伝の研究』（平楽寺書店、1966）
解説：信瑞作の法然上人伝。散逸して伝わらない。『法然上人行状画図』26によれば、信瑞は弘長2年（1262）に鎌倉に下向し、「法然上人伝」を北条時頼に献上したとする記事がみえるが、良栄の『決疑鈔見聞』には「黒谷上人伝敬西作」とあることから信瑞作の『黒谷上人伝』が存在した。

『明義進行集』の散失している第一巻はこの法然伝にあたるといはれるが、澄円の『浄土十勝節箋論』、聖冏の『決疑鈔直牒』第三、良栄の『決疑鈔見聞』第一、『選択口伝口筆』にはその逸文がみえる。また井川定慶は澄円の『獅子伏像論』に「本伝曰」として本書の逸文が長く引用されていると指摘している。根拠は、本文中に「乱想凡夫由無観称名、順次往生於浄土也」として『明義進行集』の「無観称名」がみえ、また引用文に「爾来五十余年」と記してあるように、弘長2年（1262）から逆算すれば法然滅時に合致する点をあげられ、この逸文が信瑞撰述の「黒谷上人伝」であると指摘される。
作成者名：伊藤茂樹

涇渭分流集

書名よみ：けいいぶんるしゅう
異本書名：浄土涇渭分流記
著者名：聖冏
著者名よみ：しょうげい
著者名別名：酉蓮社了誉、冏師、聖冏禅師
著者生没年：1341（暦応4）-1420（応永27）
成立翻訳年：1399（応永6）
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、寛文3（1663、大正大・竜谷大・東洋大哲学堂）
2、宝永2（1705、国会・竜谷大）
3、慶応2（1866、大正・東洋大哲学堂）
4、刊年不明（大正大・新潟大佐野）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、宝永二（1705）酉季秋板行京二条林伝左衛門
3、（未調査）
4、刊記なし
活字本所載書：『浄全』12
参考文献：服部英淳「解説」（『浄全』12）
解説：三心を具しても、往生できない場合があるという心具不生義を聖冏が論駁した書で、成立は応永6年（1399）で聖冏59歳の作。書名となった涇渭分流とは、涇水（濁）と渭水（清）、すなわち正流と邪流とを分別するという意味で用いられている。心具不生義は、良忠門下の道光や尊観の弟子である慈観が主張し、かつて聖冏は道光の説に対し、明徳2年（1392）に『心具決定往生義』を著し反論を試みた。本書では、その時は未見のため批判の対象にならなかった、信州善光寺南大門に月形房談所を開いた名越派第二祖良慶の説を取り上げ、批判を加えている。良慶は、本願行である念仏と非本願行である諸行について、諸行は三心既具であっても、行無く願行が成じていなければ往生できないとする。それに対し聖冏は、良慶の言う心具不生は、九品の成業往生の機のことであるとし、三心を具すれば往生しないことはないという、心具必生義の立場をとる。諸行と念仏との違いについては、諸行は仏の摂機願に乗ずるも、摂行願に乗じていないため安心は具し難く、行業が成し難いとし、それに比べて念仏は、仏の二種の願に乗じて安心具し易く、行業成じ易いとする。このような、念仏と諸行の捉え方に、聖冏教学の特色が見られる。また、本書における良慶の説は、著作からではなく、門人の口筆からの引文であるが、当時流布していた心具不生義説を窺い知ることのできる貴重な史料でもある。
作成者名：東海林良昌

渓嵐拾葉集

書名よみ：けいらんしゅうようしゅう
著者名：光宗
著者名よみ：こうしゅう
著者名別名：道光上人
著者生没年：1276（建治2）-1350（観応1）
成立翻訳年：14c頃
成立地：日本
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：田中貴子『『渓嵐拾葉集』の世界』（名古屋大学出版会、2003）pp.42-53を参照。
写本奥書：田中貴子『『渓嵐拾葉集』の世界』（名古屋大学出版会、2003）p.54ff.を参照。
活字本所載書：『大正蔵』76（No.2410、実蔵坊真如蔵本による）
参考文献：北川真寛「〈渓嵐拾葉集〉における浄土思想」（『密教文化』207、2001）、田中貴子『『渓嵐拾葉集』の世界』（名古屋大学出版会、2003）
解説：光宗は南北朝時代の天台宗の学僧である。37年にわたって収集した資料を編纂したものであり、天台仏教を中心とした百科全書的な文献である。全300巻あったと伝えられるが、現在は117巻（「序」・「縁起」・「目録」3巻と新出の「戒家部」1巻を含む）の存在が確認されている。諸本の系統は複雑であり、『国書総目録』（1963-1972）に18本、渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』にはさらに15本が挙げられている。田中貴子（2003）はそれらの系統が分析され、後に確認された写本も列挙されている。

このうち、巻15の「阿弥陀部」に浄土思想が記されている。これは24項目からなっているが、そのなかでも中心となるのが、第2の「四重念仏事」である。ここには天台口伝法門の一つである恵心流の説として、四つの念仏説が挙げられている。すなわち、（1）秘密念仏、（2）天台宗念仏、（3）通大乗念仏、（4）善導念仏である。さらに第3の「念仏諸宗不同事」には補足説明があり、それらは順次、真言宗のもの、天台宗のもの、源信の『往生要集』のもの、法然の開いたものとされている。ここで注目すべきことは、源信の念仏思想が天台のものより別に扱われていること、法然の教学に批判的であること、念仏と光明真言の優劣を記していることなどである。

また四重念仏の中では天台宗念仏について最も詳しく記述しているが、その特徴が阿弥陀三諦説である。すなわち阿弥陀ないし無量寿の各文字に天台の主要教義である空・仮・中の三諦を当てたものであり、この説は最澄や源信に仮託された著作にも見られるものである。さらに阿弥陀の各文字に化法四教（蔵教・通教・別教・円教）を当てる説をも示しているが、この説は妙楽大師湛然（711-782）にも見られる。天台での四重阿弥陀の説は、爾前の阿弥陀、迹門の阿弥陀、本門の阿弥陀、観心の阿弥陀とされている。これらは各々、『悲華経』の阿弥陀、『法華経』の大通智勝仏の王子としての阿弥陀、久遠実成の阿弥陀、五智のうち妙観察智の阿弥陀とされている。また秘密念仏については、その浄土は金剛界曼荼羅であり、九品の浄土とは九会であるとされている。
作成者名：藤仲孝司

決疑鈔見聞

書名よみ：けつぎしょうけんもん
書名別名：坂下見聞、白旗見聞、口筆
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、智恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：1328（文和3）
成立地：日本
巻数：5
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
写本
活字本
写本所在：1、仏教大蔵本（書写者不明、江戸期、零本）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、慶安四年（1651、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、本云於鎌倉拾閑寺道場嘉元二年（1304）三月廿七日始之同六月四日畢惣六十七日也云云干時文和二

年葵巳（1353）四月五日於江州犬上郡河瀬庄宇尾西光寺令書写之畢坂下見聞也良厳上人仰云於関東盛蓮房就伝通記並決疑鈔委細見聞也是即其見聞覚也云云尤可秘時永正八年未辛（1511）年七月五日於金勝寺之草庵令書写之訖／慶安四辛卯（1651）正月吉日、寺町通四条上林長衛門、久遠院前吉川屋次兵衛開版
活字本所載書：『浄全』7
参考文献：石井教道『選択集の研究　註書篇』（誠文堂新光社、1945）
解説：良忠の『選択伝弘決疑鈔』についての注釈書。良暁の居住した坂下にちなんで『坂下見聞』ともいう。良暁は『蓮門宗派』に「五十余帖之見聞御口筆」とするように『伝通記見聞』等、多数の注釈書がある。本書は嘉元3年（1328）に鎌倉極楽寺での『決疑鈔』講述を弟子の盛蓮房が覚え書きした書であり、『決疑鈔』の要文186文を摘出し、それぞれの文言に注釈、または教義上の問題点を問答形式で明らかにした書である。なお『蓮門類聚経籍録』下には、古本には、鎌倉拾閑寺において嘉元2年（1304）の3月27日から6月4日にいたって書いたと伝えている。
『浄土述聞鈔』にみる一念多念業成・三心の願体非願体・摂取不捨の願非願・就行立信等、先の『述聞鈔』にみられた良忠門下の異義に対する自己の相伝を述べている箇所が多い。石井教道の『選択集の研究　註疏編』（誠文堂新光社、1945）によれば、現行の流布本と聖冏の『直牒』と持阿の『見聞』にひかれる口筆と称される2本があるとされる。
作成者名：伊藤茂樹

決定往生行業文

書名よみ：けつじょうおうじょうぎょうごうもん
著者名：永観
著者名よみ：ようかん
著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：11c後半-12c初頭
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）、了慧『往生拾因私記』（『浄全』15、p.396、p.404、p.414、p.433、p.435、p.445、逸文あり）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）
解説：著者の永観については『往生拾因』の項を参照。
本書は散逸して伝わらない。しかし、了慧『往生拾因私記』（『浄全』15）に本書の逸文がのこされている。それは「決定往生行業文云」「行業文云」として引用され、全部で6箇所にわたる（大谷旭雄）。そういったわずかな逸文からその内容を伺うと、（1）一心の確立を強調し、その一心とは定心中ではなく、散善のものである、（2）専念も一心であり、専念が極まれば必得往生である、（3）一心の確立には自己の罪根が深重であることを信知する悲心を発すべきことなどが述べられている。
作成者名：能島覚

決定往生集

書名よみ：けつじょうおうじょうしゅう
著者名：珍海
著者名よみ：ちんかい
著者生没年：1092?（寛治6）-1152（仁平2）
成立翻訳年：1139（保延5）
成立地：日本
巻数：1或2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高野山宝寿院蔵本（1142（康治1）、書写者不明）
2、京都禅林寺蔵本（平安末、書写者不明）
3、藤堂恭俊所蔵本（1250（建長2）、書写者不明）
写本奥書：1、保延五年三月廿一日病中抄之。康治元年六月十二日染患為往生極楽治定之而也。
2、（奥書なし）
3、保延五年三月廿一日病中抄了。康治元年六月十二日重依病治定也。珍海越前已講号禅那院先徳云。建長二年五月十二日於往生院書写之了。
刊本所在：1、寛文5（1665、竜谷大）
2、元禄9（1696、奈良県立図書情報館）
3、宝永7（1710、京都大）
刊本の奥書刊記：1、寛文五暦仲春吉旦。中尾伝三郎板行。
2、元禄九歳次丙子季秋望日。東大寺大勧進三論宗沙門公慶謹誌。
3、宝永七庚寅歳五月吉祥日。永田調兵衛板。
活字本所載書：『大正蔵』84（（No.2684）、『浄全』15
参考文献：坂上雅翁「『決定往生集』諸本攷」（『淑徳短期大学研究紀要』29、1990）、坂上雅翁「藤堂文庫所蔵『決定往生集』残闕本について」（『淑徳短期大学研究紀要』30、1991）、坂上雅翁「珍海―画僧と学僧―」（『浄土仏教の思想』7、講談社、1993）、坂上雅翁「禅林寺本『決定往生集』の研究」（1）（2）（3）（『淑徳短期大学研究紀要』32・33・34、1993・94・95）、梯信暁『奈良・平安期浄土教展開論』（法藏館、2008）
解説：珍海の著。珍海は東大寺三論宗の学僧で、唯識・因明・浄土にも明るかった。『決定往生集』は、世俗の凡夫が念仏によって臨終正念に達し、聖聚来迎にあずかり、極楽に往生してゆくことを決定づけるための理論を示した書である。珍海は、信心決定の時に往生が決定すると言い、信心の内容を、「（1）依報決定（2）正果決定（3）昇道決定（4）種子決定（5）修因決定（6）除障決定（7）事縁決定（8）弘誓決定（9）摂取決定（10）円満決定」の10門に開いて解説してゆく。特に第5門、往生の修因に関する議論に多くの紙面を費やし、十信以前の常没の凡夫が発す厭穢欣浄の願生心が、往生極楽の正因となる菩提心であると言い、また浄土を求めて阿弥陀仏を念ずる「念仏」がそのまま菩提心であると主張する等の特徴が見られる。「念仏」についても種々の議論を重ね、十声の称名念仏が成就すれば往生極楽が決定するということを立証している。さらには世間の風潮に警鐘を打ち鳴らすように、臨終正念の獲得に汲々とするあまり、かえって空しく人生を過ごすようなことがあってはならないと説き、現生十念の成就を目指して平生より念仏に励むことを勧めている。
作成者名：梯信暁

決定往生臨終十念縁起

書名よみ：けつじょうおうじょうりんじゅうじゅうねんえんぎ
著者名：覚超
著者名よみ：かくちょう
著者名別名：都率僧都、兜率僧都、都率先徳、兜率先徳、楞厳院先徳
著者生没年：960（天徳4）-1034（長元7）
成立翻訳年：10c末-11c初頭
成立地：日本

巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：花野充道「都率僧都覚超の著作解題」（『和党』36、1976）
解説：本書は散逸して伝わらない。しかし、本書と同じ題号を持つ典籍（『決定往生臨終十念縁起』、元和5年（1619）、養典書写、実蔵坊真如蔵本）が現存するが、この題号は源信による『決定往生縁起』の内題である為、本書とは別本と考えられる。そして、源信のものとなる『決定往生縁起』が『長西録』から洩れている点、覚超撰述の『決定往生臨終十念縁起』が『長西録』のみに記されている点などからして、本書自体の存在を疑うべきかもしれない。
作成者名：能島覚

夏御文

書名よみ：げのおふみ、なつのおふみ
書名別名：夏御文章
著者名：蓮如
著者名よみ：れんにょ
著者名別名：恵灯大師、本願寺蓮如、信証院、兼寿
著者生没年：1415（応永22）-1499（明応8）
成立翻訳年：1498（明応7）
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、西本願寺蔵本（慶長年間、証如書写（？））
2、西本願寺蔵本（1778（安永7）、法如書写）
3、本願寺派山科別院蔵本（室町中期、書写者不明）
4、竜谷大蔵本（江戸期、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
2、コノ第四章ノ末語、文勢・義旨オタヤカナラサルニ似タリ、先哲ノ述意ハカリカタシトイヘトモ、ヒソカニカンカフルニ、コレの後人第五章ヲモツテ、アヤマリテ第四章に混セルモノカ、カルカユヱニ改メテ両軸トナス、イマヨリ聞クモノヲシテ惑ヒナカラシム、予臨池の技ニフケルニアラス、実ニ門下ノ道俗ヲシテ金剛心ニ住シ、生ヲ安養ニ期セシメント欲スルカタメ、コトサラニ鯔ヲアヤトリテココロヲココニ尽スノミ、安永七戊戌（1778）ノ春コレヲ書ク、法如七十二歳
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『真聖全』3、堅田修『真宗史料集成』2（同朋社、1983）、『浄土真宗聖典（原典版）』（本願寺出版部、1985）
解説：蓮如は本願寺8代門主である。衰微していた本願寺において、本願寺7世存如の長男として、苦難の中で成長する。比叡山衆徒の襲撃に遭い、京都東山大谷を出て文明3年（1471）越前吉崎に赴き、北陸地方を教化し、さらに摂津・河内・和泉で布教に専念する。のちに山科・石山に本願寺を建立する。本願寺を強大な宗門に成長させた浄土真宗中興の祖である。また、「南無阿弥陀仏」の六字名号を数多く書いて弟子や門弟に与え、「正信念仏偈」と「三帖和讃」を刊行した。著作には本書のほか『改悔文』など布教のためのものが多い。蓮如の行実を示した言行録に『蓮如上人御一代記聞書』等がある。

本書は明応7年（1498）、山科において蓮如84歳の夏安居時に述作されたものである。第1通・第2通は5月下旬、第3通は6月中旬、第4通は7月中旬と記されている（年紀は名塩教行寺蔵本による。また本願寺派は、第17代法如が第4通目を2つに分けたので、全体で5通としている）。

この『夏御文』4通はこの後5月15日より8月15日夏安居中、正午に本願寺においてのみ儀式として読誦されるようになる（これが『御文章』の儀礼化の端緒となる）。本願寺外には出されず、門徒に付与されたものではないため、『帖内御文』『帖外御文』には含まれない。天文6年（1537）に開版された。

内容として、第1通目は、親鸞の『和讃』と『安心決定鈔』を引いて、安心（信心）をとることの重要なることを、第2通目は聖教を読む姿勢として、他力の信（信心）をとるためという意識をもって読むべきであることを、第3通目は、同じく信心をとるために聖教をよみ、そしてこころをしずめ、聴聞すべきことを、第4通目はこの夏安居の機会に、むなしく過ごさず、ぜひとも安心を決定すべきことをそれぞれ説いている。このように4通とも学解は信を得るためであることに留意せよという内容といえよう。
作成者名：佐々木大悟

玄義分聞書

書名よみ：げんぎぶんききがき
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人、然阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1255（建長7）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1255（建長7）、良聖書写）
写本奥書：1、建長七年乙卯（1255）五月十七日於下総国瑳匝御庄福岡郷被談能化然阿弥陀仏五十七良聖時年二十二歳也
参考文献：恵谷隆戒『浄土宗第三祖然阿良忠上人伝の新研究：特に金沢文庫資料を中心として』（国書刊行会、1984）、坪井俊映「金沢文庫蔵『観経疏聞書』の研究」（『仏教文化研究』31、1986）、納富常天「金沢文庫本『観経疏聞書』について」（『仏教文化研究』32、1987）、日置孝彦「東国浄土教における良忠上人　－付　称名寺蔵金沢文庫保管鎮西義典籍解題－」（『仏教文化研究』32、1987）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。建暦1年（1211）、同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、建保2年（1214）、比叡山で受戒した。その後1236（嘉禎2）年、九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』の相伝を受ける。建長1年（1249）、関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、正元1年（1259）、鎌倉に入り、悟真寺を開創して念仏を広めた。

本書は、善導『観経疏』玄義分を法然・弁長の義にしたがって良忠が講述したものを、良聖が筆録したものである。講述は建長7年（1255）3月4日に始まり、同年5月17日に終わっている。『観経疏』の本文から重要な語句を選び出し、それに対して問答形式をもって解説している。講述の語句それぞれには日付が記述されており、講述の日程を知ることができる。講述の語句は198が数えられる。内訳は第1冊では総明七門7、序題門28、釈名門37、第2冊では宗旨門5、説人差別門3、料簡定散門13、第3冊では和会経論相違門97、得益門8であるが、破損が多く欠落している可能性もある。

良忠による他の『観経疏』注釈書との関係については、『伝通記』執筆に先立ってこの講述があること、また講述の語句は『伝通記』とほぼ共通することから、『聞書』が基となって『伝通記』となり、『伝通記』から重要な語句を略出したのが『略鈔』であると思われる。
作成者名：曽和義宏

玄義分問答

書名よみ：げんぎぶんもんどう
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：10
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『弥陀本願義』（平井正戒『隆寛律師の浄土教』p.127）
解説：『観経疏』「玄義分」の註釈書。散逸文献。『弥陀本願義』の奥書には、平是宣が「夢の中で雲居寺の御堂の中で宝冠の僧が現れ、隆寛律師の書をみるべしとのお告げがあり、『本願義』4巻と『礼讃問答』『玄義分問答』のそれぞれ十帖を書写した」とする記述が載り、隆寛撰述の『玄義分問答』が存在したことが知られる。隆寛には『観経疏問答』とよばれる『観経疏』全体の問答形式の書があったことがしられる。『散善義問答』と同じく本書もその一部であろう。
作成者名：伊藤茂樹

源空上人私日記

書名よみ：げんくうしょうにんしにっき
著者名：不明
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：『西方指南抄』の項を見よ
写本奥書：『西方指南抄』の項を見よ
刊本所在：『西方指南抄』の項を見よ
刊本の奥書刊記：『西方指南抄』の項を見よ
活字本所載書：『法伝全』、『浄全』17、『真聖全』4、『大正蔵』83、『定本親鸞聖人全集』3（法蔵館、1969）
参考文献：田村円澄「法然伝の諸問題」（『仏教文化研究』1、1951）、中澤見明『真宗源流史論』（法蔵館、1951）、田村円澄『法然上人伝の研究』（法蔵館、1956）、井川定慶『法然上人絵伝の研究』（法然上人伝全集刊行会、1961）、三田全信「法然上人伝の成立史的研究序説」（法然上人伝研究会『法然上人伝の成立史的研究』4、知恩院、1965）、三田全信『成立史的法然上人伝の研究』（平楽寺書店、1966）、三田全信『改訂増補浄土宗史の諸研究』（山喜房書林、1980）、中井真孝『法然伝と浄土宗史の研究』（思文閣出版、1994）
解説：親鸞書写（もしくは筆）の『西方指南抄』中末に収録されている法然伝記。

法然滅後45年にあたる康元1年（1256）に親鸞によって書写されており、現存する法然伝記類写本の中では、『知恩講私記』に次ぐ古いものである。

著者は不明であるが、法然が阿弥陀仏や勢至菩薩の化身であることを強調し、法華・真言修行における奇瑞を記すことによって法然を神秘的な面から権威付けようとしており、聖道門、特に天台宗の立場に近い者であるという指摘がなされている（田村論文1956）。また文中に信空の見聞が記されることなどから、信空の門弟であるとする説もある（三田論文1966）。

成立の時期も不明であるが、書写された時期が早いことや、醍醐本『法然上人伝記』に収録されている、いわゆる「一期物語」と共通する文章が多いことなどから、法然伝記の中でも醍醐本『法然上人伝記』と並ぶ最初期に編纂されたものと位置づけられるのが一般的である。両書の成立の前後関係について、田村円澄は醍醐本『法然上人伝記』の方が浄土宗義との整合を強く意識しており、法然の出家の動機など余計な付加を有するのに対し、本書の文章の方が素朴であるので、成立が早いと主張している。一方、三田全信は、本書には醍醐本『法然上人伝記』の記事に基づきながら更に編集を加えたために生じた不統一や誤りが散見されると指摘している。もっとも中井真孝は、『本朝祖師伝記絵詞』（『四巻伝』）との共通箇所を比較し、本書に見られる不統一や曖昧な文章を『本朝祖師伝記絵詞』（『四巻伝』）が補い整理したとは考えられず、本書の作者が自己の関心に従って『本朝祖師伝記絵詞』（『四巻伝』）から記事を抜き出したと考える方が自然であると論じ、本書は最初期に成立した法然伝ではないと主張する。

短編の伝記で、法然の主な事跡に関して簡潔に語られている。記される事跡をおおまかに列挙すると、父の名と生国、入胎時の両幡降下の奇瑞、父の死と観覚のもとでの出家、13歳時の比叡山登山と天台修学、法華および真言修行における奇瑞、屋内放光、『華厳経』被覧と上西門院説戒の際の蛇にまつわる奇瑞、高倉天皇への授戒および戒の相承、諸宗修学、浄土門帰入と夢中対面、皇円の転生、大原問答とその参加者、三昧発得と頭光踏蓮、流刑と帰洛、臨終とそれに伴う奇瑞などであり、最後に公胤の夢告と遺徳讃嘆が記されて終わる。
作成者名：斎藤蒙光

顕浄土真実教行証文類／教行信証

書名よみ：けんじょうどしんじつきょうぎょうしょうもんるい／きょうぎょうしんしょう
書名別名：教行証、教行証文類、御本典、御本書、広文類、広本、教行信証文類、広書、広典
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：6
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都東本願寺蔵本（13c前半、親鸞真筆本、一部別筆）
〈影印版〉:『顕浄土真実教行証文類』（大谷派本願寺編纂課、1917）
〈影印版〉:『顕浄土真実教行証文類』（法蔵館、1936）
〈影印版〉:『国宝顕浄土真実教行証文類』（大谷派宗務所、1956）
〈影印版〉:『「国宝」顕浄土真実教行証文類』（美之美、1986）
〈影印版〉:『親鸞聖人真蹟集成』1・2（法蔵館、2006）
〈影印版〉:『顕浄土真実教行証文類（坂東本）影印本』（真宗大谷派宗務所、2005）
2、三重専修寺蔵本（1255（建長7）-1258（正嘉2）（？）、真仏書写（？））

〈影印版〉:『専修寺本　顕浄土真実教行証文類』上・下（法蔵館、1975）
〈影印版〉:『重要文化財顕浄土真実教行証文類』（便利堂、1986）
3、京都西本願寺蔵本（1275頃（文永12）、書写者不明）
〈影印版〉:『顕浄土真実教行証文類』（浄土真宗本願寺派本願寺、1918）
〈影印版〉:『重要文化財　教行信証』（講談社、1976）
4、京都常楽寺蔵本（1334（元亨4）、存覚書写、証巻・化身土巻以外現存）
5、大谷大蔵本（1360（延文5）、覚念書写、化身土末巻のみ現存）
6、京都西本願寺蔵本（1450（宝徳2）、蓮如書写、奥書は存如）
7、京都仏光寺蔵本（室町中期、書写者不明）
8、大谷大蔵本（室町中期、書写者不明）
9、山口明厳寺蔵本（1470（文明2）、書写者不明）
10、三重専修寺蔵本（室町頃、書写者不明）
11、滋賀願念寺蔵本（鎌倉期、書写者不明、化身土巻一部、延書）
12、大阪光徳寺蔵本（鎌倉期、覚信尼書写（？）、行巻一部、延書）
13、京都東本願寺蔵本（鎌倉期、覚信尼書写（？）、信巻末一部、延書）
14、京都西本願寺蔵本（1360（延文1）、善如書写、延書）
写本奥書：1、（行巻）弘安陸癸未（1283）二月二日釈明性譲頂之（別筆）
（化身土末巻）弘安陸癸未（1283）二月二日、釈明性譲頂之、沙門性信（花押）（別筆）
2、（教巻・信巻・真仏土巻）親鸞御入滅、弘長二歳壬戌（1262）十一月二十八日午時、御年九十歳也、同二十九日午時専信遠江国池田住僧、顕智下野国高田住僧、御舎利蔵畢
（化身土巻）以彼六巻草本書写之、筆師専信之、建長七歳乙卯（1255）六月二十二日午時畢書之（『宝暦十二壬午年六月三日御目録』より補）
3、（化身土末巻）和光同塵結縁之始、八相成道以論其終ツイニオワリ、弘長二歳壬戌（1262）十一月二十八日未剋、親鸞聖人御入滅也、（以下欠損により大谷大蔵弘願寺蔵本奥より補）御歳九十歳、同二十九日戌時東山御葬送、同三十日御舎利蔵、仏滅後至二千百三十五歳、入末法後七百三十五歳、当文永十二歳乙亥（1275）也、依賢劫経仁王経涅槃経等説也
4、（教巻）元亨四年甲子（1324）三月二十七日奉書写之、今日者真宗高祖導和尚遷化之期也、依有往生之懇志殊凝渇仰之精誠而已、権律師光玄
（行巻）元亨四年甲子（1324）四月十五日書写之畢、権律師光玄
（信巻本）元亨四年甲子（1324）五月十八日以念誦之［■］終書写之功者也、権律師光玄
（信巻本）元亨四年甲子（1324）七月盂蘭之期書写之［■］、権律師光玄
（真仏土巻）元亨四載甲子（1324）十一月二十八日書写之、今日者作者上人之遠忌也、六十三廻之運転如夢、百千万端之恋催涙而已、権律師光玄
5、延文五年庚子（1360）後四月日終功、釈覚念／応安二年乙酉（1369）十月日於御前合点畢、此本一部六帖先年終愚功者也、沙門尊理
6、（教巻）宝徳三年辛未（1451）八月十六日、釈存如（花押）
（行巻）宝徳二年（1450）八月十一日奉書写畢、右筆蓮如（花押）
（真仏土巻）宝徳二年（1450）八月十一日書写了、右筆蓮如（花押）
（化身土巻）今此教行証者祖師親鸞法師撰述也、立章於六篇、調巻於六軸、皆引経論真文各備往生潤色、誠是真宗紹隆之鴻基実教流布之淵源末世相応之目足即往安楽之指南也、右此鈔者親鸞上人之御作也、而加州木越光徳寺住持性乗依所望無難去所令許与之也、於国中縦難有所望之仁蒙本寺之許者楚忽不令書写者也、宝徳三年未八月十六日、大谷本願寺住持釈存如（花押）
7、（奥書なし）
8、（信巻本）本云／寛元五年（1247）二月五日以善信聖人御真筆秘本加書写校合［■］、隠倫尊連六十六歳、文義字訓等重委註了、今年聖人七十五歳也／又云／元弘三歳癸酉（1333）従初春上旬之候［■］孟夏下旬之天終書写助阿之証本重令校合而已、釈乗専三十九歳／暦応四歳辛巳（1341）十二月二十八日遂筆硯之漸写畢、殊迎本願寺聖人之御縁日慮外終右毫之功、聖人定垂納受小質宣協知見者歟、可喜可尊、凡於此書者念仏成仏之咽喉諸門超勝之真路也、悲喜交流涙［■］抑而已
（信巻の最後に張紙）一本、教巻奥云／本云／寛元五年二月五日以善信聖人御真筆秘本加書写校合［■］、文義字訓等重委註了、隠倫尊連六十六歳、今年聖人七十五歳也／又化身土巻奥云／文明二年（1470）九月上旬於河州写畢雖有文字不審如本写畢、今将校合此書経論釈文各考基本並照合此書数本而帰其正浩、但為知恩報徳不恥不倫哢言、遇得文明古本校之以文本字、又伝得教行寺本校之示以教本字其余之異本此其例也（江戸期筆）
（化身土巻末）今此教行証者祖師親鸞法師撰述也、立章於六篇、調巻於六軸、皆引経論真文各備往生潤色、誠是真宗紹隆之鴻基実教流布之淵源末世相応之目足即往安楽之指南也
9、（教巻）（未調査）
（化身土巻）今此教行証者祖師親鸞法師撰述也、立章於六篇、調巻於六軸、皆引経論真文各備往生潤色、誠是真宗紹隆之鴻基実教流布之淵源末世相応之目足即往安楽之指南也、而去弘安六暦歳癸未（1283）春、于時正応四年（1291）五月始之、同八月上旬終功畢、文明二庚寅年（1470）九月上旬、於河州書畢、雖悪筆為仏法興隆結縁値遇如形馳也、後見嘲千悔千悔、雖有文字不審写畢
10、（化身土巻末）今此教行証者、祖師親鸞法師撰述也、立章於六篇、調巻於六軸、皆引経論真文、各備往生潤色、誠是真宗紹隆之鴻基、実教流布之淵源、末世相応之目足、即往安楽之指南也、而去弘安六暦歳次癸未（1336）春〈九十代後鳥羽院〉二月二日、彼親鸞自筆本一部六巻、従先師性信法師所、令相伝畢、為報仏恩、欲企開版於当時伝弘通於遐代之刻、有度々夢想之告矣、于時正応第三天歳次庚寅（1290）〈九十一代伏見院〉各臘月十八日夜寅剋夢云、当副将軍相州大守平朝臣乳父平左金吾禅門法名果円、屈請七口禅侶、被書写大般若経、彼人数内、被加於性海、而奉書写真文畢、同四年（1291）〈辛卯〉正月八日夜夢云、当相州息男年齢十二三許童子、来而令正坐於性海之膝上、覚而夢惺畢、同二十四日夜夢云、先師性信法師化現而云、教行証開版之時者、奉触子細平左金吾禅門、可刻彫也、言已乃去、覚而夢惺畢、同二月十二日夜夢云、有二人僧而持五葉貞一本松子一箇、来与於性海、覚而夢惺畢、依上来夢想、倩案事起、偏浄教感応之先兆、冥衆証誠之嘉瑞也、若爾者、機縁時至、弘通成就者歟、仍奉触子細於金吾禅門、即家聴許、而所令開版也、然此本者以親鸞自筆御本、令校合、合成印板者也、庶幾、後世勿令加減於字点矣／本云／于時正応四年（1291）五月始之、同八月上旬終功畢
11、（奥書なし）
12、（別筆）右之一冊覚信尼公御筆、寛文癸丑（1661）仲夏十二日、本願寺前大僧正常如上人達御照覧無紛御真筆、光徳寺常住物也、松谷院乗俊（花押）

13、（挟紙）教行証ノヘ書墨付弐拾五、尼公御筆
14、延文五歳庚子（1360）正月二十二日書終之訖、書写中無障礙終其功奉渡之条冥慮之所致歟、本望無極者也耳、釈子俊玄
刊本所在：1、寛永13（1636、大谷大・同朋大・竜谷大）
2、正保3（1646、大谷大・竜谷大）
3、明暦3以前（1657以前、大谷大・竜谷大）
4、寛文9（1669、竜谷大）
5、寛文13（1673、大谷大・竜谷大）
6、安永5以降（1776以降、同朋大・竜谷大）
7、天保8（1873、竜谷大）
8、天保11（1840、竜谷大）
9、天保14（1843、大谷大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、寛永丙子（1636）孟春吉旦、中野市右衛門新刊
2、正保丙戌（1646）仲春吉旦、中野氏是誰重刊行
3、五条橋通松屋町
4、寛文九巳酉年（1669）霜月吉日、河村利兵衛板行
5、寛文十三癸丑年（1673）仲秋、福森兵左衛門板行
6、寛文十三癸丑年（1673）仲秋、教行信証、寛文版、東本願寺御蔵版、正保版、書林焼失、明暦版、西本願寺御蔵版、京都書林、堀川通綾小路下ル町、銭屋庄兵衛、東六条下珠数屋町、丁字屋九郎右衛門
7、（刊記なし）
8、寛永丙子（1636）孟春新刊、天保庚子（1840）仲夏再［■］
9、渋谷山御蔵版、天保十四稔癸卯（1843）八月御開版、調進所、有慶堂、室町通高辻北、中嶋利左衛門
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2646）、『真聖全』2、『浄土真宗聖典－原典版－』、『定本親鸞聖人全集』篇、『真宗聖典』、『真宗史料集成』1、『定本　教行信証』（法蔵館、1989）、『親鸞』（「日本思想大系」11、1971）、金子大栄校訂『教行信証』（岩波書店、1957）
現代語訳書：『意訳　教行信証』（「意訳真宗聖典」5、法蔵館、1956）、『聖典意訳　教行信証』（親鸞聖人七百回大遠忌事務所、1961）、金子大栄『口語訳　教行信証　附領解』（法蔵館、1961）、青野季吉・本多顕彰・結城令聞・西村考次・池田弥三郎・仁戸田六三郎「顕浄土真実教行証文類」（『現代語訳　親鸞全集』6-8、講談社、1975）、真継伸彦「教行信証」（『現代語訳　親鸞全集』1・2、法蔵館、1983）、石田瑞麿「教行信証」（『親鸞全集』1・2、春秋社、1985）、『浄土真宗聖典　顕浄土真実教行証文類－現代語訳－』（本願寺出版社、2000）、内記浄・本多恵・中津功・鶴見栄鳳・福田昊淳・益田恵真・竹井徹『傍訳　教行信証全書』（四季社、2000）
参考文献：中井玄道校訂『教行信証』（仏教大学出版部、1915）、日下無倫「教行信証について」「東本願寺所蔵教行信証延書について」（日下無倫著『真宗史の研究』、平楽寺書店、1931）、『定本親鸞聖人全集』別冊研究ノート（法蔵館、1970）、石田充之「『教行信証』解題」（『親鸞』、「日本思想大系」、岩波書店、1971）、『教行信証化身土末巻の研究』（文光堂書店、1976）、北西弘「坂東本教行信証の東本願寺流伝」（『歴史への視点－真宗史・仏教史・地域史－』、桂書房、1985）、重見一行『教行信証の研究』（法蔵館、1981）、『親鸞大系』「歴史篇」4（法蔵館、1988）、慶華文化研究会編『教行信証撰述の研究』（百華苑、1994）、鳥越正道『最終稿本　教行信証の復元研究』（法蔵館、1997）、佐々木瑞雲「新出　仏光寺蔵『教行信証』の意義－『六要鈔』所釈本の行方－」（『真宗研究』50、2006）
解説：親鸞の著。

浄土真宗教義の根本となる書物で、真宗教団では本書の撰述をもって立教開宗としている。

東本願寺に真筆本が現存している。真筆本の筆跡などから、本書は一時期にまとまって書き上げられたものではなく、大きく3期にわたって成立したことがわかる。真筆本のなか、1頁8行部分は60歳代、1頁7行部分は80歳代と推定され、化身土巻に引用される『大集経』は70歳代の筆跡とされる。この事から、親鸞が晩年にいたるまで推敲を重ねたことを知ることができる。また当真筆本には角筆が使用されていることが指摘されている。なお当真筆本は全てが親鸞真筆ではなく、一部門弟らによって代筆された部分が存する。また当真筆本は、元は東京の坂東報恩寺の所蔵であったことから坂東本とか報恩寺本と呼ぶこともある。東本願寺に所蔵が移ったのは明治頃であるが、この間の事情については北西弘「坂東本教行信証の東本願寺流伝」を参照。

古写本中、三重県専修寺蔵本と京都西本願寺蔵本は共に真筆本とされていたが、現在では非真筆であることが確認されている。

専修寺蔵本は、建長7年（1255）に専信房専海が書写したものを、恐らくは真仏が書写したものである。現在の真筆本以前の本書の姿を伝えており、本書の語句や思想の展開を知ることができる。

西本願寺蔵本は文永12年（1275）頃に書写されたもの。同時期の書写本として石川県弘願寺蔵本があったが、現在は所在不明になっており、一説には焼失したとされる。書写するに際しては真筆本またはそれに近い書写本を見ていると考えられるが、本文引用文の改行など真筆本の様子とは相当に異なっており、書写時に他の写本を参考にしたのか、あるいは書写に関する口伝があったのではないかと考えられるが、詳しくは未詳。

また専修寺蔵本（室町期頃書写）の奥書には、正応4年（1291）に本書を開版したと記されており、本書の流通史や当時の真宗門徒の社会的地位を知る上から注目されている。

本書は6巻からなり、「顕浄土真実教行証文類序」「顕浄土真実教文類」「顕浄土真実行文類」「顕浄土真実信文類序」「顕浄土真実信文類」「顕浄土真実証文類」「顕浄土真仏土文類」「顕浄土方便化身土文類、本末」で構成されている。

本書は、法然の専修念仏の教えは、信心を因とすることを説き、行も信も共に阿弥陀如来の回向成就であり、衆生の自力ではないことを述べる。また真実信心の行者は真実報土、涅槃界に往生するとも説く。更に「化身土巻本」では浄土三部経に真仮をたて、顕の義、即ち経典を表面的に解釈するならば三経の思想は異なっており、『観無量寿経』は第19願の修諸功徳の願の精神を、『阿弥陀経』は第20願の自力称名を勧めるものとし、彰隠密の義、即ち経文の裏側の意にたてば三経は共に第18願の、阿弥陀仏の本願力による専修念仏往生を説いているとしている。「化身土巻末」では帰依三宝をもって仏法とし、その他の天や鬼神を拝してはならないとし、その文証として『大集経』『弁正論』『論語』などを引用する。最後には普通「後序」と呼ばれる一文がおかれ、聖道の学僧や天皇及び臣下が法の真仮を弁えないことから、法然の浄土宗が弾圧され流罪となったことや、法然から『選択本願念仏集』書写の栄誉をえたことを記している。

本書の写本・刊本についてや研究論文目録については、栗原行信「親鸞研究重要書目解題」・名畑崇「親鸞関係著述、論文目録」（『定本親鸞聖人全集』別冊所収）、「化身土末巻関係研究文献一覧」（『教行信証化身土末巻の研究』所収）、重見一行「写本目録」（『教行信証の研究』所収）、藤島達朗「『教行信証』の書誌」・名畑崇「解説」（『親鸞大系』所収）、平春生「教行信証関係論文一覧」・「増補、教行信証関係論文目録・著述目録」（『教行信証撰述の研究』）を参照。
作成者名：藤田真隆

顕正流義鈔

書名よみ：けんしょうりゅうぎしょう
著者名：真恵
著者名よみ：しんえ、しんね
著者生没年：1434（永享6）-1512（永正9）
成立翻訳年：1472（文明4）
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、鈴鹿西岸寺蔵本（1472（文明4）、真恵真筆本）
2、四日市中山寺蔵本（1539（天文8）、尭成書写）
写本奥書：1、于時文明四季辰壬（1472）二月二十日、釈真恵記之
2、天文八年（1539）十二月日、権少僧都尭成書之
刊本所在：1、正徳4（1714、竜谷大）
2、天明5（1785、未調査）
刊本の奥書刊記：1、正徳四甲牛歳（1714）二月良辰、一身田御門跡、御書物屋、京師書林、永田調兵衛、勢州津、本屋忠兵衛
2、落陽高田山蔵版、天明五年乙巳（1785）五月刻、製本発行書林、京二條車屋町、村上勘兵衛、京御幸町痛御池下ル町、菱屋孫兵衛
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2673）、『真宗史料集成』4、『高田学報』58（1967）
参考文献：田中久夫「専修寺真恵の勧化について」（『日本学士院紀要』7-3、1949）、芦原恵明「著述に顕われたる中興上人」（『高田学報』52、1964）、平松令三編「真恵上人年譜」（『高田学報』52、1964）、平松令三「高田専修寺真恵と本願寺蓮如」（『北西弘先生還暦記念　中世仏教と真宗』、吉川弘文館、1985）、渡辺信和「中世本願寺と太子信仰」（『講座蓮如』6、平凡社、1997）、金信昌樹「真恵の著述とその伝記類の研究」（『高田短期大学紀要』19、2001）、小妻典文「真恵上人の念仏思想について－『顕正流義鈔』によって－」（『高田短期大学紀要』20、2002）
解説：真慧は真宗高田派第10代法主。同第9代定顕の子弟。永享6年（1434）誕生。当時関東を中心に教化活動を展開していた高田派にあって、北越、三重に活動の拠点を移し、後年高田派の中心が三重に移転する基を築いた。永正9年（1512）没。当時本願寺には蓮如が活動をしており、若年の頃は関係も良好であったが、後、教団運営などをめぐって対立し、敵対関係にあったことは広く知られている。
　本書は、まず法然・親鸞と相承する教えは、万行諸善及び本願に対する疑心自力を捨てて名号を専修することであると述べ、曇鸞・善導・法然・親鸞も専修念仏をひろめたことを引用し紹介している。次いで、近年真宗門徒と自称しながら専修念仏とは異なった教えをひろめる者がいることにふれ、その所説をあげ批判している。
　批判される所説には、念仏を申してたすかろうとするのは自力であるとする主張、念仏を称えてたすかろうとするのは第19願の立場であり、諸行往生の立場であるとする主張や、阿弥陀仏や聖徳太子の像を礼拝しても無益なので廃棄しなければならないとする主張などがある。これらに対し、本願をたのまず余仏を礼拝するのは自力であるが、今念仏申しているのは弥陀の本願をたのんだ相であり、至極の他力の立場であり、単に念仏を称えているのを自力とするのは見当違いであるなど、高田派相承の立場を明らかにしている。
　本書執筆は文明4年（1472）であり、当時本願寺蓮如の影響は大きく、蓮如の「信心正因、称名報恩」の教説を聞いた門弟の中に、真慧によって批判されるような事柄を説くものがいたと推測されている。
　本書末部では高田派教団の正統性を強調する文もあり、本願寺教団に対する意識の強かったことが伺われる。
作成者名：藤田真隆

顕選択

書名よみ：けんせんちゃく
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1225（元仁2）
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『法然上人行状絵図』42巻（『法伝全』p.265、逸文あり）、『金綱集』（『日蓮宗宗学全書』13、p.214）、『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：石井教道『選択集の研究　註疏篇』（誠文堂新光社、1945）、平雅行「嘉禄の法難と安居院聖覚」（『日本中世の社会と仏教』塙書房、1992）
解説：散逸文献。並榎の竪者定照は専修念仏の弘通をねたみ、『選択集』を非難した『弾選択』を書き洛中に広め、隆寛に送りつけた。これに対して隆寛は『選択集』を擁護する立場から『顕選択』をあらわしたという。隆寛の弟子岡本迎蓮は本書を東国で広め、多くの道俗が『弾選択』より本書に賛同したという。『弾選択』と『顕選択』の対立をきっかけとして、嘉禄の法難がはじまる。『四十八巻伝』には、「汝が僻破のあたらざる事、たとへば暗天の飛礫のごとし」との逸文があったことが伝わる。本書の反駁書として『顕選択難義鈔』という書物があったがこれも散逸。
作成者名：伊藤茂樹

顕選択難義抄

書名よみ：けんせんちゃくなんぎしょう（けんせんぢゃくなんぎしょう）
著者名：定照（？）
著者名よみ：じょうしょう
成立翻訳年：1225（元仁2）頃
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『金綱集』5「浄土宗見聞」下（『日蓮宗宗学全書』乾p.219）
参考文献：石井教道『選択集の研究—註疏編—』(誠文堂新光社、1945)、平雅行「嘉禄の法難と安居院の聖覚」（『日本中世の社会と仏教』塙書房、1992）
解説：著者とされる定照は宝地房証真の弟子であった。
　『金綱集』5「浄土宗見聞」によれば「俊範大僧都之状に云く」として「弾選択一帖、並びに顕選択難義鈔一巻、（略）作書の体を伺い見るに、興法の要と言うべし。只だ一向専修の邪論を摧くのみに非ず（略）就中両章の書を以て三塔に觸るの処、学呂天奏を企て、公家厳制を降して謗法の邪宗停止し已畢んぬ（略）」（『日蓮宗宗学全書』乾p.219）とある。このことから平雅行は「定照が隆寛の『顕選択』に反論したものであろう」（平雅行「嘉禄の法難と安居院の聖覚」（『日本中世の社会と仏教』塙書房、1992）とされている。なお『金綱集』は、佐渡阿闍梨日向が日蓮より聴聞した内容を基に諸宗の大綱を記述した著作である。
作成者名：米沢実江子

還相回向聞書

書名よみ：げんそうえこうききがき
書名別名：但信鈔、他信鈔
著者名：了海
著者名よみ：りょうかい
著者名別名：願明
著者生没年：1239（延応1）-1319（元応1）
成立翻訳年：1300（正安2）（？）
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、京都大蔵本（1300（正安2）、了海真筆本（？））
2、京都久遠院蔵本（14c前半、乗専書写）
3、兵庫毫摂寺蔵本（南北朝期、乗専書写）
4、兵庫毫摂寺蔵本（室町初期、書写者不明）
5、姫路本徳寺蔵本（1448（文安5）、蓮如書写）
6、大坂光徳寺蔵本（1471（文明3）、書写者不明、『他力信心聞書』と合本）
7、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、正安二年（1300）五月二十九日、釈了海六十二歳書之、釈空心相伝之
2、（奥書なし）
3、正安二年（1300）五月二十九日、釈了海六十二歳
4、正安二年（1300）五月二十九日、釈了海六十二歳
5、本云／建武三歳丙子（1336）十二月九日奉書写置之、釈妙真／右於写本者、本遇寺江存覚上人之以御自筆本令書写訖、于時文安五年（1448）十月十九日、於燈下終筆功畢、蓮如
6、（『他力信心聞書』末）此本ハ全ク外見ノ為ニ非ズ、只我目斗リノ［■■］也、背本意候ト雖モ世間ノイトナミノイソカハシサノ余リ加様ニ書奉ル也、祖師聖人ノ御遺訓ナレバ、但ヒトスジニ往生極楽ノ為メ斗リ也、全ク利他ノ為ニ非ズ、聖人御遺跡ナレバ余リニ御ナツカシク思ヒ奉テ本寺ニ申度心中ニ候ヘドモ貧窮ノカナシサニ加様ニ私二書奉ル也、只往生極楽ノ為ナレバチカヒ候トモ三世ノ［■］仏十方ノサタモ哀愍納受ヲ垂レテ此度ヒノ［■■］ヲトケサセ給ヘ、穴賢穴賢、命終ノ後ハ誰人ニテモ在［■］外見セザル先キニ火ニ焼候テ給ヘシ、文明三年（1471）五月二十九日
7、正安二年（1300）五月二十九日、釈了海六十二歳書之、釈空心相伝之
活字本所載書：『真宗史料集成』5、『仏光寺小部集』（仏教史学会、1923）、『真宗大系』36（了祥著『異義集』に「但信鈔」として収録）
現代語訳書：佐々木乾三「『還相回向聞書』－光明本尊の源流－」（『仏光寺の歴史と教学』、真宗仏光寺派宗務所、1996）
参考文献：鷲尾教導「了海上人の還相回向聞書古写本に就て」（『無尽灯』21-4、1916）、梯実円「初期真宗における善知識論の一形態－『還相回向聞書』をめぐって－」（『中西智海先生還暦記念論文集　親鸞の仏教』、永田文昌堂、1994）、佐々木乾三「『還相回向聞書』－光明本尊の源流－」（『仏光寺の歴史と教学』、真宗仏光寺派宗務所、1996）、渋谷晃「仏光寺の教化活動について－『還相回向聞書』を中心に－」（『仏光寺の歴史と教学』、真宗仏光寺派宗務所、1996）
解説：真宗仏光寺派の第4世である了海の著。
　著者了海は、承久の乱により武蔵勝瀬に流された頭中将と、紀氏の女との間に延応1年（1239）誕生。最初比叡山に学んだが、後、荒木満福寺源海の教えに触れ、真宗に改宗し、名を願明と改めた。後に阿佐布（麻布）善福寺に移り念仏の教えを弘めた。活動地が阿佐布（麻布）であった事から阿佐布門徒とも称される。嘉元4年（1306）往生。了海の法系に連なる了源が仏光寺を建立したことから、仏光寺の第4祖に位置づけられる。了海、阿佐布門徒については、西岡芳文「阿佐布門徒の輪郭」（『三田中世史研究』10、2003）を参照。
　本書は、京都大蔵本が了海真筆本であるとされており、その奥書から正安2年（1300）の成立であることが解る。
　了海は、別項『他力信心聞書』に「知識と申すは他力のあらわるる使者の名なり」と述べ、善知識の必要性を強調するが、その際、善知識は曇鸞『往生論註』（『浄土論註』）所説の方便法身であるとする点に特色がある。
　即ち二種法身、即ち法性法身・方便法身のうち、方便法身とは教化地の菩薩であると述べ、教化地の菩薩の活動相を述べた後、世々相承する先徳や、現前の善知識はこの教化地の徳をすべて備えており、その善知識は報仏が来迎した姿であるとする。そしてこの善知識にあい、その恩徳を知らなければ報土へは往生できないと述べている。
　本書は近世にも何度か出版されており、広く流布したと考えられるが、本願寺派の学僧僧樸は「妄説のはなはだしきもの」と批判している。
作成者名：藤田真隆

顕名鈔

書名よみ：けんみょうしょう
著者名：存覚
著者名よみ：ぞんかく
著者名別名：光玄、尊覚
著者生没年：1290（正応3）-1373（応安6・文中2）
成立翻訳年：1337（建武4）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、新潟浄興寺蔵本（1424・1425（応永31・32）、空覚書写）
2、竜谷大蔵本（1478（文明10）、明覚書写）
〈影印版〉:『破邪顕正鈔　顕名鈔』（「竜谷大学善本叢書」7、同朋舎出版、1987）
3、大阪光徳寺蔵本（室町中期、書写者不明）
4、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明、下巻のみ、顕恵所持本）
〈影印版〉:『破邪顕正鈔　顕名鈔』（「竜谷大学善本叢書」7、同朋舎出版、1987）
5、西本願寺蔵本（室町末期、証如書写、末巻欠）
6、大谷大蔵本（室町末期、明了書写（？）、末巻欠）
7、京都常楽寺蔵本（室町末期、両巻末に「寂恵」の印有）
8、大阪真宗寺蔵本（室町末期、書写者不明）
9、兵庫毫摂寺蔵本（室町末期、書写者不明）
10、山梨万福寺蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、（本巻）応永三十一年甲辰（1424）十二月二十二日終書写之徴功、即于性順授与之畢、信州水内郡太田庄長沼浄興寺住侶、常楽台御真筆也、仍不可他人相続殊可奉貴敬云云
（末巻）本云、依明光大徳誂記之畢、干時建武四歳丁巳（1337）八月日也、去春此令誂之間当年備州在国之間所染筆也、釈存覚／此両帖雖為秘蔵之書、性順頻致望之間、旦表信心之懇望所令授与也、于時応永三十二年乙巳（1425）正月十三日終書写之微功畢

2、本云、依明光大徳誂記之畢、干時建武四歳丁巳（1337）八月日也、去春此令誂之間当年備州在国之間所染筆也／右此鈔者存覚上人御作也、料紙等雖為聊爾覚智亡者御一廻季中急所令書写也、其意趣者法事中為令拝読也、本者見御自筆也、文明十歳戊戌（1478）五月二十七日記之明覚（花押）
3、（奥書なし）
4、（奥書なし）
5、証如（花押）
6、（巻末）光兼書之
7、（奥書なし）
8、（奥書なし）
9、（奥書なし）
10、光兼書写（本文とは別筆）
刊本所在：1、『真宗法要』19
2、『真宗仮名聖教』7
刊本の奥書刊記：1、夫決難聖道ノ万行ハヤウヤク正像ノムカシニカキリ、唯有浄土ノ一門ハトヲク澆季ノ今ニ通ズ、上古ノ聖人ハ自力ヲハケムテ開悟シ、末世ノ凡愚ハ他力ヲ信シテ往生ス、ココニ吾大法主高祖古徳ノ慈訓ヲ纂輯シ若干巻トナシ、カツ校正ヲクハヘコレニ題シテ真宗法要トイフ、コレカミ仏祖先徳ノ広恩ヲ謝シシモ、生死ノ群生海ヲ度センカタメナリ、コレスナハチ念仏往生ノ真法証大涅槃ノ至要ナリ、マコトニコノ文ノ名ソレユヘアルカ、ソモソモコノ書ノ中或一部或二部国字ヲ安スルニ尋常ニ違スルモノアリ、コレモマタ先哲ノ筆蹟ニシタカフ、後ノ学侶疑端ヲナスコトナカレ、ココニ其書ノ成ヲヨロコヒテ毫ヲソメテ巻尾ニシルスト云爾、明和二年乙酉（1765)七月二十五日、釈文如（朱印）
2、文化八年辛未歳（1811）、本願寺蔵（朱印）
活字本所載書：『真聖全』3、『真宗史料集成』1、『真宗聖教大全』上、『真宗聖典全書』和文之部、『真宗仮名法典』3、『高僧名著全集』10
参考文献：鷹野香象「顕名鈔」（『存覚上人』国書刊行会、1987）、竜谷大学仏教文化研究所編『破邪顕正鈔・顕名鈔』（竜谷大学、1987）、石原堅正「顕名鈔」（『六条学報』200、1918）、吉谷覚寿『顕名鈔略述』（、1907）、豊満春洞『顕名鈔講録』（為法館、1911）、可西大秀「顕名鈔」（『真宗聖教解説』　仏教普及会、1931）、竜谷大学仏教文化研究所編『破邪顕正鈔　顕名鈔』（「竜谷大学善本叢書」7、同朋舎出版、1987）、竜口恭子「存覚『顕名鈔』における譬喩と説示」（『印仏研』56-1、2007）
解説：本書は、存覚48歳の建武四年（1337）、明光の請いに応じて執筆されたものである。これは当著の新潟浄興寺蔵本、竜谷大蔵空覚書写本などの奥書に伺うことができ、また『浄典目録』にも「顕名鈔　一巻本末、依了円明光所望草之」とあることにより知る事が出来る。ただし執筆年次については、『存覚一期記』の49歳、歴応1年（1338）の条下に「顕名抄、明光於京都所望之間、於彼境草遺了」とあることから、暦応1年（1338）をとる説もある。しかし一般には、現存の『存覚一期記』が原本ではなく抄録本であることなどから、当著奥書などの記載を採用した建武4年（1337）説が有力である。
本書はまず、三界六道のいずれもが苦であり、現在の生である人界も貪欲・瞋恚・愚癡の三毒の煩悩に沈み、悪道に赴く身であるとし、煩悩具足のまま救済される仏道を求めるべきであると述べる。
では末代の凡夫相応の仏道何かといえば、それは阿弥陀仏の往生浄土門であるとして、弥陀念仏の専修を勧め、第12光明無量の願、第13寿命無量の願の意や十二光の意味などを説いている。
また後半部分では4つの問答を通して、浄土往生の意味を明らかにしている。4つの問答とは、まず阿弥陀仏の浄土を極楽といっているが、楽は苦に相対するものではないかというもので、それに対し曇鸞『往生論註』所説の「法楽楽」や『涅槃経』の大楽などを挙げて答える。2つ目は、衆生も無量寿より出で、無量寿の仏智に帰入する等と説くのは聖道門と同じではないのかと問うもので、それに対し、こうした道理を知らなくても、仏智不思議を信じ他力の名号に帰するならば、名号の徳により無量の理を悟るのであると述べる。3つ目は、衆生も仏も本来一体であるのに何故他力に帰するのかというもので、衆生は永い流転の中で迷っており自身で真理には目覚められないので仏智に帰するのであると返答している。最後は、往生といって生を求めるのは迷いではないのかというもので、曇鸞『往生論註』をあげ「無生の生」であることを述べる。
本書は初学者が仏法を理解できるようにとの配慮から、多彩な譬喩が展開されているところに特色を見ることもできる。
作成者名：高山秀嗣・藤田真隆

迎接和讃

書名よみ：こうしょうわさん
異本書名：迎接讃
著者名：永観（？）
著者名よみ：ようかん
著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：12c-13c（？）
成立地：日本
漢和：和文
活字本所載書：『国文東方仏教叢書』1-8（ 国文東方仏教叢書刊行会、1925-1933）
参考文献：多屋頼俊『和讃史概説』（法蔵館、1933）
解説：本書は永観に仮託された和讃と考えられる。『国書総目録』3、『仏書解説大辞典』3には永観作、もしくはそれに擬するものとして採録されている。しかしその由来は定かではない。この和讃と諸和讃との讃文の対照から源信作といわれる『来迎和讃』から派生したものと考えられている。
　また時宗所用の『浄業和讃』に収録されている「迎接讃」は本書の別伝であり、源信作の『極楽六時讃』と同様に古和讃として収録されているため、遅くとも『浄業和讃』成立以前の鎌倉初期には流布していたものとみられる。
　その内容は阿弥陀仏の臨終来迎の様相を讃じたものであり、基本的に五七調の形式で、わずか41句の短編である。一方、別伝の「迎接讃」の句数はその倍近くに及ぶ。
作成者名：能島覚

皇太子聖徳奉讃

書名よみ：こうたいししょうとくほうさん
書名別名：七十五首和讃、七十五首太子和讃、七十五首聖徳和讃、伽藍和讃
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：1255（建長7）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本

写本所在：1、岸部武利蔵本（鎌倉期、親鸞真筆本、この他の所蔵地については『増補親鸞聖人真蹟集成』9を参照）
〈影印版〉:『増補親鸞聖人真蹟集成』9（法蔵館、2006）
2、高田専修寺蔵本（1255（建長7）-1258（正嘉2）、真仏書写）
〈影印版〉:『真仏上人集』（『高田古典』1、真宗高田派宗務所、1996）
3、高田専修寺蔵本（鎌倉期、顕智書写）
〈影印版〉:『顕智上人集』下（『高田古典』4、真宗高田派宗務所、2002、部分のみ）
4、京都東本願寺蔵本（1318（文保2）、覚如書写）
5、京都常楽寺蔵本（1318（文保2）、覚如書写（？））
6、愛知満性寺蔵本（室町中期、書写者不明）
7、越後浄興寺蔵本（室町末期、書写者不明）
8、愛知満性寺蔵本（1575（天正3）、寂如書写）
9、大谷大蔵本（17c、恵空書写）
写本奥書：1、（未調査）
2、拝見奉讃人者南無阿弥陀仏可唱可唱、建長七歳乙卯（1255）十一月晦日書之、愚禿親鸞八十三歳
3、拝見奉讃人者南無阿弥陀仏可唱可唱、十一月晦日書之、愚禿親鸞八十三歳
4、以彼御真筆草本、徳治二季丁未（1307）卯月七日釈道顕書写之／応長四歳辛亥（1314）六月十四日書写之訖、同十六日仮名等付之云料紙云、悪筆頗雖為嘲哢之基只為興隆仏法愁馳筆畢心閑可清書者也、写本僻字非一然而不顧紕繆終鳥跡之功而已、授与光殊丸／文保二歳戊午（1318）奉書写了、沙門宗昭四十九
5、以彼御真筆草本、徳治二季丁未（1307）卯月七日釈道顕書写之／応長四歳辛亥（1314）六月十四日書写之訖、同十六日仮名等付之云料紙云、悪筆頗雖為嘲哢之基只為興隆仏法愁馳筆畢心閑可清書者也、写本僻字非一然而不顧紕繆終鳥跡之功而已、授与光殊丸／文保二歳戊午（1318）奉書写了、沙門宗昭四十九
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2653）、『真聖全』2、『真宗史料集成』1、『定本親鸞聖人全集』和讃篇、『高田学報』8（1934）、名畑応順校注『親鸞和讃集』（岩波書店、1976）、潟岡考昭『和讃文学史稿（資料編）』（啓文社、1994）
現代語訳書：真継伸彦「皇太子聖徳奉讃」（『現代語訳親鸞全集』4、法蔵館、1983）
参考文献：可西大秀『真宗聖教解説』（仏教普及会、1931）、多屋頼俊『和讃史概説』（法蔵館、1933）、可西大秀「大谷派本願寺所蔵　古写聖徳奉讃について」（『宗史編修所報』11、1935）、梅原真隆『真宗小部集』（真宗典籍刊行会、1943）、橘純孝「親鸞の聖徳太子和讃について」（『日仏年報』29、1964）、長安章俊「親鸞聖人と聖徳太子－『七十五首和讃』制作の契機について－」（『真宗研究』13、1968）、武田賢寿「和讃に現れた宗祖の太子観について」（『真宗研究』16、1974）、常磐井猷麿「太子和讃存疑」（『真宗研究』19、1977）、本井信雄「『皇太子聖徳奉讃』恵空書写本」（『大谷学報』60-4、1981）、山崎慶輝『皇太子聖徳奉讃七十五首の考察』（永田文昌堂、1984）、河田光夫「親鸞の太子和讃についての一考察－七十五首和讃に現れた理想国家への指向」（河田光夫『親鸞の思想形成』、明石書店、1995）、清水谷正尊「皇太子聖徳奉讃」（『顕智上人集』下、「高田古典」4、真宗高田派宗務所、2002）
解説：親鸞の聖徳太子讃仰の和讃。
　建長7年（1255）11月の奥書から成立時期を知る事ができる。
　本書は、主として『御手印縁起』『聖徳太子伝暦』『文松子伝』を基に聖徳太子の思想・行実を和讃として讃嘆したもの。全75首の内、第1首は総説、第2首から第10首は六角堂建立について、第11首から第72首は四天王寺建立・聖徳太子の前生譚・物部守屋討伐について、第73首から第75首は『十七条憲法』についての和讃となっている。
　本書成立の背景としては、善鸞の異義を発端とする建長の念仏弾圧との関係が指摘されている。即ち専修念仏弾圧を繰り返す幕府などに対し、仏法守護がなければ真の平和はなく、聖徳太子の行実等を通して真の国家と仏法の関係を提示する意図があったのではないかという指摘である。この点に関しては、長安章俊・河田光夫論文を参照。
　本書は、和讃の順序が散乱しているように見えることから親鸞以降の人物による編集説が提示されていたが、親鸞より先に亡くなった真仏書写本も同様の順序となっていることから成立しにくい説となっている。
作成者名：藤田真隆

興福寺奏状

書名よみ：こうふくじそうじょう
書名別名：興福寺奏達状
著者名：貞慶
著者名よみ：じょうけい
著者名別名：解脱房貞慶、貞慶上人、解脱上人
著者生没年：1155（久寿2）-1513（建保1）
成立翻訳年：1205(元久2)
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、香川大神原文庫蔵本（1539（天文8）、良願書写)
2、東京大学史料編纂所蔵マイクロフィルム(大内文書内)（1539（天文8）、良願書写（1の影写））
3、東大寺図書館蔵本（1624（寛元1）、亮慶・1838（天保9）、公周書写）
4、大谷大蔵本（1764（明和1）、暁了書写）
5、竜谷大禿氏文庫蔵本（1766（明和3）、臨全書写）
6、竜谷大蔵本（1800（寛政12）、義陶書写）
7、竜谷大蔵本（1801（享和1）、書写者不明)
写本奥書：1、未調査
2、天文八年（1539）巳亥閏六月二十四日書功畢良願快尊院／右大内文書、東京市麻布区日ヶ窪町大内青巒氏蔵本、明治四十二年（1909）九月影写（『鎌倉旧仏』による）
3、元久二年（1204）十月日／時寛永元歳（1624）次甲子九月日求之者也／持主亮慶／外題曰興福寺奏状／法然上人流罪之事貞慶解脱上人草／元久二年者貞慶住笠置已離本寺之後十四年未移海住之前五ヶ年矣（細川行信論文による）
4、明和元（1764）甲申年九月以元常律師之持本謄写／湖月釈暁了（楠淳証論文による）
5、興福寺奏達状之写者於世無之／越後高田浄興寺宝物弘通御機内之砌鑑司歓喜庵権律師釈秀啓子不慮得之写取之趣／明和二（1765）申歳従三月弘通当郡刻法流旧友故兼約帰国之後被写賜之本紬書間自書写留寺庫／以弟子之誤及師不習之法自解必乱正義而失利益根元／熟読此書常意得嗜／仏神真実大悲開示／祖師之末弟当深慎矣／穴賢／明和三（1766）丙戌歳八月上六日出羽村上郡高楯鬼目山了広寺／九世釈臨全[知昭六十三歳]（楠淳証論文による）
6、未調査
7、未調査
活字本所載書：大屋徳城『日本仏教史の研究』3（法蔵館、1953)、『日仏全』124、日本思想大系15『鎌倉旧仏教』（1971）細川行信「宗旨留難」（『親鸞教学』56、1990（東大寺図書館蔵本））、楠淳証「竜谷大学図書館禿氏文庫蔵『興福寺奏達状』について―『興福寺奏状』の草稿本もしくは今一つの「奏状」―」（『竜谷大学仏教文化研究所紀要』48、

2009）
参考文献：大屋徳城「創立時代の浄土教」（『日本仏教史の研究』3、法蔵館、1953）、塚本善隆「日本に遺存せる遼文学と其の影響」（『東方学報』7、1936）、津本了学「興福寺奏状について」（『印仏研』3-2、1961)城福雅伸「内容が改竄された『興福寺奏状』の異本について」（『印仏研』48-2、1998）、楠淳証「竜谷大学図書館禿氏文庫蔵『興福寺奏達状』について―『興福寺奏状』の草稿本もしくは今一つの「奏状」―」（『竜谷大学仏教文化研究所紀要』48、2009）
解説：本書は、1205年（元久2）10月、興福寺の三綱らが専修念仏の宗義の糺改をもとめて朝廷に奏上した9箇条からなる奏状。1新宗を立る失，2新像を図する失，3釈尊を軽んずる失，4万善を妨ぐる失，5霊神に背く失，6浄土に暗き失，7念仏を誤る失，8釈衆を損ずる失，9国土を乱す失、と「副進奏状一通」からなる。東大寺図書館蔵本、大屋徳城氏翻刻本、『日仏全』本等にはそれぞれ異本注記があることから、更に異本が存在したと思われる。また諸本には、それぞれ標題の下に次の項目名がある。『日仏全』所収本には「貞慶上人御草」「法然上人流罪之事」「附解脱上人行状記并同修学記」「院務御所隆遍御代」「飛鳥御所御記録所」、東京大学史料編纂所(大内文書内)蔵本には「法然上人流罪事」「貞慶解脱上人御草」「同行状詞少々」、禿氏文庫蔵本「法然上人流罪之事」「貞慶解脱上人之御草事」、東大寺図書館蔵本「法然上人流罪之事」「貞慶解脱上人草」。しかしこれらの内容は掲載されていない。東京大学史料編纂所蔵マイクロフィルムには本文の他に「解脱上人形状記曰」「同上人懐胎以来形状」「解脱上人御詞」「火宅喩」「澄憲曰」「貞慶曰」等が集載されており、『日仏全』所収本にはさらに「薬草喩」「解脱上人修学記」が並載されている。

作成者名：米沢実江子

高野山往生伝

書名よみ：こうやさんおうじょうでん
著者名：如寂
著者名よみ：じょじゃく、にょじゃく
著者名別名：日野資実、日野民部卿、日野入道、藤原資長（？）
著者生没年：1119（元永1）-1196（建久6）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、国立公文書館内閣文庫蔵本（1836（天保7）、長沢伴雄書写、版本写）
2、高野山三宝院蔵本（1839（天保10）、得勇書写）
3、東京大蔵本（1836（天保7）、長沢伴雄書写、版本写）
4、日本大蔵本（版本写）
写本奥書：1、右一冊以塙本写之、長沢伴雄、天保七年（1836）十月二十日（以上、朱筆）／延宝五丁巳年（1677）九月吉辰、山本市兵衛中村七兵衛板行
2、延宝五丁巳年（1677）九月吉辰／此本古上梓而行世矣、其版既亡、今茲以明王院本使傭筆書写畢、天保十五（1844）夏五月十七日、得勇
3、（未調査）
4、（未調査）
刊本所在：1、延宝5（1677、大正大・竜谷大・玉川大・金沢大・京都府立総合資料館・高野山正祐寺・高野山増福院・高野山持明院・高野山真別処・高野山宝城院・お茶の水図書館成簀堂文庫）
刊本の奥書刊記：1、延宝五丁巳年（1677）九月吉辰（未調査）／山本市兵衛・中村七兵衛（未調査）
活字本所載書：日本思想大系7『往生伝・法華験記』、『日仏全』107、『続浄』6、『続群書類従』8上
参考文献：梶原正昭（往生伝類解題）「高野山往生伝」（古典遺産の会編『往生伝の研究』、新読書社、1968）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975）、志村有弘『往生伝研究序説』（桜楓社、1976）、志村有弘「『高野山往生伝』と如寂」（『相模女子大学紀要』51、1987）、田嶋一夫「『高野山往生伝』の編者如寂をめぐって―日野資長説の可能性―」（国東文麿編『中世説話とその周辺』、明治書院、1987）、田嶋一夫「中世往生伝の研究」（『国文学研究資料館紀要』11、1985）、今村みゑ子「『高野山往生伝』作者考―資長作者の可能性をめぐる―」（『人間文化研究年報』12、1989）
解説：延宝板の序には「法界寺沙門如寂撰」とあり、如寂は藤原（日野）資長と考えられつつある。資長は弁官から順調に昇進を重ねて正二位権中納言にまで至った文人貴族であり、治承5年（1181）に自らの日野山荘において長年の志であった出家を遂げている。
　本書は高野山において往生した38人の伝を集めたもので、その没年は寛治7年（1093）から文治3年（1187）までの約100年間に及ぶ。巻頭の「教懐伝」中の記述によれば、如寂は元暦1年（1184）に高野山に参籠したことをきっかけとして、この地の往生者の伝を集めることにしたらしい。先行する『拾遺往生伝』や『三外往生伝』と重複する往生者の伝もあって、先行往生伝を参照しつつ書かれたものもあるようだ。成立時期については、最も新しい往生者の没年からすると、文治3年（1187）以後の成立となろう。
　38人の往生者は高野山の特殊性を反映して出自や出身は多様であるが、その多くは高野山に隠棲する阿弥陀真言等の念仏聖であったようだ。念仏聖の祖師的存在である教懐の伝が巻頭に置かれるのもそのためとみられる。
作成者名：坪井直子

五巻書

書名よみ：ごかんじょ
著者名：親鸞（著）／顕智（編）
著者名よみ：しんらん／けんち
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師／
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）／1226（嘉禄2）-1310（延慶3）
成立翻訳年：1308（徳治3）
成立地：日本
漢和：和文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、福井法雲寺蔵本（1312（正和1）、専空書写）
2、愛知妙源寺蔵本（1499（明応8）、真恵書写）
3、愛知満福寺蔵本（1516（永正13）、真智書写）
4、高田専修寺蔵本（1520（永正17）、真智書写）
5、愛知上宮寺蔵本（1562（永禄5）以前（？）、書写者不明）
6、愛知上宮寺蔵本（1562（永禄5）以前（？）、書写者不明）
7、愛知妙源寺蔵本（書写年不明、書写者不明、断簡）
写本奥書：1、正和元年壬子（1312）十二月十三日専空（花押）
2、（各巻末）徳治第三戊申（1308）正月下旬第七、顕智／明応八年（1499）七月四、真恵（花押）、秀蓮方
3、（未調査）
4、于時永正十七年（1520）七月二十八日於西林坊、釈真智書写之畢

5、（各巻末）徳治第三戊申（1308）正月下旬第七、顕智（十月六日付真仏宛消息、摂取不捨事巻末）右此五巻之御書者、顕智上人真筆也、勢州安濃津上宮寺相伝之、真恵法師有披閲云、顕智之筆跡也、莫疑慮矣、依之法印御在国之時、有五巻懇望之輩、以当寺之本令書写御免許云々、親鸞上人九十歳遷化弘長二壬戌（1262）暦以来、至徳治三（1308）、至永禄五壬戌歳（1562）、二百五十五年也、経年序、破損所多、爰上宮寺釈慶諫六十五歳修補之、門流後弟取仰信、不可許自他之見聞者也、五月九日誌之
6、徳治第三戊申（1308）正月下旬第七、顕智
7、（未調査）
現代語訳書：細川行信・村上宗博・足立幸子『現代の聖典　親鸞書簡集』（法蔵館、2002）
参考文献：宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）、多屋頼俊『親鸞消息の研究』（法蔵館、1992）、平松令三「親鸞聖人の“五巻書”をめぐって」（『顕智上人集』中、『高田古典』3、真宗高田派宗務院、2001）
解説：親鸞の消息5通を、1通1巻、計5巻の巻子本の形式で集成したもの。
　本集成の特色として、それぞれの消息に題名がつけられている事が挙げられる。その題名は、「摂取不捨事」「諸仏等同云事」「如来とひとしといふ事」「仏智不思議と信すへき事」「誓願名号同一事」がそれぞれの消息につけられており、編者の顕智の命名であると推測される。また、本集成は編者を顕智としているが、親鸞消息「誓願名号同一事」の本文中に、「このふみをもてひとひとにもみまいらせたまふへく候」とあることから、門弟間の回覧用として顕智が書写し与えたものと考えられる。本書は全て真宗教義に関するものが中心となっており、その事からこの5通が選ばれたものと推測される。
　なお、本書の書名である「五巻書」は正式な題名ではなく、宮崎円遵の命名である。
作成者名：藤田真隆

極楽記

書名よみ：ごくらくき
著者名：小聖亀山居
著者名よみ：こひじりかめやまきょ
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の小聖亀山居とは、あまり高位でなく亀山という場所に住む僧ということであろうか。
作成者名：能島覚

極楽浄土九品往生義

書名よみ：ごくらくじょうどくほんおうじょうぎ
書名別名：九品往生義、九品往生義略註
著者名：良源
著者名よみ：りょうげん
著者名別名：慈慧大僧正
著者生没年：912（延喜12）-985（永観3）
成立翻訳年：10c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、叡山文庫真如蔵本（1463（寛正4）、栄円写）
写本奥書：1、寛正四年下夏十五日書写畢。右筆栄円。
刊本所在：1、寛文13（1673、竜谷大・仏教大・駒沢大）
刊本の奥書刊記：1、寛文十三年三月吉日長谷川市兵衛開板。
活字本所載書：『日仏全』24、『浄全』15
参考文献：普賢晃寿『日本浄土教思想史研究』（永田文昌堂、1972）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、叡山学院編『元三慈恵大師の研究』（同朋舎、1984）、奈良弘元『初期叡山浄土教の研究』（春秋社、2002）、梯信暁『奈良・平安期浄土教展開論』（法藏館、2008）
解説：良源の著。『観無量寿経』九品段の註釈書で、随文解釈の形式をとる。良源の外護者であった藤原師輔の要請に応じて著されたと言われる。10世紀の貴族社会に浸透しつつあった阿弥陀仏信仰に対して、教理的な情報を提供した最初の著述である。『観無量寿経』の全体ではなく、九品段のみを註釈しているのは、貴族たちの興味が「臨終来迎」に注がれていたためであろう。臨終に聖聚の来迎を得て極楽に往生するためには何をすべきかという、貴族社会より寄せられた問いに答えた書であると言える。重要語句の解説は主として天台『観経疏』に依っていること、上品上生段に説かれる至誠心・深心・回向発願心の三心を、『維摩経』の直心・深心・回向心に配当し、天台『維摩疏』を用いて解釈していることなどから、天台教学に即した浄土教教理の構築を目指していることが知られる。また、『無量寿経』の四十八願に関する諸問題を論ずるにあたっては、義寂・憬興等の新羅諸家の著述を用いている。ことに義寂の説によって、第十八願の「十念」は、『観無量寿経』下々品の「十念」と同じく、十遍の称名念仏であるとする見解は、後の叡山浄土教文献に大きな影響を与えている。加えて、臨終十念の称名念仏の意義を力説し、天台『観経疏』および『十疑論』の説を用いて、下々品の悪人が称名によって重罪を滅し、臨終来迎を感得して極楽に往生することができるということを論証している。浄土教の易行性を強調したこの見解は、貴族社会において高く評価されたようであり、これ以降12世紀に至るまで、天台宗は浄土教教理研究の分野において指導的地位を保持し続けることになる。
作成者名：梯信暁

極楽浄土宗義

書名よみ：ごくらくじょうどしゅうぎ
書名別名：宗義（外題）
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1220（承久2）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉後期、湛睿書写、下巻のみ）
2、東京某氏蔵本（鎌倉後期、書写者不明、中巻のみ）
写本奥書：1、（下巻）日本国天台山首楞厳院戒心谷権律師隆寛、為扶末学抽要記之、頗有稟承、見人勿軽、干時承久第二（1220）暦春始々之秋終々功而已
2、（中巻）日本国天台山首楞厳院戒心谷権律師隆寛、為扶

末学抽要記之、頗有稟承、見人勿軽、干時承久第二（1220）暦春始始之秋終々功而已
活字本所載書：『隆寛律師の浄土教　附遺文篇』、安井廣度監修『隆寛律師全集』1、谷村諄教校訂「金沢文庫蔵隆寛撰極楽浄土宗義」（『浄土学』14・15、1939）、『金沢文庫資料集』4、『日大蔵』90
参考文献：塚本善隆「金沢文庫蔵の長楽寺隆寛派の新資料」（『顕真学報』3-4、1934）、安井廣度『法然門下の教学』（法蔵館、1938）、平井正戒『隆寛律師の浄土教』（国書刊行会、1941）、色井秀譲「隆寛律師の『極楽浄土宗義』について」（『天台学報』18、1977）
解説：隆寛の浄土教学の概要がわかる書であり、承久2年（1220）の春から秋にかけて書かれた隆寛73歳の時の撰述。もと上中下の三巻にわたる本であるが、現在伝わるのは中下巻で上巻は散逸している。
　内容は上巻は散逸しているものの、下巻に「大文第三、総結浄土宗義、此中有三、一者結国土相、二者結往生機、三者結一宗名義」とあるように、国土相についての解釈であったことがわかる。中巻には往生の機類、すなわち隆寛教学で重要な報土・辺地往生の機類の説明とその内容に対しての問答料簡であり、下巻では、はじめに上・中巻で説明した国土相と往生の機類についてのまとめがあり、最後に一宗の名義として（1）次位の名義（2）教相の名義（3）浄土宗の名義とした隆寛の教相判釈について記されている。本書には隆寛教学の特色である九品辺地往生の詳細が説かれている。それは『無量寿経』にみえる疑惑胎生と『観経』諸説の九品往生を合致させたもので、弥陀本願に帰依せざる自力願生者を辺地に誘導して救済するという弥陀の方便説である。同書には、この説は善導の諸説に依拠したものであって『選択集』や『往生要集』にみえないものであるとする。しかし隆寛は本書撰述後に良源の『九品往生義』の中に同説を見出し、その感激から奥書きの後に『九品往生義』の長文を書き加えている。親鸞に先立つ三願転入や三心を軸にした独自の廃立観など注目すべき点も多い。金沢文庫本は『具三心義』『弥陀本願義』と同じく湛睿の手沢本であり下巻のみである。平井正戒の『隆寛律師の浄土教　附遺文篇』における中巻の翻刻の底本は、東京在住の某氏が所蔵する鎌倉期の写本。金沢文庫に写真版があるが現在どこにあるのかは不明である。隆寛教学を研究するには根本資料となるものであって重要な書である。
作成者名：伊藤茂樹

極楽六時讃

書名よみ：ごくらくろくじさん
書名別名：極楽の六時讃、六時讃、六時和讃、六時居讃、和之礼讃
著者名：源信
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：長元年間（1028-1037）以前
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大東急記念文庫蔵本（院政期（？）、書写者不明、『大乗広百論釈論』巻第10の巻末紙背、20行53句の断簡）
2、神奈川藤沢清浄光寺蔵本（書写年不明、伝真教書写、真教は1237（嘉禎3）-1319（文保3）の人）
3、愛知碧南称名寺蔵本（書写年不明、真教書写、伝真教は1237（嘉禎3）-1319（文保3）の人、善導「晨朝礼讃」と「晨朝讃」からなる）
4、神奈川藤沢清浄光寺蔵本（1574（天正2）（？）、普光書写、『六時礼讃』『六時居讃』『来迎讃』からなる）
5、神奈川藤沢清浄光寺蔵本（1621（元和7）、書写者不明、善導『六時礼讃』『極楽六時讃』『来迎讃』からなる）
6、神奈川藤沢清浄光寺蔵本（1659（万治2）、法値書写）
7、愛知碧南称名寺蔵本（1664（寛文4）以降、重全書写、『極楽六時讃』『来迎讃』からなる）
写本奥書：1、（奥書なし）（『大乗広百論釈論』巻第10は「承和八年（841）七月八日」の施点奥書と「此是雖古書加法隆寺一切経蔵畢、以大治二年丁未（1127）四月之比修治之、僧静因之」の識語あり）
2、（奥書なし）
3、二世大上人御真跡相違無之者也、京七条道場黄台山御院代
4、往古遊行有十九代筆記之礼讃、天正二甲戌（1574）比以後本両巻透写、之一冊故上人三十三世譲、之一冊当会下留、之平生可為声明稽古之本物也、慶長十八癸丑年（1613）四月二十日記録、遊行三十二世他阿
5、右依所望所染毫六時漢和之礼讃具足之者也、元和七辛酉年（1621）十月二十九日、遊行三十二世記書
6、此六時居讃者於遊行三十七祖御下藤沢山什物、以二祖上人御直筆令書写処不図二十七日筆功畢、万治二己亥天（1659）八月二十七日、法値／遊行相続之後依為無類之本、納境之葛籠者也、四十三世尊真
7、以一法上人本洞雲院重全謹書
刊本所在：1、文政8（1825、『浄業和讃』巻上所収、大谷大・金沢大暁烏文庫・京都大・大正大・名古屋大岡谷文庫・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）（「吾祖一遍大上人以悟真大師六時礼讃為不断称名之助業且以恵心僧都来迎讃及古聖和讃配次日々礼拝、爾後為一宗勤行規則矣、古括判行之恵恰後進、久而印板摩滅、門徒多慨為、藤嶺三十三主与最上光明寺主長順上人謀欲新刻之而其業未成、二師共蒙金台迎接、於是人々手自写、遂以魯為魚以亥為彖之類亦不為尠也、其資一道深憂之継二師之志、深討四方善本校定卒業、乞遊行五十六主嘱目、且告之以有梓行之志、主美其志篤速許諾焉、一道需余一言、余亦讃其成功不敢辞、乃書鄙言於巻末云、文政乙酉（1825）晩春芝崎道場日輪寺感徹碩応撰／徒弟寿阿弥陀仏曇況謹書」と序にあり）
活字本所載書：『恵全』1、高楠順次郎・志田義秀・福井久蔵編『釈教歌詠全集』5（東方出版、1934）、高野辰之編『日本歌謡集成』4（東京堂出版、1960）、国民図書株式会社編『校註国歌大系（復刻版）』1（講談社、1976）、榎木克朗『日本仏教文学と歌謡』（笠間書院、1994）、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）、藤井佐兵衛『仏教和讃五百題』（書林山城屋、1916）、河住玄編『平安浄土教漢籍と和歌』（私家版、1989）
現代語訳書：八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）
参考文献：榎木克朗『日本仏教文学と歌謡』（笠間書院、1994）、武石彰夫『仏教歌謡の研究』（桜楓社、1969）、竹田実善「浄業和讃の成立」（『国文学踏査』復刊1、1956）、多屋頼俊『和讃史概説』（「多屋頼俊著作集」1、法蔵館、1992）、多屋頼俊『和讃の研究』（「多屋頼俊著作集」2、法蔵館、1992）、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）
解説：著者は不明。『長西録』（『日仏全』1、p.351）は「源信」とする。『法華験記』源信伝には「八塔の倭讃を造り

出して」（日本思想大系7『往生伝・法華験記』p.160）と源信に和讃の著述があったことが記され、また高山寺蔵『転法輪鈔』（建保2年（1214）書写）には「恵心先徳極楽六時讃云」（末木文美士「高山寺蔵『転法輪鈔』阿弥陀釈の解説並びに翻刻」（平成8年度『高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、1996、p.56））と記されており、ひとまず源信の撰述と考えられる。

成立年代は不明。ただし長元年間（1028-1037）の成立と考えられる『栄華物語』（正編）巻17「音楽」・巻18「玉の台」に引用されていることから、長元年間（1028-1037）には流布していたものと考えられる。

内容は、極楽において見聞・勤修される荘厳・仏事を昼夜六時に配し讃詠したもので、序（28句）・晨朝讃（190句）・日中讃（198句）・日没讃（202句）・初夜讃（46句）・中夜讃（204句）・後夜讃（8句）・跋（30句）の878句から成る和讃（ただし漢讃（偈頌）も交えられる）。序は、極楽を願うべきこと、臨終の聖衆来迎の様子、往生後の六時に仏事を勤修することが讃詠される。晨朝讃は、出定から阿弥陀仏への供養、十方諸仏への歴訪・供養の様子が讃詠される。日中讃は、飯食・経行し、菩薩が仏事をなすのを見聞して仏法を修学する様子が讃詠される。日没讃は、諸菩薩の極楽への来至、阿弥陀仏の説法、大衆の歓喜の様子が讃詠される。初夜讃は、自坊へ帰り三宝を念ずる様子、諸菩薩の説法の様子が讃詠される。中夜讃は、極楽の中夜の静寂な様子、仏所の荘厳と阿弥陀仏を囲繞する諸眷属の様子、心中に仏の功徳を讃嘆する様子、仏所より帰途中における見聞の様子、自坊で釈尊一代の教化・行状が示現される様子が讃詠される。後夜讃は、初夜に準じて三宝を念ずべきことが讃詠される。跋は、娑婆に還来し仏法興隆と衆生済度に従事すべきこと、念仏の功徳と阿弥陀仏を念じ奉るべきことが讃詠される。

作成者名：上杉智英

五劫思惟諍論鈔

書名よみ：ごこうしゆいじょうろんしょう
著者名：長西
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『浄土法門源流章』（『浄全』15、p.599下）
参考文献：住田智見『浄土源流章』（法蔵館、再刊1982）pp.368-369
解説：『浄土法門源流章』の長西門下についての記述中で紹介される典籍。長西の門下である澄空（如輪房）と理円とが、法蔵比丘の五劫の思惟は唯だ思惟のみであったのか、修行を伴っていたのかという点で論争した際に、長西が本書を作して決判したとされる。長西の説は、五劫は修行であって唯思念ではないというもので、浄影等の解釈を踏まえたものと思われる。

作成者名：吉田淳雄

後拾遺往生伝

書名よみ：ごしゅういおうじょうでん
著者名：三善為康
著者名よみ：みよしのためやす
著者生没年：1049（永承4）-1139（保延5）
成立翻訳年：12c前半
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、名古屋真福寺蔵本（1258（正嘉2）、乗智書写）
2、国立公文書館蔵本（未調査、拾遺往生伝と合冊）
3、宮内庁書陵部蔵本（未調査）
4、彰考館蔵本（未調査）
5、京都大総合博物館蔵本（1501、甘露寺元長書写、勧修寺家蔵本、藤原為隆伝のみ）
写本奥書：1、承久第二（1220）秋、賜持明院宮御本書写之了、于時松風音夕日影袖方室菴静思寄玉毫、唯願若干往生之人、哀愍迎接耳、砂門慶［■］謹題之、／玄義第六云、大経云、我観衆生不観老少中年貧富貴賤、有善心者即便慈念云々、昨日看此文深銘肝、今日見此伝弥仰信、唯願大悲愍接取而已、已上本定／正嘉二年（1258）七月十七日巳剋、於西山法花山寺書写了、乗智
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、右二十七人之内、曩祖之伝令抜書訖、于時明応十年（1501）正月二十六、申出禁裏御本書之、権中納言藤原朝臣元長、先年公物書写之時令書抜処、去年宿所炎上之時紛失、仍所申出御本也／（付紙）此一巻従反古之中見出、軸表紙等如此令沙汰、仏神御崇敬併為愚昧之子孫之余慶者也、権中納言藤（花押、経広）
刊本所在：1、延宝2（1674、大正大・竜谷大・大谷大・九州大・慶応大・日本大、旧彰考館、下巻欠）
2、元禄4（1691、大正大・竜谷大・京都大・東京大（『類聚三代格』合綴）・神宮文庫・無窮会神習文庫・陽明文庫）
刊本の奥書刊記：1、（各冊奥書）本云、嘉元元年（1303）九月二十四日於康楽寺上御所書写畢、同十月七日写点了、同八日一校了、兼胤／（刊記）延宝二歳次甲寅（1674）正月良辰神洛銅陀坊書肆長尾平兵衛刊行
2、〈先人借請予返遣了〉以行衡入道本校合了、彼本有僻文字等歟、此本先人書写校合給了、重所見合也、有花押〈花押〉／予辞蘭省入桑門之後、偏仕弥陀之一仏、唯期往生於九品、願求之思未曽止息、仍如此伝等常所伺見也、抑此本者後都督禅下所被書進彼〈後納言〉内禅室也、此等子細為貽後葉、委曲雖被注置于右、予重述子細而已、日野愚僧明寂／右後拾遺往生伝、三善為康撰纂上中二巻前已繍梓、今幸得其下巻続以刊行云、元禄辛未（1691）仲冬蔵板
活字本所載書：『続群書類従』8上、『日本往生全伝』（永田調兵衛、1882）、『日仏全』107、『続浄』6、『改訂史籍集覧』19、日本思想大系7『往生伝・法華験記』、国文学資料館編『往生伝集』（「真福寺善本叢刊」2-7、臨川書店、2004）
参考文献：西口順子「往生伝の成立―三善為康の往生伝を中心に―」（『史窓』17・18、1960）、重松明久『日本浄土教成立過程の研究』（平楽寺書店、1964）、宮田尚「後拾遺往生伝」（古典遺産の会編『往生伝の研究』、新読書社、1968）、志村有弘『往生伝研究序説』（桜楓社、1976）、山崎誠「算博士三善家と往生伝」（『国文学研究資料館紀要（文学研究篇）』32、2006）
解説：著者については『拾遺往生伝』の項を参照。本書は『拾遺往生伝』の後をうけて編纂されたもので、序文によれば『拾遺往生伝』が知られるようになった保安4年（1123）頃から書き始められたという。成立年は不明だが、保延3年（1137）に没した寂念の伝が最も新しいので、それ以降、著者が没する保延5年（1139）までの間となろう。上巻21人、中巻27人、下巻27人を収録するが、2人が重複するから計73人の伝を収録していることになる。それらの約半数は前

著『拾遺往生伝』の成立下限である天永2年（1137）以後の伝で、新しいものが多く、俗人の割合が前著より大幅に増加して、身分や地域も広くなっている。また配列も一定しておらず、年代や僧俗などを鑑みることなく、採取に任せて収録したようである。往生の行業については、前著と同様に幅広く、法華経や密教などの修学もあるが、念仏が多くなっており、中でも数量念仏や破戒者の念仏のあることが注目される。
作成者名：坪井直子

御消息

書名よみ：ごしょうそく
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
写本奥書：1、『和語灯録』の項を参照
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
刊本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『定本法然上人全集』7（山喜房仏書林、1982）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『高僧名著全集』4、『国文東方仏教叢書』2-4、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』3（春秋社、1989）、石丸晶子『法然の手紙』（人文書院、1991）、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
参考文献：『和語灯録』の項を参照
解説：法然のものと伝えられる手紙。誰に宛てたかについては、本消息には記されていないが、義山『円光大師行状画図翼賛』や素中『和語灯録日講私記』で議論されている。ただし、両者の議論はあまり信憑性は高くなく、送り先の相手は不明とするのが穏当であろう。成立年次については、本消息が法然のものならば、12c末-13c初。

内容上、大きく分けて、前半部分と後半部分からなる。

前半部分では、念仏一行を信仰する人がなかなかおらず、ただひたすら浮き世の楽しみや栄華を求めて、後世を欣求しない人ばかりと嘆いたところに、あなたからこのようなお手紙をいただいて嬉しい限りだと述べられている。そして送り先の相手に対し、心を静めて念仏することを勧める。

後半部分では、三心（至誠心・深心・廻向発願心）について詳説している。善導の文をまず取りあげ、それに対し私釈を加えるという形式になっている。

まず至誠心。一見すると尊い隠遁者のようだが、実は人目を飾って至誠心を欠いている人の例をあげる。ただし、人目を飾ってはいけないからといって、人の謗りを顧みないのが望ましいといっているのでもないと注意を加える。そして、外相と内心について、4つのパターンを示し（四句分別）、とにかく内心が誠であるのを良しとする。

次に深心。善導の深心釈の「信機」と「信法」のうち、なぜ「信機」を先にあげるのかという問題を提起し、もし「信機」を先に説かなければ、往生を願う人が自らの罪深さを過度に受け止め、本願をかえって疑ってしまう場合があり、その疑いを解消するために説く。

次に廻向発願心。善導の文を引き、ほぼ善導の解釈どおりに私釈している。

このあと、三心の総説をする。三心は一見すると仰々しいようだが、実は三心は、ただ誠の心をもって深く仏の誓願を頼み往生を願うことであるゆえ、簡単に具えることができることを強調している。
作成者名：角野玄樹

御消息集

書名よみ：ごしょうそくしゅう
書名別名：善性本、善性編御消息集、善性本御消息集、善性伝持本
著者名：親鸞（著）／善性（編）（？）
著者名よみ：しんらん／ぜんしょう
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師／
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）／13c
成立翻訳年：1258（正嘉2）以降
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（鎌倉末期-南北朝期、書写者不明）
〈影印版〉:『末灯鈔　御消息集』（「竜谷大学善本叢書」12、同朋舎出版、1993）
写本奥書：1、（奥書なし）
活字本所載書：『真聖全』2、『定本親鸞聖人全集』書簡篇、『真宗史料集成』1、『真宗聖典』、日本古典文学大系82『親鸞集　日蓮集』、『新撰真宗聖典』、『高田学報』1
現代語訳書：石田瑞麿「御消息集（善性本）」（『親鸞とその妻の手紙』、春秋社、1968）、石田瑞麿「御消息集（善性本）」（『親鸞』「日本の名著」6、1969、中央公論社）、真継伸彦「御消息集」（『現代語訳親鸞全集』4、法蔵館、1983）、石田瑞麿「御消息集－善性本－」（『親鸞全集』4、春秋社、1986）、本多恵「御消息集（善性本）」（『傍訳親鸞聖人著作全集』6、四季社、2001）、細川行信・村上宗博・足立幸子『現代の聖典　親鸞書簡集』（法蔵館、2002）
参考文献：梅原真隆「専修寺伝来の御消息集に就いて」（『顕真学報』7、1932）、梅原真隆「再び専修寺伝来の御消息に就て」（『親鸞聖人研究』72、193 ）、生桑完明「高田古典の解説に対する批判に就て」（『高田学報』2、1934）、宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）、平松令三「善性本親鸞聖人御消息集について」（『親鸞真筆の研究』、法蔵館、1988）、多屋頼俊『親鸞消息の研究』（法蔵館、1992）
解説：親鸞の消息を集めたもの。編集者は、本消息集包袋に「御消息集　飯沼善性房筆」とあることから、古くより善性とされている。しかし、その善性がどういう人物であるかの定説はなく、親鸞直弟子の善性であるとする宮崎円遵説、顕智門下の善性であるとする平松令三説、編者は蓮位で、顕智門下の善性はその伝持者とする梅原真隆説などがある。

本集の編集年時については、本文に親鸞門侶の覚信が正嘉2年（1258）に往生した事に触れているので、正嘉2年

（1258）以降の成立と考えられる。成立の下限については、親鸞直弟子の善性を借定する場合は弘安3（1280）前後、顕智門下の善性の場合は史料がなく確定できない。

本集には、親鸞の消息等全7通がおさめられており、内容としては諸仏等同、便同弥勒等を説く点が注目される。また門侶上書に対する親鸞の勘弁状を収録しており、親鸞門侶の思想を知る上でも貴重なものである。

また、本集の最後に和讃2首が引かれているが、これは本文とは別筆で、高田派第5世定専の筆跡であることが平松令三によって指摘されている。

作成者名：藤田真隆

後世物語聞書

書名よみ：ごせものがたりききがき
書名別名：後世物語、後世語聞書
著者名：隆寛（？）
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（南北朝期、定専書写）
2、西本願寺蔵本（室町期、蓮如書写）
3、大谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
4、大谷大蔵本（1781（天明1）、書写者不明）
写本奥書：1、定専写之/貞和五歳ひのとのうし（1349）七月二十二日釈定専二十歳
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
刊本所在：1、寛文4（1664、竜谷大・国会図書館）
2、明和2（1765、大谷大・竜谷大、『真宗法要』所収）
3、文化8（1811、大谷大・竜谷大、『真宗仮名聖教』所収）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『真宗仮名法典』4、『真宗聖教全書』3、『真宗聖教大全』上、『真宗聖典全書』、『新撰真宗聖典』、『続浄』9、「『後世物語聞書』定専上人書写本」（『高田学報』22、1944）、『大正蔵』83（No.2676）、『定本親鸞聖人全集』6
参考文献：爪生津隆雄「隆寛律師の著作に就て」（『真宗研究』18、1928）、生桑完明「後世物語聞書定専上人書写本解説」（『高田学報』22、1939）、生桑完明「後世物語聞書解題」（『定本親鸞聖人全集』6、1969）、戸松啓真「先徳要義集解説」（『続浄』9）、松本史朗『法然親鸞思想論』（大蔵出版、2001）
解説：作者不詳とされるが、おそらく隆寛、もしくは隆寛の門弟の作であろうとされる。なお『浄土真宗聖教目録』『浄土真宗教典志』は信空作としている。了祥は静遍説をあげる。

本書は東山の禅房にいる後世者が、いかにすれば往生を遂げられるかという問いに対し答えた聞書形式の書である。9箇条の質問応答があり、仮名書きで平易な内容から、在家者向けの書として普及したようである。9箇条の内容は、三心や滅罪、念仏と諸教の優劣、無智の念仏往生、真実の念仏と妄念など、当時の専修念仏者のあいだで問題になった事が主に記されている。親鸞の書簡からは、『唯信鈔』とともに親鸞自身が書写し、門弟に与えさかんにすすめたことが知られるが、内容的には信心重視や聖道門の否定といった点がみえず、親鸞の思想と相容れない点があるゆえに、門弟たちも混乱したようである。現在伝わる流布本は、建長6年（1254）の親鸞書写本。なお最古の写本である高田専修寺蔵の定専諸写本の底本は、表紙に「後世語聞書、釈顕智」とあり底本が顕智本である。『法水分流記』には、隆寛門弟の覚什をもって「後世物語の答者」としているが、その「後世物語」が『閑亭後世物語』『後世物語聞書』のどちらをさしているのか不明である。

作成者名：伊藤茂樹

御俗姓

書名よみ：ごぞくしょう
書名別名：御俗姓御文、御俗姓御文章、俗姓の御文
著者名：蓮如
著者名よみ：れんにょ
著者名別名：恵灯大師、本願寺蓮如、信証院、兼寿
著者生没年：1415（応永22）-1499（明応8）
成立翻訳年：1477（文明9）
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、西本願寺蔵本（室町期、書写者不明）
2、大谷大蔵本（室町末期、書写者不明、実如花押）
3、兵庫名塩教行寺蔵本（1566（永禄9）、書写者不明）
4、新潟本誓寺蔵本 （室町期、書写者不明、十帖中第五帖目）
写本奥書：1、無断加筆訂正ヲ禁ズ、会行事
2、于時文明九（1477）十一月初比、俄為報恩謝徳染翰記之者也
3、文明九年（1477）／永禄九年（1566）八月下旬［■］考之
4、（未調査）
刊本所在：1、刊年不明（大谷大・大正大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2670）、『真聖全』3、堅田修『真宗史料集成』2（同朋社、1983）、『浄土真宗聖典（原典版）』（本願寺出版部、1985）、大谷暢順『蓮如上人全集』3（中央公論社、1998）
参考文献：吉谷覚寿『御俗姓御文講述』（西村護法館、1911）
解説：蓮如は本願寺8代門主である。衰微していた本願寺において、本願寺7世存如の長男として、苦難の中で成長する。比叡山衆徒の襲撃に遭い、京都東山大谷を出て文明3年（1471）越前吉崎に赴き、北陸地方を教化し、さらに摂津・河内・和泉で布教に専念する。のちに山科・石山に本願寺を建立する。本願寺を強大な宗門に成長させた浄土真宗中興の祖である。また、「南無阿弥陀仏」の六字名号を数多く書いて弟子や門弟に与え、「正信念仏偈」と「三帖和讃」を刊行した。著作には本書のほか『改悔文』など布教のためのものが多い。蓮如の行実を示した言行録に『蓮如上人御一代記聞書』等がある。

『御俗姓』は、親鸞の報恩講に際して示された法語である。俗姓にはじまり親鸞の事績を述べ、門徒の心得を説いている。本文は5段に分かれる。第1段は、親鸞の俗姓が藤原氏で、後長岡の末孫有範の子であること、第2段は、親鸞が9歳で出家し、天台宗で修行し、29歳で法然の弟子になり、専修専念の義を立て、凡夫の往生を示されたこと、第3段は、11月28日に往生されたことと、その御正忌に報

恩の志をなすべきこと、第4段は、未安心のままでは真の報恩感謝をなすことができないこと、第5段では、真実信心の人が少ないことへの悲嘆を説く。

この『御俗姓』は真宗十派のうち、本願寺派・大谷派・興正寺派では、後に親鸞の御正忌報恩講に拝読されるようになった。また、本御文も『夏御文』と同様に、本願寺外には出されず、門徒に付与されたものではないため、『帖内御文』『帖外御文』には含まれない。

作成者名：佐々木大悟

五段鈔

書名よみ：ごだんしょう
書名別名：五段抄、五疑抄、西山上人五段鈔、鑑智国師五段鈔
著者名：証空
著者名よみ：しょうくう
著者名別名：善恵房、善恵房証空、西山上人、当山上人、小坂、弥天善恵鑑智国師
著者生没年：1177（治承1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：13c
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大塚霊雲氏蔵本（江戸中期、書写者不明、尾道持光寺旧蔵『西山秘鈔』所収、内題「五疑抄」）
2、岐阜清閑寺蔵本（1810（文化8）、義道書写、『証得往生義』・『略安心鈔』・『西山上人法語』と合冊）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、文化八辛未年（1810）七月十日菩薩僧義道拝写竟
刊本所在：1、文政4（1821、竜谷大・大谷大、『安心鈔』と合冊）
2、昭和5（1925、西山短大、西山短大による文政版の同版増刷）
3、平成6（1994、竜谷大、常光寺による文政版の同版増刷）
刊本の奥書刊記：1、（巻頭序）此一巻安心起行作業之旨以示於浄業者日用警策之鈔也、信哉学諸則倍増弥徹往生証道矣。然未嘗上木徒属世旱渇矣、但数百余載転写之間魯魚混之、応永間融栄師之本為源及異本対校而訂之上木以公於世耳、文政四辛巳（1821）六月二十六日広谷下沙門龍空義道識／流祖国師為於法施開門傾蔵捨如意珠益行者矣、観門義鈔・十巻鈔・三十八巻御書此等大部之外又五段鈔・安心鈔・女院御鈔・述誡〈問実信答善慧〉・二十七箇扁〈口決〉・定散料簡義・観経疏大意・証得往生義・鎮勧用心・白木章等〈各一巻〉・宗要鈔〈五巻戒疏末鈔、今世未見〉・曼供式〈一巻〉・曼中央論義鈔〈此供式属鈔、今世別行非〉・三部経論義鈔〈此一巻者本伝第三云浄土三経来迎蓮決往生之疑於問答者此鈔歟〉、予也所見如斯、其余有無不知、若有蔵本則顕之、懐金不現人被繡不出戸孰知其文彩乎、願不密流於世広於祖道漫埋函底以勿為蠹蛀之塵
（奥書）文政四年辛巳（1821）夏六、皇都西奥海印常光寺蔵
2、（1、と同じ）
3、（1、と同じ）
活字本所載書：森英純校注「西山上人五段鈔」（『西山学報』8、1936）、広瀬観友訳注「西山上人五段鈔」（1937、『国訳一切経』和漢撰述部23諸宗部22所収）、森英純校注『五段鈔』（1965、西山浄土宗教学部）、森英純編『西山上人短篇鈔物集』（1980、西山短期大学）
参考文献：岩田善如「五段鈔を拝読して」（『信仰之友』、1917）、森英純「孝養父母の教」（『信仰之友』358-361、1937）、鷲津清静『五段鈔講説』（1994、白馬社）、三浦貫道『五段鈔を読む』（光照寺吉水霊章、1990、初出は『信仰之友』135-168）
解説：証空が、浄土門の要旨を（1）穢土を厭う、（2）浄土を欣う、（3）三心を具す、（4）念仏を行ず、（5）念仏の益の5段に分けて述べた短編。

『自筆鈔』など、善導の著述に対する注釈書を多く残している証空の著作群の中で、本書は浄土宗の信仰を端的に述べている点で、証空教学の入門書として位置付けられる。

他の著書と比較すると、証空に特徴的な術語の使用は見られず、美麗な文章によって綴られている点や、譬喩・因縁を多く引用している点が目に付く。特に、回向発願心に関連して「孝養父母」を勧めることに多くの紙数を費やしていることは、本書の最大の特徴であり、『自筆鈔』の傾向とも符合する。これは、同じ法然門下でありながら、父母への念仏回向を否定した親鸞とは対照的であり、注目すべきであろう。

古写本の所在は知られていないが、康空示導（1286-1346）は、自著『三心出要鈔』に本書の一節を引用しており、文政版の底本は応永年間（1394-1427）の融栄書写本であったことから、西山派においては古くから流伝していたことが窺われる。

本書は、江戸末期の文政年間、龍空義道が証空『安心鈔』と合冊して出版した文政版（長岡京市常光寺蔵版）によって広く流布した。その内容の簡潔さが尊重され、近代以降、三浦貫道等による解説、『国訳一切経』への収録など、一般への普及が図られている。

作成者名：稲田廣演

五輪九字明秘密釈

書名よみ：ごりんくじみょうひみつしゃく
書名別名：頓悟往生秘観、五輪九字秘観、阿弥陀九字秘釈
著者名：覚鑁
著者名よみ：かくばん
著者名別名：興教大師、自性大師、密厳尊者
著者生没年：1095（嘉保2）-1143（康治2）
成立翻訳年：1141（保延7）-1143（康治2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、千葉中山法華経寺蔵本（建長3（1251）、書写者不明）
2、神奈川称名寺蔵本（建長6（1254）、公日書写）
3、京都仁和寺蔵本（弘長3（1263）、玄瑜書写。最終書写は徳治3（1308）、忠仁書写）
4、神奈川称名寺蔵本（神奈川県立金沢文庫所管）（書写年不明、彩色図像入りの最古のもの、書写者不明）
5、京都東寺宝菩提院蔵本（慶長2（1597）、南北朝期の写本に基づく。書写者不明）
6、京都東寺宝観智院蔵本（応安6（1373）、賢宝書写）
7、和歌山高野山宝亀院蔵本（文永9（1272）、書写者不明）、ほか
詳しくは『興教大師覚鑁写本集成』（法蔵館、1997）p.451ff.を参照。
写本奥書：1、建長三年十一月二十四日戌時了、五帖之坊門富小路西門坊門ヨリハ西
2、建長六年甲刀九月三日未時了、清澄山住人肥前公日（梵字「フーン」）生年二十七歳、為仏法興隆法界衆生成仏得道也

3、本奥書云　弘長三年十一月　日於阿波犀国成相寺令書写之/畢是如来内証之奥義誠衆生頓悟之秘門也甚/秘々之権律師玄瑜、生年（三十）二　徳治三年十月六日於燈下終写功畢　法印権大僧都禅忠仁　西坊本也　裔深
4、（奥書なし）
5、（奥書なし）
6、応安六年七月三日以或本書嗣欠了　賢宝生四十一
7、文永九年壬甲十二月二十七日於光寿院令書写畢云云後伝者澄恵
詳しくは『興教大師覚鑁写本集成』（法蔵館、1997）p.452ff.を参照。
刊本所在：1、慶安1（1648、高野山三宝院）
2、慶安1（1648、高野山真別所円通律寺、東京大）
3、不明（奈良県薬師寺）
4、不明（竜谷大）
5、『密厳諸秘釈』6（刊年不明、大谷大・京都大・東洋大・高野山大・大正大・種智院大・立正大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』79（No.2514）、『興教大師全集』（中野達慧編輯、世相軒、1935）
現代語訳書：『国訳一切経』（諸宗部20）、宮坂宥勝『興教大師撰述集』上（山喜房仏書林1977、増補訂正版1990）pp.176-222
参考文献：『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1993）、櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、『興教大師八百五十年御遠忌記念論集　興教大師覚鑁研究』（興教大師研究論集編集委員会、春秋社、1992）、苫米地誠一「興教大師覚鑁の教主観について（2）-密教の教主」（『大正大学日本仏教文化学会紀要』1、1992）、佐藤隆賢「覚鑁上人と浄土思想」（『日仏年報』42、1977）
　特に本文献に関するものとして、那須政隆『五輪九字秘釈の研究』（大東出版社、1936／再版　鹿野苑、1970）、赤塚祐道「『五輪九字明秘密釈』における阿弥陀曼荼羅について」（『密教図像』14、1995、法蔵館）、松崎恵水『平安密教の研究』（吉川弘文館、2002）、神林隆浄「興教大師の浄土往生観」（『密教論叢』11、1937）、元山公寿「秘密念仏について」（『現代密教』11・12、1999）、真鍋俊照「金沢文庫建長六年写の『五輪九字明秘密釈』について」（『成田山仏教研究所紀要』15、仏教文化史論集・、1992）、魚川裕司「『五輪九字明秘密釈』における「五輪門」と「九字門」の関係について」（『印仏研』55-2、2007）
　詳しくは『密教関係文献目録』（増補改訂版、2007、種智院大学密教学会編）を参照。
解説：筆者は仁和寺、南都に学び、当時、東寺に対して従属的であった高野山を復興・自立させて、そこに大伝法院を建立し、広く諸法流を統合して事相を振興させた。しかし後に法統・寺領をめぐる対立から退去し、根来に移住した。本地身説法説を採る古義真言宗に対して加持身説法説とされる新義真言宗の祖となり、浄土教の隆盛のなかで密教に浄土教を取り入れた真言念仏ないし秘密念仏の基礎を確立した。
　本著は、大日如来の三昧耶曼荼羅である五字明「a vi ra hūm khaṃ」（五仏・五智・五大・五輪・五臓などを象徴する）の五輪曼荼羅と、阿弥陀仏の小呪である九字真言「oṃ aṛmṛta teje ha ra hūṃ」の曼荼羅について、両者を同一とする真言密教の解釈とそれに基づく実践を示した著作である。晩年の独自の解釈を提示した代表作であり、一種自身の成仏体験の表白ともなっており、古来の学者によりしばしば引用されている。同じ著者の『一期大要秘密集』が臨終正念と来世での往生を説くのに対して、本書は現身往生や即身成仏の立場を打ち出している。これは、院政期の末法思想と浄土教の全般的流行、高野聖たちの活動という状況のなかで、密教の立場から大日と弥陀の二仏、密厳浄土と極楽浄土は同体であるとし、密教の立場からの浄土観、成仏観に基づいて真言念誦の実践を強調したものである。ここでは、大日如来は万物に遍満する根本的な超越者とされ、阿弥陀はその具体的な展開としての救済者とみなされている。また本書は、信を強調し、一明一字を口唱する一密のみによる成仏という易行を説くことから、法然浄土教の一世代前にあってその一つの先駆的な動きと見られる場合もあるが、覚鑁が真言密教の優位を宣揚する点は根本的に異なるとされている。
　構成は序文、本文、跋文からなる。序文の総説において大日弥陀同体説、極楽密厳同体説が示される。本文は十門からなり、それら各章の名と凡その内容は次のとおりである。
（1）択法権実同趣門。十住心、顕密の差別を説く。秘密真言を実践する者は、深般若の心を起こし、三密の行を行うべきとされている。
（2）正入秘密真言門。五輪五智法身と九字九品報身を各字門の解釈より明らかにし、さらに五種法身の新説と、観音を中尊、弥陀を眷属とした最極深秘の曼荼羅を明らかにする。分量も全体の3分の2以上を占めて、最も主要な部分である。本著副題の「頓悟往生秘観」は「五臓三摩地観」を意味し、ここで扱われている。
（3）所獲功徳無比門。三密修行の功徳が最高であることを説く。
（4）所作自成密行門。三密修行の功徳をただ信ずることにより、平生の行を本尊の字、印、像を修習する秘密行とすることを説く。
（5）纔修一行成多門。弥陀一尊の法を行じても密教の広大な修行と同じく現世・来世の悉地を得るとし、一密成仏、唯信一行の立場が示されて、末法思想を批判している。
（6）上品上生現証門。大日の悲願により現身に往生し、弥陀の本願により順次に往生することを説く。その正因としての四種廻向、三密の人の往生、往生に至る住心の次第、十住心の解釈が示される。そこには極楽往生した人、各宗の証得者も示される。
（7）覚知魔事対治門。修行における四種の魔事とその四種の対治を示す。対治は密教の法界、三密観に基づく三密瑜伽の実践である。
（8）即身成仏行異門。即身成仏の修行には、三密相応を基本として（1）深智相応印明行、（2）事観相応結誦行、（3）唯信作印誦明行、（4）随信一密至功行という四種類の異なりがあるとする。その第四により一明一字を口唱する一密だけで成仏することを新たに主張する。
（9）所化機人差別門。一密成仏について往生と成仏を分別し、さらに機根を分析して、現身と順次の往生観を示す。
（10）発起問答決疑門。上根上智の即身成仏と但信行浅の順次往生の区別も、大日の曼荼羅観、一門即普門観に至るなら、正しくは密厳に、かねて十方浄土に往生すること、聖者と凡夫、大日と弥陀も無二であることを説く。
　最後の跋文では、著者が本書を著し、三摩地に入ったとき、教尋阿闍梨が金色世界より現れて称讃したという話が記されている。
　注釈書や関連文献には、道範（1184-1252）『五智五蔵等秘密抄』（1冊、金沢文庫蔵）、『五蔵曼荼羅和会釈』（1冊、金沢文庫蔵）、純雅『五輪九字秘釈写説考証』（1巻）、隆瑜（1773-1850）『五輪九字明秘密釈拾要記』（5巻、智積院蔵本）、曇寂（1674-1742）『中因東因記』（1帖）、観豪『五輪九字明秘密釈愚抄』（2巻）、『五輪九字秘密釈疑目』（1巻）がある。

作成者名：藤仲孝司

摧邪輪荘厳記

書名よみ：ざいじゃりんしょうごんき
書名別名：荘厳記
異本書名：しょうごんき
著者名：明恵房高弁
著者名よみ：みょうえぼうこうべん
著者名別名：成弁、明恵、高弁
著者生没年：1127（承安3）-1232（寛喜4）
成立翻訳年：1213（建暦3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、お茶の水図書館成簀堂文庫蔵本
2、叡山文庫天海蔵蔵本（天海書写？）
写本奥書：1、建暦三年六月廿二日沙門高弁於高尾寺別院栂尾住房草之了（川瀬一馬編著『お茶の水図書館蔵新修成簀堂文庫善本書目』お茶の水図書館、1992より）
2、（参考文献参照）
刊本所在：1、寛永3（1626、大谷大・香川大・京都大・大正大・名古屋大・仏教大・立正大・竜谷大・高野山金剛三昧院・高野山真別所・高野山宝城院・成田山・薬師寺・叡山文庫）
刊本の奥書刊記：1、（参考文献参照）
活字本所載書：『浄土宗全書』8、『日本大蔵経』74
参考文献：山本勇『高僧名著全集』9（平凡社、1931）、島地大等『日本仏教教学史』（中山書店、1976）、大屋徳城『日本仏教史の研究』3（国書刊行会、1988）、米沢実江子「『荘厳記』について」（『仏教大学綜合研究所紀要』別冊、2006）
解説：明恵は、1173（承安3）紀州（和歌山県）有田郡石垣庄に生まれる。幼少期に両親を亡くし、1181（養和1）高雄の上覚房行慈（明恵の叔父・文覚の高弟）に師事し、1188（文治4）東大寺で具足戒を受けた。1206（建永1）後鳥羽院より栂尾（神護寺別所）に高山寺を賜り、1212（建暦2）11月に『摧邪輪』、翌1213（建保1）6月に『摧邪輪荘厳記』を著して、『選択集』の内容を批判した。

本書は『摧邪輪』著述の7ヶ月後、その内容を補足するために撰述された（『明恵上人行状記』巻下）。「『摧邪輪』において大小13の過失について批判したが、更に3つの過失（摂取不捨の名義を謬解する過、念仏を以て本願と名づけ、観経説不説を謬解する過、十称十念の義を謬解する過）を挙げる」とするも、それぞれの項目にそって批判を展開するのではなく、『摧邪輪』での主張に更に説明を加え、その中で新たに加える3つの過失を論じるものである。
作成者名：米沢実江子

災難対治抄／災難対治御勘文

書名よみ：さいなんたいじしょう／さいなんたいじごかんもん
書名別名：国土起大地震非時大風大飢饉大疫病大兵乱等種種災難知根元可加対治勘文（中山法華経寺蔵本に依る）
著者名：日蓮
著者名よみ：にちれん
著者名別名：是聖房、蓮長、立正大師
著者生没年：1222（貞応1年）-1282（弘安5）
成立翻訳年：1260（正元2）頃
成立地：日本
所収文献名：録内御書
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、中山法華経寺蔵本（書写年不明、真筆、15紙）
写本奥書：1、（奥書なし）
刊本所在：1、東北大蔵本（『御書録内』23）
刊本の奥書刊記：1、災難対治抄　日蓮御在判
活字本所載書：立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮上人遺文』（身延山久遠寺、1952）、加藤文雄編『日蓮上人御遺文』（1962）、小松邦彰編『日蓮上人全集』（春秋社、1992）、『日蓮聖人御真跡大集』「対照御書集上」（山川智応総編、国書刊行会、1976）、日蓮宗全書出版会編『日蓮聖人全集』（須原屋書店、1914）
参考文献：石井教道『選択集の研究—註疏編—』(誠文堂新光社、1945)、梅本正雄『録内啓蒙』（本山本満寺、1975、p.537下）『日蓮聖人御真跡大集』「文永部第一」（山川智応総編、国書刊行会、1976）、中條暁秀『日蓮宗上代教学の研究—金綱集の研究—』（平楽寺書店、1996）
解説：日蓮は12歳で天台宗清澄寺に登り、16歳で出家、1238（嘉禎4）頃より鎌倉に遊学し、21歳の時比叡山にて俊範に指事。32歳で比叡山より清澄寺に帰り日蓮と名乗る。この頃から「正法である『法華経』に帰せよ」と伝道を始め、他宗の信奉者から迫害を受けることとなる。また為政者に対しても数度にわたって陳状を提したが受理されることはなく、度々流刑に処され、1282（弘安5）61歳で武蔵の国にて寂。

本書では、正嘉・正元に続いて起こった災害等は、禅・念仏等の邪法が流行し、正法の流布が止められ、その結果神仏諸天が守護の力を失い、日本を捨て去ったことによるとし、此等の災害を止める方法は禅・念仏の邪義を禁断することである、という確信の基に撰述されたものである。小松邦彰は「本書は『守護国家論』（1259（正元1））、『災難興起由来』（1260（正元2））と一連の遺文であり、諸経典からの引用が『立正安国論』と同じであることから、本書は『立正安国論』の草案であろう」（『日蓮人遺文辞典—歴史篇—』立正大学日蓮教学研究所、1985）とされている。
作成者名：米沢実江子

西方院座主毎日念仏調

書名よみ：さいほういんざすまいにちねんぶつちょう
著者名：院源
著者名よみ：いんげん
著者名別名：西方院僧正
著者生没年：951（天暦5）-1028（万寿5）
成立翻訳年：10c後半-11c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：多賀宗隼「院源僧正事　金沢文庫蔵」（『論集中世文化史下　僧侶編』法蔵館、1985）
解説：本書は散逸して伝わらない。書名の西方院座主とは天台座主第26世院源のことであり、晩年に西塔北尾谷の西方院に住したことからその呼称がある。

院源は良源・覚慶を師とし、法性寺・法興寺などの座主・別当を勤めた。また、藤原道長の信任厚く、その出家の戒師をつとめ、治安2年（1022）には法成寺金堂の落慶供養の導師を行った。『御堂関白記』ではその弁才が賞嘆され

ている。
作成者名：能島覚

西方四親近菩薩悉釈

書名よみ：さいほうししんごんぼさつしっしゃく
著者名：禅定僧都
著者名よみ：ぜんじょうそうず
著者生没年：9c-12c
成立翻訳年：10c-12c
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：著者の禅定僧都については未詳。『昭和現存天台書籍総合目録』には「円融三諦略観」の著者に同名の僧都が挙げられている。両者が同一人物か否かは今後の検討が必要であろう。ただし、『長西録』にこの禅定僧都に関し、「大原天台」と細注が付されていることから、大原に在した台密の学僧だと考えられる。
　本書は散逸して伝わらない。しかし、書名から推測する限り、その内容は金剛界曼荼羅の西方月輪に在す無量寿仏を取り囲む法・利・因・語の四親近菩薩について明らかにしたものといえよう。なお、『山門堂舎記』（『群書類聚』24）には比叡山東塔の常行堂の本尊として阿弥陀如来を挙げ、その周りにこれら四菩薩が安置されていたことが記されている。
作成者名：能島覚

西方指南抄

書名よみ：さいほうしなんしょう
書名別名：指南抄
著者名：法然（著）／親鸞（編）（？）
著者名よみ：ほうねん／しんらん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師／愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1133（長承2）- 1212（建暦2）／1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：13c半ば
成立地：日本
巻数：6
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（1256（康元1）-1257（康元2）、親鸞真筆本）
〈影印版〉:『増補親鸞聖人真蹟集成』5・6（法蔵館、2006）
2、高田専修寺蔵本（1257（康元2）、真仏書写、下末巻のみ1308（徳治3）顕智書写）
〈影印版〉:下末巻のみ『顕智上人集』下（「高田古典」4、真宗高田派宗務院、2002）
写本奥書：1、（上本巻）康元元丁巳（1256）正月二日書之、愚禿親鸞八十五歳
（上末巻）康元元年丙辰（1256）十月十三日、愚禿親鸞八十四歳、書之／（朱書）康元二歳（1257）正月一日校［■］
（中本巻）（朱書）康元元丁巳（1256）正月二日、愚禿親鸞八十五歳校了
（中末巻）康元元年丙辰（1256）十月十四日、愚禿親鸞八十四歳、書写之
（下本巻）康元元丙辰（1256）十月三十日書之、愚禿親鸞八十四歳
（下末巻）康元元年丙辰（1256）十一月八日、愚禿親鸞八十四歳書之
2、（上本巻）康元元丁巳（1256）正月二日書之、愚禿親鸞八十五歳／康元二年（1257）三月五日、書写之
（上末巻）康元元年丙辰（1256）十月十三日、愚禿親鸞八十四歳、書之／康元二歳丁巳（1257）正月一日校之
（中本巻）康元［■］丁巳（1256）正月二日、愚禿親鸞八十五歳校了
（中末巻）康元元年丙辰（1256）十月十四日、愚禿親鸞八十四歳書写之／康元二年丁巳（1257）三月二十日、書写之
（下本巻）康元二歳丁巳（1257）二月五日書之、愚禿親鸞八十四歳
（下末巻）草本云、康元元年丙辰（1256）十一月八日、愚禿親鸞八十四歳書写之／徳治三歳戊申（1308）二月中旬第五、書写之
刊本所在：1、万治4（1661、竜谷大）
2、元禄7（1694、大谷大・大正大）
刊本の奥書刊記：1、万治辛丑（1661）初春吉旦、五条橋通扇屋町丁字屋、西村九郎右衛門開板
2、元禄申戌年（1694）霜月二十八日、京高辻通鴈金町、書林、中村孫兵衛板
活字本所載書：『真聖全』4、『定本親鸞聖人全集』輯録篇、『大正蔵』83（No.2674）、『法然上人研究』1-6（1992-1998、3、4を除く）、『高田学報』25-40（29・30、36を除く）、『新撰真宗聖典』
参考文献：生桑完明「西方指南抄とその流通」（『高田学報』1、1932）、赤松俊秀「西方指南抄について」（赤松俊秀『続鎌倉仏教の研究』、平楽寺書店、1966）、生桑完明「西方指南抄について」（生桑完明『親鸞聖人撰述の研究』、法蔵館、1970）、平松令三「西方指南抄をめぐって－宝物展観の問題点－」（『真宗研究』22、1977）、浅野教信『親鸞聖人編『西方指南抄』の研究上巻』（永田文昌堂、1987）、平松令三「西方指南抄の編集をめぐって」（平松令三『親鸞真蹟の研究』、法蔵館、1988）、霊山勝海『西方指南抄論』（永田文昌堂、1993）、中野正明「『西方指南抄』について」（中野正明『法然遺文の基礎的研究』、法蔵館、1994）、小山正文「『西方指南抄』中本をめぐって－二つの小さな発見－」（小山正文『親鸞と真宗絵伝』、法蔵館、2000）、常磐井慈裕「西方指南抄直弟本」（『顕智上人集』下、「高田古典」4、真宗高田派宗務院、2002）、平松令三「解説西方指南抄」（『増補親鸞聖人真蹟集成』6、法蔵館、2006）
解説：法然の言行録等を編集したもので、高田派本山専修寺に親鸞真筆本と真仏書写本（下末巻のみ顕智書写）の2本が現存している。真仏書写本は、親鸞真筆本からの書写である事が奥書等から判明してる。
　本書の成立年代と編者については、大きく2つの説にわかれている。
　1つ目の説は編者を親鸞とし、その成立を奥書のある康元1年（1256）から2年（1257）にみるもので、生桑完明・浅野教信・霊山勝海などの説である。生桑完明は、親鸞真筆本の奥書に「書之」とあり、この表記は親鸞の自著をあらわすものであるとしている。浅野教信は親鸞真筆本の奥書から、元は上中下の3冊構成であったものを完成時に各巻を本末にわけ、全6巻構成としたと推測し、このような改編を行ったのは親鸞自身が編者であるから、としている。
　2つ目の説は、本書の成立を親鸞真筆本奥書時以前に求めるものである。現存する親鸞真筆本は転写本で、本書そのものはそれ以前に成立しているとする説で、赤松俊秀・中野正明などがその立場にたつ。赤松俊秀は、親鸞の消息のうち、建長7年（1255）10月3日の性信宛の消息や建長8年（1256）と推定される9月2日付慈信坊宛の消息に、本書

に収録される法然語録と類似する表現があることや、宝治2年（1248）までに成立した『高僧和讃』「源空讃」が、本書収録の「源空上人私日記」を基にしている事から、宝治2年（1248）までに親鸞は本書を入手していたと述べ、『教行信証』「化身土文類」末部の「奇瑞不可称計見別伝」の別伝は本書ではないかとも推測している。また中野正明は親鸞編集説を否定して、法然門下の信空・湛空周辺の人物の編集であろうとしている。また、平松令三も親鸞真筆本上巻の題名「西方指南抄上本」は元々「西方指南抄曰」と書かれていたであろうと推測して、親鸞真筆本に先立つ原本の存在を指摘している。

本書に収録される文献は次のものである。「法然聖人御説法事」「建保四年公胤夢告」「三昧発得記」「法然上人御夢想記」「法語十八条」「法然上人臨終行儀」「聖人の御事諸人夢記」「七箇条起請文」「葬家追善事」「源空上人私日記」「決定往生三機行相」「鎌倉の二品比丘尼へ御返事」「名号の勝徳と本願の体用」「念仏の事御返事」「おほごの太郎へ御返事」「しょう如ばうへ御書状」「故聖人の御坊の御消息」「基親取信信本願之様」「基親上書と御返事」「或人念仏之不審聖人に奉問次第」「浄土宗の大意」「四種往生事」「法語（末代の衆生を）」「法語（末代悪世の衆生の）」「九条殿北政所御返事」「九月十六日付御返事」「法語十三問答」「つのとの三郎殿御返事」。このうち「法語十八条」「源空上人私日記」「決定往生三機行相」「名号の勝徳と本願の体用」「浄土宗の大意」「四種往生事」は本書のみに収録される法然遺文である。

作成者名：藤田真隆

西方集

書名よみ：さいほうしゅう
著者名：勝範
著者名よみ：しょうはん
著者名別名：蓮実房、蓮実房勝範
著者生没年：996（長徳2）-1077（承保4）
成立翻訳年：11c
成立地：日本
巻数：3
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）、『浄土法門源流章』（『浄全』15）
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：勝範は天台座主33世、蓮実房ともいう。師は都率僧都覚超・谷阿闍梨皇慶である。『浄土法門源流章』（『浄全』15）では「大日本国浄教弘通次第」に「天台ノ勝範、西方集三巻ヲ作ル」とあり、本書が勝範の著述として数えられているものの、散逸して伝わらない。

しかし、青蓮院蔵『浄土厳飾抄』には蓮実和尚の説として、阿弥陀仏の身量に関する文言が一文のみ引用されており（佐藤哲英『叡山浄土教の研究』資料編、影印p.385・翻刻p.468）、場合によっては本書の逸文である可能性も捨てきれない。

作成者名：能島覚

西方集

書名よみ：さいほうしゅう
著者名：重誉
著者名よみ：ちょうよ
著者名別名：光明山重誉、理教院
著者生没年：11c後半-12c前半
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：3
散逸文献の文献名出典：『長西録』、『浄土法門源流章』（『浄全』15）
参考文献：吉田金彦「図書寮本類聚名義抄出典攷（中）」（『訓点語と訓点資料』3、1954）、築島裕「大般若経音義諸本小考」（『東京大学教養学部人文科学科紀要』21、1959）、築島裕「音義書の登場」（『しにか』2000,3）、井上光貞『日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1956）、静永賢道『南都浄土教と法然上人の教学』（百華苑、1982）
解説：重誉は光明山に住したことから、光明山重誉とも呼ばれる。師は東大寺東南院覚樹で同法に珍海がいる。『浄土法門源流章』「大日本浄教弘通次第」には「彼（実範）ノ世、同時ニ光明山ノ重誉大徳有リ。即三論ノ碩匠也。兼テ密蔵ヲ研キ浄土に帰投シテ、西方集三巻ヲ選ス」と本書を重誉の著述として挙げている。現在は散逸して伝わらない。

その一方、重誉の著述として『秘密教相鈔』（『大正蔵』77）がある。その第10巻に「極楽世界自性受用等四土分別」とあり、仏身仏土に関する簡略な議論が残されている。それは阿弥陀仏の仏身の性格に四身説（自性身・受用身・変化身・等流身）をみるものであり、更には安楽浄土にも四土の分別があるという立場を示している。

更に重誉には『大般若経音義』という著述もある。心覚の『鵜珠鈔』の巻末（『真言宗全書』36、p.321）には「大般若経以光明山重誉音義出」とあり、経文の難解な語句に対する音と意味の考証がある。そして、現存する種々の『大般若経音義』の中では、この重誉の音義が無窮会蔵本（鎌倉時代初期写）・天理図書館蔵本（弘安9年（1286）写）・薬師寺蔵本（弘安9年（1286）写）などの系統に属する（築島）という。

作成者名：能島覚

西方懺法

書名よみ：さいほうせんぼう
著者名：不明
著者生没年：14c-16c
成立翻訳年：15c-16c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、曼殊院蔵本（室町期、書写者不明、折本）
写本奥書：1、伝領訖覚恕（本文と別筆、朱筆）
活字本所載書：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
参考文献：佐藤哲英「西方懺悔法に関する研究」（『竜谷大学論集』338、1950）、佐藤哲英『西方懺悔法－本文並に解説－』（竜谷大学一乗文化研究会編、1949）、小寺文頴「西方懺法」解説（『叡山浄土教の研究』百華苑、1979）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、奈良弘元『初期叡山浄土教の研究』（春秋社、2002）
解説：本書は青蓮院蔵『西方懺悔法』に代表される阿弥陀仏懺法の式文のひとつである。撰者・成立年時は共に不明。曼殊院所蔵の本書は室町時代のものであること、並びに伝領奥書に第166世天台座主覚恕の名があることから、天正2年（1574）の覚恕入寂以前のものと考えられる。

本書の内容は主に青蓮院蔵『西方懺悔法』と『例時作法』の両者を基に編集された法式用の式文である。そして本文の前半は『西方懺悔法』と同一であり、後半は『例時作法』の語句が転用されている。しかし作法次第の項目からすると出典と考えられる両書以外に高野山金剛三昧院本

『二十五三昧式』（広本）との関係も指摘されている。また本書に『往生礼讃』の偈文も散見される。内容については佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）を参照のこと。
作成者名：能島覚

西方念仏集

書名よみ：さいほうねんぶつしゅう
著者名：昌海
著者名よみ：しょうかい
著者生没年：8c-9c
成立翻訳年：平安初期
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』2、p.146）、『浄土法門源流章』（『浄全』15、p.590）、『本朝高僧伝』巻8（『日仏全』102、p.141）
参考文献：井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、pp.35-79）、津村諦堂『日本浄土教の研究』（山喜房仏書林、1980、p.75）
解説：著者については『阿弥陀悔過』の項を参照。
　本書は散逸しており、現在のところ伝わっていない。『長西録』には「西方念仏集一巻、二十七丁、昌海、日本人、法相宗、依寛平法皇」とあり、また『浄土法門源流章』には「法相昌海欣求安養、撰西方念仏集一巻並阿弥陀悔過」（『浄全』15、p.590）とある。その書名の「集」の語から、西方浄土への往生に関する要文を集成したものであることが推測される。
作成者名：北条竜士

西方要観

書名よみ：さいほうようかん
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：11c-12c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（「小山本」）
解説：本書を実範のものとするのは小山本『長西録』である。一方、日仏全『長西録』では慶祚の著述としている。現在は散逸して伝わらない。
作成者名：能島覚

西方要決要文抄

書名よみ：さいほうようけつようもんしょう
書名別名：西方要決文集
著者名：宗性
著者名よみ：そうしょう
著者生没年：1202（建仁2）-1278（弘安1）
成立翻訳年：1233（天福1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、東大寺図書館蔵本（1233（天福1）、宗性真筆本）
写本奥書：1、天福元年（1233）九月八日午時於東大寺中院抄之畢、西方要決去八月十四日（当彼岸第三日）専凝信心故著浄衣奉読之畢、抑宗性生年第二十九之秋参籠笠置寺以降偏欣求兜率之往生専雖祈三会之値遇、弥陀悲願深被娑婆末代衆生多欣安養之間随彼風俗任其常儀、亦学西方之教門所仰未来之引接也、就中云時者中秋彼岸之良辰也、有便于殖善根尋処者大仏利生之霊地也、無妨于修功徳者歟、仰願依此披見之功答其習学之勤十方仏土之間上方西方為住処三世如来之中弥勒弥陀奉値遇矣、右筆華厳宗末葉大法師宗性
参考文献：『東大寺図書館蔵　宗性・凝然写本目録』（東大寺図書館、1959）
解説：本書は書名から慈恩大師基の『西方要決』を略抄したものであり、『東大寺図書館蔵　宗性・凝然写本目録』では紙数を12紙と挙げている。撰者の宗性は東大寺第102代別当であり、弟子の凝然と共に精力的な著作活動や資料蒐集を行った鎌倉期の南都を代表する学僧である。未だ本書の内容を紹介した研究はなく、本書の公表が待たれる。
作成者名：能島覚

西方要抄

書名よみ：さいほうようしょう
著者名：長舜
著者名よみ：ちょうしゅん
著者名別名：円蔵房長舜、円蔵房
著者生没年：1143（康治2）-1226（嘉禄2）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。
　著者の長舜は教月房良慶の弟子である。寺門の中でも学問に特に秀でたようで、建仁2年（1202）に大宝院で行われた『摩訶止観』の講師の一人として選ばれ、承元3年（1209）には探題も勤めている。建保6年（1218）に覚朝僧正に伝法灌頂を受け、承久年間に園城寺の大学頭となり、法眼に叙された。
作成者名：能島覚

三六通裏書

書名よみ：さぶろくつうりしょ
書名別名：教相十八通裏書
著者名：聖冏
著者名よみ：しょうげい
著者名別名：酉蓮社了誉、冏師、聖冏禅師
著者生没年：1341（暦応4）-1420（応永27）
成立翻訳年：14c後半-15c初頭
成立地：日本
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正保2版（1645、大谷（1冊）・大正大（2巻2冊））
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『浄全』12
参考文献：服部英淳「解説」（『浄全』12）
解説：本書は聖冏の撰になる『教相十八通』の自身による注釈書である。『教相十八通裏書』、『十八通裏書』とも。この書名の三六通とは、曇鸞・道綽・善導・懐感・源信の著作の教相に関する口伝が記されていた切り紙の合計数

十八のことであり、特に本書では、前半十通に記された、善導『観経疏』の内容に関する十重の注釈が施されている。即ち、初重散善義・第二重玄義序題門・第三重玄義釈名門・玄義宗旨第四重門・第五重玄義説人門・第六玄義定散料簡門・第七重玄義経論相違門・第八重玄義得忍門・第九重序文義・第拾重定善義である。弟子である聖聡の質問に対する口筆であるとの暁蓮社天誉東照顕月の記述がある。

内容は、全仏教の中における浄土門の位置と優位性について述べられている。例えば、聖冏は三世諸仏の化導として正浄二門判を説く際に、聖道門は方便であり、浄土門こそが真実であるとする。しかし、それは聖道門の価値をすべて否定することにはならない。なぜなら、聖道門の教えが下機愚鈍にはかなわないからであり、聖浄を共に信ずる中に浄土弥陀の利益は下機愚鈍にあたるので、浄土一門の行によっているのだとする。それは聖浄共に仏説であるからとし、聖道門を信じなければ仏教の不信の失に当たるとする。聖道門信じる有智上機の人は利益を得るであろうし、聖道門の教えを実践しない下機の者が咎となるということもないとする。このようないわゆる随他扶宗の立場が見られる。

作成者名：東海林良昌

三外往生記

書名よみ：さんげおうじょうき
書名別名：三外往生伝
著者名：蓮禅
著者名よみ：れんぜん
著者名別名：藤原資基、筑前入道
著者生没年：11c後半-12c後半
成立翻訳年：1139（保延5）以降
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、名古屋真福寺蔵本（1258（正嘉2）、乗忍書写）
2、日本大学蔵本（1801（享和1）、石原正明書写）
3、東北大学狩野文庫蔵本（1804（文化1）、木村定良書写、狩谷棭斎校訂）
4、宮内庁書陵部蔵本（未調査、温古堂蔵本の写し、続本朝往生伝を付す）
5、竜谷大蔵本（未調査）
6、天理大蔵本（未調査）
7、彰考館蔵本（未調査）
写本奥書：1、承久第二（1220）秋、於西峰方丈草菴書之、抑尋寂法師、講仙沙門、平願持経者、永観律師、南京無名女已上五人、為康拾遺伝載之、仍漏了、而其徳行、全無加増之故也、蓮禅自序云、粗得遺漏之輩、重為貽方来云々、仍且書漏了、若有深趣、可追書入歟、抑今見賢趾愚涙難抑、唯願若干新生菩薩、哀愍知見、草菴瞑目之時、必来迎引接矣、抑此本申出持明院宮御自筆本書写之了、文字有脱直之、沙門慶謹題之/正嘉二年（1258）六月十二日酉剋、於法花山寺書写了、乗忍記之
2、承久第二（1220）秋、於西峰方丈草菴書之、抑尋寂法師、講仙沙門、平願持経者、永観律師、南京無名女已上五人、為康拾遺伝載之、仍漏了、而其徳行、全無加増之故也、蓮禅自序云、粗得遺漏之輩、重為貽方来云々、仍且書漏了、若有深趣、可追書入歟、抑今見賢趾愚涙難抑、唯願若干新生菩薩、哀愍知見、草菴瞑目之時、必来迎引接矣、抑此本申出持明院宮御自筆本書写之了、文字有脱直之、沙門慶謹題之/正嘉二年（1258）六月十二日酉剋、於法花山寺書写了、乗忍記之／右三外往生伝一巻、門人石原正明、於尾州真福寺写之、享和元年（1801）五月、検校塙保己一（未調査）
3、承久第二（1220）秋、於西峰方丈草菴書之、抑尋寂法師、講仙沙門、平願持経者、永観律師、南京無名女已上五人、為康拾遺伝載之、仍漏了、而其徳行、全無加増之故也、蓮禅自序云、粗得遺漏之輩、重為貽方来云々、仍且書漏了、若有深趣、可追書入歟、抑今見賢趾愚涙難抑、唯願若干新生菩薩、哀愍知見、草菴瞑目之時、必来迎引接矣、抑此本申出持明院宮御自筆本書写之了、文字有脱直之、沙門慶謹題之/正嘉二年（1258）六月十二日酉剋、於法花山寺書写了、乗忍記之／右三外往生伝一巻、門人石原正明、於尾州真福寺写之、享和元年（1801）五月、検校塙保己一／同年十一月下旬貸温古堂蔵本課門人書写納不忍文庫、源弘賢／右三外往生伝一巻借屋代弘賢本令木村定良影鈔焉手自校読了文化甲子三月二十日望之（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
7、（未調査）
活字本所載書：日本思想大系7『往生伝・法華験記』、『続群書類従』8上、『日仏全』107、『続浄』17、『改訂史籍集覧』19、国文学資料館編『往生伝集』（「真福寺善本叢刊」2-7、臨川書店、2004）、『平安詩文残篇』（「天理図書館善本叢書和書之部」57、天理大学出版部、1984）
参考文献：平泉澄「厭世詩人蓮禅―三外往生記と本朝無題詩」（『我が歴史観』、至文堂、1926）、田村円澄『日思想史の諸問題』（永田文昌堂、1948）、重松明久『日本浄土教成立過程の研究』（平楽寺書店、1964）、関口忠男（往生伝類解題）「三外往生記」（古典遺産の会編『往生伝の研究』、新読書社、1968）、志村有弘『往生伝研究序説』（桜楓社、1976）、金原理「釈蓮膳」（『今井源衛教授退官記念文学論叢』、九州大学文学部国語学国文学研究室、1982）、藤原正義「「三外往生記」考」（『佐賀女子短期大学研究紀要』19、1985）
解説：蓮禅は俗名を藤原資基といい、筑前入道と号した。平安時代の漢詩人であり、『本朝無題詩』には59首が収録されている。書名の三外とは、先行する三つの往生伝、即ち『本朝往生極楽記』、『続本朝往生伝』、『拾遺往生伝』（『後拾遺往生伝』も含むか）以外の往生者を採録した意で、50話50余人が記される。しかし、50話を収録する真福寺本では、慶政による奥書によれば、『拾遺往生伝』と重複する5人（尋寂・講仙・平願・永観・南京無名女）は省略されたらしいし、『後拾遺往生伝』とは異伝が多いが7名（師明親王・教真・経源・勝覚・良忍・江州志賀群女・藤原敦光女）が重複する。また『大日本法華経験記』や『楞厳院廿五三昧結衆過去帳』に14名を依拠するので、先行往生伝とは同時期に平行して編纂されたと考えられている。なお天理本は、真福寺本とは別系統であり、省略された5話を載せている。往生の行業は念仏が中心であるが、法華経との兼修も多く、入水・焼身往生も注目される。
作成者名：坪井直子

三時念仏観門式

書名よみ：さんじねんぶつかんもんしき
書名別名：三時念仏記、三時講式
著者名：永観
著者名よみ：ようかん
著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：1104（長治1）-1111（天永2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、大原勝林院蔵本（1846（弘化3）、覚秀書写、

魚山叢書）
写本奥書：1、南都東大寺［■■］宗律師永観作、先向仏像或唯向西方、若焼香散花可随時、嘉元第四（1306）暦中夏晦日於東山泉涌寺々院、向灯下書写之了、弘化三年（1846）二月二十五日書写了、魚山末流法印覚秀
活字本所載書：山田昭全「永観作『三時念仏観門式』をめぐって－報告並びに翻刻－」（『大久保良順先生傘寿記念論文集　仏教文化の展開』山喜房仏書林、1994）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）、ニールスグュルベルク『講式データベース』（http://www.f.waseda.jp/guelberg/koshiki/datenb-j.htm、2004）、大谷旭雄「永観作『三時念仏観門式』について」（『坪井俊映博士頌壽記念　佛教文化論攷』坪井俊映博士頌壽記念會編、1984）、山田昭全「永観作『三時念仏観門式』をめぐって－報告並びに翻刻－」（『大久保良順先生傘寿記念論文集　仏教文化の展開』山喜房仏書林、1994）、ニールスグュルベルク「永観と宝物集」（『季刊文学』5-4、岩波書店、1994）
解説：本書は三時（晩景・五更・日中）に行う三つの観想（観諸行無常・観有漏皆苦・観諸法無我）を通して、六道を輪廻する自身の境界を厭い、弥陀の白毫と弥陀の荘厳を観念して浄土を欣求する講会の式文である。
　詳説すれば、全体で厭離穢土門・欣求浄土門の2部に大別され、その中身は表白を含めて6段で構成される。阿弥陀の名義を三身・三徳・三仏性・三部諸尊などに配当し、その功用を讃嘆し、同時に衆生と仏の一体であることを観ずる無意念仏や阿弥陀仏の光明を観念する二種の念仏に言及しながら、実際には八不中道の阿字を念ずることに帰結させていることに本書の特色がある。また『往生講式』に述べるような僧俗を問わない集会を意図した講式とは異なり、出家者自身のために無常観や懺悔を深化させる自演の形式を持つという点にも特徴がある。
　本書の撰述時期は永観の最晩年期にあたる（大谷旭雄）。
　なお、本書の引用典籍には『往生要集』『二十五三昧式』（南都系）『往生礼讃』『無量寿儀軌』などがあり、後世には本書の流麗な対句が『宝物集』『愚迷発心集』に影響を与えたことが指摘されている。
作成者名：能島覚

三心義

書名よみ：さんじんぎ
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
写本奥書：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『和語灯録』の項を参照
刊本所在：1、『西方指南抄』所収（『西方指南抄』の項を参照）
2、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『西方指南抄』の項を参照
2、『和語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『法然上人集』（「日本古典全集」1、日本古典全集刊行会、1926）、『高僧名著全集』4、『法然上人集』（「大日本文庫」仏教篇）、『西方指南抄』の項を参照、『和語灯録』の項を参照
現代語訳書：『和語灯録』の項を参照
参考文献：真柄和人「聖道門、浄土門を定義する伝法然上人法語　黒谷上人語灯録『三心義』の場合」（『高橋弘次先生古稀記念論集　浄土学仏教学論叢』1、山喜房仏書林、2004）、『和語灯録』の項を参照
解説：法然の言説とされるものを収録した文献。
　内容は三心（至誠心・深心・廻向発願心）についての解説。
　第1に至誠心。至誠心とは真実心であると、善導『観経疏』の趣旨を示す。
　第2に深心。いわゆる「信機」「信法」を説き、「就行立信」「就人立信」を述べ、「就人立信」について聖道門と浄土門の2つに分類する。そして善導の『観経疏』の、念仏の教えを信じる人に対しその信仰は誤っていると非難する四重破人の趣旨を述べた後、それらの破人がたとえ仏・菩薩であっても彼らのいうことを信じず、浄土門は我々に有縁の行であることを信ぜよと述べる。
　次に「就行立信」。行を正行と雑行の2種に分類し、正行というのは阿弥陀仏に親しい行であり、雑行というのは阿弥陀仏に疎い行であるとする。そして正行と雑行には、5種の得失（親疎対・近遠対・有間無間対・廻向不廻向対・純雑対）があると指摘する。
　第3に廻向発願心。一切の善根を極楽に廻向せよというのが、善導『観経疏』の趣旨であると説く。
　本書は『和語灯録』に所収されているが、『西方指南抄』所収『法語十八条』の一部が、和漢の違いを除くと、『三心義』の全体とほぼ同文となっている。ただし『法語十八条』所収本では冒頭に独自の内容として、真実心釈・深心釈・利他真実心釈が説かれる。
作成者名：角野玄樹

三心私記

書名よみ：さんじんしき
書名別名：浄土三心私記
異本書名：じょうどさんじんしき
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿弥陀仏、然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1254（建長6）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、鎌倉光明寺蔵本（1276（建治2）、書写者不明）
写本奥書：1、建治二丙子年五月四日、然阿（花押）
刊本所在：1、元禄14（1701、大正大）
2、弘化3（1846、仏教大）
3、明治21（1888、大正大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）

活字本所載書：『浄全』10
参考文献：吉水玄信『三心私記序講義』、柳沢迎存『科図浄土三心私記大意』、恵谷隆戒「宗義顕彰・鎮西、記主著作解題」(『浄土宗全書』10巻付録)、金子寛哉「〈三心私記〉について」(『浄土学』36、1984)
解説：三心とは至誠心・深心・廻向発願心のことであり、浄土往生の行を実践するにあたっての行者の心のありかたを説いたものである。『観無量寿経』の上品上生において説かれるこの三心を、善導は『観経疏』や『往生礼讃偈』において詳細に解説している。
本書の巻頭に置かれている縁起（序）によると、建長6年（1254）10月上旬に江の禅門なる念仏無間の行者の要請によって撰述されたという。その内容は上記善導の二著作における三心釈のそれぞれを4段（大意・引文・解義・問答）に分類して解説する。基本的には逐語釈であるが、問答の中には良忠独自の見解も見ることができるのである。
なお天和3年（1683）に、忍徴は『三心私記』を中心に『選択伝弘決疑鈔』や『観経疏伝通記』の三心釈を増補して一書を編纂した。それが『三心私記裒益』3巻である（三心の一々を各巻にあてる）。『浄全』10に収められるのはこの『三心私記裒益』であり、『三心私記』そのものの文とは区別して排版されている。なお、現在『三心私記』単独の刊本はなく、みな『三心私記裒益』である。
作成者名：斉藤隆信

散善義問答

書名よみ：さんぜんぎもんどう
書名別名：観経疏問答
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1217（建保5）
成立地：日本
巻数：10
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1222（貞応1）、智慶書写）
写本奥書：1、（巻第5中奥書）貞応元年（1222）四月二五日賜長楽寺律師御房御真筆本、於六波羅密寺念仏行人生願房房中未時為興隆仏法利益衆生如形写之了執筆智慶
（巻第8中奥書）已上上品下生並句八讃料簡訖、一校了、七旬愚老隆寛、承久2年（1220）6月下旬比重所料簡了、同聴刑部阿闍梨殿白川口実誠等也
活字本所載書：『隆寛律師の浄土教　附遺文篇』、『隆寛律師全集』1、『金沢文庫資料集』4
参考文献：塚本善隆「金沢文庫所蔵の長楽寺隆寛派の新資料」(『顕真学報』3-4、1934)、安井廣度『法然門下の教学』（法蔵館、1938)、平井正戒「隆寛律師の浄土教」(国書刊行会、1941)
解説：『観経疏』「散善義」の注釈書。『弥陀本願義』の奥書には「観経疏問答」と記されているように、隆寛には『観経疏』全巻にわたる注釈があったとみられるが、本書は「散善義」のみの注釈。首部、末尾また中間においても散逸箇所が多い。もとの状況はわからないが全体としてはかなり大部のもので有ったことが想像される。金沢文庫に残る現在の写本は隆寛の高弟である智慶の書写本であり、貞応1年（1222）に六波羅蜜寺の生願房の房舎において隆寛の真筆本から写したものである。本文そのものは建保5年（1217）に出来たようであるが、承久2年（1220）に再治している。
本書では『観経疏』「散善義」の上品上生段の三心釈と重なる点が多いことから前年に書いた『具三心義』を見るように指示する箇所が多い。『具三心義』における隆寛の至誠心の解釈は行者の自力の真実心を捨て、阿弥陀仏の真実他力に帰するが故に真実心となると解釈するものであるが、本書にみえる教説も同一である。また『観経』九品の往生行を三心具足の行者とそうでない行者にわけて、具足しない行者には、九品の辺地往生とする隆寛独自の廃立観も記されている。現存する金沢文庫の写本の内容はかなり欠落している箇所が多いが以下の通り。第一巻は三福の差別。第二巻は十一門料簡で現存部は「散善義」の三者総挙有縁之類についての詳細な問答。第三巻は上品上生、十一門義の第一門より第四門の至誠心に至るまでの問答。第四巻は第四門の深心についての解釈と問答。第五巻は第四門の廻向発願心についての問答。第六巻は上品上生の十一門義の第五門（五従復有三種衆生已下）より第十一門まで。第七巻は上品中生の解釈と問答料簡。第八上品下生第九巻は中品の三生を解釈し問答料簡している。
作成者名：伊藤茂樹

三大祖師法語

書名よみ：さんだいそしほうご
著者名：真教／智得／託何
著者名よみ：しんきょう／ちとく／たくが
著者名別名：遊行二祖／遊行三祖／遊行七祖
著者生没年：1237（嘉禎3）-1319（文保3）／1261（弘長2）-1320（元応2）／1285（弘安8）-1354（文和3）
成立翻訳年：1306（嘉元4）-1339（暦応2）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、安永5（1776、国会図書館・大谷大・京都大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、安永五丙申年（1776）八月、洛陽七條道場蔵板（未調査）
活字本所載書：『時宗全書』1、『定本時宗宗典』上、『日仏全』66、『高僧名著全集』18
参考文献：河野憲善『日仏全』解題、河野憲善『定本時宗宗典』解題
解説：遊行二祖真教、三祖智得、七祖託何の法語八部を収録したもの。53代尊如の宗典刊行の一つで、真光寺八代洞天の編集により、七条学頭徴禅の序がある。上巻には目録と真教の「奉納縁起記」「道場誓文」、智得の「知心修要記」「念仏往生綱要」「三心料簡義」、託何の「他阿弥陀仏同行用心大綱註」、下巻には託何の「条条行儀法則」「蔡州和伝要」が所収される。「奉納縁起記」は嘉元4年（1306）に、熊野本宮へ奉納した『一遍上人縁起絵』10巻の詞書（漢文）である。「道場誓文」は嘉元4年（1306）に、他阿が時衆を誡めたもので、制戒を破らず、称名念仏すれば必ず往生すると言う。これは『他阿上人法語』巻一にも所収される（漢文）。「知心修要記」は正師の教導に遇い、誓戒を破らず、称名念仏すべきという念仏行者の姿を説く（漢文）。
「念仏往生綱要」は念仏を修することを説くとともに、当体の一念についても述べる（漢文）。「三心料簡義」は三心の解釈（漢文）。「他阿弥陀仏同行用心大綱註」は末尾部分に貞和1年（1345）相当の年記があり、時宗に於ける修行時の用心を綱目化し述べる（漢文）。「条条行儀法則」は康永3年（1344）に起筆し、行儀法式九ヶ条の法式を示す（漢

文、一部カナ)。「蔡州和伝要」は、「蔡」が中国周の国名でであることから、中日浄土教史を意図した文献と考えられる。天竺から始めて、中国を概観した後、善光寺如来・聖徳太子・空海・最澄など、念仏にまつわる事柄や人物や事柄について述べる（漢文、カナ)。
作成者名：坪井直子

算頭録

書名よみ：さんづろく、さんとうろく
著者名：了源
著者名よみ：りょうげん
著者名別名：空性、空性房、釈空性
著者生没年：1284（弘安4）-1336（延元1）
成立翻訳年：1329（元徳1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、京都光薗院蔵本（1329（元徳1)、了源真筆本（？)、現在所在不明）
2、竜谷大蔵本（未調査）
3、東京大史料編纂所蔵本（未調査）
写本奥書：1、元徳元年己巳（1329）十一月二十八日、釈空性三十五歳謹書
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『真宗史料集成』4、『仏光寺小部集』（仏教史学会、1923）
現代語訳書：『了源上人研究　論文集』（真宗仏光寺派宗務所内教学委員会、1984）
参考文献：『了源上人研究　論文集』（真宗仏光寺派宗務所内教学委員会、1984）
解説：著者は、仏光寺の事実上の開山である了源。
　著者了源は弘安4年（1284）誕生。『存覚一期記』には、元応2年（1320）はじめて本願寺に参詣し、その時の身分は六波羅探題の大仏維貞の家人、比留維広の中間（ちゅうげん）であったとしている。同年京都山科に興正寺を建立、嘉暦3年（1328）前後には京都東山渋谷の地に仏光寺を建立した。名帳・絵系図・光明本尊を用いて布教し、多くの念仏者を生んだ。存覚とは深い親交があったという。建武3年（1336）52歳で往生。了源については熊野恒陽『了源上人　その史実と伝承』（白馬社、2005）を参照。
　本書は元徳1年（1329）11月28日、即ち親鸞の命日にあたって、了源から門徒に対し遵守すべきものとして3項目を示したもの。
　まず第1項目では、仏光寺の系図に加えられた者及び親鸞の教えに帰依する者は、親鸞の定めているきまりに背いてはならないことを述べ、男女の席を分ける事、夜更けに往来しない事、名誉心のために人の世話をしてはならない事など風紀的な行儀に関し注意を呼びかけている。また、親鸞の教えを伝える相承の知識に遇い、信心を決定することを勧め、獲信者には報恩の行が展開されると述べている。
　了源は、報恩の行として善導所説の五種正行をあげている。その中、第4の称名正行についてはどんな時でも行ずべきであるが、観察正行や読誦正行については人によって行ずる程度が異なるとしている。読誦に触れている部分では、六時の勤行を三時に縮めて、善導『往生礼讃』の勤行を親鸞「正信念仏偈」にかえる事、5首または7首の和讃を読む事を勧め、これらは師明光より伝えられたと述べている。初期真宗並びに仏光寺教団における勤行を知る点で注目される。
　第2項目には、親鸞が越後流罪の後、一端京都へ上洛し興正寺、即ち後の仏光寺を建立したことに触れ、いつの時代にも仏法を弘通すれば邪魔が入るものであり、「鎌倉の邪徒」は真仮の門戸を知らないから哀れむべきであるとしている。
　第3項目では、報恩の為に経典を読誦する場合に、強調してリズムをとるなどの行為は他から批判され、かえって報恩にならないので謹むべきであるとしている。
　本書は識語に「元徳元年己巳（1329）十一月二十八日、釈空性三十五歳謹書」とあり、著述年次がはっきりしているが、元徳1年（1329）は了源45歳であることが解っており、「三十五歳謹書」の部分については後代につけ加えられたものと推測されている。
　なお光薗院蔵本は了源真筆とされているが、現在は所在不明。
作成者名：藤田真隆

三部経釈

書名よみ：さんぶきょうしゃく
書名別名：浄土三部経釈、三経釈
異本書名：三部経大意、浄土三部経大意、三経大意
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：刊本
写本
活字本
写本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
写本奥書：1、『和語灯録』の項を参照
刊本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『法然上人全集』（宗粋社、1906)、『高僧名著全集』4、『法然上人集』（「大日本文庫」仏教篇)、『和語灯録』の項を参照
現代語訳書：『傍訳　三部経釈　往生大要抄』（四季社、2008)、『和語灯録』の項を参照
参考文献：塚本善隆「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本」（『今岡教授還暦記念論文集』、大正大学浄土学研究会、1933)、恵谷隆戒『浄土宗三祖然阿良忠上人伝の新研究』（金尾文淵堂、1934)、岸章二「金沢文庫所蔵三部経大意に就て」（『宗学研究』9、1934)、山上正尊「三部経大意の検討」（『真宗学報』17、1935)、大橋俊雄「建長正嘉両本対照三部経大意」（『真宗学報』17、1935)、日置孝彦「浄土教の研究（二)「浄土三部経大意」の考察」（『金沢文庫研究紀要』11、1974)、藤堂恭俊「法然上人の至誠心釈について」（『仏教文化研究』21、1975)、末木文美士「源空の『三部経大意』について」（『日本仏教』43、1977)、『金沢文庫資料全書』4浄土篇（一）（金沢文庫、1980)、坪井俊映「『三部経大意』に見られる非法然的教説について」（『仏教文化研究所年報』1、1982)、坪井俊映「『浄土三部経大意』の撰述者に関する諸問題―特に五種類の写刊本を比較して―」（『仏教大学仏教文化研究所年報』3、1985)、幡谷明『浄土三経往生文類試解』（真宗大谷派宗務所出版部、1992)、善裕昭「法然『三部経大意』における諸問題」（『浄土宗学研究』22、1996)、『影印高田古典』1（真宗高田派宗務院、1996)、松本史朗「『唯信鈔』について」（『駒沢大

学仏教学部研究紀要』57、1999)、『和語灯録』の項を参照
解説：本書は『三部経大意』と同書異本の関係にある。両者の最も大きな違いは、『三部経大意』に見られた至誠心釈の特異な文が本書では大幅に削除されている点である。
本書の真偽問題や成立、『三部経大意』との関係については、『三部経大意』の項を参照。
内容は「浄土三部経」の要文を取りあげ、解説を施したものである。
具体的な内容や『三部経大意』との相違点については『三部経大意』の項を参照。
作成者名：角野玄樹

三部経大意

書名よみ：さんぶきょうたいい
書名別名：浄土三部経大意、三経大意
異本書名：三部経釈、浄土三部経釈、三経釈
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉期、良聖（？）書写）
2、高田専修寺蔵本（鎌倉期、真仏書写）
〈影印版〉:『影印高田古典』1（真宗高田派宗務院、1996）
写本奥書：1、（表紙の袖書）良聖（花押）、三部経大意
（奥書）建長六年甲寅（1254）五月十五日、於平針郷新善光寺書了
2、（第1旧表紙の袖書）墨付三拾九枚／寛文四年辰（1664）六月十八日ニ改ル／三部経大意
（第2旧表紙の袖書）三部経大意、釈慶信
（奥書）正嘉二歳戊午（1258）［■］月十八日書写之
活字本所載書：『昭法全』、日本思想大系10『法然・一遍』、『金沢文庫資料全書』4浄土篇（一）（金沢文庫、1980）、『親鸞聖人全集』写伝篇2
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』1（春秋社、1989）
参考文献：塚本善隆「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本」（『今岡教授還暦記念論文集』、大正大学浄土学研究会、1933）、恵谷隆戒『浄土宗三祖然阿良忠上人伝の新研究』（金尾文淵堂、1934）、岸章二「金沢文庫所蔵三部経大意に就て」（『宗学研究』9、1934）、山上正尊「三部経大意の検討」（『真宗学報』17、1935）、大橋俊雄「建長正嘉両本対照三部経大意」（『真宗学報』17、1935）、日置孝彦「浄土教の研究（二）「浄土三部経大意」の考察」（『金沢文庫研究紀要』11、1974）、藤堂恭俊「法然上人の至誠心釈について」（『仏教文化研究』21、1975）、末木文美士「源空の『三部経大意』について」（『日本仏教』43、1977）、『金沢文庫資料全書』4浄土篇（一）（金沢文庫、1980）、坪井俊映「『三部経大意』に見られる非法然的教説について」（『仏教文化研究所年報』1、1982）、坪井俊映「『浄土三部経大意』の撰述者に関する諸問題―特に五種類の写刊本を比較して―」（『仏教大学仏教文化研究所年報』3、1985）、幡谷明『浄土三経往生文類試解』（真宗大谷派宗務所出版部、1992）、善裕昭「法然『三部経大意』における諸問題」（『浄土宗学研究』22、1996）、『影印高田古典』1（真宗高田派宗務院、1996）、松本史朗「『唯信鈔』について」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』57、1999）
解説：本書の写本は金沢文庫と専修寺に蔵されているが、その異本として『和語灯録』所収の『三部経釈』がある。両者の最も大きな違いは、前者にみられる至誠心釈の特異な文が後者には見られない点である。
本書には真撰説・偽撰説の両方があり、藤堂恭俊・末木文美士・善裕昭は真撰説、坪井俊映・松本史朗は偽撰説をとる。藤堂恭俊は本書の至誠心釈などの特異な部分は法然が早い時代に示した錬磨の義であると解釈する。善裕昭も本書を法然著書中の初期の成立と理解する。一方、坪井俊映は至誠心釈の特異な部分や様々な論点をあげて、本書が偽撰であるとし、隆寛に近い者が著したとする。また松本史朗は本書が第17願を重視している点や、親鸞の悪人正機説に近い考え方が説かれている点から、親鸞か親鸞に近い者の著述であるとする。
内容は「浄土三部経」の要文を取りあげ、解説を施したものである。
第1に『無量寿経』の解説。まず四十八願について。このうち第18願が特に勝れていると述べ、四十八願の各々の願には第18願の意が含まれていると主張する。
次に三輩往生の文。三輩のそれぞれに「一向専念無量寿仏」とあるのは念仏こそが仏の本願だからと説く。
次に「其仏本願力」の文。玄通律師の譬え話を示し、「其仏本願力」の文の功徳を強調する。
次に流通分の「無上功徳」の文。乃至一念することにより、無上の功徳が得られると述べる。
第2に『観無量寿経』。まず流通分の付属の文。定善・散善を釈尊は説いたが、阿難には念仏を付属したという『観無量寿経』の趣旨が示される。
次に真身観の「光明遍照」の文。この文は第12願、第13願、第17願、第18願などに基づくものであるという。
次に三心（至誠心・深心・廻向発願心）の文。まず至誠心。至誠心は定善・散善・弘願の3門に通じること、および自力を廻して他力に乗ずべきことを説く。またここに引かれる善導『観経疏』至誠心釈の「所施為趣求」の文の訓みが、真宗の訓みに近いという特徴があることで知られている。次に深心。阿弥陀仏の別願は不可思議であり、また三字の名号に内証外用の功徳や万億恒沙の甚深の法門がその内に収められており、誰もその功徳の甚大さは量れないことを示す。次に廻向発願心。この廻向発願心釈は短文で、廻向発願心は具えやすく、極楽国土の快楽を聞けば、誰でも往生を願うであろうと述べる。
次に三心のあとは九品について述べるが、ここでは上品往生を勧めている。
第3に『阿弥陀経』。『阿弥陀経』では極楽の依正二報を明かし、往生の行を示していると指摘する。そしてそれを衆生に信じさせるため、六方諸仏が証誠するのだと説く。
本書の内容的特徴として最も注目されるのは、至誠心釈において至誠心を定善・散善・弘願の3門に通じると述べてる点である。また定散二善は自力、弘願は他力と説くように読みとれるが、これも他の文献には見られない点といえる。
なお、まず金沢文庫蔵本は良聖の手沢本であることが表紙の署名からうかがえる。この良聖なる人物は良忠の弟子とされ、金沢文庫に所蔵されているいくつかの他の浄土教文献も、良聖の手が入っている。一方専修寺蔵本は、至誠心釈の訓みのみならず、『往生礼讃』の文などにも書き換えがみられ、しかもその書き換えは親鸞の文と近いことが指摘されている。
作成者名：角野玄樹

識知浄土論

書名よみ：しきちじょうどろん
著者名：聖光（？）
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立翻訳年：1237（嘉禎3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大正大蔵本（1439（永享11））
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、慶安2（1649、竜谷大）
2、宝暦5（1755、大谷大・京都大・大正大・東北大・東洋大・仏教大・早稲田大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『浄全』10
参考文献：今岡達音「識知浄土論（解題）」（『浄全』21）、石井教道「鎮西教学研究序説」（『大正大学学報』23、1935）、小西存祐「鎮西国師について」（柴田玄鳳編『三上人の研究』（三上人遠忌事務局）1935）、恵谷隆戒「宗義顕彰・鎮西、記主著作解題」（『浄全』10）、香月乗光「鎮西教学における祖述と顕彰」（『法然浄土教の思想と歴史』山喜房仏書林、1974）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。

本書は44の問答からなっており、初めの7箇の問答では「浄仏国土の義」を述べ、次の22箇の問答では「往生浄土の義」を述べ、最後の15箇の問答では「仏菩薩大悲浄土結縁の益」を述べる。「浄仏国土の義」では菩薩道としての浄仏国土の修行について述べ、「往生浄土の義」では称名念仏による往生と共に諸行往生を述べ、「仏菩薩大悲浄土結縁の益」では十悪五逆の罪人、三悪道の衆生等に対して仏・菩薩が方便を用いて浄土往生せしめることを述べる。以上44の問答は主に『大智度論』の「往生品」・「浄仏国土品」の文を引用しつつ解説されている。

『識知浄土論』撰述の理由は、経歴（江戸時代中期の学者）の『識知浄土論私記』によれば、法然滅後、念仏の法門において異義を立てる者が出たため、これらの異義を廃して、正説（「浄仏国土成就衆生」「六波羅蜜三福等を以て浄土の生因とす」）を顕すためであるとされる（『浄全』10、p.593）。

聖光の作とすることについて、経暦は、『識知浄土論』の内容には不審な点があること、また良忠や聖冏の著作に『識知浄土論』について言及がないこと等から聖光の作とすることに疑う者があることを明かした上で、自身は名越の『授手印見聞』の中に『識知浄土論』の題目があることによって、聖光より良忠に伝えられたものに間違いないとして、聖光真作の立場を取っている（『浄全』10、610上-下）。反対に石井教道は「他の書に比して内容が異なっているのと、記主以後聖冏の著述に一言も触れられていない点等を総合して、聊か疑う余地がある」とし、今岡達音も石井教道の説を受けて「第一史料として使用するのに注意を要する」とされている。また恵谷隆戒も「著者と著作年代については疑問が持たれており、直ちに聖光の真作とすることはできない」というように、聖光の真作とすることに疑問がある点を指摘している。
作成者名：米沢実江子

四句之抄

書名よみ：しくのしょう
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『閑亭後世物語』（『続浄全』9、p.43）
参考文献：爪生津隆雄「隆寛律師の著作に就て」（『真宗研究』18、1928）
解説：書名のみ『閑亭後世物語』にみえる。早くに散逸したようで、『長西録』にはみえない。『閑亭後世物語』には、自力他力について『四句之抄』をみるように記されている。

江戸期の大谷派の学匠了祥は、『念仏得失義』にみえる四不定、すなわち「自力念仏往生不定」「仮名念仏往生不定」「悪見念仏往生不定」「慢心念仏往生不定」を四句と見て、『念仏得失義』が隆寛の『四句之抄』を指すのではないかと指摘している。
作成者名：伊藤茂樹

持玄抄

書名よみ：じげんしょう
著者名：幸西
著者名よみ：こうさい
著者名別名：成覚房、鐘下房少輔、物部氏（俗姓）
著者生没年：1163（長寛1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：乗専撰『最須敬重絵詞』5（『真聖全』3、p.846）
参考文献：住田智見『浄土源流章解説』（法蔵館、1925）、安井広度『法然門下の研究』（法蔵館、1968）
解説：本書は現存しない。

乗専（1274-1357、生年には1295年説あり）撰『最須敬重絵詞』5に、幸西の著作として書名のみが挙げられている。覚如（1272-1351）は諸流派研究のため他門の先学に会いに行っており、一念義は慈光寺の勝縁から習学した。その折に書写を許された幸西著述の一つである。

幸西は『玄義分抄』の「宗旨門」を同書の「得益門」において「玄門（深奥なる教理）」と表現しているので、本書は「宗旨門」の中から肝要の義を取り上げ、それについて論じたものではないかと推測されている（安井広度、1968）。
作成者名：伊藤瑛梨

四十八願釈

書名よみ：しじゅうはちがんしゃく
著者名：智光
著者名よみ：ちこう
著者生没年：709（和銅2）-780（宝亀11）頃

成立翻訳年：8c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『仏典疏鈔目録』(『日仏全』1、p.117)、白弁『無量寿経集解』1（『続浄全』1、p.6）
参考文献：井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、pp.50-142）
解説：著者の略歴については『無量寿経論釈』の項を参照。
　本書はすでに散逸しているが、了慧道光の『無量寿経鈔』（『浄全』14、pp.72-128）には願名の39の逸文があり、一部の願名を除き、智光が付した四十八願の願名を知ることができる。それらは、良源の『極楽浄土九品往生義』の願名とほぼ一致し、良源が本書を踏襲したことが明らかにされている。また本書は、同著者の『無量寿経論釈』の一部が単行されたものという見解もある（井上[1975]）。
作成者名：北条竜士

四十八願ノ名次第

書名よみ：しじゅうはちがんのみょうしだい（？）
書名別名：無量寿経十六願釈
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：1081（永保1）以前
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、京都国立博物館蔵本（1081-1084（永保年間）、書写者不明、『大般若波羅密多経巻第20』（守屋孝蔵コレクションの内）の紙背文書）
写本奥書：1、永保甲午十二月書写［■］（『守屋孝蔵氏蒐集　古経図録』（京都国立博物館、1964）の解説より転載）
参考文献：『守屋孝蔵氏蒐集　古経図録』（京都国立博物館、1964）、大橋俊雄「金沢文庫所蔵「四十八願釈」に就いて」（『大正大学学報　仏教学部・文学部研究紀要』38、1952）
解説：本書は守屋孝蔵コレクションの『大般若波羅密多経巻第20』の紙背に書き入れられた阿弥陀仏の四十八願の簡略な注釈である。この『大般若波波羅密多経』巻第20は「飯盛寺」にて書写されたことが奥書からわかるもののその寺院については未詳であるという。
　本書の内容は四十八願全体を注釈したものではなく、第1願から16願だけに願名・願意が明かされている。『長西録』などによれば、平安浄土教において四十八願に対する注釈を施した著述は静照・真源・澄憲らに見ることができ、鎌倉期に入れば隆寛・聖覚らのものを指摘できる。それらのなかで本書は16願のみの部分的な注釈であり、撰者も不明ながらも、平安期における四十八願に対する理解の変遷を伺うには欠かせない資料の一つとして数えられるだろう。
作成者名：能島覚

私念仏作法

書名よみ：しねんぶつさほう
著者名：覚超
著者名よみ：かくちょう
著者名別名：都率僧都、兜率僧都、都率先徳、兜率先徳、楞厳院先徳
著者生没年：960（天徳4）-1034（長元7）
成立翻訳年：10c末-11c初頭
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、青蓮院吉水蔵蔵本（1149（久安4）、書写者不明、外題は「都率僧都自行念誦略記」、詳しくは「24、解説」を参照）
2、東京大史料編纂所蔵本（未調査、1のマイクロフィルム）
写本奥書：1、久安四（1149）年六月二十二日書写畢
2、（未調査）
参考文献：小山昌純「叡山浄土教における覚超撰『私念仏作法』の位置」（『印仏研』49-1、2000）、小山昌純「覚超浄土教の再検討－青蓮院所蔵『私念仏作法』を中心として－」（『仏教学研究』57、2002）
解説：本書は題号より内容を読みとれば「私の念仏作法」とも「私（ひそか）な念仏作法」ともいえることから、覚超自身が修した念仏作法が記されたものと考えられる（小山論考）。また、本書の構成は三礼・唄・発願・十六観相・念仏・礼拝・五悔・六時偈・回向という次第からなり、個々の項目について細かな説明を加えているのは、発願・十六相・念仏・礼拝のみであり、他のものに関しては、差定次第として挙げているだけである。内容は、まず発願において、阿弥陀仏悔過作法に則って、念仏の功徳により臨終正念し、極楽に往生することを願っている。次に『観経』の教説に従って第一日相より第十六下輩生相までの十六相を修することを明かしている。これら十六相の中でも、特に第九無量寿相は本書の要所であり、如来の相好を『例時作法』等にみられる「三十二相頌」を用いて『観経』の経旨に沿うように整理している。ここで小山によれば『観経』や「三十二相頌」の文言にあてはまらない相好については、『往生要集』に述べられる弥陀相好から摂取しているとの指摘があり、更にそれらの相好に対する観相の次第までも、『往生要集』の順序に沿うことが明らかとされている。次に念仏については、多少を問わないとし、真言を誦したり、顕密の行法にわたり讃歎することも許容している。そして礼拝では、四十八願・法報応の三身・十二光仏への帰依と、現世の聖朝から万民に至るまでの安穏を願う心を促し、自他共に業障を断じ、命終に決定往生することを希求するのである。
　なお、本書は『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』（吉水蔵聖教調査団、1999）によれば、第41箱の1番目の『都率僧都自行念誦略記』の一部であることが推察される。この典籍は外題に「都率僧都自行念誦略記」とあり、その左右には「息災安穏〈増長・安楽〉福寿抄」・「自行略記」・「別記」・「無病長寿福貴自在抄」と書かれ、内題に「私念仏作法、覚超僧都撰」と記されている。そして、この典籍は全体で24紙であることから、わずか5丁弱の本書の他にも覚超による著述が収められていると考えられる。
作成者名：能島覚

自筆鈔（観経疏自筆鈔、観念法門自筆鈔、般舟讃自筆鈔、往生礼讃自筆鈔）

書名よみ：じひつしょう
書名別名：自筆御鈔、御自筆鈔、薄墨御鈔、建保鈔
異本書名：観経要義釈観門要義鈔（観門義）
著者名：証空
著者名よみ：しょうくう
著者名別名：善恵房、善恵房証空、西山上人、当山上人、小坂、弥天善恵鑑智国師
著者生没年：1177（治承1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：1215（建保3）-1226（嘉禄2）

巻数：51
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（江戸期、書写者不明、真宗大谷派長浜別院旧蔵、5巻本玄義分鈔第1-4巻、4巻本序分義鈔第1・4巻、6巻本定善義鈔第4・5巻、6巻本散善義鈔第1・2・4・6巻）
2、大谷大瑞蓮寺文庫蔵本（18c、興空書写、7巻本礼讃鈔第1-5巻、般舟讃鈔7巻）
3、長岡京楊谷寺蔵本（1747（延享4）、仙空書写（？）、3巻本玄義分鈔第1巻、4巻本序分義鈔第［■］巻、3巻本定善義鈔3巻、3巻本散善義鈔3巻）
4、京都遣迎院蔵本A（1502（文亀2）、宗朴書写、禅林寺旧蔵、玄3巻本義分鈔3巻・3巻本散善義鈔第1・2巻）
5、京都遣迎院蔵本B（1517（永正14）、賢恵書写、3巻本序分義鈔第2・3巻）
6、京都遣迎院蔵本C（1491-1492（延徳3-延徳4）、書写者不明（各巻別筆）、2巻本序分義鈔のみ）
7、京都遣迎院蔵本D（1769（明和6）、知空・徹龍・師道書写、3巻本定善義鈔のみ）
8、滋賀坂本西教寺正教蔵蔵本A（1657（明暦3）、書写者不明（舜興所持）、2巻本観念法門鈔）
9、滋賀坂西教寺正教蔵蔵本B（1657（明暦3）、書写者不明（舜興所持）、5巻本往生礼讃鈔、末尾本文欠落）
10、兵庫高砂時光寺蔵本（1502（文亀2）、宗朴写、遣迎院A本の端本、京都禅林寺旧蔵、3巻本散善義鈔第3巻）
11、兵庫生瀬浄橋寺蔵本（未調査、般舟讃鈔のみ）
12、金沢専光寺蔵本（未調査、玄義分鈔2巻、序分義鈔2巻、定善義鈔上巻、散善義鈔中巻）
写本奥書：1、（玄義分第1巻奥書）出本／建武元年五月七日以玄観上人自筆之本一校了、但文字和漢以外相違、仍任大概校之而已、書写之本ハ観一房本也、什恵在判／玄一〈従観字偈畢〉、五帖之内、文安二年卯月十八日於備中州中興寺書写畢、沙門慧篤〈生才三十四〉、一校畢／文安四年十一月二十六日蒙弁空長老許免於西山本房西寮一校畢、殊更今日上人御忌也、日出ニ清浄有戒者乃獲得正法ノ経文ニヨテ先世ノ宿習誠哉、悲涙難禁、嘱乎慧篤以非修非学之身此宝珠入手事无宿世見諸佛即能信此事之往因者争如此之成大利而已／或云、玄五、序八、定十、散七、観六、礼八、舟七、五十一
（玄義分第2巻奥書）建武元年五月十六日雨中於病床一校了、玄観上人自筆本ト文字等不同也、任大概校合之而已／文安二年卯月二十二日〈午剋〉於備中州中興寺書写畢、沙門慧篤〈歳三十四〉、玄二〈従序題至説人〉、即時一校畢／文安四年十一月二十七日於西山本房西寮一校畢、当山上人御自筆ニテ
（玄義分第3巻奥書）建武元年五月二十七日於華台中房以玄観上人自筆本之本一校了／玄三〈従定散門至道理破〉、文安二年卯月二十五日於備中州中興寺書写畢、今日慈父了妙禅門之月忌也、願資彼菩提自他共同成仏道而已、欣求浄土沙門慧篤〈歳三十四〉／文安四年十一月二十八日於西山本堂以自筆御本一校畢、
（玄義分第4巻奥書）玄四〈従返対門至別時意〉、五帖之内、文安二年卯月二十八日於備中宮内中興寺書写畢、欣求浄土沙門慧篤〈生才三十四〉、南無阿弥陀仏、即一校畢／文安四年十一月二十九日於西山本房向西寮巳剋於灯下一校畢、当山上人御自筆ニテ
（序分義第1巻奥書）（奥書なし）
（序分義第4巻奥書）序〈下末顕行已下〉、四帖之内、文安二年五月九日於備中宮内中興寺南寮書写畢、欣求浄土沙門慧篤〈生才三十四〉、南無阿弥陀仏、即一校畢／文安四年十二月四日於西山本堂時処上人自筆御本一校畢、
（定善義第4巻奥書）定〈中末花座像観〉、六帖之内、文安二年五月十七日於備中山内顕密寺客寮書写畢、欣求浄土沙門慧篤、南無阿弥陀仏、一校畢／文安四年十二月七日於西山本房西寮以上人自筆之御本一校畢、
（定善義第5巻奥書）文安五年五月十八日於西山宝性院書功畢、余帖於備前書写之、然而此帖闕間只今於当山終功畢、殊更第九第十第十一三尊観也、依未来衆生当云何観無量寿仏及二菩薩請所説観故、在世之韋提証得往生ヲナシク依三尊功徳、即悟無生無疑者歟、欣求浄土沙門慧篤／文安、翌月一校畢
（散善義第1巻奥書）散〈上頭至心〉、六帖之内、文安二年五月二十二日於備中宮内中興寺南寮書写畢、欣求浄土沙門慧篤、南無阿弥陀仏／文安四年十二月八日於西山本堂時処以上人自筆御本対禎公上人一校畢、
（散善義第2巻奥書）散〈上末深心〉、六帖之内、御抄表紙、花厳経云一見弥陀仏無辺功徳身若真像画像決定往生極楽真像者造像等、私云金色形像歟、文安二年五月二十四日於備中宮内中興寺南寮〈酉剋〉書功畢、欣求浄土沙門慧篤、南無阿弥陀仏、即一校畢／文安四年十二月九日於西山上衍院以上人御自筆之本対寿禎上人一校畢、慧篤
（散善義第4巻奥書）散〈従上品中生中三品畢〉、六帖之内、文安四年六月三日於馬路山明王寺竹林房書写畢、此間根本大師忌八講中不寸暇、然而謹書功畢、欣求浄土慧篤〈生年三十六法二十一〉／例時阿弥陀経稽古在之、以余暇一校畢／同年十二月十九日於西山本房西寮以上人自筆御抄校合畢、慧篤
（散善義第6巻奥書）散〈従下末流通已下〉、六帖之内、文安四年六月十四日於馬路山明王寺竹林房例時稽古之余暇書写畢、欣求浄土慧篤、即校畢／文安四年十二月二十一日於西山上衍院以上人御自筆本対寿禎上人校合畢、慧篤
2、（往生礼讃第1巻）本云（傍注「本ニハ濃州ノカタニアリ」）、礼讃自筆抄七（傍注「私ニ五歟」）巻之内第一巻、西山御作也、濃州方県ノ郡福光ノ郷於称名寺書之、于時大永二年壬午五月上旬沙門妙覚／興空（花押）
（往生礼讃第2巻）礼讃自筆抄七巻之内第二巻、西山上人御作也、本ニ云、大永二年壬午五月上旬於濃州方県郡福光郷称名寺写之、沙門妙覚
（往生礼讃第3巻）此抄全部七巻之内第三巻、西山上人御製也、濃州方県郡福光郷於称名寺写之、沙門妙覚
（往生礼讃第4巻）礼讃自筆抄七巻内、西山上人御作、濃州方県郡福光郷於称名寺写之、沙門妙覚
（往生礼讃第5巻）西山上人御作、本ニ云、大永二年壬午卯月二十一日書之、濃州方県郡福光郷称名寺沙門妙覚
（般舟讃第1巻）本ニ云、私云、般舟讃自筆抄七巻有リ、西山善恵上人御作也、大永四年甲申五月十五日於濃州方県郡福光郷安養寺書写之、沙門妙覚／興空（花押）
（般舟讃第2巻）興空（花押）
（般舟讃第3巻）興空
（般舟讃第4巻）本ニ云、般舟讃自筆抄第四、七巻之内、大永四年甲申六月四日於濃州方県郡福光郷於安養寺写之、住持妙覚五十歳ト矣
（般舟讃第5巻）本ニ云、私ニ云、般舟讃自筆抄第五巻、七巻之内、西山御作ナリ、於濃州方県郡福光郷安養寺写之、大永四年六月九日沙門妙覚五十歳／末学拝写、興隆鳳（花押）
（般舟讃第6巻）本ニ云、私ニ云、此ハ般舟讃自筆抄第六巻、七巻之内、西山善恵上人御作也、於濃州方県郡福光郷安養寺写之、沙門妙覚五拾歳／興空（花押）
（般舟讃第7巻）本ニ云、私云、般舟讃自筆抄第七巻、西山善恵上人御作也、般舟一部之分畢、於濃州方県郡福光郷安養寺写之、沙門覚心（傍注「妙覚歟」）五十歳／興空（花押）

3、（定善義第1巻）于時文明二年神無月十五日之夜四時書写畢、慶雲判／維時元文五庚申衣更著十六日書写畢／次、延享四丁卯孟穐二十五日書写之畢
（定善義第2巻）御本云、又云三昧者正ニハ三摩地此ニハ等持、心専一境故／次本云、正安四年七月於西山往生院禅坊奉書写畢／文明二年神無月二十一日書之竟、慶雲之／維時延享第四丁卯仲穐初四日奉書写之終
（定善義第3巻）御本云（以下、教義の覚書。省略）、已上十巻畢、御本云（以下、教義の覚書。省略）、御本云、仏眼ハ菩薩ナリ、大日ノ所現ナリ金剛薩埵ナリ、仏部ノ父母ナレトモ上ハ下ヲカヌル故惣シテ三部ノ父母ニ用之／本云、正安四年七月十三日於西山往生院積学坊閑窓染筆之／維時延享四年季穐念四奉書写之畢
（散善義第1巻）正安四年七月二十三日於西山積学坊閑窓散善義一帖書写畢／維時延享四年長月晦日書写之畢
（散善義第2巻）御本云（以下、教義の覚書。省略）、正安四年七月二十八日於西山往生院禅坊密々染筆畢、更不可及他見也／維時延享四年陽月初四日書写之畢、深秘々々
（散善義第3巻）維時延享四年陽月九日書写之畢、已上十巻書写之、玄義自失本
4、（玄義分第1巻）御本云、慈恩者十一面ノ化身也／次本云、正安四年三月二十二日於西山禅房書始之、同二十五日法然上人御月忌首尾四日奉書写畢、此則為臨終正念金花来応也／京東山於禅林寺無量寿院書写之畢文亀二年七月四日、宗朴
（玄義分第2巻）御本云、仏眼ハ無窮、四眼究竟スルヲ云仏眼、此事真言行法也、仏眼ノ印真言別体アルニ殊也／次本云、正安四年三月晦日於西山善峯寺往生院積学坊閑窓染筆畢、此則為臨終正念往生極楽頓証菩提也／京東山於禅林寺無量寿院染筆畢、文亀二年七月十二日、宗朴
（玄義分第3巻）正安四年四月四日於西山積学房玄義一部書写畢、努力々々不可他見者也／京東山於禅林寺無量寿院住持一中上人御本以書写之、彼本者於西山二尊院一両度校畢、是未来学可為要路者也而已、文亀二年七月二十四日一部書写畢、宗朴
5、（序分義第1巻）次本云、正安四卯十一於西山往生院積学坊染筆畢／時永正十四年重陽下旬書之畢
（序分義第2巻）時永正十四年〈丁丑〉十月七日書写之畢、賢恵
6、法性山常念寺談義所清書畢、般舟院、延徳四年卯月二十二日
7、（未調査）
8、（観念法門上巻中途）本云、応永三十三年卯月十七日於西山三鈷寺上衍院新坊以御経蔵御本敬令書写而已、執筆僧智仙／大永六年七月十一日於東山禅林寺書写之者也、良仙
（観念法門上巻奥書）右者嵯峨二尊院本ヲ以テ書写之、明暦三〈丁酉〉年五月吉祥日、江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵
（観念法門下巻）明暦三〈丁酉〉歳五月吉日、江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵
9、（往生礼讃第1巻）右者以嵯峨二尊院本令書写之者也、明暦参〈丁酉〉歳正月吉日、江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵
（以下、各巻同文につき省略）
10、正安四年七月二十三日於西山積学坊閑窓散善義一帖書写畢、御本云、四重マンタラハ法身報身応身ト外金剛部ト也、於洛東禅林無量寿院二階楼舎以住持融舜上人之御本令書写畢、文亀二年〈壬戌〉正月二十日、宗朴
11、（未調査）
12、（未調査）
刊本所在：1、寛文11（1671、西山短大・竜谷大・大正大・東洋大哲学堂・立正大）
2、文化2（1805、大谷大・大正大・竜谷大、寛文板の補刻版、『積学鈔』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、
2、
活字本所載書：『西山全書』3・4・別巻1、『西山叢書』1-4
現代語訳書：西山教学研究所（西山浄土宗）にて作成中（未公表）
参考文献：藤原幸章「大谷大学蔵四帖疏仮名書観門義について」（『大谷学報』19-2、1938）、藤原幸章「往生礼讃仮名書観門義について」（『西山学報』10、1939）、広川尭敏「遣迎院本仮名書観門義について」（『印仏』17-2、1969）、広川尭敏「興空書写仮名書『観門要義鈔』について」（『藤原弘道先生頌寿記念史学仏教学論集』）、大塚霊雲「新資料・宗朴書写仮名書観門義について」（『西山禅林学報』17、1983）、徳岡亮英「観門義筆録の日付について」（『西山学報』25、1976）
解説：西山派祖証空の著作で、善導の著書五部九巻のうち『法事讃』を除いた4部7巻についての注釈書。
全編にわたって筆録した日時や地名等が記録されており、それによると、建保3年（1215）5月29日に筆を起こし、ほぼ毎日少しづつ書き進め、嘉禄2年（1226）5月頃に終功している（現存本文が末尾欠落のため、正確な日付は不明）。途中、建保4年（1216）から翌年にかけて1年ほどの中断があるので、ちょうど10年をかけた労作である。
行門・観門・弘願という特殊な名目（術語）を使って、論旨の不明確な善導の著述を読解し、自力の世界から他力の世界へ、そして更に終着点である弥陀の弘願へと読者を導こうとしている。後年の著述と言われる『他筆鈔』・『積学鈔』と比べて、全編にわたる逐語解釈であることが特徴で、初期の証空教学を代表するものとなっている。
なお、西山派においては、証空の師の法然が「自力行門」「仏力観門」「願力念仏」という教相判釈を示したといい（顕意『観経序分義揩定記』巻6）、証空はその口決のままを『自筆鈔』に書き留めた、と伝承している（仁空『浄土希聞鈔』）。
「自筆鈔」の名の通り、証空自身の筆になる原本が往生院（後の三鈷寺）に存在したようで、大谷大蔵本の奥書によると、もとは全51巻の体裁だったようである（これと別に、重複して注釈された自筆冊子の存在も記録されている）。弘安4年（1281）には弟子の円空によって書写持出停止状が出され（三鈷寺文書）、応仁の乱で三鈷寺が被災した際には『他筆鈔』・『積学鈔』と共に「三部御抄」として疎開させる（『善空置文』・『三鈷寺修造勧縁疏』）など、鄭重に扱われてきた。しかし、三条西実隆による書写の記録（『実隆公記』大永3年（1523）記）あたりを最後に、その消息は不明となっている。
各地に現存する写本に完結したものはなく、寛文11年（1671）の板本は未熟な漢文体に再編されたもので、その後の活字本においても良質の本文が提供されているとは言い難い。
作成者名：稲田廣演

積学鈔（観経疏積学鈔、法事讃積学鈔）

書名よみ：しゃくがくしょう
書名別名：積学坊鈔、観門義草案、観門義草書、観門義草創、観経抄
著者名：証空（述）／宇都宮蓮生（筆録）
著者名よみ：しょうくう／うつのみやれんしょう
著者名別名：善恵房、善恵房証空、西山上人、当山上人、小坂、弥天善恵鑑智国師／宇都宮頼綱、実信房
著者生没年：1177（治承1）-1247（宝治1）／1172（承安2）（？）-1259（正元1）
成立翻訳年：鎌倉初期
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本

活字本
写本所在：1、京都誓願寺蔵本（書写年不明、書写者不明、宿紙写本、巻子6巻・軸装2幅）
2、八百津善恵寺蔵本（書写年不明、書写者不明）
3、長岡京三鈷寺蔵本（書写年不明、書写者不明）
4、和歌山総持寺蔵本（書写年不明、書写者不明）
5、長岡京光明寺蔵本（書写年不明、書写者不明）
6、京都禅林寺蔵本（書写年不明、書写者不明、『浄土宗全書』旧版巻8口絵所載）
7、京都盧山寺蔵本（書写年不明、書写者不明）
8、長岡京楊谷寺蔵本（書写年不明、書写者不明）
9、京都十念寺蔵本（書写年不明、書写者不明、沢了旧蔵）
10、岡崎円福寺蔵本（書写年不明、書写者不明、宿紙写本、軸装1幅）
11、西教寺正教蔵蔵本（1654（承応3）-1655（明暦1）、書写者不明、舜興旧蔵、零本8冊・断簡4丁）
12、岡崎崇福寺蔵本（1716-1736（享保年間）智栄書写、尾題「法事讃自筆抄」）
13、岐阜清閑寺蔵本（1822（文政5）義道書写、外題「西山国師観門義草創写」）
14、大谷大瑞蓮寺文庫蔵本（18c、興空書写、外題「法事讃自筆鈔」）
写本奥書：1、（箱書）［■］
2、（箱書）〈西山国師御真筆〉観門義草書
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（箱書）西山証空上人御真筆
（箱書）黒谷長円法印寄進、寛文四年辰（1664）仲春日西林寺住持空覚修復焉為住物也
6、証空上人自筆法語
（箱書）明治三十六年（1903）四月二十四日越前国安泰寺十九世吉水法空寄付、法主範空大僧正御代
7、西山上人法語蓮生上人御筆
8、（未調査）
9、（奥書）洛陽十念寺〈十八世常住翁〉
（箱書）西山上人御手蹟、元禄十二己卯年（1699）十月初二日、十念寺十八世明空沢了
10、（なし）
11、（第1冊）明暦元年（1655）七月吉日、江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵
（第2冊）承応三年〈甲午〉（1654）九月日嵯峨二尊院本ヲ恩借シ書写仕者也、江州栗太郡芦浦観音寺法印舜興蔵
（第3冊）明暦元〈乙未〉年（1655）七月吉日、江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵
（第4冊）明暦元年（1655）七月吉日、江州栗太郡芦浦観音寺舜興蔵
（第5冊）承応三年〈甲午〉（1654）六月日嵯峨二尊院本恩借シ書写仕者也、江州栗太郡芦浦観音寺法印舜興蔵
（第6冊）承応三年〈甲午〉（1654）九月日嵯峨二尊院本ヲ恩借書写仕者也、江州栗太郡芦浦観音寺法印舜興蔵
（第7冊）承応三年〈甲午〉（1654）九月日嵯峨二尊院御本ヲ恩借仕書写者也、江州栗太郡芦浦観音寺法印舜興蔵
（第8冊）承応三年〈甲午〉（1654）九月日嵯峨二尊院御本ヲ恩借シ書写畢、江州栗太郡栗太郡芦浦観音寺舜興蔵
12、(未調査)
13、（袖書）在遣迎院之宝蔵以直筆御原本謄写之
（奥書）京寺町遣迎院之宝物国師直筆以御本写之、一導和尚所持之、時文政五載壬午（1822）閏正月十九日奥海印常光教寺住持尾府竜空義道謹写之
14、（第1巻）濃州方県郡福光郷於称名寺沙門妙覚上人写之、大永二年壬午五月上旬
（第2巻）濃州方県郡福光郷於称名寺写之、沙門妙覚、大永二年壬午五月下旬
刊本所在：1、寛文11（1671、西山短大・竜谷大・大正大・東洋大哲学堂・立正大、『観経要義釈観門義鈔』のうち『法事讃積学鈔』のみ）
2、文化2（1805、大谷大・大正大・竜谷大、『法事讃積学鈔』のみ、寛文板の補刻版）
刊本の奥書刊記：1、慧篤師奥書曰、無念之至極也、法事讃抄無之矣、此積学要義鈔者於嘉歴四載（1329）仲夏二十日大原知恩院、亦嘉吉二稔（1442）孟春十四日大滝山福生寺実相房書写之功畢／住堂曰、事讃鈔断闕而今則無、嗚呼惜哉、故以門弟積学房〈実信上人蓮生法師〉之聞書暫并祖師手書総為巻数、若観門要義有秘而持之学者出函補之而宜報祖師之恩矣、寛文辛亥（1671）秋八月日、北山沙門空覚誌之
2、（前略。寛文板と同文の後、『観門義』全巻の長文刊記あり。『自筆鈔』の項を参照）文化二乙丑孟春補刻、東山禅林寺蔵版、京師書坊長村半兵衛、小林庄兵衛、河南喜兵衛、巽佐右衛門
活字本所載書：『日仏全』56、『西山全書』3・4（1933、『日仏全』と同版）、西山学会古文書研究会「光明寺文書　伝証空筆　抄物」（『西山学会年報』13、2003）
参考文献：森英純「観門義草案　解題」（『西山全書』4、1933）、森英純「観門義草案について」（『西山学報』6、1934）、森英純「再度『観門義草案』について」（『西山学報』11、1936）
解説：善導の著作五部九巻について、証空が最晩年に口述した教義を、門弟の実信房蓮生（1172（？）-1259、宇都宮頼綱）が筆記したもの。もとは全20巻あったというが（大光演冏『楷定記先聞録』巻1）、江戸初期に『法事讃積学鈔』が開板された以外は、『観経疏積学鈔』原本の断簡および不完全な写本が散在するのみである。その断簡には推敲の跡が見られることから、古来、誤って証空自筆の『観門義』（自筆鈔）の断簡と見なされてきた。そのために「観門義草案」の異名があり、『日仏全』や『西山全書』はこの名称を採用している。

証空の他の著述と同じく、『観経疏』の用語に独自の特殊な意味を持たせた解釈がなされ、特に「顕行・示観」や「三重六義」（能請・所請、能説・所説、能為・所為）が多用されている。これによって『観経』の定散二善や念仏の意義を多面的に説いていく。釈迦の教え（自力行門・仏力観門）に導かれて弥陀の弘願である念仏（正因）を領解し、再び実践（正行）へと向かう様を「示観、顕行へ返る」と表現することは特徴的である。逐語解釈の『自筆鈔』、問答体を中心とする『他筆鈔』と比較して、いっそう達意的で円熟した趣がある。

著者名は明記されていないが、本書を実信房の筆記とする文献には、『浄土宗三国伝来血脈譜』や、仁空実導（1309-1388）の『浄土希聞鈔』および『西山上人縁起』などがある。仁空は、本書は『自筆鈔』から『他筆鈔』へと進んだ証空の思想の最後の深化を記録するものであると評価する。また、仁空の師康空示導（1286-1346）がこれら三部の鈔物を独学で研鑽したことを強調し、師示導は証空の直弟に等しいと主張している。その後、本書は康空・仁空の門流（西山派本山義）に受け継がれ、西山派内の他流と一線を画した本山義の典拠となっていった。

『積学鈔』原本が天文8年（1539）まで西山三鈷寺に所蔵されていたことは確実であるが（『三鈷寺修造勧化疏』）、光明寺蔵本によれば、寛文4年（1664）空覚によって断簡に修復が加えられているので、その間に何らかの理由で散佚したようである。

その重要性にも関わらず、いまだ現存する諸本の全貌が翻刻公開されていない本書であるが、森英純が令室菊子とともに半世紀以上にわたって諸本を整理校訂したノート、およびその延書本が未発表遺稿として残されている（物集

女来迎寺蔵)。
作成者名：稲田廣演

釈浄土二蔵義

書名よみ：しゃくじょうどにぞうぎ
書名別名：釈浄土二蔵頌義、頌義、浄土二蔵頌義
著者名：聖冏
著者名よみ：しょうげい
著者名別名：酉蓮社了誉、冏師、聖冏禅師
著者生没年：1341（暦応4）-1420（応永27）
成立翻訳年：14c後半-15c初頭
成立地：日本
巻数：30
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、慶長14（1608、大東急文庫（15冊）・お茶の水図書館成簀堂文庫（10冊）、古活字版）
2、慶長17（1611、竜門文庫（15冊）、古活字版）
3、寛永7版（1630、早稲田大（15冊）・大正大（15冊）・竜谷大（15冊））
4、寛永9版（1632、京都大（6冊）・大正大（8冊））
5、慶安4版（1651、国会5冊・大谷大（15冊）・大正大（15冊）・竜谷大（7冊）・お茶の水図書館成簀文庫（15冊））
6、安政4版（1857、早稲田大（15冊）・大正大（15冊））
7、刊年不明（大谷大（7冊）・早稲田大（7冊）・高野山真別処（8冊））
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、寛永七年（1630）庚午秋之仲書林市右衛門尉梓行
4、（未調査）
5、慶安四年（1651）辛卯稔十一月吉日二条通玉屋町村上平楽寺
6、安政四（1857）丁巳九月重刻東都書林和泉屋新八調進所酉山堂惣兵衛
7、（刊記なし）
活字本所載書：『浄全』12
参考文献：服部英淳『浄土教思想論』（山喜房仏書林、1974）
解説：聖冏がこれに先立って著した『二蔵二教義略頌』の注釈書である。本書は、弟子である聖聡の請いに応じて、『頌義』の百六十六各頌に詳細が注釈を施している。本書は、法然上人を淵源とする浄土宗に代々伝えられてきた法門を時代状況の中で組成化された本格的な浄土教概論であり、近世・近代に至るまで宗内で影響を与え続けた重要書と言える。そこに示されているのは、全仏教の中における浄土門の位置付けである。『略頌』は善導大師の「二教二蔵義」説により、全仏教を声聞蔵・菩薩蔵に大別し、声聞蔵を声聞乗・辟支仏乗・菩薩乗に分け、菩薩蔵に漸頓二教があり、漸教に初分教十地、後分教六位六十一地があるとし、頓教に性頓と相頓とを分別し、相頓教に内因・外縁・往生品位の三門を立て、内因に安心・起行・作業、外縁に総願・別願・五種増上縁、往生品位に三輩・九品を挙げ、それぞれ詳細に図示し、浄土門は菩薩蔵頓教であり、頓中の頓であると結論される。前三十巻のうち、第一巻にある、釈迦・弥陀・十方諸仏と天親・菩提流支の三仏二祖に稽首する理由のうち、天親は、正依の『往生論』の作者であり、流支は浄土伝来相承の祖であるからとし、善導については、『略頌』の結びに善導説によっていることを示してあるとする。その後は、声聞義と菩薩蔵漸教を詳説し、第八巻性頓義の解説では、菩提流支作と伝えられる『麒麟聖財論』を引用して典拠とし、第九、十の両巻では、華厳・天台・真言からの浄土門批判に反論し、聖道門は自力分判教であると名付けている。第十一巻から三十巻までは、浄土門相頓（大乗他力念仏の教え）を詳説している。聖冏の教学は、本書に見られるように菩提流支の説をよりどころとし、また三輩九品についても「浄土の実義に輩品なし」とする教門実義説を立てるため、事相教門を第二儀的に見るかのような印象を与える。それにより、二祖三代の教学と異なるとして批判の対象ともなったが、その浄土教理史上における位置づけは、聖冏の置かれた時代状況と組成の合理性を照らし合わせながら、慎重になされるべきである
作成者名：東海林良昌

釈法忍伝

書名よみ：しゃくほうにんでん
著者名：覚瑜
著者名よみ：かくゆ
著者名別名：覚愉、住心房、出阿、出雲路上人
著者生没年：1158（保元3）-1233（天福1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1、p.352）
解説：本書は現存しない。
　書名からすると「法忍」という名の僧侶の伝記であることが推測される。『長西録』にその題名が挙げられていることからすると、浄土教信仰を有する者であったことが推測される。ただし、どの宗派に属する僧侶であるかは全く不明である。ちなみに覚瑜がかつて住していた三井寺（園城寺）の血脈譜に「法忍」という名は見られない。
作成者名：伊藤瑛梨

拾遺往生伝

書名よみ：しゅういおうじょうでん
書名別名：日本拾遺往生伝
著者名：三善為康
著者名よみ：みよしのためやす
著者生没年：1049（永承4）-1139（保延5）
成立翻訳年：12c前半
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、名古屋真福寺蔵本（1257（正嘉1）、乗忍書写）
2、国立公文書館蔵本（江戸期、書写者不明、『後拾遺往生伝』と合冊）
3、東北大狩野文庫蔵本（江戸期、書写者不明、狩谷棭斎校訂）
4、彰考館文庫蔵本（未調査）
5、東京大史料編纂所蔵本（明治末期、書写者不明）
写本奥書：1、建保七年（1879）正月二十七日夜、於西峯方丈草庵写之了、此全非為名利、則為自他発心、此全不期人天上報、則為往生極楽也、唯望此新生之聖衆達、遙照於愚願、必垂於来迎矣、願以此功徳、臨欲命終時、必預弥陀迎、往生安楽国、砂門慶政記
2、建保七年（1879）正月二十七日夜、於西峯方丈草庵写之了、此全非為名利、則為自他発心、此全不期人天上報、則為往生極楽也、唯望此新生之聖衆達、遙照於愚願、必垂於来迎矣、願以此功徳、臨欲命終時、必預弥陀迎、往生安楽国、砂門慶政記／（略）／正嘉元年（1257）丁巳十一月

四日、於法花山寺書写了、乗忍四十六（未調査）
3、2に同じ（未調査）
4、（上巻奥書）上巻奥有此記、此記者先師往年述自書也、予毎閲此記序文、不覚涙下、其故者、序記云承徳二年（1098）八月四日暁夢、已終生界、将入死路、、有往生浄土之迎、而寿限未尽、向後契期云々、其後四十一年、保延五年（1139）八月四日暁卒、兼知死期、旁到用意、懺法七日既満、淋浴潔衣、身着袈裟、手持念珠、向弥陀尊、正心念仏、乍居気絶、気暖如平生、身体有薫香、決定往生之人也、其手跡往生要文有数、拝閲之処、非無其憑之、算博士三善為康記之／（中巻奥書）本云、以新禅院〈在東大寺〉経蔵本写之、永正八年（1511）三月二十八日、舜清／延宝八年（1680）庚申仲冬、借出南都新薬師寺所蔵之本写之、惜闕其下巻矣、彰考館識（未調査）
5、（表紙裏貼紙、朱書）水戸彰考館別ニ元禄戊寅歳（1698）秋九月穀旦京兆書舗茨城方道蔵版本アリ、亦下巻ヲ逸ス／（上巻奥書）上巻奥有此記、此記者先師往年述自書也、予毎閲此記序文、不覚涙下、其故者、序記云承徳二年（1098）八月四日暁夢、已終生界、将入死路、、有往生浄土之迎、而寿限未尽、向後契期云々、其後四十一年、保延五年（1139）八月四日暁卒、兼知死期、旁到用意、懺法七日既満、淋浴潔衣、身着袈裟、手持念珠、向弥陀尊、正心念仏、乍居気絶、気暖如平生、身体有薫香、決定往生之人也、其手跡往生要文有数、拝閲之処、非無其憑之、算博士三善為康記之／（中巻奥書）本云、以新禅院〈（傍注）東大寺〉経蔵本写之、永正八年（1511）三月二十九日、舜清／〉在延宝八年（1680）庚申仲冬、借出南都新薬師寺所蔵之本写之、惜闕其下巻矣、彰考館識（未調査）
刊本所在：1、元禄11（1698、下巻欠・大正大・竜谷大・東北大狩野文庫（下巻補写）・京都府立総合資料館・石川県立図書館川口文庫蔵本・大東急記念文庫・御茶の水図書館成簀堂文庫（1冊）・陽明文庫（1冊）・旧彰考館）
2、明治14（1881、竜谷大）
3、明治15（1882、大正大）
刊本の奥書刊記：1、元禄戊寅歳（1698）秋九月穀旦、京兆書舗茨城方道蔵版
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『続群書類従』8上、『日本往生全伝』（永田調兵衛、1882）『日仏全』107、『続浄』6、『改訂史籍集覧』19、日本思想大系7『往生伝・法華験記』、国文学資料館編『往生伝集』（「真福寺善本叢刊」2-7、臨川書店、2004）
参考文献：西口順子「往生伝の成立―三善為康の往生伝を中心に―」（『史窓』17・18、1960）、重松明久『日本浄土教成立過程の研究』（平楽寺書店、1964）、宮田尚「拾遺往生伝」（古典遺産の会編『往生伝の研究』、新読書社、1968）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975）、志村有弘『往生伝研究序説』（桜楓社、1976）、山崎誠「算博士三善家と往生伝」（『国文学研究資料館紀要（文学研究篇）』32、2006）
解説：著者は算道、紀伝道学者。越中国射水郡出身で、本姓は射水。十八歳の時に算道博士三善為長の門に入って、後に養子となり、堀川天皇の時に算道博士となる。紀伝道にも関心を示し、著書に『朝野群載』『世俗往生釈疑』『金剛般若験記』などがある。
　本書は『日本往生極楽記』、『続本朝往生伝』といった先行の往生伝の遺漏を拾い、新たな往生人の伝を追加したもの。熱心な仏教信者であり、康和1年（1099）に著者が天王寺に参籠した際に奇瑞を得、結縁と勧進のため撰述したという。成立年代は明かではないが、下巻最終の天永2年（1111）没大和国阿弥陀房の伝が最も新しいので、それ以降となろう。上巻30人、中巻34人、下巻31人の計95人で、出家者が68人、在俗者が27人。当初一巻のみの予定であったが、新しい資料の入手により二巻が順次追加され、上中下の三巻となったため、各巻ごとに配列法が異なり、上巻は僧のみで年代順、中巻は僧、俗男、尼、俗女の順、下巻は採取順となっている。往生の行業は多様であるが、依拠資料に『大日本国法華験記』があったらしく21話が重なっており、法華経の修学が多い。
作成者名：坪井直子

拾遺黒谷上人語灯録〔漢語〕（拾遺漢語灯録）

書名よみ：しゅういくろだにしょうにんごとうろく［かんご］（しゅういかんごとうろく）
書名別名：拾遺語灯録
著者名：法然（著）／道光（編）
著者名よみ：ほうねん／どうこう
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師／了恵、望西楼、蓮華堂、広済和尚
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）／1243（寛元1）-1330（元徳2）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、滋賀水口図書館蔵本（1702（元禄15）、興誉恩哲書写、1巻）
〈影印版〉:梶村昇・曽田俊弘「新出『大徳寺本 拾遺漢語灯録』について」（『浄土宗学研究』22、1996）
写本奥書：1、右此一冊、雖令写本之章段文字乱脱、聊加了簡奉書写者也、後輩感得正本者必糺之、維時元禄十五壬午（1702）十二月上旬、六十歳、興誉恩哲書之、南無阿弥陀仏
活字本所載書：『浄全』9、『国訳大蔵経』宗典部3、『真聖全』4、『大正蔵』83（No.2612）、『縮蔵』霜7、『浄土宗学研究』22（1996）
参考文献：梶村昇・曽田俊弘「新出『大徳寺本 拾遺漢語灯録』について」（『浄土宗学研究』22、1996）、梶村昇『法然の言葉だった「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや」』（大東出版社、1999）、曽田俊弘「『拾遺漢語灯録』と醍醐本『法然上人伝記』の関連性―大徳寺本『拾遺漢語灯録』の研究―」（『仏教文化研究』45、2001）、中野正明「大徳寺本『拾遺漢語灯録』について」（仏教大学総合研究所紀要別冊『法然浄土教の総合的研究』、2002）
解説：良忠の弟子道光の編纂した法然の遺文集『拾遺黒谷上人語灯録』全三巻の巻上で、拾遺漢語灯録と略称される。
　原本は見当たらず、永年、義山が校訂し正徳5年（1715）に開版された版本によってしか見ることができなかったが、平成7年（1995）、正徳版開版以前の元禄15年（1702）に安土浄厳院14世興誉恩哲（1643-1713）によって書写された写本が滋賀県甲賀郡（現甲賀市）水口町立水口図書館（現甲賀市水口図書館）で発見され、それが以前大徳寺（甲賀市水口町本町）の什物であったことから、大徳寺本『拾遺漢語灯録』と命名された。大徳寺本を正徳版と比べると、正徳版が原文に夥しい改変を加えているテキストであることがわかる。
　大徳寺本には、「三昧発得記　付夢記」、勢観房源智記「浄土宗見聞　付臨終記（臨終日記）」、「御教書御請」が収録されている。
　なお『拾遺漢語灯録』は、従来法然遺教の第一結集と称されてきた醍醐本『法然上人伝記』と内容が近似している

ことから、両書の関連性についての議論がなされているが、その点については、参考文献の梶村著書、曽田論文を見よ。
作成者名：曽田俊弘

十願発心記

書名よみ：じゅうがんほっしんき
書名別名：十大願記
著者名：千観
著者名よみ：せんかん
著者生没年：918（延喜18）-982（天元5）
成立翻訳年：962（応和2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、滋賀西教寺正教蔵本（1657（明暦3）、舜興写）
2、叡山文庫本（江戸末期、書写者不明）
写本奥書：1、于時応和二歳仲春略述其意貽之後輩。日本国天台沙門釈千観於摂津州箕面山観音院記之。
2、于旹応和二年仲春略述其意貽之後輩。日本国天台沙門釈千観於摂州箕面山観音院記之。
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、梯信暁『奈良・平安期浄土教展開論』（法藏館、2008）
解説：千観の著。962年（応和2）、摂津箕面の観音院において著された。千観は、園城寺の学僧で、内供奉十禅師の職にあったが、空也の導きによって隠遁し、摂津箕面や高槻に住した。自ら「十願」を発し、それを衆生教化にも用いたという。「十願」とは、往生極楽の願いに始まり、上求菩提・下化衆生の誓願が盛り込まれた、千観自身の菩提心と言えるものである。その「十願」を随文解釈の形で註釈したのが『十願発心記』である。特徴として、在家信者に対して発心を勧めていることが挙げられる。千観が教化の対象としたのは、上流貴族から近隣の庶民に至るまで、幅広い衆生であった。在家信者が菩提心を発すのは至難の業であろうが、たとえ今生での成就はかなわないとしても、今発心しておくことが重要であると説いている。中でも第1願の釈に最も多くの紙面を費やしている。一切衆生とともに往生極楽を願うという第1願は、千観自身が目指した仏道の基盤であるとともに、衆生教化の指針だったのであろう。第1願釈では、臨終から往生に至る過程が詳細に示されているが、そこでも発心の意義を明確にすることに主眼が置かれている。発心することによって、臨終の時、身心安楽の状態が得られる。それによって念仏の実践が可能となり、聖聚来迎にあずかり、往生してゆくことができると言うのである。当時の貴族たちが最も深い興味を寄せていた、臨終来迎信仰の教理を組織するにあたり、発心の重要性を強調したのである。
作成者名：梯信暁

重書裏書

書名よみ：じゅうしょうらがき
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：13c後半-14c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。
作成者名：伊藤茂樹

十誓願

書名よみ：じゅうせいがん
書名別名：十誓讃
著者名：覚瑜
著者名よみ：かくゆ
著者名別名：覚愉、住心房、出阿、出雲路上人
著者生没年：1158（保元3）-1233（天福1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『浄土伝灯録総系譜』下（『浄全』19、p.124）、『長西録』（『日仏全』1、p.352）
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1989）、戸松憲千代「十願発心記に見られる千観内供の浄土教」（『大谷学報』74、1939）、佐藤哲英「千観内供の研究」（『宗学院論輯』30、1976）
解説：本書は現存しない。
　ただし書名から推測すると、覚瑜が三井寺（園城寺）を出て浄土門に帰入した折に、10の誓願をたて、それを書籍にした可能性も考えられる。
　ちなみに同じく三井寺出身の天台学僧である千観（918-983、一説には919-984）には、西方願生者として自身が誓った十大願について述べた『十願発心記』がある。しかも覚瑜が天台教学を学んだとされる三井寺の教月房良慶（1107-1191）は『安養抄』において『十願発心記』の内容を引用している。このことから覚瑜が『十願発心記』を目にし、本書を著す際に参照していた可能性も考えられよう。
作成者名：伊藤瑛梨

十大願

書名よみ：じゅうだいがん
著者名：源信（？）
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：10c後半（？）-11c初頭（？）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、叡山文庫蔵本（1619（元和5）、養典書写、『真如観』『空観』『臨終十念縁起』と合綴）
写本奥書：1、恵心御作是也、後輩可仰信云々／本云、文明十四年（1482）六月四日西塔於藤本房北窓令書写、筆者九［■］肥後八代高田最明院末弟少将真恵比丘、助給南無仏／其次写［■］、又若身養典比丘法界利益南無妙法経（『真如観』奥書）右此文雖広多存略抜書、為後輩領納得脱、右書写畢、筆者九［■］肥後八代庄高田最明院真恵比丘、可預令誰、助玉へ南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏／書写養典比丘判
（『空観』奥書）本云、文明十四年（1482）五月二十九日辰尅於西塔北谷藤本坊書之、真恵比丘判、南無阿弥陀仏／筆者沙門養典判
（『臨終十念縁起』奥書）元和五年（1619）六月二十一日令書写畢
活字本所載書：『恵全』5、『日仏全』33、
解説：著者は不明。叡山文庫蔵本の末に「恵心御作是也、

後輩可仰信云々」（『恵全』5、p.505）と記されているが、諸目録には源信の著述として立項しているものはない。

成立年代は不明。叡山文庫本奥書には真恵が文明14年（1482）に書写した旨が記されており、これが成立年代の下限となる。

内容は、(1) 令発菩提心、(2) 令離其（三悪道）重苦、(3) 一切罪一時消除令大菩提心必堅固、(4) 三界六道一切苦難相救、(5) 臨命終之時七日已前自知死期心不顛倒、(6) 生々世々常値遇善知識在々処々必聴聞此経、(7) 結縁同心之輩同慈氏如来下生成仏之月決定値遇、(8) 未来若有離生死者必五濁熾盛国出、(9) 生々世々父母師長七世四恩法界早令離生死苦界、(10) 怨念毀謗之徒三有情悉霑平等一味法雨、の十願で構成され、序・跋等は付されない。これらの願は「此経文字放……」（第1・2願）、「依此経力……」（第3-10願）と、いずれも「此経」の力で前述の十項を願うものである。「此経」が何れの経を指すかは不明であるが、第6願の「必聴聞此経深悟解一乗」の記述からすれば『法華経』、もしくは『法華経』を含む複数の経典か。また「此経」という表現から、この願文が、その経典と近接した場で読まれたものであることが推測される。

なお佐藤哲英は千観（918-983）の『十願発心記』にみられる十願と比較して、「両書間に密接な関係があった」（『日仏全』97、p.335）と推測しており、また「兵庫県極楽寺瓦経願文銘＜天養元年（1144）六月二十九日＞」（『平安遺文』金石文編、p.272）には「有衆生、無一実菩提心者、発大菩提心光、照触其身、令発菩提心」「若有衆生沈三悪道苦患者放大慈悲之光照火血刀之身令離其重苦」「始自今生至于来世生生世世暫無相離在在処処必施利益若依悪業堕於地獄縦入猛火放清涼光而消猛焔縦堕寒氷放温和光而救寒苦（中略）三界六道一切衆苦願共相救」と第1、2、4願と同様の表現が見られる。

作成者名：上杉智英

十楽講作法

書名よみ：じゅうらくこうさほう
著者名：源信（？）
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：10c後半（？）-11c初頭（？）
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1、p.349）、『蓮門録』（『日仏全』1、p.417）、『玄智録』（『日仏全』1、p.464）
参考文献：宝田正道『日本仏教文化史』（弘文堂、1967）、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）、藤井智海『往生要集の文化史的研究』（平楽寺書店、1979）、多屋頼俊『和讃史概説』（「多屋頼俊著作集」1、法蔵館、1992）、章輝玉・石田瑞麿『新羅の浄土教・空也・良源・源信・良忍』（「浄土仏教の思想」6、講談社、1992）
解説：本書は現存しないが、書名が『長西録』（『日仏全』1、p.349）に見られることから源信に『十楽講作法』の著述があったことが知られる。

成立年代は『往生要集』成立（寛和1年（985））以降と考えられるが、源信に仮託されたものである可能性もあり断定はできない。

内容は不明。『十楽講作法』という書名から推測すれば、「十楽講」という講会の作法・次第であると考えられる。ただし「十楽講」に関しては不明。建長4年（1252）成立の『十訓抄』にみられる「十楽を講讃する法会」が相当するか。

『恵全』1（p.641）には源信の著述として『十楽和讃』が収録されているが『十楽講作法』との関係は不明。ただ『十楽和讃』は平安末期に成立していたことが『中右記』大治2年（1127）5月12日の条（「天晴、今朝院懺法結願了、三院御幸鳥羽事俄延引、今日十楽讃給道心尼了」）から伺える（ただし現存『十楽和讃』（『恵全』所収）と同内容か否かは不明）。なお源信の作法書としては永延2年（988）の奥書を有する『普賢講作法』が『恵全』5（p.519）に所収されている。

作成者名：上杉智英

十楽和讃

書名よみ：じゅうらくわさん
著者名：源信/蓮心房
著者名よみ：げんしん／れんしんぼう
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公/正定房
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）/不明
成立翻訳年：平安末期（？）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、伊勢引接寺称名庵蔵本（1926（大正15）、称念院阿法暢和南書写、『六時和讃』『伝教大師和讃』と合冊）
写本奥書：1、右十楽和讃伝教大師和讃、恵心僧都の御作として法道和尚の手記中にあり、茲に浄写して称名庵経蔵におさむ、大正15（1926）年11月24日、引接寺現住称念院阿法暢和南
活字本所載書：『恵全』1、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）
現代語訳書：八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）
参考文献：宝田正道『日本仏教文化史』（弘文堂、1967）、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）、藤井智海『往生要集の文化史的研究』（平楽寺書店、1979）、多屋頼俊『和讃史概説』（「多屋頼俊著作集」1、法蔵館、1992）、章輝玉・石田瑞麿『新羅の浄土教・空也・良源・源信・良忍』（「浄土仏教の思想」6、講談社、1992）
解説：著者は不明。

伊勢の引接寺称名庵蔵本（『六時和讃』『伝教大師和讃』と合冊）の巻末奥書「右十楽和讃伝教大師和讃、恵心僧都の御作として法道和尚の手記中にあり、茲に浄写して称名庵経蔵におさむ、大正15年（1926）11月24日、引接寺現住称念院阿法暢和南」により『恵全』1に所載されている。ただし「法道和尚」は江戸時代中期の僧であり、その手記の信憑性が問われる。多屋頼俊は、源信作『極楽六時讃』の流麗典雅な筆致に遠く及ばない、文詞が『往生要集』と余りに緊密である、「聖衆来迎楽」と関係ない『往生要集』の文を訳出している、等の点から源信の作ではないと推測されている。

なお『長西録』には「十楽和讃一巻　蓮心房＜正定房＞」「十楽講作法一巻　同（源信）」の記述がある。「蓮心房＜正定房＞」については未詳。

成立年代は不明。多屋頼俊は、親鸞作『浄土和讃』と合致する部分があること、「第二蓮華初開楽」の一節が卑俗な調子であること、を指摘して、室町時代以降、江戸時代初期の成立と推測している。

これに対し宝田正道は、『浄土和讃』と合致する部分は

親鸞以降の附加と考えられること、一遍以前に成立していたとされる「無常讃」（『浄業和讃』所収）と合致する部分があること、近世調の拙劣な部分は『往生要集』を原拠としておらず、語調・形式的にも異なることから後世の増補と考えられること、等の理由から現存『十楽和讃』（『恵全』所載）の原形は鎌倉初期には成立していたのではないか、と反論している。

なお『中右記』大治2年（1127）5月12日の条には「天晴、今朝院懺法結願了、三院御幸鳥羽事俄延引、今日十楽讃給道心尼了」の記述が見られ、平安時代末期に『十楽和讃』が流布していたことが伺える。ただしこれが現存『十楽和讃』（『恵全』所載）と同内容か否かは不明。

作成者名：上杉智英

十六相観詩

書名よみ：じゅうろくそうかんし
著者名：空然
著者名よみ：くうねん
著者生没年：平安期
成立翻訳年：平安期
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1、p.351）
解説：本書は現存が確認されておらず、内容は不明。『国書総目録』4（p.293）、『仏解』5（p.210）では書名を『十六想観詩』とする。
作成者名：上杉智英

十六相観私記

書名よみ：じゅうろくそうかんしき
著者名：済暹
著者名よみ：さいせん
著者名別名：1025（万寿2）-1115（永久3）
著者生没年：1025（万寿2）-1115（永久3）
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『諸宗章疏録』（『日仏全』1）
参考文献：櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の済暹については『観無量寿経中略要問答抄』の項を参照。
作成者名：能島覚

十六問答記

書名よみ：じゅうろくもんどうき
書名別名：真恵上人御問答、真恵問答、御問答
著者名：真恵
著者名よみ：しんえ、しんね
著者生没年：1434（永享6）-1512（永正9）
成立翻訳年：1494（明応3）
成立地：日本
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、愛知満性寺蔵本（1494（明応3）、真恵真筆本）2、茨城光了寺蔵本（江戸中期、未調査）
写本奥書：1、明応三年癸寅（1494）二月二十八日2、（未調査）
刊本所在：1、宝永7-宝暦3頃（1710-1753頃、大谷大、『永正御規則』と題して『真恵上人御定』と合冊）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
活字本所載書：『真宗史料集成』4、『高田学報』49（1961）
参考文献：生桑完明「真恵上人の撰述及書写」（『高田学報』16、1937）、生桑完明「真恵上人の御書について」（『高田学報』59、1968）平松令三「高田専修寺真恵と本願寺蓮如」（『中世仏教と真宗』「北西弘先生還暦記念」、吉川弘文館、1985）、神田千里『一向一揆と真宗信仰』（吉川弘文館、1991）、普賢保之「『十六問答記』の性格」（『蓮如上人研究　教義篇I』、永田文昌堂、1998）、金信昌樹「真恵の著述とその伝記類の研究」（『高田短期大学紀要』19、2001）、山田雅教「中世後期における高田門徒と本願寺門徒（その二）－真恵『十六問答記』を中心に－」（『高田短期大学紀要』21、2003）
解説：本書は真慧晩年の著作で、本文末に「此条条義、雖不及返答、愚鈍之族思煩候間、就其尋、如形所注也」とあるように門弟間で疑問になっているもの16個を取り上げ返答したもの。

16問答は大きく、教義に関するものと仏事勤行についてのものにわけることができる。

教義に関するものには、阿弥陀仏が十劫の昔に正覚を開いたことを知ることが往生の体であるかとの問いに、浄土門のこころは、仮に十劫正覚のいわれを知らなくても、本願を信じ念仏すれば往生すると返答しているものや、至心信楽の信は衆生にはないとする見解に対し、本願をたのむ信心は衆生にあるけれども、その信は如来回向のものであり、功を本に譲って他力の信というのであると返答するもの、また『観経』所説の「即便往生」の教説は彰隠密の立場からは平生業成の証となるとするもの、念仏して亡者を弔うのは自力ではないとするものなどが展開されている。

また仏事勤行については、法名は使用しないとする見解に対し、真宗においては親鸞以来法名を使用しているが、法名さえあれば往生決定するのではなく、大切なのは信心決定であって、その上に法名を用いることを述べている。また親鸞流派には弥陀三尊像を依用してはならないとの主張に対しては、親鸞以来、高田派では阿弥陀三尊像を依用していることを述べ、また当流では盆や彼岸の仏事を勤めないとするものに、それは覚如著『改邪鈔』の誤読であり、『改邪鈔』の所説は信心決定の時節を盆や彼岸に限定してはならないということであって、それら仏事を行わないということではないと述べている。また葬送の儀式についても、他宗のようにまですべきではないが、天蓋までは使用することを規定している。

また譜法血脈はいらないとする見解に対しては、仏法において譜法血脈は聖道門・浄土門共に大事なことであり、たとえ親子であっても譜法がなければ意味はないとし、当時仏法の血脈よりも親子等の血筋を重視する時代思潮に対し批判的であると推論される。この血脈と血筋の問題に関しては神田千里を参照。

従来、本願寺蓮如及びその門弟に対する批判書とする見解があったが、普賢保之は、当時の真慧の活動状況などから、教団内部に向けて書かれたものとしている。

作成者名：藤田真隆

修行念仏三昧七日道場明懺悔法

書名よみ：しゅぎょうねんぶつさんまいなのかどうじょうみょうさんげほう
書名別名：西方懺悔法、西方懺法
著者名：円仁（？）
著者名よみ：えんにん

著者名別名：慈覚大師
著者生没年：794（延暦13）-864（貞観6）
成立翻訳年：10c末
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、青蓮院蔵本（1061（永承6）、書写者不明、巻子本）
写本奥書：1、永承六季（1061）八月十五日書写了、円融房蔵本
活字本所載書：佐藤哲英『西方懺悔法－本文並に解説－』（竜谷大学一乗文化研究会編、1949）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
参考文献：佐藤哲英「西方懺悔法に関する研究」（『竜谷大学論集』338、1950）、佐藤哲英『西方懺悔法－本文並に解説－』（竜谷大学一乗文化研究会編、1949）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、浅田正博「西方懺悔法」解説（『叡山浄土教の研究』百華苑、1979）
解説：円仁撰の懺法が存在することは『長西録』の「修行念仏三昧七日道場懺悔方法一巻十三丁　慈覚」という記事によって知られていたが、散逸したものと考えられていた。ところが昭和11年（1936）、佐藤哲英氏等が青蓮院の経蔵から本書を発見し、以後、世に知られることとなった。

本書は阿弥陀仏を本尊とし、自身の懺悔を目的として行われる一期七日間の唯坐唯立の念仏三昧の方軌を説き示す書物である。作者は、浄土の教えに未だ懺悔請仏の方軌がないことを憂れいて、天台大師の諸懺文を規範として本書を作成したと明かしている。その組織は本書の基となった天台大師撰『法華三昧懺儀』の項目と比較対照した結果、8段に分かれることが指摘されている。1.行法前方便、2.行者初入道場三業供養法、3.請三宝方法、4.讃嘆三宝方法、5.礼仏方法、6.懺悔・勧請・随喜・廻向・発願、7.正観方法、8.初夜懺悔方法となる。これらの中でも特に第7の「正観方法」がまぎれもなく本書の中心である。そこには『観経』・『阿弥陀経』・『観仏三昧経』・『十住毘婆沙論』を幾度も引用しながら、称名と観念の双修を継続することによって口と心に阿弥陀仏を念ずることを説き、更に仏の瑞相である32相をも観想するように勧めている。しかし、必ずしも32相の観想ばかりを勧めるのではなく、不堪の者に対しては白毫観も説き、その観想により重罪が消滅することを明かしている。その一方、上根の者には如来の法身観、並びに実相観をも勧めているが、そのような高等な行法は時節に適わないとして消極的に捉え、「行者、但於七日之中、口常唱阿弥陀仏名、心常念阿弥陀仏身相光明」と本書の念仏三昧の特色を明かしている。

さて、本書の分析を行った佐藤氏は、本書について善導『観念法門』・『往生礼讃』からの多大な影響を指摘し、叡山浄土教展開史から見ても『往生要集』と比肩するほどの画期的なものと評価している。舜昌『述懐鈔』によると、慈円が建仁1年（1201）に西方懺法を行うに際して、建久8年（1197）に円仁自筆の「西方懺法」を写し、自行の修行方軌としたという。それを本書に比定できるだろう。また本書の作者と成立に関して、慈円や長西の頃には円仁撰という伝承が流布していたようだが、本書の内容のみならず、現況の叡山浄土教の研究からしてもそれを裏付けるものはない。したがって、現行では作者未詳と考えるのが適当であろう。また、その成立に関しても、『往生要集』との間に相互の影響関係が認められない点より、『往生要集』と同時期、もしくは若干、遡る頃ではないかと推測されている。
作成者名：能島覚

守護国家論

書名よみ：しゅごこっかろん
著者名：日蓮
著者名よみ：にちれん
著者名別名：是聖房、蓮長、立正大師
著者生没年：1222（貞応1年）-1282（弘安5）
成立翻訳年：1259（正元1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、千葉県松戸市平賀本土寺所蔵「録内遺文」(「平賀本」)
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、東京大（『御書録内』の内）
2、名古屋大（『御書録内』の内）
3、東北大（『御書録内』の内）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（刊記なし）
活字本所載書：加藤文雄編『日蓮上人御遺文』（1962）、立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮上人遺文』（身延山久遠寺、1952）、小松邦彰編『日蓮上人全集』（春秋社、1992）、『浄全』8（山喜房仏書林、1990）、戸頃重基・高木豊校注日本思想大系14『日蓮』（1970）
現代語訳書：田村芳朗編『日本の仏教思想　日蓮』（筑摩書房、1986(初版日本の思想4『日蓮』1969)、渡辺宝陽・小松邦彰訳『日蓮聖人全集』（春秋社、1992）
参考文献：石指浩紘「日蓮聖人遺文における『守護国家論』の位置」（『日蓮教学研究所紀要』9、1982）、冠賢一「小浜長源寺蔵『守護国家論』の古写本について（『日蓮教学研究所紀要』11、1984）
解説：日蓮は12歳で天台宗清澄寺に登り、16歳で出家、1238（嘉禎4）頃より鎌倉に遊学し、21歳の時比叡山にて俊範に指事。32歳で比叡山より清澄寺に帰り日蓮と名乗る。この頃から「正法である『法華経』に帰せよ」と伝道を始め、他宗の信奉者から迫害を受けることとなる。また為政者に対しても数度にわたって陳状を提した。度々流刑に処され、1282（弘安5）61歳で武蔵の国にて寂。

本書は、『選択集』における謗法の根元として、1時機相応不相応の義によって道俗を迷わす失、2曇鸞・道綽・善導・源信等の浄土先師に違背する失、3法華真言の行者を群賊等に譬える失、4法華信仰者に疑惑を生ぜしめる失、5実教を捨て権教に移らしめる失、を挙げる。綿密な経論引証による浄土教批判と日蓮なりの救済の論理が提示されている。なお真跡はかつて身延山久遠寺に在ったが、1875（明治8）の大火によって焼失した。焼失以前の久遠寺旧蔵の日蓮真跡等の書誌については『身延山久遠寺御霊宝記録』（寂照院日乾、1603（慶長8））を参照。
作成者名：米沢実江子

修善講式

書名よみ：しゅぜんこうしき
著者名：覚超
著者名よみ：かくちょう
著者名別名：都率僧都、兜率僧都、都率先徳、兜率先徳、楞厳院先徳
著者生没年：960（天徳4）-1034（長元7）
成立翻訳年：989（永延3）

成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：活字本
写本
写本所在：1、池辺弘氏蔵本（989（永延3）、覚超真筆本、首欠）
2、池辺弘氏蔵本（鎌倉期、書写者不明）
3、大原勝林院蔵本（未調査、魚山叢書93）
4、坂本明徳院無動寺蔵本（1830（文政13）、真超書写）
写本奥書：1、永延三（989）〈正暦二（991）〉年十一〈九〉月八〈九〉日、願主当郷近江権大椽池辺兄雄第二男延暦寺僧覚［■］〈超〉
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：赤松俊秀『続鎌倉仏教の研究』（平楽寺書店、1966）、『和泉市史』（和泉市史編纂委員会、1965-1968）
参考文献：赤松俊秀『続鎌倉仏教の研究』（平楽寺書店、1966）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、池辺義教「都率先徳、覚超の行実－源信と覚超－」（「『大谷女子短期大学紀要』38、1994）、同「都率先徳、覚超の行実－源信と覚超－（承前）」（『大谷女子短期大学紀要』39、1995）
解説：本書は講式としては、初期のものに属する。奥書によれば、989（永延3）年と991（正暦2）年に覚超が願主となり発起した修善講の講式であることがわかる。本文は主として、表白・三宝勧請・諸仏諸菩薩の勧請・懺悔・回向により構成される。本書を作成する目的は表白に説かれる。まず、釈迦、弥陀、弥勒をはじめとした諸仏、諸菩薩への帰依を述べ、覚超自身の郡内の大衆の勧めによって、過去、現在の父母、先祖、近親、ならびに郷内の有縁、無縁の存亡の者を数え、それらの為に印仏を刷り、また彼輩及び自身、並びに法界衆生の平等の利益の為に仏像を画き、写経をして、卒塔婆を立て、そのもとには、印仏、書写した経典、郷内の存亡の人々の名帳を埋納し、その地を毎年、当講を行う為の霊厳の仏地とする旨を述べている。そして、この修善講が現在の存命する郷内の人々の現世利益、往生極楽を決定し、円満させる意義のあることを主唱する。本書の特徴としては、帰依の対象を弥陀三尊に限らず、釈迦如来と普賢・文殊菩薩、更に弥勒菩薩と地蔵・虚空蔵菩薩とし、また『阿弥陀経』の他に『妙法蓮花経』、『金光明経』の功徳を称讃し、回向文では「国内神・一切神」というように神祇への回向を定めている点が挙げられる。また二十五三昧根本結衆の一人である覚超によって発願された講式である点と、本書と『横川首楞厳院二十五三昧起請』との成立時期が接近することにより、二十五三昧会との関連が指摘されている。なお、本書は摂関期の高僧の自筆聖教が現存する数少ない一例でもある。
作成者名：能島覚

述誠

書名よみ：じゅつじょう
書名別名：述成
著者名：証空（述）／宇都宮蓮生（筆録）
著者名よみ：しょうくう／うつのみやれんしょう
著者名別名：善恵房、善恵房証空、西山上人、当山上人、小坂、弥天善恵鑑智国師／宇都宮頼綱、実信房
著者生没年：1177（治承1）-1247（宝治1）／1172（承安2）（？）-1259（正元1）
成立翻訳年：鎌倉初期
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、愛知岡崎真浄院蔵本（1502（文亀2）、永感書写）
2、滋賀守山善立寺蔵本（1696（元禄9）、行感書写、恵空所持本、『安心決定鈔』と合冊）
3、大谷大蔵A本（江戸期、書写者不明、林山文庫・宗大9875）
4、大谷大蔵B本（江戸期、書写者不明、宗大5341、後欠）
5、大谷大蔵C本（江戸期、書写者不明、宗大6258）
6、大谷大蔵D本（江戸期、書写者不明、林山文庫、宗大9874）
7、兵庫生瀬浄橋寺蔵本（1808（文化5）、義道書写）
8、愛知三河一色満国寺蔵本（1839（天保10）、音空書写）
9、大谷大蔵E本（1908（明治41）、宗教大学図書館書写、原本は住田智見氏蔵本、宗大1133）
10、大谷大蔵F本（1942（昭和17）、上杉慧学書写）
11、竜谷大蔵本（書写年不明、杉紫朗書写）
写本奥書：1、本云、抑此述誠西山流義秘事也、又覚（学？）文ストモ肝用ハ不可過此物也、敢テ容易不可及他見、故ニ述誠ト云名ヲモ秘シテアカサス青ヘウシト申シ伝也、又此ノ書ヲ奉拝事掃小縁町御神明ニ参るテ七日起請スル間タ得タリ、于時文安四年閏二月二日甲子日ヒカンノ入日也云云于時文亀二年〈壬戌〉（1502）三月下旬日於大林寺書之、筆主永感（4字見せ消ち）、此ノ写本依為悪本不審ノ処多之、能々可止心也、［　］観（花押）（3字見せ消ち）
2、本云、此抄者更不可及他見者也、甚深微妙之法門可秘々々、妙椿示慶春在判／右一冊恕三学道和尚ノ所持ノ本ヲ以テ写之、恕三公常ニ語テ云、安心決定抄ハ我家ノ抄物也ト、恕三ハ西山ノ西谷流ノ名老也（傍注「後ニ元禄十三年禅林寺ノ住持トナレリ」）、又云慶春トハ二尊院ノ一代也ト云々、後日ニカノ二尊隠居此事ヲ尋ヌ、然ニ二尊院ニ慶春ト云人ナシト云々、重テ可決、本主恵空子、右安心決定抄并述成文字不審多之、又落字落行雖有之本之侭令写之畢、執筆釈行感、維時元禄九丙子年（1696）臘月五日写校遂功者也
3、本曰、実信房無二門弟写瓶器故随問許答述成畢／本云、相承法語他力実義也、於不器人不可有許見者也、西山述誠終／朱紫相混玉石叵弁者今古痛恨矣、吾宗先進漫看過此書而疑決疑鈔亦西山上人所撰乎者為不尠、嗚呼不知宗脈之甚可何至于此耶、夫決疑鈔吾宗第三祖宗昭和上恐述誠似而不真脅徒眩惑十襲珍蔵焉、所以是正也已、不肖請求此書久矣、今茲得尾州雲観寺蔵本写之、次粗加朱点云、明和丁亥（1767）春円照寺釈法慧謹誌
4、（3とほぼ同文）
5、（3とほぼ同文）
6、（3とほぼ同文）
7、右西山二十箇条者一流之為秘事所之書也、予或借知僧謹奉書焉畢、然臼本微悉雖書焉猶錯多、或点或字或文章等至其義有不分明、雖然私其点改有恐、唯々傍予為意覚印置、然雖未其義尽其余者予不能知見、無是非是指置、唯々願後見僧能々窺其義当経釈可其誤正、而後可知意味深長也、蓋惣一流支秘書必未相伝僧不可許披見、猶授法相染而後可許披見、必厳密可行者也已上、西山流本山報国山光明寺学林於南寮末葉照空顕義謹書畢、文化五戊辰歳（1808）九月念七日写之畢
8、本云、此鈔者更不可及他見者也、甚深微妙之法門可秘云云、不思議解脱経云、阿字十方三世仏、弥字一切諸菩薩、陀字八万諸聖教、三字之中皆具足矣／（以下、『善恵上人之法語（漢文体鎮完勧用心）』・『決定往生秘密義（伝法然作）』・『女院御抄』等を収録）／秘要蔵五巻者亮範大和尚壮年之昔所集也、一家密書［■］無不尽矣、案是浄土秘要

之蔵也、予遊学于広谷門下雖不及見親筆之本而幸借得学友覚道師所転写之本従季夏晦日至孟秋晦日忽々馳禿筆竟、天保第十乙亥年（1839）七月三十日、灰方村草堂寓居桑門釈音空謹記
9、（未調査）
10、以上七紙、和州小松市日末町上宮文庫所蔵ノ西山家ヨリ出シ古写本ニ依リ写取ス、大谷文庫所蔵ノ述成ト名タル一本ニハ此文ノ第四紙左ノ四月四日御文ノ文前ニ更ニ約三紙ホドノ文アリト云フ、果シテ今此ノ写本ガ脱落セシモノカソノ点ハ不明ナリトス、昭和十七年（1942）七月二十七日七尾大津邑ニ誌ス、上宮文庫読書楼主人上杉慧岳識
11、（未調査）
活字本所載書：森英純編『西山上人短篇鈔物集』（1980、西山短期大学）、田中宗龍「『述誠』の諸本とその系統―真浄院蔵文亀二年写本を中心として―」（『西山学会年報』10、2000）、安井信雅『述誠』本文・現代語訳・大意・注（西山浄土宗東部第一宗務支所、2005）
現代語訳書：安井信雅『述誠』本文・現代語訳・大意・注（西山浄土宗東部第一宗務支所、2005）
参考文献：田中宗龍「『述誠』の諸本とその系統―真浄院蔵文亀二年写本を中心として―」（『西山学会年報』10、2000）、安井信雅『述誠』本文・現代語訳・大意・注（西山浄土宗東部第一宗務支所、2005）
解説：西山派祖証空に対して、門弟の実信房蓮生（1172（？）-1259、宇都宮頼綱）が自らの教義理解を述べ、その返答を筆記したもので、全部で9つの問答からなる。ただし5番目のみ、証空の書状をそのまま収録したものである。

冒頭、証空が『観経序分義』証信序を講義し終えたところで、実信房が「南無」＝帰命のこころえ方について尋ねると、証空は亡き師法然からの口伝を語り始める。帰命には観仏（聖道門）と念仏（浄土門）の二つの捉え方があり、観仏の帰命は、衆生が能動的に起こすものであるが、念仏の帰命は、阿弥陀仏の側から、衆生（南無）の往生を自らの覚りの条件として取り込み「南無阿弥陀仏」となる。この道理を心得ることこそ、すなわち往生であり、この安心を得たならば、各自の能力に応じて観仏の帰命を努力すべきであると説く。

以下の問答では、これを「真実他力」と呼び、さらに詳論していく。これは、後の西山教義の原点といえる考え方である。証空は、20余年に及ぶ門弟生活のうち、20年後に授かった口伝であるといい、建久1年（1190）の入門から20年後の承元4年（1210）法然が摂津国勝尾寺にいた時期を示唆する。本書の口述も、法然没後それほど時を経ない頃であろう。

本書の原本は現存しないが、おそらく実信房の備忘録であったと思われる。真浄院蔵本などは5番目の書状本文を欠いているが、他の諸本では、書状を収録し、末尾に『三縁事』よりの抜粋を付加している一群がある。しかし、諸本の特徴は錯綜しており、系統の整理には困難が伴う。たとえば、書名には「述誠」「述成」の2種類があり、「述成」ならば仏弟子の理解に対する釈尊の証明を意味し、本書の内容とも関連するが、最古写本の真浄院蔵本では「述誠」とある。本文の特徴による系統付けも、題名とは対応せず、今後の解明が俟たれる。

真浄院蔵本の奥書には、本書を「青ヘウシ（青表紙）」と呼んでその存在を秘匿してきたことを伝え、西山派口伝関係の書物に合冊されている諸本が多いことを見ても、写伝経路は限られていたと想像される。江戸時代以降では、西福寺恵空や円照寺法慧など、真宗系の人師による多くの写本が確認される。
作成者名：稲田廣演

述聞制文

書名よみ：じゅつもんせいもん
書名別名：述聞副文
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：1325（正中2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、鎌倉光明寺蔵本（1325（正中2）、良暁真筆本）
2、大谷大蔵本（明治期頃、未調査）
3、竜谷大蔵本（未調査）
4、京都鹿ヶ谷法然院蔵本（未調査）
写本奥書：1、此述聞制文者先師為除遺弟疑慮被書置之処也、然則任誓文之趣可守相伝之正義者也、仍以先師加判之本所授聖満良順也、康安元年（1361）八月三十日、桑門良誉
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
刊本所在：1、承応2（1654、仏教大・大谷大）
2、天保11（1840、仏教大・大谷大、承応2年版本の後刷）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
2、（刊記なし）
活字本所載書：『鎌倉市史』、『浄全』11
解説：寂恵良暁が自身の白旗義の正統性を主張する誓文。名越派の尊観は、良暁の相伝は良忠より直接受けたのではなく、良忠の弟子である理真から相伝したとして、白旗義の正統性を批判した。これに対して、良暁は、良忠から相伝を継承した経緯を述べて、その正当性を主張するのが本書である。鎌倉光明寺蔵の良暁真筆本は、奥書きによれば附法の門弟である良誉定恵（光明寺3世）に授け、定恵は聖満良順（光明寺4世）に授けたとある。良暁真筆本は鎌倉光明寺に現存する。版本の『浄土述聞鈔』の冒頭に『述聞制文』を載せている。
作成者名：伊藤茂樹

隼疑冏決集

書名よみ：じゅんぎげいけつしゅう
著者名：聖冏
著者名よみ：しょうげい
著者名別名：酉蓮社了誉、冏師、聖冏禅師
著者生没年：1341（暦応4）-1420（応永27）
成立翻訳年：14c後半-15c初頭
成立地：日本
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、寛永6版（1629、大谷大・大正大・竜谷大・吉田幸一氏、天竺往生験記等と合一冊）
2、承応3版（1654、早稲田大、天竺往生験記と合一冊）
3、正保2版（1645、京都大、天竺往生験記付）
4、刊年不明（玉川大・東洋大哲学堂・京都大・仏教大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、刊記なし
活字本所載書：『浄全』12

参考文献：服部英淳「解説」(『浄全』12)
解説：聖冏が禅僧覚隼の疑問に答える形で著された書。本書における問答は、先ず覚隼が偈を示して、その偈に関する疑問を呈し、それについて聖冏が答えるという形式をとる。その内容は、はじめに覚隼が、禅宗の教義において心地を発明すれば、真空を覚了するが、浄土の教門は三界（迷いの世界）を出ない故、大虚に機知すると。禅宗の機知は十方虚空にわたる大円鏡智であり、機知するところも無く機知しないということもない、唯一のものであるという優越性が述べられている。その論難に対し、聖冏は修行の因としては三界の内で行われるものであり、禅宗であってもそれは同様である。ましてや、浄土宗の名の通り、果としての浄土を宗名にしているとしている。そして、禅宗は遠く煩悩を払って、菩提を求める性頓（大乗自力聖道の教え）なるが故に、執着がありながら自然に実相を現し、見生の火を焼きながら無生の智水に浴すような、即相不思議宗（大乗他力念仏の教え）には及ばないとする。このように本書は、禅宗に対する論駁の小著である。
作成者名：東海林良昌

浄阿上人絵詞伝

書名よみ：じょうあしょうにんえことばでん
著者名：尊応
著者名よみ：そんのう
著者名別名：青蓮院宮尊応准后
著者生没年：1431（永享3）-1514（永正11）
成立翻訳年：16c
成立地：日本
巻数：3
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、京都金蓮寺蔵本（室町後期、尊応詞書、土佐光信絵）
2、早稲田大蔵本
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『国文東方仏教叢書』2輯伝記、『定本時宗宗典』下、若杉準治「〈翻刻〉金蓮寺蔵浄阿上人絵伝について」(『京都国立博物館学叢』4、1982)
参考文献：若杉準治「〈翻刻〉金蓮寺蔵浄阿上人絵伝について」(『京都国立博物館学叢』4、1982)
解説：時宗四条派の祖浄阿真観（1269-1341）の絵伝。上・中巻の2巻は室町後期のものであるが、下巻は江戸期の後補。
　詞書を書いた尊応は、二条摂政関白持豊の子で、法務大僧正准后、天台座主。絵を描いた土佐光信は、土佐派中興の祖といわれ、室町時代中後期に活躍した。本書は浄阿真観の生い立ち、一向専修の念仏業者となった機縁、念仏勧進や教化のあり様などを描く。応永年間（1394-1428）に力を持った遊行派が、四条派の四条道場を、遊行派の七条道場の末寺にしようとしたことから、四条道場と七条道場との間で対立がおこるが、四条派はその独自性や正統性を主張するために絵伝を撰述したらしい。絵伝中に遊行派に対する派閥意識がみられ、例えば浄阿真観が遊行派の他阿へ師事して名号を授与されたことが触れられておらず、浄阿改号の事実を犠牲にしてまで他阿との関係を抹消しようとしたという。
作成者名：坪井直子

浄阿上人行状

書名よみ：じょうあしょうにんぎょうじょう
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：14c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、宮内庁書陵部蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
活字本所載書：『続群書類従』9、『定本時宗宗典』下
参考文献：河野憲善「四条道場の創建と浄阿真観」(『印仏研』15（8-1）、1960)、阿部征寛「四条道場（金蓮寺）と浄阿上人真観」(橘俊道・圭室文雄編『庶民信仰の源流』、名著出版、1982)、林譲「時宗四条派派祖浄阿弥陀仏伝記史料の再検討―特に三伝の成立時期を中心として」(『国史学』120、1983)
解説：時宗四条派の祖浄阿真観（1269-1341）の略伝。作者、成立年ともに不明。内容より推定して、作者は時宗門徒で、成立時期は室町初期とみられるが、さらに時代が降る可能性もある。本書は漢文体であるが、和文体の『浄阿上人伝』と内容が相似する。
作成者名：坪井直子

浄阿上人伝

書名よみ：じょうあしょうにんでん
著者名：不明
成立翻訳年：寛政4（1463）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、京都金蓮寺蔵本（寛政4（1463）、甘露寺親長書写）
写本奥書：1、（巻末）後花園天皇花押（未調査）
活字本所載書：『定本時宗宗典』下
参考文献：河野憲善「四条道場の創建と浄阿真観」(『印仏研』15（8-1）、1960)、阿部征寛「四条道場（金蓮寺）と浄阿上人真観」(橘俊道・圭室文雄編『庶民信仰の源流』、名著出版、1982)、林譲「時宗四条派派祖浄阿弥陀仏伝記史料の再検討―特に三伝の成立時期を中心として」(『国史学』120、1983)
解説：山城金蓮寺（四条道場）の開山となる時宗四条派の祖浄阿真観（1269-1341）の略伝。巻末に後花園天皇の花押があり、公家の観修寺家流甘露寺親長筆とされる。内容は、浄阿が19歳で出家、鎌倉極楽寺の良観（忍性律師）、紀州心地上人（法燈国師）について修行後、熊野で念仏往生を悟り、一阿弥陀仏と改名したこと、勧進念仏の時に遊行派の祖他阿真教と問答となり、後に師事、浄阿弥陀仏と改名したこと、京都四条祇陀林寺にいた頃、後伏見院の女院の難産を平癒した功績により、その寺に道場を開くことを許されて寺名を金蓮寺と改称し、上人の位を賜ったこと、他阿上人より念仏印板を相承したこと、暦応4年（1341）に73歳で示寂したことなどが記される。
作成者名：坪井直子

常行三昧堂行法

書名よみ：じょうぎょうざんまいぎょうほう
著者名：円仁（？）
著者名よみ：えんにん
著者名別名：慈覚大師
著者生没年：794（延暦13）-864（貞観6）
成立翻訳年：9c
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：活字本
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）、『蓮門録』（『日仏全』1）
参考文献：佐藤哲英「西方懺悔法に関する研究」（『竜谷大学論集』338、1950）、佐藤哲英『西方懺悔法－本文並に解説－』（竜谷大学一乗文化研究会編、1949）、薗田香融「山の念仏－その起源と性格－」（『平安仏教の研究』法蔵館、1981）、奈良弘元『初期叡山浄土教の研究』（春秋社、2002）
解説：本書の書名は『長西録』・『蓮門録』のみに記されている。『長西録』では、本書を伝円仁撰の一連の西方懺法として挙げているが、散逸して伝わらない。ただし、その書名から比叡山常行三昧堂で行われた行法を記したものだと推測できる。

常行三昧堂は慈覚大師円仁によって五台山竹林寺より移入された念仏三昧法を修する道場であり、『慈覚大師伝』には仁寿1年（851）に初めて常行三昧が行われ、円仁の没後、貞観7年（865）8月11日に不断念仏を勤めたとある。『三宝絵詞』ではその修行の期日を8月11日から同月17日までの7日間としている。本書もその行儀に関する内容と思われる。
作成者名：能島覚

小経直談要註記

書名よみ：しょうきょうじきだんようちゅうき
書名別名：小経要註記、阿弥陀経要註記、阿弥陀経直談要註記
著者名：聖聡
著者名よみ：しょうそう
著者名別名：大蓮社酉誉聖聡、酉師、酉公、聡師
著者生没年：1366（良治5）-1440（永享12）
成立翻訳年：1435（永享7）
成立地：日本
巻数：8
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、慶安1（1648、大正大・大谷大）
2、元禄年間（1688-1704、散逸、『浄全』版の定本）
3、刊年不明（竜谷大・大正大・仏教大）
刊本の奥書刊記：1、慶安1年（1648）歳戊子季夏吉辰　杉田勘兵衛尉刊行之
2、（未調査）
3、（刊記なし）
活字本所載書：『浄全』13
参考文献：坪井俊映「解題」（『浄全』13）、石橋誠道「解題」（『浄全』21）、岸一英「小経直談要註記」（『聖聰上人典籍研究』、山喜房仏書林、1989）
解説：本書は『阿弥陀経』についての注釈書であり、『大経直談要註記』と並ぶ聖聰の代表的著作である。

聖聰は上記二書と現在散逸した『観経直談要註記』とを合わせて「浄土三部経」の全注釈を構想していたことが知られる。

それらの総巻数を48と定める編集の都合上、当初9巻立てであった本書は8巻立てとなったと思われる。そのため聖総は、本来は本書の第1巻に、法然の『阿弥陀経釈』（本文では『阿弥陀経私記』）を置かれるべきことを示唆している。

本書の内容は、全体を「来意分」（一代教における浄土門の意義づけ）、「釈名分」（「阿弥陀」が経題として用いられる五意）、「訳人分」（訳者鳩摩羅什の紹介と翻訳の信頼性）、「依文解釈分」の四つに分け、その「依文解釈分」を序分・正宗分・流通分に大別する。さらに序分を「序説証信分」（「如是我聞」以下）、「序説発起分」（「一時」以下）、「序説列衆分」（「長老」以下）、正宗分を「正宗依報総標分」（「爾時仏告長老舎利弗」以下）、正宗正報総標分（「其土有仏告阿弥陀今現在説法」以下）、正宗依報広説分（「又舎利弗極楽国土七重欄楯七重羅網七重行樹皆是四宝周匝圍繞是故彼国名曰極楽」以下）、正宗正報広説分（「舎利弗於汝意云何彼仏何故号阿弥陀」以下）とに分けて解釈する。

解釈にあたっては、良忠の『法事讃記』を用い、鎮西流の解釈を加える。特に「浄土三部経」の中において、他経が随他の諸行往生を説くのに対し、『阿弥陀経』では、随自の念仏往生のみを説くとして、本経に特別の価値を見出している。
作成者名：東海林良昌

生西指南要

書名よみ：しょうさいしなんよう
著者名：寂照
著者名よみ：じゃくしょう
著者名別名：寂昭、大江定基、三河入道、三河聖、円通大師
著者生没年：962（応和2）（？）-1034（南宋・景祐1）
成立翻訳年：不明
成立地：不明
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：西岡虎之助「入宋僧寂照に就いての研究」（『史学雑誌』39-9、1923）、久曽神昇「三河入道寂照の研究」（『愛知大学総合郷土研究所紀要』5、1959）、平林盛得「慶滋保胤の死－参河入道寂照の入宋に関連して－」（『日本仏教』21、1965）、有馬嗣朗「寂照に関するノート－得業生大江定基」（『愛知学院大学大学院文学研究科研究紀要』8、1997）、斉藤円真「寂照をめぐって」（『天台学報』44、2002）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：本書は散逸して伝わらない。その存在は『長西録』に記される。

著者の寂照は摂関期の歌人であり、入宋僧でもある。参議大江斉光の三男として生まれ、明経道を修め、三河守を務めた。その後、愛妾の死別に遇い、出家したという。師は寂心（慶滋保胤）・源信・小野僧正仁海であり、弟子には谷阿闍梨皇慶がいる。入宋の際には、源信の『天台宗疑問二十七条』を知礼に渡し、その返答を叡山に送った。真宗帝より円通大師の号を得る。宋で客死する。

なお青蓮院蔵『浄土厳飾鈔』に「或書云参河入道極楽想意」と引用があるが、これは静照の『極楽遊意』と同文であるため寂照の教説とみることはできない（佐藤論文）。しかしながら、寂照は大山崎宝積寺において法華八講を修し、その講師に静照を招いている点を留意すれば、両者は無関係でなく、『浄土厳飾鈔』の混同はそれらの親近性から生じたかもしれない。
作成者名：能島覚

正修観記

書名よみ：しょうしゅうかんき
書名別名：正修観
著者名：源信（？）
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：10c後半（？）-11c初頭（？）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、日光輪王寺天海蔵本（室町期、書写者不明、1冊）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、万治3（1660、大正大・高野山真別処）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『恵全』1、『日仏全』24、『日仏全』31
参考文献：西村冏紹・末木文美士『観心略要集の新研究』（百華苑、1992）
解説：著者は源信か。内題下に「源信」と記され、『謙順録』『日本国天台宗章疏目録』『長西録』『蓮門録』『玄智録』（『日仏全』1、p.146、p.266、p.349、p.417、p.464）、『台祖密目』『龍堂録』『釈教目録』（『日仏全』2、p.241、p.274、p.385）の諸目録や『天台小部集釈』（『日仏全』24）にも源信の著述として立項されている。ただし阿弥陀三諦説がみられる事、二十五菩薩を来迎の菩薩とする事など、内容上疑義が持たれる。
　成立年代は不明。
　上（附極楽依報）・中（附弥陀摂八宗）・下（附弥陀正報）の三巻で構成される。内容は、依報である極楽の地・樹・池・鳥・風・雲・楽・宅・服・食の様子が述べられる（巻上）。
　弥陀の法身・報身・応身それぞれに道前・道中・道後の三重義門を立てて、法身の体は非有非無、報身の智恵は第一義空、応身の福徳は真善妙有であり、三身相即であることを明かす。また仏身仏土の関係について、自行の三身は常寂光土に住すとして、法身を常土、報身を光土、応身を寂土に、化他の三身は三土に住すとして他受用身を実報土、勝応身を方便土、劣応身を同居土にそれぞれ配当した後、四土不二同居の極楽・三身相即の劣応の弥陀を欣むべきであり、往生を遂げた後に界外を観ずべきことが述べられる。また阿弥陀を無量光・無量寿と翻じ、それぞれ法華経の迹門・本門に配当し、更に阿・弥・陀を無（諸法空寂）・量（万像森然）・寿（中道実相）に対応させ、阿弥陀の三字を唱えることは10324巻の一切聖教・1981体の一切の聖衆を唱えることに相当するとし、阿の字を念ずる時に四十二品無明同体見思の煩悩が滅し報身仏となること、弥の字を念ずる時に四十二種塵労煩悩三土の悪業が滅し応身仏になること、陀の字を念ずる時に四十二位根本無明煩悩二死の苦果が滅し法身仏になることが説かれる（巻中）。
　正報である弥陀の様子と十方界諸仏の擁護、観音・勢至・二十五菩薩の来迎が述べられる（巻下）。
作成者名：上杉智英

正信偈大意

書名よみ：しょうしんげたいい
書名別名：正信念仏偈大意
著者名：蓮如
著者名よみ：れんにょ
著者名別名：恵灯大師、本願寺蓮如、信証院、兼寿
著者生没年：1415（応永22）-1499（明応8）
成立翻訳年：1458（長禄2）/1460（長禄4・寛正1）
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、竜谷大蔵本（1458（長禄2）、書写者不明）
2、滋賀善立寺蔵本（1458（長禄2）、書写者不明）
3、京都西法寺蔵本（室町中期、書写者不明）
4、大阪恵光寺蔵本（室町末期、書写者不明）
5、三重法雲寺蔵本（室町末期、書写者不明）
6、三重深行寺蔵本（室町末期、書写者不明）
7、大谷大蔵本（室町期、書写者不明）
写本奥書：1、右この正信偈大意は、金森の道西、自身才覚にそなへんか為に連々そののそみ是有といへとも、予いささか才覚なきあひた、かたく斟酌を加所に、しきりに所望のむねさりかたきによりて、文言のいやしいをかへりみす、又義理の次第をもいはす、たた願主の命にまかせて、ことはをやはらけ、是をしるしあたふへきよし、その所望有間、かくのことくしるす所なり、あへて外見有るへからさる者なり、蓮如四十二、本云、于時長禄第二（1458）林鐘之比染筆畢
2、右この正信偈の大意は、金森の道西、一身の才覚のために連々そののそみこれありといへとも、予いささかその才覚なきあひた、かたく斟酌をくはふるところに、しきりに所望のむねさりかたきによりて、文言のいやしきをかへりみす、また義理の次弟をもいはす、たた願主の命にまかせて、ことはをやはらけ、これをしるしあたふへきよし、その所望あるあひた、わたくしにこれをしるすところなり、あへて外見あるへからさるものなり、于時長禄第二（1458）林鐘之比染筆畢、蓮如四十四歳
3、右この正信偈大意は、金森の道西、一身才覚のために連々そののそみこれありといへとも、予いささかその料簡なき間、かたく斟酌をくはふるところに、しきりに所望のむねさりかたきによりて、文言のいやしきをかへりみす、また義理の次第をもいはす、たた願素の命にまかせて、ことはをやはらけ、これをしるしあたふ、その所望あるあひた、かくのことくしるすところなり、あへて外見あるへからさるものなり、于時長禄第四之天（1460）林鐘之比染筆訖
4、（未調査）
5、寂如（花押）
6、延徳三辛亥年八月十九日　時正給日也　書写之畢　釈蓮照（花押）大杉之陰士也
7、右この正信偈大意は、金森の道西、自身才覚にそなへんか為に連々そののそみ是有といへとも、予いささか才覚なきあひた、かたく斟酌を加所に、しきりに所望のむねさりかたきによりて、文言のいやしいをかへりみす、又義理の次第をもいはす、たた願主の命にまかせて、ことはをやはらけ、是をしるしあたふへきよし、その所望有間、かくのことくしるす所なり、あへて外見有るへからさる者なり、于時長禄　本云右筆蓮如四十六
刊本所在：1、元禄2（1689、大正大・大谷大）
2、元禄3（1690、大正大・高野山大）
3、明和7（1771、大谷大・大正大・竜谷大）
4、真宗法要本巻五
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、元禄三庚午年（1690）孟春吉辰、丁子屋六兵衛、婦屋

仁兵衛
3、明和七庚寅年（1770）求板、大阪心斎橋順慶町、柏原屋与左衛門
4、『真宗法要』には刊記あり
活字本所載書：『真聖全』3、堅田修『真宗史料集成』2（同朋社、1983）、『浄土真宗聖典（原典版）』（本願寺出版部、1985）、稲葉昌丸『蓮如上人遺文』（法蔵館、1997）、大谷暢順『蓮如上人全集』3（中央公論社、1998）
参考文献：宮崎円遵「室町時代に於ける『正信偈』の註疏」（『宗学院論輯』22、1936）、源了円『蓮如』（「浄土仏教の思想」12、講談社、1993）、名畑崇「蓮如上人初期の教化」（『講座蓮如』1、平凡社、1996）、林智康「蓮如上人と〈正信偈〉」（『蓮如教学の研究』、永田文昌堂、1998）、池田真「蓮如上人における「真宗再興」の意義—「正信偈」の語釈をめぐって—」（『真宗研究』43、1999）
解説：蓮如は本願寺8代門主である。衰微していた本願寺において、本願寺7世存如の長男として、苦難の中で成長する。比叡山衆徒の襲撃に遭い、京都東山大谷を出て文明3年（1471）越前吉崎に赴き、北陸地方を教化し、さらに摂津・河内・和泉で布教に専念する。のちに山科・石山に本願寺を建立する。本願寺を強大な宗門に成長させた浄土真宗中興の祖である。また、「南無阿弥陀仏」の六字名号を数多く書いて弟子や門弟に与え、「正信念仏偈」と「三帖和讃」を刊行した。著作には本書のほか『御文』・『改悔文』など布教のためのものが多い。蓮如の行実を示した言行録に『蓮如上人御一代記聞書』等がある。

「正信偈」とは親鸞の『教行信証』「行巻」の一番最後に置かれる「正信念仏偈」の略称である。蓮如の手によるこの「正信偈」の註には3種類ある。すなわち、『正信偈註釈』・『正信偈註』（ともに漢文）と、この『正信偈大意』（和文）である。

本書は奥書にある通り、門徒である金森の道西の懇望により書かれたものである。成立には長禄2年（1458）説と長禄4年（1460）説がある。存覚の『六要鈔』・『顕名鈔』に基づき、『正信偈註釈』や『正信偈註』の釈を経て成立したものと考えられる。「ことはをやはらけ」とあることからもわかるように、「正信偈」の意味を簡単に記したものである。

「正信偈」にある「至心信楽願為因、成等覚証大涅槃、必至滅度願成就」の3句に関しては、存覚は「至心信楽の一句は十八願の意なり」とだけ解釈しているのに対し、本書では「至心信楽願為因、成等覚証大涅槃、必至滅度願成就といふは、第十八の真実の信心をうれば、すなはち正定聚に住す。そのうへに等正覚にいたり大涅槃を証することは、第十一の必至滅度の願成就したまふがゆへなり。これを平生業成とはまふすなり。」と詳細な註釈を加え、さらに親鸞の和讃でもって、その自説を補っている。

本書には三重県の法雲寺と深行寺に所蔵されている異本（現行本以前のものとされる）が存在する。詳しくは、上記の宮崎論文を参照されたい。

なお、この『正信偈大意』の制作がきっかけとなり、『御文』／『御文章』の執筆がはじまったと言われている。宮崎円遵は「初期の上人は主として『正信偈』に深く留意されていたことを示すに外ならず、上人の撰述より見れば、『御文』撰述時代に先行するものとして、『正信偈』の時代というべきものの存したことは認めねばならぬであろう」と指摘している。

文明5年（1473）3月、蓮如は吉崎で親鸞の『正信念仏偈』を開版した。これにより、これまで行ってきた『往生礼讃』の勤行に代わって、門徒たちは朝晩『正信念仏偈』を読誦するようになり、その形式が現在まで継承されている。
作成者名：佐々木大悟

正信偈註釈

書名よみ：しょうしんげちゅうしゃく
著者名：蓮如
著者名よみ：れんにょ
著者名別名：恵灯大師、本願寺蓮如、信証院、兼寿
著者生没年：1415（応永22）-1499（明応8）
成立翻訳年：1458（長禄2）以前
成立地：日本
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、西本願寺蔵本（室町期、書写者不明）
2、竜谷大蔵本（寛政年間、書写者不明）
写本奥書：1、(未調査)
2、寛政甲子（1792/1794）夏六月朔、依蓮大宗主御手沢本模写、故文字点画雖其可疑者、猶今因循古本而已
活字本所載書：伊藤義賢『蓮如上人真蹟古写本　正信偈註釈集』（竹下学寮出版部、1938）、堅田修『真宗史料集成』2（同朋社、1983）、稲葉昌丸『蓮如上人遺文』（法蔵館、1997）、大谷暢順『蓮如上人全集』3（中央公論社、1998）
参考文献：宮崎円遵「室町時代に於ける『正信偈』の註疏」（『宗学院論輯』22、1936）、源了円『蓮如』（「浄土仏教の思想」12、講談社、1993）、名畑崇「蓮如上人初期の教化」（『講座蓮如』1、平凡社、1996）、稲葉昌丸『蓮如上人遺文』（法蔵館、1997）、林智康「蓮如上人と〈正信偈〉」（『蓮如教学の研究』、永田文昌堂、1998）
解説：蓮如は本願寺8代門主である。衰微していた本願寺において、本願寺7世存如の長男として、苦難の中で成長する。比叡山衆徒の襲撃に遭い、京都東山大谷を出て文明3年（1471）越前吉崎に赴き、北陸地方を教化し、さらに摂津・河内・和泉で布教に専念する。のちに山科・石山に本願寺を建立する。本願寺を強大な宗門に成長させた浄土真宗中興の祖である。また、「南無阿弥陀仏」の六字名号を数多く書いて弟子や門弟に与え、「正信念仏偈」と「三帖和讃」を刊行した。著作には本書のほか『御文』・『改悔文』など布教のためのものが多い。蓮如の行実を示した言行録に『蓮如上人御一代記聞書』等がある。

「正信偈」とは親鸞の『教行信証』「行巻」の一番最後に置かれる「正信念仏偈」の略称である。蓮如によるこの「正信偈」の註には3種類ある。すなわち、『正信偈註釈』・『正信偈註』（ともに漢文）と『正信偈大意』（和文）である。『正信偈大意』を著すときの基礎になる役割を果たした。

本書は、存覚の『六要鈔』から「正信偈」本文および註釈を抜き出して、『六要鈔』の釈によって分科し、補注を書き込んだ覚え書きノートのようなものである。行間や上下段に『六要鈔』が略した『大無量寿経』の願文や『月蔵経』・『往生要集』などの経文ほか和讃を細字で書き込んでおり、学習の跡が見られる。また、たとえば「至心信楽願為因」の句について、存覚は「十八願意」としているのに対して、本書では「十一願意」とし、第11願の本文を下に記すなど、存覚の解釈以外に、いくつか自説も展開している。

西本願寺蔵本の「蓮如之」という袖書きは蓮如上人の筆跡であるが、本文全体が蓮如上人の筆であるかどうかは疑問であり、筆者の特定は留保されている。ただし、蓮如が所持していたことはこの筆跡の事実からして明らかである。
作成者名：佐々木大悟

常途念仏記

書名よみ：じょうずねんぶつき
著者名：永観
著者名よみ：ようかん

著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：11c後半-12c初頭
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）
解説：著者の永観については『往生拾因』の項を参照。
　本書は散逸して伝わらない。ただし、その内容に関しては、常途の念仏、すなわち日常のつとめである平生・尋常の念仏法軌を示したものであり、『往生拾因』に説くような四修（無間修・恭敬修・無余修・長時修）による実践を勧めるものだろうとの推測がある（大谷旭雄）。
作成者名：能島覚

定善義聞書

書名よみ：じょうぜんぎききがき
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人、然阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1255（建長7）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1255（建長7）、良聖書写）
写本奥書：1、建長七年乙卯（1255）二月六日読了、中間日数三十六日、除欠日八日之定也、聞衆五十人、能化然阿弥陀仏生年五十七也、抑此定善義者、建長六年（1254）十二月廿日被読始之処、良聖依年始歳末之悤劇等不会九日、是則同正月四日已後、値水想観終之時也、良聖生年二十二歳、欠日八日者、所謂十二月廿九日、晦日、正月一・二日、同十五日、同廿二・三日、同廿八日是也、談処下総国匝蹉飯塚御庄内松崎郷福岡村也
参考文献：恵谷隆戒『浄土宗第三祖然阿良忠上人傳の新研究：特に金澤文庫資料を中心として』（国書刊行会、1984）、坪井俊映「金沢文庫蔵『観経疏聞書』の研究」（『仏教文化研究』31、1986）、納富常天「金沢文庫本『観経疏聞書』について」（『仏教文化研究』32、1987）、日置孝彦「東国浄土教における良忠上人　－付　称名寺蔵金沢文庫保管鎮西義典籍解題－」（『仏教文化研究』32、1987）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。建暦1年（1211）、同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、建保2年（1214）、比叡山で受戒した。その後1236（嘉禎2）年、九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』の相伝を受ける。建長1年（1249）、関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、正元1年（1259）、鎌倉に入り、悟真寺を開創して念仏を広めた。
　本書は、善導『観経疏』定善義を法然・弁長の義にしたがって良忠が講述したものを良聖が聞き書きしたものである。講述は建長6年（1254）12月20日に始まり、建長7年（1255）2月6日に終わっている。
　『観経疏』の本文から重要な語句286項目を選び出し、それに対して問答形式をもって解説している。
作成者名：曽和義宏

定善義問答聞書私見

書名よみ：じょうぜんぎもんどうききがきしけん
書名別名：観経疏問答
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉期、西円書写）
写本奥書：1、已上定善義畢、西円之
活字本所載書：平井正戒『隆寛律師の浄土教　附遺文篇』
参考文献：塚本善隆「金沢文庫蔵の長楽寺隆寛派の新資料」（『顕真学報』3-4、1934）、安井廣度『法然門下の教学』（法蔵館、1938）、平井正戒『隆寛律師の浄土教』（国書刊行会、1941）
解説：『弥陀本願義』にみえる『観経疏問答』という著作からもわかるようにおそらくは『散善義問答』と同じ『観経疏問答』の定善義部であるとも考えられる。覚終と記してあるところから、平井正戒は「隆寛述覚終筆記西円転写所持」としている。著述形式は『散善義問答』にちかく、内容的にも隆寛の『極楽浄土宗義』『礼讃問答』における第七華座観の内容理解と一致する点が多いため隆寛における講述の筆録であるとみてよかろう。
作成者名：伊藤茂樹

浄土依憑経論章疏目録

書名よみ：じょうどえひょうきょうろんしょうしょもくろく
書名別名：長西録、依憑録
著者名：長西
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c半ば
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、小山正文氏蔵本（1644（寛永21）、松与了生書写）
＜影印版＞:小山正文「寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目録』」（『同朋大学論叢』62、1990）
2、大正大蔵本（1699（元禄12）、単誉善永書写）
3、京都大蔵本（書写年不明、書写者不明、寛文二年版の写し、二部）
4、大谷大蔵本（明治期、書写者不明）
5、大谷大蔵本（大正期、書写者不明）
6、東京大史料編纂所蔵本（書写年不明、書写者不明、望月信亨氏蔵本の写）
7、竜谷大蔵本（書写年不明、書写者不明）
8、禿氏祐祥氏蔵本（書写年不明、書写者不明）
写本奥書：1、雖為悪筆執心故書写畢る、後見校合可致者也、松与了生（花押）、寛永二十一年（1644）四月一吉日／兼阿兼耕書、享和二戊（1802）秋八月虫干を以表紙綴之、向来見者有之必写之厚心を問ふ、而頂戴按之、享和二戊年（1802）八月五日

2、于時元禄十二己卯歳（1699）七月十三日、南無阿弥陀仏、単誉善永領之
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
7、（未調査）
8、（未調査）
刊本所在：1、寛文2（1662、京都大・京都大松本文庫・大正大・竜谷大）
2、宝永2（1705、国立国会図書館・高野山真別処）
刊本の奥書刊記：1、寛文二壬寅暦（1662）仲冬吉旦　上村次郎右衛門刊行
2、（未調査）
活字本所載書：『日仏全』1、『真宗全書』74、小山正文「寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目録』」（『同朋大学論叢』62、1990）
参考文献：藤堂恭俊「浄土依憑経論章疏目録解題」（『大日本仏教全書（新版）』99、1973）、小山正文「寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目録』」（『同朋大学論叢』62、1990）
解説：『長西録』と通称される浄土教関係典籍の目録。本目録は名越派良栄の『東宗要見聞』第五に「依憑録云〈長西〉」とあるのと同一書とみられ、長西の著作として広く流伝してきた。成立年代は不詳であるが、長西晩年の作と見るのが一般的である。

本目録は、群経・諸論・釈経・集義・別出・修行・讃頌・伝記・雑述・偽妄の10篇からなり、総計500余部の書目が記載されている（巻末には若干の後人の加筆が存在）。経論はもとより中国・朝鮮・日本の章疏類までを網羅し、現在すでに散佚してしまった典籍も数多く記載されているなど、鎌倉時代中葉の浄土教典籍の流伝状況を伝える重要資料である。

従来、寛文・宝永版本の系統（『日仏全』所収本など）のみが知られていたが、近年、寛永21年書写の写本が紹介・翻刻された（小山正文「寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目録』」）。それによると、寛永写本と寛文・宝永版本とは基本的に同系統と認められる一方、かなりの異同も見られる。広く流布している版本・活字本の誤脱箇所の判別が可能になった点で、大きな意味を持つといえよう。

なお『蓮門類聚経籍録』など一部に、『長西録』を2巻とし、上巻は長西の真撰だが下巻は後人の追加とする記述がみられるが、これは現存する諸本に『浄土正依経論書籍目録』（撰者不明）が併録されていることによる。
作成者名：吉田淳雄

浄土義私記

書名よみ：じょうどぎしき
著者名：珍海
著者名よみ：ちんかい
著者名別名：禅那院珍海、珍海已講、越前已講、越洲
著者生没年：1092（寛治5）-1152（仁平2）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：2
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏晢『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）、坂上雅翁「珍海の浄土観」（「印仏研」26-2、1978）
解説：本書は散逸して伝わらない。『長西録』には『大乗義章浄土義私記』と同じくその法量を90紙と記されている。

なお、珍海の浄土理解は『決定往生集』などの現存する主な浄土教典籍の他に『大乗玄問答』第11（『大正』70、No.2303）、『三論玄疏文義要』第9（『大正』70、No.2299）、『三論名教鈔』第14（『大正』70、No.2306）の各々の「浄土義」の注釈においても詳細に論じられている。本書はそれらにおける「浄土義」注釈の別出本である可能性も考えられるが、現時点では推測の域をでない。
作成者名：能島覚

浄土疑端

書名よみ：じょうどぎたん
著者名：顕意
著者名よみ：けんに
著者名別名：道教房、公空、記主、聖恵
著者生没年：1238（暦仁1）-1304（嘉元2）
成立翻訳年：1283（弘安6）
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、正保2（1645、大谷大・西山短大・大正大・仏教大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、此釈一部四巻浄教樞鍵也、但以文義幽隠意趣源玄、浅智疑端不可称挙、今且略出一百二十条、可謂九牛之一毛矣、然此中有旧疑有新疑有実疑有仮疑有深疑有浅疑、雖有此等差殊莫不為決一宗要義以成安心住行者也、然則諸方明匠対此迷方指其径路焉、時也宝歴癸未（1283）春三月日、西郊隠士顕意謹記／右疑端者去年壬午（1282）因有学者請出之、然彼詣于一両人所未乞其答釈、数日淹留書写而已不敢解之云云、故又彰名字遣信求決、有言条数繁多不遑具釈云云、仍更以朱墨點次第略之朱點四十八件墨點一十六条重請諸賢随意答之、於此猶拒不答者誰信前所陳乎、若言問非故不答者此亦不然、答法非一何其不下作反語答上哉、此数件問豈唯一向応捨置乎、抑求決之意不為自挙凌他、今聞諸方学者不論自門他流互有臆説妄談、欲令彼等見此警策入于正路、故揚短疑請諸師高判、幸弘宣正法之人何不同此志也、癸未冬日、顕意珍重／凡斯草書者著浄家之明法而以極厥規模之大矣、其書雖存而転写者鮮矣為済堕弱者令此鏤良梓而已、時正保乙酉暦（1645）舞射吉辰、願主三陽員外小比丘愚翁、書堂敦賀屋久兵衛新梓刻
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2208a）
参考文献：望月信亨「九品寺証忍の観経義賢問愚答鈔と竹林寺顕意の拙疑巧答研覈鈔」（『浄土教の研究』）、野村憲成『深草教理史要』（私家謄写版、1955）
解説：西山流深草義の顕意が、善導『観経疏』についての疑問点を列挙した書。玄義分50条、序分義15条、定善義25条、散善義30条、合計120箇条の問いが挙げられ、序分義・定善義は合冊されて、全3巻となっている。

跋文によると、弘安5年（1282）ある学者に請われ、『観経疏』の難解とされる部分を問いとして整理し、翌年春3月に完成したものである。成立の経緯からして、問いのみの書だったであろう。初めは撰号が無かったらしく、依頼主がこの書を複数の人師に見せて答釈を求めたが、書写するのみで返答はなかった。顕意は改めて著者名を明示したが、条数が多すぎることを理由に返答を断られた。そこで、重要な論題を選んで朱点48件・墨点16件の印を付け、再度の答釈を求めたという。

これに対する反応に、道感の『弾疑』、九品寺流了阿の『略答』、同じく証忍の『観経義賢問愚答鈔』があったが、現存するのは『賢問愚答鈔』のみである。顕意は、証忍の書のみ返答に値するものとして評価し、再反論として『観経

義拙疑巧答研覈鈔』を著している。
　先にも述べたとおり、本来は問いのみの書であったと思われるが、現行の版本には、すべて答えが付記されている。その中には、本書以降に成立した『研覈鈔』や『揩定記』も参照指示されており、後世の付加と考えられる。答えは西山深草義の立場で述べられているが、その成立の詳細については不明である。
　本書においては、基本的に顕意自身が自義を主張するものではなく、『玄義分疑端』第1条に「各発無上心」の句について「無上心」と「菩提心」の関係を尋ねるなど、浄土宗通用の関心事について諸流派の意見を仰ぐという性格が強い。
　一方、その後に交わされた証忍との応答によって、深草義と九品寺流の相違が現れてくる。このような営みを通して、顕意が『観経疏』についての多様な意見を蓄積したことが、後に諸流の見解を総合的に批判した主著『揩定記』に集大成されていったと見ることができる。
　本書は、正保2年（1645）版が唯一の伝本であるが、刊記により、深草派檀林妙心寺（岡崎市岩津より明治期に京都市新京極に移転）第11世愚翁利賢の監修を経ていることがわかる。
作成者名：稲田廣演

浄土口伝肝心鈔

書名よみ：じょうどくでんかんじんしょう
書名別名：十箇条口伝肝要鈔、口伝鈔、浄土肝要集口伝、肝心集
異本書名：浄土述聞口伝切紙
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：1313（正和2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、宝菩提院三密蔵本（南北朝期、極楽寺覚祐書写、未調査）
2、大正大学蔵本（江戸期、書写者不明）
写本奥書：1、以前十箇条任相伝之旨、粗注之、以此趣奉授〻〻畢、正和三年九月六日、良暁有判
私云、已上一方義勢口決畢/干時康暦元年（1379）孟夏上旬候畢、欣浄沙門覚祐/（別筆）昔応永十九稔（1412）林鐘上旬感得之、予被閲之文章之体多誤歟、但於義無失歟、後見者得意通義而已/東寺宝厳院陪従士聖清（田中祥雄「東寺宝菩提院所蔵『浄土口伝肝心鈔』について」による）
2、（未調査）
活字本所載書：田中祥雄「東寺宝菩提院所蔵『浄土口伝肝心鈔』について」（『仏教文化研究』23、1977）
参考文献：櫛田良洪「東寺宝菩提院蔵の浄土教資料について」（『仏教史研究』4、1969）、田中祥雄「東寺宝菩提院所蔵『浄土口伝肝心鈔』について」（『仏教文化研究』23、1977）
解説：聖冏の『浄土述聞口決鈔』巻上よると、良暁は正和2年（1313）62歳のとき下総の国の海上船木の中務禅門の請によって、同国の称名寺に3年間滞在した。そして滞在期間中の浄土談義の際には、良忠門下の異議を論難し、正和3年（1314）9月6日に本書を製作した。本書の書写を望んだ船木禅門は良暁の許しをえて書写し、それを尊観の直弟にみせた。すると直弟は『口伝鈔』を書写して尊観にみせた。本書を読んだ尊観は筆をとり『浄土十六箇条疑問答』を著し16の疑問点を指摘したという。『浄土述聞鈔』に先立つ書である。内容は以下の通り。（1）業事成弁（2）三心本願（3）化仏第三身（4）三心具機（5）二十願（6）十八念仏十九来迎（7）横竪三心（8）虚仮行人（9）就行立信（10）専雑二修。写本は東寺宝菩提院三密蔵本と大正大学蔵本がある。刊本の『浄土述聞口伝切紙』は本書の異本で、内容にも異同がある。
作成者名：伊藤茂樹

浄土決疑鈔

書名よみ：じょうどけつぎしょう
著者名：公胤
著者名よみ：こういん
著者名別名：明王院僧正、大弐僧正
著者生没年：？-1216（建保4）
成立翻訳年：12c末－13c初
成立地：日本
巻数：3
散逸文献の文献名出典：『本朝念仏祖師法然上人極伝鈔』4、『正源明義鈔』6（『法伝全』p.869)、『四十八巻伝』40(『法伝全』p.253)、醍醐本『法然上人伝記』（『法伝全』p.778)、『拾遺古徳伝』6（『法伝全』p.625)、「浄土宗見聞」（大徳寺本『拾遺漢語灯録』（『浄土宗学研究』22､1996)、『守護国家論』（『浄全』8)、『選択本願念仏集秘鈔』3(『浄全』8)、『選択集叢林記』1（『真宗全書』17、『選択集昨非鈔』2（『真宗全書』19)、『念仏選擢評』（『浄全』8)、『選択之伝』（『浄全』8)、『長西録』（『日仏全』1)、『蓮門類聚経籍録』下（『日仏全』1）
参考文献：高瀬承厳「浄土決疑抄制作の年代について」（『摩訶衍』1、1920)、大屋徳城『日本仏教史の研究』3（法蔵館、1933)、石井教道『選択集の研究—註疏篇—』（文堂新光社、1945)、三田全信『成立史的法然上人諸伝の研究』（光念寺出版部、1966）
解説：著者公胤（1145-1216）は、天台宗園城寺の僧侶。
　本書は、法然在世中における『選択集』ならびに一向専修に対する非難書である。
　醍醐本『法然上人伝記』には「其の書に云く、法華に即住安楽の文有り、観経に読誦大乗の句有り、法華を読誦して極楽に生ず。何の妨げ有るや。然るに読誦大乗を廃して唯だ念仏を附属す。云云」（『法伝全』p.778）とあり、諸行往生の立場からの非難がなされていたことが知られる。『四十八巻伝』40によれば、公胤は『決疑鈔』撰述後直接法然に対面し浄土の法門について談じた後、自ら『決疑鈔』3巻を焼き法然に帰依した、とある。
作成者名：米沢実江子

浄土金明集

書名よみ：じょうどこんみょうしゅう
書名別名：玉光集、体用集
著者名：聖聡
著者名よみ：しょうそう
著者名別名：大蓮社酉誉聖聡、酉師、酉公、聡師
著者生没年：1366（貞治5）-1440（永享12）
成立翻訳年：14c末-15c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本

刊本所在：1、慶安3（1650、大正大・大谷大・竜谷大）
2、寛文2（1662、大正大）
刊本の奥書刊記：1、慶安庚寅（1650）暦九月吉辰　鈴木太兵衛刊慶安庚寅九月吉辰　中村長兵衛新刊
2、寛文二壬寅年（1662）仲秋吉日　鈴木太兵衛刊
活字本所載書：『浄全』13
参考文献：石橋誠道「解題」（『浄全』21）、坪井俊映「解説」（新『浄全』13）、石橋誠道『仏書解説大辞典』6、『浄土宗大辞典』2、阿川文正「『浄土金明集』について」（『聖聰上人典籍研究』、山喜房仏書林、1989）
解説：浄土宗の教義を他の顕密の教えとともに説き、その優越性を説いた書。
　本書は、「一、菩提仏果異名之事。二、真如之事。三、当処一心之事。四、煩悩即菩提生死即涅槃之事。五、草木成仏之事。六、性相両宗之事。七、無明断智四智中何耶之事。八、無明之事。九、一乗浄土之事。十、序題門之事。十一、三心四修五念之事。十二、即相無相生相無生之事。十三、施化利生発迹入源之機之事。十四、心性妄心不可得之事」の、十四科に分かれる。この中で聖聡は、顕・密・禅の教理を引きながら、浄土宗の教義を解説しようとする。例えば、「四、煩悩即菩提生死即涅槃之事」では、煩悩即菩提は凡夫所持の心体である、「九、一乗浄土之事」では、法華一乗に対して浄土一乗がある等、天台の教説が意識されている。これは勿論、師である聖冏の随他扶宗の説を継承しているのだが、そこには浄土宗を諸宗に対抗できる地位へと引き上げようという聖聡の意欲が見て取れる。特に、「十三、施化利生発迹入源之機之事」では、浄土門と聖道門との発迹入源機の違いについて、聖道門では解了智からの不了解智への悟入し、悟解の智が浮起するので果分の因分であるが、浄土門では、元より解了を求めないので、本来的に不儘であるが故に、果分の果分であるとし、浄土門の優越性を説いている。このような態度は、他宗から寄せられる方便論としての浄土門批判に答えたものとして注目される。
作成者名：東海林良昌

浄土三経往生文類

書名よみ：じょうどさんぎょうおうじょうもんるい
書名別名：三経往生文類、往生文類、三経文類
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：1255（建長7）・1257（康元2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、西本願寺蔵本（1255（建長7）、親鸞真筆本）〈影印版〉:『親鸞聖人真蹟集成』3（法蔵館、1974）
2、京都興正寺蔵本（鎌倉期、平俊直書写（？））〈影印版〉:幡谷明『浄土三経往生文類試解』（真宗大谷派宗務所出版部、1992）
3、京都西本願寺蔵本（室町期、蓮如書写）
4、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
5、（未調査）
写本奥書：1、建長七年乙卯（1255）八月六日，愚禿親鸞八十三歳書之
2、康元二年（1257）三月二日書写之，愚禿釈親鸞八十五歳／直筆三経文類集ノ表紙、弘化某年摂信手修理而替、今表紙弘帝化著御黄櫨染御袍之、裂関白政道公贈之
3、本云建長七年乙卯（1255）八月六日，愚禿親鸞八十三歳之
4、建長七年乙卯（1255）八月六日，愚禿親鸞八十三歳書之
5、（未調査）
刊本所在：1、承応3（1654、未調査）
2、明和2（1765、『和語真宗法要』所収、大谷大・竜谷大）
3、文化8（1811、『真宗仮名聖教』所収、大谷大・竜谷大）
4、万延1（1860、未調査）
刊本の奥書刊記：1、承応三甲丑暦（1654）孟春吉祥、京極通円福寺、秋田屋平左衛門板行
2、夫決難聖道ノ万行ハヤウヤク正像ノムカシニカキリ、唯有浄土ノ一門ハトヲク澆季ノ今ニ通ズ、上古ノ聖人ハ自力ヲハケムテ開悟シ、末世ノ凡愚ハ他力ヲ信シテ往生ス、ココニ吾大法主高祖古徳ノ慈訓ヲ纂輯シ若干巻トナシ、カツ校正ヲクハヘコレニ題シテ真宗法要トイフ、コレカミ仏祖先徳ノ広恩ヲ謝シシモ、生死ノ群生海ヲ度センカタメナリ、コレスナハチ念仏往生ノ真法証大涅槃ノ至要ナリ、マコトニコノ文ノ名ソレユヘアルカ、ソモソモコノ書ノ中或一部或二部国字ヲ安スルニ尋常ニ違スルモノアリ、コレモマタ先哲ノ筆蹟ニシタカフ、後ノ学侶疑端ヲナスコトナカレ、ココニ其書ノ成ヲヨロコヒテ毫ヲソメテ巻尾ニシルスト云爾、明和二年乙酉（1765）七月二十五日、釈文如（朱印）
3、文化八年辛未歳（1811）、本願寺蔵（朱印）
4、夫斯三種聖教者大祖聖人真翰而所秘在于宗刹宝庫、為厥慈訓乎、大悲摂化善巧万機普益要法包、豈可不珍敬奉持焉、今茲十一月有志謀上木寿梓流通于遐代、乃請大法主輪下蒙其許可在欲以報仏祖洪恩之一端、然及刻成使家伝戸読其勝縁利益不亦甚大矣哉、万延庚申（1860）冬十一月、権大僧都円崇謹撰、藤原信愿拝書、大祖和語之聖典（朱印）／先師遊泉院疾革謂弟子曰、死後莫煩樹碑唯望大祖之聖典公行於世、弟子敬承命、没後未幾而刻成、因縁師之、微意於斯云
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2654）、『浄土真宗聖典－原典版－』、『真聖全』2、『真宗聖典』、『定本親鸞聖人全集』和文篇、『親鸞聖人真蹟集成』3、『原典校註真宗聖典』、『新撰真宗聖典』
現代語訳書：「浄土三経往生文類」（『意訳真宗聖典』6、法蔵館、1956）、知切光歳「浄土三経往生文類」（『現代語訳親鸞全集』3、講談社、1974）、真継伸彦「浄土三経往生文類」（『現代語訳親鸞全集』3、法蔵館、1982）、石田瑞麿「浄土三経往生文類」（『親鸞全集』3、春秋社、1985）、益田恵真「浄土三経往生文類」（『傍訳親鸞聖人著作全集』5、四季社、2001）、「三経往生文類」（『浄土真宗聖典　三経往生文類　如来二種回向文　弥陀如来名号徳－現代語訳－』、本願寺出版、2005）
参考文献：吉谷覚寿『三経往生文類略述』（西村護法館、1903）、金子大栄「三経往生文類講義」（『真宗聖典講習録』1、1919）、藤原猶雪「親鸞聖人晩年の周囲に関する二三の史実」（『真宗史研究』、大東出版社、1939）、今井嘉照「興正寺伝来の『三経往生文類』について」（『真宗研究』4、1959）、浅野教信「三経往生文類に於ける伝統と己証」（『竜谷大学仏教文化研究所紀要』1、1962）、幡谷明『浄土三経往生文類試解』（真宗大谷派宗務所出版部、1992）、紅楳英顕『浄土三経往生文類（広本）講讃』（永田文昌堂、1995）、普賢晃寿「『浄土三経往生文類』の一考察－親鸞聖人の三経観－」（『真宗学』97・98、1998）、高田慈照『浄土三経往生文類講述』（永田文昌堂、2003）
解説：浄土真宗の宗祖親鸞の著述。本書には「建長七年乙卯（1255）八月六日」の奥書を持つ、所謂「略本」と、「康

元二年（1257）三月二日書写之」の奥書を持つ所謂「広本」とが伝来している。「略本」はもと横曽根報恩寺に伝来したが、室町期に本願寺に蔵され現在に至っている。親鸞真筆本で、「広本」は興正派本山興正寺に所蔵されており、親鸞真筆とする見解もあるが、これについては疑問視されている。又、明治44年（1911）に仏光寺から刊行された『真宗和語宝典』の中に、「文応元（1260）十一月三日愚禿善信八十八歳之」の奥書のあるものが収録されているが、この奥書を持つものについては同書にのみ収録され、他に写本等が発見されていない事などから疑問視される。

本書はその題名にもあるように「浄土三部経」の内容を、親鸞独自の思想とも言うべき三経差別門の立場に立って撰述したもので、『教行信証』のように顕彰隠密については述べていない。三経差別門とは、『無量寿経』を真実教、『観無量寿経』『阿弥陀経』を方便教とみるもので、『無量寿経』には第18願他力念仏・難思議往生、『観経』には第19願自力諸行・双樹林下往生、『阿弥陀経』には第20願自力念仏・難思往生が説かれているとする見方である。三経差別門の立場のみによって撰述された背景には所謂善鸞義絶事件の影響が考えられる。即ち、善鸞は「第十八の願をば、しぼめるはなにたとえて」（親鸞消息顕智書写）というように第18願を軽視したと伝えられており、それを正すことによって異義に混乱する関東門侶に真宗仏道の大綱を示そうとしたと推測される。

作成者名：藤田真隆

浄土三部経釈

書名よみ：じょうどさんぶきょうしゃく
書名別名：三部経釈、三部経講釈、三経釈、三経略釈、
異本書名：浄土三部経私記、浄土三経私記、三部経私記、三経私記
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本
写本所在：1、『漢語灯録』所収（『漢語灯録』の項を参照）
写本奥書：1、『漢語灯録』の項を参照
刊本所在：1、寛永9（1632、大谷大・名古屋市蓬左文庫・竜谷大）
2、承応3（1654、大谷大・京大・大正大・東洋大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、寛永九壬申（1632）暦姑洗中旬、松屋弥次兵衛
2、斯書先是雖流布于世文字訓点舛譌甚多今加訂正畢于剞闕之工云、承応三甲午（1654）暦初春吉日、井筒屋六兵衛板行之
活字本所載書：『無量寿経釈』の項を参照、『観無量寿経釈』の項を参照、『阿弥陀経釈』の項を参照、『漢語灯録』の項を参照
現代語訳書：『無量寿経釈』の項を参照、『観無量寿経釈』の項を参照、『阿弥陀経釈』の項を参照
参考文献：『無量寿経釈』の項を参照、『観無量寿経釈』の項を参照、『阿弥陀経釈』の項を参照
解説：浄土三部経を法然が解釈したもの。『無量寿経釈』・『観無量寿経釈』・『阿弥陀経釈』を所収する。

石井教道は、思想的に『逆修説法』・『選択集』より以前に成立したと推測する。古本『漢語灯録』第2、3巻末の識語によると、文治6年（1190）に、東大寺で講説したものとあるが、一方、岸一英によれば、その説に反対し、普段の講説の積み重ねたものと推論する。

本書は文献的に問題がある。すなわち、これら3書は、『選択集』の文が、後世になって流入したと今岡達音は主張する。更に岸一英は、『広本選択集』以外の文であっても、付加された新層の部分があることを示唆する。したがって、それら3書の原意を知るには、新層を除き、古層に注視する必要がある。

作成者名：角野玄樹

浄土宗三国伝来血脈譜

書名よみ：じょうどしゅうさんごくでんらいけちみゃくふ
書名別名：浄土宗三国伝来大血脈、大血脈、蓮門宗派、浄土惣系図
異本書名：浄土宗派承継譜
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：14c
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
写本所在：1、栃木益子円通寺蔵本（1506（永正3）、融舜授与、外題「浄土惣系図」）
2、愛知岡崎浄珠院蔵本（1611（慶長16）沢道授与）
3、愛知西尾養国寺蔵本（1654（承応3）、梅空授与）
4、井上慶龍氏蔵本（未調査）
5、京都誓願寺蔵本（1667（寛文7）、龍空書写）
6、大谷大蔵本（江戸初期、聞空書写、『蓮門宗派』所収第1図、金森善龍寺旧蔵）
7、竜谷大蔵（1915（大正4）、書写者不明、『浄土源流（章）図』所収第6図、山上正尊写本の転写本）
8、愛知岡崎真浄院蔵本（書写年不明、太田準悟書写）
写本奥書：1、永正三年丙寅（1506）三月九日融舜示之（花押）／浄土宗伝法空仰性秀
2、慶長十六辛亥（1611）年正月二十五日亀足山正覚寺沢道玄忠（花押）／浄土三国相承利存
3、時承応三年（1654）十月十五日三州法蔵寺住梅空授与教空祖典持之（花押）
4、（未調査）
5、本山誓願寺、時于寛文七丁未年（1667）四月二十五日龍空叟（花押）—典空—純格—光空—信空—高岳—広空—尋空—逸空—皎空—単空—疾空—亮空—頤空—高空—教空—励空—将空—三空—享空—哲空—立空—音空—祝空—暁空—凌空
6、天文十七年戊申（1548）十一月下旬写之畢
7、本書ハ宗教大学所蔵ノ原本ニヨリテ山上正尊ノ謄写シタルモノヨリ更ニ転写セシメタル者也、大正四年十二月真宗大谷大学図書館
8、（未調査）
刊本所在：1、貞享1（1684、大谷大・仏教大・岩瀬文庫、『浄土宗派承継譜』）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：野村恒道・福田行慈『法然教団系譜選』（青史出版、2004）
参考文献：伊藤真徹・宅見春雄『法水文流記・蓮門宗派』（恵谷隆戒跋、和装謄写版、1934）、河住玄『浄土宗古系譜』1（欣求庵、1973）
解説：著述年代の明記は無いものの、内容として現存最古

に位置付けられる浄土宗の法系譜である。もとは証空―浄音―観智―道空―阿道―理円―本智と相承した西山派西谷義内の一派にて成立したものと見られる。その後、西山派深草義、同派本山義等による書き入れを経て、いつしか西谷義の吾妻善導寺系統の師資相承の伝法の書として扱われるようになり、江戸初期まで書写と系譜の書き次ぎが行われた。

成立年代は、従来、大谷大蔵本の本奥書によって天文17年（1548）とされたり、最古写本である円通寺蔵本の永正3年（1506）が採られたりしているが、内部徴証によると南北朝時代以前である。深草流の道恵（？-1335、顕意の真弟）に関する注記に「此四五年先死去」とあるのは、暦応3年（1340）頃の書き入れと見られ、同じく深草流の比丘尼頓妙の注記にも「四五年先死去、暦応5年（1342）三月日京都同朋注下之」とあることから、この時期、深草義が本系譜に関与していたこと、そして最初の成立はそれを遡ることが窺える。

冒頭に浄土宗の所依として「釈迦大師―竜樹菩薩―天親菩薩―菩提留支三蔵―曇鸞法師―道綽禅師―善導大師―源空上人」の系譜とそれぞれの著作を示し、次に項を改めて「大覚世尊―弥勒菩薩・阿難尊者・舎利弗（この3師は並列）―馬鳴菩薩―竜樹菩薩―道綽禅師―光明大師―懐感禅師―法照禅師―少康法師―源信僧都―源空上人（「光明大師」より「源空上人」への直接のツリもあり）―善恵上人」と次第する祖師の略伝を記す。以下は、西谷義を始めとする西山派（流義名は明記せず。一時期、証空門下に属した長西の九品寺流を含む）・長楽寺義・鎮西義・一念義・その他の主な門弟・二字をたてまつった弟子・在家の弟子・或流の浄土宗祖師（羅什三蔵・恵遠大師・迦才法師・慈愍三蔵・永観律師等）・踊念仏（空也、一遍と以降4代の他阿弥陀仏、内阿弥陀仏、一向上人）の順に系譜を列挙する。

円通寺・浄珠院・養国寺の各蔵本は、それぞれ西山派の伝法の現場で書写されたものである。誓願寺蔵本は、西谷流から深草流に転派した龍空瑞山（1626-1707）によって書写され、龍空が中興した洛陽誓願寺の歴代の名簿として受け継がれた。

貞享1年（1684）禅林寺寰空貞準は、書写の労を省ぎ誤写を防ぐため、「浄土宗派承継譜」と改題して折本として開板した。その序文には『大血脈』（すなわち『浄土宗三国伝来血脈譜』）の開板だと明記するが、内容は大幅に改訂されている。この公開によって、本書は伝法書としての意義を失っていくこととなる。

ちなみに、『蓮門宗派』所収の2つの系譜のうち第1図は、天文17年（1548）写本を淵源とする本書の一写本に過ぎず、書名は後世に付けられた外題に依ったものである。

作成者名：稲田廣演

浄土宗名目問答

書名よみ：じょうどしゅうみょうもくもんどう
書名別名：浄土名目問答、鎮西名目、三巻名目、鎮西名目問答
著者名：聖光
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立翻訳年：12c-13c
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本
写本所在：1、竜谷大蔵本
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、元禄13（1700、大正大（2巻1冊）・東北大・仏教大・立正大・竜谷大・早稲田大）
2、刊年不明（大谷大（『奮迅鈔』と合本）・京都大・大正大・東洋大）
刊本の奥書刊記：1、元禄十三庚辰（1700）五月吉日武城増上寺前、玉屋次良右衛門版／天下和順日月清明風雨以時、浄土三国歴代祖師報恩謝徳高松原［■］武運倍増四大軽安
2、（未調査）
活字本所載書：『浄全』10
参考文献：今岡達音「浄土宗名目問答、解題」（『浄全』21）、柴田玄鳳編『三上人の研究』（三上人遠忌事務局、1935）、恵谷隆戒「宗義顕彰・鎮西、記主著作解題」（『浄全』10）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。

本書は、聖浄二門、専修門、正助二行、三心、四修、三種行儀等の要語について解説したものである。特に三心の解説は詳細であり、至誠心・深信・回向発願心のそれぞれを四句分別し、一向専修の念仏行者の用心について詳説している。また、一念義が邪義であることを力説して、臨終まで正念相続の念仏を強調している。

作成者名：米沢実江子

浄土宗要肝心集

書名よみ：じょうどしゅうようかんじんしゅう
書名別名：東宗要肝心集、肝心集
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖聖人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1287（弘安10）、上巻のみ（前19丁欠））
2、仏教大蔵本（1731（享保16）、上巻のみ）
3、大正大蔵本（1783（天明3）、書写者不明）
4、仏教大蔵本（書写者・書写年不明）
5、仏教大蔵本（書写者・書写年不明）
写本奥書：1、（参考文献参照）
2、（なし）
3、（未調査）
4、（なし）
5、（未調査）
参考文献：塚本善隆「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本」（『今岡教授還暦記念論文集』1933）、広川堯敏「良忠述『浄土宗要集』の成立をめぐる諸問題（一）」（『浄土学』34、1984）、南宏信「良忠撰『浄土宗要肝心集』上巻と『浄土宗要集』第二巻について」（『仏教大学大学院紀要』38、2010）、南宏信「東向観音寺蔵良忠撰『浄土宗要集』について」（『仏教論叢』54、2010）、米沢実江子「然阿良忠撰『浄土宗要肝心集』翻刻」（『仏教大学総合研究所

紀要』17、2010）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214（建保2）比叡山で受戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。
　本書（『肝心集』3巻）は、20の問答によって浄土宗義を明らかにするものであり、良栄の『東宗要見聞』によれば、良忠は『東宗要』と『肝心集』を製作し、『肝心集』は『東宗要』の第2・3・4巻にあたる（『浄全』11、p.205下）とある。そこで本書（江戸期書写3巻本）と『東宗要』（『浄全』所収本）とを対比してみると、上巻（2問答）は『東宗要』第2巻（第8・9問答）、中巻（8問答）は『東宗要』第3巻（第11・12・13問答）と第5巻（第18問答）、下巻（10問答）は『東宗要』第4巻（第16・17問答）に相当しており、単純に「『東宗要』の第2・3・4巻が本書にあたる」とは言い難い（各問答については、広川堯敏論文参照）。又、法然をはじめ多くの諸師のことばが引かれており、法然法語の伝承を探る上でも重要である。
作成者名：米沢実江子

浄土宗要決

書名よみ：じょうどしゅうようけつ
著者名：隆寛（？）
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、法華経寺蔵本（鎌倉期、日蓮書写）〈影印版〉:『日蓮聖人真蹟集成』13（未調査）
写本奥書：1、浄土宗要決校了
活字本所載書：山中喜八稿「史料紹介日蓮聖人親写本「浄土宗要決巻中」」（『日本仏教』11、1962）
参考文献：松野純孝「日蓮書写「浄土宗要決」について」（『日本仏教』11、1961）、松野純孝「日蓮書写の「浄土宗要決」について（補遺）」（『日本仏教』13、1962）
解説：日蓮書写の浄土関係の書である。内容は松野純孝によると、隆寛もしくは隆寛門流であろうと指摘されている。その根拠として『明義進行集』にひかれる「賜雅成親王令旨其御問状是也」の請文、「得生西方義」と同一の文が同書には存在し、また内容的にも本願を口称念仏として三心を重視する点、大経の胎生と観経の九品を同一とみることを良源の『九品往生義』の文を論証することが『極楽浄土宗義』にもみられることや、辺地往生や廻心といった隆寛教義の特色が、本書と一致する点としてあげられている。成立は雅成親王への書状が見える事から承久3年（1221）以降の著作であろう。現存するのは中巻のみ。「別限一宗明起行根源」として41の問答が記される。日蓮の浄土教（専修念仏）解釈をさぐるうえにも貴重な書といえる。
作成者名：伊藤茂樹

浄土宗要集

書名よみ：じょうどしゅうようしゅう
書名別名：西山宗要、〈西山流義〉浄土宗要集
著者名：然空（問）／顕意（答）
著者名よみ：ねんくう／けんに
著者名別名：公海已講、故海已講、名願／道教房、公空、記主、聖恵
著者生没年：1236（嘉禎2）-1282（弘安5）／1238（暦仁1）-1304（嘉元2）
成立翻訳年：1281（弘安4）-1284（弘安7）
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（江戸中期、大輪（真宗大谷派）書写、巻下のみ）
写本奥書：1、已上大綱四十八蓋寄本願之頭数綱目四百余擬生未学之慧解留贈於劫末共期往生矣、弘安四暦辛巳歳（1281）冬十月上旬於西山北尾往生院本浄房記之、西方行者然空四十六／件問者故海已講回心浄土之後所集也、然彼山門之学侶其才被人知焉、愚者郊外之隠士其名不顕矣、爰奉厳命慈注管見、問端多不審加以致反質、已講若存或容承諾、遺弟見者恐謂不然、伏乞一経高覧早埋壁底、必有紕繆潜垂糺正、顕意恐惶謹言、弘安七年（1284）二月上旬記之／陽西光明寺会下而書写之、于時寛文七丁未暦（1667）六月中旬日、沙門慶屋之、浄土宗要集巻三終／右於文字訓点等雖有不審如本書写畢、墨付卅三葉、正徳五暦（1715）正月上旬之日、恵海／於京兆高倉御学寮写之〈雲処堂舎中高田超願寺〉大輪
刊本所在：1、貞享3（1686、西山短大・大正大・竜谷大）
2、明治11（1878、大谷大・竜谷大）
3、刊年不明（東洋大哲学堂・竜谷大・高野山真別所）
刊本の奥書刊記：1、今此宗要一部三巻者故海已講発起問端記主上人施設答釈、依扣彼雷門既発斯蟄戸、可謂同気相求同聲相応矣、蓋以初自教相終至雑部、大綱四十八以極其規模之大綱、目四百余以尽其筋目之詳、門門掣開幽関顕示深奥條條捃摭精華結成至実、文撮簡要義明宗致樹名宗要豈唐捐乎、因茲後学者講習討論無不斯書之成功、所謂霧海南針夜途北斗者哉、近頃余門学徒將鏤梓行于世、携旧本来請余考正、輒披覧之数審詳之、文字之脱増惟夥訓点之錯誤不少、逐添削余闕以充其志願、庶幾遠流法水普潤後昆、大悲伝化真報佛恩而已、惟時貞享三年龍集丙寅仲春十九日、西山流深草派本山圓福現住行空誌之
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2629）
解説：然空と顕意による問答集。然空名願（1236-1282）は、天台宗妙観院僧正経海の門弟で、公海已講と呼ばれたが、後に遁世して西山深草派祖立信の門に入った。弘安4年（1281）10月上旬、然空が西山往生院において浄土宗義に関する論題をまとめたのが本書の設問部分である。しかし然空は、翌弘安5年（1282）47歳で往生を遂げてしまう。2年後の弘安7年（1284）2月上旬、「厳命」（おそらく立信の指示）により、同門の顕意がこれに回答を付した。
　この営みは、西山流祖証空によって往生院に興隆され、後に本山義の示導・実導らによって受け継がれる問答論義（『西山上人縁起』）の一環であったと推測される。
　本書の構成は、浄土宗義を機（巻上）・行（巻中）・身土・雑（巻下）の四分野に分けて、大綱48箇条と細目432箇条、計480箇条の論題を掲げる。一例を挙げれば、第1条「浄土宗意、立幾教相判一代耶」の大綱の下に、「捨聖道諸行一向専称名号、猶可有名自力耶」「聖道浄土二門、実有難易勝劣不同耶」など8箇条の細目が並ぶ。顕意は、これに一々答釈を記しているが、設問そのものの不備を批判してい

る箇所もある。問者が故人であるため、基本的に一問一答の形式である。
　本書は、浄土宗、特に西山深草義の重要な論点を、広範囲にわたってテーマ別に一覧できるという点にその特徴がある。
　貞享3年（1686）版とその復刻である明治11年（1878）版には目次や各項目の条数が付されているが、大谷大所蔵写本によると、それらは出版にあたって付加されたもののようである。
作成者名：稲田廣演

浄土宗要集

書名よみ：じょうどしゅうようしゅう
書名別名：鎮西要集、鎮西浄土宗要集、西宗要
著者名：聖光
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立翻訳年：1237（嘉禎3）
成立地：日本
巻数：6
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本所在：1、鎌倉光明寺蔵本（聖誉慶順書写）
写本奥書：1、享徳四年（1455）乙亥卯月二十七日書写之功畢、沙門聖誉慶順／本云、乾元元年（1302）十二月二十五日於相州鎌倉極楽寺坂下写之初也／于時享徳三年（1454）十二月十二日［■■■■］（『浄土宗大辞典』2より）
刊本所在：1、寛永10（1633、大谷大・早稲田大（巻2欠）・大正大・東京大・竜谷大・秋田大（3冊）
2、寛文6（1666、仏教大）
3、天保2（1831、大谷大・京都大・早稲田大・京都府立総合資料館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『浄全』10、『増補改訂日本大蔵経』90（No.586）
参考文献：今岡達音「浄土宗要宗（解題）」（『浄全』21）、柴田玄鳳編『三上人の研究』（三上人遠忌事務局、1935）、恵谷隆戒「宗義顕彰・鎮西、記主著作解題」（『浄全』10）
解説：浄土宗第二祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。
　本書は、1237（嘉禎3）4月20日筑後国上妻の天福寺における聖光の講述を弟子の良忠が筆記したものである。第1巻では第1浄土三部経事、第2浄土論事、第3一向専修事、第4専雑二種得失事、第5別事意趣事等について、特に三経一論を中心に一向専修の口称念仏こそ仏の本願に随順した往生業である所以を明らかにしている。第2巻では第6浄土本経證誠事、第7随自意事、第8頓教一乗事、第9安心起行事、第10願行具足事、第11三心具足事、第12四修事、第13観経定善機事、第14散善機事、第15双観経三輩散善機事、第16阿弥陀経念仏往生機事、第17般舟念仏三昧機事、第18般舟教自説往生事、第19鼓音声陀羅尼経往生事、第20十方随願往生機事、第21諸大乗経往生事、第22読誦大乗事、第23散善義趣事、第24持戒往生事、第25横截五悪趣事、第26五悪五痛五焼事、第27真身観事、第28二菩薩観事、第29発菩提心事、第30女人往生事、第31我見是利事、第32多善根事、第33三定聚事等によって往生浄土の機について詳説してある。第3巻には、第34無生法人事、第35四事供養事、第36特留此経事、第37極楽菩薩悉皆金色事、第38具三十二相事、第39大乗善根界事、第40七宝荘厳事、第41報身報土事、第42十方浄土与極楽勝劣事、第43辺地胎生事、第44双巻経付属流通事、第45観経付属流通事、第46阿弥陀経付属事の12論題について詳述してあり、特に「浄土三部経」の付属の文に重点を置き、本願念仏こそ浄土往生の要行である所以が説いてある。第4巻には、第47汝若不能念事、第48尋常念仏事、第49別事念仏事、第50臨終念仏事、第51本尊本経可安置事、第52十悪罪人往生事、第53破壊人往生事、第54唯叙五逆事、第55観音勢至勧進念仏事、第56天竺念仏祖師事、第57震旦念仏祖師事、第58念仏三昧発得事、第59念仏信不信機事、第60往生因縁待対法門事、第61聖道浄土二門事の15論題について論述しており、特に尋常、別事、臨終の念仏往生や、五逆十悪破戒の往生並に印度・中国などの念仏の祖師のことについて述べている。第5巻には、第62難行道易行道事、第63自力他力事、第64第十七願事、第65第十八願事、第66第十九願事、第67第二十願事、第68四誓事、第69選択本願事、第70四十八願事、第71念仏仏出世本懐事、第72三世諸仏浄業生因事、第73念仏有五種増上縁事、第74念仏行者懺悔罪障事、第75念仏行者可用心事、第76念仏行者六度内外事の15論題について釈明してあり、特に難行易行、自力他力の問題や本願の問題や念仏が仏出世の本懐であり、三世諸仏の浄業生因である所以を明らかにしている。第6巻には、第77往生善知識事、第78念仏行者可捨驕慢心事、第79念仏行者自宗他宗三宝可仰事、第80念仏行者直心広大以慈悲勧進一切衆生等事の4論題について解説してあり、特に念仏行者の用心について説いてある。（恵谷隆戒「宗義顕彰・鎮西、記主著作解題」（『浄全』10）より）
　本書は鎮西白旗派において、伝書として重視されていたもので、刊行されたのは1633（寛永10）が最初である。
作成者名：米沢実江子

浄土宗要集

書名よみ：じょうどしゅうようしゅう
書名別名：東宗要、宗要論義、鎌倉宗要、鎌倉浄土宗要集、浄土宗要義
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖聖人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1282（弘安5）-
成立地：日本
巻数：5
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大正大蔵本（未調査）
2、京都東向観音寺蔵本（北野天満宮内、1冊、如導（～1357）書写）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
刊本所在：1、寛永10（1633、大正大・竜谷大）
2、寛永12（1635、仏教大）
3、慶安4（1651、大谷大）
4、貞享3（1686、大正大）

5、文政2（1819、大谷大・大正大・仏教大・立正大・竜谷大）
6、天保2（1831、大正大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
活字本所載書：『浄全』11
参考文献：今岡達音「浄土宗要集5巻　解題」（『浄全』21）、石橋誠道「東宗要について」（『摩訶衍』14、1934）、服部英淳「三代相伝の要義と異義に関する述作　解説」（『浄全』11、1974）、広川堯敏「良忠上人述『浄土宗要集』の成立をめぐる諸問題（二）—西山義との対論—」（良忠上人研究会編『良忠上人研究』大本山光明寺、1986）、東向観音寺史料調査団「東向観音寺史料目録（一）」（『東京大学日本史学研究室紀要』9、2005）、南宏信「良忠撰『浄土宗要肝心集』上巻と『浄土宗要集』第二巻について」（『仏教大学大学院紀要』38、2010）、南宏信「東向観音寺蔵良忠撰『浄土宗要集』について」（『仏教論叢』54、2010）、
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214（建保2）比叡山で受戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。
　本書（以下『東宗要』）は、聖光撰述の『浄土宗要集』（「鎮西宗要」「西宗要」）に対して名称の混同を避けるために、「東宗要」「鎌倉宗要」と呼称される。
　本書は、良栄の『浄土宗要集見聞』によれば、良忠の弟子の慈心（？-1297）・礼阿（？-1297）の請いによって撰述された。（良忠撰『浄土宗要肝心集』（3巻）は、本書の第2・3・4巻にあたるということである（『浄全』11、p.205下）。本データベース『浄土宗要肝心集』参照）また本書の成立は、『安楽集私記』への言及があることから、『安楽集私記』撰述（1282）後良忠が亡くなる1287年（弘安10）までの5年の間であろう事ことが推測される。
　本書は24の論題から成っており、経論や中国浄土教の人師の説にとどまらず、勝願院（良遍）の説をはじめ、倶舎・唯識・法相・維摩等、多くの説を援用して念仏による凡夫の往生について述べるものである。
作成者名：米沢実江子

浄土十六箇条疑問答

書名よみ：じょうどじゅうろっかじょうぎもんどう
書名別名：十六箇条疑問答
著者名：尊観
著者名よみ：そんかん
著者名別名：良弁
著者生没年：1239（延応1）-1316（正和五）
成立翻訳年：1314（正和3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大正大蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、刊年不明（仏教大）
2、刊年不明（竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
2、（未調査）
活字本所載書：『浄全』11
解説：良暁の『口伝鈔』を読んだ尊観は良暁の教義に大いに疑義を感じ十六箇条にわたって良忠相伝の正義をしめそうとしたのがこの『浄土十六箇条疑問答』である。成立は正和3年（1314年）10月。尊観の主張する16箇条とは以下の通り。(1) 三心具足の念仏は初一念に業事成弁する (2) 本願の「乃至十念」は臨終のみでなく平生に通じるものである。(3) 極楽の化仏は、第三の真身である。(4) 第十八願は念仏正因の願で来迎はなく第十九願が臨終来迎の願である。(5) 順次往生の願は第十八願のみである。(6) 第三十五願の願体は転女成男をもって願体とする。(7)「設我得仏」は他受用身である。(8) 三心を具するものは諸行念仏をとわず往生できる。(9) 虚仮の行者が回心以前に修した行は往生の正因とならない (10) 正行は三心具足であり、雑行は三心不具の人である (11) 三心は念仏・諸行の通安心であるから第十八願の願体ではない。(12) 至誠心の多実少虚と虚実倶具は具三心の機ではなく、往生の機は定まらない。(13)「就行立信」は『伝通記』において第三義あるなか第一義を正義とする。(14)『観経』の下上品における「聞経」は決定の信心もなく回向発願もない。(15)『観経』下下品の教令念仏とは極悪罪人のために本願念仏を説く念仏であるので称名念仏である。(16)「接取不捨」とは本願（第十八願）の中に含まれる利益であって、別して摂取不捨の願があるわけではない。
　また、16箇条の補説として (1) 三心具足行者不惜身命否弁 (2) 心具行者日相続闕不弁 (3) 三心具行者意楽十悪造不弁 (4) 辺地往生安心観経三心同異弁 (5) 懈慢得生者三心具不弁 とした5つの疑問も付録として記されている。なお本書に対して良暁は『浄土述聞鈔』を書いて反論を行った。白旗・名越論争についての研究において『浄土述聞鈔』と本書は重要な書籍である。
作成者名：伊藤茂樹

浄土述聞口伝切紙

書名よみ：じょうどじゅつもんくでんきりがみ
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：不明
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、承応2年（1654、仏大・大正大）
2、天保11年（1840、京大）
3、刊行年不明（仏大・大正大）
刊本の奥書刊記：1、承応二年癸巳（1654）八月吉日吉田庄左衛門刊行之
2、（未調査）
3、（刊記なし）
活字本所載書：『浄全』11
解説：聖冏の『述聞鈔口決』には、良暁が千葉海上一族の船木禅門に請われて称名寺に3年滞在しその間浄土教講述に励んだが、良忠から相伝した念仏義の正統性を示す為に『口伝鈔』を撰述したことが記されている。本書はその『口伝鈔』の異本とされるものであり、現存する書は版本のみである。内容は浄土宗義の口伝十一箇条について問答料簡

したものである。(1) 三心業成付同異一念十念滅罪多少引文之事 (2) 業事成弁諸行念仏前後成之事 (3) 極楽樹下三尊並中下六品来迎仏者是為第二身為第三身之事 (4) 十八念仏往生機不假来迎願力不往生歟耶之事 (5) 三生已下往生二十願益歟十八九願益歟之事 (6) 虚仮行人改転其心後廻向以前所修行廻向浄土可成往生之因歟之事 (7) 専雑二修相対判十三得失於三心具上論歟之事 (8) 三心本願歟乎之事 (9) 就行立信在三義中何為正義乎之事 (10) 三心具之行者可有不生類歟之事、(11) 因横竪三心差別之事となっている。本書の元になる『口伝鈔』は東寺宝菩提院蔵『十箇条口伝肝心鈔』と大正大学蔵の『十箇条肝心集口伝』であるが、内容的に先の2冊が10箇条に対して本書は11箇条と三心業成についての1項目を分断するかたちを取っており、他の内容にも異同がある。(櫛田良洪「東寺宝菩提院の浄土教資料について」)『口伝鈔』をもとに近世以降にこのようなかたちにまとめられたことが考えられる。なお現存の版本は『述聞見聞』と合冊である。
作成者名：伊藤茂樹

浄土述聞見聞

書名よみ：じょうどじゅつもんけんもん
書名別名：述聞見聞
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：1321（元亨1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、鎌倉光明寺蔵本（1324（元亨4）、良暁真筆本）
写本奥書：1、述聞見聞以口筆委細令伝授畢、聊爾不可及他見之条如件、元亨四年甲子（1324）九月四日、良暁在判
刊本所在：1、承応2（1654、仏教大・大谷大）
2、天保11（1840、仏教大・大谷大）
3、刊年不明（仏教大）
刊本の奥書刊記：1、述聞見聞以口筆委細令伝授畢、聊爾不可及他見之条如件、元亨四年甲子（1324）九月四日、良暁在判
2、（未調査）
3、述聞見聞以口筆委細令伝授畢、聊爾不可及他見之条如件、元亨四年甲子（1324）九月四日、良暁在判
活字本所載書：『浄全』11
解説：本書は一条派の礼阿の門弟である清源が良暁の口筆をまとめて執筆した書である。『述聞鈔』と『述聞追加』の内容からあらたに補説し30項目に再編集した書である。『浄土述聞鈔』との内容に関しての『述聞鈔』『述聞追加』からの合致する点をあげれば以下の通り。

①の項目からは　1、重心造事　2、但竹谷云三心具念仏即通惣業等事　3、凡夫生浄土雖専由願力等事　4、業成以前念仏不成念仏往因等事　5、道綽道生二人為業成証等事　6、一切逆人等事　7、若限蒙霊告等事　②8、本願乃至十念之十念者限臨終等事　③9、提婆城等事　10、次及化仏者難主伴倶報身等事　④11、第十八願機若無来迎願不可往生等事　⑤12、問二十願所乗機中至第二生等事　⑥13、説我得仏之仏者自他受用等事　⑦14、虚仮行者改転意楽後乃至可成往因等事　15、勝義等四種善事　⑧16、専雑二修得失等事　⑨17、第十八願三心即本願等事　⑩18、伝通記中付就行立信等事　『述聞追加』には①19、浄土宗義事②20、観念法門立観仏念仏両三昧事　21、三経所説念仏般舟経別時念仏等事　③22、論五門中作願廻向等事　④23、道綽和尚別時意等事　⑤24、経云光明遍照事十方乃至不捨等事　⑥25、意楽起悪随犯随懺等事　⑦26、阿弥陀経諸仏証誠等事　⑧27、三十五願転女成男願云女人往生願等事　⑨28、三心為大乗心哉　⑩29、付観無量寿経題等事　⑪30、三心具機可有不生類等事である。(①～⑩の記号は『浄土述聞鈔』『述聞追加』の項目の順番による。それぞれ参照。)

良暁の講述は『述聞見聞』の本文中に「『鈔』曰」とみえることから『述聞鈔』を手元においての講述のようである。尊観に対しての批判だけなく、道光や礼阿に対しての批判も多く見えている。写本が鎌倉光明寺にある。刊本は『浄土述聞口伝切紙』と合冊。
作成者名：伊藤茂樹

浄土述聞鈔

書名よみ：じょうどじゅつもんしょう
書名別名：述聞、述聞鈔、述聞論義
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：1313（正和2）-1321（元亨1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、東大史料編纂所蔵本（1642（寛永19）、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、承応2（1654、仏教大・大谷大）
2、天保11（1840、仏教大・大谷大）
刊本の奥書刊記：1、已上十箇条先師相伝也、良暁在判、浄土述聞鈔一巻
2、已上十箇条先師相伝也、良暁在判、浄土述聞鈔一巻　/ 此鈔製作之時年未詳或云元亨元年述也、蓋雖有異本先元亨二年梓行之而後承応三年（1655）改版之今亦再刻之然間有誤脱更正之者則於帖数有延促故悉復旧版而誤脱者以傍註而補治之云、干時天保十一年庚子（1840）仏成道日、三縁山蔵版
活字本所載書：『浄全』11
解説：本書は白旗派の祖である良暁の書である。良暁は鎌倉光明寺2世、浄土宗では第4祖また白旗派の派祖とされる。『鎌倉光明寺文書』には良忠の実子とみえる。石見国三隅庄の出身。はじめ比叡山に登り仙暁について『法華玄義』・『法華文句』を学ぶが、良忠大病の報により鎌倉に下り、悟真寺の房地と寺領を良忠よりゆずられ、以後は鎌倉で活動した。この間に、浄土章疏、明王院相伝の『釈摩訶衍論』10巻、また『慈行鈔』を良忠から授けられ、大仏時遠の信頼をえて鎌倉に強固な基盤を確立した。良忠が京洛の門弟の請により上洛した際には、性心や尊観らと一緒に良忠より奥義の相伝をうけた。良忠が関東に下向した後には、袈裟と硯、また法然聖光良忠と相伝された『阿弥陀経』、さらには『伝通記』をはじめとした良忠撰述の書物を相伝され、良忠の後継者としての立場を明確にした。

本書の撰述は以下の通り。正和2年（1313）の秋、下総国海上船木の中務禅門の請いによって称名寺に滞在していたが、良暁はその滞在中の3年間に毎日講述を行った。講述において良忠門下の異議を述べるなか、自身の相伝の正統性を示すために『口伝鈔』を書いた。この『口伝鈔』を

尊観の弟子の南無阿弥陀仏が書写し尊観にみせると、尊観はこれに対し『浄土十六箇条疑問答』の書物を作り、良暁の説を批判した。その尊観の説について論破したのがこの『浄土述聞鈔』である。良暁の主張は以下のような10箇条からなる。(1) 三心具足の念仏は初一念に業成するのでなく、業成は一念多念平生臨終に通じ、機根にしたがって遅速があるとする多念業成。(2) 本願の「乃至十念」は平生ではなく臨終の十念に限るものである。(3) 極楽の樹の下の三尊、円光化仏、中品下品の来迎仏は真身でなく化身である。(4) 第十八願には来迎の願も含まれる。(5) 順次往生は第十八願のみ。(6)「設我得仏」の「仏」は自受用身である。(7) 虚仮の行者が回心前に修した行も回心後に往生の因となる。(8) 心行具足した念仏こそが本願行である。(9) 第十八願の三心は本願の当体である。(10)『観経疏伝通記』における就行立信の釈は第三義を相承の正義とする。巻末に弘安10年（1287）5月の先師良忠自筆の置文を掲げ、「已上十ヶ条先師相伝也」と奥書し、先師良忠からの正統相伝を根拠として白旗の正統性を主張している。補足として『浄土述聞追加』『浄土述聞見聞』があり、名越・白旗の両流においても末書が多くみられる。なお成立は補足として書かれた『浄土述聞追加』が元亨2年（1322）であることから『浄土十六箇条疑問答』が書かれた正和3年（1313）年10月の後である。
作成者名：伊藤茂樹

浄土述聞追加

書名よみ：じょうどじゅつもんついか
書名別名：述聞追加、述聞論議追加
著者名：良暁
著者名よみ：りょうぎょう
著者名別名：寂恵、知恵光、白旗上人、坂下上人
著者生没年：1251（建長3）-1328（嘉暦3）
成立翻訳年：1322（元亨2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、承応2（1654、仏大・大谷大）
2、天保11（1840、仏大・大谷大）
刊本の奥書刊記：1、右任先師相承之旨所註也、早守相伝莫令遺失仍為後日之証誡所録如件、承応三甲午年正月吉日、良暁在判　吉田庄左衛門刊行
2、右任先師相承之旨所註也、早守相伝莫令遺失仍為後日之証誡所録如件、元亨二壬戌暦（1322）十月八日、良暁在判　/干時　天保十一年庚子（1840）十二月重刊　製本書肆　尚古堂
活字本所載書：『浄全』11
解説：元亨2年（1322）に良暁が『浄土述聞鈔』の欠を補足した書物である。(1) 浄土宗事 (2) 三経與般舟経別時念仏同異事 (3) 浄土論作願廻向二門事 (4) 道綽別時意事 (5) 摂取不捨本願否事 (6) 意楽起悪事 (7) 阿弥陀経証誡事 (8) 転女成男願事 (9) 三心為大乗心事 (10) 観経題事 (11) 三心具有不生類事の11箇条ある。なお古写本は現存せず刊本のみ。刊本では『浄土述聞鈔』と合冊になっている。
作成者名：伊藤茂樹

浄土徹髄抄

書名よみ：じょうどてつずいしょう
書名別名：徹髄抄、徹髄鈔
著者名：聖聡
著者名よみ：しょうそう
著者名別名：大蓮社酉誉聖聡、酉師、酉公、聡師
著者生没年：1366（貞治5）-1440（永享12）
成立翻訳年：1421（応永28）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、承応3（1654、大正大）
2、承応3（1654、大正大）
刊本の奥書刊記：1、干時承応三年（1654）申午二月吉祥日　吉田庄左衛門
2、干時承応三年（1654）申午暦孟吉祥　京極通円福寺町　秋田屋平左衛門板行
活字本所載書：『浄全』13
参考文献：石橋誠道「解題」(『浄全』21)、坪井俊映「解説」（新『浄全』13)、石橋誠道『仏書解説大辞典』8、『浄土宗大辞典』2、丸山博正『浄土徹髄抄』(『聖聰上人典籍研究』、山喜房仏書林、1989)
解説：浄土宗の教義的な奥旨を簡潔にまとめた聖聡の書。著作の契機や成立年代は不詳。本書の内容は次に挙げる17の問答からなる。(1) 法性深高の妙理を報応の2身に極めて知るべきか。(2) 衆生の法性は隋縁遊戯して生死に流転している。そうであるならば修行して法性妙理に帰したとしても、隋縁により流転すると言うべきか。(3) 一行三昧の証文をどのように心得るべきなのか。 (4) 念仏は万行に超過すると言うべきか。(5) 権実にいう仏果の想はどのように心得るべきか。(6) 自受用身と智法身との違いをどのように心得るべきか。(7) 文殊菩薩は覚母であるという経文が存在するが、何故弥陀が三世の覚母であると言うのか。(8) 俱体俱用三身について。(9) 真言は下根を度さない故に難行道と言うのか。(10) 第四果の無余証得の声聞はどのようにして往生できるのか。(11) 弥陀の智体は諸宗の理体に帰すというべきなのか。(12) 浄土宗では九識を立てるのか。(13) 光明に摂取されるのは念仏の行者だけなのか。(14) 曇鸞・道綽の教相に対して、善導の二蔵二教判はどのように位置づけられるのか。(15) 十住論には十方十仏にそれぞれ光明名号の願があると説かれるのに、どうして弥陀の本願は超世であると言うのか。(16) 総じて報土とは、無三悪趣・不悪趣であり、また寿命無量・三十二相を具足していると言うのに、どうして法蔵はさらに別願を立てているのか。(17) 第二十願が三生果遂となる道理の文証は何か。所論の特徴は、顕密の教説を引きながらも浄土宗の教理の優越性を述べたところにある。本書の中には「秘すべし秘すべし」「他見すべからず」などとあるように、広く外に向けられた書ではなく教団内部で用いられたことが推測される。
作成者名：東海林良昌

浄土法門源流章

書名よみ：じょうどほうもんげんるしょう
著者名：示観房凝然
著者名よみ：じかんぼうぎょうねん
著者生没年：1240（延応2／仁治1）-1321（元応3）
成立翻訳年：1311（延慶4／応長1）
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：刊本
活字本

刊本所在：1、寛永10（1633、大正大）
2、明暦3（1657、大谷大・大正大）
3、文化11（1814、京都大・日本大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『浄全』15、『大正蔵』84（No.2687）、『群書類従』（続、伝部202巻31輯下）
解説：著者は伊予の出身で鎌倉後期の東大寺の学僧である。著書に『八宗綱要』、『三国仏法伝通縁起』といった高名な仏教史概論がある。特に日本仏教概論である前者において、南都六宗に平安期の天台、真言を述べた後、付記として当時大きな勢いを得ていた浄土教と禅宗について略説しているが、本著においては、その浄土教に絞って、インド、シナ、日本の三国にわたるその起源と伝承についてその綱要を明らかにし、法然とその門下における流派を述べている。さらに南都や天台の浄土教にも言及している。原奥書には、応長1年、著者72歳のとき東大寺戒壇院にて著作したという。

まず、浄土正依の経論として、三経、一論を挙げる。次に、弘通浄教祖裔次第として、(1) インドにおける二十四祖の相承、文殊の相承、弥勒の相承を挙げる。(2) シナにおける三蔵の伝持、血脈不転、五祖（ないし六祖）の相承、別依の善導の立場を説く。(3) 日本における始祖法然の教化、浄土教の興起を明らかにしてから、その門下の五つの流派として、幸西の一念義流、隆寛の多念義流、証空の西山流、弁長の鎮西流、長西の諸行本願義の繁栄を述べている。

註釈文献として、帰命院懐山の『解蒙』、了蓮寺文雄の『索隠』がある。
作成者名：藤仲孝司

浄土文類聚鈔

書名よみ：じょうどもんるいじゅしょう
書名別名：文類聚鈔、略文類、略典、略本
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：12c末-13c半ば
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、滋賀光延寺蔵本（1309（延慶2）、書写者不明）〈影印版〉:『御真筆浄土文類聚鈔発見記　添付御真筆浄土文類聚鈔複写本』（竹下学寮出版部、1934）
2、新潟光源寺蔵本（1434（永享6）、蓮如書写）
3、東本願寺蔵本（室町初期、書写者不明）
4、愛知満性寺蔵本（室町初期、書写者不明）
5、岸部武利氏蔵本（室町中期、書写者不明）
6、京都常楽寺蔵本（室町中期、書写者不明）
7、滋賀福田寺蔵本（室町中期、書写者不明）
8、西本願寺蔵本（室町末期、書写者不明）
9、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
10、高田専修寺蔵本（戦国期、真智書写）
11、大谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
12、岸部武利蔵本（室町末期、未調査）
13、滋賀県慈敬寺蔵本（室町末期、賢心書写）
写本奥書：1、延慶二年ツチノトノトリ（1309）正月二十日
2、永享六年（1434）五月十二日書写畢、釈蓮如
3、建長七歳（1255）七月十四日書之、愚禿釈親鸞八十三歳
4、（奥書なし）
5、（奥書なし）
6、（奥書なし）
7、建長七歳乙卯（1255）七月十四日是ヲ書、愚禿親鸞八十三歳
8、（奥書なし）
9、（奥書なし）
10、建長四年（1252）三月四日親鸞八十歳
11、本云／正喜元年林鐘四日書写之、本奥書聖人以朱被染御筆、愚禿親鸞八十五歳点之
12、（未調査）
13、本云／歴応三歳庚辰四月二十三日本願寺聖人以被染筆真名正本依頼主所望雖避以和字所延写也、他見在憚而已
刊本所在：1、慶長7（1602、大谷大・竜谷大）
2、寛永13（1636、大谷大・竜谷大）
3、天保3（1832、大谷大）
4、天保14（1843、大谷大・竜谷大）
5、天保15（1844、竜谷大）
6、嘉永7（1854、竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、右斯文類聚鈔者為末代興隆板木開之者也而已、慶長七壬寅年（1602）極月日、（竜谷蔵本にのみ准如花押）
2、寛永丙子（1636）仲冬吉旦、西村又左衛門新刊
3、寛永丙子（1636）仲冬新刊、天保壬辰（1832）初夏再刊、皇都書林、東六条下珠数屋町丁字屋、西村九郎右衛門
4、天保十四稔癸卯（1843）八月御開版、調進所、有慶堂、室町通高辻北、中嶋利左衛門
5、天保十五甲辰（1844）四月、東六条下珠数屋町、丁字屋九郎右衛門梓行
6、御本山御用、御学寮御用、真宗御書物所、京東六条下珠数屋町、丁字屋九郎右衛門
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2647）、『真聖全』2、『浄土真宗聖典－原典版－』、『真宗聖典』、『定本親鸞聖人全集』漢文編、『新編真宗聖教全書』5　親鸞聖人集1、『真宗史料集成』1
現代語訳書：石上玄一郎「浄土文類聚鈔」（『現代語訳親鸞全集』3、講談社、1974）、真継伸彦「浄土文類聚鈔」（『現代語訳親鸞全集』3、法蔵館、1982）、石田瑞麿「浄土文類聚鈔」（『親鸞全集』3、春秋社、1985）、梶山雄一「浄土文類聚鈔」（『大乗仏典』22、中央公論社、1987）、内記浄「浄土文類聚鈔」（『傍訳親鸞聖人著作全集』4、四季社、2001）
参考文献：伊藤義賢『御真筆浄土文類聚鈔発見記　添付御真筆浄土文類聚鈔複写本』（竹下学寮出版部、1934）、村上速水「広略前後の問題についての一視点」（『竜谷大学論集』393、1970）、稲葉秀賢『浄土文類聚鈔の研究』（文栄堂書店、1981）、普賢晃寿『浄土文類聚鈔概説』（永田文昌堂、1982）、渡辺了生「『浄土文類聚鈔』の成立考」（『真宗研究』39、1995）、徳永一道『浄土文類聚鈔講讃』（永田文昌堂、）、広瀬惺『『浄土文類聚鈔』に学ぶ－序・正釈・「散説段」－」（真宗大谷派出版部、2004）
解説：浄土真宗の宗祖親鸞の著作。光延寺蔵本を親鸞真筆とする見解もあったが、現在では本書の真筆本は現存しないとするのが定説である。

本書の執筆年次については、本書奥書の文言や『教行信証大意』に「このゆゑに親鸞聖人、一部六巻の書をつくりて『教行信証文類』と号して、くはしくこの一流の教相をあらはしたまへり。しかれども、この書あまりに広博なる

あひだ、末代愚鈍の下機においてその義趣をわきまへがたきによりて、一部六巻の書をつづめ肝要をぬきいでて一巻にこれをつくりて、すなわち『浄土文類聚鈔』となづけられたり。」とあること等を根拠として親鸞の晩年とされてきた。しかし戦後、研究の進む中で、本書に使われている用語や全体構成などから、本書撰述は親鸞晩年ではなく、壮年期、もしくは『教行信証』執筆以前ではないかとする見解が現れた。一般に前者を広前略後説（広は『教行信証』、略は本書）（村上速水・稲葉秀賢・広瀬惺など）、後者を略前広後説（普賢晃寿など）と呼んでいる。近年では『教行信証』執筆以前に本書草稿が成立し、『教行信証』脱稿以降に本書が成立したとする渡辺了生の説なども提起されている。ただどの説も現段階では決め手を欠き、今後新資料の発見が期待される。

本書は、親鸞の主著とされる『教行信証』「教巻」「行巻」「信巻」「証巻」の内容を簡略化して、その大綱を示したものである。本書の特色としては、『教行信証』が多数の仏典・外典を引用するのに対し、本書では浄土三部経・龍樹・天親・曇鸞・善導の文が引用されているにすいぎない点、本願文を引用せず本願成就文を引用する点、『教行信証』「真仏土文類」「化身土巻」に対応するものを欠いている点、『教行信証』には教・行・信・証の四法がたてられるのに対し、本書では教・行・証の三法をたて、行の中に信を含む、所謂行中摂信として説かれている点、などが挙げられる。また『教行信証』「行巻」には有名な「正信念仏偈」があるが、本書にはそれによく似た「念仏正信偈」がおかれている点も本書の特色である。

作成者名：藤田真隆

浄土略名目図

書名よみ：じょうどりゃくみょうもくず
書名別名：浄土名目図
著者名：聖冏（図）／源空（説）／聖覚（記）
著者名よみ：しょうげい／げんくう／せいかく
著者名別名：酉蓮社了誉、冏師、聖冏禅師／法然、黒谷上人／安居院法印
著者生没年：1341（暦応4）-1420（応永27）／1133（長承2）-1212（建暦2）／1167（仁安2）-1235（文暦2）
成立翻訳年：1382（永徳2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、天文21（1552、京都大・長野寛慶寺・兵庫毫摂寺・大東急文庫、1丁）
2、寛永20（1643、竜谷大）
3、正保2（1645、竜谷大）
4、寛文4（1664、東北大狩野文庫・竜谷大）
5、刊年不明（大谷大・大正大・東洋大哲学堂・蓬左）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、寛永二十（1643）癸未仲春吉旦二条玉屋町村上平楽寺
3、正保二年（1645）
4、寛文四（1664）甲辰年十月中旬井筒屋六兵衛彫刊之
5、（刊記なし）
活字本所載書：『浄全』12
参考文献：服部英淳「解説」（『浄全』12）
解説：聖冏が、全仏教の中における浄土宗義の地位を明らかにしようと著した書。本書は「法然説・聖覚記・聖冏図」との撰号を持っているが、法然の説法を聖覚が記したとされる『建暦法語』をもとに聖冏が図説したという意味であり、実際には聖冏の作である。

内容は、まず釈尊一代の聖教を判ずるに、「依教分宗」（経典各々に宗旨があること）と「依宗教別」（機根が格別で時代により教義も異なること）があるとする。次に『建暦法語』を引き、法然が、曇鸞（難易二道）・道綽（聖浄二門）・善導（二蔵二教）浄土宗を学ぼうとする者は、これら三師の釈義に帰するべきことを述べたとする。

特に善導の二蔵二教に関する詳細な図示があり、声聞全仏教を声聞蔵・菩薩蔵に大別し、声聞蔵を声聞乗・辟支仏乗・菩薩乗に分け、声聞乗に七賢七聖の十四位、辟支仏乗に部行と麟喩の二類、菩薩乗に初発心・行菩薩道・百劫・六波羅蜜・一生補処・成兜率天・八相成道の七位をあげる。また、菩薩蔵に漸頓二教があり、漸教に初分教十地、後分教六位六十一地があるとし、頓教に性頓と相頓とを分別し、性頓教に立位・不立位の二門、相頓教に内因・外縁・往生品位の三門を立て、内因に安心・起行・作業、外縁に総願・別願・五種増上縁、往生品位に三輩・九品を挙げ、それぞれ詳細に図示し、浄土門は菩薩蔵頓教であり、頓中の頓であると結論される。

本書は、菩提流支『麒麟聖財論』、聖覚『建暦法語』を論拠として展開されることは、古来より問題とされるところである。しかし、禅宗から寓宗であるとの批判を受けた当時の浄土宗側からの賢明な対応であり、この時点における非常に有効な論であったことこそ注目されて良い。問題を指摘されながらも末書が多いことは、この整然とした教判が浄土宗内で重要視されたことを示しており、江戸時代の壇林教学にも大きく影響を与えた。

作成者名：東海林良昌

浄土和讃

書名よみ：じょうどわさん
書名別名：弥陀和讃
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：1250（建長2）頃
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（1248（宝治2）頃、一部親鸞真筆、真仏書写）
〈影印版〉:『三帖和讃国宝本』（高田派遠忌法会事務所、1960）
〈影印版〉:『国宝　三帖和讃』（同朋舎、1978）
〈影印版〉:『増補　親鸞聖人真蹟集成』3（法蔵館、2007）
2、高田専修寺蔵本（1290（正応3）、顕智書写）
〈影印版〉:『顕智上人集』上（「高田古典」2、真宗高田派宗務所、1999）
3、石川専光寺蔵本（1437（永享9）、存如書写）
〈影印版〉:『三帖和讃』（「竜谷大学善本叢書」21、竜谷大学、2001）
4、京都西本願寺蔵本（1449（文安6）、蓮如書写）
5、滋賀円徳寺蔵本（1453（享徳2）、蓮如書写）
6、京都西本願寺蔵本（1458（長禄2）、蓮如書写）
7、大阪顕証寺蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、草本云、建長七年乙卯（1255）四月二十六日書写之／

正応三年庚寅（1290）九月十六日令書写之畢
3、（巻末）永享九年巳（1437）九月二十五日、右筆本願寺存如（花押）、賀州吉藤専光寺常住也
4、文安六載（1449）五月十八日終筆功訖、右筆蓮如（花押）
5、（奥書なし）
6、（奥書なし）
7、（奥書なし）
刊本所在：1、文明5（1473、竜谷大）
2、慶長4（1599、大谷大）
3、明暦3（1657、未調査）
4、寛正11（1799、未調査）
刊本の奥書刊記：1、右斯三帖和讃並正信偈四帖一部者末代為興際板木開之者也而巳、文明五年癸巳（1473）三月日、蓮如（花押）
2、右斯三帖和讃並正信偈四帖一部者、蓮如上人為末代興隆板木雖被開之、近代依破滅令再興而巳、慶長四年（1599）霜月日、教如（花押）
3、（未調査）
4、寛正十一巳未（1799）初冬梓行、皇都書肆、東六条下珠数屋町、西村九郎右衛門
活字本所載書：『真聖全』2、『真聖全』5、『浄土真宗聖典－原典版－』、『真宗聖典』、『定本親鸞聖人全集』和讃編、『真宗史料集成』1、『大正蔵』83（No.2650）、日本古典文学大系82『親鸞集　日蓮集』、名畑応順校注『親鸞和讃集』（岩波書店、1976）、伊藤博之校注『歎異抄　三帖和讃』（「新潮日本古典集成」、新潮社、1981）、潟岡考昭『和讃文学史稿（資料編）』（啓文社、1994）
現代語訳書：「浄土和讃」（『意訳真宗聖典』6、法蔵館、1956）、藪田義雄「浄土和讃」（『現代語訳親鸞全集』、講談社、1975）、名畑応順『親鸞和讃集』（岩波書店、1976）、真継伸彦「浄土和讃」（『現代語訳親鸞全集』4、法蔵館、1983）、伊藤博之校注『歎異抄　三帖和讃』（「新潮日本古典集成」、新潮社、1985）、石田瑞麿「浄土和讃」（『親鸞全集』3、春秋社、1986）、 鶴見榮鳳「浄土和讃」（『傍訳親鸞聖人著作全集』6、四季社、2001）
参考文献：多屋頼俊『和讃史概説』（法蔵館、1933）、藤原猶雪「和讃の成立と其流伝」（藤原猶雪『真宗史研究』、大東出版社、1939）、生桑完明「国宝本三帖和讃について」（生桑完明『親鸞聖人撰述の研究』、法蔵館、1970）、平松令三「『三帖和讃』の筆跡をめぐって」（『国宝本三帖和讃解題』、同朋舎出版、1978、後『親鸞大系』歴史編4（法蔵館、1989）に収録）、井上治子「「三帖和讃」成立考」（『国文学踏査』11、1981）、朝枝善照「仮説・国宝本『浄土和讃』『浄土高僧和讃』の成立過程」（『竜谷大学論集』424、1985）、常磐井和子「三帖和讃の諸本について」（『真宗研究』32、1988、後『親鸞大系』歴史編4（法蔵館、1989）に収録）、宮崎円遵「三帖和讃」「三帖和讃の成立に関する諸問題」（「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988、「三帖和讃」は後『親鸞大系』歴史編4（法蔵館、1989）に収録）、平松令三「国宝本三帖和讃の成立に関する諸問題」（平松令三『親鸞真蹟の研究』、法蔵館、1988）、多屋頼俊「三帖和讃の本文について」「文明開版の三帖和讃」（多屋頼俊『和讃の研究』、法蔵館、1991）、平松令三「蓮如の聖教書写と本願寺の伝統聖教」（『講座蓮如』2、平凡社、1997）、『三帖和讃』（「竜谷大学善本叢書」21、竜谷大学、2001）、平松令三「眼を凝らして見る国宝本三帖和讃」（平松令三『親鸞の生涯と思想』、吉川弘文館、2005）
解説：親鸞が著した真宗教義についての和讃。
　本書は、大きく3種の系統に分類できる。1つ目は宝治2年（1248）の奥書を伝える専修寺蔵真仏書写本、2つ目は建長7年（1255）の奥書を伝える専修寺蔵顕智書写本、3つ目は本文中に「親鸞八十八歳御筆」（『正像末和讃』本文中）とある文明5年（1473）開版本である。それぞれの奥書年次や和讃数などから、真仏書写本の底本、顕智書写本の底本、文明5年（1473）開版本の底本の順に改訂されていったものと考えられる。ただし、文明5年（1473）開版本については、底本が明かではないことへの不信感や使用語句についての批判もあり、資料的価値については慎重な説もある。この点に関しては多屋頼俊「三帖和讃の本文について」「文明開版の三帖和讃」などを参照。
　本書には、文明開版本によれば、曇鸞『讃阿弥陀仏偈』に基づく、阿弥陀仏とその浄土を讃える「讃阿弥陀仏偈和讃」48首、「浄土三部経」などに基づく「大経意」22首、「観経意」9首、「弥陀経意」5首、「諸経のこころによりて弥陀和讃」9首、「現世利益和讃」15首、「大勢至菩薩和讃」8首が収録されている。
　真仏書写本奥書の記載や、顕智書写本の紙袋に「浄土和讃二冊」とあることなどから、別項『高僧和讃』とは一具として伝来したことがわかる。
　親鸞の和讃に共通する特色として、ほとんどの和讃に出拠を求めることが出来、漢文の経典・論釈の意を和語に移して讃嘆している点を挙げることができる。
作成者名：藤田真隆

帖内御文

書名よみ：じょうないおふみ
書名別名：帖内御文章、五帖御文、五帖消息、五帖一部御文、宝章
著者名：蓮如
著者名よみ：れんにょ
著者名別名：恵灯大師、本願寺蓮如、信証院、兼寿
著者生没年：1415（応永22）-1499（明応8）
成立翻訳年：1533（大永1）（『紫雲殿由緒記』による）
成立地：日本
巻数：5
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、愛知安城本證寺蔵本（室町期、書写者不明、実如証判本）
〈影印版〉:『実如判五帖御文の研究』影印編（法蔵館、2003）
2、滋賀広済寺蔵本（室町期、書写者不明、実如証判本）
3、大阪藤井寺誓願寺蔵本（室町期、書写者不明、実如証判本）
4、福井大野最勝寺蔵本（室町期、書写者不明、実如証判本）
5、名古屋聖徳寺蔵本（室町中期、書写者不明、実如証判本）
その他、実如証判本に関しては、『実如判五帖御文の研究』資料編、pp.311-344を見よ。
写本奥書：1. 右此五帖之文者為末代興隆令清書、此外者聊爾仁不可免者也、実如（花押）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
刊本所在：1、天文6-23（1537-1554、大谷大・鷺本別院、証如開版）
〈影印版〉:『実如判五帖御文の研究』資料編（法蔵館、2003）
2、江戸中期（竜谷大、寂如開版）
刊本の奥書刊記：1、釈証如（花押）
2、（未調査）
活字本所載書：禿氏祐祥『校註蓮如上人御文全集』（文献書院、1922）、稲葉昌丸『諸版対校五帖御文定本』（大阪、1933）、『真聖全』3、出雲路修『御ふみ』（「東洋文庫」345、

平凡社、1978)、『浄土真宗聖典（原典版)』（本願寺出版部、1985)、笠原一男『蓮如文集』（岩波文庫、1985)、堅田修『真宗史料集成』2（同朋社、1983)、大谷暢順『蓮如上人全集』1（中央公論社、1998)、同朋大学仏教文化研究所編『実如判五帖御文の研究』研究篇1（法蔵館、1999）
現代語訳書：西山邦彦『蓮如上人五帖お文こころえ』（ヨコノ書店、1993)、細川行信・村上宗博・足立幸子『現代の聖典　蓮如五帖御文』（法蔵館、1993)、浅井成海『蓮如の手紙－お文・ご文章現代語訳』（国書刊行会、1997)、京都国立博物館編『蓮如と本願寺』（毎日新聞社、1998)、Gadjin M. Nagao, *Letters of Rennyo : A Translation of Rennyo's Gobunsho*, Hongwanji International Center, 2000.
参考文献：同朋大学仏教文化研究所編『実如判五帖御文の研究（影印篇・資料篇・研究篇)』（法蔵館、1999)、同朋大学仏教文化研究所編『実如判五帖御文の研究（影印篇・資料篇・研究篇)』（法蔵館、1999）
解説：蓮如は本願寺8代門主である。衰微していた本願寺において、本願寺7世存如の長男として、苦難の中で成長する。比叡山衆徒の襲撃に遭い、京都東山大谷を出て文明3年（1471）越前吉崎に赴き、北陸地方を教化し、さらに摂津・河内・和泉で布教に専念する。のちに山科・石山に本願寺を建立する。本願寺を強大な宗門に成長させた浄土真宗中興の祖である。また、「南無阿弥陀仏」の六字名号を数多く書いて弟子や門弟に与え、「正信念仏偈」と「三帖和讃」を刊行した。著作には本書のほか『改悔文』など布教のためのものが多い。蓮如の行実を示した言行録に『蓮如上人御一代記聞書』等がある。

『帖内御文』とは第9代実如（1458-1525）が蓮如の指示に従って、5帖80通を選び、御文を御堂衆に書写させて「釈実如（花押)」と証判を加え門徒に下附したものとされる。ただし、『帖内御文』の編纂者に関しては実如説（稲葉昌丸）の他に、蓮如自身が編纂に関わったとする説（出雲路修)、あるいは円如（1489-1521、実如の第3子）が編纂したとする説がある。（なお、5帖80通すべてが完全な形で揃っているものは全国に3点しか確認されていない。）

消息は基本的に編年体で並べられており、第1帖は文明3年（1471）7月15日より文明5年（1473）9月21日までの書簡15通、第2帖は文明5年（1473）12月8日より文明6年（1474）7月9日までの書簡15通、第3帖は文明6年（1474）7月14日より文明8年（1476）7月18日までの書簡13通、第4帖は文明9年（1477）1月8日より明応7年（1498）11月21日までの書簡15通、第5帖は年記のない書簡22通である。

数多くの御文のうち、教義的・普遍的問題を扱った消息が選択されているが、他流との相違を強調する点、「信心正因、称名報恩」を繰り返し説いている点に特色がある。片仮名交じりで漢字に振り仮名が付されるなど、一般への普及に努力したことが窺われる。

第10代証如（1516-1554）がこれらを開版上梓し、以後歴代の門主も板行していった。今日においても勤行後に声を出して読み聞かせるなど、教化に不可欠な聖教として尊重されている。

「御文／御文章」の項も参照せよ。
作成者名：佐々木大悟

成菩提

書名よみ：じょうぼだい
著者名：勝範
著者名よみ：しょうはん
著者名別名：蓮実房、蓮実房勝範
著者生没年：996（長徳2）-1077（承保4）
成立翻訳年：11c
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『本朝台狙撰述密部書目』（『日仏全』2）
解説：本書は散逸して伝わらない。全部で50巻あったようである（『台祖密目』)。ただし、天台密教の谷流の系譜に属し、本書の撰者である勝範の弟子にあたる永範に本書の要文を抄出した『成菩提集』がある。全4巻現存する。それは本書の抄出本であり（『仏書解説大辞典』6)、諸々の台密の諸尊法を仏部・菩薩部・忿怒部・天部に分けて各々の要文を類聚したものという。そして、その中の仏部に弥陀法が収められており、そこから勝範の阿弥陀仏観を検出できる可能性がある。勝範撰『西方集』の項、参照。
作成者名：能島覚

称名念仏奇特現証集

書名よみ：しょうみょうねんぶつきどくげんしょうしゅう
書名別名：称名念仏奇特集、念仏奇特集
著者名：隆尭
著者名よみ：りゅうぎょう
著者名別名：浄厳坊、隆尭法印、金勝山浄厳房隆尭法印
著者生没年：1369（応安1）-1449（宝徳1）
成立翻訳年：1420（応永27）・1431（永享3）
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、慶安4（1651、京都大）
2、正徳2（1712、仏教大・大谷大・東京大・京都大・大正大・東洋大）
刊本の奥書刊記：1、于時慶安四辛亥歳（1651）十月十五日、室町通鯉山町小嶋弥左衛門梓刊
2、永享三辛亥（1431）十月十五日、天台沙門隆尭謹書
活字本所載書：湯谷祐三「金勝山浄厳房隆尭法印『称名念仏奇特集』の解題と翻刻」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』19、1999）
参考文献：玉山成元「『称名念仏奇特現証集』について」(『大正史学』3、1973)、福島尚「『称名念仏奇特現証集』攷」(『語文と教育』5、1991)、笹田教彰「『称名念仏奇特現証集』について」(『仏法と教育の森』、1991)、伊藤唯真「隆尭法印の『称名念仏奇特現証集』について」(『日本仏教の史的展開』、1999)、湯谷祐三「金勝山浄厳房隆尭法印『称名念仏奇特集』の解題と翻刻」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』19、1999）
解説：本書は著者が見聞した念仏行者の奇特（＝不思議な現象）の諸例話を集めたものである。これによって著者は末代にあっては余善に比べて念仏のほうが優れていることを示し、衆生に念仏を勧めんと考えた。奇瑞を記述する点で往生伝と似ているが、ある特定の人物の臨終までを描く伝記としての性格を持たず、あくまで奇特を中心に各話が構成されている点で往生伝と異なる。奇特の例としては御鬮（みくじ）にまつわるものが多数見られる。たとえば上巻第4話では、僧良舜が念仏と真言のどちらをたのみとするべきかに悩み、これを御鬮で決めようとしたところ、8度くりかえすもすべて念仏に帰するように出たとある。この他、夢に餓鬼道に落ちた知人が念仏の追善を請う話などの霊夢感得譚が目立つ。さらには臨終に狂乱していた病者が念仏によって正念を得る話などもあり、これは往生の奇瑞を記述する往生伝と類似していると言えよう。

上巻には11話が収録され、各例話の主人公は僧俗の比率が半々となっている。これに対し下巻に収録される10話は、すべて出家者の話である。上下巻ともに近江国湖南地方の居住者、あるいは金勝寺、延暦寺など隆尭ゆかりの近江寺

院の僧侶の例話を集めている。なお慶安4年版には正徳2年版に見える上巻の第11話目が欠けている。
本書の成立年時をあげると、上巻は応永27年（1420）、下巻は永享3年（1431）である。このように上下巻の成立年時がかなり離れていること、さらには上巻の第11話の最後に後跋があることから、著者はもともと上巻のみをもって完結した完本と考えていたと推測され、下巻は追加編であったとみられる。
　本書の隆尭自筆原本は現在伝わっていない。しかしながら慶安4年版、正徳2年版の2版本があり、江戸時代にはかなり流布していたことが伺える。
　著者の隆尭はもともと天台僧であったが、応永10年（1403）石山寺に参篭し、向阿証賢が著した『三部仮名抄』を感得して専修念仏に傾倒するようになった。そして金勝山に遁世し、以後浄土教に関する著述の書写や述作をするなどして念仏信仰の布教に専念した。
作成者名：永田真隆

称名問答

書名よみ：しょうみょうもんどう
著者名：智慶
著者名よみ：ちけい
著者名別名：南無房
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『金綱集』五（『日蓮宗宗学全書』13、p.173、p.194、逸文あり）
参考文献：安井廣度『法然門下の教学』（法蔵館、1938）
解説：智慶は隆寛の高弟。『称名問答』は48箇条からなる修明門院からの問答の書。日蓮の『金綱集』に引用されている。『金綱集』は日向が各宗の大綱を日蓮から聴聞したものであるが、法然事の段に『称名問答』曰く、として上巻第5、下巻第30が引用されている。逸文の内容は主に専修念仏における戒律の問題が引用されている。
作成者名：伊藤茂樹

諸行本願義

書名よみ：しょぎょうほんがんぎ
著者名：道教
著者名よみ：どうきょう
著者名別名：念空、道阿弥陀仏
著者生没年：？-1287（弘安10）
成立翻訳年：13c頃
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1300（正安2）、湛睿書写）
写本奥書：1、于時正安二年（1300）庚子十一月六日、於相州鎌倉浄光明寺慈光院所令書写也、沙門湛睿
活字本所載書：石橋誠道『九品寺流長西教義の研究』（国書刊行会、再刊1984）、安井広度『法然門下の教学』（法蔵館、再刊1968）
参考文献：石橋誠道『九品寺流長西教義の研究』（国書刊行会、再刊1984）、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』下（大東出版社、1977）、吉田淳雄「『念仏本願義』について」（『仏教大学総合研究所紀要別冊・浄土教典籍の研究』、2006）
解説：阿弥陀如来の本願には念仏以外の諸行による往生も誓われていること、それを示しているのが第二十願に他ならないことを主張したもの。
　石橋誠道が指摘したように、本書は（1）立義、（2）難問、（3）会通、（4）問答料簡、の四部からなる。（1）立義では、諸行本願の義は善導の釈義に反するものではない旨が宣べられる。これに対して（2）難問では、善導および諸師の義に基づいた難問が示され、それを承けて（3）会通では、依理・依義・依文の三面から反論が展開されていく。すなわち、念仏一行のみが本願行であったならば様々な機根の者を漏れなく往生させるという仏の慈悲は非常に狭少なものとなってしまう（依理）とした上で、（2）難問での所難に対して反論・会通がなされ（依義）、さらに経論釈の文を列挙して諸行本願義の証明を企図している。最後に（3）問答料簡では、『選択集』第4章などを軸に、諸行非本願の言は第18願に限ってのことであるとし、法然も諸行本願の義を認容していると主張するのである。
　本書の難問・会通においては、第20願を三生果遂または繋念定生の願とみる鎮西流、とりわけ良忠の説が強く意識されており、この点に同じく金沢文庫蔵の『二十願決疑問答』『三箇願事』との共通性をみることができる。石橋誠道は、本書と『二十願決疑問答』『三箇願事』はすべて道教念空の著であり、『二十願決疑問答』を精選したものが本書であろうと推測しているが（石橋『九品寺流長西教義の研究』pp.140-142）、『二十願決疑問答』の著者を阿弥陀房とする説もあり、検討を要する。
　道教は鎌倉における念仏者の首領と目されていた人物であり、その活動時期は浄土宗第三祖・良忠と全く同時代である。当時の鎌倉における浄土系各派間、とりわけ鎮西義と諸行本願義との論争の実態を探る上で極めて貴重な典籍といえるだろう。
作成者名：吉田淳雄

初心集

書名よみ：しょしんしゅう
著者名：敬日房円海
著者名よみ：きょうにちぼうえんかい
著者生没年：13c頃
成立翻訳年：13c
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『最須敬重絵詞』（『真聖全』3、p.835）
解説：隆寛門弟の敬日の作で天台の要文を集めて造ったとされる。自筆本を敬日の弟子慈信房澄海が相伝したと『最須敬重絵詞』に記されている。本書は奥書のみ『最須敬重絵詞』に「先師敬日上人為幼学之仁被集此要文澄海伝受之、建治三年（1276）仲秋十六日依為法器所奉付属光仙殿也、以之表随分懇志而巳愚老澄海」と記されている。内容は不明。敬日から澄海に相伝されたのち、覚如に相伝されたと伝える。
作成者名：伊藤茂樹

諸仏証誠鈔

書名よみ：しょぶつしょうじょうしょう
著者名：長西
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c
成立地：日本

散逸文献の文献名出典：『選択本願念仏集名体決』（『浄全』8、p.445上）
解説：『選択本願念仏集名体決』中、諸仏の「選択」についての釈の中で指示される典籍。『名体決』では、所説の法門中、弥陀に2種の浄果（依報・正報）が、行者に2種の浄因（発願・念仏）があるが、諸仏はその中のどれを証誠しているのかと問い、傍正はあるものの、2種の浄果・浄因及び往生の機分、共に証していると答えている。その上で、「具には諸仏証誠鈔の如し」と述べて、本書に詳細を譲っている。
作成者名：吉田淳雄

序分義聞書

書名よみ：じょぶんぎききがき
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人、然阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1255（建長7）頃（？）、書写者不明）
写本奥書：1、（奥書なし、後欠のため、良聖筆説もあり）
参考文献：恵谷隆戒『浄土宗第三祖然阿良忠上人伝の新研究：特に金沢文庫資料を中心として』（国書刊行会、1984）、坪井俊映「金沢文庫蔵『観経疏聞書』の研究」（『仏教文化研究』31、1986）、納富常天「金沢文庫本『観経疏聞書』について」（『仏教文化研究』32、1987）、日置孝彦「東国浄土教における良忠上人　－付　称名寺蔵金沢文庫保管鎮西義典籍解題－」（『仏教文化研究』32、1987）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。建暦1年（1211）、同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、建保2年（1214）、比叡山で受戒した。その後1236（嘉禎2）年、九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』の相伝を受ける。建長1年（1249）、関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、正元1年（1259）、鎌倉に入り、悟真寺を開創して念仏を広めた。
　本書は、善導『観経疏』序分義を法然・弁長の義にしたがって良忠が講述したものを、講席に列なった門弟が筆録したものである。書写者は不明だが表紙に「願信之」「永」という手沢名が書かれているので、この良忍の手沢本であったことは確かである。
　『序分義聞書』の講述は講述日が書かれていないので不明である。ただ『玄義分聞書』が建長7年（1255）3月4日に始まり、同年5月17日に終わっており、『定善義聞書』が建長6年（1254）12月20日に始まり、建長7年（1255）2月6日に終わっているので、この前後に行われたものであろう。
　『観経疏』の本文から重要な語句127項目を選び出し、それに対して問答形式をもって解説している。ただし中欠ではないにも拘わらず「禁父縁」「禁母縁」「縁苦縁」の部分は筆録がない。
作成者名：曽和義宏

自力他力事

書名よみ：じりきたりきのこと
書名別名：自力他力分別、自力他力文
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（1687（貞享4）、恵空書写）
写本奥書：1、寛元四歳丙午（1246）三月十五日書之、愚禿釈親鸞七十四歳／本云文保二歳午（1318）十一月二十六日奉書写之、本者御筆也、宗昭四十九歳、貞享四年（1687）丁卯五月三日以河州古橋願得寺之本書写之、西福寺恵空
刊本所在：1、明和3（1766、竜谷大、『真宗違文纂要』所収）
2、明治33（1900、大谷大・竜谷大・大正大、『真宗法要拾遺』3所収）
3、明治34（1901、大谷大、『真宗仮名法典』中所収）
4、明治36（1902、大谷大、『真宗聖教大全』附録）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『続浄』9、『真聖全』2、『定本親鸞聖人全集』6、『大正蔵』83（No.2678）、『真宗史料集成』1
参考文献：爪生津隆雄「隆寛律師の著作に就て」（『真宗研究』18、1928）、安井広度『法然門下の教学』（法蔵館、1938）、平井正戒『隆寛律師の浄土教』（国書刊行会、1941）、戸松啓真「先徳要義集解説」（『続浄』9）
解説：『親鸞聖上御消息集』などから知られる通り、親鸞が愛読し、『後世物語』『唯信鈔』と同じく書写して門弟にすすめた書である。念仏について自力と他力の違いについて分別しており、自力を捨て他力につくことを示す。手紙形式の仮名書であり、念仏を自力と他力に分別して、阿弥陀の他力を強調し、自身を罪悪と認知して阿弥陀仏の本願にすがり極楽往生を願う他力念仏を推奨している。自力念仏であれば、「まさしき本願の極楽にはまいらず、わずかにそのほとりへまゐりて」と述べるように、極楽の辺地に往生してしまうと説く。なお、後世に流伝した書は、親鸞書写の覚如相伝本であることが奥書よりわかる。残念ながら親鸞自筆本、覚如転写本は伝わらない。
作成者名：伊藤茂樹

信海聞書

書名よみ：しんかいききがき
書名別名：真実信心意趣、真実信心聞書
著者名：信海
著者名よみ：しんかい
著者名別名：順信房
著者生没年：13c頃
成立翻訳年：13c頃
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、岸部武利氏蔵本（1373（応安6）、書写者不明）
2、福井浄勝寺蔵本（18c初期頃、順故書写）
写本奥書：1、依親鸞上人相伝注是、信海、弘安八歳乙酉十一月十八日／応安六年（1373）八月二十六日書写之

2、弘安四年辛巳正月八日、沙弥信海五十四歳、依親鸞相伝沙弥信海真実信心意趣註之／正応第五壬辰初冬下旬第九書了／（朱筆）右之本高田専修寺什物也
活字本所載書：細川行信『真宗成立史の研究』（法蔵館、1977）、織田顕信「浄勝寺本『信海聞書』について」（『同朋大学論叢』50、1984）
参考文献：岸部武利「真宗聖教について」（『真宗研究』17、1972）、細川行信『真宗成立史の研究』（法蔵館、1977）、織田顕信「浄勝寺本『信海聞書』について」（『同朋大学論叢』50、1984）、宮崎円遵「親鸞聖人と関東の門弟」（『親鸞の研究（下）』「宮崎円遵著作集」2、思文閣出版、1986）、今井雅晴『親鸞と東国門徒』（吉川弘文館、1999）
解説：著者順信房信海は親鸞の門弟。静嘉堂文庫所蔵『無量寿寺系図』には建長2年（1250）85歳で往生を遂げたとしているが、本書奥書には弘安4年（1281）54歳と記されており、西本願寺所蔵『信海等、念仏衆に告状』『信海書状』（『真宗史料集成』1所収）は弘安5年（1282）に書かれたものであり、弘安5年（1282）までは生存していたと考えられる。本書奥書によれば安貞2年（1228）誕生である。しかし、『信海書状』の中には「即生の御房」の供養代金が残ったことに触れており、この即生房は親鸞が晩年に「常陸の人々」に世話を託した人物と考えられ（11月12日付親鸞消息、西本願寺所蔵）、この時点で親鸞と信海らの交流は深かったと推測され、親鸞在関時よりの弟子とする古説も捨てがたい。鹿島神宮の宮司の出身ともされる。信海の伝記については宮崎円遵「親鸞聖人と関東の門弟」、今井雅晴『親鸞と東国門徒』を参照。
　2種の古写本中、岸部家所蔵本は冒頭部分を欠いており、浄勝寺蔵本によって全文を見ることが出来る。
　本書は冒頭『観無量寿経』華座観の文、善導『観経疏』「玄義分」釈名文を引用し、「人法並彰故名阿弥陀仏」の文を種々に解釈しながら展開する。まず「人法」を迷いの衆生を離れない仏であると解釈し、ついで「法」とは世々の先徳であり、迷いの衆生に無量寿を授けるのであるから先徳を無量寿仏と呼ぶのであるとする。西方浄土にあっては阿弥陀仏であり、穢土の教主である時には無量寿仏と呼ぶとのべ、この無量寿仏、即ち先徳には天親『往生論』所説の五念門行の功徳が具足し、穢土において衆生を導いているとしている。
　後に「知識帰命」と呼ばれる、善知識の恩徳を強調するものであり、別項『還相回向聞書』・『他力信心聞書』とも通ずるものがあり、初期真宗において善知識重視の教説が多いことが伺われる。
作成者名：藤田真隆

親鸞聖人血脈文集

書名よみ：しんらんしょうにんけちみゃくもんじゅう
著者名：親鸞（著）／編者不明
著者名よみ：しんらん／
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師／
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）／不明
成立翻訳年：12c末-13c半ば
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、愛知上宮寺蔵本（室町末期、書写者不明）〈影印版〉:『末灯鈔　御消息集』（「竜谷大学善本叢書」12、同朋舎出版、1993）
2、岐阜専精寺蔵本（室町末期、書写者不明）
3、富山専琳寺蔵本（室町末期、賢心書写）
4、大谷大蔵本（江戸初期、恵空書写）
5、大谷大蔵本（江戸後期、書写者不明、蓮光寺旧蔵本）
6、大谷大蔵本（江戸後期、徂潭書写）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
刊本所在：1、宝暦4（1754、未調査）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『真聖全』2、『定本親鸞聖人全集』書簡篇、『真宗史料集成』1、『真宗聖典』、日本古典文学大系82『親鸞集　日蓮集』、梅原真隆『親鸞聖人血脈文集の研究』（顕真学苑、1923）
現代語訳書：石田瑞麿「親鸞聖人血脈文集」（『親鸞とその妻の手紙』、春秋社、1968）、石田瑞麿「親鸞聖人血脈文集」（『親鸞』「日本の名著」6、1969、中央公論社）、知切光歳「血脈文集」（『現代語訳親鸞全集』2、講談社、1974）、真継伸彦「親鸞聖人血脈文集」（『現代語訳親鸞全集』4、法蔵館、1983）、石田瑞麿「親鸞聖人血脈文集」（『親鸞全集』4、春秋社、1986）、本多恵「親鸞聖人血脈文集」（『傍訳親鸞聖人著作全集』6、四季社、2001）、細川行信・村上宗博・足立幸子『現代の聖典　親鸞書簡集』（法蔵館、2002）
参考文献：梅原真隆『親鸞聖人血脈文集の研究』（顕真学苑、1923）、宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）、多屋頼俊『親鸞消息の研究』（法蔵館、1992）、古田武彦「性信の血脈文集と親鸞在世集団－新史料蓮光寺本をめぐって－」（『親鸞思想』「古田武彦著作集　親鸞・思想史研究編2」、明石書店、2003）
解説：親鸞の消息5通を集めたもの。全5通のうち4通が、横曽根門徒の代表的存在であった性信宛で、残る1通も性信と関係のあったと思われる慶西宛であることから横曽根門徒系の人物によって編集されたと推測される。
　編者については、性信とする多屋頼俊、古田武彦説、法然・親鸞・性信の三代伝持を主張する為に横曽根門徒によって延慶2年（1309）以降に編集されたとする梅原真隆、宮崎円遵説がある。
　本書におさめられた5通には特に統一されたテーマなどはなく、性信の手元にあったものを編集したと推測されるが、古田武彦は親鸞滅後の教団解体の危機に対応するために性信によって選択編集されたものとしている。また本集には親鸞が子息善鸞を義絶したいわゆる「善鸞義絶状」がおさめられており、注目される。
　なお、専琳寺蔵本は現在所在が不明になっているが、同書の影写本が大谷大・竜谷大に所蔵されている。
作成者名：藤田真隆

親鸞聖人御消息

書名よみ：しんらんしょうにんごしょうそく
書名別名：末灯鈔異本
著者名：親鸞（著）／編者不明
著者名よみ：しんらん／
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師／
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）／
成立翻訳年：12c末-13c半ば
成立地：日本
漢和：和文

写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、愛知浄光寺蔵本（室町中期（？）、書写者不明）
2、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（奥書なし）
活字本所載書：多屋頼俊「浄光寺本「親鸞聖人御消息」と「末灯鈔」」（『親鸞書簡の研究』　法蔵館、1992）
現代語訳書：細川行信・村上宗博・足立幸子『現代の聖典　親鸞書簡集』（法蔵館、2002）
参考文献：多屋頼俊「「末灯鈔」の成立について」「浄光寺本「親鸞聖人御消息」と「末灯鈔」」（『親鸞消息の研究』　法蔵館、1992）
解説：親鸞の消息20通前後を収録したもの。
　編者は不明である。成立時期については、浄光寺蔵本が室町中期、竜谷大蔵本が室町末期の写本であり、共に写本であることから、本書の成立そのものはもう少しさかのぼる事ができる。
　本書は、親鸞最晩年の消息と考えられる文応1年（1260）11月の消息や自然法爾をかたる法語を収録しているが、それらを年代順に並べる事もなく無作為に並べており、また改行なども整然としていない。一応、他の消息集などを参考にすると全20通か全21通を収録しているとする事ができる。
　本書に収録された消息は、後に成立する『末灯鈔』にほぼ収録されており、『末灯鈔』編集の第一資料であった。『末灯鈔』が他に集成された消息集を参照していない事などから、親鸞消息の伝播過程を知る上からも注目される。
作成者名：藤田真隆

親鸞聖人御消息集（広本）

書名よみ：しんらんしょうにんごしょうそくしゅう
書名別名：御消息集、御消息集（広本）、異本御消息集、広本
著者名：親鸞（著）／編者不明
著者名よみ：しんらん／
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師／
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）／
成立翻訳年：12c末-13c半ば
成立地：日本
巻数：5
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、愛知妙源寺蔵本（鎌倉末期、書写者不明、断簡）
〈影印版〉:『末灯鈔　御消息集』（「竜谷大学善本叢書」12、同朋舎出版、1993）
2、京都永福寺蔵本（室町中-末期、書写者不明）
〈影印版〉:多屋頼俊『親鸞消息の研究』（法蔵館、1992）『末灯鈔　御消息集』（「竜谷大学善本叢書」12、同朋舎出版、1993）
3、西本願寺蔵本（室町末期、書写者不明）
4、愛知慈光寺蔵本（室町末期、書写者不明）
5、住田智見氏蔵本（1691（元禄4）、空閑書写）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（奥書なし）
3、（奥書なし）
4、（未調査）
5、（未調査）
活字本所載書：『真宗聖典』、日本古典文学大系82『親鸞集　日蓮集』
現代語訳書：石田瑞麿「親鸞聖人御消息集」（『親鸞とその妻の手紙』　春秋社、1968）、石田瑞麿「親鸞聖人御消息集」（『親鸞全集』4、春秋社、1986）、本多恵「親鸞聖人御消息集」（『傍訳親鸞聖人著作全集』6、四季社、2001）、細川行信・村上宗博・足立幸子『現代の聖典　親鸞書簡集』（法蔵館、2002）
参考文献：宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）、多屋頼俊『親鸞消息の研究』（法蔵館、1992）
解説：親鸞の消息を集成したもの。愛知妙源寺に鎌倉末期の書写本の断簡があることから、親鸞の直接の門弟か、その孫弟子によって編集されたものと考えられる。また本書の原型が親鸞門弟の性信によって編集された、とする多屋頼俊の説もある。
　本書は普通、親鸞の消息18通を集成しているとされるが、これは第2通、第4通をそれぞれ1通として計算したからで、第2通は第1通の、第4通は第3通の、それぞれ追伸文と考えられるので、計16通とするのが正確である。
　また本書には『末灯鈔』に収録される消息と重複するものがあり、それを除いたものが『略本御消息集』として刊行されている。その影響か、この広本には刊本がない。
作成者名：藤田真隆

親鸞聖人御消息集（略本）

書名よみ：しんらんしょうにんごしょうそくしゅう
書名別名：御消息集、御消息集（略本）、略本
著者名：親鸞（著）／編者不明
著者名よみ：しんらん／
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師／
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）／
成立翻訳年：12c末-13c半ば
成立地：日本
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（江戸初期、恵空書写）
写本奥書：1、コノ書一本ニ初ニ六通ノ御書ヲイル、コノ六通ミナ末灯抄ニ出タリ、又中半ニ二通アリ、是モ末灯抄ニ出タリ、合シテ八通加タル一本アリ、今ノ写本ニハカノ八通ヲ除タル本ヲ以テ写竟ヌ、私云八通ハ末灯抄ニアルユヘニ略シテ写シ来リタル歟云々
活字本所載書：『真聖全』2、『真宗史料集成』1、『定本親鸞聖人全集』書簡篇、『大正蔵』83（No.2660）、『現代語訳親鸞全集』2（講談社、1974）
現代語訳書：石田瑞麿「親鸞聖人御消息集」（『親鸞』「日本の名著」6、1969、中央公論社）、藤原審爾・外村繁「御消息集（書簡集）」（『現代語訳親鸞全集』2、講談社、1974）、真継伸彦「親鸞聖人御消息集」（『現代語訳親鸞全集』4、法蔵館、1983）、細川行信・村上宗博・足立幸子『現代の聖典　親鸞書簡集』（法蔵館、2002）
参考文献：宮地廓恵『御消息集講讃』（百華苑、1974）、宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）、多屋頼俊『親鸞消息の研究』（法蔵館、1992）
解説：『親鸞聖人消息集』（広本）から、『末灯鈔』と重複する消息を除いたもの。計10通の親鸞の消息を収録している。
　江戸期の大谷派学僧恵空の書写本の奥書から、この当時

既にこの『略本』が存在していたことを知る事が出来る。
　『末灯鈔』の流通によって、このような形態のものが作成されたと推測される。
作成者名：藤田真隆

捨子問答

書名よみ：すてごもんどう、しゃしもんどう
著者名：隆寛（？）
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（明治期、書写者不明）
写本奥書：1、貞享二（1686）
刊本所在：1、貞享2（1686、仏教大・大谷大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、貞享二乙丑歳（1686）仲秋日板行
活字本所載書：『続浄』9
参考文献：爪生津隆雄「隆寛律師の著作に就て」（『真宗研究』18、1928）、戸松啓真「先徳要義集解説」（『続浄』9）、松本史朗『法然親鸞思想論』（大蔵出版、2001）
解説：隆寛撰述とされる仮名書きの書。成立は本文中に『般舟讃』がみえることから、『般舟讃』発見の建保5年（1217）以降であろう。隆寛撰述については疑問視もされている。捨子と修行者の問答形式の書であり、上巻に8問答、下巻に8問答記される。内容は当時の法然門下の間で論争されていた念仏と滅罪、諸教と念仏の勝劣、信心、往生と煩悩、念仏と余行、念仏相続、念仏と万行の功徳、念仏の数遍等について記されている。江戸期の了祥は『後世物語』の作者を静遍と考えており、さらには『捨子問答』と『後世物語』を大同小異とみて近い関係と捉えている。だが、至誠心を利他真実とみる点や、臨終業成を説くところからみて、隆寛自身の教説と似通った点も多くみられる。古写本は現存せず、貞享2年（1686）の版本が現存する。
作成者名：伊藤茂樹

誓言持戒往生記

書名よみ：せいごんじかいおうじょうき
著者名：円仁（？）
著者名よみ：えんにん
著者名別名：慈覚大師
著者生没年：794（延暦13）-864（貞観6）
成立翻訳年：9c
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。『長西録』のみにその名をとどめる。慈覚大師円仁に仮託された文献だと考えられる。
作成者名：能島覚

専修要行抄

書名よみ：せんじゅようぎょうしょう
著者名：西空帝山心運
著者名よみ：さいくうていさんしんうん
著者生没年：平安期
成立翻訳年：平安期
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の西空帝山心運に関しても審らかでない。『長西録』のみにその名をとどめる。
作成者名：能島覚

専雑二修義

書名よみ：せんぞうにしゅうぎ
著者名：長西
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：4（？）
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1263（弘長3）、書写者不明、巻四のみ現存）
写本奥書：1、弘長三年（1263）十月七日、未交
活字本所載書：石橋誠道『九品寺流長西教義の研究』（国書刊行会、再刊1984）
参考文献：塚本善隆「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀観の鎌倉古鈔本」（『浄土学』5・6、1933）、石橋誠道『九品寺流長西教義の研究』（国書刊行会、再刊1984）、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』下（大東出版社、1977）
解説：『選択集』第二章段にて示される、善導『観経疏』所説の正雑二行と『往生礼讃』所説の専雑二修との関係について論じた書。巻四のみ現存する。
　本書の著者については、内題下に「欣浄沙門　長［■］」とあり、石橋誠道によってほぼ長西の著作と見て間違いないことが論証されている（『九品寺流長西教義の研究』pp.56-61）。
　本書において長西は、正雑二行は何を行ずるのかという問題であり、専雑二修はどのように修するのかという問題であって、両者を同一視することはできないと主張している。
作成者名：吉田淳雄

選択疑問答

書名よみ：せんちゃくぎもんどう
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖聖人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1277（建治3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、寛文8（1668、京都大・仏教大・竜谷大）

刊本の奥書刊記：1、于建治三年（1277）九月、七九歳記之
活字本所載書：『浄全』7
参考文献：小西存祐「選択疑問答について」（『摩訶衍』14、1934）、石井教道「選択疑問答」（『選択集の研究　註疏篇』誠文堂新光社、1945）、恵谷隆戒『浄土宗三祖然阿良忠上人伝の新研究』（金尾文淵堂、1934）、玉山成元「浄土宗一条派の確立」（『佐藤博士古稀記念　仏教思想論叢』山喜房仏書林、1972）、大橋俊雄『三祖良忠上人』（神奈川教区教務所、1984）、伊藤祐晃『浄土宗史の研究』（国書刊行会、1984）、広川堯敏「良忠上人述『浄土宗要集』の成立をめぐる諸問題（二）—西山義との対論—」（良忠上人研究会編『良忠上人研究』大本山光明寺、1986）、野村恒道・福田行慈編『法然教団系譜選』（青史出版、2004）、米沢実江子「『選択疑問答』について」（『仏教大学総合研究所紀要』15、2008）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214（建保2）比叡山で受戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。

本書は、毘沙門堂阿弥の疑難に対して良忠が答えた内容を1277（建治3）にまとめたものであるとされている。また毘沙門堂阿弥については、長西の弟子の阿弥陀（1287（弘安元）寂）とする説もあるが、確証はない。

本書は『選択集』の章に沿って展開されるが、第5・6・15・16の4章は「（毘沙門堂阿弥より）問い無きが故に答えに及ばず」として記載がない。問いは全部で34箇に及び、その内容は、問い（疑難）の文の半数程が『決疑鈔』と重なり、「答」では更に『決疑鈔』『東宗要』との同文（同意趣文）が多く見られることから、良忠の『選択伝弘決疑鈔』・『東宗要』との関連が指摘できる。

本書の内容は、正行と雑行、念仏と諸行に関して多くの分量がさかれている。正行と雑行については、『往生礼讃』の十三の得失と『観経疏』の五番相対とを「十三と五番と開合異なると雖も彼此全同」と述べ、念仏と諸行については、念仏を口称とし、諸行を観仏とした上で、念仏を易修、観仏（諸行）を難修とする。また問いの中には、しばしば『選択集』の訓法を問うものが見られることから、問者の『選択集』をよく理解しようとする姿勢が窺える。また巻末には、『選択集』撰述の背景、ならびに聖光が『選択集』を書写したこと等が記されているものの、『選択伝弘決疑抄』巻末にあるような詳細な日時・場所等の記載はない。
作成者名：米沢実江子

選択集私抄

書名よみ：せんちゃくしゅうししょう、せんぢゃくしゅうししょう
書名別名：選択私抄、選択私集鈔、選択集私集鈔、選択集聞書、選択三河八巻抄、西山八巻抄
著者名：堯恵
著者名よみ：ぎょうえ
著者名別名：善偉房堯恵、善偉
著者生没年：1328（嘉暦3）-1395（応永2）
成立翻訳年：1387（至徳4）頃
巻数：8
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都長講堂蔵本（1495（明応4）、了珎書写、巻1～6に当たる零本3冊、ただし前後と巻5巻末の数丁を欠く）
2、岐阜清閑寺蔵本（1597（慶長2）、書写者不明、永金手沢本、巻2零本）
3、竜谷大蔵本（1699（元禄12）、徳円寺書写、書写原本は恵空所持本）
4、大谷大蔵本（元禄（1688-1704）頃（？）、書写者不明、法蔵寺卍亨手沢本）
5、大正大蔵本（未調査）
写本奥書：1、（巻一）明応四年乙卯（1495）六月十三日於山崎千手院書写畢、浄土西谷門人了珎〈生年三十〉
（巻二）明応五年（1496）三月十五日於山崎専修院以仏陀寺二世之御本書写之畢、浄土西谷門人了珎〈三十一〉
（第十一章段末尾）晩学沙門了珎書之（以下欠本）
2、（未調査）慶長二年（1597）
3、（巻一袖書）校合凡例、写本者以洛陽西福寺隠住恵空所持之本而全篇令写之一校畢、而以三本校合於此、一天文年中於洛陽〈東山〉禅林寺写之本〈但闕初巻、六条閑唱寺所持也、以天字而簡余本〉、二豊後善教寺所持之本〈簡以善字〉、三洛陽〈東六条〉浄真寺所持之本〈簡以浄字、但考初巻余七未及校合〉／写本云、私問此鈔於西山之諸老々々同言謂之八巻抄未知作者云々、然今此写本第三奥云堯恵作之云々、復堯恵之鈔別有之、未決正作之名、後学糺之矣／私〈某甲恵空〉云、此抄八巻可為堯公之作、一ニハ此抄第三ノ奥ニ堯恵作之ト云々、二ニハ論註ノ堯恵ノ抄ト其ノ文格相同キガ故ナリ也、全ク同ノ義多シ、堯恵ノ抄別ニ有之者是ハ不自作、堯公ノ説ヲ遺弟ノ聞書セル所也、開巻可見之、後日開巻々中文内ニ堯恵トアリ、又三巻ノ聞書ニ爾ト堯公トアリ
（巻二）天文年中書写之本奥書云、天文十九庚戌年（1550）七月七日於禅林寺写畢、此料紙顕雄ヨリ給也、越前住正運〈年二十五〉印
（巻三）本云、此抄円福寺第三代堯恵和尚製作
（巻六）天文写本奥書云、天文十九庚戌年（1550）七月五日於禅林寺書畢、一校、此料紙顕雄ヨリ給也／江州大津徳円寺庫内
（巻八）五巻見聞〈的道〉云、此抄者円福寺第三世善偉長老制作之、而間雖為一流之秘抄深志故令書写之、於後代守其志可授之者也〈乃至〉堯恵ハ名也善偉ハ道号也、而ニ名ヲ字ト云道号ヲ諱ト云也、此抄一部已上八巻〈已上〉／此三行余文字天本乃無／此私抄全部八冊〈亦云西山八巻抄〉以洛陽西福寺隠侶恵空所持之写本写之畢、然後得禅林寺天文年中所写之古本校於此已矣、維時元禄十二己卯杞（1699）初秋上旬書、入于大津徳円寺庫内
4、（巻一）三河国檀林大神光山職住貫卍亨法滅後莫曬書店、（梵字「南無阿弥陀仏」）卍鷲（花押）
（巻二）写本云、此抄者円福寺第三世善偉長老制作之而間雖為一流秘抄深志故令書之、於後代守其志可授之者也、若有聊爾相伝者背冥感失法命、可秘々々（以下別筆）亦是二条殿之写御聴講直本者也
（巻四）（本文と異筆。卍鷲の筆か）元禄十四（1701）同元禄十六未（1703）正月七日
（巻五）標紙ノ色ハ何ニテモくるしからぬも天地ハ此ノ朱引ノごとくニ［■■■■］
刊本所在：1、享保1（1716、大谷大・西山短大・竜谷大）
2、刊年不明（大谷大・種智院大・東洋大哲学堂・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、本云、此抄者円福寺第三世善偉長老制作之而間雖為一流秘抄深志故令書之、於後代守其志可授之者也、若有聊爾相伝者背冥感失法命、可秘可秘、選択私集鈔巻八大尾、享保元丙申年（1716）八月吉祥日、堀川通本國寺前金屋小佐治半右衛門、佐女牛通五条上町同半七、

五条橋通東洞院東入町福森兵左衛門
2、(求版) 本云 (以下「大尾」まで同文) 享保元丙申年 (1716) 八月吉祥日、堀川通綾小路下ル町、錢屋庄兵衛
活字本所載書：『選択集』1-3 (「仏教大系」、仏教大系刊行会、1921-1923)
参考文献：石井教道『選択集の研究　註書篇』(1945、誠文堂新光社)
解説：西山派深草義の円福寺第3世尭恵の著作で、『選択集』を注釈したもの。写本の巻1に「如来入滅壬申ヨリ至徳四丁卯至テ二千三百三十六年歟」との割注（版本では欠文）があり、その頃の成立と考えられる。
　竜谷大写本によると、江戸初期に作者名が失われていた本書について、真宗大谷派初代講師の恵空が尭恵の作と考証したようである。その後、享保1年に出版された際には、「沙門尭恵述」と明示された。その版式、書肆の一致から推測するに、恵空の盟友で粟生光明寺37世の明空沢了が開板に関わったものと思われる。
　なお、最古写本である長講堂本を書写した「了珎」は、永観堂禅林寺の中興本願として知られる。
作成者名：稲田廣演

選択集述疑

書名よみ：せんちゃくしゅうじゅつぎ（せんぢゃくしゅうじゅつぎ）
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（書写年不明、書写者不明）
写本奥書：1、(奥書なし)
活字本所載書：『金沢文庫資料全書』4「浄土編」1
参考文献：石井教道『選択集の研究—註疏編—』(誠文堂新光社、1945)、塚本善隆「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本」(『浄土学』5・6 (『今岡教授還暦記念論文集』1933))、納富常天「『選択集述疑』解題」(『金沢文庫資料全書』4「浄土編」1)、浅井成海「法然の諸行廃捨に対する批判の系譜—『選択集述疑』を中心として—」(『真宗学』74、1986)
解説：本書は、聖道門的立場から10箇条の疑問（「上巻」正雑二行・専雑二修・余行非本願・第十八願唯称名念仏、「下巻」一向・一念大利無常功徳・止住百歳・光明不照余行・約対雑善讃歎念仏・付属念仏）を掲げて称名本願義の否定と諸行往生とを主張する。
　塚本善隆は「『諸行本願義』(長西) と相似たり」とし、また「『浄土伝統総系譜』において「性仙、字は道空、浄光明寺に住す。此の人高弁の摧邪輪に附順して選択集を難ず」等とあることに依て著者は性仙道空である」(「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本」(『浄土学』5・6、1933) としている。また浅井成海は「『摧邪輪』の影響を強く受けた書である」(「法然の諸行廃捨に対する批判の系譜—『選択集述疑』を中心として—」(『真宗学』74、1986)) としている。
作成者名：米沢実江子

選択集大綱抄

書名よみ：せんちゃくしゅうたいこうしょう、せんぢゃくしゅうたいこうしょう
書名別名：選択本願念仏集大綱抄、選択大綱抄
著者名：道光
著者名よみ：どうこう
著者名別名：了恵、望西楼、蓮華堂、広済和尚
著者生没年：1243（寛元1）- 1330（元徳2）
成立翻訳年：1296（永仁4）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、慶安2（1649、大正大・東京大・東洋大）
2、延宝2（1674、大谷大・大正大・仏教大・竜谷大）
3、刊年不明（東洋大）
刊本の奥書刊記：1、慶安二巳丑（1649）暦初夏吉旦、中村長兵衛新刊
2、延宝二甲寅（1674）暦二月吉日、五條橋通丁子屋兵衛板行／洛東知恩院前、皇都書肆、沢田吉左衛門寿梓
3、(未調査)
活字本所載書：『浄全』8
参考文献：小西存祐「選択集大綱抄を読む」(『摩訶衍』10、1931)、小沢勇貫「選択集の章疏論難書　解説」(『浄土宗典籍研究』山喜房仏書林、1975)
解説：道光による『選択集』に対する注釈書。永仁4年（1296）夏に道光が草したもので、これを元亨2年（1322）2月28日に弟子の真恵が書写したものが、慶安版の底本となっている。
　本書は、16章段を3巻に分けて、上巻には第1・2章、中巻には第3-7章、下巻には第8-16章を配し、各章の重要な論点を問いの形で示し、それに答えるという叙述の形式を採っている。第1章から3章までを一宗の大綱を述べたものとし、『選択集』の末尾の「四行偈」(いわゆる「略選択」の文) は大綱をまとめたものとし、第4章以下は釈義の網目で、本願念仏の衆徳（諸々の徳）を顕かにしたものとしている。16の章題全てに「以廃立而為義」と付記し、16章段が廃立の義で一貫していることを強調している。諸師の異説を図示していること、自説の論拠に『黒谷上人語灯録』所収の法然遺文を多く用いていることも大きな特徴である。
　良忠門下で論争の争点となった、往生の業因の成就（業事成弁）は一念によるかそれとも多念か、三心具足でも往生できない場合（心具不生）があるかなどの問題については、三心具足の称名によって、平生臨終を問わず一念で往生の業因が成就すると一念業成の立場を表明している。しかしながら平生一念業成の後に悪を積み念仏しなかったならば、その悪が以前の善業によって得られたよいはたらき（前善感果之力用）を抑えてしまうので、結局は信を一念に取り、行を一行に励むべきことを説く。また三心具足の者でも不生の場合があるとする。即ち三心には正行の三心と雑行の三心があり、前者を具する者は必生であるが、後者を具する者は不必であるとする。また業成には安心門と起行門があり、前者を三心業成とし一念で業成すると述べ、後者は機根によって一念で業成するか多念で業成するか不定とし、三心を行者の安心、業成を仏力とした上で、業成は三心より強いと把え、三心具足の念仏も仏力業成の念仏もともに決定往生の業因であるが、前者は悪に妨げられるがゆえに弱いとしている。このように道光は三心具足でも不生の場合もありうるという心具不生義を説き、念仏者は必ず四修の法を具足すべきとしている。この心具不生義に対しては、伝礼阿『大経聞書』、聖冏『心具決定往生義』『涇渭分流集』で論難されている。
作成者名：曽田俊弘

選択集略鈔

書名よみ：せんちゃくしゅうりゃくしょう
書名別名：選択略鈔
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖聖人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1269（文永6）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、大正大蔵本（江戸初期、書写者不明、円澄撰『選択集諸家所解略鈔』所収）
2、大正大蔵本（1722（享保7）、三明軒畔睇書写）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
参考文献：石井教道「選択集略鈔」（『選択集の研究　註疏篇』誠文堂新光社、1945）、広川堯敏「選択集略鈔と選択伝弘決疑鈔」（『印仏研』41-2、1993）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214（建保2）比叡山で受戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249年（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。

本書には著者名は明記されていないが、円澄撰述本には書写者による「此書記主の真撰相違無し」や「此抄選択略鈔とも云。良忠上人の御自筆、述聞十六ヶ条に見へたり」（尊観『浄土十六箇条疑問答』（『浄全』11、p.673））等の墨書があり、また1722（享保7）写本にも「選択略鈔一巻然阿上人之述也」とあることから良忠作とされている。

内容は、初めに「十六章段目録」として、聖道浄土（判教大綱）、正雑二行（已上起行綱目行教）、念仏本願（已上二宗ノ大綱行也）、三輩念仏（已上一宗綱目畢）、念仏利益（行益）、特留念仏（行時）、光明摂取（行縁）、具足三心（行者安心）、行用四修（行者作業）、化仏讃歎（感畢）、讃歎念佛（勧讃）、付屬阿難（流通）、念仏多善（流通由）、證誠念仏（仏語）、諸仏護念（報護）、付屬身子（流通）というように『選択集』全16章の名目のみを挙げ、次に内容について42箇の細目（1722写本は19）を示す。しかしこの42の細目は「選択本願念仏集」・「南無阿弥陀仏」・「聖道浄土」（18項目）・「正雑二行」（21項目）・「第三念仏本願段事」からなっており、『選択集』の全編を解釈するものではない。その論述は『決疑鈔』の内容の取意の場合もあれば、『決疑鈔』の一文を端緒として本書独自の解釈（文証）を示す場合もあるが、いずれにせよ概ね『選択伝弘決疑鈔』（1254）に添う形でなされている。

本書の成立について石井教道は「大体において『決疑鈔』を簡略にしたものといえる」として『決疑鈔』以降の成立とするのに対し、広川堯敏は「思想内容から言って『選択集略鈔』は素朴であり『決疑鈔』は円熟した思想を伝えている」として、石井の説とは反対に、本書は『決疑鈔』の前に成立したとする。このように本書の成立については未だ確定的な説が無いことから、熟慮する必要がある。
作成者名：米沢実江子

選択伝弘決疑鈔

書名よみ：せんちゃくでんぐけつぎしょう（せんぢゃくでんぐけつぎしょう）
異本書名：選択集決疑鈔、選択集弘決疑鈔、決疑鈔、選択決疑
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖聖人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1254（建長6）
成立地：日本
巻数：4／5
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、仏教大蔵本（1299（永仁7）、良堪書写）
2、鎌倉光明寺蔵本（書写年不明、良暁書写）
3、金沢文庫蔵本（書写年不明、書写者不明、断簡、大橋俊雄『三祖良忠上人』参照）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
刊本所在：1、元亨1（1321、有隣館・京都大）
2、慶長14（1609、叡山文庫）
3、慶長19（1614、東京大（焼失））
4、寛永年間（1624-1644、杉紫明氏）
5、寛永7（1630、大谷大・竜谷大）
6、寛永9（1632、大谷大・京都大・大正大・仏教大）
7、寛永19（1642、所有者不明）
8、慶安2（1649、仏教大）
9、明暦2（1656、竜谷大・仏教大）
10、刊年不明（大谷大・筑波大・種智院大・名古屋市蓬左文庫・高野山真別所・西尾市立図書館岩瀬文庫、「選択伝弘決疑鈔裏書」と合冊）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、当世流布決疑鈔異本万多損落非一、今依数多本令遂校合攸覃鏤梓也矣、下州竜沢山大厳寺住世比丘肇蓮社源誉隨流、於後日値御正本学者宜有添削已上、于時慶長十四巳酉年（1609）七月六日鏤梓主雲竜（藤堂祐範『浄土教古活字版図録』より）
3、下州於竜沢山大厳寺隨流時代板行者也、于時慶長十九甲寅年（1614）七月六日鏤梓主雲竜（藤堂祐範『浄土教古活字版図録』より）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
7、（未調査）
8、（未調査）
9、（未調査）
10、（未調査）
活字本所載書：『浄全』7、『大正蔵』83、『仏教大系』12-13
参考文献：藤堂祐範『浄土教古活字版図録』（貴重図書影本刊行会、1934）、藤堂祐範「浄土教徒が遺せし印版文化足跡の一二」（『仏教文化研究』1、1944）、『第15回大蔵会展観目録』（大蔵会編『大蔵会展観目録—自第1回至第50回—』1981）、大橋俊雄『三祖良忠上人』（神奈川教区教務所、1984）、松永知海「良忠撰述忍徴募刻『選択伝弘決疑鈔』の研究（上）—伝本の書誌的研究を中心として—」（『仏教文化研究』31、1986）、松永知海「良忠撰述忍徴募刻『選択伝弘決疑鈔』の研究（下）」（『源智・弁長・良忠　三上人研究』三上人御遠忌記念出版会、1988）、広川堯敏「新出の良忠述・一巻本『三心私記』について」（『仏教文化研

究』32、1987）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214（建保2）比叡山で受戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。
本書の述作は、鏑木九郎入道（在阿）の請いによるもので（聖冏『決疑鈔直牒』巻第1）、1254（建長6）に撰述を始め、初め4巻本として成ったものを、その後何度かの再治を施して5巻本とした。以下では『浄全』7所収の忍澂募刻本（5巻）の内容に基づいて解説を行う。
本書は良忠による『選択集』の注釈書で、浄土宗における『選択集』解釈の規範とされるものである。『選択集』の文を挙げ、次に私釈ならびに問答を以て解説を行っている。その内容を紹介すると、先ずその全体像に触れ、『選択集』全16章の内「第1章を判教の大綱、後の15章を起行の綱目」とする。続いて題号「選択本願念仏集」と「南無阿弥陀仏往生之業念仏為先」を釈し、「為先」とは前後をいうのではなく念仏が最要であるという事を示すものとする。
以下、注目すべき箇所のみを述べると、まず「第二捨雑行帰正行篇」では、正行・雑行共に極楽に往生することが可能な行であるが、下機にとっては諸行での往生は難しいので、雑行（諸行）を捨てて正行即ち称名行に帰すべきと述べる。「第五念仏利益篇」では、「利益」とは現生と後生とに通じてその利益を得る事であり、『阿弥陀経』に説く「多善根」と同意であるとする。「第六末法万年特留念仏篇」では、『無量寿経』が第一であり、大悲の本懐は『無量寿経』にあるとする見解が示される。「第七光明唯摂念仏行者篇」では、称名行は本願に誓われた行であり、また「仏光」は義、「称」は名であり、名義具足して不捨の益があるとする。「不照余行」とは本願でない余行には摂益がないことをいう為に「不照」というのであって、余行を修す事が仏の身光を遮断する事をいうのではないとする。「第八三心篇」では、三心（至誠心・深信・回向発願心）は聖道門・諸行にも通じるものであるが、ここでは往生行である念仏における三心であるとする。また「欲学解・欲学行」の説明では、解義の時は一切の教えを学び、修行の時は有縁の一行を修すべきであるとする。「第九四修法篇」の四修に関しては、一切の善根を回向して往生極楽を願えば、往生の後に四修並びに自利利他の行が自然に具わると説く。「第十一約対雑善讃歎念仏篇」では、念仏の者を「好」といい、雑行を修する者は利益が劣であるので「悪」と名付けるのであるが、雑行が悪業であるというのではないとする。「第十二付属仏名篇」では、善導『観経疏』において「阿弥陀仏名を付属す」と解釈するのは、もとは天台の『観経疏』（『大正蔵』37、p.194下）にあることを示す。また三福には勝劣があるが何れも往生可能であって、浄土宗の意として、諸行往生の義は明かである（『浄全』7、p.321）とする。次の「第十三念仏多善根篇」でも、「五番相対」で「生不生対」を立てていない事等を根拠として、諸行でも往生は可能であるとする。また「千中無一」は「不至心の者」の場合をいうのであるとする。「第十五六方諸仏護念篇」では、延寿のみを願う者は浄土に生まれる事ができないとする一方で、様々な衆生がある事を考えれば、延年転寿のみを祈願して念仏しても、祈願に応じた利益がある場合も否定できないという。「第十六以弥陀名号付属舎利弗篇」では、『選択集』での「八種選択」の義に加え、聖光『徹選択集』で説かれる「二十二選択」を示す。また『選択集』では始めに「選択」と題して、最後に「八種選択」を述べるのは、称名一行のみが選択の義に適った行である事を明らかにする為であるという。
総じていうと良忠は、第3章の註釈に示される通り、仏教を総・別で捉えた上で、浄土宗の教えを「別」の立場で理解しようとしているといえる。なお本文中では「先師云」というように、師聖光の述べた内容を示し、また当時の浄土宗内における諸師の名を挙げて聖光・良忠の解釈との異同を示す。また巻末には『選択集』広・略2本の相違が示されている。
忍澂募刻本は、その凡例において、この募刻本が「会本」であることを延べ、本書各巻毎に諸本の校異の結果を記しており、諸本との異同に注意する必要がある。
作成者名：米沢実江子

選択伝弘決疑鈔裏書

書名よみ：せんちゃくでんぐけつぎしょううらがき（せんぢゃくでんぐきつぎしょううらがき）
書名別名：決疑鈔裏書、選択集決疑鈔裏書、選択本願念仏集決疑裏書
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖聖人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、正保2（1645、大谷大・大正大・仏教大・竜谷大、「選択伝弘決疑鈔」と合冊）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『浄全』7
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214（建保2）比叡山で受戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。
本書は、自著『選択伝弘決疑鈔』（『決疑鈔』）の注釈書である。『浄全』の解題では、1259年（正元5）頃の述作であろうとする（『浄全』21）。
本書の内容は「序」に続いて「第一処」「第二処」「第三処」「第四処」という大段に分れている。「序」と「第一処」の前半では『選択集』から、平基親の序（廬山寺本・往生院本には無く、延応本には有る）と『選択集』第1章の語句を挙げ、「第一処」後半以降は『決疑鈔』の語句を挙げ、問答体の型式で解説をする。「第一処」後半では『選択集』第1章の注釈の語句、「第二処」では『選択集』第2-7と12章の注釈の語句、「第三処」では『選択集』第8-10章の解釈の語句、「第四処」では『選択集』第11-16章解釈の語句を挙げる。
採取される語句を5巻本『決疑鈔』（『浄全』所収本）に比定してみると、5巻本には見られないものもあり、そのいくつかは『観経疏』・『徹選択集』に典拠を確認できる。おそらくこれらの語句は、現在失われている4巻本『決疑鈔』にあったのではないかと推測でき、本書は主として4巻本を注釈したものと考えられる。もしそうであれば『決疑鈔』は4巻本から5巻本に再治される中で、ただ増広されただけではなく、削除された内容もあり、その1部が本書によって窺えるのではないかと考えられる。

作成者名：米沢実江子

選択本願念仏集／選択集

書名よみ：せんちゃくほんがんねんぶつしゅう／せんちゃくしゅう、せんぢゃくほんがんねんぶつしゅう（せんぢゃくしゅう）
書名別名：専修念仏選択集
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：1198（建久9）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都廬山寺蔵本（1198（長承2）、法然・遵西・感西筆、草稿本）
〈影印版〉:太田資順・原玆朗編『選択本願念仏集』（日本仏教宝典会、1918）
〈影印版〉:『重要文化財廬山寺蔵　選択本願念仏集』（法蔵館、1979）
〈影印版〉:大正大学浄土宗宗典研究会編『『選択集』諸本の研究〈資料編〉第1巻・廬山寺本』（文化書院、1999）
2、当麻往生院本（1204（元久1）、書写者不明）
〈影印版〉:『選択本願念仏集』（土川勧学宗学興隆会、1931）
〈影印版〉:『往生院本　選択本願念仏集』（法蔵館、1980）
〈影印版〉:大正大学浄土宗宗典研究会編『選択集』諸本の研究〈資料編〉第2巻・往生院本（文化書院、1999）
3、禿庵文庫旧蔵本（13c前半、書写者不明）
〈影印版〉:大谷大学真宗学総合研究班編『禿庵文庫　選択本願念仏集』（大谷大学、1974）
4、竜谷大蔵本（1356（延文1）（？）、釈覚善（？）、延書本、広本、上巻のみ）
5、竜谷大蔵本（室町初期、書写者不明、延書本）
6、大谷大蔵本（室町初期、書写者不明、延書本）
7、舟橋水哉氏旧蔵本（徳川初期、恭畏書写）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、元久元年（1204）十一月二十八日書写了、願以此功徳往生一仏土而已／元久元年（1204）十二月十七日、源空（花押）
3、承元元年（1207）二月、自佐法印賜之了、暁之、大谷寺御留之艸本也、可珍之
4、（第1・2・4帖）自存覚上人奉相伝之、釈覚善
（第3帖）延文元歳丙申（1356）六月二十八日、自存覚上人奉相伝之訖、釈覚善
5、暦応四歳辛巳（1341）五月十四日、以聖人御点之正本、依頼主之所望延呈于仮名加校合訖、努力不可有忽緒之義而已
6、（未調査）
7、本云、旹天正十七己丑季（1589）正月二十五日書写之畢、余多覓摺本、文字言句無謬様大方入眼精候也、雖然麁筆之為体、後見猶有憚耳、浄土末学沙門因空
刊本所在：1、建暦2（1212、現存せず）
2、延応1（1239、法然院）
〈影印版〉:大正大学浄土宗宗典研究会編『『選択集』諸本の研究〈資料編〉第3巻・延応版』（文化書院、1999）
3、建長3（1251、西本願寺、下冊のみ）
4、鎌倉期（？）（仏教大・東洋文庫）
5、鎌倉末期（西本願寺、上冊のみ）
6、正中2（1325、大東急記念文庫、下冊のみ）
7、南北朝期（大東急記念文庫）
8、南北朝期（竜谷大・宝塚亀摂寺・伊勢神宮・石川本誓寺）
9、永享11（1439、滋賀新知恩院）
刊本の奥書刊記：1、（刊記不明）
2、延応第一之暦（1239）沽洗第六之天、校根源正本直展転錯謬、即写印字、用令流布矣
3、浄土教門解脱詮、今開印板弘流伝、廻施尊儀及群類、順次同生九品蓮、建長三年（1251）七月日、願主入阿弥陀仏
4、浄土教門解脱詮、今開印板弘流伝、廻施尊儀及群類、順次同生九品蓮
5、（刊記なし）
6、正中二年（1325）十月日、比丘了延刻
7、（刊記なし）
8、（刊記なし）
9、奉開板選択集者、為法界衆生往生極楽、令安置東山知恩院、勧進沙門静秀、永享十一年己未（1439）十二月二十五日
この他、多数の刊本有り。詳細は藤堂祐範『選択集大観』、及び『浄土宗大辞典』の「選択集の刊本」の項を参照のこと。
活字本所載書：『昭法全』、『浄全』7、『浄土宗聖典』3、『定本法然上人全集』（山喜房佛書林、1977）、藤堂祐範校訂『選択本願念仏集』（土川勧学宗学興隆会、1933）、『真聖全』1、『選択本願念仏集-浄土真宗聖典原典版』（本願寺出版社、1985）、『大正蔵』83、『日本大蔵経』89、仏教大系完成会編『選択集』（「仏教大系」、1921-1923）、日本思想大系10『法然・一遍』、大橋俊雄校注『選択本願念仏集』（岩波文庫、1997）、大正大学浄土宗宗典研究会編『『選択集』諸本の研究〈資料編〉』（文化書院、1999）、「〈翻刻〉正中版『選択本願念仏集』」（仏教大学総合研究所紀要別冊『法然浄土教の総合的研究』仏教大学総合研究所、2002）
その他、多数有り。藤堂祐範『選択集大観』、石井教道「選択集の研究（総論篇）」（『現代仏教名著全集第六巻　日本の仏教（1）』隆文館、1965）p.269などを参照のこと。
現代語訳書：服部英淳『現代語訳　選択集』（大東出版社、1980）、大遠忌記念聖典意訳編纂委員会編『聖典意訳　七祖聖教』（浄土真宗本願寺派宗務所内出版部、1977）、村瀬秀雄『和訳法然上人選択集』（常念寺、1979）、塚本善隆編『法然』（「日本の名著」5、中央公論社、1983）、石上善応『選択本願念仏集　法然』（ちくま学芸文庫、2010）、大橋俊雄『法然全集』2（春秋社、1989）、阿満利麿『選択本願念仏集-法然の教え』（角川ソフィア文庫、2007）
Leo Marvel Pruden, *The Senchaku Hongan Nembutsu-shū ("Selested Passages on the Fundamental Vow and the Nembutsu") by Hōnen-bō Genkū*, Los Angeles, 1978
Morris J. Augustine and Kondō Tesshō, *Senchaku Hongan Nembutsu Shū : a Collection of Passages on the Nembutsu, chosen in the Original Vow / compiled by Genkū (Hōnen)*, (BDK English Tripiṭaka ; 104-2), Berkeley, Calif. : Numata Center for Buddhist Translation and Research, 1997
Senchakushū English Translation Project, *Hōnen's Senchakushū : Passages on the Selection of the Nembutsu in the Original Vow (Senchaku Hongan Nembutsu Shū)* , Honolulu : University of Hawai'i Press & Tokyo : Sōgō Bukkyō Kenkyūjo, Taishō University, 1998
Jérôme Ducor, *Le gué vers la Terre Pure : Senchaku-shû / Hônen*, Paris : Fayard, 2005
藤本浄彦他『欧米語の法然浄土教研究-その翻訳紹介をめ

ぐる諸課題-』（仏教大学文学部仏教学科藤本研究室、1992）所収の英訳（ただし第11章まで）

参考文献：石井教道『選択集の研究』註疏篇・総論篇（誠文堂新光社、1945、1951）、石井教道「選択集の研究（総論篇）」（『現代仏教名著全集第六巻　日本の仏教（1）』隆文館、1965）、石井教道『選択集全講』（平楽寺書店、1967）、藤堂祐範『選択集大観』（山喜房仏書林、1975）、真宗学研究会編纂『選択集索引』（永田文昌堂、1981）、桑門秀我『選択集大意・出雲宗要』（国書刊行会、1985）、斎藤唯信『選択集講義』（法文館、1925）、土川善澂『選択集講話』（一音社、1928）、石井教道『選択集講義』（東宝書院、1935-1936）、井川定慶『法然上人の選択集』（新英社、1936）、高千穂徹乗『選択集入門』（百華苑、1957）、小沢勇貫『選択集講述』（浄土宗、1971）、鈴木法琛『選択集概説』（百華苑、1975）、石田充之『選択集研究序説』（百華苑、1976）、河住玄『選択集の研究』（宇都宮欣求庵、1978）、河住玄『選択集古本攷』（宇都宮欣求庵、1990）、西山学会『選択集』研究会編『復元根源正本『選択本願念仏集』』（西山浄土宗宗務所、1998）、藤堂恭俊『選択集講座』（浄土宗出版室、2001）、安冨信哉『『選択本願念仏集』私記』（真宗大谷派宗務所出版部）、今岡達音「広本選択集延書」（『浄土学』5、1933）、石井教道「恵空校合建暦版選択集に就て」（『浄土学』13、1938）、坪井俊映「仏教大学図書館所蔵稀観古鈔本について」（『仏教大学研究紀要』38、1960）、榊泰純「廬山寺本『選択集』の本文について」（『櫛田博士頌寿記念　高僧伝の研究』、1973）、高橋正隆「禿庵文庫本『選択本願念仏集』と『高山寺聖教目録』について」（『大谷学報』206、1975）、藤堂恭俊「廬山寺蔵古鈔本選択集の諸問題」（『仏教大学研究紀要』63、1979）、上田良準「選択集草稿本第三筆は西山上人証空」（『印仏研』30-2、1982）、堀本賢順「廬山寺所蔵本「選択本願念仏集」についての一考察」（『印仏研』32-1、1983）、兼岩和宏「廬山寺蔵『選択集』における白紙頁の解明」（『仏教大学仏教学会紀要』6、1998）、兼岩和宏「廬山寺蔵『選択集』の原初形態」（『東海仏教』44、1999）、吉水成正「『選択集』延応版について」（『鴨台史学』1、2000）、宇高良哲「『選択集』諸本の成立過程について」（『阿川文正教授古稀記念論集　法然浄土教の思想と伝歴』、2001）

解説：法然の主著とされる文献。浄土宗では「せんちゃくしゅう」、浄土真宗では「せんぢゃくしゅう」と読む。全16章。

執筆年代については伝記などによって一定しないが（石井教道〔1965〕pp.311-312）、おおよそ建久9年（1198）、法然66歳の著作というのが通説となっている。『四十八巻伝』11等によると、法然は前年に病気となり、回復はしたものの、先々のことを案じた九条兼実が、その教えを文字に遺すよう法然に要請し、それを受けて成ったのが本書とされる。

執筆に際しては、真観房感西が教えについて論ずる役、証空が引用文を確認する役、安楽房遵西が書写の役として加わったとされる（『選択密要決』1）。ただし、遵西はその役に選ばれたことを自慢したので、法然は途中から、執筆役を感西に変更したという（『四十八巻伝』11等）。

聖冏『選択伝弘決疑鈔直牒』7によると、冒頭21文字が法然が自筆し、その後、遵西→感西→筆者不明→感西というように、執筆者が変わったととされ、事実、草稿本と位置づけられる廬山寺本の筆蹟を見ると、そのようになっている。なお、この廬山寺本にはかなりの訂正箇所が見られ、『選択集』撰述の過程が知られるという点でも貴重である。

さて、法然は本書の末尾で、一読の上は壁に埋めて人々の目に触れないようにと記したものの、実際には法然自身も上足の門弟にはその書写を許した（細川行信『法然　その生涯と教え』法蔵館、1979、pp.187-193、参照）。法然在世中に書写され、法然も目を通していたと思われる往生院本もその一つと考えられ、最も古い清書本として、その文献学的価値は非常に高い。

また刊本も法然滅後すぐに建暦版が開板されたが、この建暦版は嘉禄の法難の際に刊本・版木とも焼かれて現存しない。ただし、その後の延応版を皮切りに、『選択集』は各時代を通して次々と刊行され続けたので、印刷史の面からも注目されるている。

更に写本・刊本の多さと並んで驚くべきは注釈書の数である。江戸期を中心に、現在まで500部ほどに及ぶ。

なお、『選択集』は清書本（「高覧本」「略本」）完成後に、読む者の理解を助けるために言葉を足した「広本」と呼ばれるものも作成された。「広本」そのものは現存しないが、上巻のみながら延書（書き下し）された写本が竜谷大学に現存し、良忠などの著作中にも部分的な引用があるので、かなりその姿は復元できる。

さて、内容であるが、一言で言うと、「専修念仏」の根拠を選択思想によって証明しようとした書物。なぜ称名念仏のみが往生行なのか、その根拠を示した書物といえる。まず、第1章で末法の時代には聖道門を捨てて浄土門に帰すべきこと、第2章ではその浄土門において、往生行としては諸行を捨てて念仏のみを専修すれば必ず往生できることが述べられる。そして、三心と四修を説く第8・9章を除き、第3章から第16章まで、阿弥陀仏の“本願”に誓われた称名“念仏”を弥陀・釈迦・諸仏が“選択”しておられる証拠を、「浄土三部経」の中から“集”め、それを各章の冒頭に掲げ、善導の釈を付し、更に自身の「私釈」で、その内容を解説してゆく。中でも弥陀の選択の代表である「第十八願」をあげた第3章と、釈迦の選択の代表たる『観経』「付属の文」を示す第12章は重要。

この他、第1章では所依の経典や師資相承の問題、第16章では『選択集』全体のまとめたる「略選択」（「三選の文」）と「八選択」、及び「偏依善導一師」などが説かれるが、必ずしも法然教学の全体像を示そうとした書物ではないので、仏身・仏土論には直接的言及はない。

作成者名：安達俊英

選択本願念仏集名体決

書名よみ：せんちゃくほんがんねんぶつしゅうみょうたいけつ、せんぢゃくほんがんねんぶつしゅうみょうたいけつ
書名別名：名体決、選択本願念仏集名体決並念仏本願義義
著者名：長西
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、浄土宗宗典刊行会蔵本（所在不明）
2、大正大蔵本（所在不明）
3、吉川澤誠師蔵本（所在不明）
4、黒田成勝氏蔵本（江戸期、所在不明）
写本奥書：1、正本云、正安二庚子年（1300）閏七月四日於鎌倉浄光明寺慈光院書写畢、同五日一校、金沢称名寺第二世湛睿在判（『浄全』による）
2、（不明）
3、（不明）
4、（不明）

活字本所載書：『浄全』8
参考文献：小西存祐「『選択本願念仏集名体決』解題」(『浄全』21、1934)、石井教道『選択集之研究』注疏篇（誠文堂新光社、1945)、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』下（大東出版社、1977)、吉田淳雄「覚明房長西の浄土思想考―『選択本願念仏集名体決』を中心に―」(『大正大学大学院研究論集』24、2000)、吉田淳雄「長西の著作について」(『仏教論叢』44、2000)
解説：『選択本願念仏集』の題名7字と「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」の14字につき弁釈を加えた、『選択集』の末註書の一種。
「釈名」「弁体」の2部からなる。「釈名」では、「選択本願念仏集」の題名7字を能釈（「集」）と所釈（「選択本願念仏」）とに分かち、所釈の6字3句（「選択」「本願」「念仏」）についてその名義を釈している。「釈名」は全体の8割程の紙数を占め、とりわけ「選択」の釈は精細である。「弁体」では、「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」の14字について、「南無阿弥陀仏」の6字は『選択集』において説かれている教えの「体」を示し、「往生之業念仏為本」の8字はその註であるとし、『選択集』の所説内容を整理した図が附されている。
本書は、教義上は諸行本願・諸行往生の義を認めているものの、実践的には『選択集』に依拠して正定業たる称名念仏の一行を勧めており、積極的に諸行往生を説いているわけではない。本書には刊本は伝わっておらず、写本に関しても現在のところ全てその所在は不明である。したがって現状で披見できるのは、『浄全』8所収の活字本のみとなる。なお「写本所在」の項の1-3は『浄全』初版附録の冊子によって、4は石井教道『選択集之研究』註疏篇によって、それぞれその存在を知ることができたものである。
作成者名：吉田淳雄

善導和尚十徳鈔

書名よみ：ぜんどうかしょうじゅっとくしょう
書名別名：善導十徳、善導十徳鈔、十徳鈔、実得鈔
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1222（承久4）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（大正期、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、延宝8（1680、仏教大・大谷大）
2、貞享5（1688、竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『隆寛律師の浄土教　附遺文集』（国書刊行会、1941）
参考文献：爪生津隆雄「隆寛律師の著作に就て」(『真宗研究』18、1928)、平井正戒『隆寛律師の浄土教』（国書刊行会、1941）
解説：善導の徳を10項目立てて讃歎した書。延宝8年（1680）の刊本の序には承久4年（1222）3月に隆寛が記したことが見え、文雄の『蓮門経籍録』にも同様のことが記されている。隆寛が自身の見解を述べる箇所はなく、十徳全部引用である。その引用は（1）至誠念仏（『観経疏』『選択集』『唐高僧伝』『新修往生伝』)、(2）三昧発得（『新修往生伝』『選択集』)、(3）口出化仏（遵式『往生西方略伝』、曇省『善導像賛』)、(4）為師決疑（『瑞応刪伝』)、(5）造疏感夢（『観経疏』『選択集』）(6）化導広感（『唐高僧伝』『宝珠集』『新修往生伝』『楽邦文類』）(7）遺身唱滅（『新修往生伝』）(8）帝賜寺額（『新修往生伝』）(9）遺文放光（『宋高僧伝』）(10）影像変仏（『宋高僧伝』）である。善導の著書や善導・道綽・少康の伝記類等から抄出している。法然の『類聚浄土五祖伝』、幸西の『京師和尚類聚伝』と同じ形態の書物である。初期専修念仏教団の善導理解がわかる。本書は江戸期の刊本が残るのみで古写本は現存しない。
作成者名：伊藤茂樹

善導和尚類聚伝

書名よみ：ぜんどうかしょうるいじゅうでん
書名別名：善導和尚類伝、善導大師伝、類聚伝
著者名：覚瑜
著者名よみ：かくゆ
著者名別名：覚愉、住心房、出阿、出雲路上人
著者生没年：1158（保元3）－1233（天福1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
巻数：1
参考文献：伊藤祐晃編『広疑瑞決集・利剱名号折伏鈔合巻』（三師講説発刊所、1914)、山上正尊「成覚房幸西の著「玄義分抄」に就いて」(『無尽灯』20-1、1915)、住田智見著『浄土源流章解説』（法蔵館、1925)、塚本善隆「金沢文庫所蔵浄土宗学上の末伝希覯の鎌倉古鈔本」(『今岡教授還暦記念論文集』、大正大学浄土学研究会、1933)、山上正尊「唐朝京師善導和尚類聚伝の著者に就いて」(『真宗学報』14、1934)、大屋徳城編『金沢遺文』（便利堂、1934)、小笠原宣秀「唐朝京師善導和尚類聚伝に就いて」(『竜谷学報』310、1934)、松野純孝「宋代浄土教と一念義(上)(下)」(『金沢文庫研究』63－64、1961）
解説：本書は散逸して伝わらないが、善導の諸伝記を収集し、それに註釈を附した書であると推測される。
実は「善導和尚類聚伝」と類似のタイトルを持つ著作が現存し、その著者を『仏書解説大辞典』『国書総目録』では、覚瑜としている。ただし経典目録の『長西録』(『日仏全』1、p.352)、『蓮門類聚経籍録』(『日仏全』1、p.402)、『浄土真宗教典志』(『日仏全』1、p.524）では「善導和尚類伝一巻、覚愉」「京師和尚類聚伝一巻、幸西」とあり、覚瑜と並んで幸西の「類聚伝」も挙げられている。また、良栄も『東宗要第一見聞』「第一善導論義事」(『浄全』11、p.206）において「有人類聚伝、覚愉所作類聚伝」と述べていることから、かつては2種の類聚伝が存在していたと思われる。そして現在の学説では、現存する「類聚伝」は幸西ものであり、覚瑜著述の「類聚伝」は消失したという説が有力である（幸西「唐朝京師善導和尚類聚伝」の項を参照)。
では、その現存する「類聚伝」の著者が、なぜ幸西とされるのか。その理由を小笠原宣秀の論文では次のように述べる。1、現存する3種の写本の内、金沢文庫所蔵の写本の奥書には、幸西の弟子である全報房（薩生）の名が、また住田智見氏所蔵の恵空・恵山の伝写本の奥書には、同じく幸西の弟子である明信の名が記されている。2、信瑞は『広疑瑞決集』「第八疑」(伊藤祐晃編『広疑瑞決集・利剱名号折伏鈔合巻』三師講説発刊所、1914 ）において、善導捨身往生説の正否を定める際、覚瑜の「類聚伝」とされるものに見られる議論を引用するが、現存する「類聚伝」には、このような議論は見られない。以上の点からして、現行の「類聚伝」は、幸西撰述であろうとしている。
なお聖冏は『伝通記糅鈔』(『浄全』3、p.806）において、

覚瑜の「類聚伝」に「『智昇諸経』とは、智昇撰『集諸経礼讃懺儀二巻』である」と記載されていることを挙げているが、やはり、このような表現は現行本には無いことからして、現行本が幸西のものであることがより明確になると同時に、覚瑜の「類聚伝」は善導の諸伝記を収集しただけではなく、それに対する見解や釈義を加味していたと考えられる。

なお覚瑜は「覚愉」とも表記されるが、『浄土伝灯総系譜』下（『浄全』19、p.124）に倣い、引用箇所以外は「覚瑜」と表記する。

作成者名：伊藤瑛梨

善導講私記

書名よみ：ぜんどうこうしき
書名別名：善導講式
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：不明
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『長西録』寛永21年（1644）写本（小山正文「寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目録』」『同朋大学論叢』62、1990年）
解説：書名のみ『長西録』寛永21年（1644）の写本にみえる。なお寛文2年（1662）と宝永2年（1705）刊行の版本の『長西録』にはみえない。
作成者名：伊藤茂樹

仙洞三心義問答記

書名よみ：せんとうさんじんぎもんどうき
著者名：顕意
著者名よみ：けんに
著者名別名：道教房、公空、記主、聖恵
著者生没年：1238（暦仁1）-1304（嘉元2）
成立翻訳年：1295（永仁3）
巻数：1
漢和：和文
漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、西尾養寿寺蔵本（1464（寛正5）、書写者不明）
2、西尾養寿寺蔵本（1702（元禄15）、寛空書写、寛正5年写本の写し）
写本奥書：1、永仁三年（1295）十一月六日奉勅問十七日奏聞之、高三位重経卿奉行、奉行物治之間属左馬卿為忠朝臣申入之、廿一日持参直進覧了、以直御使被召之間無別奏者／永仁四年（1296）六月十二日於霊山勝寿院草菴以彼上人自筆正本書写畢／寛正五年（1464）甲申十一月朔日一校畢
2、（1、と同文の奥書に続いて）／元禄十五年午（1702）六月二十四日書写畢、寛空受印
刊本所在：1、文政3（1820、大谷大・西山短大・竜谷大・岩瀬文庫、『浄土宗建立私記』と合冊）
2、明治31（1898、仏教大・竜谷大、文政版の後刷、『浄土宗建立私記』・『菩薩蔵頓教一乗海義要決』・『難易二道血脈図論』・『華山院家四十八問答』・『観経四品知識義』と合冊）
刊本の奥書刊記：1、時文政三竜舎庚辰（1820）五月十九日、深艸一派大衆謹開版之
2、記主大和尚遺稿校版発起崇福寺励空大和尚、時文政二己卯年（1819）五月十九日刻成／明治三十一年（1898）三月五日再版、六巻合本正価金五拾銭、三陽崇福寺蔵、発行所愛知県額田郡岡崎町環翠堂伊藤小文司、東京麻布飯蔵森江佐七、仝浅草吉野町経世書院、京都知恩院古門前沢田吉左衛門、仝五条通高倉東沢田友五郎、京都花屋町永田長兵衛、名古屋市下江川町皓月堂与助、仝門前町其中堂兼助、仝本町五丁目大成堂文二郎
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2635）
参考文献：大橋俊雄「『安心起行作業抄』に就いて―伝法然上人撰述書研究　其一―」（『仏教論叢』7、1958）
解説：西山派深草義の顕意が、西山派東山義の漸空とその支持者である公卿とを相手に、善導『観経疏散善義』の三心釈について交わした問答を記録したもの。

序文等によると、永仁3年（1295）春（正月～3月）亀山殿において5日間、「入道相公羽林」すなわち出家しながら参議を務める近衛府の役人と顕意とによって、三心についての問答が行われた。本書冒頭はその初日と2日目の梗概である。3日目より5日目までの問答については省略され、別に記録と追進状があったというが、これは確認されていない。以下、本書の大部分は、同年10月末と11月3日の2日間、「河鰭殿」すなわち亀山上皇御所の一つ嵯峨川端殿（現、臨済宗臨川寺）において、入道相公に代わって相手となった漸空と顕意との問答の記録である。

至誠心について、漸空が「虚仮不真実を捨てて三業清浄の表裏なき心」とするのに対し、顕意は「自力を捨てて他力に向かう心」とするなど、文にとらわれない「西山の本義」を主張し、東山義と深草義の三心解釈の違いを論じている。途中、亀山上皇や居合わせた公卿らの言葉もあり、問答の現場を彷彿とさせる。ただし、あくまで顕意側のみの記録であり、終始漸空が劣勢のように記述されている。

なお、顕意が本書末尾に法然の著述として依用している『十三箇条問答』・『安心起行作業抄』・『署判十箇条』などが、すべて『黒谷上人語灯録』に採録されていない真偽未詳文献であることは注意すべきである。

顕意は、同年11日6日、亀山上皇の命を受けて本書を撰述、17日、序を書いて高階重経・左馬卿為忠に奏聞を依頼、21日、本書を持参し上皇に進覧した。その際に上皇と交わした問答が『浄土宗建立私記』に記録されている。

養寿寺蔵寛正5年（1464）写本の書き入れによれば、本書の割注は、もとは朱字の傍注だったという。この頃に本書の開板を企画したようであるが、その遺冊はなく、文政年間に顕意の他の著述と共に崇福寺励空によって開板されたのが、確認できる最初の版本である。

作成者名：稲田廣演

善導大師和讃

書名よみ：ぜんどうだいしわさん
著者名：聖光（？）
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立地：日本
漢和：和文
写本等の存欠：活字本
刊本
刊本所在：1、文政10（1817、仏教大（「二祖国師褒賞弁」付録））
刊本の奥書刊記：1、右和讃伝来久矣今因［■］流某甲之需附記以伝冀人人助往業、性阿弥陀仏月真記
活字本所載書：『日本歌謡集成』4（東京堂出版、1960）、

高野辰之『新訂増補　日本歌謡史』（初頭略）（五月書房、1978）
参考文献：多屋頼俊『和讃史概説』（法蔵館、1933）、小西存祐「国師の著作」（柴田玄鳳編『三上人の研究』、三上人遠忌事務局、1935）、高野辰之『新訂増補　日本歌謡史』（五月書房、1978）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。
　本書は、善導大師の生い立ちから、出家、『観経』によって念仏門に入られたこと、弘法、写経、造寺、臨終での聖衆来迎等のことを述べたものである。高野辰之は聖光作として取り扱っているが、多屋頼俊は「聖光上人の伝記類には和讃制作の事は何ら記されていない」、「この和讃は文詞拙劣で意味が通じかねる所がある（中略）善導大師の教義の核心には殆ど触れていない（中略）この和讃の構造、用語には源信の天台大師和讃の影響が明らかに認められる」等の理由から、聖光作とするのに疑問を呈している。小西存祐は高野辰之・多屋頼俊の説をふまえた上で、「宗祖に倣って、自ら善導宗沙門と号し、また和讃を作ってその徳を賛嘆せられたということもあり得ないことでもない。（中略）文詞の拙い所はあるにしても真作と認めたほうが穏当なように思われる」というように、聖光の真作としている。小西存祐は「『善導大師和讃』は『筑紫物語集』と共に伝道的方面の著作として一種の関係を持っている」として、両書を聖光の著作とした上で、両書の関係性を指摘する。
作成者名：米沢実江子

相好抄

書名よみ：そうごうしょう
書名別名：相好集
著者名：運覚／覚運
著者名よみ：うんかく／かくうん
著者生没年：？-1143（康治2）/953（天暦7）-1007（寛弘4）
成立翻訳年：10c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、大原来迎院如来蔵蔵本（1129（大治4）、暹胤書写、上巻のみ）
写本奥書：1、願以此功徳普及於一切我等与衆生往生安楽国、面見弥陀仏相好荘厳身及十方諸仏妙色身、皆聞正法亦見功徳身、仏子運覚／大治四年（1129）九月十日午尅書了、執筆暹胤／一交了、三郎丸
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、文化庁文化財保護部美術工芸課『来迎院如来蔵聖教文書類目録』（1972）
解説：本書の著者である運覚については現在のところ明かではない。ただし、同時期に『本朝新修往生伝』に取り上げられる醍醐寺の住僧の運覚（？-1143）がいる。この運覚は密教、三論に通じながら西方願生をも志していた僧侶であり、あるいは本書の著者の運覚であるという可能性もあるだろう。なお、『昭和現存天台書籍綜合目録』、『来迎院如来蔵聖教文書類目録』では本書の著者を「覚運」と檀那院覚運の著述としており、本書が覚運の著述である可能性も捨てきれない。一方、『来迎院如来蔵聖教文書類目録』では本書を逸失書としている。
　内容は佐藤哲英によれば、仏の相好に関する経論釈を140ほど列ねたものだが、阿弥陀仏の相好に関するものはないという。
作成者名：能島覚

尊号真像銘文

書名よみ：そうごうしんぞうめいもん
書名別名：尊号銘文、銘文、尊号の銘文
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：1255（建長7）・1257（正嘉2）
成立地：日本
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、福井法雲寺旧蔵本（1255（建長7）、親鸞真筆本）
〈影印版〉:『建長本尊号真像銘文』（法雲寺、1967）
〈影印版〉:『親鸞聖人真蹟集成』4（法蔵館、1974）
2、高田専修寺蔵本（1257（正嘉2）、親鸞真筆本）
〈影印版〉:『親鸞聖人真蹟集成』4（法蔵館、1974）
3、大谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
4、竜谷大蔵本（室町末期、顕恵書写）
5、京都永福寺蔵本（室町末期、書写者不明、残欠）
6、和歌山真光寺蔵本（室町末期、書写者不明）
7、大阪光徳寺蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、建長七歳乙卯（1255）六月二日、愚禿親鸞八十三歳書写之
2、正嘉二歳戊午（1257）六月二十八日書之、愚禿親鸞八十六歳
3、本云、建長七歳乙卯（1255）六月二日、愚禿親鸞八十三歳書写之
4、建長七歳乙卯（1255）六月二日、愚禿親鸞八十三歳書写之
5、（未調査）
6、建長七歳乙卯（1255）六月二日、愚禿親鸞八十三歳書写之
（表紙裏）康永元年（1342）三月下旬、源秀授与之（花押）
7、本云、建長七歳乙卯（1255）六月二日、愚禿親鸞八十三歳書写之
刊本所在：1、承応3（1654、竜谷大）
2、明和2（1765、大谷大・竜谷大、『真宗法要』所収）
3、寛正7（1795、未調査、生桑完明『親鸞聖人撰述の研究』より）
4、文化8（1811、大谷大・竜谷大、『真宗仮名聖教』所収）
刊本の奥書刊記：1、承応三甲午暦（1654）孟春吉祥、京極通円福寺町、秋田屋平左衛門板行
2、（未調査）
3、寛正七年乙卯（1795）七月刻、高田山蔵版、製本所、勢州津、山形屋伝右衛門
（序）坊間旧刊尊号真像銘文、視之於大法主帳中祖宝翰本、則断壁残珪亡論其全物耳、蓋其出急遽窃写者之手無可疑也、頃我大法主出彼善本、刻之山中而欲使奉宗之徒得観彼全璧、豈不盛挙乎故言其事爾、寛正癸丑（1793）秋八日高田後学西院僧都真淳謹識
4、（未調査）
活字本所載書：『真聖全』2、『浄土真宗聖典－原典版－』、『真宗聖典』、『定本親鸞聖人全集』和文編、『真宗史料集成』1、

『大正蔵』83（No.2656）
現代語訳書：岩倉政治「尊号真像銘文」（『現代語訳親鸞全集』、講談社、1974）、真継伸彦「尊号真像銘文」（『現代語訳親鸞全集』3、法蔵館、1982）、石田瑞麿「尊号真像銘文」（『親鸞全集』3、春秋社、1985）、鶴見榮鳳「尊号真像銘文」（『傍訳親鸞聖人著作全集』4、四季社、2001）、『尊号真像銘文－現代語訳－』（本願寺出版社、2004）
参考文献：安井広度『親鸞の代表的著述として　尊号真像銘文並其解説－高田、専修寺本－』（法蔵館、1923）、住田智見「尊号真像銘文講讃」（住田智見『真宗教学の研究』、真宗典籍刊行会、1941）、梅原真隆『尊号真像銘文講義』（専長寺文書伝導部、1950）、赤松俊秀『「法雲寺影印本」解説』（『建長本尊号真像銘文』、法雲寺、1967）、生桑完明「尊号真像銘文に関連する問題」（生桑完明『親鸞聖人撰述の研究』、法蔵館、1970）、小川貫弌「親鸞聖人にみる宋朝文化の種々相」（小川貫弌『仏教文化研究』、永田文昌堂、1973）、寺田正勝『尊号真像銘文序説』（東本願寺出版部、1981）、幡谷明「尊号真像銘文について」（『真宗重宝聚英』6、同朋舎出版、1988）、宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）、浅井成海「『尊号真像銘文』の考察」（『真宗学』97・98、1998）、藤谷信道「光明本と『尊号真像銘文』の関係について」（『真宗研究』48、2004）、名畑崇『『尊号真像銘文』敬信記』（真宗大谷派宗務所出版部、2005）、普賢保之『尊号真像銘文講読』（永田文昌堂、2006）
解説：親鸞の著。建長7年（1255）の奥書のある東本願寺蔵本と、正嘉2年（1257）の奥書のある高田専修寺蔵本の2種の真筆本が現存している。一般的に前者を建長本、略本、後者を正嘉本、広本と呼称している。

本書は題名から知られるように、尊号と真像に記された銘文について解説を加えたものである。

尊号とは阿弥陀仏の六字名号や九字名号などを指し、真像とは本願念仏の法において高僧と仰がれる人々の絵像であり、銘文はその上下に附された経典や論釈の文である。尊号や真像の上下に銘文を加える形式は、宋朝文化の影響ではないかと推測される。この点に関しては小川貫弌論文を参照。

東本願寺蔵本では計16の銘文について解説されている。引用されている16文は、『無量寿経』第18願の文、同経「其仏本願力」の文、同経「必得超絶去」の文、世親の『浄土論』「世尊我一心」の文、同「観仏本願力」の文、善導の讃文として智栄の善導別徳の文、法然の讃文として隆寛の「普勧道俗念阿弥陀仏」の文、善導『観経玄義分』「言南無者」の文、善導『観念法門』「言摂生増上縁者」の文、同「言護念増上縁」の文、源信『往生要集』「我亦在彼摂取之中」の文、法然『選択集』標宗の文、同「夫速欲離生死」の文、同「当知生死之家」の文、聖覚「夫根有利鈍者」の文、親鸞「正信偈」の「本願名号正定業」の文である。

本願念仏の法に迷う人々に対し、三経一論を背景とした善導・法然の念仏義の真意を示している。

高田専修寺蔵本ではここに更に5文が追加され、引用の順序も変更されている。追加された5文は、勢至菩薩銘文として『首楞厳経』「勢至獲念仏円通」の文、龍樹『十住毘婆沙論』「易行品」の「人能念是仏」の文、曇鸞讃文として迦才『浄土論』曇鸞伝記の文、『上宮太子御記』に基づく聖徳太子銘文「百済国聖明王太子阿佐礼曰」の文、「新羅国聖人日羅礼曰」の文である。引用の順序は、『無量寿経』の3文、『首楞厳経』の文、「易行品」の文、『浄土論』の2文、迦才の『浄土論』の文、智栄「善導別徳」の文、善導『観経玄義分』『観念法門』の3文、『上宮太子御記』の2文、源信『往生要集』の文、隆寛の法然讃の文、法然『選択集』の3文、聖覚の文、親鸞「正信偈」の文の順序である。このように専修寺蔵本では、引用文の順序が年代順に配置されていることから選択本願念仏の正意を伝えてきた歴史をあきらかにする意図が推測される。

また、本書が尊号や真像に附された銘文の解説である事から光明本尊との関係も注目される。

なお、明治44年（1911）に刊行された『真宗和語宝典』には、真筆2本とは相違する仏光寺所蔵本を底本とする1本が収録されているが、成立事情については明かではない。
作成者名：藤田真隆

相好文字抄

書名よみ：そうごうもじしょう
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：？-12c初頭
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、大原来迎院如来蔵蔵本（1129（大治4）、最実書写、下巻のみ）
写本奥書：1、大治四年（1129）九月九日未時計書畢、執筆最実／一交了、仁融／同十二月十一日移点了
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、文化庁文化財保護部美術工芸課『来迎院如来蔵聖教文書類目録』（1972）、文化庁監修『国宝・重要文化財大全』7（毎日新聞社、1998）、築島裕「大般若経音義諸本小考」（『東京大学教養学部人文科学科紀要』21、1959）
解説：本書の著者は不明である。また現存写本の書写者について、佐藤哲英によれば、「寂憲」とするが、『来迎院如来蔵聖教文書類目録』では「最実」としている為、その確認が必要である。

本書には『大般若経音義』『和名類聚集』『唐韻』『玉篇』が極めて多く依用されているという。それらの中でも数種の『大般若経音義』の引用は刮目すべきであり、特に本邦で撰述された『大般若経音義』の中、最古層に属する信行（奈良末期、法相宗の僧、元興寺）撰『大般若経音義』・真興（935-1004、真言宗の僧）撰『大般若経音訓）の逸文が収められていることは注目に値する。また、現存する『大般若経音義』でも、国語資料として辞典・音義書の注に片仮名が用いられた最古のものとされる藤原公任（966-1041）撰『大般若経字抄』の引用もあり、その引用文が同書の撰者を同定する傍証ともなっている。これらのことから、漢文訓読史上における国語資料としての本書の価値は看過できないものといえるだろう。

なお、『長西録』諸本で本書の書名が異なるが、『相好文学抄』と紹介する小山本『長西録』の記述は誤りである。『国宝・重要文化財大全』7（p.612）によっても本書の書名は『相好文字抄』であることがわかる。
作成者名：能島覚

惣別二願抄

書名よみ：そうべつにがんしょう
著者名：長西（？）
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c（？）
成立地：日本
巻数：1

写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1248（宝治2）、乗空書写、全23葉のうち、第10・11・16・17の4紙が欠落）
写本奥書：1、宝治二年（1248）三月七日申時許書写了、生年二十五年、乗空
活字本所載書：石橋誠道『九品寺流長西教義の研究』（国書刊行会、再刊1984）
参考文献：石橋誠道『九品寺流長西教義の研究』（国書刊行会、再刊1984）、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』下（大東出版社、1977）
解説：阿弥陀仏の別願中に総・別の2二願があることを、諸経論の文によって論証しようとした典籍。一種要文集的な体裁をとるが、所々に私釈が加えられている。

本書の主張は、阿弥陀仏の本願に総・別の2願があることを示そうというもので、総願としての四弘誓願、別願としての四十八願という他に、別願たる四十八願の中にさらに総別2願があるとする。そして、念仏は別願中の別願であり、諸行は別願中の総願であるとし、諸経論の文を引いてそれを証明しようとしている。

本書には撰号等はないが、私釈中に「予在先師座下給仕」との記述がある。この「先師」が誰を指すかはっきりしない。本書の内容は諸行本願義であることから、可能性として（1）「先師」を法然、著者を長西とする、（2）「先師」を長西、著者を長西の門弟とする、の2説が考えられるがいずれも推測の域を出ない。
作成者名：吉田淳雄

続選択文義要鈔

書名よみ：ぞくせんちゃくもんぎようしょう、ぞくせんぢゃくもんぎようしょう
書名別名：続選集、後選択集
著者名：静遍
著者名よみ：じょうへん
著者名別名：禅林寺法印、心円房
著者生没年：1166（仁安1）-1224（貞応3）
成立翻訳年：建保6（1218）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、福井専修寺蔵本（建保6（1218）、書写者不明、本来3巻、現存1巻、もと福井法雲寺（旧高田専修寺）蔵）
写本奥書：1、建保六年（1218）十月四日於嶺殿善導御影御前讀畢生年四十一歳罷（ママ）所識入笠景（置）寺解脱上人室請爲不退転道心祈請所歸佛神詠一首　おもひたつこゝろいろあるたひころも　［■］ゑちの露にかゑらすもかな　従國（同）十一月十五日於真如堂始於上巻同七年正月八日始下巻同十五日畢同聽聞輩三万（ママ）人許云々今年五十三参経北白川嶺殿非退非不退経十三ヶ年同法楽頻告命尼之夢仍綴此三巻私記以爲獲徳一集以一首續前詠建保六年（1218）九月比也　よをあきの我身もいまはすゑのつゆ　もとのしつくもさもあらはあれ
活字本所載書：『仏教古典叢書』（大正12-13）4、『続真言宗全書』15
参考文献：那須一雄「静遍と法然浄土教」（『印仏研』53-2、2005）、熊田順正「静遍〈続選択文義要鈔〉における阿弥陀仏の仏身仏土観について」（『印仏研』53-2、2005）、池要「静遍の念仏思想」（『竜谷大学大学院仏教学研究室年報』2、1986）、池要「静遍僧都の研究」（『竜谷大学大学院紀要』8、1987）、藤原猶雪「般舟讃現流史料としての続選択文義要鈔」（『仏教研究』2（1-2）、1920、藤原猶雪『日本仏教史研究』大東出版社、1938／一の丸出版、1974に再録）、石田充之「密教系浄土願生者静遍僧都の浄土教的立場」（『竜谷大学論叢』336、1949）、北川真寛「〈渓嵐拾葉集〉における浄土思想」（『密教文化』207、2001）、生桑完明「続選択の断章二篇発見に就いて」（『高田学報』12、1936）、山田文昭「続選択文義要鈔解説」（『仏教古典叢書』1922-1923）
解説：著者は、覚鑁以降の真言密教における念仏思想の確立に大きな役割を果たした。明恵の弟子筋で貞慶の弟子であり、当初、法然浄土教の批判を考えていたが、法然の没後、その弟子の隆寛や証空から称名念仏の奥義を聞いて改心し、名を釈心円と改め、『続選択文義要鈔』を著した。その後も真言の立場を保ちながら、法然浄土教に帰依し、法然門下と交わり、『選択集』の講議をも行った。また善導が般舟三昧の行法を記した『依観経等明般舟三昧行道往生讃』（『般舟讃』。法然未見）を仁和寺宝金剛院の経蔵より発見し、以降、同讃が流布したといわれる。彼の教学は、三点説・秘密念仏・多法界説・一乗経劫論・大釈融合説など多岐にわたり、当時の真言教学を再構築したものである。なかでも三点説・秘密念仏に特徴が見られる。三点説は理・智・事の具足した仏身を教主とするものであり、身語意の三密や仏蓮金の三部とも符号させる解釈を行った。

本著の題名は、法然著『選択集』に続くものとして、選択義の肝要な文義を抄出したものという意味であり、『選択集』に明かされなかった深奥なる内容を、他資料や新資料により明らかにしようとしたものである。その教学は、真如としての本有絶対の一心を中心とした自証成仏、すなわち此土における即身成仏を基本としながら、現世の苦や悪趣の苦からの救済という観点から、それを阿弥陀仏の本願による来迎や極楽往生に見い出している。

現存する本書の大部分は越前法雲寺より発見された（現在は専修寺蔵）が、それは親鸞の弟子顕智（1226-1310）が所持していたものであり、彼が親鸞より付嘱されたものともされている。また顕智自筆の要文集『抄出』（専修寺蔵）には中巻他の断章が引用されている。上中下の3巻のうち現存しているのは、下巻の「大文第二選択名数加続門」と「大文第三選択所依求続門」に当たる部分である。上巻の一部と中巻の一部に当たり大文第一の一部分と推測される「三名号開合文」も残存している。

「大文第二選択名数加続門」は『選択集』末尾の八種選択に五種を加続されるべきことを諸経論により論じたものである。「大文第三選択所依求続門」は法然未見で静遍が発見した善導著『般舟讃』により十門秘義、すなわち正雑母子互讃門、三経諸教頓漸門、心蓮本願自証門、大国他方無二門、迷悟不増不減門、闡堤廻向皆往門、恒憶悪趣増心門、定散倶廻得益門、生死涅槃不隔門、本初一念往生を説いたものである。

「大文第一、上中二巻」のうち上巻には、頓教漸教分別門・菩提涅槃分別門・往生成仏分別門・顕意密意分別門・観仏念仏分別門・現益当益分別門・定善散善分別門、中巻には、残殃入塔皆懺門、睡時発願門などの項目があったことが知られており、それらは『選択集』に示された浄土門称名念仏一行彼土往生成仏義について、それが真言秘宗即心（身）成仏義を補足する関係にあり、本質的に同一であることを、経論釈により証明したものではないかと推測されている。
作成者名：藤仲孝司

続本朝往生伝

書名よみ：ぞくほんちょうおうじょうでん
書名別名：続日本往生伝

著者名：大江匡房
著者名よみ：おおえのまさふさ
著者名別名：江都督、江師、江大府卿
著者生没年：1041（長久2）-1111（天永2）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大東急記念文庫蔵本（鎌倉期、書写者不明）
2、名古屋真福寺蔵本（1253（建長5）、乗忍書写）
3、金沢文庫蔵本（南北朝期、未調査、欠有）
4、鶴舞図書館蔵本（江戸期、未調査、2本、河村秀穎本）
5、宮内庁書陵部蔵本（鎌倉期、書写者不明、前半部欠、『三外往生記』の付）
6、宮内庁書陵部蔵本（江戸期、未調査、『三外往生記』と合冊）
写本奥書：1、（未調査）
2、建保第七載（1219）三長第一月中旬第七夜、於西峰方丈草庵写之了、此則為自励忠志令他発信心、唯願此伝結縁人各留半座乗花葉待我閻浮結縁人、願以此功徳、臨欲命終時、必得弥陀迎、往安楽国、砂門慶政記／書本文字極悪、以他本可交看之／建長五年癸丑（1253）十二月六日於西峰草庵書写之、乗忍四十二
3、（未調査）
4、（未調査）
5、建保第七載（1219）三長第一月中旬第七夜、於西峰方丈草庵写之了、此則為自励忠志令他発信心、唯願此伝結縁人各留半座乗花葉待我閻浮結縁人、願以此功徳、臨欲命終時、必得弥陀迎、往安楽国、砂門慶政記／書本文字極悪、以他本可交看之／交点了
6、（未調査）
刊本所在：1、万治2（1659、静嘉堂文庫・神宮文庫・学書言志・竜谷大・茨城大・大阪女子大）
2、延宝2（1674、日比谷図書館・大正大）
3、明治15（1882、大正大・竜谷大）
4、刊年不明（慶応大・早稲田大・東京大・九州大・東北大狩野文庫・お茶の水図書館成簀堂文庫・無窮神習・陽明文庫）
刊本の奥書刊記：1、続本朝往生伝者権中納言匡房之所撰也、久蔵不行于世不能無歎惜矣、偶存一本在乎華台院安養教寺法函就而正之字画鏤梓以弘其伝矣／万治二己亥稔（1659）仲秋吉辰、丁字屋三郎兵衛開板（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：日本思想大系7『往生伝・法華験記』、『日仏全』107、『群書類従』伝部、『続浄』6、『日本往生全伝』（永田調兵衛、1882）、『平安朝往生伝集』（複製、宮内庁書陵部、1970）、国文学研究資料館編『往生伝集』（「真福寺善本叢刊」2-7、臨川書店、2004）
参考文献：重松明久『日本浄土教成立過程の研究』（平楽寺書店、1964）、篠原昭二（往生伝類解題）「続本朝往生伝」（古典遺産の会編『往生伝の研究』、新読書社、1968）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975）、志村有弘『往生伝研究序説』（桜楓社、1976）、稲城正己「新たなるユートピアへの旅―平安後期の仏教思想―」（池見澄隆・斎藤英喜『日本仏教の射程　思想史的アプローチ』、人文書院、2003）
解説：著者の大江匡房は文章道の家に生まれた平安後期傑出の漢文学者。院の近臣としても活躍し太宰権帥を拝命している。著者は漢詩文だけでなく和歌や儀礼などあらゆる面の権威で、『本朝続文粋』などの漢詩文集や、勅撰和歌集に多くの作品が入集し、『江談抄』など多数の書に談話が記録される。宗教に関する著作としては、本書のほか『本朝神仙伝』や『江都督納言願文集』がある。
　本書の成立は序文によると康和年間（1099-1103）で、最後の往生者である源忠遠妻の没年が康和3年（1101）であるからそれ以後となろう。太宰権帥赴任中の康和4年（1102）に期待を掛けていた息男隆兼が早世したことも成立に関わるかもしれない。収載されている往生人は、天皇2人、公卿3人、僧綱6人、一般僧19人、朝臣7人、婦女5人の計42人で、その配列は世俗の身分により、念仏によって往生する者が多いが、法華経や尊勝陀羅尼の読誦もみられる。著者は身近なところから多くを取材していたらしく、著者の一族や太宰府関連の人の伝が多く取られている。また良源の弟子や源信の弟子にあたる僧侶の伝が多く、著者と良源門との間には何らかの交渉があったと考えられる。行業については諸行往生で、念仏と法華経の兼修が多い。また『日本往生極楽記』にはなかった悪人往生がみられる。
作成者名：坪井直子

措心偈

書名よみ：そしんげ
著者名：幸西
著者名よみ：こうさい
著者名別名：成覚房、鐘下房少輔、物部氏（俗姓）
著者生没年：1163（長寛1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：乗専撰『最須敬重絵詞』5（『真聖全』3、p.846）、『玄義分抄』（『縮蔵』90、p.390）
参考文献：住田智見『浄土源流章解説』（法蔵館、1925）、安井広度『法然門下の研究』（法蔵館、1968）、善裕昭「幸西の仏智一念説について」（『法然学会論叢』8、1992）
解説：本書は現存しない。
　乗専（1274-1357、生年には1295年説あり）撰『最須敬重絵詞』5に、幸西の著作として書名のみが挙げられている。覚如（1272-1351）は諸流派研究のため他門の先学に会いに行っており、一念義は慈光寺の勝縁から習学した。その折に書写を許された幸西著述の一つである。
　幸西は『玄義分抄』「別時門」（『縮蔵』90、p.390）において、善導『観無量寿経疏』「玄義分（会通別時意）」（『浄全』2、p.10）の願行具足の問答に見られる「乃至一念曽未措心（乃至一念も曽て未だ心を措かず）」の文を引用しており、本書の書名はこの一文から名付けられたと考えられる。幸西が真実の生因と説く「乃至一念」はこの文が典拠となっており、その事実からすると本書はこの一文を拠り所に幸西が「一念論」を展開したものであると推測される。（安井広度、1968、善裕昭、1992）
作成者名：伊藤瑛梨

存覚法語

書名よみ：ぞんかくほうご
書名別名：法語
著者名：存覚
著者名よみ：ぞんかく
著者名別名：光玄、尊覚
著者生没年：1290（正応3）-1373（応安6・文中2）
成立翻訳年：1356（文和5）
成立地：日本

巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、岐阜専精寺蔵本（1379（永和5）、善如書写）
2、竜谷大蔵本（1379（永和5）、善如書写、「現存聖教目録」に記載なし）
3、和歌山真光寺蔵本（1519（永正16）、乗賢書写）
4、滋賀慈敬寺蔵本（1557（弘治3）、実従書写）
5、岐阜歓喜寺蔵本（室町中期、明心書写）
6、大阪光徳寺蔵本（室町末期、書写者不明）
7、兵庫毫摂寺蔵本（室町末期、書写者不明）
8、京都常楽寺蔵本（室町末期、書写者不明、「文和五歳」の奥書有）
9、大分専想寺蔵本（室町末期、書写者不明）
10、竜谷大蔵本（室町末期、顕恵書写）
11、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明）
12、竜谷大蔵本（室町末期、書写者不明、「10」とは別本）
写本奥書：1、文和五歳丙申（1356）三月四日釈存覚七十六歳／永和五歳己未（1379）二月二十二日書写之執筆桑門善如
2、永和五歳巳未（1379）二月二十二日書写之、執筆桑門善如
3、文和五歳丙申（1356）三月四日釈存覚七十六歳／永和五歳己未（1379）二月二十二日書写之執筆桑門善如
（糊付）永正十六年（1519）戊卯十月二十六日書写畢、右筆乗賢」
4、文和五歳丙申（1356）三月四日釈存覚七十六歳／永和五歳己未（1379）二月二十二日書写之執筆桑門善如／右此如右奥書以善如上人御筆之本奉書写者也、弘治三年（1557）九月十日、右筆実従／（奥書上部に糊付）右此一帖者以願入寺本書写後、以実従筆三本令校合奥書以下如彼本書写之者也、天正五年（1577）六月晦日、釈証智
5、（表紙）明心、
（裏表紙）釈明心
6、文和五歳丙申（1356）三月四日釈存覚七十六歳／永和五歳己未（1379）二月二十二日書写之執筆桑門善如
7、（未調査）
8、文和五歳丙申（1356）三月四日釈存覚七十六歳／永和五歳己未（1379）二月二十二日書写之執筆桑門善如
9、（未調査）
10、文和五歳丙申（1356）三月四日釈存覚七十六歳／永和五歳己未（1379）二月二十二日書写之執筆桑門善如
（表紙）釈顕意
11、文和五歳丙申（1356）三月四日釈存覚七十六歳／永和五歳己未（1379）二月二十二日書写之執筆桑門善如
12、文和五歳丙申（1356）三月四日釈存覚七十六歳／永和五歳己未（1379）二月二十二日書写之執筆桑門善如
刊本所在：1、寛文4（1664、大谷大）
2、享保4（1719、内閣文庫）
3、『真宗法要』20
4、『真宗仮名聖教』8
刊本の奥書刊記：1、寛文第四甲辰（1664）暦如月中澣、於［■］東七条寺内彫刻
2、享保四已亥（1719）孟秋吉日
3、夫決難聖道ノ万行ハヤウヤク正像ノムカシニカキリ、唯有浄土ノ一門ハトヲク澆季ノ今ニ通ズ、上古ノ聖人ハ自力ヲハケムテ開悟シ、末世ノ凡愚ハ他力ヲ信シテ往生ス、ココニ吾大法主高祖古徳ノ慈訓ヲ纂輯シ若干巻トナシ、カツ校正ヲクハヘコレニ題シテ真宗法要トイフ、コレカミ仏祖先徳ノ広恩ヲ謝シシモ、生死ノ群生海ヲ度センカタメナリ、コレスナハチ念仏往生ノ真法証大涅槃ノ至要ナリ、マコトニコノ文ノ名ソレユヘアルカ、ソモソモコノ書ノ中或一部或二部国字ヲ安スルニ尋常ニ違スルモノアリ、コレモマタ先哲ノ筆蹟ニシタカフ、後ノ学侶疑端ヲナスコトナカレ、ココニ其書ノ成ヲヨロコヒテ毫ヲソメテ巻尾ニシルスト云爾、明和二年乙酉（1765)七月二十五日、釈文如（朱印）
4、文化八年辛未歳（1811）、本願寺蔵（朱印）
活字本所載書：『真聖全』3、『真宗史料集成』1、『真宗聖教大全』上、『真宗聖典全書』和文之部、『真宗和語聖教』、『高僧名著全集』10、『真宗仮名法典』3、『国文東方仏教叢書』1（法語）
参考文献：和泉得成「存覚法語」（『存覚上人』国書刊行会、1987）、富井隆信「存覚法語」（『六条学報』200、1918）、南条文雄「無常講式並存覚法語と御文」（『六条学報』212、1919）、山崎龍明「真宗における法語の研究―存覚法語研究の前提―」（『武蔵野女子学院研究紀要』4、1983）、吉谷覚寿『存覚法語略述』（西村護法館、1907）、可西大秀「存覚法語」（『真宗聖教解説』仏教普及会、1931）
解説：存覚76歳、文和5年（1356）の執筆。本書は奥書にあるように、契縁禅尼の請いにより執筆された。存覚の『浄典目録』には「法語一帖、是ハ出雲路契縁禅尼所望云云」と記されており、最初、単に「法語」と呼ばれていたこと、契縁禅尼は出雲路と関係のある人物であることがわかる。契縁禅尼の素性については不明な点が多く、出雲路乗専の母であるとする説や存覚の妻であるとする説がある。
　本書は大きく前半・後半にわかれており、最初、親鸞『教行信証』「総序」の「難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」を解説することを前半部とし、後半部では阿弥陀仏が本願を発起したのは、衆生を三輪（無常輪・不浄輪・苦輪）から出離させるためであるとして、無常輪については弥陀及び往生者の無量寿を、不浄輪については弥陀の浄土が清浄であることを、苦輪については弥陀浄土の安楽世界であることを浄土三部経・曇鸞・善導などの著述を引用して述べている。
　また女人往生についても述べており、『観経』の韋提希は女性の身で仏身を得たことを述べ、その韋提希が賀茂の大明神を垂迹として法然の説法の座にあらわれた故事に触れ、専修念仏往生を遂げることを勧めている。
作成者名：高山秀嗣・藤田真隆

他阿上人歌集

書名よみ：たあしょうにんかしゅう
書名別名：他阿上人集、大上人御詠
著者名：他阿
著者名よみ：たあ
著者名別名：真教、遊行二祖、遊行上人二世
著者生没年：1237（嘉禎3）（？）-1319（元応1）
成立翻訳年：1284（弘安7）
成立地：日本
巻数：3
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、彰考館蔵本（1822（文政5）、高田与叔書写、他阿上人四十八願和歌と合一冊）
2、彰考館蔵本（1823（文政6）、高田与叔書写）
3、筑波大学蔵本（1823（文政6）、書写者不明）
4、春海文庫蔵本（1824（文政7）、未調査、他阿上人四十八願和歌と合一冊）
写本奥書：1、（上巻の下）天正十六戊子年（1588）閏五月二十九日於甲州一條一蓮寺書、境葛籠ニ納之、前代ノ本紛失浅猿シキ物也、遊行三十二世他阿弥陀仏、天正十七己丑年（1589）三月朔日

（中巻末）先本紛失之間今調之、納境葛籠而可伝後代、天正十七己丑年二月二十七日於信州本善光寺曼荼羅堂書写之、遊行三十二世他阿弥陀仏、天正十七已丑暦三月朔納之
（下巻末）先本紛失之間調之、納境葛籠、伝後世莫廃亡、天正十七己丑年二月中旬於信州書写之、遊行三十二世他阿弥陀仏／二祖上人法語全部十巻之内、後三巻者抄出和歌而、詠歌抜書ト云、今校合法語抜書トシテ、法之字ヲ以為校合印、抜書之印板者以此本為原本故以印之字、処不置法之字者自原本亦抄出者也、法語抜書原本奥書曰、本書奥書曰、七條金光寺第五之聖以自筆之本書畢、写之、于時延文元年丙申（1356）十一月上旬日＜私記此年号第九代上人御出世之年也＞、一件十巻之法語二祖遷化以後彼遺弟上足徒衆於相州当麻山無量光寺集記焉、上人入涅槃元応元年己未（1319）正月二十七日午刻面西合掌十念而化給、春秋八十三、于時異香満室音楽聞空、翌朝目出前茶毘、見斯場紫雲散華、又至午刻奏天楽、及于一七日以後瑞相現時々刻々云々、逝去以後至于天正七年己卯（1579）暦数二百六十一年也、私記、第二十代上人藤沢山御退出之季、於信州江州前乗台寺＜二十二祖御事也＞、于時集慶軒其阿尋出于彼本書而令書写者也、又此写本報土寺第十六代守臨阿＜二十四代ノ御事＞所持之、南無阿彌陀佛（未調査）
2、（上巻の下）天正十六戌子年（1588）閏五月二十九日於甲州一條一蓮寺書、境葛籠ニ納之、前代ノ本紛失浅猿シキ物也、遊行三十二世他阿弥陀仏、天正十七己丑年（1589）三月朔日
（中巻末）先本紛失之間今調之、納境葛籠而可伝後代、天正十七己丑年二月二十七日於信州本善光寺曼荼羅堂書写之、遊行三十二世他阿弥陀仏、天正十七已丑暦三月朔納之
（下巻末）先本紛失之間調之、納境葛籠、伝後世莫廃亡、天正十七己丑年二月中旬於信州書写之、遊行三十二世他阿弥陀仏／他阿上人歌集三巻、文政六年二月、同男与叔謄写之、此原本藤沢山所蔵、三十二世上人之自筆也、我門人慧充法師、就彼山而所請来也、高田与清記（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『高僧名著全集』18、大橋俊雄『時宗二祖他阿上人法語』（大蔵出版、1975）
参考文献：武石彰夫「宴曲と仏教歌謡」（『印仏研』27、1965）、小原幹雄「藤原為兼と時宗二祖他阿」（『島大国文』5、1976）、森田昭二「心の奥の終しなければ『他阿上人和歌集』を読む」（『白珠』42-1、1987）、藤原正義「時宗二祖他阿真教の歌詠集について」（『時衆文化』5、2002）
解説：時宗遊行2祖他阿真教の和歌集。真教は一遍と同様に和歌を詠み、京極為兼・為相・為守など反二條派歌壇の歌人達と交遊もあって、多くの和歌を残している。本書は3巻1419首の和歌から成り、上巻には一遍に随従した折りに白河の関で詠んだ歌から正和4年（1315）頃までの520首、中巻には正和5年6月から文保2年（1318）までに詠んだ606首、下巻には正安3年（1314）以降の293首が収録されている。それらの和歌は、無常・釈教といった仏教に関わるものだけではなく、四季・恋など一般的なものも多い。
　本書と『遊行上人縁起絵』とは32首、『他阿上人法語』巻八とは271首が重なる。『他阿上人法語』巻八は、その末尾に洛東迎称寺宜然の「此台帳者、二祖上人之和歌凡千四百五拾餘首之中、述懐、無常、釈教等安心起行有便之類二百六十餘首、依五拾三世上人之厳命書抜畢、其餘時名帳四拾八願四季恋雑等之和歌者本書可往見而已」という識語があって、原本には本書収録の和歌数に近い1450余首の和歌があったことが知られる。本書との関わりが注意されよう。
作成者名：坪井直子

他阿上人法語

書名よみ：たあしょうにんほうご
著者名：他阿
著者名よみ：たあ
著者名別名：真教、遊行二祖、遊行上人二世
著者生没年：1237（嘉禎3）（？）-1319（元応1）
成立翻訳年：13c後半-14c初頭
成立地：日本
巻数：8
漢和：和文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、安永7（1778、カリフォルニア大バークレー校）
2、寛政六（1794、金沢大）
3、刊年不明（国会図書館・大谷大・京都大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、（跋）他阿上人法語跋、吾二祖他阿上人遺誥数編由来行于世尚矣、唯惜魚魯相錯陶陰参差、咸是展轉伝写之所致也、安永乙未（1777）春、尊如上人憩錫於京師之日、令敦賀長順師従事検閲、於茲磨研積日訂正全壁、且上人命余於剞劂之事、遂募衆檀十方競資、以壽諸梓永垂不朽、聊記歳月告之後来云、安永七稔歳次戊戌（1778）正月穀旦越前州岩本成願寺其阿玄道謹誌／寺町蛸薬師下町、京師書林、松栄堂、著屋幸助（未調査）
寛政六（1794）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『時宗聖典』中、『時宗全書』1、『定本時宗宗典』上、『日仏全』67、『昭和新纂国訳大蔵経』宗典部8、大橋俊雄『時宗二祖他阿上人法語』（大蔵出版、1975）
参考文献：河野憲善「他阿真教の教学（二）」（『時衆研究』11、1965）、藤原正義『兼好とその周辺』（桜楓社、1970）、竹内明「他阿上人消息―解題と本文」（『時宗教学年報』6、1978）、金井清光「一遍・他阿の法語」『仏教文学講座』3、勉誠社、1994）、橘俊道「一遍上人と他阿真教上人」（橘俊道・圭室文雄編『庶民信仰の源流：時宗と遊行聖』名著出版、1982）、砂川博「波多野氏と他阿弥陀仏」（『時衆文化』7、2003）、梅谷繁樹「『他阿上人法語』内容索引の試み」（『時宗教学年報』31、2003）
解説：時宗遊行2祖他阿真教の法語・消息集。他阿は、建治3年（1277）に九州で一遍に師事、その後一遍に従って全国を遊行した。正応2年（1289）一遍の死により、教団は一旦解散するが、再編成を望んだ衆は他阿を知識として推す。他阿は当初固辞するが、衆の要望を受け入れ、嘉元2年（1304）に隠居するまで、関東・北陸を中心に遊行した。
　本書は遊行53世尊如の要請により、敦賀西方寺の長順が、当時残っていた真教の法語の伝本を収集し校訂したもので、安永5年（1776）に成立、翌々年に出版された。真教の法語集には、岩松青蓮寺の玄如が『時宗統要篇跋』で「蓋播州集大鏡集＜又云＞器朴論等祖師之遺書、文義幽深短綆難汲」と記すことからすれば、『大鏡集』または『二祖大法語』と呼ばれるものが存在したらしいが、本書はそれを基にしたのであろう。長順はさらに校訂を重ね、寛政6年（1794）に安永版の疑わしいところを訂正した『重校決疑録』を付けて再版している。巻1に「道場制文」「他阿弥陀仏同行用心大綱」「往生浄土和讃」、巻1から巻6に「消息法語」が119篇、巻七に「安食問答」、巻8に和歌271首を収録する。巻7の「安食問答」は実阿への法語で、清浄光寺に伝本がある。
作成者名：坪井直子

大経直談要註記

書名よみ：だいきょうじきだんようちゅうき
書名別名：無量寿経直談要註記、大経要註記
著者名：聖聡
著者名よみ：しょうそう
著者名別名：大蓮社酉誉聖聡、酉師、酉公、聡師
著者生没年：1366（貞治5）-1440（永享12）
成立翻訳年：1433（永享5）
成立地：日本
巻数：24
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、元和・寛永頃（1615-1643、国会図書館）
2、慶長19-正保年間（1614-1647、大正大・仏教大）
3、慶安1（1648、竜谷大）
4、慶安4（1651、竜谷大・大正大・仏教大）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
2、（刊記なし）
3、慶安元歳戊子（1648）季夏吉辰、杉田勘兵衛尉刊行之
4、慶安四辛卯（1651）暦仲秋吉辰、幸町通円福寺町,秋田屋平左衛門刊行
活字本所載書：『浄全』13
参考文献：岸一英「『大経直談要註記』について」（大谷旭雄編『聖總上人典籍研究』山喜房仏書林、1989）、川瀬一馬『古活字版之研究』（安田文庫、1937）、川瀬一馬・高木義一共編『高木文庫古活字版目録』（高木義一刊、1933）、藤堂祐範『浄土教版の研究』（大東出版社、1930）
解説：聖聡による『無量寿経』の注釈書である。彼の晩年の著作であり、代表的著作の一つ。増上寺での講義録がその原型になったと類推される。

本書と『小経直談要註記』において『観経要註記』の参照を示唆し、また『法事讃私記見聞』でも『観経要註記』の書名を挙げていることなどから、本来「浄土三部経」の全てに注釈がなされたと思われるが、現在伝わるのは本書と『阿弥陀経』についての『小経直談要註記』8巻との2部のみである。

その全24巻の組成は、第1巻を玄義分とし、法然『無量寿経釈』（本文では『無量寿経私記』）の全文を収録している。次に第2-3巻までを大意分とし、起経所因（世尊が浄土法門を説くことは、世々番々の出世の本懐であることを明かす）・所説大猷（大経の七段大猷、すなわち勝因・勝行・勝果・勝報・極楽・悲化・智慧を明かす）・宗体定判（七段大猷をもって宗体が念仏であることを説く）・蔵経所接（現在では法然偽撰とされる『本願義疏』を引用し、「浄土三部経」に説かれる教えは、声聞蔵・菩薩蔵、漸教・頓教の「二蔵二教」における菩薩蔵・頓教に接せられるとする）を挙げる。第3巻末には釈名分を載せ、経名と翻訳者についての解釈が施される。

それ以降が依文分に配当され、各経文について望西楼了慧道光『無量寿経鈔』の該当部分を引用し、その後私釈を加える。教理的には師の聖冏『釈浄土二蔵義』に説かれる随他扶宗の教学からの影響を受けており、了恵の解釈とは異なる点も見られる。

なかでも特徴的なのが四十八願の解釈であり、その解釈を了恵『無量寿経鈔』ではなく、法然儀撰とされる『本願義疏』と、聖覚撰とされる『四十八願釈』によっている。聖聡は師聖冏と同じく『本願義疏』を法然真撰と受けとめ、聖覚についても法然面受の弟子としてその釈をそのまま引用している。これら二説に私釈を加えることなく受け入れたところに、師聖冏からの相伝を重視する彼の姿勢が看取される。

作成者名：東海林良昌

大乗義章浄土義私記

書名よみ：だいじょうぎしょうじょうどぎしき
著者名：珍海
著者名よみ：ちんかい
著者名別名：禅那院珍海、珍海已講、越前已講、越洲
著者生没年：1092（寛治5）-1152（仁平2）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：2
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）、坂上雅翁「珍海の浄土観」（「印仏研」26-2、1978）
解説：本書は散逸して伝わらないものの、その内容は浄影寺恵遠の『大乗義章』「浄土義」に関する注釈であることが推察される。『長西録』にはその法量を90紙と記しており、それなりの分量を伴った典籍であったことがわかる。
作成者名：能島覚

大日本粟散王聖徳太子奉讃

書名よみ：だいにほんぞくさんおうしょうとくほうさん
書名別名：一百十四首和讃、一百十四首太子和讃、太子和讃、一百十五首和讃
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：1257（康元2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、愛知満性寺蔵本（天文年間（？）、寂玄（？））
2、愛知満性寺蔵本（1575（天正3）、寂如書写）
3、日下無倫氏蔵本（1727（享保12）、敬誓書写）
4、日下無倫氏蔵本（1803（享和3）、深応書写）
写本奥書：1、以上一百十四首、日本記、平氏、聖徳太子御伝、上宮記、諾楽古京薬師寺沙門景戒撰日本国現報善悪霊異記等見、三宝流布讃略云、日本国始人更無、葦二筋生立、神成代知、自是豊葦原水穂国名、神代七代第四日天下神成、依此吾国名日本、人世百王定、神武天皇始即位元年記辛酉歳釈迦滅後二百五十年成
2、以上一百十四首、日本記、平氏、聖徳太子御伝、上宮記、諾楽古京薬師寺沙門景戒撰日本国現報善悪霊異記等見、三宝流布讃略云、日本国始人更無、葦二筋生立、神成代知、自是豊葦原水穂国名、神代七代第四日天下神成、依此吾国名日本、人世百王定、神武天皇始即位元年記辛酉歳釈迦滅後二百五十年成
（巻末）右此一巻都合十巻奉書写畢、後見之人唱南無阿弥陀仏也、天正参乙亥（1575）季霜月二十八日書畢、三州国額田郡菅生田生山、満性寺常住、釈寂如／右此一部者伝来之調宝也、不可有鹿略者也、満性寺二十三世釈寂雄敬曰、文化四丁卯（1807）八月
3、以上一百十五首、日本記、平氏、聖徳太子御伝、上宮記、諾楽古京薬師寺沙門景戒撰日本国現報善悪霊異記等見也、

康元二歳丁巳（1257）二月三十日、愚禿親鸞八十五歳書之／右太子奉讃奥州糖信郡南部八戸願永寺住物也、蓮如上人御真筆也、于時享保第五庚子（1720）季冬中旬於羽州秋田写之、長浜亮空、翌年享保六辛丑（1721）天［■］月中旬七於曲谷隠士七十三翁室写之、老後思出百快千喜而已、加之、往昔建長七年乙卯（1255）十一月晦日、愚禿親鸞
八十三歳御作七十七首太子和讃於大坂拝写之合計
一百九十二首、正像末十一首、三所総合二百三首之中初二首、正像末有之、残二百一首別讃也、恐三朝高祖無類多讃超越相承極中極応知耳／爾時享保十二丁未（1727）稔閏正月二十三日再写之訖、江洲坂田郡江里之荘春近住皆念寺、釈敬誓
4、以上一百十四首、日本記、平氏、聖徳太子御伝、上宮記、諾楽古京薬師寺沙門景戒撰日本国現報善悪霊異記等見也、康元二歳丁巳（1257）二月三十日、愚禿親鸞八十五歳書之／本云、徳治二年丁未（1307）卯月三日／応長元歳辛酉（1311）閏六月六日馳筆、沙門宗昭四十九歳／享和三亥歳（1803）四月五日、越中下新川郡東狐村、謹書写、深応

刊本所在：1、明和3（1766、竜谷大『真宗遺文纂要』所収）
刊本の奥書刊記：1、明和三年丙戌（1766）四月吉旦、京都書林、堀川仏光寺下ル町、河南四郎兵衛、濃州書林、大垣、本屋善兵衛
活字本所載書：『真聖全』4、『定本親鸞聖人全集』和讃篇
参考文献：多屋頼俊『和讃史概説』（法蔵館、1933）、日下無倫「大日本粟散王聖徳太子奉讃について」（『大谷学報』19-4、1938）、宮崎円遵「一百十四首太子和讃の写伝本と原形」（『竜谷学報』331、1941、後『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）、宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）
解説：親鸞の著した聖徳太子讃仰の和讃。

奥書の記載から康元2年（1257）に成立したことがわかる。

本書は、『三宝絵詞』の太子伝や『太子伝略』などに典拠しながら、聖徳太子の行実について和讃化したものである。建長7年（1255）撰述の『皇太子聖徳奉讃』や、『正像末和讃』所収の11首太子和讃をうけて成立したと考えられ、親鸞の聖徳太子和讃の最後に位置づけられる。

本書は、最初『真宗遺文纂要』所収本のみが紹介されていたが、古写本がないことなどから親鸞撰述とすることに疑義が提示されていたが、日下無倫・宮崎円遵などがそれぞれ古写本を発見・紹介したことから、現在では親鸞撰述とする説に落ち着いている。
作成者名：藤田真隆

当麻曼荼羅疏

書名よみ：たいままんだらしょ
書名別名：曼荼羅疏
著者名：聖聡
著者名よみ：しょうそう
著者名別名：大蓮社酉誉聖聡、酉師、酉公、聡師
著者生没年：1366（貞治5）-1440（永享12）
成立翻訳年：1436（永享8）
成立地：日本
巻数：48
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、三康文化研究所蔵本（1571（元亀2）、寵蓮社運誉書写）
写本奥書：1、于時永享八（1436）丙辰閏五月二十七日、鎮西末流、酉誉、草之、今私云此流四十八巻者大蓮社酉誉草、行蓮社大誉為筆受、而自草案罫清書、門中流布之本以之所伝写也、爾者以此可為正本者也、同六月中清書、大誉判、弘治二年（1556）五月十八日於東山知恩院大誉上人真筆本以書写畢、寵蓮社運誉書
刊本所在：1、慶安2（1649、大正大・竜谷大・法然院）
刊本の奥書刊記：1、慶安己丑（1649）孟秋吉日鈴木太兵衛刊
活字本所載書：『浄全』13
参考文献：石橋誠道「解題」（『浄全』20）、坪井俊映「解説」（新『浄全』13）、石橋誠道『仏書解説大事典』、『浄土宗大辞典』2、石上善応『当麻曼荼羅疏』（『聖聰上人典籍研究』、山喜房仏書林、1989）
解説：本書は全48巻からなる当麻寺の観経曼荼羅の注釈書である。

本書成立の契機は、聖聡が応永34年（1427）4月、吉野山に詣たおり、当麻寺に伝わる曼荼羅（原本と第1転写本の2本）を拝したことに始まる。その後滞在は同年7月15日にまで及び、これを足がかりとして、同年10月14日には元興寺を訪れ智光曼荼羅を、同15日には超昇寺を訪れ清海曼荼羅を拝し、曼荼羅研究を重ねている。その成果として著されたのが本書である。

内容は、巻1-8は「縁起因縁生信分」として、浄土教曼荼羅と顕教曼荼羅とに関する説明と、当麻寺で曼荼羅を得た中将姫の利益譚が述べられている。巻9-47は、「正説変相法門分」で、それは更に「序分」（巻9-15）、「正宗分」巻16-23）、散善義（巻24-32）、中台（巻33-45）、曼荼羅奇特（巻46）、利益（巻47）に分けられ、善導『観経疏』によりながら曼荼羅の具相に説明を加えていく。そして巻48は「廻向法界往生分」となり、この浄土九品曼荼羅変相を称揚讃嘆し、それに付随する功徳を自他法界の往生に回向する旨を述べ本書を締めくくっている。

このように基本的には『観経疏』によって解釈を加えているが、講義を採録した体裁を持つ本書には、様々な経論の引用や説話の採用など、絵解きのための工夫が多くなされている。

特に本書にある当麻・智光・清海を浄土三曼荼羅とし、中将姫伝説を用いながら解き明かす方法は、浄土曼荼羅解説の雛形になったという。

この他の当麻曼荼羅の注釈書には、証空（1177-1247）の『当麻曼荼羅註記』10巻、袋中良定（1552-1639）の『当麻曼荼羅白記』10巻があるが、近年、証空の『当麻曼荼羅註記』の成立年代に、疑問が呈されていることから、本書は大部であるばかりでなく、成立の古さの面からも、近年注目されるところである。
作成者名：東海林良昌

他力信心聞書

書名よみ：たりきしんじんききがき
書名別名：他力安心聞書
著者名：了海
著者名よみ：りょうかい
著者名別名：願明
著者生没年：1239（延応1）-1319（元応1）
成立翻訳年：14c初頭
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、兵庫毫摂寺蔵本（1339（暦応2）、智性書写、下巻のみ）
2、京都常楽寺蔵本（1439（永享11）、書写者不明）
3、兵庫毫摂寺蔵本（1444（文安1）、八尾式部書写、下巻

のみ）
4、大坂光徳寺蔵本（1471（文明3）、書写者不明、『還相回向聞書』と合本）
5、滋賀本福寺蔵本（室町中期、書写者不明）
6、兵庫毫摂寺蔵本（室町末期、書写者不明、下巻のみ）
7、滋賀円照寺蔵本（室町末期、慈頓（？））
8、大谷大蔵本（1694（元禄7）、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
2、永享十一年己未（1439）七月下旬書之
3、（未調査）
4、此本ハ全ク外見ノ為ニ非ズ、只我目斗リノ［■■］也、背本意候ト雖モ世間ノイトナミノイソカハシサノ余リ加様ニ書奉ル也、祖師聖人ノ御遺訓ナレバ、但ヒトスジニ往生極楽ノ為メ斗リ也、全ク利他ノ為ニ非ズ、聖人御遺跡ナレバ余リニ御ナツカシク思ヒ奉テ本寺ニ申度心中ニ候ヘドモ貧窮ノカナシサニ加様ニ私二書奉ル也、只往生極楽ノ為ナレバチカヒ候トモ三世ノ［■］仏十方ノサタモ哀愍納受ヲ垂レテ此度ヒノ［■■］ヲトケサセ給ヘ、穴賢穴賢、命終ノ後ハ誰人ニテモ在［■］外見セザル先キニ火ニ焼候テ給ヘシ、文明三年（1471）五月二十九日
5、（奥書なし）
6、（未調査）
7、（表紙裏）這一巻引文判釈乱慢不実不可用、秘事法門トシルヘシ（本文とは別筆）
8、（未調査）
活字本所載書：『真宗史料集成』5、『真宗大系』36（了祥著『異義集』に収録）
参考文献：梯実円「『他力信心聞書』の一考察－真宗における知識帰命説の源流－」（『村上速水先生喜寿記念　親鸞教学論叢』、永田文昌堂、1997）
解説：真蹟本は現存していないが、古来より仏光寺第4世了海の著述とされる。本文末に「おりおりに聴聞することを廃忘の時の為に則これを書きつけたれば」とある所から本書成立の様子を推測することが出来るが、詳しい事情は不明。
　本書は14の問答を通して他力の一向専修念仏によって報土に往生することを明らかにしている。
　注目される部分として、第7問答に展開される南無の解釈があげられる。即ち、南無の解釈として5つ程度の解釈をあげており、その中には真言宗に説く己身の弥陀義や本覚の弥陀に帰するなどの義がみられるが、了海がこれらの義をどう了解しているのかは明確ではない。また本書では、善導の「人法並彰故名阿弥陀仏」（『観経玄義分』）になぞらえてを受け、「願力」を「願」は法、「力」は世々の先徳と解釈するなど、相承の善知識を還相の菩薩、教化地の菩薩と位置づける点なども特色として挙げられる。これらの点より古来本願寺系統では本書を「知識帰命の異端」として位置づけている。
　別項『還相回向聞書』と共に、関東を中心とした初期真宗教団を知る上から注目される。
作成者名：藤田真隆

弾選択

書名よみ：だんせんちゃく（だんせんぢゃく）
著者名：定照
著者名よみ：じょうしょう
著者名別名：並榎の竪者
著者生没年：不明
成立翻訳年：1225（元仁2）
成立地：日本
巻数：3（？）
散逸文献の文献名出典：『正源明義鈔』9（『法伝全』p.905上）、『選択集叢林記』（『真宗全書』17、p.6）、『評摧邪輪』（『浄全』8）、『念仏選摧評』（『浄全』8）、『金綱集』5（『日蓮宗宗学全書』乾p.215）、『翼賛』42(『浄全』16)、『長西録』（『日仏全』1）、『蓮門類聚経籍録』下（『日仏全』1）
参考文献：石井教道『選択集の研究—註疏篇—』（文堂新光社、1945)、大屋徳城『日本仏教の研究』3（法蔵館、1953）、平雅行「嘉禄の法難と安居院の聖覚」（『日本中世の社会と仏教』塙書房、1992所収）
解説：著者定照は宝地房証真の弟子であった。
　本書は、『翼賛』42に「深く上人念仏の弘通をそねみ」とあり、『正源明義鈔』8には「深く上人の念仏弘通をそねみ、選択集を破する文をつくり、弾選択となつけ、法然の弟子修学者おほしといへども、もとは天台宗の学者、今は師匠のあとをまなぶ、一宗を興行して一流の遍をたつるものなり」とあることから、『選択集』並びに専修念仏への批判書であることがわかる。
　この『弾選択』に対して、隆寛が1227（嘉禄3）3月に『顕選択』を著したところ、東国において多くの人がこれを支持したので、定照は『弾選択』と『顕選択』の2書を叡山に送り、是非を仰いだ。この2書を目にすることによって、叡山は朝廷に専修念仏の停止を要請し、同年6月29日に専修停止の宣旨、7月5日には隆寛他3名の流罪、7月17日には五畿七道に念仏停廃の宣旨等が発布された。所謂「嘉禄の法難」である。なお『念仏選摧評』並びに『長西録』には1巻とある。
作成者名：米沢実江子

知恩講私記

書名よみ：ちおんこうしき
書名別名：知恩講式 吉水講式　尊師講式　諸徳講式
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、東寺宝菩提院三密蔵本（1228（安貞2)、信阿弥陀仏書写）
2、光徳寺蔵本（室町期、書写者不明）
3、本善寺蔵本（室町期、書写者不明）
4、善立寺蔵本（1690、恵空書写）
5、大谷大蔵本（1772（明和8・安永1)、本暁書写）
6、大谷大蔵本（1859（安政6)、一連院書写）
写本奥書：1、安貞二年（1228）八月十二日以上蓮房本書写了、沙弥信阿弥陀仏
2、（奥書なし）
3、（奥書なし）
4、右加州宮腰本龍寺所持之本ヲ以テ令写畢、元禄三庚午年（1690）九月日
5、（未調査）
6、（未調査）
活字本所載書：『真聖全』5、櫛田良洪「新発見の法然伝記史料ー『知恩講私記』」（『日本歴史』200、1965)、櫛田良洪「知恩講私記」（『日本仏教史学』10、1976）『法伝全』、阿川文正「知恩講私記と法然上人伝に関する諸問題」（『大正大学研究紀要』51、1966）
参考文献：伊藤唯真「古法然伝の成立史的考察－特に『知

恩講私記』を繞って」(「法然上人伝の成立史的研究』3、1961)、三田全信『成立史的法然上人諸伝の研究』(平楽寺書店、1966)、阿川文正「知恩講私記と法然上人伝に関する諸問題」(『大正大学研究紀要』51、1966)
解説：講式の形態を備える法然上人の伝記。法然伝としては最古の部類に属す。著者は真宗系統の目録では存覚とする説があったが、櫛田良洪が東寺宝菩提院三密蔵で古写本の紙背から本書を発見し以降は隆寛作が定説となっている。これは、同時に発見した同筆の写本『別時念仏講私記』が隆寛の作であり、講式という同系列の書物が同じ箇所から出たことから隆寛の著作と推定される。内容的にも隆寛撰述として疑問点はない。成立年は不明であるが東寺三密蔵の写本が安貞2年(1228)8月の書写本であることから法然滅後からそれまでになる。内容は法然の徳を五箇条から分けている。第1は、諸宗通達として、誕生から登山、天台の修学、円頓戒の相承、顕密諸宗の兼学として、諸宗に通達している法然の徳を述べ、第2は本願興行で、善導の『観経疏』を浄土宗の蘭燭としながら、『選択集』を著して他力門の指南とし宗を興隆させた法然の徳を述べ、第3の専修正行は、六時礼讃、別時念仏、日課称名七万遍の専修正行から、現身に証を得て三昧発得した法然の徳を述べ、第4の決定往生については、臨終に臨み「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」の四句の偈を唱え、高唱念仏の中、臨終に観音・勢至等が来現し多くの奇瑞があり決定往生した法然の徳を述べ、第5の滅後利物に凡夫に選択本願の念仏を示した法然の遺徳は滅後ますます盛んとなり廟所に毎月25日には昼夜問わず多くの人が集まり皆が、法然の遺徳を偲んだことが述べられている。

『実悟記』には本願寺では、知恩講が蓮如または実如の時代まで修されていたと記述される。そのことから、従来、真宗には多くの古写本がみられたが、昭和40年(1965)に櫛田良洪が東寺宝菩提院三密蔵で『秘抄口決』という書物の裏にある浄土教関係の記述の墨点の断簡を復元し最古の古写本を発見された。この三密蔵の写本は語句など真宗相伝本との相違がある。
作成者名：伊藤茂樹

知恩伝

書名よみ：ちおんでん
書名別名：源空上人伝、智心伝
著者名：道光
著者名よみ：どうこう
著者名別名：了恵、望西楼、蓮華堂、広済和尚
著者生没年：1243(寛元1)-1330(元徳2)
成立翻訳年：1283(弘安6)頃
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、高瀬承厳氏旧蔵本(1703(元禄16)、恵山書写、校合)
写本奥書：1、(上巻末)元禄第十六龍集癸未(1703)冬至日、洛東天王山、孝璘／恵山叟(下巻末)維時元禄十六癸未(1703)稔仲秋之頃、依江州知恩院尊像開帳上洛、幸拝閲此書以書写了、霜月冬至日、孝璘／右知恩伝二巻者、以良照義山公所持之本写之自校合畢、此本東山大谷入信院庫蔵在之、恵山叟
活字本所載書：『摩訶衍』10(1931)、『法伝全』
参考文献：高瀬承厳「望西楼撰述の法然上人伝に就て」(『浄土学』1、1930)、石橋誠道「了恵上人の伝に就て」(『摩訶衍』10、1931)、中野達慧「五書文献史(1)」(『浄土学』10、1936)、三田全信「源空上人伝(知恩伝)」(『成立史的法然上人諸伝の研究』平楽寺書店、1976)、宝田正道「知恩伝孜」(『改訂新版　日本仏教文化史攷』書苑、1985)
解説：道光が撰述したと推定される法然の伝記。中野慧達、三田全信は撰者を道光ではなく知恩寺5世の智心(?-1313)とする。成立は、道光の後跋からして、法然滅後七十余年の弘安5年(1282)頃と推定される。

本書は、道光が法然の誕生から没後の門徒流罪までの「諸家の伝説を尋ね聞て集記せしめ」たものであり、上下2巻本である。62の記事から構成されているが、その大半の標目の下に「如絵詞」「如本伝」「如余伝」等と註記されており、他の伝記と一致する記事は省略されたと考えられる。「絵詞」については、宝田正道によって、本書の私註と諸伝記と対照された結果、『九巻伝』を指すことが明らかになった。「本伝」については、宝田正道は信瑞の『黒谷上人伝』を指すとし、一方、三田全信は『四十八巻伝』を指すとし、本書が『四十八巻伝』の成立に多くの資料を提供したと推考している。また本書と『十巻伝』とは標目が殆ど符合し、深い関連があることが宝田正道によって指摘されている。

本書の現存本は、高瀬承厳が某書店から入手したものであり、昭和5年(1930)に『浄土学』1で紹介され、翌6年には『摩訶衍』10に全文が掲載された。現存本の書写奥書によると、元禄16年(1703)11月に江州伊香立新知恩院の法然上人像を京都で開帳した折に、洛東天王山の孝璘がこれを披閲し、書写したものを、後に恵山(真宗大谷派初代講師恵空の弟子か)が入信院書庫に所蔵されている義山良照の所持本と対校しつつ書写したものである。
作成者名：曽田俊弘

地相観文

書名よみ：ちそうかんもん
著者名：永観
著者名よみ：ようかん
著者生没年：1033(長元6)-1111(天永2)
成立翻訳年：11c後半-12c初頭
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1)
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』(「浄土仏教の思想」7、講談社、1992)
解説：本書は散逸して伝わらない。その一方、永観は『往生拾因』の第8因において、懐感の『釈浄土群議論』に説く励声念仏を自身の修める行法として注目するなか、その行に堪え得ない衰老の者への行として地想観を併せて勧めている。それは『観経』の水想観・地想観の如く観想を行い、やがては瑠璃の地を観て、往生浄土の業を成就するものである。大谷旭雄氏は本書の内容もその第8因に説く地想観に相当するものだったと推測している。ただし、それは『往生拾因』と別個の典籍ではなく、『往生拾因』の第8因を別途に抄出したものだったろう、と指摘している。
作成者名：能島覚

註論刪補鈔

書名よみ：ちゅうろんさんぽしょう
書名別名：往生論註刪補鈔、浄土論註刪補鈔、浄土往生論註刪補鈔、刪抄、補抄、悟阿抄
著者名：悟阿
著者名よみ：ごあ
著者名別名：良喜、知足院悟阿、悟阿弥陀仏

著者生没年：？－1283（弘安6）
成立翻訳年：13c頃
巻数：12
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
刊本所在：1、寛文1（1661、大谷大、国書による）
2、寛文12（1672、大谷大・竜谷大・仏教大・京都大・大正大）
3、刊年不明（京都大、国書による）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、吾祖浄音師之撰述若干部、其註論刪補抄最措意之書也、伝写代遠歳久誤字脱簡甚多、是以舒巻不停手数歳、刪其繁乱補其誤脱増為刪補之功蔵之篋笥、退思落葉之譬無所逃躬、一日応剞劂者家之需刻梓欲不朽于千歳、後賢英衲若比並中華高僧之撰述文勢章段之旧習難同日言之、然音師撰述之微意在訓詁句解之外、読者得其微意其余以勿意、寛文壬子（1672）秋八月下澣
3、（未調査）
参考文献：稲田広演「浄音上人の著述と西谷光明寺の周辺」（『西山学会年報』14、2004）
解説：曇鸞『往生論註』の注釈書。著者は、寛文12年（1672）版の選号には「西谷沙門浄音述」とあり、西林寺空覚の記した跋文でも西山派西谷義祖の浄音の撰述と言っている。しかし中世の諸資料により、実は東大寺知足院白毫坊に住した悟阿良喜の著作であることが判明する。

『金沢文庫古文書』所収（仏事編、53ページ）嘉元2年（1304）文書に「悟阿弥陀仏上人御大事／往生論一巻、同註論一巻／同珊（ママ）補抄註論上巻分」とあり、西山派深草義尭恵の『註論私抄』には「悟阿云」として本書が盛んに引用されている。本書の著者が悟阿であることは、既に真宗の開轍院随慧が指摘している。

悟阿には、他に『群疑論二十五帖鈔』・『同七帖鈔』があり、善導の著作や『安楽集』・『念仏鏡』・『往生十因』にも注釈書を付け、更には『新十因』を作って「諸行本願亦非本願義」を主張したというが（『吉水法流記』）、すべて現存しない。本書は、悟阿の教説を具体的に窺うことのできる唯一の文献として貴重である。

その著述の意図は、序文に『往生論註』を「念仏一宗の指南」と定め、「上古の先徳」「近世の碩学」の註釈を尊重しながら、それらの「要を拾い、繁を刪り」、さらに経論により「義を証し、闕を補す」と述べている。註釈の特徴は、「有抄云」として諸行本願義長西の『註論疑芥』を引き、これに対する自らの意見を「私云」として述べる形が中心である。南都の学匠らしく、経論以外にも倶舎・唯識・法相等、諸宗に亘る多くの文献を援用し、幅広い学識を披露している。

一説によると、悟阿は、西山派深草義の祖立信やその弟子顕意に帰依したとも伝えられるが（『吉水法流記』）、その流れを汲む尭恵が本書を重用したことは、その信憑性を物語るものかもしれない。
作成者名：稲田廣演

註論私抄

書名よみ：ちゅうろんししょう
書名別名：無量寿経論註抄、往生論註私集鈔、浄土論註私集鈔
著者名：尭恵
著者名よみ：ぎょうえ
著者名別名：善偉房尭恵、善偉
著者生没年：1328（嘉暦3）-1395（応永2）
成立翻訳年：1379（康暦1）
巻数：7
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：写本
刊本
写本所在：1、愛知岡崎浄珠院蔵本（江戸初期（？）、書写者不明）
2、大正大蔵本（1666（寛文6）、書写者不明、旧蔵印「蔡華楼書籍」）
3、愛知吉良西福寺蔵本（江戸中期（？）、書写者不明、大光演冏手沢本）
写本奥書：1、（巻一袖書）永和二丙辰（1376）卯十九抄始之
（巻三袖書、本文とは異筆）此抄書写之年月、人王百代後円融院御宇康歴元巳未年（1379）ヨリ安永四未年（1775）迄凡三百九十七年相当ス
（巻四奥書）本云、康暦元年（1379）六月二十九日於因州無量寿寺上巻分終草功畢／於洛陽円福寺以当寺三代尭恵上人自作自筆之本而書写畢
（巻五袖書）康暦元（1379）七四草始之、先立章名次釈論文
（巻七奥書）補山上人／及山上人
2、本云、註論私抄一部七帖企草於京洛之弊房終功於因州之精舎、或載諸抄之文言或記一流之口伝、雖恥外見之謗嘗欲備自分之稽古之許也、専字埋于壁底之誡宜成隠于袖中之思而已、康暦元年（1379）八月三日深草遺葉尭恵〈年五十二臘四十一〉／于時寛文六丙午年（1666）正月十四日書写之者也
3、（奥書なし、表紙に「大光」と所持者名のみあり）
刊本所在：1、享保3（1718、大谷大・大正大・竜谷大・積翠文庫）
刊本の奥書刊記：1、時明徳二年未（1391）十月十五日了／本曰、此抄者、円福教寺第三世尭恵諱善偉上人制作之、而間雖為一流秘抄有深志故令書写之、於後代守其志可授之者也、若有聊爾相伝者肖（背（？））冥感失於法命、可秘可秘／帰命薩婆若得大総持門願共諸衆生往生安楽国、粟生報国山光明寺三十六世明空沢了校合考之畢／享保三戊戌年（1718）卯月吉祥日、皇都書林堀川本国寺前小佐治半右衛門、五条東洞院東へ入福森兵左衛門、寺町五条上ル町梅村市郎兵衛開版
解説：西山派深草義の円福寺第3世尭恵善偉の著作で、曇鸞『往生論註』を注釈したもの。諸本の識語を整理すると、永和2年（1376）4月19日に洛陽円福寺で筆を起こし、康暦1年（1379）8月3日に因幡国（鳥取県）無量寿寺にて完成したようである。版本にのみ記載される「明徳二年未（1391）十月十五日了」は、書写もしくは再治完了の日時であろうか。

内容は、巻1から巻4が『往生論註』上巻、巻5から巻7が同下巻の注釈である。様々な経典論釈はもちろんのこと、字書・音義や外典、本草書まで援用して『論註』の解釈に努めている。

尭恵の学風として、自他流の解釈の違いを強調することが挙げられるが、本書でも「刪抄」「補抄」（悟阿良喜『註論刪補鈔』）、「道光抄」（了恵『論註略鈔』・『浄土論註拾遺鈔』）、「鎮抄」（良忠『無量寿経論註記』と了恵の前掲2書）、「疑芥」（長西『往生論註疑芥』）などを列挙し、「竹林寺」（顕意）、「開山抄」（道意）、「先師口伝」「先師抄」（頓乗）の説と対比させている。

しかし必ずしも自流の相伝に拠るとは限らず、また引用と断らずに悟阿や良忠・了恵と同様の考証を載せることには注意を要する。

もともと和漢混交文であったと見られるが、版本や大正大・西福寺蔵写本（3本共に内題を「無量寿経論註抄」とする）では不完全ながら漢文化されている。本書の原初形

態を把握するには、袖書や付箋に独自記事を持ち、「自筆の本」を書写したものとされる浄珠院蔵写本（和漢混交体、内題「註論私抄」）を中心とした検討が必要である。
作成者名：稲田廣演

鎮西宗要本末口伝鈔

書名よみ：ちんぜいしゅうようほんまつくでんしょう
書名別名：鎮西宗要口伝鈔、宗要本末私見聞
著者名：聖冏（述）／聖聡（口筆）／了暁（筆録）
著者名よみ：しょうげい（述）／しょうそう（口筆）／りょうぎょう（筆録）
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師／　／
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立翻訳年：12c-13c
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
写本所在：1、仏教大蔵本
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、延宝3（1675、京都大・大正大・仏教大）
2、刊年不明（東洋大）
刊本の奥書刊記：1、鎮西宗要私見聞了誉口筆酉誉執筆了暁、于時延宝3（1675）乙卯年十月吉辰日、増上寺前松村十兵衛開板
2、（未調査）
活字本所載書：『浄全』10
参考文献：恵谷隆戒「宗義顕彰・鎮西、記主著作解題」（『浄全』10）
解説：本書の作者は、巻末に「鎮西宗要私見聞了誉口筆酉誉執筆了暁」とあるから、浄土宗第7代の了誉聖冏が『浄土宗要集』（本）と『浄土宗要集聴書』（末）との本末についての私見聞を門弟の酉誉聖聡に授け、更にそれを口授したものを門弟の了暁が筆録したもので、聖冏、聖聡、了暁の三者合作と見ることができる。従って本書は『浄土宗要集』『同聴書』の注釈書ともいえる。内容は初めに表紙上書きの事と然師弁師に逢て宗要を伝えることについて記し、次に80論題について注釈をなし、終わりに追加として本尊本経安置之事、破戒念仏之事、唯除五逆之事、天竺念仏祖師之算、宗要集八十題有生起耶之事、諸宗一心之事、名号者般舟三昧之事、設我得仏有三十之事、十方衆生之内畜類往生之事、還源江河則異之事、懺悔之処、一向専修之処の13論題を附加する。
作成者名：米沢実江子

津戸三郎へつかはす御返事（九月二十八日付）

書名よみ：つのとのさぶろうへつかわすごへんじ（くがつにじゅうはちにちづけ）
書名別名：津戸返状
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
2、『法然上人伝記』（『九巻伝』）所収（『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照）
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
写本奥書：1、『和語灯録』の項を参照
2、『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
刊本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『定本法然上人全集』7（山喜房仏書林、1982）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『高僧名著全集』4、『国文東方仏教叢書』2-4、『和語灯録』の項を参照、『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』3（春秋社、1989）、石丸晶子『法然の手紙』（人文書院、1991）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
参考文献：梶村昇「津戸宛「九月二十八日付消息」―法然上人の津戸三郎為守宛消息研究2―」（『浄土宗学研究』21、1995）、梶村昇『津戸三郎為守』（「法然上人をめぐる関東武者」3、東方出版、2000）、『和語灯録』の項を参照
解説：法然が津戸三郎へ送ったとされる手紙。本消息は『拾遺語灯録』中巻などに所収されているが、そこには「津戸三郎へつかはす御返事」と題して、10月18日付、9月28日付、4月26日付の3通が収められており、この題名はこれら3通の総称である。ただしこれら3通に内容的に関連性があるというわけではない。なお『法然上人伝記』（『九巻伝』）や『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）においては、3通のうち、10月18付の手紙と9月28日付の2通の手紙が所収されている。本消息はこの3通のうちの第2消息である。

津戸三郎（1163-1243）は武蔵国の武士であり、1195年（建久6）東大寺大仏供養で上洛した際に法然に帰依したといわれる。『西方指南抄』所収の9月18日付の消息の註記に、「オホコ・シノヤ・ツノト、コノ三人ハ聖人根本ノ弟子ナリ。」とあることからして、重要な弟子であったようである。『法然上人伝記』（『九巻伝』）や『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）によると、81歳で自害往生したということである。

内容について。津戸三郎の国もとでは、30人余りの人々が専修念仏者になったという津戸三郎の報告に対し、本消息では、道綽のいた平州こそが一向念仏の地であるのに、専修念仏者30余人というのは大変珍しいことだと讃歎する。そして続いて、無智の者だからこそ念仏を勧めているというわさがあるようだが、それは誤りであることを強調する。阿弥陀仏の念仏往生の誓願は、平等の慈悲によっておこしたので、特定の人を嫌うことは全くないと説く。また、念仏往生の願は、阿弥陀仏の本地の誓願であり、余行は本地の誓願ではない。釈迦は種々の機縁により様々な行を広めるが、それは随機の法であり、仏の本意ではない。結局念仏が阿弥陀仏の利生の本願で、釈迦の出世の本懐でもあると説いている。

この他に、熊谷直実に送った文なるものがあり、これを書き直したい旨が示されている。消息ならではの、本人同

士にしかわからない内容も記されている。
作成者名：角野玄樹

津戸三郎へつかはす御返事（四月二十六日付）

書名よみ：つのとのさぶろうへつかわすごへんじ（しがつにじゅうろくにちづけ）
書名別名：津戸返状
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
写本奥書：1、『和語灯録』の項を参照
刊本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『定本法然上人全集』7（山喜房仏書林、1982）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『高僧名著全集』4、『国文東方仏教叢書』2-4、『和語灯録』の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』3（春秋社、1989）、石丸晶子『法然の手紙』（人文書院、1991）、『和語灯録』の項を参照
参考文献：梶村昇『津戸三郎為守』（「法然上人をめぐる関東武者」3、東方出版、2000）、『和語灯録』の項を参照
解説：法然が津戸三郎へ送ったとされる手紙。本消息は『拾遺語灯録』中巻などに所収されているが、そこには「津戸三郎へつかはす御返事」と題して、10月18日付、9月28日付、4月26日付の3通が収められており、この題名はこれら3通の総称である。ただしこれら3通に内容的に関連性があるというわけではない。なお『法然上人伝記』（『九巻伝』）や『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）においては、3通のうち、10月18付の手紙と9月28日付の2通の手紙が所収されている。本消息はこの3通のうちの第3消息である。

津戸三郎（1163-1243）は武蔵国の武士であり、1195年（建久6）東大寺大仏供養で上洛した際に法然に帰依したといわれる。『西方指南抄』所収の9月18日付の消息の註記に、「オホコ・シノヤ・ツノト、コノ三人ハ聖人根本ノ弟子ナリ。」とあることからして、重要な弟子であったようである。『法然上人伝記』（『九巻伝』）や『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）によると、81歳で自害往生したということである。

内容について。法然が正月の別時念仏の前後に風邪をひき、その病状や治療の様子を伝えている。正月の別時念仏を続けていると、ますます風邪がひどくなり、2月10日頃から口が渇き、2月20日ころからは、身体も痛くなってきたという。灸などの治療を試みている様子を伝えている。

なお、現存する法然の消息はその大半が教義に言及する。特に『和語灯録』は意図的にそのような消息を集めたのではないかと思われる。そのような中にあって、教義に触れない本消息はその意味でかなり珍しいものといえよう。ただ『和語灯録』所収本の註記では、本消息に記されている治療は命を惜しんでいるためのものではなく、念仏を称えるための治療であると述べているので、このような理由によって、特別に本消息が収録されたのではないかと推測される。
作成者名：角野玄樹

津戸三郎へつかはす御返事（十月十八日付）

書名よみ：つのとのさぶろうへつかわすごへんじ（じゅうがつじゅうはちにちづけ）
書名別名：津戸返状
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：1205（元久2）（？）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
2、『法然上人伝記』（『九巻伝』）所収（『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照）
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
写本奥書：1、『和語灯録』の項を参照
2、『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照
3、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
刊本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『定本法然上人全集』7（山喜房仏書林、1982）、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『高僧名著全集』4、『国文東方仏教叢書』2-4、『和語灯録』の項を参照、『法然上人伝記』（『九巻伝』）の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』3（春秋社、1989）、石丸晶子『法然の手紙』（人文書院、1991）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
参考文献：梶村昇『津戸三郎為守』（「法然上人をめぐる関東武者」3、東方出版、2000）、『和語灯録』の項を参照
解説：法然が津戸三郎へ送ったとされる手紙。本消息は『拾遺語灯録』中巻などに所収されているが、そこには「津戸三郎へつかはす御返事」と題して、10月18日付、9月28日付、4月26日付の3通が収められており、この題名はこれら3通の総称である。ただしこれら3通に内容的に関連性があるというわけではない。なお『法然上人伝記』（『九巻伝』）や『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）においては、3通のうち、10月18付の手紙と9月28日付の2通の手紙が所収されている。本消息はこの3通のうちの第1消息である。

津戸三郎（1163-1243）は武蔵国の武士であり、1195年（建久6）東大寺大仏供養で上洛した際に法然に帰依したといわれる。『西方指南抄』所収の9月18日付の消息の註記に、「オホコ・シノヤ・ツノト、コノ三人ハ聖人根本ノ弟子ナリ。」とあることからして、重要な弟子であったようである。『法然上人伝記』（『九巻伝』）や『法然上人行状絵図』

（『四十八巻伝』）によると、81歳で自害往生したということである。
なお、この10月18日付の手紙の成立年次について、両伝記は元久2年（1205）とする。
さて両伝記によると、本消息は将軍の源実朝が津戸三郎を呼び出し、念仏について問いただすことになったので、その対策のため、津戸三郎が質問してきた。それに対し、法然が津戸三郎に送ったのがこの手紙であるという。
本消息では津戸が念仏のことを聞かれたら、法門の詳しいことは知らないと答え、その上で、以下のように答えよと法然は述べる。
まず生死輪廻から離れるには、末代の人々は極楽往生を望むほかなく、往生行としては念仏以外にないと説く。そして善導によると往生行に専修・雑修があるが、前者ならば百即百生、後者ならば千人中に一、二人しか往生できないことになると述べ、更に、専修には五種の正行の専修ということもあるが、善導は結局、一向念仏を勧めているとする。そしてまたこのような説を勧める善導は、阿弥陀仏の化身であるので、善導のいうことに誤りなどあろうはずがないという。
更に、この他にも、津戸に対して色々注意点を与えている。念仏を称えてはいけないといわれても、往生に志しがある人はそれに影響されてはならないと注意する。その一方で、他人に念仏を称えよといっても、その心がない人は聞く耳さえもたない。だから、他人のことは気にせず、せめて自分だけは念仏往生を心がけよと勧める。また子細を問いただされた際、細かいことは知らない、このように法然から聞いているといえばよいと再度冒頭と同様の助言をしている。
作成者名：角野玄樹

徹選択集鈔

書名よみ：てつせんちゃくしゅうしょう、てつせんぢゃくしゅうしょう
書名別名：徹選択本願念仏集鈔、徹選択鈔
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖聖人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1260（正元2）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、寛永5（1628、栗田文庫・藤堂祐範）
2、慶安4（1651、大谷大）
3、天保8（1837、大谷大・大正大・竜谷大）
4、刊年不明（大谷大・大正大・高野山真別所）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『浄全』7
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214（建保2）比叡山で受戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。
本書はその序文によると、ある発起人の要請により、1260（正元2）3月10日より同年3月26日までの間、発起人はじめ忍性・顕彰房等に対して講述されたものとのことである。上下2巻より成っており、各巻はそれぞれ『徹選択本願念仏集』（『徹選択』）の上巻・下巻に対応している。
上巻では、はじめに「徹選択事」として、書名と上巻下巻の意を述べ、次に『徹選択』の第1、第2、第3、第4、第6、第8、第12、第14、第16の順に、各篇より要文を出して問答体によって論を進める形式を取りる。「答」においては、良忠自身の論の他に、「先師云」「先師物語云」「口伝云」等というように、聖光の説を以て返答する。
下巻では、『徹選択』より「念仏三昧者不離仏事」「似位菩薩無浄土之行」「文珠不知弥勒挙足下足事」「住法王子」「浄仏国土成就衆生一義二議事」「金剛座上垂成正覚事」「世間灌頂出世灌頂事」「遊戯神通義」「称名念仏甚深事」「[■]陀劫事」「福即智智即福事」「三福摂万行事」「念仏往生七義」等を取り上げて聖光の説くところにさらに説明を加える。
作成者名：米沢実江子

徹選択本願念仏集

書名よみ：てつせんちゃくほんがんねんぶつしゅう（てつせんぢゃくほんがんねんぶつしゅう）
書名別名：徹選択集、徹選択
著者名：聖光
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立翻訳年：1237（嘉禎3）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、寛永5（1628、栗田文庫（下巻1冊）・藤堂祐範氏）
2、慶安4（1651、大谷大）
3、寛政4（1792、大正大）
4、天保8（1837、大谷大・竜谷大）
5、刊年不明（大正大・大谷大）
刊本の奥書刊記：1、于時寛永五戊辰暦（1628）孟春下旬（花押）（藤堂祐範『浄土教古活字版図録』（1934）による）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
活字本所載書：『浄全』7、『大正蔵』83（No.2609）
参考文献：今岡達音「徹選択本願念仏集（解題）」（『浄全』21）、小西存祐「国師の著作」（柴田玄鳳編『三上人の研究』、三上人遠忌事務局、1935）、恵谷隆戒「宗義顕彰・鎮西、記主著作解題」（『浄全』10）、藤堂祐範『浄土教古活字版図録』（1934）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。
本書は聖光によって著された、法然『選択本願念仏集』に対する注釈書である。
上巻は先ず「選択本願念仏集南無阿弥陀仏往生之業念仏為先」の題号について解釈し、「念仏」とは諸師所立の口

称念仏、「本願」とは善導所立の本願念仏、「選択」とは法然所立の選択念仏であるとして三重の念仏の義を示し、三義共に口称の念仏の義であるとする。そして次に『選択集』16章段の大意を順次略述する。この中、第12篇において「菩提心に二有り」として「凡位菩提心」と「聖位菩提心」の2つ、また「菩提心願」と「菩提心行」の2つを述べる。第16篇においては『選択集』で述べる「八選択」をさらに広げ、22の選択の義があるとして、1.選択一向、2.選択悪業待対、3.選択大善、4.選択一行、5.普賢菩薩選択臨終、6.文殊菩薩選択臨終、7.観音菩薩選択本師、8.青史菩薩選択因行、9.龍樹菩薩選択本願、10.天親菩薩選択名義讃歎、11.廬山慧遠選択得度、12.曇鸞法師選択長生念仏、13.天台大師選択改悔、14.道綽禅師選択念仏、15.善導和尚選択本願念仏、16.懐感禅師選択見仏念仏、17.少康法師法師選択興隆念仏、18.法照禅師選択末法念仏、19.慧月三蔵選択念仏、20.大智律師選択病中念仏、21.恵心先徳選択念仏往生、22.法然上人選択本願念仏を挙げる。

下巻は問答体によって述べられる。初めに「念仏三昧」について述べ、念仏三昧とは不離仏・値遇仏の義であるとする。次に「浄仏国土成就衆生」について述べ、ここに二種の菩薩を挙げる。その中、因地下位の菩薩とは、願はあっても一仏国土より一仏国土に到って国土を浄め衆生を成就するという行の無い菩薩のことであり、未だ無明を断じていないので果地上位の如来に値遇して片時も離れてはならない菩薩であるとする。一方、真位の菩薩は一仏国土より一仏国土に到って仏に値遇し国土を浄め衆生を成就する菩薩のことであるという。また六波羅蜜・受持・読誦・持戒・修禅・学解等も全て仏教を念ずるが故に不離仏・値遇仏の義であるとし、中でも口称念仏は名号を唱えて仏教に相応し仏願に随順し仏語に違せざる故に見仏三昧を成就し、弥陀の来迎に預かって往生を遂げるので、不離仏・値遇仏の義であるとする。また念仏に総（万行）と別（口称名号）の2義があるとし、善導は凡夫の行人のために総を捨てて別の念仏を取ったとしている。

また下巻の終わりに、一切衆生が念仏往生する7つの理由（1.菩薩願故、2.菩薩巧方便故、3.菩薩浄仏国土成就衆生故、4.仏智故、5.法不思議故、6.摩訶衍法故、7.譬喩故）を挙げる。

このように本書は、浄土宗の念仏は大乗菩薩道を踏まえたうえで「別」の念仏を選取する立場であることを明らかにするものである。良忠はこの通別の解釈に依って「選択集の念仏は正しく本願称名の一行に局り、智度論の念仏は広く三福六度の行に通ず。然るに本集の念仏は未だ通の念仏の相を釈せず。故に別より通に徹するなり。故に徹選択集という」（『徹選択鈔』）と述べている。

なお上巻と下巻の成立順序について、良忠は聖光の伝聞として「本書（下巻）の内容からいえば『徹選択』という書名は題と内容とが相違するので、上巻に本集（『選択集』）の大意を釈し添えた」と述べており（『徹選択鈔』）この記述からすると下巻が先に成立したかのように受け取れるが、上巻の奥書は「嘉禎3年（1237）6月19日」、下巻は「同年6月25日」とある。

作成者名：米沢実江子

天竺往生験記

書名よみ：てんじくおうじょうけんき
書名別名：天竺往生本記（尾題）、天竺往生伝
著者名：世親（？）
著者名よみ：せしん
著者名別名：天親、天親菩薩、世親菩薩、婆藪般豆、婆藪般頭
著者生没年：4c-5c
成立翻訳年：11c以前
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、檀王法林寺蔵本（1612（慶長17）、書写者不明、袋中書写本）
2、早稲田大蔵本（明治後期、書写者不明）
3、竜谷大蔵本（書写年不明、書写者不明）
4、大谷大蔵本（書写年不明、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
刊本所在：1、寛永6（1629、大谷大・高野大・大正大・竜谷大）
2、正保2（1645、京都大・お茶の水図書館）
3、承応3（1654、早稲田大・お茶の水図書館）
4、元禄7（1694、大正大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
活字本所載書：『続浄』16
参考文献：高橋伸幸「『私聚百因縁集』の出典に関する報告」（『中世文学』26、1981）、高橋伸幸「『天竺往生験記』追考」（『札幌大学女子短期大学部紀要』22、1981）、中前正志「『天竺往生験記』に関する二、三の覚書」（『京都女子大国文』135、2004）、深貝慈孝「往生伝・高僧伝解説-特に浄全続十六巻所収本について-」（『続浄』16）
解説：本書は「天親菩薩記」「羅什三蔵訳」と記され、最澄が将来したものと伝えられるが、最澄の『請来目録』には見当たらないことから、本書を権威付ける意図のもとに編集されたと考えられる。成立年代は不明であるが、その語彙（二十五三昧帳）や語法（向西飛行者見）などから日本で偽作されたものであることは明白で、長西の『浄土依憑経論章疏目録』では「偽妄録」に分類されているとおりである。その一方で本書は『拾遺往生伝』をはじめとして中世よりさかんに引用されており、近世においては袋中『天竺往生験記端書』や専称『科註天竺往生験記』などの註釈書がつくられ、それらにおいては著者等に関して概ね上述した通りの伝が採用されている。

所収される往生人は第一西天竺王子阿私陀、第二中天竺婆羅門乾利、第三西天竺貧女瑠那哥、第四南天竺沙弥悉多奢、第五西天竺俗人達竜蘇、第六中天竺大臣提婆山、第七東天竺貧人提韋、第八北天竺童子王弥、第九南天竺沙門僧の9人である。各伝は平生に修した往生行を簡略に述べた後、紫雲や異香といった奇瑞と来迎について叙述がなされる。それら個々の伝を載せた後に西天竺と中天竺における往生人の人数を記した文で終わる。往生行としては念仏が頻出し、この点も前述したような本書偽作説の根拠の1つとなっている。

写本は版本以前の慶長17年（1612）袋中筆写本が最古であるが、この本文は版本とほぼ同一である。竜谷大や大谷大の蔵本も版本と同様の本文になっている。しかし『私聚百因縁集』や『大経直談要註記』などの鎌倉室町期の文献に引用される本書の本文は上記の版本系のものとは異なっており、早稲田大蔵本がそれに近いとの指摘がなされている（高橋伸幸「『天竺往生験記』追考」）。早稲田大蔵本は明治末期に書写された比較的新しいものであるが、巻初からは天治2年（1125）に沙門智印によって書写されたもの

に連なることが伺われる。
作成者名：永田真隆

答但馬宮問三箇条

書名よみ：とうたじまのみやもんさんかじょう
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1221（承久3）以降
成立地：日本
漢和：和文
散逸文献の文献名出典：『明義進行集』（『明義進行集　影印と翻刻』pp.124-128、逸文あり）『浄土宗要決』（『日本仏教』11、p.53、逸文あり）、『閑亭後世物語』（『続浄全』9、pp.36-37、逸文あり）『法然上人行状絵図』（『法伝全』p.282）
解説：承久の乱で但馬に流された後鳥羽上皇の皇子である雅成親王が念仏信仰についての不審について問い、それに対して隆寛が答えたものが本書状。同様の書状は聖覚・明禅にもある。逸文が『明義進行集』『閑亭後世物語』『浄土宗要決』などにみえる。この三箇条は「一日乃至七日一心不乱之事」「雑行事」「称名念仏用心事」である。これらの内容をみると、現世の祈祷、神仏習合、穢れなど、公家が念仏に対して抱いている疑問点をとりあげている。本書の書名は真宗本願寺派の学匠中越後興隆が『一念多念証文録』において付けた書名であり、正式な書名ではない。
作成者名：伊藤茂樹

唐朝京師善導和尚類聚伝

書名よみ：とうちょうけいしぜんどうかしょうるいじゅうでん
書名別名：唐朝京師和尚類聚伝、京師和尚類聚伝、類聚伝
著者名：幸西
著者名よみ：こうさい
著者名別名：成覚房、鐘下房少輔、物部氏（俗姓）
著者生没年：1163（長寛1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：建保2（1214）以前
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1239（延応1）、具法房書写）
＜影印版＞:『金沢遺文』（便利堂、1934）
＜影印版＞:『金沢文庫仏教典籍資料集』8（仏教大学図書館、1954）
2、住田智見氏蔵本（1685（貞享2）、恵空書写）
3、住田智見氏蔵本（書写年不明、恵山書写）
写本奥書：1、延応元年（1239）九月二十日書写之了（花押）、以具法房本、写之訖
2、建保二年太歳甲戌（1214）五月十四日書写已竟、京師ノ門流比丘明信、校合倭漢勘定同異管見所及類聚開印矣、点本云、建保五年丁丑（1217）六月九日末時於尊経院以勘定点本移竟、釈明信、承久三年辛巳（1221）四月十一日巳時於清閑寺以彼点本移竟、釈玄信、貞享二年乙丑（1685）三月二十五日以槙尾高山寺、石水院第五十五函本写之竟、西福寺恵空
3、建保二年太歳甲戌（1214）五月十四日書写已竟、師門流比丘明信、校合倭漢勘定同異管見所及類聚開印矣、恵山
刊本所在：1、鎌倉期（西本願寺）
2、承応3（1654、大谷大・大正大）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
2、承応三年申午（1654）八月吉日、吉田庄左衛門刊行之
活字本所載書：『金沢文庫資料全書』第4巻・浄土篇（一）（神奈川県立金沢文庫、1974）、河住玄編『成覚房幸西の一念義』（欣求庵、1990）
参考文献：山上正尊「成覚房幸西の著「玄義分抄」に就いて」（『無尽灯』20-1、1915）、住田智見著『浄土源流章解説』（法蔵館、1925）、塚本善隆「金沢文庫所蔵浄土宗学上の末伝希覯の鎌倉古鈔本」（『今岡教授還暦記念論文集』大正大学浄土学研究会、1933）、山上正尊「唐朝京師善導和尚類聚伝の著者に就いて」（『真宗学報』14、1934）、大屋徳城編『金沢遺文』（便利堂、1934）、小笠原宣秀「唐朝京師善導和尚類聚伝に就いて」（『竜谷学報』310、1934）、安井広度『法然聖人門下の教学』（法蔵館、1938）、石田充之『日本浄土教の研究』（百華苑、1952）、松野純孝「宋代浄土教と一念義（上）」（『金沢文庫研究』63、1961）、松野純孝「宋代浄土教と一念義（下）」（『金沢文庫研究』64、1961）、親鸞聖人全集刊行会編「烏竜山師并屠児宝蔵伝」（『定本親鸞聖人全集』6、法蔵館、1970）、石田瑞麿「金沢文庫における浄土教典籍」（『金沢文庫研究』244、1973）、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』（大東出版社、1979）、神奈川県立金沢文庫編『神奈川芸術祭特別展　称名寺と浄土教資料』（神奈川県立金沢文庫、1982）、河住玄編『成覚房幸西の一念義』（欣求庵、1990）、稲田順学「入宋明信大徳とその周辺-浄土宗一念義の聖教開版-」（『仏教学浄土学研究　香川孝雄博士古稀記念論集』、2001）
解説：善導の諸伝記を収集したものであるが、善導伝そのもの以外にも、道綽や懐感など善導ゆかりの人物の伝記中より、善導に関する記事が抜粋・載録されている。

写本は3本が現存しており、奥書の内容から2種類に分けることができる。1つは金沢文庫蔵本、もう1つは恵空・恵山の伝写本である。1、金沢文庫蔵本の奥書には「書写之了（花押）、以具法房本」とあり、「具法房本」が書写したとある。しかし「書写之了」の四字は「以全報房点本写之了」と読まれる文字を塗抹した上に書かれている。2、住田智見所蔵の恵空・恵山の伝写本の奥書には、建保2年（1214）に幸西の弟子である明信が書写および開印したとあることから、祖本は明信が書写したものであると考えられる。なお本書を一部抄出したものとして、親鸞自筆とされる「烏竜山師並屠兒宝蔵伝」の書写本（巻子本）1巻がある。

本書は著者名が記載されていないため、かねてから著者をめぐって論が展開されてきたが、現存する写本すべての奥書に幸西の弟子の名が見られることから、現在は幸西説が主流となっている（覚瑜「善導和尚類聚伝」の項を参照）。ただし恵空・恵山の伝写本の奥書に明信が「管見」を「類聚」したとあるため、明信の著述と考えるのが自然であろうという説も出されている（稲田論文）。

本書の冒頭にもあるとおり、本書には善導伝である「正伝」が10、他の諸師4人および俗人1人の伝より善導に関する記述を抽出した「他伝」が15の、合計25伝が収められている。その詳細は、「正伝」として『往生西方浄土瑞応刪伝』『往生西方略伝』『浄土往生伝』『新修浄土往生伝』『新編古今往生浄土宝珠集』『竜舒増修浄土文』『念仏鏡』『帝王年代録』（『往生浄土略伝』『楽邦文類』）が挙げられている。そして「他伝」としては、『瑞応刪伝』から道綽伝、『続高僧伝』から会通伝、『大宋高僧伝』（『瑞応刪伝』『西方略伝』『浄土略伝』『宝珠集』）から懐感伝、『大宋高僧伝』『浄土往生伝』（『新修往生伝』『宝珠集』『竜舒浄土文』『楽邦文類』）から少康伝、『西方略伝』（『宝珠集』）より宝蔵伝が引用さ

れている。（※（）内の伝記は、書名のみの記載。）
　これら12書中、『瑞応刪伝』『念仏鏡』『帝王年代録』『続高僧伝』以外の8書は、すべて宋代の典籍であり、新来文献に対する関心の深さが窺える。また佚書『帝王年代録』をはじめ、その大半が消失している『西方略伝』『浄土略伝』『宝珠集』より伝記を引用しているので、資料的な面からしても本書は高い価値を有するものといえる。
　なお、本書と混同されてきた覚瑜撰述の佚書『善導和尚類聚伝』については、覚瑜「善導和尚類聚伝」の項を参照のこと。
作成者名：伊藤瑛梨

唐房法橋消息

書名よみ：とうぼうほっきょうしょうそく
著者名：行円
著者名よみ：ぎょうえん
著者名別名：唐房法橋、源国輔
著者生没年：986（寛和2）-1047（永承2）
成立翻訳年：10c末-11c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）／（「小山本」）、『阿字義』（『続日本絵巻大成』10、p.5、逸文あり）
参考文献：小松茂美「図版阿字義解説」、松原茂「経典絵巻の種々相」（『続日本絵巻大成』10、中央公論社、1984）、築島裕「古訓点資料に現れた十一、十二世紀の仏教諸宗教学の交流」（『後期摂関時代史の研究』吉川弘文館、1990）、松本光隆「天台宗寺門派における金剛界儀軌の訓読について」（井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開 』（「研究叢書 」116 、和泉書院、1992））、『図書寮本類聚名義抄　本文篇・解説編』（勉誠社、1976）、築島裕『平安時代訓点本論考；研究篇』（汲古書院、1996）
解説：唐房法橋とは園城寺の僧、行円のことであり、俗名は源国輔である。この国輔の弟に国経がおり、その子として永観が挙げられる。
　本書は散逸して伝わらない。ただし、わずか2行の逸文が『紙本著色阿字義』（重要文化財、平安末期成立、編者不明、大阪藤田美術館蔵、通称『阿字義』）に収められており、その逸文とは「唐房法橋御消息云　かきはつるまゝになみたをちてひかこともやかゝれはへらむ」とあるわずかな引用である。なお、この『唐房法橋消息』が記されている第6紙について、その用紙が途中で切断されているという指摘のとおり（小松茂美「図版阿字義」（『続日本絵巻大成』10、中央公論社、1984）、本来はよりまとまった引用がこの『阿字義』にあったことが推察される。
作成者名：能島覚

得生西方義

書名よみ：とくしょうさいほうぎ
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：7
漢和：和文
漢文
散逸文献の文献名出典：『明義進行集』（『明義進行集』（法蔵館、2000）pp.123-128、逸文あり『浄土宗要決』（山中喜八「史料紹介日蓮聖人親写本「浄土宗要決巻中」（『日本仏教』11、p.52、逸文あり）
参考文献：爪生津隆雄「隆寛律師の著作に就て」（『真宗研究』18、1928）、安井廣度『法然門下の教学』（法蔵館、1938）、松野純孝「日蓮書写「浄土宗要決」について」（日本仏教11、1961）、松野純孝「日蓮書写の「浄土宗要決」について（補遺）」（日本仏教13、1962）
解説：『明義進行集』『浄土宗要決』に逸文が存在する。ちなみに『明義進行集』は仮名体で『浄土宗要決』の逸文は漢文体であるが、ほぼ同文である。七篇があったことが『明義進行集』にとかれているが、逸文は第一の「往生極楽ノ正行ノ篇」。正業である称名念仏のことが詳細にとかれている。爪生津隆雄は、隆寛撰述の『一念多念分別事』『自力他力事』が7篇の1つで、『得生西方義』の抄出でないかと指摘されている。
作成者名：伊藤茂樹

登山状

書名よみ：とざんじょう
書名別名：元久法語
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
3、兵庫毫摂寺蔵本（南北朝期、乗専書写（？）、残欠本）
4、京都西法寺蔵本（室町末期、書写者不明、略本）
5、愛知岡崎専福寺蔵本（書写年不明、書写者不明、残欠本）
写本奥書：1、『和語灯録』の項を参照
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
3、（奥書なし）
4、（奥書なし）
5、（未調査）
刊本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）所収（『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照）
3、貞享4（1687、竜谷大（合冊）・大谷大）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
2、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
3、貞享四丁卯歳（1687）二月日、寺町五条　梅村弥右衛門
活字本所載書：『昭法全』、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『昭和新纂国訳大蔵経宗典部』3（東方書院、1928）、『高僧名著全集』4、相馬貴雄『登山状全釈』、『法然上人集』（「大日本文庫」仏教篇）、『法然上人集』（「日本古典全集」1、日本古典全集刊行会、1926）、『真宗史料集成』5（同朋舎出版、1983）、『和語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
現代語訳書：勝又俊教他『仏教文学集』（「古典日本文学全集」15、筑摩書房、1961）、相馬貴雄『登山状全釈』、『和

語灯録』の項を参照、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）の項を参照
参考文献：後藤丹治『中世国文学研究』（磯部甲陽堂、1943）、小林智昭「法然の法語　登山状をめぐって」（『仏教文学研究』3、法蔵館、1965）、永井義憲「中世仏教と仏教文学」（『講座日本文学』5、中世1、三省堂、1969）、魚尾孝久「安居院西法寺蔵「登山状」について」（『仏教論叢』21、1977）、真柄和人「『登山状』ノート（1）」（『石上善応教授古稀記念論文集　仏教文化の基調と展開』、山喜房仏書林、2001）、真柄和人「『登山状』ノート（2）」（『佐藤良純教授古稀記念論文集　インド文化と仏教思想の基調と展開』2、山喜房仏書林、2003）
解説：法然のものとされる法語。法然の伝記では、法然教団の批判が強まった元久年間に記したものとされ、聖覚が筆記したともされる。
　本書について、偽撰説がある。後藤丹治は、『雑談集』「無常ノ言」の比較をした上で、本書の前半と後半とでは、木に竹をついだ感があり、前半部分は後人によるものであることを推測する。小林智昭もこの偽撰説に賛同する。
　内容は、前半部分では、譬喩をまじえて、この仏法に出会ったことを喜び、世の無常を指摘する。後半部分では、聖浄2門のうち、浄土門に入ることを勧め、念仏を勧め、様々な聖教の文を引用し論証する。そして、大施太子の譬喩を用いる。すなわち、大施太子が、海を汲み尽くして、如意宝珠を取り返そうとすることを、我々が疑謗の波を汲めば、本願の宝珠を取り返せることに喩える。
作成者名：角野玄樹

呑海上人御法語

書名よみ：どんかいしょうにんごほうご
書名別名：呑海上人法語
著者名：呑海
著者名よみ：どんかい
著者名別名：有阿、恵永、恵光、遊行四代、他阿、他阿弥陀仏
著者生没年：1265（文永2）-1327（嘉暦2）
成立翻訳年：1326（嘉暦1）以降
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、尾道西郷寺蔵本（江戸期、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
活字本所載書：『定本時宗宗典』上、河野通善「遊行四代呑海とその述作」（『島根大学論集』（人文科学）10、1951）
参考文献：河野憲善「藤沢山開山呑海上人について」（『金沢文庫研究』162、1969）、河野 憲善「藤沢道場創建について」（『印仏研』35(18-1)、1969）
解説：法語の作者である遊行4祖呑海は、鎌倉御家人俣野景平の弟で、兄景平が2祖真教に帰依した縁により、真教に師事し、正安3年（1301）年には京都に七条道場金光寺を建立、1319年（元応1年）に遊行上人を継いだ。しかし、3祖智得入寂時に、呑海は初期の時宗教団の本拠地である当麻山（金光院）無量光寺に帰山せず遊行賦算を続けたので、内阿真光が当麻山の住持となった。そのため呑海は兄景平の援助により、正中2年（1325）に相模国藤沢に道場（現時宗総本山の清浄光寺。遊行寺とも呼ばれる）を建立、独住し、時宗の主流である遊行派を形成した。
　本書は、尾道西郷寺に蔵される写本1巻が現存するのみで、書写に関する記述や奥書がなく、また尊如の『宗門書籍目録』にも記載がないが、河野憲善は内容から判断して呑海の発言と断定している。3祖智得の後を継いで当麻山の住持となるはずった呑海は、内阿真光が当麻山の住持となったことに激怒したらしい。呑海自身は正しく時宗の宣教手段である遊行、化益を行ってきたのであり、内阿は遺命に背いていることを述べる。
作成者名：坪井直子

内道者持念

書名よみ：ないどうしゃじねん
書名別名：内道者持念文、恵心内道持念、恵心僧都之詞
著者名：源信（？）
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：10c後半（？）-11c初頭（？）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、宇治恵心院蔵本
2、叡山文庫蔵本（『類雑集』所収）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『恵全』5（『源信僧都之詞』として所載）、八木昊恵『恵心語録に聞く』（教育新潮社、1972）、『大正蔵』76（『渓嵐拾葉集』所収）
現代語訳書：八木昊恵『恵心語録に聞く』（教育新潮社、1972）
参考文献：八木昊恵『恵心語録に聞く』（教育新潮社、1972）
解説：『長西録』（『日仏全』1、p.352）に恵心の著述として採録され（ただし書名を『内道天持念』とする）、『渓嵐拾葉集』にも「恵心僧都記之」（『大正蔵』76、p.874）として所収されており、また宇治恵心院蔵本には「恵心僧都之詞」として同内容がみられることから、著者は源信と考えられる。
　成立年代は不明。
　8字1句の全22句で構成され、内容は内道者（釈家）が正法を常に持つよう戒めたものと考えられる。第1-4句で我身の無常なることを述べ、第5-8句で我身の不浄にして貪欲・名聞の絶ち難きを述べ、第9-14句で妄語・睡眠に耽ることを戒め、破戒が八大地獄の因であるとし、一世の持戒は九品の台に昇ると述べられ、第15-18句は過去・未来にわたる自身の懈怠を恨み悲しみ、堕地獄の昔の回顧、現在の造罪の悲嘆が述べられ、第19-20句で極楽へ往生せよという釈尊の勧進に従うべきことが述べられ、第21-22句で殺鬼・害魔から心身を護り慎むべきことが述べられている。
作成者名：上杉智英

七日導師作法

書名よみ：なのかどうしさほう
著者名：不明
著者生没年：平安期（？）
成立翻訳年：平安期（？）
成立地：日本
巻数：1

散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。その内容を推測すると七日間に亘る念仏作法を記したものと思われる。七日という期間から常行三昧に関する内容がまず想定されるが、青蓮院蔵本の『修行念仏三昧七日道場明懺悔法』から始まる一連の西方懺法に関するものとも考えられようか。
作成者名：能島覚

七日念仏私記

書名よみ：なのかねんぶつしき
著者名：不明
著者生没年：平安期（？）
成立翻訳年：平安期（？）
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。常行三昧に関する七日間の念仏修行を記した私記か。
作成者名：能島覚

難易二道血脈図論一巻

書名よみ：なんいにどうけちみゃくずろんいっかん
書名別名：二道血脈論一巻
著者名：顕意
著者名よみ：けんに
著者名別名：道教房、公空、記主、聖恵
著者生没年：1238（暦仁1）-1304（嘉元2）
成立翻訳年：13c半ば-14c初頭
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本A（1700（元禄13）、恵空書写、『観経四品知識義』と合冊）
2、愛知西尾養寿寺蔵本（1702（元禄15）、寛空書写、『仙洞三心義問答記』と合冊）
3、吉良称名院蔵本A（1733（享保18）、隆空書写）
4、吉良称名院蔵本B（1752（宝暦2）、麟空書写）
5、大谷大蔵本B（1779（安永10）、随海書写、『深草之鈔物雑書』の内）
6、名古屋蓮華寺蔵本（江戸末期、準統書写）
写本奥書：1、元禄十三辰年（1700）六月日以十念寺本写之、恵空
2、元禄十五年午（1702）六月二十四日書写畢、寛空受印
3、時享保十八癸丑（1733）九月晦日於二村山法蔵教寺会下奉書写也、大日本国千［■］五秋豊葦原穂瑞国三州幡頭郡吉良荻原山大雄院海蔵教寺門人隆空奉準
4、維時宝暦二壬申（1752）四月朔日書ス、荻原山内麟空
5、深草之鈔物雑書一冊書写畢、寛文庚戌（1670）三陽法性山会裏ー／享保十八癸丑（1733）九月於如意山書写畢、節翁上人／寛延二己巳（1749）五月於吉田宝珠院拝写畢、貞智順／安永八己亥（1779）十月於味浜満国寺拝書写畢、随海専求
6、聖来会下準充統校合敬写
刊本所在：1、文政2（1819、大谷大・西山短大・竜谷大・岩瀬文庫、『菩薩蔵頓教一乗海義要決』と合冊）
2、明治31（1898、仏教大・竜谷大、文政板の後刷、『仙洞三心義問答記』・『浄土宗建立私記』・『菩薩蔵頓教一乗海義要決』・『華山院家四十八問答』・『観経四品知識義』と合冊）
刊本の奥書刊記：1、時文政二竜舎己卯（1819）五月十九日、深艸一派大衆謹開版之
2、記主大和尚遺稿校版発起崇福寺励空大和尚、時文政二己卯年（1819）五月十九日刻成／明治三十一年（1898）三月五日再版、六巻合本正価金五拾銭、三陽崇福寺蔵、発行所愛知県額田郡岡崎町環翠堂伊藤小文司、東京麻布飯蔵森江佐七、仝浅草吉野町経世書院、京都知恩院古門前沢田吉左衛門、仝五条通高倉東沢田友五郎、京都花屋町永田長兵衛、名古屋市下江川町皓月堂与助、仝門前町其中堂兼助、仝本町五丁目大成堂文二郎
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2632）
解説：西山深草派の顕意が、難行道・易行道の分別を中心に浄土宗の教相判釈を図式化し、問答による解説を加えた短編。
図の最頂部に「性海」を置き、その下に「釈迦・弥陀」、さらに「難行・易行」、「漸教・頓教」と「観仏・念仏」、「自力・仏力・願力」、「雑業・助業・正業」、「発遣・来迎」の7段にわたって名目を並べ、それを亀甲状の線で結んでいる。
顕意の定義では、性海とは諸法・諸仏の本である法性を表し、その下の弥陀は報身、釈迦は化身を表す。本来はそれぞれ法・報・化の3つを備えた仏であるが、表の徳を示したという。次に、釈迦を難行、弥陀を易行に配当する。難行は漸教・頓教に分かれ、易行は観仏・念仏に分かれる。ここで更に、釈迦を観仏に、弥陀を頓教につなげることで、深草派の主張する二尊二教の教説を表現している。
以下の名目についても同様に相互の関連を説き、結論としては、漸頓二教および観仏はすべて釈迦発遣の教門（入り口）であり、念仏願力の正業（南無阿弥陀仏）のみを弥陀来迎の教法として、その実践を勧める。これは浄土宗一門に限る図ではないと付言し、仏教全体を包括する教相判釈であることを主張している。
本書は、『選択集』に見られる法然の教相判釈を継承しつつ、次々と細分・複雑化していった西山流の名目を深草派の立場で整理したものといえる。
その成立については、年代を知る奥書等の手がかりは残されておらず、古写本も不在である。墨付6丁ほどの短編であることから、伝本のほとんどは顕意の他の著作等と合冊されて伝わっている。
作成者名：稲田廣演

二個条疑問事

書名よみ：にかじょうぎもんのこと
書名別名：聖光房二個条疑問、二個条疑問、二箇条疑問勘付
著者名：聖光（問）・法然（答）
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立翻訳年：1205（元久2）
成立地：日本
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、お茶の水図書館成簣堂文庫本蔵本（1228（安貞2）、書写者不明、巻子本）
写本奥書：1、元久二年三月日／上件文証為停止一念之念仏之僻見之義法然上人御在生時書進二ヶ條之義所賜御外題眼前也／者未代念仏之末葉以之為証文以数遍為本不可令遂往生之大業也次穴賢穴賢仍弁阿（在判）（『昭法全』による）
活字本所載書：『昭法全』、望月信亨編『法然上人全集』、『九

巻伝』3下（『法伝全』）、『十巻伝』5（『法伝全』）、『四十八巻伝』46（『法伝全』『浄土宗聖典』6）
参考文献：川瀬一馬編『お茶の水図書館蔵新修成簀堂文庫善本書目』（お茶の水図書館、1992）、峰島旭雄「無相文雄の『金剛宝戒章真偽弁』について」（『早稲田商学』150、1961）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。
「二箇条疑問事」は、諸伝記の中では、聖光が法然に尋ねた「二箇条の疑問」として出る。その内容は、1鏡像円融疑問、2金剛法戒疑問から成る。1は或る浄土宗の学者が「天台宗と浄土宗は同一の宗義である」と言い、またある天台宗の人は「天台宗と浄土宗は（『摩訶止観』にでる「鏡像円融の譬え」の如くであって）浄土宗を別宗として立宗することはできない」と言っているが本当か、という問いであり、2は或る浄土宗の学者が「浄土宗には、金剛宝戒が法然の口伝として伝えられている」ということの真偽はどうかという問いである。これらの疑問に対して法然は「源空全以如是事不申候、以釈迦弥陀為証、如然僻事所不申候也」というように、聖光の質問の内容を僻事として一蹴している。
なお、『昭法全』は成簀堂文庫本を定本にしているが、その成簀堂文庫本には「上件文証、為停止一念之念仏之僻見之義、法然聖人御在生事、書進二ヶ條之義、所賜御外題眼前也、(後略)」という一文がみられる。これによれば、「二箇条疑問事」は、一念義に対する批判を表す為であったことが伺える。
本書について『法然上人全集』・『仏書解説大辞典』では、法然の答を採って、法然述の「二箇条疑問勘付」として採録している。
お茶の水図書館成簀堂文庫本の紙背は「1228（安貞2）仮名法語」である。
作成者名：米沢実江子

二十五菩薩和讃

書名よみ：にじゅうごぼさつわさん
書名別名：二十五菩薩迎接讃、迎接讃
著者名：源信（？）
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：10c後半（？）-11c初頭（？）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、（未調査）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『恵全』1、『日仏全』125（『天台霞標』四編巻之三）、高楠順次郎・志田義秀・福井久蔵編『釈教歌詠全集』5（東方出版、1934）、高野辰之編『日本歌謡集成』4（東京堂出版、1960）、『国文東方仏教叢書』1-8、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）
現代語訳書：八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）
参考文献：宝田正道『日本仏教文化史』（弘文堂、1967）、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）、多屋頼俊『和讃史概説』（「多屋頼俊著作集」1、法蔵館、1992）、多屋頼俊『和讃の研究』（「多屋頼俊著作集」2、法蔵館、1992）
解説：著者は不明（伝源信）。『天台霞標』（『日仏全』123、p.466）は「横川恵心僧都御作」として「二十五菩薩和讃」を所載し、『玄智録』（『日仏全』1、p.465）は「横川僧都著述」として「二十五菩薩迎接讃　十八首」をあげる。また永享8（1436）成立の聖聡『当麻曼陀羅疏』には「且是依恵心先徳迎接讃所記也」（『浄全』13、p.626）の記述がみられる。『往生要集』にも二十五菩薩はみられるが、それらは念仏者を平生に護持するものであり、臨終来迎の菩薩としては述べられていない。建長1年（1249）の奥書を有す後鳥羽院宸翰『無常講式』には「仰願観音勢至二十五菩薩普賢文殊四十一地賢聖、臨命終夕捧蓮台来草庵」と記されており、鎌倉時代初期には二十五菩薩来迎の思想が確認できるが、源信在世時には来迎の聖衆を二十五菩薩に特定する事例は確認できず、平安時代に作成された往生伝の来迎記述にもみられない。よって源信に仮託された後世の作と考えられる。
成立年代は不明。『国書』6（p.338）『仏解』8（p.304）、共に「寛和二（986）以後」とするが根拠は不明（『恵心僧都絵詞伝』巻中（『恵全』5、p.738）の「僧都この迎講の儀式を華台院にてはじめ給ひてより已来（中略）来迎和讃・二十五菩薩の和讃はその時つくらせ給ふ和讃なり」の記述によるか）。なお暦応1年（1338）成立の存覚『選択註解抄』には「山海恵経に云」（『浄全』8、p.524）として本和讃が引用されており、室町時代初期には既に流布していたものと考えられる。
内容は阿弥陀仏の来迎に随う二十五菩薩、一々の儀相を讃詠したもので62句（『恵全』所載本による。ただし末尾の「其仏本願力　聞名欲往生　皆悉到彼国　自致不退転」の偈文4句は除く）からなる和讃。
まず「帰命頂礼極楽の　五々の菩薩の御ちかひ　念仏受持のともがらを　臨命終に至てぞ　音楽異香の瑞をなし　むかへ給ぞ頼もしや」（『恵全』1、p.667）と二十五菩薩来迎の誓願を讃じ、次いで二十五菩薩各々の持物・行儀が1菩薩につき2句で讃じられ、最後に「ただねがはくば弥陀如来　弘誓の中の我等なり　五濁悪世につみふかし　あはれ超世の悲願にて　臨終正念親たり　来迎引接なし給へ」（『恵全』1、p.669）と、阿弥陀仏の願力による臨終正念・来迎引接が願われる。
二十五菩薩は『十往生阿弥陀仏国経』に見られるが、そこには各菩薩の持物・行儀は説かれておらず、本和讃が何れの経論に依ったのかは不明である。
作成者名：上杉智英

日本往生極楽記

書名よみ：にほんおうじょうごくらくき
書名別名：往生極楽記
異本書名：慶氏日本往生記、、日本往生記、日本往生伝
著者名：慶滋保胤
著者名よみ：よししげのやすたね
著者名別名：賀茂保胤、茂能、心覚、寂心、内記入道、内記上人、定潭
著者生没年：？-1002（長保4）
成立翻訳年：984（永観2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本

刊本
活字本
写本所在：1、天理図書館蔵本（1086（応徳3）、仁豪書写）
2、前田育徳会尊経閣文庫蔵本（鎌倉初期、書写者不明、湛睿手沢）
3、国立公文書館蔵本（1317（文保1）、書写者不明）
4、名古屋七寺蔵本（1180（治承4）、珍円書写）
写本奥書：1、同二十九日点〈如形〉了後可見直者也、以良本文等又可比交〈以上、朱筆〉／応徳三年（1086）八月九日於南勝房書之仁豪、尋往生極楽之行業欲励念仏往生、〈浄土［■］志而已〉
2、寛永元年（1624）五月十一日書写畢、同日一交了
3、〈古本云〉文保元年（1317）十月七日於尾張国中島郡、観音堂大門書写畢
4、治承四年（1180）七月二十九日午時許書了珍円、稲薗住太郎房也
刊本所在：1、寛文9（1669、東京国立博物館・京都大穎原文庫・大正大・東北大狩野文庫・日本大・名古屋大・竜谷大・東洋大、大阪女大・中京大・国文学研究資料館、高野山真別処・神宮文庫・大東急文庫・多和文庫・お茶の水図書館成簀堂文庫・佼成図書館・浄照坊・無窮会神習文庫）
2、延宝2（1674、大正大（所在不明））
3、刊年不明（中京大・名古屋大・多和文庫・お茶の水図書館成簀堂文庫・陽明文庫・旧彰考館）
刊本の奥書刊記：1、寛文九年己酉（1669）初冬吉日、寺町誓願時前、安田十兵衛開板（未調査）／神雒書肆長尾平兵衛繍梓（未調査）／村上三郎兵衛（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：日本思想大系7『往生伝・法華験記』、『日仏全』107、『続浄』17、『群書類従』伝部、『日本往生全伝』（永田調兵衛、1882）、『平安詩文残篇』（「天理図書館善本叢書和書之部」57、天理大学出版部、1984）、広浜文雄「天理図書館蔵『日本往生極楽記』（一）（二）」（『山辺道』13・17、1967・1972）、宇都宮啓吾「前田育徳会尊経閣文庫蔵『日本往生極楽記』解説並びに影印」『鎌倉時代語研究』17（武蔵野書院、1994）、国文学資料館編『往生伝集』（「真福寺善本叢刊」2-7、臨川書店、2004）、『日本往生極楽記』（「尊経閣善本影印集成」41-2、八木書店、2007）、倉田邦雄「七寺蔵『日本往生極楽記』について―本文翻刻及び校異―」（『馬淵和夫博士退官記念説話文学論集』、大修館書店、1981）
参考文献：重松明久『日本浄土教成立過程の研究』（平楽寺書店、1964）、小林保治「日本往生極楽記」（古典遺産の会編『往生伝の研究』、新読書社、1968）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975）、志村有弘『往生伝研究序説』（桜楓社、1976）、平林盛得「中書大王と慶滋保胤―日本往生極楽記の補訂者―」（『説話文学研究』16、1981）
解説：著者は平安時代中期の文人で、菅原文時に師事し、文才をうたわれた。若くから仏道への志があったようで、康保1年（964）に文章道学生20人と比叡山学僧とで結成された勧学会の指導者の一人である。寛和2年（986）に出家して比叡山に上り、源信とともに勧学会を発展させた二十五三昧会を組織し、横川二十五三昧会の起請文を草している。しかし、比叡山には留まらずに、山を降りて諸国を巡歴したらしい。没年は『続本朝往生伝』に拠れば長徳3年（997）であるが、四十九日諷誦文（『本朝文粋』）から長保4年（1002）10月21日で、東山如意輪寺に於いて没したと考えられる。
　本書の成立については、「行基伝」付注によれば、出家以前に「記及び序」が既に草されていたらしい。その後中書大王（従来は兼明親王、平林により具平親王説が出される）に依頼して補筆、さらに中書大王が夢告により聖徳太子と行基の2伝を付加しようとしたが病のため出来なかったのを著者が書き入れたとある。また寛和1年（985）成立の『往生要集』に本書への言及があり、本書の最も新しい往生者が千観阿闍梨の永観1年（982）であるので、成立は永観1年から寛和1年頃と考えられる。
　本書は42話から成り、その配列順序は、1・2菩薩2人、3-27比丘27人、28・29沙弥2人、30-32比丘尼4人、33-36優婆塞4人、37-42優婆夷6人で、さらに身分や地域が考慮されている。また阿弥陀信仰、法華経信仰、密教信仰を兼修する諸行往生で、特に念仏と法華経との兼修が多い。序文によれば著者は、唐迦才『浄土論』や『瑞応伝』に影響を受けて、我が国の往生者の行業を記そうとしたらしい。我が国に於ける往生伝の嚆矢であり、後続の往生伝はもちろんのこと、『今昔物語集』にも34話が採録される（『大日本国法華験記』経由を含む）など、その影響は大きいものがある。
作成者名：坪井直子

日本感通伝

書名よみ：にほんかんつうでん
書名別名：日本三宝感通集、三宝感通集
著者名：珍海
著者名よみ：ちんかい
著者名別名：禅那院珍海、珍海已講、越前已講、越洲
著者生没年：1092（寛治5）-1152（仁平2）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：10
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『長谷寺霊験記』（『日仏全』118）、『聖徳太子平氏伝雑勘文』（高楠順次郎・望月信享編輯『聖徳太子御伝叢書』（金尾文淵堂、1942））
参考文献：永井義憲「珍海の日本感通伝　―散佚説話集研究のうち―」（永井義憲『日本仏教文学研究』3、新典社、1985）
解説：仏法僧の三宝に関する日本の霊験談を集録したもの。現在のところ確認されているのは逸文のみ。『長谷寺霊験記』に1ヶ所、法空撰『聖徳太子平氏伝雑勘文』（全6巻、1314（正和3）成立）に3ヶ所、それぞれ観音菩薩・聖徳太子に関する説話が引用されている。特に後者は『聖徳太子伝暦』の注釈書に収められた逸文のため、太子伝に関する説話が採取されている。珍海はそれらの伝承に対し独自に経典・註疏・異伝・異解を広く用い考証を加えている姿勢に三論の学匠としての卓異さが垣間見えるとの評価がある。本書の分量は全10巻であったとの推測があり、当然ながら観音菩薩・聖徳太子の他に諸仏・諸菩薩等の霊異談が収められていたと考えられる。
作成者名：能島覚

如来二種回向文

書名よみ：にょらいにしゅえこうもん
書名別名：二種回向文、往相還相回向文類、往還回向文類
異本書名：往相回向還相回向文類
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：12c末-13c半ば

成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（鎌倉期、真仏）
〈影印版〉:『影印高田古典』1（真宗高田派宗務院、1996）
2、三河上宮寺蔵本（室町初期、書写者不明）
〈影印版〉:小山正文『親鸞と真宗絵伝』（法蔵館、2000）
3、竜谷大蔵本（未調査）
写本奥書：1、正嘉元年丁巳（1257）壬三月二十一日書写之
2、康元元丙辰（1256）十一月二十九日愚禿親鸞、八十四歳書之
3、（未調査）
刊本所在：1、宝暦7（1757、大谷大・竜谷大、『真宗遺法算彙』所収）
2、万延2（1861、未調査）
刊本の奥書刊記：1、宝暦七丁丑（1757）年四月吉日、浪速書舗心斎橋筋順慶町柏原屋清右衛門
2、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』83（No.2655）、『真聖全』2、『定本親鸞聖人全集』和文篇、『浄土真宗聖典－原典版－』、『真宗聖典』、『真宗史料集成』1、『高田古典』1、『原典校註真宗聖典』
現代語訳書：真継伸彦「如来二種回向文」（『現代語訳親鸞全集』3、法蔵館、1982）、石田瑞麿「如来二種回向文」（『親鸞全集』3、春秋社、1985）、山本和夫「往相回向還相回向文類」（『現代語訳親鸞全集』3、講談社、1974）、益田恵真「如来二種回向文（往還回向文類）」（『傍訳親鸞聖人著作全集』5、四季社、2001）、「如来二種回向文」（『浄土真宗聖典　三経往生文類　如来二種回向文　弥陀如来名号徳－現代語訳－』本願寺出版、2005）
参考文献：加藤智学「浄土三経往生文類と往還回向文類」（『仏教研究』4、1923）、生桑完明「高田古典の解説に対する批判に就て」（『高田学報』2、1934）、宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）、『影印高田古典』1（真宗高田派宗務院、1996）、小山正文「親鸞撰述の『浄土和讃』」（『親鸞と真宗絵伝』法蔵館、2000）
解説：浄土真宗の宗祖親鸞の著述。本書には真蹟本はなく、上宮寺蔵と専修寺蔵の二種類の写本が現存するのみである。上宮寺蔵本には「正嘉元年丁巳（1257）壬三月二十一日書写之」とあり親鸞84歳、専修寺蔵本には「康元元丙辰（1256）十一月二十九日」とあり親鸞85歳の撰述となるが、内容がほとんど同じである事などから、84歳撰述で専修寺蔵本はその書写ではないかと考えられる。
　本書には、まず最初に世親の『浄土論』（『往生論』）回向門を引用し、「この本願力の回向をもて如来の回向に二種あり。一には往相の回向、二には還相の回向なり」と、衆生の往相（往生浄土の相）も還相（還来穢国の相）も阿弥陀如来の回向であるとする真宗仏道の大綱を示し、往相回向・還相回向についてそれぞれ『無量寿経』の本願文、『如来会』の文言によりつつ解説している。本書は『浄土三経往生文類』広本の成立に影響を与えたと言われているが、『龍舒浄土文』を典拠として信心の行者を「弥勒菩薩とおなじ」と述べていることや、「他力には義なきをもて義とすと大師聖人はおほせごとありき」と法然教義について触れていることなどは、『浄土三経往生文類』広本には見られない特色である。
作成者名：藤田真隆

念仏往生義

書名よみ：ねんぶつおうじょうぎ
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半-13c初
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
写本奥書：1、『和語灯録』の項を参照
刊本所在：1、『和語灯録』所収（『和語灯録』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『和語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『高僧名著全集』4、『法然上人集』（「大日本文庫」仏教篇）、『和語灯録』の項を参照
現代語訳書：『和語灯録』の項を参照
参考文献：『和語灯録』の項を参照
解説：法然の言説とされるものを収録した文献。
　まずは念仏を称えても、疑心をもつ者は往生できないことを説く。その疑心に3例あるとする。第1に自分の罪が重いので念仏しても往生できないのではという疑心。第2に念仏するけれども、世事に忙しくあまり念仏する暇がないので往生できないのではという疑心。第3に念仏するけれども、その心が盛んでないので往生できないのではという疑心である。この3例の疑心をあげたのち、その対応が示される。
　まず第1の疑心に対する対応。罪障を滅するために念仏するのであるから、そのような疑心をもつ必要はないと説く。
　次に第3の疑心に対する対応。たとえ念仏する心が盛んでなくとも、念仏を称えようと思う心があるのは、その盛んな心の兆候である。念仏の功徳を積み重ねていけば、盛んな心は出てくるはずとする。
　最後に第2の疑心に対しては、世事に忙しいからこそ、念仏すべきであると述べる。
　以上の説示のあと、三心（至誠心・深心・廻向発願心）の解説が示される。まず至誠心とは往生を願い念仏をするにも、心の底から思って行ずることだとする。次に深心とは自身は罪悪の凡夫と信じ、阿弥陀仏は本願によりその罪悪の凡夫も必ず救い下さると信じることだと説く。次に廻向発願心とは修した善根を廻向して極楽に往生しようと願う心であると述べる。
　更にひたすら阿弥陀仏を頼んで念仏し、他の行をまじえてはならないと主張する。
　ただし念仏して往生できるからといって、悪業をはばかることさえないのは悪しきことと誡める。それはまさに仏教の掟に反するからであるという。
作成者名：角野玄樹

念仏往生綱要

書名よみ：ねんぶつおうじょうこうよう
著者名：智得
著者名よみ：ちとく
著者名別名：遊行三祖、中聖、中上人、量阿、量阿弥陀仏、他阿、他阿弥陀仏、他阿上人

著者生没年：1261（弘長2）-1320（元応2）
成立翻訳年：13c後半-14c前半
成立地：日本
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、元禄2（1689、竜谷大）
2、安永5（1776、国会図書館・大谷大・京都大・竜谷大、『三大祖師法語』所収）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、安永五丙申年（1776）八月、洛陽七條道場蔵版（未調査）
活字本所載書：『高僧名著全集』18（平凡社、1931）上、『日仏全』66（以下『三大祖師法語』所収）、『定本時宗宗典』上
参考文献：河野憲善『日仏全』解題、河野憲善『定本時宗宗典』解題、竹内明「知心修要の教育―時衆三祖智得の人間形成理念―」（『印仏研』41（21-1）、1972）
解説：遊行3祖智得が、念仏を修すべきであること、また念仏の考え方を示したもので、『三大祖師法語』8篇の内の一つでもある。
　著者の智得は加賀国堅田の生まれで、正応4年（1261）に真教の門下となる。嘉元2年（1304）に嗣法し、行化すること16年、その後無量光寺に入り翌年没した。
　本書は前半で聖道門の様々な教えを提示し、それらがいずれも教えのみありて、行じる人のない法門であるのに対し、浄土門の専称名号こそ、いかなる者も救われる教えであることが示される。
　ただし、内容的特色がより強く見られるのは後半である。後半は主として念仏について述べられるが、なぜ念仏は声に出すのかについて、この世の人は耳根が最利であり、一方、阿弥陀仏は風大を種字とするからであると述べる。また、弥陀の光明の摂取を受ければ、智慧が増長し、かえって自身が愚者であることが理解できて決定往生となるとする。
　更に、念仏を称えておれば、そこに四十八願と阿弥陀仏の兆載永劫の行が含まれるので「無願・無行」（の称名）を修すことになるとも述べる。そしてその称名を、造悪無碍とならないように留意しつつ、一生涯称え続けて、来迎を待つべしと説くのである。なお、その際、今の一念は過去・未来に渡るものであり、その一念で往生が決定するとしつつも、業報の理論からしても、また臨終・平生を不二とする立場からしても、その一念を相続してゆくことの重要性が強調される。
作成者名：坪井直子

念仏往生修行門

書名よみ：ねんぶつおうじょうしゅぎょうもん
著者名：聖光
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『四十八巻伝』46（『法伝全』p.301、逸文あり）、『聖光上人伝』（『浄全』17、p.387）、『帰命本願抄』（『大正蔵』83（No.2615）p.291）
参考文献：石井教道「鎮西教学研究序説」（『大正大学学報』3、1935）、青柳英珊『鎮西上人』（教学週報社、1932）、小西存祐「国師の著作」（柴田玄鳳編『三上人の研究』、三上人遠忌事務局、1935）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。
　本書は聖光の著作と伝えるが現存しない。『四十八巻伝』46の聖光伝の段には「かの制作の念仏往生修行門に云く」として「世の中の念仏者、故上人の御流とは申あひて侍れども、上人の御義にはなかりしことどもを、申みだり侍こそ、不便の次第に侍れ」と異義異説を唱える者のあることを嘆き、また「故上人弁阿にをしへ給いしは、善導の御心は、浄土へまいらんと思はん人は、必ず三心具足して、念仏を申べきなり」といって、三心具足の重要性を述べ、さらに法然上人より伝えられた三心の心得を語っている（『浄土宗大辞典』3より）。青柳英珊は「「勅修御伝」には「念仏往生修行門」という書物を著されたと言って、其大意が記してあるが、其内容を見れば、「念仏三心要集」と同物らしい点がある。或はこれは同じものであったであろう」（『鎮西上人』）としている。反対に小西存祐は「同書は、向阿上人の「帰命本願抄」に「念仏三心要集」と並べて一所にその名前が見えている。（中略）その題号にも見ゆるとほり、主として往生の起行に関することを述べられたもので、多分かの「念仏三心要集」の姉妹編であったと想像される。巻数なども明かではないが、恐らくまた一巻ぐらひのものであったかとおもふ。（中略）この「念仏往生修行門」は「念仏三心要集」と混同してはならない」と、「帰命本願義」の文を証拠として、青柳英珊とは反対の立場を主張している。
作成者名：米沢実江子

念仏往生伝

書名よみ：ねんぶつおうじょうでん
著者名：行仙
著者名よみ：ぎょうせん
著者名別名：行仙房
著者生没年：？-1278（弘安1）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉末期、書写者不明、残闕本）
写本奥書：1、（未調査）
活字本所載書：日本思想大系7『往生伝・法華験記』、『金沢文庫資料全書』4（神奈川県立金沢文庫、1974）、『念仏往生伝』謄写本（熊原政男編、1933）
参考文献：宮崎円遵「金沢文庫新出の往生伝」（『竜谷史壇』13、1934）、三谷光順「（金沢文庫新出）念仏往生伝（仮題）に就いて」（『専修学報』2、1934）、家永三郎『中世仏教思想史研究』（法蔵館、1947／改訂増補1955）、永井義憲「念仏往生伝の撰者行仙」（『日本仏教文学研究』古典文庫、1957／改訂版、豊島書房、1966）、熊原政男「金沢文庫蔵書解題・香厳頌　論語集解抄　念仏往生伝」（『金沢文庫研究』44、1959）、田嶋一夫「中世往生伝研究―往生伝の諸相と作品構造―（『国文学研究資料館紀要』11、1985）、浅見和彦「『念仏往生伝』から隆寛、そして慈円へ―東国文学史稿（四）―」（『文学』5-4、2004）
解説：金沢文庫より発見された往生伝で、首尾と中間を欠く残闕本。熊原政男氏が仮に名付けた書名「念仏往生伝」が、現在も通用する。
　編者は上野国山上（群馬県勢多郡）に住み、弘安1年

（1278）に入滅した行仙と推定され、『一言芳談』『祖師一口法語』に、行仙の法語が数条掲載され『元享釈書』や『沙石集』にその伝が収録される。真言系の念仏者であったが、専修念仏者となり法然門と交流したらしい。

現存する記事の中で最も新しい年紀が弘長二年（1262）であることと、行仙入滅の年とを併せて考えると、本書の成立は弘長二年（1262）以後弘安1年（1278）となる。

現存する部分は、24章から30章、34章から38章、45章から49章までの計17章17人である。編者が関東在住のためか、東国武士の往生者を多く撰集していて、東国武士と浄土教信仰の関わりが知られる。また36章「妙真尼伝」と45章「禅勝房伝」は、『法然上人伝記』（『九巻伝』）、『法然上人行状画図』（『四十八巻伝』）と共通するため、法然伝の研究にとって貴重である。

作成者名：坪井直子

念仏勧進縁起

書名よみ：ねんぶつかんじんえんぎ
著者名：慶泉
著者名よみ：けいせん
著者生没年：平安期
成立翻訳年：平安期
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1、p.353）、『蓮門録』（『日仏全』1、p.418）
解説：本書は現存が確認されておらず、内容は不明。永観（1033-1111）にも同名の著述があったことが『長西録』（『日仏全』1、p.353、「小山論文」p.236）から窺える。慶泉について『平安人名辞典』（p.423）は「関戸守彦氏所蔵文書」により東大寺の僧とする。また『中右記』大治4年（1129）5月20日の条には三井寺の僧として慶泉の名がみられる。
作成者名：上杉智英

念仏勧進縁起

書名よみ：ねんぶつかんじんえんぎ
著者名：永観
著者名よみ：ようかん
著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：11c後半-12c初頭
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）
解説：著者の永観については『往生拾因』の項を参照。

本書は散逸して伝わらない。『長西録』は慶泉に同じ書名の著述があったことを伝えている。
作成者名：能島覚

念仏偈

書名よみ：ねんぶつげ
著者名：覚超
著者名よみ：かくちょう
著者名別名：都率僧都、兜率僧都、都率先徳、兜率先徳、楞厳院先徳
著者生没年：960（天徳4）-1034（長元7）
成立翻訳年：10c末-11c初頭
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。ただし、本書の存在は『長西録』のみに挙げられており、本書の撰述そのものに検討が必要である。
作成者名：能島覚

念仏五悔講式

書名よみ：ねんぶつごげこうしき
著者名：尊道
著者名よみ：そんどう
著者名別名：尊道法親王
著者生没年：1332（元弘2・正慶1）-1403（応永10）
成立翻訳年：1362（貞治1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、西本願寺蔵本（南北朝期、尊道真筆本）
写本奥書：1、右式者祖師尊道親王真跡、可謂至宝者也、末弟二品［■］親王記之（本文と別筆）
活字本所載書：佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
参考文献：佐藤哲英「西方懺悔法に関する研究」（『竜谷大学論集』338、1950）、佐藤哲英『西方懺悔法－本文並に解説－』（竜谷大学一乗文化研究会編、1949）、浅田正博「念仏五悔講式」解説（『叡山浄土教の研究』百華苑、1979）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：尊道法親王は第18世青蓮院門跡・第145世天台座主である。『華頂要略』（『日仏全』128）には貞治1年（1362）、8月の条に「同月十一日為祖師報恩、始行念仏五悔講」と尊道が慈鎮和尚慈円の『法華五悔講』にならって念仏五悔の法則を製作したとある。そして、その講式の式文が本書に相当するという。

本書の内容は五悔（懺悔・勧請・随喜・発願・回向）を主体とした念仏行道の式次第であって、表白には慈覚大師門流として念仏懺法を行う発意が述べられている。この講式の修行期間は他の西方懺法にみられるような7日間を一期とするのではなく、導師・式衆により執り行われる一座の行法へと短縮されている。

なお本書には青蓮院蔵『西方懺悔法』の別出本という性格もあり、弥陀懺法の流行をあらわす文献としても貴重である。
作成者名：能島覚

念仏讃

書名よみ：ねんぶつさん
著者名：永観
著者名よみ：ようかん
著者生没年：1033（長元6）-1111（天永2）
成立翻訳年：11c後半-12c初頭
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）、乾克己『中世歌謡の世界』（近代文芸社、1992）、乾克己「『往生講式』と仏教歌謡」（『金沢文庫研究』274、1985）、乾克己「往

生講式研究序説」(『和洋女子大学紀要（文系編）』28、1988)
解説：著者の永観については『往生拾因』の項を参照。
　本書は散逸して伝わらない。小山本『長西録』では作者不詳として扱っている。
　その一方で、『往生講式』の後代への影響を考証した研究によると、その式文の影響が『撰集抄』『宝物抄』『方丈記』『平家物語』『愚迷発心集』などの説話・物語・法語に認められるが、両者は直接的な相関関係ではなく、むしろ、その影響はそれらの間に介在するある和讃によってなされていることが想定でき、それは『往生講式』の式文を七五調の和讃に整えた作品と考えられるという（乾克己）。本書がそういった和讃とはにわかに特定できないが、永観作の阿弥陀讃文の存在を示唆する指摘としては注目に価する。『往生講式』の項を参照。
作成者名：能島覚

念仏三心要集

書名よみ：ねんぶつさんじんようしゅう
書名別名：鎮西宗彙三心要集
著者名：聖光
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立翻訳年：1231（寛喜3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、元禄7（1694、大谷大・大正大・仏教大・竜谷大）
2、寛延4（1751、大正大）
3、寛政4（1792、国会図書館・大谷大・大正大・仏教大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『浄全』10
参考文献：小西存祐「国師の著作」（柴田玄鳳編『三上人の研究』、三上人遠忌事務局、1935）、恵谷隆戒「宗義顕彰・鎮西、記主著作解題」（『浄全』10）、金岡秀雄他編『日本仏教典籍大辞典』（雄山閣、1986）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。
　本書は、「授手印に曰く」「名義集に曰く」等とあることから『末代念仏授手印』『念仏名義集』制作以降に著されたもので、制作の意図については、本書に「弟子弁阿弥陀仏ハ故法然上人ヨリ如此種種念仏ノ法門を受伝テ候也日本国ノ一切ノ人人ヲ奉助ンカ為ニ年七旬ニ成テ最後ノ化導ト存ジテワナナク注シ置候也」とあることから、最後の化導のために70才になって執筆したものであることがわかる。内容は、法然門下の意義邪説に対して、法然上人の正しい安心起行のおもむきを記したものであり、とくに三心の問題について詳述する。本書の後半には「師曰く」として弁長の詞を載せているので、後半は後人による追加と考えられる。
作成者名：米沢実江子

念仏三昧記

書名よみ：ねんぶつざんまいき
著者名：慶運
著者名よみ：けいせん
著者名別名：百光房慶運
著者生没年：993（正暦4）-1064（康平7）
成立翻訳年：11c
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1)、(「小山本」)
解説：本書は散逸して伝わらない。
　その著者に関しては『長西録』の本書の細注に「三井」とあることからして園城寺の僧侶とみられている。ところが『長西録』の『日仏全』本と小山本の間では互いに著者が異なり、日仏全本は「慶運」とするのに対し、小山本は「慶暹」とする。だが、平安期に「慶運」という寺門僧は見当たらない。したがって、本書は摂関期に活躍した慶暹のものといえるだろう。
　慶暹は百光房とも号し、源輔親の養子である。師には明筆・慶祚らがいる。園城寺十月会をはじめとした法会でその活躍がみられる。康平2年（1059）の仁王経供養の御八講では結願の講師を勤め、その賞により権少僧都となった。また、歌人でもあり、勅撰和歌集に数首の歌が収められている。朝暮に『観経』を読誦し、臨終の夢には常に弥陀仏を拝したという（『三井往生伝』）。
　『長西録』の異本の相違により、本書の著者が異なる。まず、「念仏三昧記一巻　慶運三井」（『日仏全』1）という記述に従う「慶運」の場合と「念仏三昧記一巻　慶暹三井」（小山正文「寛永21年本『浄土依憑経論目録』」『同朋大学論叢』62、1990）という記述に従う「慶暹」の場合がある。まず「慶運」とするのは『仏書解説大辞典』8があり、そこから孫引きした『国書総目録』6、『国書著者別』、また『昭和現存天台書籍総合目録』、『日本天台宗典目録』にも確認できる。これらに対して「慶暹」を「念仏三昧記」の著者とするのは「小山論文」の『長西録』のみで、目録には「念仏三昧記一巻　慶暹三井」と記載がある。そこで著者名の次に掲げられている「三井」という注の条件を満たすものと想定した場合、両者のうちでは「慶暹」が該当する。すなわち平安中期の寺門系の僧侶「百光房前律師慶暹大和尚」（『三井高僧記』）であることが判明する。したがって、「小山論文」の『長西録』の記述に従い、「念仏三昧記」の著者は園城寺の「慶暹」とする。
作成者名：能島覚

念仏三昧記

書名よみ：ねんぶつざんまいき
著者名：行円
著者名よみ：ぎょうえん
著者名別名：唐房法橋、源国輔
著者生没年：986（寛和2）-1047（永承2）
成立翻訳年：10c末-11c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：小松茂美「図版阿字義解説」、松原茂「経典絵巻の種々相」（『続日本絵巻大成』10、中央公論社、1984）、築島裕「古訓点資料に現れた十一、十二世紀の仏教諸宗教学の交流」（『後期摂関時代史の研究』吉川弘文館、1990）、

松本光隆「天台宗寺門派における金剛界儀軌の訓読について」(井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開 』(「研究叢書 」116 、和泉書院、1992))、『図書寮本類聚名義抄 本文篇・解説編』(勉誠社、1976)、築島裕『平安時代訓点本論考；研究篇』(汲古書院、1996)
解説：著者の行円については『唐房法橋消息』の項、参照。本書は散逸して伝わらない。
作成者名：能島覚

念仏三昧記

書名よみ：ねんぶつざんまいき
著者名：頼尊
著者名よみ：らいそん
著者名別名：被雲房頼尊
著者生没年：998（長徳4）-1064（康平7）
成立翻訳年：11c
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1)
解説：本書は散逸して伝わらない。
著者の頼尊は被雲房とも号し、権少僧都までになった。長暦3年（1039）の42歳の時に師の唐房法橋行円より大法灌頂を受け、その後、頼尋僧都に授法をしている（『寺門伝記補録』15)。また長元6年（1033）に行われた園城寺の十月会には問者としてその名を列ねている（『三井続灯記』)。
作成者名：能島覚

念仏者追放宣旨御教書集列五篇勘文状

書名よみ：ねんぶつしゃついほうせんじみぎょうしょしゅうれつごへんかんもんじょう
書名別名：念仏者追放宣状事
異本書名：念仏追罰五篇
著者名：日蓮
著者名よみ：にちれん
著者名別名：是聖房、蓮長、立正大師
著者生没年：1222（貞応1年）-1282（弘安5）
成立翻訳年：1259（正元1）
成立地：日本
所収文献名：録内御書
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
刊本
写本所在：1、千葉県松戸市平賀本土寺蔵本（「平賀本録内遺文」、1531（大永7）-1532（大永8)、本土寺日遊発願、勝妙房日信写)
2、大谷大蔵本
写本奥書：1、(未調査)
2、(未調査)
刊本所在：1、東北大（『御書録内』36)
刊本の奥書刊記：1、(刊記なし)
活字本所載書：立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮上人遺文』(身延山久遠寺、1952)、加藤文雄編『日蓮上人御遺文』(1962)、小松邦彰編『日蓮上人全集』(春秋社、1992)、日蓮宗全書出版会編『日蓮聖人全集』(須原屋書店、1914)
参考文献：橋本正雄『録内啓蒙』下（本山本満寺、1975、p.814)、戸頃重基・高木豊校注日本思想大系14『日蓮』(1970)、高木豊「遺文の写本について」(『大崎学報』125・126)、中條暁秀『日蓮宗上代教学の研究—金綱集の研究—』(平楽寺書店、1996)
解説：日蓮は12歳で天台宗清澄寺に登り、16歳で出家、1238（嘉禎4）頃より鎌倉に遊学し、21歳の時比叡山にて俊範に指事。32歳で比叡山より清澄寺に帰り日蓮と名乗る。この頃から「正法である『法華経』に帰せよ」と伝道を始め、他宗の信奉者から迫害を受けることとなる。また為政者に対しても数度にわたって陳状を提したが受理されることはなく、度々流刑に処され、1282（弘安5）61歳で武蔵の国にて寂。
本書は、序文に「先賢の語を宣説し、称名の行を停廃せんと欲す。又愚懐の勘文を添え、すこぶる邪人の慢憧を倒さんとす」(加藤文雄編『日蓮聖人御遺文』、1904）とあるように、浄土宗が云うところの称名行を停止させることを目的としてこれまでに世に出た、浄土宗に対する宣旨・批判書等の集成である。第1奏状篇には「南都奏状云」(「謗人謗法事」「蔑妨霊神事」) と「山門奏状云」(「一向専修党類向背神明不当之事」「一向専修和漢之例不快事」) を挙げ、第2宣旨篇には「永尊堅者状」(1227（嘉禄3)) を引載、第3には御教書、第4には院宣、第5には下知状、等18通を収録。その中には、1227（嘉禄3）の隆寛流刑をはじめとする嘉禄の法難関係文書等も含まれている。この中、宣旨3通、御教書2通は、『金綱集』第5にも収められている。
作成者名：米沢実江子

念仏助成

書名よみ：ねんぶつじょじょう
著者名：禅嘉
著者名よみ：ぜんか
著者生没年：不明
成立翻訳年：？-12c
成立地：不明
漢和：和文
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1)
解説：著者の禅嘉の事跡は不明である。本書は散逸して伝わらない。なお、『昭和現存天台書籍綜合目録』には曼殊院蔵『念仏助成　依真言　一巻』(院政期書写）が挙げられている。本書に比定されるか。
作成者名：能島覚

念仏同法要記

書名よみ：ねんぶつどうほうようき
著者名：隆寛（？）
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『長西録』(『日仏全』1)
解説：隆寛撰述とされるが未詳。典籍名のみ『長西録』にみえる。
作成者名：伊藤茂樹

念仏宝号

書名よみ：ねんぶつほうごう
著者名：覚超
著者名よみ：かくちょう

著者名別名：都率僧都、兜率僧都、都率先徳、兜率先徳、楞厳院先徳
著者生没年：960（天徳4）-1034（長元7）
成立翻訳年：10c末-11c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。また、本書の撰述が覚超によるという伝承は『長西録』のみである。なお、『長西録』には本書と別に「旦那院僧正念仏宝号 一巻」とあるが、これは檀那院覚運の『念仏宝号』を指すものと考えられる。
作成者名：能島覚

念仏宝号

書名よみ：ねんぶつほうごう
書名別名：念仏宝号観心偈、旦那院僧正念仏宝号
著者名：覚運（？）
著者名よみ：かくうん
著者名別名：檀那僧正、檀那院僧正
著者生没年：953（天暦7）-1007（寛弘4）
成立翻訳年：10c末-11c初頭
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、坂本実蔵坊真如蔵蔵本（1528（享禄1）、未調査）
2、坂本実蔵坊真如蔵蔵本（1528（享禄1）、覚然書写、題号『念仏宝号観心偈』）
3、坂本西教寺正教蔵蔵本（1657（明暦3）、舜興書写、題号『念仏宝号観心偈』）
4、竜谷大蔵本（1861（文久1）、善勝書写、『善導大意』・『別時意趣』・『本覚讃』と合冊本）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
刊本所在：1、寛文3（1663、大正大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『日仏全』24
参考文献：田島徳音「念仏宝号」（『仏書解説大辞典』8）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、八木昊恵『恵心教学史の総合的研究』（永田文昌堂、1996）
解説：本書の流布本である『天台小部集釈』所収のものは3篇で構成される。第1に「念仏宝号」、第2に「観心偈」、第3に「念仏偈」である。このうち、第1の「念仏宝号」においては仏・菩薩の名号や『法華経』やその教説を明かす名号を宝号と称している。その仏・菩薩とは釈迦・阿弥陀仏、及び普賢・文殊・弥勒・観音・勢至・地蔵菩薩であり、これらの宝号はそれら仏・菩薩への帰命を説いている。そして、本来、これらの宝号は念仏の法会に際して唱えられる奉請段・敬白段に相当し、そういった宝号のみを取り集めたものという田島徳音の指摘がある。第2篇の「観心偈」は本データ『観心偈』の項を参照。第3篇の「念仏偈」とは七言一句46句と久遠実成の阿弥陀仏に帰依する宝号から成り立っている。その内容は阿弥陀仏に『法華経』の久遠の釈迦仏と同様の本迹の立場を認め、久遠実成の仏としての地位があるという。そして、天台の観心の説のとおり諸仏は同一の真如を基としていることから、金胎蘇の教主である大日如来に同ずるとして阿弥陀仏の徳を明かしている。
　親鸞筆の『二尊大悲本懐』（『親鸞聖人真跡集成』9、法蔵館、1974）には「壇那院覚運和尚曰」として第三篇の「念仏偈」の取意の句が引かれる。この点は本書の一部が鎌倉初期に覚運撰であるという伝承があった一例である。
　なお、本書には別名として「念仏宝号観心偈」・「旦那院僧正念仏宝号」がある。前者は本書が記載される目録に頻繁に使われる書名であり、その内容が『念仏宝号』全体を指すのか、「念仏宝号」と「観心偈」、各々を指している書名なのか判然としない。しかしながら、これらの3篇は元々、別の典籍であったものを、偶々、巻頭に「念仏宝号」の書名が記されていた為に全体の題号となったという田島の指摘や『長西録』（『日仏全』1）に記される「旦那院僧正念仏宝号一巻一丁」という書名と法量、並びに同目録では『観心偈』と別項していること、更に『本朝台祖撰述密部書目』（『日仏全』2）には「或」と注が付記し、「観心偈」・「念仏宝号」と別項している点などからすると『念仏宝号』とは本来は本書の第1篇のみを指してきたという可能性が強い。
作成者名：能島覚

念仏本願義

書名よみ：ねんぶつほんがんぎ
書名別名：選択本願念仏集名体決並念仏本願義
著者名：長西
著者名よみ：ちょうさい
著者名別名：覚明房長西、覚明、九品寺
著者生没年：1184（元暦1）-1266（文永3）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、浄土宗宗典刊行会蔵本（所在不明）
2、大正大蔵本（所在不明）
3、吉川澤誠師蔵本（所在不明）
4、黒田成勝氏蔵本（江戸期、所在不明）
写本奥書：1、正本云、正安二庚子年（1300）閏七月四日於鎌倉浄光明寺慈光院書写畢、同五日一校、金沢称名寺第二世湛睿在判（『浄全』による）
2、（不明）
3、（不明）
4、（不明）
活字本所載書：『浄全』8
参考文献：小西存祐「『選択本願念仏集名体決』解題」（『浄全』21、1934）、石井教道『選択集之研究・注疏篇』（誠文堂新光社、1945）、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』下（大東出版社、1977）、吉田淳雄「『念仏本願義』について」（『仏教大学総合研究所紀要別冊・浄土教典籍の研究』、2006）
解説：『選択集』に対する一種の註釈書。『選択集』第3章段における、諸行は本願でない旨の説示を、諸行本願義の立場より会通しようとしたもの。
　本書の著者について、一般には長西とされているが根拠は曖昧であり、長西の門弟である念空道教の著ではないかとの推測もある（石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』下）。
　本書には刊本は伝わっておらず、写本に関しても現在のところ全てその所在は不明である。したがって現状で披見できるのは、『浄全』8所収の活字本のみとなる。なお「写本所在」の項の1-3は『浄全』初版附録の冊子によって、4は石井教道『選択集之研究』註疏篇によって、それぞれそ

の存在を知ることができたものである。
作成者名：吉田淳雄

念仏名義集

書名よみ：ねんぶつみょうぎしゅう
書名別名：和字念仏名義集
著者名：聖光
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立地：日本
巻数：3
漢和：和文
写本等の存欠：刊本
刊本所在：1、寛文8（1668、大谷大・京都大・大正大・東洋大・仏教大・竜谷大）
2、寛延4（1751、大正大・東洋大・仏教大、『和字念仏名義集』）
3、寛政4（1792、大谷大・竜谷大（2巻1冊）・仏教大・無窮平沼文庫（1冊））
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『国文東方仏教叢書』2輯3巻、『浄全』10
参考文献：小西存祐「国師の著作」（柴田玄鳳編『三上人の研究』、三上人遠忌事務局、1935）、金岡秀雄他編『日本仏教典籍大辞典』（雄山閣、1986）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。
　本書は、成立年代は不明であるが、本書中に「歳七十にまかり成りて候身の目も見えず手もわななき候」とあり、また『念仏三心要集』（1231）に引用されていることから、『念仏三心要集』以前の成立で、著者70才（1231（寛喜3））頃の作と思われる。内容は、上巻は主として五種正行を説き、中巻では三心と三心具足について説明する。ここでは三心具足にちなんで法然上人滅後において異義が競い起こったために、それを破斥する。下巻では、四修、五念門、三種行儀などを平易に解説している。また下巻末に、法然上人滅後の門下の異義の続出（一念義、西山義、寂光土義等）について、「全ク故法然上人ハ仰セラレ候ハザリシ也」としていることから『末代念仏授手印』と同様にこれらの異義に対して法然上人の正義を伝えるために書かれたものである。ただし『末代念仏授手印』では浄土宗の義と行が体系化して述べられているが、本書では立てられた項目についての平易な解説となっている。
作成者名：米沢実江子

念仏滅罪因縁略鈔

書名よみ：ねんぶつめつざいいんねんりゃくしょう
著者名：済暹
著者名よみ：さいせん
著者名別名：仁和寺済暹僧都、仁和寺済暹律師、南岳房僧都、暹僧都
著者生没年：1025（万寿2）-1115（永久3）
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『諸宗章疏録』（『日仏全』1）
参考文献：櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の済暹については『観無量寿経中略要問答抄』の項を参照。
作成者名：能島覚

破悪義証文

書名よみ：はあくぎしょうもん
書名別名：画西方浄土記
著者名：不明
著者生没年：13c頃
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉中期、書写者不明、忍性手沢本、中欠）
写本奥書：1、（奥書なし）
活字本所載書：金沢文庫『金沢文庫資料全書』浄土篇1（「金沢文庫資料全書」4、県立金沢文庫、1980）
参考文献：金沢文庫『金沢文庫資料全書』浄土篇1（「金沢文庫資料全書」4、県立金沢文庫、1980）、日置孝彦「忍性の浄土教思想に関する一資料 〈画西方浄土記〉の問題をめぐって」（『金沢文庫研究』225、1971）、太田次男「金沢文庫保管 古鈔本所引の白氏詩文について（上・中・下）〈画西方浄土記〉を中心にして」（『金沢文庫研究』230・233・236、1971-1972）
解説：本書の正しい書名は「破悪義証文」である。従来の「画西方浄土記」とは本書引用の『楽邦文類』所収の白居易による浄土詩の名称のこと。唯一の写本は忍性の手沢本とされるが、従来考えられてきた極楽寺忍性ではなく、良忠門人の忍性であるという見方が太田氏によって示されている。
　内容は『楽邦文類』2文、『往生要集』4文、『木槵経』『大智度論』『譬喩経』それぞれ1文ずつを収める短篇の証文であり、主として念仏の功徳を強調する要文を連ねるという構成になっている。これらのうち、『往生要集』所引の『般舟三昧経』『観仏三昧海経』と『木槵経』への注目は善導撰『観念法門』の引用が念頭に置かれているものと考えられ、更に良忠の『観念法門』講述書のそれと軌を一にする点も注目されている。そのような点より本書の撰述時期と成立環境は建長6年（1254）以降の良忠『観念法門』講述の周辺であると推定される。
　ところで本書に引用される『楽邦文類』は泉涌寺俊芿の請来以降、法然門下の幸西・弁長・親鸞・長西・良忠などによって注目されるが、そのうちの白居易の詩文である白氏詩文に対して良忠は訓読の用例や故実の例示を明らかにする場合、他の祖師と比べて最も多用することに注意が向く。この白氏文集は平安期文学に最も影響を与えた中国の詩文集であるが、良忠の時代にも漢詩文の素養にそれがあったことが垣間見える。なお、本書引用の『楽邦文類』所収の『画西方浄土記』は『明義進行集』にも「白氏詩文」として引用され、鎌倉浄土教圏内にこの浄土詩が知られていたことがうかがえるのである。
作成者名：能島覚

破邪顕正義

書名よみ：はじゃけんしょうぎ
書名別名：鹿島問答
著者名：聖冏
著者名よみ：しょうげい
著者名別名：酉蓮社了誉、冏師、聖冏禅師
著者生没年：1341（暦応4）-1420（応永27）
成立翻訳年：1377（永和3）
成立地：日本
巻数：2
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、承応4（1655、京都大・大正大・東京大・立正大・船橋市立図書館・高野山金剛三昧院・神宮文庫）
2、文政2（1820、大正大（2巻1冊）・名古屋大神宮皇皇学館文庫（2巻1冊）・竜谷大（2巻1冊））
3、刊年不明（大谷大（1冊）・大正大（1冊）・東京大・東洋大哲学堂・竜谷大・日比谷加賀（1冊））
刊本の奥書刊記：1、承応四［■］未季仲春上旬鈴木太兵衛板行
2、（未調査）
3、此破邪顕正義者襄祖了誉上人所著也旧板甚麁誤字脱語不亦鮮矣今茲文政二年（1820）己卯秋九月二十七日丁上人四百回諱辰正再刻以凝報恩之万一矣回功徳普施法界共生安養斉悟法忍文政己卯季秋増上寺大僧正騰誉誌三縁山蔵板
活字本所載書：『浄全』12、『続群書類従』33輯上
参考文献：服部英淳「解説」（『浄全』12）
解説：神仏相関の立場から、浄土門の教義について述べた聖冏37歳時の著作。本書はある設定を基に問答の記録形式をとって著されている。
　それは、聖冏が常州鹿島神社に参詣し、社頭安居寺に逗留の折の夕刻、若い女性の様相をした老女が神前で弥陀名号を称え始める。次いでそこに醜老翁が現れ、『唯識三十頌』を誦し始める。この2人の間で神仏関係に関しての、また、念仏行者に関する世間から誤解や非難について、女性が問い老翁が答えるというものである。
　その構成は、(1) 鹿島大明神縁起之事（日本開闢之事・遘合之事・神前鳥居の事・忌返矢之事・旅始鹿立之事）、(2) 鹿島大明神御本地之事、(3) 念仏行者可誡神明参詣義乎之事、(4) 念仏行者不可祈現世福楽之事、(5) 限往生一門何偏令欣慕乎之事（卞和玉之事）、(6) 於得悟人奇特有無之事（融禅師座禅之時百鳥供百味之事・膺禅師座禅之時諸天供華之事・外道与仏子依無生問答害仏子之事・成覚房円戒之至極奉問空師之事）、(7) 於十方浄土中西方易行道之事、(8) 夢窓国師以説教多少判難易二道之事（宗有三義之事）、(9) 以聖徳太子自二菩薩専可令安置乎之事、(10) 以本迹高位聖徳太子可仰本尊之事（天照大神不見出家因縁之事・応神天皇八幡之垂迹之事・空師先祖光公本地観音之事・聖徳太子誕応日本因縁之事）、(11) 念仏行者精進潔斎或重数？云自力之事、(12) 念仏行義三種之事、(13) 躍念仏行義背文義之事（三衣之事）、(14) 日蓮法師指於念仏難無間業之事（心行禅師依破法之罪堕地獄之事）、(15) 夢窓国師以浄土判属小乗之事、(16) 有相人者不知実体故不可往生乎之事、(17) 明九品差別故可非一乗世界之事、(18) 常此處見奉何人不覚等之事、となっている。
　内容は多岐に渡るが、仏本神迹の立場から神仏関係を把握し、また禅門や日蓮宗から浄土宗に向けられた非難への論駁等、聖冏における諸教融和の立場からの浄土門優越の主張や当時の浄土宗を取り巻く状況への積極的な対応が看取される。
作成者名：東海林良昌

八塔和讃

書名よみ：はっとうわさん
書名別名：八塔讃
著者名：源信
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：10c後半-11c初頭
成立地：日本
漢和：和文
散逸文献の文献名出典：『諸宗章疏録（謙順録）』（『日仏全』1、p.146）、『日本国天台宗章疏目録（日本天台録）』（『日仏全』1、p.265）、『玄智録』（『日仏全』1、p.465）、『本朝台祖撰述密部書目（台祖密目）』（『日仏全』2、p.241）、『山家祖徳撰述篇目集（龍堂録）』（『日仏全』2、p.274）、『大日本国法華経験記』（日本思想大系7『往生伝・法華験記』、p.160）
参考文献：近藤喜博「円寂塔和讃」（大和文化研究会『大和文化研究』10-7、1965）、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）、多屋頼俊『和讃史概説』（「多屋頼俊著作集」1、法蔵館、1992）、多屋頼俊『和讃の研究』（「多屋頼俊著作集」2、法蔵館、1992）、鈴木佐内『仏教歌謡研究』（近代文芸社、1994）
解説：本書は現存しないが、書名が諸目録に見られ、また『法華験記』源信伝に「八塔の倭讃を造り出して」（日本思想大系7『往生伝・法華験記』、p.160）とあることから、源信に『八塔和讃』の著述があったことが伺える。
　成立年代は源信在世時（942（天慶5）-1017（長和6））となるが、仮に源信に仮託されたものとしても『法華験記』成立時（長久1年（1040）-寛徳1年（1044））には既に成立していたことが知られる。内容は不明。『八塔和讃』という書名から推測すれば『八大霊塔名号経』『八大霊塔梵讃』『大乗本生心地観経』等に記される釈迦の霊蹟である八塔（浄飯王宮生処塔・菩提樹下成仏塔・鹿野園中法輪塔・給孤独園名称塔・曲女城辺宝［■］塔・［■■■］山般若塔・［■］羅衛林維摩塔・娑羅林中円寂塔）に関するもので、釈迦一代の教えを讃詠したものか。
　多屋頼俊は『四座講法則（常楽会法則）』所収『舎利和讃』（『日本歌謡集成』4所収『舎利講式和讃』）が『八塔和讃』の一部分（娑羅林中円寂塔に関する箇所）ではないかと推測されており（『和讃の研究』p.320）、同内容の和讃は長寛2年（1164）10月18日の奥書を有する『舎利供養式』にも『円寂塔和讃』という名で所収される（近藤喜博「円寂塔和讃」、『大和文化研究』10-7）。また鈴木佐内は多屋頼俊の説を承け、『仏生講伽陀和讃』（『続日本歌謡集成』1所収）も『八塔和讃』の一章（浄飯王宮生処塔に関する箇所）ではないかと述べている（『仏教歌謡研究』p.275）。
　なお『舎利和讃』（『舎利講式和讃』『円寂塔和讃』）『仏生講伽陀和讃』は共に一節が『梁塵秘抄』（日本古典文学大系73『和漢朗詠集・梁塵秘抄』p.375・384）に収録されていることが指摘されており（多屋頼俊「移動する和讃」、p.321、新間進一『続日本歌謡集成』1）、平安時代後期には成立していたと考えられる。
作成者名：上杉智英

播州法語集

書名よみ：ばんしゅうほうごしゅう
著者名：一遍
著者名よみ：いっぺん

著者名別名：智真、一遍上人、遊行上人、捨聖、円照大師、証誠大師、河野時氏（通秀、通尚とも）
著者生没年：1239（延応1）-1289（正応2）
成立翻訳年：14c
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉末期-南北朝期、書写者不明、残闕本）
2、神奈川清浄光寺蔵本（室町後期、書写者不明、残闕本）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
刊本所在：1、安永5（1776、東洋大・竜谷大・日比谷図書館）
刊本の奥書刊記：1、敬損貲刻此播州法語集一巻、摂州兵庫津＜真光寺洞天、長楽寺義円＞、安永五丙申年（1776）八月廿三日（未調査）
活字本所載書：『定本時宗宗典』上、日本思想大系10『法然・一遍』、武田賢善編『一遍上人語録付播州法語集』（永田文昌堂、1961）、『一遍上人語録付播州法語集』（岩波文庫、1985）、橘俊道・梅谷繁樹『一遍上人全集』（春秋社、1989）
現代語訳書：橘俊道・梅谷繁樹『一遍上人全集』（春秋社、1989）
参考文献：宮崎円遵「金沢文庫所蔵播州法語集に就て「一遍上人語録」「播州問答集」の成立に関する一考察」（『中世仏教と庶民生活』、平楽寺書店、1951）、今井雅晴『中世社会と時宗の研究』（吉川弘文館、1986）、梅谷繁樹「『播州法語集』の法語編纂についての試論」（『時衆文化』19、2009）
解説：中世において一遍の法語集の中心となる系統で、『一遍上人語録』よりも古態を残す。安永5年（1776）刊本の序に、播磨国弘嶺八幡宮における一遍の説法を、門弟の持阿（播州行化の際に入門。播州葛磨津の人とされる）が聞き書きし、それが転写され伝えられてきたとあるように、主に弘安9年（1286）・弘安10年（1287）頃の播磨化益中の一遍の法語を収録する。そのためか、『一遍聖絵』・『遊行上人縁起絵（一遍上人絵詞伝）』所収の法語とは重複せず貴重である。
　安永5年（1776）刊本の祖本とみられる南北朝期頃写の金沢文庫蔵本は、巻首や巻尾を欠く上に錯脱もある残闕本ではあるが、現存する一遍の法語集の中では最も古く73条の法語を存する。また清浄光寺にも約19条を収録する室町後期書写の残闕本がある。安永5年（1776）刊本は遊行第43代尊如が真光寺の洞天に命じて校訂刊行させたもので、84条の法語を収録しており、その内83条は『一遍上人語録』と重なるが、『一遍上人語録』が安永刊本の祖本の法語を、配列を変え収録したらしい。
作成者名：坪井直子

播州問答集

書名よみ：ばんしゅうもんどうしゅう
著者名：一遍
著者名よみ：いっぺん
著者名別名：智真、一遍上人、遊行上人、捨聖、円照大師、証誠大師、河野時氏（通秀、通尚とも）
著者生没年：1239（延応1）-1289（正応2）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、元禄1（1688、国会図書館・大谷大・東京大・竜谷大・東洋大・金沢大・仏教大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『定本時宗宗典』上、『高僧名著全集』18
参考文献：宮崎円遵「金沢文庫所蔵播州法語集に就て「一遍上人語録」「播州問答集」の成立に関する一考察」（『中世仏教と庶民生活』、平楽寺書店、1951）、橘俊道・梅谷繁樹「解説」『一遍上人全集』（春秋社、1989）
解説：近世に入って最初に刊行された一遍の法語集で、中世に流布した『播州法語集』のような和文体の法語集を、漢文体に改変したものらしい。貞享5年（1688）に量光と円明が、当時流布していた法語集を、他の法語集や教義書等を用いて訂正し、32条の問答体に編纂し直して出版した。
作成者名：坪井直子

般舟讃私記

書名よみ：はんじゅさんしき
書名別名：般舟讃記
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿弥陀仏、然阿、記主禅師
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1276（建治2）頃
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、宝永6（1709、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、宝永六年龍集己丑孟（1709）夏上六之日、沙門良仰謹識
活字本所載書：『浄全』4
解説：本書は善導撰述の『般舟讃』1巻の注釈書である。全体を2段に分け、はじめに「依観経等名般舟三昧行道往生讃」という『般舟讃』の具題を解説し、次に『般舟讃』本文の解説を行う。その際本文を更に前序・正讃・後序に分類し、それぞれに随文解釈を加えている。広く大蔵経の中から経文を援引しつつ巨視的に浄土教を分析していく良忠の姿勢が現れているといえる。撰述年代は不明であるが、善導の五部九巻の注書である『法事讃私記』『観念法門私記』『往生礼讃私記』は建治2年（1276）ごろにほぼ同時に撰述させていることからして、あるいは本書もこの時期の成立といえるかもしれない。なお宝永6年（1709）の刊本は良仰による冠註校訂本である。なお本書は良忠による科段にしたがい、基本的には逐次釈によって解説されている。
作成者名：斉藤隆信

般舟讃私記見聞

書名よみ：はんじゅさんしきけんもん
著者名：聖聡
著者名よみ：しょうそう
著者名別名：酉誉上人、酉師、酉公、聡師
著者生没年：1366（貞治5）-1440（永享3）
成立翻訳年：14c末-15c前半
成立地：日本
巻数：1

漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、寛政2（1790、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、御書物所、澤田吉左衛門 赤井長兵衛（なお、總本山華頂知恩教院藏版目録（寛政2）が印刷されている）
活字本所載書：『浄全』4
解説：もと武家に生まれた聖聡上人は幼いころ密教を学んでいたが、浄土宗第八祖聖冏の教えを聞いてからは念仏法門に帰依するようになった。後に増上寺を創建し、宗侶養成や著作活動を通して宗門の興隆に貢献した。
　聖聡は三祖良忠上人が著した善導の行儀分の私記に対して、さらに末書を残している。それが『法事讃私記見聞』『観念法門私記見聞』『般舟讃私記見聞』の三書である。
　本書は基本的には良忠の『般舟讃私記』1巻にある語彙の注釈書であり、その採用された約40の語彙の多くが浄土教の用語ではなく、通仏教用語や一般漢語であり、聖聡の博学な見識から要領よく簡潔な解説が加えられている。
　なお本書は序文や奥書がなく、撰述年代や撰述背景などはすべて不明である。
作成者名：斉藤隆信

般舟三昧経観念阿弥陀仏

書名よみ：はんじゅざんまいきょうかんねんあみだぶつ
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：11c-12c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：佐藤哲英『念仏式の研究』（百華苑、1972）
解説：本書の名は『長西録』（『日仏全』1）のみに挙げられる。散逸して伝わらない。佐藤哲英は天台大師の『摩可止観』に説く常行三昧に関連する著述であると推察する。
作成者名：能島覚

秘蔵記

書名よみ：ひぞうきしょう
著者名：静遍
著者名よみ：じょうへん
著者名別名：禅林寺法印、心円房
著者生没年：1166（仁安1）-1224（貞応3）
成立翻訳年：12c後半-13c初頭
成立地：日本
巻数：10
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『続真言宗全書』15
参考文献：橘信雄「興教大師と平安浄土教」（『興教大師八百五十年御遠忌記念論集　興教大師覚鑁研究』春秋社、1992）、那須一雄「静遍と法然浄土教」（『印仏研』106（53-2）、2005）、熊田順正「静遍〈続選択文義要鈔〉における阿弥陀仏の仏身仏土観について」（『印仏研』106（53-2）、2005）、池要「静遍の念仏思想」（『竜谷大学大学院仏教学研究室年報』2、1986）、池要「静遍僧都の研究」（『竜谷大学大学院紀要』8、1987）、藤原猶雪「般舟讃現流史料としての続選択文義要鈔」（『仏教研究』2（1-2）、1920、同『日本仏教史研究』大東出版社、1938／再採　一の丸出版、1974）、石田充之「密教系浄土願生者静遍僧都の浄土教的立場」（『竜谷大学論叢』336、1949）、末木文美士『鎌倉仏教形成論』（法蔵館、1998）、硲慈弘『日本仏教の開展とその基調』（下、三省堂、1948）
解説：著者は、覚鑁以降の真言宗における念仏思想の確立に大きな役割を果たした。明恵の弟子筋であり、貞慶の弟子であったので、当初、法然浄土教の批判を考えていたが、法然の没後、その弟子の隆寛や証空から称名念仏の奥義を聞いて改心し、名を釈心円と改め、『続選択文義要鈔』を著した。これは法然の『選択本願念仏集』を補うというものである。その後も真言の立場を保ちながら、法然浄土教に帰依し、その門下と交わり、『選択集』の講義をも行った。また善導が般舟三昧の行法を記した『依観経等明般舟三昧行道往生讃』（『般舟讃』。法然未見）を仁和寺宝金剛院の経蔵より発見し、以降、同讃が流布したといわれる。彼の教学は、三点説・秘密念仏・多法界説・一乗経劫論・大釈融合説など多岐にわたり、当時の真言教学を再構築したものである。なかでも三点説・秘密念仏に特徴が見られる。三点説は理・智・事の具足した仏身を教主とするものであり、身語意の三密や仏蓮金の三部とも符号させる解釈を行った。
　本著は、静遍の口述を弟子の道範（1184-1252）が記録したものである。三重阿弥陀仏説を説いたものであり、顕密の経説を示した上で密教の立場からそれらを統合しようとしている。すなわち、（1）『悲華経』『無量寿経』所説の法蔵比丘が成仏した顕教の阿弥陀仏、（2）五智五仏の一つとして曼荼羅において西に位置する妙観察智の阿弥陀仏、（3）華蔵世界すなわち極楽世界であり、大日すなわち阿弥陀とされるところの阿弥陀仏、である。
作成者名：藤仲孝司

秘密念仏鈔

書名よみ：ひみつねんぶつしょう
書名別名：念仏鈔
著者名：道範
著者名よみ：どうはん
著者生没年：1184（元暦1）-1252（建長4）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：3
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、望月誓氏蔵本（京都東寺観智院旧蔵本）（明徳2（1391）、書写者不明、阿弥陁三帖、阿巻墨付二十九丁）

2、和歌山高野山宝城院蔵本（慶長11（1607）、宗賢書写、上中下三巻、上巻表紙とも十九丁）
3、京都持明院蔵本（室町末期、書写者不明、一冊、上巻墨付十八紙）
4、神奈川金沢文庫蔵本（鎌倉期、書写者不明、零本、上巻巻首から四紙のみ）
5、滋賀叡山文庫蔵本（元和2（1616）、俊書写、一冊）
6、京都東寺宝菩提院三密蔵聖教本（鎌倉期、書写者不明、阿弥陀三帖）
写本奥書：1、（弥巻末尾）明徳二年（1391）十月　日一部三帖感得之（別筆）加修輻了（梵字四つ）
2、（上巻）慶長十一年（1606）三月上旬　越中　筆者宗賢（花押）
（中巻）慶長十一年（1606）正月八日　越中　筆者宗賢（花押）

（下巻）慶長十一年（1606）正月廿八日　越中　筆者宗賢（花押）
3、（末尾）今至日本天文十七、申戌（1548）迄二千五百八年歟（別筆）
4、（奥書なし）
5、元和二年（1616）十月廿七日以西南院良存御本書写畢。老筆俊　之
6、（弥巻末尾）明徳二年（1391）十月日一部三帖感得之（別筆・加修輻了）（梵字）
刊本所在：1、正保2（1645、高野山大・大正大）
2、貞亨3（1686、京都大・日本大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『日仏全』70、『安心全書』巻下、『続浄全』12
参考文献：末木文美士「阿弥陀三諦説をめぐって」（『印仏研』28-1、1979）、武内孝善「道範著〈秘密念仏抄〉本文校訂（一）」（『高野山大学論叢』20、1985）、中村本然「道範の浄土観」（『高野山大学論叢』29、1994）、秘密念仏抄研究会「道範著『秘密念仏抄』の研究-本文校訂と書き下し・語注-」（『豊山学報』39、1996）、元山公寿「秘密念仏について」（『現代密教』11・12、1999）、佐藤もな「道範著『秘密念仏抄』引用文献出典注記」（『仏教文化研究論集』4、2000）、佐藤もな「道範の秘密念仏思想　名号観を中心として」（『印仏研』49-2、2001）、佐藤もな「中世真言宗における浄土思想解釈　道範〈秘密念仏抄〉をめぐって」（『インド哲学仏教学研究』9、2002）、山口史恭「道範著『秘密念仏抄』の批判対象について」（『豊山学報』45、2002）、佐藤もな「真言教学における浄土観　道範の場合」（『密教研究』331（75-4）、2002）、佐藤もな「道範に関する基礎的研究　伝記資料を中心として」（『仏教文化研究論集』7、2003）
解説：著者道範は和泉出身で、鎌倉前期、中期の高野山正智院の学僧である。師に禅林寺の静遍（1166-1224）、金剛王院の実賢、正智院の明任などがいる。本著は、静遍説道範記『秘蔵記鈔』に説かれた三重阿弥陀説、すなわち、(1) 顕教の『悲華経』『無量寿経』に説かれた発心した法蔵比丘が四十八願を立てて仏になった阿弥陀仏、(2) 密教の五智五仏の一つとして曼荼羅において西に位置する妙観察智の阿弥陀仏、(3) 華蔵世界すなわち極楽世界、大日すなわち阿弥陀である阿弥陀仏、という説を承けて、さらに (4) 衆生の色心の本来清浄である阿弥陀仏としての阿弥陀仏を加えた四重阿弥陀秘釈を説いている。

さらに、阿弥陀の各文字に三諦・三部・三身・三点・三密・三宝・三智・三内声・三秘密身・四曼・阿弥陀三尊・三毒・三道の十三の範疇、南無阿弥陀仏の六字に五仏・五方・五智・五大・五臓・五根・五塵・五根本煩悩・五趣の九の範疇を配当する。これらの字義釈を踏まえた上で、最終的には阿弥陀仏の名号には胎金両部の理智万徳がすべて包摂されているとし、その名号は真言であるから、称名行は三密行の一つであるとされている。

全般的に『選択集』あるいはそこに引用された善導の言葉を参照した上で、それらを秘密念仏の立場から会通ないし批判しているが、それらの解釈には天台教学や中ノ川実範や覚鑁からの影響が見られる。

他の著書として、『秘密念仏鈔跋書』（1冊。高野山大蔵本）、『秘密念仏印』（1巻。高野山金剛三昧院本（室町期写）、高野山宝亀院本（正徳6写、正保3刊））があるとされるが、未確認。
作成者名：藤仲孝司

病中修行記

書名よみ：びょうちゅうしゅぎょうき
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：1134（長承3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、高山寺蔵本（1134（長承3）、書写者不明）
2、大谷旭雄氏蔵本（鎌倉末-室町初期（？）、未調査）
3、長谷寺蔵本（1796（寛政8）、慈明書写）
写本奥書：1、長承三年（1134）冬十一月小疾早率記矣／中川少将御房作
2、（奥書なし）
3、長承三年（1134）冬十一月因患少疾早率記矣／写本云、延文三年（1358）三月七日、釈恵海（在判）／寛文十一年辛亥（1671）秋八月二十一日於京都城北般若寺謄写之、英岳／寛文十二壬子年（1672）正月中旬於和州豊山書写之、金色山養遍／寛政八丙辰（1796）五月十四日写得之更加朱点、慈明（未調査の為、『真言宗安心全書』下より転載）
活字本所載書：長谷宝秀『真言宗安心全書』下（1914）
参考文献：佐藤哲英『念仏式の研究』（百華苑、1972）、櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、大谷旭雄「実範「病中修行記」について　その構成と念仏思想」（『仏教文化研究』13、1966）、苫米地誠一「実範の阿弥陀観－付、東寺観智院所蔵『観自在王三摩地』翻刻－」（『智山学報』50、2001）
解説：本書は臨終行儀を記した文献である。実範入滅の10年前に撰述された。その内容は、1.「寿限未決定之間、不可一向捨身命事」、2.「量知命期已至時、一向可修菩提之行事」、3.「可殊念不動尊祈臨終事」、4.「可除已発惑業事」、5.「可防未起諸悪事」、6.「可念阿弥陀四種法身依正」、7.「可念阿弥陀四種曼陀羅相事」、8.「可用三密加持、得随宜悉地事」の8項目で構成される。

これらの内、阿弥陀仏とその土に4種の法身説（自受用・他受用・変化・等流）を設けながら、一方で仏身・仏土は本質的には行者の心に即するものであり、結局、両者は密厳浄土中の一大法界の内であるとする点、三密加持の内容は尋常では結印・誦真言・明の字義、即ち阿字を観ずることであるが、別時の行業として、身に恭敬慇重の儀をする中で、口に阿弥陀仏の名を称し、心に阿弥陀の3字の字義を念じることも三密加持になるとして、三密行の易行化の一つの展開を示している点などは注目すべき教説である。

また本書には、善導の『観経疏』「散善義」の三縁釈、『往生要集』の雑略観などの諸処の教説が依用されていることや、本書の一部が実範と同時代の覚鑁の『一期大要秘密集』に引用のあること、両書の構成に類似性のあることなどが指摘されている。
作成者名：能島覚

普賢講作法

書名よみ：ふげんこうさほう
書名別名：首楞厳院普賢講作法、楞厳院普賢講作法
著者名：源信
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、

横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：988（永延2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、坂本西教寺蔵本（未調査、『恵全』5、巻頭に巻首・巻末の影印あり）
2、小野随心院蔵本（院政期（？）、書写者不明、紙背に『仏生講式』（室町初期に書写）あり）
3、大原勝林院蔵本（1847（弘化4）、覚秀書写、『魚山叢書』第86）
4、伊勢引接寺称名庵蔵本（1847（弘化4）、法竜書写）
5、大原勝林院蔵本（未調査、『魚山叢書』第16）
写本奥書：1、永延二年＜戊子＞（988）七月二十七日、楞厳院僧源信、為住持仏法、為利養衆生、為世々値遇、為證成菩提、懇以愚浅略述一隅而已
2、（奥書なし）
3、弘化四年（1847）五月八日書写了、仏子覚秀
4、永延二年＜戊子＞（988）七月二十七日、楞厳院僧源信、為住持仏法、為利養衆生、為世々値遇、為證成菩提、懇以愚浅略述一隅而已／裏書曰、此裏打修補令寄進之者也、寛文元年（1661）十一月日、芦浦観音寺舜興／右台麓西教寺所蔵古本、即楞厳院僧都親筆也、令他写之畢、文政五年（1822）正月、清浄金剛宗淵／弘化四年（1847）八月十八日、沙門法龍謹写
5、（未調査）
活字本所載書：『恵全』5、『日仏全』33、随心院聖教類綜合調査団編『随心院聖教類の研究』（汲古書院、1995）
現代語訳書：中御門敬教「楞厳院僧源信の華厳浄土義『普賢講作法』-『往生要集』との接点」（『浄土宗学研究』33、2007）
参考文献：花野憲道「普賢講作法」（随心院聖教類綜合調査団編『随心院聖教類の研究』、汲古書院、1995）、中御門敬教「楞厳院僧源信の華厳浄土義『普賢講作法』-『往生要集』との接点」（『浄土宗学研究』33、2007）
解説：坂本西教寺正教蔵本の奥書「永延二年＜戊子＞（988）七月二十七日、楞厳院僧源信、仏法を住持せしめんが為、衆生を利養せんが為、世々値遇の為、菩提を證成せんが為、懇に愚浅を以て略して一隅を述するのみ」より、著者は源信、成立年代は永延2年（988）七月二十七日と考えられる。
　内容は、『大方広仏華厳経』（四十華厳）の「普賢行願品」に説かれる普賢菩薩の十願を讃嘆礼拝する式文。講式の形態をとっており、敬白・勧請、揚題、十願の総意、十願（（1）礼敬諸仏願、（2）称讃如来願、（3）広修供養願、（4）懺除業障願、（5）随喜功徳願、（6）請転法輪願、（7）請仏住世願、（8）常随仏学願、（9）恒順衆生願、（10）普皆廻向願）の讃嘆、十願の利益、十願の功徳、普賢菩薩の大悲、六種廻向で構成されている。
作成者名：上杉智英

仏心解

書名よみ：ぶっしんげ
著者名：託何
著者名よみ：たくか、たくが
著者名別名：託阿、詫阿、他阿弥陀仏、七祖他阿、遊行七代、七祖上人、遊行七祖
著者生没年：1285（弘安8）-1354（文和3）
成立翻訳年：14c初頭
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、神奈川清浄光寺蔵本（未調査）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、寛延3（1750、未調査）
刊本の奥書刊記：1、時惟寛延三庚午歳（1750）仲春念三島謄功畢（未調査）
活字本所載書：『時宗聖典』中、『時宗全書』1、『定本時宗宗典』上、『日仏全』67
参考文献：長沢昌幸「遊行七代他阿託何の伝歴とその業績」（『時宗教学年報』32、2004）、長沢昌幸「託何教学における宗観念」（『大正大学綜合仏教研究所年報』26、2005）、長沢昌幸「『仏心解』の成立に関する一考察」（『大正大学綜合仏教研究所年報』27、2005）
解説：時宗遊行七代託何の著作で、著述年代は不明。仏心の本義を解き明かそうとするもので、教門・禅門について論じる。序に、ある人から『東山西谷問答集』という一書（佚書）を贈られ、返報としてその詞に解釈を付したとあるように、本文は西谷（禅門）の問、東山（教門）の答、そして託何の解という順序で論が記される。禅法と念仏を対比しながら、聖浄二門の了義不了義、仏身仏土論、念仏と九品分別、難易二道、発菩提心と菩薩行、正像末の時間論、称名などを論じる。最後に、仏心について論じ、西谷は参禅によって仏心を得るとし、東山は念仏三昧中に仏心を見るとする。それに対し自身はどちらが良いか判断し難いとして両者の方法を解説するものの、結論としては口称念仏こそが勝れるとする。
　現行のものは難解な漢文だが、序に「擬仮名書」とあり本来は和文であったようだ。また女性が理解しやすいように、言葉を和らげて経論・経釈の意を取り引用したとあり、人々に広く示す意図があったらしい。当時は臨済宗大徳寺派が勢力を拡大しつつあり、それに対抗するために執筆されたものと思われる。
作成者名：坪井直子

仏像幖幟義

書名よみ：ぶつぞうひょうしきぎ
著者名：聖冏
著者名よみ：しょうげい
著者名別名：酉蓮社了誉、冏師、聖冏禅師
著者生没年：1341（暦応4）-1420（応永27）
成立翻訳年：14c後半-15c初頭
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄全』12
参考文献：服部英淳「解説」（『浄全』12）
解説：聖冏による僧侶の衣服の種類や成り立ちを説明した小著。本書では、僧の「衣服は身垢を弊し、正しく心染を幖幟す」とあるように、僧侶の衣服は実用品のみならず仏道修行の精神を表すものとして述べられる。
　まず、仏家の服装について明かし、その起源が衫服というインドの皇の法服にあるとする。それは、下衣である裙子（裙裳）と上衣である偏衫（覆腋衣）とに分かれ 、裙子で下半身を覆い、偏衫で右肩を出して着用するものであった。しかし、中国の魏の時代に、そのような梵僧の服装が、宮中で好まれなかったために、勅命で両袖を付け、上

下をあわせ綴る直綴という僧服が用いられるようになったという。

次に袈裟については三衣を挙げ、縦の継ぎ目である「条」を基に、安陀会（五条）、鬱多羅僧（七条）、僧伽梨（九・十一・十三・十五・十七・十九・二十一・二十三・二十五条）と、分類している。それらの、条と条との間にある布の長短や数の多少（及び九品への配当）についても、五条は一長一短、九・十一・十三条は二長一短（下品）、十五・十七・十九は三長一短（中品）、二十一・二十三・二十五は四長一短（上品）と説明を加え、二十五条を上限とするのは、二十五有に福田をなすためであることや、長短のあるのは、他を利するにあたって、聖を増し凡が減ずることを表すと述べている。

そして、着衣について、三世の如来と同じように着衣をしていること、三衣は賢聖の沙門幟幟であることなどにふれ、その功徳の大なることを述べている。

また、当時の禅僧が絹衣を用い、律僧が布衣を用いることの邪正については、蚕の殺生を伴うために、インドや中国天台では、袈裟の素材として用いられなかった絹であるが、それは小乗の儀であって、大乗の意からすると、必ずしもそれに拘泥する必要は無い。もし他への利益があるのならば、金玉さえ求めることもあり得るし、自らに徳が無ければ、瓦礫としてそれらを捨てるべきである。すべての法は一如であり、自他二利があるのなら、麁妙どちらも成することができると、絹衣被着容認論を展開している。

小著ではあるが、当時の浄土宗僧侶の服装に関する、教理上の論拠と当時の実態について述べられていることが注目される。

作成者名：東海林良昌

別時念仏講私記

書名よみ：べつじねんぶつこうしき
書名別名：別時念仏講式
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1224（貞応3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、東寺宝菩提院三密蔵本（1224（元仁2）、信阿弥陀仏書写）
写本奥書：1、本云貞応第三暦（1224）初冬中旬初依憑懃之語注別時之式詞海久忘不及沈思花実共闕嘲哢難遁但酔有霊夢云云、頗感情而已、隆寛、元仁二年（1224）二月下旬書写了、沙弥信阿弥陀仏
活字本所載書：櫛田良洪「別時念仏講私記」（『日本歴史』201、1966）、櫛田良洪「史料紹介　別時念仏講私記」（『日本仏教史学」13、1978）
解説：隆寛が書いた別時念仏の講式。昭和40年（1965）に櫛田良洪が東寺宝菩提院三密蔵で『秘抄口決』という書物の紙背にある浄土教関係の記述を発見し、そのうち朱墨同様の加点のある断簡と墨点のみの断簡がみられ、前者の断簡を復元し発見されたのが『別時念仏講私記』である。全体が3段に分かれて説かれている。内容は、第1段は、別時念仏が凡夫に必要であり、嬾堕惰懈の輩は善友をもち精進して励まし別時念仏をするようにと、別時念仏の徳について説かれ、第2段は、別時念仏の功徳は機根の利鈍に関係なく皆、順次往生にあづかると説かれ、第3段の廻向発願は、廻向を3つの意味から捉え、（1）先立つ者が別時念仏に参加する同志の還相廻向をするとし（2）たとえ一称一礼一花一飯といった最低限の廻向であってもそれが機縁となり極楽浄土に往生することが出来ると仏・僧への供養を廻向とし（3）念仏を誹謗・非難する者も皆、浄土門に廻心転向（廻向）して同朋となり阿弥陀仏の浄土に結縁引接されると説き、廻向について3つの意味から仏意に順じるとする。『往生要集』の浄土十楽を参照にしながら、別時念仏の功徳について説かれている。本書の撰述は法然滅後12年の貞応3年（1224）にあたり、法然亡き後の専修念仏教団で行われた別時念仏のありようがわかる。

作成者名：伊藤茂樹

別異弘願集

書名よみ：べっちぐがんしゅう
書名別名：弘願集、別異弘願性戒鈔
著者名：浄遍／静遍（？）
著者名よみ：じょうへん／じょうへん
著者名別名：禅林寺法印、心円房
著者生没年：1166（仁安1）-1224（貞応3）
成立翻訳年：12c後半-13c初頭
成立地：日本
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、神奈川金沢文庫蔵本（書写年不明、書写者不明、良聖手沢本）
2、竜谷大本蔵（書写年不明、書写者不明）
3、京都青蓮院蔵本（鎌倉初期、慈円書写（？）、和訳完本）
写本奥書：1、浄遍僧都別異弘願集　建長六年（1254）刀甲七月廿九日　於遠田郡長崎郷来迎寺東面　書寫畢　後見人可唱南无阿弥陀仏十返也
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『金沢文庫資料全集』4、浄土編1
参考文献：塚本善隆「金沢文庫所蔵浄土宗学上の来傳稀覯の鎌倉古鈔本」（『今岡教授還暦記念論文集』大正大学浄土学研究会、1933）、硲慈弘「別異弘願集の作者浄遍について」（『浄土学』10、1936）、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』（下、大東出版社、1979）、那須一雄「静遍と法然浄土教」（『印仏研』53-2、2005）
解説：法然の浄土教に帰した人たちのなかで、顕教、密教の諸行について「雑行」として否定する立場と否定しない立場があったが、本著は、善導の『往生礼讃』での専修、雑修の得失を論じ、雑行十三の失を語りながら、それらを単純に否定しないで、それらは非真実心により修されるとき悪の雑行であるが、真実心により修されるとき善の雑行であると考え、善の雑行については阿弥陀仏は「別異の弘願」として奨励されているとする。そして、別異の弘願である善の雑行を修して、究極的には第十八願所説の称名念仏、一行専修に帰すべきであるとする。その理由としては、浄土教一般で強調される三心（至誠心、深心、廻向発願心）を具えるには、『往生礼讃』所説の「無余修」が必要であることが挙げられている。また仏とその国土については、『続選択文義要鈔』と同じく、本有絶対一心の世界観を中心としながらも、阿弥陀仏とその国土を釈迦仏とその国土と対比し、大毘盧遮那仏と一如であり、それら諸仏の住す国土は真実報土であり、一つであるが、応化教化の国土が各々異なるとする。最後には、別時念仏に類することを奨励している。釈迦一代の法門すべては弥陀の名号一教により衆生を利益することだとされているが、その名号一教は

法性自然の惣持陀羅尼、秘密真言であり、念仏と真言は同一の醍醐味とされている。著作の傾向としては、空海の著作を参照する。自らの善導教学の理解を示して、法然著『選択集』と法然門下の他の諸師の影響を大きく示しながら、同時に違いをも示そうとしている。

著者の浄遍は東密の静遍と同一人物とする説と別人物とする説がある。『勅伝翼賛』、『後世物語録』、塚本善隆（1933）、那須一雄（2005）は同一人説、硲慈弘（1936）は別人説であり、石田充之（1979）は『沙石集』、『閑亭後世物語』の記述は禅林寺浄遍、『吾妻鏡』のは台密の浄遍、『別異弘願集』の著者は『続選択文義要鈔』の著者静遍だとする。

ちなみに静遍は、覚鑁以降の真言宗における念仏思想の確立に大きな役割を果たした人である。明恵の弟子筋であり、貞慶の弟子であったので、当初、法然浄土教の批判を考えていたが、法然の没後、その弟子の隆寛や証空から称名念仏の奥義を聞いて改心し、名を釈心円と改め、『続選択文義要鈔』を著した。これは法然の『選択本願念仏集』を補うという題名である。その後も真言の立場を保ちながら、法然浄土教に帰依し、法然門下と交わり、『選択集』の講議をも行った。また善導が般舟三昧の行法を記した『依観経等明般舟三昧行道往生讃』（『般舟讃』。法然未見）を仁和寺宝金剛院の経蔵より発見し、以降、同讃が流布したといわれる。彼の教学は、三点説・秘密念仏・多法界説・一乗経劫論・大釈融合説など多岐にわたり、当時の真言教学を再構築したものである。なかでも三点説・秘密念仏に特徴が見られる。三点説は理・智・事の具足した仏身を教主とするものであり、身語意の三密や仏蓮金の三部とも符号させる解釈を行った。

作成者名：藤仲孝司

別伝記

書名よみ：べつでんき
著者名：不明
成立翻訳年：13c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：醍醐本『法然上人伝記』の項を見よ。
写本奥書：醍醐本『法然上人伝記』の項を見よ。
刊本所在：醍醐本『法然上人伝記』の項を見よ。
刊本の奥書刊記：醍醐本『法然上人伝記』の項を見よ。
活字本所載書：『法伝全』、『藤堂恭俊博士古希記念　浄土宗典籍研究』資料篇（同朋舎出版、1988）、『仏教古典叢書』3（国書刊行会、1923）
参考文献：三田全信「法然上人伝の成立史的研究序説」（法然上人伝研究会『法然上人伝の成立史的研究』4、知恩院、1965）、三田全信『成立史的法然上人伝の研究』（平楽寺書店、1966）、梶村昇「醍醐本『法然上人伝記』の筆者について」（『小沢教授頌寿記念　善導大師の思想とその影響』大東出版社、1977）、玉山成元「「別伝記」の資料的価値」（『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究』研究篇　同朋舎出版、1988）、中井真孝「醍醐本『法然上人伝記』の「別伝記」について（『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究』研究篇　同朋舎出版、1988）、中野正明『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、1994）
解説：醍醐本『法然上人伝記』に収録されている、最初期に成立したと目される法然伝記。

著者および成立の時期は不明である。同じく醍醐本『法然上人伝記』に収録されている、いわゆる「一期物語」に語られる事跡を殆ど取り上げていないことから、三田全信はより早い形態の「法然上人伝記」の存在を推測し、そこから「一期物語」を抜粋した残りが「別伝記」であると主張する。また梶村昇は、「一期物語」を製作した源智の門弟がそれを補足するために、源智が残した他の伝記から行実面を抜き出したものであると論じている。それに対して中井真孝は天台修学時の年齢など、わずかながらも「一期物語」との矛盾点が見出されることから別の編集者の存在を強調し、四人の師についての記述などが『知恩講私記』と相似していることから、隆寛の系列によると主張している。中野正明は中井説を発展させ、初期法然伝には『知恩講私記』および『本朝祖師伝記絵詞』（『四巻伝』）の系列と「一期物語」の系列という2つの系列があり、「別伝記」は前者に含まれると位置付ける。また『知恩講私記』の第2「讃本願興行徳」には「別伝記」の公胤夢告に関する記述の影響が見出せるとして、『知恩講私記』よりも成立が早いと論じ、天台色が強いことなどから信空の系統によると推測している。

600字にも満たないごく短編の伝記であり、法然の修学に関する事跡を中心に記録されている。「別伝記云」という見出しから始まり、生国と氏姓、故郷の師である智鏡房観覚の感嘆と父の言いつけ、15歳の比叡山登山と慈眼房叡空のもとでの出家受戒、父の死の知らせと遁世の申し出、天台修学と黒谷における一切経披見、叡空・華厳宗の鏡賀・観覚・法相宗の蔵俊という4人の師より2字を捧げられること、竹林房静賢（『四十八巻伝』などでは静厳）が弟子となり、後にその弟子が法然と法談して博識に感嘆したこと、公胤が七箇条の不審を開き、後に夢告を得たことが記されている。出家受戒の師が叡空であるという記述や天台三大部を三所で学んだことなど独自の記述が散見されるが、その中でも父の死が叡山登山の後であるという記述は他の全ての法然伝と食い違い、最も注目されるところである。

作成者名：斎藤蒙光

報恩記

書名よみ：ほうおんき
書名別名：仮名報恩記
著者名：存覚
著者名よみ：ぞんかく
著者名別名：光玄、尊覚
著者生没年：1290（正応3）-1373（応安6・文中2）
成立翻訳年：1338（暦応1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（江戸初期、恵空書写）
2、滋賀弘誓寺蔵本（江戸初期、恵広書写）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（奥書なし、末尾を欠く）
刊本所在：1、元禄4（1691、内閣文庫・大谷大・竜谷大）
2、『真宗法要』16
3、『真宗仮名聖教』9
刊本の奥書刊記：1、元禄四年辛未（1691）七月中浣日、[皇都書林西六条花屋町油小路東入町永田調兵衛（大谷大のみに有）
2、夫決難聖道ノ万行ハヤウヤク正像ノムカシニカキリ、唯有浄土ノ一門ハトヲク澆季ノ今ニ通ズ、上古ノ聖人ハ自力ヲハケムテ開悟シ、末世ノ凡愚ハ他力ヲ信シテ往生ス、

ココニ吾大法主高祖古徳ノ慈訓ヲ纂輯シ若干巻トナシ、カツ校正ヲクハヘコレニ題シテ真宗法要トイフ、コレカミ仏祖先徳ノ広恩ヲ謝シシモ、生死ノ群生海ヲ度センカタメナリ、コレスナハチ念仏往生ノ真法証大涅槃ノ至要ナリ、マコトニコノ文ノ名ソレユヘアルカ、ソモソモコノ書ノ中或一部或二部国字ヲ安スルニ尋常ニ違スルモノアリ、コレモマタ先哲ノ筆蹟ニシタカフ、後ノ学侶疑端ヲナスコトナカレ、ココニ其書ノ成ヲヨロコヒテ毫ヲソメテ巻尾ニシルスト云爾、明和二年乙酉（1765)七月二十五日、釈文如（朱印）
3、文化八年辛未歳（1811）、本願寺蔵（朱印）
活字本所載書：『真聖全』3、『真宗史料集成』1、『真宗聖教大全』上、『真宗聖典全書　和文之部』、『真宗仮名法典』、『日本教育文庫 宗教篇』
参考文献：足利浄円「報恩記」（『存覚上人』国書刊行会、1987）、山名哲朗「報恩記」（『六条学報』200、1918）、吉谷覚寿『報恩記略述』（西村護法館、1909）、可西大秀「報恩記」（『真宗聖教解説』仏教普及会、1931）、竜口恭子「存覚と『報恩記』―三州義士譚を中心に―」（『印仏研』54－1、2005）、竜口恭子「存覚『報恩記』の報恩―聖徳太子御書並善光寺如来御返報を中心に―」（『印仏研』55－2、2007）
解説：本書は、孝養父母・奉事師長について述べ、それらはつまるところ阿弥陀仏の本願を信じ、念仏往生を遂げるところにあると説いている。
　本書には執筆年次を示す奥書はないが、『存覚一期記』の49歳の条に本書の名があり、また寂恵『鑑古録』には「暦応元戊寅年（1338）、存師四十九歳三月、備後国ニシテソノ国ノ守護某ノ亭ニテ、日蓮派ノ僧輩ト法問アリ、（中略）コノトキ同国山南ノ慶空所望ニヨリテ、決智鈔・歩船鈔ヲ述作シ、同ク願空ノ所望ニツヒテ、報恩記・法華問答・至道鈔・選択注解鈔・等ヲ制述シタマヘリ」と記されている。これらから暦応1年（1338）に願空の求めに応じて撰述されたものであることがわかる。
　本書は、最初「孝養父母」について述べる。「孝養父母」は世間でも大切にされているが、仏教でいう場合は得脱・涅槃をむねとしており、没後の追善を営むなど現当二世にわたるとしている。父母の恩について、『心地観経』・『父母恩難報経』・『四十二章経』・善導『観経疏』などを引用し、釈尊が母である摩耶婦人に報恩の為に説法をしたことや、釈尊が父浄飯王の棺を担いだこと等に触れ、仏教者も父母の恩を大切にすべき事を説いている。
　また当時広く知られていた「三州義士譚」の説話を引用し、釈迦は我らの慈父であり、阿弥陀仏の本願を信じ念仏往生を遂げることがその報恩となると述べている。
　次に「奉事師長」について説くが、仏法の師の恩徳は父母よりも重いものと位置づける。その上で、『心地観経』・善導『観経疏』・高野大師の解釈、聖徳太子が善光寺如来より手紙の返報を受けたことなどを引用しつつ、念仏往生を遂げることが師恩に報いるものであると述べる。
作成者名：高山秀嗣・藤田真隆

法事讃私記

書名よみ：ほうじさんしき
書名別名：法事讃記
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人、念阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、慶長16（1611、叡山文庫）
2、宝永6（1709、大谷大・東京大・東洋大・千葉県立中央図書館「訂正微考法事讃私記」）
3、刊年不明（大谷大・早稲田大・大正大・竜谷大・名古屋市蓬左文庫・高野山真別所）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『浄全』4
参考文献：『法事讃私記冠註』（『浄全』4所収）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。1211年（建暦1）同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、1214年（建保2）比叡山で戒、その後1236（嘉禎2）九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』を相伝し、1249（建長1）関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、1259（正元1）鎌倉に入り、悟真寺を開創し、念仏を広めた。
　本書は善導『法事讃』の注釈書であり、上中下3巻よりなる。良忠は本書の冒頭において、善導の5部の著作に関し、『観経疏』を「解義分」とし、他の『法事讃』・『観念法門』・『往生礼讃』・『般舟讃』を「行儀分」とした上で、これらの「行儀分」はそれぞれ五種正行の読誦・観察・礼拝・讃歎に当たるとしている。注釈の形式は句義釈であり、直接良忠自身の解釈を示す場合と、問答体を用いる場合とがあるが、何れの場合も『大智度論』・『維摩経』・『摩訶止観』・『倶舎論』他、多くの経論の内容を示し、また羅什・僧肇・慧遠・天台・窺基・玄一・璟興・霊芝・元照等の解釈を注釈にあてている。また「灰身滅智」の内容を示すのに、「若し法相に依らば」「若し天台に依らば」（『浄全』4、p.62）というように、異説を複数示す場合も見られる。しかしこの様に諸師・諸宗間の異解を積極的に示すものの、浄土宗としてはどのように解釈すべきであるかという言及は、あまり見られない。この様な著述態度は、八万法門は、衆生の機縁からすると別であるものの、仏意からすると同等である（『浄全』4、p.60）とする立場の現れであるといえる。
　なお本書における引用典籍の出典については『法事讃私記冠注』（『浄全』4所収）が詳しい。また1256（建長8）、下総の福岡西福寺において『法事讃』を講説した際の聞書（良聖筆）が、上巻1巻のみながら金沢文庫に蔵されている。なお本書を注釈したものに、良栄（1342-1423）の『法事讃私記見聞』と聖聡（1366-1440）の『法事讃私記見聞』等がある。
作成者名：米沢実江子

法事讃私記冠註

書名よみ：ほうじさんしきかんちゅう
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：不明
成立地：日本
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄全』4
解説：本書の作者は不明であるが、良忠（1199-1287）述『法事讃私記』を、良仰が1709（宝永6）に校正刊行した時、古本を校合し、傍注を欄外頭註として出し、冠註はまとめて巻尾に別出したものを、『浄全』刊行の時に別本として載せたものである。（『浄土宗大辞典』より）
作成者名：米沢実江子

法事讃私記見聞

書名よみ：ほうじさんしきけんもん
書名別名：良栄見聞、大沢見聞、栄見聞、法事讃記見聞、
著者名：良栄
著者名よみ：りょうえい
著者名別名：理本、高蓮社
著者生没年：1342（康永1）-1428（応永30）（？）
成立翻訳年：14c-15c
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、東洋大蔵本（書写年不明）
写本奥書：1、（未調査）
刊本所在：1、享保17（1732、京都大・大正大・東北大・お茶の水図書館成簀堂文庫)
2、刊年不明（大谷大・大正大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『浄全』4
参考文献：金子寛也「『法事讃私記見聞』三巻」（大谷旭雄編『聖聡上人典籍研究 』大本山増上寺、1989）
解説：良栄は、良忠・尊観（名越派の祖）・明心・妙観・聖観・良栄と続く名越派の人で聖観に師事した。また名越派中興の祖でもある。良栄の著書は「大沢見聞」と呼ばれ、名越派の重要な書として用いられた。
　本書は良忠（1199-1287）述『法事讃私記』の注釈書であり、上中下3巻よりなる。良栄は、良忠が『法事讃私記』において善導著作の5部の内『観経疏』を「解義分」とし、他の『法事讃』・『観念法門』・『往生礼讃』・『般舟讃』を「行儀分」とした上で、これらの「行儀分」はそれぞれ五種正行の読誦・観察・礼拝・讃歎に当たるとした解釈について、さらに「行儀分」の4部は称名を以て何れの巻にも通じるとする解釈を加えた（『浄全』4、p.593）。また「浄土の体」については、良忠は三論と天台の解釈をそれぞれ示したのみであったが、良栄は「浄土の体に約せば方便土と言うも、得名に約せば天台に限るべし」（『浄全』4、p.623）というように、良忠の解釈を更に詳述する態度が見られる。この他にも『法華経』・『称讃浄土経』・『大荘厳経』・『摩訶止観』等の諸典籍ならびに天台・嘉祥・義寂等の解釈を多用している。
作成者名：米沢実江子

法事讃私記見聞

書名よみ：ほうじさんしきけんもん
書名別名：法事讃見聞、法事讃記見聞、行儀分私記見聞、
著者名：聖聡
著者名よみ：しょうそう
著者名別名：大蓮社酉誉聖聡、大蓮社、酉誉、酉師、酉公、聡師
著者生没年：1366（貞治5）-1440（永享12）
成立翻訳年：14c-15c
成立地：日本
巻数：3
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、刊年不明（大谷大・東京大・竜谷大・早稲田大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『浄全』4
解説：聖聡は良忠・良暁（白旗派の祖）・定恵・了実・聖冏・聖聡と続く白旗派の人。幼年に明見寺（千葉県）において真言密教を学んだが、後1385（至徳2）に聖冏（浄土宗第7祖）の教義を聞き浄土教に帰依し、浄土宗第8祖となった。
　本書は良忠（1199-1287）述『法事讃私記』の注釈書であり、上中下3巻よりなる。本書は「良栄の『大沢見聞（法事讃私記見聞)』に対抗して書かれた」とする見解もあるが（紀氏隆真『仏書解説大辞典』9、p.99)、本書が注釈する『法事讃私記』の引用箇所は、良栄の『法事讃私記見聞』と重なることが極めて少なく、また具体的に良栄の解釈を挙げてその相違を述べることもない。「謙倉見聞」・「鎌倉御抄」・「記見聞」・「白旗直見聞」等の白旗派の典籍を多く援用して注釈をしていることから、本書は解釈上の問題で『大沢見聞』を直接批判するというより、白旗派教義の顕彰であると考えられる。
作成者名：米沢実江子

法然讃

書名よみ：ほうねんさん
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1212（建暦2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『尊号真像銘文』（『定親全』3、p.104、逸文あり）
解説：『知恩伝』には法然滅後まもない建暦2年（1212）3月1日に空阿が似絵の名手藤原信実に法然の真影を描かせ、隆寛がその真影の讃文を書いたとする記事が載る。この隆寛作の讃文が、親鸞の『尊号真像銘文』、また『本尊色紙文』に記されている。ちなみに真影の描かれた3月1日は法然中陰の五七日の一日後であり、中陰の五七日は隆寛が導師を勤めている。法然滅後に廟所で、法然の徳をたたえる知恩講が行われていたが、そこにまつられる真影の讃文がこれを指す。四明山権律師劉官讃として「普勧道俗　念弥陀仏　能念皆見　化仏菩薩　明知称名　往生要術　宜哉源空　慕道化物　信珠在心　心照迷境　疑雲永晴　仏光円頂　建暦壬申（1212）三月一日」と書かれている。
作成者名：伊藤茂樹

法然上人伝

書名よみ：ほうねんしょうにんでん
著者名：隆寛（？）
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c-14c
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、智満寺蔵本（鎌倉末期-室町期、書写者不明）
写本奥書：1、建暦二壬申歳（1212）二月晦日三十五日の

追善畢、上人の言葉を中将姫称讃浄土経のうらに書置也、同三月二日隆寛書之
活字本所載書：宇高良哲「新出の隆寛作「法然上人伝」について」（『大正大学研究紀要』69、1984）
参考文献：宇高良哲「新出の隆寛作「法然上人伝」について」（『大正大学研究紀要』69、1984）、中井真孝「隆寛作「法然上人伝」の若干の考察」（同著『法然伝と浄土宗史の研究』思文閣出版、1996）
解説：「法然上人伝」とは仮称。静岡県天台宗智満寺所蔵の『称讃浄土経』の紙背に第10紙目から第3紙目に書かれる隆寛作とされる法然伝。かな文で、内容的には法然の晩年（配流・帰洛・一枚起請文授受・入滅）の事項であり、『九巻伝』に近似している。他の伝記にない記述として、浄華院と法然の関係が強調されており、『一枚起請文』も全文あげられている。中井真孝は、この一枚起請文を源智相承系として最古であるとしている。なお宇高良哲は隆寛作とされるが、中井真孝は九巻伝にもとづいて浄華院の一条派の正統を示した浄華院版の法然伝とする。
作成者名：伊藤茂樹

法然上人伝絵詞（琳阿本）

書名よみ：ほうねんしょうにんでんえことば（りんなぼん）
書名別名：法然聖人伝絵
著者名：不明
成立翻訳年：13c半ば
成立地：日本
巻数：9
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、東京都妙定院蔵本（江戸期、書写者不明）〈影印版〉:『法然上人絵伝集成2 法然上人伝絵詞（妙定院本）』（浄土宗出版、2008）
2、栗原家蔵本（鎌倉期、書写者不明、巻7のみ）
3、東京国立博物館蔵本（鎌倉期、書写者不明、巻8のみ）
写本奥書：1、（2巻頭）向福寺琳阿弥陀仏
（2巻末）向福寺琳阿弥陀仏、南無阿弥陀仏
（3巻頭）向福寺琳阿弥陀仏
（4巻頭）向福寺琳阿弥陀仏
（7巻頭）向福寺琳阿
（8巻頭）向福寺琳阿
（9巻頭）向福寺琳阿弥陀仏
2、（未調査）
3、（未調査）
活字本所載書：『法伝全』、『浄全』17、「法然上人絵伝詞書」（『美術研究』33、1934、栗原家蔵本）、関忠夫「東京国立博物館保管法然上人絵伝」（『MUSEUM』275、1974）、『法然上人絵伝集成2 法然上人伝絵詞（妙定院本）』（浄土宗出版、2008）
参考文献：田中喜作「法然上人絵伝」『美術研究』33、1934）pp.19-20、井川定慶『法然上人絵伝の研究』（法然上人伝全集刊行会、1961）、三田全信「法然上人伝の成立史的研究序説」（法然上人伝研究会『法然上人伝の成立史的研究』4、知恩院、1965）、三田全信『成立史的法然上人伝の研究』（平楽寺書店、1966）、関忠夫「東京国立博物館保管法然上人絵伝」（『MUSEUM』275、1974）、中井真孝『妙定院蔵『法然上人伝絵詞』本文と研究』研究篇（仏教大学アジア宗教文化情報研究所、2008）
解説：鎌倉期成立の法然絵伝。
　製作者は不明。妙定院本の各巻頭などに「向福寺琳阿」または「向福寺琳阿弥陀仏」と記されているため、「琳阿本」と呼称される。しかし琳阿は時宗一遍の法孫にあたるが、この本では鎮西派第2祖の聖光房弁長が重視されている点や、西本願寺所蔵『善信聖人絵』にも同様の署名が所有者の証として記されている点から、琳阿とは著者ではなく所有者であるという井川定慶説が通説となっている。
　制作年は13世紀中頃。井川定慶は『法然上人伝』（増上寺本）より遅く『拾遺古徳伝絵』（1301成立）より早いと主張し、三田全信は『黒谷源空上人伝』（『十六門記』）や信瑞作『黒谷上人伝』（1262頃成立）より遅く、『拾遺古徳伝絵』より早いとする。また中井真孝は『拾遺古徳伝絵』のみならず『黒谷上人伝』よりも早いと主張する。
　内容は、巻1は法然の受胎から父の葬送中陰まで、巻2は母との別離から比叡山修学まで、巻3では嵯峨参籠・南都遊学から黒谷における帰浄、東大寺勧請、大原問答、明遍について、巻4は貴人への説戒や授戒、弁長などの門弟について、巻5は東大寺説法、三昧発得、二祖対面、弁長への『選択集』付属、送山門起請文と兼実の書状について、巻6は聖覚の瘧病平癒祈願の説法、頭光踏蓮、隆寛への『選択集』付属、流罪について、巻7は讃岐国の生活、勝尾寺への納経と聖覚の唱導、一念義停止の書状について、巻8帰洛後の生活と老病・臨終、中陰の法要、公胤の夢告について、巻9は公胤の往生から嘉禄の法難までおよび随連の夢告について記す。
　『伝法絵』系列を下敷としつつ、画中詞を詞書に統合する、『一期物語』などを参考に曖昧な記事を増補するなど、構成面にも内容面にも発展が見られる。また中井真孝は、絵伝において初めて『一念義停止の書状』などの消息類の収集・収録に努めた、『伝法絵』系列の天台色を抑えて鎮西派の教義・相承を前面に打ち出した、建永の法難を断行した政府を激しく批判している、明遍を重視している、諸伝のうち唯一、法然の帰洛を許す宣旨が下った年を承元3年（1209）8月と記すなどの特徴を指摘する。
　3種の転写本が現存し、中でも妙定院本は9巻すべて揃っている。栗原家蔵本は巻7のみ、東京国立博物館蔵本は巻8のみが現存するが、それぞれに多少の錯簡が見られる。妙定院本には内題・外題ともになく、「法然上人伝絵詞」という題号は『浄全』に収録される際に付けられた。一方、東京国立博物館本には「法然聖人伝絵」という題号が見える。
作成者名：斎藤蒙光

法然上人伝記（醍醐本）

書名よみ：ほうねんしょうにんでんき（だいごぼん）
書名別名：法然上人伝記、醍醐本、法然上人伝記附一期物語
著者名：法然（著）／源智（著）／編集者不明
著者名よみ：ほうねん／げんち
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師／勢観房源智、勢観房、賀茂上人
著者生没年：1133（長承2）－1212（建暦2）／1183（治承7）－1238（歴仁1）
成立翻訳年：1241（仁治2年）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、醍醐寺蔵本（江戸初期、義演門弟書写）＜影印版＞:『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究』資料篇（同朋社出版、1988）
写本奥書：1.法然上人伝記依及覧雖為枝葉書之、義演
活字本所載書：『昭法全』、『法伝全』、『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究』資料篇（同朋社出版、1988）、『仏

教古典叢書』3（国書刊行会、1923）
参考文献：望月信亨『浄土教之研究』（金尾文淵堂、1922）三田全信「法然上人伝の成立史的研究序説」（法然上人伝研究会『法然上人伝の成立史的研究』4、知恩院、1965）、三田全信『成立史的法然上人伝の研究』（平楽寺書店、1966）、梶村昇「醍醐本法然上人伝記について」（『亜細亜大学教養部紀要』4、1969）、梶村昇「醍醐本『法然上人伝記』の筆者について」（『小沢教授頌寿記念　善導大師の思想とその影響』大東出版社、1977）、伊藤唯信「『法然上人伝記』（醍醐本）の成立史的考察」（『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究』研究篇　同朋社出版、1988）、梶村昇「醍醐本『法然上人伝記』の意図するもの」（『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究』研究篇　同朋社出版、1988）、野村恒道「醍醐本研究に関する回顧と展望」（『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究』研究篇　同朋社出版、1988）、中野正明『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、1994）、曽田俊弘「『拾遺漢語灯録』と醍醐本『法然上人伝記』の関連性」（『仏教文化研究』45、2001）、伊藤真昭「醍醐本『法然上人伝記』の成立と伝来について―なぜ醍醐寺に伝わったのか―」（『仏教文化研究』53、2009）
解説：法然遺教の第一結集と位置付けられる、法語・伝記・遺文録。

巻頭には「見聞書（出）勢観房」と記されている。だが「御臨終日記」の後に、法然の入滅後30年(仁治2年（1241）にあたる）に及んで本書を編集したと記されているのに対し、勢観房源智は法然の滅後26年の暦仁1年（1238）に既に没している。また編集者が源智の滅後に、秘蔵されていた「三昧発得記」を発見し書写したという記述も見られる。よって実際には、源智の遺弟が、源智が生前に記録および秘蔵していた資料を中心に、別の法然門弟の系統から収集した資料を加えて整理編集したものと思われる。

内容は大きく三部、細かく六部に分けられる。(1) 法然法語。まず源智の見聞録と思しき「一期物語」、次に「禅勝房との十一箇条問答」、そして悪人正機など特異な法語も含む「三心料簡および御法語」の順に収録されている。(2)「別伝記」。「一期物語」を補足するように、法然の修学を中心とする事跡が記録されている短編の伝記。ただし中井真孝や中野正明は、「一期物語」と矛盾する記述も見られるとして、源智以外の系統に伝わる法然伝記と位置付けている。(3) 法然遺文。まず法然の臨終の様を記録した「御臨終日記」が収録されているが、中野正明は『西方指南抄』所収の「法然聖人臨終行儀」系統の記述を抜粋したものと位置付けている。そして最後に、法然自身による建久九年以降の三昧体験の記録と伝えられる「三昧発得記」が収録されている。なお内題に『法然上人伝記附一期物語』とあることから、一般には冒頭の法語が「一期物語」と呼称されるが、曽田俊弘や伊藤真昭は「附一期物語」とは「御臨終日記」を指すと主張している。

現存唯一の写本が、大正6年（1917）に醍醐寺三宝院より発見された。巻末には醍醐寺第80代座主の義演によって「書之」と記されているが、伊藤唯信は本文とは異筆であると指摘する。また中野正明も、義演の指揮下で門弟が書写したと推測し、その字体や誤字が多いことから、鎌倉期まで遡り得る底本を模写した可能性があると指摘している。なお『西方指南抄』や『拾遺漢語灯録』には、部分的に同内容の資料が収録されている。特に『拾遺漢語灯録』に関しては、平成7年（1995）に元録15年（1702）書写の大徳寺本が発見され、義山の手が加えられる以前の姿が明らかとなったことで、より厳密な比較研究が可能となった。
作成者名：斎藤蒙光

法然上人伝法絵（高田本）

書名よみ：ほうねんしょうにんでんぽうえ（たかだぼん）
書名別名：伝法絵
異本書名：本朝祖師伝記絵詞、法然上人伝法絵流通
著者名：耽空
著者名よみ：たんくう
著者名別名：湛空、正信坊湛空
著者生没年：1176（安元2）-1253（建長5）
成立翻訳年：1237
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（1296（永仁4）、顕智書写、下巻のみ）
〈影印版〉:『影印高田古典』3（真宗高田派宗務院、2001）
〈影印版〉:高田山蔵「資料復刻　顕智上人筆　法然上人伝法絵下巻」1、2、3（『高田学報』75、76、78、1986-1987）
写本奥書：1、草本云、永仁四年（1296）十一月一六日云々／永仁四年丙申（1296）十二月下旬第六書写之
活字本所載書：『法伝全』、『唯信』3、4、5、6、7（唯信社、1927）
参考文献：中澤見明『真宗源流史論』（法蔵館、1951）p.39、pp.84-88、井川定慶『法然上人絵伝の研究』（法然上人伝全集刊行会、1961）、三田全信「法然上人伝の成立史的研究序説」（法然上人伝研究会『法然上人伝の成立史的研究』4、知恩院、1965）、三田全信『成立史的法然上人伝の研究』（平楽寺書店、1966）、中川和則「法然上人伝法絵」（『影印高田古典』3、真宗高田派宗務院、2001）、中井真孝『善導寺蔵『本朝祖師伝絵詞』本文と研究』研究篇（仏教大学アジア宗教文化情報研究所、2007）
解説：最初期の法然絵伝の一つである『本朝祖師伝記絵詞』（善導寺本）と同系列の異本。

著者は『本朝祖師伝記絵詞』と同じく耽空であろう。現存する唯一の写本は高田専修寺第3世の顕智の書写によるものである。

原本の成立年は『本朝祖師伝記絵詞』によるならば嘉禎3年（1237）である。下に記すように『本朝祖師伝記絵詞』には見られない文章を有することから、井川定慶や三田全信は『本朝祖師伝記絵詞』よりも古い形態であると位置付けるが、中井真孝は『本朝祖師伝記絵詞』より後に増補改訂した形態であると主張する。跋によると、『本朝祖師伝記絵詞』の原本より約60年後の永仁4年（1296）11月（に完成もしくは書写）の草本を、同年12月下旬に顕智が書写したという。

この書写本は専修寺に保蔵されている。文章だけが抜書きされており、下巻のみ現存する。もっともその内容は『本朝祖師伝記絵詞』の巻第2から巻第4に相当し、「国家本」と同じく2巻本であったと考えられる。

『七箇条起請文』に始まり、頭光踏蓮、三尊出現の奇瑞、小松殿で歌を詠んだこと、上西門院への説戒、住蓮・安楽の死罪と法然の流罪、摂津・播磨のできごと、高階入道の館での問答、讃岐の善通寺を訪れたこと、勝尾寺に逗留したこと、勝尾寺納経時の聖覚・法然の説法、法然80歳で老病不食が進んだこと、法然の入滅と中陰の仏事、嘉禄の法難、随連のこと、信空の伝語などが綴られている。

基本的には『本朝祖師伝記絵詞』との共通部が多いが、相違点も見られる。具体的には、『七箇条起請文』が和文で僧名の序列も異なる、『本朝祖師伝記絵詞』では女人往

生の説法が記されている箇所に上西門院への説戒が配される、『三昧発得記』からの引用箇所が異なるなどの違い、住蓮・安楽の処刑、随連のことや信空の伝語など、『本朝祖師伝記絵詞』には見られない記事が存在する。また最大の相違点としては、『本朝祖師伝記絵詞』は天台色が強く浄土宗の教義に関する記述がほとんど見られないのに対し、この本では『七箇条起請文』、高階入道宅での問答、勝尾寺での聖覚・法然の説法などの内容まで詳細に記載されている。つまり『本朝祖師伝記絵詞』と共通する伝記部分に加えて、法然の法語や問答が極めて多量に記されているのが特徴と言える。
作成者名：斎藤蒙光

法然上人伝法絵流通（国華本）

書名よみ：ほうねんしょうにんでんぽうえるずう（こっかぼん）
書名別名：伝法絵流通
異本書名：本朝祖師伝記絵詞、法然上人伝法絵
著者名：耽空（著）／観空（図）
著者名よみ：たんくう／かんくう
著者名別名：湛空、正信坊湛空／源光忠
著者生没年：1176（安元2）-1153（建長5）／1204（元久1）-？
成立翻訳年：1237
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、複数人分蔵本（室町期（？）、書写者不明、下巻の残欠のみ）
写本奥書：1、（未調査）
活字本所載書：『法伝全』、『国華』705（国華社、1950）
参考文献：梅津次郎「新出の法然上人伝法絵について」（『国華』705、1950）、井川定慶『法然上人絵伝の研究』（法然上人伝全集刊行会、1961）、三田全信「法然上人伝の成立史的研究序説」（法然上人伝研究会『法然上人伝の成立史的研究』4、知恩院、1965）、三田全信『成立史的法然上人伝の研究』（平楽寺書店、1966）、中井真孝『善導寺蔵『本朝祖師伝絵詞』本文と研究』研究篇（仏教大学アジア宗教文化情報研究所、2007）
解説：『本朝祖師伝記絵詞』と同系列の異本。
　著者は『本朝祖師伝記絵詞』（善導寺本）と同じく、耽空および観空と考えられる。
　成立年は善導寺本に基づくならば、嘉禎3年（1237）。もっともこの本が書写した原本は、善導寺本よりも古い形態であると見るのが定説である。中井真孝はその理由として、善導寺本にはない画中詞を挙げる。画中詞は制作年代が後になる法然絵伝ほど省略されるので、後から付け加えたとは考え難く、むしろ古い形態の証拠となる。
　現存部の内容を善導寺本と比較すると、多少の相違点はあるがほぼ同内容で、法然の流罪から帰洛、入滅と荼毘に付すまでの部分が断片的に発見されている。その中でも、配流出発の際の絵、配流の途中の摂津および明石浦に関する画中詞、勝尾寺一切経の絵および画中詞、恩免の宣旨や法然の帰洛を惜しむ道俗に関する画中詞、聖覚開題讃歎の絵、法然の病床に侍る僧衆の名などが、善導寺本には見られない大きな特徴と言える。
　現存唯一の写本は終戦前後に1巻として巷に現れたが、後に18部に切断され掛幅の形に改装されて、細見良、松下健二、幸節静彦などの諸氏によって分蔵されるところとなった。『国華』第7号ではじめて紹介されたことから「国華本」と通称される。残欠1の冒頭には「下巻」と記されているが、内容は善導寺本の巻第3から巻第4に相当するので、もとは2巻本であったと推測できる。
作成者名：斎藤蒙光

法然上人秘伝

書名よみ：ほうねんしょうにんひでん
書名別名：黒谷秘伝、秘伝
著者名：隆寛（？）
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：13c-14c
成立地：日本
巻数：３
漢和：漢文
和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高野山中院御房蔵本（室町中期、真誉書写）
2、禿氏裕祥氏蔵本（室町期、書写者不明）
3、大谷大蔵本（1677（延宝5）、恵空書写）
4、大正大蔵本（1710（宝永7）、書写者不明）
5、大谷大蔵本（1718（享保3）、書写者不明）
写本奥書：1、（奥書なし）
2、（奥書なし）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
刊本所在：1、享保17（1732、仏教大・竜谷大・大谷大、『浄全』版の底本）
刊本の奥書刊記：1、（刊記なし）
活字本所載書：「法然上人伝記附一期物語・法然上人秘伝・法然上人事」（『仏教古典叢書』中外出版株式会社、1924）、『法伝全』（法然上人伝全集刊行会、1952）、『浄全』17
参考文献：妻木直良「法然上人秘伝解説」（『仏教古典叢書』中外出版株式会社、1924）、井川定慶『法然上人絵伝の研究』（法然上人伝全集刊行会、1961）、三田全信『成立史的法然伝の研究』（光念寺出版部、1966）
解説：法然上人の伝記。隆寛作と伝わる。しかし義山の『翼讃』には真偽未詳とし、真宗本派玄智、大谷派了祥も同様の指摘をしており、隆寛撰述説が疑われている。その理由として隆寛の寂年が安貞2年（1221）であるが、これ以後の記事（粟生野での荼毘・二尊院の建塔）も付け加えられている事や、本文中、法然の説く説法の内容に法然らしからぬ点がみえる事からも否定されている。妻木直良は隆寛にちかい門弟の談義書でないかと推測されている。内容は、書物が談義本的な性格が強いことから創作的な説話が多いが、法然廟の改葬など注目すべき記事もみられる。三田全信は伝歴部と説話部に分けて考えられ、伝歴については、（1）童名の異なる事（2）時国従兄弟斉藤兵衛ノ慰時定事（3）美作荘園の事（4）母の死の事（5）慶雅、一切経を上人に譲る事、（6）筑後尾合の権太義憲の事（7）阿波助の事、（8）嘉禄の法難の事。説話部は（1）念仏の功徳と滅除薬、（2）上人の登山に因む慈仁僧正円正の事（3）聖道門を捨てて浄土門に入られた先徳の事（4）鎮西の光明房入信の事（5）阿波助の事（6）重源、皇円、明遍の事（7）善勝房の発心出家の事（8）熊谷入道と筆捨法師の事（9）松虫鈴虫の事（10）筑前坂本郡の強盗江馬権之助発心の事、（11）江口神崎の遊女徳来の問法入水往生の事とする。

従来、江戸期の刊本だけであったことから、江戸時代の偽作とも考えられていたが、妻木が高野山中院において室町期の古写本を発見し、また禿氏祐祥も別に室町時代の古写本を発見したことから、本書の撰述が室町期に辿りうることが明らかとなった。古写本と版本の異同が甚だしく、原型を特定することは出来ない。禿氏本は和文平仮名本で上下2巻。中間と結尾を書いている残欠本であり『法然上人伝全集』に翻刻が載り、高野山中院本は漢文体和文で上中下の3巻本で『仏教古典叢書』にその翻刻がある。『浄全』の底本である享保17年（1732）の刊本は三巻本である。
作成者名：伊藤茂樹

防非鈔

書名よみ：ぼうひしょう
著者名：解阿
著者名よみ：げあ（？）
著者名別名：解阿弥陀仏
著者生没年：不明
成立翻訳年：1341（暦応4）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、安永4（1775、大谷大）
刊本の奥書刊記：1、（巻頭）安永四年乙未（1775）十月、摂州兵庫大道場西月山尽寺洞天謹識／（巻末）安永四乙未歳（1775）、洛陽七條道場　蔵板
活字本所載書：『日仏全』68、『時宗全書』1、『時宗聖典』下
参考文献：大橋俊雄「解題」『時宗全書』
解説：著者の解阿弥陀仏について、大橋俊雄は、序に「漸磨於高祖誨鏡、払三心四終之垢、伝先師相承威儀、防遮身口之過非」とあることから、一遍の門弟であり、「拭七十老眼」とあることから、文永8年（1271）生と推定している。成立は、奥書に「暦応第四之天甡賓初三之日拭病眼、終短毫是偏匪重当寺貫首之命、兼復為積善根結縁之功而已」とあるので、暦応4年（1341）と分かる。本書は、先師である一遍の滅後、門人の無知の僧尼が威儀を犯し戒律を破らないよう、梵網経の十重四十八軽戒に倣い、守るべき威儀や制戒48箇条を撰述したもので、過ちに対するの処罰方法も記す。梵網経を中心に他の経典を引用して示される規範は、殺生戒、偸盗戒といった一般的なものから、行法に関すること、着座次第、看病を粗略にしない、嗜好品・愛好品を持つべきでないことなど多様で、独特の構成となっている。
作成者名：坪井直子

菩提心讃

書名よみ：ぼだいしんさん
著者名：珍海
著者名よみ：ちんかい
著者名別名：禅那院珍海、珍海已講、越前已講、越洲
著者生没年：1092（寛治5）-1152（仁平2）
成立翻訳年：1128（大治3）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：活字本
活字本所載書：『浄全』15、『釈教歌詠全集』5、『日本歌謡集成』4
参考文献：多屋頼俊『和讃史概説』（法蔵館、1933）、筑土鈴寛『宗教文学・復古と叙事詩』（「筑土鈴寛著作集」1、せりか書房、1976）、大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）
解説：本書は珍海『菩提心集』の巻尾に付されている和讃である。七五調の74句の讃で、讃の調子も平安期のものらしく優雅であり、その成立年代が明確な和讃として和讃史の面からも評価されている。
主題は文殊菩薩を讃揚しつつ、阿弥陀仏への浄土往生を勧進するものである。文殊菩薩の教化の力によってこそ凡夫の発心は成立するという主張を柱に浄土往生を説くが、それは讃の前に付された『大乗本生心地観経』巻3の「文殊師利大聖尊、三世諸仏以為母、一切如来初発心、皆是文殊教化力」を受けての讃文である。なお、この文言は『往生要集』大文第2や『本朝新修往生伝』に沙門永尋が誦した伽陀として平安後期の文献に散見する（多屋頼俊）。『菩提心集』の項も参照のこと。
作成者名：能島覚

菩提心集

書名よみ：ぼだいしんしゅう
著者名：珍海
著者名よみ：ちんかい
著者名別名：禅那院珍海、珍海已講、越前已講、越洲
著者生没年：1092（寛治5）-1152（仁平2）
成立翻訳年：1128（大治3）
成立地：日本
巻数：2
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高野山金剛三昧院蔵本（12c後半-13c前半（？）、未調査）
2、西本願寺蔵本（文永5（1268）、書写者不明、『大蔵会展観目録』より転載）
写本奥書：1、（未調査）
2、大治三年歳次戊申（1128）八月六日沙門珍海記云々／文永五年戊辰（1268）五月十二日校合畢（花押）
刊本所在：1、元文1（1736、東京国立博物館・大谷大・京都大・種智院大・大正大・東京大・日本大・竜谷大・神宮文庫・薬師寺、宝洲註、書名『夾註菩提心集』・『菩提心集夾註』）
刊本の奥書刊記：1、（上巻末）文永五年戊辰（1268）五月十二日校合畢（下巻末）大治三年歳次戊申（1128）八月六日沙門珍海記云々／文永五年戊辰（1268）五月十二日校合畢（以下、未調査）
活字本所載書：『浄全』15
参考文献：大谷旭雄・坂上雅翁・吉田宏哲『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1992）、大野法道「菩提心集」（『仏書解説大辞典』9、1936）、恵谷隆戒「珍海已講著鎌倉古写本　安養知足相對抄に就いて」（『専修学報』2、1935）、坂上雅翁「珍海の往生思想」（『浄土宗学研究』10、1978）
解説：本書は珍海の他の著述のような仏教教義に関する議論を展開した著述ではなく、一般的な在俗者を主たる対象にしたものと考えられる。上下二巻、67もの問答で綴られている。また漢字仮名交じり文の形式からも本書の通俗性がみてとれる。
その内容は一々の問題に応答が繰り返されるため非常に多岐にわたる。そのなかで上巻は出離生死の道には念仏の

門が適していることを主張する。その念仏の内容は基本的に観想であるが、身口意に阿弥陀仏を礼拝し、仏身仏土を想い、名号を誦することも説く、続いて臨終には正念に住する必要性とその用心、更には本願への疑心や懈慢国への往生の注意を喚起している。そのような中でも、その根幹となることは菩提心を発すことであり、文殊菩薩の教化によってこそ、その発心が叶うとして文殊への帰依を勧説している。

一方の下巻には念仏生活における身の処し方、中有と仏事の意義、尼の生活に関する言及、兜率・極楽の優位論にも触れ、特に極楽への往生が平易で優れていることを述べる。しかしそのような優劣を展開しながらも、各々の随縁の法に依ることを尊重している点は同じ著者による『安養知足相対抄』の主張と同様である。また、九品の階位に対する理解が善導のそれとは異なり、三論の祖師である吉蔵のものを踏襲することは、三論の学者珍海の立場が表れている部分でもあるという指摘もある。

作成者名：能島覚

法花行者順次往生論

書名よみ：ほっけぎょうじゃじゅんじおうじょうろん
著者名：俊経入道
著者名よみ：しゅんきょうにゅうどう
著者名別名：藤原俊経、隆心
著者生没年：1113（天承1）-1191（建久2）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
参考文献：『大日本史料』4-3
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の俊経入道とは参議正三位の藤原俊経だと考えられる。元暦2年（1185）に出家し、隆心と名のった。また文章博士も務め、平治・永万・安元・寿永の年号を勘申した人物でもある。

本書の内容は『長西録』に本書の細注として「依法花」とあることから、『法華経』に基づいた往生の行業が説かれたものと推測される。

作成者名：能島覚

法水分流記

書名よみ：ほっすいぶんるき
著者名：静見
著者名よみ：じょうけん
著者名別名：了日、良日
著者生没年：1314（正和3）-1383（永徳3）
成立翻訳年：1378（永和4）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、愛知岡崎真浄院蔵本（1678（延宝6）、霄翁書写）
2、大谷大蔵A本（1700（元禄13）、沢了書写）
3、大谷大蔵B本（1702（元禄15）、休是書写、A本の写し）
写本奥書：1、本云、右系図者和州来迎寺開山静見上人御集記之秘書也、粗依伝承頻令競望之処以御哀憐蒙許可者也、但於初学之見聞者斟酌之義在之、努力不可令他見云云、仍後代学者可察之者歟、時也永正七年庚午（1510）十一月二十八日於和州山辺荘戒長寺光舒令書写之訖、深草末学康翁三十四歳／今延宝六己未年（1678）十二月三日於三州碧海郡中嶋盧庵山崇福寺雪窓下写功竟、深草負笈子霄翁俊霽
2、本曰、右此系図者、粗依承及頻致競望之間以御哀憐預許可者也、但於初心者之見聞者斟酌之子細等在之、努力不可令他見云云、仍後代持者尤可被察之者也、于時永正七年庚午（1510）十一月二十八日於和州山辺庄戒長寺光舒軒写之、住所三州立信寺深草苗裔康翁二十四歳、右依叵背賢命雖為秘書令相伝之筆、康翁判／今イ、右此系図者一宗大綱也、蒙法蔵寺康翁老之許可書写之訖、大永七年丁亥（1527）八月二十七日於三州吉良庄満国寺住居之時誌之畢、深草余風沙門伝空賢智〈四十六歳在判〉／異本曰、右系図者和州来迎寺開山静見上人御集記之秘書也、粗依伝承頻令競望之処以御哀憐蒙許可者也、但於初学之見聞者斟酌之義在之、努力不可令他見云云、仍後代学者可察之者歟／予年久伝承此系図希望不浅之処去年仲秋之下旬依本山客殿造立為門輩勧化承厳命下向之砌於三州坂崎之邑西方寺有不慮子細令拝見之間欣喜無限、恩借之令帰京以余隙拝写之、後見之衆輩仰称名回向者也、維時元禄第九甲子天（1696）孟春念八日草山廟之末学於深草本山円福寺書写之、匪空書〈生歳二十有九〉／（以下別筆）元禄十三歳次庚辰（1700）六月朔日、雒北十念寺十八世願往生沙門明空沢了拝書（印）
3、（未調査）元禄十五年午（1702）四月念二日書写、栄正寺休是
活字本所載書：『法水分流記』（山田文昭解題翻刻、「戊午叢書」1、仏教史学会、1918），菊地勇次郎「法水分流記」（『日本仏教史』1、3、1957），『真宗史料集成』7伝記・系図（同朋社、1975），牧哲義「『吉水法流記』『法水分流記』の翻刻とその研究　第一部資料篇」（『東洋学研究』30、1993），福田行慈・野村恒道『法然教団系譜選』（青史出版、2004），河住玄『浄土宗古系譜』（欣求庵）
参考文献：伊藤真徹・宅見春雄『法水文流記・蓮門宗派』（恵谷隆戒跋、和装謄写版、1934）、河住玄『浄土宗古系譜』（欣求庵）、福田行慈・野村恒道・中野正明「日本浄土教諸系譜の研究―法然門下系譜の脈流考」（『仏教文化研究』30、1984）
解説：法然に始まる浄土宗の師弟の次第を記した法系図で最も著名なものである。法然門下の諸流について、信空の白川門徒、隆寛の多念義、弁長の鎮西義、幸西の一念義、親鸞の大谷門徒（一向宗）、湛空の嵯峨門徒、証空の西山義、源智の紫野門徒、長西の九品寺義（諸行本願義）の順に記載され、末尾に、俗人を含むその他の法然門下139名と、直接には法然の教えを継承していない浄土教の学匠11名などが付載されている。

他の系図と比較した場合、序列がほぼ生年順であること、基本的に房号ではなく諱（実名）を掲示すること、寺院歴代を優先して記載することなどが特徴として挙げられる。また、親鸞の系統に関する記述は、真宗関係以外の中世文献に親鸞の名が見出し難いことを考慮すると、貴重な史料といえる。

著者静見は西山深草派に属し、本系図に「大和来迎寺開山」と注記されているが、行実の詳細は不明である。本書成立に先立つこと3年、同じ深草派の尭恵も同様の系図『吉水法流記』を編纂しているが、参照関係は希薄に見える。

本書は主に大谷大所蔵の2写本を中心に研究が進められ、存在しない年号の記述などから、静見の所属や成立事情への疑問も提示されてきた。しかし、それらは牧哲義によって翻刻紹介された真浄院蔵本によって、ほとんどが伝来過程の誤写として解決されるものであり、今後は諸本を視野に入れた研究が期待される。

作成者名：稲田廣演

本朝新修往生伝

書名よみ：ほんちょうしんしゅうおうじょうでん
書名別名：新修往生伝
著者名：藤原宗友
著者名よみ：ふじはらむねとも
著者生没年：11c（？）-12c頃
成立翻訳年：1151（仁平1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、名古屋真福寺蔵本（1258（正嘉2）、乗智書写）
2、日本大情報センター蔵本（書写年不明、書写者不明、花廼家文庫、黒川真頼旧蔵）
3、宮内庁書陵部蔵本（未調査）
4、国立公文書館蔵本（江戸時代、書写者不明）
写本奥書：1、本云、貞応元年（1222）六月四日、於西山峯方丈草菴書写之了、先年之比、雖書写此伝既与他人了、仍重馳筆者也、是則為、自励緩心、今他生勇心矣、唯願四十一人正衆必垂来迎、沙門慶政謹題之／正嘉二年（1258）正月晦日酉剋、於西山法花山寺書写之了、乗智四十七／从慶安三［■■■■］三十一年当寺二十六世信［■］代
2、右新修往生伝者、続群書類従之内板本也（未調査）
3、（未調査）
4、1に同じ
刊本所在：1、元禄10（1697、静嘉堂文庫・大谷大・九州大・慶応大・大正大・名古屋大・国文学研究資料館・お茶の水図書館成簀堂文庫・陽明文庫・旧彰考館）
刊本の奥書刊記：1、元禄十年丁丑（1697）十月十五日、書林梅邨弥右衛門、茨木多左衛門
活字本所載書：『続群書類従』8上、『日本往生全伝』（永田調兵衛、1882）、『日仏全』107、『続浄』6、『改訂史籍集覧』19、日本思想大系7『往生伝・法華験記』、国文学資料館編『往生伝集』（「真福寺善本叢刊」2-7、臨川書店、2004）
参考文献：重松明久『日本浄土教成立過程の研究』（平楽寺書店、1964）、関口忠男「本朝新修往生伝」（古典遺産の会編『往生伝の研究』、新読書社、1968）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975）、志村有弘『往生伝研究序説』（桜楓社、1976）
解説：著者の美濃権守藤原宗友は、三善為康や藤原為隆らと親交があった文人貴族であったと推測される。本書は宗友の自序によれば仁平1年（1151）の成立で、承保1年（1074）から仁平1年（1151）までに没した41人の往生人の伝を、1話から5話については没年不明で、6話以降は没年順に載せる。俗人の往生者16人には中下層の貴族が多いことが特色で、著者の交遊を反映してか学者が7人もいる。往生の行業は念仏が多いが、法華経や密教系の外、四天王寺信仰もあって雑多であり、数量信仰もみられる。『後拾遺往生伝』中下巻と9話が同内容であり、このことについて、『後拾遺往生伝』成立後に表現を若干変えて取りいれたとする見方と、『本朝往生伝』と『後拾遺往生伝』中巻の執筆時期が同じ頃であり、為康と親交のあった著者は為康と知識の交換ができたとする見方がある。
作成者名：坪井直子

本朝祖師伝記絵詞（四巻伝）

書名よみ：ほんちょうそしでんきえことば（しかんでん）
書名別名：伝法絵流通、善導寺本
異本書名：法然上人伝法絵、法然上人伝法絵流通
著者名：耽空（著）／観空（図）
著者名よみ：たんくう／かんくう
著者名別名：湛空、正信坊湛空／源光忠
著者生没年：1176（安元2）-1153（建長5）／1204（元久1）-？
成立翻訳年：1237
成立地：日本
巻数：4
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、筑後善導寺蔵本（室町期、書写者不明）
〈影印版〉:『法然上人絵伝集成1 本朝祖師伝記絵詞（善導寺本）』（浄土宗出版、2008）
写本奥書：1、（1巻末）此ノ絵詞伝四巻星霜経リテ本末トモ知ル人無シ、予明治十二乙卯年（1879）七月華頂山ニ登ルノ次携テ之レヲ法主ニ質シ修補スル者也、則チ第四之巻奥ニ大教正順徹定上人手親跋ヲ書シテ証セラル、乞後々ノ法将本宗最勝之玉軸タレハ厳ニ保護セラル可シ、鎮西本山、明治十二年（1879）十二月、権少教正龍祐善
（2巻末）嘉禎三年丁酉（1237）十一月二十五日筆功已畢、此絵披見之人奉礼三尊之像、其詞説明之輩読誦大経之文願身口意之行念阿弥陀之名往生極楽之志無二勿疑之也、爰耽空執筆而草旨趣観空和墨摸書図、願結一仏浄土之縁、共証九品蓮台之果乃至無遮平等、敬白、耽空＜在判＞、観空＜在判＞、おもひ入やすち筝ゆミハりの月のつよくもひくかたそかし、弓はりの月ハ大地を的としのおもひ入よりはつしけそなき
（4巻末）嘉禎三年（1237）五月に始之、同十一月二十五日於相州鎌倉八幡宮本社之辺図之、鎮西筑前国之住人左兵衛尉源光忠＜法名観空行年三十三云々＞、願主沙門耽空＜六十九＞、
人ことにおしむけしきやみえぬらん山のこころにいれぬ月かけ、月をなをもとのすミかにやとせかしいてしも山のかけならぬかは、わきたれも往生際にうせにける阿弥陀仏をとかりやにして、抑この絵ハふかき心さしあり、特留此経之傍に為挿先師之遺徳止住百歳之間欲備後代之美談者也、然則往日駅路之斗藪ハ翻為なり、界道林池之経行ノ今上子城之宣命者宜待大閣講堂之法輪矣者、往生極楽之類将得天眼天耳他心智、欣求浄土衆盍照人界人身願楽思也、知見無誤者早出有為之家、本誓有馮速入無為宮而已、耽空＜在印＞／永仁二年甲午（1294）九月十三日書畢、執筆沙門寛恵＜満七十＞雖手振目闇為結縁所之書也、後見念仏申可訪給、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏／福岡県下筑後国山本郡善導寺蔵本朝祖師伝記絵詞古本四巻、寺主権少教正不破祐善上人携之来視余、余閲之、跋曰嘉禎三年丁酉（1237）十一月二十五日功畢、詞者耽空画者観空、距今凡六百四十五年也、其詞画共古拙、然書体有古文字画中亦有所可取、当時淳朴之風足以見焉、余按此巻如随見聞而登録大師化導之事蹟者、且夫嘉禎三年（1237）隔大師入滅之年僅二十五年、然則大師行状図本当以此巻為嚆矢、又按九巻伝十巻伝共文永以後之著述而増補事実潤色文体、又如吾知恩院蔵四十八伝所謂集而大成者也、然而世之人知有此本者甚罕、故書之備博雅之参稽、時明治十二年（1879）八月念五日、大教正華頂山順徹定、（印）（印）
（『善導寺蔵『本朝祖師伝絵詞』本文と研究』に基づく）
活字本所載書：『法伝全』、『浄全』17、『本朝祖師伝記絵詞』（善導寺、1912）『法然上人絵伝集成1 本朝祖師伝記絵詞（善導寺本）』（浄土宗出版、2008）
参考文献：中澤見明『真宗源流史論』pp.34-67（法蔵館、1951）、田村円澄『法然上人伝の研究』（法蔵館、1956）、井川定慶『法然上人絵伝の研究』（法然上人伝全集刊行会、

1961)、三田全信「法然上人伝の成立史的研究序説」(法然上人伝研究会『法然上人伝の成立史的研究』4、知恩院、1965)、三田全信『成立史的法然上人伝の研究』(平楽寺書店、1966)、中井真孝『善導寺蔵『本朝祖師伝絵詞』本文と研究』研究篇(仏教大学アジア宗教文化情報研究所、2007)

解説:耽空によって作成された法然絵伝。法然伝のうち、絵伝としては最古のもの。

詞書の執筆者は本書の願主でもある耽空、絵図は観空(源光忠)。耽空については正信坊湛空と同一人と見なすべきか否かが注目される。嘉禎3年(1237)に耽空69歳であったという記述が湛空の年齢との間に齟齬が生じることなどから、望月信亨や今岡達音は別人説を唱えたが、音通の別字による名前表記は他にも見られ、善導寺本の4巻には誤字脱字が多く年齢も誤写の可能性があること、湛空の師にあたる信空に敬称をつけることなどから、三田全信や中井信孝は同一人説をとり、現在はそれが一般的見解である。観空は跋文によると俗名は源光忠、筑前の人で左兵衛尉の職につき、耽空の同法であったという。

唯一の写本である善導寺本は、その巻第1・2の冒頭に「本朝祖師伝記絵詞」と書名が記されているが、それは後の異筆であり、巻第3の冒頭に記される「伝法絵流通」が本来の書名であると考えられる。また跋文には永仁2年(1294)寛恵の書写とあるが、伝存本はその寛恵書写本をさらに室町期に書写したものと考えられる。もっとも中井真孝は巻第1・2のみ、それよりも古い異本からの書写であると指摘している。また同系列の異本に、国華本と呼称される『法然上人伝法絵流通』と高田専修寺蔵『法然上人伝法絵』があるが、それらについてはそれぞれの項目を参照されたい。

作成年は嘉禎3年(1237)で、法然滅後25年に当たる。その正月25日から11月25日までかけて完成したという。初期に成立した法然伝の中で作成年が明確なものは少なく、他の伝記の成立年を推定する場合に、本書が一つの基準となる。

巻第1は法然の誕生から父の死を経て比叡山に登り、修学の末の嵯峨参籠および南都遊学までを記し、三昧体験や二祖対面の絵図をはさみ大原問答を記す。巻第2は上西門院や高倉天皇、後鳥羽法王や後白河法皇など、貴人への授戒や説戒を列記しつつ、『七箇条の起請文』など法難への兆しも記す。巻第3は法然の流罪から帰洛までの事跡を記す。巻第4は女人往生の説法に始まり、法然の入滅から中陰の法要、公胤の帰浄と往生などを記し、嘉禄の法難に言及する。

他の初期成立伝記と比較すると、嵯峨参籠や貴人への説戒、法然の中陰や法難に関する具体的な記述など、本伝記をもって初出とする事跡が多く見られるが、浄土宗の教義にはほとんど触れず、戒師としての面や三昧体験などから法然を権威づけようとしている。中井真孝はその理由について、作者である耽空が、未だ法難の影響が残る当時の世相を考慮したためであると主張する。

作成者名:斎藤蒙光

本朝法華験記

書名よみ:ほんちょうほっけげんき
異本書名:大日本国法華経験記、大日本国法花験記・日本法花験記、法華経験記、法華験記
著者名:鎮源
著者名よみ:ちんげん
著者生没年:不明
成立翻訳年:長久年間(1040-1044)(?)
成立地:日本
巻数:3
漢和:漢文
写本等の存欠:写本
刊本
活字本
写本所在:1、和歌山高野山宝寿院蔵本(1153(仁平3)、珍光書写、上巻のみ)
2、名古屋真福寺蔵本(1336(建武3)、書写者不明、上巻8話、下巻16話の抄出本)
3、彰考館文庫蔵本((上巻)1701(元禄14)、書写者不明/(中巻)書写年不明、書写者不明/(下巻)1685(貞享2)、書写者不明、合本)
4、旧彰考館蔵本(未調査、焼失(?))
写本奥書:1、仁平三年癸酉(1153)仲夏中旬於多武峯書了、珍光一交了
2、建武三年丙子(1336)二月二十八日、令相伝了(花押)
3、(上巻末貼紙)右一巻元禄辛巳(1701)中秋獲于京師写之
(下巻巻初、薬恒の『本朝法華験記』の横に)右出扶桑略記第二十一宇多帝紀条下、今考下巻無此事、蓋知所闕巻也、貞享乙丑(1685)冬十一月十三日、彰考館識
(下巻末)于時正和第五執徐歳(1316)林鐘中旬丑[■]、於奥州桃生郡河俣宿所書写畢、執行行年
(下巻貼紙)貞享乙丑季(1685)春 武州金沢称名寺文庫本写畢(未調査)
4、(未調査、1708(宝永5)年写、中下二巻は所蔵されていたが焼失(?))
刊本所在:1、享保2(1717、大谷大・九州大・日本大・竜谷大・大正大・東洋大・国立公文書館・宮内庁書陵部・お茶の水図書館成簀堂文庫・薬師寺・陽明文庫)
2、刊年不明(竜谷大・彰考館文庫)
刊本の奥書刊記:1、(未調査)
2、(未調査)
活字本所載書:日本思想大系7『往生伝・法華験記』、『高野山宝寿院蔵　日本法花験記』(「京都大学国語国文資料叢書」38、臨川書店、1983)、千本英史「翻刻・真福寺蔵『日本法花験記』(上)(下)」(『学大国文』30・31、1987、1988)、千本英史「真福寺文庫本翻刻」『験記文学の研究』(勉誠出版、1999)、『続群書類従』8上、国文学研究資料館編『伝記験記集』(「真福寺善本叢刊」2-6、臨川書店、2004)
現代語訳書:山下民城『法華験記』(国書刊行会、1993)
参考文献:重松明久『日本浄土教成立過程の研究』(平楽寺書店、1964)、井上光貞『日本古代の国家と仏教』(岩波書店、1971)、大曽根章介「『法華験記』の原型について」(『中央大学文学部紀要』39、1977)、森正人「法華霊験譚の享受と編纂—唐代験記類と百座法談聞書抄・探要法華験記・今昔物語集・本朝法華験記—」(『中古文学と漢文学Ⅱ』、「和漢比較文学叢書」4、汲古書院、1987)、大曽根章介「彰考館本法華験記について」(『大曽根章介日本漢文学論集』3、汲古書院、1998)、千本英史『験記文学の研究』(勉誠出版、1999)、森正人「本朝法華験記の説話と表現」(『論集説話と説話集』、和泉書院、2001)、永藤端編『法華験記の世界』(三弥井書店、2005)

解説:著者の鎮源は経歴不明であるが、本書の奥書に「首楞厳院沙門鎮源」とあり、横川首楞厳院の僧であったことがわかる。他に「来迎院文書」所収「霊山院釈迦堂毎日作法」に記された結縁者に名がみえることから、源信の二十五三昧会に連なる法華講集団の一員であったようだ。但し、『扶桑略記』所引の「法華験記」が叡山智源撰と述べ、また高野山宝寿院蔵本にも「智源撰」とあるなど、著者を「智源」とするものもみられる。なお鎮源と智源の関係については定説をみない。

本書は奥書に「長久年之年季秋」とあり、書中に長久4

年（1044）とあることから、この頃に成立したと推定される。巻上40話、巻中40話、巻下49話（但し第84話本文欠）で構成され、第1話の聖徳太子、第2話の行基から始めて、比丘第3-93話、在家沙弥第94-97話、比丘尼第98-100話、優婆塞第101-116話、優婆夷第117-124話、異類第125-129話と配列される。この構成は『日本往生極楽記』にならったものとみられる。序には唐義寂の『法華験記』（現存せず）の流布に触発されて、「都鄙遠近、緇素貴賤」の見聞を集録したとあり、『法華経』の受持、読誦による様々な日本の霊験譚が記される。法華経による様々な効験を記録することが目的のため、必ずしも往生の様相を語るわけではないが、極楽往生、兜率天往生を遂げる者も多く、中には忉利天への転生もみられる。本書はまた『往生極楽記』『三宝絵詞』から説話を摂取し、後世の『拾遺往生伝』『三外往生記』『今昔物語集』などに強い影響を与えた。
作成者名：坪井直子

凡頓一乗

書名よみ：ぼんとんいちじょう
著者名：幸西
著者名よみ：こうさい
著者名別名：成覚房、鐘下房少輔、物部氏（俗姓）
著者生没年：1163（長寛1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：乗専撰『最須敬重絵詞』5（『真聖全』3、p.846）
参考文献：住田智見『浄土源流章解説』（法蔵館、1925）、石田充之『鎌倉浄土教の研究』（百華苑、1966）、安井広度『法然門下の研究』（法蔵館、1968）、浅野教信「幸西教学と親鸞聖人」（『竜谷教学』4、1969）、善裕昭「幸西の一念義（一）」（『仏教大学大学院研究紀要』18、1990）
解説：本書は現存しない。
　乗専（1274-1357、生年には1295年説あり）撰『最須敬重絵詞』5に、幸西の著作として書名のみが挙げられている。覚如（1272-1351）は諸流派研究のため他門の先学に会いに行っており、一念義は慈光寺の勝縁から習学した。その折に書写を許された幸西著述の一つである。
　書名から推測すると、幸西の主著『玄義分抄』および『略料簡』に説示される「凡頓一乗」について述べたものであると考えられる。「凡頓一乗」の「凡頓」とは『略料簡』に説かれる幸西独自の教判論であり、聖道門の頓教を「聖頓」（為聖）、それに対して浄土門の頓教を「凡頓」（為凡）としている（詳しくは『略料簡』を見よ）。そして『玄義分抄』において念仏三昧を「凡頓一乗」、すなわち凡夫を出離生死せしめる唯一の教法であると説く。その「凡頓一乗」という、幸西の仏教観の一端を現したものであると推測される。
作成者名：伊藤瑛梨

末代念仏授手印

書名よみ：まつだいねんぶつじゅしゅいん
書名別名：授手印、二重巻物
著者名：聖光
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立翻訳年：1228（安貞2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
刊本
写本所在：1、熊本往生院蔵本（1228（安貞2）、聖光真筆本）
2、筑後善導寺蔵本（1228（安貞2）、聖光真筆本）
3、博多善導寺蔵本（1228（安貞2）、聖光真筆本）
4、佐賀大覚寺蔵本（1228（安貞2）、聖光真筆本）
5、京都清浄華院蔵本（鎌倉期、書写者不明）
6、滋賀新知恩院蔵本（1280（弘安3）、未調査）
7、京都清浄華院蔵本（1316（正和5）、証賢書写）
8、博多善導寺蔵本（1317（清和6）、道光書写）
9、福井西福寺蔵本（1322（元亨2）、寂恵書写）
10、愛媛大超寺蔵本（1322（元亨2）、証賢書写）
11、京都清浄華院蔵本（1323（元亨3）、証賢書写）
12、滋賀新知恩院蔵本（1324（元亨4）、寂恵書写）
13、京都清浄華院蔵本（1327（嘉暦2）、証賢書写）
14、東京伝通院蔵本（1330（元徳2）、証賢書写）
15、三重念仏寺蔵本（1332（元弘2）、証賢書写）
16、千葉浄福寺蔵本（1342（暦応5）、未調査）
17、竜谷大蔵本（『相伝書』の内）
18、東京増上寺蔵本（1436（永享8）、未調査）
19、東京増上寺蔵本（1442（嘉吉2）、了智書写）
20、京都知恩寺蔵本（1453（享徳2）、慶竺書写）
21、兵庫清水寺蔵本（1527（大永7）、量峻書写）
22、千葉大厳寺蔵本（1583（天正12）、虎角書写）
23、京都知恩院蔵本（1584（天正13）、聡補書写）
24、福井西福寺蔵本（1593（文禄2）、良智書写）
写本奥書：1、于時安貞二年（1228）十一月二十八日以自筆書無時形見（花押）、授手印、源空—弁阿—聖護—教弁（別筆）—源与（別筆）
2、于時安貞二年（1228）十一月二十八日申時以自筆之（花押）、／授手印、安貞二年十二月十五日、肥後国宇土伊津野西光院、奉施入、授手印一通、右件授手印者末代悪世之宝物也、弁阿与生極楽為師弟也、故為一切衆生往生極楽作此文施入之者末代之人々無諍無疑勤念仏決定可遂往生仍録施入之状以納寺尤承知不可出寺外之状如件、安貞二年十二月十五日沙門弁阿（花押）
3、于時安貞二年（1228）十一月二十八日無時形見（花押）／源空—弁阿—円阿—信教—恵阿—楽恵—色阿、博多津光明山善導寺安置之（別筆）
4、于時安貞二年（1228）十一月二十八日以自筆書〈無時形見〉（花押）、授手印、源空—弁阿—唯称／此授手印善導寺開山聖光上人御自筆也表書御判形直判也、于時貞和二年六月十四日、肥後国満善寺住全寂（花押）／此一軸吾山開祖禅師之真蹟聊無疑者也、拝見之日補虫喰而加印證焉、時文政三龍集庚辰初夏仏誕日鎮西本山五十世見住満阿弥陀仏豊恂（花押）
5、上件文證為停止一念之念仏之僻見之義法然上人御在生之時書進二箇條之義所賜御外題現前也者末代念仏之末葉以之為證文以数遍為本尤可令遂往生之大業也穴賢々々仍弁阿（花押）／此授手印善導寺ノ上人御自筆乃本也、弘安十三年三月二十四日、然阿弥陀仏（花押）
6、（未調査）
7、（未調査）
8、（未調査）
9、（未調査）
10、（未調査）
11、（未調査）
12、（未調査）
13、（未調査）
14、（未調査）

15、（未調査）
16、（未調査）
17、（未調査）
18、（未調査）
19、（未調査）
20、（未調査）
21、愚僧苟雖為癡鈍幸［■］宿運、酌黒谷之正流、居浄土之正［■］相承在忌耳弘通存心、以相伝之正義、授沙門道栄畢、宜持先聞可備安心決定之券契、仍以両手為法験耳／大永七季六月二九日、前浄華院沙門良春（嵐瑞澂「播州清水寺蔵の末代念仏授手印について」（『仏教論叢』23、1979）による）
22、（未調査）
23、（未調査）
24、（未調査）
刊本所在：1、明治14（1909、華頂山）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『浄全』10、『浄土伝燈輯要』上、『昭和新纂国訳大蔵経』「宗典部」、『大正蔵』83（No.2613）、『浄土三巻書』（1883）、『昭和新訂末代念仏授手印』（林彦明編、土川勧学宗学興隆会、1930）、『昭和新訂三巻七書』（林彦明、林勧学古希記念会、1938）
参考文献：林彦明編『昭和新訂末代念仏授手印』（土川勧学宗学興隆会、1930）、小西存祐「国師の著作」（柴田玄鳳編『三上人の研究』、三上人遠忌事務局、1935）、林彦明『昭和新訂三巻七書』（林勧学古希記念会、1938）、阿川文正『聖光上人伝と『末代念仏授手印』』（善導寺、2002）、阿川文正「伝法史上における『授手印』の意義とその地位」（『仏教文化研究』16、1970）、柴田哲彦「国師本『末代念仏授手印』について」（『仏教文化研究』16、1970）、大橋俊雄「向阿本『末代念仏授手印』について」（『仏教文化研究』16、1970）、嵐瑞澂「播州清水寺蔵の末代念仏授手印について」（『仏教論叢』23、1979）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。

本書の初めに「究竟大乗浄土門」「諸行往生称名勝」「我閣万行選仏名」「往生浄土見尊体」の要偈があり、次で条文、六重22件の法数について詳説する。初めの要偈は、本書の袖書であり、聖光真筆本にはこの偈文はなく、三祖良忠の門弟に伝授されたものにはいずれもこの偈文がある。次に六重とは、五種正行、正助二行、三心　五念門、四修、三種行儀のことであり、22件というのは、六重の中に22の法数があることをいう。最後に六重22件すべて、一行三昧に帰結することを記し、三心・五念・四修・三種行儀、そのいずれもが皆南無阿弥陀仏の一行に帰結する所以を明らかにし、法然上人の「源空が目には三心も五念も四修も皆ともに南無阿弥陀仏に見ゆるなり」（『浄全』10、p8）という言葉をのせて法然上人の念仏の真の精神は念仏の一行に帰する所以を述べている。伝法上この箇所を「奥図の伝」と呼び、法然上人の真精神である所以を立証するために両手印を押して証明とし、終わりに「念仏往生浄土宗血脈相伝手次の事」という伝法相伝の手次が記されており、裏書きには別時念仏に参加した門弟の名を記し、最後に法然上人門流の異義邪説を記す。
作成者名：米沢実江子

曼陀羅八巻書

書名よみ：まんだらはちかんしょ
書名別名：曼陀羅八巻之記
著者名：尭恵
著者名よみ：ぎょうえ
著者名別名：善偉房尭恵、善偉
著者生没年：1328（嘉暦3）-1395（応永2）
成立翻訳年：14c
巻数：8
散逸文献の文献名出典：明空沢了『当麻曼陀羅諸鈔標目』
解説：尭恵が著したとされる当麻曼陀羅の注釈書。粟生光明寺37世明空沢了が同寺に寄付した書籍の目録には「曼陀羅八巻之記　一巻」との記載があるが、その書籍群は享保19年（1734）の火災に際してほとんど焼失したため、現存しない。わずかに、沢了の著した『当麻曼陀羅諸鈔標目』に付された注記に「曼陀羅尭恵上人八巻書、全部八巻、尭恵上人諱号善偉住洛陽円福寺、此書外教相書物『選択』『論註』等各有八巻之疏鈔等云云」とあることから、当時実在したことがうかがえるに過ぎない。浄土諸流の教義を盛んに引用・比較する尭恵の学風から、本書もそのような内容であったと予想され、曼陀羅注釈の歴史的研究における重要な資料となった可能性を思うと、その散佚が惜しまれる。
作成者名：稲田廣演

三井往生伝

書名よみ：みいおうじょうでん
著者名：昇蓮
著者名よみ：しょうれん
著者生没年：12c-13c
成立翻訳年：1217（建保5）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、早稲田大教林文庫蔵本（近世中期、厳覚書写（？）、下巻欠）
写本奥書：1、（未調査）
活字本所載書：田嶋一夫「教林文庫本『三井往生伝』翻刻と研究」（伊地知鉄男編『中世文学資料と論考』、1978）、『続天台宗全書』12
参考文献：田嶋一夫「教林文庫蔵『三井往生伝』」（『説話文学研究』8、1973）、志村有弘『往生伝研究序説』（桜楓社、1976）、田嶋一夫「三井往生伝編者考―昇蓮と法然教団との関わりを中心として―」（三谷栄一・ 国東文磨・ 久保田淳編『論纂説話と説話文学』（西尾光一教授定年記念論集、笠間書院、1979）、田嶋一夫「中世往生伝の研究」（『国文学研究資料館紀要』11、1985）
解説：本書は比叡山雞足院教林坊の蔵書であった教林文庫に所蔵されていた孤本で、編者昇蓮は今のところ不明とせざるを得ない。昇蓮の序によれば、上下二巻各24人にさらに2人を加えた計50人の構成であったようだが、現存するのは上巻24人のみで、他に『両峰問答秘抄』に下巻中の2名が引用されている。

序の「日本ノ往生伝ハ……多ク延暦寺ヲ載セテ諸寺ヲ載セズ」、「智証大師ノ遺風ヲ扇デ、聊カ園城ノ門葉ヲ拾フ」からは、延暦寺（山門派）に対して三井寺（寺門派）の往生者を編集しようとする意図が明確にみられる。そのことは上巻の第一が円珍の往生で、以下円珍の弟子など三井寺の重要人物の往生が集められていることからも判る。
作成者名：坪井直子

三河念仏相承日記

書名よみ：みかわねんぶつそうじょうにっき
著者名：不明
著者生没年：不明
成立翻訳年：14c頃
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、愛知東泉寺蔵本（南北朝期、書写者不明）
〈影印版〉:平松令三「新発見の古写本『三河念仏相承日記』（『教学院紀要』15、2007）
2、愛知上宮寺蔵本（江戸期、書写者不明）
〈影印版〉:『蓮如・ルター・民衆』（岡崎市美術博物館、1998）
〈影印版〉:『よみがえる上宮寺の法宝物』（太子山上宮寺、2004）
写本奥書：1、（未調査）
2、イマ三河ノ念仏弘通ノミナモトヲシルスコトハ高田ノ顕智ヒジリノオンモノカタリナラシニアカソフノ信願ヒシリノイニシヘノオンモノカラリニツキテタイカイハカリヲシルストコロナリ、ココロアラン人コノヲモキヲモッテ存知アルヘキモノ也、コノホカ和田ノ信寂ヒジリイニシヘヲシタイ夫妻トモニタカタヘオンマイリノ事レキセン也、シタカイテアマ性空ノオンバウ念仏サウテンニヨリテ顕智ヒジリノミエイアンチノ事レキセン也、シカレハ寂静ノオンハウニイタルマテシサイアリシ事トモ也、建長八年丙辰ヨリ貞治三年甲辰マテ百九年、法然上人辰マテ百五十三年、親鸞聖人辰マテ百三年、貞治三年甲辰九月二日、人王八十五代後堀川院御宇、嘉禄二丙戌建立親鸞聖人五十四歳、下野国大内庄、高田専修寺開山親鸞聖人
活字本所載書：『真宗史料集成』1、脊古真哉「『三河念仏相承日記』の史料論的検討」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』25、2006）、細川行信『真宗成立史の研究』（法蔵館、1977）
参考文献：小山正文「三河念仏相承日記の一考察」（『日本歴史』391、1980）、小山正文「三河念仏相承日記の薬師寺」（『日本歴史』、1981）、平松令三「三河のリアルタイムで書いた上宮寺の『三河念仏相承日記』」（『よみがえる上宮寺の法宝物』（太子山上宮寺、2004）、脊古真哉「『三河念仏相承日記』の史料論的検討」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』25、2006）、平松令三「新発見の古写本『三河念仏相承日記』（『教学院紀要』15、2007）
解説：三河地方における親鸞門流の起源及び展開について記したもの。
　著者は不明。
　内容は大きく2段に分かれており、前半部分では建長8年（1256）10月13日に、京へ上洛中であった真仏・顕智らが三河の薬師寺に立ち寄ったこと、及び上洛後、関東へ下向する際に顕智が三河で教化し多くの人々がその教えに帰依したことを伝えている。帰依した人物として、後にこの地方の真宗勢力を支えていく円善や信願といった名前が挙げられ、計35名の帰依者がおり、庄司太郎や信願房らによって念仏の道場が建立されたことを伝えている。後半部分では、三河地方から関東の高田へ参詣する人々が存在しており、東殿の御前や性善坊らが高田に留まり死去したことや慶願、了念が顕智と共に関東に行ったことを伝えている。
　本書は従来、江戸期の書写本である上宮寺本しか知られておらず、史料的価値について様々な推測が生まれたが、東泉寺蔵本が発見されたことにより、史料的価値は確定したと思われる。
作成者名：藤田真隆

眉間白毫集

書名よみ：みけんびゃくごうしゅう
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）、『転法輪抄目録』（『安居院唱導集』上、p.205）
参考文献：佐藤哲英『念仏式の研究』（百華苑、1972）
解説：本書は散逸して伝わらない。実範は主に法相・真言・律の諸宗を兼学した僧侶であり、『元亨釈書』（『日仏全』101）の実範伝では天台の教えを横川の明賢阿闍梨から学んだとされる。この点に注目した佐藤哲英は、実範の思想に叡山浄土教の影響を想定し、本書の内容を源信の『阿弥陀仏白毫観』や『往生要集』大文第4「正修念仏」に説く雑略観に関連する著述ではないかと推察している。
　その一方で澄憲の『転法輪抄目録』（『安居院唱導集』上、p.205）の仏部（下）には阿弥陀仏の極楽浄土を説く経論疏の要文が阿弥陀仏の部として収められているが、その阿弥陀第3の帙に「一帖　白毫集実範作」と、また別の帙には「一帖　眉間白毫集、一帖　往生要集疑問私」とあり、本書が実範の没後、まもない内に澄憲自身の『往生要集』注釈書と共に『転法輪抄』に収録されていたことが知られる。
作成者名：能島覚

弥陀如来名号徳

書名よみ：みだにょらいみょうごうとく
書名別名：名号徳
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：1260（文応1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、長野正行寺蔵本（1311（慶長1）、書写者不明）
2、三河上宮寺蔵本（1311（慶長1）、書写者不明、聖教断簡）
写本奥書：1、草本云、文応元年庚申（1260）十二月二日書写之、愚禿親鸞八十八歳書了／慶長［■］年十二月二十六日釈［■■■■］十歳［■■］之、主正行寺
2、（奥書なし）
活字本所載書：『真聖全』2、『浄土真宗聖典－原典版－』、『定本親鸞聖人全集』和文篇、『真宗史料集成』1、『真宗聖典』、『新撰真宗聖典』、『真宗史の研究』、『親鸞聖人小部集』、『現代語訳親鸞全集』3
現代語訳書：真継伸彦「弥陀如来名号徳」（『現代語訳親鸞全集』3、法蔵館、1982）、石田瑞麿「弥陀如来名号徳」（『親鸞全集』3、春秋社、1985）、「弥陀如来名号徳」（『浄土真宗聖典　三経往生文類　如来二種回向文　弥陀如来名号徳－現代語訳－』本願寺出版、2005）

参考文献：山田文昭「「弥陀如来名号徳」解説」「祖蹟採訪史料」（『真宗史之研究』、破塵閣書房、1934）、谷下一夢「弥陀如来名号徳について」（『竜谷史壇』16、1935）、梅原真隆「弥陀如来名号徳」（『親鸞聖人小部集』真宗典籍刊行会、1943）、日野環「三河上宮寺蔵聖教断簡について－『弥陀如来名号徳』の断片と推定して－」（『親鸞聖人』真宗大谷派宗務所、1961）、浄土真宗本願寺派「『弥陀如来名号徳』本文構成表（『浄土真宗聖典－原典版－』、本願寺出版部、1985）、宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）
解説：浄土真宗の宗祖親鸞の著作。真蹟本は現存せず、長野正行寺蔵の写本が唯一残るのみである。正行寺蔵本の奥書によれば、文応1年（1260）親鸞88歳の撰述であるが、同奥書には「書写之」とあり、初稿本ではなく初稿本の再書、あるいは初稿本の再稿改訂本と考えられ、また『親鸞聖人御消息集』所収10月21日付唯信坊あての消息には「ひとびとのおほせられてさふらう十二光仏の御ことのやうかきしるしてくだしまひらせさふらふ」とあり、当書写本の底本以前にも同様の書があったことが推測される。正行寺蔵本は応長1年（1311）に書写されたことが奥書から推測され、親鸞滅後49年である。ただし当書写本には欠落箇所があり、本書の完全な内容を知る事はできない。また日野環は三河上宮寺蔵「聖教断簡」が、本書欠落部分の一部ではないかと推測し、最近では断定された感が強いが、その「断簡」を欠落箇所のどこに位置づけるのかについては諸説がある。
　本書は阿弥陀仏の十二光について親鸞がその一々を解説したものである。ただし十二光の順番が『教行信証』『浄土和讃』などとは異なっており、『西方指南抄』所収「法然上人御説法事」の影響が指摘されている。しかし「法然上人御説法事」と全く同じ内容ではなく、その中に親鸞独自の光明解釈も展開されている。例えば「無碍光」の解釈では、法然は外障が碍りとならないと述べているが、本書では「有情の悪業煩悩にさえられず」と述べ、内障にも言及している点が異なる。
作成者名：藤田真隆

弥陀如来和讃

書名よみ：みだにょらいわさん
書名別名：阿弥陀如来和讃
著者名：覚超（？）
著者名よみ：かくちょう
著者名別名：都率僧都、兜率僧都、都率先徳、兜率先徳、楞厳院先徳
著者生没年：960（天徳4）-1034（長元7）
成立翻訳年：10c末-11c初頭
成立地：日本
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、（未調査、日仏全本「天台霞標」の底本を調査中）
2、（未調査、坊間本）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
活字本所載書：『日仏全』102、『国文東方仏教叢書』1-8、『日本歌謡集成』4、『釈教歌詠集全集』5
参考文献：多屋頼俊『和讃史概説』（法蔵館、1933）、花野充道「都率僧都覚超の著作解題」（『和党』36、1976）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、小山昌純「覚超浄土教の再検討－青蓮院所蔵『私念仏作法』を中心として－」（『仏教学研究』57、2002）
解説：本書は敬雄・慈本による『天台霞標』4-3所収本と『国文東方仏教叢書』所収本の2系統のものが現存する。前者は108句、後者は127句からなるが、誤字を除けば、はじめより108句目までは、両者ともほぼ同じである。内容は、西方の弥陀は本願慈悲の深き故に、念仏する衆生を摂取して捨てないと讃じ、我等、三界流転の衆生は末法悪世の故に、三毒に悩まされ続けているが、本来、仏性を具足しており、本質は仏と変わらない。故に一念に慈悲を生じれば、神・仏ともなり、一念に邪見を起こせば、夜叉、羅刹ともなる。四聖六凡、悉く一念の造るものであり、これを唯心造という。そして無常の世を説き、正念を失ったまま命終を迎えれば、悪趣に沈み、その結果、生じる地獄の惨状は酷いものであると諭す。よって、偏に浄土を願い、常に阿弥陀を念ずれば、無量の罪を滅し、現世は安穏にして、後世は必ず浄土に生まれると説く。そうすれば、臨終には二十五菩薩の来迎を迎え、得生した後には還来して衆生を救うこととなると説いている。多屋頼俊は、この内容に関し、南北朝以降の俗信仰である二十五菩薩来迎が表れている点、語調が近世のものであるという点、著しく教訓的な内容であるという点の3点より、江戸中期の成立としている。喜多義英は、そういった説を受けながらも、唯心論的な内容や真如随縁思想が含まれていることより、成立はもっと遡る可能性を示している。いずれにせよ、このように本書に関して、ほぼ偽撰説で占められるが、『観心略要集』との関連より、覚超のものであるという理解もある。今後の検討が課題といえよう。
作成者名：能島覚

弥陀本願義

書名よみ：みだほんがんぎ
書名別名：無量寿経四十八願義、長楽寺御本願義、本願義
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1208（承元2）
成立地：日本
巻数：4
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉期、書写者不明）
2、金沢文庫蔵本（鎌倉後期、湛睿書写）
写本奥書：1、承元三年（1209）比四月九日者権中納言隆衡卿、始行千日称之後第三旬始也、触縁招請懇領状之処、十箇日之間可釈弥陀四十八願之由所示送也、仍声読此本願義備讃歎訖、自去年春比製作此書、其功終、置之仏前弥陀三尺立像是也　心中有所願念之故也、然間忽有此事、若是弥陀納受之験歟、不堪感懐、便以此書所讃説也、彼卿非知音非親族不来之外蒙招請、是一不思議也、可釈四十八願之由相示以前三十箇日不然已上、是二不思議也、聴聞所前有作泉、未湛水其泉敷石、件泉巽角有龍子、四寸許其色薄香也、講演尅限出現、聴聞之間不動不去、従九日朝至十四日朝毎日其儀若斯、諸人見之大以為恠、或以手追之或以扇驚之塵許無動、予不知之十四日朝講未始之前預法師相語此事、即前寄見之実也、発奇異之想念弥陀名字百遍廻向龍子、乃十五日以後一切不見、是三不思議也、又依壇主命及秉燭令行向之日、彼龍子如日者自朝出現空至夕陽出自泉底入干道場走廻堂内、似有所求、諸人恠曰若是尋導師歟已上、是又不思議中不思議也、抑此書抄記不為名聞不為利養為導愚人為救罪人也、所載書多是諸経論要文也、人師明哲微言也

願以此功徳自他生極楽矣　欣求安養愚老天台山首楞厳院住権律師法橋上人位伽婆羅摩記之而已、貞応二年（1223）九月二日進士右馬允平是宣夢云、雲居寺御堂中長一丈許宝冠僧来現云、汝存知之旨隆寛律師義早可見所作之書云々、仍所書写本願義四巻礼讃並玄義分問答各十帖、開草子形令拝見之処、一々文字悉金色仏像也、心中思［■］此隆寛者既得証之人歟　生帰信之間夢覚畢已上、以是宣自筆記略注之、具可見観経疏問答奥記而已、貞応三年（1224）五月六日於康楽寺草堂以長楽寺御本願義写之畢、願以書写功自他往生極楽、敬白、三部職位厭苦欣求浄土比丘慈円、
三十五三十三記之、／同本云承久三年（1221）十一月十三日夜、修行者入阿弥陀仏入西、於出羽屋代庄新阿卿夢想云、無止高僧相示云、本願義者昔尊念上人所作也、隆寛律師於中堂百箇日間被講彼本願義也、夢已雖覚尚両眼閉未開之処、高僧告云、此書者有声有香、言訖眼忽開明也、入西上人手自記之送願智房本名武蔵公也、件入西伝雖聞題名未見此書之人也、貞応元年（1222）十一月十六日以件自筆記所与隆寛也、仍為彼未聞載愚草奥、願智相語云隆寛弘通本願非一世事歟、嗟呼斯言誠哉
2、（奥書なし）
活字本所載書：『隆寛律師の浄土教 附遺文篇』、『日大蔵』90、『金沢文庫資料全書』4
参考文献：塚本善隆「金沢文庫所蔵の長楽寺隆寛派の新資料」（『顕真学報』3-4、1934）、徳沢龍泉「『弥陀本願義疏』と『弥陀本願義』とについて」（『竜谷学報』309、1934）、安井広度『法然門下の教学』（法蔵館、1938）、平井正戒『隆寛律師の浄土教』（国書刊行会、1941）、色井秀譲「隆寛の『弥陀本願義』」（『天台学報』19、1977）、村松清道「『弥陀本願義』の奥書について」（『三康文化研究所年報』28、1996）
解説：隆寛における『無量寿経』四十八願を講述した書。隆寛61歳の著作である。同書の奥書によれば、隆寛は承元3年（1209）藤原隆衡が千日称名行を行ったとき、藤原隆衡に呼ばれ本書を講義をしたという。本書はその前年の春に製作しており、尊念の『本願義』をもとにして隆寛が作製したようである。奥書きに出る伽婆羅摩は隆寛の別号。
　全4巻にわたっており、1巻は第1願より16願まで。2巻は17願より37願まで。3巻は33願より四十八願まで。四巻が料簡門である。
　本書は、金沢文庫に写本が2冊現存している。1冊は湛睿手沢本、1冊は書写者不明の鎌倉期の写本で称名寺本と呼ばれる。湛睿本は同庫所蔵の湛睿手沢本の『具三心義』『極楽浄土宗義』とも同筆である。両本とも欠落している部分が多いが、両書を補いあえば大半がわかる。平井正戒『隆寛律師の浄土教』における翻刻は、称名寺本を底本として欠けているところを湛睿本で補っている。なお称名寺本は慈円本の転写。
　本書が撰述された承元2年（1208）は法然存命中であり四国に流罪となった翌年に書かれている。後に隆寛教学にみられる三願転入観や独特な三心釈もいまだみえず、『選択集』のみならず曇鸞・道綽、恵心僧都といった天台の伝統的な解釈も踏まえてまとめてあり、初期の作といえる。
作成者名：伊藤茂樹

密厳浄土観

書名よみ：みつごんじょうどかん
書名別名：密厳浄土略観
著者名：覚鑁
著者名よみ：かくばん
著者名別名：興教大師、自性大師、密厳尊者
著者生没年：1095（嘉保2）-1143（康治2）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、京都高山寺蔵本（治承5（1181）、範果書写）
2、京都東寺観智院蔵本（南北朝期、書写者不明）
3、京都醍醐寺三宝院蔵本（正嘉2（1258）、書写者不明）
4、京都高野山宝寿院蔵本（弘長1（1261）、元瑜書写）
詳しくは『興教大師覚鑁写本集成』（法蔵館、1997）p.454ff.を参照。
写本奥書：1、（梵字「バン」）聖人作　治承五年五月十六日野高（高野）山以西谷院主御房　本書写了　範果
2、（奥書なし）
3、正嘉二年（1258）四月十一日　見了　正覚房作云々　（梵字「バン」）奴
4、弘長元年（1261）七月十三日於禅定院書写/校合終功畢　金剛仏子元瑜　正和三年（1314）卯月十九日賜御本書写/校点畢　金剛資性瑜　正中二年（1325）正月二十四日於加賀国井家/庄月輪以御本書写了/金剛資道通/金剛資永尊
刊本所在：1、刊年不明（大谷大・京都大・東洋大・高野山大・大正大・種智院大・立正大、『密厳諸秘釈』9）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『大正蔵』79（No.2515）、『興教大師全集』（中野達慧編輯、世相軒、1935）
現代語訳書：『興教大師撰述集』（上、宮坂宥勝編注　山喜房仏書林、1977、増補訂正版1990）pp.152-156
参考文献：『永観・珍海・覚鑁』（「浄土仏教の思想」7、講談社、1993）、櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、『興教大師八百五十年御遠忌記念論集　興教大師覚鑁研究』（興教大師研究論集編集委員会、春秋社、1992）、苫米地誠一「興教大師覚鑁の教主観について（2）-密教の教主」（『大正大学日本仏教文化学会紀要』1、1992）、佐藤隆賢「覚鑁上人と浄土思想」（『日本仏教学会年報』42、1977）
　特に本文献に関するものとしては、中村瑞隆「大乗密厳経に説く密厳浄土」（『日本仏教学会年報』42、1977）、佐藤隆賢「覚鑁上人と浄土思想」（『日本仏教学会年報』42、1977）、田中公明『性と死の密教』（春秋社、1997）
　詳しくは『密教関係文献目録』（増補改訂版、2007、種智院大学密教学会編）を参照。
解説：筆者は仁和寺、南都に学び、当時、東寺に対して従属的であった高野山を復興・自立させて、そこに大伝法院を建立し、広く諸法流を統合して事相を振興させた。しかし後に、高野山側との法統・寺領をめぐる対立から退去し、根来に移住した。本地身説法説を採る古義真言宗に対して加持身説法説とされる新義真言宗の祖となり、浄土教の隆盛のなかで密教に浄土教を取り入れた真言念仏ないし秘密念仏の基礎を確立した。
　本著は、密厳浄土という完全な理想世界の徳性を簡略にまとめたものである。密厳浄土は、まず中期大乗経典として唯心の理論に基づき、大乗の浄土を理論的に解明する『密厳経』に説かれた。それが同様の性格をもった『入楞伽経』で成仏の場所とされる色究竟天と同一視されて、真言密教において法身大日如来の住する浄土とされたのである。
　内容は、まず密厳浄土が清浄な世界であり、そこでの様々な事物が各々すぐれた徳性を具えていることが説かれる。さらにその四方には門があり、東に阿閦、南に宝生、西に阿弥陀、北に釈迦という四仏の浄土があるとされる。次に中央の法界宮殿のあり方と徳性、およびそこに住する心王大日如来の円満な姿と徳性が説明され、さらに大日如来の

眷属としての四仏と四波羅蜜多・十六菩薩・十二天妃・十六転輪王・五大明王・二十天等の無数の者からなる曼荼羅世界が説かれ、彼らによる供養が説明される。そして、救済のために彼らは自由に行者を訪問できること、迷暗を転じて光明とし穢土を浄土とするものであること、本尊の徳性と行者の実践が相俟って一念に万徳が証得され、速やかに自利利他が完成すること、願行が浅い機根未熟な者も、しばし応化の浄土に安置され、次に法性の浄土に迎えられて、三密の仏果を得ることを説いている。

また本書は同著者の『自受法楽讃』『大日遍照釈』などと同じく、仏の徳と浄土の荘厳を美しく描写しており、文学的に源信の『往生要集』に並ぶものとも評されている。

なお『秘密念仏集』（三巻、cf.総浄土依憑章疏目録）という名の著作があるようであるが、それがどれに該当するかについては未詳。

作成者名：藤仲孝司

明義進行集

書名よみ：みょうぎしんぎょうしゅう
著者名：信瑞
著者名よみ：しんずい
著者名別名：敬西房
著者生没年：？-1279（弘安2）
成立翻訳年：13c
成立地：日本
巻数：３
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、金剛寺蔵本（1283、恵鑁書写）
2、大谷大蔵本（1921、未調査）
3、大正大蔵本（未調査）
4、竜谷大蔵本（未調査）
5、東大史料編纂所蔵本（未調査）
写本奥書：１、干時弘安六年（1283）五月二十二日、於泉州山直郷多治米村安楽寺之砌仏法興隆書写畢、願以書写功徳力、我等/二親及法界（別筆5字）/、所迎法師之（書カ）、共生西方極楽界、頓証菩提利群生、僧恵鑁之（書カ）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
活字本所載書：「明義進行集」（『仏教古典叢書』中外出版株式会社、1924）、『法伝全』、『明義進行集　影印と翻刻』（法蔵館、2001）
参考文献：黒板勝美「明義進行集解説」（『歴史地理』1919）、橋川正「明義進行集とその著者」（『仏教研究』2-4、1921）、望月信亨「信瑞の無観称名義と明義進行集」（『仏教学雑誌』3-3、1922）、井川定慶「信瑞の法然上人伝と明義進行集巻第一に就いて」（『仏教学雑誌』3-7、1922）、「明義進行集追考」（『仏教研究』3-2、1922）、伊藤祐晃「敬西房信瑞著明義進行集について」（『仏教学雑誌』3-4、1922）、中嶌容子「解題」（『明義進行集　影印と翻刻』法蔵館、2001）
解説：隆寛、信空の弟子である信瑞の著作。『明義進行集』は『和語灯録』等では『信行集』『進行集』として引用されているが、散逸したものと考えられていた。ところが大正7年に黒板勝美により河内国金剛寺で発見される。全3巻であるが現存するのは2、3巻。内容は静遍、明遍、隆寛、空阿、覚愉、信空、明禅、聖覚の８人の伝記・言行録。第1巻は法然伝と推測されている。信瑞の師である信空が提唱した「無観称名義」にもとづいて、上記八名のそれぞれの伝記・言行録が記さされているところに特徴がある。第3巻末の最後には「無観称名」に対しての問答が記されている。本文には雅成親王への返書、信空の『不審十四箇条』といった書の散逸文も収録されている。なお大谷大学、東大史料編纂所などにみえる諸本はすべて金剛寺本の謄写本である。
作成者名：伊藤茂樹

妙行心要集

書名よみ：みょうぎょうしんようしゅう
書名別名：妙行心要
著者名：恵心／恵快／増覚
著者名よみ：えしん／えかい／ぞうかく
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公/　/
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）/ ？-1087（応徳4）/1092（寛治6）- ？
成立翻訳年：985（寛和1）-1092（寛治6）
成立地：日本
巻数：3
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1254（建長6）、称願房書写、上巻零本（二葉残欠）、中巻欠、下巻完本）
2、金沢文庫蔵本（1274（文永11）、書写者不明、中巻のみ）
3、坂本西教寺正教蔵蔵本（1486（文明18）、光順栄磚書写）
写本奥書：1、（下巻奥書）寛治六年（1092）七月晦日、書了於安楽谷円経房増覚＜写本位＞／応徳四年（1087）四月三日、夜夢云、中阿闍梨御房此房南面地西向立給言、其被作書我心契吉、何此程捨不見、心中思此書事已上、覚了、去二月廿五日造作之間納置敢不見沙汰之、仍有是夢歟、夜既明了、披見奉拝耳、仮名是中房法号秘妙房也、習中道法門学法花奥旨仏自証明覧故見阿闍梨敢有夢告歟／寛治二年（1088）八月十八日、夜夢水精多宝塔、高大如御塔祐妙、二基空飛来自身頂上登給見已上／寛治三年（1089）十二月廿八日、夜夢平蒔絵箱法花経一部入奉、今行住坐臥奉持、愚定随身奉見已上／寛治五年（1091）二月七日、正法房阿闍梨恭被光臨云、一夜夢有人告云、此処聖如法経読云々已上、於末法中願持正法為表願成有此告歟／寛治六年（1092）六月上旬、乗蓮聖御房此書上巻借給、経数日後恭入、次被示云、此書左手乍持眠夢火燈持見言給已上、中心之悦無始之真途燈憑之故也／沙門云、記之已畢、本自所帰在弥陀与法花、故今寄此示観心之総要耳、願共諸衆生往生安楽国、早悟真正源速証無上覚、保安元年（1120）七月十七日、一部之巻書写既了、執筆念仏房／建長六年甲寅（1254）十一月一日、於奥州遠田郡平柳新久寺書写了、執筆称願房＜生年＞二十一歳也
2、文永十一年（1274）五月八日、於下野国足利庄寺山法楽寺書写、雖元極悪筆志至深間不恥後見也
3、寛治六年（1092）七月晦日、書了於安楽院円経房増覚＜写本位＞／応徳四年（1087）四月三日、夜夢云、中阿闍梨御房此房南面地西向立給言、其被作書我心契吉、何此程捨不見、心中思此書中事已上、覚了、去二月廿五日造作之間納置敢不見沙汰之、仍有是夢歟、夜既明了、被見奉拝耳、似若是中房法号秘妙房也、習中道法門学法花奥旨仏自証明覧故見阿闍梨敢有夢告也／寛治二年（1088）八月八日、夜夢水精多宝塔、高大如御社塔廟、二基空飛来自身頂上登給見已上／寛治三年（1089）十二月廿八日、夜夢平蒔絵箱法花経一部入奉、今行住坐臥奉持、愚定随身奉見已上、同五年（1091）二月七日、正法房阿闍梨恭被光臨云、一夜夢有人

告言、此処聖如法花経読云已上、於末法中願持正法為表願成有此告歟、同六年（1092）六月上旬、乗蓮聖御房此書上巻借給、経日数後恭入、次被示云、此書左手乍持眠夢火燈持言給已上、中心之悦無始之真途燈憑之故也／沙門云、記之畢、本自所皈在弥陀与法花、故今寄此示観心之総要耳、願共諸衆生往生安楽国、早悟真正源速証無上覚、保安元年（1120）七月十七日、一部三巻尽写既了、執筆念仏／建長六年甲寅（1254）十二月一日、於奥州遠田郡平柳新善光寺書了／文明暦午才（1486）林鐘十八日、右筆光順栄珎書之畢

刊本所在：1、慶安3（1650、叡山文庫内毘門・坂本実蔵坊内真如蔵・寛永寺・法然院光明蔵・仏教大・竜谷大）

刊本の奥書刊記：1、慶安三年（1650）、京都柴田安兵衛

活字本所載書：『恵全』2、『日仏全』33

参考文献：田村芳朗『鎌倉新仏教思想の研究』（平楽寺書店、1965）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、西村冏紹・末木文美士『観心略要集の新研究』（百華苑、1992）、八木昊恵『恵心教学史の総合的研究』（永田文昌堂、1996）、末木文美士『鎌倉仏教形成論』（法蔵館、1998）

解説：著者について、西教寺正教蔵蔵本（文明18年（1486））の首題撰号は「恵心」と記すが、『長西録』は「恵快」（『日仏全』1、p.346）、『日本天台録』は「慧快」（『日仏全』1、p.268）、『台祖密目』『竜堂録』は「安楽院恵快」（『日仏全』2、p.242、p.280）とする。恵快については未詳（ただし、延久1年（1069）の「福岡県観世音寺十一面観音像銘」（『平安遺文』金石文編、p.123）に「僧恵快」の記述あり）。なお末木文美士は金沢文庫本巻下奥書の夢記にみえる「中阿闍梨」を序の「先師」とし、増覚を夢記の筆者＝著者と考え、その成立を夢記にみられる応徳4年（1087）とする（『鎌倉仏教形成論』、pp.320-321）。

その他成立年次として、佐藤哲英は序の「先師」を源信とし、源信入寂の寛仁1年（1017）より増覚の書写した寛治6年（1092）までの成立とし（『叡山浄土教の研究』、pp.266-268）、田村芳朗は本書の思想内容を天台本覚思想の第3次的形態にあたるとして、鎌倉初期（1200）から中期（1250）にかけての成立としている（『鎌倉新仏教思想の研究』、p.488）。

内容は天台の妙行である止観の要目を述べたもので、序と122条の項目からなる。各項目はそれぞれ独立しており、体系的な構成とはなっていない。序には「夫れ観心は乃ち是成仏の直道なり。誰か心あらん者、この行に遵わざらんや。茲に因りて、先師多年に居を深洞に占め、衡岳・台崖の虚白を羨み、三観一心の幽幻を尋ぬ。予、不肖なりと雖も、苟くも親資となり、夙夜に随逐し、昏暁に稟承す。厥の後、遺訓を骨に銘じ、実相を心に懸く。縦い中的の功なくとも、何ぞ半銭の分を疑わんや。今、暮年に及び、倩凰日を憶えば、涙落ち神摧け、未だ報いる所を知らず。仍りて聊か旧聞を録し、留めて後賢に贈り、兼ねて愚慮を注して敢えて添削を稀う。償じて一百二十条あり。名づけて妙行心要集と曰う」（『恵全』2、p.247）と著者が晩年に至り、先師の遺訓を記し自らの見解を加えたものであることが述べられる。

内容上の特色として、『往生要集』『阿弥陀仏白毫観』の影響を受けつつ、四種三昧中、半行半坐三昧・非行非坐三昧も阿弥陀仏と関連して述べること、釈迦・薬師・弥陀を本来一仏として三仏がいずれも久遠実成とすること、阿弥陀仏の4字に十義を立て解釈すること等、源信とは異なった点がみられる。

作成者名：上杉智英

名号万徳鈔

書名よみ：みょうごうまんどくしょう

書名別名：万徳鈔、大原万徳鈔

著者名：聖聡

著者名よみ：しょうそう

著者名別名：大蓮社酉誉聖聡、酉師、酉公、聡師

著者生没年：1366（貞治5）-1440（永享12）

成立翻訳年：1421（応永28）

成立地：日本

巻数：1

漢和：漢文

写本等の存欠：写本

刊本

写本所在：1、竜谷大蔵本（書写年不明、書写者不明）

写本奥書：1、高祖上人［■］代記［■■■■■■］別黒［■］三十三西福寺当［■］

刊本所在：1、寛文2（1662、大正大・大谷大）

刊本の奥書刊記：1、寛文二（1662）壬寅年仲秋吉日鈴木太兵衛刊

活字本所載書：『浄全』13

参考文献：前田聴瑞「解題」（『浄全』21）、坪井俊映「解説」（新『浄全』13）、前田聴瑞『仏書解説大辞典』10、『浄土宗大辞典』3、梶村昇『名号万徳鈔』（『聖聰上人典籍研究』、山喜房仏書林、1989）

解説：本書は名号に万徳が備わっていることを述べた書である。成立年月日は応永28年（1421）正月2日であり、前年である応永27年（1420）12月28日に性阿弥陀仏から発せられた問いに対する聖聡からの応答にあたる。この年の9月27日には、聖聰の師である聖冏が、80歳で入寂している。その時期から考えると、本書は単なる教理書ではなく浄土宗を師から受け継いでいく聖聡57歳の決意が感じられ、小論ではありながらも重要な著作として位置付けられる。

その内容は、名号に関する10の勝義を中心に展開される。すなわち、第1は名体不相離の故に、弥陀の名を称えれば、その者のところにお越しになるということ。これを善導大師の説く三縁の中の近縁に配当する。第2は、念仏は本願の行であるということ。第3は、本願の行である念仏は、阿弥陀仏の選択本願の行であるということ。第4は、名体不離であるが故に、阿弥陀仏の内証外用の功徳は、名号に備わっているということ。第5は、念仏は五乗斉入の報土に迎えられる大願（超世の願）の行であるということ。第6は、念仏が大業であるということ。法蔵菩薩が衆生に代わって修した万善万行が、本願名号に加持され、この御意行を修すれば、常に仏が親しくお思いくださる故に、三縁の中の親縁に配当されるとする。第7は、念仏は大力の致すところの行であること。三縁の中の増長縁に配当される。第8は、念仏は大利があるということ。第9は、念仏には無上の功徳があるということ。第10は、念仏は多善根でるということ。

また、本書には「御相伝に云　念仏者深き行なり哉と人問はば　人に依りて答ふべし　若し聖道門の執見深からん人には　念仏は浅行也　然雖も下機誘引のために斯く勧なりと云うべし　是一往の義也　此如き一往の義を謂ひて連連引き寄せて念仏の深心を云うべし」と、師聖冏と共に他宗派に対して浄土宗の独立性を強く意識している面が看取される。さらに、先に述べたような法蔵菩薩の万行が名号に加持されるという、聖聡独自の表現も注目される。

作成者名：東海林良昌

無量寿経賛鈔

書名よみ：むりょうじゅきょうさんしょう

著者名：善珠

著者名よみ：ぜんじゅ（ぜんしゅ）

著者生没年：723（養老7）-797（延暦16）

成立翻訳年：8c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『永超録』（『日仏全』1、p.6）、『諸宗章疏録』2（『日仏全』1、p.77）、『仏典疏抄目録』2（『日仏全』1、p.117）、『長西録』（『日仏全』2、p.144）、『蓮門録』上（『日仏全』2、p.157）、『浄土真宗教典志』3（『日仏全』2、p.210）、白弁『無量寿経集解』（『続浄全』1、p.6）
参考文献：大野達之助『上代の浄土教』（「日本歴史叢書」28、吉川弘文館、1972、新装版、1997、p.137）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、p.59、pp.73-74）、津村諦堂『日本浄土教の研究』（山喜房仏書林、1980、p.75）
解説：著者は大和国の出身で、興福寺の玄昉に従って法相教学、唯識因明を学び、773（宝亀3）、近江国に善通教釈寺・蓮法光寺・現善王寺・妙楽長興寺、776（宝亀7）、大和の秋篠寺を創建した。794（延暦13）年9月、比叡山の最澄の招きにより、根本中堂の落慶供養の導師をつとめ、797（延暦16）、皇太子安殿親王の病を癒し、その功績によって僧正に任じられる（津村[1980]、p.75）。
　本書は散逸して伝わらない。『東域伝燈目録』の記載および書名から、新羅憬興の『無量寿経連義述文賛』の副註であると考えられている（井上[1975]、p.76）。
作成者名：北条竜士

無量寿経指事私記

書名よみ：むりょうじゅきょうしじしき
著者名：智憬
著者名よみ：ちけい（ちきょう）
著者生没年：751頃
成立翻訳年：8c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『永超録』（『日仏全』1、p.6）、『仏典疏鈔目録』下（『日仏全』1、p.117）、『浄土真宗教典志』3（『日仏全』2、p.210）、七寺『古聖教目録』（「七寺古逸経典研究叢書6、中国・日本経典章疏目録」、大東出版社、1998、p.210）、法金剛院『大小乗経律論疏記目録』上（「七寺古逸経典研究叢書6、中国・日本経典章疏目録」大東出版社、1998、p.340）、白弁『無量寿経集解』（『続浄全』1、p.6）
参考文献：井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、pp.59-70）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、p.440）、大野達之助『上代の浄土教』（吉川弘文館、1972、新装版、「日本歴史叢書」28、1997、p.137）、津村諦堂『日本浄土教の研究』（山喜房仏書林、1980、p.84）
解説：著者の略歴については『無量寿経宗要指事』の項を参照。
　七寺『古聖教目録』では本著の著者を「憬興」とするが、「智憬」の誤りと思われる。『長西録』（『日仏全』2、p.145）では『無量寿経私記』一巻　智景　景恐憬」とあるが、本書を指すのかは不明である。
　本書は散逸し伝わっていない。新羅の元暁『無量寿経宗要』に基づいて著された同著者の『無量寿経宗要指事』を、さらに敷衍したものであると考えられている。
作成者名：北条竜士

無量寿経釈

書名よみ：むりょうじゅきょうしゃく
書名別名：大経釈
異本書名：無量寿経私記、大経私記
著者名：法然
著者名よみ：ほうねん
著者名別名：法然房源空、源空、黒谷上人、空上人、円光大師
著者生没年：1133（長承2）-1212（建暦2）
成立翻訳年：12c後半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、『大経直談要註記』所収（『大経直談要註記』の項を参照）
2、『浄土三部経釈』所収（『浄土三部経釈』の項を参照）
3、『漢語灯録』所収（『漢語灯録』の項を参照）
刊本の奥書刊記：1、『大経直談要註記』の項を参照
2、『浄土三部経釈』の項を参照
3、『漢語灯録』の項を参照
活字本所載書：『昭法全』、日本思想大系10『法然・一遍』、『法然上人全集』（宗粋社、1906）、『法然上人集』（「大日本文庫」仏教篇）、『漢語灯録』の項を参照
現代語訳書：大橋俊雄『法然全集』1（春秋社、1989）、斉藤舜健『傍訳　無量寿経釈』上・下（四季社、2003）
参考文献：住田智見「真本漢語灯録と三部経私記（一）」（『無尽灯』23-6、1918）、住田智見「真本漢語灯録と三部経私記（二）」（『無尽灯』23-10、1918）、今岡達音「三経釈と選択集との著作前後」（『仏教学』2-3、1925）、今岡達音「三経釈と選択集との著作前後」（『仏教学』2-6、1925）、岸一英「『逆修説法』と『三部経釈』」（『藤堂恭俊博士古稀記念　浄土宗典籍研究』研究篇、同朋舎出版、1988）、岸一英「『三部経釈』の研究（一）」（『法然上人研究』1、1992）、岸一英「『無量寿経釈』古層の復元―『三部経釈』の研究（二）―」（『佐藤成順博士古稀記念論文集　東洋の歴史と文化』、山喜房仏書林、2004）
解説：法然が『無量寿経』を解釈したもの。『浄土三部経釈』のうちの1つ。
　石井教道は、思想的に『逆修説法』・『選択集』より以前に成立したと推測する。古本『漢語灯録』第2、3巻末の識語によると、文治6年（1190）に、東大寺で講説したものとあるが、一方、岸一英によれば、その説に反対し、普段の講説の積み重ねたものと推論する。
　科段は、大意、立教開宗、浄教不同、釈名、入文解釈の大きく5つに分ける。
　法然の一向念仏の教えの立場から、『無量寿経』を解釈するが、特に念仏の要文について力を入れて説く。本願、三輩、流通分の文などを解釈し、但念仏往生を主張する。
　本書は文献的に他の『観無量寿経釈』・『阿弥陀経釈』とともに問題がある。すなわち、これら3書は、『選択集』の文が、後世になって流入したと今岡達音は主張する。更に岸一英は、『広本選択集』以外の文であっても、付加された新層の部分があることを示唆する。したがって、それら3書の原意を知るには、新層を除き、古層に注視する必要がある。
作成者名：角野玄樹

無量寿経宗要指事

書名よみ：むりょうじゅきょうしゅうようしじ
著者名：智憬
著者名よみ：ちけい（ちきょう）
著者生没年：751頃

成立翻訳年：8c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『永超録』（『日仏全』1、p.6）、『諸宗章疏録』2（『日仏全』1、p.76）、『浄土真宗教典志』3（『日仏全』2、p.210）、七寺『古聖教目録』（「七寺古逸経典研究叢書6、中国・日本経典章疏目録」、大東出版社、1998、p.210）、法金剛院『大小乗経律論疏記目録』（「七寺古逸経典研究叢書6、中国・日本経典章疏目録」、大東出版社、1998、p.340）
参考文献：大野達之助『上代の浄土教』（「日本歴史叢書」28、吉川弘文館、1972、新装版、1997、pp.137-138）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、pp.59-69）、津村諦堂『日本浄土教の研究』（山喜房仏書林、1980、p.84）
解説：著者の智憬は華厳宗東大寺の僧で、良弁の弟子である。凝然『三国仏法伝通縁起』によると、天平12年（740）に審祥によって始められた『華厳経』の講説が、その後、何人かの諸師によって継続して行われ、智憬も天平勝宝1-4（749-752）の間に講説を行ったと伝えられている。また著者は戒律に通達しており、天平年中（729-748）に師の良弁に招かれて『行事鈔』を講じたとされる（凝然『三国仏法伝通縁起』巻中・下、井上〔1975〕、pp.68-69、大野〔1972〕、pp.137-138、津村〔1980〕、p.84）。

『正倉院文書』の「一切経納櫃帳」の記事によると、著者が天平20（748）から天平勝宝4（752）まで東大寺羂索堂の寺堂司をつとめたとあり、その間、良弁の師である新羅の審祥の蔵書を研究し、本書と『無量寿経指事私記』を著したと考えられている（井上〔1975〕）。また良忠の『往生要集義記』第3では智憬に関して「元暁師大経宗要作釈師也」とする（『浄全』15、p.236）。

本書はすでに散逸し伝わらない。『永超録』の記述から、新羅の華厳学者である元暁の『無量寿経宗要』に基づく著作であると考えられている（井上〔1975〕）。
作成者名：北条竜士

無量寿経抄

書名よみ：むりょうじゅきょうしょう
書名別名：大経望西抄、大経抄、大無量寿経抄、無量寿経疏
著者名：道光
著者名よみ：どうこう
著者名別名：了恵、望西楼、蓮華堂、広済和尚
著者生没年：1243（寛元1）- 1330（元徳2）
成立翻訳年：1296（永仁4）
成立地：日本
巻数：7
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、竜谷大蔵本（1322（元亨2）、書写者不明）
写本奥書：1、元亨二年壬戌（1322）六月三日於王舎城三条之坊門高倉専修念仏院［■］写了［■］、一切衆生往生極楽也、南無阿弥陀仏、必十返
刊本所在：1、慶長19（1614、大谷大・叡山文庫、『無量寿経疏』）
2、慶長20（1615、国文学研究資料館・東洋文庫・仏教大）
3、寛永1（1624、仏教大）
4、寛永8（1631、大阪府立中之島図書館・大正大・竜谷大）
5、延宝7（1679、大谷大・京都大・浄照坊・大正大・東京大・東洋大・仏教大・宮城県立図書館・無窮会図書館・立正大・竜谷大、恵海校『首書無量寿経抄』）6、延宝9（1681、竜谷大）
7、延享3（1746、大谷大、『会本無量寿経抄』）
8、延享5（1748、大谷大・金沢大・京都大・大正大・東京大・千葉県立中央図書館・東洋大・仏教大、『会本無量寿経抄』）
9、刊年不明（仏教大、『会本無量寿経抄』）
10、刊年不明（仏教大、『首書無量寿経抄』）
11、刊年不明（大谷大、『首記無量寿経抄』）
12、刊年不明（大正大、『冠註無量寿経抄』、6冊）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、寛永辛未（1624）孟夏吉旦、書舎中野氏道伴刊
5、延宝己未（1679）仲秋十日勘文校正訖、鈴木太兵衛刊行
6、（未調査）
7、（未調査）
8、東都芝峯貫首大僧正蔡華楼主嗣法弟子等捐貲新刻此、無量寿経望西抄会本全部七冊乃置三縁山矣輪下南渓沙門貞鏡智英分会同校、維時、延享第五歳次戊辰（1748）夏五月十有七日謹識
9、東都芝峯貫首大僧正蔡華楼主嗣法弟子等捐貲新刻此、無量寿経望西抄会本全部七冊乃置三縁山矣輪下南渓沙門貞鏡智英分会同校、維時、延享第五歳次戊辰（1748）夏五月十有七日謹識／此経抄会本全部七冊之版雖［■］置在于縁山書蔵而洛東法林寺則是以望西楼師之旧跡宝暦三年次癸酉（1753）二月念九［■］稟老師大僧正之命納之法林寺宝蔵／前大僧正蔡華楼主嗣法弟子等識
10、洛東知恩院門前、皇都書肆、沢田吉左衛門寿梓
活字本所載書：『浄全』14
参考文献：石橋誠道「了恵上人の伝に就て」（『摩訶衍』10、1931）、三長覚静「無量寿経抄を通観し望西楼持説の一班を窺ふ」（『摩訶衍』10、1931）、戸松啓真「三部経の註釈および大原談義に関する著作について」（『戸松教授古稀記念　浄土学論集』大東出版社、1987）
解説：良忠の弟子道光による『無量寿経』に対する注釈書。本書は、道光が、師良忠に『無量寿経』の注釈書がないので、師から聞いた講説をもとに注釈書を書くよう同門の慈心良空から懇請され、永仁3年（1295）春に草案を書き、同門の然空礼阿と再三精論し、永仁4年（1296）正月に草稿本を完成させ、永仁5年（1297）2月に同門の者と治定したものである。

内容は、全体を大意・題名・経文解釈の3門に分け、大部分を占める経文解釈を序分・正宗分・流通分に3分し、さらに正宗分を浄影寺慧遠『無量寿経義疏』によって所行（法蔵菩薩の修行）・所成（阿弥陀仏の身土）・所摂（阿弥陀仏の外用）の3つの大科に、また善導『観経疏』によって勝因（四十八願は皆勝れた因から起こされている）・勝行（勝因によって勝れた行を起こす）・勝果（勝行によって勝れた果を感じる）・勝報（勝果によって勝れた報を成就する）・極楽（勝報によって極楽を願い感じる）・悲化（極楽を願い感じることによって救いをあらわす）・智慧（悲化によって智慧の門を開く）の7つの小科に分けて注釈している。

良忠の説に基づいて、〈無量寿経〉の異訳や『往生論』と対校させ、広く他の諸経論および浄影寺慧遠・嘉祥・義寂・憬興・法位・玄一等の無量寿経釈から引証し、詳細な注釈を施している。良忠より相伝の義を記述したものとしているが、浄影寺慧遠に与して、法蔵菩薩が地前十廻向の位にある時と地上初位（歓喜地）の位にある時の2度にわたって発心したとする法蔵菩薩二重発心説を説いており、

礼阿の『大経聞書』（実際は門弟の撰）においては「然るに道抄浄影義を以て本義と存す。これ尚相伝の暗き故か」と異端扱いしている。しかし、後世、鎮西義の聖冏・聖聡・義山・観徹等は本書を重視する。

『蓮門類聚経籍録』によれば、注釈書として、良栄理本『無量寿経抄見聞』、知足『無量寿経名義弁事』並『引拠』、龍原寺霊哲『無量寿経抄引文私考』がある。

作成者名：曽田俊弘

無量寿経大意

書名よみ：むりょうじゅきょうたいい
書名別名：大経大意抄
著者名：道光
著者名よみ：どうこう
著者名別名：了恵、望西楼、蓮華堂、広済和尚
著者生没年：1243（寛元1）- 1330（元徳2）
成立翻訳年：13c後半 - 14c前半
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、慶安1（1648、大正大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、慶安元（1648）孟冬仲旬、二條通玉屋町、村上平楽寺開板
活字本所載書：『続浄』4（旧17）
参考文献：小沢勇貫「浄土三部経の釈義音義書　解説」（『浄土宗典籍研究』山喜房仏書林、1975）
解説：本書は、道光が、法然『無量寿経釈』に説かれる『無量寿経』の大意の説示を承けつつ、自身の『無量寿経』に対する見解を説述したものである。成立年は不明。

経の大意として、釈迦と弥陀の二尊の出世の本懐は浄土教にあることを強調し、経の序分の「如来無尽の大悲を以て三界を矜哀すゆえに世に出興して（中略）恵むに真実の利を以てす」の文や、流通分の「一念大利無上功徳」の文等を釈尊穢土出世の本懐の経証として、また「乃至十念若不生者」の願文を弥陀浄土出世の本懐の経証としてあげ、穢土の念仏の衆生を浄土に往生せしめることこそが二尊の本懐であり、これを随自の本懐とし、諸行往生を二尊随他の本懐としている。そして、安養世界が変易（菩薩が自らの悲願力によって現した）・無漏（煩悩がない）・他力・他摂の実報土にほかならないと主張する。

作成者名：曽田俊弘

無量寿経註字釈

書名よみ：むりょうじゅきょうちゅうじしゃく
著者名：善珠
著者名よみ：ぜんじゅ（ぜんしゅ）
著者生没年：723（養老7）-797（延暦16）
成立翻訳年：8c
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』2、p.145）、『仏典疏抄目録』下（『日仏全』1、p.117）、『浄土真宗教典志』3（『日仏全』2、p.210）、『蓮門類聚経籍録』上「（『日仏全』2、p.157）、白弁『無量寿経集解』（『続浄全』1、p.6）
参考文献：大野達之助『上代の浄土教』（「日本歴史叢書」28、吉川弘文館、1972、新装版、1997、p.137）、井上光貞『新訂　日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、p.59、p.73-74）、津村諦堂『日本浄土教の研究』（山喜房仏書林、1980、p.84）
解説：著者については『無量寿経賛鈔』の項を参照。本書は現在のところ伝わっていない。著者不明の『両巻経字釈』との関係が指摘されている（井上[1975]、p.75）。

作成者名：北条竜士

無量寿経論釈

書名よみ：むりょうじゅきょうろんしゃく
書名別名：智光疏
著者名：智光
著者名よみ：ちこう
著者生没年：709（和銅2）-780（宝亀11）頃
成立翻訳年：776（宝亀7）頃？
成立地：日本
巻数：5
漢和：漢文
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』2、p.146）、『諸宗章疏録』2（『日仏全』1、p.121）、『浄土真宗教典志』3（『日仏全』2、p.213）
参考文献：高西賢正「智光の浄土論疏に就いて」（『仏教研究』7-1・2、1926）、戸松憲千代「智光の浄土教思想に就いて（上）（中）（下）」（『大谷学報』18-1、18-4、19-1、1937、1938）、戸松憲千代「天親『浄土論』、曇鸞『浄土論註』、智光『無量寿経論釈』三本対照表」（『大谷学報』19-1、1938）、戸松憲千代「安養抄に引用せられたる『往生論疏』に就いて」（『仏教研究』3-1、1939）、戸松憲千代「元興寺智光無量寿経論釈抄」（大谷派宗学院『宗学研究』24、1942）、石田瑞麿『浄土教の展開』（春秋社、pp.63-68）、藤堂恭俊「智光の教学」（元興寺仏教民俗資料刊行会『智光曼荼羅』、1969）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、1975、p.49-58）、恵谷隆戒「元興寺智光の無量寿経論釈の研究」「元興寺智光撰無量寿経論釈の復元について」（恵谷隆戒『浄土教の新研究』山喜房仏書林、1976）、服部純雄「智光撰『無量寿経論釈』稿（復元資料）」（『浄土宗学研究』15・16、1986）、章輝玉・石田瑞麿『新羅の浄土教・空也・良源・源信・良忍－叡山の浄土教－』（「浄土仏教の思想」6、講談社、1992、pp.48-56）
解説：著者の智光は、三論宗の僧で元興寺の智蔵に学び、智光曼荼羅の作者として知られ、またわが国最初の浄土教家といわれている。『日本霊異記』によると、智光は行基の盛名を嫉妬・誹謗し、そのことで地獄の閻魔王に呼ばれ、その非をさとされて蘇生したと伝えている。また『日本往生極楽記』によると、智光と同室の頼光の入滅をきっかけに、夢中で極楽浄土を見て、それを画工に描かせた。それがいわゆる智光曼荼羅で、生涯それを観想したと伝えている。

本書はすでに散逸しているが、源隆国の『安養集』などの諸書の引用文に基づいて、高西[1926]、戸松[1937][1938]、藤堂[1969]、恵谷[1976]などにおいて復元版が発表されており、その内容のほとんどが参照できる。その中で最もまとまったテキストは服部[1986]である。

本書は、曇鸞の『往生論註』に基づいて世親の『往生論』（『無量寿経論』）を解釈したもので、第1巻では『往生論註』上巻（総説分）を註釈し、第2巻から第5巻では『往生論註』下巻（解義分）を註釈する。以下、その内容を挙げる。

（1）阿弥陀仏の本願については、四十八願および初期無量寿経類の二十四願に各々願名をつけ、その理由も記し、さらに四十八願と二十四願とを一々対比させている。本書の第1巻では第18願の成就文と『観経』下下品の「十声称仏」の文を引用し、また本書の第3巻では、五逆の罪人でも善知識に遇って臨終の時に具足十念すれば、往生が得られる

と主張していることから、本願としては第18願を重視し、特に「具足十念」に重点を置いている。(2) 十念については、すぐれた菩薩が行うべき慈・悲・護法などの10種の念を説く『弥勒発問経』の十念説に依っている。念仏については、迦才の『浄土論』巻上にほぼ一致する文を挙げて、仏の色身や仏の智身、すなわち大悲力を念ずることである「心念」と、常に阿弥陀仏の名号を念ずることである「口念」とに分け、「心念」ができない時は「口念」を用いるとし、あくまでも「心念」を中心とした観念的念仏を主張する。(3)「逆謗除取」の問題については本書の第1巻で、『観経』下下品には五逆罪についての記述はあるが、正法の誹謗についての記述はなく、五逆罪よりも誹謗正法の方がより重罪であるから、誹謗正法さえしなければ往生が可能であるとする。この文は曇鸞の『往生論註』巻上の文とほとんど同文であるから、曇鸞の説を踏襲していると見られている。(4) 九品階位説については、過去の三説を異解として排斥し、自らの説を正義とする。すなわち、上品上生を十廻向、上品中生を十解十行、上品下生を十信菩薩、中品上生を前三果、中品中生を七方便、中品下生を凡人中有世間善、下三品を随過軽重分三生発心為因本願為縁とする。この説は、浄影寺慧遠の『観経疏』の説を踏襲したという見解と（戸松[1937]）、唐の慧浄の『無量寿観経纘述』の説。および唐の竜興の『観無量寿経記』に記す基法師の説とほぼ一致するという見解が提示されている（恵谷[1976]）。

本書は、日本最古の浄土教に関する著述といわれ、良源の『極楽浄土九品往生義』、源信の『往生要集』、源隆国の『安養集』、作者未詳の『安養抄』、良忠の『無量寿経論註記』などに引用され、その後の日本浄土教史に大きな影響を与えた。また同時代の、華厳宗の智憬や善珠の著作のほとんどが散逸して伝わらないから、現在のところ、南都仏教における浄土教思想を知る上で貴重な資料である。

作成者名：北条竜士

無量寿経論註記

書名よみ：むりょうじゅきょうろんちゅうき
書名別名：往生論註記、論註記
著者名：良忠
著者名よみ：りょうちゅう
著者名別名：然阿、記主禅師、三祖上人、佐介上人、然阿弥陀仏
著者生没年：1199（正治1）-1287（弘安10）
成立翻訳年：1262（弘長2）-1286（弘安9）
成立地：日本
巻数：5
漢和：漢文
写本等の存欠：刊本
活字本
刊本所在：1、寛永6（1629、仏教大）
2、正保2（1645、大正大）
3、慶安1（1648、仏教大）
4、貞享3（1686、大正大・仏教大）
5、正徳2（1712、仏教大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
活字本所載書：『浄全』1
参考文献：恵谷隆戒『浄土宗第三祖然阿良忠上人伝の新研究：特に金沢文庫資料を中心として』（国書刊行会、1984）、良忠上人研究会『良忠上人研究』（大本山光明寺、1986）、三上人御遠忌記念出版会『源智・弁長・良忠　三上人研究』（三上人御遠忌記念出版会、1987）
解説：良忠は浄土宗第3祖で、姓は藤原氏、石見国三隅荘（島根県）に生まれる。建暦1年（1211）、同国鰐淵寺月珠房信暹に入門し、建保2年（1214）、比叡山で受戒した。その後1236（嘉禎2）年、九州に下向して弁長の弟子となり、『末代念仏授手印』の相伝を受ける。建長1年（1249）、関東に入り、常陸・上総・下総を教化し、正元1年（1259）、鎌倉に入り、悟真寺を開創して念仏を広めた。

本書は、曇鸞『無量寿経論註』に対する注釈書である。良忠の弟子である了慧道光の『論註略鈔』下によると、弘長3年（1263）3月20日に起草し、文永2年（1265）7月6日に浄書し、文永9年（1272）12月28日にさらに添削した、と記している。さらに『料簡鈔』（未詳）によると、弘安9年（1286）9月に重ねて治定したとされる。

内容は、『無量寿経論註』を首題・撰号・釈文と順次に解説していく。さらにその中の釈文は、明教相・述論大意・正釈論文の3つに細分される。最初の「教相を明かす」では、『論註』冒頭所引の、龍樹『十住毘婆沙論』易行品の水路乗船の譬喩を引用する部分を注釈する。良忠は、不退転を得る2種の道として、五濁無仏の世において不退を得ようとする「自力難行不退」と往生浄土という「他力易行不退」があると解釈すべきとし、往生行に難易二道、自他二力があると理解すべきではないとしている。

「論の大意」を述べるとは、曇鸞が「此の『無量寿経優婆提舎』は蓋し上衍の極致、不退の風航なり」と述べ、題号の「無量寿経優婆提舎」を「無量寿」と「優婆提舎」に2つに分けて解釈をしている、その部分を指す。ここでは「此の『無量寿経優婆提舎』とは」という文が大意であり、次の「無量寿」「優婆提舎」は題目の大意であるから曇鸞が別して解釈しているのであって、釈文の解釈と重複するものではないとする。

そして「釈文」では、『論註』の題号釈、ならびに本文に対する逐文解釈が行われている。

作成者名：曽和義宏

無量寿如来念誦私記

書名よみ：むりょうじゅにょらいねんじゅしき
著者名：三密房
著者名よみ：さんみつぼう
著者生没年：不明
成立翻訳年：平安末期
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：写本
写本所在：1、高野山大蔵本（平安末期書写、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
参考文献：『仏書解説大辞典』
解説：著者の三密房については未詳。ただし、三密房と呼ばれる院政期の真言僧に聖賢（1083-1147）がいる。聖賢は醍醐寺の流れを汲む勝覚の弟子であり、後には金剛王院流を興した。本書の著者に比定できるかは今後の検討を俟つ必要がある。

本書は阿弥陀仏に対する供養法を綴った内容か。今後の原本調査が望まれる。

作成者名：能島覚

迷悟抄

書名よみ：めいごしょう
著者名：信証
著者名よみ：しんしょう

著者名別名：堀池僧正
著者生没年：1086（応徳3）-1142（康治1）
成立翻訳年：平安末期
成立地：日本
巻数：1
参考文献：北尾隆心「『迷悟抄』について（一）」（『山崎泰広教授古稀記念論文集　密教と諸文化の交流』永田文昌堂、1998）
解説：本書は即身成仏・五大観・密厳浄土依正観法の三項目を立てて問答したものという。高野山持明院（天文六写、真言内証義・本式文と合一冊、『国書総目録』）
　なお、高野山宝寿院諸蔵の覚済『迷悟抄』（室町中期書写）とは別本と考えられる。同書の活字本は『国文東方仏教叢書』1、『真言宗安心全書』上に収められている。
作成者名：能島覚

滅罪劫数義

書名よみ：めつざいごうすうぎ
著者名：隆寛
著者名よみ：りゅうかん
著者名別名：伽陀婆羅摩、皆空、無我、劉官、隆観、長楽寺律師
著者生没年：1148（久安4）-1227（嘉禄3）
成立翻訳年：1210（承元4）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、大谷大蔵本（江戸期、了祥書写）
写本奥書：1、聖暦庚午之歳窮冬甲子之日為勤愚者注之、敢不為智人、猥勿嘲々々、権律師隆寛記矣、予天性雖愚深信本願、信心無二、慇懃念仏然一念之力滅八十億劫生死罪未測其故、思惟日積旨趣弥暗、此事屢乱心殆為念仏障、爰自然発智雖成此義下品下生除五十億劫罪文和会失據之間於観念法門中忽得証誠、先年之比恒可係心於華座観之由有夢想之告、其後観経第七観文並礼讃中七言八句偈僅以諳誦許也、敢不辨幽旨、而今就華座観文既察和尚深意又推本願密意往日之夢豈非告示此事哉、竊以経云如此妙華本法蔵比丘願力所成也、若欲念彼仏者当先作此華座想、釈云弥陀本願華王座、又云華座一観是其別依唯属弥陀仏也　料識阿弥陀即本願名也、華座即本願体也、以法蔵因感極楽果、此因果即本願宗也、滅多劫罪得生彼国即本願用也、此経一部即本願教也、彼一部即本願教也、彼一夜奇霊夢今多劫滅罪義倩案始末宛同府契感涙如雨、見者勿疑而已、建暦二年（1212）正月四日追以録之／干時文明九年丁酉（1486）八月二十九日、長楽寺流沙門隆秀齢二十五、在書判
活字本所載書：『隆寛律師の浄土教　附遺文篇』、『隆寛律師全集』1、戸松憲千代「『滅罪劫数義』の本文及其解説」（大谷学報20-1、1939）
参考文献：安井廣度『法然門下の教学』（法蔵館、1938）、戸松憲千代「『滅罪劫数義』の本文及其解説」（大谷学報20-1、1939）
解説：隆寛の著作。『観経』に説かれる滅罪の問題に関して論じた書物。『観経』下品下生には一念の力がよく八十億劫の罪を滅するとされれうがそれはどのような意味であるか。また下品上生には五十億劫の罪を滅すると説き、下品下生には八十億劫の滅罪を説くとするが五十億と八十億についてどのように会通するべきかを論じた書である。
　本書は昭和10年（1935）大須賀秀道により、九州の正行寺にて発見される。『長西録』などの目録には出てこないが、奥書には建暦1年（1211）の隆寛63歳の時の書であることが記され、『散善義問答』には本書の書名が見え、内容的に一致した点も見え、隆寛の書物として間違いない。現存する写本は、戸松憲千代によれば、文明9年（1477）長楽寺流の隆秀の書写本を了祥が影写したものであるという。現在は大谷大学に所蔵する。
作成者名：伊藤茂樹

物語集

書名よみ：ものがたりしゅう
書名別名：筑紫物語集（？）
著者名：聖光
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：聖聡『徹選択本願本末口伝抄』上（『浄全』7）
参考文献：石井教道「鎮西教学研究序説」（『大正大学学報』23、1935）、小西存祐「国師の著作」（柴田玄鳳編『三上人の研究』、三上人遠忌事務局、1935）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。
　本書について聖聡は「鎮西上人の御作に物語集という文あり」（『徹選択本願本末口伝抄』上（『浄全』7、p.130下））と述べているが、小西存祐は、本書の別名が『筑紫物語集』であるとし、「『善導大師和讃』は『筑紫物語集』と共に伝道的方面の著作として一種の関係を持っている」として、両書を聖光の著作とした上で、両書の関係性を指摘している。
作成者名：米沢実江子

唯信鈔文意

書名よみ：ゆいしんしょうもんい
書名別名：唯信文意、唯心鈔文意、唯心文意
著者名：親鸞
著者名よみ：しんらん
著者名別名：愚禿鸞、愚禿釈親鸞、愚禿親鸞、愚禿釈の鸞、善信、本願寺聖人、愚禿釈善信、見真大師
著者生没年：1173（承安3）-1262（弘長2）
成立翻訳年：1250（建長2）・1257（康元2・正嘉1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高田専修寺蔵本（1257（康元2）、親鸞真筆本）〈影印版〉：『親鸞聖人真蹟集成』8（法蔵館、1974）
2、高田専修寺蔵本（1257（康元2）、親鸞真筆本）〈影印版〉：『高田法宝留影』4（真宗高田派宗務所、1974）
3、前橋妙安寺蔵本（1258（正嘉2）、成然書写）
4、高田専修寺蔵本（1258（正嘉2）-1310（延慶3）、書写者不明、顕智加筆）

〈影印版〉:『顕智上人集』下（「高田古典」4、真宗高田派宗務院、2002）
5、盛岡本誓寺蔵本（鎌倉期、親鸞真筆（？）是信書写（？））
6、静岡教覚寺蔵本（鎌倉末期、書写者不明、はじめ11紙は室町末期補写）
7、大谷大蔵本（建武2（1335）、未調査）
8、兵庫毫摂寺蔵本（1341（暦応4）、乗専書写）
9、大阪願得寺蔵本（1345（康永4）、乗専書写）
10、七尾常福寺蔵本（室町前期、書写者不明）
11、河内光徳寺蔵本（室町末期、書写者不明）
写本奥書：1、康元二歳丁巳（1257）正月十一日
2、康元二歳（1257）正月二十七日、愚禿親鸞八十五歳書写之
3、正嘉元年丁巳（1257）八月十九日、愚禿親鸞八十五歳書之／正嘉二年（1258）季夏十五日、以師真筆本、釈成然書写之
4、本云／正嘉元年丁巳（1257）八月十九日、愚禿親鸞八十五歳書之
5、建長二歳丙辰（1250）十月十六日、愚禿親鸞書之
6、正嘉元年丁巳（1257）八月十九日、愚禿親鸞八十五歳書之
7、（未調査）
8、正嘉元年丁巳（1257）八月十九日、愚禿親鸞八十五歳書之／暦応四歳辛巳（1341）閏四月十四日於四条朱雀道場書写校合訖、願主釈顕性
9、本云／正嘉元年丁巳（1257）八月十九日、愚禿親鸞八十五歳書之／康永四年乙酉（1345）正月晦日書写校合訖、殊可有尊重頂戴者也、願主釈慶如
（裏紙裏）コノ文ヲウツサンヒトハカミノカス行ノカスコレニタカフヘカラス、タトヒ異本アリトイフトモ、コノ門徒ニヲイテハ末代ニイタルマテ一字ヲモクハヘヲトスコトアルヘカラス／一本此奥書在之、誰人ノ作候哉可尋
10、（未調査）
11、建長八歳丙辰（1256）三月二十四日、愚禿親鸞八十四歳写之
刊本所在：1、承応2（1653、大谷大）
2、享保20（1735、（未調査）、『唯信鈔文意秘印訣』所収）
3、明和2（1765、大谷大・竜谷大、『真宗法要』所収）
4、文化8（1811、大谷大・竜谷大、『真宗仮名聖教』所収）
5、万延1（1860、未調査）
刊本の奥書刊記：1、承応二癸巳（1653）暦黄鐘吉祥板行、京極通円福寺町、秋田屋平左衛門板行
2、高田一身田御書物所、勢州安濃津東町書林、京都出店、永田忠兵衛、享保二十乙卯（1735）戴孟夏穀旦、皇都書肆、錦小路通新町西へ入町、永田調兵衛刻梓
3、（未調査）
4、（未調査）
5、夫斯三種聖教者大祖聖人真翰而所秘在于宗刹宝庫、為厥慈訓乎、大悲摂化善巧万機普益要法包、豈可不珍敬奉持焉、今茲十一月有志謀上木寿梓流通于遐代、乃請大法主輪下蒙其許可在欲以報仏祖洪恩之一端、然及刻成使家伝戸読其勝縁利益不亦甚大矣哉、万延庚申（1860）冬十一月、権大僧都円崇謹撰、藤原信愿拝書、大祖和語之聖典（朱印）／先師遊泉院疾革謂弟子曰、死後莫煩樹碑唯望大祖之聖典公行於世、弟子敬承命、没後未幾而刻成、因縁師之、微意於斯云
活字本所載書：『真聖全』2、『浄土真宗聖典－原典版－』、『真宗聖典』、『定本親鸞聖人全集』和文編、『真宗史料集成』1、『大正蔵』83（No.2658）、『諸本校異　唯信鈔文意』（安居事務所、1933）
現代語訳書：若杉慧「唯信鈔文意」（『現代語訳親鸞全集』、講談社、1974）、常磐井鸞猷「現代語訳　唯信鈔文意」（『高田法宝留影』4、真宗高田派宗務所、1974）、真継伸彦「唯信鈔文意」（『現代語訳親鸞全集』3、法蔵館、1982）、二橋進「唯信鈔文意」（『唯信鈔文意　親鸞に学ぶ仏教の極意』、PHP研究所、1983）、石田瑞麿「唯信鈔文意」（『親鸞全集』3、春秋社、1985）、櫟重誓「唯信鈔文意」（『傍訳親鸞聖人著作全集』4、四季社、2001）、『唯信鈔文意－現代語訳－』（本願寺出版社、2003）
参考文献：大谷派宗史編集所「唯信鈔文意諸本の解説」（『宗史編修所報』2、1933）、梅原真隆『唯信鈔文意講義』（親鸞聖人研究発行所、1937）、可西大秀『唯信鈔文意講読』（東本願寺安居事務所、1954）、寺川俊昭『唯信鈔文意』（真宗大谷派宗務所出版部、1984）、宮崎円遵「親鸞聖人書誌」（『真宗書誌学の研究』、「宮崎円遵著作集」6、思文閣出版、1988）、浅野教信「『唯信鈔文意』の研究」（『親鸞と浄土教義の研究』、永田文昌堂、1998）、袴谷憲昭「『唯信鈔文意』比較対照本」（『駒沢短期大学研究紀要』28、2000）、小山正文「『西方指南抄』中本をめぐって－二つの小さな発見－」（『親鸞と真宗絵伝』、法蔵館、2000）、門川徹真「『唯信鈔文意』の書誌学的研究－流布本の特異性について－」（『真宗研究』45、2001）、梅林久高「唯信鈔文意（顕智上人加筆正嘉元年本）」（『顕智上人集』下、『高田古典』4、真宗高田派宗務院、2002）、梅林久高「『唯信鈔文意』をめぐって」（『真宗研究』47、2003）
解説：親鸞が安居院聖覚の『唯信抄』に引用される漢文章を注釈したもの。即ち、『唯信抄』に引用される、法照『五会法事讃』「如来尊号甚分明」の文、「彼仏因中立弘誓」の文、善導『法事讃』「極楽無為涅槃界」の文、『観無量寿経』「具三心者」の文、善導『往生礼讃』「具此三心必得往生也」の文、善導『観経疏』「不得外現賢善精進之相」の文、『五会法事讃』「不簡破戒罪根深」の語、『無量寿経』「乃至十念」の文、『観無量寿経』「応称無量寿仏」「具足十念称南無阿弥陀仏」の文、善導『往生礼讃』「若我成仏十方衆生」の文について、この順に語句をきって解説をしている。そこで展開されている解説は、『唯信抄』の説示とは趣を異にしており、親鸞独自の思想が展開されているとみることができる。例えば来迎の問題では、本書には臨終来迎を語らずに、かえって現生で真実信心の行者を守護する等と解説している点や、また信心についても、『無量寿経』の三信と『観無量寿経』の三心を一致とする立場を取らず、『観無量寿経』の三心をえて後に『無量寿経』の三信、即ち一心を獲得すると説くなど、親鸞の思想が特徴的にあらわれている。この点に関しては浅野教信「『唯信鈔文意』の研究」を参照の事。

本書には、建長2年（1250）の奥書のある盛岡本誓寺蔵本、康元2年（1257）1月11日、同年1月27日の奥書のある高田専修寺蔵の2本、正嘉1年（1257）の奥書のある妙安寺蔵の計4種のものが知られている。このうち高田専修寺蔵の2本は親鸞真筆である。この4種はおおよそ、盛岡本誓寺蔵本・高田専修寺蔵本の2本と妙安寺蔵本の2つのグループにわけることができる。

妙安寺蔵本では、それまで本書ではふれられなかった弥勒等同の思想や、等正覚・無上覚の語が使用されている点、草木国土の成仏が語られている点などに特色がある。この点については門川徹真「『唯信鈔文意』の書誌学的研究－流布本の特異性について－」、袴谷憲昭「『唯信鈔文意』比較対照本」を参照のこと。

親鸞は、康元2年・正嘉1年（1257）の1年間に本書を3度著していることになり、それぞれに文の出入が激しい事から、この時期の親鸞の思想展開や思想表現の変化を知る上で注目されている。
作成者名：藤田真隆

遊心法界念仏鈔

書名よみ：ゆうしんほっかいねんぶつしょう
著者名：済暹
著者名よみ：さいせん
著者名別名：仁和寺済暹僧都、仁和寺済暹律師、南岳房僧都、暹僧都
著者生没年：1025（万寿2）-1115（永久3）
成立翻訳年：11c後半-12c前半
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『諸宗章疏録』（『日仏全』1）
参考文献：櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の済暹については『観無量寿経中略要問答抄』の項を参照。
作成者名：能島覚

要法文

書名よみ：ようほうもん
書名別名：要法門
著者名：源信
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：986（寛和2）/1010（寛弘7）
成立地：日本
巻数：2
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（1129（大治4）、永義書写、上巻のみ）
2、坂本西教寺正教蔵本（1161（永暦2）、弁春書写、下巻のみ（前欠））
3、金沢文庫蔵本（1163（長寛1）以前、書写者不明、覚応点、上巻のみ）
4、大須真福寺蔵本（鎌倉期（？）、書写者不明、上巻（零本）、下巻（前欠））
5、高野山正智院蔵本（1208（承元2）、院暁書写）
6、鈴鹿隆夫氏蔵本（1251（建長3）、圓思書写）
7、金沢文庫蔵本（鎌倉期、書写者不明、上巻のみ）
8、河内長野金剛寺蔵本（鎌倉期、書写者不明、上巻のみ（零本））
9、身延久遠寺身延文庫蔵本（1461（寛正2）、日朝書写）
写本奥書：1、大治四年（1129）七月二三日書写了、執筆僧永義
2、永暦二年（1161）六月十日午時、於大蓮房之写了、為是偏往生極楽頓証菩提也、右筆弁春（花押）
3、点者霊山寺之住僧覚応、長寛元年（1163）九月八日点了（加点奥書、本文別筆）
4、寛弘七年＜庚［■］＞七月廿五日　沙門源信記（下巻本奥書）
5、承元二年四月十三日酉時、於王城東京姉小路油小路橘逸勢之房書写了、偏為利生方便仏法興隆也、執筆近士院暁
6、建長三年三月八日、於本院東谷月蔵房書写了、右筆釈圓思（花押）（巻上）／于時寛弘七年＜庚戌＞七月廿五日　沙門源信記（巻下本奥書）／建長三年三月二十日＜［■］時＞、於本院東谷月蔵房書写之畢、右筆釈圓思（花押）
7、寛弘七年＜庚戌＞七月廿五日　天台山首楞厳院沙門源信記
8、（奥書なし）
9、于時寛弘七年＜庚戌＞七月廿五日　［■■］記（本奥書）／寛正第二＜辛巳＞七月十三日、於鎌倉比喜谷長［■］山［　　］二十日法談砌玉明房日慶阿闍梨［■■］皈敬［■］日朝（花押）（書写奥書）
刊本所在：1、寛永3（1626、叡山天海蔵）
2、慶安4（1651、大谷大・大正大・立正大・竜谷大）
刊本の奥書刊記：1、于時寛和二年丙戌七月二十五日 沙門源信記（本奥書）／于時寛永三＜丙寅＞暦閏卯月日刊摺之（刊記）
2、于時寛和二年＜丙戌＞七月二十五日 沙門源信記（本奥書）／慶安四＜辛卯＞仲春（刊記）
活字本所載書：『恵全』5、『日仏全』32
現代語訳書：なし
参考文献：佐藤哲英「金沢文庫に見存する恵心僧都撰述に就て」（『竜谷学報』309、1934）、上杉智英「真源撰『法要文』の撰述年次について」（『印仏研』55（2）、2007）
解説：著者は源信。
成立年代に関して慶安4年（1651）刊本は「于寛和二（986）年＜丙戌＞七月二十五日、沙門源信記」と寛和2年（986）、源信45歳の撰述とする。ただし金沢文庫蔵本の鎌倉時代写本、真福寺蔵本には「寛弘七年＜庚戌＞（1010）七月二十五日　天台山首楞厳院沙門源信記」と寛弘7年（1010）、源信69歳の撰述とする本奥書がみられる。
内容は仏教の基礎的な名目の解説で、百箇条（五蘊、十二処、十八界、地等六界、四諦、四縁、十二有支、六波羅蜜、空、真如法界、四静慮、四無量心、四無色定、八解脱、八勝処、九次第定、十遍処、四念住、四正断、四神足、五根、五力、七覚支、八正道、三解脱門、菩薩十地、三乗共十地、五眼、六通、仏十力、四無所畏、四無礙解、菩薩四無量心、十八不共法、三十二相、八十随好、無妄失法、恒住捨性、一切智等三智、一切陀羅尼門、一切三摩地門、預流等四果、独覚菩提、一切菩薩摩訶薩行、諸仏無上正等菩提、三身、智恵、涅槃、八相成道、十号、四悉檀、転法輪、十二部経、聖教蔵摂、三帰、戒品、三学、五分法身、見修等三道、天台教文、正像末法、四依、四種道理、五明、煩悩、随煩悩、三毒、使、顛倒、結、纏、垢、五蓋、五住、百八八万等惑、身口意三業、律儀等三無表、十善十悪、四重禁、五逆罪、福等三業、順楽等三業、順現等業、定不定業、苦々等三苦、生等四苦、八苦、八難、五趣、三聚衆生、魔事、三界、九地、七識住、九有情居、四生、生等四有、器界安立、劫、四種仏土）に関する要文で構成されている。
なお下巻末には「海公の請に依り聊か此の文を集む。願わくは此の功徳を以て安楽国に往生し、水鳥樹林の声に常に此の法門を聞かん。乃至、慈氏の下生に値遇し恒河の仏法を悟り、不二の法門に入らん。若し一文一句を習学する者あらば、仏に値い法を聞かんこと、我等が如くにして異なり無けん」と本書撰述の理由が「海公の請」であったことが述べられている。海公については不明。
作成者名：上杉智英

横川首楞厳院二十五三昧起請（十二箇条）

書名よみ：よかわしゅりょうごんいんにじゅうござんまいきしょう（じゅうにかじょう）
書名別名：花台十二ヶ条起請、十二箇条起請、二十五三昧起請
著者名：源信
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、

横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：988（永延2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、東大寺中性院蔵本（鎌倉期（？）、書写者不明、慶滋保胤（？）『起請八箇条』、湛秀『臨終行儀注記』と合綴。表紙に「清涼院実海」、『臨終行儀注記』末尾に「于時慶安三庚寅（1650）五月所持之　実海」と本文と別筆で記される）
写本奥書：1、永延二年（988）六月十五日首楞厳院源信撰
活字本所載書：小山昌純「東大寺中性院所蔵『横川首楞厳院廿五三昧＜恵心保胤＞臨終行儀』の再検討―叢書本の誤植による問題点―」（竜谷仏教学会編『仏教学研究』53、1997）、『恵全』1、『日仏全』70、『大正蔵』84（No.2723）、『続浄』12
現代語訳書：川崎庸之編『源信』（「日本の名著」4、中央公論社、1972）
参考文献：堀大慈「二十五三昧会の成立に関する諸問題」（京都女子大学『人文論叢』9、1964）、宮崎円遵「二十五三昧式並びに同起請について」（『結城教授頌寿記念　仏教思想史論集』、大蔵出版、1964）、川崎庸之編『源信』（「日本の名著」4、中央公論社、1972）、伊藤真徹『平安浄土教信仰史の研究』（平楽寺書店、1974）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、藤本佳男「横川と二十五三昧会」（『続国家と仏教』古代中世編、永田文昌堂、1981）、大隈和雄・速水侑『源信』（「日本名僧論集」4、吉川弘文館、1983）、速水侑『源信』（「人物叢書」、吉川弘文館、1988）、章輝玉・石田瑞麿『新羅の浄土教・空也・良源・源信・良忍』（「浄土仏教の思想」6、講談社、1992）、小山昌純「東大寺中性院所蔵『横川首楞厳院廿五三昧＜恵心保胤＞臨終行儀』の再検討―叢書本の誤植による問題点―」（竜谷仏教学会編『仏教学研究』53、1997）、奈良弘元『初期叡山浄土教の研究』（春秋社、2002）
解説：東大寺中性院蔵本『横川首楞厳院二十五三昧起請』（内題）の奥書「永延二年（988）六月十五日首楞厳院源信撰」より、著者は源信、成立年代は永延2年（988）6月15日と考えられる。

内容は二 十五三昧会における行法、施設、結縁衆の心構え等を規定したもので、二十五 三昧会の趣旨、定起請、結語で構成される。その内、定起請は「毎月十五日の夜を以て不断念仏を修すべき事」「毎月十五日の正中以後の念仏以前に『法華経』を講ずべき事」「十五日の夜、結衆の中、次第に仏聖灯明を供え奉るべき事」「光明真言を以て土砂を加持し、亡者の骸に置くべき事」「結衆相共に永く父母兄弟の思いを成すべき事」「結衆発願の後はおのおの三業を護るべき事」「結衆の中に病ある時は用心を致すべき事」「結衆の中に病人ある時は、結番して遞いに守護し問訊すべき事」「房舎一宇を建立して往生院と号づけ、病者を移し置くべき事」「兼ねて勝地を占い、安養廟と名づけ、率都婆一基を建立し、はたまた一結の墓所と為すべき事」「結衆の中に亡者ある時は問葬、念仏すべき事」「起請に随わず、懈怠を致す人を衆中より擯出すべき事」の12ヶ条からなるが、これは先行する『横川首楞厳院二十五三昧起請（八箇条）』を増補したものと考えられる。増補の理由を堀大慈は「永延二年六月十五日、往生院の完成を契機として、二十五三昧会をより強化ならしめるため」（堀大慈「二十五三昧会の成立に関する諸問題」（京都女子大学『人文論叢』9、1964、p.164））とされている。

なお『二十五三昧根本結縁衆過去帳』によれば、源信は25名の根本結衆ではなく、19名の根本結縁衆の一員としてその名が見える（『恵全』1、p.671）。結縁の時期は、『横川首楞厳院二十五三昧起請（八箇条）』の結文に「いま極楽の蓮台に発心し、長く十口の禅侶と結縁す」（『恵全』1、p.357）とあり、『二十五三昧根本結縁衆過去帳』の根本結縁衆の記載順序が結縁順序であるならば、寛和2年（986）9月15日頃と考えられる。
作成者名：上杉智英

横川首楞厳院二十五三昧起請（八ヶ条）

書名よみ：よかわしゅりょうごんいんにじゅうござんまいきしょう（はっかじょう）
書名別名：花台院八ヶ条起請、花台八ヶ条起請、花台八ヶ条、起請八ヶ条、二十五三昧起請
著者名：慶滋保胤／源信（？）
著者名よみ：よししげのやすたね／げんしん
著者名別名：寂心、賀茂保胤、内記入道、入道内記、内記上人、心覚、心公、茂能、定矜/恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：？-1002（長保4）/942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：986（寛和2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、東大寺中性院蔵本（鎌倉時代（？）、書写者不明、源信『横川首楞厳院二十五三昧起請』、湛秀『臨終行儀注記』と合綴。表紙に「清涼院実海」、『臨終行儀注記』末尾に「于時慶安三庚寅（1650）五月所持之　実海」と本文と別筆で記される）
2、高野山金剛三昧院蔵本（南北朝期（？）、書写者不明、1217（建保5）4月19日に始修の旨が記されている『二十五三昧式＜表白等＞』の中に「二十五三昧起請文有二通、其一通云、首楞厳院起請八箇条」として本書が所載される）
3、高野山金剛三昧院蔵本（1224（貞応3）、書写者不明、『失題（二十五三昧式）』（首欠）の中に「二十五三昧起請文有二通、其一通云、起請八箇条」として本書が所載される）
写本奥書：1、寛和二年（986）九月十五日、慶保胤草云々
2、寛和二年（986）九月十五日
3、貞応三年甲申（1224）正月十五日
活字本所載書：小山昌純「東大寺中性院所蔵『横川首楞厳院廿五三昧＜恵心保胤＞臨終行儀』の再検討―叢書本の誤植による問題点―」（竜谷仏教学会編『仏教学研究』53、1997）、『恵全』1、『日仏全』70、『大正蔵』84（No.2724）、『続浄』12、和多昭夫「高野山の二十五三昧式」（仏教文学研究会編『仏教文学研究』11、1972）
現代語訳書：川崎庸之編『源信』（「日本の名著」4、中央公論社、1972）
参考文献：堀大慈「二十五三昧会の成立に関する諸問題」（京都女子大学『人文論叢』9、1964）、宮崎円遵「二十五三昧式並びに同起請について」（『結城教授頌寿記念　仏教思想史論集』、大蔵出版、1964）、川崎庸之編『源信』（「日本の名著」4、中央公論社、1972）、伊藤真徹『平安浄土教信仰史の研究』（平楽寺書店、1974）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、1979）、藤本佳男「横川と二十五三昧会」（『続国家と仏教』古代中世編、永田文昌堂、1981）、大隈和雄・速水侑『源信』（「日本名僧論集」4、吉川弘文館、1983）、速水侑『源信』（「人物叢書」、吉川弘文館、1988）、

章輝玉・石田瑞麿『新羅の浄土教・空也・良源・源信・良忍』（「浄土仏教の思想」6、講談社、1992）、小山昌純「東大寺中性院所蔵『横川首楞厳院廿五三昧＜恵心保胤＞臨終行儀』の再検討―叢書本の誤植による問題点―」（竜谷仏教学会編『仏教学研究』53、1997）、奈良弘元『初期叡山浄土教の研究』（春秋社、2002）

解説：著者は不明。東大寺中性院蔵本『起請八箇条』（内題）の末尾には「寛和二年（986）九月十五日、慶保胤草云々」の記述あり。また『長西録』『蓮門録』『玄智録』（『日仏全』1、p.352、417、465）は源信撰とし、金剛三昧院蔵本『二十五三昧式』の末尾にも「此式者見恵心僧都起請二通＜八ヶ条十二ヶ条＞并雲林院式世流布式等書出也」（和多昭夫「高野山の二十五三昧式」（仏教文学研究会編『仏教文学研究』11、p.354）と、源信の撰述とする記述がみられる。なお良忠『往生要集義記』は「二十五三昧の起請＜恵心作保胤筆＞」（『浄全』15、p.312）とする。

成立年代は中性院蔵本、金剛三昧院蔵本（建保5年（1217）本）、共に寛和2年（986）9月15日とする。

内容は二十五三昧会における行法、施設、結縁衆の心構え等を規定したもので、「毎月十五日、念仏三昧を勤修すべきこと」「念仏結願の次、光明真言を誦して、土砂を加持すべきこと」「心を調え、道を護り、人を択びて補鄭すべきこと」「別処を建立して往生院と号づけ、結衆の病める時、移し住せしむべきこと」「結衆の病める間は結番して車視すべきこと」「結衆の墓所を点定して華台廟と号づけ、二季に念仏を修すべきこと」「常に西方を念じ、深く功力を積むべきこと」「結衆の没後は義を守り、善を修すべきこと」の8ヶ条と結文からなる。これら8ヶ条は『二十五三昧式』所載「楞厳院二十五三昧根本結衆二十五人連署発願文」（『恵全』1、p.360-362）の趣旨に基づくものであり、『往生要集』巻中、大文第五「助念方法」止悪修善、懺悔衆罪、大文第六「別時念仏」尋常別行、臨終行儀、等を参照したものと考えられる。ただし第2・6・8条に見られる結衆の葬送・墓地・追善の規定は「楞厳院二十五三昧根本結衆二十五人連署発願文」『往生要集』に見えず、『八ヶ条起請』特有の問題であり、堀大慈はこれら3ヶ条に注目され、「花山法皇の入会と御願華台廟の建立が原因となって制定された」ものと論じられている（「二十五三昧会の成立に関する諸問題」（京都女子大学『人文論叢』9、1964、p.155））。

結語には「方今、像法の寿、喉に至る」（『恵全』1、p.357）と末法に対する意識が伺え、また「販鶏の悪人」「殺牛の屠士」（『恵全』1、p.357）といった『瑞応伝』の悪人往生譚の引用は、『日本往生極楽記』序にも見える。

なお『二十五三昧根本結縁衆過去帳』（『恵全』1、p.671-676『楞厳院二十五三昧過去帳』（『続天台宗全書』史伝2、p.277）には根本結衆、結縁衆として慶滋保胤の名は見られない。

作成者名：上杉智英

吉水法流記

書名よみ：よしみずほうるき
書名別名：尭恵勘録
著者名：尭恵
著者名よみ：ぎょうえ
著者名別名：善偉房尭恵、善偉
著者生没年：1328（嘉暦3）-1395（応永2）
成立翻訳年：1375（永和1）
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、愛知岡崎真浄院蔵本（延宝7（1679）、霄翁書写）
写本奥書：1、（内題下）沙門尭恵勘録〈永和元乙卯年（1375）九月二十三日〉
（奥書）本云或依相承口伝釣之或校数多血脈記之、自欲備廃忘、堅勿許外見耳、永和元乙卯年（1375）九二十三於因州無量光寺令清書畢、洛陽円福寺沙門尭恵〈在判〉／永正七庚午（1510）十一月二十八日於和州山辺庄戒長寺光（「舒」脱？）軒書写之訖、深草末学康翁三十四歳／今上延宝七己未（1679）十二月六日於三州碧海郡中嶋盧庵山崇福寺学窓下令書写之訖、西山流深草派晩学霄翁俊空雲良敬白
活字本所載書：牧哲義「『吉水法流記』『法水分流記』の翻刻とその研究　第一部資料篇」（『東洋学研究』30、1993）
参考文献：牧哲義「『吉水法流記』『法水分流記』の翻刻とその研究　第一部資料篇」（『東洋学研究』30、1993）、「尭恵勘録『吉水法流記』について」（『印仏研究』32-2、1984）、「法然門下の相承について（一）」（『印仏研究』41-1、1992）、「法然門下の相承について（二）―聖冏と尭恵―」（『印仏研究』41-1、1992）
解説：浄土宗において、成立年代が判明する中では最古の法系譜である。

冒頭には信空の白川義を配置するが、続いて深草義を中心とする西山派の系譜を記し、以下、法然門下の諸師を挙げ、鎮西義、長楽寺義、一念義、九品寺義については門弟まで詳述している。「法然上人」以外の人師には、ほとんど「法師」の称号を用いるのが特徴である。最後に浄土先達、別義建立の2項目を立て、諸宗浄土教の学匠を列挙する。奥書を挟んで「浄土三国伝来血脈相承之事」として、釈迦如来から法然に至る次第相承・不次第相承の系譜等を載せるが、これが本来一具のものかどうかは検討の余地がある。

現在のところ、本書は真浄院蔵本を唯一の伝本とする希覯本である。しかし、禅林寺54世霊空是湛撰『光明寺歴代記』は、本書を「尭恵勘録」という名で引用し、西山派西谷義についての記述の不確かさを批判しており、江戸時代には僅かながら流布していたものと思われる。

作成者名：稲田廣演

来迎和讃

書名よみ：らいこうわさん、らいごうわさん
書名別名：来迎讃、来迎の讃、弥陀和讃
著者名：源信
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：986（寛和2）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、高山寺蔵本（1116（永久4）頃（？）、書写者不明、『古和讃集（仮名、第4部182函26号）』所収）
2、神奈川藤沢清浄光寺蔵本（1574（天正2）（？）、普光書写、『六時礼讃』『六時居讃』『来迎讃』からなる）
3、前田家尊経閣文庫蔵本（1587（天正15）、伝向阿書写、『来迎讃』『五会讃』からなる）
4、神奈川藤沢清浄光寺蔵本（1621（元和7）、普光書写、善導『六時礼讃』『極楽六時讃』『来迎讃』からなる）
5、叡山文庫蔵本（江戸中期、書写者不明、『来迎和讃』（外題『弥陀和讃』）『法華出離血脈』『法華和讃』からなる）
6、静嘉堂文庫蔵本（江戸末期、書写者不明、『東照宮御鎮

座帳並縁起』巻末に慈鎮『無作讃』と共に付載）
7、愛知碧南称名寺蔵本（1664（寛文4）以降、重全書写、『極楽六時讃』『来迎讃』からなる）
写本奥書：1、（奥書なし、表表紙に本文と同筆で「永久四年丙申（1116）七月十日＜シシホレト大般若カソヒシナリ　ステママ＞」の記述あり）
2、往古遊行有十九代筆記之礼讃、天正二甲戌（1574）比以後本両巻透写、之一冊故上人三十三世譲、之一冊当会下留、之平生可為声明稽古之本物也、慶長十八癸丑年（1574）四月二十日記録、遊行三十二世他阿
3、宝性院智半大徳、天正十五丁亥（1587）六月二十一日
4、右依所望所染毫六時漢和之礼讃具足之者也、元和七辛酉年（1621）十月二十九日、遊行三十二世記書
5、（未調査）
6、（未調査）
7、以一法上人本洞雲院重全謹書
刊本所在：1、（未調査）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
活字本所載書：『恵全』1、『日仏全』125（『天台霞標』四編巻之三）、『昭和新纂国訳大蔵経』（宗典部3）、高楠順次郎・志田義秀・福井久蔵編『釈教歌詠全集』5（東方出版、1934）、高野辰之編『日本歌謡集成』4（東京堂出版、1960）、『国文東方仏教叢書』1輯、国民図書株式会社編『校註国歌大系（復刻版）』1（講談社、1976）、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）、高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺典籍文書の研究』（「高山寺資料叢書」別巻、東京大学出版会、1980）、『西方浄業式』、多屋頼俊『和讃の研究』（「多屋頼俊著作集」2、法蔵館、1992）、藤井佐兵衛『仏教和讃五百題』（書林山城屋、1916）、河住玄編『平安浄土教漢籍と和歌』（私家版、1989）
現代語訳書：八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）
参考文献：竹田実善「浄業和讃の成立」（『国文学踏査』復刊1、1956）、武石彰夫『仏教歌謡の研究』（桜楓社、1969）、八木昊恵『恵心和讃に聞く』（教育新潮社、1976）、早苗憲生「来迎讃について」（『仏教史学研究』19-2、1977）、山口佳紀「高山寺本古和讃集の研究」（高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺典籍文書の研究』「高山寺資料叢書」別巻、東京大学出版会、1980）、鈴木治子「『来迎讃』と迎講」（『国文学踏査』14、1986）、鈴木治子「『来迎讃』と浄土教文化」（『梁塵』5、1987）、多屋頼俊『和讃史概説』（「多屋頼俊著作集」1、法蔵館、1992）、多屋頼俊『和讃の研究』（「多屋頼俊著作集」2、法蔵館、1992）、榎木克朗『日本仏教文学と歌謡』（笠間書院、1994）
解説：著者は不明。『長西録』（『日仏全』1、p.351）は「源信」とし、『天台霞標』（『日仏全』125、p.447）、『浄業和讃』（『日本歌謡集成』4、p.13）にも恵心撰として収載される。『円光大師行状画図翼賛』巻46（『浄全』16、p.669）には「当時恵心僧都ノ製作トテ当麻寺ノ迎講ニ誦スル所ノ讃文トイヘル者世ニ行ハル。其文中ニ「コノトキ身心ヤスクシテ念仏三昧現前シ」ト云句アリ」の記述あり。なお『拾遺往生伝』永観伝（日本思想大系7『往生伝・法華験記』、p.384）には「来迎讃＜本云、木工助敦隆の作なりといふ＞」という記述があるが伝源信撰『来迎讃』との関係は不明。

成立年代は不明。『国書総目録』8（p.5）、『仏解』11（p.168）は共に寛和2年（986）の成立とするが典拠は不明。『恵心僧都絵詞伝』巻中（『恵全』5、p.738）の「僧都この迎講の儀式を華台院にてはじめ給ひてより已来（中略）来迎和讃・二十五菩薩の和讃はその時つくらせ給ふ和讃なり」の記述によるか。

永久4年（1116）頃の書写と考えられる高山寺本『古和讃集』28-138行目（高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺典籍文書の研究』、「高山寺資料叢書」別巻、東京大学出版会、1980、pp.1038-1042）は『来迎和讃』とほぼ一致することから、永久4年（1116）頃には成立していたことが知られる。

内容は、まず、摂取不捨の光明は念仏行者を照らすこと、観音・勢至の来迎はその声を尋ねて来られること、娑婆を厭い浄土を欣うべきことが述べられる。次いで阿弥陀仏・観音・勢至・諸菩薩衆が西方の空から近づき、念仏行者を引接し金蓮台に乗せて往生させるという臨終時の来迎の様子、そして往生後の諸楽相が述べられ、最後に来迎引接への懇願、廻向が述べられる。

構成は96句からなる（『恵全』所載の『来迎和讃』による。末尾の漢讃（廻向文）は除く）。ただし『浄業和讃』に「来迎讃ノ如キ、古ヘ願生ノ行者専ラ称讃シケルニヤ往々諸伝ニ見ユ。然ルニ類本一二ニアラス、讃文モ剰脱一準ナラス」と記されるように、現存する諸本の句数には異同が認められる。

なお『円光大師行状画図』巻12・巻46（『浄全』16、p.215、p.668）、『鎮流祖伝』巻2（『浄全』17、p.262、p.429）、『聖光上人伝』（『浄全』17、p.393）、『看病御用心』（伊藤真徹『日本浄土教文化史研究』p.453）には『来迎讃（来迎の讃）』を誦したことが記されており、『諸経要文伽陀集（実成本）』（『金沢文庫資料全書』7、p.65、（51）（56）（58））、金沢文庫本『伽陀集』（『金沢文庫資料全書』7、p.87、（9））には高山寺本『古和讃集』と一致する訓伽陀がみられ、鎌倉時代における『来迎和讃』の流布状況の一端が伺える。
作成者名：上杉智英

礼弥陀四十八願文

書名よみ：らいみだしじゅうはちがんもん
著者名：源信（？）
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：10c後半（？）-11c初頭（？）
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1、p.349）、『玄智録』1（『日仏全』1、p.464）、『蓮門録』（『日仏全』1、p.417）
参考文献：恵谷隆戒『＜浄土宗第三祖＞然阿良忠上人伝の新研究（特に金沢文庫資料を中心として）』（「浄土宗学研究叢書」祖師篇、国書刊行会、1934）、西村冏紹「叡山浄土教における四十八願名をめぐって―源信撰『礼弥陀四十八願文』の発見を中心に―」（叡山学院編『叡山学院研究紀要』5、1982）、中野正明「＜安居院西法寺所蔵＞聖覚筆四十八願文について」（南都仏教研究会編『南都仏教』68、1993）、納富常天「四十八願釈－澄憲撰を中心として－」（同『金沢文庫資料の研究（稀覯資料篇）』、法蔵館、1995）
解説：本書は現存しないが『長西録』等により源信の著述であることが知られる。

成立年代は不明。

内容は不明。題号から『無量寿経』四十八願に関するものと考えられる。

なお『門葉記』巻96の「五悔講次第」（『正蔵』図像12、pp.51c-52a）には「阿弥陀願＜四十八願　恵心略頌＞」として四十八願名と「我建六八超世願　必至無上菩提道　此願若不満足　我誓不成等正覚」の4句からなる全52句（1句7字）の偈頌が収められている。西村冏紹は、「恵心略頌」として四十八願名を挙げている、『長西録』等により源信に『礼弥陀四十八願文』という題号の著述がある、という点からこの偈頌を『礼弥陀四十八願文』に比定している。

しかし、(1)『長西録』には『礼弥陀四十八願文』だけでなく、四十八願に関すると思われる源信の著作として『六八弘願』といった名もみられる。(2) 貞治1年（1362）成立の尊道法親王（1332-1403）撰『念仏五悔講式』には「第四発願者（中略）其願文者有恵心先徳五念門頌。抜以彼作願之一門可加以慇重之五悔」（佐藤哲英『叡山浄土教の研究』資料編、p.312（百華苑、1979））として『門葉記』所引の「阿弥陀願」と同文が所収されており、この偈頌が本来、源信撰『五念門頌』の一部分（作願門）であることが知られる、等の理由から「阿弥陀願四十八願」を『礼弥陀四十八願文』とするにはより詳細な検討が必要と思われる。
作成者名：上杉智英

理観

書名よみ：りかん
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：11c-12c前半
成立地：日本
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
写本所在：1、金沢文庫蔵本（鎌倉後期以前、書写者不明、堪睿手沢本）
2、高野山金剛三昧院蔵本（1529（大永8）、真宥書写）
3、唐招提寺蔵本（未調査）
写本奥書：1、本云、建保二年（1214）十一月五日酉剋、雇同法堅遍令書写了、即自加交正了、此書故中川実範上人御草也、仍大業近々之間雖不得寸遑一返読合耳、一交了、良算
2、大永八年（1529）七月十二日於高野山本中院東南院書之畢、真宥
3、（未調査）
参考文献：真鍋俊照「金沢文庫本『理観』釈文」（『金沢文庫研究』246、1977）
解説：諸法実相の諦観は阿弥陀仏の大悲により成し遂げられることが明かにされている。詳説すれば、真如の本質・相を観じ、その実相を究明する中で、貪欲をはじめとする八万四千の煩悩といった全ての法の本質は認知できない（不可得）ものであるが、その一方、諸法の実相は理として一味平等であり、諸仏と衆生でさえも一体のものという立場を説き明かし、それらの断絶を乗り越える為にこそ、阿弥陀仏への帰依が衆生に必要であると勧めている。それは帰依の対象となる阿弥陀仏に無上の智恵・正悟の大悲・同体の大悲・無縁の大悲、さらに一切を利益する自性身（法身）といった阿弥陀仏に備わる仏身の特質のためだと論じている。
　本書は完本ではない。現存の金沢文庫蔵本・金剛三昧院蔵本では共に同一箇所で本文が途切れている。その点より、両者の親本は同じものと想定されるが、個々を細かく検証すると本文は一致するが、多少の振り仮名や文言の異同から、各々の祖本は別系統であったという見解に至っている。
　なお、『長西録』・『諸宗章疏録』（『謙順録』）などの仏教書籍目録には記載がないが、『仏書解説大辞典』・『国書総目録』には本書の存在が挙げられている。
作成者名：能島覚

立正安国論

書名よみ：りっしょうあんこくろん
書名別名：安国論
著者名：日蓮
著者名よみ：にちれん
著者名別名：是聖房、蓮長、立正大師
著者生没年：1222（貞応1年）-1282（弘安5）
成立翻訳年：1260（文応1）
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
刊本
活字本
写本所在：1、千葉県中山法華経寺所蔵本（1269（文永6）、真筆）
2、京都本圀寺所蔵本（『広本』真筆）
3、伊豆玉沢妙法華寺蔵本（13-14c、日興書写）
4、千葉中山法華経寺蔵本（13-14c、日高書写）
5、静岡県岡宮光長寺蔵本（13-14c、日法書写）
6、鎌倉妙本寺蔵本（13-14c、三位日進書写）
7、京都妙蓮寺蔵本（1619（元和5）、本阿弥光悦写、一軸）
写本奥書：1、文応元年〈大歳庚申〉勘之正嘉自始之文応元年終勘畢／去見正嘉元年〈太歳丁巳〉八月二十三日戌亥之尅大地震勘之其後以文応元年〈太歳庚申〉七月十六日付宿谷禅門奉故最明寺入道殿其後文永元年〈太歳甲子〉七月五日大明星之時弥々知此災根源自文応元年〈太歳庚申〉至于文永五年〈太歳戊辰〉後正月十八日経于九个年自西方大蒙古国可襲我朝之由牒状渡之／又同六年重牒状渡之既勘文叶之／准之思之未来又可念歟／此書有徴文也是偏非日蓮之力法華経之真文所至感応歟／文永六年〈太歳己巳〉十二月八日写之
2、（奥書なし）
3、（未調査）
4、（未調査）
5、（未調査）
6、（未調査）
7、（未調査）
刊本所在：1、刊年不明（竜谷大）
2、宝暦12（1762、氏家氏）
3、文化5（1808、井上氏）
4、天保4（1833、東北大・静岡県立中央図書館）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
4、文応元年〈太歳庚申〉御年三十九／以御正本校之畢本朝沙門日蓮
活字本所載書：姉崎正治校注『日蓮上人遺文抄』（岩波書店、1938）、『大正蔵』84（No.2688）、日蓮宗全書出版会編『日蓮聖人全集』（須原屋書店、1914）、『浄全』8(山喜房仏書林、1990)
現代語訳書：星野武男『現代語訳立正安国論』（真世界社、1959）、紀野一義編『日蓮』（「日本の名著」8、中央公論社、1970）、渡辺宝陽・小松邦彰訳『日蓮聖人全集』（春秋社、1992）
参考文献：山川智応編『日蓮聖人御真蹟大集』（国書刊行会、1976）、 山本勇『高僧名著全集』7（平凡社、1931）、小林是恭「安国論広本について」（『望月歓厚先生古稀記念論文集』大文社、1951）、宮崎英修「立正安国論諸本について」（『法華』39-6、1953）、田村完誓『日蓮立正安国論付観心本尊抄』（徳間書店、1973）、中川日史『立正安国論提要』（平楽寺書店、1974）、佐々木馨『日蓮と『立正安国論』—その思想的アプローチ—』（「日本人の行動と思想」44、評論社、1979）、渡辺宝陽・小松邦彰編『日本の仏典9日蓮』（筑摩書房、1988）、中條暁秀『日蓮宗上代教学の研究—

金綱集の研究—』（平楽寺書店、1996）
解説：日蓮は12歳で天台宗清澄寺に登り、16歳で出家、1238（嘉禎4）頃より鎌倉に遊学し、21歳の時比叡山にて俊範に指事。32歳で比叡山より清澄寺に帰り日蓮と名乗る。この頃から「正法である『法華経』に帰せよ」と伝道を始め、他宗の信奉者から迫害を受けることとなる。また為政者に対しても数度にわたって陳状を提したが受理されることはなく、度々流刑に処され、1282（弘安5）61歳で武蔵の国にて寂。
　本書は、略して『安国論』ともいい、10の問答からなる。その10とは、(1) 天変災難等に対し、祈祷等の効験がないのは人心の背正によって善神聖人が国を捨てたためであり、(2) その経證を挙げ、(3) 悪僧の謗正法が原因であると述べ、(4)『選択集』に捨閉閣抛を説くことによって、国民が謗法の民となったと述べ、(5)『選択集』と亡国の先例の現證を出し、(6) 元仁年中に南都北嶺の奏聞によって『選択集』の印板が消却されたことを挙げ、(7)『涅槃経』等を文證に、消災止難は禁謗法人と重正道僧にあると述べ、(8) 謗法根絶するには施をやめるべきであるとし、(9) 国家の現状から自界叛逆の難があることを予言し、(10) 前科を誡めんことを誓う、というものである。かつて身延山久遠寺に真跡が蔵されていたが、1875（明治8）に焼失。
　1968（文応5）には『安国論御勘由来』において『立正安国論』撰述の由来と、自身の予言が的中したことをふまえて、諸宗の祈請等に頼らず日蓮の言葉を聞くことをを著した（法鑒房（一説に平盛時とする）に賜える書）。更に翌1269（文永6）にはふたたび『立正安国論』を著した（中山法華経寺所蔵本）。この中山法華経寺所蔵本に『立正安国論奥書』が書かれている。
作成者名：米沢実江子

略往生講式

書名よみ：りゃくおうじょうこうしき
著者名：覚瑜
著者名よみ：かくゆ
著者名別名：覚愉、住心房、出阿、出雲路上人
著者生没年：1158（保元3）-1233（天福1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：小山正文「翻刻　寛永二十一年本『長西録』」（『同朋大学論叢』62、1990）
解説：本書は現存しない。
　ただし、そのタイトルからして平安期から鎌倉期に盛んにつくられた講式類（仏・菩薩などの徳を讃歎する儀式、またはその手順を記述した書）の中でも、極楽浄土への往生を願って作成された「往生講式」の一つと考えられる。
　本書の内容は不明であるが、書名に「略」と付されていることから、永観（1033-1111）などが著した従来の「往生講式」の内容や方法を簡略化・平易化したものであるということも考えられる。
　本書は寛永21年本『長西録』（小山論文、1990）のみに見られ、著者名は「覚愉〈廬山寺、日本、住心房〉」と記載されている。しかし『日仏全』所収の「長西録」では、覚愉の名が出る場合、房号は同じく住心房であるが、〈廬山寺〉とは附されていない。覚瑜が「廬山寺」と称されるのは、廬山寺を復興したとされるからであるが、廬山寺の復興年（1245）は覚瑜の没後であり、また当時覚瑜という名の僧が数人存在していたことからも、浄土教信仰を有する者として一般的に知られている「覚瑜」とこの「廬山寺の覚瑜」を後世の人が混同した可能性も考えられる。その場合、本書は「廬山寺の覚瑜」の著であって、浄土教の人師として有名な「住心房覚瑜」とは別人ということになる。
作成者名：伊藤瑛梨

略観経義

書名よみ：りゃくかんぎょうぎ
著者名：幸西
著者名よみ：こうさい
著者名別名：成覚房、鐘下房少輔、物部氏（俗姓）
著者生没年：1163（長寛1）-1247（宝治1）
成立翻訳年：12c後半-13c前半
成立地：日本
散逸文献の文献名出典：乗専『最須敬重絵詞』5（『真聖全』3、p.846）
参考文献：安井広度『法然門下の研究』（法蔵館、1968）、石田充之『法然上人門下の浄土教学の研究』（大東出版社、1979）
解説：本書は現存しない。
　乗専（1274-1357、生年には1295年説あり）撰『最須敬重絵詞』5に、幸西の著作として書名のみが挙げられている。覚如（1272-1351）は諸流派研究のため他門の先学に会いに行っており、一念義は慈光寺の勝縁から習学した。その折に書写を許された幸西著述の一つである。
　書名から推測するに、『観経』の註釈書あるいは善導撰『観経疏』の略註であると考えられる。
作成者名：伊藤瑛梨

臨終行儀

書名よみ：りんじゅうぎょうぎ
書名別名：臨終行儀集、臨終観行記、臨観行記
著者名：源信（？）
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：985（寛和1）以降（？）
成立地：日本
巻数：1
漢和：和文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、京都大蔵本
写本奥書：1、（未調査）
活字本所載書：『恵全』1
解説：著者は不明。『恵全』1には「恵心御作」として収録される。
　成立年代は不明。『往生要集』巻中、臨終行儀を基に和文体としたものと考えられることから、成立の上限は『往生要集』成立の寛和1年（985）となるか。
　内容は、序。家ノ内ノコトヲコシラフルニ五ヶ条（(1) 祇園精舎無常院ニシテ病ヲウケテ其日ヨリヒコロノスミカヲアラタメテ別所ヲシツラヒヲクヘシ。(2) 物ノ肉ヲ食シ酒ヲノミカラヒルヲクヒスル人ヲ高キ賤ヲキラハスシタシキヲアラハスチカツクヘカラス。(3) 夢ニモサメテモ善悪トモニ目ニミエンコトアラハ善知識ニカタルヘシ。(4) マツリハラヒヲシミコカンナキヲヨヒスゲテミタリニタスカランコトヲ思フヘカラス。(5) 病者ノアタリニ人ヲアツメテヲクヘカラス)。往生ヲ勧ニ五（(1) 目ヲトチ掌ヲ合セ仏ノ相好ヲオモフヘシ。余ノ色ヲミルコトナカレ。法音ニアラスヨリハ余ノ音ヲキクコトナカレ。心ハ常ニ聖衆来迎ノヨソヲイヲオモヒ口ニハツネニ弥陀ノ本願ノ名号ヲトナ

フヘシ。(2) 摂取ノ光ハサタメテ唯今我頭ヘヲ照シタマハントオモフテ弥陀ノ名号ヲトナフヘシ。(3) 如来ハタタ光ヲ以テ照シタマフノミニアラス。往生セシメタマフノミニアラス。観音勢至無量ノ聖衆ト共ニ来テ蓮台ヲカタムケ唯今我ヲ引接シタマハント思テ心ヲシツカニシテ念仏ヲマフスヘシ。(4) 病者気色ヤウヤクヨハクミエン時ハ言ハオホクセスシテ要ヲ取テ勧ムヘシ。阿弥陀観音勢至無量ノ聖衆ト共ニ来テ蓮台ヲカタムケテ唯今我ヲムカヘタマフト思テ弥陀ノ名号ヲトナフヘシ。(5) 願クハ仏我ヲ引接シタマヘト思テ心ヲトトメテ南無阿弥陀仏トマフスヘシ)。跋の4つで構成される。

『往生要集』巻中、臨終行儀を基に和文化したものと考えられるが、「マツリハラヒヲシミコカンナキヲヨヒスゲテミタリニタスカランコトヲ思フヘカラス」(『恵全』1、p.592)、「口ニハツネニ弥陀ノ本願ノ名号ヲトナフヘシ。ソノ本願ハ設我得仏十方衆生至心信楽欲生我国乃至十念若不生者不取正覚トイヘリ」(『恵全』1、p.596) 等、『往生要集』臨終行儀にみえない記述もみられる。

作成者名：上杉智英

臨終行儀支度

書名よみ：りんじゅうぎょうぎしたく
書名別名：臨終支度
著者名：湛秀
著者名よみ：たんしゅう
著者名別名：真成房、湛秀已講、西大寺別当、西大寺已講
著者生没年：1067（治暦3）-1122（保安3）
成立翻訳年：11c後半-12c初頭
成立地：日本
巻数：1
写本所在：1、高野山金剛三昧院蔵本（1253（建長5）、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
解説：本書は『国書総目録』のみに紹介されている。書名から内容を推測すると、臨終行儀に必要な支度を記したものと考えられる。支度とは修法に要する支具、供物等を予め計度（はかり）で調えることであり（『密教大辞典』）、そのための法具の種類及び供物の分量などを記した典籍と思われる。湛秀については『臨終行儀注記』の項を参照。
作成者名：能島覚

臨終行儀注記

書名よみ：りんじゅうぎょうぎちゅうき
書名別名：臨終行儀、臨終記
著者名：湛秀
著者名よみ：たんしゅう
著者名別名：真成房、湛秀已講、西大寺別当、西大寺已講
著者生没年：1067（治暦3）-1122（保安3）
成立翻訳年：11c後半-12c初頭
成立地：日本
巻数：1
漢和：漢文
写本等の存欠：写本
活字本
写本所在：1、東大寺中性院蔵本（12c（？）、書写者不明、外題『横川首楞厳院二十五三昧〈恵心保胤〉臨終行儀』、『横川首楞厳院二十五三昧起請』『起請八箇条』との合本）
写本奥書：1、一校了／于時慶安三庚寅（1650）五月所持之、実海
活字本所載書：『日仏全』70、『続浄』15
参考文献：石井教道「首楞厳院二十五三昧起請に就て」(『仏書研究』48、1918)、大谷旭雄「実範「病中修行記」について　その構成と念仏思想」(『仏教文化研究』13、1966)、伊藤真徹「臨終行儀注記」(『日仏全』98、鈴木学術財団、1973)、服部英淳「浄土教に関する諸宗の述作」(『続浄』15、1974)、小山昌純「東大寺中性院所蔵『横川首楞厳院二十五三昧〈恵心保胤〉臨終行儀』の再検討　―叢書本の誤植による問題点―」(『仏教学研究』53、1997)
解説：湛秀は興福寺の僧侶であり、法相宗の学僧である。師は『東域伝灯目録』を編した永超で、孫弟子に菩提院蔵俊がいる。宮中の勅会である三会の講師を勤仕した已講であり、西大寺別当でもあった。『中右記』などには宮中・諸家の法会に度々、出仕し、説法・論義の才は賞賛に値するものだったと記されている。天仁1年（1108）6月5日の条には月の5日に弥勒、15日に阿弥陀、18日に観音、24日に地蔵、晦日に釈迦を供養する五斉日講を行っていることが認められる。

本書は石井教道氏によって紹介され、良忠『往生要集義記』に引用される「湛秀臨終記」「臨終行儀」の逸文と合致するという考証から、西大寺已講湛秀の典籍と同定された。

その内容は臨終行儀は一期の大事であるから往生浄土を願う者は臨終への用心を怠ってならないという旨を13条に分けて説いている。その13条とは、1.発願すべき事、2.病を患った後は他事を慎む事・偏えに功徳を営む事、3.随分の衣服・飲食を三宝・貧病者に布施すべき事などが記されている。なかでも臨終の正念に関する条はあるべき住処・衣服・荘厳・行儀について言及し、臨終の苦しみを一心の念仏で乗り越えるべきことを明かしている。

本書の引用典籍は『華厳経』、『法鼓経』、『大毘婆沙論』、道宣『四分律行事抄』、善導『観念法門』等がみられるが、主要な部分は『往生要集』「大文第六」の臨終行儀を下敷きとしていることが指摘されている。

なお本書の性格について、法相宗の学僧による撰述、玄奘三蔵の臨終の事績並びに兜率上生への言及という点から、弥勒の浄土を指向する行儀書とみる立場もあるが、本書の第13条に釈迦・弥陀・弥勒を始めとした12もの仏菩薩に対する帰依を同列に述べて本文を締めくくっていることから、特に弥勒信仰に特化した臨終行儀を記したものとは考え難い。

作成者名：能島覚

臨終讃

書名よみ：りんじゅうさん
著者名：安然（？）
著者名よみ：あんねん
著者名別名：五大院阿闍梨、秘密大師、福集金剛、真如金剛、阿覚大師
著者生没年：841（承和8）（？）-915（延喜15）（？）
成立翻訳年：9c後半（？）-10c初頭（？）
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：写本
写本所在：1、坂本実蔵坊真如蔵本（1619（元和5）、真秀書写）
2、大谷大蔵本（1916（大正5）、書写者不明）
3、餘大蔵本（1916（大正5）、書写者不明）
写本奥書：1、（未調査）
2、（未調査）
3、（未調査）
参考文献：上杉文秀『日本天台史』（破塵閣書房、1935）、叡山学会編『安然和尚の研究 』（同朋社、1979）、末木文

美士『安然・源信』(「大乗仏典　中国・日本篇」19、中央公論社、1991)、末木文美士『平安初期仏教思想の研究　安然の思想形成を中心として』　(春秋社、1995)
解説：本書の存在は上杉文秀『日本天台史』によって知られる。すなわち上杉文秀氏は安然の著述に関して悉雲部・教義部・事相に分類するうち、本書を教義部に該当するものとして挙げ、その内容は弥陀念仏に関するものと言及する。ただし、本書の内容は未だ公開されておらず、その真偽は不明である。本書の調査・研究が待ち望まれる。
作成者名：能島覚

臨終用心抄

書名よみ：りんじゅうようじんしょう
著者名：聖光
著者名よみ：しょうこう
著者名別名：聖光房弁長、弁長、鎮西上人、筑紫上人、善導寺上人、二祖上人、弁阿、大紹正宗国師
著者生没年：1162（応保2）-1238（暦仁1）
成立地：日本
写本等の存欠：刊本
刊本所在：1、寛文7（1667、竜谷大（『臨終行儀』と合冊）・仏教大）
刊本の奥書刊記：1、（未調査）
解説：浄土宗第2祖である聖光は、1183（寿永2）比叡山に登り、先ず観叡の室に入り、後に証真に師事し、1190（建久1）郷里の香月に帰る。その後1197（建久8）に上洛し、法然の弟子となり、1204（元久1）九州（鎮西）に下向し、筑後にあって、法然相伝の教えを広め、「鎮西義」という一派をなした。
　本書は、往生を願う念仏者の臨終の一念の重要性を述べたものである。先ず、最後臨終の一念が次生の生所の善悪を定めるものであるとして、善導・道綽・千観・源信等も臨終の用心を勧めていることを述べる。次に臨終の一念の善悪は愛執の有無に依るものであるとして、行者は「厭離穢土」「欣求浄土」の二心を以てこの愛執を対治することが決定往生の大要であることを述べる。この中、初めの「厭離穢土」では、行者の厭うべきこととして「三種の愛執（境界愛・自体愛・当生愛）」を挙げる。その理由として、これらの愛執によって「三苦（顛倒苦・錯乱苦・失念苦）」すなわち「最後断末魔の苦」が起こるとして、往生を願う人の最も厭離すべきものであるとする。次の「欣求浄土」では、極楽では阿弥陀仏とまみえ、釈迦の説法を聞き、聖衆とともに悟りに達することができると述べ、此土においては阿弥陀の願力と称名念仏の十声一声によって極楽に往生するということを信じて疑うべきでないと述べる。以上のことが「一期終焉の大要」であると述べ、文末には行者に対して、平生の時より行住坐臥にこの心を発して観念を生ずれば上品の往生疑いなしと述べる。
　なお仏教大蔵本（刷題僉「新板善導源空弁阿然阿臨終用心鈔」）では善導『臨終正念訣』、源空『臨終行儀』、弁阿『臨終用心抄』、然阿『臨終用心抄』の4書合冊である。
作成者名：米沢実江子

臨終要文

書名よみ：りんじゅうようもん
著者名：実範
著者名よみ：じっぱん
著者名別名：中川少将上人、中川上人、中川律師、円光房
著者生没年：？-1144（天養1）
成立翻訳年：12c
成立地：日本
巻数：1
写本等の存欠：写本
写本所在：1、高野山竜光院蔵本（未調査）
写本奥書：1、久安六年（1150）初冬月於光明山蓬室請成就院根本之本書写之、又以先年草本比校之処所相違一処也、即裏［■］了、又別裏書有之後人之所付歟、雖然付之了、治承三年（1179）七月二十六日於光明山書之（花押）（『平安遺文』題跋編、第2875号より転載）
参考文献：櫛田良洪『覚鑁の研究』（吉川弘文館、1975）、大谷旭雄「実範「病中修行記」について　その構成と念仏思想」（『仏教文化研究』13、1966）
解説：本書に関し、『仏書解説大辞典』・『国書総目録』は共に『長西録』の記述に従い書名を挙げるものの欠本としている。ところが、『平安遺文』題跋編には「臨終要文一帖」を挙げ、その奥書を紹介している。奥書には実範の開基となる成身院の根本の本を書写したとあり、本書は実範によるものとしてまちがいないだろう。現存するのは高野山竜光院蔵本のみか。
作成者名：能島覚

臨終要文集

書名よみ：りんじゅうようもんしゅう
著者名：西空帝山心運
著者名よみ：さいくうていさんしんうん
著者生没年：平安期
成立翻訳年：平安期
成立地：日本
巻数：3
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1）
解説：本書は散逸して伝わらない。著者の西空帝山心運に関しても審らかでない。『長西録』のみにその名をとどめる。
作成者名：能島覚

六八弘願

書名よみ：ろくはちぐがん
書名別名：六時弘願
著者名：源信（？）
著者名よみ：げんしん
著者名別名：恵心僧都、恵心の御房、恵心院前権少僧都、横川僧都、楞厳和尚、楞厳先徳、楞厳院先徳、源信内供、横川禅門僧都、今迦葉、円通大師、源公
著者生没年：942（天慶5）-1017（長和6）
成立翻訳年：10c後半（？）-11c初頭（？）
成立地：日本
巻数：1
散逸文献の文献名出典：『長西録』（『日仏全』1、p.351）、『玄智録』1（『日仏全』1、p.464）、『蓮門録』（『日仏全』1、p.417、書名を『六時弘願』として採録する）
参考文献：恵谷隆戒『＜浄土宗第三祖＞然阿良忠上人伝の新研究（特に金沢文庫資料を中心として）』（「浄土宗学研究叢書」祖師篇、国書刊行会、1934）、西村冏紹「叡山浄土教における四十八願名をめぐって―源信撰『礼弥陀四十八願文』の発見を中心に―」（叡山学院編『叡山学院研究紀要』5、1982）、中野正明「＜安居院西法寺所蔵＞聖覚筆四十八願文について」（南都仏教研究会編『南都仏教』68、1993）、納富常天「四十八願釈―澄憲撰を中心として―」（同『金沢文庫資料の研究（稀覯資料篇）』、法蔵館、1995）
解説：本書は現存しないが『長西録』等により源信の著述

であることが知られる。
　成立年代は不明。
　内容は不明。題号より『無量寿経』に説かれる四十八願に関するものと考えられる。源信の四十八願に対する願名は『阿弥陀経略記』や『門葉記』巻96「五悔講次第」（『正蔵』図像12、pp.51c-52a）所載の「阿弥陀願＜四十八願恵心略頌＞」から伺える。また『長西録』等によれば『礼弥陀四十八願文』なる著述のあったことが知られる。
　なお金沢文庫には著者不明の「四十八願釈」が所蔵され、奥書には「陸捌弘願釈　巻下＜自三十至四十八＞、文永十二年（1275）五月二十二日書写了、筆師欣求浄土沙門信円、生年八十三（花押）」と「陸捌（六八）弘願釈」の書名がみられる。ただし本書は第39願の下に「楞厳ノ先徳ハ」として『往生要集』の文が引用され、また第37願の下に「本朝ニハ石倉ノ成尋阿闍梨ハ入唐シテ十二月ノ礼拝ノ文ヲ送ル」と成尋入宋（延久4年（1072））以降の記述がみられることから源信撰『六八弘願』に相当するものではない。
作成者名：上杉智英

書名索引

あ

阿弥陀観私記 247
阿弥陀経 5
阿弥陀経会本 175
阿弥陀経義疏 175
阿弥陀経句解 175
阿弥陀経綱要記 247
阿弥陀経讃 176
阿弥陀経事義 176
阿弥陀経直解正行 176
阿弥陀経私抄 247
阿弥陀経釈 248
阿弥陀経集註 248
阿弥陀経疏 176
阿弥陀経疏 177
阿弥陀経疏 178
阿弥陀経疏鈔 178
阿弥陀経疏鈔演義 178
阿弥陀経疏鈔擷 178
阿弥陀経疏鈔問弁 179
阿弥陀経疏随縁義鈔 179
阿弥陀経摘要易解 179
阿弥陀経約論 179
阿弥陀経要記 249
阿弥陀経略記 180
阿弥陀経略解 180
阿弥陀経略解円中鈔 181
阿弥陀経略註 181
阿弥陀経略記 249
阿弥陀鼓音声王陀羅尼経 5
阿弥陀悔過 250
阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経 6
阿弥陀抄 250
阿弥陀新十疑 251
阿弥陀懺補助儀 251
阿弥陀懺法 251
阿弥陀大呪秘要決 252
阿弥陀秘讃 252
阿弥陀秘釈 252
阿弥陀仏大思惟経 6
阿弥陀仏白毫観 253
阿弥陀略道場観私釈 253
示或人詞（あるひとにしめすことば） 254
ある人のもとへつかはす御消息 254
安心鈔 254
安身養神集 255
安養集 256
安養抄 256
安養知足相対鈔 256
安養讃 181
安養賦 257
安楽集 182
安楽集私記 257
安楽集私記見聞 258
安楽集論義 258

い

意楽用心記 259
為傑大霊駕撒骨下語 183
為尚愚上菴和尚下語 183
為誠寧大君仙駕下語 183
一期大要秘密集 259
一実菩提偈 260
一念多念分別事 260
一念多念文意 261
一枚起請文 262
一向出生菩薩経 7
一切如来烏瑟膩沙最勝総持経 7
一紙小消息 263
一遍上人絵詞伝 263
一遍上人語録 265
一遍上人法門抜書 265
一遍念仏法語 266
一遍聖絵 266
印光法師文鈔 184
印光法師文鈔三編 184
印光法師文鈔続編 184
隠遁国ノ記 267

え

依観経等明般舟三昧行道往生讃 185
恵信尼消息 267
円戒秘決己証 267
円福寺縁起 268

お

於一向専修宗選択集中摧邪輪（摧邪輪） 268
往生講式 269
往生極楽讃 270
往生極楽問答 270
往生西方浄土瑞応刪伝 186
往生集 187
往生集 271
往生拾因 271
往生浄土決疑行願二門 187
往生浄土懺願儀 187
往生浄土伝 188
往生仏土経 272
往生要集 272
往生要集勘文 274
往生要集外典抄 274
往生要集釈 275
往生要集鈔 276
往生要集詮要 277
往生要集略料簡 278
往生要集料簡 279
往生礼讃偈 189
往生礼讃見聞 280
往生礼讃私記 280

往生礼讃前料簡 280
往生礼讃問答 281
往生論 26
往生論五念門行式 281
往生論註 188
往生論註記見聞 281
往生論註記鈔 282
大胡の太郎実秀か妻室のもとへつかはす御返事 282
大原座主消息 283
御文 283

か

改悔文 284
華山院家四十八問答 284
角虎集 189
月灯三昧経 7
勧一切衆生願生西方極楽世界阿弥陀仏国六時礼讃偈 189
観経四品知識義 285
観経疏 190
観経疏 197
観経疏光明抄 286
観経疏大意 286
観経疏伝通記 287
観経疏伝通記見聞 287
観経疏問答 288
観経疏略鈔 288
観経疏他筆鈔 288
観経要義集 289
漢家類聚往生伝 290
観極楽遊心鈔 290
勧修定慧結社文 191
灌頂百結神王護身呪経（巻第四） 8
観心極楽讃 290
観心念仏 290
観世音菩薩往生浄土本縁経 291
観世音菩薩授記経 8
観世音菩薩如意摩尼陀羅尼経 9
閑亭後世物語 291
勧女往生義 292
勧念 191
観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門 192
観念法門 192
観念法門見聞 292
観念法門私記 292
観念法門私記見聞 293
勧念要録 192
観無量寿経 9
観無量寿経科文 293
観無量寿経記 192
観無量寿経記 293
観無量寿経義疏 193
観無量寿経義疏正観記 193
観無量寿経義疏白蓮記 194
観無量寿経義疏扶新論 194
観無量寿経綱要 195
観無量寿経釈 293
観無量寿経十六想観画讃釈文 294
観無量寿経集註 294
観無量寿経疏 195
観無量寿経疏 196
観無量寿経疏 295
観無量寿経疏顕要記破文 295
観無量寿経疏末抄（仮題） 295
観無量寿経中略要問答抄 295
観無量寿仏経疏妙宗鈔 196
観無量寿仏経義疏 196
観無量寿仏経疏 197
観無量寿仏経初心三昧門 198
観無量寿仏経図頌 198

き

帰元直指集 198
騎上牧童歌 198
羈中吟 296
器朴論 296
逆修説法 297
教行信証 309
憬興師云 297
経釈文聞書 298
経釈要文 298
行図 199

く

具三心義 299
求生行門要出 199
九条殿下の北政所へ進する御返事 299
愚禿鈔 300
九品往生阿弥陀三摩地集陀羅尼経 10
九品寺見聞集 301
熊谷の入道へつかはす御返事（九月十六日付） 301
黒谷聖人御消息 302
黒谷上人語灯録（漢語） 302
黒谷上人語灯録（和語） 303
黒谷上人御法語 305
黒谷上人伝 305

け

涇渭分流集 306
渓嵐拾葉集 306
華手経 10
決疑鈔見聞 306
決定往生行業文 307
決定往生集 307
決定往生臨終十念縁起 307
夏御文 308
玄義分聞書 308
玄義分問答 309
源空上人私日記 309
現行西方経 199
現行法会礼懺儀式 200

華厳念仏三昧論 200
顕浄土真実教行証文類 309
顕正流義鈔 312
顕選択 312
顕選択難義抄 312
還相回向聞書 313
顕名鈔 313

こ

迎接和讃 314
皇太子聖徳奉讃 314
興福寺奏状 315
高野山往生伝 316
五巻書 316
極楽記 317
極楽浄土九品往生義 317
極楽浄土宗義 317
極楽六時讃 318
五劫思惟諍論鈔 319
後拾遺往生伝 319
後出阿弥陀仏偈 11
御消息 320
御消息集 320
後世物語聞書 321
御俗姓 321
五段鈔 322
御文章 283
五輪九字明秘密釈 322
金剛恐怖集会方広軌儀観自在三世最勝心明王経 11
金剛頂経観自在如来修行法 11

さ

西帰直指 201
西斎浄土詩 201
摧邪輪荘厳記 324
災難対治御勘文 324
災難対治抄 324
西方院座主毎日念仏調 324
西方確指 202
西方合論 202
西方直指 202
西方四親近菩薩悉釈 325
西方指南抄 325
西方集 326
西方懺法 326
西方念仏集 327
西方要観 327
西方要決釈疑通規 202
西方要決要文抄 327
西方要抄 327
西方略伝 203
三六通裏書 327
讃阿弥陀仏偈 203
三外往生記 328
三時念仏観門式 328
三心義 329
三心私記 329
散善義問答 330
参禅念仏文 203
三大祖師法語 330
算頭録 331
三部経釈 331
三部経大意 332
三門直指 204

し

示永昌大君 205
識知浄土論 333
四句之抄 333
持玄抄 333
四十八願釈 333
四十八願ノ名次第 334
示諸念仏人 205
私念仏作法 334
自筆鈔（観経疏自筆鈔、観念法門自筆鈔、般舟讃自筆鈔、往生礼讃自筆鈔） 334
積学鈔（観経疏積学鈔、法事讃積学鈔） 336
釈観無量寿仏経記 205
釈浄土群疑論 206
釈浄土二蔵義 338
釈法忍伝 338
思惟略要法 12
拾遺往生伝 338
拾遺黒谷上人語灯録〔漢語〕（拾遺漢語灯録） 339
十願発心記 340
修三密証念仏三昧 206
十住毘婆沙論 12
重書裏書 340
集諸経礼懺儀 207
十誓願 340
十大願 340
十楽講作法 341
十楽和讃 341
十六相観詩 342
十六相観私記 342
十六問答記 342
修行念仏三昧七日道場明懺悔法 342
守護国家論 343
受持阿弥陀仏経行願儀 207
修善講式 343
述誠 344
述聞制文 345
浄土旨訣 207
隼疑冏決集 345
浄阿上人絵詞伝 346
浄阿上人行状 346
浄阿上人伝 346
小阿弥陀経科 207
小阿弥陀経義記 208

小阿弥陀経疏古迹記 208
小阿弥陀経疏 208
小阿弥陀経鈔 208
小阿弥陀経新疏指帰 208
小阿弥陀経西資鈔 209
請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経 13
常行三昧堂行法 347
小経直談要註記 347
浄業初学須知 209
浄業知津 209
生西指南要 347
称讃浄土経疏 209
称讃浄土仏摂受経 13
正修観記 348
浄修捷要 209
清珠集 210
正信偈大意 348
正信偈註釈 349
常途念仏記 349
定善義聞書 350
定善義問答聞書私見 350
摂大乗論 13
浄土依憑経論章疏目録 350
浄土往生伝 210
浄土紺珠 211
浄土義私記 351
浄土疑端 351
浄土口伝肝心鈔 352
浄土決 211
浄土決疑鈔 352
浄土五会念仏誦経観行儀 211
浄土五会念仏略法事儀讃 212
浄土極信録 213
浄土金明集 352
浄土三経往生文類 353
浄土三部経釈 354
浄土指帰集 213
浄土自警録 213
浄土十疑論 213
浄土宗三国伝来血脈譜 354
浄土修証儀 214
浄土宗名目問答 355
浄土宗要肝心集 355
浄土宗要決 356
浄土宗要集 356
浄土宗要集 357
浄土十六箇条疑問答 358
浄土述聞口伝切紙 358
浄土述聞見聞 359
浄土述聞鈔 359
浄土述聞追加 360
浄土承恩集 214
浄土証心集 215
浄土生無生論 215
浄土資糧全集 215
浄土神珠 216
浄土晨鐘 216
浄土瑞応伝 186
浄土随学 216
浄土徹髄抄 360
浄土法語 217
浄土宝書 217
浄土法門源流章 360
浄土文類聚鈔 361
浄土立教志 217
浄土略名目図 362
浄土論 26
浄土論 218
浄土論註 188
浄土或問 218
浄土和讃 362
帖内御文 363
成菩提 364
称名念仏奇特現証集 364
称名問答 365
称揚諸仏功徳経 14
諸行本願義 365
諸上善人詠 219
初心集 365
諸仏証誠鈔 365
序分義聞書 366
示楽庵居士念仏要略 219
自力他力事 366
示李尚書 219
信海聞書 366
新修浄土往生伝 219
新編普勧文 220
親鸞聖人血脈文集 367
親鸞聖人御消息 367
親鸞聖人御消息集（広本） 368
親鸞聖人御消息集（略本） 368

す

随願往生集 220
捨子問答 369

せ

誓言持戒往生記 369
専修要行抄 369
専雑二修義 369
選択疑問答 369
選択集 374
選択集私抄 370
選択集述疑 371
選択集大綱抄 371
選択集略鈔 372
選択伝弘決疑鈔 372
選択伝弘決疑鈔裏書 373
選択本願念仏集 374

選択本願念仏集名体決 375
善導和尚十徳鈔 376
善導和尚類聚伝 376
善導講私記 377
仙洞三心義問答記 377
善導大師和讃 377

そ

相好抄 378
尊号真像銘文 378
相好文字抄 379
送魂下語 220
惣別二願抄 379
続選択文義要鈔 380
続本朝往生伝 380
措心偈 381
存覚法語 381

た

他阿上人歌集 382
他阿上人法語 383
大阿弥陀経 6
大経直談要註記 384
太子刷護経 15
大乗義章浄土義私記 384
大乗起信論 15
大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経 15
大聖竹林寺記 221
大乗無量寿経 16
大乗無量寿荘厳経 16
太子和休経 16
大智度論 17
大日本粟散王聖徳太子奉讃 384
大方広仏華厳経 17
大方広仏華厳経修慈分 18
大宝積経阿闍世王子会 19
大宝積経発勝志楽会 19
大宝積経無量寿如来会 19
大方等大集経賢護分 20
当麻曼荼羅疏 385
大弥陀懺略抄要覧普勧念仏文 221
他力信心聞書 385
弾選択 386

ち

知恩講私記 386
知恩伝 387
地相観文 387
註論刪補鈔 387
註論私抄 388
澄性歌 221
鎮西宗要本末口伝鈔 389

つ

津戸三郎へつかはす御返事（九月二十八日付） 389
津戸三郎へつかはす御返事（四月二十六日付） 390
津戸三郎へつかはす御返事（十月十八日付） 390

て

徹悟禅師語録 222
徹選択集鈔 391
徹選択本願念仏集 391
転経行道願往生浄土法事讃（法事讃） 222
天竺往生験記 223
天竺往生験記 392

と

答浄土四十八問 224
答但馬宮問三箇条 393
唐朝京師善導和尚類聚伝 393
唐房法橋消息 394
答妹氏書 224
東林十八高賢伝 224
得生西方義 394
登山状 394
呑海上人御法語 395

な

内道者持念 395
七日導師作法 395
七日念仏私記 396
難易二道血脈図論一巻 396

に

二個条疑問事 396
二十五菩薩和讃 397
二尊大悲本懐 298
日本往生極楽記 397
日本感通伝 398
如来二種回向文 398

ね

念仏往生義 399
念仏往生綱要 399
念仏往生修行門 400
念仏往生伝 400
念仏歌 225
念仏伽陀 225
念仏勧進縁起 401
念仏感応伝 225
念仏鏡 226
念仏偈 401
念仏警策 226
念仏五悔講式 401
念仏作法 227
念仏讃 401
念仏三心要集 402
念仏三昧記 402
念仏三昧記 403
念仏三昧宝王論 227
念仏者追放宣旨御教書集列五篇勘文状 403

念仏助成 403
念仏同法要記 403
念仏百問 228
念仏宝号 403
念仏宝号 404
念仏本願義 404
念仏名義集 405
念仏滅罪因縁略鈔 405
念仏要門 228
念仏要門科解 229

は

破悪義証文 405
栢庵浄土讃 229
破邪顕正義 406
抜一切業障根本得生浄土神呪 －附 阿弥陀経不思議神力伝 20
八塔和讃 406
抜陂菩薩経 20
播州法語集 406
播州問答集 407
般舟讃 185
般舟讃私記 407
般舟讃私記見聞 407
般舟三昧経 21
般舟三昧経観念阿弥陀仏 408

ひ

毘倶胝菩薩一百八名経 22
悲華経 22
秘蔵記 408
秘密念仏鈔 408
白衣解 230
白衣礼懺 230
病中修行記 409

ふ

普賢講作法 409
普賢広大願王清浄偈 17
普賢菩薩行願讃 23
仏心解 410
仏説阿弥陀経要解 230
仏説観無量寿仏経略論 231
仏説大阿弥陀経 231
仏説大乗無量寿荘厳清浄平等覚経 232
仏説無量寿経 232
佛説無量寿経箋註 233
仏像幟幟義 410

へ

別時念仏講私記 411
別異弘願集 411
別伝記 412

ほ

宝王三昧懺 233
宝王三昧念仏直指 233
報恩記 412
法事讃私記 413
法事讃私記冠註 413
法事讃私記見聞 414
法然讃 414
法然上人伝 414
法然上人伝絵詞（琳阿本） 415
法然上人伝記（醍醐本） 415
法然上人伝法絵（高田本） 416
法然上人伝法絵流通（国華本） 417
法然上人秘伝 417
防非鈔 418
法華経 23
菩薩従兜術天降神母胎説広普経 24
菩薩受斎経 24
菩提心讃 418
菩提心集 418
発覚浄心経 25
法花行者順次往生論 419
法水分流記 419
本朝新修往生伝 420
本朝祖師伝記絵詞（四巻伝） 420
本朝法華験記 421
凡頓一乗 422

ま

摩訶阿弥陀経 234
摩訶阿弥陀経衷論 234
末代念仏授手印 422
曼陀羅八巻書 423

み

三井往生伝 423
三河念仏相承日記 424
眉間白毫集 424
弥陀経義 234
弥陀経讃 235
弥陀讃 235
弥陀証性偈 236
弥陀如来名号徳 424
弥陀如来和讃 425
弥陀本願義 425
密厳浄土観 426
明義進行集 427
妙行心要集 427
名号万徳鈔 428

む

無量寿経 25
無量寿経優波提舎願生偈 26
無量寿経優婆提舎願生偈略釈 236
無量寿経記 236
無量寿経起信論 237
無量寿経賛鈔 428
無量寿経指事私記 429
無量寿経釈 429

無量寿経宗要 242
無量寿経宗要指事 429
無量寿経述記 237
無量寿経述義記 238
無量寿経抄 430
無量寿経大意 431
無量寿経註字釈 431
無量寿経連義述文賛 238
無量寿経論 26
無量寿経論釈 431
無量寿経論註記 432
無量寿如来観行供養儀軌 27
無量寿如来念誦私記 432
無量清浄平等覚経 28

め

迷悟抄 432
滅罪劫数義 433

も

物語集 433
文殊師利発願経 28

や

薬師如来本願経 29
薬師瑠璃光七仏本願功徳経 29
薬師瑠璃光如来本願功徳経 30

ゆ

唯信鈔文意 433
遊心安楽道 239
遊心法界念仏鈔 435

よ

要法文 435
横川首楞厳院二十五三昧起請（十二箇条） 435
横川首楞厳院二十五三昧起請（八ヶ条） 436
吉水法流記 437

ら

懶翁和尚僧元歌 240
来迎和讃 437
礼浄土十二偈 240
礼念往生文 240
礼弥陀四十八願文 438

り

理観 439
立正安国論 439
略往生講式 440
略観経義 440
略諸経論念仏法門往生浄土集 240
略論安楽浄土義 241
竜舒浄土文 241
両巻無量寿経宗要 242
領解文 284
臨終行儀 440
臨終行儀支度 441
臨終行儀注記 441
臨終偈（仮名） 242
臨終讃 441
臨終正念訣 243
臨終用心抄 442
臨終要文 442
臨終要文集 442

れ

霊峰蒲益大師撰定浄土十要 243
蓮邦詩選 244

ろ

六八弘願 442

A

Ārya-Bhadracaryāpraṇidhānarāja 30

S

Sukhāvatīvyūha 32

Ka

Kun tu bzang po'i spyod pa'i smon lam gyi don kun bsdus 37

bKa' rdzogs pa chen po sangs rgyas dgongs 'dus 'Gro ba kun bsgrol las / bDe chen zhing gi smon lam Thar pa'i sgo 'byed 51

bKra shis tshe ring mched lnga 51

sKal ba dang ldan pa'i gdul bya rnams kyis rtsa ba'i bla ma dang mgon po 'od dpag med dbyer med du byas nas gsol ba 'debs pa'i tshul 52

sKyob pa rin po che'i bde smon 52

Kha

Khams gsum Chos kyi rgyal po Tsong kha pa chen po dang bCom ldan 'das mGon po Tshe dpag med dbyer med ma mchis pa la brten pa'i Tshe grub －'Chi med bdud rtsis gang ba'i bum bzang－ 53

Ga

Grub rgyal ma lugs kyi tshe dbang bskur tshul gnyis 54

Grub rgyal lugs kyi Tshe dpag med lha gcig bum gcig gi dbang bskur 54

Grub chen Mitradzoki'i lugs kyi sByong rgyud Tshe dpag med kyi dbang gi bla ma brgyud pa'i gsol 'debs smon lam shis brjod dang bcas pa 55

Grub chen Tshem bu ba'i lugs kyi thugs rje chen po'i sgrub thabs bDe ba can gyi myur lam 56

Grub dbang Thang stong snyan brgyud kyi tshe dbang gi cho ga bsgrigs 'chi med chab rgyun 'beb pa'i kai la sha ri （1） 56

Grub dbang thang stong snyan brgyud kyi tshe dbang gi cho ga bsgrigs 'chi med chab rgyun 'beb pa'i kai la sha ri （2） 57

Grub pa'i dbang phyug chen po Mi tra dzo ki'i lugs kyi sByong rgyud Tshe dpag med gsung gi dkyil 'khor gyi sgrub thabs dkyil cho ga dbang bskur tshul dang bcas pa 'chi med grub pa'i zhal lung 57

mGon po Tshe dpag med kyi dkyil 'khor gyi mjug tu bya ba'i smon lam dang shis pa brjod pa ji ltar bya ba'i tshul 58

mGon po Tshe dpag med kyi sgrub thabs 59

mGon po Tshe dpag med par brten pa'i tshe'i dngos grub bsgrub thabs －Mi 'gyur rdo rje'i srog rtsa－ 60

mGon po Tshe dpag med lha dgu'i dkyil 'khor du slob ma gzhug cing dbang bskur ba'i rim pa －'Chi med dpal ster zhes bya ba dang sMan bla mched bdun gyi rjes gnang skabs kyi chos bshad bcas－ 61

mGon po Tshe dpag med lha dgu'i cho ga'i yan lag －Bla brgyud gsol 'debs smon lam shis brjod dang bcas pa－ 61

mGon po 'Od dpag med kyi bstod pa －Zhing mchog sgo 'byed－ 62

mGon po 'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba'i nyams len mdor bsdus 62

mGon po 'Od dpag med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor －bDe ba can gyi myur lam－ 63

mGon po 'Od med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor －Zhing mchog sgo 'byed－ 63

rGyal ba Tsong kha pa chen po'i bDe chen smon lam gyi sa bcad 64

rGyal ba Tshe dpag med sogs lhag pa'i lha rnams kyi bla ma'i rnal 'byor gyi skor 64

rGyu bzhi'i sgo nas bde chen zhing du skye ba'i smon lam －rNam mkhyen lam bzang－ 65

Ca

bCom ldan 'das mGon po Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i bskyed rdzogs kyi khrid sgom tshul zin bris su btab pa 65

bCom ldan 'das snang ba mtha' yas kyi gzungs sngags 37

bCom ldan 'das mGon po 'Od dpag med la mchog cing gsol ba gdab pa'i cho ga －dGe legs dpal ster－ 66

bCom ldan 'das mGon po 'Od dpag med la brten pa'i Bla ma'i rnal 'byor －'Pho ba'i nyams len dang 'brel ba 'khyer bde－ 67

bCom ldan 'das Tshe dpag med la brten nas tshe ril sgrub tshul gyi cho ga Tshe dang bsod nams 'phel bar byed pa'i bsam 'phel yid bzhin nor bu 68

bCom ldan 'das 'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba bsdus pa 68

Cha

Chags med bDe smon gyi sa bcad 69

Chos rje dBo tshang ba la gnang ba'i bDe can gyi smon lam 70

'Chi kha ma'i gdams ngag ngo mtshar can 70

'Chi med tshe yi sgrub pa 70

Nya

Nye brgyud tshe khrid 'chi med rdo rje'i srog shing gi ngag 'don nag 'gros su bkod pa 71

Nye brgyud tshe sgrub 'Chi med rdo rje'i srog shing gi dbang cho ga －Khrigs chags su bkod pa Tshe dpal mchog sbyin－ 71

Nye brgyud lugs Bla ma Tshe dpag med zhi khro la brten pa'i tshe dbang －'Chi med dpal ster－ 72

Ja

'Jam dbyangs nas rJe Rin po che sogs la brgyud pa'i 'jam lugs tshe dpag lha lnga'i rjes gnang 73

'Jam lugs tshe dbang rigs lnga'i zur 'debs －'Chi med sgrog gi dpal sbyin－ 74

rJe bla ma Tsong kha pa chen po'i nye brgyud mGon po Tshe dpag med rigs lnga'i sgrub thab 'chi bslu ba'i man ngag dang bcas pa －'Chi med bdub rts'i dga' ston－ 74

Ta

bsTan bcos mNgon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rNam bshad rnam pa gnyis kyi dka' ba'i gnas gsal bar byed pa Legs bshad sKal bzang Klu dbang gi rol mtsho las rDzogs smin sbyangs gsum byas pa'i tshad bshad 75

Tha

Thugs rje chen po 'gro ba kun sgrol gyi bde smon 76

Theg pa chen po'i smon lam（尾題） 76

Da

Dag snang las sNang mthas mngon sum gsungs pa'i smon lam 76

De bzhin gshegs pa sNang ba mtha' yas kyi mtshan brjod pa dang legs pa dang sangs rgyas kyi zhing gi yon tan thob pa mdor smros pa 77

rDo rje snang ba mtha' yas kyi sgrub thabs 77

bDe ldan gyi snying po 38

bDe chen zhing bkod zhes bya ba theg pa chen po'i mdo bsdus pa 78

bDe chen zhing gi bkod pa －lCags khams gser du 'gyur ba'i gdams pa－ 78

bDe chen zhing gi ro sreg cho ga Ngan song gnas 'dren sdug bsngal mtsho skem gtan bde rab 'bar 79

bDe chen zhing sgrub kyi bka' bsrung gsol mchod bkrigs chags su bris pa 80

bDe chen zhing bsgrub smon lam 80

bDe chen zhing du skye bar smon pa'i gdung tshig －rNam mkhyen lam bzang－ 81

bDe chen zhing du 'pho ba'i gdams pa rgyas par bsgrigs pa 81

bDe ldan bkod pa'i mdo don ji bzhin pa'i smon lam －Thar pa'i sgo 'byed－ 82

bDe ldan zhing gi dGon po 'Od dpag med rten dang brten par bcas pa las brtsams pa'i gtam yang dag par brjod pa mThong ba don ldan nor bu'i 'khri shing 83

bDe ba can gyi zhing gi mdo 84

bDe ba can gyi 'pho ba'i gdams ngag 84

bDe ba can gyi smon lam 85

bDe ba can gyi smon lam 86

bDe ba can gyi smon lam 87

bDe ba can gyi smon lam mTha' yas sgo 'byed ma 87

bDe ba can gyi smon lam －Zab lam dbang gyi cha lag－ 88

bDe ba can gyi zhing bkod brjod pa －Zhing der bgrod pa'i them skas－ 88

bDe ba can gyi zhing bkod smon lam 89

bDe ba can gyi zhing gi bstod smon 89

bDe ba can gyi zhing gi yon tan sems pa dang sbrags te smon lam 'debs tshul byin rlabs myur 'jug dang Yid dga' chos 'dzin gyi zhing bsngags brjod bcas 90

bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon tshig 90

bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam －Zhing mchog sgo 'byed－ 91

bDe ba can gyi zhing du bgrod pa'i myur lam gsal bar byed pa'i sgron me 92

bDe ba can gyi zhing du thogs pa med par bgrod pa'i myur lam 92

bDe ba can gyi zhing sbyong ba'i dad pa gsal bar byed pa －Drang srong lung gi nyi ma－ 93

bDe ba can gyi zhing las brtsams pa'i gtam －dGe pa'i lo tog spel byed dbyar skyes sprin chen glal ba'i sgra dbyangs－ 94

bDe ba can gyi gsol 'debs smon lam 95

bDe ba can du skye ba 'dzin pa'i smon lam 95

bDe ba can du skye ba'i rgyu bzhi 'i don 96

bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam 96

bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam Kong gi khrus cho ga dang 'brel ba'i gshin po la lam bstan 97

bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam gyi dbang cho ga －Ma rig mun sel 'od zer 'bum ldan－ 97

bDe ba can du bgrod pa'i rnal 'byor 98

bDe ba can du bgrod pa'i smon lam 98

bDe ba chen po'i smon lam 99

bDe smon 99

bDe smon －Phul byung ma－ 100

bDe smon 100

bDe smon 101

bDe smon －Nyung 'dus－ 102

bDe smon 102

bDe smon 103

bDe smon 104

bDe smon 105

bDe smon 106

bDe smon bsdus pa 106

bDe smon bsdus pa 107

bDe smon －bSlu med ma－ 108

'Di nas nying mtshams sbyor zhes pa'i［dbu can gyi］bDe smon 108

Na

gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bDe chen zhing gi sgrub thabs 'don cha 109

gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bDe chen zhing sgrub kyi byang chog Thar lam dkar po 109

gNam chos thugs kyi gter kha las bDe chen zhing sgrub kyi zin bris 111

gNam chos bde chen zhing sgrub kyi dbang 'grig chags su bkod pa 111

gNam chos bDe smon 112

gNam chos bDe smon 113

rNam dag bde chen zhing gi smon lam 114

rNam dag bde chen zhing gi smon lam gyi 'byed 'grel bDe chen zhing du bgrod pa'i them skas bzang po 116

rNam dag bde ba can gyi smon lam －'Od dpag med kyi thugs rjes sa bon byang chub sems kyi myu gu mi zad par rab tu 'phel ba－ 117

rNam dag bde ba chen zhing gi smon lam gyi 'grel bshad －Thar lam snang byed－ 117

rNam par rgyal ma la brten nas rang gzhan gyi tshe sgrub bya tshul dang rje btsun sGrol dkar gyi sgo nas tshe sgrub bya tshul 'chi med bdud rtsi'i dpal ster 118

sNang ba mtha' yas rjes su dran pa 38

sNang ba mtha' yas kyi zhing gi yon tan la rnal 'byor pas bstod pa 119

sNang ba mtha' yas bsgom don 119

sNang ba mtha' yas la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor －bDe chen lam bzang－ 120

Pa

Padma dkar po'i le'u nyer bzhi pa las byung ba'i be smon 38

dPal ldan nye rgyud lugs kyi Tshe khrid zab mo'i zin bris －'Chi med bcud len－ 120

Pha

'Phags pa da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa'i ting nge 'dzin ces bya ba theg chen po'i mdo 39

'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo 40

'Phags pa tshe dang ye she dpag tu med pa'i sgrub thabs 41

'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs 41

'Phags pa tshe dpag tu med pa'i snying po'i tshe dbang bskur ba zhes bya ba'i gzungs 42

'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po 42

'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po'i rgya cher 'grel pa 43

'Phags pa yon tan bsngags pa dpag tu med pa zhes bya ba 44

'Phags pa bZang po spyod pa'i smon lam gyi rnam par bshad pa Kun tu bzang po'i dgongs pa gsal bar byed pa'i rgyan 121

'Pho khrid －dPa' bo g-yul 'jug gi lhan thabs zin bris－ 122

'Pho ba 122

'Pho ba －Ma bsgoms sangs rgyas－ 123

'Pho ba'i skor rnams 123

'Pho ba'i gdams pa 124

Ba

Bya rgyud pad ma'i rigs kyi gtso bo mGon po Tshe dpag med kyi sgrub thabs smyung bar gnas pa'i cho ga dang bcas pa －Rin po che'i phreng ba－ 124

Bla ma dang mgon po tshe dpag med dbyer med du byas nas gsol ba 'debs pa'i tshul －dGongs grub mchog sbyin－ 125

Ma

Ma gcig grub pa'i rgyal mo lugs kyi tshe dbang bka' bsgo bya tshul －dNgos grub kun 'byung－ 125

Ma gcig grub pa'i rgyal mo lugs kyi tshe dpag med la brten nas brtan bzhugs 'bul tshul gyi cho ga －bsGrigs sra mkhregs rdo rje'i srog shing－ 126

Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs kyi tshe mtha' yas pa'i sgrub pa la brten rang gzhan gyi tshe spel ba dang / de'i slad du ril sgrub ji ltar bya ba 127

Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs kyi tshe dbang bskur ba'i cho ga ji ltar bya tshul 'khyer bde bar bkod pa 128

Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs Tshe dpag med lha gcig bum gcig gi sgo nas tshe dbang bskur tshul bsdus su bkod pa －'Chi med dud rtsi'i bum bzang－ 128

Mi tra snying thig las / rNam dag bde ba can du skye pa'i smon lam 129

sMyung gnas kyi cho ga'i zur rgyan bDe ba can gyi lam yig 129

Tsa

rTsa ba'i bla ma dang mgon po 'od dpag med dbyer med kyi bla ma'i rnal 'byor 130

Gtsug tor gdugs dkar mo'i bsgom bslas －bDe ba can gyi zhing du 'gro ba'i gdams pa Bya rgyal khyung gi rta pho－ 131

Tsha

Tshig bdun gsol 'debs / Byang zhus min na ltung bshags / bDe chen zhing sgrub kyis gsol 'debs 131

Tshe khrid 'chi med dga' ston 132

Tshe sgrub 132

Tshe sgrub 'khyer bde －Kun phan－ 133

Tshe sgrub －'Chi med bdud rtsi'i chu rgyun－ 133

Tshe sgrub 'chi med 'bdud rtsi'i chu rgyun gyi sbyor dngos mjug gsum du ji ltar bya ba'i cho ga bsgrigs －Man ngag zhal shes dang bcas pa－ 134

Tshe sgrub －bDud rtsi bum bcud kyi dbang bshad－ lhan thabs su byas pa 134

Tshe bsgrub bDud rtsi'i zil mngar 135

Tshe cho ga －'Chi med dpal ster－ 135

Tshe cho ga － 'Chi med 'dod 'jo dbang gi rgyal po－ 136

Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po'i sngags 137

Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba'i sgrub thabs 45

Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i dkyil 'khor gyi cho ga 45

Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs 46

Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i cho ga 46

Tshe 'das la 'pho ba bya tshul 137

Tshe dpag tu med pa'i sbyin sreg gi cho ga 47

Tshe dpag med kyi sgrub thabs 138

Tshe dpag med kyi sgrub thabs zab mo 138

Tshe dpag med kyi sgrub pa'i thabs 139

Tshe dpag med kyi brgyud pa 139

Tshe dpag med kyi mngon rtogs 140

Tshe dpag med kyi snying po'i sngags 140

Tshe dpag med kyi mdo sde'i sngags 141

Tshe dpag med kyi bla brgyud －sMon shis sogs smon shis le tshan－ 141

Tshe dpag med dkar po phyag bzhi pa 142

Tshe dpag med dkar po'i sgrub thabs 142

Tshe dpag med gyi bstod pa －Padoma'i phreng ba－ 143

Tshe dpag med grub rgyal lugs kyi zhi rgyas kyi sbyin sreg dngos grub kun 'byung 143

Tshe dpag med 'chi med rnga sgra'i dkyil chog －Tshe dpal ye shes bsam 'grub－ 144

Tshe dpag med dwangs ma bcud 'dren gyi sgo nas gzims chung brtan bzhugs kyi cho ga sgrigs dang gang rgyun gyi rnal 'byor la dgos pa'i lhan thabs bcas pa 145

Tshe dpag med sprul sku 145

Tshe dpag med Ba ri'i lugs 146

Tshe dpag med Mi tra'i lugs 146

Tshe dpag med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor 147

Tshe dpag med la brten pa'i tshe sgrub 147

Tshe dpag med la bstod pa 147

Tshe dpag med la bstod pa 48

Tshe dpag med lha dgu las bzhi'i sbyin sreg ji ltar bya ba'i tshul 148

Tshe dpag lha dgu'i sgo nas zhi rgyas kyi sbyin sreg －Nag 'gros su bkod pa Zla ba gsar pa－ 148

Tshe phyag zung 'brel gyi tshe sgrub rgyun 'khyer －rDo rje'i srog sgrub－ 149

Tshe dbang bskur tshul －'Chi med tshe'i rig dzin gyi dngos grub ster ba'i gdams pa bzhugs so－ 149

Tshe dbang bya tshul －'Khyer bde－ 150

Tshe ril sgrub pa dang tshe dbang bskur tshul －'Chi med dpal ster － 150

Tshe ril bsgrub tshul －'Chi med dpal sbyin－ 151

Tshe lha rnam gsum gyi mngon rtogs 151

Tshogs zhing dang 'brel ba'i snying po'i nyams len －bDe ba can du 'gro ba'i lam bzang－ 152

Dza

rDzogs pa'i sangs rgyas 'Od dpag tu med pas rgyal ba Ka thog pa dam pa bde gshegs la gnang ba'i sgrub thabs las khol du byung ba'i bde smon 153

Zha

Zhing mchog sgo 'byed kyi dmigs rim mdor bsdus 153

Za

Zab lam 'pho ba'i man ngag gi skor 154

bZang spyod kyi 'chi blu bya tshul 154

bZang po spyod pa'i smon lam kyi 'grel pa bZhi'i don bsdus nas brjed byang du byas pa 155

bZang spyod la brten pa'i 'chi blu'i cho ga bya tshul 'khyer bder bkod pa 156

bZang spyod las byung ba'i nyal sgom gyi nyams len －bDe ldan zhing gi 'jug ngogs－ 156

'A

'Od dpag tu med pa'i snying po 'dod chags gshin rje gshed sgrub pa'i thabs zhes bya ba 157

'Od dpag med 158

'Od dpag med kyi sgo nas sdig pa sbyong ba'i thabs 158

'Od dpag med kyi sgom bzlas 158

'Od dpag med kyi sgrub thabs 159

'Od dpag med kyi nyal bsgom mdor bsdus 159

'Od dpag med kyi 'pho ba bKa' rgya ma sbyod tshul mdor bsdus 160

'Od dpag med kyi 'pho ba －bKa' rgya ma'i bka' zin－ 160

'Od dpag med kyi tshe sgrub 160

'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba 161

'Od dpag med la brten pa'i bzang spyod kyi sgo nas 'chi ba blu ba'i cho ga － 'Chi med grub pa－ 161

Ya

Yon tan bsngags pa dpag tu med pa'i sngags 162

Ra

Rang gzhan bDe ba can du skye ba'i thabs mchog ces bya ba bDe ba can gyi mdo'i spyi don 162

Ri chos mtshams kyi zhal gdams las / Zhing khams gdams pa ded dpon nor len 163

Rig 'dzin tshe bsgrub －bDud rtsi'i bum bcud－ 164

Rig 'dzin tshe bsgrub dmigs gnad gal mdo 164

Sa

Sangs rgyas rjes su dran pa bla na med pa bsgom pa 48

Sangs rgyas rjes su dran pa'i 'grel pa 49

Sangs rgyas rjes su dran pa'i rgya cher 'grel pa 50

Sangs rgyas sNang ba mtha' la bsten pa'i sku gsum bla ma'i rnal 'byor 165

Sras rgyal ba Don grub la mKha' 'gro'i gsang tshig tu gdams pa Dam tshig nyi shu rtsa gcig pa 165

Slob dpon chen po Jetāri'i lugs kyi bCom ldan 'das Tshe dpag med lha dgu'i sgrub dkyil gyi cho ga 'i ngag 'don khrigs chags su bsgrigs pa －'Chi med bdud rtsi'i mchog sbyin － 166

gSang bdag snyan brgyud las gsungs pa'i Tshe dpag med dang Phyag na rdo rje zung 'brel gyi sgrub thabs tshe dbang dang bcas pa'i cho ga bsgrigs －'Chi bdag gyul las rnam par rgyal ba'i rgyal mtshan－ 167

無題

無題（No Title） 50

無題（No Title） 168

無題（No Title） 169

無題（No Title. 東北目録による仮題は「阿弥陀如来讃」） 169

無題（No Title） 170

無題（No Title） 171

著者名索引

あ

阿地瞿多
阿弥陀仏大思惟経 6

安国
観無量寿経十六想観画讃釈文 294

安然
臨終讃 441

い

一念
西方直指 202

一遍
一遍上人法門抜書 265
一遍上人語録 265
一遍念仏法語 266
播州法語集 406
播州問答集 407

為霖
浄土旨訣 207

院源
西方院座主毎日念仏調 324

印光
印光法師文鈔 184
印光法師文鈔三編 184
印光法師文鈔続編 184

員性禅師
観無量寿経記 293

う

宇都宮蓮生
積学鈔（観経疏積学鈔、法事讃積学鈔） 336
述誠 344

運覚
相好抄 378

え

永観
往生拾因 271

永範
阿弥陀経綱要記 247

恵永
白衣解 230

慧遠
観無量寿経義疏 193

恵快
妙行心要集 427

懐感
阿弥陀経疏 178
釈浄土群疑論 206

恵静
阿弥陀経疏 178

懐成
阿弥陀経疏 177

恵心
妙行心要集 427

恵信尼
恵信尼消息 267

慧日
略諸経論念仏法門往生浄土集 240

袁宏道
西方合論 202

円西
阿弥陀懺補助儀 251

円測
阿弥陀経疏 177

円仁
阿弥陀懺法 251
修行念仏三昧七日道場明懺悔法 342
常行三昧堂行法 347
誓言持戒往生記 369

お

王古
新修浄土往生伝 219

王耕心
摩訶阿弥陀経衷論 234

王日休
仏説大阿弥陀経 231
竜舒浄土文 241

大江匡房
続本朝往生伝 380

か

戒香
浄土極信録 213

戒珠
往生浄土伝 188
浄土往生伝 210

戒度
観無量寿経義疏正観記 193
観無量寿経義疏扶新論 194

覚運
一実菩提偈 260
観心念仏 290
観無量寿経疏顕要記破文 295
相好抄 378
念仏宝号 404

覚超
阿弥陀秘讃 252
往生極楽問答 270
決定往生臨終十念縁起 307
私念仏作法 334
修善講式 343
念仏偈 401
念仏宝号 403
弥陀如来和讃 425

覚鑁
阿弥陀秘釈 252
一期大要秘密集 259
五輪九字明秘密釈 322
密厳浄土観 426

覚瑜
隠遁国ノ記 267
観無量寿経疏末抄（仮題） 295
釈法忍伝 338
十誓願 340
善導和尚類聚伝 376
略往生講式 440

迦才
浄土論 218

覚賢
文殊師利発願経 28

夏蓮居
阿弥陀経会本 175
浄修捷要 209
仏説大乗無量寿荘厳清浄平等覚経 232
宝王三昧懺 233

元暁
阿弥陀経疏 176
澄性歌 221
弥陀証性偈 236
遊心安楽道 239
両巻無量寿経宗要／無量寿経宗要 242

涵虚得通
安養讃 181
為傑大霊駕撒骨下語 183
為尚愚上菴和尚下語 183
為誠寧大君仙駕下語 183
勧念 191
送魂下語 220
弥陀経讃 235
弥陀讃 235
臨終偈（仮名） 242

観空
法然上人伝法絵流通（国華本） 417
本朝祖師伝記絵詞（四巻伝） 420

元舎
小阿弥陀経疏 208

元照
観無量寿仏経義疏 196

元昊
現行西方経 199

き

基
西方要決釈疑通規 202

魏源
摩訶阿弥陀経 234

義寂
観無量寿経綱要 195
無量寿経述義記 238

義浄
薬師瑠璃光七仏本願功徳経 29

義想
小阿弥陀経義記 208

吉蔵
観無量寿経義疏 193

吉迦夜
称揚諸仏功徳経 14

堯恵
阿弥陀経私抄 247
円福寺縁起 268
選択集私抄 370
註論私抄 388
曼陀羅八巻書 423
吉水法流記 437

行円
唐房法橋消息 394
念仏三昧記 402

行観
観経要義集 289

憬興
無量寿経連義述文賛 238

行仙
念仏往生伝 400

敬日房円海
初心集 365

畺良耶舎
観無量寿経 9

虚舟徳真
浄土紺珠 211

く

空然
十六相観詩 342

求那跋陀羅
抜一切業障根本得生浄土神呪 － 20
附阿弥陀経不思議神力伝

鳩摩羅什
阿弥陀経 5
華手経 10
十住毘婆沙論 12
思惟略要法 12
大智度論 17
法華経 23

け

解阿
防非鈔 418

憬興
阿弥陀経略記 180

慶運
念仏三昧記 402

慶泉
念仏勧進縁起 401

慶祚
阿弥陀観私記 247

玄一
無量寿経記 236

源空
浄土略名目図 362

幻空治兆
清珠集 210

玄奘
摂大乗論 13
称讃浄土仏摂受経 13
薬師瑠璃光如来本願功徳経 30

源信
阿弥陀経略記 249
阿弥陀仏白毫観 253
往生要集 272
勧女往生義 292
観無量寿経疏顕要記破文 295
極楽六時讃 318
十大願 340
十楽和讃 341
十楽講作法 341
正修観記 348
内道者持念 395
二十五菩薩和讃 397
八塔和讃 406
普賢講作法 409
横川首楞厳院二十五三昧起請（十二箇条） 435
要法文 435
横川首楞厳院二十五三昧起請（八ヶ条） 436
来迎和讃 437
礼弥陀四十八願文 438
臨終行儀 440
六八弘願 442

顕真
大原座主消息 283

源智
法然上人伝記（醍醐本） 415

顕智
五巻書 316

顕意
華山院家四十八問答 284
観経四品知識義 285
浄土疑端 351
浄土宗要集 356
仙洞三心義問答記 377
難易二道血脈図論一巻 396

こ

悟阿
註論刪補鈔 387

公胤
浄土決疑鈔 352

好隠有璣
新編普勧文 220

広貴
蓮邦詩選 244

幸西
持玄抄 333
措心偈 381
唐朝京師善導和尚類聚伝 393
凡頓一乗 422
略観経義 440

光宗
渓嵐拾葉集 306

康僧鎧
無量寿経 25

悟開
浄業初学須知 209
浄業知津 209
念仏百問 228

古崑
浄土自警録 213
浄土神珠 216
浄土随学 216

古徳
阿弥陀経疏鈔演義 178

小聖
観心極楽讃 290

小聖亀山居
極楽記 317

さ

西空帝山心運
専修要行抄 369
臨終要文集 442

済暹
阿弥陀大呪秘要決 252
観極楽遊心鈔 290

観無量寿経中略要問答抄 295
十六相観私記 342
念仏滅罪因縁略鈔 405
遊心法界念仏鈔 435

済能
角虎集 189

三密房
無量寿如来念誦私記 432

し

示観房凝然
浄土法門源流章 360

竺仏念
菩薩従兜術天降神母胎説広普経 24

竺法護
太子刷護経 15
法華経 23
無量寿経 25
無量清浄平等覚経 28

支謙
阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経／大阿弥陀経 6
無量清浄平等覚経 28

慈蔵
阿弥陀経疏 177

実範
阿弥陀抄 250
安身養神集 255
往生論五念門行式 281
観無量寿経科文 293
西方要観 327
般舟三昧経観念阿弥陀仏 408
病中修行記 409
眉間白毫集 424
理観 439
臨終要文 442

志磐
浄土立教志 217

寂照
生西指南要 347

闍那崛多
一向出生菩薩経 7
大方等大集経賢護分 20
発覚浄心経 25

闍那崛多・達摩笈多
法華経 23

周演済
阿弥陀経義疏 175

周克復
浄土晨鐘 216

周夢顔
西帰直指 201

袾宏
阿弥陀経事義 176
阿弥陀経疏鈔 178
阿弥陀経疏鈔問弁 179
往生集 187
答浄土四十八問 224

俊経入道
法花行者順次往生論 419

遵式
往生浄土懺願儀 187
往生浄土決疑行願二門 187
西方略伝 203

浄遐
阿弥陀経讃 176

昌海
阿弥陀悔過 250
往生集 271
西方念仏集 327

聖戒
一遍聖絵 266

証空
安心鈔 254
観経疏大意 286
観経疏他筆鈔 288
五段鈔 322
自筆鈔（観経疏自筆鈔、観念法門自筆鈔、般舟讃自筆鈔、往生礼讃自筆鈔） 334
積学鈔（観経疏積学鈔、法事讃積学鈔） 336
述誠 344

聖冏
涇渭分流集 306
三六通裏書 327
釈浄土二蔵義 338
隼疑冏決集 345
浄土略名目図 362
破邪顕正義 406
仏像幟幟義 410

貞慶
興福寺奏状 315

聖冏
鎮西宗要本末口伝鈔 389

静見
法水分流記 419

少康
往生西方浄土瑞応刪伝／浄土瑞応伝 186

聖光
円戒秘決己証 267
識知浄土論 333
浄土宗名目問答 355
浄土宗要集 357
善導大師和讃 377
徹選択本願念仏集 391
念仏往生修行門 400
念仏三心要集 402
念仏名義集 405
末代念仏授手印 422
物語集 433
臨終用心抄 442

聖光・法然
二個条疑問事 396

成時
観無量寿仏経初心三昧門 198
受持阿弥陀仏経行願儀 207

定照
顕選択難義抄 312
弾選択 386

常摂
西方確指 202

聖聡
往生論註記見聞 281
観念法門私記見聞 293
小経直談要註記 347
浄土金明集 352
浄土徹髄抄 360
大経直談要註記 384
当麻曼荼羅疏 385
般舟讃私記見聞 407
法事讃私記見聞 414
名号万徳鈔 428
鎮西宗要本末口伝鈔 389

定尊
阿弥陀秘釈 252
阿弥陀略道場観私釈 253

性澄
阿弥陀経句解 175

聶道真
菩薩受斎経 24

勝範
西方集 326
成菩提 364

浄遍
別異弘願集 411

静遍
続選択文義要鈔 380
秘蔵記 408
別異弘願集 411

昇蓮
三井往生伝 423

徐槐廷
阿弥陀経疏鈔撷 178

如寂
高野山往生伝 316

支婁迦讖
阿弥陀三耶三仏薩楼仏壇過度人道経／大阿弥陀経 6
般舟三昧経 21
無量清浄平等覚経 28

真恵
顕正流義鈔 312
十六問答記 342

信海
信海聞書 366

仁岳
小阿弥陀経新疏指帰 208

真教
三大祖師法語 330

振虚捌関
三門直指 204

信証
迷悟抄 432

真性禅師
観無量寿経記 293

信瑞
黒谷上人伝 305
明義進行集 427

真嵩
阿弥陀経摘要易解 179

真諦
大乗起信論 15

真仏
憬興師云 297
経釈文聞書 298

親鸞
阿弥陀経集註 248
一念多念文意 261
観無量寿経集註 294
憬興師云 297
経釈要文／二尊大悲本懐 298
愚禿鈔 300
顕浄土真実教行証文類／教行信証 309
皇太子聖徳奉讃 314
五巻書 316
御消息集 320
西方指南抄 325
浄土三経往生文類 353
浄土文類聚鈔 361
浄土和讃 362
親鸞聖人御消息 367
親鸞聖人血脈文集 367
親鸞聖人御消息集（広本） 368
親鸞聖人御消息集（略本） 368
尊号真像銘文 378
大日本粟散王聖徳太子奉讃 384
如来二種回向文 398
弥陀如来名号徳 424
唯信鈔文意 433

せ

聖覚
浄土略名目図 362

靖邁
称讃浄土経疏 209

世親
天竺往生験記 392

禅嘉
念仏助成 403

千観
十願発心記 340

善珠
無量寿経賛鈔 428
無量寿経註字釈 431

善性
御消息集 320

禅定僧都
西方四親近菩薩悉釈 325

善導
依観経等明般舟三昧行道往生讃／般舟讃 185
勧一切衆生願生西方極楽世界阿弥陀仏国六時礼讃偈／往生礼讃偈 189
観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門／観念法門 192
観無量寿仏経疏／観経疏 197
転経行道願往生浄土法事讃（法事讃） 222
弥陀経義 234
臨終正念訣 243

善道
念仏鏡 226

禅瑜
阿弥陀新十疑 251

そ

増覚
妙行心要集 427

荘広還
浄土資糧全集 215

宗俊
一遍上人絵詞伝 263

宗性
西方要決要文抄 327

宗本
帰元直指集 198

続法
阿弥陀経略註 181

存覚
顕名鈔 313
存覚法語 381
報恩記 412

尊観
浄土十六箇条疑問答 358

尊道
念仏五悔講式 401

尊応
浄阿上人絵詞伝 346

た

他阿
他阿上人歌集 382
他阿上人法語 383

提雲般若
大方広仏華厳経修慈分 18

太賢
小阿弥陀経疏古迹記 208

太古普愚
示楽庵居士念仏要略 219

大佑
阿弥陀経略解 180
浄土指帰集 213

平基親
往生要集勘文 274
往生要集外典抄 274

択瑛
浄土修証儀 214

託何
三大祖師法語 330
器朴論 296
仏心解 410

達摩笈多
薬師如来本願経 29

耽空
法然上人伝法絵（高田本） 416
法然上人伝法絵流通（国華本） 417
本朝祖師伝記絵詞（四巻伝） 420

湛秀
臨終行儀支度 441
臨終行儀注記 441

ち

智円
阿弥陀経疏 177
小阿弥陀経西資鈔 209

智顗
観無量寿経疏 195
浄土十疑論 213

智旭
仏説阿弥陀経要解 230
霊峰蕅益大師撰定浄土十要 243

智慶
称名問答 365

智憬
無量寿経宗要指事 429
無量寿経指事私記 429

智光
安養賦 257
観無量寿経疏 295
四十八願釈 333
無量寿経論釈 431

智首
阿弥陀経疏随縁義鈔 179
小阿弥陀経鈔 208

智昇
集諸経礼懺儀 207

智昭
小阿弥陀経科 207

智得
三大祖師法語 330
念仏往生綱要 399

澄興
阿弥陀経疏 178

長西
往生礼讃前料簡 280
観経疏光明抄 286
九品寺見聞集 301
五劫思惟諍論鈔 319
浄土依憑経論章疏目録 350
諸仏証誡鈔 365
専雑二修義 369
選択本願念仏集名体決 375
惣別二願抄 379
念仏本願義 404

長舜
西方要抄 327

重誉
西方集 326

知礼
観無量寿仏経疏妙宗鈔 196

珍海
安養知足相対鈔 256
決定往生集 307
浄土義私記 351
大乗義章浄土義私記 384
日本感通伝 398
菩提心讃 418
菩提心集 418

鎮源
本朝法華験記 421

て

丁福保
佛説無量寿経箋註 233

徹悟
徹悟禅師語録 222
念仏伽陀 225

伝灯
阿弥陀経略解円中鈔 181
観無量寿仏経図頌 198
浄土生無生論 215
浄土法語 217

天如
浄土或問 218

と

道衍
諸上善人詠 219

道教
諸行本願義 365

道鏡
念仏鏡 226

道間
観経疏 190

道光
黒谷上人語灯録（漢語） 302
黒谷上人語灯録（和語） 303
拾遺黒谷上人語灯録〔漢語〕（拾遺漢語灯録） 339
選択集大綱抄 371
知恩伝 387
無量寿経抄 430
無量寿経大意 431

道綽
安楽集 182
行図 199

道範
秘密念仏鈔 408

呑海
呑海上人御法語 395

曇無竭
観世音菩薩授記経 8

曇無讖
悲華経 22

曇鸞
往生論註／浄土論註 188
讃阿弥陀仏偈 203
礼浄土十二偈 240
略論安楽浄土義 241

遁倫
小阿弥陀経疏 208

な

那連提耶舎
月灯三昧経 7

難提
請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経 13

に

日蓮
災難対治抄／災難対治御勘文 324
守護国家論 343
念仏者追放宣旨御教書集列五篇勘文状 403
立正安国論 439

ね

然空
浄土宗要集 356

は

栢庵性聡
浄土宝書 217
栢庵浄土讃 229

白延
無量清浄平等覚経 28

般若
大方広仏華厳経／普賢広大願王清浄偈 17

ひ

飛錫
念仏三昧宝王論 227

非濁
随願往生集 220

ふ

不空
九品往生阿弥陀三摩地集陀羅尼経 10
金剛恐怖集会方広軌儀観自在三世最勝心明王経 11
金剛頂経観自在如来修行法 11
普賢菩薩行願讃 23
無量寿如来観行供養儀軌 27

藤原宗友
本朝新修往生伝 420

普照知訥
勧修定慧結社文 191
念仏要門 228

仏陀跋陀羅・宝雲
無量寿経 25

ほ

法位
観無量寿経疏 196

芳慧
浄土承恩集 214

彭際清
念仏警策 226
華厳念仏三昧論 200
無量寿経起信論 237

宝思惟
観世音菩薩如意摩尼陀羅尼経 9

法常
観無量寿経疏 195

彭紹昇
阿弥陀経約論 179
仏説無量寿経 232

法聡
釈観無量寿仏経記 205

宝鼎
念仏要門科解 229

法天
一切如来烏瑟膩沙最勝総持経 7
大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経 15
毘倶胝菩薩一百八名経 22

法然
阿弥陀経釈 248
ある人のもとへつかはす御消息 254
示或人詞（あるひとにしめすことば） 254
一枚起請文 262
一紙小消息 263
往生要集釈 275
往生要集詮要 277
往生要集略料簡 278
往生要集料簡 279
大胡の太郎実秀か妻室のもとへつかはす御返事 282
観無量寿経釈 293
逆修説法 297
九条殿下の北政所へ進する御返事 299
熊谷の入道へつかはす御返事（九月十六日付） 301
黒谷上人語灯録（漢語） 302
黒谷聖人御消息 302
黒谷上人語灯録（和語） 303
御消息 320
西方指南抄 325
三心義 329
三部経釈 331
三部経大意 332
拾遺黒谷上人語灯録〔漢語〕（拾遺漢語灯録） 339
浄土三部経釈 354
選択本願念仏集／選択集 374
津戸三郎へつかはす御返事（九月二十八日付） 389
津戸三郎へつかはす御返事（十月十八日付） 390
津戸三郎へつかはす御返事（四月二十六日付） 390
登山状 394
念仏往生義 399
法然上人伝記（醍醐本） 415
無量寿経釈 429

菩提流志
大宝積経無量寿如来会 19
大宝積経発勝志楽会 19
大宝積経阿闍世王子会 19

菩提留支（菩提流支）
無量寿経優波提舎願生偈／無量寿経論／往生論／浄土論 26

法賢
大乗無量寿荘厳経 16

法照
浄土五会念仏誦経観行儀 211
浄土五会念仏略法事儀讃 212
大聖竹林寺記 221

梵琦
西斎浄土詩 201

ま

末継智言
騎上牧童歌 198

卍蓮
浄土証心集 215

み

源隆国
安養集 256

明恵
於一向専修宗選択集中摧邪輪（摧邪輪） 268

明恵房高弁
摧邪輪荘厳記 324

明衍
大弥陀懺略抄要覧普勧念仏文 221

明眼
現行法会礼懺儀式 200
念仏歌 225

妙叶
宝王三昧念仏直指 233

三善為康
後拾遺往生伝 319
拾遺往生伝 338

も

文誅
往生西方浄土瑞応刪伝／浄土瑞応伝 186

ゆ

唯信房
観経要義集 289

よ

永観
阿弥陀経要記 249
往生講式 269
往生極楽讃 270
決定往生行業文 307
迎接和讃 314
三時念仏観門式 328
常途念仏記 349
地相観文 387
念仏勧進縁起 401
念仏讃 401

用欽
観無量寿経義疏白蓮記 194

楊仁山（楊文会）
仏説観無量寿仏経略論 231

楊文会（楊仁山）
無量寿経優婆提舎願生偈略釈 236

慶滋保胤
日本往生極楽記 397
横川首楞厳院二十五三昧起請（八ヶ条） 436

ら

懶庵普雨
勧念要録 192

懶翁恵勤
示永昌大君 205
示諸念仏人 205
示李尚書 219
答妹氏書 224
懶翁和尚僧元歌 240

頼尊
念仏三昧記 403

り

李贄
浄土決 211

隆寛
一念多念分別事 260
往生礼讃問答 281
観経疏問答 288
閑亭後世物語 291
羈中吟 296

具三心義 299
玄義分問答 309
顕選択 312
極楽浄土宗義 317
後世物語聞書 321
散善義問答 330
四句之抄 333
定善義問答聞書私見 350
浄土宗要決 356
自力他力事 366
捨子問答 369
善導和尚十徳鈔 376
善導講私記 377
知恩講私記 386
答但馬宮問三箇条 393
得生西方義 394
念仏同法要記 403
別時念仏講私記 411
法然上人伝 414
法然讃 414
法然上人秘伝 417
弥陀本願義 425
滅罪劫数義 433

隆堯
黒谷上人御法語 305
称名念仏奇特現証集 364

竜興
観無量寿経記 192
無量寿経述記 237

良栄
安楽集私記見聞 258
観念法門私記見聞 293
法事讃私記見聞 414

了海
還相回向聞書 313
他力信心聞書 385

良暁
意楽用心記 259
往生礼讃見聞 280
往生論註記鈔 282
観経疏伝通記見聞 287
観念法門見聞 292
決疑鈔見聞 306
重書裏書 340
述聞制文 345
浄土口伝肝心鈔 352
浄土述聞口伝切紙 358
浄土述聞見聞 359
浄土述聞鈔 359
浄土述聞追加 360

了暁
鎮西宗要本末口伝鈔 389

良慶
安養抄 256

了源
算頭録 331

良源
極楽浄土九品往生義 317

了根
阿弥陀経直解正行 176

良忠
安楽集私記 257
安楽集論義 258
往生要集鈔 276
往生礼讃私記 280
観経疏伝通記 287
観経疏略鈔 288
観念法門私記 292
玄義分聞書 308
三心私記 329
定善義聞書 350
浄土宗要肝心集 355
浄土宗要集 357
序分義聞書 366
選択疑問答 369
選択伝弘決疑鈔 372
選択集略鈔 372
選択伝弘決疑鈔裏書 373
徹選択集鈔 391
般舟讃私記 407
法事讃私記 413
無量寿経論註記 432

了如
念仏伽陀 225

了如等
徹悟禅師語録 222

了梅
徹悟禅師語録 222
念仏伽陀 225

了亮
徹悟禅師語録 222
念仏伽陀 225

れ

霊裕
観無量寿経疏 196

蓮心房
十楽和讃 341

蓮禅
三外往生記 328

蓮如
御文／御文章 283
改悔文／領解文 284
夏御文 308
御俗姓 321
正信偈大意 348
正信偈註釈 349
帖内御文 363

不明

求生行門要出 199
参禅念仏文 203
修三密証念仏三昧 206
天竺往生験記 223
東林十八高賢伝 224
念仏感応伝 225
念仏作法 227
白衣礼懺 230
礼念往生文 240
往生仏土経 272
漢家類聚往生伝 290
観世音菩薩往生浄土本縁経 291
源空上人私日記 309
西方懺法 326
四十八願ノ名次第 334
浄阿上人伝 346
浄阿上人行状 346
浄土宗三国伝来血脈譜 354
選択集述疑 371
相好文字抄 379
七日導師作法 395
七日念仏私記 396
破悪義証文 405
別伝記 412
法事讃私記冠註 413
法然上人伝絵詞（琳阿本） 415
三河念仏相承日記 424

失訳

阿弥陀鼓音声王陀羅尼経 5
大乗無量寿経 16
太子和休経 16
拔陂菩薩経 20

失訳説（帛尸梨蜜多羅訳説）
灌頂百結神王護身呪経（巻第四） 8

後漢失訳
後出阿弥陀仏偈 11

著者名翻訳者名無し（仏説）

Ārya-Bhadracaryāpraṇidhānarāja 30
Sukhāvatīvyūha 32

Ka

Ka thog pa dam pa bde gshegs
rDzogs pa'i sangs rgyas 'Od dpag tu med pas rgyal ba Ka thog pa dam pa bde gshegs la gnang ba'i sgrub thabs las khol du byung ba'i bde smon 153

Ka thog Si tu Chos kyi rgya mtsho
bDe smon 105

Tib. Karma Chags med、Skt. Rāgāsya
bDe chen zhing gi ro sreg cho ga Ngan song gnas 'dren sdug bsngal mtsho skem gtan bde rab 'bar 79
bDe chen zhing sgrub kyi bka' bsrung gsol mchod bkrigs chags su bris pa 80
bDe chen zhing du 'pho ba'i gdams pa rgyas par bsgrigs pa 81
bDe smon bsdus pa 106
bDe smon bsdus pa 107
gNam chos thugs kyi gter kha las bDe chen zhing sgrub kyi zin bris 111
gNam chos bde chen zhing sgrub kyi dbang 'grig chags su bkod pa 111
rNam dag bde chen zhing gi smon lam 114
Gtsug tor gdugs dkar mo'i bsgom bslas －bDe ba can gyi zhing du 'gro ba'i gdams pa Bya rgyal khyung gi rta pho－ 131
Ri chos mtshams kyi zhal gdams las / Zhing khams gdams pa ded dpon nor len 163

Karma pa sku phreng bcu bzhi pa Theg mchog rdo rje
Tshig bdun gsol 'debs / Byang zhus min na ltung bshags / bDe chen zhing sgrub kyis gsol 'debs 131

Karma pa De bzhin gshegs pa
bDe ba can du bgrod pa'i smon lam 98

Karma pa bDud 'dul rdo rje
bDe smon －Nyung 'dus－ 102

Kun bzang gzhan phan
bDe smon 102

rKong gTer pa
bDe chen zhing gi bkod pa － lCags khams gser du 'gyur ba'i gdams pa－ 78

sKyob pa 'Jig rten mgon po
sKyob pa rin po che'i bde smon 52

Kha

Khrag 'thung bDud 'joms rdo rje
Dag snang las sNang mthas mngon sum gsungs pa'i smon lam 76

mKhan chen Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan
Grub rgyal ma lugs kyi tshe dbang bskur tshul gnyis 54
bDe ba can gyi 'pho ba'i gdams ngag 84

Ga

Gung thang dKon mchog bstan ba'i sgron me
Grub chen Tshem bu ba'i lugs kyi thugs rje chen po'i sgrub thabs bDe ba can gyi myur lam 56
mGon po 'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba'i nyams len mdor bsdus 62
mGon po 'Od med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor －Zhing mchog sgo 'byed－ 63
bDe ba can gyi zhing gi yon tan sems pa dang sbrags te smon lam 'debs tshul byin rlabs myur 'jug dang Yid dga' chos 'dzin gyi zhing bsngags brjod bcas 90
sMyung gnas kyi cho ga'i zur rgyan bDe ba can gyi lam yig 129
Tshe dpag med kyi bla brgyud －sMon shis sogs smon shis le tshan－ 141
Tshe dpag med la brten pa'i tshe sgrub 147
Tshe lha rnam gsum gyi mngon rtogs 151
無題（No Title） 168
無題（No Title） 170
無題（No Title） 171

Go rams bSod nams Seng ge
bDe smon 100

Grwa lag Byang chub rdo rje
rGyu bzhi'i sgo nas bde chen zhing du skye ba'i smon lam －rNam mkhyen lam bzang－ 65
bDe chen zhing du skye bar smon pa'i gdung tshig －rNam mkhyen lam bzang－ 81
bDe smon －bSlu med ma－ 108

Glag bla bsod nams chos 'grub
bDe smon 104

Glag bla bSod nams chos 'grub
rNam dag bde ba chen zhing gi smon lam gyi 'grel bshad － Thar lam snang byed－ 117

dGe 'dun rgya mtsho
bCom ldan 'das mGon po 'Od dpag med la brten pa'i Bla ma'i rnal 'byor －'Pho ba'i nyams len dang 'brel ba 'khyer bde－ 67
Chos rje dBo tshang ba la gnang ba'i bDe can gyi smon lam 70
'Chi med tshe yi sgrub pa 70
無題（No Title. 東北目録による仮題は「阿弥陀如来讃」） 169

Tib. dGra las rnam par rgyal ba、Skt. Jitāri
'Phags pa tshe dang ye she dpag tu med pa'i sgrub thabs 41
Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i cho ga 46
Tshe dpag med la bstod pa 48

rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan
bDe ldan zhing gi dGon po 'Od dpag med rten dang brten par bcas pa las brtsams pa'i gtam yang dag par brjod pa mThong ba don ldan nor bu'i 'khri shing 83
bDe ba can gyi zhing gi mdo 84
'Od dpag med la brten pa'i bzang spyod kyi sgo nas 'chi ba blu ba'i cho ga － 'Chi med grub pa－ 161

sGra tshad pa Rin chen rnam rgyal
Tshe dpag med 'chi med rnga sgra'i dkyil chog －Tshe dpal ye shes bsam 'grub－ 144

Nga

Ngag dbang byams pa
'Jam lugs tshe dbang rigs lnga'i zur 'debs －'Chi med sgrog gi dpal sbyin－ 74

Ngag dbang Blo bzang rgya mtsho
Tshe sgrub 132
Tshe dpag med kyi sgrub thabs 138
Tshe dpag med dwangs ma bcud 'dren gyi sgo nas gzims chung brtan bzhugs kyi cho ga sgrigs dang gang rgyun gyi rnal 'byor la dgos pa'i lhan thabs bcas pa 145
bZang spyod las byung ba'i nyal sgom gyi nyams len －bDe ldan zhing gi 'jug ngogs－ 156
'Od dpag med kyi sgrub thabs 159
無題（No Title） 170

Ngag dbang blo bzang chos ldan dpal bzang po
bDe ba can gyi zhing du bgrod pa'i myur lam gsal bar byed pa'i sgron me 92
Tshe khrid 'chi med dga' ston 132
Tshe bsgrub bDud rtsi'i zil mngar 135

Tshe dpag med kyi mngon rtogs 140
Tshe dpag med dkar po'i sgrub thabs 142
Zhing mchog sgo 'byed kyi dmigs rim mdor bsdus 153

Ngor chen Kun dga' bzang po
'Od dpag med kyi tshe sgrub 160

rNga rgod byams pa rab rgyas
mGon po 'Od dpag med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor －bDe ba can gyi myur lam－ 63
Tshe dbang bya tshul －'Khyer bde－ 150

Ca

Co ne Grags pa bshad sgrub
'Jam dbyangs nas rJe Rin po che sogs la brgyud pa'i 'jam lugs tshe dpag lha lnga'i rjes gnang 73
bDe ba can gyi zhing bkod brjod pa －Zhing der bgrod pa'i them skas－ 88
Tshe cho ga －'Chi med dpal ster－ 135
Tshe ril sgrub pa dang tshe dbang bskur tshul －'Chi med dpal ster－ 150
Tshe ril bsgrub tshul －'Chi med dpal sbyin－ 151
Tshogs zhing dang 'brel ba'i snying po'i nyams len －bDe ba can du 'gro ba'i lam bzang－ 152
Zab lam 'pho ba'i man ngag gi skor 154

lCags kong rDo rje dgra 'dul
bDe smon 103

lCang skya Rol pa'i rdo rje
'Phags pa bZang po spyod pa'i smon lam gyi rnam par bshad pa Kun tu bzang po'i dgongs pa gsal bar byed pa'i rgyan 121

Cha

Che yol rig 'dzin chen po
bDe ba can gyi gsol 'debs smon lam 95

mChog gyur bDe chen gling pa
bDe smon 103

Ja

'Jam dbyang mkhyen brtse Chos kyi blo gros
sNang ba mtha' yas la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor －bDe chen lam bzang－ 120
'Od dpag med kyi nyal bsgom mdor bsdus 159

'Jam mgon 'Ju Mi pham rgya mtsho
bDe ba can gyi zhing sbyong ba'i dad pa gsal bar byed pa －Drang srong lung gi nyi ma－ 93
bDe ba can du skye ba'i rgyu bzhi 'i don 96
bDe smon 103

'Jigs med gling pa
bDe ba can gyi zhing bkod smon lam 89
bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam 96
bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam Kong gi khrus cho ga dang 'brel ba'i gshin po la lam bstan 97
'Pho ba －Ma bsgoms sangs rgyas－ 123
Tshe sgrub －bDud rtsi bum bcud kyi dbang bshad－ lhan thabs su byas pa 134
Rig 'dzin tshe bsgrub －bDud rtsi'i bum bcud－ 164
Rig 'dzin tshe bsgrub dmigs gnad gal mdo 164

'Jigs med bstan pa'i nyi ma
bDe ba can gyi zhing las brtsams pa'i gtam －dGe pa'i lo tog spel byed dbyar skyes sprin chen glal ba'i sgra dbyangs－ 94
bDe smon 104

'Jigs med 'phrin las 'od zer
bDe ba can du bsgrod pa'i cho ga dpag med myur lam gyi dbang cho ga －Ma rig mun sel 'od zer 'bum ldan－ 97

'Jigs bral Ye she rDo rje
Sangs rgyas sNang ba mtha' la bsten pa'i sku gsum bla ma'i rnal 'byor 165

Ta

rTa tshag pa Ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan
Khams gsum Chos kyi rgyal po Tsong kha pa chen po dang bCom ldan 'das mGon po Tshe dpag med dbyer med ma mchis pa la brten pa'i Tshe grub －'Chi med bdud rtsis gang ba'i bum bzang－ 53

sTag phu yongs 'dzin ye shes rgya mtsho
Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs kyi tshe dbang bskur ba'i cho ga ji ltar bya tshul 'khyer bde bar bkod pa 128
Tshe 'das la 'pho ba bya tshul 137

sTag sham Nus ldan rdo rje
rNam dag bde ba can gyi smon lam －'Od dpag med kyi thugs rjes sa bon byang chub sems kyi myu gu mi zad par rab tu 'phel ba－ 117

Tāranātha
bDe ba can gyi smon lam 87

Tha

Thugs rje gzhan phan dpal bzang
rNam dag bde chen zhing gi smon lam gyi 'byed 'grel bDe chen zhing du bgrod pa'i them skas bzang po 116

Tib. Thogs med、Skt. Asaṅga
Sangs rgyas rjes su dran pa'i 'grel pa 49

Da

Dol po pa Shes rab rgyal mtshan dPal bzang po
bDe ba can gyi zhing gi bstod smon 89
bDe ba can du skye ba 'dzin pa'i smon lam 95
Rang gzhan bDe ba can du skye ba'i thabs mchog ces bya ba bDe ba can gyi mdo'i spyi don 162

Dharmabhadra
Grub rgyal lugs kyi Tshe dpag med lha gcig bum gcig gi dbang bskur 54
Nye brgyud tshe khrid 'chi med rdo rje'i srog shing gi ngag 'don nag 'gros su bkod pa 71
bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon tshig 90
'Pho khrid －dPa' bo g-yul 'jug gi lhan thabs zin bris－ 122
Tshe sgrub 'khyer bde －Kun phan－ 133
bZang spyod kyi 'chi blu bya tshul 154
'Od dpag med kyi 'pho ba bKa' rgya ma sbyod tshul mdor bsdus 160

bDud 'dul rdo rje
bDe smon 101

rDo rje bDe chen gling ba
rDo rje snang ba mtha' yas kyi sgrub thabs 77

Na

Skt. Nāgārjuna, Tib. Klu sgrub, Chin. 龍猛、龍樹
bDe ba chen po'i smon lam 99

Pa

Padmasambhava
bDe ba can gyi smon lam 85

Padma Nyin byed dBang po
bDe smon 102

Paṇ chen lnga pa bsTan pa'i dbang phyug
Grub dbang Thang stong snyan brgyud kyi tshe dbang gi cho ga bsgrigs 'chi med chab rgyun 'beb pa'i kai la sha ri （1） 56
Grub dbang thang stong snyan brgyud kyi tshe dbang gi cho ga bsgrigs 'chi med chab rgyun 'beb pa'i kai la sha ri （2） 57

Paṇ chen gnyis pa Blo bzang ye shes
Tshe sgrub －'Chi med bdud rtsi'i chu rgyun－ 133

Paṇ chen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan
mGon po Tshe dpag med kyi dkyil 'khor gyi mjug tu bya ba'i smon lam dang shis pa brjod pa ji ltar bya ba'i tshul 58
bCom ldan 'das 'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba bsdus pa 68
bDe ba can gyi zhing du thogs pa med par bgrod pa'i myur lam 92
bDe ba can du bgrod pa'i rnal 'byor 98
bDe smon 101
Tshe cho ga － 'Chi med 'dod 'jo dbang gi rgyal po－ 136
Tshe dbang bskur tshul －'Chi med tshe'i rig dzin gyi dngos grub ster ba'i gdams pa bzhugs so－ 149

Paṇ chen bzhi pa bsTan pa'i nyi ma
bKra shis tshe ring mched lnga 51
sKal ba dang ldan pa'i gdul bya rnams kyis rtsa ba'i bla ma dang mgon po 'od dpag med dbyer med du byas nas gsol ba 'debs pa'i tshul 52
mGon po Tshe dpag med lha dgu'i dkyil 'khor du slob ma gzhug cing dbang bskur ba'i rim pa －'Chi med dpal ster zhes bya ba dang sMan bla mched bdun gyi rjes gnang skabs kyi chos bshad bcas－ 61
rNam par rgyal ma la brten nas rang gzhan gyi tshe sgrub bya tshul dang rje btsun sGrol dkar gyi sgo nas tshe sgrub bya tshul 'chi med bdud rtsi'i dpal ster 118
'Pho ba 122
'Pho ba'i gdams pa 124
rTsa ba'i bla ma dang mgon po 'od dpag med dbyer med kyi bla ma'i rnal 'byor 130
Tshe dpag med grub rgyal lugs kyi zhi rgyas kyi sbyin sreg dngos grub kun 'byung 143
Tshe dpag med la brten pa'i bla ma'i rnal 'byor 147
Tshe dpag med lha dgu las bzhi'i sbyin sreg ji ltar bya ba'i tshul 148
bZang spyod la brten pa'i 'chi blu'i cho ga bya tshul 'khyer bder bkod pa 156
'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba 161

Paṇ chen gsum pa Blo bzang dpal ldan ye shes
bCom ldan 'das mGon po Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i bskyed rdzogs kyi khrid sgom tshul zin bris su btab pa 65
'Pho ba'i skor rnams 123
Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs kyi tshe mtha' yas pa'i sgrub pa la brten rang gzhan gyi tshe spel ba dang / de'i slad du ril sgrub ji ltar bya ba 127

dPal sprul rin po che
rGyal ba Tsong kha pa chen po'i bDe chen smon lam gyi sa bcad 64
Chags med bDe smon gyi sa bcad 69

Pha

'Phags pa
Tshe dpag med kyi sgrub thabs zab mo 138
Tshe dpag med kyi sgrub pa'i thabs 139
Tshe dpag med gyi bstod pa －Padma'i phreng ba－ 143
Tshe dpag med la bstod pa 147
'Od dpag med kyi sgo nas sdig pa sbyong ba'i thabs 158

Tib. Phyogs kyi glang po、Skt. Dignāga
Kun tu bzang po'i spyod pa'i smon lam gyi don kun bsdus 37

Tsha

Tshab tsha sGrub rgan pa
bDe chen zhing bsgrub smon lam 80

Ba

Bu ston Rin chen grub pa
Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po'i sngags 137
Tshe dpag med kyi brgyud pa 139
Tshe dpag med kyi snying po'i sngags 140
Tshe dpag med kyi mdo sde'i sngags 141
Yon tan bsngags pa dpag tu med pa'i sngags 162

Tib. Blo 'gros chen po、Skt. Mahāmati
Sangs rgyas rjes su dran pa bla na med pa bsgom pa 48

Blo bzang bsKal bzang rgya mtsho
mGon po Tshe dpag med kyi sgrub thabs 59
mGon po Tshe dpag med par brten pa'i tshe'i dngos grub bsgrub thabs －Mi 'gyur rdo rje'i srog rtsa－ 60
Bla ma dang mgon po tshe dpag med dbyer med du byas nas gsol ba 'debs pa'i tshul －dGongs grub mchog sbyin－ 125
Ma gcig grub pa'i rgyal mo lugs kyi tshe dpag med la brten nas brtan bzhugs 'bul tshul gyi cho ga －bsGrigs sra mkhregs rdo rje'i srog shing－ 126

Blo bzang nor bu shes rab
bCom ldan 'das Tshe dpag med la brten nas tshe ril sgrub tshul gyi cho ga Tshe dang bsod nams 'phel bar byed pa'i bsam 'phel yid bzhin nor bu 68
Tshe dpag med dkar po phyag bzhi pa 142
Tshe dpag med sprul sku 145
Tshe dpag med Ba ri'i lugs 146
Tshe dpag med Mi tra'i lugs 146
'Od dpag med 158

Blo bzang ye shes bstan pa rab rgyas
Tshe dpag lha dgu'i sgo nas zhi rgyas kyi sbyin sreg －Nag 'gros su bkod pa Zla ba gsar pa－ 148

dByangs can dga' ba'i blo gros
rGyal ba Tshe dpag med sogs lhag pa'i lha rnams kyi bla ma'i rnal 'byor gyi skor 64

dByangs can grub pa'i rdo rje
'Od dpag med kyi 'pho ba － bKa' rgya ma'i bka' zin－ 160

Tib. dByig gnyen、Skt. Vasubandhu
Sangs rgyas rjes su dran pa'i rgya cher 'grel pa 50

'Brug pa Pad ma dkar po
bDe ba can gyi smon lam 86

Ma

Tib. Ma gcig grub pa'i rgyal mo、Skt. Ḍākinī-Siddhi-Rāja
Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba'i sgrub thabs 45
Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i dkyil 'khor gyi cho ga 45
Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs 46
Tshe dpag tu med pa'i sbyin sreg gi cho ga 47

Ma gcig lab kyi sgron ma
Sras rgyal ba Don grub la mKha' 'gro'i gsang tshig tu gdams pa Dam tshig nyi shu rtsa gcig pa 165

Mitrajoki
Mi tra snying thig las / rNam dag bde ba can du skye pa'i smon lam 129

Mi 'gyur rdo rje
gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bDe chen zhing gi sgrub thabs 'don cha 109
gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bDe chen zhing sgrub kyi byang chog Thar lam dkar po 109
gNam chos bDe smon 112
gNam chos bDe smon 113

Tib. Mar me mdzad ye shes、Skt. Dīpaṃkaraśrījñāna
'Od dpag tu med pa'i snying po 'dod chags gshin rje gshed sgrub pa'i thabs zhes bya ba 157

Tsa

Tsong kha pa
mGon po 'Od dpag med kyi bstod pa －Zhing mchog sgo 'byed－ 62
bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam －Zhing mchog sgo 'byed－ 91
bDe smon 99
bDe smon －Phul byung ma－ 100
無題（No Title） 168
無題（No Title） 169

Dza

rDza phu khung Padma rin chen
bDe smon 106

Zha

Zhwa dmar cod paṇ 'dzin pa
bDe ba can gyi smon lam 86

Za

Zhe chen rGyal tshab
bDe smon 105

Ya

Ye shes rgyal mtshan
Bya rgyud pad ma'i rigs kyi gtso bo mGon po Tshe dpag med kyi sgrub thabs smyung bar gnas pa'i cho ga dang bcas pa －Rin po che'i phreng ba－ 124
Ma gcig grub pa'i rgyal mo lugs kyi tshe dbang bka' bsgo bya tshul －dNgos grub kun 'byung－ 125
Tshe sgrub 'chi med 'bdud rtsi'i chu rgyun gyi sbyor dngos mjug gsum du ji ltar bya ba'i cho ga bsgrigs －Man ngag zhal shes dang bcas pa－ 134

Ye shes sde
bZang po spyod pa'i smon lam kyi 'grel pa bZhi'i don bsdus nas brjed byang du byas pa 155

Ra

Ratna gling pa
bDe ba can gyi smon lam mTha' yas sgo 'byed ma 87

Rig 'dzin rGod ldem can
bDe ba can gyi smon lam －Zab lam dbang gyi cha lag－ 88

Rig 'dzin Tshe dbang nor bu
bDe ldan bkod pa'i mdo don ji bzhin pa'i smon lam －Thar pa'i sgo 'byed－ 82

Rin chen bzang po
bDe ba can gyi smon lam 85

Sha

Tib. Shākya'i bshes gnyen、Skt. Śākyamitra
'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po'i rgya cher 'grel pa 43

Sa

Sa skya Paṇḍita
'Chi kha ma'i gdams ngag ngo mtshar can 70
sNang ba mtha' yas bsgom don 119

Se ra rje btsun Chos kyi rgyal mtshan
bsTan bcos mNgon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rNam bshad rnam pa gnyis kyi dka' ba'i gnas gsal bar byed pa Legs bshad sKal bzang Klu dbang gi rol mtsho las rDzogs smin sbyangs gsum byas pa'i tshad bshad 75

Ha

Hal ha Dam tshig rdo rje
Grub chen Mitradzoki'i lugs kyi sByong rgyud Tshe dpag med kyi dbang gi bla ma brgyud pa'i gsol 'debs smon lam shis brjod dang bcas pa 55
Grub pa'i dbang phyug chen po Mi tra dzo ki'i lugs kyi sByong rgyud Tshe dpag med gsung gi dkyil 'khor gyi sgrub thabs dkyil cho ga dbang bskur tshul dang bcas pa 'chi med grub pa'i zhal lung 57
mGon po Tshe dpag med lha dgu'i cho ga'i yan lag －Bla brgyud gsol 'debs smon lam shis brjod dang bcas pa－ 61
bCom ldan 'das mGon po 'Od dpag med la mchog cing gsol ba gdab pa'i cho ga －dGe legs dpal ster－ 66
Nye brgyud tshe sgrub 'Chi med rdo rje'i srog shing gi dbang cho ga －Khrigs chags su bkod pa Tshe dpal mchog sbyin－ 71
Nye brgyud lugs Bla ma Tshe dpag med zhi khro la brten pa'i tshe dbang －'Chi med dpal ster－ 72
rJe bla ma Tsong kha pa chen po'i nye brgyud mGon po Tshe dpag med rigs lnga'i sgrub thab 'chi bslu ba'i man ngag dang bcas pa －'Chi med bdub rts'i dga' ston－ 74
dPal ldan nye rgyud lugs kyi Tshe khrid zab mo'i zin bris －'Chi med bcud len－ 120
Ma gcig grub pa'i rgyal mo'i lugs Tshe dpag med lha gcig bum gcig gi sgo nas tshe dbang bskur tshul bsdus su bkod pa －'Chi med dud rtsi'i bum bzang－ 128
Tshe phyag zung 'brel gyi tshe sgrub rgyun 'khyer －rDo rje'i srog sgrub－ 149
Slob dpon chen po Jetāri'i lugs kyi bCom ldan 'das Tshe dpag med lha dgu'i sgrub dkyil gyi cho ga 'i ngag 'don khrigs chags su bsgrigs pa －'Chi med bdud rtsi'i mchog sbyin－ 166

gSang bdag snyan brgyud las gsungs pa'i Tshe dpag med dang Phyag na rdo rje zung 'brel gyi sgrub thabs tshe dbang dang bcas pa'i cho ga bsgrigs －'Chi bdag gyul las rnam par rgyal ba'i rgyal mtshan－ 167

不明

bKa' rdzogs pa chen po sangs rgyas dgongs 'dus 'Gro ba kun bsgrol las / bDe chen zhing gi smon lam Thar pa'i sgo 'byed 51
Thugs rje chen po 'gro ba kun sgrol gyi bde smon 76
Theg pa chen po'i smon lam（尾題） 76
De bzhin gshegs pa sNang ba mtha' yas kyi mtshan brjod pa dang legs pa dang sangs rgyas kyi zhing gi yon tan thob pa mdor smros pa 77
bDe chen zhing bkod zhes bya ba theg pa chen po'i mdo bsdus pa 78
'Di nas nying mtshams sbyor zhes pa'i［dbu can gyi］bDe smon 108
sNang ba mtha' yas kyi zhing gi yon tan la rnal 'byor pas bstod pa 119
'Od dpag med kyi sgom bzlas 158

著者名無し（仏説）

bCom ldan 'das snang ba mtha' yas kyi gzungs sngags 37
bDe ldan gyi snying po 38
sNang ba mtha' yas rjes su dran pa 38
Padma dkar po'i le'u nyer bzhi pa las byung ba'i be smon 38
'Phags pa da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa'i ting nge 'dzin ces bya ba theg chen po'i mdo 39
'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo 40
'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs 41
'Phags pa tshe dpag tu med pa'i snying po'i tshe dbang bskur ba zhes bya ba'i gzungs 42
'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po 42
'Phags pa yon tan bsngags pa dpag tu med pa zhes bya ba 44
Tshe dpag med la bstod pa 48
無題（No Title） 50

あとがき

佛教大学総合研究所「浄土教典籍目録の作成」班では、長年にわたり浄土教の典籍データを蓄積してきた。このたび、その成果を冊子と電子書籍の『浄土教典籍目録』(パイロット版)として公表することとなった。これは、本班の暫定的な成果として学内向けに公開し、さまざまなご意見をいただいて今後の完成版の糧とするためのものである。ここまで達するには実に長い年月を要したので、これまでの経緯を簡単に振り返っておきたい。

ことの発端は、総合研究所の香川孝雄元所長が、浄土教の典籍と論文についての目録の必要性を提起されたことにはじまる。浄土教は分厚い研究史を有しながら、関連の典籍を網羅した大部な目録となると、頭に思い浮かぶものがあまりない。天台典籍を渉猟して現存諸本を明示し、目録のひとつの理想型を示した渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』(初刊1940年)のようなものが浄土教領域にもあれば、研究の土台として重宝されることになろう。そこで、1999年度に「浄土教典籍目録と浄土教論文目録の作成」班が組織され活動がはじまった。最初は小規模な班員で典籍と論文のデータを収集する作業の方向性を模索したが、ついで典籍目録を実現するべく、2001年度にこの班から分離するかたちで「浄土教典籍目録の作成」班が組織されたのである。各年度の班名と主任は次の通り。

1999～2001年度	「浄土教典籍目録と浄土教論文目録の作成」班	主任:藤堂俊英
2001年度	「浄土教典籍目録の作成」班	主任:松永知海
2002～2004年度	「浄土教典籍目録の作成」班	主任:福原隆善
2005～2008年度	「浄土教典籍目録の作成」班	主任:安達俊英
2009年度	法然上人800年遠忌記念特別研究プロジェクト(統括・藤本淨彦)	
	「浄土教典籍目録の作成」班	主任:善　裕昭

このように幾人かの主任が交替して任にあたり、当該年度の活動を行った。とくに本班を牽引したのは安達俊英氏で、主任の時期やそれ以前の段階を含め、全体の進行役を中心的に担われた。

目録を作る上でのおよその方針は次の通りである。対象となるのは、インド・チベット・中国・韓国・日本の各時代にわたる浄土教典籍である。ただし、日本の江戸時代以降は点数が膨大になるので扱わない。各班員は担当する典籍データを簡易データベースソフトに蓄積していく。採録項目は、書名・書名よみ・書名別名・著者名・著者名よみ・著者名別名・著者生没年・成立翻訳年・成立地・巻数・写本等の存欠・写本所在・写本奥書・刊本所在・刊本刊記・活字本所載書・現代語訳書・参考文献・解説など。とくに最近の学界の状況を考慮すれば、現存諸本をできる限り示すことが目録の価値を決めると言ってよく、写本・刊本の所在とその奥書・刊記の採録には力を注いだ。また、解説では内容・著者略歴・研究史などについて説明し、単なる目録にとどまらず典籍解題としての性格を併せもつようにした。

扱う国や時代は広いので、本学や学外の若手の研究者・院生諸氏に呼びかけて協力をあおぎ、各自の専門に近いところを担当していただいた。幸い班員の献身的な努力に支えられてデータは順調に増えていった。何度も研究会を開いて入力方針が決められ、安達氏と班員との個別的な打ち合わせを重ねながら典籍データの完成度は高められていった。

しかし、これだけの項目を埋めるには膨大な作業量が必要で、それを長期にわたり維持するわけであるから、当然色々な困難にも直面する。入力方針の変更をくり返したため、新旧データ間での調整がまぎらわしかった。刊記や奥書については、既刊の目録や論文を利用したが、必要に応じ複写を取り寄せたり、原本調査にも出かけた。解説では、内容を説明するため当該典籍を読まなければならない。自分の領域に近ければよいが、あまり関係ない場合もあり、かなりの時間と精力をかけて知識を吸収した。基礎作業の大切さは誰もが口にするが、実際に携わると徒労感がつのるばかりで、この先に見えてくるのが光なのか闇なのかもわからない。進捗状況のよい時も倦怠期もあったりで、浮沈をくり返しながらも地道に続けた。

作業を積み重ねるうち、十分に調査されていない典籍の多さを肌身で実感することとなり、既刊の研究にはない新たな発見もあった。目録とは別に、その成果の一端を論文集としてまとめたのが2006年度の『佛教大学総合研究所紀要 別冊 浄土教典籍の研究』である。

その一方、扱うべき典籍はまだまだ多く、解説はいよいよ詳細なものになっていった。この種の研究作業には、完成と見なしうる地点は存在しない。永遠に発展させてゆくことさえ可能である。しかし、研究開始から10年もの歳月が流れ、消化した経費も少なくない。学内からは成果の公表を求める声がしきりに聞こえてくる。そこで、総合研究所の君塚大学所長の英断により、一応の区切りをつけて現時点で公表しうる典籍データをまとめ、暫定的な成果としてパイロット版を刊行することとなったのである。

2009年度下半期に入り、あらためて班員へデータの見直しを依頼した上、公表可能なものを選定してゆき、全体の表記を調整することに取りかかった。作業全体の統括は、総合研究所事務局の川崎秀子氏があたり、作業工程の立案や原稿の取りまとめ及び凸版印刷との打ち合わせをしていただいた。表紙のデザインも同氏の手になるものである。同研究所嘱託研究員の舩田淳一・市川定敬両氏には、原稿の不備をチェックしていただいた。掲載可否の最終判断や内容の校閲は、インド・チベットを中御門敬教氏、中国・韓国を齊藤隆信氏、日本を善が行った。また清水和広氏には、入力方針に従ったデータ入力になっているか詳細に点検していただいた。そして、この目録は何よりもデータを作成された班員の方々の地道な努力によって成り立っている。それに報いるためにも、各典籍の末尾に作成者名を明記した。

今回のパイロット版は、次のステップへ進むための踏み台である。もとより対象とした国や時代のすべてを網羅しているわけではない。インドのサンスクリット典籍は割愛したほか、中国・韓国・日本でも掲載を見送ったものがかなりある。写本や刊本欄には(未調査)と記されるものが少なくなくない。それでも、チベットについてはこの種の目録ははじめてであり、中国や日本でも個別的にみると有用な情報が豊富に盛られていて、現段階でもそれ相応の意義を有したものとなっている。学内の諸先生方より建設的なご意見をお寄せいただき、今後、作成される完成版に生かされることを願っている。

2010年３月14日

法然上人800年遠忌記念特別研究プロジェクト
「浄土教典籍目録の作成」班　2009年度主任　善　裕昭

本版あとがき

どのような研究分野であろうと、その研究を効率よく進めるにこしたことはない。それはテクニックの一つとして身につけるべきものである。研究において、当該分野のテクニックを身につけることは、その作業を成就するための必要条件である。我われの前には、さまざまな便利な「工具書」というものがある。工具とは、その名の通り、職人が使う道具のことである。より多くの道具を所持し、それを使う知識をそなえ、いつでも利用できるようにメンテナンスを怠らないこと。そのような姿勢が効率的で確実な作業を保証してくれる。我われにとっての工具とは、さしずめ辞典、目録、索引、年表、地図、類書、年鑑などである。まさに研究職人の七つ道具と言ってもよい。これらの存在とその有効な使い方を知ると知らないとでは、その成果に大きく影響するものである。また、近年はこの七つ道具がつぎつぎにデジタルデータ化され、パソコンの画面上で利用することが可能となってきている。

＊　＊　＊

さて、ここに我われの成果として、『浄土教典籍目録』なる工具書を提供させていただく。この目録がこうして一応の完成を見るまでの経緯については、昨年度試験的に公にしたパイロット版の「あとがき」に記されているので、ここで絮説は差し控えるが、構想からすでに12年の時が経過していることになる。この間、担当主任の交替や、データ採取する班員の出入り、さらに基本入力フォームの変更など、決してスムーズに進められてきたわけではなかった。データ採取は、それが研究上の基礎作業としてきわめて重要であることは誰もが認識していながら、その単調で地味な作業のくりかえしとなると、ときに辟易とさせられるものがある。そうした状況にあってパイロット版をだすことができたのは、まさに班員一人ひとりの忍耐と根気が実を結んだ結果であった。加えて、このたびの本版の刊行にあっては、ふたたび班員に労苦を強いることになったが、幸いにも理解と協力を得ることができ、パイロット版の訂正を中心としつつ、200件以上の新たなデータを追加することができた。感謝にたえない。しかし、データの中には奥書や刊記の項目で、いまだ「未調査」とされているものが少なくないことや、採取すべき典籍データそのものを欠いていることも事実である。これにはデータ採取者のモチベーションをいかに維持するかという問題だけではなく、物理的な時間と経費の問題も厳然としてそこにある。そうした課題を残したままで、あえて刊行するのは、現段階での成果を共有していただきたいという思いからである。

＊　＊　＊

その一方で、課題は今後の方針に反映されるべきである。おそらくこうした類の成果は、データの訂正と追加、それに新規の典籍データの採取がなければ、数年後には誰も利用しなくなるのが相場である。したがって、まず利便性を考慮するという意味では、いつでも、だれでも、どこからでもアクセスして情報を入手することが可能なオンライン目録として公開することも必要となる。そうした昨今の状況を鑑み、本学図書館電子資料庫のデータベースからもオープンアクセスで本目録を閲覧できるようにしている。今後はウィキペディアのようにオープンコンテント方式を採用することで、ひろく有識者から情報をお寄せいただき、逐次データ更新し蓄積していくことも一考すべきであろう。ハイパーリンクによって関連する項目を検索するなどして、いよいよ利用価値が増すはずである。もちろん、それを実現するには、著作権の問題、ライセンス規定とガイドラインの策定など、いくつかのハードルを乗り越えなければならず、早急に成し遂げられるものではない。しかし、もし現段階の成果をもって終了とするならば、12年かけて積み重ねてきた知的財産を死蔵させ

ることになる。やはり、データは更新されてこそ、学術的水準をたもち、その意義が発揮されるものである。浄土教に特化した典籍総合目録であればこそ、情報の収集と発信の拠点として本学がその役割を担うべきであり、そのためにオンライン＆オープンコンテントの実現は望ましい。

なお、本版では、パソコンだけで無く、普及が進んでいるタブレット型端末の電子書籍機能を使って閲覧できるフォーマットでも提供ができるようになり、活用の幅が広がったので、是非、ご利用いただきたい。また、パイロット版では、書名索引だけであったが、著者名索引をつけることにより一層の便宜を図った。

＊　＊　＊

このたび本版としての成果を公開できたことは、これまで本プロジェクトを支えてくださった多くの方々のご理解とご芳情のたまものである。とくに佛教大学総合研究所の関係者や、単調な作業を黙々と継続されたデータ採取者に対し、記して満腔の謝意を表したい。そして、本書が工具書としての使命を発揮し、多くの研究者や、浄土教に関心をもつ者を大いに裨益することを望むものである。

2011年３月７日

「浄土教典籍目録の作成」班 2010年度主任　齊藤隆信

（50音順）

【監　　修】

安達俊英　齊藤隆信　善　裕昭

【執　　筆】

兼担研究員：齊藤隆信（主任）　曽和義宏

嘱託研究員：安達俊英　稲田廣演　上杉智英
梯　信暁　角野玄樹　佐々木大悟
肖　越　東海林良昌　曽田俊弘
高山秀嗣　趙　仲明　坪井直子
中御門敬教　能島　覚　馬場久幸
藤田真隆　藤仲孝司　北條竜士
山中行雄　吉田淳雄　米澤実江子

研究協力者：伊藤瑛梨　伊藤茂樹　加藤弘孝
齋藤蒙光　佐藤直美　永田真隆
南　宏信

（注）身分は年度により違いがあるため直近の在籍時のものとした。
詳細はあとがきを参照。

【編集協力】　市川定敬　清水和広　ドルジイ ケルサン
中御門敬教　舩田淳一　藤仲孝司

【企画編集担当】　川崎秀子

インド（漢訳）	57件
チベット	240件
中国・朝鮮	185件
日本	415件

浄土教典籍目録

編　集　佛教大学総合研究所
発　行　佛教大学総合研究所
発行日　2011年3月25日
〒603-8301　京都市北区紫野北花ノ坊町96
Tel. 075(491)2141(代)
制作　凸版印刷株式会社
©2011　佛教大学総合研究所

SINCE 1912

100th Anniversary